

ナイン・レコード

オルタンシア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも大輔とヒカリと賢が、一緒に冒険していたら。

1999年の冒険をベースにしております。

『暁』と自サイト『Hortensia』にて連載中

目次

はじまりのおはなし	1
ちいさなしまのおはなし	
始まりの夏	16
そして彼らは巡り会う	37
太陽の咆哮	67
夜の静寂（しじま）に	92
月夜に奔る蒼狼	121
不死鳥は天（そら）に煌めいて	147
ちびっこの交流会	180
選ばれし子ども達	213
地下水道にて	235
おもちゃの町	262
生真面目くんの憂鬱	288
ムゲンマウンテン	317
つかの間の休息	341
闇に潜む者	370
てんしさまのおはなし	394
蒼い竜の飛翔	425
灰色の記憶	456
囓う闇	477
進化する想い	502
光のその先へ	525
おおきなたいりくのおはなし	

僕らの疑問

ゲンナイと言う青年

置いていかれる気持ち

大嫌い

『ごめんなさい』

おかしな村①

おかしな村②

おかしな村③

砂漠と猿とラブソング

堕ちた太陽

破壊の使者

約束の日—Side D—

約束の日—Side H—

約束の日—Side K—

そして、約束の日

ありがとうの花束を

虚ろな心

リアルとデータ

信じる心

ナイン・レコード

いまとむかしとみらいのおはなし

ButterFly

イレギュラー

みらいとむかし

沈む心

548

565

584

610

630

651

671

693

714

732

751

776

793

814

834

854

871

891

923

947

965

982

1003

1022

b r a v e h e a r t

いとみらい

天使様のお話

置いていく気持ち

むかしとみらい

スワンプモン

みらいのおはなし

みらいといま

愛されなかった少女

愛情と純真

そして花は咲き誇る

湖の畔で

思う信念、岩をも通す

探究者

誰も知らない物語

賢者の意地

1999年8月1日12時20分

本宮ジュン

兄と姉

狭間の世界

14181401138213661345132413071285126112371218119711801160113211131093107610581039

はじまりのおはなし

何かが、足りなかった。

それは、本当に偶然であった。

その日は休みだったから、お父さんとお母さんとお姉ちゃんとお出かけて、骨董市に出くわした。

昔の人が使っていて、今もまだ使える家具とか絵とか食器とかがいっぱい並んでいた。

綺麗な白いキャンパスに、青い絵の具で葉っぱとか女の人の絵が描かれているティーカップとソーサーがずらりと並んだお店のまえで立ち止まっている女性がいる。

鈍い銀色を放ったティーポットを手に取り、眉間に皺を寄せて買うかどうか悩んでいる初老の男性がいる。

知り合いなのか、店主と和やかに話し込んでいる上品そうなお婆さんがいる。

2人すれ違うのがやつとなほどの狭い通路に、人が密集していて非日常感がその場に溢れていて、まるでテーマパークみたいで彼もお姉ちゃんもわくわくしていた。

行こうよ、つて彼はお母さんの手を引っ張って、骨董市に特攻していく。

小さいものは指輪から、大きなものは洋服箆笥まで何でも揃っている。

昔々の、彼が生まれるよりもずっとずっと昔の人が使っていたとは思えないほど、少しデザインが古いものの全く傷んでいる様子がない。

多少は欠けたり塗装が剥げたりしているものの、それすらもアンティークの一部であると捉えている人は多い。

そして、それはあった。

お姉ちゃんと手を繋いで、忙しく辺りを見渡していた彼の視界に映ったのは、古いアクセサリーが売られているお店だった。

そこにあつたのは、1つのゴーグル。

鈍い金色に縁に少々曇ったレンズ。産業革命時代のイギリスを思わせるアンティークのゴーグルだった。

「坊や、何か欲しいものでもあるのかい？」

気が付くと彼はカウンターに両手をかけて、そのゴーグルを覗き込んでいた。

熱い眼差しをゴーグルに向けている幼い彼に気づいた、皺を刻んだ優しい微笑みを浮かべる老人が声をかける。

お母さんとお父さんが駆け寄ってきて、どうしたのって声をかけるけれど、彼は何も答えない。

ただ無造作に置かれたアンティークのゴーグルに目を奪われていた。

欲しいと、思った。

自我が芽生え始めてから彼は何かが足りないと思っていた。

でもそれが何のか分からなくて、毎日モヤモヤしていた。

でもようやく見つけた。これだ、と思った。

自分が求めていたものは、これだったのだ。

彼は欲しいというおねだりをするのも忘れて、じつと見つめていた。

あまりにも食い入るように見つめるものだから、お母さんは値段を確かめてから彼に買ってくれた。

嬉しくて嬉しくて、彼は早速首にかける。

よかったね、って言うてくれたお姉ちゃんにも、お母さんは何か買ってあげるって言うてくれたので、何かいいものないかなって同じ店で探したけれど、ピンとくるものがなかったので、色んな店をはしごすることになった。

骨董市にはヨーロッパのアンティークだけでなく、色んな国からここアメリカに渡ってきたものも沢山ある。

ハンガリーから来た陶磁器や、アフリカの方から渡ってきた神様の彫刻、古代中国で皇帝が使っていたと言われている金のコップなど、興味を引かれるものは沢山あるが、どれも彼のゴーグルのような普段使っているものではないので、却下。

なかなかいいものが見つからない、と一度骨董市から抜けることになった。

時間を見ればお昼丁度。目に着いたイタリアンの店に入って、お母さんはペロンチーノ、お父さんはボロネーゼを、お姉ちゃんと彼でピザー1人前を半分こすることになった。

料理が出てくるまでの間、彼は買ってもらったばかりの、首から下げているゴーグルを手にとって、ずっと眺めている。

よほど嬉しかったんだなあって、お母さんもお父さんもニコニコしているし、お姉ちゃんもよかったねって彼の頭を撫でてやる。

運ばれてきた料理を平らげた一行は、また骨董市に入って散策を開始した。

お姉ちゃんにも何か買ってあげるって約束してくれたから、何かいいものないかなって色んなお店をお母さんとお姉ちゃんを中心になつて巡っている。

その後を、彼を抱っこしたお父さんがついていく。

まだかなあ、って彼がちよつと退屈し始めた頃に、お姉ちゃんがあるお店の前で止まった。

商品が見やすいように、コルクボードに貼りつけられた画鋏に、商品飾りつけられていた。

指輪やネックレス、ブレスレット。女の子が好きそうなデザインで

はなかつたものの、何となく気になったお姉ちゃんはふらふらと吸い寄せられるようにそのお店に近付いていく。

別のお店を覗いていたお母さんが気づいてお姉ちゃんの後を追う。少し遅れて彼とお父さんも歩いてくる。

ブルネットの髪をひつ詰めた、素朴な白人女性が、テントの奥で商品を整理しているのが見えた。

こういうアンティークなら普段使いできそうだ、とお姉ちゃんはコルクボードに飾られている商品を眺めて……ふと気になるものが目に映った。

枝にとまっている2羽の小鳥が施された丸い金色の蓋。

気が付くと手に取って、その蓋を開けていた。

中から現れたのは、時を刻む長短の針。

ながーい金色の鎖には、つつかけのようなものがあつた。

それは、いわゆる懐中時計というものだった。大きさはお姉ちゃんの掌ぐらいはあつた。

さつきの彼みたいに、それを手に持つてじーつと見ていたら、奥で作業をしていたお店のお姉さんが気づいて声をかけてくれた。

だから隣に立つて見守っていたお母さんに、これがいいつてお願いした。

金ぴかで、可愛い小鳥の精巧な細工が施されている、子供が持つにはちよつと不釣り合いな懐中時計。

でもお母さんもお父さんもそんなものに合わない、とかまだ早い、とか言つて止めたりしなかつた。

それどころか、ニコニコしながらいいよつて言つてくれた。

値段も彼が買ってもらつたゴーグルと変わらなかつたので、晴れてその懐中時計はお姉ちゃんのものとなつた。

彼は、とても不思議な男の子だった。

彼はまだ3歳だがアメリカで生まれ、アメリカで育った。

彼はハーフではなく純粋な日本人で、父親も母親も姉も、みんな日本人だ。

両親は日本で生まれ、日本で育ち、姉もまた日本で生まれた。けれど彼は、彼だけはアメリカで生まれた。

だから国籍は日本とアメリカの両方を持っている。

日本では法律で二重国籍を認められていないから、22歳になるまでにどちらかの国籍を選んで、どちらかを捨てなければならぬ。

まあそれまでにまだ時間はたっぷりあるし、決めるのは彼である。

自分達は可能性を提示してやるだけだと、両親は思っている。

元々父親の仕事の関係でアメリカに引っ越してきたのだが、その際いつ帰るか分からないからと彼の家は日本語を一切使わなかった。

父親は仕事柄しよっちゅう単身赴任をして英語を強制的に使っていたし、母親はアグレッシブだから英語も習い事として勉強していた。

姉は彼が生まれる前、3歳の時にアメリカに来たから多少の日本語は分かるけれど、それでも英語の方が使う頻度が高い。

彼の家では完全に英語が飛び交っていたし、近所に住んでいる同い年の友達とも英語で会話をしていた。

現地のキンダガーデンにも通っている。

よって彼は日本語を一切知らずに育った。

単語として知っているものは幾つかあるが、それを文章として繋げることは出来ないのである。

しかし、そこまでは普通だ。

そこまでは、普通の子供と同じだった。

周りにいる、彼と同じくアメリカに住んでいる日本人の子供達と同じだった。

彼が不思議だと言われる所以は、そこではない。

例えば母親と姉と一緒に、買い物に出かけた時のことである。

大好きな姉と手を繋いで、お気に入りのお菓子の箱を片手に、機嫌よく鼻歌を歌っていた時のことだった。母親は精肉のコーナーにて、今日の夕飯は牛肉と豚肉どちらにしようかしらと悩んでいる。

ねーまあだー？と買い物に飽きた彼は、先程から何度も母親を急かしているのだけれど、もうちよつと待ってとぼっかりで、ここから動く様子が無い。

アメリカにはタイムセールなんて、お財布に優しい便利な制度はない。

少しでも節約をするために、なるべく安いお肉を買いたいのだ。

早く帰ってお菓子食べたいのに、と彼がむくれていると、クスクスという笑い声がした。

振り返る。彼と同じ年の女の子がいた。

緩くカールされた金髪と、空色の瞳。

ふわふわの白いワンピースを着ていて、とても可愛らしい子だった。

口元を手で隠して、むくれている彼を見て笑っている。

ムツとなった彼は笑うなよおと言った。

女の子はびっくりした顔を見せて、慌てて背中を向け走って行く。自分を見て笑ったくせに、何で逃げるんだ、と彼は女の子の背中を見送っていると、姉がねえと話しかけてきた。

何、と姉を見上げると、姉は怪訝な顔をして彼を見下ろしている。

「アンタ、今誰に話しかけてたの？」

変なことを聞いてきた。

彼が笑うなと言った時に姉が振り返った気配がしたから、姉も女の子を見ていたはずなのに。

何言ってるの、と彼は呆れた眼差しで走り去って行く女の子の背中を指差す。

「あそこ。ぼくのことみて、ずーっとわらってたんだよ」
酷いよね、と彼は頬を膨れさせて怒っている。

しかし……………。

「……………ふーん？」

姉は眉を顰める。彼が指を差した先を見据えながら。

女の子と、彼は言っていた。

しかしそこに女の子は見当たらない。

いるのは自分と同じ年ほどの男の子がちらほら、もしくは自分より年上の女の子が数名いるのみだ。

彼は、年上の女の子を女の子とは呼ばない。

だから彼が言う女の子とは、必然的に彼と同じ年の子を意味する。

しかし何処を見渡しても、彼と同じ年の女の子は、何処にもいなかった。

それなのに。

「あ、こっちみてる」

なんだよもー、と彼は不機嫌になった。

しかし姉には、彼を見ている女の子は何処にも見えなかった。

こんなこともあった。

父は仕事に、姉は幼稚園に出かけていて、家には母親と彼しかいなかった時のことである。

時間帯はお昼頃。

アメリカ在住ではあるが、食べる物はもっぱら日本食である彼の家のその日のお昼は、うどんだった。

お湯を沸騰させて、鍋に入れるだけの、簡単な料理である。

箸を使って、鍋の中をかき混ぜるようにうどんをほぐす。

彼はまだ3歳だから、うどんは少し柔らかめに煮込む。

自分の分のはまた後で作るとして、コンロの火を止めて鍋の取っ手を持つ。

彼専用の、子供用の丼にうどんと汁を移す。

箸でうどんを軽く上げたり下げたりしながら、汁の温度を下げる。白い湯気が薄くなり始めたのを見て、そろそろいいかと箸を置く。2階で遊んでいる彼を呼んだ。

返事はない。遊びに夢中になって、母の呼ぶ声が聞こえていないのだろうか、と思いつながら、母親はリビングを出た。

玄関のすぐ目の前にある階段を昇る。カーペットが敷かれ、更に母親はスリッパを履いているため、階段を昇る音は一切出ない。

ぽす、ぽす、ぽす、と階段を昇って、斜め向かいの部屋へと向かう。扉は閉まり切っていた。白い扉。

白を基調とした壁には、前の住人の忘れ物か、それともオーナーの趣味か、小さな絵画が所々に飾られていた。

扉を叩こうと右手をあげた。

「……………」

叩こうとした手が止まる。中から声が聞こえた。

彼がいるのだから、声するのは当たり前だ。

楽しそうに笑っている声。がちゃん、がちゃん、と何か軽いものをぶつける音がする。

最近父親に買ってもらった玩具で遊んでいるのだろうか。

5人組の、カラフルなスーツに身を包み地球を護る戦士達のテレビ番組は、元は故郷の日本で製作されたものを、アメリカがリメイクしたものである。

アメリカの番組にはない、敵と戦う前に自らの名を名乗るという、アメリカにはない斬新な内容がアメリカ人のハートをがっしりと掴んだらしい。

彼もその1人(彼は日本人だが)で、父にねだって5人の戦士がセットになっている玩具を買ってもらったのは、ついこの前。

特に青い戦士がお気に入りようで、何処へ出かける時も、寝る時も、片時も離さない。

だから、母が呼んでも降りてこないのは、お気に入りの人形に夢中になっているからだと思っていたのだが……。

「……………」

眉を顰める。扉に耳を近づける。聞こえてくる、彼と誰かの笑い声。

誰かを招いた覚えはない。母親は慌てて扉を開けた。

部屋の真ん中で、彼は座って人形を持って遊んでいた。

オレンジの髪で、ネグリジェ姿の女の子もいた。

誰、と母親が悲鳴を上げる前に、遊んでいた彼と女の子の視線が母親に向けられ、女の子は驚いたような表情を浮かべ……。

煙のように姿を消した。

あ、と彼は声を漏らす。

母親は硬直した後、悲鳴を上げて彼を抱え上げた後、彼のために作ってやったうどんも忘れて、家を飛び出して行った。

また、別の日のことである。

多忙な父が珍しく休みの日で、その日は曇天だった。

父の仕事はとつても忙しくて、なかなか休みが取れなくて、だから父が休みの日は1日中遊んでもらうのが彼の家のルールだ。

明日はお休みの日だから、沢山遊ぼうなって前日の夜にお父さんと約束して、久しぶりにお父さんと遊べるって楽しみにしていたのに。

前日の夜は、楽しみ過ぎてなかなか寝付けなくて、お姉ちゃんのベッドに潜り込んで、背中をトントンしてもらって漸く寝付けたのが深夜1時。

起きたら10時になっていて、寝坊したって慌てて起きたら、ザーという水が大量に落ちる音がした。

閉め切っていたカーテンを開けると、外は土砂降りの雨。

父と遊べるのを楽しみにしていた彼は、そんなあつて見るからにガツカリしていた。

雨なんだから仕方ないでしょ、つてお母さんが窘めるけれど、滅多

に遊べない父が、せっかく休みの日なのにこんなおつてない。

喜怒哀楽を素直に出す彼は、頬つぺたを限界まで膨らませて、如何にも不機嫌ですと言ったオーラを隠さなかった。

お姉ちゃんが私と一緒に遊ぼうかって誘ってくれたけれど、お父さんと遊びたかった彼はいやってそっぽを向いた。

せっかくお姉ちゃんが誘ってくれたのに、つてお母さんは彼を叱ろうとしたけれど、姉が止める。

姉も分かっていたのだ、彼の拗ねる気持ちを。

だつてお姉ちゃんとはいつでも遊べる。

お姉ちゃんは来年小学生だけど、それでもお父さんなんかよりずっと早い時間に帰宅しているから、お姉ちゃんと遊ぶ時間はいっぱいある。

でも父は雑誌のお仕事がとつても忙しくて、なかなか帰つて来られない。

だから今日はその分もいっぱい遊ぼうと思つていたのに……。

彼はほつぺたを膨らませたまま、ずかずかと窓に近づく。

がら、と窓を開けたので、母は慌てて何してるのつて近寄つたら。

「かみさまのばかー！あめやませろよー！」

と叫んだ。

キリスト教が信仰されているこの国で、神様の悪口を大声で言うなんてと、母は顔を真っ青にして窓をピシヤリと閉めた。

何てことを、と叱りつけようとしたら。

「……………あれ？」

娘の、キョトンとした声。

とたとたと近寄つてきて、窓にびつたりと張り付く。

お母さん、と少し舌足らずな声で母を呼ぶ。

「雨、止んだ」

「えっ」

ほら、つて娘は窓の外……正確には空を指差す。

異変に気付いた、新聞を読んでいた父も新聞を畳んで何があつたと近づいてきた。

皆で窓の外を見る。地面を叩きつけていた、バケツをひっくり返したような雨は、止んでいた。

ザーザーがサーサーとなり、やがてぼたぼたとなり、空を覆っていた灰色の雲が掻き分けられていくように、左右に引いていった。

光の柱が雲の隙間から幾つも零れている。

彼がまだ寝ている時に流れていたお天気の新コースでは、今日どころか明日まで土砂降りの雨だろうって言われていたのに。

母も父も、そして姉もポカーンと空を見上げている。

彼だけが、ニコニコとした顔ではしゃいでいた。

「やったあーはれたよーおとーさん、あそびにいこー！」
「え、あ、うん……」

はしやぐ息子を他所に、父親は呆けた声しか出せなかった。

そんなわけで、彼は大変に不思議な男の子だった。

度々そんなことを言ったりやったりしては、家族を怖がらせていた彼だったが、彼の家族はそれ以上に寛大で、おおらかだった。

彼が変なことを言ってもやっても、母親は最初こそ驚いたもののその内慣れてしまった。

それどころか面白がって、彼から話を引き出すのである。

今日は何があつたの、どんな子と遊んだの。彼を否定せずに話を聞いてくれるから、彼は全部話すのである。

父親も、仕事柄怖い話などは聞き慣れていた。最近では息子と外に出かけるよりも、彼から話を聞く方がずっと面白いらしい。

そして、彼のお姉ちゃん。彼はお姉ちゃんが大好きだ。何かあると真っ先にお姉ちゃんに報告する。

怖い幽霊に会った時、わんわん泣いてお姉ちゃんに泣きついたら、よしよし大丈夫よと沢山頭を撫でてくれた。

それを夜まで引き摺って、一人で寝るのが怖いと言ったら、朝まで一緒に寝てくれた。

彼の家族は、誰も彼を否定しなかったのである。

普通は莫迦なことを言うとか、気のせいでしょうと言って、否定

するものだ。

否定されていく中で、自分がおかしいのだと思い込んで、誰にも何も言わなくなる。

けれど彼の家族は、そう言った意味ではとてもおおらかだった。

まだ3歳の彼は、良くも悪くも感受性が強かった。

嬉しかったら笑って、腹が立つたら怒って、哀しかったら大声で泣いて。

自分の感情に素直な彼だから、誰も視ることのできないものを視たり、聴いたりできるのだろう、とは母親の見解である。

お姉ちゃんはそのなことはなかったけれど、まあ男の子だしこんなもんよね、と母親は至って呑気だった。

とにもかくにも、彼は運よく恵まれた境遇にあった。

からん、と首にかけたホイッスルの中に入っている合成コルクの玉が鳴る。

背中に背負ったランドセルが重たい。

お母さんに手を引かれながら小学校へ向かうのは、今日が最初で最後だ。

明日からは近所の子と一緒に通う。

彼が今まで住んでいた国とは違って、この国は子どもだけで学校に通うらしい。

1人で通うもよし、近所に住んでいる仲のいい子どもと一緒に登校してもよし。

とにかく子ども達だけで、学校に向かうのである。

通学路の途中に何人か見守ってくれる大人はいてくれるものの、今までスクールバスを使って学校に通っていたお姉ちゃんは大丈夫かになってちよつとだけ不安そうだった。

お母さんに連れられて、職員室に挨拶に行く。彼の担任は優しいような女性の先生だった。

初めまして、って彼が知っている英語で話しかけてくれたので、ほつと胸を撫で下ろす。

今までずっと英語漬けの環境だったのに、いきなり知らない言語が溢れた空間に飛び込ませて大丈夫なのだろうか、と学年主任の先生が心配していたけれど、私に任せてくださいって彼の担任になる女性の先生がどんと胸を叩いて言ってくれたので、お母さんは安心して任せることにした。

お姉ちゃんの担任の先生も、男の先生だけどつても優しいそうだった。

じゃあね、つて彼とお姉ちゃんはお母さんにバイバイして、それぞれの教室に向かう。

1年生のクラスに向かう道中、先生は彼が緊張してしまわないように、いっぱい話しかけてくれた。

アメリカでは何処に住んでいたの、とかお父さんは何のお仕事をしているの、とか。

その度に彼は元気よく答える。

「そのホイッスルは？」

彼の首からかけられている、ちよつと大きめのホイッスルについても、先生は聞いた。

学校に関係のないものは持つてきてはいけない決まりなのだが、この校則はそこそこ緩いようで、校長先生や教頭先生に挨拶をした時も、目についていたはずなのに特に何も言われなかった。

きつとつても大切なものなんだろう、って思って、先生は問いかけた。

さつきみたいに、また元気よく捲し立てるように答えてくれるのだ

ろうって、返事を待った。

幾ら待っていても、返事は返ってこなかった。

ぴたり、と立ち止まって、首からかけたホイッスルをじっと見下ろしている。

どうしたの？ って聞くと、彼は我に返って慌てて首を振った。

いつの日のことだったのだろうか、幾ら記憶を遡っても思い出せない。

気が付いた時には、このホイッスルを首からかけていた。

とつても大切なもので、大事にしなきゃいけないものだと言うことだけは分かっていたのだけれど、どうして大切なのか、大事にしなければならないのか、その理由だけが思い出せなかった。

そもそも、これはいつ手にいれたのだろう。

お母さんやお父さんに聞いてみたけれど、曖昧に微笑まれて誤魔化された。

お姉ちゃんにも聞いてみたけれど、お姉ちゃんもさあつて首を傾げるだけだった。

それだけではない。

お姉ちゃんも、買ってもらった覚えのないブレスレットをしていた。

細長い牛革が2本、緩く捩じり合って小さなパワーストーンがついているブレスレットだった。

いつ買ったんだっけ、ってお姉ちゃんは訝し気な眼差しでブレスレットを見つめるお姉ちゃんだったけれど、決して外そうとはしなかった。

彼のホイッスルと同じで、とても大切にしないではいけなものだったからだ。

何故かは、分からない。

教室の前に着く。先生が入ってきて、って言ったら入ってきてねって言われたから、彼は大人しく待つ。

先生が先に入って、おはようございます、って彼の知らない言葉で

教室の皆に挨拶した。

今日は転校生がいます、みんな仲良くしてあげてね。

クラスがざわつく。解けていたはずの緊張が、再び戻ってきた。

入ってきて、って先生が英語で言ってくれたので、彼は勢いよくドアをスライドした。

クラスの子達の視線が、一齐に彼に向けられる。

緊張して足取りがちよつとだけ覚束ないけれど、何とか先生の下まで来られた。

黒板に彼の名前が書かれる。先生が彼を紹介する。

はい、ってクラスみんなはお利口さんのお返事をする。

自己紹介して、って先生に促されたから、彼はお家でお姉ちゃんとお母さんと一杯練習した日本語で、大きな声で挨拶をした。

「はじめまして！もとみやだいすけです！」

ホイッスルが、からりと鳴った。

ちいさなしまのおはなし 始まりの夏

その日、大輔の中では上機嫌と不機嫌が交互に顔を出していた。

子ども会に在籍している大人達が、夏休みに子ども達の思い出作りの一環として企画してくれたサマーキャンプが、今日から3日間の日程で行われる。

友達のお家にお泊りをしたことは何度かあったけれど、完全な外泊で、しかもお泊りするのがお家ではなくテントだと聞いた時は、興奮しすぎて壁に激突してしまったほどだ。

大好きな女の子と、尊敬している先輩も参加する、と聞いて大輔のテンションは爆上がりだった。

サマーキャンプでの必要事項が書かれたプリントを貰った時は、何度も何度もお姉ちゃんと呼ぶ物の確認をして、キャンプの日を指折り数えて楽しみにしていた。

「大輔、支度は出来た？」

いつもより少しだけ早起きした、キャンプ当日。

お姉ちゃんと何度も確認して、忘れ物はないってお姉ちゃんから太鼓判を貰ったりリュックを背負い、大輔は子供部屋を出る。

その音を聞きつけて、キャンプの付添として準備をしていたお母さんが声をかけてきた。

途端に、大輔の機嫌が急降下する。

部屋を出る前にはニコニコした顔をしていたのに、お母さんの顔を見た途端に不機嫌ですという表情を隠さず、眉間に皺を寄せてお母さんから目を逸らす。

こちら、つてソフアーに腰かけてたお姉ちゃんが眉を顰める。

「大輔、返事しなさい」

「……できた」

お姉ちゃんに叱られた大輔は、渋々と言った様子で呟く。

カラン、と首にかけたホイッスルが傾いて音を立てた。

お母さんは、そんな大輔の様子に一瞬だけ哀しそうな顔を浮かべるも、すぐに笑顔を浮かべた。

「ん。じゃ、そろそろ出ようか。あ、出かける前にお姉ちゃんに挨拶しなさいよ?」

「……………」

お母さんの言葉に、大輔の眉間にますます皺が寄ったのを、お姉ちゃんは見逃さなかった。

「……お姉ちゃん、行ってきます」

「……行ってらっしゃい」

お姉ちゃんに挨拶をして、大輔はさっさと玄関に向かう。

でもお母さんは待ちなさい!つてちよつと強めに大輔を呼んだ。

「〃〃〃うちのお姉ちゃん〃にもちちゃんと挨拶して!」

「……先に行く!」

「大輔!」

ぎゅ、とシヨルダーハーネスを強く握った後、大輔はお母さんの言葉を無視して玄関に向かい、サッカーの走り込みでボロボロになり始めた靴をつっかけるように履いて、踵の部分を履き潰しながら逃げるように玄関を出て行った。

大輔!と背後からお母さんの怒鳴る声が出たけれど、大輔はだーつと廊下を走っていく。

エレベーターを待つ時間がもどかしかったのか、それともお母さんに追われるのが嫌だったのか、大輔は階段を使って下まで駆け下りていってしまった。

「全くもう……………」

「…………お母さんも、早く行けば」

遠ざかっていく、階段が鳴る音。

お母さんは困ったように立ち尽くすが、そろそろ集合時間なのである。

お姉ちゃんはお母さんが準備し終えていた荷物を持って、玄関で立ちつくしているお母さんに渡した。

「……じゃあ、行ってくるわね。戸締りとか、お願いね」

「分かってるって。行ってらっしゃい」

受け取った荷物を肩にかけ、お母さんも出かけていく。

ひらひらとお姉ちゃんは手を振って、お母さんの姿がエレベーターの中へ消えていくのを見送って、玄関を閉めた。

ガチャン、と無機質な金属音が響く。チーンをかけて、リビングへと戻る。

夏休みの特別放送で、お母さんやお父さんが小さい頃のアニメをやっていたが、何となく見る気になれなくてチャンネルを変えた。

お父さんはとくに仕事に出かけていたし、お姉ちゃんはお昼頃には家を出る予定だ。

それまでに洗濯物を干したり、部屋の掃除をしなければならない。

「……はあ」

誰もいない空間で、彼女の溜息が虚しく響いた。

先に家を出た大輔だったが、結局お母さんに追いつかれて一緒に行くことになった。

むすりとした顔を隠さず、お母さんと微妙に距離を取ってお台場小学校へと向かう。

キャンプ場へはバスで向かうのだが、そのバスは大輔達が通うお台場小学校にまで迎えに来てくれることになっている。

時間を見ればまだ20分前だったが、既に子ども達は殆ど集まっているようだった。

集団の中に何人か見知った顔が見える。

その中の2人が、大輔に気づいておーいって手を振ってくれた。

「大輔くーん！」

「よー！間に合ったな！」

1人は大輔と同じぐらいの女の子、もう1人はその女の子に寄り添っている、爆発したように逆立った髪の子の男の子。

先程まで降下気味だった大輔の機嫌が、一気に上昇した。

「ヒカリちゃん、太一さん！」

両腕が千切れるぐらい勢いよく振りながら、大輔は2人の下へと駆け寄っていく。

2人は、同じマンションで同じ学校に通う、大輔の1番の仲良しの友達とのお兄ちゃんです。サッカークラブの先輩だ。

大輔はアメリカからの帰国子女で、1年生の時に帰ってきた。

アメリカで生まれたために、ずっと英語漬けの毎日。日本語なんか全く分からなかった。

右も左も、何も分からなかった大輔の面倒を積極的に見てくれたのがヒカリちゃんだった。

席は隣ではなかったのだが、何故だかヒカリは誰よりも先に大輔に話しかけてくれて、学校の案内とかもしてくれて、先生のお話を大輔のために紙に絵を描いたりして教えてあげたり、日本語の勉強も手伝ってくれたり、何かと世話を焼いてくれた。

お陰でたった1年で日本語での会話に問題はなくなったが、今でも興奮すると英語が飛び出してくるし、お姉ちゃんとの会話は英語である。

ぐっもーにん、ってヒカリちゃんはニコニコしながら走ってきた大輔の両手を取った。

首元に光っているのは、お兄ちゃんである太一の額にあるものとは形状が違う、ちよつと古いゴーグル。

大事なものの、って前に遠足に出かけた時にもかけていて、何かイベントごとがある時はいつもかけてきているのだと教えてくれた。

鈍い金色に縁取られている少し曇ったレンズは、何処か古臭さを感じるしヒカリにはちよつとごつくないだろうか、と思わなくもないが

ヒカリ自身が気に入っていて大切なものなら、他人が口に出すべきことではない。

大輔だつて買った覚えのないホイッスルを大事にしているのだから。

太一と知り合つたのは、ヒカリを通じてである。

日本語が分からなかつた大輔を連れて、お兄ちゃんがやっているサッカークラブに連れて行ってあげた。

サッカーが大好きな大輔は、目を輝かせた。

目をキラキラさせていた大輔をニコニコしながら見つめて、あれがお兄ちゃん、つて一番動いている人を指した。

それが太一だ。

太一は太一で、大人しくていつもお友達達の輪の中で誰かの話を聞いているのが好きな妹が、見慣れない男の子と手を繋いでサッカークラブに見学しにきていたから、ボールを蹴り損ねてしまった。

誰だそいつ、つてしどろもどろになりながら尋ねれば、妹は至極当然と言いたげに大輔くんつて答えるものだから、太一は違うそうじゃないと頭を抱える羽目になる。

まあ、それも最初の内。大輔がサッカー少年と聞いて、太一はじゃあ一緒にやるかつて持前の人懐こさを發揮して大輔をサッカークラブに誘ってくれた。

日本語が分からない、とヒカリを通じて知つて、英語が分かる同じサッカークラブの友人に通訳を頼んだり、日本語を教えたりと、ヒカリと同じぐらい世話を焼いてくれた。

いつの間にかヒカリの隣に座つて、同じように見学をしていた大輔のお姉ちゃんと4人で、オレンジ色に染まる帰り道を一緒に帰つたことは、今でも鮮明に思い出せる。

「みんな集まつたかー？」

それぞれ乗るバスの前に集まつて、引率の先生が点呼を取る。

3日間一緒に過ごす人達と同じバスに乗り込んで、まずはバスの中で注意事項を受けた。

走っている最中は立ち上がらない、窓から身を乗り出さない、気分が悪くなったら先生に言うこと、などなど遠足でバスに乗った時と全く同じ注意を受け、時間になったのでバスは出発した。

カラリ、と首にかけたホイッスルが音を鳴らした。

誰かに、呼ばれた気がした。

みいんみいんという蝉の喧しい鳴き声が響く。

空に浮かんでいる雲は一握りほどしかなく、夏の太陽がギラギラと容赦なく照り付けていた。

豊かな自然が溢れるキャンプ場で、子供達の笑い声がする。

「ねー、人参の皮むきってこうでいいの?」

「ジャガイモ切りにくいよー!」

「あれ?お肉は?」

キャンプと言えばカレーである。

子ども会のプリントに書いてあった材料をそれぞれ取り出して、先生からの注意事項を体育座りで聞いていた子ども達は、早くカレーを作りたくてうずうずしていた。

キャンプという非日常の中で、子供の大好物トッポ₃に入るカレーを作るなんて、考えるだけでもわくわくするものだ。

いつもはお母さんのアシストと言う名の食器運びだけれど、今日はお母さんやお父さんがアシスタントで、子ども主体のカレー作りなのだ。

先生の注意事項が終わると同時に、子ども達はわっと蜘蛛の子を散らすように解散する。

野菜を切る子、お肉を切る子、お米をとぐ子、薪用の乾いた枝を拾う子、それぞれ役割を決めて準備に取り掛かり、先生や大人達はそれを傍らで見守ることに徹していた。

最初こそ子ども達は意気込んで、初めてにも等しい料理に挑んでいくが、進めていく内に少しずつ少しずつ思い描いていたものとずれ始めていく。

お母さんが家でやっている通りにやってるのに上手くいかない、と嘆いている子がいる。

玉ねぎを切っている子が目にしみるーと他の子に泣きついている。

料理に飽きた男の子達が、先生の目を盗んでサボっている。

それを見つけた女の子達が先生に言いつけに行く。

いつだって女の子は男の子よりも早熟なので、先生に言いつけたな、って仕返しにくる男子の行動なんかお見通しである。

先生ー上手く切れないのーと上手く先生を呼びだして、男子の仕返しを阻止するのである。

ぐにに、と男子は歯を食いしばるばかりである。

そう、男子と女子の対立と言うのは小学校から始まるのだ。

でも、そんなの関係ねえと言わんばかりの二人がいる。

「人参ー」

「にんじん！Carrot！」

「きやろつと……」

大輔とヒカリだった。

大輔が転入してきてからずーつとずーつと大輔のお世話をしていたヒカリのマイブームは、大輔が使っている英語を覚えることである。

ヒカリが手にしたものをまずヒカリが日本語で言う。

そしたら大輔がそれを復唱した後に、英語で言う。

その繰り返しである。これが思いのほか楽しいのだ。

日本語だと思っていたものが英語だったり、日本語でも英語でも同じ言葉だったり、面白いことがいっぱい知れるのである。

「次はー……これージャガイモー」

「じゃがいも！Potato！」

「ぼてと？英語でもぼてとって言うの？」

「そうだよ！日本語でも言うの？でもさつきじゃがいもって言ったよね？」

「じゃがいもって言う人もいるし、ぼてとって言う人もいるよ」

「ふーん？……次！Onion！」

「おにおん？玉ねぎ！」

最早見慣れた光景だったので、子ども達は誰も何も言わない。

それどころか大輔の英語講座の生徒が少しずつ増えていって、最終的には一緒に調理をしていたそのグループの下級生が全員調理の手を止めてしまった。

こら、つて上級生が慌てて注意して、我に返った下級生は慌てて調理を再開する。

最初に気づいたのは、ヒカリのお母さんだった。

子ども達主体で進めているカレー作りのアシスタントの1人であるヒカリのお母さんは、歩き回りながら子ども達の様子を伺っていたのだが、ふと辺りを見渡すと長男である太一が何処にもいないことに気づいた。

上級生達は、下級生が皮をむいた野菜を切る役目を担っている。

出来ましたーって下級生の子達が上級生の子達に持って行くのを微笑ましく思っていたのに、その上級生の1人である太一が何処にもいないのだ。

サボったことは容易に想像がついたので、お母さんは溜息を吐いてもう1度辺りを見渡す。

目に着いたのは、娘であるヒカリと1番仲良しの男の子である大輔だった。

他の下級生の子達と同じように、皮をむき終えて上級生達に渡しに行くところだった。

「ヒカリー、大輔くーん」

「なあにー？」

「？」

「お野菜、終わったのね。それお母さんが持って行くから、ヒカリと大輔くんはちよつと頼まれてほしいことがあるんだけど、いい？」

何だろう、つてヒカリと大輔は顔を見合わせる。

お母さんはそんな2人に、困ったような笑みを浮かべて目線を合わせてしゃがんだ。

「あのね、太一がどつか行っちゃったみたいなのよ。自分のやらなきゃいけないことほっぽって。だからちよつと探してきてくれない？お母さん、まだ手が離せないから……」

「うん、いいよ」

「OK」

ヒカリのお母さんのお願いを快く引き受けた大輔とヒカリは、行つてきまゝすつて言つて太一を探しに行つた。

今日キャンプ場に来ていたのは、子ども会の子達だけではなく、色々な団体や家族連れがキャンプ場に来ていたから、子ども達が立ち入り出来る場所は限られている。

ここからここまで子ども会の方で借りたので、これ以外の場所へ行つてはいけませんよ、つて最初に言われていたから、すぐに見つかると思つていた。

が、太一は何処にも見当たらない。

少なくとも、子ども達がみんなでカレーを作っているこの場に、太一はいない。

何処に行つたのか、と大輔とヒカリはどんどんどんどん人気のないところへ、子ども達がいなくてところへ、大人の目が届かないところへ向かつて行つた。

気が付くと人気の全くない、奥の方にまで来ていた。

キャンプ場の何処にも太一の姿はなかったから、もしかしたらサボっていることがバレないように人気のないところにいるのかもしれない、というのは小学2年生の2人でも簡単に想像できた結果である。

憧れの先輩は何処かな、って大輔がちよつと駆け足になる。

その度到大輔が首から下げているホイッスルがカラコ口と音を鳴らす。

辺りを見渡しながら奥へ奥へと進んでいくと人影が見えたので、大輔は視界に映った人物の下にたーつと駆け寄って行った。

ヒカリも一瞬遅れて走る。

「治さぁんー！」

夏だと言うのに濃い渋茶色の半袖パーカーの下に、紺色の長袖シャツを着ている、太一と同級生で同じサッカークラブの先輩だった。

大輔ほどではないがちよつとボサついた黒い髪に、眼鏡をかけた優しそうな表情をした先輩である。

大輔の声を聴いて振り向いた彼——乗寺治は、腕に杖を抱えていた。

「大輔にヒカリちゃん？どうしたんだ、こんなところで？野菜切る係りじゃなかったっけ？」

「もう終わりました！それで、あの、ヒカリちゃんのお母さんに頼まれて」

「お兄ちゃん、探してるんです。治さん、見ませんでしたか？」

「えっ、見てないなあ……。あの莫迦、サボったのか？しょうがない、一緒に探そうか」

苦笑しながら、治は大輔とヒカリと一緒に太一を探してくれる。

治にも割り当てられた役目があったのに、申し訳ないとヒカリが謝ると、気にしないでいいよって笑ってくれた。

つくづく不思議だ、とヒカリは思う。

太一と治は親友である。

同じクラスで、同じサッカークラブに所属しているけれど、性格はまるで正反対だ。

太一は元気を体現したような活発な少年で、授業の時間はいつも爆睡して過ごす問題児。

対する治は成績優秀、スポーツ万能という文武両道な少年で、先生の言うことはよく聞き、クラス委員なども進んでやる、所謂優等生で

ある。

問題児と優等生なんて一見相容れない相手ではあるが、正反対が故に相性がよかつたらしく今のところ上手くいつているから、先生たちも口を出せずにいた。

大人の言うことなんか聞かん坊の太一も治の言うことだけは聞き、治も治で太一の行くところに必ずついていくほど懐いている。

ヒカリが小学校に通う前にはもう既に仲が良くて、よくお家に遊びに来ていたし、お家に遊びに行っていた。

校庭で、2人だけでサッカーボールを追いかけている姿も、よく目撃されていた。

本当に、縁というのは不思議なものである。

「……あら？・治くん？・大輔にヒカリちゃんまで……」

キャンプ場の方は粗方探し終えているから、残っているのはこの辺りだけだ。

人もほぼいないし、サボるにはうってつけの場所だろう、と言うことで治と一緒にここら辺を重点的に見て回ろうとした時、向こうから別の声がした。

オレンジの髪を短く切って、水色の帽子を被り、黄色い袖なしのシャツとジーンズを履いた男勝りの女の子、武之内空だった。

「やあ、空」

「いないと思ったら、こんなところにまで薪拾いに来てたのね」

「手頃な枝が近くになくてね。気が付いたらこんなところにまで来ちゃってたよ。ああ、太一見なかった？」

「治くんらしいわね。太一？見てないけど……もしかして」

「空の想像通りさ」

治が苦笑しながら言えば、空は全く！って眉を顰めた。

「あいつ、ご飯炊く係りのくせに！」

「空さんって、お兄ちゃんと同じグループだっけ？」

「そうよ。もう！あいつのせいでカレー食いっぱぐれちゃうわ！治くん、私が大輔とヒカリちゃんについてるから、治くんはその薪用の枝、持ってっちゃって」

「ああ、それなら大丈夫だよ。この薪用の枝さ、予備のために拾ってただけだったんだ。火おこし用の薪はもうとつくに集めて持つて行ってたから、一緒に行くよ」

「……相変わらず用意周到ねえ」

予備用の薪まで拾うなんて、何処までも慎重な彼に今度は空が苦笑する。

さて、と気を取り直し、一行は姿をくられましたお莫迦さんを探しに行こうと、一步踏み出した時であった。

「……ん？」

ピタリ、と空と治の前を歩いていた大輔が急に立ち止まってしまった。

大輔と手を繋いでいたヒカリも当然大輔に引つ張られて止まることになるし、後ろを歩いていた空と治も動きを止められることになる。

「大輔、危ないでしょ？急に立ち止まっちゃ……」

「……」

じ、と上を見上げて、空を見つめる大輔に、ヒカリもつられて空を仰ぐ。

ヒヤリ、とヒカリの頬に冷たいものが降ってきた。

「きゃっ！」

「ヒカリちゃん？」

ビックリして一瞬身を縮めたヒカリに、空が声をかけた。

大丈夫？って聞けば、びっくりしただけですってヒカリから返ってきた。

「何か冷たいものが降ってきて……」

「冷たいもの……？」

「……空」

雨でも降ってきたのだろうか、傘持ってきてないどうしようって空が焦っていたら、隣の治が静かに彼女の名を呼んだ。

「何よ、治くん？」

「……雪だ」

「え?」

「雪が降ってきた……」

嘩然と呟く治の言葉に、そんな莫迦な、って空は視線を上に向け。ひらひら、ひら、と雲が少ない青空から舞い降りてきたではないか。こんな真夏に、青空が広がるこの空の上から。

そんな莫迦な、と思う間もなく、辺り一帯は吹雪に見舞われ、あっという間に雪が降り積もった。

その年の夏は、地球全体がおかしかった。

東南アジアでは全く雨が降らず、水田が枯れ、中東では大雨による洪水が発生。

アメリカでは記録的な冷夏となった。

サマーキャンプにいた9人は、何も知らずにいた。

それが、誰も知らない世界での、冒険の始まりになることを。

空に連れられた大輔とヒカリは、猛吹雪のせいで方向感覚を失い、視界に映った階段を駆け上る。

治は、いなかった。吹雪いた瞬間に抱えていた枝の束を捨てたかと思うと、先に行っていてという言葉だけ残して、何処かへ行ってしまうのだ。

反射的に大輔が後を追おうとしたけれど、空に首根っこを引つ掴まれてしまい、ぐえつとなつてずるずると引き摺られた。

階段を駆け上った先にあった古いお堂に、空は大輔とヒカリの手を引いて中に入る。

そこには、先客がいた。

「あれ、光子郎?」

「空さん、大輔くんにはカリさんも……」

4年生の、泉光子郎であった。彼もまた大輔や治、空と同じくサッカークラブに所属しているが、根っからのインドア派で、暇さえあればパソコンを弄っている子である、という印象しかない。

そう言えば光子郎さんもキャンプ場で見かけなかったなあ、ということ思い出した大輔は、遠慮なく聞いた。

「光子郎さんも、サボリ?」

「え?」

「こら、大輔! えつとね、太一の奴、当番サボってどっか行っちゃったのよ。大輔とヒカリちゃんを探しに来たらしいんだけど……」

「光子郎さん、お兄ちゃん何処かで見かけなかった?」

「そうだったんですか。すみません、僕は見かけてないですね」

そう、と空は困ったような表情を浮かべる。本当に、あの莫迦は何処に行ったのだろうか。

寒いねーという会話をしている大輔とヒカリを尻目に、光子郎は冷や汗流しまくりであった。

サボりか、と大輔に指摘されたが、その通りだったからだ。

空が話を逸らしてくれた結果、誤魔化すことができたとは言え、その空に突っ込まれてしまったら誤魔化し切る自信がない。

さてどうしようか、と内心一人で焦っていると、救世主が現れた。

「やーんもうーさいっあくー! 何だっつて吹雪なんか……!」

「あれ、ミミさん?」

「え? あれ? 光子郎くん?」

ガラリ、とお堂の障子が再び開かれて、中に飛び込んできたのは全身赤系の色でコーデされた、ウエスタンスタイルの女の子。

大輔とヒカリと空は知らなかったが、光子郎とその子は互いに面識があるらしい。

誰、って聞いたら、同じクラスの子ですと光子郎は答えた。

ミミです、って女の子は明るく答えた。

「賢、ほら、急いで」

「寒いよー、お兄ちゃん!」

開いているお堂の入り口から、続いて2人入ってくる。

先程別れた治だった。その傍らには、治によく似た大輔とヒカリと同じぐらいの小さな男の子。

きらり、と胸に不釣り合いなほどの大きなペンダントをしていた。

「治さん」

「あれ、光子郎もいたんだ」

「治くん、太一は?」

「ごめん、見なかったよ……」

「ぎゃー!退いてくれ、退いてくれ!」

「……訂正、今見つかった」

「あの莫迦……」

入り口のところで立ち止まっていたら、治の背後から喧しい声。先程から探していた問題児である。

ひよいと避ければ、なだれ込むようにお堂に飛び込んできた。

「うひー!参った参った!急に吹雪くんだもんなあ」

「参った参った、じゃないでしょ!何処行つたのよ、自分の当番ほっぽって!大輔やヒカリちゃんも小母さんに頼まれてアンタのこと探してたんだからね!」

「あー!太一さんいたー!」

「お兄ちゃん!」

部屋の真ん中で、ミミと光子郎に構ってもらいながら暖を取っていた大輔とヒカリは、聞き慣れた声にぐるりと振り返る。

爆発した頭を見て、ぱあつと顔を輝かせると、2人一緒に太一に飛びかかった。

「ぐえっ!」

「太一さん、今まで何処にいたの?」

「お母さんが捜してたよ。ダメじゃない、当番サボっちゃ」

「う、わ、わりい。えーつとちよつとトイレにな……」

「誤魔化し方下手くそか」

しどろもどろになって目が水魚の如く泳ぎまくっている太一に、治

が冷静に突っ込んだ。

「あーもう……」

「丈先輩？」

力ない声に反応したのは空である。黒髪で眼鏡の少年が、項垂れながらお堂に入ってきた。

大輔もヒカリも知っている、だって大輔のお姉ちゃんと同じ年で、同じクラスの委員長さんだから。

「やあ、みんなも吹雪に巻き込まれたのか……」

「はい……」

「暫くやみそうにないな……しょうがない、ここでじっとしてよう」

「光子郎、携帯持っているかい？」

「持ってますけど、この吹雪だと……」

「うん、だろうね。やんだらかけられると思うから、その時はよろしく」

「分かりました」

そんな会話をした数十分の後、先程の吹雪が嘘みたいにやんだ。

ガタガタ、つてお堂の障子の音がしなくなったから、たぶんやんだんだろうって治が判断して、太一が代表して障子を開けると、太陽の光を反射して煌めいている白い絨毯が敷かれていた。

真っ先に飛び出して行く太一を追って、空もお堂の入り口に立つ。

途端に、遮るものがなくなった冷たい風が、剥き出しになっている空の顔や腕を容赦なく襲い掛かった。

次いで飛び出して行ったのは、掌ほどの大きさがあるペンダントを首からかけた男の子である。

わーい！とはしやぎながら外に飛び出して、真っ白な絨毯の上を踏みしめる。

待ちなさい、つて治が慌てて後を追って行った。

早く戻った方がいい、という丈の言葉を遮って、ミミも外に出る。

「……ダメかあ。吹雪が止んだら電話届くと思っただのに……」

吹雪がやんだと聞いて、光子郎が真っ先に確認したのは、持ってきた携帯とパソコンの電波状況である。

1999年と言えば情報社会の先駆けのような年代である。

軍用として開発されたパソコンが家庭用に普及され始めて、一家に1台の波が広がり始めた頃である。

子どもが持つには少しばかり高価なパソコンや携帯を、小学4年生ながらにして光子郎は既に所持していた。

パソコンのことなぞこれっぽっちも分からない大輔とヒカりは、そんな光子郎の眩きをスルーして同じように外に飛び出して行く。

雪なんてほぼ初めてに等しい大輔や、どっちのお祖父ちゃんお祖母ちゃんも雪が降る地域に住んでいないヒカりがはしゃぐには十分だった。

手を繋いだまま、せーのでお堂から降りて、ぼす、と雪の上に着地する。

自重で雪の中にめり込み、それだけで2人は楽しくて仕方がなかった。

「わあ、と子ども達が歓声を上げる。

しやがみこんで雪の感触を楽しんでいた大輔とヒカりは、何かと顔を上げた。

先に外に出ていたお兄ちゃんや先輩達が、みんな揃って空を見上げていた。

何だろう、って大輔とヒカりは顔を見合わせて、また手を繋いでとつとつとつ、と先輩達に歩み寄る。

「こうしろー！早く来いよー！」

「太一さん、治さん、空さん、どうしたの？」

「ほら、見て」

未だお堂の中にいる光子郎を呼ぶ太一。大輔がよく見知った先輩達に尋ねると、空が優しい声色で上空を指差した。

空の指の先を辿って目線を上空に向ければ。

「……わあー！」

「Beautiful！」

感嘆の声を漏らすヒカリと、興奮してその場でジャンプする大輔。

そこには、空一杯に薄いヴェールのようなカーテンが広がっていた。

光子郎も遅れて合流して、大輔があれ何あれ何って上級生達に聞くと、カーテンを見つめたままの空が、オーロラだと教えてくれた。

オーロラとは、天体の極域近辺に見られる大気の発光現象のことである。

名前の由来はローマ神話の夜明けの女神であるアウロラ。知性の光、創造性の光が到来する時のシンボルと言われている。

発生の原理は太陽風のプラズマが地球の磁力線に沿って高速で降下し、待機の酸素原子や窒素原子は励起することによって発光すると考えられている。

日本でも観測は可能だが、主に南極・北極付近で見られる現象のため、日本で観測できる場所も限られてくる。

つまり、東京の端っことは言え、日本のほぼ真ん中でオーロラを見られるはずがないのだ。

治と光子郎がそう指摘すれば、知識として薄らと知っている空がそうなんだよね……と困ったような表情を浮かべて呟いた。

「……早く、大人達のいるキャンプ場に戻らなきゃ」
あり得ない光景に、何か不吉なものを感じた最年長である丈が、そう呟いた。

そうだな、と治も眉を顰める。太一や空、ミミ達と違って見たことのないオーロラをただ綺麗だなーで済ませるほど、治は莫迦ではない。

「風邪引いちやつまらないからな……吹雪も止んだし、太一、戻ろう」
「……そうだなあ」

治が言うなら、と太一もオーロラから目を離し、キャンプ場に戻ろうと足を1歩踏み出した時だった。

彼らの長い、そして短い冒険が幕を開ける。

あ、って声を漏らしたのは大輔だった。

大輔と手を繋いで、お兄ちゃんの後が続こうとしたヒカリだったが、大輔が立ち止まって空を見上げたのでつられて足を止め、天を仰ぐ。

空のカーテンの向こうに、不自然な光が見えた。

緑色で、台風のように渦巻いていた。

歩き出そうとしていた太一達の足が、再び止まる。

真夏に吹雪とオーロラという異常事態に見舞われていた子ども達は、もう何が何だか分からない。

何だ何だと狼狽えている間に、緑色の渦から幾筋もの光が伸びてきた。

隕石と呼ぶには小さく、流れ星と呼ぶには荒々しい光の筋は、真っ直ぐ子ども達の下に向かって落ちてくる。

危ない、と叫んだのは誰だったか。

どおん！どおんどおん！！

小さな爆発音と衝撃、悲鳴が辺りを包んだ。

集団の前を陣取っていた太一は、後ろの方にいる大輔とヒカリの下に走って、咄嗟に抱きかかえる。

敷き詰められた雪の絨毯が白い煙のように舞い上がり、更に絨毯を突き破って地面に突き刺さり、破片が飛び散る。

子ども達は反射的に頭を抱え込んだり、腕で顔を庇って衝撃や舞う埃から身を護った。

「みんな、怪我はない!？」

雪まみれになりながらもみんなの心配をする空は流石と言うべきか。

ああ、と太一が短い返事を返す。その腕には、目を白黒させている大輔とヒカリがいた。

「2人とも大丈夫か？」

「うん、平気」

「Yes!」

元気な返事を聞いて、太一はホッと胸を撫で下ろす。

他の子ども達も、空の問いかけに返事を返した。

「何とかな……」

「はあ、びつくりした……」

「い、一体……」

今のは、何だったのだろうか。尻餅をついた丈が、啞然と眩く。

そうだ、先程の衝撃の正体。空から落ちてきた流れ星。

頭を抱えて姿勢を低くしていた光子郎が、白い絨毯に両手をつきな
がら光が落ちてめり込んでいる地面を、恐る恐る覗き込む。

すうー……

光の柱が伸びた。え、つて光子郎は目を丸くする。

光の柱に押し出されるように浮かび上がってきたのは、見たこと
ない小さな機械だった。

薄いヴェールの光の珠に包まれながら浮かび上がってきた機械を、
子ども達は咄嗟に掴む。

恐る恐る、と言った様子で、子供達は手を広げて掴んだ物を見下ろ
した。

薄い水色で、真ん中にはディスプレイがあり、その周りに見たこと
のない模様が彫られていた。

右に楕円のボタンが上下に2つ、左に丸いボタンが1つ。

「何、これ……」

「ポケベルでも、携帯でもないし……」

空が投げかけた眩きを拾ったのは、光子郎だった。

これは、一体何なのだろう。大輔は空に翳してみたり、耳元で鳴ら
してみたりしたが、カチ、カチ、という音がするだけだった。

変なの、つてもう一回それを見下ろすと、機械が不思議な音を鳴ら
しながら、ディスプレイを緑色に発光させる。

え、え、つて子ども達が混乱する間もなく、地平線の向こうから突
如として現れたのは、何とここにあるはずのない大きな波だった。

ざぱーん、と立ち上がった大きな波に、子ども達は悲鳴を上げて反
射的に回れ右をして逃げ出そうとした。

が、出来なかった。

何故なら立ち上がった波が縦に割れ、まるで見えない手に捕まれた

かのように子ども達の身体が浮かび上がり、波の中へと吸い込んでいったからだ。

その後は、もう訳が分からない。

掴んできた見えない手が、今度は子ども達を放り投げてしまったかのように、子ども達の身体はグルグルと回転しながら波の奥へと誘われていく。

回転する身体を止めようにも、勢いがついた回転は止まらず、子ども達はされるがままだった。

大輔は、見た。

いつしか波が消えて、上下が斑の虹に染まり、ずっとずっと向こうに真っ白な光が差し込んでいる。

やがて斑の虹の天井と床が壁になって、暗闇に吸い込まれるように消えた代わりに、幾筋もの彩られた細長い光の線が走る。

光の線を置いてけぼりにするように、大輔の身体は暗闇へと放り出されて、そして――

そして彼らは巡り会う

ねっとり纏わりつくような風に頬を撫でられながら、暗闇に閉ざされていた大輔の視界は開かれる。

ぱちり、と音がしそうなほどに見開かれた真ん丸の目に飛び込んできたのは、白縹の空。

ぱちぱち、と瞬きを2回して、大輔は上半身を起こす。

右手が暖かくて、ボーっとした頭のままそつちを見れば、大輔の手を握って離さないヒカリが、穏やかな表情で横たわっていた。

いつのまに眠っていたのかなあ、と大輔は自分が今まで何をしていた、何をしようとしていたのか記憶を引っ張り出そうとする。

今日は、待ちに待ったキャンプの日だった。

1ヶ月も前から楽しみにしていて、お姉ちゃんと何度も何度もリュックの中身を確認して、1日1日が過ぎていくたびにカレンダーにバツをつけてもらった。

お姉ちゃんは一緒に行かないって聞いてショックを受けたけれど、大好きな女の子と尊敬している先輩達も一緒だからいつか、って機嫌を治してお土産いっぱい持つてくるねってお姉ちゃんと約束したのだ。

本当はお姉ちゃんも来るはずだったんだけど、何気なしに応募したライブのチケットが当たってしまい、それがしかもキャンプ当日だったから、大輔はすっかりしよげてしまった。

ごめんねってお姉ちゃんは謝ってくれたけれど、大輔は許した。

だってお姉ちゃんが悪いんじゃない。もちろん、ライブをするグループも悪くない。

タイミングが悪かったただけだ。こればかりはどうしようもないのだ。

他の、キャンプには参加しないお姉ちゃんの友達も一緒だし、夜の

部ではなく昼の部だから心配ないって、それまで1人でお留守番することを心配していたお母さんにも念を押していた。

お母さんのことを思い出して一瞬大輔の表情が曇められたけれど、大輔はお母さんのことを頭の隅に追いやって、再び作業に戻る。

キャンプ場について、皆で楽しく料理を作っていたら、ヒカリちゃんのお母さんに太一を探してくるように頼まれたから、2人で探し回った。

途中で治や空と合流して、皆で探そうとした時に見舞われた、突然の吹雪。

階段の上にあった小さなお堂に逃げ込んで、他にもキャンプ場から離れていた子ども達も続々と集まって、皆で吹雪が止むのを待っていた。

そして、ようやく大輔の頭は覚醒する。

そうだ、吹雪が止んだから外に出たら、オーロラが見えたのだ。

日本ではまず見られるはずのないオーロラを。

大輔もヒカリも、太一や空やミミだって、綺麗だなーで済ませていたあり得ない光景を、不吉なものとして捉えた丈と治が早く戻ろうってみんなを促して帰ろうとした時に、それは起こったのだ。

辺りを見渡す。整備されていない、でこぼこの地面と、鬱蒼と覆い茂っている樹々。

白い絵の具がついた筆を振り回したように、点々と背景に零れている。

じつとりと汗ばむような暑さは、照り付ける太陽のせいだけではないだろう。

「ううん……」

「！ヒカリちゃん！」

何処だ、ここは。明らかにキャンプ場ではない、見たことのない自然の中に放り出されて呆然としていた大輔は、隣で呻き声が聞こえたので慌ててヒカリを揺り起こした。

ゆつくりと開かれる目に、大輔はほつと胸を撫で下ろす。

大輔と手を繋いだまま起き上がったヒカリは、しよぼしよぼする目を優しく擦り、目の前にいる大輔を見た。

「……だいすけくん？」

「Good morning」

ぐつもーにん。知っている、おはようって意味だ。朝、一緒に学校に行く時、大輔はいつもそう言って元気よく挨拶する。

だからヒカリもおはよう、じゃなくてぐつもーにん、って返す。

朝の恒例行事となっている挨拶に、ヒカリは反射的にぐつもーにんと言った。

「……あれ？私、いつの間に寝て……？」

だんだんとクリアになっていく思考で、ヒカリはふと考える。

今日は子ども会のサマーキャンプの日で、大輔くんと同じ班になったから英語と日本語を教え合いながら夕飯であるカレーを作っていたはずだ。

途中でお母さんが来て、太一探してきてつてお願いされたから、大輔と2人ではーいっていい子の返事をして、行方をくらしちやったお兄ちゃんを探しに行つていたはずだった。

途中で吹雪にあつて、みんなでお堂に避難して、それで、それで……。

「……………」

記憶が鮮明になってきたヒカリは、辺りを見渡してようやく気づいた。

ここは、爽やかな風と穏やかな川の流れる音、深緑に彩られた樹々の上に広がる天色の空のキャンプ場ではない。

周りに生えている樹々や風の匂いは知っているものと全然違って、ヒカリはパニックに陥りかけるが、ぎゅつとヒカリの左手を握ってくれる暖かいものを思い出して、我に返った。

「ヒカリちゃん？」

「……あ」

「大丈夫？」

「……うん」

向き合う形で座り込んでいた大輔が、不安の色を浮かべたヒカリの顔を覗き込む。

茶色い目がじっとヒカリを見つめてくるので、波立っていたヒカリの心は徐々に落ち着きを取り戻した。

改めて周りを見渡す。何度見つめ直しても、ここは大輔達が来たキャンプ場でないのは明確なのだが、だとすればここは一体何処なのだろうか、という疑問が湧いてくる。

立ち上がった大輔につられて、ヒカリも両足で地面を踏みしめた。繋がれている手に、無意識に力が籠る。

大輔とヒカリの身長を合わせてもまだ高い樹を見上げ、そしてハツと気づいた。

太一が、いない。

それだけじゃない。あのお堂に一緒に避難していた面々が、周りにいないのだ。

記憶が確かなら、大輔とヒカリと一緒に突如として立ち上がった荒波に飲み込まれたはずなのに。

どうしようどうしよう、って2人してあわあわしていた時だった。

がさり

近くの茂みで、葉が擦れ合う音がした。

ひっ、と喉の奥から引き攣る悲鳴が漏れる。

繋がる2人の手は更に力が込められ、ほぼ同じタイミングと速度で、音がした方に顔を向けた。

恐る恐る、ゆっくりと背後の茂みに目を向けると、ガサガサ、ガサガサ、と葉が擦れ合う音がどんどん大きくなっていった。

こちらに近付いているのだ、と気づいた時にはもう遅かった。

がさがさ……ぴよーん！

「うわあああああああ！」

「きやあああああああつ」

茂みから勢いよくジャンプして飛び込んできた、2つの陰。

ビックリした大輔は、咄嗟にヒカ리를庇うような姿勢をとり、ヒカリも大輔の後ろに隠れるようにしがみつく。

べちよ、と大輔の顔に何か張り付いて、視界が真っ黒に染まった。

「うわ、わ、わ、わとおっ!？」

「だつ、大輔くん！」

飛びつかれた勢いを殺せず、伸しかかってきた何かに圧される形で、大輔はひっくり返った。

ヒカリが巻き添えにならぬように咄嗟に手を離れたのは、流石である。

ひっくり返ってごちーんと頭を打った大輔に、ヒカリは慌てて駆け寄ろうとしたが、それより先に何かがヒカリの視界を遮るように落ちてきた。

反射的にそれを受け止めると、そこにいたのは。

「……ね、ん？」

丸っこいフォルムの天辺には、取って付けたような三角の耳、それから縞々模様の尻尾。赤く、くりくりとした目が、ヒカリをじっと見上げる。

『……ヒカリ？ヒカリだよね？』

「え……どうして私の名前……」

「っ、ぷはあつ!!」

仔猫のような生き物が、嬉しそうにヒカリの名を呼ぶことに啞然としていたが、ため込んでいた息を吐きだしたような大輔の声で、ハツとそちらの方に目を向けた。

ひっくり返っていた大輔は、顔に張り付いていた青い陰を取ろうと格闘していて、ようやく剥がしたところだったようだ。

両脚と腹筋を使って上半身を起き上がらせた大輔は、引き剥がした青い陰を見るなり、早口で捲し立てた。

「○△×□◎☆▽；ゝ!？」

が、全く聞き取れない。それはそうだ、何せ大輔が使っているのは英語である。

正確には米語、つまりアメリカンイングリッシュで、ブリテイッシュイングリッシュではないのだが、それは今は置いておこう。

大輔は帰国子女で、小学校に上がる前までアメリカに住んでいた。と言うかアメリカで生まれたので、日本とアメリカの国籍を2つ持っている。

日本では二重国籍を法律として認められていないので、大人になったらどちらの国籍を取るかの選択をしなければならない。

それは置いておいて、アメリカで生まれた大輔は、小さい頃からお家でもお外でも英語漬けで、日本語なんか全く知らなかった。

こっちに帰ってきてから少々苦労することになったが、一緒にいるヒカリちゃんが懇切丁寧に教えてくれたお陰で、たった1年で日常会話には困らないほどの日本語力を取得することができた。

が、やはり小さい頃に取得した言語というのは、なかなか忘れないもので、今でも大輔はお姉ちゃんと会話をするときや興奮する時には英語が飛び出してくる。

相当ご立腹のようで、次から次へと飛び出してくる知らない言語に、青い陰は目を白黒させながら大輔を見上げていた。

「だっ、大輔くん、落ち着いてー!」

流石に青いのが可哀想になってきたヒカリは、仔猫を腕に抱いて大輔の下に駆け寄る。

と言うかヒカリも、若干英語で捲し立てている大輔が怖かった。ヒカリに話しかけられて、ハッと我に返った大輔は、肩で息をしていた。

落ち着いた? ってヒカリが困ったような表情を浮かべているのを見て、大輔はバツが悪そうに目を逸らして、青いの見下ろした。

ぱっちりとした赤い目が、印象的なちびっこいのだった。

「ご、ごめんな……?」

流石に悪いと思ったのか、大輔はきよとりと見上げている青いのに謝罪する。

知っている言語を口にしたためか、青いのはぱあつと笑った。

『ううん！へいきーでもびつくりしたよ、ダイシユケー！いまの、なんだったの？』

「え？今のは英語つつって……ってえ、そうじゃねえ！誰だお前！」

良かった、そのまま話を続けようとしていたから、どうしようかと思っただ、とヒカリは安堵した。

大輔が落ち着いてくれたので、ヒカリはようやく腕に抱いた仔猫をゆつくりと観察することが出来る。

座り込んでいる大輔の隣に腰かけて、ヒカリは先程思い浮かんだ疑問を、仔猫にぶつけた。

「ねえ、貴女はだあれ？どうして私の名前を知っているの？」

『アタシ？アタシはニヤロモン！ヒカリのこと、ずっと待ってたの！』
ニコニコと、答えになっていない答えを仔猫——ニヤロモンは返した。

ヒカリとニヤロモンの会話を隣で聞いていた大輔も、抱えていた青くてちっこいのに目を向ける。

「お前もニヤロモンっていうの？」

『ちつがうよー！オレはチビモン！すがたもかたちも、ぜんぜんちがうだろー。ダイシユケはダイシユケでヒカリはヒカリなのとおんなし！』

「uh, I see」

あいし？って思わず呟いた大輔の言葉を、首を傾げながら繰り返した青くてちっこいの……チビモンが何だか愛おしく思えて、大輔の胸がキュンとなる。

これが庇護欲なのだが、大輔はそんなこと知る由もない。

ただ衝動に任せて、ぎゅーっと抱きしめた。

きゃー！ってチビモンは嬉しそうな声を上げた。

そんな2人を微笑ましく眺めていたヒカリだったが、は、と我に返る。

そうだ、こんなことしている場合ではなかった。

「ね、ねえニヤロモン。お兄ちゃん知らない？」

『オニイチャン?』

「うん、あの、他の人。私や大輔くんみたいな。見てない？」

自分達は今2人きりなのだ、お兄ちゃんや他の人が見当たらないのだ。

どうしよう、つて途方に暮れていたところに、チビモンとニヤロモンが飛び込んできたから、太一達のことが一時的に頭からぽーんって飛んでいってしまった。

ヒカリの言葉で、大輔も思い出したらしい。

チビモンに同じような質問をしたら、

『しってるよ』

という言葉が2匹から同時に返ってきた。

「ほ、ほんとか!？」

『うん。コロモンたちがたいちがきた!つてどっかいつちやつたから、ここらへんさがせばいるはずだよ!』

「そっか!」

それなら話は早い。大輔とヒカリは手と手を取り合つて、空いている片方の手でチビモンとニヤロモンをそれぞれ抱っこして、2匹がくんくん匂いを嗅いであつちーつて指差す方向に向かって進み始めた。

『……………』

歩き始めて数分。大輔の腕に抱っこされて楽ちんな移動をしているチビモンは、ふと目に映ったものに興味を引かれた。

大輔が首から下げている、銀色に光っているもの。

お喋りをして退屈をしのいでいたのに、突然黙り込んでしまったから、大輔は腕に抱いているチビモンを見下ろした。

チビモンは、ホイッスルを持ってまじまじと眺めていた。

何だろう、何だろうこれ?と言いたげに傾けたりひっくり返したりして、ホイッスルを見つめている。

可愛らしい仕草にまたも大輔の庇護欲が刺激され、んっ、と変な咳が出た。

『ダイシユケー、これなあに?』

カラコロ、カラコロ、と振ってみれば中から音がする。見たことのないものに、こうやって振って遊ぶものなのか、とチビモンは大輔を見上げた。

「ホイッスルだよ」

『ほいつする?』

「そう、ホイッスル。その、細いところ口に咥えてふーって息吹いてみ。あ、あんまり強く吹くなよ? 優しくな、優しく」

『こう?』

口を尖らせながら見本を見せてくれた大輔の真似をして、チビモンは優しく息吹く。

ぴい、と弱い音が鳴って、チビモンとニャロモンはビックリした。

『しゅーいー!おとなった!』

『あー!アタシもやるー!』

きやつきやとはしゃぐチビモンを見て、自分もやりたいとニャロモンがせがむ。

いーよ、って大輔が許可を出してくれたから、一旦立ち止まってやればチビモンがホイッスルをニャロモンに向けて差し出した。

チビモンと違ってニャロモンは身体がない(顔だけ)なので、しようがない。

口に咥えて、チビモンがやったように優しく息を吹きかけると、ぴい、と弱い音を奏でた。

きやあきやあとチビ2匹ははしゃぐ。そんな2匹が微笑ましくつて、大輔とヒカリもニコニコしながら見守る。

再びチビモン達に導かれて歩き出す大輔達。

チビモンはホイッスルが気に入ったのか、ずーっと口に咥えて小さな音を鳴らし続けていた。

ぴっ、ぴっ、ぴっ、と言う音がBGMになって聞き慣れた頃に、ニャロモンがくんくんと匂いを嗅ぐ。

『ヒカリ、あっちからヒカリとにたにおいがするよ』

「私と似た匂い…?」

『コロモンとモチモンのおいもする!』

新たな名前に、大輔とヒカリは首を傾げるも、とりあえず先を進む。こつちだよ、と促すニャロモンとチビモンに急かされ、急ぎ足になった大輔とヒカリの視界に映ったのは。

「あ、空さん!」

「!あら、大輔にヒカリちゃん!」

空だった。何やら物陰から様子を伺っている彼女に疑問を抱きながらも、大輔とヒカリは声をかける。

一瞬びくつとなったが、正体が大輔とヒカリなのだ知って胸を撫で下ろしていた。

すみません、驚かせましたかと慌てて謝れば、いいのよと空は笑った。

何してたんですか、と問おうとして隣で頭の触角をぴよこぴよこさせてるのが目に入って、大輔とヒカリはそちらに目を向ける。

「ああ、紹介するわね。ピヨコモンよ。」

『よろしくね!』

また知らない生き物が出てきた、と大輔とヒカリはピヨコモンと名乗った生き物を見下ろす。

腕に抱かれていたチビモンとニャロモンがぴよんと降りて、ピヨコモンの下へ。

『チビモンたち、だいすけたちにあえてよかったね!』

『おー!』

『ピヨコモンとそらは、こんなところでなにしてるの?』

「え?ああ、そうだった!」

ニャロモンが至極最もな質問をすると、思い出した、と空は物陰から飛び出す。

ピヨコモンと、大輔達は慌てて空を追った。

チビモンがなにかあったの、とピヨコモンに聞くと、そらのなかまがたいへんだったの、とだけ言った。

何が大変だったのかは後で聞くとして、大輔とヒカリは空が向かつ

て行った大きな大きな樹へと駆け寄った。

おー、つて感嘆の声を漏らしながら、大輔とヒカリは樹齡云千年の樹を見上げていると、空がその樹に向かってもう大丈夫みたいよ、と話しかけた。

え？つて2人は怪訝な眼差しを空に向ける。それはそうだろう、茂みから飛び出して行ったかと思ったら、大きな樹に向かって話しかけたのだから。

2人の頭の上に沢山の「？」が浮かび上がっていたが、樹の幹の中から太一と光子郎が出てきたのを見て目を見開いた。

「お兄ちゃん！」

「光子郎さん！」

「空！大輔にヒカリ！無事だったんだな！」

「危なかったね」

「なあに、大したこともなかったさ」

「お兄ちゃん、何かあったの？」

樹の幹から出てきた太一に駆け寄り、抱き着きながらヒカリが問うが、太一はあーうーと呻いて苦笑いするだけで何も言ってくれなかった。

不思議に思ったけれど、空が見ていたらしいので後で空にでも聞くでしょう。

『クワガーモンのおと、とおーくにいったよ、ソラ』

ピヨコモンが頭に咲いている植物の蔓をびよこびよここと動かしなから言う。

ありがとう、と笑顔で礼を言う空に対し、太一と光子郎はピヨコモン達と、太一達の後から出てきた生き物達をマジマジと見つめた。

どちらも深みが違うピンク色で、ニヤロモンのように丸っこくて頭にひらひらとした触覚が生えている赤い目の薄いピンク色がコロモン、そのコロモンと違って両手がある少し濃いピンク色がモチモンというらしい。

太一も光子郎も、目が覚めてからコロモンとモチモンが傍にいて、ずつついてきているのだと言う。

チビモン達と一緒にだなあ、とぼんやり眺めていたら、もう一匹がトコトコやってきて、コロモン達と太一達の間で止まった。

コロモンよりももっと薄い、白に近いピンク色で頭の先にコロモンと同じようなひらひらがついているけれど、その生き物は短い四足を持っていた。

申し訳程度の四足は、捏ねた粘土を指先でちよつとだけ摘まんでみた、ぐらいの短さだった。

次から次へと現れるちっこいのに、太一達も啞然と見詰めるしかない。

当の本人（厳密には人ではないのだが、便宜上）は太一達の好奇と驚愕の眼差しなど全く気にせず、来た方角に顔、というか身体を向けてこつちだよーと誰かに呼びかけた。

ひよこ、と樹の陰から顔を出したのは、黒髪の、大輔とヒカリと同じぐらいの見かけない、薄い紫のTシャツと首からペンダントを下げた男の子。

「トコモーン！」

「賢、待ちなさい！」

ニコニコと笑顔を浮かべながら走ってきた男の子の後から現れたのは、太一の親友でサツカークラブの先輩、治であった。

その腕に抱えているのは、これまた見たことのない角が生えた不思議な生き物。

「太一！みんなも、無事だったんだな。よかった……」

「あ、ああ、まあ……って、それより、お前のその腕の奴……」

「え？ああ、こいつ？」

目が覚めたらいたんだ、と何処か嬉し気に太一達に紹介する。

恥ずかしそうにもじもじしながら、生き物はか細い声でツノモンだと名乗った。

角が生えているから、ツノモン。安直なネーミングセンスである。

「ぎゃあああああああああああ!!」

悲鳴が響いて、子ども達はギョツとなってそちらに目を向けた。

茂みから一直線に飛び出してきたのは、最年長の丈である。

太一達の姿を見て、助けに来てくれえと情けない声で叫んだ。

「へ、へんな奴に追われて……!」

『しつれいだな!へんなやつじゃないよ、おいらポケモンだい!』

肩で息をしながら太一達の前で膝に手をつく丈の背中に、ぺつとりと抱き着いたのはアザラシの子どものような生き物。

また悲鳴を上げた丈だったが、年下達からの怪訝な眼差しを感じて、悲鳴を総て吐き出した。

じつと見つめてくる太一達のすぐ隣には、自分をずっと追いかけてきた生き物と同じような、見たことのない生き物達。

既に色んなことが起こって、もう次に何が来ても全く驚かなくなっていた太一達は、少し感覚が麻痺していた。

と言うより、ぎやあぎやあと騒いでいる丈を見て、逆に冷静になれたとも言える。

ホラー映画などで、自分よりも派手に怖がっている者を見ると平静さを取り戻す原理と一緒である。

姿かたちも様々な生き物を目にし、驚愕している丈と冷静さを取り戻しつつあった子ども達に向かって、彼らはこう言った。

《ぼくたち、デジタルモンスター!》

とりあえず自己紹介をそれぞれしないか、と啞然としている子ども達を我に返らせてくれた空の提案に乗ることにして、まずはデジタルモンスターと名乗った生き物達がそれぞれ名前を告げてくれる。

丸くて頭にひらひらした触覚がある、赤い目をしたコロモン。

頭に角が生えた、ふわふわした毛に覆われている恥ずかしがり屋のツノモン。

花が咲いたタコのような姿をしたピヨコモン。

関西人が聞いたら間違いなく卒倒するような、変な関西弁を喋るモ
チモン。

アザラシの子どものようなプカモン。

豚の貯金箱と見紛うトコモン。

仔猫をぎゅつと凝縮したようなニヤロモン。

そして青くてへによりとした角が2本あるチビモン。

みんな姿形が様々で、何の共通点もないけれど、総称してデジタル
モンスターと言うらしい。

「僕は、よくできたテーマパークか何かかと……」

「だとしたらキャンプ場にいた僕らをどうやって運んだんだよ、って
話になるぞ」

「それもそうですね」

自己紹介の続きをする。

お台場小学校の5年生、太一と空と治、6年生の丈、4年生の光子
郎は、大輔も知っている。

5年生の3人と4年生はサッカークラブの先輩だし、6年生の丈は
お姉ちゃんと同じ学年、同じクラスだ。

ヒカリもまた然り、なので特出して言うことは特にないだろう。

でも1人だけ知らない子がいる。

あんな子、学校にいたっけ？って大輔とヒカリは首を傾げた。

クラスメートの名前を覚えるのが精いっぱい、他のクラスの子は
顔だけ知っている、という状況ではあるが、それでも黒髪の小さな男
の子を見かけた覚えはない。

1年生の子か、それともああ見えて3年生なのかな？って思いなが
ら、太一が紹介してくれるのを待った。

「えーっと、確か、ケン、だっけ？治の弟の」

「うん！僕、賢！御手洗賢！小学校2年生だよ！」

「あー、この子が？初めまして、賢くん。私は空よ」

「初めまして、光子郎です」

太一と空、光子郎は知っていたようで、賢と名乗った男の子に挨拶
をする。

でも大輔もヒカリもやつぱり見かけたことがないから、思い切って聞いてみることにした。

「ねえ、お兄ちゃん。あの子、治さんの弟なんだよね？」

「でも学校で見かけなかったっすよ？」

「ん？あれ、言っただけじゃなかったっけ？僕の家、両親が離婚して別々の家で暮らしてるんだ」

大輔達の疑問に答えたのは、治であった。

あまりにもあっさりとは答えるものだから、同じく知らなかった丈が、何故かゴメンと謝罪した。

「ちよ、ちよつと失礼だったね……」

「何ですか？僕は気にしませんよ」

変な丈先輩だなあ、つてあつげらかんと笑うから、丈も脱力した。まだ自己紹介は残っている。

「ほら、大輔とヒカリ。お前らも自己紹介しろよ。」

太一に促されて我に返った大輔達は、はーいっていい子の返事をした。

「本宮大輔！小学校2年生です！サッカー部です！」

「八神ヒカリです、小学校2年生。よろしくお願いします」

ぺこり、と2人が揃って頭を下げたのを見守って、太一はぐるりと全員を見渡した。

オーロラと一緒に目撃し、突然立ち上がった荒波に吞まれてこの不思議な世界に飛ばされた子ども達の人数を数え、1人足りないことに気づいたのは光子郎だった。

「ミミさんが、太刀川ミミさんがいません！」

4年生のミミは光子郎と同じクラスの子で、学年1の美女として有名だった。

彼も挨拶ぐらいは何度か交わしたことはあるものの、まともな会話をしたことは殆どない。

丈も何か彼女に用があつたらしいのだが、その用件が何なのかを聞くことは叶わなかった。

「きゃあああああああああああああああつ!!」

絹を裂くような悲鳴が響く。

「あっちだー!」

太一が最初に走り出した。続いて空、光子郎が太一の後を追う。治と賢、大輔とヒカリ、そして丈がしんがりを務め、悲鳴のした方へ、子供達は走る。

開けた場所に出て、向こうの方からテンガロンハットを被った、ウエスタンスタイルの女の子が走ってきた。

足元にはコロモン達と似たような、植物の種から芽がでたような生き物が同じく走っている。

あれもデジモンなのだろうか。

今にも泣き出しそうな声を出しながら走ってくるミミ達の無事に、一同がホツと胸を撫で下ろしたのもつかの間、ミミの背後から高速で羽を飛ばたかせる音と、何かをなぎ倒すような音が同時に聞こえた。ギョツとなって立ち止まった子ども達の視界に飛び込んできた、毒々しい程の赤色に染められた巨体のクワガタ。

「What!? What is happening!? What IS that thing!? What is going on here!? Somebody help us!!」

『ダツ、ダイシユケ!?なに!?なにいつてるの!?!』

「大輔くん、落ち着いて!何言ってるか分かんないよ!」

見たことのない大きな大きなクワガタに興奮と混乱により、英語で捲し立て始めた大輔にチビモンとヒカリは慌てて大輔を宥める。

が、そんなことをしている場合でもない。

大きなクワガタ……太一達曰くクワガーマンが、上空から滑空して太一達に襲い掛かってくる。

頭上すれすれまで降りてきたクワガーマンは、太一達の真上を通り過ぎると再び上昇して、大きなハサミで樹々をなぎ倒して行った。

『ミミ、だいじょうぶ?』

「うう、タネモン……」

恐怖と疲労で座り込んだミミに、タネモンと呼ばれたデジモンが気づかわし気に声をかける。

空はそんなミミに駆け寄って、背中を優しく擦ってやった。

しかし息つく間もなく、クワガーモンは子ども達に執拗に襲い掛かってくる。

大きく旋回して再び襲い掛かってきたクワガーモンから逃げるべく、子ども達は走り出す。

デジモン達も、その小さな身体をぴよこんぴよこんと跳ねさせながら子ども達の後を追った。

背後から迫ってくる、樹々をなぎ倒す音に、治が伏せろと叫んだ。

上級生が下級生を庇う形で倒れ込むように伏せた上空を、クワガーモンが通り過ぎていく。

『きやうー!』

「チビモン!」

転んだ勢いとクワガーモンが通過した際に巻き起こった風に呷られ、チビモンがころころと転がっていくのが見えたヒカりは、クワガーモンが通り過ぎたのを見計らって、思いつきりずっこけた大輔の代わりにチビモンに駆け寄っていく。

「大丈夫?」

べちよ、と地面に思いつきり顔を打ち付けたらしいチビモンは、ううって涙目になって短い手で顔を擦っているのを、ヒカりはひよいと持ち上げた。

顔の真ん中がちょっとだけ赤くなっている。

砂まみれになっている顔をふるふるさせて埃を払ったチビモンが、ヒカリを見て、ヒカりに抱きあげられていると理解して、ひゅつと小さく息を呑んだ。

怯えた、表情。

見開かれた赤い目は小刻みに揺れながらヒカリを見つめている。

そんなチビモンの反応に驚いたヒカりは思わず黙ってチビモンを見下ろしたが、何かに気づいたチビモンの怯えた表情はすぐに引込み、数度瞬きをした。

自分の身体を抱きあげているヒカリの手をキョトキョトと見やつて、しきりに首を傾げている。

「どうしたの、チビモン？」

『……うくん？』

「悪い、ヒカリちゃん。チビモンありがとな。」

「あ、ううん。大丈夫よ。ニヤロモンは？」

『わたしもへいきー！』

「な、何なんだよ、これは！」

泣き言を言っている丈のすぐ近くに、クワガーモンが切り落とした枝が落ちてきて、ひっと短い悲鳴を上げた。

もう訳が分からない。ここは一体何なのだ。一体何故自分達はこんなところにいるのだ。答えてくれる者は、勿論いない。

いきなり飛ばされて、デジモンだと、パートナーだと名乗る不思議な生き物が自分達の後をついてきて、その上大きな昆虫に追い回されて、丈の精神はもう限界である。

ただクワガーモンの猛攻は止まらない。

子ども達の真上を通り過ぎていったクワガーモンは、ピヨコモンのまた来る！と言う言葉と共に、再び樹々をなぎ倒しながら子ども達の下へと飛んできた。

「くそ……いゝあんな奴にやられてたまるか！」

「太一、無理よ！無茶言わないで！」

太一が勇ましいことを言いながら立ち上がるも、空がそれを止める。

幾ら何でも、相手が悪すぎた。コロモン達によれば、クワガーモンはとても凶暴で、目についたものには何でも襲い掛かるデジモンらしい。

身体の小さなコロモン達は、クワガーモンを見かけたらまず隠れるか逃げるしか、選択肢はなかった。

不思議な生き物であるデジモン達にはそれぞれ技があるらしいが、まだ幼年期（と彼らは言っていた）であるコロモン達が使えるのは、泡を吹くくらいである。

だがそれも威力はほぼないに等しく、大きな身体のクワガーモンにダメージを与えることは出来ない。

第一、

「そうだ！僕達には何の武器もないんだぞ!?空を飛んでる相手に、どうしろって言うんだ！それに……」

治が正論を叩きつけながら、傍らにいる弟を見やる。

兄にしがみ付いた賢は、とつても怯えた表情を浮かべていた。

そんな兄弟を見て、太一も思い出す。ちよつと離れたところで、転がって行ったチビモンを助けに行った妹と、1番の仲良しの男の子。武器がない以上に、ハンデがありすぎる。

「そうです、ここは逃げた方が……」

戦う術がない弱者は逃げるしか許されない。

悔しそうな表情を浮かべる太一だったが、妹がいる以上彼女を危険に巻き込むわけにはいかなかった。

それに……。

「……くそーみんな走れ！」

太一が叫ぶ。妹と後輩の腕を掴んで、先頭を走った。

クワガーモンは樹々をなぎ倒しながら、尚も追ってくる。

一体、どうしてこんなことになったんだ。

きっと誰もがそう思っている。みんな、キャンプをしに来ただけだ。

親睦を深めるために、毎年何かしらのイベントを行っており、今回はたまたまサマーキャンプになった。

お友達や、遠くに住んでいるお祖父ちゃんお祖母ちゃんのお家にお泊りしたことはあっても、外でテントを張って知らない人達と眠るなんて、みんな初めての経験だ。

大輔は1ヶ月前から楽しみにしていて、毎日毎日その日を指折り数えながら待っていた。

皆でカレーを作って、お喋りしながらカレーを食べて、夜になったらレクリエーションをやって、寝る時間になったら大人達の目を盗んで知らない人達とこっそりお喋りして夜更かししたり……。

そんな計画を立てていたのに、全部台無しだ。

ここは、一体何処なのだ。

見知らぬ大地、見知らぬ空、見知らぬ風景、見知らぬ匂い。

総てを、子ども達は知らなかった。

理由もなく襲い掛かってくるクワガーモン。

あまりにも総てが理不尽だった。

どうして、どうして、どうして。

そんなことばかりが頭の中を駆け巡り、太一達の眼前に広がる行き止まりが、更なる絶望へと追いやる。

森を抜ける。背後から迫ってくる、樹々がなぎ倒される音から早く逃れたかった子ども達は、開けた眼前の先に続く道がないと知って、愕然となった。

鬱蒼と覆い茂っていた森から抜けて広がる青空が、今は憎たらしい。

太一が代表して崖の先に行き、下を覗き込んだ。

眼前に流れる川、飛び込めば助かるかもしれないが、まだ小学生の子ども達が飛び込むには高すぎた。

太一と治、空だけならきつと恐怖を押し殺して飛び降りただろう。

でもそこにいるのは太一達だけじゃないのだ。

最年長なのに頼りない丈、女の子を体現しているミミ、精密機器を抱えている光子郎、そして何よりも護らなければならぬ最年少の2年生が3人。

全員に飛び込めなんて無茶振りを言うほど、太一も愚かではない。

「こっちはダメだ！別の道を探そう！」

「べ、別の道って……！」

しかし絶望は待ってくれない。どおん、と背後の樹々が吹き飛んで、子ども達は慌てて崖の先へと逃げた。

飛び出してくる、毒々しい赤のクワガタ虫。

咄嗟に伏せた太一の上を通り過ぎていくのを見た空は、今のうちに逃げようとみんなに声をかけた。

しかし、

「っ、いって……!」

『ダイシユケ!』

「大輔くん!」

立ち上がるうとした大輔だったが、膝に激痛を感じてしやがみこんでしまった。

膝から血が出ている。先程転んだ時に擦りむいたのだろうか。

すぐ傍にいた丈が、大丈夫かと声をかけてくれた。

「太一!後ろっ!」

大輔に気を取られていた子ども達は、気づかなかった。

上空を旋回して再度襲い掛かってきたクワガタモンが、太一に迫っていることに。

治が真っ先に気づいて声を張り上げたから、太一は慌てて立ち上がって走り出した。

しかし、クワガタモンは、すぐそこにまで迫っている。

治の視界の端を、薄いピンクの丸い陰が横切った。

『タイチー!』

コロモンだった。弾力のある身体を利用し、コロモンは大きく跳ぶ。

足を纏れさせながら子ども達の下へ駆け寄ってくる太一の横を通りすぎ、コロモンは頬を膨らませてピンク色の泡をクワガタモンに向かって放った。

ぺちよ、という情けない音を出しただけで、クワガタモンにダメージは入っていない。

それどころかコロモンの小さな身体は、巨大なクワガタモンの頭部

で呆気なく吹っ飛ばされていく。

ああ、と太一は悲痛の声を上げながら、自分を護ろうとしてくれた小さな生き物の下へと駆け寄って行った。

そして、コロモンの後に続けと言わんばかりに、他のデジモン達も飛び出して行く。

一斉に吐いた泡は、ダメージにこそ至っていないものの、バランスを崩すには十分だったようで、クワガーモンは森の樹々へと突っ込んで姿が見えなくなった。

助かった、なんて誰も思わなかった。

誰も、喜ばなかった。

だって自分を護ろうと突っ込んでいった小さな生き物達が、そのせいで倒れてしまったのだから。

大輔は泣きそうになりながら、チビモンの下へ歩を進める。

ヒカリも、賢も、そして他の子ども達も。

ここに来てからずっとずっと、自分の後をひよこみたいにくっついてきていたデジモン達の下へ行つて、ぐったりしている身体をそっと抱き起す。

「馬鹿野郎！何で無茶したんだ!!」

『だって……ぼくはタイチをまもらなくちや……』

「……コロモン」

こんな小さな身体で、何が護るだ。クワガーモンに吹っ飛ばされたのに。

そう言えたら、どれだけよかっただろうか。

言えなかった。言えるわけが、なかった。

太一を待つていたと、目が覚めてからずっとずっと自分の後をついてきてくれた、この小さな生き物に、最初にクワガーモンに襲われた時にも、自分を護ろうと小さな身体で果敢に攻めていった小さな戦士に、そんな酷いことを言えなかった。

他の子ども達も、同様だった。

会ったばかりなのに、お互いのことなんか何も知らないはずなのに、デジモン達は子ども達の名前を間違うことなく呼んで、慕っていた。

訝しんだり、邪険に扱う者もいたのに、デジモン達はそれを気にするそぶりなんか全然見せない

何故、こうもデジモン達は子供達のためにあんなに必死になれるのだろうか。

「チビモン……!」

「ニヤロモン、どうして……?」

ぐったりとしているチビモンとニヤロモンをそれぞれ抱き上げる大輔とヒカリ。

うう、と呻きながらゆっくりと目を開いたチビモンとニヤロモンは……笑っていた。

不意に、大輔の脳内に初めて会った時の記憶が蘇る。

ちっこくつて、大輔が片腕で抱き上げても全然余裕で、大輔が首から下げているホイッスルを気に入って、ずっとぴ、ぴ、ぴ、って吹いて遊んでいた姿がとっても可愛くて、むしろ自分が護ってやらなければと思っていたのに。

クワガーモンに追いかけて逃げることしか出来なかった大輔を助けてくれたのは、護らなければと思っていたチビモンだった。

あの太一だつて背を向けることしかなかったのに。

「……ああ!」

悲痛の声を上げたのは、誰だっただろうか。

低く空気を擦るような唸り声と共に、クワガーモンが突っ込んでいった辺りの樹々がガサガサと揺れる。

爆発でも起こったかのように、樹々が根元から折れて上空へと舞い上がる。

シャキン、シャキン、と頭の先についているハサミをこれ見よがしに見せつけて鳴らして、子ども達に威嚇してくる。

クワガーモンが退路を塞いでしまっているため、もう逃げ道がな

い。

残っているのは崖の先だけ。子ども達はパートナーを連れて、太一の下へと走る。

もう、逃げ場がない。

ゆっくりと立ち上がったクワガーモンは、その重い巨体を支える両肢で大地を踏みしめながら立ちはだかった。

ゆっくり、ゆっくりと。

クワガーモンは恐怖に怯える子ども達の下へと近づいてくる。獲物を追いつめ、甚振る捕食者のように。

パートナーを抱きしめる子ども達の腕に力が入った時だった。

『……いかなきや』

ぽつりと、落とすように眩いたのは、コロモンだった。

え、と太一は腕に抱いたコロモンを見下ろす。

聞き違いか、と思ったがコロモンは衝撃的な言葉を続けた。

『ぼくたちが……たたかわなきや、いけないんだ……！』

「な、何言ってるんだよ!？」

こんな小さな身体で、あんな巨体に挑もうというのか。

先程吹っ飛ばされたばかりだと言うのに。

『そうや……わいらは、そのためにまっとうたんや……！』

「そんな……！」

光子郎の庇護から逃れようと、モチモンがもがいている。

『いくわ!』

「そんな、無茶よ!あなた達が束になっても、あいつに敵うはずないわ!」

可愛らしい姿とは裏腹に、ピヨコモンも空を護ろうとクワガーモンを睨み付けた。

空はそんなピヨコモンを咎めることしか出来ない。

『でもいかなきや!』

『ボクもお!!』

『おいらもおー!』

ツノモン、トコモン、プカモンが飛び出そうとするのを、治と賢と丈が止めている。

そんな彼らを見て、ミミは不安そうに腕に抱いたタネモンを見下ろした。

「タネモン……貴女も?」

タネモンが頷くと、ミミは傷ついたような表情を見せる。

「……ニヤロモン……」

『ヒカリ、おねがい、はなして。アタシはあなたをまもらなきやいけなの!』

真剣な顔でお願いをしてくるニヤロモンに、それでもヒカリは決心がつかずにその手を離すことができない。

みんなそれぞれのパートナーにやめろと進言して、それでもデジモン達は行くと言い張っている。

「……チビモンも?」

『うん……!』

何処か打ちつけたのか、痛みを堪えているような表情を浮かべながらも、チビモンの視線はクワガーモンに向けられている。

どうしよう、どうしたらいいのだろう。

今の自分達に戦う力はない。でもだからって、こんな小さな生き物達を戦わせるなんてことも出来ない。

どうすれば、どうすれば……。

子ども達は必死で小さな生き物達を抑え込むが、デジモン達はそんな子ども達の願いも虚しく、その腕を飛び出して行ってしまった。

小さな身体を一生懸命跳ねさせながら、大きな大きなクワガーモンに向かって行くデジモン達。

待つて、という言葉ももう届かない。

それぞれのパートナーの名前を呼んでも、デジモン達は振りむいてくれなかった。

「コロモオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

動いたのは、太一だけだった。

自分を護ろうと亥の一番に飛び出して行ったコロモンの後を追って、太一は腹の底から叫んだ。

空から9つの光が降り注ぎ、デジモン達を包み込んだのは、その時だった。

想いを受け止めて空から降ってきた9つの光は、まるで虹の柱のようで、何処か幻想的であった。

突如として暗くなった空から降り注ぐ9つの虹の柱に包み込まれたデジモン達が白い光に包まれる。

くるくるとその場で回転したかと思うと、それまで小さく頼りなかつた姿かたちが変わってしまったのだ。

コロモンは黄色く小さな恐竜に、

ピヨコモンはピンク色の小鳥に、

モチモンは大きなテントウムシに、

ツノモンは蒼い毛皮を被った恐竜に、

トコモンは羽の生えたハムスターに、

プカモンは白い毛皮のアザラシに、

タネモンは濃いピンク色の花が咲いた姿に、

ニヤロモンは薄いピンク色の子犬に、

そしてチビモンは青い小さな龍の子どもに。

突然姿形が変わってしまったコロモン達を啞然と見つめる太一達を尻目に、コロモン……いや、アグモンは勇ましい掛け声をデジモン達にかけた。

『行くぞ、みんなあー!』

アグモンを筆頭に、デジモン達は次々とクワガーモンに飛びかかっていく。

少しだけクワガーモンを怯ませることに成功したが、それでもクワガーモンと比べればまだまだ小さい。

右の2本の腕を思いつき振るって、アグモン達をあしらう。

溜まらず吹っ飛ばされたアグモン達だったが、コロモンだったときと違ってすぐに起き上がった。

「大丈夫か!？」

『これぐらい平気さっ!』

決して強がりなどではなかった。身体が大きくなったことにより、受けるダメージも少ないのだ。

分が悪いと判断したのか、クワガーモンは背中の羽を羽ばたかせ、空に逃げようとした。

『させなわよ!ポイズンアイビー!』

逃がすまいと最初に動いたのはタネモンから変化した、パルモンだった。

爪だと思っていたのは蔓だったようで、思いつき振るとどんどん伸びて行った。

クワガーモンの片足に蔓を捲きつけ、浮かび上がろうとする巨体を踏ん張って止める。

それでもなお逃げようとするから、プロットモンは大きく息を吸いこんだ。

『逃がさない!パピーハウリング!!』

きいいいん、と脳に響くような音に、子ども達は咄嗟に耳を塞いだ。

それはクワガーモンも一緒だったようで、全身に響くような超音波はクワガーモンの巨体を鈍らせる。

次に動いたのは、ブイモンとパタモンだった。

アグモンよりも小さな身体のブイモンだったが、思いつきり助走をつけて走ると、パルモンの後ろでジャンプし、何と蔓の上に立った。

だだだだつと駆けあがったかと思うと、クワガーモンの身体を飛び回って上空に大きく跳ぶ。

『だりゃああああああつ!!』

勇ましい掛け声と共に、身体を回転させて勢いをつけるとクワガー

モンの頭部に踵落としを決めてやった。

『パタモン！』

『オツケー！エアーショット!!』

バランスを崩したクワガーモンに、パタモンが空気の砲弾を食らわせる。

『まだまだ行きまっせ！プチサンダー!!』

畳みかけるようにテントモンが動く。

羽を高速で羽ばたかせ、摩擦で起こした小さな雷がクワガーモンに命中した。

引き摺り下ろしてやったクワガーモンの足が地面に着く前に、ゴマモンが転がって行って足払いをしてやる。

『みんな退いて！ベビーフレイム!!』

とうとう片膝をついたクワガーモンに、アグモンがオレンジ色の炎の弾を吐いた。

先程のお返しとばかりに、猛攻は止まらない。

『食らえっ！プチファイヤー!!』

青い炎の線を吐き出したのはガブモンだった。

『行くわよーマジカルファイヤー!!』

ピヨモンが繰り出したのは、緑色の渦巻く炎である。

大きなクワガーモンも、連続で炎の攻撃をされるの流石に堪らない。

頭部が燃えているのを振り払うように、大きな咆哮をあげたクワガーモンに、遠距離の攻撃を持っているデジモン達が留めを指す。

一瞬大きな爆発を起こし、再びクワガーモンの身体が燃えた。

大きな咆哮を挙げながら、クワガーモンはゆっくりと背後の森の中へ倒れ込む。

何が起こったのか、咄嗟に理解できなかった子ども達だったが、笑顔で走り寄ってきたパートナー達を見て、ようやく我に返る。

倒した、倒したのだ。

あの大きなクワガタを、クワガーモンを。

小さく頼りなかったコロモン達がその姿を変えて、逞しい姿になってクワガーモンを倒したのである。

立ち去った危機に子ども達も笑顔になり、腕を広げてパートナーを迎え入れた。

よくやったな、つて褒める者もいれば、姿形が変わって目を白黒させている者もいる。

三者三様の反応を見せている子ども達、大輔とヒカリは前者だった。

「すごい、すごいねニヤロモン！おっきなクワガーモン、やつつちやった！」

『ふふふ、今はプロットモンよ。ヒカリが無事でよかったわ』

仔猫から子犬になったニヤロモン、ではなくプロットモンを抱き上げたヒカリは、嬉しさのあまりほおずりしている。

「Great!! You're awesome, aren't you!?! How did you do that!?!」

『……ごめん、ダイスケ。オレ、ダイスケが何言ってるのか全然分かんない……』

「あ、わりい」

微笑ましい光景の一方で、こちら。

大輔に褒めてもらおうと両手を広げて駆け寄ったチビモン、基ブイモンだったが、興奮しすぎて英語が飛び出している大輔に引いていた。

しかし物事というのは、そう上手くいくものではない。

クワガーモンを退けて喜んでいる子ども達の水を差すように、空が悲鳴を上げた。

アグモンと抱き合って喜んでいた太一だったが、空の悲鳴と視線の先を辿り後ろを振り返る。

ズシン、ズシンと地響きを立てながら、ソレは頭部の2本の角を地面に突き刺した。

びきびきびき、と走る罅。

そしてソレは、走った罅から地面を持ち上げるように頭を上げた。

ソレ……倒れたはずのクワガモンが突き刺した角は、地面の底まで罅を産み出し、呆気なく崖の先を崩してしまふ。

そして子ども達は、遥か下の川へと呆気なく落ちていくのであった。

太陽の咆哮

「あーエライ目にあつた……」

何とか岸にたどり着いた子供達は、びしょぬれになった服から水気を取るように絞り、息をつく。

ちよつと水を飲んだのか、丈がげほげほ咳き込んでいた。

大丈夫ですかーとヒカリが丈の背中をさする。

「あ、ああ…何とかね。」

ようやく落ち着いて、丈は苦笑いした。

クワガーモンに落とされた子ども達を、何とか助けようとデジモン達はそれぞれの特徴を生かして奮闘したが、それで助かったのなら今頃丈はびしょぬれになんかなっていいだろう。

虚しい結果に終わり、まず丈とゴマモンが水しぶきを上げて川に落ちる。

すかさずゴマモンが何か叫び、ゴマモンを中心にカラフルな魚が川の中から飛び出してくる。

それがどんどん広がって、最初に川の中に落ちた丈が助け出された。

魚が密集して1つの筏となったと同時に、子ども達とデジモン達が魚の筏に救出される。

目を白黒させていた子ども達が、助かったのだと安堵したのもつかの間、治が声を張り上げながら崖を指差した。

崖を崩したことで足場が脆くなり、そこにいたクワガーモンも巻き込まれて落ちてきたのだ。

空に飛んで逃げる暇もなかったのだろう。

崩れた巨大な岩と共に川に落下したクワガーモンを見て、ゴマモンは魚の筏を急かす。

だが小さな魚が密集した筏は、ほんの少しスピードを上げたただけだった。

距離を離すことが出来ず、落ちた岩とクワガーモンが作り上げた巨大な水の柱が、つかの間の雨となって子ども達に降り注いだ。

「あー」

太一の声が漏れる。大きな波が立ち上がって、太一達に襲い掛かってきた。

振り落とされまいと、子ども達は魚の筏に腹這いになって、必死にしがみ付く。

多少ぬるついているのは、この際我慢した。

ざっぱーん、と立ち上がった波によって岸に打ち上げられた子ども達は、今に至る。

魚の筏のお陰で服は多少水を被ったぐらいではあったものの、真つ先に落ちた丈は誰よりもびしょぬれだったので、丈の服が乾くまで休憩することにした。

樹の陰に隠れて、丈は脱いだ服を限界まで絞って水気を取り、日当たりのいい場所に置く。

下着までびしょぬれになってしまった丈は随分葛藤していたが、せつかく服が乾いても下着が濡れたままだと意味がないだろう、という太一の至極最もな意見に覚悟を決める。

他の子達は多少服が濡れた程度だったので、お日様の下でじつとしていればすぐに水気は飛んでいった。

へーつくしよん、と樹の陰から情けないくしゃみが聞こえる度に、気の毒に思う。

服を着る、という概念がないデジモン達は丈が服を脱いでどうして樹の陰に隠れているのか、さっぱり理解が出来ない。

ゴマモンが仕切りにこつちに来れば、日が当たらないから寒いんだよ、って丈に声をかけるけれど、丈としては冗談ではなかった。

男だらけならともかく、ここには女子もいるのだ。

何が悲しくて、隠すものが何もない状態で3人もいる女子の前に、裸で飛び出さなければならぬのか。

丈は頑としてゴマモンの意見を聞き入れなかった。

小一時間もすれば、これぐらいならまあ我慢できるかな、ぐらいには乾いたので、治に服を持ってきてもらってさつきと着替え、クワガーモンの猛攻からやつと逃れることができたこともあり、気持ちに余裕が出来た丈はふと思いついた。

「それにしても何だったんだろう、さつきの魚の群れ……」

『あー、あれ？あれはね、マーチングフィッシューズさ！おいら、魚を自由に操ることができるんだー！』

白いアザラシが笑顔で誇らしげにそう言った。

札を言って、姿が先程と違い名前も違っていることに気づいて、丈が口ごもる。

『オイラ、ゴマモンだよー！』

「ゴマモン？」

白いアザラシ……ゴマモンを筆頭に、姿を変えたデジモン達が次々と自己紹介をする。

アグモンは言った、自分達は“進化した”のだと。

進化ってなあに、って賢がお兄ちゃんに尋ねる。

うーん、と治は腕を組んで困ったような表情を浮かべた。

「生き物の能力とかが、世代を経る中で変化していくこと、なんだけど、普通は……」

「そうですね。変化していく環境に対応していくために、生き物はより高度なものへと進化していきますが……」

光子郎も眉を顰めている。

彼らの言った通り、進化と言うのは普通は世代を経て変化していくことを指すのである。

つまり“その世代”自体が変化するのではなく、次世代、次に生まれた子どもに起こった変化を進化と言うのだ。

少なくとも、子ども達の世界での進化の概念はそれである。

しかしどうもここでは進化の概念が少し違うらしい。

アグモンによれば太一のお陰で進化が出来たというのだが、子ども

達は何のことやらさっぱりだった。

特に何かした覚えがないのである。

アグモン達が進化した時は、確かにクワガーモン相手に小さな身体で戦うなんて無茶だ、とは思った。

それでも戦うと言い張るデジモン達に、必死に祈ったことだけは覚えてる。

何を祈ったのか、どんなことを祈ったのかは分からない。

ただクワガーモンから逃れるだけの力が欲しいと、助けようと必死になってくれているデジモン達が怪我をしませんようにと、子ども達の頭の中はそれだけで一杯だったと思う。

よく分かんないなあ、って大輔は上級生達の話から興味を失くして、自分のパートナーであるブイモンを見やる。

チビモンの面影を持ったブイモンは、チビモンだったところは顔周りまで白かったのが、口元だけになっている。

庇護欲をそそっていた可愛らしくて小さかったチビモンが、今や大輔と同じぐらいだ。

両手でブイモンの顔をペタペタと触れば、くすぐりたい、とブイモンは身をよじりながら笑う。

ああ、そう言えば。

「さっきの、カツコよかったなブイモン！」

『?さっきのって?』

「クワガーモンにキックした時だよ！えっと、パルモン?の蔓の上走ってった時はビックリしたけど、その後ぴょんってジャンプして、キックしてただろ！」

すっげーカツコよかった!って大輔ははしゃぐ。

褒められているのだと気づいたブイモンは、えっへんって胸を張った。

「……まあ、それはひとまず置いておこう。それより、これからどうする?」

どうして姿が変わったのか、何故それが子ども達のお陰なのか、子ども達にもデジモン達にも分からない今、これ以上議論しても仕方が

ないと判断した治は、話題を変えた。

「元の場所に戻ろう！大人達が助けに来るのを待つんだ！」

そう言ったのは、丈だった。

迷子になった時、大人とはぐれた時は、すれ違いにならないようにその場でじっとしているのがセオリーである。

クワガーモンのせいでだいぶ彼方此方走り回ってしまった挙句、崖から落とされ川に流されてしまったが、元いた場所まで戻るべきだと、丈はそう主張したが……。

「……戻るって言ったってなあ？」

「随分流されちゃったわよ？」

太一と空がそう言って自分達が流された川の向こうの聳え立つ山を見上げた。

自分達が何処にいたのかも、最早覚えていない。

クワガーモンに追いかけてられてあっちへこっちへ走り回って、落ちた川は何度も蛇行して、方向感覚も狂ってしまったている。

戻るなんて言葉では簡単に言うが、どうやって戻るといえるのか。

考え込んでいた治が口を開いたのは、その時だった。

「……思っただけけど、ここってキャンプ場の近くじゃないんじゃないか？」

「え？」

「いや、もつと言うと日本ですらない、むしろ地球ですらないんじゃないかと、僕は思う」

「お、治何言ってるんだい？」

顎に指をかけるその姿は様になっており、まさしく天才少年に相応しい佇まいだった。

しかしいきなり突拍子もないことを言い出した治に、丈だけでなく他の子ども達も狼狽えていた。

治ほどの天才少年が、いきなり日本でも地球でもないと言い出したのだから、無理もないだろう。

「治先輩、一体どういう……？」

「ん？簡単さ。まず周りの景色。キャンプ場の山は岩肌なんかじゃな

かった。生えている樹も亜熱帯の植物みたいだなあと思ったけれど、近くで見ると微妙に違ってたし、何よりこの子達の存在が、ここは日本どころか地球じゃないって教えてくれた。趣味で生き物図鑑をよく眺めていたけれど、どの図鑑にもこの子達の姿はなかったし、新種だしたらテレビで大々的に報道されているけれど、そんな特集見たことあったかい？異世界だって考えた方がずっと自然だよ」

「……確かに」

小学5年生とは思えない理路整然とした、それでいて分かりやすい説明に、狼狽していた子ども達はすとんと腑に落ちた。

自分達の名前を知っている不思議な生き物と出会い、子ども達の3倍はあるクワガタに追いかけて、色々追いつめられかけていたが、少なくともここが自分達の知っている場所ではないということが分かっただけでも、大きな収穫である。

だってそうだろう、デジモンと名乗る不思議な生き物が自分達の世界に存在しているなんて、考えたくない。

治の説明により、落ち着きを取り戻した丈も、徐々にだが現実を受け入れ始めたようだ。

「治の言う通り、本当にここが異世界だとしたら……どうすればいいんだ？」

「そこですよねえ……」

「助けを求めるには絶望的な状況だよなあ……」

デジモン達を見下ろしながら、丈、光子郎、太一が言った。

治の言葉により、ここは日本どころか地球ではないのではないか疑惑が浮上している今、まずは何をすればいいのかすら分からない。

遠出した先で迷子になった時とは訳が違うのだ。

デジモンという未知の生物がいる時点で、ここは自分達の世界ではないことは明白、大人達どころか人間がいることすら怪しくなってきたのに、助けなど期待するだけ無駄なのは、大輔やヒカリでも分かった。

ならば自分達がここにいて手がかりでも見つからないか、丈は再度元の場所に戻ることを提案してみたが……。

「い・や！さつきみたいのにまた襲われるかもしれないのに、冗談じゃないもの！ねえ、パルモン、さつきみたいの、まだいる？」

『いるわよ？』

「ほらあー却下よ、却下ー！」

ミミが喚くが、正論でもある。

デジモン達が進化して強くなってくれたとは言え、先程クワガーマンから逃れられたのは殆どラッキーな状況だ。

聞けば、クワガーマンはあの辺を縄張りにしていて、コロニーのようになっているらしい。

本能の塊であるクワガーマンはその巨体に違わず凶暴で、見かけたらまず逃げるが合言葉だったそうだ。

「うーん、そうか。リスクはなるべく犯したくはないな……」

「そうねえ……」

そう言った治と空の視線の先にいるのは、最年少の2年生3人組である。

賢は治の傍らでキョトンとお兄ちゃんを見上げているし、大輔とヒカリはそれぞれのパートナーとじゃれ合っていた。

微笑ましい光景に、思わず2人の頬が緩むも、癒されている場合ではない。

庇護の対象である2年生が3人もいる中、凶暴なクワガーマンの巢に突撃するほど子ども達も莫迦ではなかった。

上級生の心は1つである。

「他に何か手がかりはないのかい？」

「……そう言えば、ピヨモン。ここ、ファイル島って言ってたわよね？」

『？うん、そうよー！ここはファイル島！ピヨモン達が育った島！』

自己紹介してもらった時に、まだピヨコモンだったピヨモンがここが何処なのかを教えてくれたことを思い出した空が言った。

まだ小学5年生で、世界地図を覚え始めたばかりの空は、何処か外国の島にでも飛ばされたのだろうか、とその時は思っていたが、治の結論によりここが日本どころか自分達が知っている世界ではないこ

とが判明したため、更に地理が分からなくなってしまった。

ピヨモン達は当たり前のように認識しているようであるが、不安は打ち消されるどころかますます大きくなっていくばかりである。

「島かあ……絶海の孤島だったらずくなくないか？」

「孤島なのかはどうか分かんねーけど、海ならさつき見えたぜ。行ってみるか？」

治の不安を打ち消すように、太一が言った。

何事も慎重な治に対し、まずはやってみようがモットーの太一である。

不安なら確かめればいいじゃないか、と笑う太一に、それもそうだなって治は苦笑した。

そもそも他に当てはない。ここが異世界だと分かった以上、太一達のような人間がいる可能性は限りなく低いのだ。

何をすればいいのか、どうすればいいのか途方に暮れていたところに差し込んだ、一筋の希望を逃してはならない。

『……ダイスケエ、お話終わったみたいだよ？』

上級生達の議論に飽きてブイモンと遊んでいた大輔は、太一達が動き出したので慌ててヒカリを呼ぼうとして、ふと視線を感じた。

じいじいっと大輔を食い入るよう見つめている、1つの陰。

さつきつから感じてはいたけれど、敢えて無視していた大輔は、とうとう耐えきれなくなって半目になってそちらに目を向けた。

「……何か用？」

これから始まるであろう大冒険の仲間に向かって、何か用？はないだろうに、大輔はその視線をずっと無視していた気まずさからか、ちよつと他人行儀に陰に尋ねた。

同じくプロットモンに促され、ヒカリが大輔の下に来たのはその時である。

ようやく気付いてもらえたからなのか、ぱつと笑顔を見せながら陰……賢は大輔に話しかけた。

「あ、あの、えっと、僕、賢！二年生なんだ！本宮くんと八神さん……だっけ？よかったら友達になろうよ！」

さつきつから一体何の用で大輔達を見つめていたのかと思えば、友達になってほしい宣言に、大輔とヒカリは呆気にとられた。

無理もない、大輔達はこのメンバーの中では最年少だ。

これから先どうなるのか上級生ですら手探り状態の中、どうしたつて下級生の彼らは置いてけぼりになってしまう。

庇護の対象として見られている彼らは、上級生達の難しい議論にすぐ飽きてしまうだけでなく、彼らを不安にさせてはいけないと躍起になって、上級生達の議論に混ぜてもらえない可能性が非常に高い。

「おう、いいよ！よろしくな。俺のことは大輔でいいから」

「私も、ヒカリでいいよ」

「じゃあ、僕も賢でー！」

えへへーって笑顔全開の賢に、つられて笑う大輔とヒカリ。

よく分かんないけど、パートナー達が嬉しそう、ってブイモン達もニコニコしていた。

「君達、自己紹介もいいけど、早くおいで。置いてかれるよ」

自己紹介が終わったタイミングを見計らって話しかけてきたのは、賢の兄・治である。

弟と同じ年の子達との交流を邪魔したくなかったのだろう。

先に行っただと思っていたのだが、殿を歩くつもりだったようで、賢達の会話が終わるのを待っていたようだ。

「ああ、すみません！みんな、行こうぜ！」

「ああ、待ってよ、大輔くん！」

「走らないでー！」

『ダイスケエ！置いてかないでよお！』

『ヒカリィ！』

『うわーん、待ってえ！』

「……フッフ」

元気だなぁって治は苦笑しながらも、暖かい眼差しを弟達に向けながら、ガブモンを伴って歩き出した。

穏やかに流れる川に乗って、ゴマモンが泳いでいる。

見た目通りの海洋生物であるゴマモンは、陸を歩くのに適した身体ではない。

抱っこしてやろうか、って警戒心を解きつつある丈が申し出てくれたけれど、ゴマモンは泳ぎたいらしく、川のないところでお願いしていい？って断った。

快く引き受けてくれた丈に笑顔を返し、ゴマモンは川に飛び込んだ。

気持ちいいかーって大輔が尋ねたら、ダイスケも泳ぐ？って返ってきたので遠慮しておいた。

さつき川に落ちたばかりで、ようやく服が乾いたところなのに、またびしょぬれになるのはごめんである。

「ねえねえ、ヒカリちゃんて太一さんの妹なの？」

上級生達がここは何処なのか、デジタルモンスターとは何なのかっていう議論をしている間、賢は早速友達になったばかりのヒカリに話しかける。

「うん、そうだよ。太一は私のお兄ちゃん。」

「そうなんだー。苗字が一緒ってことは、パパとママはリコンしてないんだよね？いいなー、お兄ちゃんとずっと一緒にいられて」

「……治さん、リコンしたって言ってたけど」

リコン、が何なのかはよく分かってはいないが、それでもデリケートな話題であることは大輔にも分かった。

あの太一がちよつと気まずそうに治と賢を見ていたし、あまり触れてはならぬ話題であることは明白だった。

しかし当の本人である賢は、苦笑いを浮かべてはいるものの、こちらの気まずさなど気にしている素振りを全く見せない。

「うん、リコンしちゃったんだあ、パパとママ。僕がまだもつと小さ

かった時に」

「……それで、別々に暮らしてるの?」

お台場小学校の中で、1番仲のいい兄弟姉妹は誰だと生徒に聞けば、間違いなく誰もが八神兄妹だと答えるだろう。

猪突猛進を体現していて、気に食わなければ上級生や先生にだって平気で食ってかかるサッカー部のキャプテン・太一も、妹のヒカリにはデレデレである。

兄妹喧嘩もしたことがないし、しているところを見たこともない。それぐらいお兄ちゃんが大好きなヒカリにとって、離れ離れで暮らすなんてとても想像できないだろう。

考えただけでもヒカリは泣きそうになっているのだから、実際にその状況に置かれている賢の心情は如何ほどに。

『ケンー、リコンて何?』

パタモンが無邪気に聞いてきた。聞いたことのない単語を、大好きなパートナーが喋っているということ、興味も一押しである。

それが残酷な質問だなんて知らずに、パタモンは賢が答えてくれるのを待っていた。

しかし大輔もヒカリも、そして当事者である賢も、幼い故に離婚と言う言葉の意味をよく知らない。

だからお兄ちゃんが分かりやすく教えてくれた言葉を、そのままパタモンに教えてあげた。

「うんとね、親が喧嘩しちゃって、離れちゃうことだよ。だから僕とお兄ちゃんは兄弟だけど、離れ離れなんだ」

『そうなんだー』

寂しい? ってパタモンは遠慮なしに問う。

ちよつとだけ、って賢は悲しそうに笑う。殿を歩いている治が、それを聞いていることなど気づかず。

デジモンに親や兄弟姉妹という概念がないと知るのはずとずっと後のお話なのだが、そんなこと大輔達は知る由もない。

『……ねえ、ブイモン』

足の早い上級生達の後を追うのに必死に足を動かしながらも、お喋

りを楽しんでいるヒカリ達と、殿を歩いてる治とガブモンに気づかれないように、プロットモンはパタモンを挟んで真ん中を歩いているブイモンにそつと話しかけた。

『何?』

『……さつき、大丈夫だったの?』

『何が?』

眉を顰めながら訪ねてくるプロットモンの意図が分からず、ブイモンはキョトンとする。

……気づいていないのか、それとも忘れているのか。

プロットモンの表情はますます渋いものとなった。

『さつきはさつきよ……ヒカリに抱っこされた時平気だったの?』

『つ……!』

『あ……』

ようやく合点があったブイモンは、立ち止まってしまった。

隣を歩いていたパタモンも同様に。

だからすぐ後ろを歩いていた治とガブモンは、ぶつかりそうになつて慌てて立ち止まった。

『……つと、どうしたんだい?』

『何かあったの?』

『……へ?あ、ああ、ごめん。何でもない』

背後に治とガブモンがいることをすっかり忘れていたブイモン達は、頭を振って誤魔化した。

何でもないようには見えないのだが、治が追及する前にブイモン達は歩き出してしまったので、挙げかけた手は行き場をなくす。

『……』

しばらく宙を彷徨っていた手だが、治はやれやれと肩を竦めてまたズボンのポケットに突っ込むと、徐に歩き出した。

『……いいの?聞かなくて』

「ガブモンは何か知っているのかい?それは、僕が聞いたら答えてくれるのかい?」

『……え、つと』

「おや、その様子だと知っているみたいだね」

ガブモンの気まずそうな表情を見抜いて、治は笑う。

しまった、とガブモンは口を隠すように両手で抑えた。

器用とは正反対の性格であるガブモンでは、上手く誤魔化すことが出来ない。

どうしようどうしよう、としどろもどろになるけれど、治はそれ以上何も聞いてこなかった。

ガブモンの頭上に沢山の『？』が浮かび、治を見上げると困ったような笑みを浮かべる。

「向こうが話したくなったら、話してくれるだろう？こういうのは無理やり聞き出したってよくないからね」

『……そう、だね』

ほ、とガブモンは胸を撫で下ろした。

知らないのか、と聞かれたら嘘になるが、これはブイモンの問題なので、自分が言うべきことではないのである。

大輔に対するブイモンの様子から多分大丈夫なのかな、とは思っているが飽くまでも「多分」、*「だろう」*に過ぎないので、下手なことは言えない。

治が追及してくるタイプでなくてよかった、とガブモンは思った。

海が、見えてきた。

さて、皆さまは不条理という言葉の意味をご存じだろうか。

不条理とは筋道が通らないこと、また道理に合わないことという意味である。

人間社会で生きていくためには、ガチガチに凝り固まった常識とルールに縛られなければならない。

目上の人には敬語を使うとか、自分が悪くなくても頭を下げなければならぬことがあるとか、周りに合わせるために空気を読まなければならぬとか、とにかく肩が凝るような思いをしなければ、一人前と認めてもらえないのである。

だから自分の常識に当てはまらないものは、人は断固として認めない。

そうすると自分が今まで信じていた世界が音を立てて崩れてしまふからだ。

人は脆く、壊れやすい。

だから太一達は、浜辺に当然のように建てられている電話ボックスを見て、啞然とするのだった。

川沿いを歩いてしばらくすれば、見えてきたのは切り取られた森の向こうに広がる大海原。

風に乗って漂ってきた潮の香りに子ども達は顔を見合わせ、眼前に広がる海へと走り出した。

そして、啞然となる。

柔らかい砂浜に不自然なぐらいに自然に鎮座している、複数の電話ボックス。

電話線は何処だとか、電気はどうやって引いているのだとか、そんな常識はとつくの昔に捨て去ってしまった。

だってここは異世界である。自分達の世界ではないのである。扉を開けて、中に入ってよく観察してみれば、近所によくあるタイプの電話であることはすぐに分かったけれど、デジモンという自分達の世界ではまず見ない生き物がある時点で、太一達がこれまで培ってきた常識など到底通用しない場所であることは明白であった。

ここでは自分達の世界の常識など、一切通用しないのである。

だが、非常識の中で探し当てた常識が目の前にあるのなら、それに従ってみたくなるのは当然だ。

少し考えて、太一はポケットをまさぐり、小銭を探した。

「太一さん、何しているんですか？」

「ん？いや、電話かけてみようかと思って」

「そんな、よく見るタイプの電話ボックスとは言え、通じるかも分からないのに、よくもまあ臆せずそんなことができるな……」

「いいじゃないか、太一らしくて。僕らもかけてみよう」

無事10円を発見した太一は、コインの挿入口にお金を入れて受話器を取り、自分の家の電話番号に当たる数字をぽちぽちと押した。

そんな太一を見た他の子ども達も、空いている電話ボックスへと向かう。

ぶるる、と鳴る電話の向こう。がちや、と受話器が取られた音がしたので、太一は電話口の向こうにいるであろう母親を想定していたのだけだ。

「…何だこれ」

「お兄ちゃん？どうしたの？」

兄の行動を見守っていたヒカリが問いかけると、太一は首を振った。

どういうことだろう、って思っていると、太一は無言でヒカリの耳元に受話器を持って行った。

そして、理解した。どうやらこの電話は使えないらしい。

だって電話口から聞こえてくるのは、総てでたらめな情報ばかりなのだ。

午前35時？明日の天気はアイスクリーム？電波、超音波？

他のメンバーも首を傾げていた。

「……大輔くん、どう？」

「ダメ」

空がかけた後の電話を使わせてもらい、大輔もお家の電話番号を押してかけてみたけれど、出てきたのはお姉ちゃんではなく、機械的な女性の音声であった。

治お兄ちゃんがかけているのを傍らで見守っていた賢が、大輔に尋ねてきたから、肩を落としながら首を振る。

そつかあ、つて残念そうな表情を浮かべて、お兄ちゃんにその旨を伝えた。

お姉ちゃんが出なかった、と言う事実には打ちのめされて大輔は見るからにシユンとなってしまう。

受話器を置いて、ぐるりと子ども達を見渡した。

尊敬しているサッカー部の先輩が4人と、お姉ちゃんと同じ学年で同じクラスの先輩、接点が少ない4年生の先輩と、学校で一番仲のいい同い年の女の子と、友達になったばかりの男の子。

はあ、と無意識に溜息が漏れる。

『……ダイスケ?』

「……んあ? 何だよ、ブイモン?」

『何だよって……溜息なんか吐いて、どうしたの? 何かあった?』

「……何でもねえよ。ただ電話に誰も出なかったから、がっかりしただけだ」

嘘である。いや、誰も出てくれなかったことはショックではあったが……それだけではないのだ。

大輔はもう一度子ども達の方を見やる。

視線の先にいたのは、太一とヒカリ、そして治と賢。

不安そうにしているヒカリと賢を、それぞれのお兄ちゃん達が笑顔を浮かべて大丈夫だよって安心させようとしているのが分かる。

太一はヒカリの頭をわしわしと撫でて、治は腰を落として賢と目線を合わせていた。

……もう一度、溜息。

「大輔? 大丈夫?」

は、と我に返って顔を上げると、心配そうに大輔を見下ろしている空がいた。

電話を交代してもらった時、太一の下に行って何か話し合いをしていたのに、いつの間にかその話し合いが終わっていたようだ。

慌てて何でもないですって誤魔化して、どうしたんですかって尋ね返すと、一旦休憩することになったから、あっちに行きましょう、つて空が指さす先には、少し小高い崖のようになっている個所。

子ども達とデジモン達がそこで一塊になって座り込んでいる。

ぼんやり考え込んでいたせいで、自分だけ出遅れたようだ、と大輔とブイモンは慌てて子ども達の下へと駆け寄って行った。

そして気付く。あれ？

「丈さんは？」

「あそこ」

遅れてやってきた空が電話ボックスの方を指差しながら答える。

振り返ってみれば、そこには諦めずに知っている番号に片っ端からかけては、がっかりしている丈の姿。

ここは自分達のいた世界ではないのではないか、という結論が出たばかりなのに、自分達が見知ったものを目にしたこと、諦めかけていた希望が再びわき上がってしまったと思われる。

凄い執念だと思うと同時に、一体どれだけの電話番号を覚えているのだろうかという疑問も浮かぶ。

そもそも電話が通じたとして、何をどう説明するつもりなのだろうか。

異世界に迷い込んだから助けに来てくれとでも、言うつもりなのだろうか。

子どもの悪戯で片付けられて終了なのは目に見えている。

結構しつこい性格してますね、とのたまったのは光子郎だった。

「……さつとと、どうするかね？」

いつまでも電話をかけ続けている丈を見飽きた太一が、口を開いた。

見渡す限り海の向こうを単眼鏡で覗いた太一曰く、近くに他の島や大陸は見当たらないらしい。

アグモン達の言う通り、ここが島であるという疑惑が一気に浮上したところで考えることを放棄した太一達は、それよりも次のことを考えなければならなかった。

電話は使えない、海の向こうは何もない、ならば次に取る行動は、何だろうか。

「うーん、こっちからの電話が通じない、ってことは、向こうからか

かってくる可能性も低いだろうなあ……」

「せっかく手がかりになるかと思っただのにね……」

太一達の会話を聞きながら腹減ったなくと、大輔はさつきからぐるぐる鳴っているお腹を押さえる。

それを聞き逃す治や空ではない。お腹空いた？って空は大輔だけでなくヒカリや賢にも尋ねる。

どうする？どうする？って大輔達は互いの顔を見やった。

正直に答えていいものか、考えあぐねている様子の大輔達に、遠慮しなくていいんだぞって治が口を開こうとしたら。

「もう、私疲れた！お腹空いた！何か食べたい！」

それより先にミミが喚いた。空が苦笑しながら宥める。

でもミミが先に言ってくれたお陰で、大輔達もちよつとだけ我儘が言えた。

「俺も腹減ってきたっす……」

「私も……」

「僕も……」

「だよなあ。お昼まだ食べてなかったもんなあ」

項垂れているミミと2年生ズを見て、太一が呟いた。

そう言えばキャンプのカレー、まだ作っている途中だった。

口の中がすっかりカレーになっていたのに、急に季節外れの吹雪に見舞われて、みんなで吹雪が止むのを待っていたら、訳の分からない世界に飛ばされたのだ。

理不尽にもほどがある、せめてお昼ご飯を食べてからにしてほしかった。

「じゃあ、各自持っているもの、確認しましょうか。みんな何持ってる？私が持っているのはこの……あら？」

空が腰にかけているポーチに手をかけた時のことである。

ポーチのベルトに触れた際に、何か違和感を覚えた空はそれを手に持った。

それは、オーロラから降ってきた、あの白い機械だった。いつの間に、つて眩く空を見て、他の子ども達もそれぞれの身体をまさぐって、白い機械を手にする。

オーロラから降ってきたそれを手に取った時、子ども達は立ち上がった波に飲まれたのだ。

所謂、総ての元凶である。これのせいで自分達はこんな訳の分からない世界に飛ばされたのだと、半ば八つ当たり気味にその機械を見下ろしていたが、光子郎の腹の虫が鳴る音によって中断された。

『……………』

「……………ん？どうした、ブイモン？」

空がポーチから救急用セットやソーイングセットを取り出している。

光子郎は背中に背負っていた細い鞆を降ろし、パソコンやデジカメや携帯電話を取り出して太一に突っ込まれていた。

そんな光景を横目で見ながら、手に持った白い機械をズボンにつっかけようとして、大輔は視線を感じる。

隣に座っていたブイモンが大輔が持っている機械を見下ろしていた視線だった。

『……………なー、プロットモン、パタモン』

食い入るようにつめているから、大輔はどうしたのかと尋ねるけれど、ブイモンは答えない。

仕切りに首を傾げ、顎に人差し指を添えて、目を閉じて何かを考え込んでいる。

大輔の両隣に座っていたヒカリと賢の傍らにいるプロットモンとパタモンを呼びかけると、2体も似たような表情をしていた。

『……………俺達、なーんか忘れてる……………？』

『アタシもそんな気がしてる……………』

『ボクも……………』

うんうん唸るパートナー達に、大輔達は互いの顔を見合わせた。

眉を顰めて考え込んでいる間にも、お話は進められている。

治も食べ物は持っていないことを申し訳なさそうに告げたが、弟の

賢が背負っていた鞆を降ろして、お菓子を取り出した。

やったー、つてミミは見るからに喜んでる。

腹を満たすには心許ないだろうが、ないよりはマシだ。

ミミも肩にかけていたバッグから、無断で持ち出してきた父親のキャンプセットを次々取り出していく。

サマーキャンプと言えど、一通りの道具等は大人達が用意したり、キャンプ場の施設で借りれたりするから必要ないのだが、これから予想されるサバイバル生活において、重要な役割を担うことだろう。

水柱が立ち上がる。

電話をかけ続けていた丈の非常食バッグを目敏く見つけた太一の号令により、今日のお昼は決定した。

元々はミミが管理していなければならなかったのを、届ける途中で異世界に飛ばされたのは不幸中の幸いと言えよう。

丈の言葉によりミミと同じ班だったことが判明した非常食バッグの中身は、1日朝昼晩の3回が3日分の6人用。

6×3×3という簡単な計算式で54食、それを9人の子ども達で分けると2日分。

だがデジモン達も含めれば1日分、つまり今日の分しかないことになる。

賢が持ってきたお菓子があるとは言え、それだって無限ではない。

さてどうしたものか、と悩んでいると、デジモン達は自分達で探すからいいと自らそれを辞退した。

子ども達と会うまで、ずっとそうして生きてきたから必要ない、そう言ったのである。

見るからに喜ぶ丈を尻目に、太一は勝手に非常食の1つを手にとって、アグモンに幾つか食べさせてしまっていた。

丈が慌てて止めるも、別に少しぐらいいいじやないか、と元来の適当な性格を露呈させる太一に、最早呆れるしかない。

太一とアグモンはそれ2人で半分こしろと、という治の判決によって場が収まり、丈によって非常食が分配される。

それを見届けたデジモン達は、それじゃあ自分達も行くか、って各自動こうとした時だった。

最初に気づいたのは、海を漂っていたゴマモンだった。

海水の流れの異常に気付いたゴマモンは、身を起こして海原を睨み付けている。

他のデジモン達も、砂浜に響き渡る波に混じって聞こえた微かな音、それからピリつくような敵意や殺気を肌で感じて、本能的に立ち上がった。

その目は、鋭い。

砂浜に水柱が聳え立ったのは、その時である。

驚く子ども達を尻目に、水飛沫がまるで生きているかのように砂浜を走り、電話ボックスを持ち上げえるように吹き飛ばして、破壊してしまった。

打ち上げられた電話ボックスが重力に従って砂浜に落下する。

硝子が砕け散り、鉄骨がひしやげる。

無残なものとなった電話ボックスの瓦礫の中から、砂浜が突如として山のように盛り上がる。

その盛り上がった山の中から、先端をドリルのように回転させながら大きな大きな巻貝が姿を現した。

「なっ、何だアレ!?!」

『しもた! シェルモンや! この辺はあいつの縄張りやったんか!』

驚愕する光子郎にテントモンが教えてくれたデジモンの名前は、シェルモンと言うらしい。

巻貝の側面の穴からピンク色の本体がにゅるんと出てきて、咆哮を

拳げる。

とにかく逃げよう、と先導しようとした丈に向かつて、シエルモンは緑のイソギンチャクのようなものが生えている頭部から水鉄砲を繰り出した。

水の勢いで吹っ飛ばされていく丈を見たゴマモンが慌てて駆けつけようとしたが、同じく水鉄砲によって吹っ飛ばされていく。

『みんな、行くよー!』

子ども達を護るために、アグモンを筆頭にシエルモンに向かつて行くが、様子がおかしかった。

アグモンは果敢に炎の弾を吐いて攻めていくのに対し、他のデジモン達は技が発射しているのである。

ガブモンもピヨモンも這い出した炎がぽひゅん、と間抜けな音を出して白い煙が吐き出され、テントモンは電流が足りず、パタモンも吸い込む力が弱まっている。

パルモンの手から蔓は伸びず、ブイモンも何処か疲れているように見えたし、プロットモンの超音波も先程とは比べ物にならなかった。

あれ?あれ?あれ?デジモン達も困惑している。

その隙を逃すシエルモンではなく、頭部から水を噴射させてデジモン達を薙ぎ払ってしまった。

溜まらず吹っ飛ばされるデジモン達に、子ども達は悲鳴を上げながら駆け寄った。

アグモンだけがすぐに起き上がり、再びシエルモンに炎の弾を吐き出す。

頑張れーって太一が応援しているのを見ながら、大輔は倒れ込んでしまったブイモンを抱き起した。

「おい、どうしたんだよ!」

『……ダイスケエ』

「何!」

そして紡がれたのは、

『腹減ったあ……』

情けない声と言葉であった。

はあ？って大輔の目が点になるが、どうやら他のデジモン達も同じ理由らしい。

お腹が空いて力が出ない。何処の頭部があんパンで出来た国民的アニメのヒーローだ。

あれの場合は頭部のあんぱんに異常をきたした場合だけでも。

「アグモン！俺達だけで何とかするぞー！」

『分かった！』

他のデジモン達は戦えないと悟った太一はすぐさま切り替え、何を思ったのかシエルモンに向かって走り出した。

空が太一の名を呼ぶ。

恐らく、空腹で動けないデジモン達に、シエルモンの狙いがいかにようにするためだろうが、それにしても無茶だ。

身体の大きさが違い過ぎて、アグモンが吐き出す炎でもダメージが入っている様子が見られない。

それでも太一とアグモンは、引かなかった。

破壊された電話ボックスの瓦礫から手頃な鉄の棒を手にとった太

一は、シエルモンに向かって叩きつける。

莫迦、って治の焦ったような声が飛んだ。

幾ら何でも近づきすぎだ、踏み潰されたらどうする！

案の定、ちまちまとした攻撃をいい加減鬱陶しく思ってきたシエルモンが、怒りの形相を滲ませながら頭部に生えた触手を伸ばし、太一を絡めとった。

ぬめり気のある触手が身体に纏わりつき、ぎゅうぎゅうと絞めつけてくる。

悲鳴を上げる太一の名を呼んだアグモンだったが、成すすべなくシエルモンに押さえつけられてしまった。

どうしよう、どうしよう、って焦りの色が浮かび始めた子ども達に、

トドメの水流を放つ。

ぐったりする子ども達と、デジモン達。

太一を絡めとっている触手は、どんどんキツく締め上げる。

みし、と腕の骨が悲鳴を上げた。

『タイチー！』

みし、みしみしみし、と骨が絶え間なく軋む。

声を上げる余裕さえ、太一にはなかった。

「お兄ちゃん……！」

倒れたヒカリが最愛の兄の名を呼ぶが、もう太一にはきつと届いていない。

——せっかく会えたのに、やつと出会えたのに、こんな、こんなところで、こんなことで、タイチがいなくなるなんて、絶対に嫌だ！

眩い光りが、アグモンから溢れ出た。

アグモンを抑えつけていたシエルモンの身体がひっくり返り、触手に捕らわれていた太一が吹っ飛ばされる。

太一の視界に映ったのは、鮮やかなオレンジ色だった。

青い筋がコントラストのように彩られ、茶色い兜を被った、オレンジ色の恐竜。

「また、進化した……？グレイモン……？」

大きなシエルモンに負けないぐらい大きな恐竜は、グレイモンと名乗った。

唾然としている太一や他の子ども達を他所に、アグモンだったグレイモンに向かって突進していったシエルモンを、その巨体と腕でがっしりと受け止めた。

太く逞しい脚に力が入り、筋肉が盛り上がって砂浜を抉る。

コロモンからアグモンになった時と同じような高揚感を覚えた太一は、声を張り上げてグレイモンに声援を送った。

形勢は、一気に逆転した。

勝負は一瞬だった。不利を悟ったシエルモンは至近距離で水流を放つも、グレイモンは火炎放射を吐いて水流を押し返す。

炎と水がぶつかり合い、凄まじい量の水蒸気が辺りを覆った。

水流の勢いが弱まったところを狙い、グレイモンは頭部をシエルモンの身体の下に入れると、持ち上げるように投げ飛ばした。

すげえ、とブイモンを抱えていた大輔は息を飲みながら戦いを見守っている。

空中に打ち上げられたシエルモンに向かって、グレイモンはアグモンのそれとは比べ物にならないほどの巨大な炎の弾を吐き出した。

轟！

直視できないほどの眩しい炎の塊が、シエルモンに向かって真っ直ぐ伸びていく。

シエルモンに直撃したと同時に爆発を起こし、シエルモンは溜まらず地平線の彼方へと吹っ飛んでいった。

ばっしやーん、と遠くで水飛沫が上がったのが見えた。

「アグモンー！」

光に包まれたグレイモンの身体が、急速に縮んでいった。

太一が慌てて駆け寄ったと同時に、グレイモンはアグモンに戻っていた。

大丈夫か、つて声をかけたら返ってきたのは腹が減った、という力のない声。

太一は苦笑するしかなかった。

夜の静寂（しじま）に

あの日のことを、治ははつきりと覚えている。

お父さんとお母さんが離婚したのは、治が今の賢と同じ学年の時である。

元々は別の場所に住んでいたのだが、お父さんとお母さんが離婚したのをきっかけにお台場に引っ越した。

その年のお台場小学校は、怒涛の転校生ラッシュだったようで、治の他にも転校生が何人かいたのだが、治は他の転校生のようにすぐ馴染むことが出来なかった。

元々積極的とは言えない性格の治は、自分から友達の輪に入るということが出来ない。

頑張っては、みたのだ。

何度か話しかけてみよう、手を伸ばしてはみたのだ。

だがこちらを振り返るその目に見つめられると、どうしても委縮してしまうのである。

何？と、じ、と見つめてくるその目に、心の内に隠した思いを総て見透かされるようで、結局何も言えなくなってしまふのである。

何でもない、とか細かい声で返して、背中を向けて逃げてしまふ。

そんな治を見てクラスメートの方も気味悪がったり、近寄らなくなったりしてしまう。

治も治で、そんなクラスメートの心情を嫌でも察して、治はますます委縮してしまう。

悪循環である。

おまけに治は小学2年生とは思えないほど頭が良かった。

中学生で習うような公式もその当時に既に理解していたし、難しい漢字も一度見ただけで覚えるし、スポーツだって何をやらせても卒な

く熟すのである。

教えれば何でもスポンジのようにすると吸収してしまう治は、教師からは大変可愛がられていた。

勉強もスポーツも万能、先生の言うこともよく聞く、所謂「優等生」。

まだまだやんちゃ盛りで手がかかる子がクラスに溢れている中で、治のような子は教師にとって有難かった。

だが子どもと言うのは単純で、純粹で、残酷である。

勉強もスポーツもできる子、というのはどちらか一方しか出来ない子、またはどちらも劣っている子にとっては疎ましい存在である。

先生の言うことをよく聞くというのも、先生に取り入って「お気に入り」にしてもらおうと思っているのだと実しやかに陰口を叩く。

結果的に、クラスの子達は治を遠ざけるようになってしまった。

それだけならまだよかった。

治が大人しいのをいいことに、気が強い男子や勉学にコンプレックスのある男子が、治を虐めだしたのである。

筆箱や上履きを隠されるのは日常茶飯事、教科書を捨てられ、体操服に落書きされ、治の机を廊下の外に出したり、一番酷かったのはそこから辺で咲いていた、枯れかけた花を生けた花瓶を机に置かれたことだった。

それがどういう意味なのか、賢い治は勿論知っていた。

それでも、治はお父さんに相談することは出来なかった。

お母さんと離婚したばかりで、幼い治を育てるだけでなく、お母さんについていった賢の養育費も稼がなければならず、夜遅くまで働いていたお父さんを煩わせるのは忍びなかったのである。

いつもごめん、つて疲れた顔で頭を撫でてくれる父親の顔が先に浮かんでしまうのである。

教師には、もつと言えなかった。

先生の言うことをよく聞いて、勉強もスポーツも出来る、何の問題も起こさない優等生、と治の表面しか見ていなかった教師を、治は子

どもながらに信用することが出来なかった。

体操服を泥だらけにされ、もう心が麻痺しかけてぼんやりとそれを眺めていた治を見た教師が、スポーツが好きなのはいいけれどもっと大切にしなきゃだめよ、帰ったらお母さんにごめんなさいしなさいね、つて優しい笑顔を浮かべながら言ってきた時から、治は教師を見限った。

これがスポーツによる汚れか、態と汚されたのかの見わけもつかないような無能な教師なのだ、賢い治がさつきと切り捨てたのは当然である。

複数の人数に囲まれていた時だって、どう見たって仲良こよしの会話をしているのではないことは明白だったのに、治くんは友達が多いのねって言われた時は流石に鼻で笑いそうになった。

優等生の治が問題を起すわけがないと、信じていた。

確かに治自身は問題を起こしていない。

治を取り巻く環境に問題が起こっていたのだ。

だが教師は言うことをよく聞き、勉強もスポーツも優秀な治しか見ていない。

先生にとつての「いい子」と言うのは、「都合のいい子」ということだということだが、よく分かった1年だった。

そして、転機が訪れる。

それは、治が3年生に上がった時のことである。

お台場小学校は3年生の時と5年生の時にクラス替えがある。

色んな子と仲良くなるため、なんて聞こえはいいが、いじめっ子と同じクラスになったら何の意味も成さない。

治を虐めていた子達は、皆治と同じクラスになった。

既に心が死にかけていた治は、ニヤニヤしながらいじめっ子達が近づいてきて、腕を引っ張って校舎裏に連れていかれても、最早何とも思わなかった。

子どもらしい、ボキャブラリーの乏しい罵詈雑言が、治に叩きつけられる。

ばか、とかあほ、とか幼稚園の子が言うような罵倒に、治はさつさと終わらないかなあ、と心を無にしていた時であった。

ぼーん、と飛んできたサッカーボール。

え、と思った時には、いじめっ子の主犯格のこめかみ辺りにぶつけられていた。

すつ転ぶ主犯格に、ギョツとなった取り巻き達。

嘩然とそれを見下ろしていた時に、太陽のような元気な声が響き渡った。

「3年生にもなつてイジメかよ、カツコわりーな！」

声のした方を見やる。

特徴的な髪型にやんちゃを絵にかいたような男の子と、外はねのオレンジ髪が眩しい女の子だった。

脚を中途半端な位置で上げているのを見て、どうやらサッカーボールを蹴ったのは男の子らしいと気づいた。

「なつ、なつ、何すんだ！」

「何すんだ、じゃないわよ！あんな分かりやすく気持ち悪い顔浮かべて、その子連れ出して！気づかないほうがバカでしょ！君、大丈夫？」
起き上がって怒鳴りつけたいじめっ子に怒鳴り返したのは、女の子である。

うん、って謔言のように返事をすれば、女の子はよかった、って笑った。

「無視してんじゃねー！」

「女のくせにでしゃばるな！」

「いじめを助けるのに、男も女も関係あるかよ、バーカ！」

「何だとお!？」

「1人を虐めるのに、複数人で虐めないとなーんにも出来ない奴が、威張ったって怖くないわよ！卑怯者！」

2人がべーって舌を見せて、いじめっ子達を莫迦にする。

ぐぬぬ、となつたのはいじめっ子の方だった。

治1人に対して、いじめっ子は4人もいる。

主犯格がない時は何もしてこなくせに、主犯格があると途端に威張り散らすような取り巻きなど、確かによく考えたら何の脅威にもならないのだ。

とは言え、彼方も2人しかおらず、心許ないのは変わりない。

それにも関わらず、女の子の方は口撃の手を緩めることはなく、治は凄いなあと何処か他人事のようにそれを眺めていた。

「うるせー！女のくせに！」

「そうだそうだ！女のくせに！」

「ふうんだ、女のくせについて言葉しか返すことしかできないなんて、だっさーい！悔しかったらもつと勉強して、日本語覚えなさいよ！太一だってもう少し口喧嘩できるわよ！」

「おい、俺を巻き込むな！」

思わぬ方向から飛び火してきたことにびっくりした男の子が、抗議をしたが女の子はそれを無視した。

「さっさとその子から離れて、どっか行きなさいよ！」

「じゃねーと先生に言うからな！」

「…ちっ！」

2人の剣幕に気圧されたのか、いじめっ子達は面白くなさそうな表情を浮かべて立ち去って行った。

憶えてろよ、という捨て台詞を吐かれたが、うるせー速攻忘れてやる、とまた舌を出した。

そそくさと立ち去っていくいじめっ子達の背中を見送り、男の子と女の子が治の下に駆け寄ってきた。

「大丈夫だったか？」

「怪我とかしてない？何か他にされてない？」

それが、治と太一と空の、最初の邂逅であった。

グレイモンがシエルモンをぶっ飛ばした後、あの浜辺は危険だと言うことで、子供達は急いで荷物をまとめて海が見下ろせる崖の上へと避難することにした。

太一が崖から落ちそうになったり、モノクロモンの縄張り争いに巻き込まれたり、ちよつとしたアクシデントはあったものの、無事に切り抜けられた。

グレイモンが再びアグモンに戻ったのは何故だと言う疑問はもたげたけれど、今の彼らが気にするべきはそれではない。

色んな絵具を混ぜ合わせたバケツの中の水をぶちまけたような夕日を見上げながら、一向は歩き続けた。

もうすぐ夜だ。このまま当てもなく彷徨うのが危険なことは、太一でも分かっている。

だからデジモン達に飲み水や食料が確保できそうな、安全な場所はないかと尋ねてみた。

尋ねてみるものだ、デジモン達はあると答えた。

もう少し歩けば広い湖があるらしい。

その湖なら魚も泳いでいるし飲み水として他のデジモン達も利用しているし、食べ物も豊富に実っているとのこと。

だったらそこに行かない手はないだろう、と子ども達の見解は一致した。

デジモン達を先頭にして、子ども達は湖を目指したのだったが……。

「もう疲れた…足が太くなっちゃう…」

最初に根を上げたのはミミだった。

今日1日だけで何度も走り回っていたせいもあるが、オシヤレを優

先して歩きやすさとか動きやすさを無視した服装は、これから始まるであろう大冒険にはとても不向きなものなのは明白だ。

サマーキャンプに來ただけなのに、どうしてまたそんな恰好をしてきたの、と誰もが疑問に思っていたが疲れを見せ始めている子ども達は誰も突っ込まない。

もう少し頑張れよ、と太一が励ますが、ミミはもうやだーとだたこね寸前である。

そんなミミにアグモンが余計なこと言ったから、ますますへそを曲げる。

脚は太い方がいい、なんて体重に敏感な女の子には絶対に言ってはならない言葉なのだが、そんな複雑な乙女心をデジモンが理解できるはずもなく。

『そーらー！見えてきたよー！』

『コウシロウはーん！あっちゃ、湖やでー！』

ピヨモンとテントモンが高い樹の枝まで飛んで、周りを見渡してくれたのはその時である。

降りてきた2匹が、こっちこっちって子ども達を先導する。

5分もしない内に、デジモン達が言っていた湖が見えてきた。

わあ、って漏れた声は安堵よりも驚愕に近かった。

と言うのも、湖に何故か電柱が建てられていたからである。

あの電柱も、よく見かけるタイプのものだった。

電話ボックスと言ひ、電柱といい、治によって異世界ではないかという結論が出た場所に、一体何だって自分達の世界でもよく見かけるものがあるのか。

「湖を水力として電気を起こして、誰かが使用しているとか……？」

「留まっている水じゃあ、電気は起こせないよ。水力発電は高い所から低い所に流れる時の位置エネルギーを利用してあるんだから」

「それに、あの電線も水中に建っている電柱にしか繋がっていないよ
うですよ」

治と光子郎の説明を聞いて、なあんだ、って太一はがっかりする。
勉強嫌いの太一が水力発電のことを覚えていただけでも、褒めるべ

きことだろう。

「すごい！大きな湖だね！」

「ねえ、大輔くん。湖って英語でなんて言うの？」

「湖？えーつと……pond？……じゃないな、この大きさだと。えーつとlake、かな？」

「えっ、大輔くん英語喋れるの？」

「凄い！って賢は目をキラキラさせながら大輔を見やる。

クワガーモンに追っかけられていた時と、撃退した際にも披露していたのだが、賢はそれどころではなかったようで、実質今が初めてだったのだ。

照れる大輔と、すごいすごいって褒める賢とヒカリ、そしてそのパートナー達を微笑ましく思いながら、空は口を開いく。

「でもここなら、キャンプするのに丁度よさそうね」

「えー？でもキャンプってことは、野宿ってことですよね？」

「ま、そうなるな」

「うっそお……」

夕日を反射した湖がオレンジや赤やピンクに染まっている。

目の前に広がる幻想的な風景をぶち壊すように、ベルの音が鳴った。

そちらに目を向ければ、まるで太一達を待っていたかのように電気が点いた路面電車が、湖の小島に鎮座していた。

何で？って言う疑問が浮かんでくるけれど、その前に誰がいるかもしれない、という期待が心に灯り、子ども達は走った。

小島と湖畔を繋ぐ石畳の橋を渡り、路面電車のドアを開けて中に飛び込んでみたものの、案の定中には誰もいない。

子ども達の期待は、またも打ち砕かれることとなった。

だがいいこともある。光子郎と治が軽く調べてみたところ、まだ新しく座席のクッションも利いている。

1車両分しかないが、子ども達が全員横になっても余裕はありそうだった。

ならば決定である。

「今日はここで寝ましようか」

『さんせー!』

持ってきた荷物をとりあえず電車の中に置いて、それからまず役に立ちそうな物を取り出す。

魚が獲れるとのことなので、ミミのキャンプ道具から釣り竿を取り出し、子ども達は一度外に出た。

役割を決める。海洋生物であるゴマモンは、必然的に魚獲りに回され、それに光子郎と賢が立候補した。

魚釣りなんてしたことなかったけれど、やりたくないって拒否したって別の面倒な役割が待っているのである。

だったらさっさと役割を貰った方がいい。ミミから釣り竿を受け取った光子郎と賢は、湖畔に移動して釣りを開始した。

途中でゴマモンが泳ぐことに夢中になってしまい、釣り竿近くで顔を出したために光子郎に怒られるという場面があったが、完全な余談である。

丈と空は薪を探しに行く。ミミはパルモンに連れられて、食べられる植物を探しに行った。

植物のような見た目をしているだけあり、どれが安全でどれが危険なのかすぐに教えてくれる。

パルモンがいてくれてよかった、ってミミが素直にお礼を言うと、パルモンは嬉しそうに胸を張った。

丈と空が拾ってきた薪を、太一と治が円に並べた手頃な石の真ん中にバサツと置いた。

あとは火を起こすだけであるが、ミミが持ってきた固形燃料があっても火種がなければ点けられない。

さてどうしたものか、と悩んでいる3人のために、アグモンが火を吐いてくれた。

「魚、釣れましたよー!」

光子郎と賢が釣れた魚を持って戻ってきた。

治は、弟から魚を受けとると、ミミのキャンプ道具から持ってきた小型のナイフで削った細い樹の棒に、魚をS字状に突き刺す。

「よし、こんなもんかな？さあて、上手くできるかな……」

少し自信なさそうだったが、お兄ちゃんなら出来るよ、って弟が言ってくれたから、ありがとうって微笑む。

太一が、光子郎から受け取った魚を火の上であぶろうとしているのが見えて、治は苦笑した。

「太一、危ないよ。そんなことしたら。ほら、それ貸して。こっちの魚、火から少し離して地面に突き刺しておいて」

「お？おう、すげえな治。これもお前調べたのか？」

「2日目に鮎釣りするってプリントにも書いてあっただろう？ま、網焼きだったのかもしれないけれど、念のため、な」

クスクスと笑う治に、太一は感心しきりである。

人数分釣り上げた魚を躊躇なく串に刺していく姿に、きつと図書館やパソコンで調べたんだらうなあって思った。

どうすればいいのかな、って思ったことはきちんと調べるのである。

治が天才少年たる所以なのだが、その反面出来ないと思っただらあつさり引き下がる潔さも持ち合わせていた。

出来ないなりに躍起になっているところを見たことがない太一は、しかしそれに関して何か言うつもりは、今のところなかった。

「……あれ？大輔くんとヒカリちゃんは？」

役割を終えた賢が、次に何かやれることはないかと、皆を見渡していたら気づいた。

友達になった2人がいない。デジモン達も、何匹かはいるが、足りなかった。

「確かブイモンとプロットモンと……ガブモンとピヨモンもだったかな？樹に生えた果物取りに行っているはずだけど……」

「じゃあ僕も行ってくるね！」

『あ、ケン待ってえ！』

丈が指さした方向に向かって、賢とパタモンは走り出す。

治は立ち上がりかけたが、デジモン達もいるから大丈夫だよ、という太一の言葉によって、再び腰を下ろした。

大輔とヒカりに割り当てられた役割は、自分のパートナー達と一緒に、樹に生っている果物を取りに行くことだった。

付近にも果物は沢山なつてはいたのだが、ピヨモンの好物だと言っていた果物を太一が試しに食べてみたところ、酸っぱすぎて食べたものじゃない代物だったため、子ども達でも食べられるような果物はないかと探すことになったのである。

聞けば桃やリンゴ、ミカンのような果物も生っているようなので、子ども達が安堵したのは言うまでもない。

そんなにも多くなくていいわよ、つて空に言われたので、皆で手分けして大きな葉っぱを2枚もぎ取り、そこに置いて2人ずつぐらいで持ち運べるぐらいまでにしよう、つて決めて大輔とヒカりはブイモン達に案内されてまずはリンゴが生っている樹を見つけた。

ブイモンとピヨモンが樹に登ってリンゴを落とし、大輔とヒカリでキャッチしてガブモンに渡す。

その要領で他の果物もたつくさんゲットして、あつという間に葉っぱの上には果物が山積みになった。

「Apple!」

「あつぷるー!リンゴー!」

「あつぷー?」

「あつぽー!」

途中で大輔により英語講座が始まったものの、概ね順調である。

ヒカリとガブモン、大輔とブイモンで手分けして、果物が山積みになった葉っぱをせーので持ち上げた。

「よい、しよー!」

『ヒカリ、大丈夫?重くない?』

「ちよ、ちよっと重いかな……」

『じゃ、ワタシ手伝うわね!』

ピヨモンも助っ人に入り、ヒカリ達は歩き始める。

プロットモンも手伝ったそうにしていたが、四足歩行という身体の

構造上、断念せざるを得なかった。

『よいしょっ!』

「うわ! ブイモン、すげー! 力持ちだな!」

『へへーん、これぐらいどうってことないよ! さ、ダイスケ。早く行こっ!』

「うおお、ちよつと待てっ!」

軽々と持ち上げるブイモンに対し、大輔はへっぴり腰だった。

ちよつと取りすぎてしまったようで、持ち上げた葉っぱが若干悲鳴を上げている気がする。

手がぷるぷると震えているのが分かった。油断すれば肩ごと腕を落としそうで、大輔は一旦タンマー! と言って山積みのフルーツを地面に降ろす。

いてて、つて両手をぶらぶら振る大輔に対し、情けないな! っつてブイモンが笑うから、このやろー! っつて追っかけた。

慌てて逃げるブイモンを何とか捕まえて、頭をぐりぐりして満足した大輔は、再度チャレンジ。

ブイモンに向こう側を持ってもらって、大輔はせーのっつて掛け声をかけて持ち上げた時だった。

「おーい、大輔くーん!」

「! 賢?」

『手伝いに来たよー!』

『おー! サンキュー!』

手を振りながらやってきた賢とパタモンが駆けつけてくる。

前と後ろで大輔とブイモンが持ち上げている葉っぱを支えようと、賢は葉っぱの横に立ち、手を添えた。

その時、賢の手がブイモンの手に当たった。

『っ!!』

「うわっ!」

「わあっ!」

『ケ、ケン!? ダイスケ!!』

あまりにも突然だったので、大輔と賢は何が一瞬何が起こったのか

分からなかった。

気付いた時には、視界に映っていたのはオレンジと濃紺の境目で、星が散らばり始めた空模様だったのである。

え？え？って大輔の頭上に疑問符がたつくさん浮かんで、数秒ほどしてようやく理解した。

脚と腹筋を使って起き上がると、せつかく集めた果物が彼方此方へ転がっていつているではないか。

大輔と賢は慌てて果物を拾い集める。

何処か傷んだりしていないかを念入りに確かめ、特に異常がないと分かってホッと胸を撫で下ろして後、大輔はじろって原因を睨み付けた。

「ブイモン、何だよいきなり！」

そう、原因はブイモンだった。

賢が手伝おうとした瞬間、ブイモンは何故だか知らないが持っていた葉っぱを放り投げるように手を離してしまったのである。

その衝撃で大輔と賢はひっくり返り、葉っぱに乗せていた果物がコロコロと転がって行ってしまったのだ。

が、ブイモンの顔を見た大輔の口から、更なる抗議の言葉が出ることはなかった。

そこには、蒼い顔を更に真っ青にさせて、赤い目をこれでもかと思開かせて、硬直していたブイモンがいたからだ。

へによりとした2本の角としっぽがピーンと尖って、胸の位置で左手で右手をぎゅうっと掴んでいる。

腕に変な力がかかっているのか、小刻みに震えていた。

「……ブイモン？」

「ど、どうしたの……？」

『……………ご、めん。ちよつと、びっくり、した、だけ……』

あまりにも様子がおかしいブイモンに、大輔と賢は顔を見合わせた後、恐る恐ると言った様子でブイモンに話しかける。

は、と我に返ったブイモンは、気まずそうに視線を逸らし、落ち着きなさげに右手を擦りながらも小さく謝罪した。

「……………」

「……………」

「……………」

『……………あ、え、えっと、早く行こうよ？きつとタイチ達も待つてるよ？』

「あ、そ、そうだね！えっと、じゃあ、大輔くん。そっち持って！」

「お、おう！ほら、ブイモンもそっち！」

『……………う、ん』

総ての支度が終えた頃には、青白く光る月が森の向こうから顔を覗かせていた。

今が何時なのかすらも分からないが、お昼ご飯もまともに食べられなかったために子ども達のお腹は悲鳴を上げている。

焼き魚は1人1つずつ、大輔とヒカリと、途中合流した賢とデジモン達で手分けして持ってきた果物を2つずつ。

到底足りるとは思えないけれど、ないよりはマシである。

「よし、とりあえずご飯にしようか」

丈に促されて子供達はご飯にありつく。

魚を焼いただけなのと、果物丸かじりという質素なものだが、空腹は最高のスパイスだ。

まともな食事にありつけた子ども達は、夢中になってかじりついた。

「Delicious！」

「でり…………？」

口元に食べかすをくつつけながら魚お頬張る大輔は、またも英語を使う。

隣にいた賢がきよとんと大輔を見つめていると、治が美味しいって意味だよ、って教えてくれた。

そっかーって納得した賢は、魚を一口食べて、

「でりしやす！」

って大輔の真似をした。

Good!と大輔もサムズアップする。

「ヒカリ、大丈夫か？」

「う、うん……」

初めての食べ方に悪戦苦闘しているヒカリに、太一が目敏く気づく。

普段はお皿に乗っているお魚をお箸でつついて食べるから、両手で持って食べると身がぼろぼろと零れてしまうのである。

オマケにいつも食べている魚は切り身が多く、骨はあらかじめ取られているものが多い。

食べる度に細かい骨が口の中をちくちくと刺激して、もごもごさせながら骨を出しているために食べるのが遅い。

ごめんなさい、ってヒカリは申し訳なさそうに頭を下げるが、他の子ども達は気にしなくていいよって言ってくれた。

「骨取ってやろうか？」

「へ、平気だもん！」

太一が揶揄えば、ヒカリは躍起になって魚にむしゃぶりついた。

よしよし、と頷く太一に、空は呆れるやら感心するやらで苦笑するしかなかった。

太一が先程のようなことを言ったのは、恐らくヒカリが周りを気にしているのを払拭させるためなのだろう。

太一の妹とは思えないほど、ヒカリは他人を優先するきらいがある。

周りに気を使い過ぎて、自分のやりたいことや言いたいことをため込みがちなのだが、太一はヒカリの膨らみ過ぎた心の風船を上手くガス抜きしているのだ。

自然と兄をやったのける太一を、空は凄いなあと思わざるを得なかった。

「……………」

「……………大輔?どうしたの?」

「……何でもないっす」

そんな太一とヒカリに視線を向ける大輔に気づいたのは、空だった。

眉を顰めて、じーつと食い入るように見つめているから、一体どうしたのかと思つて尋ねるのだが、大輔は首を横に振るだけだった。

こういう時の大輔は意外と頑固なので、きつと答えてくれないだろう、というのは経験上よく分かつていた空は、それ以上何も言わなかった。

そう言えば海に行った時も、太一とヒカリをじつと見つめていたなあつて思い出す。

何か言いたいことでもあつたのだろうか、言いたいことははつきりという性格の大輔にしては珍しい。

一人っ子が故に、大輔の心情が思い当たらない空が大輔の本心を知るのもう少し後のこと。

パチパチという薪がはじける音がした。

「おい、ガブモン。毛布代わりにその毛皮貸してくれよ。俺すつごく気になってたんだよなあ、ガブモンのさ、毛皮の下ってどうなつてんの?」

『へっ!? いやっ、ちよっ、待つて待つてそれだけはっ!!』

そろそろ寝よう、と言ひ出した太一が、悪戯っ子の笑みを浮かべながらガブモンにちよっかいをかけている。

そのガブモンはと言うと、顔を真っ赤にして慌てて逃げ、治の後ろに隠れた。

「おい、よせよ。嫌がつてるだろ?」

「なはは、悪い悪い」

眉を顰めて太一の悪戯を咎める治。

うう、って若干涙目になっているガブモンを、よしよしって撫でてあげれば、ちよつと照れくさそうに笑った。

「全く太一は……」

「だーから悪かったって！」

「僕じゃなくてガブモンに謝ってくれよ」

「おう、悪いな、ガブモン」

『……いいけど、もうしないでね』

ぎゅ、と治の腰にしがみ付いて、背中から覗き込むように言われると、罪悪感が太一の心に突き刺さる。

いや、あの、本当にすみません、ってバツが悪そうに謝るものだから、治はおかしくて吹き出してしまった。

笑うなよ。ごめんごめん。

昔から、この2人はこうだった。

性格も成績も全くの正反対、片やクラスの問題児、片や学校一の優等生。

普通なら相容れない存在だろうが、それが逆に功を奏したのか、2人はとても仲が良かった。

太一が暴走すれば治が抑え込み、治が引っ込んでしまえば太一が引っ張り出す。

お互いがお互いのいいところを上手く引き出しているのである。

そんなもんだから、教師も下手に2人を引き離すことが出来ずにいるのを、太一達は知らない。

「ふあゝあ……」

「……………」

「……………」

下級生がそろそろ限界のようだ。

見張りを立てた方がいい、という光子郎の意見を採用し、上級生の男の子達が順番を決める。

私もやろうか、って空が申し出てくれたけれど、チビ共頼むという太一の一言により空は引き下がった。

眠そうな下級生3人の手を引いて、空とミミは小島の路面電車へと

乗り込んだ。

「あーあ、いつもならベッドで眠れるのに……」

「寝る所が見つかっただけでもありがたいと思わなきゃ。さ、寝ましょ」

空がミミを宥める。

子ども達はクツションの利いた座席に寝転がり、デジモン達は皆で集めた南国風の葉っぱをかき集めて、床に敷き詰めて寝床を作った。

一緒に寝なくていい？って空が尋ねると、こつちの方が落ち着くからってピヨモンは笑顔で答える。

『……………』

『……………ブイモン？大丈夫？』

子ども達のおやすみなさいが飛び交う中、賢の隣を陣取ったパタモンがこつそりブイモンに尋ねる。

大輔はとつくに夢の中で、豪快な寝相を披露していた。

ヒカリも丸くなって横になっていたし、賢からも穏やかな寝息が聞こえる。

他の子ども達も、既に目を閉じていた。

だから、誰も聞いていない。

『……………どうしたのよ？』

ヒカリの隣で眠りにつこうとしていたプロットモンが、ひそひそ話をしているブイモンとパタモンに気づいて割り込んできた。

だから、パタモンはプロットモンに話した。

ヒカリとプロットモンはガブモンとピヨモンと先に行っていたから知らなかった、賢とパタモンが合流した際に何があったのかを。

え、ってプロットモンの顔色が変わる。

『だ、大丈夫だったの？』

『うーん……………大丈夫、ではなかった……………？』

『……………何で疑問形なのよ』

『だ、だって……………』

『……………びっくり、は、したんだけど……………いつもと、違ったんだ』

先程、賢の手が偶然触れた、右手の甲。

違和感は拭えないし、まだ手が震えているけれど、それでも、いつもと違った。

いつもなら、こんなではないのだ、いつもなら、もっと――。

「どうしたの？」

は、と3匹は一斉に顔を上げた。

見れば、寝たと思っただけの空がブイモン達の方を見ていたのである。

慌てて何でもないと返して、おやすみなさいって言って横になった。

不思議に思っただけだったが、眠気に勝つことは出来なかった。

ぽつん、と。

大輔はそこに立っていた。

上も下も前も後ろも右も左も何処を見渡しても真っ黒に染まっております、何も見えない。

しばらくぼんやりと前方を眺めていた大輔だったが、だんだん頭が覚醒してきて、はた、と気づいた。

ここは、何処だ。

何処を見渡しても暗闇の空間に佇んでいた大輔は、そこにいるのが自分1人だと気づいて硬直する。

太一は？ 治は？ 空は？ 光子郎やミミ、丈、賢は？ ヒカリは？

ブイモンは？

誰もいないのである。尊敬する先輩達も、友達も、パートナーも、誰もいないのである。

光さえ飲み込むほどの深い闇の中に、大輔は一人ぼっちで佇んでいるのである。

そのことに気づいた時、急に怖くなった大輔は、先輩達の名を呼ぼうと口を開いた。

「っ!!」

だが腹の底から喉を通して吐き出されたはずの声は、まるで暗闇に食べられてしまったかのように、その空間に響くことはなかった。

あれ？あれ？って大輔は自分の喉を抑えて、もう一度声を出してみるのが、やはり結果は同じだった。

誰もいない、何処にいるのか分からない、声も出せない。

大輔の中に燻っていた不安の火種は、徐々に大きくなっていく。

ぼわ……

暗闇に閉ざされた空間で、恐怖に支配され始めた大輔の小さな身体は全身が震え始め、お気に入りのお青い服をぎゅっと握りしめる。

初めて感じる孤独に大輔の心が押し潰され始めた時だった。

視界の端に、白い何かを黒を掻き分けるようにして浮かび上がったのである。

誰か、いるのだろうか。藁をも縋る思いで振り返った大輔の視線の先にいたのは――。

気が付いたら薄暗い、鉄の板が目の前に浮かんでいた。

路面電車の天井だと気づくのに数分かつたのは、脳みそがまだ覚醒しきっていなかったからである。

むくり、と両脚と腹筋を使って上半身を起こした。

周りを見ると、隣に身体を丸くして眠っているブイモン、反対側には両手を頭の下に置いて枕代わりになっているヒカリ、ブイモンの隣には、パタモンを抱えて幸せそうに笑いながら寝ている賢の姿。

向かいの席には空とミミ、光子郎と丈はそれぞれ別の座席で寝ていた。

治とガブモンは出入り口付近で座りながら目を閉じている。

そして南国風の葉っぱで詠えた寢床に、デジモン達。

ちよつとずつ引き上げられていく意識で、先程の夢のことを思い出した大輔は何となく気分が悪くなる。

よく覚えてはいないのだけれど、何故かは分からないが不快な気分になったことだけは覚えていた。

窓の外を見ればまだただ夜が明ける気配はない。

もう1度寝ようと座席に横になってみるものの、不快感がどうしても拭えない。

「……………」

起き上がる。そろそろと座席から降りて、そつとそつと足音を立てないように静かに歩いた。

『……………ダイスケ?』

「つ、ブイモン、起きちゃったのか?」

起こさないように細心の注意を払っていたつもりだったが、僅かな振動を感知したらしく、パートナーであるブイモンは、寝ぼけ眼の赤い目をとろとろさせながら、大輔を見つめていた。

眠い目を擦りながらブイモンもそつと身体を起こして、そろそろと

座席を降りて大輔の下へと向かう。

『どうしたの……？』

「あー……ちよつと夢見悪くて。顔洗いに行こうと思つてたんだ」

だからついでこなくていい、と言おうとしたら、ブイモンも行くと言つた。

『オレもちよつと……顔洗いたい』

「ん？お前も何か変な夢でも見たのか？」

『……そんなとこ』

曖昧に微笑むブイモンに、そつかあつて大輔はそれ以上深く聞くことはしなかつた。

ただもう早く顔を洗いたくて、顔を洗つて寝たくてしようがないのである。

2人でそつとそつと、抜き足差し足をして眠っている先輩達を起こさないように電車を降りた。

「ふあゝあ……」

『んーっ……』

2人して伸びをする。

ばきばき、つて背骨が鳴つたような気がして、いててつて呻く。

伸びをした時に見上げた夜空には、白い絵の具がついた筆を振つて散らばしたような星が広がっていた。

人工的な光に包まれた都会で育つた大輔は、遮るものが何も無い夜空を初めて見た感動で、目を輝かせていた。

はしやぐ大輔を、顔を洗うんじやなかつたの？つて苦笑したブイモンによつて我に返つた大輔は、慌てて島の縁へと移動した。

斜面になつている縁を慎重に降りて、膝をつく。

緩やかなさざ波が島の縁に当たつてちやぶちやぶという水音が響いた。

水の向こうに映る大輔を掻き消すように、両手を水につける。

掬い上げた水を叩きつけるように、ばしゃつと顔にかけた。

大きく息を吐くと、心地いい風が、水がかかった大輔の顔に吹きつけた。

やっとすつきりした気がする、と大輔は顔を軽く叩いた。

先程見た夢の内容は覚えていないけれど、どうもむかむかとした、もやもやとしたものが心の奥から湧き上がってきてしょうがない。

憶えていないと言うことは、大した内容ではないのだろうけれど……はつきりしないのはイライラする。

「やっつと……ん？」

電車に戻ろうと思って、同じく隣にしゃがんで顔を洗ったはずのブイモンに声をかけようと、横を向いた。

『……………』

「……ブイモン？」

『っ、な、何……？』

「いや、何って……」

顔を洗っていると思っていたブイモンは、隣で右手の甲をぼんやりとした眼差しで見つめていたのである。

その目に光はなく、まるでブイモンの心が夜の闇に溶けてしまったような感覚に陥った大輔は、恐る恐るブイモンに声をかけた。

途端に、は、と我に返ったブイモンの目に光が戻り、困惑した表情を浮かべながら大輔に答える。

「どうしたんだよ、自分の手なんか見て……」

『……………え、と……』

大輔が尋ねるも、ブイモンは答えようとしない。目を逸らし、落ち着きなく右手の甲を左手で擦っている。

怪我でもしたのかと思つて、無理やりブイモンの右手を取つて見てみたが、そんな跡は何処にも見当たらなかった。

しかし、安堵することも怒ることも、大輔には出来なかった。

取った手が、震えていたのだ。

小さく、小刻みに、でも確実に、ブイモンの手は震えていたのである。

慌ててブイモンはその手を引っ込めたが、もう遅い。

大輔にばれてしまった。どうしよう、ブイモンは再び右手を左手で掴む。

ブイモンには、大輔に言っていない秘密があった。

それは、仲間のデジモン達はみんな知っていることで、ブイモンがまだチビモンだった頃からの、公然の秘密だった。

チビモンがチビモンとしての物心がついた頃には、もうそれがあって、ブイモンにはどうしようもないことであった。

何とかしようと努力はした。でもそれは、努力ではどうすることもできないものだった。

心と体は別物である、頭で理解していても、身体はそうそう納得してくれない。

脳みそが幾ら命じても、身体はその通りに動いてくれないのである。

右手の震えもそうだ。ブイモンがどれだけ止まれと願っても、身体が受け付けてくれず、勝手に震えてしまう。

せっかくカツコイイって、すごいなって大輔が言ってくれて、受け入れてくれているのに、ちっちゃなチビモンが大輔と同じぐらいの大ききになれたのに、それはブイモンにしつこく付きまとってくる。

大輔を護るためにここにいるのだと、大輔のパートナーなのだと言語しているのに、それを覆ってしまうような秘密を抱えていることを知られたら、大輔に嫌われてしまうかもしれない。

そう思うとどうしても言い出せなかつたのである。

大輔は大輔で考えていた。ブイモンが先程から気にしている、右手。

どうしてしきりに右手を気にしているのか分からなくて、大輔はここに来るまでの行動を必死に思い出していた。

あまり頭がいい方ではない大輔ではあるが、デリカシーが全くないわけではない。

アメリカで生まれ育ったせいで空気が読めないところはあるもの

の、基本的には大輔は優しい子である。

相手が笑っていると大輔も楽しくて、相手が泣いていると大輔も悲しくなる。

感受性が強い子で、人の悲しみに敏感なのである。

猪突猛進だが、決して前しか見ていないわけではなく、誰かが置いてけぼりを食らったり、1人でぼつんという子によく気づき、どうしたのって戻ってきてくれるのである。

1番前を走っているはずなのに、いつも1番後ろの子に気づいて、声をかけてくれるのである。

だから、知り合ったばかりだけど、パートナーだって、待ってたっ言ってくれて、大輔を護るために大きくなったブイモンが何か悩んでいるのなら、力になりたかった。

屈託なく笑って、ダイスケダイスケって慕ってくる不思議な生き物が、悪いものはずがない。

勘とも言うべき感覚が、大輔にそう告げている。

それは間違いではなかった。

「……なあ、ブイモン。俺のこと、パートナーだって、待ってたって、言ってくれたよな？そんな俺にも、どうしても言えないことなのか？」

未だに震えている右手を落ち着きなく左手で擦っているブイモンの両手をとり、包み込むようにしっかりと、優しく握る。

まだ出逢って1日も経っていない、これから始まる冒険もどれぐらいかかるのかも、相手のこともよく知らないのに、大輔は目の前にいる不思議な生き物の力になりたいと心の底から思っていた。

クワガーモンと戦っていた時はあんなに凛々しい表情をしていたのに、昼間みんなで移動する際は愛嬌のある笑顔を浮かべていたのに、それが今はこんなにも不安そうなのである。

何とかしてやりたいと、この震えを止めてやりたいと、大輔が思うのは当然だった。

——どうしよう

真つ直ぐな目で見つめてくるパートナーに、ブイモンは何も言えない。

いつかは、言わなければならぬだろうなって、思っただけだけれど、まさか出会って初日で覚悟を決めなければならぬとは思ってもいなかった。

どうしよう、ブイモンは必死で考える。

ずっとずっと待っていた、待ち焦がれていたパートナー。

気が遠くなるような月日を、皆で身を寄せ合って待っていた。

時には意地悪なデジモンに虐められて大変な思いをしたこともあったけれど、それでもパートナーのことを思えば、そんなもの何でもなかった。

やっと来てくれた時には、嬉しくて嬉しくて、思わず飛びついてしまった。

嬉しさの方が、勝っていた。

だからもしブイモンの秘密を打ち明けたとして、信じてくれるかどうか。

大輔のことはとつてもとつても大好きで、心から信頼しているけれど、大輔はどうだろう。

初めて会った時、思わず飛びついたチビモンに対して、訳の分からない言葉で何やら捲し立てていたことは、きっと一生忘れない。

あの時は訳の分からない言葉が耳に入ってきた驚きの方が強かったけれど、後からじわじわと怖くなったのだ。

だってやっと会えたパートナーが怖い形相で訳の分からない言葉で捲し立ててきたのだ、怖かったに決まっている。

ゴマモンも化け物扱いされた時はちよつと傷ついた、って丈に寂しそうな笑顔を見せて丈が平謝りすることになるが、それはそう遠くない未来の話である。

すぐに仲直りできたけれど、少なくとも大輔の第一印象は最悪だったに違いない。

ちよつとだけ、ほんのちよつとだけ、ブイモンは躊躇する。

自分の秘密を打ち明けて、果たして大輔は受け止めてくれるのか、決心がどうしてもつかない。

——そしてそれは、思わぬ形で暴露されることとなる。

どうしようって考えあぐねているブイモンと、真っ直ぐブイモンを見つめる大輔に迫る、1つの陰。

2人は気づいていない。思いこんだら一直線の大輔の目にはブイモンしか映っていないし、ブイモンは俯いてしまっている。

……そのせいで、反応が遅れてしまったことを、後にアグモンは後悔した。

「なあにしてんだ、お前ら！」

「うわっ」

静かに伸びてきた陰に、がっしりと横から首を掴まれた大輔は悲鳴を上げる。

誰だ、と思う前に引つ張られて、ほっぺたをむにいつてされた。

「たっ、太一さん!」

見張り番をしている、太一だった。

薪の前で見張りをしていた太一だったが、眠気に負けそうになって顔を洗おうと島の縁に来たのだ。

その際に大輔とブイモンがいるのを見かけ、しかも深刻そうな表情を浮かべていたから、何かあったのだろうかと感づいたらしい。

ならば先輩として、ここは相談にのってやろうじゃないかとこっさり近づいてきたと。

大輔の首に回ったのは太一の腕で、頬に感じたむにとした感触は太一が抱き寄せた際に頬を擦りつけてきたものだ。

太一はよく動くこの後輩がお気に入りで、揶揄っては全身を使つきいきい怒る後輩の柔らかい頬っぺたをむにむにしてやるのがマイブームだ。

両手で顔を挟んで、むにむにと捏ねくりまわしてやれば、またきいきいと怒る。

それに便乗して、彼の姉もよく大輔の頬をむにむにしている。

太一からすれば、ただのスキンシップだった。

勿論大輔にとつても、尊敬している先輩に構ってもらえる手段にすぎなかった。

だから太一は深刻な表情をしている大輔の緊張でも解してやろう、ぐらいの認識であった。

自分と後輩だけのスキンシップに、後輩のパートナーも混ぜてやろうと思っただけだったのだ。

まさかそれがとんでもないことを引き起こすなんて、考えても見なかった。

「ちよっ！太一さん！やめてくださいって！くすぐりたい！」

「他のみんなは寝てるっつーのに、夜更かしか？ん？いつちよまえに大人な表情してやがって。何話してた？言えっ、おらっ！」

「ギョー！」

うりうりと自分の頬を大輔の頬に押し付けてやれば、大輔も満更ではなさそうな表情で太一から離れようともがく。

じゃれ合っている先輩と後輩は気づかない。

『タタタタタイチ!?何してるの!?!』

薪の前で留守番していたアグモンは、島の縁が少し騒がしいことに気づいてそちらに向かう。

その際、島を構成している細かい石の塊とは違う感触を足の裏で感じたが、今はそれどころではない。

太一の声がある方向に行ってみれば、太一が後輩の大輔とじゃれ合っている姿を見た。

が、その光景に和むことは出来なかった。

太一が、ブイモンに抱き着くように触れている。

もうそれだけで、アグモンの度肝を抜くのに十分であった。

黄色い顔を真っ青にさせているアグモンに、太一と大輔はキョトンとしている。

『タツ、タイチ！ブイモンから手を離して！』

顔を真つ青にさせながら、突然そんな忠告をしたアグモンを不思議に思った太一と大輔がブイモンの方を見ると……ブイモンはがっちーんと硬直していた。

目を見開いて、尻尾と頭のへによつとした触角がぴーんとなつて、ぎぎぎ、と壊れたロボットのようになり、顔が動かして、自分の肩に回された太一の手を目線をやる。

え、え、と困惑する太一を他所に、アグモンがあわわわって言いながら彼の手をブイモンから引きはがした。

が、時既に遅し。

「？おい、何だ……」

『……………う、』

恐怖に引きつる表情を浮かばせたブイモンが森に響くほどの悲鳴を上げたのは、数秒後。

月夜に奔る蒼狼

それはまるで真上から髪を引っ張られて、放り投げられたような感覚であった。

深淵を揺蕩っていた治の意識は急浮上し、ばちつと目を覚ます。

寝る前は点いていたはずの電気がいつの間にか消えていて、微かに温まっていた車内は夜の冷たさに冷やされた鉄のせいで温度が若干下がっていた。

それを理解した途端に分かりやすく震えた身体に、腕をさすりながら立ち上がれば、他の眠っていた子ども達も何事だと動揺していた。運転席に一番近かった治は、とりあえず電気を点けようと適当にボタンを押してみる。

数秒ほどしてパツと電気が点いたのを確認して、空は素早く電車内を見渡した。

「……大輔は？」

『ブイモンもないわ』

1、2、3、と心の中で人数を数えていくと、1人と1匹足りないことに気付く。

太一とアグモンは外で見張りをしているから、初めから除外だ。

子ども達が起きた原因は、何処からか聞こえてきた悲鳴のせいである。

異世界に飛ばされて最初の夜に、そこら辺の地面で寝ることにならずに済んだ子ども達は、屋内と言うこともあつて安心して夢の中へと旅立っていた。

浅い眠りから深い眠りへと誘われていた時に、突如として響いてきた悲鳴。

それはまるで傷ついた獣が、寄ってくる者総てを退けるような咆哮

でもあり、助けを求めている哀しい叫び声のようでもあった。

——どうする？

子ども達は顔を見合わせる。

悲鳴は間違いなく外から聞こえてきたものだ。

まさかこの辺りに住む凶悪なデジモンがこちらに向かってきているのではないか、昼間クワガーモンに追いかけて回された子ども達の心に、そんな考えが浮かぶのは当然のことである。

しかしそれならば、外で見張りをしているはずの太一が、いつまでもここに駆け込んでこないのはおかしいことだ。

異変をいち早く察知して、知らせるのが見張りの役目なのに、子ども達が悲鳴を聞いてからもう数分は経っているのに、いつまでも太一が知らせに來ないのである。

危険なものではないのだろうか、それとも……知らせに來ることが、出来ないでいるのか。

頭の回転が早い故に、そう言う結論に至ってしまった治は、子ども達が戸惑っている中真つ先に飛び出していった。

慌てて後を追うガブモンに、空とピヨモンが待つてって言って他の子ども達と一緒に、反射的に走り出す。

「太一！何処だ!？」

『アグモン！』

煌々と燃え上がる薪の前には、先程まで見張りをしていた形跡があるのに誰もいない。

さあ、と血の気が引いていく音が聞こえた治は、辺りを見渡しながら親友の名を叫んだ。

隣に立ったガブモンも、焦ったようにアグモンを呼んだ。

『ガ、ガブモン！……こっちだよお！』

『！アグモン！』

そして聞こえてきた、アグモンの呑気な、しかし少々困ったような

声。

とりあえず無事らしい、ということに安堵した治とガブモンは、遅れて来た他の子ども達とデジモン達と一緒に声がした方向に向かった。

そして子ども達は、思っても見なかった光景を目の当たりにする。

「……大輔くん？」

『ブイモン……？』

ヒカリとプロットモンがポツリと漏らした。

そこにいたのは、太一とアグモン、それから大輔とブイモンだった。何処にもいないと思ったら、外にいたらしい。

しかし子ども達は、心配かけて何をしていたのだと、語り掛けることは出来なかった。

「お、おい、ブイモン？どうしたんだよ？」

「なあ、ブイモン。答えてくれよ、なあ、なああってば！」

太一と大輔が懸命にブイモンに声をかけている。

そのブイモンは……身体をぎゅううううと縮こまらせて、自らの腕を回して抱きしめて、見るからに震えていた。

人間のようなら本指に生えた鋭い爪が腕に食い込んでおり、このままではいずれ皮膚を食い破ってしまう。

何があつたのかは知らないが、とりあえず止めさせようと丈が動いたのだが……。

『っ、ジョウー！待って！』

ブイモンの様子を訝しんでいたデジモン達だったが、やがて何かに気づいたようで目を見開かせ、さつと顔を青くした。

ブイモンに近付こうとした丈を、ゴマモンが引き留める。

いきなり大きな声を出したもんだから、丈も反射的に立ち止まった。

「どっ、どうしたんだよ、ゴマモン？」

『ブツ、ブイモン！』

『大丈夫!？』

ゴマモンは答えず、動いたのはパタモンとプロットモンだった。

ヒカリと賢がそれぞれ抱えていたのだが、2匹は2人の腕から飛び出して行って、蹲っているブイモンの下へと一目散に駆け寄って行ったのである。

ガチガチに震えて、身体を丸めるように縮こまっているブイモンの両側に立って、ゆつくりと擦ってやれば、少しずつだが震えが収まっていくのが分かった。

『……アグモン?』

ほ、とデジモン達が胸を撫で下ろしたのもつかの間、パルモンが何やら怒っているかのような雰囲気醸し出してアグモンを見つめた。と言うより睨んだ。

『あー……ごめん。ボクが止める間もなく……』

『もー！何してんのよ！パートナーでしょ!?!』

「ちよ、ちよっとピヨモン?」

気まずそうに頭をかいているアグモンを、ピヨモンが叱りつける。デジモン達の間だけで繰り広げられている会話に、空が耐え切れずにピヨモンに問いかけた。

一体、何が起こっているのか。何故ブイモンは蹲って震えていたのか、どうして太一と大輔は訳が分かりませんっていう顔をしているのか。

デジモン達は知っているようでも、子ども達は知らない。

ここに来てまだ1日も経っていないのである。

どういふことかちゃんと教えて、って空が困ったように言えば、ピヨモンが初めて気づいてごめんなさいって頭を下げた。

『そうだった。そうだったわね、ソラ。ごめんなさい。もっと早くに言っていればよかったわ』

『仕方ないんとちゃいまっか?ダイスケはんは平気やったみたいやし、ワテらが勝手にいう訳にもいかんやろし……』

『それも含めてちゃんと話そう?パタモン、プロットモン、ブイモンのことお願いね』

『分かってるわよ』

『ダイスケ達も、ここは僕らに任せて、ピヨモン達から聞いて?多分

……ブイモンは言いたくないだろうから』

「……分かった」

物凄く納得がいかない、って顔をしているけれど、可哀想なぐらいぶるぶる震えているブイモンを見ちゃったら、大輔は何も言えない。ヒカリと賢に促され、大輔は先に行った先輩達の後を追う。

みんな薪の周りに集まっていた。

「……えっと、まずは状況整理ですね。大輔くん、さつき聞こえた悲鳴は、ブイモンので間違いないですか？」

最年少3人が座つたのを見計らい、光子郎が尋ねる。

こくん、と大輔は頷いた。

「どうしてなのか、聞いてもいいかい？」

「……え、と、まず俺、変な夢見ちゃって……」

大輔は話す。こうなるまでに至った経緯を。

顔を洗おうと思ったただけだったのだ。夢見が悪くて、でもそれがどんな夢なのか思い出せなくてむしゃくしゃして、顔を洗ってすつきりしたかっただけだったのだ。

一緒に顔を洗いにいったブイモンが、とっても深刻な表情で自分の右手の甲を見つめていて、どうしたのって聞いてもブイモンは答えてくれなかった。

何度も何度も大輔から目を逸らして、忙しなく右手の甲を擦って、それで……。

「……太一が来た、ってわけ？」

「はい……」

はあ、と空は溜息を吐きながら太一を見やった。

たはは、と苦笑しながら頭をかく太一。無鉄砲ながらに周りをよく見ている太一だが、如何せん空気が読めないところがある。

大輔とブイモンが大事な話をしている、ということも、恐らく見えしていなかったのだろう。

多分、本人はちよつとじゃれたら早く寝ろよって言うつもりだったに違いない。

お気に入りの後輩と豪語している大輔には、よく男兄弟のノリで構ってやっていることがある。

大輔の兄弟はお姉ちゃんだから、男の子の遊びはあんまりしてもらえない。

逆に太一の兄弟はヒカリという妹だから、男の子の遊びは誘いにくい。

結果的に妹と同じ年で、太一さん太一さんって慕ってくる大輔を男兄弟のように扱うのだ。

少々乱暴に、雑に、でもきちんと手加減して。

ヒカリちゃん相手じゃ絶対しないことを、お姉ちゃんが絶対してくれないことを、お互いにやって、じゃれ合っているのである。

勿論太一にとっての兄弟はヒカリだけだし、大輔もまた然りだから、飽くまでも「兄弟ごっこ」だ。

それを太一も大輔も分かっている。分かっている態と踏み込んだりすることもある。

今回はたまたま、「踏み込んだ」のだ。

いつもなら頬つぺた同士をくつつきあってべたべたしたりしない。せいぜい両手で頬つぺたを挟んで、むにむにしてやるだけだ。

ちよつとだけ、ふざけちゃったのだ。

いきなり知らない世界に飛ばされて、しよっぱなからクワガールモンに追っかけ回されて、海に行けばシエルモンと対峙して、それを退けたと思ったらモノクロモンの縄張り争いに巻き込まれかけて。

色々あった。子どものキャパシティーは、とつくに限界を迎えていた。

正直、ふざけないとやっていられない状況だったのだ。

寝る前に太一がガブモンにちよつかいかけたのも、そう言ったことが理由だった。

限界以上までふざけて、明日に備えたかったのだ。

散々じゃれ合った後に、何やってんだろうな、って2人で乾いた笑いを浮かべて遠くを見つめて、しばらくボーっとしたら、切り替えるつもりだったのだ。

彼らがいた世界でも、たまーに見られる光景だった。

太一と大輔にとっては、日常茶飯事、いつものことだった。

だから太一は、大輔のパートナーも同じように扱っただけだったのである。

自分達だけの儀式に、ふざけ合いに、じゃれ合いに、ブイモンも混ぜてあげたかっただけだったのである。

アグモンが来たら、アグモンも一緒にふざけようと思っていたのである。

その結果、アグモンがあわわつて顔を真っ青にさせて、ブイモンががっちーんと硬直した数秒後に喉が裂けるほどの大きな悲鳴を上げることになるなんて、太一も大輔もきつと思っていなかった。

「……とりあえず、状況は理解できたよ」

どうしてブイモンが悲鳴を上げることになったのか、という経緯は理解した。

問題は、その理由である。

太一が触れてしまったことでブイモンは悲鳴を上げた。

ならば何故、ブイモンは太一に触れられて悲鳴を上げたのだろうか。

ちゃんと話してくれるとデジモン達は言ってくれたので、子ども達はデジモン達の方を向き、言葉を待った。

デジモン達は、互いの顔を見やり小さく頷き合うと、代表してピヨモンが口を開いた。

『えつとね、最初に言っておくと、ワタシ達も詳しいことは分かんないの。だから、何で？つて聞かれても、それが何でなのか答えられないの。ごめんね？』

そう前置きしてから、ピヨモンは教えてくれた。

『ブイモンね、誰かに触られるの、すつごく嫌がるの。怖がるの。ワタシ達がソラ達と会う前、ソラ達のこと、みんなですつとずつと待ってた時から』

「……私達が此処に来る前から？」

『うん』

ピヨモンは言う。子ども達を待っていた長い長い間、気が遠くなるような長い間、ピヨモン達はみんなと一緒に待っていた。

まだ小さく、頼りなく、相手を退ける力も持たない頃、みんなを寄せ合って力を合わせて生きてきた。

いつか必ず出会えるパートナーが来るのを信じながら。

気が付いた時にはみんな一緒にいたから、いつから待っていたのか、その記憶は定かではない。

ただ……もうその頃からブイモンは、チビモンは他の誰かに触られることを拒絶していたらしい。

少しでも触れれば先程のような悲鳴を上げて、がちがちに震えて、わんわん泣くそうなのだ。

だからみんな、なるべくチビモンには触れないようにしていた。

触れさえしなければ、チビモンはいつも通りだったからだ。

「……そうだったの」

空が悲しそうな、辛そうな表情を浮かべて、ブイモンとプロットモンとパタモンがいる方に視線を向ける。

もう、ブイモンは蹲ってはいなかった。

こちらからは背中しか見えなかったが、プロットモンがブイモンの顔を覗き込んで、パタモンが背中を擦っているのが見える。

「……………あれ？」

「パタモン、普通に触ってますけど……」

『ああ、それなあ。何でか知らんけど、プロットモンとパタモンは平気みたいなんですわ』

「……………何で？」

『知りまへんて』

曰く、他のデジモン達はダメなのだが、プロットモンとパタモンはニヤロモンとトコモンだったときから、何故か触れても硬直したり泣いたりすることがなかったらしい。

何で？何で？ってデジモン達は不思議がっていたが、ブイモンも何で分からないので、説明しようがないのだ。

それを聞いて、うーん？と首を傾げ、はいつて手を挙げたのは賢と

ヒカリだ。

「じゃあ、ヒカリから」

「はい。えっと、お昼ここに来たばつかの時に、クワガーモンに追いかけられて、転んだ時なんですけど。私、転んだブイモン……チビモンを抱っこしたんです」

でも、

「その時のチビモン、びくってなったけど、泣いたり叫んだりはしなかったよ?」

『え? そうなの』

ヒカリの言葉に、デジモン達も目を丸くした。

あの時はみんなで逃げることだけに集中していたから、デジモン達は誰もそのことに気づいていなかった。

「じゃ、次。賢」

「うん! あのね、ご飯の時、大輔さんとヒカリちゃんは果物とってくる係りだったでしょ? 僕、自分の当番が終わったから大輔くん達のお手伝いしようと思つて、大輔くん達のところに行つたんだ。でね、大輔くんとブイモンが持つてた、果物がいっぱい乗つた葉っぱを支えてあげようと思つて持つた時に、ブイモンの手を触っちゃつたんだ」

「……それで、どうなつたんだ?」

「……ブイモンの奴、賢の手を振り払つたんです。でも、叫んだり泣いたりしなかった……」

賢の言葉に、大輔が補足するように呟いた。

そう、あの時ブイモンはとても怯えた表情を浮かべてはいたが、悲鳴を上げることはなかった。

ビツクリしたただけにしては大袈裟だとは思つていたけれど、まさかそれが、触れられることを怖がっているからだなんて、大輔は夢にも思わなかった。

だって大輔には自分からくつついてきてたし(初めて会つた時なんか大輔の顔にべちゃつと張り付いてきた)、パルモンが伸ばした蔓に飛び乗つてクワガーモンに踵落としをお見舞いしていたし。

『自分から触る分には平気みたいなんだけどね』

『それこそ不思議よねえ』

ガブモンとパルモンが顔を見合わせて、そう言った。
触るのは平気だが、触られるのがダメ、とは確かに奇妙ではある。

何にせよ、

「……悪いことしちゃったなあ」

太一が頭をかきながら、本当に申し訳なさそうに項垂れる。

「……知らなかったんだから、仕方ないんじゃないか？」

『そうだよ、言わなかったオレ達も悪いんだから……』

「それでも……やっぱ気は引けちゃうよ」

治とガブモンがフオローを入れるも、太一は首を横に振り、知っていたら、あんなことしなかったのになあ、って悔しそうに呟いた。

白い手袋をはめた両手を、胡坐をかいた膝の上でぎゅつと握りしめている。

タイチ、つてアグモンが眉を垂れ下げながらパートナーの名を紡いだ。

無神経ながらも、自分が悪いと思ったならそれを素直に認めることが出来るのだ、太一という男の子は。

ちやんとごめんなさいが素直に言える子なのだ。

こういうところがすごいなあって、治はいつも思っている。

——自分には、絶対にできないことだ。自分は持っていないものだ。

「よし、理由は分かった。これからは気を付けるよ」

『うん。そうしてあげて』

『ワテらも、すんまへんなあ』

「いえ、これはこれでなかなかデリケートな話題ですし、しにくかったのは仕方ないと思いますよ」

触るのは平気でも、触られるのは無理だと言うのは、なかなか理解されにくいものだろうから、デジモン達が言い出しにくかったのも無理はない。

欧米人と違って、日本人である子ども達は必要以上にべたべたしたり、触れ合ったりすることが少ないから、尚更気づいてやれなかった。先程のはただ太一のキャパシティーがちよつとぶっ壊れそうになったから、軌道修正するためにちよつとふざけちゃっただけなのだ。

「……………」

「……大輔くん」

大輔の様子に気づいた賢とヒカリは、気づかわし気に声をかける。ぎゅつと唇を真一文字に結び、両手で拳を握りしめ、顔を俯かせていた。

大輔は優しい子だから、きつとブイモンが抱えていたことに気づいてやれなかった自分を、ふがいなく思っているのだろう。

何と声をかけたものか、と考えあぐねるヒカリは、固く握りしめられている大輔の手に、自分の手を重ねてやることしか出来ない。

賢も、指をもじもじさせながら何度か口を開いてはすぐに閉じる、という行為を繰り返している。

『ヒカリィ』

『ケーン！』

気まずい空気が流れている子ども達の下に、ブイモンを伴ったプロットモンとパタモンがやってきた。

プロットモンとパタモンの間に挟まれているブイモンは、大輔と同じように項垂れていた。

違うところと言えば、大輔の表情は硬く、ブイモンは憔悴しきっている。

「……………」

『……………』

じ、とブイモンを見つめる大輔と違い、ブイモンは項垂れたままである。

他人に触れられることを怖がるというとても大事なことを、後回しにしていたことを後悔しているのだろうか。

でも言えるはずがなかった。大輔を護るのだと、ずっと待っていた

のだと豪語していたのに、こんな致命的な弱点があつたなんて。嫌われたくなかつた。失望されたくなかつた。そう思うと、大輔の顔をどうしても見れない。

『……あ、』

「もう、」

『え?』

沈黙が怖い。どうしよう、ブイモンの心にますます焦りが浮かぶ。無意識に落とされた声を掻き消すように、大輔が口を開いた。

「もう、隠してること、ないよな?」

『……………』

「ないよな?」

『……な、い』

「じゃあいい」

ぶっきらぼうな口調で、大輔はそう言った。

え? ってブイモンはようやく顔を上げて、大輔を見やる。

『ダ、ダイスケ……?』

「謝るなよ」

『え?』

「俺は別に、ブイモンに怒ってるわけじゃないから。だから謝るなよ」
ぎゅ、とブイモンの手を握りしめ、大輔は言った。

「何かあつたら、ちゃんとやってくれよ。俺達、パートナーなんだから?」
そう言ってくれたじゃんか」

『……う、ん』

再度項垂れるブイモンの視線の先には、大輔にぎゅつと握られている己の手である。

もう、震えは止まっていた。

他の誰かに触れられることを拒む己の身体は、大輔は勿論、助け起こしてくれたヒカリのことも、手伝おうと偶然触れた賢のことも、何故か拒否しなかつた。

理由は分からない。

プロットモンとパタモンのパートナーだからだろうか?

幾ら考えても、答えは出なかった。

……でも、

《何かあったら、ちゃんと saying してくれよ》

きつともう、悪夢は見ない。

それは、突然のことであった。

島が、突如として揺れたのである。

ブイモンと会話する際は、振れないように注意を払おう、と要点を纏めた丈によってお開きになり、明日に備えて寝ようと、太一とアグモンを残して電車に戻ろうとしていた時だった。

「なっ、何だあ!？」

金波の美しい湖面が、激しく波打っている。

経っていられないほどの強い揺れに、子ども達はなすすべもなかった。

何が起こっているのか、何があったのか、子ども達は話に夢中で気づいていなかった。

太一が真剣な話をしようとしていた大輔とブイモンの下へ向かう際に、大きな大きな赤い葉っぱを踏みつけて行ったことも。

見張りを再開しようとした太一が薪をいじくって、弾けた熱い木片がその葉っぱの上に転がっていったことも。

そしてそれが……葉っぱなんかではなかったということも。

「ぐぐぐぐぐ、という地響きとともに、島の石に埋まっていた葉っぱが蠢いて、湖の底から渦が顔を出した。その渦が立ち上がり、水飛沫を上げながら真つ二つに割れ、霧散する。

中から現れたのは、長い身体が特徴的な、まるで蛇のような怪物だった。

《ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!》

咆哮。長い身体をくねらせながら、怪物は唾然としている子ども達を見下ろす。

『シ、シードラモンやないか!』

「シードラモン!?あれもデジモンなんですか!」

テントモンの慌てふためく声に、光子郎が問いかけたがテントモンが答える前にシードラモンが動く。

子ども達を睨み付けていたシードラモンは、くるりと背を向けると泳ぎ出した。

同時に、陸地と島を結んでいた石畳がガラガラと音をたてて崩れ、島が動き出したのである。

まるでシードラモンが島を引っ張っているようだった。

光子郎がそう言うと、そんな莫迦なとテントモンが返す。

『シードラモンは大人しいデジモンでっせ!?!殺気を感じん限り襲ってくるなんて、ありえへん!!』

「んなこと言っただって…!!」

太一が踏んづけて、始めた木片の熱さによって怒り狂っていることなど、太一達は知る由もない。

やがてシードラモンの泳ぐスピードが緩まると、小島もゆつくりと停止する。

湖のほぼ真ん中まで連れて来られてたことにより、子ども達の逃げ道は絶たれてしまった。

島に埋め込まれていたシードラモンの尻尾が、持ち上がるように掘り出され、ばしんと小島を叩く。

島が大きく傾くほどの揺れに、子ども達とデジモン達は溜まらずひっくり返った。

渦を産み出しながら、シードラモンが再び湖の中へと潜って行く。

湖面から見える陰は、猛スピードで島の真下へ移動すると硬い頭で島を突きあげるようにぶつけた。

その衝撃でまた島が動く。

彼方此方へ動き、激しく揺れる小島はまるで荒波にもまれる漁船のようで、船酔いを起こしたミミの顔は真っ青に染まっていた。

がしやーん、と湖の中に建っている電柱にぶつかり、小島は動きを止める。

やっど止まった、と安堵した太一だったが、いよいよ逃げ道がなくなってしまうことに代わりはない。

再び水飛沫をあげ、水柱の中からシードラモンが顔を出した。

『行くよ、みんな！』

アグモンの声を合図に、デジモン達は動き出す。

『マジカルファイヤー！』

『エアーショット！』

渦巻く緑の炎と空気の塊はシードラモンに命中するが、顔を顰める程度で大したダメージには至っていない。

『ポイズンアイビー！』

パルモンが伸ばした蔓は、届きもしなかった。

テントモンがシードラモンの顔の位置まで飛び、羽を高速で動かして静電気を起こす。

『プチサンダー！』

だが硬い皮膚は静電気程度の電撃など、通すことはない。

『ベビーフレイム！』

アグモンが吐き出した炎の弾も、シードラモンの顔に直撃したが、弾かれてしまった。

『パピーハウリング！』

辺り一帯にプロットモンの超音波が響く。

子ども達は耳を塞いだが、シードラモンを怯ませることは出来なかった。

「くっそー！アグモン！進化だ！進化しろ！」

どれも通用しないと分かった太一は、最後の頼みの綱であるパートナーに、進化を促してみるが、アグモンは困ったような表情で無理だと告げた。

『さっきっからやろうとしてるんだけど、出来ないんだ！』

「何でだよ！」

『だからボクにも分かんないんだって！』

昼間のようにグレイモンになってくれれば、シードラモンを退けることが出来るかもしれない。

だがアグモンが幾ら踏ん張っても、進化の兆候など全く見られなかった。

コロモンがアグモンになった際も、進化をした原理はよく分からないとデジモン達も言っていたし、何か条件があるのだろうけれど、こんな時に条件が何なのかという推理をする暇はない。

このままでは怒り狂ったシードラモンに、全員やられてしまうのだ。

どうすれば、どうすれば……。

「うわああああ!!」

「！賢!？」

再び島が揺れる。上級生達によってシードラモンから遠ざけられていた下級生達は、島の隅のほうにいた。そのせいで、バランスを崩した賢が湖に落ちたのだ。

ぼしやああん、という音を立てて賢の姿が湖に消える。

すかさずゴマモンが飛び込んで賢の救助に向かった。

真っ青になった治は太一が止めるのも聞かず、見事な飛び込みを披露して賢の下へ急いで泳いだ。

ガブモンも後を追う。すでにゴマモンが背に乗せて救助した後だった。

「済まない、ゴマモン」

『いってことよ』

ゴマモンはそのまま小島に上がっていった。

だが治はそれだけでは安心できなかったのか、あろうことかこつちだと叫びながら小島から離れていったではないか。

「何やってんだ、治!?早く上がって来い!!」

『オサム、待って!何処行くの!?!』

「お兄ちゃん!!」

太一の怒声、ガブモンと賢の焦り声。

『オサムウ!シードラモンがそつちに向かってまつせ!』

テントモンが叫ぶ。標的を治に変えたシードラモンが、長い身体をもたげながら治に襲い掛かろうとした。

『危ない!プチファイヤー!!』

すかさずガブモンが青い炎を吐き出し、シードラモンの顔にぶつける。

だがそれは、シードラモンの怒りを更に助長させるだけとなった。

激昂したシードラモンは、水の中に隠していた下半身を動かし、葉っぱのような尻尾でガブモンを持ち上げるように吹っ飛ばした。

「ガブモン!!うわ……!!」

治が湖の底に消える。シードラモンが暴れたせいで引っ掻き回され、激流が出来上がった水の中で、治は身動きすら取れなかった。

「お兄ちゃん!?!」

『オサム!!』

賢の悲鳴が響き渡る。パタモン、大輔とヒカリ、空とミミが心配そうに見下ろしているのも、視界に入っていなかった。

ごつごつとした石の島に叩きつけられ、全身に激痛が走っているガブモンも、賢の悲鳴で治の異変に気付く。

ざばあ、と湖から出てきた時には、治はシードラモンの尻尾に捕らわれていた。

「治!!」

「治くん!!」

太一と空の叫び声。

シードラモンの尻尾に捕らわれると、死に絶えるまで離されない。
テントモンの説明に、賢の顔が真っ青になる。

「あ……ぼ、僕のせいだ！僕を助けようとして、お兄ちゃんが……!!」
賢の目尻に涙が浮かぶ。無力な自分が、この時ばかりは憎かった。
身体が小さなデジモン達では、シードラモンに太刀打ちできない。
せめてアグモンが、シエルモンをブツ飛ばした時のように、進化を
してくれれば。

しかしあの時は無我夢中だったアグモンも、どうやって進化したの
か分からないとどうすることも出来ない。

どうしよう、どうしよう。

そうこうしているうちにも、シードラモンは治を捉えている尻尾に
更に力を籠め、治の身体を絞めつけている。

ミシミシ、骨が軋む音が聞こえてくる気がした。

「うわああああああああああああ!!」

より一層締め付けられた治の悲鳴が、辺り一帯に響いた。

全身に走る痛みを堪えながら、やっとこさ起き上がったガブモンの
心に、絶望の火が燦る。

それはまるで、澄んだ水に一滴落とされた、黒いインクが広がって
いくように。

——ふとガブモンの脳裏に過ぎったのは、優しい笑顔を見せてくれた
治の姿だった。

初めて会った際、他の子ども達が混乱したり拒絶したりする中、
真っ先にガブモンを、この世界を受け入れたのは治だった。

ここは自分達の世界じゃない。ガブモン達の世界で、それがこの世
界の普通なんだって皆を説得してくれたお陰で、子ども達は早い段階
でデジモン達と打ち解けることができた。

他者と境界線が曖昧で、異質なものを受け入れやすい、まだ小学2
年生の賢や大輔やヒカリはともかく、自分というアイデンティティー
が確立し始める小学3、4年生ともなれば、自我が崩壊するのを恐れ

て異質なものから目を逸らしたがるものだ。

現に誰よりもパソコンや携帯などのデジタル機器に触れている光子郎や、天真爛漫を絵にかいたようなミミでさえも、最初はテントモンやパールモンとは距離を置いていた。

行動派の太一、面倒見のいい空も、自分の常識の範囲外であるということを、治に言われるまで認めようとはしなかった。

来年は中学生になる丈なんか、その最たるものだ。

治だけだったのだ、ガブモンを最初から笑って受け入れてくれていたのは。

初めましてをした時も、ツノモンからガブモンになったときも、昼間海に向かう道すがらの会話でも。

治は一度だって嫌悪や懐疑の眼差しを向けたことはなかった。

ガブモンをガブモンとして、そこに生きるものとして、受け入れていた。

——もう、あの優しい眼差しで見つめてもらえなくなるのか

嫌だと思った。それは、それだけは嫌だ。

何年も何年も、仲間達と身を寄せ合ってずっとずっと待っていたパートナー。

待ち望んでいた瞬間を迎えた時は、涙が出るぐらい嬉しかった。

嬉しくて嬉しくて涙を滲ませた時、泣かないでくれて慌てて抱き上げて、涙を拭ってくれたのだ。

よしよして優しく頬を撫でてくれたのだ。

賢に対して同じことをしているのを見た時は、もっともっと嬉しかった。

治にとって自分は、賢と同じぐらい大切なものとして治の中にあるのだと、感じられたから。

受け入れてくれただけでなく、自分を賢と同率の位置に置かせてくれたのだ。

……それを、みすみす失ってなるものか。

『オサムウウウウウ!!』

ガブモンの叫び。

そして、光が治から発せられる。

正確には、治の腰から。

ガブモンの身体から、眩い光が溢れた。

『ガブモン、進化あー!!』

くるくるとその場で回転したガブモンの身体が、大きく変化した。

アグモンがグレイモンに進化した時と、全く同じ光景だった。

『ガルルモン!!』

光が収まる。

二足歩行の恐竜は、被っていた青い毛皮が身体を包み、大きくなった狼のような姿をしていた。

啞然とする子ども達を尻目に狼……ガルルモンは大きな身体を支える太い四肢で大地を駆ける。

大地を蹴り、宙を跳ぶ。その跳躍力や凄まじいもので、一気にシードラモンと距離を縮め、治を捉えていた尻尾を掠めた。

解放された治は湖に飛び込み、残された体力と気力を何とか振り絞って、子ども達がいる島まで泳ぐ。

太一と丈が島のほとりで待機して、治を引っ張り上げた。縛られていたことで詰まっていた息を何度も吐き出して、治は呼吸を整える。

わあ、つて賢がはしゃぐ声でした。

「頑張れー！ガルルモン！」

「You can do it!」

「シードラモンなんかには負けないで！」

2年生達が、パートナーと一緒に声を張り上げていた。

視線の先を辿ると、そこには蒼い狼へと進化した己のパートナーが、シードラモンに噛みついていて姿があつた。

強靱な前足の爪をシードラモンの固い皮膚に食い込ませ、鋭く尖つた牙はシードラモンを食い破ろうとしている。

溜まらず咆哮を挙げるシードラモン。

身体の差は相変わらずあるものの、ガブモンだったときとは比べ物にならないほどの勇敢さと力強さで、シードラモンに噛みついてた。

すごい、と呟いたのは、誰だったか。

噛みつかれた箇所は激痛が走ったシードラモンは、怒りに任せてガールモンを尻尾で振り払った。

吹っ飛ばされ、湖に落ちたガールモンに、子ども達はああ、と悲鳴を上げた。

湖に落ちたガールモンに、更に追い打ちをかけるように尻尾を叩きつける。

凄まじい勢いで湖の底まで沈むガールモン。

シードラモンは、息苦しきですぐに浮上して来るであろうガールモンを狙って、水面を睨み付けている。

ぶくぶくと、水の中から泡が浮かんできた。

水面から顔を出したガールモンは、シードラモンに背を向けて泳ぐ。

大きく口を開けて襲い掛かるシードラモンの目に、ガールモンの尻尾の先が突き刺さった。

目玉を抉ることはなかったものの、どんな生き物も鍛えることは出来ない弱点である目を狙われてはシードラモンも堪らない。

水中に適した身体を持つシードラモンから、端から泳いで逃げられるとは思っていなかったガールモンは、それを狙ったのだらう。

咆哮を挙げるシードラモンの横を悠々と泳いで、距離を取った。

最後のあがきとばかりに尻尾でガールモンを攻撃しようとしたが、テントモン曰く伝説の金属「ミスリル」並に強い毛皮を持つガールモンの身体を、傷付けることは叶わなかった。

太一と空に介抱されていた治は、2人を押しつけるようにガブモンの下へと急ぐ。

『あ……オサム……よかった……』

「莫迦！僕よりお前だろう！怪我は？痛いところはないか？地面に思いつき叩きつけられてただろう？」

『なっ、オ、オサムこそ！シードラモンに絞めつけられてたんだよ！ちゃんと休んでなきゃ……！』

「このぐらい何ともない！サッカー部で怪我なんか日常茶飯事だったんだ！慣れっこさ！」

『さっかーぶが何なのかよく分かんないけど、だからって……！』
「あーもう！どっちもどっちでしょう！2人とも大人しくしなさい！」

お互いを思いやるあまり、どんどんヒートアップしていきそうなのを察した空が、2人の言い合いを阻止する。

我に返った2人は、他の子ども達から見られていることに気づいて、恥ずかしそうに苦笑した。

「お兄ちゃん！」

「！賢……」

「ごめんなさい、お兄ちゃん！僕のせいで……！」

ガブモンと言い合いを始めてしまったことで出遅れた賢だったが、空に強制終了されたのを見計らい、兄に駆け寄って抱き着いた。

涙をボロボロ流して謝罪する賢に、大丈夫だよって苦笑しながら頭を撫でてやる。

「お前のせいだなんて思っていないから。賢が無事でよかったよ」

「おに……い……ぢゃあ……ん……」

「あーあー、もう、涙と鼻水でぐしゃぐしゃじゃないか。しょうがないなあ、賢は」

うえーんて泣く賢に、込み上げる笑いが抑えきれない治は、空が貸してくれたハンカチで顔を拭いてやる。

ずび、って鼻水を啜り、ふんわりと笑って賢を見下ろしている治に、もう一度ごめんなさいをして、それからガブモンに向き直った。

「ガブモン、ありがとうね。お兄ちゃんを助けてくれて」

『え……いい、いやあ……』

『あー、ガブモン照れてるー』

『パ、パタモン！』

そんなやり取りが微笑ましくて、子ども達はようやく笑った。

……2人の兄弟を、羨ましそうな目で見つめる大輔に気づいてくれたのは、ブイモンだけだった。

『……う、ダイ、』

「あ、ところでどうやって岸に上がるんだい？」

大輔の名を呼ぼうとしたブイモンだったが、丈の声に遮られてしま
う。

おいらに任せて！ってゴマモンが湖に飛び込んだ。

湖の主は暫く現れないだろうから、安心して技名を叫ぶ。

魚釣りをしていた時には全く姿を見せなかったカラフルな魚が、大
量に姿を現し、ビチビチという音を立てながら水面を跳ねて、小島を
岸まで押して行った。

あんな小さい魚の、どこにそんな力が、って光子郎が興味津々に覗
き込んでいる。

岸にたどり着いた子ども達は、下級生を筆頭にどつと疲れが押し寄
せ、その場に座り込む。

色々あった。ありすぎた。

路面電車のお陰で安心して眠れると思っていたのに、まさかシード
ラモンに襲われるなんて夢にも思わなかった。

ただでさえ、訳の分からないところに飛ばされて、子ども達のまだ
成熟しきっていない小さな心にはストレスがかかっていたというの
に、あんまりである。

「……どうして今度はガブモンが進化したんでしょうね？」

疲れた顔を見せながらも、誰もが疑問に思っていたことを、光子郎
はぼつりと口にした。

傍で聞いていた太一と空だけが、光子郎に反応してくれた。

うーん、って考えて、ある一つの結論に至る。
ガブモンが進化した時の、状況と言えば。

「……もしかして、治くんがピンチだったから？」

あ、と太一と光子郎は言葉を落とす。

そう、ガブモンが進化した時、治は危うくシードラモンに殺される
ところだったのだ。

太一の時も、シエルモンの頭部に生えていた触手に絡めとられ、太
一も危うく死にかけるところだった。

ちらりとアグモンを見やる。

太一の隣で、アグモンはとづくに夢の中に旅立っていた。

もう食べられないくと幸せそうに呟いていて、お約束だなぁって太
一は苦笑する。

よく考えたら、交代制の見張りをする予定だった太一とアグモン
は、一晩中起きている羽目になったのだ。

そう自覚した途端、強烈な眠気に襲われた。

「あー……難しいこと考えるのは起きてからにしようぜ……眠い
……」

「……そうですね」

眠気に負けたミミが空に寄りかかってきた。

もうここで寝る、と、路面電車で寝る前はベッドで寝たかったと我
儘を言っていたお嬢様が、逞しくなったものだ。

見渡せば、他の子ども達とデジモン達もぐっすりと深い眠りに陥っ
ている。

昼行性のデジモンに襲われたらどうするのだ、という考えすら、今
は至らないのだろう。

とにかく寝たい。眠りたい。寝させろください、頼むから。

空と光子郎も寝落ちしたのを見守って、太一もしよぼしよぼする目
に従って目を閉じようとした。

親友がいらないことに気づき、何処に行ったのだと反対側をみやる
と、少し離れたところで賢とパタモン、そしてガブモンが治に寄りか
かって眠っていた。

賢とガブモンの肩に手を回し、引き寄せ、穏やかな表情で見下ろしている治は、ふと視線に気づき、顔を上げる。

太一だった。

賢に回していた方の手で、ピースサインを作り、普段は絶対に見せない悪戯っ子のような笑みを、太一に向ける。

にしし、と太一も笑い返して、親指を立てた。

不死鳥は天（そら）に煌めいて

《私が貴女のお母さんでも、きつと同じこと言ったわよ》

憧れの人からそう言われた時、私は酷い絶望感に苛まれた。

次に大輔が目を覚ました時、薄らと色づいていたはずの空には太陽が昇っていた。

しばしばする目を何度か瞬きさせて隣を見ると、ヒカリとプロットモンが、反対側には賢とパタモン、そしてブイモンが眠っていた。

他の先輩達もぐつすりと眠り込んでいたので、起きたのは大輔だけだった。

昨夜、と言うか昨日は1日大変だった。いきなり見知らぬ世界に飛ばされ、自分達の名を呼び慕ってくる不思議な生き物に懐かれ、大きなクワガタに追いかけられ……前半だけで割とお腹いっぱいな内容であるにも関わらず、そこまではほんの序章に過ぎず。

何とか逃れて海に出れば、今度は建物3階分ぐらいの大きさの貝に襲われる羽目になった。

大きなクワガタの時と違って、皆一方的にやられてしまったけれど、土壇場で太一のアグモンが更なる進化を遂げたのである。

グレイモン、と名乗ったオレンジ色の大きな恐竜は、苦戦していたのが嘘みたいに大きな貝……シエルモンを投げ飛ばした。

その後急いで海から離れて、宛てもなく彷徨い続けた彼らは、やがて夜を迎える。

これ以上うろつくのは危ない、ということ、今大輔達がいる湖ま

でやってきて、一行は寝ることにした。

したのだが、やはりというか、平穩は長くは続かない。

ひよんなことから湖の主である水龍の怒りを買ってしまい、今度は治がピンチに陥った。

その治を救ったのは、太一の時と同じ、治のパートナーのガブモンであった。

蒼き狼・ガルルモンへと進化したガブモンは、その強靱な四肢と青白い炎をもってシードラモンを撃退した。

つい数時間前のことである。

昨日1日で色々ありすぎて、子ども達のキャパシティーはとつくに振り切れていた。

負担がかかった心を護ろうと、身体が無意識に休息を欲し、シードラモンに襲われた恐怖とガブモンが進化した興奮で目が冴えていた子ども達は、強烈な眠気に襲われた。

地べたで寝るのは嫌だと言っていたミミが、真っ先に横になった。それにつられるように、デジモン達や最年少である小学2年生の3人、最年長であるはずの丈が穏やかな寝息を立てて眠り出す。

太一と空、光子郎は、何故ガブモンが進化したのかが気になって、ギリギリまで議論していたのだが、結局眠気には勝てず、ものの数分で静かになってしまった。

「……あら、大輔。起きたの?」

湖を眺めてぼーっとしていたら、背後から声をかけられた。

振り返った視線の先にいたのは、つい今しがた起きたばかりと見られる空。

ぐっもーにん、って癖になっている挨拶を口にすれば、空は同じくぐっもーにん、って返してくれた。

これが太一なら、ここは日本なんだから日本語で挨拶しろ、って言ってくるのに、優しい先輩である。

太一が全然優しくない、と言っている訳では決していない。

空がきつかけになったかのように、他の子ども達も次々と目を覚ま

す。

まだ覚醒しきれていない脳と、しばしばする目。顔を洗いたいところだが、つい数時間ほど前に撃退したシードラモンがいる湖である。

近付いて覗き込む勇気がどうしても湧いてこなかったが、デジモン達が気にせず湖に近寄っていったので、大丈夫かしらん？と恐る恐る、そして素早く顔を洗って湖を離れた。

ご飯食べたら出発しようぜ、って太一が音頭を取り、子ども達は自分達が持ってきた荷物をチェックする。

デジモン達は昼食と呼ぶべき朝食を調達しに行った。

『……………』

『……………Good Morning』

最後に目を覚ましたのは、ブイモンである。

大輔の隣で、身体をぎゅつと丸めて擦り寄るように眠っていたブイモンの目元は、少し腫れていた。

後で聞いたのだが、アグモン達が太一達に説明するためにプロットモンとパタモンだけを残して離れていた際、声押し殺して泣いていたらしいのだ。

アグモン達は普段からブイモンに触らないように気を使ってくれていたけれど、太一達はそのことを知らなかったし、話してもいなかった。

ちやんと、言おうとは思っていたのだ。だって誰かに触れられるのが怖くて堪らない、なんて重大案件である。

大輔はともかく、他の子ども達がそうそうブイモンに触れる機会なぞないだろうけれど、それでも出会った時に真っ先に伝えておかなければならないような内容なのに、何故ブイモンは黙っていたのだろうか。

『……………その……………嫌われなくなかったから……………』

最初に見せてくれた、あのやんちゃ坊主っぷりは何処へ行ったのかと疑うほどに、今大輔の目の前にいるブイモンは、しょんぼりとして

いた。

先輩達が忙しく動いていると、大輔は小さいながらも何か自分に出来ることはないかって、いつもは率先して聞き回っているのだが、今は優先すべきことがある。

ブイモンに昨日のことを問いただすことだ。

どうして、大事なことだったのに言ってくれなかったのか。

ずっと待っていたって、ずっとずっと待っていたんだって言うのに、ダイスケダイスケって名前を呼んでひつついてきていたのに、どうしてそんな重要なことを黙っていたのか。

周りにいる先輩達も、大輔の問いただす言葉が聞こえたからか、何も言っていない。

プロットモンとパタモンに加え、拒否されなかったもう2人の人間であるヒカリと賢も、気になって仕方ないようで、大輔の両隣に座ってブイモンを見つめていた。

3人からの圧がすごくて、これは逃げられる状況ではないと判断したブイモンは、それでも何と言ったものかと考えあぐねて、ようやく絞り出した言葉が上記の台詞である。

返ってきた言葉に、大輔ははてなと首を傾げた。

嫌われたくなかった？

出会ってまだ1日も経っていないのに、大輔がブイモンを嫌うなんて、おかしい話だと思った。

嫌いというのは、深く付き合っていく中で、どうしてもこれが我慢できないが積み重なって爆発して、生まれる感情だ。

少なくとも大輔はそう認識していた。

だから知り合ったばかりのブイモンが、自分の弱点を晒すことで大輔に嫌われるのでは、と考えるのが、どうしても理解できなかった。

「……えつとき、俺達まだ知り合ったばかりじゃん？だからまだ好きとか嫌いとか……よく分かんないからさ、今は気にしなくていいんじゃないか？」

よく分かんないけど、と大輔は頬をかく。

俯いていたブイモンは、弾けるように顔をあげて大輔を見た。

大輔は、照れたように笑っていた。

「もつとちゃんと、ブイモンのこと教えてくれよ。俺、お前のこと何にも知らねえもん。ブイモンは何でか俺のこと知ってたけどさ」

知らないのなら、知っていけばいい。

好きになるか嫌いになるかは、その後だ。

でもきつと、大輔はブイモンのことを嫌いになるなんてことはあり得ないだろう。

それは、プロットモンとパタモン、そしてヒカリと賢も同じだった。

「あ、あのね、ブイモン。上手く言えないんだけど、その、何かあったら僕やパタモンにも言ってみてね？僕に出来ることがあったら、力になるから……」

『そうだよ！遠慮なんかしないでいいからね！』

賢が何処か気まずそうに、でも真っ直ぐブイモンを見つめながらそう言った。

パタモンも張り切っている様子である。

「私達が触るのは平気だったもんね。大丈夫だよ、そんなことぐらいで、私達はブイモンのこと嫌いになつたりしないから……」

『そうよ、そもそもこんなのいつものことじゃない。今更よ』

「ちよ、ちよつと、プロットモン……」

ヒカリがせっかかない話で締めくくろうとしていたのに、プロットモンがちよつと辛辣なことを言い出したので、ヒカリが慌てて止める。

が、プロットモンの言葉はばつちり届いていたようで、ブイモンはぐぬぬと歯を食いしばっていた。

……少しづつ、調子が戻ってきているみたいだ。

「おーい、お前らーそろそろ飯にしようぜー」

話し終えたタイミングで太一が3人と3体に声をかける。

はーい、ってみんなでいい子の返事をしてまずは腹ごしらえを済ませてしまおうと、太一達の下へと走った。

きいん、という空気が擦れるような音を置き去りにして、纏わりついた雲を巻き込み、白い線を描きながら飛び出していった。

綿菓子のような入道雲が、空に浮かんでいる。

あれがもつと大きくなると雷雲になるんだよ、つてお姉ちゃんに教えてもらったのを思い出した大輔は、雨降らないといいなあ、と思いながら先を歩く先輩達の後をついていった。

微かに吹く風すら照り付ける太陽のせいで生ぬるく、次から次へと玉のような汗が流れ出て水分が奪われていく。

どつしりと構えている大きな太い幹に、何故かこれでもかど貼りつけられた道路標識は、日本にあるものもあればアメリカで見かけたことがあるものもあつた。

車も通れないどころか、舗装すらされていない悪路なのに、一体どうしてこんなところに標識があるのか、という疑問すら、今の子ども達は抱くことはない。

先に進むにつれ、上昇していく気温に、長袖シャツを中に着ている治は、一言断りを入れると茂みに隠れた。

しばらくごそごそしたかと思うと、お待たせって言って戻ってきた治は、下の長袖を脱いで腰に巻いていた。

「長袖着てくるんじゃないかなあ……」

「そもそも何で着てきたんだよ、夏だぞ今？」

「キャンプ場は比較的涼しいって、天気予報で言ってたからさ……」

先に行く。鬱蒼と覆い茂った森の樹々が作った陰のお陰で、熱いの

は軽減されているが、暑いのはどうしようもなかった。

楕円にぽっかりと開けた場所に出る。陰から出たことで薄暗かった視界が、一瞬だけ白く染まった。

眩しさに目を細めながらも、先頭を歩いている太一が黙々と進んでいくから、他の子ども達も置いて行かれないように必死についていく。

「……あら？」

地面から飛び出した根っこを跨いだ空の耳が、何かを捉えてふと天を仰ぐ。

傍らにいたピヨモンが、つられて上を見た。

空気を擦るような音が徐々に近づいてきて、他の子ども達も何事かと足を止めた。

「何の音だ……？」

太一がそう呟いた直後、覆い茂る樹々の隙間から見えたのは、高速で横切った黒い何か。

「……歯車みたいだったな」

ほんの一瞬しか見えなかったはずなのに、治はあれを歯車と認識できたらしい。

浜辺に建てられた電話ボックスと言い、周りにレールのない路面電車と言い、車も通れない悪路の樹々に貼りつけられた道路標識と言いい、異世界であつてもあり得ない光景を絶えず目にしてきた子ども達は、もう何が来ても驚かない。

「空飛ぶ円盤じゃないの？」

「歯車型の隕石だったりして」

「……何にしても、いい感じのするもんじゃないな」

それでも、子ども達の不安を叩くには十分だった。

ここでは自分達の常識は通用しない。だから歯車が空を飛んだとしても、この世界ではきつと何らおかしいことではないのだろうか……頼れるものが何もないという状況であることに代わりはなかった。

「……うわっ！賢？どうした？」

どんよりとした空気に包まれかけた子ども達を引き戻したのは、治の悲鳴だった。

他の子ども達よりちよつとだけ遅れていた最年少3人も、先輩達の言葉を聞いて、パートナー達と一緒に空を見上げていた。

視界を一瞬だけ横切った黒い何か。

何だろうね、あれ、つて。パタモンとプロットモンとブイモンは呑気に会話をしていたのだが……。

ぞ、

「じんわりと熱い空気が漂っているはずなのに、どうしてか分からないけれど、大輔とヒカリと賢の背筋に寒いものが走った。

ひ、と喉の奥が引き攣って、最初に動いたのは賢であった。

一瞬にして全身に鳥肌が立った賢は、表情を引きつらせながら治の元までダツシユしたのである。

いきなりダツシユし出したので、パタモンはビックリしてそんなに早くない飛行スピードを一生懸命上げて、賢の後を追った。

それが、上記の治の悲鳴に繋がる。

「どうした、賢？」

「……………」

賢は何も言わず、ただ治にしがみ付くだけだった。

不思議に思った治だが、こういう時の弟は何を言っても教えてくれないということはよく分かっているので、苦笑しながら賢の頭を優しく撫でてやる。

「……………ん？ヒカリ？」

そんな治と賢をぼんやり眺めていた太一だったが、ちよいちよいと服を引っ張られた気がして振り返ると、遠慮がちに太一の服を掴んでいる妹の姿があった。

どうした？つて太一はヒカリに尋ねるけれど、賢のだんまりが伝染してしまったのか、彼女も何も言わない。

普段から自己主張をしない妹だけれど、今回は輪にかけてだんまり

になっていた。

困った太一は、治のように妹を撫でてやることしか出来なかった。

「……………」

『……ダイスケ?』

そんな2人を、複雑な表情で見つめる大輔。

ブイモンは気づかわし気に大輔の名を呼ぶけれど、大輔は何でもな
いって言って上級生の下へと走った。

「さ、行きましようか」

様子のおかしい下級生3人を何とか落ち着かせた後、空はみんなを
鼓舞するように口を開いた。

「そうだね、泣き言言ったって始まらないから……」

「……とは言ったものの、当てなんかないのが現状なんだよなあ」

治も空に乗ったが、珍しく太一が弱気な発言をして台無しにす
る。

が、太一の言うことは事実だ。そもそも何の前触れもなく異世界に
飛ばされた子ども達は、まず何をすればいいのかさえ分かっていない
のである。

何処に行けばいいのか、このデジモンと呼ばれる生き物達が何故自
分達と行動を共にしているのかすら、子ども達には分からない。

だってデジモン達に聞いても、さっぱり要領を得ないのである。

君達は誰、ここは何処って聞いても、デジモンはデジモン、デジタ
ルワールドはデジタルワールドだって最早哲学みたいな回答しか
返ってこないし、どうして自分達の名前を知っているんだって質問
も、ずっと待っていたからと答えにすらなっていない言葉だったか
ら、殆ど諦めてしまったのだ。

分かっているのは、ここは自分達の世界じゃないって言うことだけ
だ。

ここにはデジモンしかいない、とデジモン達は言うので、手助けな
ど期待するだけ無駄である。

最初から詰んでいるのだ、この旅は。せめてこの世界を護っている
神様みたいな存在が、お主らに使命を授けるとか何とか言っ放り出

してくれれば、まだ救いはあったのに、現実にはゲームみたいにそう簡単にはいかないらしい。

さてどうしたものか、と何となしに下に視線をやった空の視界に映ったのは、満面の笑みを浮かべて空に擦り寄っているピヨモンであった。

『アタシはあ、ソラがいてくれればそれであーんしん!』

そう言っつてピヨモンはうっとりとした表情で空に甘えている。

そんなピヨモンを、空は困ったように見下ろし、小さく溜息を吐いた。

「そんなあ……100%安心されちゃっても、困るんだけどなあ。責任とれないよ?」

『……ひやくぱー?』

「あ、いい、いい。気にしなくて……」

『せきにん、とれ?』

「いいつてば、気にしないで?」

空が何気なく呟いた言葉を、1つも聞き漏らすまいとピヨモンは首を傾げながら、彼女の言葉をたどたどしく繰り返す。

聞こえていたとは思っていなかった空は、慌てて忘れるように言い含めたが、ピヨモンはニコニコとした笑顔を空に向けた。

『アタシィ、ソラの喋ってることいーっぱい知りたあい!教えて、ねえ?』

「そんなの知らなくていいよー!」

何じやれてるんだよ、つて先を歩き始めた治が呆れて空とピヨモンに声をかける。

そんなんじゃないつてば、つて空は憤慨しながらピヨモンと一緒に歩き出した。

そんな空とピヨモンを観察していた光子郎に目敏く気づいたテントモンが、光子郎にこつそりと耳打ちしてやる。

『ピヨモンは人懐っこいデジモンなんや』

「なるほど……デジモンによって性格がそれぞれ違うんですね……君はどうなんだい?」

鼻歌でも歌い出しそうな雰囲気のパヨモンが、空と手を繋いでいるのを横目に見た光子郎の探求心に火が付いたようで、テントモンの方を見ながら目を輝かせた。

光子郎と話が出来るのが嬉しいのか、テントモンは嬉々として喋り出している。

お喋りに興じている光子郎とテントモンを目の前に、パヨモンは空の名前を何度も連呼していた。

ずっとずっと、気が遠くなるほどずっと空達を待っていたと、初めて会った時に教えてくれた当時ピヨモン、現在ピヨモン。

空に逢えたのがよほど嬉しかったのか、隙あらばピヨモンは空に甘え、噛みしめるように空の名前を何度も呟いているのだ。

出会った当初こそ、何か用事があるのかと思つて、なあにつて返事をしていたのだけれど、その度に呼んだだけーって返されるので、今ではもう何も言わなくなっている。

無視されているに等しい状況だというのに、それでもピヨモンは空の名前を呼ぶことを止めなかったのは、すごいとしか言いようがなかった。

——こんな甘ったれのデジモンと上手くやっていけるのかしら？

こつそり吐かれた空の溜息は、幸か不幸か誰にも聞かれることはなかった。

砂漠、だった。

宛てもなく彷徨っていた子ども達は、突如として亜熱帯の樹林が終わりを告げたのを見た。

樹林が切り取られた先に広がっていたのは、一直線を描いた地平線を境に、天色の空と綿雲、黄土色の砂漠が果てしなく広がっていた。

前に進むしか選択肢が残されていない子ども達は、砂漠のエリアに足を踏み入れる。

治と丈が嫌な顔をしたけれど、他に道が見当たらないのだから仕方がない。

太陽の光は容赦なく降り注ぎ、子供達から余裕を奪っていく。遮るものが何もない砂漠地帯は、砂が太陽を反射して視界を歪めるほどの熱さに達していた。

上と下から容赦なく熱さが子ども達に襲い掛かってきて、必然的に上がっていく体温を下げようと防衛反応が働く。

次から次へと流れる汗を袖で拭えば、水分を吸った個所だけ色が濃くなった。

「……………って、テレビで見たアフリカのサバンナってところに似てるなあ」

背負ったパソコンが熱と砂にやられないかと冷や冷やししながら、光太郎は辺りを見渡して呟いた。

精密機器は水や熱、そして細かい埃などに弱いから、本当はこんな砂漠歩き回りたくないのだが、根っからのスポーツ少年の太一に訴えたところで、理解してくれるかどうかすら怪しい。

「それならどんなに良かったことか……」
「だよなあ、ライオンとかキリンが飛び出してくりや、まだマシだったぜ」

治の推理によって、ここは異世界であるということが前提でインプットされている子ども達の脳内は、暑い中でも冷静であった。

丈は至極残念そうに呟いていたし、太一は周りの景色を見ながら軽い絶望のようなものを抱いている。

ここにはデジモンしかいない、とデジモン達はずっと言い張っているから、太一の言う通り今更ライオンやキリンが出てくるわけがないのだ。

実際ライオンなんか出て来たら無事では済まないが、それでも自分達が本来いるべき場所であるということが認識できさえすれば、この際肉食動物が出てきても構わなかった。

だがここが子ども達の本来の世界ではない、と嫌でも認識させるのは、デジモン達の存在だけではない。

「そもそも砂漠に電柱が建っていること自体、ツツコミどころだよ。現実の世界でこんななんだったら、アフリカはもつと発展しているだろうに……」

この中では博識な治が、彼方此方無造作に建てられている電柱を見ながらそう言った。

アフリカは正確には沢山の国で成り立った大陸のことであり、その発展具合も国によつて全く異なっている。

欧米のようにコンクリートジャングルが建ち並んでいる国もあれば、伝統を護り続けている国もある。

だがテレビのせいで乾燥地帯、または広大な砂漠の国で、生き物達が毎日デッドオアアライヴを繰り返しているというイメージが先行してしまい、遠い地域であることもあってなかなか正しい情報が入ってこないものだ。

「ブイモン、大丈夫かあ……？ 疲れてないかあ……？」

『うえ……』

喉が渴き始めた大輔は、同じく熱さと暑さでひいひい言っているブイモンに、力なく問いかける。

が、最早答える気力すらないようで、ブイモンが返したのはうめき声だけだった。

「暑いねえ……」

「喉乾いたよお……」

ヒカリと賢も弱音を吐き始める。

まだ小学2年生の3人だ、バテるのが早いのも当然であった。

だがこんな広大な砂漠に、休めるところは愚か太陽の光を遮つてくれるような陰もない。

砂漠を突っ切るのはやはり無謀だったか？と太一と治は顔を見合わせた。

「……ええっ!? 何よこれえ!!」

突如として、ミミが叫んだので、子ども達は足を止めた。

掌を見つめているので、何事かとみんなが集まれば、ミミが持っていたのは何かが高速で回っている、時計のようなものだった。

聞けば、今自分達が何処に向かおうとしているのか確かめようと思ったミミは、父親から無断で拝借したキャンプセットからコンパスを取り出したらしい。

だがそのコンパスは、取り出した途端に使い物にならなくなった。コンパスには磁気コンパスとジャイロコンパスと呼ばれる2つの種類がある。

磁気コンパスというのは磁石を使って地球の地場の方向を測定するものであり、ジャイロコンパスとは高速回転するコマの運動を用いて方位を知る道具だ。

ミミが持っているのは磁気コンパスである。
すなわち……。

「……砂みたいに見えたけど、これよく見たら鉄の粉だ。磁石にくっつきますよ」

「磁気コンパスが狂うわけだ。ミミちゃん、残念だけどそのコンパスはもう使い物にならないよ」

光子郎と治が言う。理科の実験で、磁石にコンパスを近づけるとどうなるか、ということを行った者はいらるだろう。

あれと似たようなことが、目の前で起きている。
安いコンパスなら、一発でアウトだ。

改めて自分達がとんでもない所にいるということ、再認識させられてしまった。

ミミの絶叫が、辺り一帯に響き渡った。

悪意というのは、人の目の届かないところで、静かに蠢くものであ

る。

早く水を確保した方がいい、という光子郎の言葉の下に、子ども達は再び歩き出す。

砂の中の僅かな水分を吸い上げて根性を見せた雑草が、時折吹く風でかさかさとして揺れる音がした。

しかし上から降り注ぐ太陽の光と、その熱を反射する砂のせいで、子ども達の頬を撫でる風は、爽やかとは言えない。

「うあー、暑い……」

「やっぱり森の中にいた方がよかつたんじゃ……」

「このままじゃ、全員干上がっちゃうな……」

『はあ……うーん……』

「……暑いのか、ゴマモン？」

『水が欲しい……せめて水……』

何とか暑さを誤魔化そうと、気力を振り絞って会話になっていない会話を繋げる子ども達だったが、結局暑いに戻ってしまっている。

海洋生物のゴマモンが、今にも倒れそうなのが心配で、丈は自分が暑くて疲労が溜まっているのも我慢して、ゴマモンを抱き上げてやった。

さつきの森のエリアならまだしも、こんな砂漠のエリアじゃあ川は愚か池などの水源を見つける方が難しい。

オマケにゴマモンは見た目通りならアザラシのように、寒い地域に生息しているであろうデジモンだ。

ということとは、ゴマモンは寒いところに適した身体になっているために、寒さには強くとも暑さには対応できない身体のはずである。

他の誰よりもへばっているところを見ると、丈の見立ては間違いないだろう。

未だ自分達の状況を理解しがたいものの、だからと言って自分を助けて、慕ってくれている未知の生物を放っておくほど、丈も鬼ではな

い。

ちよつと我慢してくれよ、つて肩にかけている鞆にゴマモンを乗せ、自分の身体で日陰を作つてやった。

「気休めにしかならないと思うけど……」

『ありがとう、ジヨー……』

それでも丈の気づかいは嬉しかった。

「帽子貸してあげようか、パルモン？」

『うん……』

大きなピンクのテンガロンハットを脱ぎ、ミミはパルモンに被せてやる。

似合うじゃない、つてはしゃぐミミを見て、空は苦笑した。

上級生達は、概ねそんな感じで、元気ではないもののまだ気力は残っている。

問題は下級生の3人だ。

下級生達は先輩達が行くならと黙つてついてきているが、限界が近かった。

体力がない上に、身体が成長期のデジモン達と同じぐらいなこともあるのだ。あって、砂を反射する熱を上級生達よりも近くで浴びることになっているのだ。

足取りはフラフラだし、かいている汗が上級生達よりも若干多い。

このままでは熱中症になりかねない、と下級生達に目を配っていた治が太一に相談しようとした時だった。

「いい加減にして!!私はねえ、今喉が渴いてて疲れてるし、歩いてて疲れてるし、貴女とじゃれてる余裕はないのよ!余計疲れるでしょ!!」

治のすぐ後ろで空の怒鳴り声があったので、ギョツとなつてみんなで立ち止まる。

空が苛立たし気に声を荒げて怒鳴るなんて、滅多にないことだからだ。

空は太一と治と同じクラスで、太一が男の子達のリーダーなら、空

は女の子達のリーダーだった。

そしてリーダー同士が仲が良いから、男女で諍いがあったとしても太一と空が一緒に間に割って入るから、溝が深まったり仲がこじれたりすることが少なく、太一達のクラスは学年の中でも一番クラスの団結力が強いと評判なのである。

男子は無暗に女子を邪険に扱ったりしないし、女子も必要以上に男子を莫迦にすることが少ない。

太一自身、問題児と呼ばれているものの、それは飽くまで教師の間話であって、生徒達から苦情が来たことは全くと言っていいほどないのだ。

というのも、太一が問題を起こす前に治が止めたり、空が諫めたりするから、生徒同士の問題に発展しないのである。

5年生にしてサッカー部のキャプテンということもあって、どちらかと言うと太一は問題を解決に導こうとする方だ。

彼が問題児と呼ばれているのは、先生の言うことを聞かない、体育以外の授業を爆睡して過ごす、宿題は忘れる、など「教師にとって」の問題児であって、決して生徒に意地悪をするような問題児という訳ではない。

何が言いたいかと言えば、そんな太一が先生と衝突したとしても、空は呆れるか後で軽くお説教をするかのどちらかで、大きな声を出して八つ当たり気味に叫ぶことが、全くないのだ。

感情のままに叫ぶところを見たことがなかったからこそ、太一も治も呆気にとられていたのである。

しかしこの暑さと熱さだ、自分だけでなく元気がない下級生にも気を回さなければならぬと、ちよつとだけピリピリしていた空の気も知らないで、無邪気にじゃれついてきたピヨモンを怒鳴りつけてしまったのは、もう仕方がないとしか言いようがない。

『……ソラ、疲れてるの？ごめんさい、ピヨモン大人しくする……』
そして、見るからにしよぼーんと元気をなくすピヨモン。

まるで料理中のお母さんに、甘えようとしたら危ないでしょって怒鳴られた子供のようだった。

自他共に男勝りと言われている空だが、それと同じくらい、母性に満ちた女性である。

そんな姿のピヨモンなんか見てしまったら、もうダメだった。

「あーん、分かった分かった。一緒に歩こう？」

『わーい！アタシ、嬉しい！ソーラア、だあい好き！』

今泣いたカラスがもう笑った。

甘ったれなデジモンでこの先不安だという表情だが、同時に泣きだしそうな子供を見て、キュンとなつて泣きやませようと甘えさせてくれるお母さんのようにも見える。

空の足にすり寄っているピヨモンは、何処からどう見てもお母さんに甘える娘だった。

率直な感想は“小さい”である。

大輔やヒカリ、賢などの最年少組でも入ることは困難では、と思うほど、子ども達の目の前に広がっている小屋は文字通り小さかった。

『ピヨコモンの村にいらっしやうい！』

小屋の中からわらわらと出てきたのは、頭に青い花を咲かせた蛸のようなデジモン、ピヨコモン。

ピヨモンが嬉しそうにピヨコモンに挨拶をした。

何処まで行っても何も見えてこない砂漠と、そろそろ限界を迎えてきた下級生の様子に、空が怒鳴ったことで言いそびれた治が、太一に進言したのがきっかけであった。

このまま進んでも、体力と水分を悪戯に奪われるだけ、こんなところで全員倒れてしまったら元も子もない。

すると太一はポケットに突っ込んでいた単眼鏡を取り出し、覗き込んだ。

側面についているダイヤルを弄れば、景色がズームされる。

そこに、村があった。そのあたりにだけ緑が覆い茂っていて、しかも湖が見えたと言うのだ。

これは行かない手はないだろう。どんなデジモンが住んでいるの

かは分からないが、今は藁にも縋る思いなのだ。

喉も乾いたしお腹もすいたし、上手くいけば1泊ぐらい出来るかもしれない。

そんな期待を込めて、子ども達は最後の気力を振り絞って、太一が見えた村へと向かった。

その結果が、「コレ」である。

「……見知ったデジモンがいることに喜ばいいのか、結局人間がいなかったことに絶望すればいいのか……」

『ジヨウ、何処見てんの?』

目から光が失われた丈を心配するのは、最早ゴマモンだけだ。

最年長が故に、未だに人間がいる可能性を捨てきれない丈は、この際無視するとして、子ども達はどうしたものかと顔を見合わせる。

突如としてやってきた訪問者に対して、ピヨコモン達は怯えたり怖がったりする様子は見せていない。

それどころか、これ何?これ何?成長期のデジモンもいる!何?何?つて感じで、好奇心旺盛に小屋から出てきた。

とりあえず歓迎はされているようだ、と言うことで子ども達は小さく息を吐く。

『ねえねえ!なんていうデジモン?』

ピヨコモンの1匹がじつと空を見つめながら尋ねてくる。

へ?つて間抜けな声を出してしまった空だったが、デジモン達曰く、ここに人間はいないから、ピヨコモン達が人間を知らないのは当たり前だった。

『うふふ、ソラ達はデジモンじゃないわ。人間っていうの』

空が否定する前に、ピヨモンがちよつとだけ胸を張って、ピヨコモン達に教えてやる。

『ニンゲン?』

『デジモンじゃないの?』

ピヨコモン達が一斉に、そしてバラバラなことを訪ねてくるものだから、その場は大混乱である。

収集がつかなくなったから、ピヨコモンの相手はピヨモンに押し付

けることにした。

「ごめんね、ピヨモン。」

「賢くん、どう?」

「うーん……ダメみたい」

「そっかあ……」

最年少組が、何とか入れないかと頑張ってみたけれど、一番小さい賢でも、入り口に顔を突っ込むことはできたが、身体を入れることは出来なかった。

何もかもがピヨコモンサイズで、まるで自分達が大きくなったような錯覚に陥る。

ガリバー旅行記みたい、とミミが嬉しそうに言っていたが、何のことだろう。

「……1泊ぐらいできるかなあと思ってたけれど、これじゃ無理だな。現実はその甘くない、ってことか……」

「でもまあ……休憩するぐらいは出来るだろ」

「そうですね。水もあるみたいですし、水分補給をして、身体を十分休めるぐらいは……」

がっかりする治を慰めるように、太一と光子郎が言った。

確かに、ここで寝ることは出来ないかもしれないが、休憩を取るには丁度いいかもしれない。

ピヨコモン達の許可を取って、子ども達はようやく腰を落ち着けることができた。

『ねえねえ、ピヨモン。ピヨモンはどうやってしんかしたんだ?』

ピヨモンに押し付けていたピヨコモンのうちの1体が、ピヨモンにそう尋ねた。

『ソラと一緒にいたら、いつの間にか進化したのよ』

『のよ?なんだそれ?』

『ピヨモンのことば?』

『ふふ、違うわ。これはソラが使ってる言葉。一緒にいると、ソラの言葉たっくさん覚えるから……』

『へー! そうなんだ!』

子ども達が各々好きなところに座り込んで休憩している中、空はピヨモンのすぐ近くに腰を下ろした。

自慢げに、そして誇らしげにピヨコモン達に語っているピヨモンが、まるで小さな弟や妹にお姉さんぶる子どもみたいに見えて、思わず笑みが零れる。

途中で、ん？と疑問が浮かぶような話題が出たが、ピヨコモン達はそれ以上興味がなかったのか、それをサラツと流して次の質問に移った。

『それより、どうしてしんかできたの？ただにんげんといっしょにいれば、しんかできるの？』

どうやらピヨコモン達の興味は、進化の方だったようだ。

これは後から聞いた話なのだが、ピヨモンがピヨコモンだった頃はどんなに頑張ってもピヨモンに進化出来なかったらしい。

それは他のデジモン達も同じで、子ども達と出会ったことでようやく進化を果たしたのだと。

普通のデジモンは、長い長い年月を経て力を蓄え、進化するのである。

アグモンやガブモンのように、グレイモンやガルルモンに進化したらまた戻るということは、殆どあり得ないのだ。

でも今の子ども達は、そんな情報を知りえない。

デジモン達も、どうして進化と退化が出来るのか、分からないからだ。

そしてそれは、近い将来に知ることとなる。

だからピヨモンは、考えうる中で最初に思いついたことを、口にした。

『それはきつと、ソラを護るため！』

それは、デジモン達にとって当たり前のことで、他の何よりも優先すべきものだった。

物心がつく頃から、何故だか分からないけれど、パートナーを護る

のだと、当たり前のように思っていた。

ずっとずっと待っていた、最愛の人達。子ども達を護るために戦う力を手にいれたのだ、とデジモン達は信じて疑っていない。

「……私を護る、ねえ？」

傍で聞いていた空は、訝しんでいた。

まだ出逢って2日しか経っていないが、テントモン曰くピヨモンは人懐っこい性格らしい。

ここに来るまでも、ピヨモンは空に甘えて、甘えすぎて空に怒られていた。

シユンとなったピヨモンに罪悪感を抱いて、結局甘やかしてしまっただ。

その時の顔と言ったら、まるで母親に抱っこをしてもらった直前の子どものような表情で。

「……ただの甘ったれのくせして、何言ってるんだか……」

でも、と空は思い出す。

太一のアグモンも、治のガブモンも、進化を果たしたのは2人がピンチに陥った時だった。

ならば自分も……？あの甘ったれが、自分がピンチになったらグレイモンやガルルモンみたいに身体が大きくなって、自分を助けてくれると言うことだろうか？

空は想像してみる。

アグモンもガブモンも、それぞれの特徴を残した進化をしていた。

ということは、ピヨモンも大きな鳥になるのだろうか。

しかしどう想像してもピヨモンが大きくなっただけの姿しか思い浮かばず、空は吹き出してしまう。

まあ、そうそうピンチになることもないだろう、って空は頬杖を解いた。

ピヨコモン達がご馳走をしてくれる、とのことで喜んでいた子ども

達は、その前に喉の渴きを潤したいとピヨコモン達に訴える。

案内してくれた先にあつたのは、簡易な噴水だった。

覗き込むと、ゴミが浮かんでいる様子はない。

傍にただで爽やかな風を感じ、ずっと熱い風に晒されていた子ども達には天国にも等しかった。

ピヨコモンによると、この辺りの水はミハラシ山と呼ばれる山に水源があり、そこから流れているらしい。

ミハラシ山って？って賢が尋ねると、ピヨコモン達は一齐に同じ方向を振り向き、同じ山を指した。

ピヨコモン達が指した先にあつたのは、渦巻きのような形をした、少し変わった山だった。

悪意は、すぐそこまで迫ってきている。

いざ水を飲もうと、下級生3人が噴水に溜まっている水に手を伸ばした時だった。

ぞく

とても暑いはずなのに、まるで全身に氷水をかけられたような寒気を覚えた大輔は、その手を何故か引つ込めてしまった。

大輔だけじゃなく、ヒカリと賢も大輔と似たような顔をして腕を引つ込める。

あれだけ喉が渴いたって言って、水を飲みたがっていたのに、一向に飲もうとしないから不思議に思った太一達は、どうしたって3人に聞こうとした、その時だった。

轟っ!!

噴水から湧き上がっていたはずの水が勢いを失くしたかと思うと、突如として火柱が立ち上がったのである。

水は一瞬にして干上がってしまい、子ども達とデジモン達は悲鳴を上げた。

『いったいどうして……!?!』

「喉乾いてたのにー！まだお水飲んでないー！」

『だ、だいじょうぶ！あつちにいけがあるから！』

うわーん、って嘆くミミを宥めようと1体のピヨコモンが村の中心を指した。

太一がこの村を見つけた時に見た、船が半分ほど沈没していた池のことだ。

ピヨコモン達がこっちーって先導する後をついていった子ども達だったが、そこで更なる絶望を味わうことになる。

『……ああああああああ!!みずがないー!』

悲鳴にも似た叫び声を上げたピヨコモン達。水なんか、何処にもなかった。

そこにあつたのは、大きな窪みの中心に佇んでいる傾いた船体だった。

長年水に晒されていたせいで、遠目から見ても船体が錆びついているのが分かった。

下を覗き込めば、結構な深さがあることが分かる。

水も何千リットルという単位で溜まっていたのだろう、と言うぐらいの深さだから、その水が一瞬にして無くなってしまふなんて、まずあり得ない。

ならばとピヨコモン達は、今度は井戸を案内した。

太一はロープに括りつけられた桶を放り投げるように井戸に落とす。

ロープが桶の重さに引っ張られて勢いよく落ちていくが、やがてポツと言う謎の音がしてロープが止まった。

何の音だ、と慌てて引きあげてみるが、異様に軽い。

それもそのはず、ロープの先はプスプスという音を立てて焦げており、桶は跡形もなく無くなっていたのだから。

直後に、井戸から噴水の時と同じような火柱が立った。

これはいよいよもっておかしい、と子ども達の心が1つになった時、1体のピヨコモンがミハラシ山に何かが落ちていくのを見たと教えてくれた。

方角的に、先程子ども達が見た黒い歯車のことだろうというのは、すぐに推測できた。

だがそれが何だと言うのか、という空の疑問に、別のピヨコモンが答えてくれる。

『このあたりはすべてみはらしやまのいずみがすいげんなの！だからみはらしやまになにかあったら、みずはぜんぶひあがっちゃう！』
でも、とピヨコモン達は続ける。

『みはらしやまにはメラモンがいるの！』

『みはらしやまはメラモンがまもってくれてるはずなの！』

黒い歯車が落ちていき、そして水が干上がった。

これはミハラシ山か、メラモンに何かあったと考えるのが妥当だろう。

太一は再び単眼鏡を取り出し、ミハラシ山を覗き込む。

ほぼ同時に、渦を巻いている山の頂上が燃え上がり、その中から火の粉のように小さく燃えているものが飛び出して、ミハラシ山を駆け下りていくように見えた。

もつとズームにしてみると、その姿がはつきりと見えた。

全身が燃え盛る炎のようになっていて、デジモンだった。

名前から推測するに、あれがメラモンだろう。

そのメラモンが、山から下りてきていることに、ピヨコモンが驚いている。

どうやらメラモンは滅多に山から下りてこないらしい。

いつものメラモンじゃない、とピヨコモン達が狼狽えていた。

『燃えているうううう!!』

ピヨコモンの村からミハラシ山までだいぶ距離があるにも関わらず、メラモンの声が轟いている。

『燃えている!!燃えているう！俺は!!今!!燃えているんだぜえええええ!!』

そんなことを叫びながら、メラモンは山を駆け下りてくる。

噴水と、井戸と、そして山の頂上から火柱が立ち上がっているだけでも大参事だったというのに、そのミハラシ山の手前にある森までオレンジ色に染まってしまった。

文字通り燃えているメラモンの身体が、森を駆け抜ける度に樹々に燃え移っている。

目の前で繰り広げられている光景が信じられなくて、子ども達はその場で啞然と立ち尽くすことしか出来ない。

『俺は燃えてる！燃えてる！燃えてるぜええええ！』

立ち昇る炎と黒煙。咆哮のような、悲鳴のような叫び声。

山を駆け下りていたオレンジ色の点は森の中に消え、そして絶叫と共に森の奥からその姿を現した。

燃え盛る森をバツクに、電柱が建ち並ぶ砂漠のエリアへと足を踏み入れたそのオレンジ色は、真っ直ぐここを目指して疾走している。

砂漠から立ちこめる蜃気楼が、周りの景色を、そして疾走するメラモンを歪めて、一層不気味だった。

「……みんな……」

迫りくるメラモンを前に、真っ先に我に返ったのは太一だった。

「逃げろおおおおお!!」

太一の怒鳴り声で、同じく我に返った子ども達は、ピヨコモン達とともに一斉に逃げ出した。

小さな村がピンク色と青で埋め尽くされるほどの数のピヨコモン達を踏み潰さないように、子ども達は村の中心を目指して走る。

すっかり干上がってしまった湖の真ん中に、半分ほどが埋められてしまった船体に空いた穴を通じて、ピヨコモン達は船の中へと逃げ込んだ。

太一と空が慌てるピヨコモン達を落ち着かせるように声をかけながら、ピヨコモン達を誘導している。

中に入って、上へと通じる階段付近に治と丈、光子郎とミミは下級

生3人を連れてピヨコモン達と共にデッキへと上がっていた。

船主が空を見上げるように傾いているせいで、子ども達やパートナー達には少々登りにくかったが、ピヨコモンの足には吸盤がついているようで、ぶきゅ、ぶきゅ、という場違いな音が響いている。

なるべく沢山のピヨコモン達がデッキに逃げられるように、隙間なく詰めるように光子郎もピヨコモン達を頑張って先導した。

光子郎と一緒に先に逃げていたミミは、恐怖でしがみ付いてくる下級生3人を宥めるのに必死だった。

仕切りに、大丈夫だから、怖がらないでって声をかけているのが、光子郎の耳に微かに届いた。

ピンク色のカーペットのように密集したピヨコモン達の数は、一向に減る様子を見せない。

船体の半分が地面に埋もれている船に、途切れる様子のないピンクのカーペットが総て収まるのか、段々不安になってきた頃、空はパートナーのピヨモンがいないことに気づいた。

ここに来るまでは、確かに一緒にいたはずのピヨモンが、何故かいない。

太一のアグモンはすぐ目の前で、太一と一緒にピヨコモン達を船の中に誘導しているのに。

「たっ、太一！ピヨモン見てない!」

「へっ!?ピヨモン!?一緒じゃなかったのか!」

「さっきまで一緒だったんだけど……!」

『……あ、タイチ!ソラ!あそこ!』

一体何処に行ったというのか、と空が辺りを忙しなく見渡した時、近くで会話を聞いていたアグモンが指を指したのは、湖だった窪みの畔。

一生懸命逃げているピヨコモンを、一番危ないところで先導している。

『みんな!こっちに逃げるのよ!落ち着いて!大丈夫だから!』

「なっ……!」

吐き出された言葉は、途中で失われた。

メラモンはもうすぐそこまで来ているというのに、ピヨコモンを逃がすために留まって、ピヨコモン達に声をかけている。

甘ったれで、空にべったりひっついて離れなかったはずのピヨモンが、空から一番遠いところで、ピヨコモン達を逃がそうとしている。

気が付いた時には、空は走り出していた。

「っ、空!!何処行くんだ!!」

『あ、危ないよおー!』

太一とアグモンが止めるも、空は聞いていない。

彼女の頭にあるのは、ピヨモンの下に行かなければという考えだけだった。

「ピヨモンー!ピヨモオン!!」

ありったけの声を張り上げるも、ピヨコモンを逃がすことに夢中なのと、距離があるせいでピヨモンには届いていない。

やがて懸念していたピンクのカーペットは徐々にその数を減らしていき、空が崖の下に着く頃によく途切れた。

逃げ遅れたピヨコモンがないことを確認し、ピヨモンは静かに息を吐いて、さあ自分も、というところでやっとな自分に迫っている危機に気づく。

「ピヨモン!!後ろお!!」

今度は、届いた。え、ってピヨモンは先に逃げたはずのパートナーが戻ってきていることに驚いて、更に彼女の言葉を聞いて咄嗟に後ろを振り返る。

いつの間に忍び寄っていたのか、全身が燃えている炎の化身が徐々にピヨモンを見下ろすように佇んでいた。

驚いたピヨモンは、慌てて翼をはためかせるも、元々上手いとは言い難い飛行能力のせいで、咄嗟に空へ飛ぶことが出来なかった。

メラモンが振るった右腕に吹っ飛ばされ、ピヨモンの身体が崖を転がり落ちていくのを見た空は、サッカーで鍛えた足に、更にブー스트をかけてスピードを速めた。

「ピヨモオオオオン!!」

地面を蹴る。勢いよく転がるピヨモンの身体は、誰もみ状態で止まることができない。

出っ張った地面に身体が引っかかり、ピヨモンの身体が宙に浮いた。

飛び込むようにキャッチした空の身体が、硬い地面を滑り砂埃が舞う。

ちよつとだけ痛みが走ったが、男の子に混じってサッカーをしている空は、スライディングなんて日常茶飯事である。

このぐらい平気だ、それよりもピヨモンが。

うう、つて痛みを堪えて顔を上げたピヨモンは、空を見るなり満面の笑みを浮かべた。

『……ソラ、アタシのこと、助けに来てくれた？』

「当たり前じゃない！全く、無茶して！怪我はしてない？何処も痛くない？」

『うふふ、平気だよ！ソラ、ありがとう！』

何処も怪我をしていないと分かった空は、安堵の息を漏らしながらピヨモンを抱き上げ、頬ずりをする。

思っても見なかった反応で、ピヨモンは嬉しくて嬉しくて空にしがみ付くように抱き着いた。

だが、まだ危機は去っていない。

凶悪な敵意を感じたピヨモンは、上を見る。

メラモンの手の平に、大人の拳ほどの炎の塊が浮かんでいる。

危ない、とピヨモンは空の庇護を飛び出して、メラモンに向かって飛んでいった。

『マジカルファイヤー!!』

空を傷付けさせまいと、ピヨモンは緑に渦巻く炎をメラモンに浴びせた。

それは確かに直撃したのだが、メラモンは唸り声を上げただけで、ダメージを負っているようには見えない。

『くっ……マジカルファイヤー！マジカルファイヤー！』

それでも、ピヨモンは空を護るために技を何度も繰り出し、メラモ

ンを攻撃する。

全く堪える様子のないメラモンは、悪意に満ちた笑みをピヨモンに向けた。

あのままではピヨモンが危ない、と他のデジモン達も船から降りてピヨモンに加勢しようとした。

「……っ!!」

それを、船主で見ていた大輔とヒカリと賢。ぞくりとしたものが背中を這った気がして、ミミにしがみ付く力を強めた。

3人とも、顔が真っ青である。

様子がおかしいことに気づいてくれたのは、彼らのパートナーだけだった。

『バーニングフィスト!』

掌に浮かんでいた火の玉が凝縮され、サッカーボールほどの大きさになったものを、メラモンがピヨモンに投げつける。

上手く飛べないピヨモンは、回避することが出来ずにまともに食らってしまった。

ピヨモン!と空の悲痛な声がこだまする。

「よくもピヨモンを……!アグモン、やっちなえ!」

「テントモン!お願いします!」

「ガブモン、頼んだ!」

駆けつけた太一、光子郎、そして治が、それぞれのパートナーに声をかける。

任せろと言わんばかりにアグモン達は必殺技を繰り出したが……。

「……なっ、何だあ!」

素っ頓狂な声を上げたのは、船主で戦いを見守っていた丈だった。彼のパートナーであるゴマモンは、水中戦なら負けなしたが、陸の上では無力に等しい。

駆けつけても足手まといにしかならないのは目に見えていたので、光子郎の代わりに船主に上がってきたのだが、メラモンの異変に真っ先に言葉を発したのだ。

アグモン達の攻撃を受けるメラモンは、ダメージを負うどころか二

ヤニヤと笑っている。

そして、元々大きな身体が、更に大きくなっていった。

『どっ、どうなってるんだ……!?』

「……そうか！メラモンの身体は炎だから、炎の技は利かないんだ！」
「みんなのエネルギーを吸い取って、大きくなっています……！どうしますか!?!」

光子郎が尋ねるが、太一も治でさえも、いい案などない。

炎は水に弱いから、せめてここに水があればまだ手はあったかもしれないが……。

「……おい、まずいぞ！どんどん大きくなってる！」

治が叫んだ。大人より少し大きい、ぐらいだったのが、今やグレイモンと同じぐらい、いや、それ以上かもしれない。

最早、逃げ場などなかった。

メラモンが不敵な笑みを浮かべながら、崖を滑り降りてくる。

子ども達の頭が、真っ白になった。

メラモンに吹っ飛ばされたピヨモンが、痛む身体を叱咤して起き上がった。

空は、無事だろうか。震える身体を何とか起こして、空の方を見やる。

ピヨモンがやられてしまったところをまともに見てしまった空は、へたり込んでいた。

まるで、空が泣いているように、ピヨモンには見えた。

『っ、ソラ……！何よ、こんなことで、負けたりしないんだからっ!』

——護らなければ、そのためにアタシは、ここにいるんだ!!

空の腰につけられた白い機械が光り輝いたのは、その時だった。

ピヨモンを傷付けられ悲しんでいた空の心と、空を護りたいピヨモンの心が1つになった時。

想いは形になって、力が生まれる。

『ピヨモン進化あー!!』

は、と空は顔を上げた。光に包まれたピヨモンの身体が、大きくなっていく。

『バードラモン!!』

光を突き破って姿を現したのは、まるで不死鳥のような炎の化身。オレンジ色に燃える羽をゆったりと羽ばたかせ、進化したピヨモン——バードラモンは飛んだ。

崖を滑り降りてきたメラモンを押し返すその力強さに、空の目が見開かれる。

地響きと、爆風に卷かれた砂埃。

その巨体に似合わない、美しい囀りが、空を心地よく包んだ。

『うおおおおおおお!!バーニングファイトオオオ!!』

バードラモンに吹っ飛ばされたメラモンは、炎の弾を連射してバードラモンに何度も投げつける。

まともに食らっているバードラモンだったが、全くダメージを受けている様子を見せない。

恐らくメラモンと同じで身体が炎で構成されているから、炎の攻撃は効かないのだろう。

大きく羽ばたく。大空に舞い上がり、メラモンから距離を取ると、ばさりと開かれた翼に幾つもの煌めきが見えた。

『メテオウイング!!』

ばさ、と翼を振るう。炎のシャワーが、メラモンに降り注いだ。メラモンに炎は利かない。だが、威力のある炎の塊を、何十発もち放ち吸収すればどうなるか。

コップに注ぎ過ぎた水が溢れるのと同じように、自身のキャパシティ以上の炎を吸い取ったメラモンは、荒れ狂う体内の炎に勝て

ず、その場で蹲った。

小さくなつていく身体。勝つたのだと気づいたのは、メラモンの身体から黒い歯車が飛び出して行って、空中で爆発したのを、目撃した時だった。

『ソラー！ソラー!!ソラー!!』

「ピヨモンー！」

退化したピヨモンがへろへろと高度を下げながら、パートナーの名を何度も呼び、その腕に飛び込む。

空も、自分を助けるために進化を果たした、甘ったれのだけだと思っていたパートナーを迎え入れる。

勢いあまつてその場で2周ほど回った空とピヨモンは、互いの無事を喜んで笑い合っていた。

空の中の、ピヨモンに対する印象はここで決まったと言ってもいいだろう。

甘ったれで、空に対する大好きっていう気持ちを隠そうともせず、それでいてとても勇敢で優しい子。

知らない場所に飛ばされ、不安や疑念が纏わりついていた空の心は、ピヨモンの愛情で少しずつ晴れていく。

「ピヨモン、ありがとう……！……！本当にありがとう！」

『ううん、ピヨモン、当たり前のことしただけだよ。だって……』

ソラが、大好きだから。

鬱陶しいと思っていたその愛情表現が、今は嬉しかった。

ちびっこの交流会

お気に入りのリュックは青い色。

大好きなアニメのキャラクターの顔が貼りつけてあって、お出かけをするときはいつもこのリュックを使っていた。

その中にお菓子とパンをありったけ詰め込んで、しっかりとチャックを閉めてから背負う。

踵を踏み潰したランニングシューズを履き、お姉ちゃんに手を引かれながら大輔は玄関を出る。

扉を開け、背の小さな大輔が扉と天井で狭められた空を見上げると、オレンジ色に染められていた。

夕方を知らせる鐘はとつくに鳴り終えている。鐘が鳴ったら帰りましょう、朝になるまで外に出てはいけませんよ。

なのにお姉ちゃんは、お母さんの目を盗んで大輔の手を引いて、外に出てしまった。

大輔の方を一切振り向かず、ただ大輔の小さな手をしっかりと握って、早足でマンションの廊下を歩く。

時々転びそうになりながらも、大輔は待ってとか早いとか、文句を一切言わずにただお姉ちゃんについていった。

エレベーターのボタンを押す。今日に限ってなかなか上がってこない。

1階ずつ止まるエレベーターに痺れを切らしたお姉ちゃんは、すぐ傍の階段を使って降りる。

カンカンカン、と金属でできた階段が甲高くて短い音を鳴らした。

空がオレンジと濃紺の半分ずつになる時間帯だというのに、お姉

ちゃんは引き返そうとしない。

それどころかどんどん先へ進んでいく。

濃紺が迫る住宅街を真っ直ぐ突き進んでいくお姉ちゃんを不思議に思いながらも、大輔は黙ってその手に引かれて歩いていく。

もうお夕飯の時間だから帰らなくていいの、とか、何処に行くの、とか疑問は沢山浮かんできたけれど、お姉ちゃんはどんどんお家から離れていく。

大輔の位置からでは、お姉ちゃんの顔色を伺うことは出来ないから、今お姉ちゃんがどんな顔をしているのかは分からない。

すっかり暗くなってしまった辺り一帯は、次々と街灯が照らし始める。

それでも、人口的な灯りは道を照らすので精いっぱい、空は相変わらず真っ黒に塗りつぶされていた。

わき目も振らずに、真っ直ぐ突き進んでいたお姉ちゃんの足が、ぴたりと止まる。

それにつられて大輔も立ち止まった。

じ、とお姉ちゃんの視線の先にあったのは、いつも遊んでいる公園だった。

公園にも街灯はあるが、1つだけしかなく、昼間に遊んでいる時と雰囲気が違って見えて、何となく不気味だ。

物心つく前からそうだったモノが見える大輔は、殆ど無意識にお姉ちゃんの手を強く握った。

直後に、お姉ちゃんは公園に向かって歩き出す。

ブランコ、ジャングルジム、滑り台、一般的な公園にある遊具は一通りある。

お姉ちゃんが向かったのは、半球体で幾つか穴が開いているドームだった。

昼間、皆で遊ぶときは、そこでよく秘密基地ごっこをして遊んでいる遊具である。

先に大輔を中に押しやり、次にお姉ちゃんが入る。

公園に1つだけ設置されている街灯の灯りが、穴から中を照らしてくれていた。

その時、大輔は漸くお姉ちゃんの顔を見ることができた。

泣いていたのだ。

大輔は、目を見開いた。

あの姉が、いつも大輔を守ってくれている姉が、涙をぼろぼろ零して、泣いていたのである。

目を真っ赤にさせて泣き腫らして、唇をぎゅつと真一文字に結んで、嗚咽を堪えながら泣いている姿は、衝撃的だったから、今でも鮮明に思い出せる。

高い所から落ちて足を骨折したときも、男の子と喧嘩をして顔を殴られた時も、何があつたつて泣かなかつたお姉ちゃんが、大輔の目の前で泣いている。

どうして? どうして?

大輔は分からない。

大好きなお姉ちゃんが泣いている理由が、分からない。

そんなお姉ちゃんを何とかしてあげたくて、大輔はお姉ちゃんの傍に寄り、そして……

あの時、自分は何と言ったのだったか。

周りの景色が歪んで見えるほど、地面から熱気が立ち上る。

ピヨコモンの村で一晩過ごした一行は、今日こそこの広大な砂漠のエリアを抜けようと、一心不乱に歩いていった。

だが何時間歩き回っても、見渡す限りの砂漠の向こうは森も海も何も見当たらず、一直線の地平線が引かれているだけだった。

太陽の熱さと、それを反射して熱を帯びている砂漠の砂の両方から攻められ、子ども達の全身から汗が噴き出て水分が急速に失われているのが分かった。

ピヨコモンの村で調達しておいた水分も、無限ではない。

また何処かで水分を調達するなり、休めるようなところを探すなりしないと、悪戯に体力を消耗するだけである。

「はあ……はあ……もうダメえ……」

まず最初にへたり込んでしまったのは、ミミだった。

動き回るのに全く適していない服装と靴のせいで、他の子ども達よりも負担が大きいらしく、ここに来るまでにも何度も休憩を挟んでいる。

ここが森の中や草原など、普通の環境だったら、先頭を歩く太一にしっかりとしろと引つ張られていただろう。

だが砂漠地帯という特殊な環境下、灼熱地獄のど真ん中を何の装備もなしに歩き回っているのは、流石の太一でも根を上げそうになっている。

休憩が多くなるのも、自然なことだった。

「うう……」

「はあ……はあ……」

「一歩も動けないよお……」

限りなくないに等しい水分で生き延びている、僅かに生えた草に身を投げるように座り込んだのは、最年少の小学2年生の3人である。

身体が小さな3人は、上から容赦なく降り注いでくる太陽だけでなく、太陽の熱を吸収して熱気を吐き出している砂漠の地面とも距離が近いので、尋常ではないほどの量の汗をかいていた。

そしてそんな4人の子ども達に混ざってへばっているデジモンは、

ゴマモンだ。

ピヨコモンの村に着く前の砂漠での移動もそうだったが、ゴマモンは寒冷地域の海洋生物である。

寒さには強いが、暑さにはめっぽう弱い。

空気も乾燥しているから、この環境はゴマモンには辛いだろう。

休憩しようか、という太一の鶴の一声で、4人はすぐ傍にある一本だけ立った木に寄りかかるように座り込んだ。

木が作り出す影のお陰でほんの少し太陽光を遮ることは出来るが、殆ど無風状態では流れ出る汗を乾かすことは出来なかった。

「……やっぱりだめかぁ」

丁度いい大きさの石に腰かけた光子郎が残念そうに呟く。

彼が見ていたのは、キャンプにも持ってきていたノートパソコンである。

ここに飛ばされる前から調子が悪かったが、電源ボタンを入れてもうんともすんとも言わないのだ。

荷物を確認していた時も言ったが、バッテリーは十分残っていたので、そもそも電源がつかないということがあり得ないのである。

一体どうしたことか……と溜息を吐きながらパソコンを見下ろしていた光子郎の呟きを拾った、太一の行動は早かった。

「そういう時は叩けば直る！」

光子郎のパソコンを取り上げ、あろうことか乱暴に叩き始めたのである。

一瞬何が起こったのか理解できなかった光子郎だったが、次いで聞こえてきた治の怒声で我に返った。

「何やってるんだ、お前は！」

滅多に声を荒げることのない治の怒声に、太一や光子郎だけでなく空や丈、ミミ、そして2年生組とデジモン達は、びっくりしてその場で硬直してしまった。

治はそんな一同に気づかず、怒りに満ちた形相を浮かべながらずかか太一の下に歩み寄り、太一が持っている光子郎のパソコンを取り上げる。

「あのなあ、パソコンは精密機器だぞ!?薄っぺらいから信じられないかもしれないけれど、この中にたつくさん小さな部品が密集していて、1つでも欠けたら正常に動かなくなるんだ!ブラウン管のテレビじゃあるまいし、叩いて直るわけないだろう!?壊れたら責任とれるのか!?!こういう精密機器は子供の小遣いでどうこう出来るものじゃないんだ!!そもそも人間がいる保証が全くないこんな異世界で、直してくれるような人やモノなんか……!」

「治!ストップ、ストップ!」

青筋を額に浮かべながらマシンガントークをかましそうになる治を、最初に我に返った丈が羽交い絞めにして止めてやる。

親友の治の豹変っぷりに、目を見開いて硬直していた太一は、お、お、お、としか返事が出来なかった。

「全く、治らしくないぞ?ほら見なよ、空くんやミミくんだけじゃなくて、2年生達までびっくりして固まっちゃってるじゃないか」

「……済まない。賢、びっくりさせちやったな?ごめん……」

「う……ううん。大丈夫だよ、びっくりしちやっただけど……ね、パタモン?」

『う、うん……』

賢も我に返り、隣にいたパタモンに同意を求めながら大丈夫だと返した。

大輔、ブイモン、ヒカリ、そしてプロットモンも、言葉にはせずとも何度も頷いている。

そんな最年少3人に、治は苦笑しながら再度謝罪し、太一から取り上げた光子郎のパソコンを返した。

「はい、光子郎」

「あ、ありがとうございます」

「壊れてはいないと思うけど、念のために確かめておきな」

「はい」

「……あと、分かっているとは思うけど、太一の前で不用意な発言はしないように」

「……そうですね」

半目になった治と光子郎の視線の先には、空と丈に説教されて正座をさせられている太一の姿があった。

学校の備品なども時折ぶっ壊して、先生に怒られている姿をよく見かけるからか、空と丈に説教されているところを見ても、あまり気の毒には感じられない。

一通り説教が終わり、空と丈からようやく解放された太一は、むすりと拗ねた表情を浮かべながら地平線が広がる砂漠に目を向ける。

単眼鏡を使わずとも見えたのは、明らかに不自然に立ち昇っている黒煙だった。

先程説教されて、機嫌が急降下していたことも忘れ、太一は走り出した。

アグモンが慌てて追いかける。

何とか起動してくれないものかと、治が取り返してくれたパソコンを弄っていた時だった。

「……………え？」

キーボードを滑っていた光子郎の手が止まる。

突如として、パソコンが起動し出したのだ。

真っ黒だったディスプレイがパツと光り、起動したという旨のメツセージが映し出される。

やった、と喜んだのもつかの間、画面の端のバッテリー残量が0を示していた。

パソコンというのは常に電力を消費して稼働されているので、日頃から電源アダプタと繋げて使用するものだから、電源を入れているにもかかわらずとは言え、バッテリーが消耗していたのは理解できる。

しかし残量がないのなら、何故起動したのだろうか。

浮かんだ疑問を解決する術を、今の光子郎は持っていないので、治にでも聞いてみようかとした時、太一が子ども達を呼ぶ声があった。

先を行く上級生達を追い、同年のミミと2年生の3人と一緒に、いつの間にか一行から離れていた太一の下へと走る。

黒煙が立ち昇っていたことに気づかなかった一行は、何か見つけた

のかとその足を急かした。

地平線だと思っていた線は、切り取られたような高台だったようだ。

その高台から下つてだいぶ遠いところに、黒煙が上がっている原因が、あつた。

張り巡らされた太い幾つものパイプと、それに繋がっているタンク。

「工場だ……」

明らかに人が建てたとしか思えないような構造物を目にした子ども達の行動は早かった。

太一を筆頭に、降りられる個所を探して建物に走っていく。

治の推測を聞いてから、人なんていないと絶望しきつて、自分達で乗り越えるしか生き残る道はないのだと諦めていた子ども達の心に、希望の火が灯る。

立派な工場から立ち昇る黒煙を見るに、この工場は現在進行で稼働されている。

ならば工場を稼働させている「誰か」がいるはずだ。

はやる気持ちを抑えることが出来ず、疲労を見せていたはずの子ども達の足は自然と早まる。

無機質な金属の大きな壁は、見たことがない金属で、治と光子郎の好奇心を刺激する。

食い入るように壁を見つめている2人を引っ張って、子ども達は工場へと入っていった。

何かを叩きつけるような音がひっきりなしに聞こえ、金属で出来ている壁や建物に反響している。

「…う、おー！」

「すごいー！」

「おっきいねえ、パタモン！」

2年生3人組が感嘆の声を上げる。

顔を上に向けると、聳え立つ建物に遮られて、空が凄く狭い。

つられて上を見たブイモン達も凄いなーとか言っていた。

「すみませーん！誰かいませんかー!?」

太一がありつたけの声を張り上げて、稼働音に負けない音量で工場内にいるであろう人に聞こえるように叫んだが、返事が返ってくる気配が全くない。

おかしいな、と太一とアグモンは歩き出した。

子ども達も自然とついていく。

剥き出しになった歯車を横目で見ながら、太一達は更に奥へと入っていった。

内部へと通じるようなドアが、規則的に並んだ建物の彼方此方に見られる。

どうする？って子ども達は互いを見やった。

誰かが建てたとしか思えない構造物である、絶対に誰かがいるはずだと力説する丈と、重要施設っぽいのに外部から侵入してきた自分達の下に、ガードマンの1人すら駆けつけてこないのはおかしいと疑い始める治。

どちらの言い分も納得できるが故に、子ども達は迷っていた。

「何だよ、だったら探しに行きやいいじゃん？ここでじっとしてたって、誰かが来てくれる保障もないんだろ？」

意見が分かれた時や迷った時、決断力や判断力がある者の意見が採用されることが多い。

例に漏れず、太一が迷っている子ども達に対してあっさりと提案し、他に案もないことから太一の意見を採用することにした子ども達は、何人かで別れて建物を散策することにした。

その班決めで、ちよつとした一悶着が起こる。

太一と治と空が中心になって、どの組み合わせでどう動くかと話し合っているのを聞いた大輔は、はい！と元気よく手を挙げた。

「俺、ヒカリちゃんと賢と、あとブイモン達で行きますー！」

「ええっ!？」

何言ってるの、と慌てたのは最年長の丈だった。

「2年生だけでなんて、危ないよ！君達はまだ小さいんだから！」

「小さいからって、何もさせてもらえないなんて、やです！」
「そうだよ！誰かいらないか、探せばいいんでしよう？それなら僕達だって出来るもん！」

「プロットモン達もいてくれるし、危ないことはしません。約束します。ねえ、お兄ちゃん、いいでしょう？」

これまでずっと上級生の後をついてくるだけだった2年生達の不満が、ここぞとばかりに爆発した。

小さいから危ないことはさせてもらえない。それは仕方のないことだ。

大輔達だってよく分かっている。治の推測が現実を帯びてきている今、2年生の大輔達にとって上級生だけが頼りなのだ。

3人とも上に兄弟姉妹がいるから、もしも上級生達が目を離れた隙に勝手なことをしたり、怪我なんかしようものなら、怒られるのは上級生達なのだということも、よく分かっていた。

下級生を怪我させるなんて、何してたの、ちゃんと見てて言ったでしょう、つて理不尽な説教を受けるところを、大輔達は兄や姉を通して何回も見てきた。

そりゃ、たまーにそれを利用して上手く叱られるのを回避したことはあったけれど、それは今は置いておくとして。

元々大輔は自立心の強い子である。

アメリカで生まれ育ったこともあり、自分で出来ることは自分でしなければ気が済まなかった大輔は、その自立心をサッカー部でも遺憾なく発揮していた。

こちらに来てから妙に大人しかったのは、流石の大輔も見知らぬところをうろつくのは賢明ではないことが分かっていたからである。

太一と治と空はサッカー部に入っていて、大輔はサッカー部の後輩だ。

小さな身体でちよこまか動き回る大輔を知っているからこそ、3人は敢えて大輔をヒカリと賢と一緒に行動させていた。

もしもヒカリや賢がいなかったら、先輩達がやるなら自分もやると

言い出して、上級生に混じって先頭に立とうとしていただろう。

上級生達が下がってなさいって言ったところで聞かん坊の大輔は、きつと何でですかって地団駄踏んで癩癩を起していただろうと言うことは、安易に想像ついた。

だからこそ、ヒカリや賢という、大輔と同じ年の子が他にもいてよかったです、太一達は思ったのである。

一番仲のいい女の子のヒカリちゃんは、お兄ちゃんと違ってあまり運動が得意ではない。

それどころか季節の変わり目になるとしよっちゅう風邪をひくよな、身体の弱い子だ。

もつと小さい頃は、今よりもつと大変だったらしい。

そんなヒカリのお兄ちゃんである太一は、自他ともに認めるシスコンで、いつもヒカリのことを心配していた。

クラスどころか学年が違うせいで、ヒカリの面倒を見ることが出来ないけれど、大輔が転校してきてくれたお陰で、それが好転しているらしい。

どういう訳か、大輔が転校してきたその日から積極的に大輔に話しかけて、日本語が話せない大輔の面倒を見ているし、そのお陰でヒカリに懐いた大輔は暇さえあればずーっとヒカリと一緒にいる。

勿論、ちゃんと他の友達もいるけれど、それでも一緒にいる頻度が高いのは、お互いだった。

2人で一緒に太一が蹴るボールを追いかけて遊んだり、英語と日本語を教え合ったりするだけでなく、大輔はヒカリの調子が悪いと目敏く気づいて保健室に連れていくなり、太一に知らせるなりしてくれるのである。

頻繁に風邪をひいていたヒカリは、両親や兄に心配かけさせまいと具合が悪いのを上手に隠してしまう子で、気が付いたら悪化していた、というのはしよっちゅうだった。

それが大輔のお陰で、悪化する前に気付いて対処が出来るようになったのである。

大輔くん様様ね、とは太一の母の台詞だった。

つまり、お互いがいい具合にストッパーになったり、よき相棒になつたりしているお陰で、何でも自分でやりたがる大輔が、上級生に混ざりたがって前に来るのを防いでいるのだ。

加えて、新しい友達の賢。賢は、大輔と違ってあまり前に出たがらない。

自分のことは自分で出来るものの、目立つことが嫌いなんだと治が言っていた。

天才少年・治によれば、賢も小学2年生にしてはなかなか賢い子らしい。

勉強も出来るし、スポーツも得意。でも治と一緒に、人が沢山いると奥に引っ込んでしまう子。

だからこそ、大輔は前に行かずにヒカリと賢と一緒に、敢えて上級生の後をついていく。

太一も大輔も、遅れている子がいると目敏く気づいてくれるのだが、太一は前で待っているタイプで、大輔は遅れている子の下へ行くタイプと、全く違う行動を取る。

何やってんだよ、早く来いよーって太一は待っていてくれるけれど、迎えには来てくれない。

前に出たがらない子の腕を引っ張って、押し出すのである。

反対に大輔は、どうしたーって遅れている子の下まで来てくれるけれど、待っていてくれない。

一緒に行こう、って隣を歩いてくれる。

それが如実に表れていた2日間だったが、慣れてくれば大輔も自分の本領を発揮し始めるだろう。

そして大輔が前に出ようとすれば、1番の仲良しのヒカリや友達になつたばかりの賢も、それにつられて前に出てくる。

そろそろ我慢できなくなる頃だろうなあ、って治は予想していたけれど、思っていた以上に早かったから、どうする？って太一に尋ねる。

「ここでダメって言ったって、聞くような大輔じゃないぞ……」

「だよなあ……だからって3人で行かせるか？」

「でも見てよ、あの目……3人で行きますって言いたげなのが丸わか

りよ……?」

5年生3人は額を寄せ合って話し合う。

目をキラキラさせながら太一達を見上げてくる下級生は、今までずっとお荷物だった分、役に立ちたいと言いたげなのが、嫌でも伝わってきた。

「いや、だから、ダメに決まってるだろう? 何でそんな満更でもない表情しているのさ」

最年長の丈が断固として反対する中、5年生3人は乾いた笑みを浮かべて丈を見つめた。

「……丈、お前確か大輔の姉ちゃんと同じクラスだったよな?」

「何だい、藪から棒に」

「だってら知っているだろう……? お姉さんがどういう性格をしているのか……」

「……………」

「そして大輔は、そんなお姉さんにそっくり……そこまで言えば、後は分かりますよね……?」

ふふふ、と5年生が遠い目をしているのは、気のせいではない。

3人は大輔だけではなく、サッカーをしている大輔をたまに応援しに来てくれる大輔のお姉ちゃんのことにもよく知っている。

小学6年生にしてパンクやロックなファッションを好み、学校でもそう言ったタイプの服装を着て通学し、教師を仰天させたという逸話と、学校中の男子がひれ伏す切っ掛けになった「アレ」をしでかした伝説を持ち合わせている、トンデモガールである。

大輔は、そんなお姉ちゃんの弟だ。

大輔のお姉ちゃんと同じクラスである丈は、5年生3人の言いたいことが、痛いほどに分かった。

「……君達、絶対、絶対、ぜーったい! 危ないことはしないって約束してくれるかい?」

「「はー」「」

返事だけはいいのだ、返事だけは。

物凄く不安だが、ダメだと言い含めて無理やり他の上級生達と一緒に

にしたところで、目を盗んでこっそりと抜け出すのは目に見えて
いる。

だったら最初から別行動をしていることが分かっていた方が、心臓
に優しいか。

『ブイモン達も、すっかりしろよ？ダイスケ達を護ってやれるのは、お
前らだけなんだから』

『分かってるよ！』

『どーんとお任せ！』

『何たって、パートナーだもの！』

『……どうしよう、ソラ。ワタシ、物凄く不安』

「奇遇ね、ピヨモン。私もそう思ってたの……」

丈につられるようにゴマモンがブイモン達に言い含めるものの、ど
ういう訳か頼りなく見える。

傍らでやり取りを見ていたピヨモンと空が半目になっていたこと
を、誰も咎められないだろう。

このまま悩んでいても埒が明かないということで、一向はさっさと
3組に分かれて探索を開始する。

太一と空と丈で1組、治と光子郎とミミで1組、そして大輔とヒカ
リと賢で1組。

不安要素の塊が1組いるが、今は無理やりにも置いておくしかな
い。

工場内に侵入した最年少とそのパートナー達は、工場を稼働させて
いる「誰か」を見つけたという任務を遂行させながらも、見たことが
ない機械がひしめき合っている内部は、子ども達にとっては魅力的な
場所でもあった。

すげーすげーって目を輝かせ、彼方此方視線を向けながら歩いてい
るから、自然と足取りも遅くなる。

ゴマモンやピヨモンに、すっかりしろよと釘を刺されていたブイモ
ン達も、大輔達につられて天井を見上げたり、両脇を占領している見

たことのない機械や装置にすっかり心を奪われてしまっていた。

最初に脱線してしまったのは、意外なことにヒカリである。

大輔と賢、パートナーデジモン達が辺りをキョロキョロと伺っている間に、悪戯つ子の表情を浮かべたヒカリちゃんは、2人と3体の目を盗んで、機械や装置の陰に隠れてしまった。

すぐに気づいたのはプロットモンで、パートナーのヒカリがいなくなったことで悲鳴を上げ、それによって大輔達もヒカリがいなくなっていることに気づいた。

何処だ何処だつて慌てふためく大輔達の声が聞こえて、ヒカリはくふくふと口元を両手で隠しながら笑いを堪える。

暫くしてブイモンが見つけたーって隠れていたヒカリを見つけ、引つ張り出した。

見つかつちやった、つてヒカリはペロツと舌を出して、全然悪びれていない。

そして上級生達が危惧していた通り、最年少達は少しずつ脱線し始める。

「……ねえ、そう言えばさつきお兄ちゃん達が言ってたけど、大輔くんとお姉さんいるの?」

道中に落ちていたスパナを拾った賢が、それを軽く振り回しながら大輔に尋ねた。

先程、自分達だけで行動したいと上級生にお願いした時に、彼らが目の前で話をしていたから、気になっていたのだろう。

そう言えば言っていなかったっけ、つて大輔はしれつと言った。

「おう、いるよ。丈さんと同じ年の、小学6年生のお姉ちゃん。ジュンって言うんだ」

『ダイスケもオネエチャンいるんだ?どんな人?』

「んー……何て言うのかなあ?ブレないって言うか、真っ直ぐって言うか……」

「自分の好きなものは好きーって譲らないよね」

身内の評価というのはなかなか難しいものだ。

外から見た姉と、自分から見た姉というのはだいぶズレがあるか

ら、大輔がこうだと思っけていても周りもそう見えていたとは限らない。

『じゃあジュンは何が好きなの?』

「そうだなー、何か男の人がお化粧してるバンドの音楽とか?音もでつかくて、時々お姉ちゃん部屋の音漏れてるんだぜ?煩いからやめてくれって何度も言っけてんのにさー」

『ばんど……?』

聞き慣れない言葉に、ブイモン達は首を傾げる。

バンドが何なのかは知っけているけれど、何と説明したものか分からなかつたので、曖昧に笑っけて誤魔化した。

「ヒカリちゃんは、大輔くんのお姉ちゃんのこと、知っけてる?」

「うん、勿論知っけてるよ。時々大輔君のお姉さんと一緒に、お兄ちゃんや大輔くんがサッカーしてるの、見てるんだ」

「大輔くん、サッカーやっけてるんだ?あ、お兄ちゃんサッカーやっけてるけど……」

「おう、治さんにもよく世話になっけてるよ。俺が日本に帰っけてきたばっかの時は日本語全然分かんなかつたんだけど、治さんが通訳してくれて助かつたなあ」

「お兄ちゃん、僕達がまだ一緒に住んでた頃から、海外でお仕事したいっけて言っけて英語のお勉強してたんだよ。すごいよねえ。僕も勉強してるんだけど、全然分かんないんだよー」

「……簡単なのでよかつたら、俺が教えようか?」

「え、いいの?」

「つっけても本当に簡単なのしか教えられねえけど」

「私も教えてもらっけてるんだー。結構楽しいよ、賢くんも一緒にやろうよー!」

「えー、いいなあ!ダイスケ、俺にも「えいご」っけて奴、教えてくれよ!」

『あ、ボクも〜!』

『ヒカリがやっけてるなら、アタシも!』

「あはは、楽しそう!みんなでやろうね!」

同い年で最年少、訳の分からない場所に突如として飛ばされ、右も左も分からないまま行く宛てもなく上級生達が彷徨い歩くのをただついていくことしかできない3人の会話は、どんどん脱線していく。「お兄ちゃん、学校ではどう?」

久しぶりに会っても僕ばかり喋ってるんだよーって、賢は頬を膨らませながら不満を漏らすと、大輔とヒカリはクスクス笑いながら教えてあげる。

「サッカー部の時の治さんしか知らないけど、サッカーしてる時の治さんってすつごくカッコイイよなー」

「うん、1番上手だよね!お兄ちゃんとツートップっていうの、やってるんだって」

「そっかー、じゃあ僕もサッカーしてみようかなあ。僕も運動は好きだけど、クラブとか入ってないし……」

「いいじゃん、やろうぜ!そんで、いつか俺達んこの学校のサッカー部と試合すんだ!」

「あ、それいい!試合の日は呼んでね。私とジュンちゃんて絶対見に行くから」

「え?ジュンちゃん?」

ヒカリが大輔のお姉ちゃんをちゃん付けで呼んだことに、賢はびつくりしてヒカリを見やる。

まだヒカリと知り合って日は浅いが、基本的に年上の人相手には「さん」付けで呼んでいるヒカリが、大輔のお姉さんに対して『ジュンちゃん』と呼んだのである。

理由は、簡単だった。

「私もね、最初はジュンさんって呼んでたの。でも慣れないからやめてって、呼び捨てでいいって。そんなの無理だって言ったら、じゃあせめてちゃんて呼んでって言われちゃった」

「そうなの?」

「俺も日本に帰ってきたばっかの時に、太一さんと治さんのこと呼び捨てにしちゃって、すっげー怒られたんだよなあ」

あはは、って大輔は苦笑する。

アメリカでは会社や初対面、特殊な役職などについていないなど特別な理由でないに限り、相手が年上年下に関わらず呼び捨てである。

両親の方針で家でも英語漬けだった大輔は、お姉ちゃんのことだけは日本語で『お姉ちゃん』と呼んでいたが、それ以外はほぼ呼び捨てだった。

お姉ちゃんのアメリカー人の友達だって、呼び捨てで呼んでいたから、ついついその延長で太一や治のことも呼び捨てで呼んでしまったのである。

そんなアメリカ事情を知らない太一にしこたま怒られたことは、今でも鮮明に思い出せた。

あの時の太一さん、めっちゃ怖かった、って大人になっても言うほどには。

治とジュンが間に入ってくれて、何とか誤解は解けたけれども、ここは日本なんだから日本の方式に従うように、と太一に言われた大輔は、最初こそ戸惑ったものの、最近は何とか違和感なく太一達を呼べるようになってきた。

最初は、サッカー部に入るんだから太一先輩って呼べ、って言われたのだけれど、先輩という言葉が難しく、また理解できなかった大輔は口をもごもごさせてばかりだった。

英語漬けの日々を過ごして、すっかり英語を使うための筋肉と化していた口では、『先輩』という言葉は言いにくかったらしい。

ずっと英語が飛び交っている中で育ってきたのだから仕方がない、と小学生にしては海外事情に詳しい治の提案により、暫くは『さん』付けでいい、と言ってもらい、今に至るらしい。

「……でもお兄ちゃん達はジュンさんのことは『さん』付けで呼んでるんでしょ？」

「……えーっと」

「……何か、色々あったみたいで……」

様々な伝説を作って上級生の男子はみんなジュンを怖がって『さん』付けで呼んでいるのだが、口に出すのは憚られた。

ただジュンと大輔が転校してきた約2か月後、ジュンが学校中を巻

き込むようなことをしでかしてしまった、ということだけ記載しておこう。

その日から学校中の男子は、ジュンを見かける度に顔を真っ青にさせていたし、女子は尊敬の眼差しをジュンに向けるようになった。

それは太一や治も例外ではない。

2人は大輔を通じてジュンと知り合ったのでまだマシだが、それでもジュンがこの1年で作り出してしまった伝説を目の当たりにしてしまっているのです、時々白目を剥きながらジュンを見つめていることがあるのは、公然の秘密である。

大輔とヒカリの顔も蒼褪めて何故か賢から目を逸らしているし、ここは空気を讀んだ方がよさそうだ。

『……え、えーっと、じゃあ今度はヒカリ達のこと教えてよ!』

ヒカリの隣を歩いていたプロットモンが、慌てて話題を変える。

ジュンが作り出した伝説を思い出して顔を青くさせていた大輔とヒカリだったが、プロットモンの言葉を聞いて顔色を戻す。

「私達の」

「こと?」

『うん!アタシ達はヒカリ達の名前も、ここに來てくれることも知ってたけど』

『ダイスケ達が今まで何をしていたのかとか、どう過ごしていたのかとか、そういうの知らないんだよな』

『そう!だから教えて?ケン達のこと、もっと知りたい!』

教えて教えてって目を輝かせているパートナーが何だかおかしくて、3人は顔を見合わせた後、くすりと笑い合った。

それは、巨大な乾電池だった。

工場を散策するチームが、5年生によっていつの間にか決まっていたが、元来人に意見を述べることに積極的ではない光子郎は、そのことに対して文句を言うことが出来ず、ただ大人しく治の後をついていくだけだった。

最初に立ち寄ったのは、何かを作っている工場ラインだった。

土台だろうか、同じパーツが幾つもベルトコンベアに乗せられており、上から様々な形をした色々なパーツが次々と取りつけられている。

一体何が出来上がるのだろうか、と好奇心を抑えられずに、治とミミと光子郎はそれぞれの憶測を口にしながら流れていくベルトコンベアを眺めている。

その道すがら、治達は動力室を見つけた。

誰かいるかもしれない、という期待を込めて引き戸になっている扉を、治が代表して開けた。

ガラリ、と重たい扉を全開にさせて中に入り、目に入ったのが上記のものだった。

乾電池の横にはこれまた大きなモーターがあり、乾電池と繋がっていた。

光子郎の好奇心が更に刺激され、乾電池に近寄り、ペタペタと触れる。

見た目は光子郎達の世界の乾電池を大きくさせたものだった。

大きな大きな乾電池とは言え、巨大な工場をこれだけで賄えるほどの電力を持っているのだ、何か秘密があるに違いない。

「……あー、光子郎。まだ調べるつもりなら、僕達先にいくけど、いいか?」

「あ、すみません。構いませんよ、どうぞ先に行ってください」

目をギラギラさせながら乾電池を見上げている光子郎を見て、色々察した治は、ちよつとだけ腰が引けながらも光子郎にそう言った。

おざなりで返事を返されたことに治は苦笑したが、ここにいると言うことが分かっているらいいだろう、とキョトンとしているガブモンやミミやパルモンを促して動力室を出て行った。

「……あれ、こんなところにドアが……」

治達が出て行った数分後に、光子郎はお化け電池に扉がついているのを発見した。

恐る恐る手にかけて、引っ張ってみると、すんなりと開いたので中を覗き込んでみる。

「……う、わあ……」

中は、明るかった。

円形の空間の壁には、見たことがある文字とない文字がびっしりと書き詰められており、まるで古代の壁画のようだ。光子郎は思った。

吸い寄せられるように正面の壁に赴いた光子郎の後を、テントモンがくつついていく。

「……これ、何だろう?」

『これは、デジ文字でんなあ』

「デジ文字?」

『はいな。ワテらが使とる文字ですわ』

「へえ。何て書いてあるんだい?」

『それが、1つ1つの文字は読めるんやけど、読めへんですわ』

「へ?」

『えーっと、文章になってへん、って言った方がええですな』

「何だ、それならそうと言ってくれよ」

それにしても、と光子郎は再び壁に書かれている文字を見やる。

テントモン曰く、特に意味のない文字の配列らしいのだが、光子郎は何だかコンピュータのプログラムのようだなあ、という印象を受けた。

恐る恐る手を伸ばし、壁に書かれている文字の1つの一部分を指で消した。

刹那

ぷつうん……

突如として、空間を照らしていた電気が、切れた。

ギョツとなる光子郎に、テントモンはドアからお化け電池の外を見ると、外も真っ暗になっていると告げた。

この時、光子郎とテントモンは知らなかったのだが、光子郎が壁に書かれていた文字の一部を消したことにより、工場内総ての電力の供給が途絶え、停電してしまっていた。

ベルトコンベアを追って何の機械が出来上がるのかを観察していた治達のところも、最年少だけで行動していた大輔達のところも、そして今まさに大ピンチを迎えている太一達のところも、総て。

都合よく持っていたマジックペンを取り出し、消したところを書き込めば再び電気が点いたので、光子郎は安心して座り込み、背負っていたパソコンを取り出して膝に乗せ、立ち上げた。

何をしているのか、とテントモンが問えば、壁に書かれているプログラムを分析するのだと、楽しそうに答えた。

通常、電池は金属と溶液の化学反応によって電気を起こす。

だが今光子郎とテントモンがいる乾電池の内部は、光子郎が知っている電池の構造と全く異なり、壁に書かれた文字がエネルギーとなって電気を作り出しているのである。

電池がどういう仕組みで電気を起こしているのか興味が湧いて、一度分解したことがあった光子郎は、中身が空っぽにも関わらず動力源となっているお化け電池の構造が、気になって仕方がなかった。

壁に書かれた文字が電気を起こしている、という言葉にすれば単純な文章だが、それが如何に難しいことなのか、普段からパソコンのよきな電子機器に触れている光子郎にはよく分かっていた。

パソコンだって、ぱつと見た限りではそんなに複雑な形をしているとはいいがたい。

でも電源ボタンを押せばディスプレイが点くとか、キーボードを叩けば文字が打ち込めるとか、マウスを動かすとディスプレイの中の矢印の形をしたポインタが動くとか、一見簡単そうな操作だってパソコン内部の複雑な回路にプログラムされているから、可能になっているのだ。

太一が光子郎のパソコンを叩いた時に治が怒っていたのは、その回路が繋がっている個所がほんのちよつとズレただけで全く動かなくなる危険性があったからである。

治も光子郎ほどではないにしろパソコンにはそこそこ詳しいので、あの時珍しくあんなに怒っていたのだ。

そうだ、と光子郎は目を輝かせると、キーボードに指を滑らせた。カチカチカチ、とキーボードが小気味いい音をたてて、空洞の乾電池の中で響き渡る。

『今度は何しはるんです?』

「このプログラムを分析してみるのさ。やっと僕のパソコンの出番ってわけだ!」

「…………う、おおおお?」

道なりに真っ直ぐ突き進んで、目的をすっかり忘れてパートナーや友達とのお喋りに興じていた大輔達だったが、その先は行き止まりとなっていた。

なあんだ、って大輔達は引き返そうとしたけれど、ブイモンが壁に引っかけられていた文字に気づいて、大輔達を呼び止めた。

白いプレートに、黒い文字。その下には何の変哲もない扉。

何か文字のようなものが書かれているが、大輔達には読めない。

何て書いてあるのかなあと3人で首を傾げていると、パタモンが代表して読んでくれた。

管理室、と書いてあるらしい。

ここに来てようやく当初の目的を思い出した3人と3匹は、ここなら誰がいるかもと期待を込めて、扉を開ける。

ぎい、と蝶番が軋む音がする。

まずは大輔とブイモンが管理室を覗き込んだ。
広い広い空間には、誰もいない。

大輔は目をぱちぱちさせながら、扉を開ききってブイモンと一緒に中に入る。

がらんだような管理室は誰もいないし、何も置いていない。

ちよつと拍子抜けした大輔とブイモンは、外で待機しているヒカリ達を呼んでやる。

恐る恐ると言った様子でヒカリ達も管理室に入ってきた。

誰も、そして何もなかったことにヒカリ達もがっかりしていたが、それよりも目を引くものがあつた。

最年少の3人の目の前にあるのは、巨大なスクリーンだつた。

部屋の壁一面に大きなスクリーンが設置されており、そのすぐ下に大きなスクリーンに相応しい大きなキーボードが並んでいる。

「でっけー!」

『何かコウシロウが持つてるパソコンって奴みたいだな!』

大きなスクリーンに興奮して、大輔とブイモンは走り寄つていった。

ヒカリ達も慌てて大輔達の後を追う。

しかし触つてみようかと試みた大輔だつたが、身体の小さな彼ではキーボードに手が届かない。

それどころか顔を覗き込ませることすら出来なかつた。

「ちえー、弄つてみたかつたのになあ」

「えー?でも勝手に弄つて、変なことになつたら怖いよ?」

「そうだよ、お兄ちゃん達に怒られちゃうよ?」

「う……太一さんのゲンコツは勘弁……」

『ジュンにも言いつけられたりして』

「ひっ!!それはもつと勘弁!!」

ブイモンの言葉で容易にそれが想像できた大輔は、ゲンコツを作つた拳を振り上げている姉が頭の中に浮かんで、顔を真っ青にさせる。

そんな大輔がおかしくて面白くて、ヒカリや賢、そのパートナー達はどつと笑つた。

「……それで、どうしようか?」

ひとしきり笑った後、ヒカリが大輔と賢を見ながら口を開いた。

どうする、というのは、引き返して太一達と合流するか、別の道を探すかどうするか、ということらしい。

大輔の判断は、早かった。

「まずは光子郎さん、探そうぜ!このでっけーパソコン、見てもらうんだ!」

目をキラキラさせながら、大輔はそう言った。

恐らく光子郎なら目の前のパソコンについて何か分かるかもしれないと思っただろう。

電子機器が好きだから、大きなパソコンがあると聞けば嬉々として駆けつけてくれるかもしれない。

大輔の提案に賛成したヒカリ達は、早速来た道に戻っていった。

轟音が鳴り響く。

工場内の電力を賄っているお化け電池の内部に書かれていた文字の解読を行っていた光子郎だったが、打ち込んだプログラムの羅列が突如としておかしい動きを始めた。

パソコンを背負っていた鞆の持ち手に引っかけた白い機械がそれに対応するように反応し、更にディスプレイに工場の地形が映し出される。

簡単な3Dで描かれた工場から飛び立ち、そして地形のようなものが浮かび上がった。

大きな円形から飛び出しているような、尖ったでっぱりが2つ。

それが、テントモン達が生まれ育ったファイル島の地図であるということに気づいたのは、すぐ後だった。

だが、それをテントモンに尋ねることは出来なかった。

何故ならその直後に、テントモンが身体が熱いと言いながら、騒ぎ出したからだ。

テントモンは名前の通りテントウムシのようなデジモンで、腕と身体の接合部あたりから何故か煙が吹き出していた。

薄らと青白く発光もしている。

それは、まるで機械がオーバーヒートを起こした時の現象によく似ていた。

何があったのか、テントモンに尋ねても分からないとしか返ってこない。

持ち手に引っかけておいた白い機械が、規則正しく鳴り響くのも気になった。

手に取ってみると、小さなディスプレイに白い線が8本、縦に並んで点滅している。

これは、一体何だろう。

光子郎の好奇心が疼くが、テントモンの方が先に限界を迎えそうだったので、慌ててパソコンの電源を切った。

同時に、テントモンに起こっていた異変も収まった。

白い機械も、音が鳴りやんで画面に浮かんでいた白い線が消えていった。

暫く白い機械を呆然と見下ろしていた光子郎だったが、やがて弾けるように顔を上げ、パソコンをバッグに背負い直して乾電池の空間を出て行く。

慌てて追いかけるテントモンに見向きもせず、光子郎はベルトコンベアが流れていく先に向かって走った。

ベルトコンベアに乗って組み立てられていたはずの機械が、いつの間にか分解の工程に移っているのを見た光子郎は、この先に恐らく治はないと判断し、別の道に逸れる。

カンカンカン、と金属でできた階段を駆け上がった先、解放された空が見渡せる屋上に、治達はいた。

興奮冷めやらぬ、と言った様子で光子郎は主に治に向かって捲し立てる。

この工場は、プログラムそのものがエネルギーを作っているのだ、と。

ミミとパルモン、ガブモンはキョトンとしていたが、流石天才少年の治はそれだけで光子郎が言いたいことを理解してしまった。

ここでは、データやプログラムなど、本来ならただの情報でしかないものが実体化する。

どういうこと? ってミミが治に聞けば、治は分かりやすく教えてくれた。

「ミミちゃん、何か好きなものはあるかい?」

「え? そうねえ、オシャレなお洋服とか、アクセサリーとか!」

「そっか。じゃあ、ミミちゃん。そういうミミちゃんの好きなものはどうやって手にいれる?」

「んーと、パパやママが買ってくれたり、お友達がプレゼントしてくれたり……」

「うん、そうだね。本来は、そうやって手にいれるよね。ミミちゃんのパパやママが稼いだお金、お友達がお友達のパパやママから貰ったお小遣い、僕らの世界ではお金で物を手にいれるね?」

「うん」

「ああ、ガブモン。お金のことについて聞きたいなら後でちゃんと教えるから、もうちよつと待ってくれ。えーつと、つまりね。僕らの世界ではそうやって成り立っているけれど、この世界では“お洋服”って文字にすれば、それが実体化……文字がお洋服になるんだ」

「ええっ!? そうなの!?!」

「うん。まあ勿論ただ文字にすればいいってもんじゃないと思う。色々制限とか、制約とか、文字を実体化させるために必要な条件とか、そういうのはあるんじゃないかな」

「なあんだ、魔法みたいに何でもできるってわけじゃないのね」

「あはは、魔法だって万能じゃあないよ。でも概ねこの解釈で合っていると思う。そうだろ、光子郎?」

「はい、それで合っていると思います。先程、治先輩達と別れた後に、僕あの巨大電池に扉があるのを見つけたんです。」

「え、扉？」

「はい。見てみると、中は本来の電池の構造ではなく、空洞でした。その代わり壁一面に文字がびっしりと書かれていたんです。その一部を消した際、電気が切れてしまつて……」

「あ、そう言えばさつき一瞬だけ暗くなつて、ベルトコンベアが動かなくなつたわよね？あの時かな？」

「ああ、やっぱりそうだったんだ。で、マジックで書き直したらまた電気が点いて……」

「文字の一部を消したら電気が消えて、書き直したら電気が点いた……本当にパソコンみたいだな」

『どういうこと？』

「パソコンもね、プログラムつていう文字の羅列で動いているんだ。1文字でも間違えると、パソコンは正常に稼働しなくなっちゃうんだよ」

『へー、オサムは物知りなんだね！』

「いやあ、パソコンの中身が気になつて一回分解しちゃつたことがあつて……」

「それはそれで治先輩らしいですね……」

「あの時は父さんに怒られた、怒られた。でも好奇心があるのはいいことだぞつて、頭撫でられたよ」

「あはは、治さんでも怒られちゃうことつてあるんですね！」

別れていた太一達が、息を切らしながら駆けつけてきたのは、その時だった。

そして開口一番に、逃げろと言ひ出した。

一体何のことだ、と治達がぼかんとしている目の前で、それは起こつた。

突如として巻き上がった瓦礫と粉塵。

機械仕掛けの身体が、粉塵の中から現れ、太一達と治達の間を塞ぐように立ちはだかつた。

じ、と治達を見ていたかと思うと、胸部のハッチを開いて、ミサイルを発射させた。

危ない、とガブモンが飛び出して身体が光に包まれ、ガルルモンへと進化し、向かってきたミサイルを逞しい前足で薙ぎ払った。

すぐ傍にいた光子郎は、治の腰に引っかけられていた白い機械が光り輝いていたのを見逃さない。

ガルルモンが薙ぎ払った2つのミサイルは、1つは空中で爆発したが、もう1つはあろうことか太一達の方に向かってきた。

魚を改造したような形のミサイルは口を開くと中にガトリング砲が内蔵されていたようで、太一達に向かって乱射してくる。

あわわわ、つて後ずさりながら何とか砲弾の雨を避ける太一達を護るべく、飛び出して行ったのはアグモンだった。

太一の腰につっかけられている白い機械が、同じように光ってアグモンがグレイモンに進化する。

太い尻尾をぶん回して、ミサイルをぶっ壊した。

何だあれは、と驚愕する治に、傍にいたテントモンがアンドロモンというデジモンだと教えてくれた。

グレイモンやガルルモンよりもずっと強くて、進化したデジモンらしい。

2体が同時にアンドロモンに飛びかかっていったが、アンドロモンはまるで虫でも追い払うかのように、いとも簡単に巨体のグレイモン達を投げ飛ばしてしまった。

大輔達は、何も知らなかった。

大きなパソコンのようなスクリーンを見かけたから、光子郎に早く知らせたくて、元来た道に戻っていたのだが、途中で遊びに興じてしまったために、何処から来たのか分からなくなってしまった。

あっちだっけ、こっちだっけ、どっちだっけ、つてうろろうしている間に出口らしき扉を見つけ、開いてしまった。

外に出れたことは出れたのだが、中に入ってきた時とは周りの様子が違っていた。

街の入り口にほど近いところだったと記憶している、少なくとも左右を壁に囲まれてはいなかった。

でも外に出れたのなら、外から最初のところに戻った方がいいんじゃない？という賢の提案を採用し、大輔達はそのまま行くことにした。

それがいけなかったのか、それとも乱暴な幸運だったのか。

轟音と共にオレンジと蒼い何かが空から降ってきて、大輔達はビツクリしてその場で硬直してしまった。

一瞬の砂煙が晴れて、そこから現れたのは尊敬している先輩達のパートナー。

地面に伏して身体を小刻みに震わせながら呻いている。

え、え、って大輔達は何が起こったのか分からなくて、ただその場に立ちつくしていた。

ドシン、と重たい何か降ってくる。

今度は何だ、って狼狽していると、上から聞き慣れた声が、大輔達を呼んだので反射的に上を向く。

太一達がいた。尊敬している先輩達の姿を見て、ほっと胸を撫で下ろしたのもつかの間、太一が顔を真っ青にさせて逃げろと声を張り上げた。

え、って思っていると、ヒカリが悲鳴を上げながら大輔にしがみ付いてきた。

先程降ってきた重たい何か。見たことがなかったが、恐らくデジモンだろう。

そのデジモンが右手を高速で回転させ、振り上げた。

『スパイラルソード!!』

合成したような声で叫びながら、デジモンは振り上げた右手を振り下ろした。

高速回転させた右手はまるで槍のように鋭くなり、その銚にエネルギーが集められ、三日月の刃のような衝撃波を作り出して大輔達に向かってきた。

危ない、ってブイモン達が大輔達を押し倒すように飛びかかって、間一髪避ける。

どおとおおおん、という轟音を響かせながら衝撃波が道を抉る。

あんなもの当たったら、一たまりもない。

ゴクリ、と大輔達は抉れた地面を見ながら息を飲んだ。

「ガルルモン!!賢達を護ってくれ!!」

『分かった!!』

本当なら賢達の下に駆け付けて、引つ張って何処か安全なところに連れて行ってやりたい。

だがここから飛び降りるのは幾らなんでも危険すぎるし、何より戦闘の最中に飛び込むほど莫迦でもない治は、下にいるパートナーに小さな弟達を護ってくれるよう、声を張り上げることしか出来なかった。

ガルルモンは大輔達の前に、護るように立つ。

グレイモンが火球を口から放ったが、アンドロモンは片手で掻き消すように薙ぎ払ってしまった。

霧散する火球に怯まず、ガルルモンが蒼い炎を吐き出す。

今度は回し蹴りの要領で、炎を振り払った。

ならばとグレイモンがその大きな口を開けて、アンドロモンを噛み砕いてやろうとしたが、グレイモンの口をがっしりと掴み、背後から飛びかかってきたガルルモンに叩きつける。

このままでは、グレイモンもガルルモンもただ体力を消耗するだけだ。

そうなれば残る道は……。

テントモンが光子郎に話しかけたのは、そんな時だった。

先程巨大乾電池の中で行っていた、プログラムの解析。

“アレ”をやってくれと言い出した。

今なら分かる。“アレ”は、進化の前兆だったのだ。

身体中が熱くなったのは、膨大なエネルギーが急激に身体に流れ込んできて、キャパシティオーバーしてしまったのだ。

進化に必要なエネルギーは十分だったが、進化に必要な条件が十分だったためにテントモンは進化しなかった、できなかつたのである。

だが、今なら……。

光子郎はパソコンを立ち上げ、先程のプログラムを打ち込んだ。
白い機械が光りを放つ。

『テントモン、進化!!——カブテリモン!!』

青い身体に、兜のような被り物、そして4枚の翅。
蟲を彷彿させるその四肢は、大きく空に飛翔した。

すぐ傍に最年少の3人と、まだ進化できない3体のデジモンがいる
せいで上手く戦えず、一方的に蹂躪されているグレイモンとガルルモ
ンの下へと飛んだカブテリモンは、アンドロモンを叩きつけようと体
当たりをした。

避けられたが、硬い兜の頭部のお陰でダメージを負わずに済み、素
早く飛び上がる。

再び体当たりをした。今度は避けずに、受け止めたアンドロモン
だったが、ビギナーズラックのようなものが働いているのか、カブテ
リモンは押し負けなかった。

押し潰さんと上から圧力をかけ、アンドロモンの足が地面を抉る。
溜まらず受け流したアンドロモンは、背を向けて上空へ飛び立つカ
ブテリモンにミサイルを放った。

押しではいるが、決定打がなかなか掴めない。

何か、何か弱点はないだろうか。

突破口になるようなものは……。

剥き出しになっている右足に、青白い火花が散っているのを見逃さ
なかった光子郎は、カブテリモンに右足を狙うように指示する。

追ってきたミサイルを薙ぎ払い、カブテリモンは大きな電撃の塊と
なった弾を、アンドロモンの右足に向けて放った。

バチバチバチ!!

機械仕掛けのアンドロモンの右足を、電撃の塊が包み込む。

ぬるり、とアンドロモンの右足から黒い歯車が飛び出してきて、子
ども達の頭上で塵のように霧散した。

どうやらあれが、アンドロモンをおかしくしていたらしい。

取り囲んでいたグレイモンやガルルモンを見ても、攻撃して来なかった。

顔を見合わせた子ども達は、とりあえず最年少の3人の下へ行こうと下に降りる。

「ヒカリイ、大輔え！」

「賢！無事か!?」

「お兄ちゃんーん！」

降りて来た兄達に駆け寄り、抱きつくヒカリと賢。

泣きこそはしなかったものの、賢の表情は情けないものとなっていた。

怖かったな、ごめんな、もう大丈夫だからって治が苦笑しながら宥めていると、退化して戻ったアグモンとガブモンが、アンドロモンを伴ってやってきた。

「ガブモン、ありがとうな」

『どうってことないよ』

「サンキュー、アグモン！」

『えへへ。あのね、タイチ。アンドロモンが話があるんだって』

何だろう、と子ども達はすっかり大人しくなったアンドロモンに対する警戒心を解いて、話を聞く体勢に入る。

そして、アンドロモンの言葉に、子ども達は驚愕するのだった。

『君達は、 “選ばれし子ども達” だね?』

選ばれし子ども達

「なあ、賢が首から下げてるのって、ペンダントか？」

「これ？違うよ、これ時計なんだ」

「え？そうなの？」

「うん、懐中時計って言うんだって。ここ押すとね、蓋がパカって開くんだ」

『わあ！ホントだ』

『ねえ、トケイ？って何？』

「えっ、プロットモン時計知らないの？」

「時計って時間を教えてくれるもんだよ。今12時とか、5時とか」
『ジカンってなんだ？』

「……えーつと、あとでお兄ちゃんに説明してもらおうから、それでいい？」

『？うん、いいよー』

「……え、えーつと、賢くんの懐中時計、金ぴかで綺麗だね！」

「お、おう！蓋の鳥とか、すっげーな！」

「えへへ、でしょ？すっごく気に入ってるんだー。……でも」
「？」

「これ、何処で買ったのか全然覚えてないの。いつからあるんだっけってお母さんに聞いても、分かんないって言うんだよ」

「自分で買ったんじゃないの？」

「ううん、だって買った覚えもないもん。お兄ちゃんにも聞いてみただけど、知らないって……」

『ケンがもつと小さい頃とかは？小さい頃のことってあんまり覚えてないじゃん』

「それもないなあ。確かにちっちゃい時のことって記憶には残ってないけど、僕がちっちゃい頃はまだお兄ちゃんとお父さんと一緒に暮ら

してたし、その頃のお兄ちゃんは今の僕と同じ年だったから、お兄ちゃんが知らないのはおかしいもん」

「……私も」

『ヒカリ?』

「私も、そうなの。このゴグル。いつ買ったのか全然覚えてないの」「え? 太一さんとお揃いで買ったとかじゃないの?」

「ううん。違うみたい。いつ買ったのか思い出せなくて、私もお母さんに聞いたんだけど、いつだろうねって……おかしいなって思ったんだけど、でもどうしても捨てたりする気になれなくて……」

「ヒカリちゃんもなんだ。僕も、この懐中時計、ずっと持ってたなきゃって思ってた手放せないんだ」

「大輔くんのホイッスルもだよね?」

「……うん」

『……みんな、どうしてあるのか分からないけど、大切なもの持ってるの?』

『何かすつげー偶然だな』

「不思議だねー」

『ねー』

大きなコンピューターのスクリーンに映し出されたのは、海にポツンと浮かぶ孤島であった。

鋭角に聳え立っている山を中心に、四季が1つの場所に集められたように、色とりどりの光景を映し出している。

君達が今いるのはここだ、とアンドロモンは手のひらサイズほどある手元のパネルに手を乗せる。

地図がズームされて、外で見た工場が映し出された。

「……本当に島だったんだ」

丈が何処か呆然と呟いていた。

徐々に現実を受け入れつつあった丈であったが、やはり目の前で事実を突きつけられたことは、大変なショックであったようだ。

機械に巻き込まれた黒い歯車を取り除こうとしたら、その歯車に意識を乗っ取られたアンドロモンは、心をウイルスに犯され、攻撃的なデジモンに変貌してしまった。

本来なら争い事は好まない、機械型のデジモン達を取り仕切るようなボスの存在だったのに。

本当に申し訳ない、と正気を取り戻してからも隙あらば謝罪してくるアンドロモンを宥めつつ、太一はあの言葉の意味を聞く。

「なあ、選ばれし子ども、って何だ？俺達はその、選ばれし子ども、って奴なのか？」

それは、正気を取り戻したアンドロモンが、太一達に向かって言い放った言葉だった。

エラバレシコドモ？何それ？って首を傾げる子ども達を見て、驚愕の表情を浮かべたアンドロモンは、詳しい話をすると言って案内したのが、大輔達最年少組が見つけたこの管理室だ。

大きなコンピュータは、現実世界ではまずお目にかかれないもので、思った通り光子郎がだいぶ興奮していたが、今はその話ではないので、光子郎にはまず落ち着いてもらうとして。

『……デジモン達から何も聞いていないのか？』

『ほえ？』

『え？オレ達？』

『……なるほど、分かった』

キョトンとしているアグモン達を見て色々と察したらしいアンドロモンは、短く息を吐いた。

どうやら本来ならデジモン達から色々と教えてもらう手筈だったらしい。

ジトリ、と太一がアグモンを睨むと、え、えへ？と可愛らしく誤魔

化した。

「お前なあ〜！」

『そ、そう言われても〜！ねえ、みんな、何かあったっけ？』

『え、えーっと……？』

『な、何だったっけ……』

太一に詰め寄られたアグモンは、ガブモン達の方を振り向いたが、似たような反応だった。

これはダメだと悟った太一は、アンドロモンの方に向き直る。

『まずは、デジヴアイスを……』

「デジヴアイス？」

『ここに飛ばされた際に、白い機械がお前達を導いたはずだ。聖なるデバイス、それがデジヴアイスだ』

「これのこと？」

ショルダーバッグの持ち手につっかけてある白い機械を指差すミミ。

アンドロモンは頷いた。

『それを持って、みんなで円になりなさい。そしたらデジヴアイスを、中心に向けるんだ』

不思議に思いながらも、太一達は言われた通りに輪になって、白い機械……デジヴアイスを中心に向ける。

デジヴアイスの小さなディスプレイから、白い光が飛び出していた。

うわ、と驚いてひっくり返りそうになった子ども達だったが、何故か腕が空中に固定されたように動かない。

腕に力を入れていないにも関わらず、だ。

どうして、と思う前に、中心に集まった光が合流すると、どんどん大きくなって形を変えていく。

光を割って現れたのは、半透明の人間の男性だった。

「え!？」

「に、人間!？」

子ども達は驚いた。

ここにはデジモンしかいないとデジモン達は言っていたのに、治の推理でここは自分達がいたところではないと半ば諦めて現実を受け入れつつあったのに、目の前に現れたのは会いたいと願っていた人間だった。

年は20代後半から30代前半の青年に見える。

焦げ茶色のセミロングの髪を無造作に結んでおり、白いローブを羽織っていた。

《初めまして。デジタルワールドにようこそ、選ばれし子ども達。私の名はゲンナイ。このデジタルワールドの安定を望む者だ》

青年は、ゲンナイと名乗った。

《君達のそばにいるデジモン達だけでは、きつとさっぱり要領を得ないだろう。なのでデジヴァイスに記録として、保存しておいた。これは君達の世界でいう録画のようなものだから、私からの一方通行になることを許してほしい》

何だ、って子ども達はちよつとがっかりする。

せつかく人間に会えたのに、質問することも出来ずただ一方的に向かうの話を聞くだけだなんて。

だが次の言葉で、子ども達はさらに驚愕することになる。

《始めに言っておくが、私は人間でもデジモンでもない》

ゲンナイは、この世界の調和と平穩を望む、セキュリティシステムの末端だという。

この世界の1番偉い神様から指令を受けて、それを子ども達に伝える役割を担っているらしい。

《まず、この世界のことを教えよう。ここは先程も言ったが、デジタルワールドと言う名の、君達の世界とは別次元に存在する世界だ。所謂異世界という奴だ。だからここには君達のような人間は存在していない。人の姿をしたデジモンはいるがね》

「……治の仮説は正しかったってわけか……」

丈が眉を顰めながら呟いた。出来れば当たってほしくなかった仮説であったが、それでも治が早い段階でここは自分達の世界ではないと言ってくれたお陰で、だいぶ心構えは違ったので有難いと言えは有

難しいが。

《君達の世界にあるパソコンを介してくることが出来る、それがこの世界なんだ。君達とこの世界はとても密接に絡み合っていて、切っても切り離せない、まるで双子のような関係なんだよ。……君達の世界で、今何か異変は起きていないかい？》

にこやかだった表情が一変し、真剣なものとなった。

ゲンナイの最後の言葉に、心当たりがある子ども達の肩がピクリと一斉に動いた。

録画でしかないゲンナイの映像から目を離して、それぞれ隣にいる仲間と目配せをする。

ゲンナイの言う通り、今太一達の世界は異変だらけである。

乾燥地帯で洪水が起きたり、亜熱帯で雨が全く降らなかつたり、太一達がこの世界に来る直前は季節外れの雪が降った。

だがどうしてゲンナイがそれを知っているのだろうか。

録画のゲンナイは、子ども達が戸惑っている様子など知らず、そのまま話を続ける。

《……単刀直入に言おう》

本題に入る。

ゴクリ、と誰かの喉が鳴った。

《君達をここに呼んだのは、この世界を救ってもらうためだ》

シン、と空間が静まり返った。

《今、この世界は邪悪な意志の脅威にさらされている。我々も抵抗したのだが……所詮は戦闘能力が皆無に等しい、セキュリティシステムの末端だ。とても敵わなかつた……》

目を閉じ、俯くゲンナイの握った拳は、震えていた。

《この世界の光の守護者達も、力及ばず封じられてしまった。そこで我々は、この世界に伝わる言い伝えを実現させることにした》

曰く、世界が暗黒の力に覆われた時、別の世界から「選ばれし子ども達」がやってきて世界を救う、というものらしい。

本当か嘘かも分からない、眉唾物の言い伝え。

しかしそれに縋らなければならぬほど、ゲンナイ達はひつ迫していたのだ。

《何故自分達が、とみな思っているだろう。だが事態は深刻なのだ。何故ならこの世界の状況が君達の世界にも影響を及ぼしている。君達の世界の異変は、そのせいなのだ》

だからこそ、

《どうか、我々に力を貸してくれないか。こんな一方的なメッセージで頼むのは本当に心苦しいのだが……》

映像のゲンナイは、苦しそうな表情を浮かべながら頭を下げた。

子ども達は困惑する。

いきなりそんなこと言われたって、と誰もが表情で語っていた。

当たり前である、子ども達はいつも通りの日常を過ごそうとしていたのだ。

サマーキャンプに出掛けただけだったのだ。

3日間のキャンプを終えたら、みんなお家に帰って、夏休みをダラダラしたり宿題をしながら過ごしていく予定だったのだ。

それが、突然壊された。不思議な機械、デジヴァイスに導かれ、異世界へと飛ばされてしまった。

デジモンと名乗る不思議な知的生命体と、宛てもなくただ彷徨っていた矢先に聞かされたのは、この世界を救ってほしいという一方的なお願ひ事。

Yes 以外の選択肢なんて、あつてないようなものである、あんまりだこんなのは。

文句を言うことすら、今の子ども達には許されない。

このやるせない気持ち、何処に、誰に、ぶつけばいいのか。

……でも、はつきりとNoを突きつけることも、子ども達には出来なかった。

今世界中で起こっている異変が、デジタルワールドによる影響のせいで聞かされて、そんなの知らないと突っぱねるほど冷徹な子は、

ここにはいなかった。

ここに飛ばされてからずっとずっとついてきているデジモン達。やっと会えたって、ずっと待ってたって言って嬉しそうに縋ってきて、子ども達を護るのだと豪語している彼ら。

最初こそ警戒したものの、彼らの言葉にも態度にも嘘偽りはなく、ピンチになった時は本当に護ってくれた。

あんなに凄い力を持った彼らだ、自分達を手にかけるつもりなら、最初からそうしているはずである。

《デジモン達は、いわば君達の『武器』だ。何の力もない子ども達に戦えなんていうほど、我々も非道ではない。むしろこの世界の問題は、本来なら我々が解決しなければならぬのだ。だからこそ、我々も出来る限りのサポートをするつもりだ。デジモン達は、そのサポートの一環だと思ってくれ》

子ども達が返事をする事が出来ないのと同じように、映像のゲンナイは子ども達からの返事を受け取る事は出来ない。

話は、まだ続いていた。

《デジモンは本来、長い年月をかけて次の世代へと進化する。一度進化すれば余程のことがない限り前の世代に戻ることはない》

けれど、パートナーデジモン達は違う、と言う。

《この世界のエネルギーはデータや情報だ。デジモン達が進化するのに、必要不可欠なものだ。だが長い年月を経て強くなるデジモンを育てる余裕は、我々にはない。そこで君達を呼んだのだ。デジモンが進化するのに必要な力を、君達は持っている。デジヴァイスは、君達その力を増幅、制御し、そしてパートナー達に進化に必要なエネルギーとして与える役割を持っている。君達だけに与えられた、特別な力だ》

本来ならゆつくりと時間をかけて進化するデジモン達だが、邪悪な意志を振り払うために子ども達とそのパートナーに与えられた特権。

時間をかけずに進化を促すから、その反動で退化を引き起こしてしまうらしい。

ゲンナイのその台詞を聞いて、眉を顰めたのは治だけだった。

そしてそんな治に気づいたのは、両隣にいる太一と空だった。

《まずは、そのファイル島に巣食う邪悪な意志を祓ってほしい。ファイル島は総ての始まり、総ての命が生まれる場所と言われている。その島が陥落してしまつたら、世界は終わりだ》

半ば脅し文句のようにも聞こえる懇願に、子ども達は息を飲んだ。

《今、私がいるところからでは、君達と直接コンタクトを取ることが出来ないんだ。妨害されているらしい。君達が来る頃までに何とか妨害を退けることが出来ないか、出来る限りのことはするが、もしもそれが叶わなかったときのために、この映像を残しておいたんだ》

どうやら間に合わなかつたらしい。

もし間に合っていたら、太一達はもつと早い段階で覚悟を決められただろうし、ゲンナイに文句を言うことが出来ていたであろうに。

《ファイル島に巣食う邪悪な意志を振り払うことが出来たら、きつと君達と会いまみえることが出来ると思う。その時はアンドロモンがいる工場に来てくれ。そうしたらこんな一方的なメッセージなんかではなく、きちんと話をする事が出来るはずだ。私に言いたいことを総てぶつけてくれて構わない。罵倒される覚悟は出来ている》

何処か哀しそうに、でも気丈に振る舞うゲンナイ。

他の世界から助けを求めなければならぬほどに、切羽詰まっている状況なのだ。

子ども達は、何も言えなかつた。

ザザツ、と映像が一瞬乱れた。

《……もつと詳しく話してやりたいが、今私がこの映像を録画している場所も、そろそろ危ない。敵が近づいてきたようだ。だが君達をサポートするため、ザザツ、アイテムをアンドロモンに、ザーツ、きつと君達の役に立つ、ザーツ》

ノイズが酷くなってきた。声も少し焦っているように聞こえる。

色々と、もつと聞きたいことがあるのに、情報を一方的に与えられるだけなんて、拷問である。

光子郎が今にも声を張り上げそうなくらい、顔を真っ赤にしていた。

《……この世界を救えるのは、君達だけ、ザザッ、ピーッ、頼む、選ばれし、子ども、た、チ……》

ブツン……

映像は、ここで途切れた。

《コウシロウ、と言ったね。そのパソコンを貸しなさい。ゲンナイ様から預かった、便利な機能を君のパソコンにインストールしよう》

光子郎のパソコンが動くようになったのは、常時稼働しているこの工場内を賄っている巨大電池から漏れたエネルギーを、何らかの方法で受信したからだろう、というのがアンドロモンの見解だった。

だから恐らく、ここから離れてしまつたら再び停止してしまうだろう、とのこと。

これから先、光子郎のパソコンは必要不可欠なものとなるはずである。

光子郎は目に見えて喜び、誰にも触らせないようにしていたパソコンをあつさりとは差し出した。

相手は機械だ、太一と違ってパソコンを乱暴に扱ったりはしないだろう。

巨大なパソコンからコードを取り出し、光子郎のパソコンと繋ぐ。スクリーンから海に浮かんでいる孤島の映像が消え、代わりに見たことのない文字の羅列が次々と書き込まれていった。

そのスクリーンと同じ文字の羅列が、光子郎のパソコンにも映し出されている。

先程テントモンから教えてもらったデジ文字だ。

何て書いてあるのかなあ、と興味津々でスクリーンを覗き込む光子郎を、アンドロモンは微笑ましく見つめた。

作業はほんの数分ほどで終わってしまったので、子ども達がゲンナイのことを相談する時間はなかった。

コードを引き抜き、パソコンを光子郎に返す。

子ども達も、興味津々に光子郎の周りに集まった。

「ありがとうございますー！」

《追加した機能は先程も言った、ここから離れてもデジタルワールドの空気に漂っている微量なエネルギーをパソコンの電気に変換して使用できる機能だ。残量を気にせず使えるし、このメールアドレスも追加しておいたから、何かあつたら遠慮なくメールをしなさい。こちらも何か情報を掴んだらメールをするから》

はい、と光子郎は返事をした。

《それから、ゲンナイ様から預かったアイテムだ。デスクトップにアイコンがあるだろう?》

「えっと……あ、これですね? テント……?」

《このコードを》

そう言つてアンドロモンが差し出したのは、細いコードだった。

2つあるコネクトは、1つはパソコン、もう1つは何とデジヴァイスに繋げるらしい。

アンドロモンに促され、光子郎はコードを使つてパソコンとデジヴァイスを繋げる。

《デジヴァイスを何処か適当に……そこら辺でいい、そこに向けなさい。そしたらテントのアイコンをダブルクリックするんだ》

「分かりました」

キーボードの下にあるパッドの左側を、2回素早くクリックする。デジヴァイスのディスプレイから光が伸びた。

うわ、と子ども達は短い悲鳴を上げて、顔を庇つたりひっくり返つたりと三者三様の反応を見せる。

無機質な床に辿り着いた光の筋が、三角形の形になった。

筋が三角形に向かってデジヴァイスから飛び出して、光がすうっと消えていく。

あ！と最初に声を上げたのは、大輔だった。

「テントだ！」

『すっげー！』

太一達が止める間もなく、大輔とブイモンは群れから飛び出してテントに向かって走っていく。

待つてよ！って賢とパタモン、それからヒカリとプロットモンが駆け出した。

テントの縦の大きさは大人程、奥行きは外から見ると1人分ぐらいしかない。

役に立つ便利な道具、ってゲンナイは言っていたのに、これではみんなで寝れそうになさそうだった。

頭上に沢山の疑問符を浮かべながら、誘うようにまくり上げられている入り口に、まずは大輔が四つん這いになって中を覗き込む。

「……………う、おおおおおおおおお！」

『うわ、ダイスケ！』

「え、え？何、なに？」

「どっ、どうしたの大輔くん!？」

中を覗き込んだ途端、雄叫びを上げた大輔に、傍にいた賢達だけでなく、その様子を遠巻きに見守っていた太一達もびくーって肩を震わせる。

「すげーすげー！ブイモン、ほら、来いよ！」

『えっ!?ちよ、待つてダイスケ！』

興奮した大輔は、心配そうに見守っている先輩達や友人達のことなどすっかり忘れて、相棒を呼びながらテントの中へ入ってしまった。

ブイモンは迷わず大輔のすぐ後を追って、賢とヒカリは顔を見合わせ一瞬悩んだ様子を見せながらも、ブイモンが入った後に、それからパタモンとプロットモンも慌ててテントの中へ、次々と入っていく。

「わああっ、何これ!!」

『すっごいねー!』

「広ーい！」

『何これ、どうなってんの?』

警戒心を全く抱かない最年少とそのパートナーデジモンは、躊躇なくテントの中に入って、感動の声を上げている。

止める間もなく、あつと言う間の出来事を見守っているしかなかった太一達だったが、どうやら危険はなさそうだと判断して、テントに近付いていく。

リーダーの頭角を見せ始めている太一が、まずはテントに顔を突っ込んだ。

「……は?」

「おい、どうした太一?」

入り口に顔を突っ込んだ体勢で硬直してしまった太一に、治が声をかけた。

何も答えずにそのまますると中へ吸い込まれるように入ってしまったので、みんな顔を見合わせた後、次々中に入る。

「……何これ?」

「きゃあああつ、すごいー!」

空が唖然と眩き、ミミは感嘆の言葉を漏らした。

テントの中は、外見とは裏腹に広々とした空間になっていた。

外見は人が1人入るのがやっとと言った感じなのに、中は子ども達とデジモン達が全員入ってもまだ余裕そうだった。

それだけではない。

真ん中に簡易だが調理ができる暖炉が置いてあり、その下にはふわふわのカーペットが敷かれていた。

テントの縁に沿ってぐるりと置かれていたのは、子ども達念願のベッドだった。

初日の夜は運よく路面電車を見つけて、そこを寝床にすることができた。

アクシデントにより、深く眠ることが出来ずに結局そこら辺で野宿することになってしまったが。

路面電車を見つけたのは、殆どラッキーのようなものだ。

次に寝るところにも都合よくベッドの代わりになるようなものが

あるとは限らないし、だからと言って寝る度にあの湖に戻るのは面倒くさい。

だからこのテントを貰えたのは、とてもありがたかった。

これから夜をどうやって過ごすか、雨風をどうやって凌ごうか、考えるだけで億劫だったのだが、これならゆつくりと身体を休めそうだ。

あれ、と部屋を見渡していた大輔が、何かに気づいた。

「どうした、大輔？」

「太一さん、ベッド、6個しかないよ？」

言われて気づいた。ベッドの数を数えたら、6つしかなかった。

デジモン達はそれぞれのパートナーと一緒に寝れば良いとして、ベッドの数が圧倒的に足りない。

最年少3人とそのパートナーに1つのベッドを使わせたとしても、残りのベッドは5つ。

1人が見張りに出していれば全員使えるが、そもそも男女が同じ空間で寝るのも……と上級生が気まずそうに顔を見合わせていると、光子郎が思い出した。

アンドロモンがインストールしてくれたアイテムは、これだけではなかった。

テント1、と書かれたアイコンの他にテント2と3があるのだ。

もしかして、と光子郎は慌ててテントの外に出て、先程アンドロモンが教えてくれた手順を繰り返し、テント2と3のアイコンをそれぞれダブルクリックする。

テント1と形状が同じテントが出てきた。

「空さん、ミミさん、ヒカリさん、来てくださいー！」

中を覗き込んで確認した光子郎が、女子を呼ぶ。

呼ばれた女子達は最初に出したテントから出て、光子郎がひよつこりと顔を出しているテントに移動する。

そちらも似たような作りだったが、ベッドの数は3つだった。

どうやらゲンナイは男子と女子でテントを分けてくれていたらしい。

良かった、と胸を撫で下ろして、テント3を調べる。

「きゃああああああああつ!!うそっ!本当に!」

ミミが悲鳴を上げた。

無理もない、テント3はシャワールームだったのだ。

もう2日も身体を洗っていない。

女の子を体現しているミミにとっては、とても我慢ならない状況だった。

入りたい!と今にも服を脱ぎだしそうなミミを宥めて、まずは男子と女子それぞれのテントを確認しようということになった。

「俺とブイモン、ここー!」

『ここー!』

「あー!大輔くん、ずるい!じゃあ、僕とパタモンここー!」

『わーい、ふっかふかー!』

テントに入って目の前、奥にある2つのベッドに、大輔とブイモン、遅れて賢とパタモンが突撃していった。

ぼふん、と程よい硬さのクッションに身を投げ、きゃあきゃあとはしゃぐ最年少を尻目に、太一達はテントの中を隈なく調べる。

見れば見るほど不思議だった。

外からは人1人ぐらしか入れないほどの小さなテントでしかないのに、中は広々空間で、前にテレビを見た、モンゴルの移動民族の住居みたいだな、と治は思った。

「……ちゃんと寝られる場所が確保できれば、とは思っていたけれど、まさかここまでとはね」

「いいじゃん、雨風凌げるんだから、文句は言いつこなし!な?」

「いや、別に文句じゃないんだけど……」

上機嫌の太一が、治の肩を組んでニッコニコである。

あからさまだなあ、と治は苦笑した。

一方、女子のテントの方。

広さは男子のテントと同じぐらいだろうか。

ベッドの数が少ないせいで、使える空間は男子より広い。

それぞれのベッドの横にヒカリの肩ぐらいの高さの小さな引きダ
ンスがあつたので、ヒカリは恐る恐ると言った様子でダンスの引き出
しを引いた。

あ、と声を漏らした後、慌てて他のダンスの引き出しの中も見やる。
空さん！つてヒカリは興奮したように空を呼んだ。

「どうしたの、ヒカリちゃん？」

「ごっ、これ！あの、これ！見てください！」

興奮して上手く言葉を発せないようだ。

傍らにいるプロットモンが慌てている。

空はピヨモンと共にヒカリとプロットモンに近付き、ヒカリが指さ
している引き出しを覗き込んで……絶句した。

「……ああああああ!!うっそー！お着替えまである!!」

後からついてきたミミとパルモンも同じように引き出しの中を覗
き込んで、悲鳴を上げた。

そこには、空が今着ている服と全く同じ服が丁寧に畳まれて入っ
ていたのだ。

どうして、つて空は困惑である。

確かに2日も同じ服、同じ下着で、せめて洗濯したいとは思って
いた。

ゲンナイが子ども達へのサポートの一部として、寝床を用意して
くれたのは本当にありがたかったし、しかもシャワールームまでつけて
くれていた。

だから最悪、下着類はシャワーで簡単に洗って使い回してしまえば
いいか、つて思っていたのだが……。

まさかと思つて下の引き出しを開けると、ご丁寧に下着類が入っ
ていないか。

しかもパジャマまで！

「ゲンナイさん……」

空は困惑しながらゲンナイの名を呟いた。

映し出された映像のゲンナイは、間違いなく男性だった。

彼は人間ではないと言っていたが、見た目が立派な成人男性である

ために、女子の下着を彼が用意したのかと思うと、色々な葛藤が浮かんでくる。

しかもよくよく見れば、自分が普段身につけている下着とよく似ていた。

空の服が引き出しに入っていたことにより、ミミも最後のタンスの引き出しを開けて、自分の服があることを喜んでいるが、彼女はどうかやら気づいていないらしい。

ヒカリもまた然り。

……知らぬが仏、黙っていよう、と空は葛藤と共に引き出しを閉じた。

男子にも聞けば、やはり着替えが用意されていたらしい。

これからの冒険が少し楽になりそうだと男子は単純に喜んでいった。

先程ちらりと過ぎった疑惑は無視しようと、空は曖昧に微笑む。

「……でも、着た奴はどうするの？タンスに入れておけばいいのかな？」

「そしたら前に着た奴、そのまんまってこと？」

最年少の男子2人が至極当然の疑問を上級生達にぶつける。

あ、つて子ども達が一瞬硬直したが、アンドロモンが苦笑しながらまた光子郎に教えてくれた。

テントのデータをインストールしたのと同時に、データ化されたデジモン——メカノリモンとガードロモンと言っらしい——も一緒にインストールしてくれたらしい。

何故？と問えば、光子郎のサポートのためだと言う。

自律プログラムが施されており、光子郎がパソコンで何かやっているのを察知すると、光子郎が何をやっているのか自己判断し、サポートをしてくれるそうだ。

更に、

《君達が着ている服も、コウシロウ、君のパソコンにインストールしておいた洗濯機のデータで洗濯できるから、安心しなさい》

「本当!？」

そのことに一番喜んだのは、ミミであった。

両手を上げてその場で小躍りするほどに喜んでいる。

他の子ども達も、これから先ずーつと同じ服を着て旅をする羽目にならずに済むことに、ほっと胸を撫で下ろしていた。

……治だけが、険しい表情でアンドロモンを見ていた。

「……よう、シケた面してんな」

「……太一」

とりあえず明日に備えて今日は休みなさい、とアンドロモンに言われたので、子ども達は早速貰ったばかりのテントを使うことにした。

本来サマーキャンプに来ていたのだから、どうせなら外で!と言い出したミミの提案に、反対する理由もなく、一行は屋上にテントを設置し、男子と女子で別れて眠りにつく。

ベッドはフレームがなく、クッションと毛布だけの簡易なものだったが、それでも地面何かよりは随分マシである。

これから先ずつとベッド無しの地べたで野宿生活を覚悟していただけに、この支援はとても有難い。

2日ぶりのシャワーを順番に浴びて、自分達が普段使っているのと似たようなパジャマを着こんで、それぞれのベッドに潜り込んだ。

デジモン達は初めてのベッドに警戒した様子ではあったが、子ども達が躊躇なくベッドに寝転がるのを見て、遠慮なく布団に入った。

ふかふかで気持ちいい、とデジモン達はすっかりベッドを気に入ったようで、ベッドに入ってから数秒程で寝入ってしまった。

子ども達も、2日ぶりのベッドで嬉しくて興奮しきっていたが、その内ベッドの心地よさに誘われて、すーという寝息がテント内に静かに響いた。

ぐったりとクッションに身を任せ、明日に備えてその身体を休めている子ども達を尻目に、治はテントの外でぼんやりと座り込んでい

た。

その表情は、険しい。

何か考え込んでいるようで、組んだ両手の甲に口元を隠すように乗せて、じつと一点を見つめていた。

そんな治に気づかない親友の太一ではない。

ばさりとテントの入り口を覆っていた布が捲り上げられ、長考にしていた治が気付いて振り返ると、口元に笑みを浮かべて、テントの中から顔を覗かせている太一がいた。

意識が思考の海に沈んでいたために、いきなり呼びかけられた治はビクリと身体を大袈裟に震わせて硬直していたが、声をかけてきたのが太一だと知ってジト目で睨み付けた。

「まだ起きてたのか？」

「それはこっちの台詞だったの……何か気になることでもあったんだろ？」

よっこいせ、と親父臭い掛け声と共に、太一は治の隣に座り込んだ。

うん、まあ、と治は何処か歯切れ悪く返事をする。

「何だよ、言ってみろよ」

「果たしてお前に言っただけで半分も理解できるのかな？」

「言ったな、コノヤロー！」

悪戯っ子の笑みを浮かべる太一に、同じような笑みを浮かべて返す治。

ぼさぼさ気味の髪に両手を伸ばしてぐしゃぐしゃにしてやれば、やめろ！と笑いながら抗議された。

ひとしきり笑った後、2人同時に深い溜息を吐く。

一瞬の間。

「……で？マジで何考えてたんだよ」

見上げてても、工場の煙突から出て行く灰色の煙に遮られているせいで、夜空に散らばる星は見えない。

それでも太一は重心を後ろにやって、両手で上半身を支えながら空を見上げた。

治は、立てた右の膝に右の腕を乗せて、気だるげに構える。

「……ゲンナイさんが言っていたこと、お前覚えているか？」

「ゲンナイさんが？お前みたいに一字一句覚えてるわけじゃねーけど……この世界と俺達の世界は無関係じゃなくて、こっちの問題を解決しねーと帰れねー、ってことだろ？」

「まあ、ざっくり言うとならね。でも僕が引つかかっているのはそこじゃないんだ」

「あ？どういうことだ？」

「この世界、ひいては僕達の世界のためにデジモン達と一緒にこの世界を冒険するのは、全然構わないよ。そうしないといけなのなら、僕は喜んでやるよ。お前もだろ？」

「そりゃあ、な。頼まれたら嫌とは言えねえよ。俺らの世界にも影響があるってんなら、何もしねーわけにはいかねーって」

「うん、そうだよな。お前はそう言う奴だ。でもそれはどうでもいいんだ。ああ、どうでもいいってそう言う意味じゃないからな？えーとつまり、僕が言いたいのは、そこじゃないんだ。世界を救うことに関しては、僕も異論はない。そこじゃないんだ、僕が気になっているのは」

ふう、と溜息を吐いて、治は太一と同じ体勢をとり、空を見上げた。

「……ゲンナイさんが言うには、デジモン達が進化するために僕達の手が必要なんだろう？そしてこのデジヴァイスがその手助けをしてくれる……僕はそこが引つかかかってね」

「？どういうことだ？」

「引つかかったと言うより、言い方が気になった、と言った方がいいかな？ゲンナイさんの言い方、あれじゃまるで僕達は、デジモン達が進化するためのエネルギー源として呼んだみたいじゃないか」

「何だよ、要するに拗ねてたってことか？」

「おい、何でそうなるんだ！」

「違うのか？」

「……もう、それでいいよ」

後ろにしていた上半身を戻して、また右膝に腕を乗せる体勢を取った。

「僕達を体のいいエネルギー源として呼んだのかって思うと、ちよつとした不信感みたいなものはやっぱり抱いちゃうなーって……」

「お前はそう言うところあるよなー。難しく考えすぎだよ、もうちよつと気楽にいこうぜ?」

「お前は呑気すぎるんだ」

「いいんだよ、いいんだよ。俺はこれで。難しいことはぜーんぶお前が考えてくれんだろ?」

「……太一」

「ありがとうな、治。お前が難しいこと全部引き受けてくれるお陰で、俺は安心して突っ走れるよ」

「……突っ走りすぎて空に怒られるなよ?」

「その前にお前が止めてくれるんだろ?」

「いっつもお前の首根っこ掴んで止める僕の身にもなってくれ」

軽口を叩き合った後、一瞬間を置いて2人は声を出して笑った。

「はーあ……確かに難しく考えすぎかな、僕は」

「そーそー。まずは世界を救うことを考えようぜ!難しいことはゲンナイさんに逢ってから、ぶつけりやいいよ」

「だな。あの話ぶりだと、いずれゲンナイさんに逢えるみたいだし」

「それまでに質問したいこと、纏めとけよ。俺はよく分からねえから、お前に全部丸投げするわ」

「まーたそんなこと言って……だったら僕も面倒なことは全部お前に丸投げさせてもらおうかな」

「あん?面倒なことって……」

「そうだなあ?例えばみんなを引っ張るリーダーとか?」

「げえ、マジか」

「僕はリーダーには向いてないよ。なあ、サッカー部のキャプテン?」

「うるせー、サッカー部の副キャプテン」

「サッカー部の副キャプテンは空だろう?」

「じゃあ2人で副キャプテンってことで」

「おいおい、いいのかそれ?」

「俺が決めた!」

「それ職権乱用って言うんだぞ」

「はっはっは！……さあて、そろそろ寝ようぜ。明日も早いんだから
さ」

「ああ」

夜が、更けていく。

地下水道にて

浮上する意識の向こう側で、誰かの話し声がする。

真つ暗に閉ざされていた視界は、いつしかチカチカとした光がまわりつき、ヒカリは薄らと目を開けた。

程よいクツションが利いたベッドが気持ちよくて、身体はまだ起きたくないと訴えているが、引つ張り出された意識が再び沈むことはなく、寝転がったまま腕と足を引つ張るように伸ばした。

ゆつくりと上半身を起こす。とろとろとした目が何処を見ているわけでもなく、脳が覚醒するまで視線を落としていた。

「おはよう、ヒカリちゃん」

プロットモンはまだ寝ている。

横から声をかけられたので、そちらを振り向くと、すでに支度を終えて着替えている空がいた。

おはようございます、と寝起きの籠った声で返せば、空はクスクスと笑った。

「……もしかして、寝坊しちゃいました?」

「そんなことないわ。太陽が昇り始めた頃だもの。男子達なんかまだ寝てるわよ」

「でも支度とかしないといけないから、ヒカリちゃんも早く着替えた方がいいわよー。女の子は準備に時間がかかるんだから」

ミミもすでに起きていたようで、着替えてドレッサーの前に座っていた。

昨日ゲンナイと名乗る、人間でもデジモンでもない不思議な男性がくれたテントで、ヒカリ達は一夜を過ごした。

これから先ずつと星空の下で野宿生活を覚悟していた子ども達は、思わぬ贈り物に両手を挙げて喜んだ。

人間が生きていく上で必要な衣食住の衣と住を提供してもらったのだ、これからの旅も少しはマシになるはずである。

惜しむらくは、食の提供がなかったことだろうか。

まあ、これに関してはデジモン達に頼れば、食いつぱぐれることはないだろうけど。

テントには簡単だが調理器具もあるし、治は家の事情で台所を任されているから、材料さえあれば何とかなる、と豪語してくれたので、こちらも一旦隅へ置いておくことにして。

ようやくと覚醒した脳みそに、ヒカリはもう一度伸びをしてベッドから降りた。

プロットモンはまだ寝こけている。

パジャマを脱ぎ、ゲンナイさんが用意してくれた、ヒカリがこの世界に来た際に着ていたものと全く同じ、真新しい服に袖を通す。

はい、つて空から渡されたタオルを持って、男の子と女の子それぞれに宛がわれたテントの他にある、シャワー用のテントに向かった。シャワー用のテントにはシャワーだけでなく、洗面台とトイレもついている。

不思議だ、と治と光子郎は首を捻っていた。

何処か水源があるわけでもなく、水道から水を引いているわけでもないのに、どうして水が出てくるのか。

昨日光子郎が自力で発見した理論に基づけば、恐らくシャワーという情報やデータが形として実体化しているのだろう。

シャワーは水を流すもの。だから水源がいらないのだ、きっと、たぶん。

珍しく自信なさげな治だったが、太一のへーやっぱお前すごいなーって言葉で苦笑しながらも立ち直ったので、よしとしよう。

本当なら洗顔用ソープもあればよかったのに、というのはミミの愚痴である。

小学4年生ながらに、お洒落に余念がないミミは、お肌のお手入れだって気を使っていた。

可愛いもの、綺麗なものが大好きな母の影響だろう。

母は昔からフリルやリボンがいったいついたお洋服を着るのが好きだったし、娘のミミに着せるのも好きだった。

元から可愛いミミだが、母はいつも「可愛いも綺麗も努力して手に入れるものよ」と口酸っぱくしてミミに言い聞かせていた。

今が可愛いからってそこに胡坐をかいていると、いつか努力で可愛いを手に入れた人に追い抜かされる。

手入れを怠れば、あつという間に劣化する。

だからちゃんとお手入れはしなきゃだめよ、ってお母さんはミミの髪を梳かしてやりながら、口癖のように言っていた。

「あー！ヒカリちゃん、待って待って！」

「ほえ？」

顔を洗ってテントに戻ってきたヒカリは、ミミが使っていたドレッサーの前に立つと、空よりも短い焦げ茶色の髪の毛を手櫛で軽く整える。

後ろの方は見えないけれど、まあいいかあつて妥協してドレッサーから離れようとしたら、ミミが悲鳴にも似た叫び声をあげながらヒカリの腕を掴み、ドレッサーの前に座らせた。

「もう！ダメじゃない、ヒカリちゃん！手櫛だけで済ませちゃうなんて！女の子でしょ！ほら、お姉さんがやったげるから、座ってて！」

「ええっ、い、いいですよ、私の髪、短いし……」

「短いからって整えなくていい言い訳にはならないの！」

いいから座る！と有無を言わさないミミの剣幕に、ヒカリは従うしかなかった。

短く切られた髪は、少しだけ濡れている。

恐らく顔を洗った際に水を少し撫でつけたのだろう。

何てこと、とヒカリの頭に触れたミミの手がわなわなと震えた。

と言うか、

「あー！ヒカリちゃん、昨日ちゃんと髪の毛乾かさないうで寝たでしようー！」

「う……は、はい……」

「髪の毛ごわごわになっちゃってるじゃない！ダメよ、ちゃんと乾か

さないと！」

残念ながらゲンナイさんが用意してくれたテントに、整髪剤のようなものはない。

必要最低限の装備しかなかった。

シャンプーやリンス、コンディショナー、ボディーソープやハンドソープ、バスタオル、ハンドタオルは子ども達とデジモンの分だけあったのに、シャワー後のヘアケアやスキンケアの類はなかった。

もしゲンナイに逢う機会があったら、それらも全部用意してもらわなきゃ、ってミミはぷりぷりしている。

しようがない、ブラシとドライヤーで今は我慢しよう。

口をとがらせながらミミはヒカリの髪をブローする。

ゆっくり、ゆっくり、時間をかけて丁寧に。

ロールブラシを上手く動かしながら、ドライヤーの温かい風を当て、ヒカリの短い髪をお手入れした。

しばらくして。

「……よし、できたー！」

会心のでき！とミミはドライヤーとブラシをドレッサーに置いて、ふうと満足げにため息を吐きながら額を拭った。

傍から見ると全く変わっているように見えなかったが、触ってみれば分かる。

動き回るのに邪魔で、煩わしいからという理由で短く切られて、ちよつとボサついていたはずのヒカリの髪は、お母さん行きつけの美容室に行った後みたいにサラサラだった。

ドレッサーに身を乗り出すように、鏡に映っている自分自身を見つめる。

否、正確には生まれ変わった己の髪を。

髪を撫でる手が止まらない。サラサラの髪なんて、プロの人にしかできないと思っていたのに。

ヒカリの目がキラキラと輝いていた。

「す、すごい！ヒカリの髪、サラサラになっちゃった！」

「ふっふーん！でしょ、でしょ？ちゃんとお手入れすれば、短くたってサラサラにできるんだから！ヒカリちゃん、今日からお風呂に入った後はちゃんとドライヤーで髪を乾かすのよ？短いからすぐ乾く、って面倒くさがっちゃうダメ！太一さんの髪みたいに爆発しちゃうわよ！」

「ええっ！そ、それはヤダツ！ちゃんと乾かします！」

「ん、よろしい！さあて、次は空さんよ！」

思わぬ遊撃を食らって、空はぎよつと目を見開いた。

「ちよ、ちよつと待って！アタシは別にいいわよ！」

「だあめ！空さんの髪も外にびよんびよん跳ねまくってるじゃない！大丈夫ですよー、ちゃんとして整えてあげますからー」

「待って！その手つき何か危ない！こらっ、ミミちゃん！」

うふふふふふふ、と目が全く笑っていない笑顔を浮かべながら、両手をわきわきさせるミミはかなり怪しい。

何やら危機感を覚えた空は、逃走態勢をとっている。

じりじり、とミミがにじり寄ればその分だけ空は後ずさった。

『……………何してるの？』

「……………おはよう、プロットモン」

らしくなく、ぎゃあぎゃあど騒ぐ女子2人の喧騒に起こされたパートナー達は、ギリギリギリと両手を組み合って拮抗している空とミミを見て、首を傾げるのだった。

デジヴァイスという白い機械は、デジタルとデバイスを掛け合わせた造語らしい。

デバイスとは英語で「装置」という意味で、ITにおけるデバイスとはコンピュータに接続して使うあらゆるハードウェアのことだ。

分かりやすく例えるならキーボードもマウスもデバイスの一種で、

パソコンに内蔵されている、または接続して使用される装置は総称してデバイスと呼ばれる。

特定の機能を持つ電子部品・機器・周辺機器のことを指して使われる単語なのだが、デジヴァイスの主な機能として子ども達が把握しているのは、子ども達が何らかの危機に陥った際に爆発的なエネルギーをデジモン達に送り込んで、次の世代へと進化させるということだった。

今のところ、その他の機能は判明していないし、別世界とは言え生き物の姿形だけでなく能力までも急激に引き上げてしまうような、オーパーツにも近い機械を分解してしまうほど、治も光子郎も莫迦ではなかった。

何処を見渡しても接合部やネジ等で止められた部分がない。

感触も、子ども達がよく知っているプラスチックや合成樹脂の類ではない。

もちろん、石とか宝石系のものでもない。

とにかく今まで見たことも触ったこともないような、恐らくこの世界の素材で作られたものだ。

下手にいじくりまわして故障なんてことになったらシャレにならない。

アンドロモンでも、デジヴァイスの直し方は分からないそうだ。

物をぞんざいに扱ってぶっ壊す天才の筆頭である太一と大輔は、治と丈に口酸っぱく言い含められた。

分かりました、つていい子の返事をする大輔とは対極的に、太一は分かっているよ、と若干拗ねている。

それでも調べられることはあるはずだ、と好奇心を抑えきれなかった光子郎が、アンドロモンからもらったケーブルで自分のパソコンと接続して慎重に調べまくったところ、幾つかプロテクトされたプログラムを見つけた。

進化に関わるプログラムかもしれないので、それには手を出さずに他に何かないかと躍起になっていたところ、とあるデジ文字が光子郎

のパソコンのディスプレイに浮かび上がった。

テントモンに読んでもらうと、ユーザー名という文字と光子郎の名前が書かれているそうだった。

「恐らく、皆さんのデジヴァイスもそれぞれの名前がユーザー名として登録されていると思います。多分ですけど、ユーザー名と登録されている以上、それぞれのデジヴァイスはみなさんにしか使えないのでしよう。だから賢くん、申し訳ないけど、たぶんテントモンを進化させた時のようには出来ないと思うんだ」

「ごめんね、と申し訳なさそうに言えば、そっかーって賢は残念そうだったが、大丈夫って首を振った。

テントモンが進化をした時の話を聞いていた賢は、パタモンもテントモンと同じように光子郎のパソコンで進化させてあげられないのか、尋ねたのだ。

そのことに関する返答が、上記のものである。

「僕達は僕達で頑張るから！ね、パタモン！」

『うん！僕だってやればできるもんね！』

えっへん、てパタモンは胸を張るけれど、賢の頭の上でくつろぎながら言われても、説得力が感じられない。

優しい光子郎は苦笑するだけで、それを指摘することはなかった。

さて、子ども達は今下水道を歩いている真っ最中である。

濁った水の通り道を中心に、子ども達とデジモン達が左右に分かれながら、薄暗い地下水道を進んでいた。

アンドロモンが守護していた工場から繋がっていたもので、広大な砂漠を横切るのは幾ら何でも危険だから、下水道を通って行った方がいいとアドバイスされたのである。

下水道って暗くてジメジメしてて臭いが酷そう、と困惑していた女子3人だったが、砂漠で遭難するよりはいいだろ、という多数決にもならない男子6人の主張により、降りることになった。

躊躇なく飛び込む太一とその後が続くと大輔、大輔くんが行くのならば賢が後を追い、弟が飛びこんだことによつて慌てる治、砂漠を歩

くよりはマシと光子郎と丈、そしてデジモン達が入って、安全を確かめる。

確かにちよつとジメツとしているし薄暗いのだが、意外なことに臭いはそれほど気にならなかった。

下水道特有の、鼻にツンとつく生ごみの臭いが、殆どしないのだ。

これなら大丈夫だろう、ということとで女子3人とそのパートナーも遅れて地下水道に潜り込んだのだった。

カンカンカン、と手摺を降りて、子ども1人ほどの大きな丸い排水溝から、広い地下水道へと出る。

ファイル島で起こっている異変を全て解決したら、再び工場に来てくれ、とゲンナイに言われているので、アンドロモンとはしばしの別れだ。

「コーラが飲みたい」

どれぐらいの時間が経つただろうか。

誰かがぼつりと言った。

その声と言葉を聞いて、みな一斉に立ち止まる。

等間隔で見つかる排水溝からちよろちよろとした水が流れていくのを横目に、子ども達は地下水道を真つすぐ突き進む。

行けども行けども何の変化もない地下水道で、誰が提案したかしりとりをする事になった。

しりとりつてなあに、つていうデジモン達の疑問から、まずしりとのルールを教えてやるところから始まり、子ども達チームとデジモンチームで分かれてしりとりをしながら暇を潰すこと、約40分。

そんな時だった。

「……ミミちゃん、何も今それ言わなくても」

「だって飲みたいんだもん！」

空が困ったような表情を浮かべてミミを宥めるが、ミミは頬を膨らませて自分は悪くないと言いたげである。

アンドロモンによりゲンナイから衣食住の衣と住を提供されたお陰で、これからの冒険はだいぶ楽なものになるだろう。

固い地面に寝っ転がって碌に睡眠をとれず、翌朝寝不足気味の頭と足取りでフラフラにならずに済んだのである。

その日の汚れを落としてくれるシャワーや排出物を流してくれるトイレ、自分達のお家で使っているのと変わらないパジャマ、ふっかふかのベッド、そして自分たちが着ているものと同じ替えの洋服と下着。

最初こそ訝しんでいた子ども達だったが、このことによってゲンナイに対する信頼も株も急上昇中である。

そりやいきなり連れてこられて世界を救ってくれなんて、一方的にお願いはされたけども、サポートはしてくれとのことなので、貰えるものは貰つとけ精神でこれからも行こう、と子ども達の心は1つであつた。

しかし飲食に関するサポートは間に合わなかつたか、それともそこまでの余裕が作れなかつたのか、受け取ることはできなかつた。

初日は運よく湖で魚を釣って果物と一緒に口にすることができたが、次もそうできるとは限らない。

魚や果物はともかく、肉は既に加工されたものを調理したことしかないから、食べるとしたらまずは生き物を仕留めるところから始めなければならぬ。

そのことを想像して、治は自滅しかけたのだが彼はすっかり忘れているようだ。

この世界にはデジモンしかいないのである。

例え治に解体スキルがあろうとも、デジモンの肉が食べられるのかも分からないから迂闊に手が出せない。

そもそもの大前提が子ども達の世界とこの世界で違うのだが、今はそんなこと知る由もなかつた。

閑話休題。

「こんなところにコーラなんかあるわけないじゃないですか」

「分かつてるわよ、そんなこと！」

光子郎が窺めると、キツと光子郎を睨みつけながら食って掛かるか

ら、光子郎は肩を竦める。

後ろの方を歩いていた最年少は、きよとんとしながら上級生達のやり取りを眺めていた。

「……でも口にしないと、爆発しそうだったんだもん」

「……気持ちは分かるよ、ミミちゃん」

しかしすぐさまシユン、となって項垂れる。

治が苦笑しながらミミの肩にそっと手を添えた。

ミミは思ったことは全て口にしないと気が済まない性格だ。

がーつと言うだけ言つてすつきりして、知らん顔をするのである。相手がどう思っているとか関係ない。

ただ心の中で思い浮かんだ言葉を全部口にして、溜め込まないようにしているだけなのである。

心の中で溜め込みがちにして、限界まで心の風船を膨らませてしまうと、ちよつとした刺激で簡単に破裂してしまうのだ。

そうならないように定期的にガス抜きをするのだが、ミミの心の風船はほんの一息膨らませただけでプシュツと空気が抜けてしまいうらしい。

膨らませすぎは危ないが、膨らむ前に空気が抜けていくのもどうなのか、と光子郎は頭を抱えた。

だがミミは特段、我儘を言っているのではない。

思ったことを口にはしているだけで、具体的にああしてこうしてあれいらないこれいらないと言っているわけではないのだ。

現にミミはコーラを飲みたい、とは言ったけれどコーラを持ってこいとは一言も言っていない。

誰かを顎で使つて、ないものを持ってこいなんて無茶を言うほど、ミミも鬼ではない。

「……だったら僕は焼き肉が食べたいなあ」

思わぬところから声が上がリ、みな視線がそちらに向けられる。

そう言ったのは、治だった。

あまりそういつたことを口にしない治が、珍しく自分の気持ちを吐

き出したのである。

太一も空も、目を真ん丸にして治を見やれば、苦笑していた。思ったことを口にするだけなら罰は当たらない、そう言いたげだった。

それを皮切りに、他の子ども達もやりたいことを各々口にする。

湯船にゆつくり浸かりたいとか、メル友とメールのやり取りがしたいとか、勉強がしたいとか、いつもなら何気ない日常を、非日常に放り込まれた子ども達は懐かしく思った。

「だったら僕はゲームしたい！まだクリアしてないゲームがあるから、帰ったらお兄ちゃんと一緒にやりたいなあ。ヒカリちゃんは？」
「私？私は……そうだなあ、本が読みたい。夏休み中にいっぱい本を読むって目標立てたから……」

「そっかー。僕も本好きだよ。冒険ものとか。ヒカリちゃんは？」

「ファンタジーが多いかな。私も魔法使ってみたいし、妖精さんにも会ってみたい！」

「ふふふ、ヒカリちゃんらしいね。大輔くんは？帰ったら何したい？」
それは、当たり前前のフリであった。

ヒカリちゃんにも聞いたのだから、大輔くんにも話を振るのは当然だった。

2人が知っている大輔なら、張り切って教えてくれるだろうと思っていた。

きつとたつくさんやりたいことがあるだろうなって、あれがしたいこれがしたいって欲張って、それで賢とヒカリが笑うのだ。

やりたいことありすぎだよって笑い合うのだ。
そう信じて、疑っていなかった。

しかし、

「……………」

大輔は、口を噤んだままだった。

目線を下に落として、きゅつと唇を結んで、何かを考えこんでいる

かのようにだった。

あれ？つて賢とヒカリは首を傾げる。

てつきりすぐにマシンガントークをかましてくれると思っていたのに、大輔は一言も発さないのである。

「……大輔くん？」

「……俺、は」

上級生達は、自分達のやりたいことで盛り上がっていて、最年少達の様子に気が付かない。

気が付いてくれたのは、最年少のパートナー達だけだった。

「……お姉ちゃんに会いたい」

この時、賢は強烈な違和感を覚えた。

ぽつりと落とされたように放たれた大輔の言葉は、傍から聞けば特に変わりのない言葉かもしれない。

大輔にはお姉ちゃんがいるというのは、昨日教えてもらったから、もしかしたらその話からお姉ちゃんが恋しくなってきたのかもしれない。

それで、お姉ちゃんに会いたいなんて言葉がつい口に出たのかもしれない。

でも……。

お姉ちゃんに会いたい、という切実な願いが漏れた言葉とは裏腹な、この怒っているような、悲しんでいるような表情は一体何なのだろうか。

賢は聡い子で、敏い子である。

賢い子どもである。

両親が離婚し、家族がバラバラで暮らしているという、それなりに特殊な家庭事情を抱えているせいなのか、人の顔色を異様に伺う子であった。

お友達とは滅多に喧嘩をしない、しても賢が先に折れて喧嘩に発展しないようにするのである。

お話をしている最中、何気ない会話の中でも、少しでもお友達が嫌な顔を見せると、賢はそれを察して話題をさりげなく変えてしまう。人はそれぞれ色々複雑な事情を抱えているものだから、賢だっただうしてお父さんがいないのっってお友達に聞かれるのは嫌だろう？っってお兄ちゃんにも言われているから、もしもお友達の様子がおかしいと気づいても、賢は深く踏み込んでいかないようにしている。「……………そ、っか」

だから、賢はすさまじい違和感を覚えながらも、それ以上大輔に踏み込むことができなかつた。

薄暗い地下水道は、暗闇に塗りつぶされており、数十メートル先が見えない。

しみりとした空気に包まれていた子ども達の耳に、水が弾けるような音が聞こえてきた。

その音と同時に、お腹を押すと可愛い音が鳴る赤ちゃんのおもちやのような音が、地下水道で反響している。

最初に気づいたのは、テントモンであった。

音を聞いた瞬間にギリとその身体を震わせて、ぎ、ぎ、ぎ、と錆びたロボットみたいにぎこちなく、音がする方向に顔を向ける。

他のデジモン達も、似たような反応であった。

まだ姿は見えない。

『ヌメモンだー！』

「ヌメモン？」

ガブモンが、音の正体を言い当てた。

治が、ガブモンの言い放った言葉を復唱すると、ゴマモンがとても嫌な表情を浮かべて、子ども達に説明してくれる。

ヌメモンとは、暗くてジメジメしたところに好んで住みつき、知性も教養も戦う力もなく、デジモン界の嫌われ者と呼ばれているらしい。

そして特出すべきは、“汚い”ことだという。

汚いというのはどういうことなのだろうか、と子ども達は首を傾げた。

暗くてジメジメした、こういうところに住んでいるからという直接的な意味でなのか、それとも知性も教養も戦う力もないから、汚い手を使って相手を追い詰める、という意味なのだろうか。

……考える間もなく、子ども達は数秒後にその答えを知ることとなる。

ヌメモンが水の上を走っているらしい音と鳴き声が、どんどん近づいてくる。

ヌメモンというデジモンがどんな姿をしているのか気になった子ども達は、その場でじつとしていて動かない。

デジモン達はというと、何故か及び腰で、顔を真っ青にさせてじりじりと後ずさっていた。

やがて、ヌメモンがその姿を現す。

子ども達の印象は、緑色のナメクジ、であった。

ぬめぬめと粘り気のある、スライムのような身体。

ぎよろりと大きな目は身体から離れるように飛び出しており、大輔はカタツムリの歌を思い出した。

カタツムリのアレは、目ではなくて角なのか槍なのか、お姉ちゃんとの談義をしたことがあったけれど、それは今は関係ない。

というよりも、そんなことを考えている場合ではない。

やっぱりヌメモンだ！とアグモンが引きつったような悲鳴を上げて、子ども達とデジモン達に逃げろと言ひ、駆け出した。

言われなくとも、とデジモン達は言われた通りにしたけれど、子ども達は訳が分からない。

反射的に走りだしたけれど、さつきデジモン達は、ヌメモンは弱いデジモンだと言っていたはずだし、子ども達から見てもヌメモンの外見はとても強そうには見えなかった。

アグモンがアグモンのままで戦っても余裕で勝てそうな相手なのに、どうしてデジモン達は顔を真っ青にしてあわあわ言いながら来た

道を戻っているのだろうか。

その答えは、すぐに出た。

べちよっ！

子ども達の背後から、何かが投げられてすぐ横の壁にぶちまけられるように当たる。

べつとりと壁に張り付いた「ソレ」はピンク色で、粘着質な固形物だった。

それが次々と子ども達とデジモン達に向かって投げられては、壁にべつちよりと張り付く。

つん、とした刺激臭は、何故か覚えがあった。

ピンク色の正体を理解してしまったミミが、いやああああああって悲鳴を上げる。

次々と沢山のウン……ゲフンゲフン排泄物が投げられ、飛び交う中、子ども達は当たらないように必死で逃げた。

ゲンナイさんがくれたシャワー付きテントがあると言えど、排泄物まみれになるのはごめんである。

どれぐらい走ったか。無我夢中で走り続けていた賢は、気づけなかった。

最後尾を歩いていた関係で、先頭を走る羽目になっていた賢は、飛び交う排泄物を見たくなくて目を瞑りながら走っていた。

そのすぐ後ろを走っていた大輔は、後ろから飛んでくる排泄物から逃げるのに必死で、賢の背中を通り越した前しか見ていなかった。

更にその後ろにいるヒカリは、頭を守るように抱えながら、賢と同じように目を閉じていた。

だから気づかなかった。

ぽつかりと開いた排水溝を通り過ぎて、最年少3人とそのパートナー達はとにかく迫りくる危機から逃れようと必死だった。

「っ、みんなーっっちー！」

最年少3人の後ろを走っていたミミが、排水溝に気づいて飛び込んでいく。

後に続いた他の子ども達とデジモン達もミミの後を追っていたが、誰一人として排水溝を通り過ぎてしまった最年少達に気が付かなかった。

『……あ、れ?』

どのぐらい走っていただろうか。

先頭を走っていた賢だったが、スポーツは体育の授業でぐらいしかやったことがないせいで、走るスピードがどんどん落ちていく。

すぐ後ろにいる大輔が、早く走れって急かしながら賢の背中をぐいぐい押すけれども、無理なものは無理だ。

体力も限界、足も纏れ始めてうまく走れない。

もうダメだ、って賢はどうとう膝をついてしまった。

追いついた大輔とヒカリが賢に立ってと促すけれど、息が切れて苦しい賢は両手を地面について大きく呼吸をする。

川を挟んで向こうの道を走っていたパートナー達が、川をぴよんと飛び越えて大輔達の下へと駆け付け、彼らを守るように立ちはだかり、代表してパタモンが声を上げた。

それは、戦闘開始の合図ではなく、疑問符を含んだ言葉だった。

そこでようやく、3人と3匹は気づいた。

後ろを走っていたはずの上級生とそのパートナー達どころか、追っかけてきていたヌメモンの、姿形が何処にもないことに。

『……お兄ちゃん? 丈さん?』

「太一さん……? 光子郎さん……?」

「空さん、ミミさん……何で……?」

呆然としながら上級生達の名を口にしているが、虚しく反響するだけで誰からの返事もない。

『えっ、えっ? ガブモオーン! ゴマモオーン!』

『アグモン! テントモン! 返事してえ!』

『ピ、ピヨモン! パルモオン! 何処お!?』

パタモン達も混乱しながらも、上級生のパートナー達を呼んだが、シーンとした静寂が辺りを支配していた。

さあ、とヒカリの顔が真っ青に染まる。

「どっ、どうしよう！お兄ちゃん達とはぐれちゃった！」

『ヒ、ヒカリ！落ち着いて！大丈夫よ、アタシ達がついてるから！』

「そっ、そうだよ、ヒカリちゃん！はぐれちゃったなら、探そうぜ！なっ、ブイモン!?!」

『お、おう！』

パニックに陥りかけるヒカ리를、プロットモンと大輔とブイモンが3人がかりで宥める。

無理もない、ヒカリはお兄ちゃんである太一が大好きで、いつもべったりだ。

こつちの世界に来てからは、最年少の小学2年生ということで一纏めに括られて、後ろの方に遠ざけられちゃっているし、大輔くんと賢くんとそのパートナー達とお喋りが楽しくて、そつちの方に集中してしまっているけれど、基本的にはお兄ちゃん子だ。

お兄ちゃんが視界に映っているから、安心して大輔と賢と一緒に後ろの方に甘んじていたのだ。

それなのに、太一が何処にも見当たらない。

今にも泣きそうなヒカリと、それに焦って宥めようとしている大輔とブイモンとプロットモンを尻目に、体力と息切れからようやく回復した賢が、大輔達を見つめた後、ぐるりと辺りを見渡し、何かを考えこむような体勢をとる。

数秒ほどして。

「大輔くん、ヒカリちゃん」

大輔達に宥めてもらったお陰で少し落ち着いたヒカ리는、それでも顔色が良くない。

だからヒカ리를安心させるために、賢は先ほど数秒で考えた自分の意見を口にした。

「えつとね、ちよつと周りを見てほしいんだけど……僕達がヌメモンに追いかけられてた時、えつと……ピンク色のウンチ、投げられたよ

ね？」

排泄物を口にするとき賢が若干口ごもったが、それは置いておこう。

うん、と2人と3体は頷く。

「周りの壁とか川とかにいっぱいいたり、落ちたりしたよね？でも僕達の周りの壁にはウンチがついてない。だからきつとヌメモンは、僕達じゃなくて、お兄ちゃん達の方を追いかけたんだ」

「……つまり？」

「僕達があそこまで歩いていた時まで、何個か大きな穴があったでしょ？多分お兄ちゃん達はその大きな穴に逃げてったんだ。でも僕達はそれに気づかずに通り過ぎちゃって、だからお兄ちゃん達とはぐれちゃったんだと思う」

賢が言いたいのはこうだ。

自分達の周りにヌメモンが投げた排泄物がないのは、途中にあった排水溝へ逃げ込んだ太一達上級生の姿しか見えておらず、賢達を追いかけてなかったからだ。

上級生達を追ったヌメモンは、薄暗い地下水道の暗闇の中へ溶けてしまった大輔達に気づくことなく、太一達を追っていった。

つまり、ヌメモンが投げつけてべつちやりと天井やら壁やらに張り付いた排泄物が、途切れている辺りまで戻ればいいのだ。

『そっかー！ケン、頭いいね！』

パタモンが目をキラキラさせながら、賢を見やる。

えへへ、って賢は照れ臭そうに笑った。

賢の言葉によって、だんだんと落ち着いて、冷静さを取り戻した大輔とヒカリは、そっかあって思った。

はぐれちゃったのだから、はぐれた場所まで戻ればいいのだ。

そう思ったら、いてもたってもいられない。

大輔達は急いで来た道に戻った。

またヌメモン達に追いかけてはたまらない。

追い払うのは簡単だろうが、飛び交う排泄物の中を突っ込む勇気までは持ち合わせていないし、パタモンとプロットモンは遠距離の技を

持っているからまだしも、ブイモンは格闘技中心の接近戦タイプだ。おまけに誰かに触られるのがダメという弱点付き。そうでなくともヌメモンに近づいてパンチを食らわせるのは断固拒否するだろうけども。

ほどなくして、見るのも憚られるような光景が目飛び込んでくる。

天井から壁から床から至るところに張り付いている、ピンク色の排泄物。

特有の臭いが辺りに充満しており、3人と3体の顔は真っ青で、歪んでいた。

こんな悍ましい臭いが充満しては、太一達の匂いを追って探すことなどできやしない。

幸い太一達が逃げ込んだであろう横穴がすぐそばにあったので、みんな鼻を摘まんで、ピンクの排泄物を避けながら排水溝へ入り込んだ。

そこも天井や地面がピンク色の排泄物塗れになっており、天井に張り付いている排泄物が今にも落ちそうになっているから、急いで通り過ぎる。

直後に背後からべちよりと言う音がしたけれども、聞こえないふり。

やがて整備されていた排水溝はいつの間にか岩肌のトンネルに様変わりしており、曲がりくねった薄暗い道の向こうから光の筋が手を差し伸べてきた。

排泄物はまだあちこちに張り付いている。

「…………ふはあー」

数秒しないうちに見えてきた出口に、大輔達の足が早まる。

ぴよん、と飛び出してさわやかな風を感じたと同時に、大輔は鼻と口を押えていた手を放して、抑えていた息を全て吐き出した。

新鮮な空気を、深呼吸して肺に送り込む。
が……。

『……外もウンチ塗れだね』

『……タイチ達も見当たらないし、外まで追いかけられたのかしら』

『……この天気だもんねえ』

洞窟の外は、岩肌の山だった。

少し小高い位置にあるようで、2メートルほど下に枯れかけた草原が見える。

そして洞窟の外にも、たくさんのピンク色が落ちていた。

それを見て、それから空を見上げたブイモン達のつぶやきに、賢がはてなと首を傾げる。

「どういうこと?」

『見て、ケン。空、太陽が隠れちゃってるでしょ?』

『ヌメモン達は太陽の光が苦手なんだけどね、たぶんタイチ達が外に出た時も曇ってたんでしようねえ』

『太陽の光で撃退できなくて、タイチ達逃げるしかなかったのかなあ。ウンチがあつちに続いているし、しょうがないから後追おう?』

ブイモンが指さした先に、点々とピンク色の排泄物が落ちていく。

ブイモン達によれば、ヌメモンは暗くてジメジメしたところを好むが故に、明るくて乾燥したところが苦手らしい。

だが見上げた空には厚くてほの暗い雲が、太陽を隠してしまっていた。

もしも雲がなかったら、太陽の光がガラガラと照り付けて、ヌメモン達を退けてくれて、はぐれてしまった最年少達を待っていてくれるなり、探しに来てくれていたであろうに。

大量のヌメモン達がピンク色の排泄物を次から次へと投げつけるせいで、デジモン達は技を放つ隙すら与えられなかったのだろう。

そうでなければ次の世代に進化可能なパートナー達がいるのに、ヌメモンを追い払うことができなかつたはずがない。

1番弱い技を放つパタモンよりも弱いという話だから、排泄物さえなければ楽勝のはずなのだ。

汚い、というのは当初の予想通り、二重の意味が含まれていたらし

い。

仕方ない、と大輔達は点々とぶちまけられているピンクの排泄物を目印に、太一達を探すために歩き出した。

よりによって排泄物が目印だなんて、せめてヘンゼルとグレーテルのように石ころやパン屑だったらよかったのに、とヒカリは頬を膨らませながらメルヘンチックなことを考える。

2メートル弱の小高い崖になっていた足場は、やがて緩やかな坂道になり、枯れ草の草原と合流する。

排泄物はまだ続いており、セピア色の背景には異物でしかないのだが、目印としては大変助かった。

しかし。

「……嘘だろ」

『そんなあ』

先頭を歩いていた大輔とブイモンが突然立ち止まり、啞然と呟いた。

どうしたの、と大輔達の後に続いていた賢とパタモン、ヒカリとプロットモンが大輔につられて足を止め、声をかける。

振り返った大輔とブイモンの表情は、絶望にも似た色に染まっていた。

何があつたのだろう、と不安に駆られた2人と2体が大輔の隣に移動すると、その意味を理解した。

ピンク色の排泄物が、途切れていたのである。

ここに来るまでにほぼ真っすぐ投げつけられていたピンク色が、ぱったりと途切れている。

さあ、と賢とヒカリの顔が青くなった。

手がかりが、なくなってしまった。

目を逸らしたくなるような光景ではあつたものの、太一達の下へたどり着く唯一の手掛かりだったのに。

このままでは会えなくなってしまう、と再びパニックに陥りかけたヒカリに気づいて、大輔とブイモンとプロットモンが再度彼女を宥めにかかった。

『ど、どうしよう、ケンく!』

「どつ、とにかく、何か周りにないか探そう!」

『う、うん!』

ヒカリは大輔達に任せて、賢とパタモンは何かないかと辺りを見渡す。

しかし見渡す限り青空と白い雲、それからセピア色の草原以外何も見当たらない。

大輔達から少し離れて、何か見えるものはないだろうか、足元がお留守になっていた賢は、踏み出した足に地面がなくてすつ転びそうになった。

うわ、と悲鳴を上げて、一瞬滑り落ちた賢だったが、何とか踏ん張った。

賢の悲鳴を聞きつけて、賢とは別の方向を見ていたパタモンが慌てて飛んでくる。

『ケン!?大丈夫!』

「だつ、大丈夫……!」

目を見開いて驚きの表情を浮かべてはいたが、咄嗟に踏ん張ったお陰で転がり落ちずに済んだ。

背中で這うように坂道を上がって、ふうと一息。

「……何だろう、あれ?」

『ほえ?』

賢の視界に映ったのは、乱雑に置かれたたくさんの自販機。

色んな色や種類の自販機があった。

兄譲りの好奇心が疼いた賢は、大輔達を呼ぶのも忘れて坂道を下る。

賢が住んでいる集合住宅のすぐ近くにあるのと同じ自販機だった、見たことのない文字や飲み物、ジュースを売っているものもあった。

『ケン、これなあに?』

「自販機だよ。お金を入れてボタンを押すと、ここにあるのと同じものが出てくるんだ」

『オカネって?』

「え? パタモン、お金知らないの?」

どうやらこの世界には金銭の概念はないらしい。

賢もまだよく分かっていないので、お金とは何か欲しいものを買うときに必要なものなのだと、お兄ちゃんが昔教えてくれたことをそのままパタモンに教えてあげた。

お金がないと、欲しいものが手に入らない。

しかしパタモンはそれでもよく分かっている木の実や果物をとれば

食べ物が欲しいのなら、そこら辺に生っている木の実や果物をとればいいじゃない、というのがパタモンの反論である。

服や靴もデジモン達には必要がないから、それを買うためのお金だと言ってもピンとこない。

結局賢達の世界では必要不可欠なもので、文化の違いのようなものなのだと無理やり納得させるしかなかった。

『オカネがひつよーだなんて、人間って不便だね』

「あはは……」

「おおい、けーん!」

『パタモン! 何してるんだよー!』

ここでようやく、ヒカリが落ち着いてくれたのか、姿が見えなくなった賢を探しに来てくれた大輔とブイモンが、坂道の下で自販機の前立っている賢に気づいてくれた。

「え、これって自販機?」

「ラツキー! 何か買おうぜ! 喉乾いちまった!」

坂道を下って賢の下に駆け付けたヒカリと大輔は、セピアの草原に不自然に立ち並んでいる自販機にびっくりしていたが、喉の渇きが優先されてしまい、不条理な光景に対する突っ込みは脳内の隅に追いやられてしまった。

ヌメモン達の排泄物から逃れるために行方不明になってしまった上級生達を探すために、身体の小さい最年少達は上級生達の倍ぐらいの労力を使って歩き回っていたのだ。

喉がカラカラに乾いてくるのも無理はない。

が、賢がストップをかけた。

「うーん、大輔くん。その自販機使えないと思うよ?」

「えっ、何で?」

「自販機も、電気があるから動くんだよ。僕、前に自販機がどうやって動くのか気になって、お兄ちゃんに教えてもらったんだ。僕の腕ぐらいの太いケーブルがあつてね、そこから電気をもらつて動くんだつて。でもこの自販機、ケーブルないよ?」

ほら、つて賢は大輔とヒカリを自販機の後ろに連れて行つて指をさす。

お家でも見たことがあるコンセントがあつて、そこにケーブルはなかった。

だからお金を入れてボタンを押しても、自販機は飲み物を出してくれないし、出してくれたとしてもこの暑さである。

気温が高いところに食べ物や飲み物を長い時間放つておくと、腐つてしまつてお腹を壊すんだよ、つてお兄ちゃんに教えてもらったのをちゃんと覚えている賢い子は、友達にもそれを教えてあげる。

「それに海にあつた公衆電話、あれ僕が住んでるマンションの近くにもあるけど、結局誰もお家に繋がらなかったでしょ?だからもし僕達の世界にあるものと同じものを見かけても、それがちゃんと使えるかどうか分からないから、まずは調べてからだつてお兄ちゃんが」

「あーそっかあ。治さんが言うんならしょうがないよなあ」

『オサムつてホント物知りだなあ』

『ね。すごいよねえ』

「飲み物飲みたかつたねえ、プロットモン」

『うん。アタシももう喉乾いちやつたあ』

この自販機は使えない、という結論に達した最年少達は、とりあえず上級生達の搜索を再開するために歩き出そうとした、時だった。

Bannon!!

大輔達が観察していた自販機が、突然大きな音を立てて蓋が開くよ

うに立方体の側面が開いたのだ。

大きな音にびつくりした最年少とパートナー達は、ビツクーンと全身を震わせてその場に硬直した。

ぎ、ぎ、ぎ、と錆びたロボットが無理やり動くようなぎこちなさで、3人と3匹は後ろを振り返る。

『あつー!』

『ヌツ、ヌメモモン!?!』

ばったりと倒れた側面、自販機の中から出てきたのは、自分達を追いかけまわして上級生とはぐれる原因になったヌメモモンである。

すぎぎ、と3人は後ずさり、パートナー達は前に出て戦闘態勢を取った。

その表情は微妙に引きつっていたが、ブイモン達の背後にいる大輔達はそんなこと知る由もない。

それでも、またあの排泄物を投げられて追いかけては溜まらないので、ブイモン達は先手必勝を取ろうとしたのだが……。

『ああ? あんだよ、ガキンチョコども。俺様の昼寝の邪魔しやがって、ぎやあぎやあ煩くて敵わねえぜ。騒ぐんならどっか行け』

予想に反して、ヌメモモンは襲ってこないどころか、眠そうにあくびをしながら喋ったのである。

知性も教養もないとゴマモンが言っていたから、喋ることもできないのだろうなって思っていたのに。

『つたく、せーつかくいい気持ちで寝てたつてのに、何だつてんだ。さつきもわあぎやあ騒がしい連中がやってきて機嫌が悪いつてのに……ああ、そういや隙間から覗いたら見たことねえデジモンがたくさんないたなあ? お前らみたいいな姿してたけど、仲間か何かか?』

啞然とする大輔達を尻目に、ぶつくさと文句を垂れていたヌメモモンだったが、やがて何かを思い出したらしいヌメモモンが衝撃的なことを口にする。

ヌメモモンの文句が続くようなら、こっそりとその場から離れるつもりだった大輔達は、ヌメモモンの言葉に目を見開いて、相手が相手だということも忘れて詰め寄った。

「たっ、太一さん達を見たの!？」

『何処!? 何処行つたか分かる!？』

『ああっ!?! なっ、何だ何だ!?! やっぱりさっきの連中の仲間だったのか!?!』

「そうなの! 私達、お兄ちゃん達とはぐれちゃったの!」

『どっちの方角に行つたのかだけでいいから教えて!』

「このままじゃお兄ちゃん達とずっとはぐれたままになっちゃう!!」

『お願い、ヌメモン!!』

3人と3体に一気に詰め寄せられたヌメモンは、とりあえず落ち着け
と言ひ含める。

そして、訳を聞かせてもらう。

地下水道でヌメモンに追いかけられたせいで、兄達とはぐれてしまつたということの話したら、ヌメモンはやれやれと言いたげにため息を吐いた。

『全く、地下の連中と来たら。年がら年中暗くてジメジメしたところにいつから、碌でもないことばつかしやがるんだ。悪いね、ガキンチョども。同族として謝らせてくれ』

「い、いや……君が悪いんじゃないし」

しどろもどろになって賢が首を振る。

知性も教養もないはずのデジモンが、ペラペラとしゃべるだけでなく同族の非を詫びている。

それに、厚い雲が晴れ始めて、太陽の光が顔を出し始めたのに、ヌメモンは嫌がるどころかケロリとしていた。

大輔達は知らなかったが、これはいわゆる個体差というもので、種全体が全く同じとは限らない。

それはまさしく人間と同じ、1人1人の性格や個性と同じなのである。

このヌメモンは太陽に耐性があり、比較的社交的らしい。

昼寝の邪魔をされたと文句を言いながらも、詰め寄ってきた大輔達を邪見にすることなく、大輔達の質問に答えた。

『お前らの仲間なら、あつちの森に逃げて行つたのが見えたぜ。何な

「一緒に探してやろうか？」

「しかも面倒見もいいと来たものだ。」

大輔達小学2年生は3人、そのパートナーが3体なのに対し、上級生6人とそのパートナーも6体。

「手分けして探すのに、大輔達では少なすぎた。」

「ありがとう、ヌメモン。お願いしていい？」

『おう。ほかにも協力してくれるか、声かけてみるからな』

「うん！ありがとう！」

『じゃあ、何処に集まる？バラバラで探しちゃったら、集まれないよ？』

『だったら、すぐ近くにおもちやの町ってところがあるから、そこ目指しな。お前らなら分かるだろ』

『おもちやの町！そっか、この近くだったんだ』

ブイモン達の目がキラキラと輝く。

おもちやの町って何だ、って大輔が聞いたら、もんざえモンっていうデジモンが町長をやっている、おもちやや遊ぶところがいっぱいあるところらしい。

遊ぶところ、と聞いて大輔達もぱっと顔が綻んだ。

「じゃあ、太一さん達見つけたら、そこで遊んじやおうぜ！」

「遊ぼう、遊ぼう！メリーゴーランドとかあるかな？」

「私、観覧車乗りたい！」

すっかり目的が切り替わってしまっている大輔達に、協力を申し出たヌメモンは苦笑しながら早く行けと促した。

「はい、つていい子のお返事をして背中を向け、大輔達はヌメモンが指した方向へと走り出す。」

それを見送ったヌメモンは、すぐ近くにある自販機擬きをコツコツと叩いて、昼寝をしていた仲間達を叩き起こす作業から始めることにした。

おもちゃの町

ピンクはミミの大好きな色だ。

赤ほど主張しておらず、白ほど影が薄くなく、ミミの可愛らしさをいかになく引き立ててくれる色だからだ。

母親譲りの愛されフェイスは、ミミの大好きな自分のパーツの1つ。

くりくりと大きな目は、友達みんなから羨ましがられている。

小学4年生にして母親から美に関する知識を叩き込まれており、肌はすべすべのもちもち。

頑張つて伸ばした髪だって、お手入れは欠かさない。

可愛いアクセサリーやお洋服の情報も、常にチェックしている。

これはミミがナルシストというわけではなく、自分の可愛さを自覚している上での行為である。

お小遣いは全部そういったものにつき込まれているし、娘を可愛く着飾りたい母親もお金を惜しげもなくミミのために使ってくれた。

父親はそんな娘や妻に呆れている……のではなく、むしろもつとやれとハートマークを飛ばしながら、可愛く着飾った娘にメロメロである。

世界一可愛い、世界一美しい、そう言つて両親がミミを褒め称えていたのが、今や懐かしい。

こっちの世界に迷い込んでからまだ4日ぐらいしか経っていないのに、自分を甘やかしてくれるパパやママが恋しくて仕方がなかった。

だってパパもママもミミがお腹空いたとか喉乾いたつて言えば、それ以上は何も言わなくともはいはいつて世話を焼いてくれるんだもん。

もちろん、ミミはもう小学4年生だから、そんな我儘が他の人にも

通じるとは思っていない。

こういう我儘を言っているのは、パパとママにだけって、ちゃんと分かっている。

あれがしたいこれがしたいってミミが口にするのは、ただ心に溜まった鬱憤を吐き出したいだけなのだ。

それはさておき。

ピンクはピンクでも、それが人間やデジモンの身体から排泄されたものなら、話は別である。

地下水道に漂っていた僅かな刺激臭を上書きする臭いと、頭上を飛び交う排泄物が、ミミ達を容赦なく襲う。

同じピンクでも可愛いテンガロンハットの広いつばを抱えるように掴んで、悲鳴を上げながら逃げ惑うミミは、ふと視界の端に先ほど通り過ぎた排水溝を見つけた。

後ろを走っていた上級生達を先導して、ミミは排水溝に飛び込む。逃げるのに必死で、ミミは目の前で起こったはずの異変に気付くことができなかった。

背後から絶えず投げられるピンク色の排泄物。

いつの間にか岩肌に変化していた洞窟を駆け上り、向こうから光の筋が伸びてくるのが見えたから、ミミは一生懸命走った。

しかし悪夢は終わらない。

みんなで洞窟を出たはいいものの、宙を舞うピンクの排泄物が途切れることはなく、子ども達は立ち止まることを許されなかった。

反射的に左へ走ったミミにつられ、他の子ども達も後を追う。

岩肌の山はいつの間にかセピア色の草原へと変わっていたのだが、今の子ども達は景色の変化を楽しんでいる余裕はない。

飛び交うピンクの排泄物から逃げるのに精いっぱいだったのだ。

執拗に追いかけてくるヌメモンに、誰かが分かれて逃げようと言いだした。

沢山いるヌメモン達の数を、少しでも減らすためだ。

耳障りなヌメモンの声は、まだ聞こえてくる。

技を放って追いつく隙ももらえず、子ども達とデジモン達はその意見に賛成するしかなかった。

自分が何処に向かっているかなんて、そんなことすら気にする余裕もなく、ミミとパルモンは息を切らしながらも迫りくるヌメモンから逃れたくて、頑張っている。

お洒落優先、実用性なんて二の次であるブーツのせいで足の指先に痛みが走ったけれど、立ち止まったら忽ちヌメモン達に追いつかれてしまう。

あんな、自分の排泄物を投げつけてくるような汚物系デジモンに捕まるなんて、冗談じゃない！

気が付いたら木々が立ち並んでいる林に逃げ込んだミミとパルモンは、障害物を利用してヌメモンが投げつけてくる排泄物をやり過ごす。

どうしよう、どうしよう、ってミミは周りに仲間がいない状況でどうしたらいいのか分からずに焦っている。

パルモンはそんなミミを守るために、排泄物が飛び交う中を飛び出していった。

排泄物を武器として攻撃してくるヌメモンだが、ミミを守るためなら仕方がない。

ヌメモンが攻撃する前に追い払えばいいのだ。

幸い林に逃げ込んだお陰で、障害物に隠れることができた。

こちらの攻撃態勢を整えることができたので、追いかけてまわされた恨みをここで果たしてやる、とパルモンは手に収められている蔓を伸ばそうと両手を振り上げた。

しかしパルモンが攻撃を放つことはなかった。

パルモンが攻撃を放つために両手を振り上げた直後に、ヌメモンが奇声を発しながら回れ右をして逃走したのである。

あれ、ってパルモンは拍子抜けした。

まだ技を放っていないのに、近づいたら蔓で掴んで放り投げてやる

うと思っていたのに、ヌメモンは逃げたのである。

ミミはパルモンを褒めてくれたけれど、何もしたわけでもないのに退散していったヌメモンに、心中は複雑だった。

どしーん、という地響きが、背後から聞こえた。

揺れる地面によろけたミミとパルモンは、何事かと背後を振り返る。

そこにいたのは、大きな黄色いクマのぬいぐるみであった。

もんざえモン、という名前のデジモンらしい。

見た目はどう見ても大きなぬいぐるみでしかないのに、数時間前に別れたアンドロモンと同じ、完全体という世代だそうだ。

デジモンには世代があり、それぞれ幼年期、成長期、成熟期、完全体というレベルで振り分けられ、基本的には世代が上であるほど強いらしい。

身体が大きくとも成熟期のグレイモンやガルルモンでも、相手が完全体だと歯が立たないのだという。

昨日戦ったアンドロモンに勝てたのは、運が良かったのだ。

ただ相手を攻めるだけでなく、相手の弱点を突いて戦うという賢い戦い方をしたからである。

しかし昨日はアンドロモンが黒い歯車でおかしくなったから戦うことになっただけで、もんざえモンは悪いデジモンではない。

おもちゃ型のもんざえモンは、おもちゃを愛し、おもちゃに愛されるデジモンで、おもちゃの町というところで町長をしているらしい。

基本的には危害は加えてこないはずである、というのがパルモン談だ。

自信なさげなのは、パルモン達は情報としてもんざえモンのことは知っているけれど、ミミ達を待っていた最初の森から殆ど出たことがなかったし、こんな遠いところまで来たこともなかった。

だからもんざえモンが自分達に対して敵意があるのかわからないのか、いまいち分らないのだそうだ。

そんなの困る、とミミは言ったが、そう言われてもわからないもの

は分からない。

どうしようか、とミミとパルモンが恐る恐るって感じでもんざえモンを見上げていたら……。

どおん!!

「いやあああああああああつ!!いいデジモンがどうして私達に攻撃するのよおおおおおおおおお!!」

『分からないってばあああああああつ!!』

爆発音と砂煙が上がる。

ミミとパルモンは悲鳴を上げながら再び走り出した。

もんざえモンが突然目から赤いビームを放ったのである。

せつかくヌメモンを退けることができたのに、休む間もなくもんざえモンに襲われるなんて、冗談にもならない事態だ。

パルモンはまだ進化できないから、もう既に進化を成功させた誰かと合流しなければ、勝ち目どころか逃げることもすらできない。

林を抜けて再びセピア色の草原に出たミミとパルモンは、身を隠すものが何もなくどうしようとしてと途方に暮れながら、背後に迫るもんざえモンから逃れるために走り続ける。

『お姉ちゃん、こつちこつちー!』

そんな時に、ミミに声をかけてきたのは、何と先ほどまでミミ達を追いかけてまわっていたヌメモンだった。

ヌメモンがいるのは窪地になっていて、ミミとパルモンが隠れても十分の深さがあつた。

しかしヌメモンに助けられるなんて、と屈辱的になるミミだったが、背に腹は代えられない、と嫌そうな表情を隠さずにヌメモンがいる窪地にジャンプした。

どしん、どしん、ともんざえモンが近づいてくる。

ミミとパルモンは息を殺して、もんざえモンが通り過ぎるのを待つ。

どしん、どしん、どしん。

振動がどんどん大きくなっていく。

ミミとパルモンは身を寄せ合って、時が過ぎるのを待った。間もなくして。

『……ふう、お姉ちゃん達、もういいぜ』

ぎゅつと目を瞑っていた間に、もんざえモンはミミ達が潜んでいた窪地を大股で通り過ぎて行った。

地響きが遠ざかっていく。

ひよっこり顔を覗かせたヌメモンが、遠ざかっていくもんざえモンを確認して、息を吐きながらミミ達に言った。

ミミとパルモンもひよっこりと顔を覗かせて、安堵の息を吐いた。しかし、とパルモンは首を傾げる。

おもちゃの町を守っているはずのもんざえモンが、何故こんなところにいるのか。

もしかしたらおもちゃの町で何かあったのでは？と言うと、ミミ達を助けてくれたヌメモンが口を開いた。

『ねえねえ、お姉ちゃん。お姉ちゃんもしかして、誰かとはぐれなかった？』

「えっ!? なっ、何で知ってるの!?!」

『あーやっぱり。俺の仲間が、幼年期みたいになっちゃい奴らが、仲間とはぐれちゃったから探してやってくれって頼んできたんだ。パタモンとプロットモンと……あと青いのが一緒だったぜ。知ってる?』
『パタモンとプロットモン……青いのってことはブイモンね!? ってことは!』

「大輔くん達だわ! きつきバラバラになっちゃった時ね!」

大輔達は地下水道ではぐれたのだが、逃げることに必死だったミミは、そんなことに気づきもしない。

「行こう、パルモン!」

『ど、何処に? ダイスケ達も探してるだろうから、何処にいるか分からないでしょう?』

『それなら大丈夫だ。おもちゃの町で集合しようってことになってるから、お姉ちゃん達はおもちゃの町を目指しな。俺は他にもいないか

探してくるから』

「うん！ありがとう、ヌメモン！さ、パルモン、目的地は分かったから行きましよう！」

『……もんざえモンの様子も気になるし、ちょうどいいわね。うん、行きましよう』

「あつ、ミミさあん！」

『パルモン！よかったあ！』

おもちゃの町へ向かう道すがら、ミミは林の向こうから聞き慣れた声を聞いて、そちらの方に顔を向ける。

最年少の3人とそのパートナーが、おーいって手を振りながらミミの下まで走ってきた。

自分よりもちっちゃい子達とは言え、ようやく仲間と会えたという安堵から、ミミはその場にへなへたと崩れ落ちてしまった。

大輔達が慌てて駆け付けてくれたが、ちよつと疲れちゃっただけ、って誤魔化して、氣力を振り絞って何とか立ち上がる。

そしてようやく、ミミは真相を知ることになる。

大輔達は地下水道でヌメモン達から逃げる際に、はぐれていたということを。

えーってミミとパルモンは驚愕の声を上げた。

「ミミさん、氣づかなかったの？」

『ヒドいわ。アタシ達、ミミ達の前にいたのに』

『ご、ごめんね？逃げるのに必死で、氣づかなかったの』

「アタシも、ごめんなさい……」

「いいつすよー、こうして合流できたんすから」

『そーそー！とにかくおもちゃの町に行こうぜ！タイチ達ももういるかもしれないし！』

まずは他の子ども達と合流することが先決である。

大輔達はヌメモンに指示された通り、おもちゃの町に向かおうとし

たのだが、ミミとパルモンが待ったをかけた。

「ねえ、もんざえモンって分かる？」

『うん？知ってるよ？』

『アタシ達がこれから行くおもちゃの町の町長だもの。知らないはずないわ』

『もんざえモンがどうかしたのー？』

ミミがブイモン達に尋ねれば、当然知っているとこの言葉が返ってきた。

やっぱり知ってるんだ、という言葉を読み込んで、ミミは自分達が今しがた体験したことを彼らにも話しておく。

情報というのは、みんなで共用して初めてその価値が発揮されるのだ。

自分の胸だけに秘めているのは、仲間を危険に晒す恐れがある。

最初こそ、ブイモン達はおもちゃの町の心優しい町長がミミ達を襲ったなんて信じられない、と言った顔をしていたが、パルモンも同じことを主張してしまつたら何も言えない。

でもなあ、つて互いの顔を見やるブイモン達と、まだもんざえモンに会っていないから、いまいち理解しきれていない大輔達。

とにかく異変がないかだけでも確かめよう、というパルモンの主張が採用され、子ども達は再び歩き出した。

進むにつれて深くなっていく林はいつしか森となり、くすんだ緑の中に不自然な色とりどりのお城が顔を出している。

まるで遊園地のような外観に、ミミの心が一瞬浮足立ったが、もんざえモンと他の仲間達のことを思い出して頭（かぶり）を振った。

今、この場にいる1番年上の子は、ミミだけなのだ。

ミミと一緒にいるのはみんな小学2年生の子達と、デジモン達だけ。

ここに来るまで太一達が引っ張ってくれているのが当たり前だったのに、ミミは今一緒にいる小学2年生の最年少の子達と一緒にいていくだけでよかつたのに、その太一達は何処にも見当たらない。

(この際光子郎くんでもいいから、会えればいいのになあ……)
心細いことこの上なかつた。

自分よりも頭一個分も小さい同級生の男の子だが、進化を果たしている彼でも今のミミにとつては抛り所である。

進化した4体のうち、完全体を相手に成熟期で奮闘したのは、光子郎のテントモンだけなのだ。

光子郎とテントモンがいてくれれば、少しは力強かったのに。でも今はいない人のことを考えても仕方がない。

今この場で小学2年生の最年少3人を守るのは、小学4年生のミミだけなのだ。

……あの時だって。

「ミミさんっ！」

思考の海に引きずられていたミミは、下からかけられた声で意識を急浮上させる。

何も言わず、一点だけを見つめてぼんやりしていたミミを不思議に思ったヒカリが、声をかけてくれたらしい。

大輔と賢も、そのパートナー達も、ミミを見上げている。

その目に浮かんでいるのは……不安だった。

いけない、とミミは無理やり笑顔を作って何でもないわよ、って気丈に振る舞う。

(アタシがすっかりしないと……)

最年少の大輔達が今縋っているのは、頼りにしているのはミミなのだ。

ミミが不安でたまらないのと同じく、大輔達もいつも頼っている人達がいなくて、不安なのだ。

「さ、行きましょう。太一さん達がここに來てるかどうか、確かめなきゃ」

『そうね』

務めて明るく振る舞いながら、ミミは元氣のない最年少達を促して、おもちゃの町に足を踏み入れる。

ミミと合流する前に、地上に住んでいるヌメモン達と良好な関係を

結べた大輔達は、太一達を探すのをヌメモン達に手伝ってもらっている。

もしかしたら、何人かヌメモン達が見つけて、このおもちゃの町に向かわせてくれているかもしれない。

ううん、もう既におもちゃの町に来ているかもしれない。

そうすれば、その誰かと合流して、もんざえモンの異変を知らせて、一緒に調査してくれるかもしれない。

希望は、まだある。

しかし、ミミの観測的希望は、脆くも儂く崩れ去ることになる。

聞いていると体が自然と踊り出してしまいそうな、楽しい音楽が聞こえてくる。

小さい空砲があちこちから聞こえ、もんざえモンの顔の風船が風に乗って空へ運ばれていくのが見えた。

そこは、ミニチュアのお家のように色とりどりに彩られた1つの街だった。

こんな時でなければきつとミミ達は真っ先にはしやぎまわっていただろう。

しかしこんなにも楽しそうな雰囲気を感じ出しているのに、客らしい客の影は1つも見当たらなかった。

太一さん達何処かな、まだ来てないのかな、ってミミに引っ付いていた最年少達は、ふと金属のような音を聞きつけてそちらを振り返った。

あ！って声を出したのは、ヒカリだった。

「お兄ちゃんー！」

大好きなお兄ちゃんが、向こうから走ってくるのが見えたヒカリは、駆け付けようとした。

が、2、3歩進んだところでその足はピタリと止まってしまった。

どうしたの、ってミミが問おうとしたら、走ってきた太一はミミ達に見向きもせずに通り過ぎてしまったのである。

え、って目の前を通り過ぎて行つた太一を見送つたミミとパルモンは、太一の後をゼンマイ式の車が追っているのを目撃した。

何か、ぶつぶつと呟いていたのだが、あれは一体……？

「空さんー」

今度は大輔が叫ぶ。

別の方角からやってきた空は、やはり太一と同じように何かをぶつぶつと呟きながら、ふらふらとした足取りで走ってきた。

シンバルを叩くサルのおもちやが、空を追い立てるようにシンバルを忙しなく叩いていた。

ぎ、ぎ、ぎ、という何かが一斉に動く音が、更に別の方角から聞こえる。

光子郎が、両手をパタパタさせながらたくさんの兵隊のおもちやに追いかけていた。

「お、お兄ちゃん!」

賢が悲鳴を上げる。

光子郎が走り去っていった方から治が汽車のおもちやに追いかけていた。

待ってーって涙目になりながら兄を追いかける賢だったが、治は賢に気づいていないのかそのまま何処かへ走って行ってしまった。

太一、空、光子郎、そして治。

みんなみんなおかしくなっている。

ということは、残る一人は……。

「……丈先輩」

たつた今ミミの脳内に浮かび上がった人が、ミミの目の前を通り過ぎていく。

大きな鳥の頭が、一定間隔で地面をつついて丈を追い立てる様は、まるで地面を這いつくばるミミズを啄もうとしている鳥のようだった。

水飲み鳥、英語でドリキンキングバードと言う。

鳥が水場から水を飲む動きを模倣した、熱力学で作動する熱機関のおもちやなのだが、ミミとパルモンはそんなこと知る由もなかった。

『何あれ、みんなどうしちやっただ…?』

『ぜんっぜんちつとも楽しそうじゃないのに、何で楽しいとか嬉しいとか言ってるの?』

『まるで感情がなくなっちゃったみたいね…』

目の前にいたはずのミミ達を素通りして、おもちゃに追いかけられていた太一達に、呆気にとられながらブイモン達は顔を見合わせる。うーん、ってブイモン達の会話を聞いていたパルモンは、首を傾げた。

『…アグモン達がいらないわね。どこに行っちゃったのかしら…?』

「アグモン…そうよ、まずはアグモン達を探しましょう!きつと事情を知ってるはずよ!」

だから落ち込まないで、とミミはしよんぼりしている最年少に声をかけ、アグモン達を探そうと提案した。

ずーつと子ども達のそばにいて離れなかったデジモン達がいらないなんて、何かあつたに違いない、ということはミミでも分かった。

幸いメンバーは全員揃っているから、アグモン達も何処かに必ずいるはずである。

事情を聞き出したら、何とかみんなを元に戻して、それからもんざえモンをどうにかしよう。

ミミの行動は早かった。

「本当はみんなで手分けして探したほうが早いんだろうけど、ここつてもんざえモンの町なんでしょう?だから効率悪いけど、みんなで固まって探しましょう」

はい、って不安そうな色を隠さない最年少は、しかしミミが今ここにいるメンバーで一番年上ということもあり、素直にお返事をしてミミの後をついていく。

太一達と同じようになってきているのか、それとも何処か別の場所にいるのか、それすらも分からないからみんな慎重になっていた。

大きな通りはもちろん、小さな裏通りや脇道、お家の中も徹底的に。その甲斐あつてか、幸運なことにミミ達はアグモン達の居場所をす

ぐに突き止めることができた。

あるお家の、窓の中。

ガン、ガン、と何かを叩きつけるような音。

何だろう、ってじっとしているのが苦手な大輔が、第一発見者だ。

窓を覗き込むと、漫画やアニメに出てきそうな金の縁と赤く塗られた宝箱が、ガタガタと動いていた。

大きな錠前がついている。

他の家を覗き込んでいたミミ達を呼んで、一向はその宝箱があるお家に入った。

出して〜っていう情けない声は、聞き覚えがある。

「みんな？そこにいるの？」

『アグモン？ガブモンや、他のみんなもいる？』

『あ、ミミ！パルモン！』

『無事だったのね!?!』

よかった、と安堵しているミミを押しつけるように、ヒカリと賢が箱に手をつけて、中にいるらしいアグモン達に問いかけた。

「ねえ、アグモン！お兄ちゃん、どうなっちゃったの!?!」

「ガブモン！何か知ってる!?!お兄ちゃんが、お兄ちゃんが!」

『ああ、ヒカリ！ヒカリも無事だったんだね!?!』

『ケン！よかった……』

『ダイスケは？ブイモンはいるの？』

「おう、いるよ!」

『それより、教えてくれよ！何があったんだ!?!』

ミミと最年少3人、そのパートナー達の無事を喜んだアグモン達は、もんざえモンに捕まったのだと教えてくれた。

みんなバラバラに逃げている途中、突如現れたもんざえモンに驚いてヌメモンが逃げたまでは、ミミとパルモンと一緒にだ。

しかし他の子ども達は、もんざえモンの必殺技であるラブリーアタックという青いハートに捕まったらしい。

もんざえモンのラブリーアタックは、本来なら包んだ相手を幸せな気分になせ、相手から戦意を奪う技だ。

だが青いハートのラブリータックは、どういうわけか全身から力が抜けて、何もかもがどうでもよくなつていくような、アグモン達が知っているものとは全く別のものだったそうだ。

やる気や気力が根こそぎ奪われて、意識さえも遠ざかっていく中、もんざえモンが言い放った言葉をデジモン達は聞き逃さなかった。

子ども達から感情を抜き取り、おもちゃのおもちゃになつてもらう。

そしてデジモン達はおもちゃ箱に“お片付け”されてしまったのだと。

「おもちゃのおもちゃ?」

「どういうこと?」

おもちゃは子どもが遊ぶから“おもちゃ”になる。

おもちゃの“おもちゃ”ということは……おもちゃに“遊ばれて”いる“ということだ。

「何だよ、それ!太一さん達はおもちゃじゃねーぞ!」

『何とかして元に戻してやらないと……!』

「もんざえモンのせいでお兄ちゃん達がああなったんなら、もんざえモンを何とかすれば元に戻るんじゃないかな?」

「ど、どうやって?プロットモン達、まだ進化できないよ?」

『相手は完全体……グレイモンやガルルモンよりも上だわ。進化できたとしても、勝てるかどうか……』

プロットモンが悔しそうに、しかし事実を述べる。

前回カブテリモンがアンドロモンに勝てたのは、まさしく運が良かったからだ。

光子郎が冷静にアンドロモンを観察してくれたお陰で、カブテリモンに指示を出せたからだ。

しかしここにいるのはまだ進化できないデジモン達だけ。

上級生に部類されるとはいえ、蝶よ花よと大切に育てられたお姫様に、戦う力などない。

「ね、ねえ……この箱から出られないの?」

『さっきっからやろうとしてるんだけど……』

『ワテら全員で力合わしたんですけど、びくともせえへんのや』
見かけによらず頑丈らしい。

進化ができなくとも、デジモン達で力を合わせれば、もんぎえモンを倒すチャンスぐらいは作れると思ったが、その可能性は捨てたほうがよさそうだ。

『！何か来る！』

どうしよう、と途方に暮れていたら、パタモンの大きな耳が何かを聞きつけた。

もんぎえモンか、と思いミミ達は開きっぱなしだったドアを閉め、咄嗟に身を隠す。

ブイモンが代表してそつと窓から顔を覗かせたら、先ほど何処かへと行ってしまった治が、通り過ぎていくのが見えた。

「お兄ちゃん……」

今すぐにも駆け付けて、抱きしめてもらいたいのには、今の治は感情を抜き取られてしまっている。

賢が治の前に飛び出していったとしても、賢のことが分かるかどうか……。

「……ううっ」

『っ、ケ、ケン……』

自分のことが分からないかもしれない、と思ったら底冷えするような恐怖が沸き上がった賢の目に、涙が滲む。

何でも知ってるお兄ちゃん、何でもできるお兄ちゃん。

両親の都合で離ればなれにされてしまったけれど、賢にとってお兄ちゃんは大切に、大好きな存在だ。

賢がテストでいい点を取れば頭を撫でて褒めてくれたし、悪いことをすればそれがどうして悪いことなのか、賢の目線まで腰を下ろして諭してくれる。

でも、そのお兄ちゃんはもう何処にもいない。

「……ふ、え……！」

「ヒ、ヒカリちゃん!？」

『ヒカリっ！』

そして奇しくも、賢い子と同じように兄が大好きな女の子は、悟つて、泣いてしまった。

もう、大好きな兄に会えないという、最悪な想像が過ってしまったのである。

大輔とパートナー達がヒカリと賢をそれぞれ慰めるが、溢れる涙を止めてやることができない。

ぷつん、とミミの中で何かが切れた。

「……パルモン、行きましょう」

『え?』

妙に落ち着いた声色で、パルモンに声をかけてきたミミに、パルモンは虚を突かれながら顔を上げた。

さつきまでもんざえモンと対峙することを躊躇していたとは思えないほど、ミミの顔は険しかった。

その視線の先にいるのは、まだ小学2年生の最年少3人。

うち2人はめそめそと泣いており、残った1人は途方に暮れている。

どうしたの、ってパルモンが声をかける前に、ミミは泣いている2人と慰めようとしている1人に向かって、膝に手をつきながら口を開いた。

「みんな、聞いて」

「ミミさん……?」

「これからアタシとパルモンで、もんざえモンを探して、何とかみんなを戻してもらおうようにお話してみようと思うの。でもアグモン達から聞いた様子だと、お話聞いてもらえそうにないかもしれないでしょ? そうなったら危ないから、みんなはここで待っていてくれる?」

「だ、だったら俺も……」

「大輔くんはここでブイモン達と一緒にヒカリちゃんと賢くんを見てあげて。2人も、お兄ちゃんがいなくなっちゃうかもって不安がつてるから、一緒にいてあげてほしいの。大輔くんだって、お姉さ

んがいなくなるかもって考えたら、怖いでしょ？そういうの分かってあげられるのは、大輔くんだけだから……ね？」

ミミは一人っ子だ。だからお姉ちゃんの気持ちも、妹の気持ちも分からない。

それでも、やれることがある。やらなければならないことがある。でも、となおも食い下がる大輔に、ミミはにっこり微笑んだ。

「だーいじょうぶ！絶対何とかするからーね？」

『……そうよ、ダイスケ。アタシがついてるから、ミミの心配はいらないわ。ヒカリとケンを慰めてあげて。パタモン、プロットモン、ブイモン、ダイスケ達をお願いね？』

『パルモン……』

ミミの真意を理解したパルモンも、大輔達を安心させるように笑いながら、そう言った。

最年少の3人をここに残して、单身でもんざえモンに挑むのは無謀なことであるのは重々承知している。

もしもミミに何かあれば、今度は彼らが頑張らなくてはならないだろう、ということも。

それでも。

「いーい？誰が来てもここを開けちゃダメ。もしもアタシ達が出てった後にもんざえモンが来たら、さつきみたいにちゃんと隠れるのよ。パタモン、周りを警戒して何か聞こえたらちゃんと知らせてあげてね」

『任せて！』

『じゃあ俺、この鍵壊せないか確かめてみるよ！』

「ええ。でもあんまり大きな音は立てないようにね。それじゃ、行ってきまーす！」

いつてらっしやーい！って最年少達に見送られたミミとパルモンは、来るなら来いと言わんばかりに道の真ん中を堂々と歩いた。

相手は完全体。まだ進化できないパルモンでは心許ないけれど、それでも誰かがやらなければならないのだ。

1番年上の自分が、やらなければ。

『……まさかミミがあんなこと言い出すなんてね』

ちよつと見直した、という言葉は心にしまっておいた。

出会ったばかりのころは、ずっと待ち望んでいたパートナーではあったけれど、泣き喚いて我儘を言っつて、こんな子とこれから先上手くやっていけるのかなつて心配になったものだが、それでも下級生の子達を宥めようと必死になっていた姿は、間違いなく上級生のものだった。

どちらかと言えば上級生達が全て決めるのを後ろで黙つて見ていて、決定されたことにははーいつて従うような、受け身の子である。興味があること以外、自分からやるつてあんまり言わない子である。

それが一体どういう風の吹き回しなのだろうか。

「アタシだつてお姉さんだもん。小さい子が泣いているの、黙つて見てるほど鬼じゃないのよ」

なんて口では言っているが、*ソレ*を自覚しだしたのは、つい最近である。

何でもやつてもらっているお姫様は、しかし自分はお姫様ではないことはちゃんと分かっていた。

ママもパパも甘やかしてはくれるけれど、それと同時に自分でできることは自分でしなさいつていう躰を怠らなかつたのだ。

将来お嫁さんになった時に困らないように、つて一通りの家事をちゃんと教えてくれたのだ。

だからお皿洗いだつてちゃんとやるし、お部屋のお片付けだつて自分でする。

お料理だつてできる。……味の保証はできないが。

あれ欲しいこれ欲しいつて口にはしても、誰かにやつてもらつてまで欲しいわけじゃない。

自分で手に入れるから価値があるのだ。大切に扱うのだ。

ミミはもちろん、お友達からもらつたものも、自分で手に入れたものと同じぐらい大切にできる優しい子だが、それは今は置いておこう。

あれは、確か空のピヨモンが初めてバードラモンになった日のことだ。

狂暴化したメラモンから逃れるために、干上がった湖にあった朽ちた船に避難するために、ミミ達は走っていた。

上級生達は皆逃げ惑うピヨコモン達を先導し、パニックにならないように声を張り上げながら言葉をかけていた。

ミミもピヨコモンに混じって逃げていた時、治に腕を掴まれたと思つたら、賢達最年少の子達を連れて行ってやってくれと頼まれたのである。

自分達はピヨコモン達を落ち着かせるのに手いっぱいだからと。

え、え、つておどおどしながら、でも、でもって狼狽えていたミミに、治は苛立たし気にこう怒鳴ったそうだ。

《もう4年生だろう！君だつてお姉さんなんだぞ！もしも僕達がいなくなつたらどうするつもりだ!!》

その時はその剣幕に圧倒されて、言われるがままに最年少3人を連れて船に避難した。

船についてから一息ついて、そして気づいた。

頼るものがミミしかいなかった最年少達が、必死になってミミにしがみついていたことに。

小さな手が、ミミのスカートをしつかりと、でもぶるぶると震えながら掴んでいるのが、嫌でも伝わってきた。

その時の、何ともいいようなない気持ち。

今なら分かる。あれが、守らなければという気持ちなのだ。

きつとミミが下級生だったら、同じように守ってもらえたのだろうなつていうのは、ただの幻想にすぎない。

今のミミはどうあがいても4年生で、小学生を2つに分けたら上級生の部類になって、そろそろ下級生の面倒を見ましようつて言われるような年だ。

ミミには妹もいなければ姉もないから、面倒を見るといのがどういうことなのか、ミミはまだ分からなかった。

でも下級生を危険から遠ざけるといいうのが面倒を見るといいう意味なのなら……ミミはもんざえモンに立ち向かわなければならぬ。

「……だから、アタシは貴方を何とかしてみせるわ。そうじゃなきやアタシのお友達はみんなずーつとあのままなんでしょう？」

自分よりも何倍も大きなもんざえモンと対峙しても、ミミは怯まずに真つすぐもんざえモンを見上げた。

もんざえモンは、たくさんの風船を両手で持ちながら、何を考えているのか読めない目で見下ろしている。

大輔達を巻き込んではいけない、とミミとパルモンはなるべく遠いところでもんざえモンと対峙しようと、駆け足でその場から離れた。

途中で空とすれ違ったけれど、やはり空はミミのことなんか眼中に無く、フラフラとした足取りでおもちゃに追いかけられている。

いつもなら真つ先に声をかけて、ミミを気遣ってくれるのに。

泣きたいのをぐっと堪えて、ミミはもんざえモンを探していたのだが、どしんどしんという地響きが近づいてきたので、ミミはその場に立ち止まった。

「どうしてあんなひどいことしたの？アタシのお友達が、貴方に何をしたっていうのよー！」

『おもちゃは遊びに飽きられるとあっさりと壊される。私にはそれが我慢ならない！何故おもちゃが遊ばれなければならないのか！おもちゃは都合のいい道具ではない！壊されるために作られたのではない！だから私はおもちゃのために、あの子ども達を『おもちゃのおもちゃ』にしたのだ！お前もおもちゃになるがいい！』

「何よそれ!!意味分かんない！」
ミミは、腹の底から叫んだ。

「おもちゃが壊されるのは確かに可哀そうだわ！おもちゃを乱暴に扱って壊すなんて、アタシだって許さない！でも、おもちゃは子どもを笑顔にするものでしょう!?子どもを喜ばせるものでしょう!?あんなの、笑顔じゃない！きつとおもちゃ達だって楽しくないって思ってる！こんなの望んでなかったって！」

『貴女に、何が分かるというのです!!』

「分かんないわよ!!子どもを笑顔にするために生まれてきたのに、子どもを悲しませてるもんざえモンのことなんか、ぜんっぜん分かんない!可哀そうに、賢くんもヒカリちゃんも泣いてたわ!もう二度とお兄ちゃん達に会えないかもって!おもちゃに取られたって!貴方はおもちゃのためのを思っでやってるんだらうけど、そんなの全然違う!貴方がやっているのはおもちゃを乱暴に扱って壊す子どもと一緒に!!」

『黙れっ!!黙れえええっ!!』

両手に持っていた風船が風に攫われていく。

もんざえモンは手あたり次第に目からビームを放って、ミミとパールモンを追い回し始めた。

きやあつ、という悲鳴が破壊音と瓦礫でかき消される。

勢いよく啖呵を切ったのはいいものの、もんざえモンに対する策なんてこれっぽっちも練っていないミミは、逃げるしかない。

背後から迫る爆音に恐怖しながらも、それでもミミは走った。

自分が何とかしなければ、太一達は元に戻らない。

ヒカリと賢の涙を、自分では拭ってやることのできないのだ。

「きやあつ!!」

『っ、ミミ!!』

逃げることに必死になっていたせいか、足元がお留守になっていたミミは、石畳の溝につま先をひっかけ、派手に転倒してしまった。

ずざー、とスライディングのような形で転んだために、ミミの剥きだしになっている腕に痛みが走る。

見れば、少し擦り?けて血が滲み出していた。

『ぐゅっくりお楽しみください……』

痛い、と嘆いている暇はない。

立ち上る砂煙の向こうから、もんざえモンの声が聞こえてくる。

逃げなければ、とミミは立ち上がろうとしたが、転んだ時に足も怪我をしたのか、痛みが走って上手く立ち上がれなかった。

このままではミミまで感情を消されて、”おもちゃのおもちゃ”にされてしまう。

パルモンはミミを守ろうと、彼女の前に出た。

『お姉ちゃん！助けにきたぜえー！』

その時だった。

先ほどミミを助けてくれたヌメモンが、何処からともなく飛び出てきたのだ。

ぎよつとなるミミとパルモンを尻目に、次から次へと現れるヌメモンは、砂煙の向こうにいるもんざえモンに、果敢に攻めていった。

自分の排泄物を、自分よりも身体のかなんない相手に躊躇なく投げつけ、挑発する。

もんざえモンは、突如として現れたヌメモンの大群にきよとんとしながらも、投げつけられ、べつちよりとはりついた排泄物に怒りを隠さない。

次々現れてまわりついてくるヌメモンを、腕をぶん回して薙ぎ払い、足で踏みつづす。

軟体であるヌメモンは振り払われても大したダメージにならず、踏みつぶされてもすぐに復活して、再びまわりついていた。

どうして、ミミもパルモンも開いた口が塞がらない。

確かにさつきは大輔達に頼まれたから、助けてくれた。

ここに来ればいいって、他にも仲間がはぐれていないか探してくれらるって言ってくれた。

知性も教養もなく、デジモン界の嫌われ者なんてレッテルを張られて、暗くてジメジメしたところに追いやられて暮らしているのに、排泄物を投げることしかできないのに、ヌメモンは完全体のもんざえモン相手に怯むどころか猛攻を繰り返している。

ミミを守ろうと、奮闘している。

——ミミを守らなくてはならないのは、自分なのに

ミミのデジヴァイスから光が漏れたのは、その時だった。

『パルモン進化ー!!』

漏れた光は一筋の線となり、パルモンに真っすぐ伸びていく。

光がパールモンを包み込み、パールモンはくるくると回り出し大きな光になった。

『トゲモン！』

それは、大きなサボテンだった。

目と口を模した黒い穴が3つ。

両手にはボクシンググローブがはめられている。

頭に花が咲いていた可愛らしい姿が、まさかのサボテンに進化をして、ミミは二重の意味で啞然となった。

もんざえモンと同じぐらいの大きさになったパールモン、基トゲモンがのっしのっしと歩いていく。

相手は完全体だ。見かけによらず強いと言っていたのはパールモンなのに、勝てるのだろうか。

……いや、勝てる勝てないの問題ではない。

やるしかないのだ、トゲモンしか、残っていないのだ。

「トゲモン、頑張って……！」

デジヴァイスを握りしめ、ミミは必死に祈る。

光が、強くなった気がした。

『いくぞおー！』

グローブをばしばしと合わせ、やる気は十分だった。

先手を放ったのは、トゲモンだった。

雄たけびを上げながら殴りつけると、もんざえモンがたまらず仰け反る。

手ごたえはあったが、もんざえモンも負けてはいない。

柔らかくとも完全体のものであるパンチを、トゲモンにお返ししてやった。

そこから怒濤のラッシュである。

トゲモンがパンチをすれば、もんざえモンも拳を叩きつける。

まさに殴り合いだ。見た目はものすごく間抜けだけれども。

いつまでも続く殴り合いに飽きたのか、罅が明かないと悟ったのか、もんざえモンはビームを放とうと目にエネルギーを溜め始める。

それを、トゲモンが見逃すはずがない。

隙を見せたもんざえモンの顎にアッパーを決めると、身体中に生えているとげをもんざえモンに向かつて飛ばしてやった。

ぬいぐるみの身体とはいえ、たくさんのとげが身体中に刺さるのは溜まったものではない。

悲鳴を上げたと同時に、もんざえモンの背中にあるチャックがこじ開けられ、中から黒い歯車が飛び出していった。

『本当に申し訳ございません……』

項垂れるもんざえモンに、子ども達はもういいよって声をかけてやる。

お日様は既に傾いてオレンジ色に染まっており、おもちゃの町が時刻を知らせる鐘を響かせていた。

もんざえモンがおかしくなっていたのは、やはり黒い歯車のせいだったようだ。

いつの間にもんざえモンの中に入り込んでいたのやら、その辺りの記憶が曖昧で、結局分からなかった。

しかしもんざえモンがおかしくなっていたのは黒い歯車のせいだと分かったので、子ども達はこれ以上追及しないと行って、もんざえモンを許した。

『ミニさんの言ったとおりですね。おもちゃは、子ども達を喜ばせるためにある。それなのに私は、その子どもを泣かせてしまった……おもちゃの町の町長失格です……』

「もういいってば。全部丸く収まったんだから。なあ？」

『そうだね。だからもんざえモンも気にしない、気にしない！』

しかしそれでは気が済まないもんざえモン。

せめてものお詫びをと言って、赤いハートを子ども達に向かつて放った。

本来の効力を発揮する、ラブリーアタックだ。

ほよん、という音を立ててハートに包み込まれた子ども達は、今まで生きてきた中で最高の幸せ気分を味わっていた。

この世界を救ってほしい、と突如として異世界に飛ばされた子ども達。

心細くて、これから先どうなってしまうのかという不安に包まれながら始まった旅路だったが、たまにはこういう思いをしても罰は当たらないだろう。

今回の立役者とも呼ぶべきヌメモン達は、いつの間にか姿を消していた。

突然現れて助けてくれたかと思ったら、お礼も聞かずに去っていったしまった。

汚物系デジモン、嫌われ者と罵ったこと、少しは反省しているのだ。

今度会ったら人としてお礼はちゃんとしなくちゃね、とミミは赤いハートに包まれながら思った。

……そういえば。

「あのヌメモン、パタモンとプロットモンのことは知ってたのに、どうしてバイモンのことは青いのなんて言ったのかしら……?」
独り言ちたミミの疑問に、答えてくれる者はいなかった。

『……頼まれた通り、あいつらのこと助けてやったぜ』

おもちゃの町のお城が見える。

セピア色の草原からそのお城をぼんやりと眺めながら、ヌメモンは言った。

かさり、とヌメモンの背後に、 “誰か” が立っていた。

「うん。みてたよ。ありがとうね、ヌメモン」

『けっ。見てたんなら、自分で助けてやりやよかつたのに。俺様はデジモン界の嫌われ者だぞ？何だつてよりによって俺様に声かけたんだ？』

「うーん、すべてはよていちようわ、だからかな？ “あのこたち” がここにくることは、ずっとまえからきまってたから」

『まあたそうやって誤魔化すのか。まあいい。ちゃんと頼まれたことはやってやったんだ。さっさと例のもの、俺様によこしな』

「ふふふ、わかってる。はい、これ」

幼い子どものように舌足らずな “誰か” は、籠にどつきりと入った腐りかけている食べ物とヌメモンに差し出した。

ヌメモンは大喜びで、ハートまで飛ばしている。

『しっかし何だつて、陰から子ども達を見守るなんて、お前さんも物好きだねえ？何か思い入れでもあるのかい？』

籠に入った腐りかけの魚を1つ手に取って、ぽいっと宙に投げて口に入れながら、ヌメモンは “誰か” に問いかけた。

さわり、と風が吹く。

「……あいたいひとが、いるの」

『会いたい人？』

うん、と “誰か” が頷いた。

「でもいまはまだあえないの。まだ “そのとき” じゃないから」
だから、そのときがくるまでまっているの。

『……ふーん』

その声色が何とも言えない悲哀を漂わせており、ヌメモンは2つ目の魚を口にしながら、相槌を打ってやることしかできなかった。

生真面目くんの憂鬱

風が吹く。

木々の間を駆け抜けて、緑がさわさわと揺れた。

空に浮かぶはソフトクリームのように柔らかい雲。

とてもこの世界に、異世界の子供達が召喚されるほどの危機が訪れているとは思えなかった。

でも不安というのは、音もたてずにいつの間にか背後に忍び寄っているものである。

どれだけ警戒していようとも、闇はすぐそこまで迫っている。今も。

例えば常人では気づかないほどの小さな大地の揺らぎ。

例えば空気を擦るような音に乗って空を覆う黒い歯車。

漆黒に呑まれた空間には、光すら侵入を許されない。

大輔はそんな暗闇の中で、1人ぽつんと立っていた。

辺りを見渡しても、太一や治や空、ヒカリちゃんも賢も、そしてブイモンもない。

上も下も、前も後ろも右も左も、何も分からない。

身体に上手く力が入らないのは、何故だろうか。

ぼんやりと漆黒の向こう側を見つめていた時だった。

ぼう……。

小さな光が灯る。

大輔の顔ぐらいの大きさの光が、ふっと浮かび上がった。

ゆつくりと、大輔は右手を肩の位置まで上げる。手を伸ばす。
1歩、また1歩と、大輔は光に近づいていく。

ぼう……………。

光が大きくなる。

ふわり……………。

光の中に、「誰か」が立っていた。

ごちん、と頭に衝撃が走って大輔は目を覚ました。

ぎゃあつという悲鳴を上げて飛び起きた大輔は、ベッドのクツションではなく固い床の感触でベッドから落ちたのだと気づいた。

更に、大輔の悲鳴を聞いて先輩達が何だ何だと飛び起きてしまったので、慌ててすみません、って謝罪する。

莫迦野郎、って太一に頭をぐりぐりされた大輔は、本当にごめんなさい、って一生懸命頭を下げて何とか許してもらった。

時刻は7時頃。そろそろ起きてもいい時間帯か、って治の号令により、男子はのろのろと身支度を始める。

デジモン達は、まだ寝ていた。

それぞれのベッドヘッドにある2段の引き出しを開けて、子ども達は自分の着替えを取り出し、パジャマをその中に入れた。

ゲンナイがくれた機能のおかげで、衣と住を提供された子ども達は、こちらに飛ばされたその日から身に着けている服をずーつと着ていなければならぬ、という覚悟を持たずに済んだ。

使用した服は引き出しに入れておけば、光子郎のパソコンにしまわれた時にガードロモンというデータ化されたデジモンが洗濯をしてくれるらしいので、毎日新しい服を着ることができる。

太一なんかは、泥まみれになっても平気なことだよな、って何か

企んだ時の顔をしたらから、治と空がやるなよ？絶対やるなよ？って睨みを利かせる羽目になった。

「大輔くん、朝は大丈夫だった？」

とつくに支度を済ませていた女子と合流して、テントを光子郎のパソコンにしまい、子ども達はもんざえモンに礼を言つて再び旅立った。

もんざえモンの暴走を食い止めた子ども達は、是非にともんざえモンに押し切られておもちやの町で一夜を明かすこととなった。

夜になるまでちよつとだけ時間があつたから、遊ぶことにした子ども達は、久しぶりに心の底から笑顔になった。

それからもんざえモンが用意してくれた食事を口にして（果物がそのまま出されたが、ないよりはマシである）、シャワーを浴びて、遊び疲れた身体は一瞬で眠りについた。

そして男の子たちは、大輔の悲鳴で起こされることとなる。

「全然大丈夫じゃねーよお。頭ぶつけるし、太ーさん達にどやされるし、変な夢見るしでもう最悪だ！N a s t y！」

おもちやの町を旅立って、数時間。

頬を膨らませて、いかにも不機嫌ですという体を隠さない大輔に、ヒカリはくすくすと苦笑した。

「夢ってどんな夢？」

「んー……何か暗いところにいるさあ、明かりとか全然なくて、ここ何処だろーってぼーってしてたらいきなり光が浮かんで……そこに誰かいたんだよ」

『誰かって？』

ブイモンが問うが、大輔は納得いかないと言った様子で首を振る。

「分かんね。そこで目が覚めちまったから」

「……男の人？女の人？」

「それも分かんねー。分かったのは誰かがいたってことだけなんだよなー」

すると、大輔の話聞いて一瞬考えこんだ賢が、辺りを慎重に伺いながら小声で同い年の友達とそのパートナー達に告げる。

「……あのね、僕も夢を見たんだ」

『え？ケンも？』

「うん……大輔くんと、同じ夢」

「え？」

思っていたより大きな声が出てしまい、前を歩いていたミミとパルモンがどうしたの？って振り返る。

何でもないです、って3人と3体で慌てて頭（かぶり）を振って誤魔化す。

「そう？何かあつたらちゃんと言うのよ？」

『ブイモン達も、ちゃんとダイスケ達のこと見てるのよ？』

『分かってるよー』

どうも昨日の出来事から、ミミとパルモンは大輔達最年少に対してお姉さんぶりがついているような感じがする。

1番後ろを歩いている最年少達をちらちらと気にしては、少しでも異変があると先ほどのようになあにつて声をかけてくれる。

気にかけてくれるのは嬉しいのだが、どうにもむず痒かった。

地下水道を歩いていた時は、どちらかと言えば最年少達寄りの言動をしていたのに。

まあ、それはともかく。

「……俺と同じ夢って……真つ暗なところにいて、光の中に誰かがいたのか？」

「うん……僕もそこで目が覚めたんだ。多分、大輔くんがベッドから落ちたのと同じタイミングで」

「何だよ、俺のせいみたいに言うなよ」

「あ、ごめん。そんなつもりじゃなかったんだ」

「………私も」

『ヒカリ？』

「私も……同じ夢、見たの」

『ヒカリも？』

『えー？3人とも同じ夢？何かいいなー。俺もダイスケと同じ夢、見たかったなー』

ボクもーアタシもーってパタモンとプロットモンがブイモンに賛同しながら、それぞれのパートナーに引っ付くから、最終的にはじゃれ合って太一にこらーって怒られる羽目になった。

どれぐらいの時間が経っただろうか。

太陽はいつの間にか傾き始めており、気温がますます下がってきている。

進むにつれて肌寒い風が、剥き出しになっている大輔達の腕や顔を撫でつける。

はつくしよん、つてヒカリは盛大なくしゃみをして、肩を縮こませながら、擦り合わせた両手に息を吹きかける。

子ども達は、いつの間にか寒いエリアに足を踏み入れていた。

「暑い砂漠地帯を抜けたと思ったら、今度は寒冷地帯か……」

「うう、寒いわね……大輔達が風邪引かないように注意しないと……」

体温と気温差から白く染まった吐息を漏らしながら、治は辺りを見渡した。

キャンプ場は涼しいという天気予報から、念のため長袖を着ていた治はともかく、ノンスリーブの空は忙しなく腕を擦って体温を逃すまいとしている。

自分達だけならまだしも、身体の小さい2年生達も一緒にいるのだ。

もしも風邪など引いてしまえば、風邪薬など持っていないから処方してやることはできないのだ。

「……まあ、寒いのも悪かないよなあ」

2人の話を聞いていなかったのか、太一が頓珍漢なことを言い出したので、治と空は咎めるような眼差しを太一に向けたが、続く太一の言葉で態度を改めた。

「だーって雪が降ったら雪合戦できるじゃん！」

「雪合戦！いいですね！」

「寒いだけなのは憂鬱ですが、雪が降るとなれば話は別ですね」

ミミと光子郎も賛同する。

「デジモン達は雪合戦を知らないらしく、何それって子ども達に聞いてくる。」

食べ物かかって尋ねてきたテントモンに苦笑しながらも、光子郎は雪合戦が何たるかを教えてやった。

食べ物ではないと聞いた途端に興味を無くしたテントモン、アグモンと同じぐらいには食い意地が張っているから、呆れるしかない。

寒いことを懸念していた治と空だったが、やはりまだ小学5年生。

すっかりしているとはいえず子どもである、太一の前向きな考えを聞いたら少しポジティブになれたのか久しぶりに勝負でもしよう、つてはしやいでいた。

しかし丈は、そんな気分になれなかった。

はしやいでいる年下達を見て、困惑の溜息を吐く。

どうしたの、つて寒くなるにつれて元気を取り戻していたゴマモンが、項垂れている丈に話しかけた。

「全く、気楽なもんだよなあ。雪なんて降られたらたまんないよ」

『何でさ？オイラは寒いのも雪も大好きだよ？』

「君は、ね。見れば分かるよ、寒いのは平気なんだろう？ガブモンも。さっきつから元気じゃないか」

でも僕達人間はそうはいかないんだ、つて丈はゴマモンを抱き上げた。

「君みたいに寒さに適した身体をしていないから、これ以上寒くなったらまずダウンするのは大輔君達下級生だ。夜になるにつれてきつともつと気温も下がるだろうから、今日は早めにキャンプするべきだ。でも雪なんか降っちゃったら、それさえ難しくなる」

『テントがあるからいいじゃん？』

「だあかあらー！そのテントを何処に設置するのって話！雪の上に設置するわけにはいかないだろう？ゲンナイさんがくれたものとはいえ、

壊れたらシヤレにならないんだから……」

『ふーん?』

「それに食べ物だ。ゲンナイさんはそこまで用意してくれなかったから、食料調達は僕達でしなくちゃ。まあ君たちが食べられるものとそうでないものを教えてくれるから別にいいんだけど、こう寒いと木の実が生っているのかさえ怪しいよ。探すのも苦労しそうだつていうのに、太一達は どうしてああ呑気でいられるんだか……」

『……さつきつからどうしたんだよ、ジョウ? 何難しいこと考えてんだ? まだ起こつてもいないことで心配したつて、疲れるだけだよ?』

あのなあ! つて丈は ついつい語気を荒げた。

「行き当たりばつたりでどうにかなるつて思えるほど、僕はお気楽じゃないの! ここは僕達の世界とは違うんだ、慎重になるのも仕方ないだろう?」

『だーいじょうぶだつて! オイラがついてるんだから!』

「どっから来るんだ、その自信……とにかく、僕だけでもこれからのことはちゃんと考えてないといけないんだ、僕は1番年上なんだから……ゲンナイさんに頼まれた、この世界を救うつていう責務を果たして、みんなを無事に帰す義務があるんだから……」

険しい表情を浮かべながら、丈はゴマモンを抱きしめる腕の力を強めた。

白銀の世界である。

真っ白な絨毯が子ども達の前に敷かれており、緑の終わりを告げた。

遮るものが何もない雪原は、何者にもまだ踏み荒らされておらず、ただ美しい風景としてそこにある。

1歩踏み入れてみれば、さく、と新雪の音がした。

ほら見ろ、つて丈は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

丈が懸念していた通りになつてしまった。

一面雪景色は確かに美しいかもしれないが、キャンプをするには不

向きだしこのままだと体温と体力が悪戯に奪われるだけだ。

だからこそ、きちんと話し合いの場を設けなければならないのだが……。

「すっげー！雪だ！」

『ダイスケ！遊ぼう！』

「雪合戦しましょ！」

『やろうやろう！』

「パタモン、行こう！」

『待ってーケン！』

最年少3人とパートナーの3体が、遠慮なく白い絨毯に足を踏み入れる。

大輔は雪に手を突っ込むと、ぎゅっぎゅっつと押し固めて、雪玉を作った。

そしてその雪玉を、遠慮なくブイモンにぶつけてやる。

『ぎゃっ！な、何すんだよ、ダイスケ！』

「これが雪合戦だよー！それっ、今度は賢だ！」

「うわっ！やったな、大輔くん！パタモン！」

『それー！』

「わああああつ！お前それは反則だろ！」

「きやああ賢くんやめて！」

『痛い痛いパタモン莫迦！やめなさい！』

賢が素早く作った雪玉を、パタモンは2つ持って空中からぽいぽいと下にいる大輔達に放り投げる。

そこにミミも混ざって（パルモンは植物故なのか、雪原から遠いところにいる）、大変微笑ましい光景となった。

「……どうするよ、治？」

お友達と楽しそうにはしゃいでいる妹をぼんやりと眺めていた太一だったが、やがてその光景から目を逸らして隣に立っている親友に声をかけた。

ぴくり、と丈の肩が強張るが、誰も気づかない。

そうだなあ、って治は腕を組んで考え込む。

「前は雪原、後ろは岩山。どっちに進んでも詰むな……」

「今の私達は夏の装いだもの。このまま進んでも寒さで体力を奪われちゃうだけだわ」

「何処まで続いているのかも、分かりませんからね……」

5年生3人の話し合いに、光子郎も混ざる。

ただしその場にしゃがんで手持ち無沙汰に小さな雪山を作って遊んでいたが。

「だからっていつまでもここでグズグズしてるのもなあ」

「うん、お前と僕らだけならそれでもいいかもしれないけどね」

「わーかってるよ。俺だってヒカリの兄ちゃんなんだから、ヒカ리를危険な目に合わせるわけにはいかないって」

「分かってるならいいよ。さて、それを踏まえて。丈先輩、どうしますか?」

「え?」

突如として話しかけられて、半ばぼーっとしていた丈は虚を突かれた。

治が話しかけたことにより、太一と空、それから光子郎も、丈に視線を向けている。

全く準備していなかった丈はあたふたと口ごもったが、とりあえず。

「え、えーっと、とりあえずご飯、集める?進むにしても戻るにしても、そろそろ用意ぐらいはしておいた方がいいんじゃないかと……」

「ああ、それはいいですね。そうしましょうか」

「だな。まずは腹ごしらえしとくか」

「ん、賛成。おーい!みんなー!」

苦し紛れに意見を出したら、採用された。

何だか腑に落ちないが、特に突っ込まれることもなかったのと、とりあえず何も言わないでおいた。

『……あれ?ちよっと待って』

ミミに伴われて戻ってきた最年少とそのパートナー達に、丈の提案を教えていると、アグモンが鼻をひくひくさせながら口を開いた。

「どうした、アグモン？」

『何か変なにおいがする……』

『……そういえば』

『何だろう、これ？』

ピヨモンとガブモンも鼻をひくつかせて、漂ってくる臭いに顔を顰めた。

他のデジモン達も、アグモンに言われて臭いを嗅ぐと、眉をひそめてそれぞれのパートナーに寄り添う。

嗅ぎ慣れない臭いだったからなのか、警戒しているのが一目で分かった。

太一もすすんと臭いを嗅いでみる。

これは……。

「あ、太一さん！あれ！」

辺りを見渡していた光子郎が、何かを見つけたらしい。

子ども達が同時にそちらに目を向けると、雪が降り積もった木々の向こうから煙が上がっているのが見える。

敵襲か、とアグモン達は身構えたが、太一達は違った。

デジモン達にとっては嗅ぎ慣れない臭いだったかもしれないが、子ども達は違った。

これは、子ども達の世界でもよく知った臭いだった。

お休みの日に、お父さんとお母さんに車で連れて行ってもらった、あの施設や旅館で嗅いだことがある、懐かしい臭い。

「温泉だ！」

「温泉?！」

丈が叫ぶと、子ども達の顔が一斉に輝き、煙に向かって走り出した。ゲンナイさんが用意してくれたテントは、シャワーはついているが湯舟はない。

ジャワーだけでも汚れは落とせるし、さっぱりするのだが、やはり疲れを癒すなら湯舟にゆつくりと浸かりたかった。

だから子ども達は、とても喜んだ。

お風呂に入れる！ゆつくりできる！

しかし、現実はどううまくいかないものである。

煙を目印に、肌寒いのも忘れて雪原を走った子ども達だったが、辿り着いて沸き上がったのは歓喜ではなく、絶望だった。

近づけば、熱で周りの雪が解けているようで、ざらざらの地面が剥き出しになっている。

そしてぐつぐつぐつ、という泡が生まれては弾ける音。

完全に沸騰していた。これでは風呂として使えない。

「……とりあえず、ここなら寒さは凌げるかな」

「だな。じゃあ、食いモン探すか」

嘆いても仕方がない。お風呂に浸かれなかったのは残念だが、シャワーがあるのだから当分は我慢だ。

がっかりしているミミとヒカリには悪いけれど。

「……とは言っても、こんな辺り一面雪原の景色じゃあ、食べ物があるかどうか……」

「……あれ？ねえお兄ちゃん、あれって……」

賢が治の袖を引っ張って、指さした先にあつたものを見て、丈は愕然とした。

そこには、何故か冷蔵庫があつた。

一般家庭に普及している、よく見る型の冷蔵庫だ。

「何で……っ！非常識だつ、何でこんなごつごつした岩だらけのところに、冷蔵庫がっ！」

「何言ってるんですか、丈先輩。ここは僕達の世界じゃないんですよ？この前だつて、浜辺に電話ボックスが立ってたじゃないですか」

使えませんでしたけど、と治は至って冷静である。

そうだった、つて平静さを取り戻した丈だったが、それでもそう簡単に割り切れるほど、丈の頭は柔らかくはない。

小学6年生、来年には中学生になる丈は、既に社会のルールや常識がインプットされ、大人への第一歩を踏み出している。

子どもでありながら、大人であることを強いられるのが6年生なのである。

6年生が自分1人であるという現実、彼らの世界で生きるために

必要な常識という鎖に捕らわれ始めている丈にとって、とんでもないプレッシャーとなっていた。

年長者として、下級生達を導き、守らなければならないのだ。

終わりの見えない冒険の中で、いつ帰れるのか分からない不安と戦いながら。

しかし下級生達は、そんな丈の心境などお構いなしに物事を進めていく。

「……電気は通っていないな」

4年生と2年生を空に任せ、太一と治が慎重に冷蔵庫を調べる。

冷蔵庫も電気を利用して中身を冷たくしているから、電気が通っていないければ中身が冷やされずに腐っている可能性が高い。

浜辺にあった電話ボックスも同様だが、会話ができる相手と繋がらなかったという意味では、使うことができなかった。

ここにあるものは全て子ども達の世界にあるものと同じでありながら、使用できるのかどうか直前まで分からない。

だからこそ、まずは使えるのかどうか調べてからだ、という治の主張はあっさり通ったのだった。

「……開けるぞ」

「おう」

「ちよ、ちよっとー」

外観を調べつくした治のゴーサインで、太一は冷蔵庫の扉に手をかける。

丈が慌てて止めようとするも、1歩遅かった。

がちやり、と躊躇なく冷蔵庫の扉を開けた太一と、警戒を怠らないアグモンの目に飛び込んできたのは、冷蔵庫いっばいに並べられた卵だった。

目を輝かせる太一とアグモン。冷蔵庫は知らなかったのに、卵は知っているのか、という妙な好奇心が沸いた太一だったが、それよりもまずは。

「今日の夕食はこれで決まりだな！」

「ちよ、ちよつと待てよ！食べられるかどうか分からないのに！」

「だーいじょうぶだよ！毒見だったら俺がやるから」

「そういう話じゃなくて！食べられるにしても誰のものか分からないのに……！」

「丈先輩、落ち着いてください。ここには人間は住んでないんですから、誰のものでもありませんよ」

ヒートアップしていく丈を落ち着かせたのは、またもや治である。

う、と言葉を詰まらせる丈は、それ以上何も言うことができなかつた。

そして、項垂れる。どうして上手くいかないのだろう。考えても答えが出てこない。

ジョウ？って足元にいるゴマモンが心配そうに声をかけてくれたけれど、答える余裕もなかった。

顔を上げれば、太一と談笑している治の姿があった。

——どうして、こんなにも違うのだろうか。

丈と同じ真面目な方で勉強が好きはずなのに、どうして治はあんなに余裕でいられるのだろう。

幾ら言っても太一から返ってくるのは、丈が言いたいこととは少しずれている答え。

丈が言いたいのはそういうことじゃないのに、どうして太一は分かってくれないのか。

どうして治は、そんな太一に対してイライラすることなく会話を成立させることができるのだろう。

考えれば考えるほど深みにはまっていく。

だから、子ども達とデジモン達がウキウキとした様子で卵を取り出していくのを、丈は黙って見ていることしかできなかつた。

ゲンナイさんが子ども達のために用意してくれたテントを取り出

し、中からコンロになる持ち運びできる暖炉とフライパン等の調理道具と油、受け皿と箸を外に出した。

テントの中でやると煙が充満する恐れがあるからだ。

賢とパタモンで集めた枯れた枝を中に放り込み、ガブモンが火をつける。

フライパンを暖炉の上に置き、少し温めてから油をしく。

ここまで用意してくれているのなら、食べ物の方も準備してくれていたっていいのに、と治は不満に思ったけれど、口に出しても仕方がないので心にとどめておく。

はい、とヒカリに手渡された卵を受け取り、暖炉の角にこつんとぶつけて罅を入れると何と片手で卵を割った。

すごい、つて目を輝かせて覗き込んでくるヒカリに、危ないよって苦笑しながら忠告し、さりげなく遠ざけてやる。

熱せられた油と卵が美味しそうな音を立てていた。

「どれぐらい茹でればいいのかしら？」

「とりあえず10分ぐらいにしておきますか？」

光子郎とミミが、2つある籠にロープをそれぞれ結んで、子ども達とデジモン達の分をそれぞれ乗せると、沸騰している温泉に浸らせる。

治がテント中をひっくり返す勢いで探したお陰で、1分用の砂時計を見つけることができた。

「これを10回ひっくり返せば10分ですね」

「オッケー！」

まずは1分、とミミは砂時計をひっくり返した。

「そーつと、そーつとだぞ……よし！」

太一は丈とデジモン達と一緒に、手ごろな大きさの岩を運んできた。

こんなものどうするんだ、と丈が問うと、テーブル替わりにするんだよ、と、何を言っているんだと言いたげに返された。

こつちが何を言っているんだと言いたいが、太一と会話をするだけ疲れるので、あつそとだけ言っただけ言っただけを嚙む。

ちょうどいい具合に平らで、大きい岩の周りに、椅子替わりの小さな岩を運んできたのは大輔とブイモンだ。

全てのセツティングが終わったと同時に、ゆで卵と目玉焼き、卵焼きが完成する。

受け皿に適当に盛り付け、それぞれ席に着いた頃には、辺りはすっかり暗くなっていた。

いただきます、という太一の号令の下、子ども達とデジモン達は食事でありつく。

調味料がない上に、白米や他のおかずもない、卵だけの夕食というもの悲しいものだが、この際我慢だ。

あーん、つて大きな口を開けてまずは目玉焼きを頬張れば、久しぶりに調理されたご飯ということで、太一の胸にじーんとこみ上げるものがあった。

「うっめー！こんなまともな飯、久しぶりだぜ！」

「ほんつと、ゲンナイさんも、どうしてご飯用意しておいてくれなかったんだ……白いご飯が欲しい」

「あーやめて治くん。想像しただけで恋しくなっちゃう」

ねえねえ、つて5年生の会話を聞きながら、賢は大輔に話しかけた。一口で目玉焼きを食べてしまった大輔は、次に卵焼きに取り掛かっている。

ブイモンはと言えば、まるで掃除機がゴミを吸い込んでいるかの如く、すごい勢いで卵を次々口に放り込んでおり、プロットモンに怒られていた。

「んぐ……なんだ？」

「目玉焼きって英語でなんて言うの？」

「目玉焼き？えーつと、sunny-side upかな」

正確にはfried eggであり、sunny-side up、つまりサニーサイドアップは片面焼きで黄身は半熟のことを指す。

日本ではフライというと油で揚げるイメージだが、英語でいうフラ

イはバターや油で炒めることを言うのである。

また、焼き方によつて名称も変わるので、一概に目玉焼きイコールサニーサイドアップとは言えないのだ。

だが大輔は、そんな違いがあるということを知る前に日本に帰ってきてしまったので、サニーサイドアップが目玉焼きということしか知らないのである。

大きくなれば嫌でも勉強することになるだろう、ということでは、このメンバーの中では英単語の知識が誰よりもある治は敢えて黙っていた。

甘えさせても甘やかさないのである。

「やにーさいどあつぷ？」

「おう。Sunnyつてお日様のことなんだ。お日様みたいだから、Sunny—side up」

「なるほどー！」

『確かにお日様みたいだねー』

ねーつて賢とパタモンはにこにこしている。

そんな和やかな空気に包まれている中、丈だけが浮かぬ顔を浮かべていた。

『どうしたの、ジヨウ？ 食べないのか？』

「……ああ、家に帰ればこんな苦勞しなくていいんだなって思つて……」

発言してから、しまったと丈は口を噤んだがもう遅い。

和やかなムードが凍り付く音が聞こえる。

誰もが丈に困惑の眼差しを向けていた。

みんなが思つていて、でも誰も口にすることができなかったことだ。

いきなり異世界に飛ばされて、訳も分からぬまま島を巡つて、ゲンナイと名乗る男性に世界を救つてほしいと頼まれて。

まだ子どもなのに、キャンプをしに来ただけのただの子どもものに、一体どういった基準で自分達が選ばれたのか。

他の子どもではだめだったのか。

ここにいるみんなが思っていて、でも絶対口にははいけないって必死に抑えていたことを、よりによって最年長の丈が口にしてしまった。

静まり返ってしまうのも、無理はない。

「……アタシだって、お家恋しいもん」

不貞腐れたように口にしたのは、ミミだ。

この世界に来て、もう4日以上経っている。

3日間の工程で行われる予定だったサマーキャンプ、大人達はきつと大騒ぎしていることだろう。

今頃、警察の人達が総出で山狩りを行っているかもしれない。

必死に探し回っているであろう両親のことを思うと、胸が痛む。

「……パパ、心配してるかな」

ぽつりと落とすように、しかしみんなの耳に届いてしまった、賢の寂しい言葉。

ママではなくパパと言ったのは、恐らく離婚したせいでたまにしか会えない父親との久しぶりの団欒だったろうに、この世界に来たせいでそれができなくなっただからだろう。

……だがどういったわけか、大輔はパパと漏らした賢の顔に、違和感を抱いた。

それは、昨日地下水道を歩いていた時、自分達の世界に帰ったら何がしたいかと子ども達が各々口にしていた際、大輔がお姉ちゃんに会いたいと言った時に賢が抱いたのと、同じ違和感だった。

大輔は、賢が自分と同じような違和感を自分に対して抱いていたことに、全く気付いていなかった。

その違和感の正体を知るのは、もう少し後のこと。

「……ねえ、みんな！目玉焼きには何かけて食べる？」

どンドン沈んでいく空気を払拭しようと、空が務めて明るい声色で話題を変える。

帰りたいのは、みんな同じ。

でもゲンナイさんに頭を下げられたみんなは、決めたのだ。
決めるしか、なかったのだ。

世界を救って、みんな帰ると。

それしか帰る術がないのなら、世界を救うと。

拒否権など、ないに等しかった。事後報告とか酷すぎる。

でも不平不満や鬱憤は、次にゲンナイさんに会った時に全部ぶつけると決めた。

ゲンナイさんも、それでいいと、構わないと言ってくれたのだ。

今は、それでいいではないか。

「何かけるって、目玉焼きには塩コショウって決まってるじゃないか」それ以外何があるんだ、と言いたげに丈は空を見つめる。

すると他の子ども達もそれに乗っかかり始めた。

太一は醤油、治と賢はマヨネーズ、空はソース。

ここまでは普通だったが、光子郎がポン酢だと答えると微妙な空気が流れた。

しかしその上を行く者がいて、その答えにみな戦慄することになる。

「うえ、みんなおかしい！ やっぱ目玉焼きって言えばお砂糖よね！ アタシ、それに納豆かけたのもだーい好き！」

ひえ、と一同息を呑む。

砂糖はまだしも、納豆を乗せる？ 納豆は好きだけど、想像するのは脳が全力で拒否した。

「……え、えーっと大輔くんとヒカリちゃんは？」

顔を引きつらせながら賢が友達に問うと、ヒカリは太一と同じ醤油、大輔はケチャップと答えた。

普通の調味料に軌道修正されたことで、子ども達はこっそりと胸を撫で下ろしたのだが、丈はそうではなかったらしい。

「おかしい……みんなおかしいだろう！ 目玉焼きにそんな変なものかけるなんて……！ 日本文化の崩壊だよ！」

『……何訳の分かんないこと言ってるんだよ、ジヨウ？』

頭まで抱えだした。ゴマモンが至極当然のツツコミを入れているが、子ども達全員が思っていることだろう。

全員が困惑の眼差しを丈に向けている。

「だって目玉焼きには塩と胡椒だもの！ソースでもマヨネーズでもなく、塩胡椒！おかしいのは君たちだ！」

「……丈さん」

こちらが口を挟むのも憚れるほどの剣幕で、下級生達の間違いを正そうとしている丈に勇敢にも話しかけたのは、大輔だった。

箸先を口に咥えて、ぽけつと丈を眺めていた大輔に、全員の視線が向けられる。

「丈さん、卵焼きは何味が好き？」

「は？」

「オムレツとかオムライスは何かける？」

いきなり質問をしてきて、一体何なのだろうか。

しどろもどろになりながらも、真つすぐ自分を見つめてくる大輔の質問に答えるべく、丈はずれた眼鏡をかけ直しながら口を開いた。

「た、卵焼きは砂糖に決まってるじゃないか。オムレツやオムライスはケチャップだよ」

「じゃあ卵かけご飯は？」

「醤油だよ！どうしたのさ、大輔くん？」

「じゃあ全然おかしくないっすよね？」

「へ？」

「……大輔、何が言いたいんだ？」

きよとん、と首を傾げる大輔の真意が分からない。

太一が問いかけると、大輔が答える前に賢が合点がいったように声を上げた。

「ああ、そっか！そっか！そうだよ！全然おかしくないよね！」

『ケン？』

「丈さん、卵焼きもオムレツもオムライスも、卵かけご飯も全部目玉焼きと同じ卵料理だよ。だったらどうしてそれぞれかけるものが違うの？」

「な、何でって……卵焼きに砂糖も、オムレツやオムライスにケチャップも当たり前だろう？」

「……ああ、そういうことか」

賢の言葉で、ようやく大輔の真意を理解したらしい治が、彼らの言いたいことを代弁してやる。

「丈先輩、卵焼きに砂糖、オムレツやオムライスにケチャップ、卵かけご飯に醤油をかけるなら、目玉焼きにそれらの調味料をかけたって、おかしくはないですよ。ねって大輔と賢は言いたいんですよ」

元はどれも同じ、全て卵料理だ。

姿形や名称が違うだけで、材料は同じ。作り方が少々違っているだけで元は同じなのだ。

それなのに、名称が違うだけの本質は同じものであるのに、それぞれの料理にそれぞれの調味料をかけても辿り着く先は同じなのに、どうして目玉焼きにかけるものが自分と違うからと言って、そこまで深刻になる必要があるのだろうか。

「だ……だとしても、目玉焼きに塩胡椒をかけるのが一番美味しいし、日本人ならそうするべきで……」

「えー？そんなこと言ったって、俺アメリカで育ったし、アメリカじゃ何でもケチャップとかマヨネーズだったすよ？」

大輔に悪気はない。だって彼はアメリカからの帰国子女なのだ。

いくら日本専門店でも日本の調味料や材料を揃えて、家では日本食であつたとしても、アメリカのものを全く排除することなどできない。

大輔がアメリカにいた頃は、まだ日本食はそれほどメジャーではなかったから、海苔を巻いたおにぎりなんか持っていけば忽ち引かれてしまうし、最悪の場合いじめにまで発展してしまう。

だからお姉ちゃんがエレメンタリースクール（小学校）に通っていた時は、お弁当はサンドイッチ、または学校のカフェテリアでお昼を済ませていた。

外に出ればファーストフード店が軒並み経営しており、味だつてケチャップやマヨネーズを大量にぶっつけた、素材の味とはと問いかけたくなるようなものばかり。

そればかりはもう、文化の違いとしか言いようがない。

そう、文化の違いと一緒だ。

目玉焼きに醤油やマヨネーズ、ソース、ポン酢、砂糖、ケチャップをかけるのは、文化の違いと一緒なのである。

人は、みんなそれぞれ違う。

誰一人として同じ人などいない。

同じ調味料をかけるのでも、太一は全体にどばっとかけるがヒカリは黄身の部分にちよこつと乗せるように。

治は半熟の黄身を崩してマヨネーズと混ぜながら、賢はお皿に添えるようにマヨネーズの塊を出して、固めに焼いた目玉焼きを少しずつお箸で分けながら食べる。

兄弟姉妹でもこんなに違うのだ、他人ともなれば猶更味覚に違いがあるのは当たり前なのである。

……まあ、納豆に関しては何んでもおかしくはないが。

『……はあ、やれやれ。ジョウ、ちよつと落ち着きなよ』

「っ……」

ヒートアップしかけていた丈を宥めたのは、ゴマモンであった。

座っている丈の足を、白いヒレでペシペシと叩いてやれば、我に返った丈は下級生達からの視線で気まずそうに口を噤んだ。

『落ち着いた？じゃあ早く食べちやいなよ。せつかく料理したのに、冷めちやったらもつたないよ？腹が減ってるから、そんなカリカリするんだよ』

「別にカリカリしてるわけじゃ……はあ、まあいいや」

ちよつとずれた慰めをもらった丈は、どうでもよくなったのか食事を再開した。

おいらも食べよーとか言いながら、テーブルに身を乗り出して犬食いのように皿から直接目玉焼きを食べるゴマモンを見て、丈は何を思ったのか彼を膝の上に乗せてやった。

ゴマモンの身体の構造上、丈のように座って箸を使って食べるということができないのである。

更に石のテーブルはゴマモンにとって高さがあったので、テーブルに身を乗り出すようにしなければならぬゴマモンは、とても食べるにくそうにしていた。

何も言われずに膝に乗せられて面食らっていたゴマモンだったが、嬉しそうに礼を言つて目玉焼きを食べる。

最初こそ、丈はゴマモンを、いや、デジモン達を警戒していたが、今はすっかり警戒心を解いて普通に接している。

もうすぐ中学生という年齢故に、社会の常識を周りの大人から刷り込まれた丈は、元来の真面目さと頑固さも手伝つて、馴染むのに時間がかかった。

しかし丈の強みとも言えるのは、元来の真面目さではなく懐の深さである。

自分の常識に当てはまらないものを受け入れるのに時間がかかるものの、一度認めると全てを受け入れる度量の広さも併せ持っているのだ。

残念ながらら丈のその度量の広さを発揮させる機会は、もう少し後のことである。

それよりも今は気まずい空気が払拭されたことを悦び、食事を再開させるほうが先だ。

子ども達は再び食べ始めた。

夕食を終えた子ども達は、汚れた皿を雪で洗い流すという暴挙に至り、元あった場所に戻す。

コンロとして使った暖炉も、火を完全に消して中の炭を取り出して、テントの中にしたった。

沸騰した温泉地にテントを張ったお陰で、思ったよりも暖が取れそうだ。

少し休んで、順番にシャワーを浴びてから寝よう、ということになり、子ども達は各々好きなように休んでいる。

「ねえねえ、パタモンはどんなデジモンに進化するの？」

年代ごとや性別ごとに分かれて談笑している上級生達を尻目に、下

級生である大輔達はひと塊になって進化について話をしていた。

黄色い恐竜のアグモンは、オレンジ色で兜を被った大きな恐竜に、ガブモンは纏っている毛皮がそのまま大きくなったような狼に、といった具合で、各々の面影を残した進化を果たしている。

まだ進化していないのは、下級生と丈の4人だ。

賢の言葉をきっかけに、2年生の大輔達は己のパートナー達の、まだ見ぬ進化した姿に胸を馳せている。

『うーん、進化したことないから、分かんないよー。アグモンがグレイモンに進化するのだから知らなかったし』

『えー？自分のことなの？』

賢にそう言われて、ちよつとムツとなったパタモンは、頬を膨らませる。

『ケンだって自分のことはよく分かんないでしょー？だったらケンは自分が進化したらどうなるのか、知ってるの？』

『人間は進化って言わないよ。成長って言うんだ。……でもそうだね、パタモンの言う通りだ。僕、おつきくなつた自分が想像できないや』

ならばと大輔は話題を変える。

『どんな風に進化してほしい？俺はーそうだなードラゴンがいい！』

『どらごん？何だ、それ？』

『翼があつて、空を飛べるんだ！すっげー大きくて、グレイモンよりもおつきくて、火を吹くんだけー』

『空を？それってバードラモンのこと？』

『バードラモンは鳥だろ？ドラゴンは、えーつと空飛ぶトカゲ？』

『えー？何か間抜け』

『うっせーなあ！』

でもダイスケが、それがいいというのなら、それに進化したいなあ、ってブイモンは笑った。

『プロットモンは何だろう……犬みたいだから、ガルルモンみたいな大きな犬になるのかな？』

『さあ？ただどんなデジモンに進化しようが、アタシはそれを受け入

れるだけよ。ヒカリを守るためなら、アタシはどんなデジモンにだってなつてやるわ』

『そんなこと言つて。スカモンとかだつたらどうするんだよー』
『ボク知つてるー！そういうの、目も当てられない』って言うんでしょー！』

怒つたプロットモンによつてブイモンとパタモンが追いかけられるまで、あと1秒。

「丈先輩は、どう思いますか？」

夕方のデジャヴに、丈はまた頭を悩ますことになる。

事の発端は明日についての話し合いだ。

パチパチという薪の爆ぜる音をBGMに、子ども達は明日の行先について真剣に顔を突き合わせている。

というのも子ども達の行く手は前の雪原か、後ろのムゲンマウンテンという山の2択しかないそうさ。

次のエリアは雪原の向こう側、殆ど1本道のようなもので、元来た道に戻つておもちやの町まで引き返しても、そこから別のまだ行つたことないエリアには繋がっていない、ということらしい。

だから雪原を突つ切るか、ムゲンマウンテンに登るか、という相談をしていたのだが、意見がなかなかまとまらなかつた。

ムゲンマウンテンとは、このファイル島で1番大きな山のことである。

そこに登れば島を一望できるのだが、狂暴で気性の荒いデジモンがたくさん住んでいるし、アグモン達がまだコロモン達だった頃、山に住んでいる意地悪なデジモンがたまに山から下りてきて、コロモン達を追いかけまわして虐めていたこともあり、滅多なことでは近づかないそうさ。

そしてやはりというか、考えるよりもまず行動派の太一はムゲンマウンテンに1票入れた。

島の構造がよく分かつていないから、当てもなく彷徨う羽目になるのだ。

ちゃんと地図は頭に入れておいた方がいい、というのが太一の主張である。

それに賛成したのが、光子郎だ。

ゲンナイがくれたファイル島の地図は、地形や環境までは載っていないかったので、ちゃんと確認しておきたいという理由からである。

アグモン達の話聞いて、真っ先に反対したのはミミだった。

自分が怖いから、とか山登りは疲れるから、ではなく、大輔達をどうするのだという最年少への気遣いからであった。

最年少の3人のパートナーは、まだ進化ができないのだ。

それを懸念して、ミミは反対した。

これには太一や治だけでなく、空と光子郎と丈も驚いた。

この3日間、ミミはどちらかと言えば下級生達のように、ただ上級生達の決定事項を大人しく聞いているだけだったのに、今日のミミは積極的に動くだけでなく、5年生達の話し合いにも参加している。

一体どういった心境の変化だろうか。まあ人数は大いに越したことはないし、様々な意見があるのはいいことだ。

さて、と気を取り直し、空と治はミミの味方についた。

慎重派の2人らしい、と理解はするものの納得はできない。

ムゲンマウンテンには狂暴なデジモンが住んでいるから、3人が慎重になって反対するのは分かるのだが、だからと言ってここにいつまでもグズグズと留まってはられない。

ムゲンマウンテンがダメなら、雪原を突っ切ることになるが、きっと3人はそれも反対するだろう。

どっちもダメならどちらかしかない。

そして、上記の治のセリフである。

まだ丈だけが意見を提示していなかった。

下級生達全員から注目を浴びることになった丈は、最大のピンチを迎えている。

どうしよう、と冷や汗が流れるのが分かった。

2つ以上の解答がある問題を考えるのが、丈は苦手なのだ。

メリットとデメリットが同じ数だけある2つ以上の正解の道を選ぶのに、人の倍以上時間をかけて考えないと丈は決められないのである。

そして、散々悩んで選んで、やっぱりあつちにすればよかつたって後悔するのも多々あつた。

だが上級生として、最年長として、何も言わないわけにはいかない。

まずはメンバーの整理をしよう。

デジモンを進化がさせられるのは自分と最年少3人以外の、5人。進化できない数よりもできる数の方が多いから、それはカバーできるだろう。

最年長の自分ができないというのはかなり情けない話ではあるが。問題は最年少3人である。どちらに進むにせよ、まだ小さく進化させてやることのできない彼らを危険な目に合わせるわけにはいかないのだ。

それは太一と治もよく分かっているはずだ。

それなのに、太一は敢えて山に登るという選択肢を選んだ。

何か考えがあつてのことなのだろうが、それはひとまず置いておくことにして。

太一と光子郎は、全体を把握したいから危険を承知でムゲンマウンテンに登りたい。

治と空とミミは、最年少のことを考慮して気性の荒いデジモンが住むムゲンマウンテンには登りたくない。

両方の言い分は、どちらも正しい。

島の全体図が分からないから、危険を承知でムゲンマウンテンの頂上に登る。

狂暴なデジモンが住んでいるから、リスクは避けるべき。

さて、どちらを取るべきなのか。

賛成派と反対派の目が厳しい。

どちらも、自分達の方を選べというプレッシャーをかけてきている。

勘弁してくれ、と丈は心の中で嘆いた。

「丈？」

「丈先輩？」

太一と治が黙り込んだ丈を、キョトンとしながら見つめてきている。

いけない、と丈は頭を無理やり切り替えた。

しかし考えれば考えるほど、深みにはまる。

どうしよう、どうしよう。うんうん唸り、ふと空を見上げる。

満月は、既にてっぺんまで登っていた。

今何時か分からないが、確実にもう寝る時間のはずだ。

視線を下級生達に戻すと、その向こうで最年少の3人が舟を漕いでいるし、そのパートナー達も目をとろとろとさせていているのが見えた。

なので、

「もう夜だし、大輔くん達も眠そうだ。続きは明日にしないかい？」

丈にそう言われた太一達は、丈の視線の先を辿って振り返る。

さっきまで元気にはしゃいでいたはずの最年少とそのパートナーデジモン達は、もう完全に寝る体勢に入っていた。

「朝になってからもう一回話し合おう。今はとにかく寝るんだ。身体を休めなきゃ。僕らはゲンナイさんに頼まれた、この世界を救うっていう使命があるんだ。いざって時に戦えないのはシャレにならないよ」

「……そうね、丈先輩の言う通りだね。今日はいったん休みましょう」

「ヒカリちゃん、先にテントに連れてっちゃいますね」

「では僕は太輔くんと賢くんを」

「そうね、2人ともお願い。シャワーは明日の朝浴びせてあげましょ」

眠そうな下級生とそのパートナーを連れて、4年生2人と空はテントに入っていく。

まずはほっと一息ついた。

よかった、何とか誤魔化せた。

優柔不断で、正解が2つ以上の問題にぶち当たると思考が停止して

しまう丈にとつて、太一と治の相反する解答は、どう結論付けていいのか分からなかった。

どっちも正しいし、どちらも間違っている。

だから丈は、空達を見送ってから太一と治に謝罪した。

「ごめんね、先延ばしにするようなこと言つて。でもどちらにしても、リスクはあるだろう？僕はどちらかを選ぶのに時間がかかるから、君達が寝てる間にちゃんと考えとくよ。みんなを危険な目に合わせるわけにはいかないからね」

「いえ、こちらこそ急かすようなことをしてすみませんでした」

「おう。まあじっくり考えてくれ。俺も治も、意見を曲げるつもりはねえし、丈がどっち選んだって文句は言わねえから」

俺らも寝ようぜ、つて太一とアグモン、治とガブモンもテントに引っ込んでいく。

入れ違いで、空とピヨモンがタオルとパジャマを持って出てきた。

「これからお風呂かい？」

「はい。ミミちゃんも、疲れたから明日にするつて言つてベッドに入っちゃったんですけど、私はまだ眠くないので、シャワーを浴びてからにします。丈先輩も、もう寝ますか？」

さきほど太一達に伝えたことを、そのまま空に伝えると、分かりましたつて微笑んで、その後少し困つたような表情を見せた。

「二晩中考え込むのだけはやめてくださいね？ちゃんと身体を休めろつて言ったのは丈先輩なんですから……」

『大丈夫、大丈夫！オイラがちゃんとしてやるつて！』

「何でゴマモンが偉そうなんだよ」

胸を張るゴマモンに、丈が軽く小突いてやった。

いったいなあ、つて文句を言えば、痛いわけないだろ、軽くしてやったんだから、つて丈も軽口を叩く。

……夕飯時の、思いつめたような表情は、すっかり消えていた。

もう大丈夫だろう、と判断した空は、ピヨモンを連れてシャワー用のテントへと消えていった。

空は、それを後に後悔することになる。

ムゲンマウンテン

丈は3人兄弟の末っ子である。

小学6年生の丈と違い、上2人はもう高校生と大学生、大人として見られる歳だ。

だいぶ遅くに生まれた末っ子は、それはもう兄2人からも母からもたつくさん構われた。

丈が生まれた頃には兄2人は既に母親の庇護から離れていたせいか、母親が丈に付きつ切りになったとしても羨んだり妬んだりすることなく、それどころか積極的に面倒を見てもらったものだ。

勉強面でもそうだったし、将来の夢に関しても、兄2人は丈にとって目標であった。

丈の一家は医者の家系で、代々大手の病院でそれなりの地位についている。

母も看護師だし、大学生の兄は医大、高校生の兄も大学生の兄と同じ大学に通うべく、日々勉強している。

丈も、漠然とではあるが医者を志していた。

しかしそれは、親が強制したもので、丈が自分で決めたことでもなかった。

ただ何となく、家族みんなが医者だから医者になろうと思っているだけだ。

だが末っ子としてみんなに可愛がられてきた丈は、自分自身のことであるはずなのに、そんなことにすら気づいていない。

ただこの6年間真面目に、真つすぐに、がむしゃらに勉強していた。勉強していたせいで、周りを見る余裕もなくなっていた。

一心不乱に、自分を追い込むように勉強していた我が子を心配し、無理やりサマーキャンプに参加させたのは、母親の親心というもので

あろう。

丈からすれば、勉強する時間を取られるから余計なお世話なのが、まさに親の心子知らずである。

丈は気づいていないが、丈が医者を目指しているのは上2人に対するコンプレックスからだ。

2人とも優秀で、自慢の兄だ。

勉強だけでなく、スポーツの方面でもいい成績をたたき出している。

だからこそ、丈は劣等感を無意識に抱いていた。

末っ子でありながら真面目に振る舞うのは、そんな劣等感の裏返しである。

何の取り柄もなく、ただ2人の兄の後を追う形で医者を目指している丈は、真面目に振る舞うことしかできなかつた。

いつしかその振る舞いは気質として丈を形成する1つの個性となり、それがゆえに異質なものを受け付けられなくなっていく。

「AはAである」という固定概念から抜け出せず、クラスメートからも「真面目だけどつつきにくい」という印象を抱かれてしまい、遠巻きにされていることにも気づいていなかった。

夕飯時の会話からも、それが見て取れる。

すっかりしようと、みんなを導こうと振る舞えば振る舞うほど、空回りしてしまうのである。

無理もなかつた、最年長であつても丈は末っ子として育ってきた。

上2人の兄を手本として、兄達がやっているように振る舞ってきたはずなのに、なのにどうしてみんな言うことを聞いてくれないのだから。

どうしてあんなにも簡単に割り切れるのだろうか。

丈は気づいていない。

どれだけ兄達のように振る舞ったところで、しよせんは末っ子が行う真似っこ行動の延長戦に過ぎないことを。

丈は知らない。

そんな付け焼刃の“兄としての振る舞い”など、“本当の兄や姉”達ならすぐに見破ってしまうことを。

空とピヨモンがシャワー用のテントに入ったのを見送り、丈は夕飯を食べる際に椅子として使用していた手ごろな小岩に腰かけた。

『……ジョウ？』

「……ゴマモン、君は寝ておいで。疲れただろう？僕に付き合って夜更かしすることはないよ」

『そういうわけにはいかないよ』

そういつてゴマモンは丈の足元に座り込む。

『……あのさ、ジョウ。もうちよつと肩の力、抜いてもいいんじゃないか？』

遮るものが何もない夜空は、見たことのない星座を描いた星が散りばめられている。

何となしにそれをぼんやりと眺めていた丈は、不意にゴマモンに話しかけられて弾けるように足元を見た。

『ジョウはさ、自分が年上だからーとか言ってみんなの面倒見ようとしてるみたいだけど、オイラから見ても慣れてないんだなって分かるよ。どうして慣れてないことを、無理やりやろうとするんだ？何を焦ってるんだ？』

「……慣れてないからやらないっていう選択肢は、僕には最初からないんだよ。6年生は僕しかないんだ。全部が終わって無事に帰ってこれたとしたら、まず真っ先に叱られるのが僕なんだよ。6年生の貴方がついていながら、何をしていたのってね。理不尽だと思わないかい？」

『年上ってだけで？ジョウは何もしてないのに？ジョウが連れてきたわけじゃないのに？』

「そ。大人ってそういうもんなんだよ。しかも異世界に飛ばされました、なんてぜーったい信じてくれないさ……君たちは、現にこうして

「ここにいるのにな」

自嘲気味に笑いながら、丈は足元のゴマモンを抱き上げ、膝に乗せた。

海洋生物特有のぺったりとした毛に覆われた身体をぎこちなく撫でる。

ここは異世界であると治が推理してくれたお陰で、助けは求められないことは分かっていたから、そういった意味では余裕はあったのだ。

自分達の世界ではないから、ゴマモン達のことを受け入れることができた。

もしも治が言ってくれなかったら、丈は今でもここは自分達の世界の何処かについて、助けを求めたことを諦めていなかっただろう。

「何を焦っているのかっていうのは……僕達の旅は、きつとこれからもっと過酷なものになると思う。だって世界を救うなんて、そんな簡単なものじゃないだろう？この世界がどれだけ広いのか、世界を救うのにどれぐらいの時間がかかるのか、それは夏休み中に終わるのか……そういうことかな。僕達の都合なんかお構いなしなんて、あんまりじゃないか？」

『それで怒ってたのか、ジヨウは？』

「怒ってたっていうより、愚痴かな。うーん、何て言うか、世界なんて規模の大きなものを救わなきゃいけないし、どれぐらい時間がかかるのか分からないのに、みんな暢気すぎるよ。世界の危機はすぐ目の前まで急かっているのかもしれないに……」

そういったことが積み重なって、焦りを感じていた丈は目玉焼きの件がきっかけになって爆発してしまっただけらしい。

すぐに大輔と賢が不思議そうに質問を重ねてきて、更にゴマモンに宥めてもらったお陰で、すぐにその爆発は収まったのだけれど、今考えると本当に申し訳ない。

目玉焼きごときでメンバーの輪を乱すなんて、6年生としてあつてはならないことである。

「……それにさ、太一も治も、お互いのことすごく信頼し合ってる。太

一は僕がどれだけダメだつて言つても言うことなんか聞かないのに、治の言うことならあつさり聞いて、治は治で何をするのか聞く時は真つ先に太一を頼るし……」

むしろそちらの不満の方が大きいのだろう。

自分はメンバーの中で一番年上なのに、しつかりしなくては、他の子ども達をしつかりとまとめて、守らなければならないのに、太一は丈の言うことなんか耳も傾けず、一人で突つ走つてしまう。

そして、迷つた時は治か空からの助言を乞うのである。

年上の丈ではなく、同い年の治か空なのである。

確かに丈の目から見ても、治は冷静だし頭も要領もいい。

太一と治は親友同士だから、太一が治を頼りにするのも理解はできる。

だが何かを決める際に、丈ではなく治や空を頼るなんて、年上としてのメンツが丸つぶれだ、あんまりではないか。

そして治は、そんな丈がないがしろにされていることに気づいているようで、丈が意見を出しやすいように話を振ってくれる。

突つ走り気味の太一に対して頭ごなしになってしまう丈を、太一は鬱陶しがっているから年上なのに扱いがかなり雑なのだ。

そんな太一に気づきつつも、真正面から言えば間違いなく拗ねるか意地を張るだろう、ということとは容易に想像できた。

なので太一と丈の機嫌を損ねることなく円滑に物事を進めるには、みんなから意見を聞き出すという体で丈に振るといふ方法しか、治は思いつかなかつた。

5年生に舐められ、気を遣われているなんて、丈としてはプライドも何もあつたものではない。

自分は1番年上だからと必死に言い聞かせて、下級生達を導こうと頑張つた。

しかしどれだけ頑張つても全てが空回りし、気がつけば子ども達を先導しているのは1つ下の5年生達。

4年生の2人も、最年少の3人も、そしてデジモン達も、みんな5年生3人の後をついていく。

……自分は、何のためにいるのだろうか。

それが、丈は悔しいのだ。

一目で頼りないと察して早々に丈を切り捨てた太一と、頼りなくも年上であるということと丈に気を遣っている治と空。

確かに丈には太一のような判断力や決断力もなければ、治や空のように気配り上手でもない。

光子郎のように何かに特化しているわけでも、ミミのように場を和ませられるような性格でもない。

それでも、丈は6年生だ。1番年上なのだ。年下しかいない状況で、頼りにされたいと思うのは当然だし、8人分の責任が押し掛かって、プレッシャーを感じているのも、仕方がない。

『……ジヨウ? どうしたんだ?』

抱き上げていたゴマモンを地面に下ろした丈は、何かを決意した表情を浮かべながら立ち上がる。

シャワー用のテントをちらりと見やった。

空とピヨモンは、まだ上がってくる気配はない。

それを確認した丈は、男子が寝ているテントの前に移動すると、手ごろな石ころを手に持ち、地面に何かを書いた。

「……これでよし、と」

満足げに頷いた丈は、テントに背を向け歩き出した。

『ジヨウ?』

「ゴマモンは、ここで待ってて。僕はあの山に行ってくるから」

『はあ? 何言ってるの、1人で行くなんて無茶にもほどがあるって! あの山は……』

「知ってるよ。気性の荒いデジモンが住んでるんだろう?」

『じゃあ、何で……!』

「僕が、行かないといけないから!」

それ以外に理由なんてない。

自分は年上だから、6年生だから。

何かあったときに責任を取らなければならないのは、丈だから。

確かに丈は優柔不断である。

2つ以上の道があつて、どちらかしか進めないと言われたら、散々悩んで選択して、やっぱりあつちにすればよかつたつて後悔することは、多々ある。

だが丈は、やると決めたことは必ずやり遂げる、という意志の強さも持ち合わせていた。

短所は、長所である。頑固者と言われるほど頭の固い丈だが、それは逆に言えば意志の強さを表しているのだ。

決めるのに、やり始めるのに時間がかかるだけなのだ。

「じゃあね、ゴマモン。みんなのことよろしく」

『…………ふざけんなー！』

夕飯後に見せていた情けない顔は、同一人物とは思えないほどの決意に満ち溢れている。

そんな丈を、ゴマモンは腹立たしく思つて、叫んだ。

声を荒げたゴマモンに、みんなが起きたらどうするんだ、と丈は焦つたが、そんなのゴマモンの知つたことではない。

今、言わなければいけないことは。

『うだうだ悩んでたと思つたら、勝手に1人で決めちゃつてさ！何だい、何だい！オイラはそんなに頼りないのかよ！』

「ゴマモン…………？」

『ふざけんなよ、ジヨウ。オイラはジヨウのパートナーで、ジヨウのパートナーはオイラなんだ！オイラも行く！頼りないジヨウを1人になんかさせるかよ！』

前のヒレをばたばたさせながら言うと、ゴマモンは唾然としている丈を尻目に歩き出した。

他のデジモン達と違つて丈にはずけずけと意見を述べるけれど、それでもゴマモンだつて他のデジモン達と同じだ。

ずーっとずーっと、気が遠くなるような長い年月を、ゴマモンは待っていたのだ。

みんなで身を寄せ合いながら、いつ来るのかな、明日かな、明日だといひなつてみんなでわくわくしながら、ゴマモンは丈を待っていた

のだ。

それなのに勝手に1人で悩んで、勝手に1人で決めて、勝手に置いていこうとして、何て自分勝手なんだろう。

『タイチとオサムのこと、あれだけぐちぐち言ってたくせに、自分もオイラに同じことするなんて、酷いよ、ジョウ』

「……ごめん」

太一達が最年長の自分を差し置いて、勝手に突っ走ることに對して怒っていたのに、それなのに自分が同じことをするなんて本末転倒である。

ゴマモンに言われて気づいた丈は、素直に謝罪した。

あれだけ嫌だって、年下達が言うことを聞いてくれないって地団駄踏んでいたのに、されて嫌だったことをゴマモンにしようとしていた。

年下達はみんな、自分のパートナーだと名乗っているデジモン達を頼りにし始めているのに、丈はゴマモンに對して警戒心は解いているけれど、それは完全に信賴しているというわけではなかったのだ。

パートナーを信じていない者が、年下達から信じてもらえるはずがないのに。

『ねえ、オイラそんなに頼りない？ジョウの力になれない？』

「……いや、そんなんじゃないよ。僕だ、僕が僕を信じていなかった。頼りにしていなかったんだ。自分でも情けないって気づいていたのに、気づかないふりして、心に蓋をしてしまった……お前に対しても、心を閉ざしてしまっていたみたいだ、本当にごめんね、ゴマモン」

『ん、いいよ。連れてつてくれるんなら、許してあげる』

「分かった。行こう、ゴマモン。僕は、僕らは僕らにできることをやろう」

『そーこなくっちゃー！』

浮上した意識は、暗闇に閉ざされた視界の向こうに、淡いオレンジ

色の光を捕らえる。

ぐっすりと眠りこんでいたはずの大輔だったが、尿意を催して意識が引つ張られてしまった。

眠気と尿意が一緒に襲ってきて、ベッドの中で落ち着きなく何度も寝返りを打っている。

そういえば寝る前にトイレに行っていないなかったことを思い出し、渋々起き上がった。

このまま眠気に負ければ、翌日間違いなくベッドが大洪水を起こしているだろう。

小学2年生にもなっておねしょなんて、目も当てられない。

大輔はゆっくりと身体を起こすと、その振動がベッドに伝わって、一緒に寝ていたブイモンも起きてしまった。

どうしたの、って聞かれたから、トイレだって素直に言ったら、自分も行くと言つてブイモンもベッドから降りる。

しばしばする目を軽く擦りながら、最小限の明かりが灯されているテントを真つすぐ歩いた。

何となしに辺りを見回すと、太一と治、光子郎と賢がそれぞれのベッドで寝ているのがうつすらと見えた。

丈がない。テントをもらった初日、下級生達が寝るベッドを選んでいるのを見守つて、余つたベッドで寝ることになった丈の姿が、なかった。

明日をどうしようかと議論していた上級生の会話を知らない大輔とブイモンは、大輔の前にトイレにいるのかな、つてぼんやり考えるだ。

それよりも早く尿意をどうにかして、身体と脳が完全に覚醒する前にベッドに戻らなければならぬ。

お家でも時々尿意が勝つて夜中にトイレに駆け込むことがあるのだが、トイレが終わると必ずと言つていいほど目が冴えてしまう。

眠いうちに戻りたいのに、トイレが終わると頭がすっきりしてしまい、再び眠るのに時間がかかってしまう。

結果的に、翌朝寝坊してしまう。

よくお姉ちゃんに遅くまでゲームしてるんでしょ、つてからかわれているが、とんだ風評被害である。

……確かに止め時が分からなくて、夜中までゲームをして遊んでしまいうちもあるけれども、たまにだ。いや、時々？週に1回ぐらい？

テントを出る。濃紺の空はいつの間にか白んでおり、もう夜明けが近いことを報せていた。

大きな欠伸を1つ落とすと、それを拾ったブイモンも一拍遅れて大欠伸。

シャワーとトイレが1つになっている、3つめのテントに向かうと、同時に誰かが出てきた。

空とピヨモンだった。

「あら、大輔。おトイレ？」

「ふあ〜い……」

そして、あれ？つて気づく。ぱちりと目を覚ます。

トイレに行きたくて覚醒しかけて大輔の中でふらついていた意識が、ぴったりとはまる。

「丈さんは？」

「え？」

眠たかったけれど、テントの中の丈のベッドに丈とゴマモンがいなかったのは、ちゃんと覚えている。

もしかしてトイレにいるのかなってぼんやりと考えていたから、覚えてる。

だが実際トイレから出てきたのは空だ。

だから大輔はそのことを空に伝えた。空は困ったような表情を浮かべる。

「見間違いとかじゃ、ない？」

「そんな、絶対見間違いじゃないっすよ！な、ブイモン！」

『そうだよ！そりゃ、確かに眠かったけど、ゼーったい見間違いじゃないって！疑うなら来てよ！』

「そうだ、見てもらえばいいんだ！空さん、来て！」

疑っているわけではなく、確認のために聞いたのだが、大輔とブイモンはそうは捕らえなかつたらしい。

大輔が空の腕を引っ張って、男子のテントに連れていく。ピヨモンとブイモンが後を追う。

空は一瞬躊躇したが、大輔が構わずぐいぐい引っ張るので、仕方なしにテントに足を踏み入れた。

太一や治に何か言われたら、大輔に引っ張られたのだと言い訳しよう。

しかしそんな空の思考は、彼方へと吹っ飛ぶことになる。

ここ、ここ！って大輔が指さしたベッドはもぬけの殻であった。

どうやらこのベッドが丈とゴマモンのものらしい。

触ってみると冷たい。つまり丈とゴマモンはベッドに入っていないということだ。

……ならば丈は、何処に？

『ソ、ソラーちよつと来てー！』

テントの入り口で、ピヨモンが空を呼ぶ。

大きな声だったので太一達が起きてしまう、と空は注意しようとしたのだが、テントの入り口で待機していたピヨモンとブイモンが、視線を地面に向けている。

どうしたのだろうか、と空と大輔がテントの入り口に行くと、これとピヨモンとブイモンが地面を指さす。

そこには、几帳面な字でこう書かれていた。

———すぐに戻る。

この場を動かず待っていてくれ

丈

家族に引きずられる形で医者を目指している丈は、勉強こそできるもののスポーツはてんでダメという、典型的ながり勉くんである。

暇さえあれば机にかじりつき、教科書や参考書と睨めっこをしていることが多いものだから、国語や算数の成績はいいが、体育は5段階評価中1以上を取ったことがなかった。

別に医者になるのに体育は必要ないし、などと強がったものの、今ほどそのことを後悔したことはないだろう。

運動はできないでも、せめて体力はつけておくべきだった。

だが勉強の息抜きとして参加したサマーキャンプで、誰が誰も知らない大冒険を繰り広げることになるなんて思おうか。

ごつごつとした岩肌の山道は当然、舗装なんて親切な手入れはされていないはずがなく、デコボコとしていても歩きにくい。

キャンプのプログラムでも山登りはあったが、飽くまでも人の手が加えられた安全な山道のハイキングであり、1歩歩いただけで足を取られるような岩の道ではない。

子ども達が履いている靴も、長距離の移動に適した靴ではあるものの、こんなごつごつとした岩肌の道なんか歩いて、耐えられるだろうか。

自分達の世界に帰ったときにボロボロになっていたら、母に何と言いつくすればいいのだろうか。

「ぜえ、ぜえ、うえ……」

運動不足、慣れない山道、その他もろもろ積み重なってまだ4分の1も登っていないのに、丈の息は切れ始めている。

少し休んでは歩き、また少し休んでは歩きの繰り返しで、前に進んでいる感覚がなかった。

この調子では、頂上にたどり着く前に丈の書置きに気づいた子ども達が追いかけてきて、追いついてしまっただろう。

「うう、それにしても、ぜえ、大きな山だな、はあ、はあ……」

『何だい、はあ、もう根を、へえ、上げたのかい……ぜえ』

「……君にだけは、うえ、言われたくないよ」

まだ頂上は遠い。見上げると眩暈がしてきそうだが、ぐつとこらえる。

『ま、いざとなったら、よいしょ、オイラが手を貸してやる、よつと！』
「……それ手だったの？」

思わずと言った様子で眩けば、ゴマモンがじとりと睨みつけてきたので、慌てて冗談だと弁解した。

海洋生物のゴマモンの「ソレ」は手というよりはヒレである。

だからこそ、違いを正さないと気が済まない丈は、ヒレを手と称するゴマモンに疑問を抱いたのだが、ゴマモンにとつてヒレは人間の手であることに相違ないので、間違っではない。

また、ゴマモンの「ゴマ」はゴマフアザラシから来ているのだろうが、アザラシというよりはアシカかオットセイの方が近い気がする。アザラシは地上では腹ばいになって移動するが、ゴマモンは前ヒレを動かして移動しているのだ。

それはアシカやオットセイの歩き方に酷似していた。

「君はアシカなの？オットセイなの？」

『？オイラはゴマモンだよ？』

何となく気になって聞いてみるが、返ってきたのはいつものように不毛な答えである。

「いや、そうじゃなくて。それは知ってるけど、そのゴマモンは何科なの？」

『???』

「……ごめん、僕が悪かった」

ここは異世界だ。だからもしかしたら、丈の世界のように何々類何々科という分類がないのかもしれない。

ちなみにアシカは鰭脚類アシカ科である。

先に進む。岩肌の間を抜けるような小川を飛び越え、誰がかけたのか丸太の橋を危なげに渡り、洞窟を抜ける。

丈の足幅ぐらいしかない崖先を、背中を岩肌にくっつけて慎重に進む。

行き止まりになっている岩壁をよじ登り、道なき道を真っすぐ突き進んでいく。

登り切ったところで、流石に息が切れてきた丈とゴマモンは、その場に座り込んだ。

見上げたムゲンマウンテンは、先ほどよりは距離が近づいてはいるものの、まだまだ遠い。

だがやると決めたのだ。やっと半分近くまで登ってきたのだから、途中でやめるなんて選択肢は始めからない。

切れた息が整ってきたらまた歩き出そう、とゴマモンと並んで星空を眺めていた時である。

「……………う、わーな、何だ!?!」

『じ、地震!?!』

突如として揺れ始めた地面。下から突き上げるような振動に、丈とゴマモンは何事だと焦った。

近くでガラガラと岩が転がり落ちるような音がしたから、岩肌を背を預けていた丈達は慌ててその場から離れた。

地震大国と呼ばれる日本で生まれた丈は、避難訓練の時を思い出して持っていた鞆で守るように頭に乗せ、更にゴマモンを自分の傍に引き寄せた。

日本が地震大国と呼ばれるのは、地震を引き起こす原因とも呼べる「プレート」と呼ばれる真上に日本列島が位置しているから、というのは、本で得た知識だった。

ユーラシアプレート、フィリピン海プレート、太平洋プレート、そして北米プレートという、世界でも珍しい4つのプレートがぶつかり合っている真上にあるのである。

プレートは可視化できないほどゆっくりとした速度で動いており、一方のプレートの下にもう一方のプレートが沈み込み、そのプレートの境目で断層が生じ、地震が発生するのが主な原因なのだが、火山大国でもある日本には火山性地震というマグマの移動などの火山活動によって発生する地震も存在している。

だから丈は、ムゲンマウンテンが火山なのではと推測した。同時に、最悪の事態が頭を過った。

もしもムゲンマウンテンが火山なら、この地震は火山性地震である。

ということは、いつマグマが噴き出てもおかしくない。

種類にもよるが温度が1000度前後の高温である、熱いなんて言葉では済まされない。

これは避難をした方がいいのか、ゴマモンを抱えて元来た道に戻り、下級生達に知らせなければ……。

その時である。

岩肌の一部がまるで切り取られたかのように真つ二つになり、そして地響きを立てながらゆつくりと横にスライドした。

そしてその不自然に綺麗に切り取られた割れ目から、悍ましい闇の気配を漂わせた大量の歯車が飛び出してきたのである。

背後から綺麗な星空を漂う濃厚な闇の気配を醸し出している歯車を見た丈とゴマモンは、歯車が飛んできた方向に顔を向けた。

二つに分かれた岩肌が、またゆつくりと下に戻っていくのを見た丈とゴマモンは、その場に向かうことにした。

この山は、何かおかしい。

高い岩山の向こうから顔を出した太陽の光で、もう朝なのだ知った丈達。

そろそろ下級生達が目を覚ますころだろう。

そして、丈とゴマモンがいないことに気づいて、みんなで何処に行っただと探し回るだろう。

目立つところにメッセージを残したつもりだったが、テントの入り口ではみんなが入りする間に消されてしまう恐れがあったのを、丈は今頃になって思い立った。

どうかみんなが気づいてくれますように、と願いながら、丈とゴマモンは先ほど歯車が飛び出してきた辺りに到着した。

パツと見渡したところ、切れ目のようなものは見当たらない。

まるでナイフで切ったかのように、不自然なぐらいに綺麗に真つ二つにされていたのに、その切れ目が何処にも見当たらないのである。

おかしいな、ここではなかったのかな、と訝しみながらも丈がもつとよく探してみようと1歩踏み出した時。

『待って！』

ゴマモンが真剣な声色で丈を止めた。

見れば、険しい表情で辺りを伺っている。

どうしたの、って問いかければ、何か聞いてみると返ってきた。

耳を澄ませてみると、確かに何か聞いてきた。

何か、布のように柔らかいものが何度も空中に叩きつけられるような音。

岩山からすっかり顔を出した白く丸い光の向こうに、丈とゴマモンは天馬を見た。

朝の涼やかな風の中、美しいとはいえないがたいものの、丈の世界では想像上の生物として神話などに描かれている、背中に翼の生えた馬が、今まさに目の前を悠然と空を駆けている。

角が生えている赤いヘルメットを被り、翼は少々ぼろい黒、名前はユニモンというらしい。

神話などに全く興味がない丈は知らないのだが、ユニモンのモデルはユニコーンであって、ペガサスではない。

ユニコーンは頭部に1本の角が生えているのが特徴で、日本では一角獣と呼ばれている。

獰猛だが清らかな乙女が好きで、その懐に抱かれると大人しくなるという。

角には蛇などの毒で汚された水を清める力があるそう。

対するペガサス、あるいはペーガソスはギリシア・ローマ神話に登場する翼を持つ馬で、日本語では天馬である。

海の神・ポセイドンとゴルゴン3姉妹の三女・メデューサの子で、英雄ペルセウスによって首を落とされたメデューサの首の切り口から生まれた。

そのペガサスを元にしたデジモンは、およそ3年後に登場することになるのだが、それは後に語ることになるだろう。

今までデジモン達の情報を信じていたら酷い目にあつた結果しかなかった丈は、ユニモンは大人しいから大丈夫だというゴマモンの言

葉を信じる事が出来ず、彼を抱きかかえて近くにある岩壁の窪みに身を隠した。

だが丈の心配とは裏腹に、ユニモンは優雅に着地を決めると、岩山を伝って流れ落ちていく小さな滝に首を近づけ、水を飲み始めた。

どうやらユニモンの水飲み場らしく、丈はほっと胸を撫で下ろす。

ほら見ろ、とゴマモンは鼻を鳴らしたので、苦笑しながら謝罪した。本当に大人しいデジモンなので、恐らく丈が近づいて撫でたりしても怒らないだろう、とゴマモンは言いながら静かに歩み寄る。

流星にそんな勇氣は持てないので、ゴマモンを止めようとした時。

一難去つてまた一難、というのはこのことだろう。

空気を擦るような微かな音を聞きつけ、水を飲んでいたユニモンは顔を上げ、耳を忙しなく動かした。

ゴマモンの耳もそれを捕らえたようで、ピタリとその動きを止める。

“ソレ”が良くないものだどゴマモンの本能が警鐘を鳴らし、警戒心が一気に膨れ上がった。

悪意が、山の眼下に広がる森の間を駆け抜けている。

ユニモンとゴマモンだけに聞こえていた微かな音は、やがて大きくなっていき、食物連鎖の頂点に立つてしまったことで敵に対する本能などが鈍くなっている人間の丈の耳にも、それは聞こえてきた。

不安そうに辺りを見回す丈とは裏腹に、ゴマモンは一点を見つめている。

音がする方角が正確に分かっているようだったが、丈は気づかない。

静まり返っている空間が、一層不気味だった。

空気を擦るような音が近づいてくる。

それは、上の方から聞こえてきた。すっかり昇りきった朝日が眩しくて、腕で影を作りながら目を細めて上を見上げた時、丈は“ソレ”

を見た。

「あれは……！」

『黒い歯車だ！さっき飛び出していったやつか!？』

不気味な音をかき鳴らし、濃厚な闇の力を漂わせた黒い歯車は、丈とゴマモンなどには目もくれず、真つすぐユニモンの下へと急降下していった。

警戒しながら事態を見守っていたユニモンは、自分めがけて急降下してきた黒い歯車に反応することが出来ず、黒い歯車はあろうことかユニモンの背中に突き刺さった。

半分ほど埋まった歯車に、丈は自分のことのように表情を顰めたが、今はそれどころではない。

闇の気配をまとった歯車から漏れ出す邪悪なエネルギーに浸食されたユニモンの、ヘルメットの奥にある目が怪しく光った。

ゆっくりと、その首をもたげ、丈とゴマモンを視界に捕らえたユニモンは、地響きを鳴らしながら丈達に近づいてくる。

大きく口を開けると、水色のエネルギーが収束・放出された。

丈とゴマモンの頭上を通り過ぎて、岩壁に当たると派手な爆音を轟かせながら崩れていく。

丈は咄嗟に覆うようにゴマモンを庇った。

背後を見れば、自分達のすぐ後ろの道が抉れている。

あんなものを溜まったら一たまりもない、と丈は息を飲んだ後ゴマモンを抱えたまま走り出した。

ゴマモンはまだ進化が出来ない。何とかしてほしくとも、何とかしてやりたいとも、今の2人ではどうすることもできないのだ。

再びユニモンがエネルギー弾を撃ち出してきた。

走っている丈のすぐ上を狙って撃ち出されたエネルギー弾は、岩を抉って幾つもの破片が雨のように降り注がれる。

丈は、ゴマモンを抱えて慌てふためきながらも懸命に走る。

ゴマモンが降ろせと喚いているが、走っていることに夢中な丈は気づいていない。

早く逃げないと、ユニモンはすぐそこまで追いかけているのだ。

しかし運動不足に加え、不運体質の丈はとことんついていなかった。

再び放たれた技によって、丈達が走ってきた道が崩れてしまったのだ。

何とか瓦礫を乗り越えたものの、ユニモンは翼を悠然と羽ばたかせながら、丈とゴマモンの前を塞ぐように降り立つ。

行く道も来た道も塞がれた丈。逃げ場はない。

急速に集められたエネルギーの塊。眩さと絶体絶命という絶望に、丈とゴマモンは咄嗟に目を瞑る。

だが、ユニモンの技が2人を包み込むことはなかった。

2人の頭上を圧縮されたエネルギーが通り過ぎるのを感じ、恐る恐る目を開けると、そこにはユニモンに体当たりをして岩山に押しつぶしている火の鳥がいたのである。

「バ、バードラモン!？」

空のピヨモンが進化したデジモン、バードラモンだった。

その足には、太一とアグモン、そして空がしがみついていた。

「丈先輩！」

「助けに来たぜ！」

「太一！空くん！」

駆けつけようとしたと同時に、バードラモンがユニモンから離れると、お返しとばかりにエネルギー弾を放つ。

近距離から技を放たれたバードラモンは、まともに食らってしまい、岩肌を滑り落ちるように墜落していつてしまった。

空が悲鳴を上げながら、墜ちていったバードラモンの後を追って崖を滑り落ちる。

今度はアグモンがグレイモンに進化し、ユニモンと対峙したが翼があるユニモンは空へと逃げてしまった。

地上戦なら負けなしのオレンジ色の恐竜だが、これでは手も足も出ない。

更に進化した後の隙をつかれ、背後から思いっきり体当たりされてしまった。

もろに食らったグレイモンは、バランスを崩して岩肌に叩きつけられる。

崩れた岩壁と道の窪みに落ちた太一だったが、幸いお椀のように湾曲になっていたために、滑り落ちることはなかった。

『メガフレイム!!』

大きな火の塊を吐き出したグレイモンであったが、空を飛んでいるユニモンは嘲笑うかのように悠然と宙を舞いながら、それを避ける。

エネルギー弾を岩山に吐き出し、振り注がれる岩の雨。

グレイモンは太一を守るので精一杯だった。

空中戦ならやはりバードラモンの方に分がある。

叩き落されたバードラモンは、何とか空へと舞い戻ると、炎の雨をユニモンに向けて撃ちだしたのだが、進化を果たしたばかりのバードラモンと、それよりもずっと前に天馬として空を駆けていたユニモンとでは、経験の差は歴然としていた。

炎の雨を軽々と避けながらバードラモンに近づき、ユニモンは体当たりをする。

再び落とされたバードラモンは、あろうことか空の下に落ちていき、空を巻き込む形で更に下へと転がり落ちてしまった。

何もできない丈とゴマモンは、助けに来てくれた仲間達をただ見ていることしかできない。

何て、無力なんだろう。

太一と治と空に上級生としてのお株を奪われ、光子郎のように何かの特化したわけでもなく、ミミのように空気を変える才能があるわけでもなく、ただ“ここ”にいるだけの6年生。

それは、それだけは嫌だったから、だからこそ丈は自分に何かできないかと思ってゴマモンと2人だけでこの山に登ったのに、結局ユニモン相手に逃げることしかできず、助けに来てくれた仲間達を助けることもできず、指をくわえて見ているだけ。

——いや、そんなことはない。

やると決めたら必ずやり遂げる、意志の強い子どもは諦めない。
何か、何かあるはずだ。

パートナーを進化させることが出来ない自分でも、何かやれることがあるはずだ。

この山に登ろうと決めた時のように、何か……。

不意に、ユニモンが視界を横切る。

丈の目に飛び込んできたのは、その背に半分ほど埋まった黒い歯車。

「……あれだ！」

丈は叫んだ。

大人しく、水を飲みに来ただけのはずのユニモンがおかしくなったのは、あの黒い歯車が突き刺さったすぐあとだ。

あれがユニモンをおかしくさせているんだ。

思えばデジモン達が賢くて大人しいと教えてくれたにも関わらず襲い掛かってきたのは、黒い歯車が原因ではないか。

アンドロモンももんざえモンも、あの黒い歯車が身体から抜けてから正気に戻っていたではないか！

やると決めたら、必ずやり遂げる。

丈の行動は、早かった。

『ジヨウ!?何してんの!!』

立ち上がったかと思えば、丈はユニモンが視界を横切るタイミングを見計らって崖から飛び出していった。

驚きのあまりゴマモンが声を張り上げるが、丈は聞いていない。

危なげに飛び降りた丈は、黒い歯車にしがみつく形でユニモンの背中に乗る。

「これを……これさえ外せば……」

やると決めたら必ずやり遂げる子は、もう歯車を外すことしか考えていない。

深く突き刺さった棘を抜くためには痛みを伴う。

邪悪に心を染めてしまったユニモンは、歯車が突き刺さっている痛みなどきつと感じていない。

だが引き抜こうとする痛みは、どうだろうか。

へっぴり腰になりながらも、丈が腕に力を入れて歯車を抜こうとした時、激痛がユニモンを襲う。

嘶きながら空中を暴れまわるユニモンだが、丈は引き抜くのをやめない。

痛いかもしれないけれど、これが外れなければユニモンはずっとこのままだし、仲間達も危ないのだ。

『ジヨウ、止める!!無理だよ、幾ら何でも!!』

「ダメだ！僕が、僕がやらなきゃいけないんだ!!」

ゴマモンが制止するが、丈は止まらない。

歯車を外すということしか、今の丈の頭の中にはないのだ。

一番面倒なこと、大変なことは年上が率先してやらなければならぬ。い。

丈の2人の兄達は、いつもそうだった。

自分は兄だからって、面倒なことも笑顔で引き受ける姿を、丈はいつも見てきた。

だから丈も、この無謀な冒険の中で最年長として、面倒なことを、大変なことを引き受けようと決めた。

それが年上としての務めだから。みんなを守らなければならないから。

「うわあっ!!」

奮闘空しく、丈の身体が空中に放り出される。

重力に逆らうことも許されず、放り出された丈の身体は悲鳴を置いてけぼりにして落下していった。

『ジヨオオオッ!!』

目の前で落ちていく、守るべきもの。

ゴマモンの悲鳴にも似た咆哮が、ムゲンマウンテンに響いた。子ども達が危機に陥った時、デジヴァイスは光り輝く。

『ゴマモン進化!!』

光に包まれたゴマモンの身体に、0と1が降り注がれていくのを、丈は見た。

光の卵から生まれたのは、白い毛に覆われ、大きな牙を生やした、巨大なトドだった。

『イツカクモン!!』

灰色の地面に死を覚悟した丈だったが、白い地面が突如として現れ、そして柔らかく受け止められる。

岩に叩きつけられる痛みではなく、クッションのような柔らかさ。

少々ごわついた毛の触感に、助かったのだと安堵したと同時に、上空を睨みつける。

イツカクモンのすぐそばまで高度を下げていたユニモンに、イツカクモンは鋭い角が生えた頭部で頭突きをお見舞いしてやった。

取るに足らないと思っていた成長期が突如として成熟期に進化したことに驚いていたユニモンは、その頭突きをまともに食らって空中に飛ばされた。

だが途中で何とか踏ん張り、エネルギー弾をお返ししてやる。

それを難なく躲したイツカクモンは、頭部の角をユニモンに向けた。

『ハーブーンバルカン!!』

まるでロケットのように火を吹きながら発射された角は、真つすぐユニモンに向かっていったが、それを嘲笑うかのようにユニモンはフラフラと避けてしまう。

悔しそうに顔を歪めた丈だったが、イツカクモンはにやりと笑った。

飛んで行った角が真つ二つに割れ、中から更にミサイルが出てき

て、先ほどよりも早いスピードでユニモンに向かって飛んで行ったのである。

完全に油断していたユニモンは、背後からミサイルを何発も食らって、白煙を上げながら落ちていった。

同時に、背中に突き刺さっていた歯車が抜けて、細かい粒子になって消滅した。

闇をまとった黒い歯車が外れたことにより、邪悪に染まっていたユニモンの心は正気を取り戻し、慌ててその場から飛び去って行った。

つかの間の休息

「ねえ、太一さん。どうして丈さんのこといつも呼び捨てにするんですか？」

それは、丈とゴマモンがいないことに気づき、空が太一達を叩き起こした際のことだった。

みんなで辺りを探したけれど何処にもいなくて、もしかしたらムゲンマウンテンにゴマモンと2人だけで登ったのでは、という結論に至った。

自分は決めるのに時間がかかるから、ムゲンマウンテンに向かうか否かは、明日になってから決めようと言い出したのは丈だったのに、その丈が自分で言い出したことを無視して、1人で向かってしまうなんて、一体何を考えているのか。

太一が呆れながら丈に対して悪態をついていたら、大輔がふと口にしたのだ。

太一はヒカリと、賢は治と、そして大輔は光子郎と一緒に辺りを探していた。

何処にも見当たらず、一度テントに合流して、話し合っていた時のことだった。

突然、思ってもいなかった質問をされた太一は、虚を突かれたように大輔を見下ろす。

そんな太一に気づかず、大輔はこう続けた。

「太一さん、俺が呼び捨てしたらすつごく怒ったのに、どうして太一さんは丈さんのこと呼び捨てにするんですか？」

雷に打たれたとは、まさにこのことだろう。

そういえばアメリカから転校してきたばかりの時、大輔は日本語が分からなかったから、日本の暗黙のルールなんて全く知らなかったから、太一のことを呼び捨てにしたことがあった。

年上にはさんをつけると、先輩って呼べと太一は大輔にすぐ怒っていたのに、その太一自身が年上である丈を呼び捨てにしている。あまりにも自然で、あまりにも無意識だったから、誰も指摘しなかった。

丈がもう少し頼りがいがあって、自分の意見をはつきりと言える性格だったら少しは違っていたかもしれない。

しかし最年少の大輔から見ても、丈はあまりにも頼りなさ過ぎた。太一と治と空がさっさと意見を述べたり、決定するのが早すぎて、丈が口を挟む隙すら与えなかったというのもある。

しかしお姉ちゃんと同じ年であるという事実が前提にある大輔としては、丈にはさんをつけて敬語で話すのは当たり前だった。

それなのに、太一は平気で呼び捨てにし、敬語も使わない。

敬うも何もあつたものではない態度が、大輔はどうしても不思議だった。

上下関係に疎いデジモン達は頭上にたくさんの疑問符を浮かべていたが、子ども達はそういえば、つて顔をして太一に視線を向ける。

太一は、言葉に詰まった。

何と答えたらいいものか、分からなかったのだ。

大輔にはちゃんと敬語を使って、先輩として敬えて言っているのに、自分がそれをしていないのである。

サッカー部の先輩には一応敬語は使っているけれども、それ以外は基本的に敬語は使わない。

同じサッカー部の治と空、光子郎はサッカー部以外の先輩にも敬語を使っているのに。

それが太一の性格である、たとえばそれまでだが、自分が使っていないのに大輔には使えてというのは不公平なのではないだろうか。

「どうしてですか？」

大輔は再度尋ねる。大輔の疑問に引つ張られた賢とヒカリも、大輔と同じような眼差しを太一に向けていた。

「……お、治」

「お前のごとだろう。僕に聞くな」

助け船を求めた相手は、その手を振り払ってしまった。

じとり、と睨みつけてくるその目は、責めているようにも見えないや、実際責めているのだろう。治がそれとなく、そしてさりげなく丈をフォローしてやらなければ、きっと太一は丈を差し置いてどんどん先に行ってしまう。

太一は、切り捨てたものには容赦をしないのだ。

振り返ることも立ち止まることも、してくれないのである。

ここに飛ばされた時、よりにもよって晒したのが情けない姿だったから、太一は早々に丈は頼りない存在であると判断して、切り捨ててしまったのである。

それが、丈を無意識に呼び捨てすることに繋がっているのだが、太一は恐らく気づいていない。

捨てたことにすら、太一は気づいていないのである。

「……丈先輩が頼りないのは同意だが、年下の前でそういう態度はよくないぞ」

「うう……」

最年少3人に詰め寄られて、逃げ場を失った太一に、治はずーっと思っていて、でも指摘できなかったことをようやく口にした。

仕方なかったのだ、もしもこんな状況ではなく何でもない日常の中で指摘したとしても、太一は絶対に聞く耳を持たなかっただろう。

基本的に治の言うことは聞く太一だが、自分が決めたことに対して口を出されたり窘められたりすると、余計に意固地になってこじれてしまう。

治は、それをよく知っていた。知っていたから、言えなかった。こうなってしまったのは、太一と喧嘩をしましてでも指摘すべきだったのに、それを怠ってしまった自分も悪い、と治は反省する。

なので、

「太一はね、丈先輩のことを対等に見てるからなんだ」

「たいとー?」

きよとん、と最年少3人は同じ方向に、同じタイミングで首を傾げる。

え、ちよ、ま、つていきなり胡散臭いにこやかな笑顔で語り出した治に、太一は慌てるがその口を塞ぐように右手を思いつきり伸ばして太一の顔に押し当てた。

ばちん、という音がしたのは多分気のせい。

「そう、丈先輩は6年生だけど、1人しかいないだろうか？みんなも、お母さんから年上のお兄さんやお姉さんの言うことはよく聞きましようって言われてるだろうけど、こんなに人数が多いと、丈先輩1人じゃまとめきれないから、太一はその負担を半分こしてあげたくて、わざと呼び捨てにしているんだ」

「そうだったんですね！」

「そっかー、太一さん優しいね！」

「お兄ちゃん、ちゃんと考えてたんだ」

「お、おう……！」

治の強引なこじつけにより、何とか誤魔化すことが出来たのだが、キラキラとした眼差しを向けてくる最年少に、罪悪感が半端なかった。

バードラモンに乗って迎えに来た空に伴われ、山の麓で待っていた治達はムゲンマウンテンを登る。

気性の荒いデジモンが住んでいるから、と辺りを警戒していたパートナー達だったが、丈とゴマモンが頂上付近までは何事もなく登っていたのが証拠であるように、1匹も野生のデジモン達が現れて、襲ってくる気配がなかった。

いつもなら麓にいても殺気めいたような気配が漂ってくるのに、それすらなかったことを思い出して、デジモン達は首を傾げている。

最年少達が危険な目に合わなくて済む、とミミは安心してはいたが、いつもと様子が違うということに、治は引っかけかりを覚えていた。

危険がないのは何よりだが、普段は気性の荒いデジモン達がうろつ

いているのに、今日に限って1匹もないというのは、却って不気味である。

いつもと様子が違うことを、ラッキーで済ませてはいけない気がするのだが、今はとりあえず頂上で待っているであろう太一達と合流する方が先だ、と治は先を急いだ。

島で1番高い山は阻むものが何もなく、360度を見渡すことが出来る。

ゲンナイから聞いていた通り、絶海に浮かぶ孤島であるファイル島の周りには、何もなかった。

ある程度の覚悟はしていたものの、実際に見せつけられると秘めていたはずの覚悟があっさりと言を立って崩れていくような錯覚を覚える。

だが泣くのは後回しだ。泣いて現状がどうにかなるものではないことぐらい、子ども達にも分かっていた。

パソコンを開いた光子郎は、ゲンナイがくれた地図を開いて、大まかではあるがエリアを区切って情報を打ち込んでいく。

ここに来るまでに通りがかった場所にはそのエリアの特徴やどんなデジモンがいたのか等が事細かに書かれ、まだ行っていない場所は山の上から見下ろしたときに見えた特徴だけを書き記していた。

アンドロモンがインストールしてくれたガードロモンやメカノリモンのデータが、光子郎がやっていることを感知して自己判断で手伝いをしてくれたおかげで、思っていたよりも早く終わった。

「……これでよしっ」と

「できたか？」

「はい、粗方ですが。あとは立ち寄ったときにまた色々と書き込もうと思います。今は場所が把握できればいいので……」

「よし、じゃあ降りるかー!」

太一の号令により、子ども達は下山を開始する。

道中で気性の荒いデジモンと出会わなかったせいか、子ども達の間には登山の際に抱いていた緊張感は殆どなかった。

「……なるほど、それで太一は僕を呼び捨てにしてる、ってことになったんだね」

1番前を歩く太一と丈は、丈とゴマモンが2人だけでムゲンマウンテンを登っている最中にあつた出来事を話していた。

黙って行くなんて水臭いぞ、という話から発展して、それから太一は唐突に丈に謝罪をしたのだ。

一体何のことか、一瞬本気で丈は分からなかったのだが、大輔がぶつけてきた質問で、自分があまりにも無神経だったことに反省したことから謝罪だったようだ。

「そりゃさ、丈は頼りねえなって思ってたよ。6年生なのに、どっか抜けてるし。……でもだからって蔑ろにしてたつもりはなかったんだ、ごめんな」

「……いや、こつちこそ、何も言わずに勝手なこととしてごめん。みんなを守らなくちゃ、って思ったら居ても立っても居られなくなっちゃってさ。みんなをまとめなきゃいけない立場なのに……」

「じゃ、お互い様ってことで」

「……あれ、おい、太一！」

太一と丈のすぐ後ろを歩いていた治が、何かに気づいて太一を呼び止める。

何だよ、って振り返ると、治があれ、って指をさした先が、崩れていた。

まるで切り取られたかのように、道にぽっかりと穴が開いていたのである。

来た時は何の異変もなかったのに。

「どうする?..」

「確か、反対側にも降りれるような道あっただろ。あっち行こうぜ」
頂上には、降りる箇所が2つあった。

子ども達は元来た道を戻って雪原のエリアに降りる予定だったのだが、これでは雪原のエリアには戻れそうもない。

もう1つの下山ルートから山を下りようと、道を引き返した時だった。

ぶうーん、という空気を擦るような、不快な音が聞こえて、デジモン達はぴたりと立ち止まる。

忙しなく辺りを伺って警戒していたら、なんと上空からクワガーモンが襲ってきた。

何で、ってデジモン達は驚いたが、真つすぐこちらに向かって下降してくるクワガーモンの狙いは、間違いなく自分達である。

子ども達の真上をスレスレで通り過ぎて、再び上昇していく。

クワガーモンは森に生息するデジモンで、ムゲンマウンテンには生息していないはずだ、とテントモンが叫んだ。

ここにいないはずのクワガーモンが、何故ここにいて、しかも子ども達に襲い掛かってくるのか。

賢い治は、最初に出会ったクワガーモンでは、と太一に進言する。クワガーモンは、なかなか執念深いデジモンである。

1度狙いを定めたら、相手が力尽きるまで追い回してくる、厄介なデジモンだ。

だから子ども達が命からがら逃げだした、あのクワガーモンが子ども達を偶然見つけてまた追い回しに来たのでは、と治は推理したのだ。

そうだとしたら、なんて面倒な相手なのだろう。

だがあの時とは違う。成長期に進化したアグモン達は、更なる姿を手に入れた。

遅れは取らない、相手が空を飛んでいる、ということによってバードラモンに進化できるピヨモンをパートナーに持つ空と、カブテリモンに進化可能なテントモンをパートナーに持つ光子郎が、デジヴァイスを手を取った。

だがピンチは連続してやってくるものである。

ピヨモンがバードラモンに、テントモンがカブテリモンに進化し、空へと飛翔したと同時に、途切れた道の向こうから咆哮が聞こえた。

振り返ると、そこにいたのはデジモン達が揃って大人しいと評価していた、モノクロモンであった。

大きく跳躍して途切れた道を渡り、子ども達に向かって突進してくる。

気性の荒いデジモンが住んでいるはずのムゲンマウンテンで、登山中に1体もデジモン達が襲ってこなかった。

そして下山の際に、ここにいるはずのないクワガーモンと、大人しいはずのモノクロモンが襲ってきた。

嫌な予感的中した、と治は苦い表情を浮かべる。

子ども達はパートナー達を進化させるべく、デジヴァイスを手にする。

最年少の3人とそのパートナー達は、まだ進化できないので丈とミミによって引つ張られ、都合よく鎮座していた大岩の陰に押しやられた。

バードラモンとカブテリモンがクワガーモンを追い払うように追いつ立てるが、クワガーモンは去る気配がない。

それどころか、大きく旋回してバードラモンに向かって頭部のハサミを鳴らしながら向かってきた。

何とか躲すと、カブテリモンが助太刀に入り、電撃の玉をクワガーモンに叩きつけてやる。

地上では、突進してきて止まる気配のないモノクロモンを、グレイモンが押しとどめていた。

ガルルモンとトゲモンは、背後にいる子ども達を守るためにグレイモンの後ろで控えていた。

イツカクモンは空で戦っているバードラモンとカブテリモンの援護である。

『いい加減、どっか行きなさい！』

バードラモンが苛立たし気に叫び、羽にエネルギーを集めてクワガーモンに火の玉の雨を浴びせてやる。

もうあの時の、クワガーモンに怯えて隠れてやり過ぎしていた、力のないデジモンではない。

クワガーモンと同格か、それ以上の体格と力を得たのだ、負ける気

はしない。

実際、バードラモンが放った火の玉の雨はクワガーモンに直撃したし、グレイモンもモノクロモンを押ししている。

そのまま追い払つちまえ、と太一がグレイモンを鼓舞した時であった。

彼らの頭上で突如として鳴り響いた轟音。次いで、ガラガラと何か硬くて重いものが崩れる音。

は、と子ども達が一斉に上を向くと、崩れた岩が斜面を転がり落ちてくるのが見えた。

ガルルモンとイツカクモンが技を放つて、転がってきた岩を粉碎する。

地面が揺れ、子ども達は岩にしがみついたり、しゃがんだりして何とか耐える。

うわ、とブイモンがたまらずバランスを崩し、それを見た丈は……思わず手を伸ばしてしまった。

『あー!』

『ジヨウ、ダメ!!』

丈が伸ばした手を見たパタモンとプロットモンが止めるが、もう遅い。

丈の手は、ブイモンの背中に触れてしまった。

『っ!!』

肌と肌が触れる。程よい体温が、ブイモンの背に添えられる。

赤い目を見開き、ひゅ、と息を飲んだブイモンの悲鳴は、転がり落ちてきた岩が、ガルルモン達の技によって粉碎される音でかき消された。

「……ふう。みんな、大丈夫か?」

粉碎された岩だったものは細かい砂となって、子ども達に降り注ぐ。

岩に身を隠さず、グレイモンを応援していた太一は、隠れていた子ども達に声をかけた。

「……僕らは、な」

ひよこ、と顔を出した治は、険しい表情を浮かべている。目線は、すぐに逸らされた。岩陰の向こうを向いているが、隠れている誰かに向けられているようだった。

治だけではない、岩陰から顔を覗かせた、ミミと空、それから光子郎も困ったような表情を隠さず、太一と岩陰を交互に見つめている。何かあったらしいと察した太一は、岩陰を覗き込んだ。

最年少3人と、パタモンとプロットモンがうずくまっているブイモンを囲み、その傍らで丈が申し訳なさそうに項垂れている。

「……何があったんだよ？」

「……さつき、岩が崩れた時に……」

事情を話せば、太一は呆れたように溜息を吐く。

ブイモンに触れてはいけないと、最初の夜に話し合っていたのに、そう子ども達に言い聞かせていたのは丈だったのに、それをすっかり忘れていたようだ。

だが無理もないだろう、あの夜からみんな極力ブイモンには触れないようにしていたし、それ以外は本当に普通だった。

だから、すっかり忘れてしまっていた。

覚えていなければならぬ大事なことだったのに、あんまり普通だったものだから、そして次から次へと子ども達に襲い掛かる試練を乗り越えるのに必死だったから、頭の中から抜け落ちてしまった。

何やってんだ、と言いたげに太一が睨めば、面目ない、と丈はますます項垂れる。

自分がやったことを柵に上げて丈を責めているが、丈だって悪気があってブイモンに触れたわけではなく、むしろ条件反射のような形だったのだ。

これ以上責めてもしょうがない。

それよりも、

「あ、アグモン！」

モノクロモン相手に奮闘していたグレイモンは、いつの間にかアグ

モンに退化して、その場に倒れこんでいた。

アグモンだけではない。ガブモンもパールモンも、ピヨモン、テントモン、そしてゴマモンも、ぐったりと伏している。

慌てて太一が駆け寄ってアグモンを抱き起せば、大丈夫という力のない言葉が返ってきた。

無理もない、アグモンとピヨモン、そしてゴマモンにとっては今日2度目の進化だ。

「……そういえば、クワガーモンとモノクロモンは？」

テントモンに駆け寄っていた光子郎がふと呟く。

空を見上げても、道の向こうを見つめても、2匹の陰は何処にもなかった。

クワガーモンはともかく、モノクロモンの影も形も見当たらないのはおかしい。

先ほどの崖崩れに巻き込まれたのか、と丈は崖の下を見下ろす。

木々が広がった緑の絨毯しか見当たらないが、いかにモノクロモンと言えど落ちれば一たまりもない、という高さだ。

助かった、と子ども達が安堵する中、最年少の3人は岩が崩れた辺りを見上げていた。

「……………」

『……ケン？どうかした？』

未だ震えているものの、先ほどよりは落ち着いてきているバイモンの背中を撫でていたパタモンは、パートナーとその友達が黙って上を見上げていることに気づいて声をかけた。

しかし返事はない。

プロットモンと顔を見合わせ、もう一度声をかけようとしたら、弾けるように上から顔を逸らして、賢はパタモンと、ヒカリはプロットモンを抱き上げ、そして大輔はまだ震えているバイモンの手を取って崖から離れた。

『……ダイスケ？』

『ケ、ケン？』

『ヒカリ？どうしたの？』

その顔色は、とてもではないがよくなかった。まるで怖いものや嫌なものを見たような、恐怖で引きつっているような表情。

賢とヒカリは真っ青で、大輔は恐怖を押し殺しているように見えた。

いきなり岩陰から飛び出して崖の上を睨みつけた最年少に、子ども達は目を丸くする。

「おい、大輔？どうした？」

「……太一さん、早く降りよう？」

太一が代表して声をかけると、だんまりだった大輔が崖から目を離さずに答える。

「大輔？」

「……お兄ちゃん、また崖が崩れたり、さつきみたいに他のデジモン達が襲ってきたら、危ないよ。早く降りようよ」

治も大輔を呼ぶと、賢が治の手をぎゅっと握ってきた。

その手は、微かに震えている。

ヒカリも似たようなもので、太一にたーつと向かって行って、ズボンを握りしめながら引っ付いた。

ヒカリに抱き上げられているせいで、太一とヒカリに挟まれて、プロットモンは苦しそうに押し潰されている。

最年少の様子に、ミミがみんなを急かした。

きつとデジモンに襲われたことと、急に崖が崩れたことで、大輔達は怖がっているのだと主張して、早く山を下りるべきだと。

最年少をこれ以上怖がらせてはいけない、というミミの主張により、上級生達も、それもそうだなって納得して、急いで下山した。

『……ねえ、ヒカリ。どうしたの？』

お兄ちゃんにしがみついて離れないせいで押し潰されているプロットモンは、何とか顔だけ抜け出して小さな声でヒカリに尋ねる。

プロットモンを抱きしめている腕の震えが、伝わってきている。

何とかしてあげたくて、プロットモンは顔を摺り寄せたが、ヒカリは答えない。

賢もパタモンを左腕で抱きながら、右手はしっかりと治の手を握っているし、大輔もブイモンと手を繋いでいて、離さない。

上級生達は怖がっているのだろうな、って判断していたけれど、ブイモン達はいつもと様子が違うパートナー達に、デジモンに襲われたり崖が崩れたりしたせいで怖がっているのではない、と直感的に気づいていたのだが、何度問いかけてもパートナー達は答えてくれなかった。

やっと下山した頃には、もう日が傾いてオレンジ色に染まり切っていた。

相変わらず不思議な色をした夕方の空だが、漂流生活が5日ほど経とうとしている子ども達は、子ども故の柔軟性ですっかり慣れ切ってしまったている。

それよりも心配すべきは、デジモン達だ。

デジモン達が守ってくれているお陰で子ども達はマシなのだが、連日戦闘の日が続いており、更にアグモンとピヨモンとゴマモンは、その間を置かずに2回目の進化を果たした。

ブイモンとパタモン、プロットモン以外のデジモン達の顔は、疲れ切った色を隠さない。

足元はフラフラで、今にも倒れそうだ。

このままでは、他のデジモンに襲われた時に戦うどころか逃げることもできない。

元気なのはまだ進化を果たしていない最年少のパートナーデジモン3体、そのうち1体はまだ小刻みに震えて、項垂れている。

それでも、下山している間にいつもの調子を取り戻した大輔が、仕切りに声をかけてやることで何とか落ち着いた状態だ。

つまり、実質動けるのは、パタモンとプロットモンのみである。

2体とも持っている技に殺傷能力はない。

これ以上は無理だ、ということ、何処か少し開けた場所でテントを張ろう、ということになり、子ども達は立ち止まる。

子ども達が今いる場所は、左右に森が分かれた道の上。

他のデジモン達の通り道でもあると思われるので、こんなところでテントを出すことはできない。

何処かいい場所はないだろうか、と辺りを見渡していた時に、丈が森の奥を指さして悲鳴を上げた。

明らかな人工物のそれに、子ども達は走り出す。

近づいていくにつれて、それは夢幻などではなく、現実のものであると理解した子ども達の心は、安堵に満ちていた。

それは、大きな館であった。

おとぎ話や、テレビのヨーロッパ特集なんかで見るとような、洋式の建物だったのである。

深い森の中に、不自然なぐらい自然に溶け込んだ、立派なお屋敷だった。

館の前は人の手が加えられたように整備されており、溜息すら漏らすのを躊躇うほどに荘厳だった。

素敵、つてメルヘンチックなものが大好きなミミが両手を口元で組んでお屋敷を見上げる。

「……………どう思う?」

「……………繋がらない電話、湖に放置されていた電車、沸騰した温泉地に置いてあった冷蔵庫……………あれと似たようなものだと思う」

人がいるはずのないこの世界で、野生動物のように生きているデジモン達がいるこの世界で、いかにも人が住んでいますと言った様子を隠さない屋敷に、太一と治が警戒心を抱く。

丈も似たような表情をしているを見るに、手放しで歓迎はしていないようだ。

自分達にはゲンナイからもらったテントもあるし、今更寝るところで困ることはないのだが……………

「……………入ってみるか?」

どうせ人間はいないのだ、だったら屋敷に勝手に入ったところで咎める者は誰もいない。

調べるだけ調べて、特に異変がないのならここで一泊すればいい。

どちらにしろ、疲れているデジモン達を休ませないといけないのだから。

太一が子ども達に尋ねると、全員が頷いたので、屋敷に入ることにした。

否、全員ではなかった。

「……………」

『……ダイスケ？入らないの？』

未だ震えて、大輔と手を繋いでいるバイモンが、みんなの後を追おうと1歩踏み出したのだが、後ろに引っ張られたような感覚がして立ち止まる。

引っ張られたのではなく、大輔が動こうとしなかったからだと感じていた。

大輔だけではなかった。

賢も、そしてヒカリも。

それぞれのパートナーを抱いて、館を見上げている。

その表情は……崩れた崖を見上げていた時と全く同じだった。

『……ダイ、』

「なあバイモン」

大輔が、口を開く。

「何か、変な感じしねえ？」

そう言っつて、大輔は館から目を離さない。

しかしバイモンの手を握っている大輔の手は、力を入れすぎてバイモンとは別の意味で震えていた。

そんな大輔を訝しみながらも、バイモンは大輔が言った「変な感じ」とやらを探ってみる。

『……別に、変な感じはしないよ？』

しかし大輔の言う「変な感じ」を、バイモンは何も感じなかった。

変な臭いや、何か敵意を持ったデジモンの気配などを探ってみたが、何も分からないのである。

だから素直にそう言ったら、驚いたような、でもすぐに納得したような表情になって、ブイモンの手を引いて太一達の後を追った。

賢とヒカりは、大輔がどうするのか見守っていたようで、大輔が走り出した後を慌てて追ってくる。

シンプルながらも重厚なドアの取っ手は、金の細工が施されている。

太一が代表してドアを開ければ、静まり返った館内は仄かな光源で灯されていた。

暗い赤の絨毯に足を踏み入れる。

2階へと通じる階段が右側にあり、どの部屋も固く閉ざされていた。

「ふーん、特に変わった様子はないな……」

「ま、今更何が現れても、もう驚かねえよ」

ぐるりと辺りを見渡して、治が言う。

静まり返った館内は一種の不気味さすら感じるが、どう見ても人間の建物にデジモン達が住処にしているとは思えない。

中也綺麗で、散らかっていないところを見ると、野生のデジモンがいる気配は見受けられなかった。

「わー！綺麗な絵！天使様の絵だわ！」

ミミが歓喜の声を上げる。

エントランスの正面の壁には、淡い色使いの、天使の絵がかけられていた。

優しく暖かみのある絵に目を奪われてはしゃいでいるミミを見て、子ども達は警戒するのも莫迦らしくなったのか、無意識に浅くなっていた息を深く吐いて、肩の力を抜く。

「とりあえず、何か異変はないか調べましょ」

「そうだね。ここで寝泊まりするかどうかは、それからでも遅くはないだろうし」

「ここなら野生のデジモンに襲われることもないわよね」

すっかり安心しきってしまった子ども達は、扉を閉めて館内を散策

することにした。

だが、おかしいのだ。

どう考えてもおかしいのだ。

誰も気づかなかった、丈でさえも、そして治でさえも。

人間がいはいはずのこの世界で、どうしてこんなに立派なお屋敷が立っているのか、もっとよく考えるべきだったのだ。

ゲンナイが、ここにはデジモンしかいない、人間はいない異世界だつて言っていたのに、人間が住むために建てられたような館が、あ
るはずがないのに。

それだけではない、建物は人間が使っている気配がないと、朽ちる
のが早いのである。

人間がいはいはずのこの世界で、まるで今さつき建てられたような
新品の館、塵一つ落ちていない、汚れていない館内。

人がいないはずの館内が不自然なぐらいに綺麗であることに、違和
感を覚えなければならなかったのに、誰一人として気が付かなかつ
た。

9人いる子ども達は、3人1グループで分かれて散策する。

太一と治と空はもつと奥を調べてくると言つて、疲れているパート
ナー達を引つ張つていった。

丈とミミと光子郎は、1階の部屋を中心に見て回る。

そして大輔達最年少は、2階へと上がつていった。

「……………」

『コウシロウはん？どないしはりました？』

「え？あ、いや……………」

天使の絵の隣にあった部屋の扉を開け、丈とゴマモンがまず部屋に
入る。

壁についているスイッチを押して、電気をつける。

丈とゴマモンが入り、危険がないかを確認してから光子郎達に入る
ように促す。

ミミとパルモンはそれに従ったが、光子郎はいつの間にか開いたパソコンと睨めっこをしていて、丈が呼んだことに気づかなかつた。

光子郎は何か熱中すると周りの音を遮断してしまう癖がある。

なのでテントモンは、丈が呼んでいるのに何の反応も見せない光子郎が気になって、ポンと肩を叩きながら声をかけた。

接触があったことで流石に気づいたらしい光子郎は、我に返ってテントモンを見下ろす。

何だい、つて聞くと、ジヨウはんが呼んでますよ、と返した上で尋ねた。

『何や、考え事ですかいな』

「あー、うん……ちよつと、気になっちゃって……」

『何がですかのん?』

「うん……ムゲンマウンテンの頂上で、ゲンナイさんからもらった地図と上から見たファイル島を照らし合わせて、大まかな地図を作っただろう?」

でも、と光子郎はパソコンを操作する。

ディスプレイに映し出されている、3Dのファイル島の地図が、ぐるぐると回ったり、拡大されたりした。

「でも、上から見た時、こんな建物見なかった。見てたら、僕が書き零してるわけではないもの」

『うーん……?森で隠れて見つからなかったんとちやいます?』

「……それもあるかもしれないけれど」

しかし腑に落ちない、と光子郎の表情は険しい。

確かに崖から目元だけを覗かせて見下ろしたただけだから、きちんと見たと言いきるのことはできなかつたが、一面森で、屋敷の建っている箇所だけがぽつかりと開いていたら気づくはずだ。

深い森の中で、ぽつんと建って子ども達を待っていたかのように、突如として現れた洋式の館。

この違和感は何だろう。まるで自分達が来るのを待ち構えていたかのような……。

そこまで考えて、光子郎は頭（かぶり）を振った。

まさか、幾らここが異世界だからと言って、そんなことありえないだろう。

考えすぎて疑心暗鬼になっているだけだ。

「光子郎？大丈夫か？」

「……はい、すみません。大丈夫です」

特に何も異変のようなものはなかったと判断した丈が、部屋に入らずに外で待っていたらしい光子郎に声をかけてきた。

パソコンを閉じて、何でもなかったかのように取り繕い、次の部屋に行こうと促す。

悪戯に不用意なことを言っ、丈を心配させたりミミを怖がらせるのは本意ではない。

幾ら光子郎でも、そのぐらいは弁えていたので、何でもないと行って誤魔化した。

2階の大輔達を纏う空気は重い。

ずーっと表情は強張っているし、足取りだって軽いとは言えなかった。

いつもの大輔からは考えられないような、慎重な足取りで階段を上がっていく。

相変わらず手はブイモンと繋がれたままで、まるで自分が何処かに引つ張られたり、ブイモンが何処かへ連れていかれないようにしているようにも思えた。

賢とヒカリも、それぞれパートナーを抱っこして、大輔に引っ付く形で階段を昇って行く。

まずは、正面の部屋。つま先で立つように背伸びをして、ドアの取っ手を掴み、降ろした。

開ける。ぎい、と蝶番が軋む音が、静寂の空間に嫌に響いた。

真っ暗な部屋だった。何処かにスイッチはないかと壁を手探りで

探す。

でつぱりを見つけて、大輔は迷うことなく押した。

カチ、という音と同時に、部屋にぱつと明かりがつく。

何の変哲もない、ホテルの一室のような部屋だった。

ベッドがあつて、何かを仕舞える棚があつて、机があつて。

まだアメリカにいた頃、家族みんなで旅行した先のホテルに似ていた。

家族。

余計な事を思い出した大輔の表情は、複雑なものとなっている。

大輔の後ろから部屋の中を伺っていた賢とパタモン、ヒカリとプロットモン、それから大輔から顔を逸らして部屋を見渡していたブイモンは気づかない。

ゆっくりと息を吐きながら、沸き上がりかけた怒りを追い出し、特に何も無いから次の部屋に行こうと促す。

次の部屋も、似たようなものだった。

その次の部屋も特に異変は見られなかったので、強張っていた賢とヒカリの身体と顔が少しずつほぐれていき、大輔とブイモンから離れて散策し始める。

『……なあ、ダイスケ』

ここは安全だろう、と上級生が判断したことで、最年少の3人も散策が許可された。

6人いる上級生はみんな、1階を散策してここにはいない。

だから、ブイモンは思い切つて聞いてみることにした。

「何だよ」

次の部屋へ向かう途中の大輔は、前から目を離さない。

『……さつき、この館を見上げた時、何であんなこと聞いたんだ？』

びたり、とその足が止まる。

エントランスを見下ろせる廊下は、蠟燭の明かりが一定の間隔で灯っており、柔らかなオレンジ色を放っていた。

ブイモンの手を握る、大輔の小さな手に力が籠る。

『ダイスケ?』

「……あのさ、絶対誰にも言わないって、約束してくれるか?」

そう言っただ輔はブイモンの目を真つすぐ見つめる。

何か覚悟を決めたような、そんな目をしていた。

一瞬だけ身じろぎをしたブイモンだったが、きつととつても大事なお話をするのだろうかという悟り、ぎこちないながらも頷く。

階段の方を見て、上級生が上がってこないのを確認すると、ブイモンを引つ張って廊下の壁際に寄る。

賢とパタモン、それからヒカリとプロットモンが、大輔とブイモンを間に挟む形で設置されている扉から、ちようど出てきた。

「絶対誰にも言うなよ。太一さん達にも、アグモン達にもだぞ?約束な?……このお家見た時、変だなって思ったんだ」

『変?』

「ああ……なんか、ここう、合ってないって思った」

合わない?

ブイモンは首を傾げる。

大輔が何を言いたいのか、さっぱり要領を得ないのだが、大輔も何と言ったものか考えあぐねているようで、うんうん唸りながら頭を抱えている。

分かる、と賢が乱入してきたのは、その時だった。

「僕も変だなって思ったんだ、このお家。ムゲンマウンテンで岩が崩れた時、あつたじゃない?あの時に感じたのと、おんなじ感じがした」
「私も……」

ヒカリもおおずおおずと言った様子で参戦する。

いつの間にかヒカリの腕から降ろされていたプロットモンが、ヒカリを見上げながら変な感じって何と尋ねた。

『何を感じたの?アタシは何も感じなかったけど……』

「……何だろう、見られてるなって思ったの。ここう……とつても怖い目で、まるで私達が……憎くてたまらない、みたいな感じがして……」

その時のことを思い出したのか、ヒカリは両腕を抱きしめるように

擦って、身震いする。

「ブイモン達は、首を傾げた。

視線を感じたのなら、まず真つ先にデジモン達が気づくはずだ。

子ども達を狙っているのなら、猶更。

しかしブイモン達は特に異変のようなものは察知していない。

ブイモンはあの時、弱点である触れ合いをしてしまつて、パニックに陥つてそれどころではなかったのだが、それでももし大輔を狙う何かがあれば、絶対に分かつたはずだ。

しかしブイモン達だけでなく、疲れていたアグモン達も特に何も感じた様子はなかった。

どうして大輔達だけ？もしかしてデジモンには分からないけれど、子ども達には感じる何かがあつたのだろうか。

しかし大輔は首を振る。

「たぶん、俺たちだけだと思う。だって太一さん達も、何も言わなかったもんね」

「うん……お兄ちゃん達も何か感じてたら、あんなにのんびりしてなかったと思う……」

リーダーとして子ども達を引っ張り始めている太一、遅れている子がないよう周りを見てくれる治、そんな2人をフォローしている空。

上級生として下級生を守らなければと自覚しているリーダー格が3人もいて、異変に気付かないはずがない。

もしも誰かに見られていると気づいたら、少なくとも治や空が早く降りようと急かしていたはずだ。

しかし実際に急かしていたのはミミ、それも大輔達が異変を感じて挙動不審になっているのを見ての判断だ。

その視線に気づいていたのは、大輔達2年生だけということになる。

だから大輔は、誰にも言うなとブイモンに念を押ししたのだ。

太一達の様子を見て、異変を察知したのは自分だけだということを理解したから。

「あそこから離れたら、誰かに見られてるって感じは消えたんだけど……このお家を見た時に、また変な感じがしたんだ」

『誰かに見られてるって?』

「それだけじゃない、の」

しゃがんだヒカリは、プロットモンの前足を掴んで、持ち上げるように自分の膝に置く。

ぎゅ、と継るようにプロットモンの前足を握った。

「……このお家、何かちぐはぐ? っていうのかな? こう……とつても優しい顔をしているんだけど、言葉が怒ってる人、みたいなの……」

「あー! そう! そんな感じだ! にこにこしてんのに、すっげー怖いの! お姉ちゃんみたい!」

「大輔くん……」

賢が的確に表現してくれたお陰で、大輔がすつきりしたーという表情を浮かべていたが、最後の言葉は余計だったので、とヒカリは苦笑する。

どうかジュンちゃんにばれませんように、と願わずにはいられなかった。

「でもブイモン、変な感じはしないって言っただろ? 太一さん達も全然、何にも感じてないみたいで平気でお家入っちゃおうし……」

太一達が入った途端に、その「変な感じ」は消えてしまったので、ぼーっと突っ立っていることも入りたくないと思拒否することもできなかつた大輔達は、ブイモン達から離れまいと思つて手を離さなかつたようだ。

何だ、つてちよつとだけ、ブイモンはがっかりする。

誰かに触れられることを怖がるブイモンが、丈に触れられてしまったことでパニックに陥ってしまったから、落ち着かせてくれようと思つて手を繋いでくれたわけじゃないのか、つて。

でも同時に、嬉しさもあった。

異変を感じた時に、太一達ではなく自分達を頼ってくれたのだ。

まだ進化を果たしていないせいで、必然的に太一達やアグモン達の前に出て大輔達を守る形になっていたのだが、ブイモン達はそれが悔

しくてしようがなかった。

早く進化できるようになって、大輔達にすごいなって褒めてもらいたいし、大輔達を守るのは自分達でいたい。

それは、パートナーデジモンとして、当然の感情である。

大輔達だけが感じた異変を、太一達には絶対言うなって、内緒だぞって言われた時だって、太一達よりも自分達が信頼されているのだと、ブイモン達が舞い上がるのも無理はなかった。

それにしても、である。

『……ダイスケ達だけが感じた視線って、何なんだろうな？』

『困ったねえ。もしもこの先同じようなことがあったら、僕達で何とかできるかな……？』

『何弱気になってるのよ、パタモンたら！何とかするのよ、アタシ達だけなんだからね、ヒカリ達がこうして話してくれたのは』

項垂れるパタモンに、はっぱをかけたのはプロットモンであった。自分が弱いことを自覚しているパタモンは、まだ進化が出来ないしどんなデジモンに進化するのも分からない。

賢を守り切れるだろうか、と弱気になってしまうのは当然だった。だがプロットモンがそれを一蹴する。

自信ありげに胸を張って、ヒカリを守るのは自分であると豪語する。

すごいなあと呆気にとられつつも、プロットモンの言う通りだなあと思ったパタモンは、俯くのをやめた。

他のデジモン達と一緒にだ、自分は賢を守るためにここにいるのだ。弱気になっていない場合ではない。

『そうだよね！ボク、がんばるからね、ケン！』

『？うん！』

何かよく分かんないけど、パタモンが元気になったからいいや、って賢は微笑んだ。

『……………』

そんな友達2体を、ブイモンは複雑そうな目で見つめている。大輔が握ってくれている、ブイモンの手に力が入る。

パタモンもプロットモンも、賢とヒカリを守るために頑張ろうとしている。

自分は？自問自答する。

自分もみんなと同じように、大輔を待っていた。

大輔を守るのは自分だと、パタモンやプロットモンのように言いたいのに、喉の奥に張り付いて言葉が出てこない。

だって、パートナーデジモンでありながら、大輔を守る立場でありながら、致命的な弱点があるのだ。

誰かに触れられるのが怖い。

少しでも触れたら、身体中が緊張して硬直して、がたがたに震えて冷や汗が止まらなくなる。

目の前の景色がぼやけて、焦点が合わなくなる。

自分から触る分には、問題ないのだ。

接近戦をメインとする戦い方をするからなのか、拳や蹴りをぶつけるのは、大丈夫なのだ。

手を伸ばして相手に触るのは、平気なのだ。

その手を握り返されると、もうダメだった。

身体が拒否反応を起こして、弾いてしまう。

まだチビモンだった頃、感情のコントロールが上手くできなかったときは、触られるたびに泣いて、アグモン達を困らせていた。

パタモンとプロットモンだけは、触られても何ともなくて、みんなで首を傾げたことも覚えている。

——そんな自分が、ダイスケをちゃんと守れるのだろうか？

「ブイモン？」

大好きなパートナーの声に呼びかけられて、思考の海に沈みかけたブイモンの意識が引っ張られた。

『な、何？』

「何って……どうしたんだよ？大丈夫か？」

大輔の空いている手が、ブイモンの頬に触れる。

パタモンとプロットモン以外のデジモンに触れられると、怖くて仕方がないのに、大輔はパートナーだからなのか、触れられても全然へっちゃらだった。

程よくあつたかくて、手はブイモンよりも小さいはずなのに何故か包み込まれているような感じがして。

心配してくれているのが嬉しくて、ブイモンは泣きそうになるのを我慢して、何でもないって笑った。

——今は、考えないでおこう。

自分の弱点をさらけ出しても、大輔は受け止めてくれたのだ。

認めてくれたのだ。ブイモンはブイモンだって。

うじうじと考えるのは性に合わない。

震えも止まってきたし、ブイモンは大輔にもう大丈夫だからと言って、手を離してもらった。

そして、丈に謝りたいと言った。

『ジヨウも、悪気がなかったのは分かっているんだ。ただひっくり返りそうになった俺を助けようとしてくれてただけなのも、分かっている。でも、ダメなんだ、俺。どうしてか分かんないけど、本当にダメなんだ。誰かに触られるの』

「分かっているよ、ブイモン。丈さんの手を叩いちゃったのも、わざとじゃないんでしょう？丈さん、怒ってなかったよ。だから大丈夫だよ」
『……うん。分かっている。でも、だからって、それに甘えるのは、何か違う気がするんだ。ちゃんと謝りたい』

「……ブイモンがそこまで言うんなら、それでいいんじゃないか？多分丈さんは許してくれると思うけど」

「でも“ケジメ”は大事だよ。いいと思うよ」

『じゃあ、みんなと一緒に謝りましょう』

『さんせー！』

悪いことをしたと思ったのなら、謝らなければ。

許す許さないを決めるのは丈だが、でもきつと丈は許してくれるっ

て、みんな確信していた。

ブイモンは、何も悪いことをしていない。そう言つて、きつと丈は許してくれる。

むしろブイモンの弱点を忘れていた自分が悪いのだと、きつとそう言うだろう。

それでも、丈は悪気があつてブイモンに触れたのではない。

ただ助けようとしただけ、転びそうになったブイモンを支えようと、反射的に手を伸ばしただけ。

恐らく丈もそのことで頭を下げるだろう。

互いに謝罪合戦になつて、それでみんなで笑うのだ。

それでいい、それでいいのだ。

今は、まだそれでいい。

丈のところに行こう、と大輔達が1歩足を踏み出した時だった。

ガシャアアアアアアアアアアアアン!!

金属が派手に倒壊したような、重たい陶器が落とされて割れたような、派手な音が館中に鳴り響いた。

あまりにも突然だったその音に、大輔達は耳を塞ぐ用意もできずにその場で硬直する。

キンキンと耳の奥に反響して、脳内に幻痛が走つたような気がした。

「どうしたんですか!？」

下から光子郎の声がした。

それで我に返つた大輔と賢とヒカリは、慌てて木で出来た柵に近寄り、下を覗き込むように掴む。

「悪い！俺だ！廊下にあつた鎧、ぶつ倒しちまった！」

少しだけくぐもつた、太一の声が聞こえる。

声色からして特に緊迫したものではない、と判断した光子郎が気を付けてください！と少々苛立たし気に返した。

『なあんだ、びっくりした』

『よかったー、敵に襲われたとかじゃなくて!』

賢とヒカリ、それぞれの隣で、パタモンとプロットモンも下を覗き込みながらそう言った。

そうだね、って賢はクスクス笑いながらパタモンを抱え、定位置である自分の頭に乗せてやる。

丈のところに行こう、と賢は大輔の方を振り返ったのだが……。

「……ブイモン? どうしたの?」

最初に気づいたのは、賢だった。

賢の言葉に、大輔とヒカリ、パタモンとプロットモンも反応して、ブイモンに視線を向ける。

赤い目を見開いて、小刻みに揺らして、硬直しているブイモンがいた。

え、って大輔達も身体を一瞬強張らせる。

まるで、誰かに触れられた時のブイモンとそっくりで、でもここにはブイモンが触れられても大丈夫な子達しかいなくて、みんな頭上にたくさん疑問符を浮かべる。

「ど……どうしたんだよう?」

そう声をかけるのがやっとで、未だに解けない硬直の中みんなでブイモンを見つめっていると、その声が引き金になったかのように、その場にへなへなと崩れ落ちた。

「へ!? お、おい、ブイモン!」

慌てて駆け寄る。

震えこそなかったものの、身体が強張っているのは、触れてみれば分かった。

は、は、は、と浅い呼吸を繰り返している。

大丈夫? ってヒカリは何度も背中を擦ってやった。

触れられて、パニックに陥った時よりも早く、ブイモンの強張った身体はほぐれていった。

「…………どうしたんだよ」

『わ、分かんない…………』

再度尋ねる。だがブイモンにも分からなかったようで、返ってきたのは疑問を意味する言葉だった。

また何か隠しているのでは、と大輔は。パタモンとプロットモンを見やったが、その意図に気づいた2体は、首を横に振って否定した。

大きな音に驚いた、というだけの反応には見えなかった。

触れられるのを拒絶するときの態度と似ていたが、悲鳴は上げなかったし、震えてもいない。

それならば今のは？ 幾ら考えても、まだ2年生の最年少では考えつかなかった。

闇に潜む者

他の部屋と違って2つ並んだ扉を見つけた太一は、躊躇なく扉を開ける。

先ほどそれで廊下に飾られていた西洋鎧を倒したというのに、全く反省している様子を見せていないが、もはや何を言っても無駄だと分かっている治と空は何も指摘しない。

沈黙は時として恐怖となりうるのだが、特性が鈍感な太一に、果たしてその嫌味が通じるかどうか。

「……………」

扉を開ける。壁と垂直になるようにに取り付けられた木の板に、何処かで見ることがあるような籠が6つ鎮座していた。

中は広々としている。棚がある壁とは反対側には、大きな鏡とドライヤー。

角には観葉植物、太一達の正面にはすりガラスの引き戸。

もしかして、と太一は躊躇なく中に入って、すりガラスの引き戸に手をかけ、開ける。

涼しい空気にモザイクのタイル。壁に設置されている、等間隔に並んだシャワーと、僅かに纏わりついてくる湿気は、恋しくてたまらなかったもの。

「お風呂だー！」

「えっ!?!」

「本当!?!」

中に入らずに様子を伺っていた治と空は、太一のその言葉に反応して部屋に入る。

太一の背後から覗いたすりガラスの引き戸の向こうに広がっていたのは、確かに浴場であった。

「使えるのかしら?」

「やってみりゃ分かるって」

そう言つて太一は治とともに浴場に入って、使えるかどうかを確かめた。

まずはシャワー。蛇口を捻れば、お湯も水も問題なく出てくる。

湯舟の方にも蛇口がついており、捻ればお湯が出たのでしばらく放っておいてお湯を貯めておくことにした。

「よし、じゃあ次……ん? アグモン?」

次の部屋を散策しようとした太一だったが、いつも後をついてきているはずの黄色い陰が見当たらない。

何処だ、と辺りを見渡すと、脱衣所の辺りでガブモンとピヨモンと一緒に座り込んで、目を閉じていた。

太一が揺さぶりながら声をかけても、口元をむにやむにやさせるだけで、特に反応を見せてくれなかった。

「……どうする?」

進化をしたことにより疲れが眠気に変換されているのだろう。

これではご飯を食べる気力もなさそうだと判断した太一は、治と空に尋ねる。

2人も太一と同意見だったようで、目を閉じて寝る体勢に入っていたアグモン達を何とか引つ張り起こして、脱衣所を出た。

廊下はまだ奥に続いていたが、それよりも役立たずになり下がりがけているアグモン達をどうにかせねば。

寝ぼけ眼で、太一達に引きずられるアグモン達に四苦八苦しながら、エントランスに向かうと、1階の散策を終えたらしい丈と光子郎、ミミがいた。

こちらも似たようなもので、それぞれのパートナーが座り込んでぼんやりしていた。

「もうベッドに放り投げとくか」

「言い方」

ぐったりとしているデジモン達を見ながら、これ以上はもう無理だろうと判断した子ども達は、デジモン達を寝かせることにした。

1階の部屋は書斎とか、寝泊まりするには相応しくない部屋ばかりだったらしいので、一行は2階へ行く。

そう言えば2階は2年生の3人とそのパートナー達が散策していたはずだ。

アグモン達を無理やり立たせて2階への階段を上がると、その階段を下りようとしていた最年少と鉢合わせした。

「太一さん？」

「お兄ちゃん、どうしたの？」

「1階はもう終わったの？」

「おう、まあな」

「ガブモン達が眠そうだからさ。先に寝かせちやおうと思つて」

そつかあ、つて賢は治の言葉に納得する。

2階は1人部屋が多かったが、1室だけ全員が寝られそうな部屋もあったので、そこに案内してやった。

眠くて眠くてフラフラになっているアグモン達の手を引いて、その部屋へと入る。

ベッドが10台、太一達はアグモン達をそれぞれベッドに放り込んで、再び1階へと降りる。

「さあつて、粗方回つただろうし、飯にでもするか？」

「そうね。お腹も空いちやつたし」

まだ散策が終わっていない箇所もあるが、進化をしていないが故に元気が有り余っているブイモン達が特に反応を見せていないから、危険なものはないだろう、と子ども達は判断し、やつと気を抜いた。

途端に空腹を覚え、まずは腹ごしらえをしよう、ということになった。

何処か食べるところはないだろうか、とまだ散策していない、階段のすぐ傍にある廊下へ向かう。

「……あれ、大輔くん」

「はい？」

「まだブイモンと手を繋いでたんですか？」

先を歩く上級生の後をついていく下級生達。

光子郎は何げなく、背後をついてくる最年少の方を見て、そう口にした。

ここに来る前、ムゲンマウンテンで様子がおかしかった大輔達最年少は、山を下りるまで、否、この屋敷に入るまでずーっとパートナーと手を繋いだり、抱きかかえたりしていたのだが、ムゲンマウンテンで恐ろしい目に合ったからなのだと思っていた。

行きの登り道では何ともなかったのに、帰りの下り道で唐突にデジモンに襲われた挙句、突如として崖崩れに襲われたのだ。

大輔達の様子がおかしくなったのは、その後だった。

だからミミは早く山を下りようと主張し、疲れてフラフラになっていたデジモン達を見て、今日は何処でキャンプをしようか、という話をしている最中に、この屋敷を見つけた。

それまでずーっとずーっと、大輔はブイモンと手を繋いで、賢とヒカリはパタモンとプロットモンをそれぞれ抱っこしていた。

もう安全は確保されたのに、どうしたのだろうか、と一度に気になってしまったら聞かずにはいられない光子郎は、つい冷たい口調で尋ねてしまう。

それだけではない。

「ブイモン達、ずーっと黙ってるけど、どうかした？」

光子郎の言葉で、ミミも引つかかることがあったようで、そんなことを聞いてきた。

さつきっからブイモン達がずーっとだんまりなのである。

最年少のパートナーだけあって、探検や探索となったら大輔達と同じように張り切って、騒がしいはずのブイモン達が、ずーっと黙り込んでいるのである。

と言うか、ここに入ってきた時から、最年少は妙に静かだった。

散策する時だって、アンドロモンの工場の時は積極的にやりたいやりにって上級生達に詰め寄って困らせていたのに、この屋敷に入ってから太一が散策しようって言い出した時は、特に何も言ってこなかったのだ。

組み合わせを決めたのは太一だったが（どうせお前らまた3人でや

りたいって言うんだろ？とか言つて）、その時だつて元気よく返事を
するのかもしれない、黙つてそれぞれ目配せしていただけだつた。

あれ？とは思つたけれど、すんなりと組み合わせが決まったので、
太一がさつさと解散して散策を促してしまつたから、言及することも
できずにそのまま忘れてしまつていた。

「えつと……」

どうして手を繋いでいるのか、そんなことを言及されると思つてい
なかつた大輔は、言葉を詰まらせる。

何と言つてよいものか、と考えあぐねている大輔に、助け船を出し
たのはブイモンであつた。

『……お、俺、お腹空いちやつて。それで、ダイスケが引つ張つてくれ
てるんだ』

『……ボ、ボクも』

『アタシも……』

「ああ、なるほど」

デジモン達は、子ども達以上によく食べる。

お腹がすぐタイミングはほぼ一緒でも、食べる量が子ども達の倍
か、それ以上なのだ。

特にアグモン、テントモン、ゴマモン、そしてブイモンが食いしん
坊の筆頭で、子ども達が苦勞して集めた食べ物を、あつという間に平
らげてしまう。

何日かに分けて非常食にしたくとも、デジモン達が全部平らげてし
まうせいで、残ることが殆どない。

最初こそ少しは遠慮しろつて怒つていた太一達だったが、進化が出
来るようになるとエネルギーを膨大に消費してしまうせいで、以前よ
りも更に食べるようになったアグモン達に、それ以上文句は言えな
かつた。

ブイモン達はまだ進化を果たしていない。果たしていないが故に、
アグモン達ほど疲れてはいない。

動き回る体力は残っているが、それでも減るものは減る、というこ
とである。

「そうだったの。みんな優しいのね」

納得したらしいミミはにっこり笑って最年少を褒める。

が、強引に誤魔化した自覚のある最年少3人は、曖昧に微笑みを返すことしかできなかつた。

食堂を見つけた一行は、食事の用意を始める。

キッチンもあつたので、何か食材になるものがあるかもしれないと期待したが、冷蔵庫は見当たらなかつたし、キッチン中の棚をひっくり返してみたが、食材になりそうなものはなかつた。

がっかりした空気がキッチンに漂つたが、誰も住んでいない館に食材が置いてあつたら、それは逆にホラーだろうし、怪しんだ方がいい事案である、という治の主張により一行は納得した。

ブイモン・パタモン・プロットモン以外のパートナーデジモン達は疲れ果てて寝入ってしまったので、何人かを留守番で残して、外に出ていつものように果物を見つけて、両腕いっぱい抱えて、戻ってくる。

果物を調理するにも、他に何も材料はないし、流石の治も果物を使った料理は思いつかず、結局そのまま丸かじり、いつものように食べることとなつた。

「はいブイモン、パタモン、プロットモン。お腹空いてたんでしょ？
いっぱい食べてね」

にこにこしながら、何かと最年少の世話を焼くミミに困惑しながらも、最年少とそのパートナー達はお礼を言つてリングにかぶりつく。そろそろ果物も飽きてきたなあ、お肉とか食べたいなあ、とは思つても口には出来ない。

いつもならミミが真つ先にそういうことを口にするのに、昨日も今日も我儘を1度も漏らさなかつた。

変だなあつて、どうしてかなあつて、大輔はずーっと思っていたけれど、太一や治や空のように、何かと構つて世話を焼いてくれている姿を見ると、水を差すのが申し訳なくて何も言えない。

悪い気はしないし、ミミが最年少達の面倒を見ていると、どうも上級生達は話し合いに集中できるみたいなので、ミミの態度についても言及はしてこなかった。

まあいつか、と思うと同時に、やはり何処かむず痒くなる。

食事が終わると、子ども達は5年生を先頭にして、浴場の方へ向かう。

お風呂がある、湯船に張ったお湯にゆつくりと浸かれる、と聞いて子ども達、特にミミとヒカリは大喜びであった。

男女に別れて、それぞれ脱衣所で服を脱ぐ。

湯船は、ちょうどお湯がたっぷり溜まった頃だった。

蛇口を捻ってお湯を止めてから、太一達はまずシャワーを浴びる。

ゲンナイがくれたシャワー用のテントのお陰で、身体をさっぱりさせることはできていたのだけれど、やはり日本人なら肩までお湯に浸かって、ゆつたりとした時間を過ごしたいものだ。

髪と身体を丁寧に洗い、子ども達はお湯に浸かる。

その際太一が、自分達の世界では絶対にできない、湯船に飛び込むということをしてかして治に怒られたが、太一はいつものように軽く流した。

「……………」

「ん？どうした、大輔、賢？」

「入らないのか？」

久しぶりのお風呂で、すっかりリラックス気分の太一達は、様子がおかしい大輔達に気づく。

じ、と湯船を見つめて、入ろうとしない。

いや、見つめている、というより睨んでいる？と聞きたくなるような目つきを、大輔はしていた。

右手には相変わらずブイモンの左手が握られている。

シャワーを浴びていた時も、何やら訝し気にシャワーヘッドを見つめていたが、一体どうしたのだろうか。

大輔だけならともかく、賢まで湯船を覗いて困ったような表情を浮

かべている。

『ダイスケ?』

『ケン?』

パートナーがそれぞれ声をかけるも、反応しない。

代わりに、大輔は空いている左手を恐る恐る、と言った様子で湯船に伸ばした。

ちやぷん、と少し熱いお湯の中に、大輔の小さな手が入られる。

揺れている水の感触。だが大輔はますます不思議そうな表情を浮かべて、首を傾げていた。

「おい、大輔?」

再度太一に声を掛けられた大輔は、それでようやく我に返った。

太一と治、そして光子郎が、怪訝な眼差しを向けてきているのを理解して、慌てて何でもないと行って湯船に入る。

右手でブイモンの手を握ったままだったせいで、引つ張られたブイモンは、ちよ、ま、ダイスケガボガボと悲鳴を上げて湯船に沈みかけることとなった。

大輔が入るのなら、と言いたげに、賢もパタモンを抱えながら湯船を乗り越えて、そろそろと足をつける。

その際眉を一瞬だけ顰めたが、誰も気づいていなかった。

「お邪魔しまーす……」

小さいのによく響くのは、浴場に敷き詰められているタイルのせいだろう。

すりガラスの引き戸が遠慮がちに開かれ、中に入ってきたのは腰にタオルを巻き、恥ずかし気に隠した丈であった。

男同士なのだから、照れなくてもいいのに、と太一が呆れたように言う。

眼鏡が曇るといふ単純な、しかし眼鏡族にとっては命と同じぐらい大事なために、眼鏡を外している治は、裸眼だと顔をくつつける距離でなければぼやけて何も見えないために、丈がどんな格好をしているのか分からない。

太一が丈の格好を伝えてやれば、そういう人もいるんだから気にす

るな、という大人の解答が返ってきた。

「でも湯船に入る時は外してくださいよ、タオルの繊維が排水溝に詰まったり、タオルについている汚れとかでお湯が汚くなっちゃいますからね」

もちろん、しっかりと釘を刺すのも忘れずに。

「ヒカリちゃん、どうしたの?」

「入らないの?」

一方、女湯も男湯と似たような状態となっていた。

空とミミは久しぶりのお風呂で、男子達と同じようにリラックスした表情で湯船に浸かっている。

ピヨモン達も疲れていなければ、一緒に入れてあげたのになあつてちよつと残念に思っていたら、一番小さい女の子がなかなか入ってこないことに気づいた。

パートナーのプロットモンを胸に抱いて、じーっと湯船の中のお湯に視線を落としている。

右手をそろそろとお湯につけて、何かを確かめているように見えた。

「ヒカリちゃん、もしかして熱いの苦手?」

「そうなの?ちよつと水入れて冷ます?」

「え?あ、いえ、大丈夫、です」

「本当に?熱かったら我慢しなくていいのよ?」

「足だけお湯につけるとか、ね?」

「……はい」

どうも腑に落ちない、と言った表情を浮かべながらも、これ以上先輩達を困らせたくないヒカリは、意を決したように湯船に入った。

お風呂に入る前に1度外に出て、光子郎のパソコンからテントを取り出し、パジャマを持ってきておいた子ども達は、それに着替えてアグモン達が眠っている寝室へと向かう。

ガチャリ、と扉を開けると、デジモン達の眠りの妨げにならないようにと、ベッド横のランプだけつけていたので、ほんのりと暖かみのあるオレンジ色の灯りが灯っていた。

ゲンナイがくれたテントにベッドが備え付けられていたから、柔らかい布団に包まれて眠れる、というありがたみは薄い。

しかしあちらはマットだけで、こちらにはフレームがあった。ホテルのベッドのような豪華な部屋に、子ども達のテンションがちよつとだけ上がる。

しかしパートナー達は既に眠っていて、ベッドに横になっているから、大きな声ではしゃぐのは止めておいた。

「何だか林間学校みたい」

「ふふふ、そうね」

それぞれのパートナーが寝ているベッドに入る。

4年生が上がって、5月ぐらいのころに行ったお泊りのことを思い出したミミは、何となしにそう口にした。

空が同意し、その話は和やかに終わるはずだったのに、余計なことを口にする者というのは何処にでもいる。

「みたいじゃないよ……そもそも僕達はサマーキャンプに来てんだ。それがどういいうわけか……」

「先輩！」

治の鋭い声が、丈のセリフを遮った。

治らしからぬ大きな声に、丈は身じろぎをしたが、すぐにその理由を理解した。

しん、と静まり返った寝室で、丈と治以外の子ども達が俯いている。はしゃいでいた子ども達の心に、一点の闇が生まれた。

丈の言う通り、彼らはサマーキャンプをしに来ただけなのだ。

みんなそのつもりで家を出て、3日間サマーキャンプを楽しんだら、まったりと家に帰るはずだったのだ。

そしてしばらくの間は、サマーキャンプの話題で持ち切りになって、部活動に参加して汗を流して、お父さんの田舎に行ってお祖父ちゃんお祖母ちゃん親戚の人に逢ってお盆を過ぎしたり、近所で行わ

れる夏祭りに参加するためにお母さんに浴衣を買ってもらったり、そうやって毎日毎日遊んで、最終日になって宿題をやるのを忘れたと騒いで、友達と一緒に片づけたり……。

去年と同じように過ごすはずだったのに、今年は違った。

猛吹雪で帰り道が分からなくなり、お堂に避難したらオーロラに導かれるように、この世界にやってきた。

最初は当てもなく彷徨っていたけれど、3日目に立ち寄った工場でアンドロモンに言われるがままに白い機械……デジヴァイスを使えば、立体映像としてゲンナイと名乗る、人間でもデジモンでもない、この世界の安定を望むものが、子ども達をこの世界に呼んだ理由を話してくれたお陰で、目的は見つけられた。

この世界の闇を晴らし、救うこと。

困惑した子ども達だったが、それで自分達の世界に帰れるのならと、1度は了承した。

次に会ったときに幾らでも文句は受け付ける、と言っていたから、それまでの辛抱だと、子ども達は堪えてきた。

堪えてきたのだけれど……。

「……ごめん」

やらかしたと悟った丈は、小さく呟いた。

誰も、何も言わない。丈を責める言葉も、気にするなという言葉も、誰もかけない。

丈の言う通りではあるけれど、まさか二晩に渡ってやらかすとは思わなかった。

昨日の晩も、丈が余計なことを口走ったせいで、子ども達は意気消沈してしまった。

あの時はゴマモンが丈を宥めて、話を逸らしてくれたから事なきを得たものの、今そのゴマモンはぐっすりと寝入ってしまったている。

治が止めてくれないければ、丈が紡いでいたその先の言葉で、子ども達の心はぼつきりと折れていたかもしれない。

「……もう寝ようぜ」

「……そうね」

静まり返ってしまった子ども達に、そう声をかけたのは、やっぱり太一であった。

それに空が賛同すると、子ども達は詰まらせていた息をほっと吐く。

それぞれのベッドの横の棚にあるライトを消して、子ども達は眠りにつくのだった。

月はすっかり夜空の頂点に登り、青白い光が濃紺の背景で煌めいている。

野生のデジモン達もその身を闇に委ねているのか、辺りを闊歩しているような音や荒い息遣いなどは聞こえてこない。

風が通り抜ける足音すら死んでいた。

悪意の手が、子ども達の首を絞めつける。

弾けるように飛び起きた大輔の顔は、青白い月明かりの下でも分かるほどに真っ青だった。

掛け布団を握りしめ、全身は変に力が入っているかのように硬直しており、その反動で掛け布団を握っている両手ががちがちに震えている。

振動がベッド全体に伝わり、大輔の横でぐっすり寝こけていたブイモンが、それに気づいて目をとろとろさせながら開けた。

『……ダイスケ？どうしたんだ？』

返事は、ない。光源は窓から降り注ぐ月明かりしかなく、しかも大輔とブイモンがいるベッドは窓から遠い位置、部屋の入り口に近いところにある。

だから大輔が今どんな表情を浮かべているのか、薄らとしか分からないのだが……。

——怯えてる？

パートナーとしての直観なのか、ブイモンは大輔の横顔を見てそう

判断した。

……誰かに触れられた時の自分と、様子が似ていた、という理由もあつたけれど。

『ケン?』

『ヒカリ? どうしたの?』

その直後、ほぼ同時に友人の声が聞こえた。

大輔とブイモンがいるベッドの真正面と、左側。

正面のベッドにいるのはヒカリで、左にいるのは賢である。

見れば、2人ともベッドから身を起こしていた。

青白い月光で僅かに垣間見えたのは、目を見開いてがちがちに震えている2人の姿だった。

まるで、大輔のように。

え? と思ったのもつかの間、ヒカリはベッドから飛び降りると、彼女がいたベッドから斜め右上、大輔とブイモンがいるベッドの列の1番左端、窓側のベッドに寝ている太一のところへ、一目散に走り出した。

プロットモンが慌てて追いかける。

すっかり眠りこけて、夢の世界を旅しているであろう、大いびきをかきながら芸術的な寝相を披露している兄に遠慮することなく、その腹めがけてダイブをかました。

ぐえ、って蛙が潰れたような悲鳴が聞こえる。

「ヒ、ヒカリイ……兄ちゃん、つぶれちまうよお……」

寝ぼけていても、自分の腹にダイブをかましてくる相手が分かっているようで、太一は妹の名を呼んで抗議をする。

だがヒカリは聞いていないのか、太一のベッドによじ登って、兄にしがみつくように掛け布団に潜り込んだ。

おい、って更に太一が抗議をしようとして……口を嚙む。

兄のパジャマを掴む、妹の小さな手が、分かりやすいほどに震えていた。

一瞬何が起こったのか理解できなかつた太一であつたが、一拍遅れて太一のベッドに飛び乗つたプロットモンが困つたような表情を太

一に向けて、何となく察した。

何か怖い夢でも見たのだろうか、太一はそれ以上文句を言わずに、黙って妹に布団をかけ直し、落ち着かせるように彼女の背中を優しく叩いてやる。

1つのベッドに子ども2人にデジモン2体はなかなかきつかったが、それでも兄として、縫ってきた妹を振り払うことはできなかった。

それを見ていたらしい賢は、1度掛け布団に視線を落とすと、数秒ほど硬直して、意を決したようにパタモンを抱き上げ、ベッドから降りて左隣にいる兄のベッドによじ登った。

その振動で、眠りについていたはずの治が目を覚まし、ベッドに潜り込んできた弟に気づく。

パタモンをぎゅっと抱きしめながら、治のパジャマを遠慮がちに握る賢の目は、戸惑いと恐怖で見開かれている。

離ればなれになる前と変わっていないければ、これは何か嫌な夢を見た時の反応だ。

両親が別れて、それぞれ引き取られる前、同じ部屋で過ごしていた治と賢。

2段ベッドの上で眠る治お兄ちゃんのお布団に潜り込んで、くすんくすんって堪えるように泣きながら、お兄ちゃんのパジャマを遠慮がちに掴んでくる。

そんな賢を、治はやれやれって思いながらも甘やかしてあげるのがだ。

お兄ちゃんがいるから怖くないよって、頭をよしよし撫でてあげるのがだ。

そうすると賢は涙目になった目をとろとろさせて、夢の世界に旅立つのである。

翌朝、お母さんが起こしに来ると、幼い兄弟が仲睦まじく同じベッドですやすやと眠っている姿を見ることが出来たのだ。

……もう、その愛らしい光景を拝めることはできないけれど。

だから治は、何も言わずに賢を受け入れてやる。

ガブモンには悪いが、ちよつとだけ詰めて、賢とパタモンがベッドで寝られるようにしてあげて、賢を安心させるように優しい笑顔を浮かべながら、よしよしって頭を撫でてやる。

「……大きくなったなあ、賢」

ベッドが嫌に狭く感じるのは、きつとガブモンとパタモンもベッドにいるから、だけではない。

最後に、同じベッドで一緒に眠ったのは、いつだっただろうか。昨日のことものようにも思うし、遠い遠い記憶の彼方の出来事だったようにも思う。

だからこそ、ついつい言葉に出してしまったのは、父親が言うようなセリフであった。

「……………」

そんな治と賢の、ほのぼのとした兄弟の空気を、唇を噛みしめながら大輔は眺めていた。

賢だけじゃない、兄の下へ走ってしまったヒカリのことも、じつと見つめて目を離さない。

『……ダイスケ』

ブイモンは大輔の名前を呼ぶことしかできなかった。

ずーとずーと待っていた、大好きなパートナー。

嬉しくって嬉しくって、ずーと引っ付いていた。

自分の弱点を知られてしまった時は、もうダメだって絶望しかけたけれど、大輔は何でもないだろって受け入れてくれて、知る前と変わらない扱いをしてくれた。

それがどんなに嬉しかったか、きつと大輔には分からないだろう。

だからブイモンはますます大輔にべったり引っ付くようになる。

引っ付くようになって、気づいた。

大輔は時々、賢とヒカリを羨ましそうな目で見ていることに。

普段はとつても仲が良く、上級生達があーでもないこーでもなあって頭を捻らせている間も、最年少の3人はお喋りに興じていることが多い。

ブイモン達も仲間に入れてもらって、絆を育みつつある3人だけでなく、時々大輔は仲がいいはずの賢とヒカ리를、複雑そうな目で見るこ
とがあるのだ。

自分だけ仲間外れ、って顔をする時があるのだ。
そんな時に大輔にどうしたの、って聞いても大輔は答えてくれない。

何でもない、って言って、ぷいって賢やヒカリから目を逸らして、暫くするといつものように賢とヒカリと楽しくお喋りし始める。

せっかく太一達やアグモン達には内緒って、ブイモンとパタモンとプロットモンだけに教えてくれるぐらいには、信頼され始めてきたのに。

大輔のことは何でも知りたいから、どうして仲がいいはずの賢とヒカ리를羨ましそうな目で見るのか、教えてほしいのに。

今もそうだ、どうして大輔が賢やヒカ리를羨ましそうな目で見ているのか、ブイモンには分からない。

それは、人間にあつてデジモンにはない、きつとデジモン達にはある種一生理解できない事柄なのだが、ブイモンがそれを知るのは、もう少し後となるだろう。

「……………」

『……ダイ、』

ブイモンの口から、大輔の名前が最後まで紡がれることはなかった。

じ、つと賢とヒカ리를交互に見ていた大輔は、やがて2人から顔を逸らしたかと思うと、ブイモンを引き寄せて抱き枕みたいにぎゅうぎゅうしながら、布団を頭まですっぽり被ったのだ。

大輔の顔を見ることはできなくて、どうして大輔が突然抱きしめてくれたのか、ブイモンは訳が分からなくて頭上にたくさんの疑問符を浮かべたけれど、大輔と密着できるこの状況はかなり嬉しい。

誰かに触られると、全身が硬直して呼吸が出来なくなつて、目の前もぼやけて、足元がふらついて上手く立てなくなるのに、大輔とヒカ
リと賢は触れられても何ともなかった。

大輔はパートナーだからまだしも、賢とヒカリまで平気なのは何故なのか、幾ら考えてもブイモンには分からない。

パタモンとプロットモンが平気だからなのかな、って思うけれど、そもそもどうしてパタモンとプロットモンは平気なのか、その理由が分からなかったから、幾ら考えても無駄なのだ。

難しいことはもういいや、大輔にぎゅってしてもらってるから。そう思って、ブイモンは暗闇に身を委ねるために、目を閉じた。

直後に、突き刺さるような強烈な悪意を感じて、デジモン達は飛び起きた。

疲れ果ててぐっすり眠りについていたはずだったのだが、示し合わせたように一斉に起きたのだ。

勢いよく起き上がったためにベッドが激しく揺れて、深い眠りについていた子ども達の意識を強制的に引きずり出した。

太一と治に至っては、先ほど妹と弟に起こされたばかりだ。

今度は何だよ、って太一はパートナーであるアグモンに抗議しようと、上半身を起こす。

「……………え？」

そして、視界に映った光景に、太一は言葉を失った。

満天の星が、目の前に広がっていたのだ。

いや、待て。そんなはずない。

だってここは室内だ。丈が見つけた、デジモン達が住むには少々不便そうなの、しかし人間である自分達を使うには十分すぎるほどの、立派な屋敷で今日は寝泊まりしたはずだ。

お休みをしたときは、きちんと壁と窓と天井があつたのだ。

なのにどうして夜空に散りばめられた星が、太一の視界いっぱいに広がっているのだろう。

「なっ……!?!」

「え、え? 何これ、何で、どうして?」

パートナーに起こされた形で目を覚ました、他の子ども達も動揺している。

崩れかけた壁、罅が入っている窓、ところどころ穴が開いている床、あの綺麗な館は、見るも無残なものとなって、子ども達の目の前にある。

「……ガブモン? どうした?」

唾然として、朽ちかけている屋敷を眺めていた子ども達の中で、デジモンの様子がおかしいことに気づいた治が、賢を抱きしめながらガブモンに問いかける。

ガブモンの赤い目は、瞳孔が開ききっており、まさに獣の目をして虚空を睨みつけていた。

見れば他のデジモン達も、似たような、いや、全く同じような目をして何処ともないところを見つめている。

それはまるで、子ども達の命を狙っている姿なき敵意を持った者と、対峙しているようだった。

力を持たぬはずの人間の自分でも、ガブモンが強烈な闘志を抱いているのが分かる。

ガブモンだけではない。アグモンもピヨモンも、テントモンやパルモン、ゴマモン、そしてブイモンとパタモンとプロットモンも。

《夢はもう失われた……》

背筋を指先でなぞられたような悪寒が走る。

がっちゃん、と子ども達の全身が硬直したと同時に、朽ちかけていた

屋敷に更なる変化が起こる。

パリン、というガラスが割れるような音がした。

一枚のタイルを剥がしていくように分解されていく屋敷を、子ども達は黙って見ていることしかできない。

朽ちかけていた屋敷は、更に表面を引きはがされ、やがて細かい粒子となって本来の姿を子ども達に晒した。

それは、屋敷などではなかった。豪邸などではなかった。

最早その役割と機能を果たしていない、ただ不安定な柱に支えられた足場に、ベッドが置いてある、そんな状況だった。

「何だよ、これ!!」

「一体、どうなって……!?!」

太一と治が思わず、と言った形でベッドから飛び降りる。

アグモンとガブモンがすかさず2人の前に飛び出ていった。

ぬう、

と。

月と星空が作り出すにしては不自然なぐらい濃い影から、悍ましい闇の気配が姿を現した。

ひ、と賢の喉が引きつる音が聞こえた。

『……………っ!』

アグモンとガブモンが、影から顔を覗かせた闇に気づいて息を飲む。

頭部から飛び出た2本の角、全身を闇で纏い、異様に長い手は心臓を鷲掴みにして離さない。

ボロボロの羽は、まるで蝙蝠のそれとよく似ていた。

『デビモン……………!』

『何で……………どうして、お前が……………!』

「……………アグモン?」

「ガブモン……………? デビモン、て……………」

曰く、最強最悪の、闇を司る闇の体現者。

光を嫌い、光を憎み、闇を愛するムゲンマウンテンの支配者。
普段はムゲンマウンテンを住処として、滅多に山を下りてこない。
それが、どうして目の前に降り立ったのか、アグモン達には理解で
きなかった。

す、

右手を掲げる。闇のオーラが、手のひらから排出された。

「きゃあああああああああああつ!!」

「!?」

響き渡る絶叫。それは、妹のものだった。

ぎよつとなつて振り返れば、先ほどまで自分が寝ていたはずのベッ
ドがない。

いや、自分のベッドだけではない。仲間達が使っていたベッドが、
全てそこからなくなっていた。

「太一!あれ!」

隣にいた治が夜空を指さす。

その先を辿って視線を向ければ、縦横無尽に夜空を駆け巡っている
ベッドがあった。

浮いている。子ども達を乗せて、恐怖に引きつって悲鳴を上げてい
る子ども達を嘲笑うかのように、ベッドが暴れまわっている。

「まずい、あのままじゃ振り落とされる!」

「ガブモン、進化できるか!?!」

治がガブモンを振り返ってそう問いかけるが、ガブモンの答えは残
酷なものだった。

『ご、ごめん、オサム……すぐく疲れちゃって、お腹も空いてるし……』
「……っ、そ、うか……!」

何故、と責めることは、治には出来なかった。

連日連夜の戦闘で、疲れを見せ始めていたデジモン達。

この屋敷を見つけた時も、デジモン達は食べることよりも眠る方を
優先してしまった。

食べることが大好きなデジモン達だが、それすらもままならないほど疲れていたのだ。

立派な外見の屋敷を見て、他のデジモンが襲い掛かってくることもないだろう、という安心と油断もあったのだろう。

子ども達の安全が確保できたのなら、子ども達を守るためのエネルギーを摂取するよりも、疲れた身体を休める方を求めてしまったのだ。

まさかその選択が仇になってしまうなんて。

「うわあっ!!」

『わあっ!!』

「っ、太一!?!うわっ!」

『アグモンツ!!わっ!?!』

そして、また油断。

進化をしてデビモンを追い払う選択肢を奪われた太一達は、周りへの警戒心が疎かになっていた。

空（から）のベッドが、太一達に襲い掛かってきたのである。

避けることが叶わなかった太一とアグモンは、ベッドに掬い上げられる形で乗っかり、他の子ども達と同じように上空へと連れていかれた。

親友の名を紡いだ直後、治とガブモンも同様に。

不安定に揺れながら空を駆けるベッドに、何とかしがみついて、振り下ろされまいとみんな必死だった。

響き渡る子ども達の阿鼻叫喚に酔いしれるように、デビモンは嗤っている。

太一は、叫んだ。

「くそ……何故だ!何故俺達をこんな目に合わせる!?!お前の目的は何だ!!」

デビモンの気に障るようなことをした覚えなどない太一には、デビモンの目的が分からない。

今まで太一達を襲ってきたデジモン達は皆、縄張りに踏み込んでし

まったり、黒い歯車で操られていたり様々だったが、デビモンのように明確な悪意と敵意を持った相手は初めてだった。

自分達は、ゲンナイに頼まれてこの世界を救うために旅をしているだけなのに。

デビモンの口の端が、顔を裂くほどに吊り上げられた。

『知れたこと……お前たちが「選ばれし子ども達」だからだ!』

「……………な、に?」

選ばれし子ども達。それは、ゲンナイがこの世界に言い伝えられている、異世界からやってきた救世主達のことだと教えてくれた、自分達のことだ。

『お前たちは私にとって、邪魔な存在なのだ。黒い歯車でこの世界を覆いつくそうとしている、私にとってはな!!』

徐に両手を掲げるデビモン。

何処からか地響きが聞こえてきた。

空に浮かんでいるせいで太一達には分からないが、両手を掲げたデビモンに呼応する形で、ムゲンマウンテンを中心として、ファイル島全体が揺れているのだ。

それはさながら、大地が四肢をもぎ取られて悲鳴をあげているかのような、大きな揺れだった。

ぴし、ぴし、ぴし、とムゲンマウンテンの頂上から麓に向かって、稲妻のような亀裂が走る。

上から鋭い切っ先のナイフを振り下ろされ、無理やり押し広げられた岩山が、大きな岩の塊にその姿を変え、崩れていく。

崩れたムゲンマウンテンの中には、無数の黒い歯車が空気を擦り、不気味な音を立てながら回転していた。

麓にたどり着いた亀裂は留まることを知らず、今度は大地をかける。

見えない手がその亀裂から大地を引き裂くように、砂ぼこりと崩れる瓦礫の音を立てながら2つに、4つに、8つにどんどん別れていく。

『ファイル島は既に黒い歯車で覆いつくした……』

ファイル島の中心にして心臓部であるムゲンマウンテンから、かつ

てファイル島の一部だった島が離れていくのを、子ども達は空飛ぶベッドから見下ろすことしかできなかった。

最初に目を覚ました森、使えない電話ボックスが立っていた砂浜、かつてキャンプをした湖、広大な砂漠、生み出すものなど何もなかった工場、おもちゃに愛される町長がいる町。

子ども達の眼下で、全てが崩れていく。

——これを、あのデジモンが、1人で？

治は得体のしれない恐怖を感じながら、デビモンに視線を向けた。風に煽られそうになりながらも、何とかガブモンと2人で必死にベッドに捕まりながら、治は息を飲む。

もしも、ゲンナイが言っていた「ファイル島に巣食っている闇」が、あのデジモンを指しているのだとしたら……。

——……恨むよ、ゲンナイさん……！

たった1人で、小さいとはいえ島1つを八つ裂きにするほどの闇の力を持った相手と、どう戦えというのだろうか。

ガブモン達が進化をして、全員でかかっても勝ち目がない確率の方が高い。

頭の回転が早い故に、最悪の事態を想定してしまった治の顔は、真っ青である。

『——次は、海の方この世界、全てだ!!』

程よい硬さのものを、両手で千切りながら1つずつ捨てていくように、小さなファイル島は更に小さな島となってバラバラの方角へと流されていく。

「お兄ちゃん!!」

「ヒカリイ!!」

小さな妹が、ベッドとパートナーに必死にしがみつきのながら、最愛の兄を呼ぶ。

妹の下に駆け付けた兄は、しかし縦横無尽に暴れまわるベッドをコントロールする権利を持たず、ただ虚しく宙をかく左手を、どんな離れていく妹に伸ばすことしかできない。

「お兄ちゃん、助けてえー！」

「賢っ!!けえええええん!!」

今にも泣きそうになっている弟が、必死に兄に助けを求めている。

だが兄は、弟の名を叫ぶことしか許されなかった。

『最早お前たちなど、私の敵ではない……。私が直接手を下すまでもなからう……。お前たちに、この世界は救えない。何故なら、ここがお前たちの墓場となるのだ!!』

左手を掲げるデビモン。

その手から放出された闇のエネルギーは、ぞつとするほど冷たいものを感じた。

子ども達を乗せながら暴れていたベッドは、更に狂暴性を増し、スピードを上げる。

成す術がない子ども達は、どんどん仲間達から離れていくベッドに、しがみつく他なかった。

やがて、子ども達は小さく千切られた島のそれぞれに吸い込まれるようにして、その姿をデビモンの前から消してしまった。

てんしさまのおはなし

深い霧に包まれたムゲンマウンテンの頂上から、悍ましいほどに濃厚な闇の気配が漏れ出している。

山肌に沿ってゆつくりと流れていく闇の気配は、気性の荒いムゲンマウンテンに住みつくデジモン達でさえも凍り付かせた。

周りの森を一部残して、ファイル島は砕けたクツキーのように残骸が流されていく。

森の一部を残して聳え立っているムゲンマウンテンでは、取り残されたデジモン達がなるべくムゲンマウンテンから離れようと島の端に集まっている。

本能的に、悟っているのだ。

頂上に君臨している者は、自分達では到底敵わない相手なのだということを。

ムゲンマウンテンの頂上に、古代ギリシヤや古代ローマを思わせる、神殿のような建物が建っている。

しかし闇を凝縮したような雲が空を覆い、濃厚な霧が立ち込めているせいで、神聖さが全く感じられない。

神殿の中も、天使ではなく悪魔のような風貌をした彫刻が首（こうべ）を垂れて、神殿の主に跪いているような、禍々しさを醸し出している。

その神殿を反響して、不気味な笑い声が響いた。

『選ばれし子どもと言っても、1人1人の力など知れたもの……1人残らず血祭りにあげてやるわ!』

神殿の奥、玉座に佇む1つの陰。

その背には蝙蝠の翼が生えており、闇の衣を全身に纏い、赤い目の奥に暗い野望を秘めている、まさしく悪魔に相応しい姿をしていた。

空気を裂く音を置いていきながら、悪魔……デビモンの前を、黒い歯車が飛び去って行く。

《……………》
キシツ》

何処かで、闇が笑った気がした。

白や水色、それからほんのちよつとのピンクとか赤とかオレンジ色。

ヒカリの世界では絶対に見られない光景に、こんな状況であるにも関わらずぼんやりと見とれていた。

お日様はすっかりてっぺんまで登っていて、木々に挟まれて生まれた空の道から燦燦と照らしている。

時折聞こえてくる鳴き声に反応して、その度に立ち止まってしまふけれど、パートナーのプロットモンが大丈夫って声をかけてくれる。肺いっぱい吸い込んだ空気は少し冷えていた。

ここに来てからすっかり見慣れてしまったはずの光景が、何となく寂しい。

「ヒカリ？…どうしたの？」

「……………ううん、何でもないよ、なっちゃん」

ぼんやりと立ち止まって空を見上げていたら、隣にいる子が話しかけてきた。

振り向く。心配そうに見つめてくる瑠璃色の目。ヒカリはにこつと笑って首を横に振った。

大きな館を見つけて、昨夜はその館で休んでいたヒカリ達だったが、夢見が悪くて兄の寢床に忍び込んだ直後には、何もかもが変わっていた。

ヨーロッパのお嬢様が住んでいるような、メルヘンチックな絵本に出てくるような、素敵な館。

お兄ちゃん達はみんな、警戒しながらもまともな寝床を見つけたことですっかり安堵していたけれど、ヒカリ達最年少の3人は、何処か薄気味悪いものを感じて、始終落ち着きがなかった。

でも自分達は2年生だし、ここは嫌だと言ったところでその意見が聞き入れてもらえないだろう、ということは目に見えていたので、何も言えなかった。

もしもあの時、兄に叱られることを覚悟しながら、3人で一緒に主張していれば、少しは違ったかもしれない。

でも3人はしなかった。できなかった。

その結果が、"コレ"だ。

デジモン達が強烈な悪意を感じて飛び起きたことで、意識を強制的に引きずり出された子ども達の目に飛び込んできたのは、満天の星。

荘厳な館の天井は、何処にも見当たらなかった。

それどころか、豪華な館の姿形すらなくなっていた。

ボロボロの壁と床、遮るものがなくなった濃紺の空。

みんなで混乱していたら、そのうちベッドが宙に浮きだし、空を駆けていた。

これが何でもない日常なら、メルヘンチックで片付けられていただろうに、今ヒカリ達は誰も頼れる人がいない中、過酷な環境を生き抜かなければならない異世界の冒険の真つ最中であった。

振り落とされるかもしれないという恐怖で引きつりながらベッドにしがみついていたら、ヒカリ達が冒険をしていた小さな島が、バラバラに散らばったのを見た。

離ればなれになっていく仲間達。

そしてヒカリ達は、引きちぎられた小さな島の一片に、不時着したのである。

朝になるのを待っていたヒカリとプロットモンは、壊れたベッドのシートに包まって一夜を過ごした。

プロットモンは、見張りは自分がやるから寝てていいよって言うてくれたけれど、ヒカリはその申し出を辞退した。

眠れなかった。眠れるわけがなかった。

いつもお兄ちゃんが、大輔くんが、賢くんが傍にいてくれたのに、みんなバラバラになっちゃって、一人ぼっちになっちゃって、眠れるはずがなかった。

眠くて眠くて何度か船を漕いでいたけれど、ガサリと近くの茂みが揺れるたびに、ヒカリはびくーって肩を震わせて眠気が吹っ飛んでしまう。

お日様が昇って空が白んできて、ヒカリはようやく安堵した。

普段着に着替えて、パジャマは畳んで手に持って、さあこれからどうしよう、って相談をプロットモンとする。

結論から言えば、太一達を探すのが手っ取り早い、ということだったので、2人はとりあえずベッドが来た方角を目指すことにした。

プロットモンはまだ進化が出来ない。

もしも野生のデジモンと出会って、そのデジモンがとっても好戦的なデジモンだったら、逃げるしかない。

ヒカリは溜息を吐いた。

お兄ちゃんじゃなくてもいいから、せめて大輔くんとか賢くんが一緒だったらよかったのになあ、って思った。

頼れる人がいない、というのは、妹として守られるのが当たり前のヒカリにとっては、かなりきつい状況だ。

あの時みたいに、ヌメモン達に追いかけてお兄ちゃん達とはぐれちゃった時みたいに、大輔くんや賢くんが一緒だったらよかったのに。

状況としては、あの時とほぼ似ていた。

大輔とブイモン、賢とパタモンがいないだけだ。

あの時はヌメモンから逃れるためにバラバラになったのだが、今回は違う。

ヒカリは、立ち止まった。ぎゅ、と胸の前で両手を組む。昨夜のことを思い出す。

空を駆けるベッドから見下ろした先にいたのは、闇を凝縮させたような存在感を放っている悪魔だった。

デビモン、という名のデジモンで、普段はムゲンマウンテンに籠っているらしい。

どうしてそのデビモンがヒカリ達の前に姿を現して、ヒカリ達を困らせるようなことをしたのか、ヒカリには分からない。

ただ、ムゲンマウンテンで感じたものと、お屋敷の外で感じたものと、全く同じ気配をしていたことだけは分かった。

あれは、あの時の恐ろしい気配は、デビモンだったのだ。

自分達をずっと見ていたのだ、あの恐ろしい気配を隠そうともせず

に。
過保護でサッカー上手なお兄ちゃんのお陰で、ヒカリは自分に向けられる敵意や悪意に少しだけ鈍感になっていた。

だから、デビモンが自分達に対して向けてきた、剥き出しの悪意の理由が、どうしても分からなかった。

——あれが、ゲンナイさんが言っていた“闇”なのかな。

ふるり、とヒカリは総毛立った。

ゲンナイさんに、この世界を救ってほしいって頼まれて、他のみんなもそれしか帰る方法がないのならってそれを引き受けた。

まだ最年少のヒカリ達は、ついていくことしか許されない。

頼れる人がいない太一達にとって、ヒカリ達最年少は最後の砦だ。何があっても守らなければならない存在だ。

ヒカリ達を守ることによって、彼らの心を保ち、守ることに繋がるのである。

まだ2年生で、1年生に対しても“年下のお友達”という感覚が強いヒカリは、しかし身近で“兄”として奮闘している太一をよく見ているから、それをよく理解していた。

太一は悪くないのに、太一が目を離した隙にヒカリが怪我をする

と、怒られるのは太一なのだ。
ちがうよ、おにいちゃんはわるくないの、ってヒカリは一生懸命お母さんに言っ

て、お兄ちゃんを庇うけれど、お母さんが聞いてくれた

試しは1度もなかった。

お兄ちゃんが好きなのは分かるけど、って頓珍漢なことを言っ
て、ヒカ리를叱ってくれないのである。

違うのに、お兄ちゃんは悪くないのに。

これでヒカリちゃんが、嫌なことをぜーんぶお兄ちゃんに押し付け
て、お母さんの後ろであつかんべーってする女の子だったら、きつと
2人の仲は険悪なものになっていただろう。

だがヒカ리는周りをよく見る子である。お兄ちゃんが大好きなの
である。

お兄ちゃんが自分を庇って、お母さんの怒りをヒカリに向けないよ
うにすることがよくあるのを、ちゃんと知っているのである。

だからお兄ちゃんが頑張って“お兄ちゃん”をやっているのを、邪
魔したくない。

幸か不幸か、ヒカリと同じ年のお友達は、2人ともヒカリと同じ立
場だ。

大輔も賢も、お兄ちゃんとお姉ちゃんの大変さを分かっているか
ら、どうしても口を挟めない。

太一達があっちに行くぞって言ったら、黙ってついていくことしか
できない。

だが、その太一達は、今いない。

大輔も賢も、そのパートナー達も、何処にもいないのである。
プロットモンしかないのである。

黙っていれば、あっちに行くぞって引つ張ってくれる上級生達がい
ない今、ヒカリが自分の意志で行くところを決めて、自分だけで上級
生達を探さなければならぬのである。

今までずつとついていくだけだった自分に、そんなことが出来るの
だろうか、ってヒカリちゃんは不安で不安で仕方がなかった。

『……ヒカリ、大丈夫？』

は、と我に返ってヒカリは足元にいるプロットモンを見下ろす。

急に立ち止まって黙り込んでしまったパートナーを心配して、プ

ロットモンが声をかけてきたのだ。

自分は、1人ではない。ここに来た時からずっと一緒にいてくれた、パートナーがいるではないか。

そのことを思いだしたヒカリは、先ほどまでの不安が嘘みたいは何処かに消えてしまった。

ぶんぶん、と嫌な考えを振り払うように頭を振って、頬を軽く叩いて、切り替える。

きつとお兄ちゃんや、大輔くん達も、ヒカリを探して歩き回っているに違いない。

他の人達を探し回っているに違いない。

自分もやらなければ、誰かが見つけてくれるのを待っているだけでは、ダメだ。

こういう時ぐらい、自分から動かなければ。

心配してくれたロットモンを見下ろして、ごめんね、大丈夫、早く行こうって返して、ヒカリは歩き出そうとした。

ガサリ

近くの茂みで、葉っぱがこすれ合う音がした。

ギクリ、とヒカリとロットモンの足が止まる。

ガサリ、ガサリ

風は吹いていない。だから何かがその茂みを刺激しない限り、葉がこすれ合っただけで音を立てるはずがない。

ぎぎ、ぎぎ、と錆びたロボットのみにぎこちない動きで、2人は音がした方に顔を向ける。

ガサリ

再び音がした。ひ、と引きつったような音が、ヒカリの喉の奥から零れた。

どうしよう、何だろう。

ヒカリとロットモンの心臓がバクバクと激しく波打つ。

「だっ、誰……？誰かいるの？」

ヒカリは声をかけたが、返事はなかった。
気のせい、ということはないだろう。

ヒカリだけでなくプロットモンも気づいたし、そもそもプロットモンの表情が険しい。

恐らく、茂みの向こうにいるであろう何者かは、自分達が知っている気配ではないのだろう。

そもそも太一達だったら、茂みに隠れている必要はない。

どうしよう、ってヒカリの内心はパニックだった。

ガサリ

また茂みの葉が鳴る。

もう決定打である。ヒカリの目の前で茂みが揺れたのだ。

誰かがいることはもう間違いないかった。

「ね、ねえ！誰かいるの？」

再度問いかけるヒカリだったが、茂みの向こうからは何の反応もない。

数分待つてみたけれど、茂みの向こうから飛び出してくる気配はなかった。

だがプロットモンの表情は険しいままだったので、まだ茂みの向こうに何かがいるらしい。

……敵意は、ないのだろうか。

ヒカリは、息を飲んで覚悟を決め、茂みへと歩み寄っていった。

こつ、スニーカーが地面を踏みしめる。

茂みとの距離は、約1メートル。プロットモンが心配そうにヒカリを見つめても止めようとしなのは、茂みの向こうの気配から殺気や敵意を感じないことに気づいたからだろう。

こつ、また近づく。手を伸ばせば届く距離だ。

恐る恐る手を伸ばす。

がさり、茂みに手が乗る。

がさり、茂みの向こうが揺れる。

やっぱり、何かいる。

大好きなお兄ちゃん、1番仲のいい男の子に影響された女の子

は、行動も大胆になってきている。

えーい、つて茂みをかき分けて、そこにいたものにヒカリは目を見開いた。

「え……!?!」

『ヒカリ?……ええっ!?!』

ぎよつとなつて硬直するヒカリを見て、プロットモンも慌ててヒカリの隣に並んで、ヒカリがかき分けた茂みの中を覗き込む。

そして、同じように驚いた。

そこにいたのは、なんと人間の女の子だった。

茂みに隠れるようにしやがみこんでいたのだが、ヒカリがかき分けたせいでがっちんと硬直しながらヒカリを見上げている。

バターブロンドの髪は肩までの長さで、ふわふわしている。

深い海のような瑠璃色の目は、見ているだけで吸い込まれそうだった。

パフスリーブの白いチュニック型のワンピース。

真雪のような白い肌と、背中から見える小さな翼は、まるで。

「天使さん……?」

「っ……!」

『あつーちよつとー!』

目を奪われるほどに美しいその容姿に見とれて、ぼそりと呟いたヒカリが声をかけたのがきっかけになったように、硬直が解けた女の子は、ペタンと尻餅をついた後、ばたばたと手足を動かしながら、ヒカリ達に背を向けて逃げ出そうとした。

ヒカリとプロットモンも慌てて追いかける。

「あつ……ま、待ってー!」

足元を纏れさせながら逃げようとした女の子の腕を、ヒカリは両手でがっしと掴んだ。

ゲンナイさんはいないと言っていた人間を見つけたのだ、1人になりたくないこともあって、ヒカリは逃すまいと必死だった。

掴んでくるヒカリの手が震えているのが伝わって観念したのか、女

の子は困ったような表情を浮かべてヒカリを見下ろした。

「あの、天使さん？お名前は？」

逃げる様子がないことにほっと胸を撫で下ろしたヒカリは、手を離して女の子に尋ねた。

女の子はしばらくもじもじしていたのだが、そのうち消え入りそうな小さな声でぼそりと口を開いた。

「……アタシ、天使じゃないよ。なっちゃんって言うの」

なっちゃん。女の子はそう言った。

天使さんじゃないの？ってヒカリは首を傾げる。

ふわふわの甘いお菓子のようなバターブロンドと、太陽が反射した海のような瑠璃色の目、白いワンピースと背中に見える白い羽は、どう見ても絵本で見た天使なのに。

そう言ったら、白い羽はなっちゃんが背負っている鞆についているもので、背中を向けて見せてくれた。

天使さんじゃなかったことを残念に思いながらも、天使さんがお名前を言ってくれたことが嬉しいヒカリは全く気付かない。

なっちゃんと名乗った女の子の容姿は、いつだったか大輔くんに見せてもらったアメリカの写真に写っていたお友達のような、アメリカの人達のような見た目なのに、名前は日本人そのものであることは色々とおかしいのだけれど、まだ小学2年生のヒカリは知る由もなかった。

「なっちゃんね、私はヒカリ。こっちはプロットモン」

『よろしくね！』

「……うん」

手を差し出すと、天使さん……なっちゃんは交互にヒカリとヒカリの手を見つめた後、ぎこちなく手を取って微笑んだ。

「なっちゃんはどうしてここにいるの？もしかしてもゲンナイさんに呼ばれたとか？」

「……うん」

『えっ？じゃあパートナーは？』

「……は、はぐれちゃって……」

「大変ー！じゃあ探さなきゃー！」

なつちゃんの言葉に、ヒカリとプロットモンが慌てる。

ここはデジモン達が住む異世界である。人間はいないのである。

ヒカリ達でさえ、デジモン達と一緒にいないと安心して歩けないぐらには危険地帯だというのに、パートナーとはぐれてしまったなんて、一大事だ。

ヒカリは自分が置かれている状況も忘れて、なつちゃんのパートナーを探そうと言った。

なつちゃんは目を見開いて驚いていたけれど、すぐに可愛い笑顔を見せる。

「……うん、そうなの、大変なの。だから一緒に探してくれる？」

そして今に至る。

なつちゃんとはぐれてしまったパートナーを探して、あちこち歩き回っているのだが、幾ら探しても、それらしいデジモンは何処にも見当たらず、ヒカリは困ったなあって眉尻を下げた。

なつちゃんのパートナーデジモンはピコデビモンという名前のデジモンらしい。

姿は丸っこくて、蝙蝠みたいな羽が生えていて、見た目は怖いけれど、とっても優しいのだそうだ。

ふーん、ってヒカリは思ったけれど、プロットモンは違ったらしい。えーって言う表情を浮かべていたから、どうしたのかって尋ねたら、ピコデビモンはとっても意地悪なデジモンで、誰かが困っているのをケラケラ笑って楽しんでいるような奴なのだという。

なつちゃんとは正反対の評価で、どっちを信じたらいいのか分からなくて、ヒカリは困ったようにプロットモンとなつちゃんを交互に見やった。

そんなヒカリを見て、なつちゃんはクスクス笑う。

きゆるん、と可愛い音が鳴った。

え、つてなっちゃんとはプロットモンが音の出どころに顔を向けると、目をぱちぱちさせた後、顔を真っ赤にさせたヒカリの姿。

お腹を押さえていたので、恐らく先ほどの音はヒカリの腹の虫が鳴いた音だろう。

そう言えば朝から何も食べていなかったのだ。

朝はお兄ちゃん達を探すためにプロットモンと軽く会議をして、あちこち歩き回っていた。

朝ご飯を食べるのを、すっかり忘れていたのだ。

すぐ近くに木の実もなっていたし、ヒカリとなっちゃんとプロットモンは、木の実を集めて朝ご飯兼お昼ご飯を食べることにした。

お昼はここに来てから定番になっている、リンゴのような果物だ。

ナイフなんて便利なものはないので（光子郎のパソコンに収められているテントの中にはある）、皮がついたままの丸かじりである。

シャクシャクシャク、とリンゴを咀嚼する音を立てながら、ヒカリはなっちゃんに尋ねた。

「ねえ、なっちゃんは本当に天使さんじゃないの？」

ヒカリの焦げ茶色の髪と、赤みがかった茶色の目、大輔くんと遊びまわって日焼けした健康的な肌とは、全く真逆の容姿。

絵本で読んだ天使さんにそっくりなのに、なっちゃんは違うと言う。

最初は、一人ぼっちになっちゃったヒカリを可哀そうに思った神様が、ヒカリのためによこしてくれたのだと本気で思っていた。

違うと言われて、ちよつとだけがつかりしたけれど、それでもプロットモンと自分だけという現状を打破てきたのはなっちゃんのお陰だから、本当は人間のフリをしている天使さんなのでは、とちよつとだけ疑っていた。

でもなっちゃんは、クスクスと笑ってやっぱり首を振る。

「違うの？本当は？」

『ねえ、ヒカリ。『テンシ』ってなあに？』

否定するなっちゃんに食い下がるヒカリに、プロットモンが聞く。

2人だけで話を進めちゃうから、構ってくれと言わんばかりにヒカ

りの膝に寄り掛かるように、話題を遮った。

でもヒカリはそれで怒ったりせず、プロットモンの質問に答えるべく、目線をプロットモンに向ける。

「えっとね、背中に白い羽が生えてて、神様のところでお仕事してるの」

『その「テンシ」に、なっちゃんが似てるの?』

「うん。前に読んだ絵本にのってたの。だからてつきりなっちゃんは天使さんだと思っただけど……」

「……ヒカリは天使さんが好きなの?」

ずーっとなっちゃんのことを天使さんと言っているせいなのか、なっちゃんはそんなことをヒカリに問う。

「うん、好き! 白い羽とか、綺麗な金色の髪とか」

実はヒカリ、お家には天使さんにまつわる絵本や本もいっぱいあったり、天使さんのイラストが描かれているとお母さんにねだって買ってもらったり、そのページだけでもらって机や壁に飾ったりするぐらいには、天使モチーフのものが好きだったりする。

あんまり自己主張せずに、こっそりと一人で楽しむ程度なので、たぶんお兄ちゃんやクラスのお友達も気づいていない。

何気に鉛筆や筆箱にも天使さんのシールが貼ってあったりするのだけれど、自慢したり見て見てーってぐいぐい行く子じゃないので、誰も気づかないのである。

いつも一緒にいる大輔くんだけは気づいているようで、この前のお誕生日プレゼントでヒカリがこっそり集めているシリーズの、天使さんのぬいぐるみをくれた。

嬉しくて嬉しくて、夜寝る時のお供にしているほどだ。

それぐらいには、天使さんのことが好きだった。

誰にも言ったことがなかったのだけれど、何故か初めて会ったはずのなっちゃんと、パートナーのプロットモンには、すんなりと話せた。

お友達には恥ずかしくて言えなかったのに。

「そっか。でもアタシは天使さんじゃないの。ごめんね?」

その代わり、つてなっちゃんは笑った。

とっておきのお話を聞かせてあげる。

「とっておき？」

「そう、ヒカリが好きな、てんしさまのおはなし」

むかしむかし、あるところに3にんのでんしさまがおりました。

3にんのでんしさまはそれぞれ、おとこのひと、おんなのひと、けものすがたをしておりましたが、すがたがちがうことなんかまったくきにしないぐらい、なかよしでした。

おとこのてんしさまは、せいぎとちつじよをつかさどり、せかいのへいわをたもっております。

けものてんしさまは、かみさまとちせいのしゅごしやといわれておりました。

そしておんなのでんしさまは、じひとじあいにもちあふれたてんしさまでした。

3にんは、いつもいっしょでした。

うれしいこともかなしいことも、いつも3にんでわけあっています。

おんなのでんしさまには、まいにちにつかになっていることがあります。

それは、げかいのようすをのぞきみることでした。

みどりいっぱいにひろがったもり、おひさまをはんしゃしてきらめくうみ、いろとりどりにさくおはな、すべててんしさまがくらしているせかいにはないものでした。

そしてそこでくらすものたちの、いきいきとしたかおは、このよでもともうつくしいとおもっていました。

じひとじあいのてんしさまは、げかいでくらすいきものを、いつもやさしいめでみまもっていたのです。

なかでもおきにいりだったのは、ちいさなあおいらゆうのこどもでした。

ちいさなあおいらゆうのいちぞくは、ながくいきられないしゅぞくでした。

それはきょうだいなちからをもっただいしようでした。

でもそのことをけつしてうらんだり、なげいたりせず、きょうというひをだいにいきることをしているいちぞくでした。

そのなかでも、いつとうげんきなこが、おんなのてんしさまのおきにいらでした。

そのこはいつもぼーるみたいにとびはねて、おなかいっぱい食べて、たくさんねて、そのひそのひをくいのないように、げんきにすごしていました。

おんなのてんしさまは、まいにちそのこをみていました。

そのこがげんきだと、てんしさまもえがおになりました。

がんばろうとおもえました。

へいわをまもるのはとてもたいへんだけれど、そのこがいているせかいをまもるために、てんしさまはがんばりました。

ときどきおとこのてんしさまとけものてんしさまも、いつしよにそのこをながめていました。

へいわでした。

へいわ、だったはずでした。

かみさまと、3にんのてんしさまが、へいわをたもっていたはずでした。

そのへいわは、みごとにくずれさってしまいました。

あるひ、そらのむこうからおそろしいものがやってきました。

それは、ざんぎやくとよばれるものでした。

それは、ぼうりよくとよばれるものでした。

げかいにすむものたちは、みんなちからをあわせて、おいはらおうとしました。

しかしぼうりよくとざんぎやくは、それをあざわらうかのように、かれらのいのちをいともかんたんにうばっていきました。

ざんぎやくとぼうりよくは、かれらのいのちだけでなく、かれらのすまうばしよまで、むざんにもうばっていききました。

てんしさまは、さげびました。

てんしさまは、なげきました。

あざわらいながらうぼっていくさんぎやくとぼうりよくにいきなり、かなしみました。

そして、かみさまにおねがいしました。

かみさま、かみさま、おねがいです。

どうかげかいにいくことをゆるしてください。

あのこたちを、たすけたいのです。

しかしかみさまは、うんとはいってくれませんでした。

やがてさんぎやくとぼうりよくによつて、すべてのいきものがしにたえてしまいました。

みどりいっぱいひろがっていたもりも、おひさまをはんしやしてきらめいていたうみも、いろとりどりにさいていたおはなも、このよでももつともうつくしいとおもっていたものが、すべてうぼわれてしまいました。

てんしさまはなきました。

たくさんたくさんなきました。

だつてもうないので、てんしさまがめでていたものが、うつくしいとおもっていたものが、もうどこにもないので、うつくし

おきいにいりのりゆうのこどもも、どこにもいません。

どこをみわたしてもいないのです。

せかいのどこにもいないのです。

だから、かみさまにおねがいしました。

かみさま、かみさま、おねがいです。

どうかげかいにいかせてください。

あのこをさがしたいのです。

やっぱりかみさまは、うんといつてくれませんでした。

てんしさまはなきました。

たくさんたくさんなきました。

どれぐらないいたのか、わからないぐらいなきました。

おとこのてんしさまは、ずっとそばにいてくれました。けものてんしさまは、いつしよにないてくれました。でもおんなのてんしさまは、なきやみませんでした。なきやんでくれませんでした。

なかよしのてんしさまたちがそばにいてくれたのに、かなしみはきえてくれませんでした。

でもそのかなしみは、いつしかよろこびにかわりました。りゅうのこどもは、いきっていたのです。

ざんぎやくとぼりよくから、のがれていたのです。

りゅうのこどものいちぞくは、みんなみなしんでしまったけれど、そのこはいきていたのです。

それをしたとき、おんなのてんしさまはよろこびました。

かなしみのなみだは、よろこびのなみだになりました。

てんしさまは、もういちどかみさまにおねがいました。

かみさま、かみさま、おねがいです。

わたしのすべてをあなたにかえすので、あのこのそばにいさせてください。

えいえんのいのちなど、あのこのためならおしくありません。

かみさまはやつと、うんといつてくれました。

おんなのてんしさまは、じぶんのすべてをかみさまにかえして、りゅうのこどももとへといきました。

ひとりぼっちで、かなしくてないたりゅうのこどもは、もうひとりぼっちじゃありません。

てんしさまだったてんしさまと、りゅうのこどもは、ずっといっしよに、しあわせにくらしました。

「……めでたし、めでたし。どう？」

語り終えたちやっちゃんは、首を傾げながらヒカりに微笑みかける。

しかしその微笑みは、何処か悲しみを帯びているように見えた。なっちゃんの話に聞き入っていたヒカリとプロットモンは、眉尻を

下げる。

「何か……悲しいお話だったね」

『そうね……ねえ、他の天使はどうなったの?』

「さあ、そこまでは。女の天使様と一緒に竜の子どもの傍にいたって
いうお話もあるし、いなくなった女の天使様の分まで平和を守ったつ
ていうお話もあるわ」

色々と話のバリエーションはあるらしい。

聞いたことがなかったけれど、帰ったら調べてみようかな、とヒカ
リは3つ目のリングに手を伸ばし……。

どおん!!

「ぎゃあっ!?!」

「え、な、何?！」

突如として揺れる地面。ヒカリとなつちちゃんとプロットモンは、
ぎよつとなつて立ち上がった。

まるで地震のようで、ヒカリは学校の避難訓練を思い出す。

確か先生は、地震があつた時はまず慌てないでつて言っていた。
建物の中で地震があつたときは机の下に隠れなさいって。

お外にいるときは、崩れそうなものから離れて、その場でしゃがん
で揺れが収まるまでじつとしていなさい。

そうだ、先生は確かそう言っていた。

ヒカリはなつちちゃんの手を掴んで、頭を抱えながらその場にしゃが
みこんだ。

なつちちゃんはびつくりした顔をしていたけれど、ヒカリが必死の形
相だったので、何も言わずにヒカリの真似をしてその場にしゃがみこ
んだ。

地面が揺れる。その上に立っている木々が葉を激しく擦りあわせ
て、ぐらぐらと震えている。

ピシリ

固いものに亀裂が入ったような音。

ピシ、ピシピシピシ

ヒカリとなつちちゃん、そしてプロットモンに向かって、地面に雷が

走ったような亀裂が走ってくる。

このままではまずいと思ったヒカリは、なっちゃんの手を取ってその場から逃げようとしたが、揺れはまだ続いており、立ち上がる事が出来ない。

ぴし……

あ、と言ったのは誰だったか。

地面に走った亀裂がヒカリとなっちゃんとプロットモンの目の前まで迫り着くと、

がらり

2人と1体の真下の地面が崩れて、ぽっかりとした穴が開いた。

重力に逆らうことができない、無力な人間の女の子達はそのまま穴の中に落下する。

「きやああああああああああああああつ!!」

2人の悲鳴が二重奏のように響き渡る。

穴は思っていたよりも浅かったが、それでもヒカリとなっちゃんが2人で肩車をしても届かないぐらいには深い。

広さは半径50メートルほど、と割と広めだった。

掘られた穴の中は少々デコボコで、歩きづらい。

一体どうして、つて混乱するヒカリとなっちゃんを、更なる危機が襲う。

大きな岩や細かい欠片になって崩れた岩壁の向こうに、落下して尻餅をついて座り込んでいるヒカリとなっちゃんとプロットモンは見た。

大きな、角。

高速で回転して、砂埃と崩れた岩の中から姿を現したのは、大きな角が鼻先から生えた、四つ足のデジモンだった。

短い体毛は、上半分が紫色で、下が白くなっている。

どすん、どすん、と地響きを立てながら岩壁に開いた穴から、ぬうつと出てきたデジモンに、ヒカリとなっちゃんは声を失う。

『このっ……パピーハウリング!!』

ヒカリとなっちゃんから引き離そうと、プロットモンは超音波をドリモゲモンにぶつける。

しかし成長期と成熟期では力の差が歴然としているし、何より身体の大きさが違いすぎる。

プロットモンが発した超音波は、まるで巨人にたかる蠅のように無力だった。

『グルルル……!』

ドリモゲモンの目の焦点が合っていない。

しかしドリモゲモンはそれでも真つすぐヒカリとなっちゃんから狙いを外さない。

どす、どす、どす、と地響きを立てながらヒカリとなっちゃんを追いかけ回す。

『パピーハウリング!パピーハウリング!!』

プロットモンは何度も技を放つけれど、ドリモゲモンは全く見向きもしない。

ならばとプロットモンはドリモゲモンに体当たりをしに行つたが、身体の大きさの差がありすぎて、プロットモンの方が吹っ飛ばされてしまった。

「プロットモン!」

「あ、ヒカリ!ダメ!」

吹っ飛ばされて転がっていったプロットモンを見たヒカリは、なっちゃんの手を振りほどいてプロットモンの下へと走る。

驚いたなっちゃんも、ヒカリを追いかけて走った。

必然的に、ヒカリとなっちゃんを追いかけていたドリモゲモンも、進路を変更する。

「プロットモン……!」

「ヒカリッ!危ない!」

うう、って呻いているプロットモンを優しく抱き上げ、今にも泣きそうな表情を見せながらプロットモンを見下ろす。

なっちゃんが声を張り上げる。

は、って反射的になっちゃんの方を振り返ると、なっちゃんの背後からドリモゲモンが迫ってきていた。

「……きゃあっ！」

足場が不安定の中で走っていたせいで、なっちゃんは足を取られて転んでしまった。

「なっちゃん！」

『っ、ヒカリッ！』

ヒカリはプロットモンを抱えたままなっちゃんの下へと走る。

だがヒカリが駆け付けるよりも、ドリモゲモンがなっちゃんを踏みつぶす方が早い。

間に合わない、でもヒカリは止まる気配がない。

このままだとヒカリまで……！

プロットモンの心の奥から、何かが沸き上がってくる。

『うあああああああああああああああああああああああああああああああつ!!』

プロットモンが悲痛の籠った咆哮を上げると、ヒカリの腰についているデジヴァイスから、眩く強い光が漏れる。

その光は、ヒカリが抱いていたプロットモンを包み込んだ。

眩い光が、薄暗い穴の中を強く照らしつける。

その眩さに、ヒカリとなっちゃんは咄嗟に目を瞑り、ドリモゲモンはもだえ苦しみながらその動きを止めた。

『プロットモン進化——』

0と1に変換された光によって、プロットモンのデータが書き換えられていく。

くるくると回転しながら、光に包まれたプロットモンの姿形は、四つ足から二足歩行に変化した。

『テイルモン！』

見た目はまるで白い猫のようだった。

白と紫の縞模様の尻尾はその体長より長く、金色のリングが通っていた。

手には鋭い爪が生えた手袋をはめている。

念願の成熟期に進化したが、しかしその大きさは、ヒカリの腰ほどしかない。

プロットモンと比べれば大きいものの、ドリモゲモン相手ではかなり心許なかった。

ヒカリとなつちやんの表情は困惑に彩られている。

しかしプロットモン、否、テイルモンの表情は自信に満ち溢れていた。

光が収まり、苦しんでいたドリモゲモンは、首を振ってチカチカする視界を振り払う。

再び咆哮を上げながら突進してこようとしたので、なつちゃんは我に返った。

プロットモンが進化したことに目を奪われていたので、自分が転んだことをすっかり忘れていたのだ。

危機はまだ去ったわけではない。

しかしその危機がなつちゃんに牙をむくことはなかった。

『はあっ!!』

テイルモンの、気合の籠った声。

そして、ヒカリとなつちゃんは信じられないものを見る。

小さな身体を駆使して、頭部のドリルが届かない懐に潜り込んだテイルモンは、あろうことかその巨体を持ち上げるようにアッパーをかましたのである。

吹っ飛ぶ巨体。もちろん、ヒカリとなつちゃんに被害がないように、位置を調節して。

ずうん、と地響きを立てながら落下して、ひっくり返るドリモゲモン。

すごい、つてヒカりはテイルモンの方に顔を向けるが、やはり無茶をしたせいなのか、少々息が上がっていた。

「テイルモン……いー」

『平気よ、これぐらい！それより2人とも、もう少し下がって！』

テイルモンの目はまだやる気に満ちている。

ヒカリとなっちゃん顔を見合わせると、離れたところに積み重なっている岩の瓦礫の陰に隠れた。

『グルルルるるる……!!』

ドリモゲモンが唸る。

その目は焦点が合っておらず、口の端から唾液が垂れていた。

ずしん、ずしん、と地響きを立てながらテイルモンに狙いを定めたその足は、ふらついていった。

——様子がおかしい。

これは早いところケリをつけた方がよさそうだと判断したテイルモンは、ドリモゲモンに向かって走り出した。

距離を詰め、あと数メートルというところで跳躍する。

ドリモゲモンが降り回した、頭部についた角にとん、と乗つかると、更にそれを利用して高く飛び上がった。

穴の外へ飛び出すテイルモンを追って、視線を上へ向けたドリモゲモンを襲ったのは、強烈な光。

ほぼ天辺に登った太陽の光がドリモゲモンの目を焼く。

ぎゃあ、と悲鳴を上げて目を瞑ったドリモゲモンの隙を逃さず、重力和落下で加速した拳を振りかぶった。

『ネコパンチッ!!』

その脳天に重たい一撃をお見舞いする。

ドゴオ、だかバキイ、だか何かが割れるような音が聞こえた気がした。

反動をつけ、テイルモンは宙がえりをしながらドリモゲモンから飛び降りる。

脳天を思いきり殴られたドリモゲモンは、白目を剥いてゆっくりとその場に倒れこんだ。

「……や、った、の?」

「……分かんない、けど……」

息を飲むヒカリとなっちゃんは、岩陰からそろそろと出てきて、倒れこんだドリモゲモンを見つめた。

大きく口を開け、涎を口の端から垂らしているドリモゲモンは、数

分ぐらいじつと見つめていたが動く気配がなかった。

「……はあ」

「え!? ヒカリ!?」

『ヒカリッ!』

へなへなとその場に座り込んだヒカリに、なつちゃんとテイルモンが慌てたが、安心しただけだと引きつった笑みを浮かべた。

『……いつまでもここにいられないわ。またドリモゲモンが起きたら、さつきみたいにな手くいくとは限らない。早くここから出ましよう』

呆れたように溜息を吐いたテイルモンは、ヒカリとなつちゃんにそう言った。

「ど、どうやって……?」

なつちゃんが言う。

ヒカリとなつちゃんの身長を合わせたよりも深い穴である、よじ登るのはかなり骨がいりそうさ。

と言うか体力にあまり自信がないから、登りきれるかも怪しい。するとテイルモンがふふんと胸を張りながら、鼻を鳴らした。

『ワタシに任せなさい』

そう言うと、テイルモンはヒカリとなつちゃんの間で移動し、腕をしつかりと2人の腰に回すと、何と2人を抱えたまま軽々と跳躍したのだ。

デコボコに出っ張った岩場を上手く利用しながら、テイルモンは2人を抱えて穴の外へと脱出する。

2人を下ろす。ヒカリとなつちゃんは、目を白黒させながらテイルモンを見下ろした。

ヒカリよりも身体が小さいテイルモンが、女の子とは言え2人の人間を抱えて何でもないように大きくジャンプしたのである。

すごい、つてヒカリはようやく事態を飲み込み始めて、頬を上気させた。

「すごいね、プロットモン! あんなに身体が大きいデジモン、あつという間に倒しちゃった!」

『ふふ、今はテイルモンよ、ヒカリ。当然じゃない、身体が小さくとも成熟期よ。あんなのに負けるわけないでしょ』

そう言つて胸を張るテイルモンに、ヒカリは目をキラキラさせながらすごいすごいって何度も連呼した。

なつちゃんはふふ、つて苦笑している。

……そして、少し寂しそうな表情を見せた。

『……さて、いつまたドリモゲモンが起きてきて襲い掛かってくるか分からないし、早くここから離れましょう』

「うん、そうだね。なつちゃん、行こう?」

「……ヒカリ」

なつちゃんに手を差し出そうとしたヒカリは、なつちゃんの落としたような眩きを拾った。

なつちゃんの向こうから風が吹いて、なつちゃんのバターブロンドのふわふわの髪が、風と戯れて遊んでいる。

瑠璃色の目は、太陽を背にしているせいで、暗い影を帯びているような気がした。

一瞬だけ、ヒカリは息を飲む。

「……ごめんなさい」

「え?」

なつちゃんは、何故か頭を下げた。

え、え? つてヒカリとテイルモンは慌てる。

「ごめんなさい、ヒカリ。本当にごめんなさい」

「な、なつちゃん? どうしたの?」

『何故謝るの?』

「……アタシ、ヒカリと一緒に行くことはできないの」

「……何で?」

「アタシね、ヒカリに嘘ついてたの」

嘘? つてヒカリとテイルモンが首を傾げると、なつちゃんはようやく顔を上げて、小さく頷いた。

「ゲンナイさんに呼ばれたっていうのも、パートナーとはぐれたっていうのも、嘘なの」

「……そうなの？」

『何故そんな嘘を……』

「……あのね、ヒカリ、テイルモン。約束してほしいことがあるの」
なつちゃんはヒカリとテイルモンの質問には答えず、彼女の両手を
取って優しく握り、ヒカリの目をじっと見つめた。

「約束……？」

「そう、約束。そうしたら教えてあげる」

真剣な表情で見つめてくるなつちゃんの剣幕に、ヒカリは何を感じ
たのか、同じように真剣な顔つきになって、しっかりと頷いた。

なつちゃんは、ほっとしたように表情を緩め、ありがとうと小さく
言った。

「あのね、アタシと逢ったこと、誰にも言わないでほしいの」

「……どうして？」

「約束、して」

ぎゅ、とヒカリの両手を握るなつちゃんの手は、少し震えていた。
そのことに気づいて、ヒカリはなつちゃんと自分の手を見下ろした
後、顔を上げてなつちゃんを見やる。

見つめ合うこと、凡そ数分。

「……分かった。言わない。誰にも言わないね、なつちゃんのこと。
約束する」

『……ワタシも』

ヒカリのただならぬ気配を感じたのか、テイルモンもそう言った。

ありがとう、となつちゃんはようやく笑ってくれた。

そして話す。どうして嘘をついていたのか、それは。

「本当はね、ゲンナイさんに言われたの。逢っちゃダメって。陰から
見守っているように、って。でもみんな、デビモンのせいではぐれ
ちやっただしょ？アタシ、どうしようって凄く悩んで……太一達は
大きいし、パートナーも進化してるから、大丈夫かって思って、それ
でヒカリのことを見守ることにしたの」

「私？どうして？」

「だってヒカリは女の子でしょ？」

こてん、となつちゃんは首を傾げる。

どうしてそんな当たり前のことを聞くの？と言いたげな表情に、そっかあつてヒカリは納得してしまった。

ヒカリは女の子だから。いつも言われていることだ、お兄ちゃんに。

そのことについてヒカリは疑問に思ったことすらなかったのだが、それは今は置いておくことにして。

「なつちゃんのこと、内緒にする。私とテイルモンと、なつちゃんだけの約束」

「うん」

なつちゃんの手を握り返す。

ヒカリは口の堅い子だ。言わないと約束したこともあり、今日なつちゃんと逢ったことは絶対に太一達に口外することはないだろう。

嘘をつくのは苦手だけれど、隠し事は得意だ。

なつちゃんと逢ったことを悟られる心配もない。

……大輔には感づかれるかもしれないけれど、その時はその時だ。

「本当にごめんなさい。ヒカリを騙すつもりはなかったの」

「ううん、いいの。だってなつちゃん、ずっと私のこと助けてくれたもん」

ヒカリとテイルモンに危害を加えるつもりだったのなら、逢った時に仕掛けてくるはずだ。

でもなつちゃんはヒカリと一緒に太一達を探してくれていたし、ドリモゲモンに襲われた時だってヒカリの手を引いて一緒に逃げてくれた。

なつちゃんは敵ではないと、ヒカリの本能が告げている。

『……それで、これからどうするの？一緒にはいけない、ということだけれど……』

「うん、一緒に行けない。だから帰るね」

帰る？ってヒカリとテイルモンは首を傾げる。

「何処に？」

「ゲンナイさんのところ。みんなを陰から見守ってほしい、ってゲン

ナイさんに頼まれてたけれど、ヒカリに見つかっちゃったから、帰らなきゃ」

「……どうしても?」

うん、つてなっちゃんは微笑む。

ヒカリは、寂し気に俯いた。

右手を解いて、ヒカリの頬にそつと添える。

「大丈夫よ、ヒカリ。またすぐ会えるわ。ちよつとお別れするだけだから」

「……ほんとに?」

「ええ。……あのね、ちよつとだけ。ちよつとだけ教えてあげる。本当は貴女達が全部やらなきゃいけないんだけど、ゲンナイさんに口止めされてるんだけど、逢っちゃったから教えてあげる。でも誰にも言わないでね?」

しーっ、て口元に人差し指を当てて、ヒカリとテイルモンにしか聞こえない音量でお話をした。

「あのね、海の向こうにサーバ大陸っていう場所があるの」

「サーバ大陸?」

『……そういう大陸がある、と言うのは聞いたことはあるけれど……』

テイルモンが首を傾げる。

ファイル島から出たことがないテイルモンは、知識としては知っているようだが、詳細は知らないらしい。

ヒカリとテイルモンは、続きを促すようになったちゃんを見た。

「ゲンナイさんとワタシはね、普段はそこに住んでるの。このファイル島からずーつとずーつと海の向こう」

「海の向こう……もしかして、そこも……?」

おずおずと尋ねるヒカリの意図を理解したなっちゃんは、辛そうに目を伏せた。

それだけで、ヒカリとテイルモンは理解できた。

海の向こうにあるサーバ大陸にも、闇の手が伸びているらしい。

アンドロモンの工場でも、同じようなことを言っていたのを思い出した。

この世界に巣食う闇を晴らすために、異世界から戦う力を持つ子どもを呼び出した、とゲンナイさんは言っていた。

この小さな島を守るためだけなら、デジモン達でどうにかできる、でも事態はこの世界の住人だけでは手に負えないところまで来てしまった。

だからヒカリ達は、今ここにいます。

「この闇を晴らしたら、次はサーバ大陸に来てほしいの。そこでもた逢えるから、それまではワタシと逢ったことは、3人だけの秘密ね？」

「うん、分かった」

『約束だ。なつちゃんのこととは絶対に言わない』

す、となつちゃんは小指を差し出した。

ヒカリはなつちゃんの小指に、自分の小指を絡ませ、歌う。

「ゆーびきーりげーんまん」

「うーそつーいたーら、はーりせーんぼん」

「のーますー！」

指きった！2人の少女は笑った。

次に、なつちゃんはテイルモンに自分の小指を差し出した。

ヒカリのように小指を絡ませることはできないから、代わりに手袋の爪に小指を絡めてもらい、同じように歌う。

聞いたことのない歌だったけれど、何となく楽しくなった。

「……行って、ヒカリ。ここでお別れ」

「……うん」

名残惜しそうにするが、ヒカリは他の仲間達を探さなければならぬ。い。

なつちゃんも、ヒカリに見つかってしまった以上、ここに留まっては行かない。

サーバ大陸というところでまた逢えるから、つて言ってくれたから、残念だけれど行かなければ。

「……このまま真つすぐ行けば、ヒカリの1番好きな男の子がいるよ。だから早く行ってあげて？」

1番大好きな男の子。そう聞いて思い浮かぶのは、2人だ。

1人は兄の太一。いつもヒカリを守ってくれて、サッカーをしている姿がとつてもかっこいいお兄ちゃん。

もう1人は……。

「バイバイ、ヒカリ。また逢いましょう?」

強い風が吹く。きや、つてヒカリとテイルモンは咄嗟に目を瞑った。

次に目を開けた時、なつちゃんの姿は何処にもなかった。

「……………」

優しい風が、ヒカリの短い髪を撫でつける。

不思議な色をした青空が、ヒカリを見下ろしていた。

『…………ヒカリ?』

「…………うん、何でもない。行こう!」

ぼんやりしていたヒカリに声をかけたが、ヒカリは何でもないと首を横に振った。

そして、なつちゃんが指をさした方角に駆け足で向かう。

テイルモンは慌てて追いかけた。

この先に、ヒカリの「大好きな男の子」が待っている。

「…………ヒカリ、ごめんなさい。ワタシ、また1つ嘘ついた」

「逢っちゃいけない、って言われてたのは本当だけど、ヒカリには、貴女にだけは逢いたかったの」

「…………だって、貴女は、ワタシの——」

蒼い竜の飛翔

《ひどいよ！お母さんも、お父さんも！》

白い背景に滲み浮かんだのは、〃自分〃だった。

《自分》はここに居るのに、《自分》の視界に映っているのは、確かに
〃自分〃なのだ。

両手の拳をぎゅっと握りしめ、全身を使って叫んでいた。

《どうして？どうしてそんなことしたの？お姉ちゃんがかわいそうだよ！》

叫んでいる〃自分〃の目の前に、男性と女性が現れる。

それは、とても見覚えのある2人で、《自分》の顔が顰められるのが分かった。

2人とも、困ったような、狼狽しているような表情をしている。

《ねえ、何で？どうして答えてくれないの？》

〃自分〃が問う。その後ろに、すーっと浮かび上がってきたのは

……〃姉〃だった。

《もういいよ、『』。もういいから……》

〃姉〃が必死に〃自分〃を宥めている。

背後から〃自分〃に縋るように、肩に手を置いてきた。

それでも、〃自分〃は止まらなかった。

《……もういい、お父さんもお母さんも知らない！嫌い！》

何も言ってくれない2人に痺れを切らした〃自分〃が、痙攣を起こして2人に背を向け、何処かに行ってしまった。

白い背景に溶けていくように、〃自分〃が消え去った。

「……………」

〃大輔〃は、〃自分〃のことははずなのに、何処か他人事のようにこの光景を見ていた。

『……ケ……スケ………ダイスケ!』

は、と目を覚ますと、目の前には心配そうに見つめてくる2つの赤い瞳。

ブイモンだと気づくのに数秒ほど気づいた。

むっくりと起き上がる。大丈夫? って聞いてきたから、ぼーっとながらも頷いた。

『ホントに? でも、ずっと魘されてたぜ?』

「……変な夢見てたけど、忘れた」

ブイモンにそう指摘されたが、嘘である。

本当は不気味なぐらいはつきりと覚えているのだが、口にするのも憚れたので、大輔はそう言って誤魔化した。

それよりも、

「………何処だ?」

辺りを見渡した大輔が言う。さあ、つてブイモンは困ったように返事をした。

大輔とブイモンがいたのは、静かな森の中だった。

ただの森ではない、適度に湿り気があるようで、剥き出しになっている肌にじつとりとした空気が纏わりついた。

しかし夏の湿気のような、不快な感じはしなかった。

森の木々が地面から吸い上げた水分を、空気中に放出しているようで、大きく息を吸い込むと肺の中に空気中に漂っている水分が入り込んで、少し冷たくなった気がした。

背の高い木々がデコボコとした足場の悪い地面から生えて、空を覆いつくしているのに、薄暗さを感じないどころか、どこか神聖な空気がすら感じる。

前にビデオで見た、自然と共に生きる少年と、山犬に育てられ人間を憎む少女を主人公とするアニメ映画に出てきたような森に似ていると思った。

黒いミミズみたいなものを大量に身に宿した猪が、若干トラウマ

だったりする。

「……いや、ホントに何処だよ?」

『わ、分かんない……』

啞然と見上げていた大輔が再度ブイモンに問いかけるが、ブイモンは自信なさげに小さな返事をするだけだった。

何でだよー! ってブイモンの肩を掴んでがつくんがつくと揺さぶる大輔だが、知らないもんは知らないよー! としか返せない。

でも、と解放されたブイモンが軽く咳き込んだ後、再びぐるりと辺りを見渡した。

『……何だろう、何か……懐かしい匂いがする……』

「懐かしい匂い……?」

うん、とブイモンは神妙な表情で頷く。

その表情はまるで、苦しそうな、切なげな、今にもその赤い眼から涙を零しそうだったので、大輔は一瞬息を飲んだ。

「ブ、ブイモン……?」

『え?何?』

しかしその表情は、すぐに引っ込んでしまった。

大輔が声をかけると、キョトンとした顔を浮かべて大輔を見やる。あれ、って大輔は目を白黒させた。

この森を懐かしいと言って、今にも泣きそうな表情を確かにしていたのに、こちらを向いたブイモンは、いつもの表情をしていた。

気のせいだったのだろうか、って大輔は腕を組んで沢山の「?」マークを頭上に浮かべる。

……が、幾ら考えても答えなんか出てくるわけがないので、大輔はとつと気持ち切り替えた。

「とりあえず、ここから出ようぜ。じつとしても、こんなに深そうな森じゃあ見つけてもらえるか、分かんねーしよ」

『おう、そうだな』

もう1度辺りを見渡してみる。大輔とブイモンをここまで運んだベッドが、地面に激突したためか、骨組みからバラバラになっていた。

大輔の青いパーカーと茶色いズボンが、残骸になったベッドから零

れたシートに包まれるように地面に転がっているのが見えたので、それを拾って軽く埃を払い、パジャマから着替える。

パジャマを置いていくのは憚られたので、荷物になると分かっていたが持つていく他ない。

お姉ちゃんが見たら絶対に文句を言いそうな雑な畳み方をする。

ん、と大輔はブイモンに手を差し出すと、ブイモンは何の違和感も躊躇もなくその手を取り、手を繋いだ。

しかし、

「……どっちに行けばいいんだろう」

『……………』

1歩踏み出す前に、大輔達は早速壁にぶち当たった。

自分達が今、何処にいるのか分からないのである。

だから何処に向かえばいいのか、出口が何処にあるのか全く見当がつかなかった。

気がついたらこの森の中にいたのだ、分かるはずがない。

あのいかにも怪しい館で一夜を明かそうとしたのが、きつと運の尽きだったのだ。

ずっと怪しい気配がしていたのに、上級生達に遠慮して何も言い出せなかった。

そのせいで仲間達は、そしてファイル島はバラバラになってしまった。

やっぱり言っとけばよかったかなあ、って思う反面、言ったところで理解してくれたかどうかとも思う。

怪しい気配がするから、館から離れましょう、なんて絶対信じてくれない。

……お姉ちゃんがいたら、真っ先に話して、太一さん達に上手く言ってくれていたかもしれないのに。

一瞬そんな考えが思い浮かんだけれど、ここにいない人のことを考えても仕方がない。

大輔はぶんぶんと首を思いっきり振った。

『え、ダ、ダイスケ？どうしたのさ、急に……？』

「……いや、考えても仕方ねえなって思ったんだよ」

いきなり首を振り出した大輔に驚いたブイモンだったが、大輔は何でもないと再度誤魔化した。

それよりもまずは太一達と合流する方が先である。

四方を森に囲まれて方向感覚が分からないが、とりあえず進んでみれば何か分かるだろう、と楽観的に考えて先に進もうと1歩踏み出した。

「うわっ！」

『危ないっ！』

斜面になっっているようで、1歩踏み出したら湿っている土で足が滑りそうになった。

ブイモンが咄嗟に繋いでいる手に力を加えて、大輔が転ぶのを阻止する。

サンキュー、ってお礼を言いながら、今度は転ばないように1歩1歩踏みしめるように進んだ。

斜面になっっている、ということとは、ここは山なのだろうか。

斜面と言っても緩やかな下り坂で、慎重に進んでいけば滑り落ちていく心配はなさそうだ。

猪突猛進を体現している大輔にとっては、時間をかけて進まなければならぬのは苛立ちの種だろうが、ここですつ転んで怪我をしても心配してくれる人（というかデジモン）はいいても、絆創膏を貼ってくれる人はいない。

初めてこの世界に来た時に、逃げ回った際にスライディングするみたいにずっこけて膝を擦りむいたことがあったが、落ち着いてから空が絆創膏を貼ってくれた。

あれから1週間近く経っている。

傷はとつくによくなくなっていたから、膝小僧に貼っていた絆創膏は何処にもなかった。

大輔はよく転ぶから少し持ってなさい、ってその時言われていたんだけど、横着して受け取らなかつたことを、今猛烈に後悔している。

目の前が薄らと白みがかってきた。
顔や腕に纏わりついてくる水分が先ほどより多くなってきた気がする。

不快さはないけれど、ちよつとべたべたしてきた。
前に進む。白みがかつた光景は、少しずつ濃くなっていく。

霧雨みたいだった水分が、白いベールに変わっていく。

「……ブイモン、いるよな？」

『……ダイスケこそ』

霧雨が霧に変わるのに、時間はかからなかった。

真つ白な視界は、手で泳ぐように掻き分けるように探らなければ、
障害物にぶつかってしまいうぐらいに濃い。

時々間に合わなくて、気づいたときには木にぶつかることもあった。
た。

両手でやればその危険は減るだろうに、大輔もブイモンもそれをしようとしなない。

片方の手は塞がっている。2人がはぐれないように。

それでも時々互いに声をかけあつて確認している。

今繋いでいる手は、本当に自分のパートナーのものなのか、それが不安で。

どちらに戻ろうとは言わなかった。来た道を引き返そうとは言わなかった。

こんなに霧が深くては、戻っても意味がないからだ。

もう前に進むしかない。

2人は更に慎重になる。

互いの手を掴む己の手の力が、ますます強くなる。

やがて、それは唐突に終わりを迎えた。

「……あれ？」

素つ頓狂な声をあげたのは、大輔だ。

霧が、晴れたのだ。

でもそれは徐々に薄れていったのではない。

まるでハサミで切り取られたかのように、唐突に晴れたのだ。

そこにだけ見えない壁があつて、それに阻まれているかのよう、押しとどめられるように終わったのである。

2年生の大輔でも、流石にそれが不思議な現象だと分かる。

沢山の「？」が大輔とブイモンの頭上に浮かんでは消えていった。

「……………う、おー？」

しかしいくら考えても、大輔の頭では到底理解できそうになかったので、さっさと切り替えることにした。

霧が行く手を阻まれている箇所には、円形の空間が出来ていた。

誰の手も加えられていないような原生林だったはずなのに、大輔とブイモンが霧に誘われ、迷い込んだこの空間は、誰かが円形になるように木を植えたか、木を伐採したかのような不自然さと完璧さを感じた。

そしてその中心には、樹齢何千年はあろうかと思われる樹が聳え立っていた。

少し盛り上がった地面の上に、まるでこの森の主のように君臨しているその樹に見とれて、大輔は感嘆の溜息を吐いた。

夏休みになると毎年のように放送される、北欧のトロールがモデルと言われている妖精と2人の少女達の心の交流を描いた、アニメ映画に出てきそうな樹だと言えば想像はしやすいだろう。

あの樹のように背は高くなかったが、幹は子ども達が全員手を繋いで囲んでも足りないくらい太かった。

生い茂っている枝のあちこちで、一定の間隔で何かが発光しているのが見える。

神々しさのような、神秘的なものさえ感じた大輔は、すごいなあつて素直な感想を抱いて、それをパートナーのブイモンと分け合おうと思ひ、隣にいるブイモンの方に顔を向けて……………目を見開いた。

「へ!?ちよ、おま、どうしたんだよ!?!」

『……………え?』

ぎよつとなつて、一瞬だけ硬直して、慌てて声をかける。

惚けていたブイモンは、声をかけられたことでぼんやりとしながらも、大輔の方に顔を向ける。

何で、って口をパクパクさせながら、大輔は言った。

「お前、何で、泣いてんだよ……？」

『……………へ？』

何を言われているのか理解するのに時間がかかったブイモンだったが、気づいていない様子のブイモンに大輔は手を伸ばして目元を拭ってやる。

そこでようやく、ブイモンは自分の異変に気付いた。

顔に両手を持っていくと、指先にぽつりと雫が伝った。

次から次へと雫が落ちてきて、それが涙だと気づくのに数秒かかった。

あれ、あれ、ってブイモンは慌てて拭うが、涙は留まることを知らず、ブイモンの意思を無視してどんどん溢れてくる。

『な、なん、で』

「ちよ、もう、勘弁してくれよ……」

ハンカチなんて持ってねえよ、と呟いて、大輔はパーカーの裾を引っ張ってブイモンの目元を乱暴に拭いてやった。

しかし涙は止まらない。ダメだ、と大輔はブイモンの涙を止めることを諦めて、泣き止むのを待つという選択をした。

数十分後。

「……………泣き止んだかよ」

『……………ん、ごめん。急に……………』

別にいいよ、と大輔は告げる。

沢山泣いたせいで、元々赤いブイモンの目が更に赤くなっているし、目元も少し腫れている。

水でもあればいいのだが、この辺に小川はないようなので、放っておく以外なかった。

「……………でも何だっけ急に泣き出したんだよ？」

先ほど、懐かしい匂いがすると言っていた時も、泣きそうな表情を浮かべていたことを思いだした大輔は、気になって聞いてみる。

手のひらを押し付けるように目元を拭っていたブイモンは、未だにしゃくりあげていた。

『……分かんない。分かんないけど……さっきつから胸の奥が痛くて……』

「え？胸の奥が痛いって……何かの病気か？」

『……多分そういう意味じゃない』

そうじゃなくて、とブイモンは鼻をすすった。

『胸の、奥から……懐かしさとか、痛みとか、ぶわーって溢れてきて……』

気がついたら泣いていたらしい。

自分でもよく分かっていないようなので、大輔に理由が分かるはずもなかった。

とにかく泣き止んでくれたし、多分もう大丈夫だと思う、という何とも頼りない答えが返ってきたので、よしとしよう。

それよりも。

大輔はこのぽつかりと空いた空間の中止に立っているあの樹が、先ほどから気になって仕方ない。

ブイモンの手を取り、大輔は中心にある樹に恐る恐ると言った足取りで近づいていく。

積み上げられた岩と土の玉座の階段をあがり、時々湿った土に足を取られそうになりながらも君臨する森の王の下へと歩み寄っていた。

「……………」

『……………』

木の根元付近まで近寄って、立ち止まる。

見上げる。生い茂る枝の葉から零れている光は、どう見ても空から降り注いでいる太陽のものではない。

しかし大輔達がいるところからでは、よく見えなかった。

背は高くない樹だが、大輔が手を伸ばしても一番低い位置にある枝には届きそうにない。

光がなんなのか気になって仕方がない大輔は、しかしこの樹に登ろうという気にはなれなかった。

何と言うか、神々しさと同時に、威圧感のようなものも感じたのだ。ただそこにあるだけのはずなのに、上から押さえつけられるような圧迫感を覚えたのである。

だが拒絶されているとも思えなかった。

それならここまで近づけない。

ここに来たのも、偶然ではないような、そんな気がして仕方ないのである。

視線を下にずらす。樹の根っこが一部盛り上がって、洞（うろ）のようになっっていた。

大輔が四つん這いになれば余裕で入れそうな入口だった。

中はどうなっているのだろう、と大輔はブイモンから手を離して1歩近づいてみる。

その時であった。

《久しいな、人間》

声が出た。その空間に響くような、空気をその手に収めて抑え込むような声に、大輔とブイモンはきよろきよると辺りを見渡した。

「……今の、聞こえた？」

『う、うん……』

何処から聞こえてきたのか、自分達以外の誰かがいるのか、太一達の声ではないのは確かだ、大輔は後ずさりしてブイモンの隣に並び、手を掴む。

ブイモンも、握り返す。大輔を守るのは、自分だけだ。

ここで戦う力があるのは、自分だけだ。

致命的な弱点はあるが、今はそんなことを言っている場合ではない。

進化が出来ない？知るか、そんなこと。大輔を守るのは俺だ！

大輔の手を握る手に、力が籠る。

《……む？よく見れば儂が出会った子どもとは姿形が異なっておるな

……》

「だっ、誰だよ!? 何処にいるんだ!？」

『す、姿を見せろ!』

《おかしなことを言う。僕は目の前にいるというのに……》

目の前? って大輔とブイモンは顔を見合わせた後、正面に目線を戻す。

そこにあるのは、この空間の中心に聳え立っている巨大な樹だけである。

……つまり。

「……樹が、喋った?」

《ようやく気付いたか》

くつくつと含むように笑う声の主…… “樹” は言った。

数十秒ほど硬直した大輔とブイモンは、その後パニックに陥ってぎゃあぎゃああと騒ぎ立てる。

「樹!? 樹が喋ったのか!? 何で!？」

『し、知らないよ! 喋る樹なんて俺も見たことないし!!』

《はっはっは、元気のいい子どもだ》

パニックになっていいる大輔達を尻目に、“樹” は呑気なことを言っている。

数分経つてからようやく落ち着いた大輔とブイモンは、恐る恐ると言った様子で “樹” を見上げた。

先ほどまでは遠慮なく見上げていたのに、と “樹” はまたくつくつと笑う。

何処にもないはずの目に見られているような居心地の悪さを、大輔とブイモンは感じてむすりとむくれた。

《……随分久しい顔を見たな。暫く見ていなかったが……懐かしい》
「?」

《いや、こちらの話だ。……人間がいるということは、またこの世界に危機が訪れているのだな? 全く、いつの世も忙しない……樹として存在している身としては、平穩無事で過ごしたいのだが……》

「……どうしよういふこと?」

《何、儂は何千年、何万年も前からここに存在している。『前』にも人間の子どもが、ここに来たのだ》

「え!?俺達の前にも人間が来たの!？」

《応。この世界に危険が迫ると、世界が人間の子どもを選出し、世界を救ってもらう。そうしてこの世界は1度破滅を免れたのだが……また人間の子どもがここにこうしているという事は……》

『樹』が溜息を吐いたかのように、言葉を切る。

『どうしたんだよ?』

《……否》

黙り込んでしまった『樹』にブイモンが首を傾げながら問いかけたが、『樹』は何でもないと答えた。

「……なあ、俺達よりも前に選ばれた子どもで、世界は救われたんだよな。その時は何があったんだ……?」

《……それは儂の口からは語れぬ。儂はただ長生きしているだけの『根』に過ぎん。この世界の行く末を見届けるだけの存在。この世界の生き証人。儂に出来るのはただここに在るだけ……》

目の前にあるのは『喋る樹』のはずなのに、その『樹』が悲しみの表情を浮かべているような錯覚に陥って、大輔は目をぱちくりとさせる。

先ほどまで感じていた畏怖は何処へ行ったのか、大輔はブイモンの手を離すと『樹』を見上げながら近づいていき、そつと幹に手を伸ばして、撫でた。

《……何をしている?》

「……何か悲しそうだったから」

そう言って大輔は年月を重ねた、荒い『樹』の肌を優しく撫で続ける。

突然の、大輔の行動に面食らって啞然としていた『樹』だったが、やがてくつくつと笑い、そして森中に響き渡るほどの高笑いを上げる。

大輔とブイモンは、びっくりしてその場で硬直してしまった。

《くくくつ……子ども、名は》

「え……うだ、大輔、だけど……」

《……そうか、大輔。お前はいい眼を持っているな》

「眼……？」

首を傾げる大輔。

さわり、と風が吹いていないのに枝の葉が揺れた気がした。

《そうだ。本質を見抜くその眼……その眼ならば、孤独に身を落とした者を見極め、救い上げることが出来るやもしれぬ》

「……何言ってるのか、さっぱり分かんねーんだけど……」

《……今はまだそれでいい。この世界を救うために、お前達は呼ばれた。今はこの世界を救うことだけを考えろ。しかし、そうだな……》
ふむ、と『樹』は考え込むような素振りをする。

さわり、風が吹いていないのに枝の葉が揺れる。

そして、のっそりとした動きで、1番低い位置にある枝が何と動き出した。

ぎゃあっ!?!と大輔とブイモンは悲鳴を上げて後ずさる。

「What the…?!? The branch is moving!
!? Why!?! How did you do that!?!」

『ダイスケ……また変な言葉になってるよ……』

またもや興奮して英語で捲し立てる大輔に、ブイモンが半目になりながら指摘する。

もうだいぶ慣れてきたから、指摘するだけに留めておいた。

いけね、と大輔は口を抑えると、『樹』がくつくつと笑う。

《面白いな、大輔は……取って食うわけではないから、戻ってこい》
確かに『樹』では大輔を食べることなんかできない。

別に、食われると思ったわけじゃないし、枝が突然動いてびっくりしただけだし、と言いつつ試みただけで考えながら、大輔とブイモンは手を繋いだまま、意を決して『樹』に近づいた。

《身に着けている聖なる絡繰りを出せ》

「?聖なる絡繰り……?」

《腰につけているだろう、お前達にのみ身に着けることを許された、
進化の光》を放つものだ》

「……もしかして、これのこと？」

「樹」の言いたいことを察した大輔は、ズボンにひっかけていたデジヴァイスを手に取り、「樹」に見せるように差し出す。

「樹」は枝を動かし、デジヴァイスの真上に翳す。

ほわん、とここに来てからずっと気になっていた光が点滅した。

枝が大輔の近くに移動したことで、それがはっきりと見えた。

それは、まるでガラス玉のようだった。

怖いぐらいに透明で、その中に光が包み込まれているように収まっていた。

ガラス玉には何かの塗料で塗られたような、綺麗な曲線の模様が描かれている。

綺麗だなーって見とれていたら、そのガラス玉から雫のようなものがじわりと染み出した。

ぴちよん、そんな音を立ててガラス玉から染み出た雫が、デジヴァイスのディスプレイに落ちた。

ばあ……

デジヴァイスが風を巻き起こしながら、眩い光を発する。

うわ、と大輔とブイモンは眩い光に、目を瞑った。

数秒ほど経って、光はデジヴァイスの中に収まるように消えていった。

「……びっくりした」

『な、何？今の……』

《何、これから先で役に立つだろう。ここから動くことのできない、儂からの餞別だとも思ってくれ》

さて、と「樹」は言った。

《……そろそろ行きなさい、大輔。仲間を探さなくてはならんのだろう？》

「へ？え、あーそうだった！」

本来の目的を思いだした大輔は、デジヴァイスを再びズボンにつっ

かけて、ブイモンの手を取り、湿った土と岩が積み上げられて出来上がった自然の玉座を降りた。

「あのっ、何かよく分かんねえけど、ありがとう！」

降り切ったところで、大輔は振り返り、そう言った。

「俺、頑張るから！世界を救うとか、闇を祓うとか、よく分かんねえけど、でも、俺に出来ることは何でもするから！」

《……………》

「ブイモンと一緒に頑張るから！だから、えっと、何て言えばいいのかな……………」

《……………ふふふ、今回の子どもも随分頼もしいな。ああ、是非とも頑張ってくれ。俺はいつでも見守っているぞ……………さあ、もう行きなさい。お前の仲間の1人がこちらに向かっているようだ》

『え!?な、何でそんなこと分かるんだ!?!』

《ふふふ、さてなあ。全ては風が知っているのだ》

そして再三、『樹』は先を促した。

大輔はもう1度礼を言っつて、ブイモンの手を引っ張ってその場から立ち去って行った、

空間を取り囲むように立ち込めていた霧は、いつの間にか晴れていた。

《……………我が子に幸あらんことを》

大輔のために下ろしていた枝を元の位置に戻し、『樹』は再び樹と
なった。

「……………あれ?」

大輔達の目の前には、風に揺れている緑が広がっている。
大輔とブイモンは目を白黒させながら、目の前の草原のエリアを見つめた。

後ろを振り返る。森があった。

しかし大輔達が先ほどまでいたはずの原生林の森ではなく、普通の森だった。

大輔達がいたのは原生林の中で、出入り口も分からないくらい奥深いところだったはずなのだ。

少し斜面になっていて、滑り落ちないように慎重に降りて行ったのも覚えている。

しかし大輔達が今しがた出てきた森は斜面や山などではなかった。

大輔とブイモンの頭上に沢山の「？」が浮かんだが、彼らの頭では到底解決できそうにない現象だったのも確かなので、ひとまず頭の隅に置いておくことにして……………。

ぞ、

「——っ!？」

とりあえず無事に森を出られたからよしとしよう、ということで大輔とブイモンは仲間達を探そうと、1歩踏み出した時である。

背筋に氷のナイフを突きつけられ、なぞられたような悪寒を感じた大輔は、ひゅ、と息を飲んでその場に硬直した。

大輔と手を繋いで歩き出そうとしたブイモンも、同様に。

違うのは、硬直したのではなく戦闘態勢を取ったことである。

大輔の手を振り払って、ブイモンは両手の拳をきつく握って、胸の位置で構えながら忙しなく辺りを見渡している。

これは、殺気だ。

大輔に向けられた、明確な殺意だ。

パートナーデジモンの宿命とも呼ぶべき本能が、大輔を守れと命令

したのである。

ブイモンの瞳孔が極限まで凝縮され、戦闘態勢を取りながら辺りを忙しなく警戒している。

『……誰か、いるの?』

気が立っているのか、ブイモンの声がいつもより低い。

——キシッ

何処かで、闇が笑った気がした。

『……っ！危ない、ダイスケ！』

何かに反応したブイモンが、大輔を押し倒すように飛びついた。直後に、大輔がいた位置に上から何かが降ってきた。

ドゴオ、という轟音と共に地面が岩と瓦礫に変貌する。

「なっ、なっ、なっ……!!?」

『……いた、あいつだ!』

事態を飲み込めきれない大輔が目を白黒させているのを尻目に、ブイモンは攻撃が降ってきた方角……上空を見渡し、そして何かを発見した。

あれ、と指さした先に、長い紐のようなデジモンが飛んでいた。青みがかかった緑のボディに、頭部の骨のようなものを被っている。

真つ赤な翼は、少しボロボロになっていた。

最初の夜、ガブモンが進化した夜に戦った、シードラモンにそっくりだった。

「ブ、ブイモン……あれって……!」

『エアドラモンだ……何でここに……!!?』

エアドラモン、と言うらしい。

シードラモンのシーは恐らくSea、つまり海のことだろう。湖に住んでいたから、そんな名前なのだろう。

ならばエアドラモンのエアはAir、空気のことだ。赤い翼に、空を飛んでいることから間違いない。

いや、それはどうでもいいのだ、割と。

今どうにかしなきゃいけないのは、この状況だ。

自分達を攻撃してきたということは、自分達の敵なのだろうか。

デビモンの差し金？大輔は訳が分からない。

でもバイモンは、もつと訳が分からなかった。

『おかしい、おかしいよ、ダイスケ！』

「え？おかしいって……何が？」

『エアドラモンだよ！エアドラモンはファイル島にはいないはずなんだ！もつと遠くの……とにかくここじゃないところにいるはずなんだよ！』

「ええっ!？」

バイモンの言葉に大輔は混乱するしかない。

ここにいないはずのエアドラモンが、何故ここに？バイモンに聞いても、バイモンは首を振るばかりだ。

どうしよう、大輔は狼狽えるしかない。

そうこうしているうちに、大きく口を開いたエアドラモンが、再び技を放ってくる。

バイモンは大輔の手を握って、その場から走った。

直後に、背後から地面が破壊されたような音が聞こえたが、振り返る余裕はない。

『ギンチャアアアアアアアアアアアア……!』

走った大輔とバイモンの後を追って、咆哮を上げながら翼を羽ばたかせた。

間違いなく、あのエアドラモンは大輔達を狙っている。

「ど、どうしよう、バイモン……!」

『ど、どうしようだったって……流石に無理だよ、オレ、空飛べないもん

！』

至極全うな反論に、大輔は何も言えなかった。

ブイモンは空を飛べない。成熟期への進化もできない。

逃げ回るしか、彼らに許された手段はなかった。

『くそそう、オレが空を飛べたら……！』

空を飛ぶ手段を持ち合わせているのは、ピヨモンとテントモンだけである。

自分がどんな進化をするのか、進化してみるまで分からない。

もしかしたらピヨモンやテントモンのように、翼を持ったデジモンかもしれない。

アグモンのようにがっしりとした体格の、地上戦に向いているデジモンかもしれない。

ゴマモンのように、水中戦に特化したデジモンかもしれない。

デジモンの可能性は、無限大だ。

しかしブイモンも大輔も、今はまだそのことを知らない。

今しなければならぬのは、エアドラモンから逃げることだ。

エアドラモンは、なおも執拗に空から攻撃を仕掛けてきている。

森の中に逃げ込むか？それなら目くらましになりそうだけど、エアドラモンは凶悪な上に、1度狙いを定めたら撃墜するまで逃がさない。

やり過ぎすことは不可能に近いだろう。

どうする、どうしよう……。

そんなことばかり考えていたせいで、大輔を引っ張っていたことが頭から抜けてしまったらしい。

『……あっ！』

「うわっ！」

気づいた時には、目の前の景色が開けていた。

両側に立ち並んでいた樹々が突然途切れて、空がいつぱいに広がったのである。

がらり、と足元の地面の一部が欠片になって崩れ、下に広がっている白波を立てた海に落下する。

デビモンのせいで一枚の紙を千切ったようにバラバラになってしまった島の欠片には、これ以上逃げ場はない。

『ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

背後から聞こえてくるエアドラモンの咆哮のせいで、回れ右をすることは叶わなかった。

ならば森の中に逃げ込むしかない。

ブイモンは大輔の手を引いて横に広がっている森に逃げ込もうとした。

『ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!』

赤い翼を飛ばたかせ、必殺技であるスピニングニードルという、幾つもの鋭利な真空刃が大輔とブイモンに襲い掛かってきた。

ぎよつとなったブイモンは、このままでは大輔が危ないと手を離して思いつき突き飛ばす。

吹っ飛ばされた大輔は地面を滑りながら尻餅をつき、木にぶつかってとまる。

何するんだよ、という抗議の言葉は、大輔の口から飛び出してくることはなかった。

大輔が見たのは、エアドラモンの必殺技が周囲を取り囲むように直撃し、その衝撃で宙に投げ出されたブイモンの姿だった。

直撃は免れたらしいが、宙に投げ出されたブイモンの身体は後ろの方へ吹っ飛ばされる。

後ろ……つまり、千切れて切り立った崖の方に。

「ブイモン!!」

大輔が咄嗟に手を伸ばすが、小学2年生の大輔の腕は短すぎてブイモンには届かない。

あ、と言っている間にも、ブイモンの身体は重力に従って海に吸い込まれていく。

考えるよりも先に、大輔は行動を起こした。

立ち上がって、走って、地面を蹴り、大輔は崖に落下していくブイモンを追うように飛び降りたのだ。

『ダイスケツ!?!』

ブイモンは目を見開く。

エアドラモンの攻撃から大輔を護るためにその手を離れたのに、あ
ろうことか大輔は自分の後を追って崖から飛び降りたのだ。

どうして、何で。

ブイモンは焦る。

必死の形相で手を伸ばしてくる大輔。

このままでは一緒に、海に落ちてしまう。

そうならばエアドラモンは好機とばかりに、自分達を攻撃してくる
だろう。

水中に特化しているわけではないこの身体では、思うように動けな
い。

——大輔を、護ることが出来ない。

そんな考えがブイモンの頭を過った時、心の奥が、頭の中が熱く
なった。

『ダイスケエエエエエエッ!!』

大輔の手がブイモンの手を掴む。

海面まであと2メートル、と言ったところまで迫っていた。

ずっと待っていたパートナーを、こんなところで死なせない!

ブイモンの感情が高ぶる。

大輔のズボンに引っかけられていたデジヴァイスが、金色の光を
放って“ブイモンに伸びていく。

デジヴァイスから与えられた情報によって、ブイモンの身体のデー
タが書き換えられていく。

黄金に包まれた龍を、大輔は見た。

大きくなった身体を支える、太い脚。スラリとしたボディは、グ
レイモンのがつしりとした体形とはまた違った、逞しさを感じた。

背中から翼が生える。エアドラモンのものとは違い、少し小さかつ
た。

ブイモンだったものを包んでいた黄金色が、その身体に溶けるよう
にすーっと消えていく。

海面まであと数十センチというところまで迫った時、ブイモンだっ

後にまでエアドラモンが迫っていた。

まずい、と思ったと同時にエアドラモンが尻尾の部分を振り回してきた。

反射的に受け止める。

『ギシャアア……い！』

『——っ!!』

ぞわり、とした感覚が背中を走る。

誰かに触れられた時と同じ、あの感覚。

ひ、と小さく悲鳴をあげたが、ぐつと堪えた。

「頑張れええええっ!! エクスブイモオオン!!」

何故なら、大輔の声が聞こえたからだ。

下を見る。デジヴァイスを握りしめて、必死に声援を送ってくれているパートナーがいる。

それだけで、エクスブイモンは力と勇気が湧いてきた。

そうだ、触られるのが嫌だとか怖いとか、泣き言言っている場合ではない。

大輔を守らなければ!

『ギシャアア……い！』

懸命に声援を送る大輔を、エアドラモンが苛立たし気に見下ろす。

その眼が明らかに異様なことに、エクスブイモンは気づいた。

何と言うか、目がギラギラとしている。

口の端から唾液をだらだらとだらしなく垂らしていて、歯をカチカチと鳴らしていた。

パートナーとしてだけでなく、デジモンとしての本能が警鐘を鳴らす。

これは、早々にかたをつけなければまずいと。

『っ、うらああああああああああっ!!』

掴んだ尻尾を気合だけで離さず、そのまま1周して振り回して投げ飛ばしてやった。

『エクス……い！』

そして畳みかけるように、次の攻撃に移る。

両腕を胸の前で交差させ、しまい込むように身体を丸めた。腹の辺りが薄らと光ったのが、大輔には見えた。

『レイザー!』

ば、と勢いよく身体を広げると、腹に描かれている『X』の字から同じ形の光が発射された。

真つすぐ伸びていくソレは、エクスブイモンによって投げ飛ばされたエアドラモンに直撃する。

かなり強く投げ飛ばされたらしく、エアドラモンは翼で体勢を整えることすらできなかつたようだった。

『ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

断末魔のような咆哮を上げながら、エアドラモンは投げ飛ばされた勢いと、エクスブイモンが放った光線によって、遥か向こうへと吹っ飛ばされていった。

——何か、呆気なかつたな……

肩で息をしながら、エクスブイモンは思う。

殺気を漂わせながら襲い掛かってきたにも関わらず、大して苦戦せずにエアドラモンを撃退できてしまった。

初めて進化をしたから、興奮していつもより力が入ってしまったのだろうか。

……グレイモンやガルルモンも、最初に進化した際には割とあっさりど敵を倒していたから、そういうものなのだろうか。

何だか嫌な予感が拭えない。あのエアドラモン、黒い歯車で操られていた他のデジモン達とは、何かが違っていた気がした。

……早くここを離れた方がいいかもしれない。そう判断したエクスブイモンは、徐に下に降りて行った。

「エクスブイモン!」

大輔が駆けつけてくる。

頬を上気させて、興奮しているようだった。

「You're great! Awesome! And you're able to fly now! Please!

Can I get a ride to you!

『……ダイスケ。今度でいいから、俺にダイスケが喋っている言葉を教えてくれないか?』

こうも頻繁に英語で捲し立てられてしまっただけは、もう驚いたり指摘したりするのも面倒である。

せめて大輔が何を言っているのか理解できるぐらいにはなっておきたいなあ、と苦笑しながら言った。

またやってしまった、と大輔は口元を抑え、照れ笑いをする。その時だった。

「大輔くん!」

『ブイモン!』

「!この声は……!」

聞き慣れた大好きな声だったので、大輔の頭部にあるはずのない子犬の耳がピンと立ったような幻覚が、エクスブイモンには見えた。

勢いよく声がした方向を振り返れば、100メートルぐらい向こうに大好きな女の子が、手を振りながら走ってくる姿があった。

「ヒカリちゃん!」

『プロットモン!……あれ?』

隣にるのはプロットモンだと思っただけで声をかけたエクスブイモンだったが、だんだん近づいてくるにつれて、何かがおかしいと気づいた。

それは、すぐに分かった。

プロットモンがプロットモンではなかったのだ。

薄いピンク色の四足歩行の子犬ではなく、白い猫のような姿をしていたのである。

『プロットモン、だよな?進化したのか』

『あら、アンタ……ブイモン?ダイスケの傍に居るってことは』

『ああ、今はエクスブイモンだ。今しがた進化した』

『ふーん?ワタシはテイルモンよ。じゃあさつき飛んでったエアドラモンは、アンタの仕業って訳?やるじゃない……』

『……褒めてる割には、不機嫌そうだな……?』

『当たり前でしょう！せつかく進化して、アンタやパタモンをあつと言わせてやろうと思つていたのに！まさかアンタまで進化してたなんて……』

『……謝つた方がいいか？』

『莫迦ね、ワタシを更に不機嫌にしたいわけ？ちよつと拗ねただけよ、気にしないで』

どうやらプロットモンが進化したデジモンはテイルモンと言うらしい。

ということは成熟期、今のエクスブイモンと同じだ。

その割に、大きさはブイモンよりも小さかった。

ブイモンもアグモンやガブモンと比べるとチビなのだが、そのブイモンよりも小さいのである、本当に成熟期なのかと疑つてしまうほどだ。

しかも念願の進化を果たして、まだ進化をしていなかった仲間に自慢してやろうと思えば、同じく進化をしていたブイモン、しかもグレイモンほどではないが大きい。

テイルモンが拗ねてしまうのも、無理はなかった。

ヒカリも興奮しているようで、エクスブイモンの周りをうろつきながら、すごいすごいって興奮している。

褒められて悪い気はしないけれど、今はそれは置いておいて。

「ねえ、ヒカリちゃん。他の人は？太一さんは？」

未だ興奮してエクスブイモンの周りをぐるぐる回っているヒカリに問いかけると、我に返つて首を横に振つた。

「ううん、私とプロットモン……テイルモンだけだったの……大輔くんは？」

ノー、と大輔は言った。つまりいいえだ。

そつか、つてヒカリはがっかりした。

でもすぐに気持ちを切り替える。

大輔くんに逢えたからいつか。なっちゃんの言つてた通りだ。

嬉しくて、ヒカリはくふくふと笑つた。

しかしなっちゃんのことは誰にも言わないと約束した。

大輔にも言わない。約束したのだから。

「大輔さんと逢えてよかった」

「俺もー」

2人は向き合いながら、互いの両手を握った。

ここにこととした笑みに、テイルモンは溜息を吐きながら優しく見守る。

『……テイルモン』

隣に立っていたエクスブイモンが、腰と声を落としてテイルモンに話しかけた。

大輔とヒカリは、気づかない。

『……何?』

エクスブイモンに倣って、テイルモンも小さく返す。

『……早く、みんなと合流しよう。何だかきな臭い……嫌な予感が離れないんだ』

『……奇遇ね。ワタシもそう思っていたわ』

エクスブイモンも、テイルモンも、表情が険しい。

聞けば、テイルモンに進化したきつかけを話してくれた。

ドリモゲモンに襲われた、と。

『ドリモゲモン? ファイル島にはいないはずだろう?』

エクスブイモンが驚く。

大輔達がいるのは、デビモンによって散り散りにされた、ファイル島の残骸である。

周りは何もなく、ただ広い海のだ真ん中にぽつんと存在しているファイル島には、いわゆるガラパゴスであった。

古代よりその姿を変えずに生きているデジモン達が、多く生息している場所。

だからいわゆる「亜種」に当たるエアドラモンや、ドリモゲモンがいるはずがないのだ。

一体何故……。

『……考えるのはよしませう、エクスブイモン。ワタシ達がしなければならぬのは、ここに生息するはずのないデジモンが、何故いる

のかを話し合うことじゃないわ』

『……ああ、そうだな』

パートナーとして、子ども達を守ること。

エキスブイモン達が何よりも優先しなければならぬのは、大輔達の安全の確保だ。

そのためにも、はぐれた仲間を探さなくてはならない。

幸い、今のエキスブイモンなら空を飛べる。

乗せるのは、身体の小さな子どもと、成長期と変わらない姿の成熟期。

しかもエキスブイモンが触れられても問題のない人選である。

これはラツキーとしか言いようがなかった。

ヒカリとお話している大輔に、エキスブイモンは手を差し出した。

『……ダイスケ、ヒカリ。オレの手に乗って。タイチ達と合流しよう』

「え、でも、太一さん達が何処にいるのか……」

『それなら大丈夫よ』

太一達も、大輔達と同じように散り散りになったファイル島の残骸に飛ばされてしまった。

何処に太一達が飛んだのか分からない今、闇雲に動き回るのは得策ではない。

だがテイルモンは言う。

『ワタシ達がしなきゃいけないことは何?』

「……太一さん達と合流すること?」

『そうじゃないでしょ。貴方達は何のために呼ばれたの? ゲンナイが言っていたでしょ、この世界を救うためだつて。そのためにはまずファイル島の闇を祓ってほしいつて。つまり?』

「……デビモン?」

ヒカリがコテン、と首を傾げながら言うと、そう、とテイルモンは頷く。

『デビモンは昨夜ワタシ達をバラバラにしたわ。ワタシ達の目的が分かっていたみたいだから、邪魔させないために。そしてそのデビモンが住んでいるのは、ファイル島の中心とも言えるムゲンマウンテン

……』

「あ、そっか！」

ファイル島を覆っている闇というのは、間違いなくデビモンである。

闇を祓うということは、つまりデビモンを倒す、ということだ。
すなわち。

「デビモンを倒すためには、ムゲンマウンテンに行かなきゃいけない……」

「きつとお兄ちゃん達も、そう考えてムゲンマウンテンに向かっていくよね！」

『そういうことよ。ただ闇雲に散り散りになったファイル島を1つ1つ探すよりも、目的地にさっさと向かった方が効率がいいわ』

「そうだな！よし、エキスブイモン！頼むぜ！」

ようやく合点がいった大輔とヒカリは、エキスブイモンの大きな手に乗った。

ゆっくりと手を挙げて、肩の方に移動させる。

大輔とヒカリは、エキスブイモンの方に座った。

『大丈夫か？』

「俺は平気！」

「わ、私も……」

『念のために手で支えてるし、ゆっくり飛ぶから……』

『……つと、ワタシもいつでもいいわよ』

テイルモンもエキスブイモンに飛び乗り、準備は万端である。

『よし、行くぞ！』

「おー！」

地面を蹴り、飛び上がる。

ジェットコースターに乗った時のような浮遊感が、ヒカリの内臓を擦った。

ひえ、とヒカリの口元が引きつっている。

大輔は楽しそうだけれど。

『3人とも、しっかり捕まってるんだよ！』

身体を地面と平行にするように、エクスブイモンはムゲンマウンテンに向かって飛んで行った。

数分もしないうちに、陸地が海に変わる。

散り散りにされたファイル島は、ただ静かに地平線へ吸い込まれるように流されていくのが見えた。

《……………》
キシツ》

何処かで、闇が笑った気がした。

灰色の記憶

今の賢を形成した決定的な出来事は何かと聞かれれば、間違いなく両親の離婚だと賢は答えるだろう。

元々争いごととは苦手だった。兄と殴り合いの喧嘩どころか口論になったことすらなかったし、どちらかと言えば2人とも譲り合いの精神が強くて、1つしかないものはいつも半分こしていた。

2つ以上の異なるものをどちらが取るかで決める際のジャンケンすら、したことがなかった。

治はいつもお兄ちゃんだからって欲しいものを我慢して、賢に譲っていた。

そして賢は、そんな治の弟だ。本当は欲しいのに、お兄ちゃんだからって我慢していることなんかとつくにお見通しの賢は、時々こつちがいいって欲しいものとは違うものを選んで、兄に譲ることもある。本当にいいのかい？って念を押されても、こつちがいい！と末っ子っぷりを発揮するから、治も苦笑する。

しかし、そんなやりとりも、今はもう夢の向こうである。

両親は離婚した。それは、変えられない事実だ。

お父さんとお母さんの喧嘩に、幼い兄弟は巻き込まれたのだ。幸か不幸か、兄弟は賢かった。両親は兄弟に喧嘩をしている姿を見せないように取り繕っていたけれど、賢い兄弟の前では、そんなものは無意味だった。

毎晩のように聞こえてくる怒号と破壊音。母親がヒステリーを起こして花瓶を割ったことは明白であった。

その音にびっくりして、泣き出してしまった賢を、一晩中慰めてくれたのは治である。

最初こそ取り繕っていた両親だったけれど、それが別のストレスになつていたのだろうか、そのうち綻びを生み始めた。

父親への怒りが収まらず、その苛立ちを子どもにぶつけることが多くなつてしまったのである。

虐待にまでは至らなかつたものの、言葉が刺刺しくなつたり、邪険に扱われたりと、両親との思い出を辿ると最初に出てくるのは、そんなものばかりだ。

家族で楽しく過ごした日々も確かにあつたはずなのに、いかに賢いと言えどまだ4歳だった賢では、その思い出を引つ張り出すことは難しい。

しかし両親が離婚した日のことは、はっきりと覚えている。

あれは確か、春から夏にかけての少し日差しが強い日だった。

部屋で本を読んでいた治、それからブロックのおもちやで遊んでいた賢は、突然入ってきた母親によつて連れ出され、親戚の家に1カ月ほど預けられた。

母親の祖父母の家で、突然やつてきた孫達を邪険にすることなく、歓迎してくれた。

その間、学校は休んだ。何で、つて賢が聞いたけれど、母親は何も答えてくれなかつた。

ただ曖昧に微笑んで、ごめんねとしか言ってくれなかつた。

それから1カ月父も母も来てくれなかつた。

毎日祖母が起こしてくれて、朝食は祖母が用意してくれた和食を食べ、お兄ちゃんと一緒に勉強したりお絵かきしたり、遊んだりした。

昼食を食べたらお祖父ちゃんと一緒にお出かけして、野草や野鳥、虫の名前を教えてもらつたりして過ごした。

それは楽しかつたのだけれど、様子を見に来てくれないどころか、電話の1つもかけてきてくれない両親が何をしているのか、賢は気になつて仕方がなかつた。

治も気にしていない素振りをしていたが、時々重い溜息を吐いてい

たことは、賢も気づいていた。

しかし賢い子は、聡い子だ。賢に悟られないようにしているのを、わざわざ指摘するような子ではなかった。

それに祖父母も、突然やってきた孫達を歓迎して世話を焼いてくれたが、何処かよそよそしいと言うか、腫物に触るような態度と言うか、可哀そうなものを見る目で賢達を見つめていたのだ。

賢い子ども達が異変に気付くのに、時間はかからなかった。

そして運命の日が訪れる。

唐突に祖父母の家に連れてこられた治と賢だったが、連れ戻されたのも突然だった。

お兄ちゃんと一緒に絵かきをしていたら、突然母がやってきて、祖父母が止めるのも聞かずに治と賢を連れ出してしまった。

やっとお家に帰れると安堵したのもつかの間、連れていかれたのは賢達の住み慣れたお家ではなかった。

お母さんのお仕事がない時、時々連れて行ってくれるカフェだった。

お父さんとお母さんは、とっても険しい表情をしていたのを、今でも鮮明に思い出せる。

カフェに来るといつも注文しているオレンジジュースとチョコレートトのケーキ。

治はリンゴジュースとチーズケーキを頬張っていた。

その顔は、暗かった。当たり前だ、同席している両親の顔が険しいのだから。

母は、言った。

お母さんとお父さんは離婚することになったと。

淡々とした口調と表情でそう言ったから、賢は最初意味が分からなかった。

リコン？リコンって何？お父さんとお母さんがリコンするって、ど

ういうこと？

賢の頭上に沢山の「？」が浮かぶ。

治はと言うと、目を見開いて父と母を交互に見ている。

何で、どうして、賢は兄が狼狽えているのを初めて見た。

それを見た時、リコンと言うのは嫌なものだと、怖いものだという
ことだけは理解できた。

狼狽する子ども達を尻目に、母はまた淡々と言った。

近いうちに出ていくから、荷物を纏めておくように。

子ども達の意見なんか、皆無に等しかった。

賢は、無力だった。どれだけ泣き喚いても駄々をこねても、離婚の
決定が覆ることはなかった。

そしてそんな賢に、更なる悲劇が襲い掛かる。

母の話では、子ども達は2人とも母に引き取られるはずだったのだ
が、治がそれを拒否したのだ。

自分は、父についていく。そう宣言したのだ。

父も母も度肝を抜かれたのだが、治の決心は固かった。

理由を聞いても、治は絶対に口を割らなかつた。

ただお兄ちゃんと一緒に暮らせないと知った賢は、自分も兄と一緒に
に父と暮らすと泣きついた時、治はこう言った。

お父さんもお母さんも離婚して他人に戻ってしまうけれど、それで
も自分達にとっては1人ずつしかいない両親であることに変わり
はない。

自分達の存在が、4人が家族だったという確かな証拠なのだ。

それを途切れさせないためにも、自分は父の下へ、賢は母の下へ
行った方がいいと。

治の真意を賢が知るのには、もう少し後のことだ。

とにかく、賢は自分達家族をバラバラにってしまった「喧嘩」が嫌
いだつた。

賢にとって「喧嘩」は、みんなで築き上げた尊い絆を壊す悪いもの
だつた。

だから賢は、目の前で起こっている喧嘩に対して、全身が硬直してしまった。

かつて両親を引き裂き、家族をバラバラにした“喧嘩”が、目の前で引き起こされている。

ひゅ、と息を飲んで、手足が小刻みに震え、目を見開かせて成り行きを見守っていることしかできなかった。

『いってえー！お前、よくも噛みついたな！』

『そっちが先に手を出したんじゃないか!!』

赤いのと大きな耳のハムスターが、取っ組み合って喧嘩をしている。

傍目から見ると可愛らしい光景だが、賢にとってはトラウマとも呼ぶべきものだった。

在りし日の両親が、賢の脳内に鮮明に再生される。

きつかけは何だっただろう。

あのいかにも怪しい屋敷から放り出されたのが、始まりだった気がする。

大輔もヒカリも、あの屋敷の異質さに気づいていた。

けれど兄達にそれを言うことはできなかった。

目に見えなかった悪意を証明する手立てがなかったからだ。

治は非科学的なものがあまり好きではない。目に見えないもの、というよりも存在が証明されていないものを信じていない。

科学的根拠に基づかないもの、実際に自分の目で確かめたものではないものを信じないのである。

怖いとかではなく、はつきりしないのが何だか気持ち悪いのだ、と言っていた。

治のは信じていない・否定と言うよりも、お化けの存在を証明する手段がないから“いるかないかは分からない”派と言った方が正しいだろう。

現に、治はデジモン達のこととは子ども達の中の誰よりも先に認めて

いる。

実際に自分の目で見て、触れて、確かめたからだ。

自分達の世界ではありえない現象もあったけれど、全て子ども達の前で起こったことだったから、治は何も言わなかった。

けれど、賢が感じたものに関しては、どうだろうか。

基本的に賢の意見を尊重してくれる治だけれど、目に見えないものに怯える賢に対して、真剣に取り合ってくれていたか。

それはないだろうな、と賢は自嘲気味に笑った。

まだ家族が一緒だった頃、窓の外に蠢く陰を見た気がして怖くて泣きついたら、お化けなんているはずないだろ、って笑われたのだ。

まああまりにも泣くから、最終的に布団の中に入れてくれたけれど。

ここは、何処だろうか。

パジャマから洋服に着替え、枕の横に置いていたリュックに無理やり詰め込む。

賢の手のひらぐらいの大きさの懐中時計を、最後にしっかりと首にかけて、賢は周りを見渡した。

目の前にあるのは、それなりに大きな滝。

昨夜の出来事を思い出す。

賢とパタモンが乗っていたベッドは空を飛んだ後、川に突っ込むように落ちた。

急な流れの川に激しく揺られながら、身を任せることしかできない賢とパタモンは、目の前に滝が迫っていても何もできなかった。

悲鳴を上げながら落下していくベッドにしがみついていた賢は、そのままベッドとともに滝つぼの水に全身を叩きつけながら沈むはずだった。

しかしそうなることは、なかった。

ぐい、とパジャマを引っ張られて浮遊感を覚えた賢は、枕の横に置いておいた服とリュックを咄嗟に掴んだ。

ばしやあん、という水飛沫があがる。

滝つぼに落ちたのはベッドだけ、浮遊感を覚えた賢は目をぱちぱちさせながらゆっくりと地面に降り立った。

ぜえぜえと息を切らしながら賢の隣に降りたパタモンを見て、賢は全てを悟った。

飛ぶのが上手ではないのに、賢よりも身体が小さいのに一生懸命耳の羽を羽ばたかせて、賢を救出したのである。

息を切らして目を回しているパタモンに礼を言いながら、とりあえず朝日が昇るのを待とうと、賢はてっぺんに登っている月をぼんやりと見上げながら時間を過ごした。

朝焼けに染まった空は相変わらず不思議な色をしていた。

水に叩きつけられたベッドは残骸となつて水に浮かんでいるために、パタモンと引っ付き合つて木の根元でうとうととしていた賢は、地平線の向こうから顔を覗かせた太陽に容赦なく声をかけられ、覚醒する。

周りを観察し終わった賢は、溜息を吐いた。

目の前には大きな滝、開けた場所の周りには木々が生い茂っている。

傍にるのはパタモンだけ、はつきり言おう、状況は最悪だ。

だって誰もいないのである、頼りになるお兄ちゃんも、いつも引っ張ってくれる太一さんも、何かと気にかけてくれる空も、丈やミミ、光子郎も、同じ年の大輔もヒカリも、誰もいないのである。

最年少が故に、上級生にくっついていくことしかできない賢は、途方に暮れるしかない。

いるのは、まだ進化を果たしていないパタモンだけ。

パタモンが頼りないと言っているわけではないのだ、断じて。

ただちよつと心許ないだけだ。パタモンが頼りにならなくて、心細いとか、断じてない。

「……どうしようか、パタモン」

ちよつとだけ泣きそうになったけれど、ここで泣いたつてしようが

ないことは分かり切っているので、ぐつと堪えてパタモンに問いかける。

うーん、ってパタモンも悩んでいた。

賢達と出会う前は、幼年期だったこともあって、あまり遠くに出歩いたことはない。

この辺りのエリアにも、足を踏み入れたことがなかったから、土地勘は全くないに等しかった。

どうすればいいのかわからないのは、パタモンも同じである。

ブイモンやプロットモンがいてくれたら、3体であーでもないこーでもないってアイデアを出し合えたのに。

……進化が出来れば、空を飛ぶデジモンに進化出来れば、上から辺りを見渡せるのに。

出来もしないことを考えてしまって、パタモンは重たい溜息を吐く。

どうしたの、って賢がしゃがんで問いかけてきたので、進化できればいいのって考えてた、と正直に答えた。

『今のボクじゃあ、周りを見渡せるぐらい空を飛ぶなんて、無理だもん。バードラモンやカブテリモンみたいに飛べたらよかったのに。そしたらケンを連れてみんなと合流できるのに……』

「そつかあ……でもよくよ悩んでても、しようがないんじゃない？できないものはできないもん」

きつぱりと、そしてあっさりと言い放つ賢に、多少ムツとしたものの、賢の言う通りでもあるので反論できなかった。

進化が出来ないのは、事実なのだ。そのことで賢に八つ当たりをしてもしようがない。

『じゃあどうするのさ？』

「歩こう？きつと太一さんやお兄ちゃんも、そうすると思うんだ。まずは森から抜けようよ。もっと見晴らしのよさそうなところ、探そう？」

そして1人と1体は歩き出す。

何の当ても目的もなく、これまで上級生達がやってきたように、と

りあえず歩いてみるというコマンドを、賢は選択する。

幸い賢達が落つこちた森は広くなかったようで、数十分ほど歩くと森から抜けることが出来た。

ただっぴろい草原に、昨日目の当たりにした闇の悪意と敵意が嘘み
たいな晴れ模様、春に吹く少し強い風が賢の髪と戯れ、パタモンの耳
を撥る。

新緑の匂い、聞き慣れた警報の音は、お母さんと手を繋がないと未
だに怖くて渡れない踏切が、草原にぽつんと建設されていた。

電車が通る様子もないのに設置されている踏切は、やがて警報が鳴
り止み、行く手を遮る遮断機が上がる。

広い草原には目印もなく、賢は再び迷う。

「……どっちに行けばいいと思う？」

『どっちでも。僕はケンについていくだけ』

しかし返ってきた答えは、何とも頼りないもの。

ママに今日の夕飯何がいい、って聞かれて何でもいい、って答える
パパみたいだ。

今ならママの気持ちがよく分かる、と賢はこっそり溜息を吐く。

この世界のことを知っているのはパタモンの方なのだから、パタモ
ンに決めてほしいのに。

あっちに行けばあれがあるとか、こっちに行けばこれがあるとか。

しかし賢が同じ立場になったとして、果たして賢にはそれが出来る
かと問われれば微妙なところだろう。

賢いとはいえまだ小学2年生の賢が知っている世界は、狭すぎる。

賢が住んでいる東京の全てを知っているのかと聞かれても、きつと
答えられない。

それと同じなのだが、今の賢には考えつきもしないものだった。

踏切を渡る。

夏の空気にも似た蜃気楼をかき分けていくと、向こうに何かが見え
てきた。

オルゴールの音。優しい音色は何処か懐かしい。

緑の中に突如として現れた鮮やかな色は、おもちゃの町で見かけたものとはまた少し毛色が違っていた。

あれは、何だろう。お兄ちゃん達と合流しなければならぬという目的をひよいっと忘れた賢は、視界に映った色とりどりの何かに目を奪われ、自然と早足になる。

待って、ってパタモンも短い四つ足で一生懸命ついていった。

近づいていくにつれ見えてきたのは、ウサギやトリなどの動物や、家とか乗り物とかとにかく色々なものが描かれ、子どもが積み上げたように歪な正方形のブロックだった。

賢の何倍もある大きさのブロックが適当に積み上げられ、門のように聳え立っている間を抜けると、まるでおもちゃ箱のような光景が目の前に広がった。

わあ、って賢とパタモンは感嘆の声を上げ、走り出す。

強烈な悪意と敵意を向けられ、すっかり怯え切っていた幼い心は、何処かへ飛んで行ってしまったようだ。

地面が弾む。芝生だと思っていたのはクツクションで、思いつきり足を踏み込むと、踝まで沈み、びよーんと跳ねた。

トランポリンみたいに跳ねていく身体に、賢とパタモンはすっかり夢中になってしまい、ここが何処なのかとかお兄ちゃん達は何処へ行ったのかとか、そんなことは忘却の彼方である。

遠目から木の実がなっていると買ったものは、赤ちゃんが好きそうな柔らかめのおもちやだった。

おもちゃが木の実みたいになってる！って賢はケラケラ笑う。

今よりもっと小さい頃に持っていたのと似たようなおもちゃを見つけて、懐かしいなあって思った。

オルゴールが聞こえる。星が煌めく音がする。

『……あれ？ケン、あっちにも何かあるよっ。』

「？」

パタモンが目を向けた方向に行ってみる。今度は何があるのかな。考えただけでわくわくする。そう、まだ治と賢と一緒に住んでいた頃、パパに「おたから」を隠してもらって、「たからのちず」を作っ

てもらって、海賊ごっこをして遊んでいた時のような。

「……ゆりかご?」

簡素なゆりかごだった。土の色に似た装飾も何もないゆりかごが、沢山あった。

中を覗き込む。賢の両手の平ほどの大きさの、黒い塊があった。ボタモンという、デジモンの赤ちゃんだと、パタモンは教えてくれた。

触り心地は水ようかんのようにぷよぷよしており、あまりの可愛さに賢の表情が緩む。

他にもゆりかごがあるから、順番に覗いてみた。

赤くて柔らかそうな角があるプニモン、全身が毛で覆われたユラモン、頭から双葉が生えたニヨキモン、クリオネによく似たピチモン。沢山の赤ちゃんデジモンがいる。これらは幼年期Ⅰと呼ばれており、トコモンやニャロモン、チビモンよりも小さいのだと言う。

「……ねえ、あれは?」

ユラモンが可愛らしくしゃみをするのを見守っていた賢は、ふと顔を上げた。

ゆりかごが沢山置かれている場所のすぐ傍に、これまた沢山の何かがあった。

近付いてみる。そこにあったのは、卵だった。

普通の卵ではない、賢が両手で支えなければならぬほどの、大きな卵。

デジタまだ、とパタモンが嬉しそうに言った。

賢が抱えている黄色と白の縞模様の卵、それから周りに鎮座している大量の卵、全てデジモンが生まれてくる卵らしい。

お兄ちゃんが勉強しているのを横で見ていた賢は、デジモンは鳥類や爬虫類とか両生類みたいな卵生なのかなと呟いた。

卵生が何なのか分からなかった。パタモンは、多分とだけ返す。

じゃあ、

「……デビモンも、デジタまから生まれたの?」

全てのデジモンは、みんな等しくデジたまから生まれる。生まれたばかりの赤ん坊は、無垢な存在である。

育つ環境によって性格や人格が形作られていくものだ。

そう、物心ついた頃には既に仲が悪く、喧嘩ばかりしていた両親を見ていた賢が、争いごとを嫌う優しい子に育つように。

あのデビモンだって、最初はここにいる赤ちゃんのデジモン達と同じだったはずだ。

何も知らない、それこそ光も闇も善も悪もなく、ただ目の前に在るものがそのままの形で存在していたはずなのだ。

一体何が、デビモンをあんな風にしてしまったのだろう。

デビモンが発していた気配、今なら分かる。

ムゲンマウンテンの頂上と、あの立派なお屋敷で感じた悪意の視線は、デビモンのものだ。

どうしてデビモンが自分達に悪意を向けたのか、ボロボロになった屋敷の上空でベッドに必死にしがみつきながらも、太一と治が啖呵を切っていたのは聞こえていた。

何故自分達を襲うのだと声を張り上げていた太一に放ったデビモンの言葉。

《お前達が、選ばれし子ども達だからだ》

それだけの理由で、デビモンは自分達に襲い掛かり、仲間をバラバラにしてしまった。

今思い出しても背筋が凍るほどの明確な悪意と敵意と……殺意。

『……………うん』

何と答えたものか、パタモンは俯いてしまう。

パタモンにとって、いや、きつとファイル島に住む全てのデジモンにとって、デビモンは未知の存在だ。

光を嫌い、憎み、闇を愛すデジモン、というぐらいの知識しかなく、ムゲンマウンテンからも滅多に降りてこないから、どういうデジモンなのか今の今までちゃんと考えてこなかったかもしれない、今思うと。

否、考える隙すらなかったかもしれない。

異世界からパートナーの子ども達を待っていることしか、パタモン達の頭の中にはなかったのだ。

それがいつなのかとか、何故そんなことを知っていたのかとか、そんな疑問すら浮かんでこないぐらい、パートナーの子ども達が来るのを楽しみにしていた。

それだけだった、それしか考えていなかった。

何のために子ども達を待っているのかも、子ども達と共に何をするべきなのかも、パタモン達は何一つ知らなかった。

まさか賢の何気ない一言によって、自分の存在意義に疑問を抱くことになるとは、思いもしなかった。

『……あれ、これなんだろう？』

思考の海に沈みかけたパタモンだったが、俯いた目線の先にあるものを見つけて我に返った。

薄いピンクの封筒に、顔を覗かせている白い紙。

拾い上げる。中を取り出す。わたしをなでなでして、と色とりどりのクレヨンで書かれた紙だった。

なでなで？って賢は首を傾げる。なでなで、つまり撫でろと言うことだ。

誰を？賢とパタモンは顔を見合わせる。

2人ではいことは確かだ。手紙はここにあっただのだから。

目線をデジたまに向ける。りんごころ、りんごころ。赤ちゃんのおもちやと同じ音がして、デジたまが揺れる。

周りにあるデジたまが、そうだそうだと言っているように一斉に揺れる。

撫でてみた。ぴき、ぴき、ぴき、と卵に罅が入る。もう一度撫でる。

ほん、と軽い音を立てて上の殻を突き破って出てきたのは、ゼリーのような赤ちゃん。

ポヨモン、という名前らしい。

わあ、って喜んだのもつかの間、ポヨモンのゆりかごがないことに気づく。

殻の中にいるのは可哀そうだ、生まれたばかりのデジたまを置い

て、空いているゆりかごを探そうとしたら、これまたほんという音がした。

煙に一瞬包まれたポヨモンは、いつの間にかゆりかごの中にいた。こうなつてたんだ、と呟いたパタモンに、知らなかったの？つて賢は苦笑する。

何だよーつてパタモンは頬を膨らませて抗議した。

『赤ちゃんの頃のことなんて覚えてないもん！ケン覚えてる？』
「……………」

笑顔が、消える。あれ、とパタモンが気づいた時には、遅かった。俯く賢。パタモンに言われて思い出したのは……枕を被るみたいに耳を塞いで、布団に潜り込んでいる光景と、仕切りに声をかけてくる兄、扉越しに聞こえてくる両親の怒号。

『……ケン？』

「……分かんない、覚えてないや」
ぱ、と上げた賢の表情は、笑っているはずなのに、何処か痛々し気で。

——楽しい思い出だって、あつたはずなのになあ。

例えば、家族みんなで出かけた温泉。例えば、パパのお祖父ちゃんお祖母ちゃん家でやった花火。例えば、何でもない日にみんなで言ったシヨップングモール。

ほら、思い出してみれば楽しい記憶はいっぱいある。

……それなのにどうして、家族との記憶を思い出そうとして真っ先に出てくるのが、こんなものなんだろうか。

それは今の賢を形成している潜在意識が、優しくあるためにはどうしたらいいのか、相手と喧嘩をしなければいいからだと、無意識に引つ張り出しているからに他ならない。

尊い絆を壊す悪いものだから、それを避けるために、そして賢を守るために潜在意識が優しくあれと刷り込んでいるのである。

喧嘩によって両親は離ればなれになってしまった。

巻き添えを食らった兄弟は、まだ子どもだったせいで力及ばず、強制的に引き離されてしまった。

今回もそうだ。デビモンの激しい憎悪によって、子ども達はバラバラになった。

自分達ではどうすることもできないほどの、不条理な力の差を見せつけられた賢は、そのことと両親が喧嘩した時のことを無意識に結びつけてしまったらしい。

いつもはそんなことないのに、今日に限ってやたらと両親が喧嘩した時のことを思い出すのは、それが原因だったのだが、そのことに賢が気づくのは凡そ3年後のことだ。

「……ねえ、あつちのデジたまもなでなでしちやおう！」

『ふえ？あ、ま、待つてよー！』

そして賢は、嫌な方向に行きかかっている考えを振り払うかのよう
に、努めて明るく振る舞いながら走り出した。

難しいことは分からない振り、知らない振り。目を逸らした先にあるものが恐ろしく高い壁だったとしても、大人の振りかざした暴力に対する抵抗する術など持たない子どもだ。

駄々をこねただけではどうすることもできないこともあると悟ってしまった幼子は、現実から目を逸らすように、目の前のデジたまに手を伸ばした。

ただそれだけだった。

初めて見た生命の誕生の瞬間に興奮して、ちよつと調子に乗っ
ちやっただけだった。

たつくさんあるデジたまを次々なでなでしていたら、デジたまは
あつという間に瞬つてしまった。

全部である、全てである。きつと本当は生まれてくるタイミングと
いうものがあっただろうに、なでなでしただけで生まれてくるのが楽
しくて、いつばいなでなでしていたら、デジたましかなかつた場所は
あつという間にゆりかごで埋め尽くされてしまった。

だが賢とパタモンは知らなかった。

赤ちやんというのはただ可愛いだけではないのだ。

生まれたての赤ん坊と言うのは非力で、大きい者が世話をしてやら

なければ何もできないのである。

「ご飯も排便も、寝かしつけるのだってゼーんぶ大人にしてもらわないとできないのだ。」

上手に眠れなくてぐずる赤ん坊もいる。

大人からすれば、眠いのなら寝ればいいのに、という感じだが、赤ちゃんはそれすらできないのだ。

ねむいようねむいようなんでねむいの、どうすればいいのうわああああん。

これが赤ちゃんの心情である。

赤ちゃんは大人が世話してくれるからいいなーなんて子持ちのお母さんの前で言えば、鉄拳が飛んでくること間違いなしだろう。

賢もパタモンも、赤ちゃんを見たことはあってもお世話なんかしたことがない。

だから2人は、ゆりかごの中で大人しくしていたはずの赤ちゃん達が今にも泣きそうな理由が、全く分からなかった。

「わ、わ、ちよ、ちよつと待って！」

『あわわ、泣かないでー！ほら、いないいないばー！』

泣き声の大合唱である。一斉に泣きだしてしまった赤ちゃんに耳を塞ぎながらも、傍を離れるなんて冷徹なことが出来ない賢とパタモンは、あわあわとあちこち駆け回っていた。

調子に乗ってデジたまを全部でなでしなきやよかった、と大合唱の原因に思い至った賢は、ユラモンを抱っこしながらげんりとする。

ゆりかごの中には、何処かで見たとのことのあるピンク色の、とぐろが巻かれたもの。

仕方ないことだと分かってはいるのだが、いかんせんいい思い出がない。

人間の赤ちゃんならおむつを履いていて、それを捨てて新しいのに変えるだけでいいのに、デジモンにはおむつの概念がないから排泄物をどうやって処理すればいいのかなんて、賢は知らない。

どうしよう、と途方に暮れていた時のことである。

『デメエらっ!!』

怒鳴り声がして、反射的にそちらを振り向く。赤いウサギみたいなデジモンが、険しい表情でこちらに走ってくるのが見えた。

誰、という前に、赤いウサギのようなデジモンが、大きく飛び上がった電撃を放った。

『何するんだ!!危ないじゃないか』

真つすぐ伸びてきた電撃は、賢に向かっていている。

何が起こったのか理解できずに硬直していた賢を庇ったのは、パタモンだった。

押し倒すように飛びつき、怪我をしていないか確認すれば、目を白黒させて放心しながらもうんと呟いた。

そのことにほっとしたパタモンは、次に攻撃してきた赤いウサギを睨みつける。

ふん、と赤いウサギは鼻で笑う。

『そりやそうさ、狙ってやったんだから!』

『何でそんなことするの!?ケン人間なんだ!僕達みたいに技を受けなくてもへっちゃらじゃないんだぞ!』

『知るか、そんなこと!それよりも、お前らよくもベビー達を可愛がってくれたな!』

はあ?ってパタモンは間の抜けた声を上げる。

が、賢い賢はあの赤いウサギの言いたいことを正確に理解した。

「僕達、虐めてなんかないよ!誤解だよ!」

賢は慌てて弁明した。あの赤いウサギ、見るからに怒っている。

このままではまずい、そう思っ自分達がここにいる理由を話そうとしたのだが……。

『問答無用!スパークリングサンダー!』

「うわっ!」

『ケンツ!!』

また電撃を放たれる。咄嗟に頭を庇って、その場に伏せた。すぐ傍にある樹に直撃する。

赤ちゃん達が、ひっ、って小さく悲鳴を上げた。

そのことに気づいた賢が、大丈夫だよって声をかけて手を伸ばしたのだが。

『ベビー達に触るんじゃねえ!』

赤いウサギが突進してくる。

『やめろっ!!』

身体が膨れるぐらい息を吸い込み、パタモンは一気に吐き出した。空気の塊が赤いウサギに直撃する。

殺傷能力は皆無だが、赤いウサギは驚いて吹っ飛んでくれたために、賢を傷つけずに済んだ。

『何しやがるー!』

『それはこつちのセリフ!先にやったのはそつちでしょ!!』

『ベビー達を傷つけようとするのが悪い!』

『何処に目つけてんの!?ケンは何処に傷つけようとなんかしてない!君が攻撃したせいで、赤ちゃん達が怖がっちゃったじゃないか!そんなことにも気づけないくせに威張らないで!!』

『っ、んだと、このチビ!』

『うるさい、ガキッ!!』

そして冒頭に至る。あの赤いウサギはベビー達を守るために、そしてパタモンは賢を守るために、互いを敵視して、取っ組み合いを始めてしまった。

賢は、その光景を呆然と見ていることしかできなかった。

「……………て……………」

ぽつり、と言葉が落とされる。

パタモンも赤いウサギも気づかない。

相手を離すまいと爪を立ててしがみつき、噛みついたりひっぱいたりして、取っ組み合っている。

争い合っている。

「……………め……………て……………」

ぽつり、言葉が落ちる。

パタモンは気づかない。傍らでパタモンと赤いウサギが取っ組み

辺り一帯に響いた、賢の悲痛な叫び。

赤いウサギと取っ組み合いになっていた。パタモンは、守るべきパートナーの悲鳴に驚き、顔を上げる。

『……ケン?』

『な……ん、だ……?』

赤いウサギも、賢の悲鳴に驚いて硬直していた。

2体の先にいるのは、俯いて佇んでいる人間の男の子。

遠目からでも全身を震わせているのが分かった。

赤ちゃん達が心配そうに集まって、見上げている。

賢の気持ち、空気と電波になって、パタモンの心に届いた。

『っ、ケンッ!』

赤いウサギを放り出して、パタモンは賢の下へと急いだ。

おい、と赤いウサギが声をかけてきたけど、気にしている暇はない。

そんなの、どうだっていい。

パタモンがしなければならぬのは、赤いウサギに対する報復でも、抗議でもないのだ。

『ケンッ!!』

高速で耳を羽ばたかせて、賢の下へたどり着いた。

『……』

『ケン……?』

俯いて、両手でズボンをぎゅっと握りしめている。

賢の心が伝わってくる。

ぼたり……

賢の顔を覗き込もうとしたパタモンの足元に、雫が落ちた。

クツシヨンに染み込んで、濃い緑色が浮かび上がる。

ぼたり、ぼたり……

更に雫が落ちる。賢の名を呼ぶよりも、賢の方が早かった。

『……』

『ケ、ケン……!?!』

泣いていた。

弾けるように上げられた賢の両目から、大量の涙が零れていたのだ。

歯を食いしばって、ぼろぼろと涙を零して、泣いているのである。

『ケ……』

「う………つ、う、わあああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああんっ!!!」

そして賢は。

パタモンの前で初めて声を張り上げて、泣き喚いた。

嗟う闇

日はすっかり傾いており、少々肌寒い風が吹き始めている。

鮮やかな緑のキャンパスは、夕暮れのオレンジに染まっていた。

たくさんの赤ちゃんデジモンがいるエリア、いつもなら夜ご飯をお腹いっぱい食べて、うとうとし始める時間帯である。

だが赤ちゃんデジモン達はいつまで経っても自分のゆりかごに向かおうとしないし、そもそも夜ご飯もまだだった。

いつもご飯をくれるデジモンがすぐ傍にいるのに、いつまで経っても夜ご飯を用意してくれない。

でも赤ちゃん達は催促するために泣くこともしなかった。

出来なかった。むしろお腹が空いていることも、忘れていたようだった。

赤ちゃん達はみんな、賢の周りに群がっていた。

両手で目を擦るようにぐしぐしして、えぐえぐってしゃくりあげて、パタモンと赤ちゃん達が仕切りに大丈夫？大丈夫？って顔を覗き込んでいる。

でも賢は泣き止まない。ずーっとずーっと両目から大量の涙を流して、パタモンがどれだけ声をかけても何も言わずにしゃくりあげているのである。

パタモンは困っていた。

泣きそうになったり、静かに涙を流したり、泣くのを堪える賢の姿は何度か見たことがあったけれど、先ほどみたいに泣き喚くことはなかったのである。

だからどうやって慰めていいのか分からなかった。

ずっと傍でおろおろしていることしか、できなかったのだ。

……無力な自分が情けない。パタモンは項垂れるしかなかった。

『……あ、のよ』

未だしやくりあげている賢と、項垂れているパタモンに、気まづそうに話しかけたのは、喧嘩を売ってきた赤いウサギである。

エレキモンという名前のデジモンで、ここ《はじまりの町》で、赤ちゃんデジモン達のお世話をしているそうだ。

誰に頼まれたわけでもなく、勝手に世話をしているらしいのだが、それは置いておくことにして。

赤ちゃん達のご飯を調達するために、少し離れた小川で魚を取っていたら、泣き声が聞こえてきて、駆け付けたら賢とパタモンがいた。

それを見たエレキモンは、赤ちゃんデジモン達が虐められていると勘違いしてしまったそうだ。

『……さっきベビー達から聞いたよ。世話してくれてたんだって。なのにいきなり攻撃して、悪かったよ』

『ボクはいいから、ケンに謝って』

ちよつとだけぶつきらぼうになってしまったのは、致し方なしか。

賢もパタモンも、赤ちゃんデジモンが珍しかったただけだったのにとんだ不可抗力である。

『……おう、ケン、ごめん？』

エレキモンは賢の方を向いて改めて謝罪するも、賢は未だに泣き止んでおらず、返事をすることもできない。

困ったように頭をかいたエレキモンは、気まづい空気を払拭するために、今日はここに泊まっていけと提案した。

もう日が暮れている。辺りはオレンジに染まっている。

今からここを出て何処かへ行こうとも、夜になれば夜行性の野生デジモン達がうろついており、小さい2人では危ないとのことだ。

お腹も空いてきたし、エレキモンが赤ちゃん達のために取ってきて、放置していた魚を取ってくると言つて、エレキモンは走り去っていった。

賢は、まだ泣いている。

『ケン……』

泣き止んでくれないパートナーを、途方に暮れながら見上げるパタモン。

どうしたら泣き止んでくれるのだろうか、必死に考えても何も思いつかない。

幾ら声をかけても、賢は。パタモンの存在なんか忘れちゃったみたい、何も答えてくれないのである。

ごめんねって言っても、泣き止んでって言っても、賢はいつも見せてくれる笑顔を浮かべてくれないのである。

ただぎゅってパタモンを抱きしめて、ぐりぐりって顔をパタモンに押し付けて、涙をボロボロ零しているのである。

だって思い出しちゃったのだ。

今よりもっと小さい頃に、パパとママが毎日のように喧嘩をしていた日々のことを。

ママのヒステリックな悲鳴と、パパの宥めるような怒声、それから時々響く破壊音。

兄の治と一緒に、子ども部屋に閉じこもって、枕で頭を覆ってじっと耐えていた日々。

パパとママは毎日喧嘩をしていた。子ども達が聞いているかもしれないなんて、これっぽっちも考えないで。

兄と弟は、そんな暴力から逃れるために、いつも部屋の中に閉じこもっていたか、外に逃げていた。

そして仲の悪い両親に巻き込まれる形で、仲のいい兄弟は離ればなれになってしまった。

賢にとって「喧嘩」とは、絆を、家族をぶち壊す象徴でしかない。だから目の前で友達が喧嘩を始めた時、賢は息が止まりそうになった。

何が起きたのか、理解が出来なかった。

いつもニコニコしていて、甘ったれで賢にべったり引っ付いて、お兄ちゃん達が戦っている間は、大輔とブイモン、ヒカリとプロットモンと一緒に後ろで控えていたはずなのに、それが見たことのない形相でエレキモンと取っ組み合ったのだ。

聞いたこともない声で、怒鳴っていたのだ。

その瞬間、友達と口論することすら避けようとするほどに争いごとが苦手な賢の脳裏に、普段は心の奥底に閉じ込めている悍ましい記憶がぶわーっと蘇った。

ドアの隙間から見えた、母の形相。母を宥めようとする父の憔悴しきった背中。死んだ目をした兄。

時折聞こえてきたのは花瓶が割れる音。前のお家には嫌な記憶しか残っていない。

その記憶が目の前で再現され、賢は震えた。

視界が真っ白になったり真っ黒になったり、足ががくがく震えて、呼吸も荒くなつて、心臓がバクバクと胸を突き破りそうなくらい激しく波打った。

いつもなら傍にお兄ちゃんがいてくれるから、我慢できた。

大丈夫だよ、お兄ちゃんがいるからねって頭をよしよしして、ぎゅーっしてくるから、耐えられたのに。

でも今、ここにお兄ちゃんはいない。

大丈夫って言ってくれる人がいない。

友達のパタモンは、賢を置いてけぼりにして、賢が大っ嫌いなことを盛大にしでかしてしまった。

色んなものが積み重なった賢が、パニックを起こしてしまったのは仕方がないと言えよう。

賢はまだ泣いている。

大粒の涙をボロボロ零しながら、パタモンを抱えて震えながら。

——ボクじやダメなの？

賢が泣いてしまった本当の理由を知らないパタモンの心に、一点の曇りが浮かぶ。

大輔やブイモン、ヒカリやプロットモンがいてくれたら、少しは違ったのかな。

彼らがいてくれたら、きつとすぐに賢を慰めてくれたのに。

そんな考えに至ったことすら、嫌悪感を抱いてしまう。

自分はケンのパートナーなのに、ケンのパートナーは自分なのに、

自分じゃない誰かがいてくれたらいいのにつて思ってしまった。

だつてきつきつからずつと自分が慰めているのに、賢は全く自分を
見てくれないのである。

聞いてくれないのである。自分がここにいるのに、賢は何も言つて
くれないのである。

パタモンの心にどンドンどンドン、まるで透き通つた綺麗な水に落
ちた一滴の墨が広がつていくように、曇つていく。

泣き止んでくれない賢、一瞬でも自分じゃなくて他の誰かを思い浮
かべてしまったことに、パタモンは顔を歪め、そして……。

『……うええええええええええええええええん』

賢の気持ちに引つ張られるような形で、泣きだしてしまった。

ボロボロと涙を零して、賢の腕の中でわんわん泣いている。

いきなり泣き出したパタモンに、顔をぐりぐり押し付けていた賢は
目をぱちぱちさせて、パタモンを見下ろした。

「パタモン……う？ど、どうしたの……？」

『だつてえくゲンがなぎやんでくれないくくながないでつでゆつでる
のに』

泣いているせいで言葉に濁点がついているが、つまり自分が泣き止
んでくれないことで泣いているのだと理解して、賢はようやく涙を
拭つた。

「ご、ごめんね？ごめんね、パタモン、僕、気づかなくて、あの」
『う、ええええええええええええええええええええええ……』

立場が逆になつて、今度は賢があたふたすることになる。

ごめんね、ごめんねつて賢はパタモンをぎゅーつと抱きしめて、ま
た泣いた。

周りに群がつている赤ちゃんデジモン達まで泣きそうになつてい
た。

でも2人は気づかない。ただ気の済むまでひとしきり泣いて、泣い
て、泣いて、目を真っ赤にして泣き止んだのが、数十分後。

泣きはらした目は、2人とも真っ赤だ。

賢はパタモンを抱えなおして、ぼんやりと空を見上げる。

オレンジ色に染まっていた空の向こう側から、僅かに濃紺が顔を覗かせていた。

エレキモンは、まだ帰ってこない。

「…………お腹空いたね」

『エレキモンがご飯作ってくれるって』

きゆるん、と可愛らしい音が賢とパタモンの腹から同時に聞こえた。

あれだけ泣いたのだ、体力が消耗して空腹になるのは仕方ないだろう。

賢が泣き喚いていた際にエレキモンが言ってくれたことを話せば、賢はそっかと言って立ち上がった。

「じゃあ、お手伝いしないと。エレキモンもきつと僕が急に泣いちやったから、びっくりしちやったよね。謝らなきゃ…………」

『…………何言ってるのさ。ケンは何も悪くないよ?』

突然喧嘩を売ってきたのはエレキモンの方だ。

勘違いで、赤ちゃん達を守るためだったとはいえ、理由も聞かずにいきなり攻撃してくるのはいただけない。

下手をすれば赤ちゃん達を巻き込んでいたのかもしれないのに。

「しようがないよ、エレキモンは赤ちゃん達を守りたかっただけなんだ。帰ってきたら知らない人がいて、びっくりしちやっただけだよ」

『もー、どうしてケンはそんなに優しいんだよ?自分が怪我してたかもしれないのに…………ボク、怖かったんだよ?』

「…………うん、ごめんね、パタモン」

『……………………』

飽くまでも悪いのは勝手に入ってきた自分達で、エレキモンは悪くないと言う賢に、パタモンは呆れるしかなかった。

だってこうすれば丸く収まることを、賢は知っているのだ。

自分が悪かったのだって思えば、自分から謝れば丸く収まるのだ。そうすればそれ以上拗れないって、自分さえ我慢すればいいんだっ

て、まだ小学2年生なのに悟ってしまったのである。

…………そして、もしかして、ってパタモンは何となく気づくのだ。

自分のパートナーは自分が思っている以上に争いごとが嫌いな
でとは。

いつもニコニコしていて、自分が知らないことを何でも知ってい
て、頭の回転が早い、自慢のパートナー。

パタモンもいずれは、他のデジモン達と同じように進化を果たし、
賢を守るために奮闘するだろう。

それが当たり前だと思っていたのだが、ここに来てパタモンと賢の
間に僅かな溝が生まれてしまった。

——もしも……

パタモンは思うのだ。

もし自分が賢を守るために進化をしたとして、その時賢は……今ま
で通り自分の友達でいてくれるのだろうか。

賢を守るためだけでも、賢は泣いて拒否をしたのだ。

もしも自分が戦うために進化をした時……自分と賢はどうなっ
てしまうのだろうか？

「エレキモンと仲直りできたから、もういいじゃない。ね？」

『……ケンがそう言うんなら、もういいよ』

賢がこれ以上エレキモンを責めないというのなら、パタモンはそれ
に従うだけである。

正直もつと色々と言ってやりたいことはあるし、賢を守るパート
ナーとしてはエレキモンがいきなり攻撃をしてきたことは許せない
けれども、もうどうでもよかった。

大事なものは、賢なのだから。賢がもういいって言っているから、許
してやるのだ。

ボクって何てカンダイなんだろう、と自画自賛する。

きゆるん、と再びお腹が鳴った。

お腹空いたなーエレキモン何処かなーって賢の腕に抱かれながら、
はじまりの町と森のエリアの境目に辿り着く。

何処かで、闇が笑った気がした。

「っ!!」

森のエリアに右足を踏み入れた瞬間、全身に氷水をかけられたような悪寒が走った。

ぎくり、と賢とパタモンはその場で硬直し、立ち止まる。

ぎゅ、とパタモンを抱える賢の腕に力が入った。

風が吹く。森の木々が揺れる。葉が擦れる音がする。

目の前には森、そして後ろには沢山のおもちやと赤ちゃんて溢れたはじまりの町。

小川の潺と、赤ちゃんてジモン達のきやあきやあという楽しそうに騒ぐ声が聞こえる。

幾ら見渡しても、何の変哲もない光景が広がっているだけだというのに、この壮絶な違和感は何だ。

何かがおかしいと、賢の本能が警鐘を鳴らしている。

ここから離れろと、逃げろと激しく鼓動する心臓が訴えている。

がさ

森のエリアとはじまりの町の境界に立っている賢の耳に、風が吹いたにしては不自然な葉の擦れる音が届いた。

小川の潺と赤ちゃんてジモン達の楽しそうな声の方が遙かに大きいはずなのに、微かな葉音が嫌に響いて、賢とパタモンは大袈裟に跳

ねた。

がさ、がさり

音がまた聞こえる。

気のせいだと思いたかったのだが、再び葉っぱの音が鳴ったので、その希望は無残にも打ち砕かれた。

がさり……ぽろ

再度音がする。直後、茂みの向こうから何か転がった。

それは、枯れて折れたらしい樹の幹だった。

坂になっっている、敷き詰められた河原の石に、茂みからゴロゴロと枯れ木が転がってきたのである。

同時に、賢の背筋を舐めていた悪寒がふ、と消えた。

緊張して変に力が入っていた賢の肩から力が抜け、パタモンを抱きしめていた腕の力も緩んだ。

ずるり、とパタモンが賢の腕から落ちるように抜け出した。

頭の羽を動かして、転がってきた枯れ木の下へと飛んでいく。

待って、つて硬直が解けた賢も慌ててパタモンの後を追う。

賢の手のひらサイズほどの石が沢山敷き詰められた地面は少し歩きにくかった。

今パタモンと離れるのは少し心細い、と言うのもあったが、パタモンの行動が少し気になったのだ。

転がってきたのはただの枯れ木のはずなのに、パタモンがピリピリしているような気がしたからだ。

いつもなら賢の安否をまず確認するだろうに。

……先ほど、エレキモンと喧嘩をした時のパタモンのことを思い出して、少しだけ身震いしてしまったのは、内緒だ。

「パタモン、待ってよー」

駆け足でパタモンの後を追う。しかしパタモンは賢の声など聞こえていないように、枯れ木に向かって真つすぐ飛んで行った。

距離にして、約20メートル。飛ぶのが上手ではないパタモンは、耳の羽を一生懸命動かして、枯れ木の下に辿り着いた。

じ、と見下ろしている。数秒遅れて、賢もパタモンの隣に立った。

「パタモン?どうしたの?この枯れ木がどうかしたの?」

『……ウツドモンだよ』

「ウツドモン?」

『うん。枯れた樹みたいだけど、こいつもデジモンだよ。でも……』

パタモンは眉を顰めて、枯れ木……ウツドモンを見下ろす。

「どうしたの?」

『……ウツドモンは、ファイル島にはいないはずなんだ』

「そうなの?」

『うん……ケン、ここから離れよう?何か、嫌な感じがする』

ここにいるはずのないデジモンが、ならば何故いるのか。

力なく転がっているだけのウツドモンに、妙な胸騒ぎを覚えたパタ

モンは、賢の足をぐいぐいと押してウツドモンから離そうとした。

《……………》
キシッ》

『……………』

むくり、と。立ち去ろうとした賢とパタモンの背後で、気を失っていたはずのウツドモンが緩慢な動作で起き上がった。

ゆるらゆるらと非常にゆっくりとした動きで左右に揺れるその姿は、傍から見れば不気味だが背中を向けている賢とパタモンは気づいていない。

『……あ』

喉の奥から絞り出したような呻き声が落ちる。カラン、とウツドモンの足元の石が転がった。

片方は空に向かって、もう片方は賢とパタモンに向かって。危ない、とパタモンは賢を押し倒すように飛び掛かり、伸びてきた腕から庇う。

森のエリアとはじまりの町の境界にいた賢は、パタモンに押されてはじまりの町の方へと滑るように転がっていく。

仰向けに転がった賢の視界に、ウッドモンが伸ばした木の枝の腕が横切るのが見えた。

目を白黒させてひっくり返っている賢に、パタモンが逃げてと叫んだ。

「え、な、何……っ?」

『あの木の枝みたい腕に当たると、エネルギーが全部吸い取られちゃうんだ!』

「ええっ!」

パタモンの言葉を聞いて顔を真っ青にさせた賢は、慌てて立ち上がって逃げようと振り返った。

だが、その足が地面を蹴って走り出すことはなかった。

何故ならパタモンに背を向けて逃げようとした賢の視界に、赤ちやんデジモン達が映ったからだ。

何が起きているのか理解できていないらしい赤ちやんデジモン達は、目をぱちぱちさせながら賢を見つめていた。

ダメだ、と賢は立つために地面に添えていた手を握りしめる。

このまま逃げると言うことは、はじまりの町を走ると言うことだ。

はじまりの町には元からいた赤ちやんだけでなく、賢とパタモンが瞬してしまった赤ちやん達も、沢山いる。

もしもこのまま賢がはじまりの町の方へ逃げた時、ウッドモンが追いかけてこないという保証はないのである。

赤ちやんデジモン達を巻き込むわけにはいかない。

そう思った賢は、はじまりの町ではなく、ウッドモンの方に向かって走り出した。

『ケン!?何してるの!?!』

「赤ちやん達を巻き込めないよ!」

ウッドモンを牽制していたパタモンはぎよつとなつたが、賢のその言葉で彼の行動を理解した。

ウッドモンは引つ込めた樹の枝の腕を再び伸ばそうと構えたが、パタモンが空気砲を放つてそれを阻止する。

川を挟んでウッドモンがいる岸とは反対側に逃げた賢を追って、パタモンも耳の羽を動かして賢の後を追う。

虚ろに呻いていたウッドモンは、暫くキョトキョトとした様子だったが、やがてのっそりとした動きで賢とパタモンが逃げた方角へと向かった。

「はあつ、はあつ、はあつ……！」

どれぐらい走つただろうか、賢の息は切れかかっている。

足も纏れて何度か転びそうになっていた。

気が付けば周りは樹々が立ち並んでおり、空は生い茂った葉で覆われて辺りは薄暗くなっていた。

後ろからついてきていたはずのパタモンはいつの間にか賢を追い越しており、先導してくれている。

しかしもう賢は限界である。額から、首から、全身から汗が噴き出しており、薄紫のTシャツが所々濃い染みを作り出していた。

立ち止まり、膝に手をつく。肩で息をする。全身から噴き出した汗が重力に従って滴り落ちる。

もうこれ以上は走れなかった。

少し先を飛んでいたパタモンは、そんな賢に気づいて戻ってくる。

『ケン！』

「……っ、ぐ、めん……もう、僕、はしれ、な……！」

息も絶え絶えに、賢はパタモンにそう言った。

膝について肩で息をする賢の背を擦りながら、パタモンは先ほど来た方角を睨む。

ウッドモンが来る気配はない。

追いかけてくるのを見たわけではないのだが、あのウッドモンは明

らかに異常である。

いきなり攻撃してきたこともだが、目の焦点が合っておらず、口の端から涎をだらしなく垂らしていた姿は、かなり不気味だった。

そもそもウッドモンはここ、ファイル島にはいないデジモンだ。

それなら何故、ウッドモンはここにいるのか。考えてもパタモンには思いつかない。

でも1つだけ、はつきりしたことがあった。

——あれは、黒い歯車で操られているのではない。

今まで何度か黒い歯車で操られたデジモンと対峙したことはあった（正確には他の仲間達が、である）が、あれとは全く様子が違う。

黒い歯車で操られていたデジモン達は、黒い歯車に宿った闇の影響で心を悪に染めてしまったが、意識と意志はきちんと存在していた。

だがあのウッドモンは……。

『……あ、ア……』

『っ!!』

パタモンの耳が、ウッドモンの呻き声を捉える。

もう追いかけてきたのだ、とパタモンは顔色を変える。

逃げなければならぬのだが、賢はまだ走れそうにない。

パタモンは覚悟を決めてウッドモンの呻き声がする方を向き、いつでも攻撃を放てるように体勢を整えた。

しかし、しつかりと大地を踏みしめていたはずの四肢が、ふわりと浮き上がり、周りの景色が流れていく。

肩で息をして、もう走れないと弱音を吐いていた賢に抱きかかえられているのだと気づいたのは、数秒後。

『ケン!?!』

「っ、ダメ……！絶対、ダメ……！」

びっくりして賢の名前を呼べば、賢は謔言のようにそう言った。

暫く走って立ち止まり、辺りをきよきよ見渡すと、賢は近くの茂みに飛び込み、息を潜める。

このままやり過ぎすつものようだ。パタモンは、訳が分からな

『ケン、このまま逃げたつてしつこく追いかけてくるだけだよ？そう
だ、エレキモンと合流しようよ！ボクはまだ進化出来ないけど、エレ
キモンと2人で力を合わせれば……』

「静かにっ！」

口を塞がれる。抱きしめられる。激しく鼓動している賢の心臓が、
パタモンの耳に響いてくる。

パタモンを抱きしめている腕は、震えていた。

頑ななまでに争いを避けようとする賢に、パタモンは歯がゆい思い
を抱く。

このままでは、賢も傷ついてしまうかもしれないのに。

『あ………ア、あ………』

息を潜めてじつとしていたら、ウッドモンの呻き声が聞こえてき
た。

確かめたくとも、賢が強く抱きしめているせいで、茂みから顔を覗
かせることが出来ない。

目を閉じ、最低限の呼吸だけして、身体を丸めている賢が、妙に手
慣れていることに違和感を抱いたものの、今はそれどころではなかつ
た。

非力でも、パタモンはデジモンである。

パートナーである。賢を守るために生まれてきたのである。

ウッドモンを倒すことが出来ずとも、追い払うぐらいなら出来る
し、先ほどパタモンが言ったようにエレキモンと力を合わせれば何と
かなるかもしれないのだ。

それなのに、賢はパタモンを抱きしめて、やり過ぎそうとしている。
逃げようとしている。

「そうすればいいのだということを知っている」。

自分や仲間達が幼年期だった頃、逃げることしか出来なかったよう
に。

『あ………』

ウッドモンの呻き声が近づいてきている。

賢の心臓がより一層激しく鼓動している。

遠ざかっていく。

「……行、った、かな……」

『………みたい』

小さい小さい声で、賢は言った。

パタモンは耳の羽をぴくぴくさせて、遠ざかっていく音を拾う。

ウッドモンがこちらに気づいて、戻ってくる様子はなさそうだった。

そう言っつてやれば、賢はやつと詰まらせていた息を全て吐いて、肩から力を抜き………。

《……………
キシツ》

ぞわり、と全身の産毛が総毛だつ。

ひゅ、と息を飲み、パタモンを抱きしめていた腕には再び力が籠った。

パタモンも、本能が刺激されて険しい表情になった。

今度こそ賢の腕から逃れて、賢の前で大地を踏みしめる。

犬や猫などの動物が、自分を襲おうとしている他の動物に対して、毛を逆立てて威嚇するように。

そこには、見たことのないデジモンがいた。

今の今までいなかったはずの場所に、突如として現れたのだ。

景色の中から浮かび上がったのでも、何処からか飛んできたというわけでもなく、まるでそのデジモンがないフィルムというフイ

ルムを無理やりくつつけたかのように、本当に突然に現れたのである。

そのデジモンは、全身がピンク色をしていた。

腕の大きな爪は毒々しいほどに赤く、頭部には2本の長い角が生えている。

顔の模様は目なのだろうか、まるで悪魔のような細い眼をじっと見ていると、心が、魂が捕らわれそうデ賢は息をするのも忘れてしまった。

「パ、パタモン……あの、デジモン、何……？」

賢は辛うじてそれだけをパタモンに問いかけたが、パタモンは答えなかった。

対角線上にいるピンク色のデジモンを睨んで、地面にめり込むほどに足で踏みしめている。

こいつは、ダメだ。

敵意や殺気などが、デビモンの比ではない。

デビモンがその内に秘めている闇の力など、可愛いものだ。

もっと深い……光も、闇でさえも飲み込むほどの、「暗黒」。

そうだ、「暗黒」をデジモンにしたような、そんな違和感だ。

↑……………
ピンク色のデジモンは、最初に軋むような音を出す以外に何も発しない。

それが余計に不気味であった。

一体何の目的で賢とパタモンの前に現れたのか、そもそもこのデジモンは一体何なのか。

賢に危害を加えるつもりなのなら、相手が誰だろうが怯むわけにはいかない。

治とガブモン、それに仲良しの大輔達もない今、賢を守れるのはパタモンだけだ。

パートナーの子どもが、争いを避けたがるとかそんなことを言っている場合ではない。

あいつは、自分が傷ついても戦わなければ……。

だから、反応するのが一瞬遅れた。

目の前のデジモンが敵意とか悪意とか殺気を超えたものをパタモン達に向けていたから、すぐ後ろに危機が迫っていることに気づけなかった。

通り過ぎていったはずのウッドモンが音もなく引き返ってきて、賢の背後から飛び掛かってきたことに

『っ!!』

にたり、と見たことのないデジモンが笑った気がして訝しんでいた。パタモンは、ようやく背後から迫ってきた殺気に気づき、振り返る。

賢のすぐ背後から、焦点の合わない目を泳がせ、ニタニタと笑っている口の端から大量の唾液を零し、木の枝の腕を賢の頭上に突き刺さうとしている、ウッドモンの姿。

『エアーションョット!!』

身体いっぱい大きく息を吸い込み、空気の塊をウッドモンにぶつける。

吹っ飛ぶウッドモン。一瞬の出来事だったので、賢はそのまま棒立ちになっていた。

我に返ったのは、ウッドモンが地面に力なく転がっていった時。

目を見開いて、口元を引きつらせ、全身を震わせながら、錆びた口ポットのようになぎこちなく振り返る。

地面に転がって、口の端から涎を垂らしているウッドモンの姿に、賢は引きつった。

『っ、あいつは……!』

思いつきり息を吸い込んで吐き出したために、若干息が切れている。

吹っ飛ばしてピクリとも動かなくなったウッドモンを睨みつけて、は、とパタモンは振り返る。

あのピンク色のデジモンは？振り返った先には、何もないかった。 “

「パ、パタモン……!」

『ケン！怪我はない!』

緊張から戻った賢は、駆け足でパタモンの下へ駆け寄る。
怪我はないかと問えば、ないと答えたので、パタモンはほっとする。
だが、安心はしていられなかった。

『……………あ』

「っ!？」

『っ!!』

微かな呻き声を拾った賢とパタモンは、ギクリと身体を硬直させる。

恐る恐る、賢とパタモンは振り返る。

パタモンが吹っ飛ばしたはずのウッドモンは、いつの間にか起き上がっていた。

相変わらず目は虚ろで、口の端から大量の唾液を垂らしている。

『ア……………あ、ア……………』

「あ……………」

『ケン、下がって……………ケン!？』

もう1度吹っ飛ばしてやろうとしたが、賢が咄嗟にパタモンを抱き寄せて後ずさる。

パタモンは賢の腕から逃れようともがくが、賢は強く抱いて離さなかった。

このままでは賢を守れないのに、賢は頑ななまでに戦おうとしない。

それは即ち……………賢がパタモンの進化を望んでいないのと、同じこと。

『ブランチドレイン!!』

そして、ウッドモンは容赦なく、木の枝の腕を伸ばす。

様子のおかしいウッドモンには、関係ないのだ。

賢に戦意がないとか、パタモンは弱い攻撃しか出来ないとか、そんなこと全く関係ないのである。

ただ目の前に動くものがある、エネルギー源がある、それだけだ。

他のデジモンのエネルギーを自分の生きる糧としているウッドモンに、相手の都合など関係なのだ。

『オサム……ガルルモン……どうしてここが……?』

『はじまりの町の赤ちゃん達とエレキモンが教えてくれたんだ』

聞けば、エレキモンは賢とパタモンが森の中へ逃げ込み、更にウツドモンが追いかけていった後に、はじまりの町に帰ってきたらしい。

騒がしい赤ちゃん達から事情を聞いたエレキモンが仰天して、賢とパタモン達を助けるべく、森の中へ行こうとしたところを、ガルルモンに乗った治が駆けつけてきた、ということらしかった。

「……そう、だったんだ。ごめんなさい、お兄ちゃん……」

「何を謝る?赤ちゃん達を巻き込まないように、森に逃げたんだろう?賢は何も悪くないよ」

『そうさ。パタモンと一緒にウツドモンと戦ってたんだろう?』

『………う、ん』

あれ?とガルルモンは首を傾げる。

パタモンはガルルモンの言葉を否定しなかったが、何処か複雑そうな表情を浮かべたからだ。

パタモンならきつと、そうだよって、えっへんて胸を張って、頑張ったボクを褒めて褒めてつてすると思っただのに。

というか、ウツドモンに追われていたにしては、進化をした様子が見られなかった。

進化していれば、間違いなく2人ともはしゃいでいただろうに、そんな気配が全く見られないのである。

治もその違和感に気づいたようで、困ったように眉尻を下げながらガルルモンの方に顔を向けた。

何かあったことは確実なのだろうけれど……治は兄として、今賢に問いただしても絶対に答えないだろう、ということだけは、分かっていた。

「……とりあえず、はじまりの町に戻ろうか。エレキモンも、心配していたよ」

『さつき、コウシロウ達とも合流したんだ。アンドロモンから話を聞こうって。さあ、乗って』

「……うん」

『……………』

乗りやすいようにしゃがんだガルルモンは、それでも賢にとっては大きかったため、治が抱っこして乗せてやる。

パタモンは賢の腕の中、そして治は賢が落ちないように、彼の後ろに乗って支えるように抱えてやる。

捕まってるね、とガルルモンが促し、そして優しく走り出した。

置いていかれる風が、賢の頬を撫でて気持ちいい。

いつもならきつとはしゃぐ状況に、しかし賢は素直に喜べなかった。

その賢の様子に、やっぱり何かあったんだな、と思いながらも、治は無理に聞き出すことはしなかった。

「……………」

賢は振り返る。

遠ざかっていく、賢とパタモンがいた場所。

燻っていたウッドモンは、影も形もなくなっていた。

ムゲンマウンテンの頂上に、デビモンが集めた闇の力が集結していく。

デビモンは高揚する気持ちを抑えきれず、高笑いを洩らした。

『いいぞ……もつともつと集めて……そして世界を……世界を美しい闇で満たし、我が手に……!!』

子ども達がここに向かってきていることは、分かっていた。

生意気にも、自分を倒そうとしていることも。

——そうはさせない……!!

世界を手に入れるためにも、この世界が呼んだ救世主などに、邪魔をされるわけにはいかなかった。

自分こそが、世界の支配者なのだ。

この島も、海の間こうにある大陸も、全て自分のものにする。

海の間こうに住んでいる、強いと言われているデジモンも、全て自分の糧にしてやる。

自分以外の強者など、必要ない。生きとし生ける者全て、自分にひれ伏し、恐怖し、崇めるがいい。

——あと少し……。

頭上に集められた闇の卵を見上げながら、デビモンは暗い笑みを浮かべた。

後少しで、パワーアップするために必要な闇が集まる。

その闇を身に宿し、まずは邪魔な子ども達を……。

『……何だ、貴様は。』

美しい闇の卵をうっとりとして見上げていた時、自分と同じような気配を感じて、デビモンは不機嫌を隠さずに呟いた。

闇に包まれた空間から、ぬうつと現れたのは場違いなほどの明るいピンク色のデジモン。

この辺りではまず見かけない姿のデジモンに、デビモンは眉を顰めたが今はそんなものに構っている暇はない。

何も言わずにただそこに佇んでいるだけのデジモンなど、何の障害にもならない。

デビモンはそのデジモンからさっさと興味を無くして、闇の卵に再び目を向けた時だった。

どす

背中に何か衝撃のようなものを受けて、それからじわじわとした熱が背中から広がっていく。

ゆっくりと、背後を振り返った。

さっきのピンク色の奴がニタリと笑った気がした。

どくん、と何かが自分の中に流れ込んでくるのを感じた。

『!?!』

ぐらりと世界が歪む。何が起きたのか把握しようとしたが、頭の中を驚掴みされたような感覚に襲われ、すぐに何も考えられなくなつた。

ニタリ、ピンク色のデジモンが嗤う。

デビモンに突き刺したのと反対側の爪を、デビモンが集めていた闇の力に向ける。

すると集められた闇から筋が伸びてきて、爪に吸収されていき、ピンク色のデジモンを介してデビモンに送られていくように、赤い爪に黒い筋が入って不気味に発光していた。

『がっ…!?!』

ビクビクと手足が痙攣する。

思考が、目の前が真っ黒に染まっていく。

⤴……………
キシッ

不気味な声を残して、そのデジモンは姿を消した。

進化する想い

今になってようやく、賢は自分が置かれている立場を理解できた。これは、ゲームなんかでは決してないのだ。

セーブデータなんか存在しないし、失敗しても残機などない。

死ねば終わりの世界なのだ。戦争なのだ、これは。

いつかテレビで見た、銃を持ったまだ幼い子ども達を思い出す。

治や賢と同年代の子達が、明日のため、国のため、家族のために銃を持って佇む姿に、何も思わなかったわけではない。

むしろ争いが嫌いな者として、とても胸が痛んだ。

賢がお母さんに新しいお洋服やおもちゃを買ってもらったり、ご飯を作ってもらったり、勉強を見てもらっている間、その子ども達は生きることにままならないところで、間近に迫る死に怯えながら暮らしているのだ。

生きるため、食べるために10にも満たない歳の子どもが、金にもならない仕事を大人に強いられて、虐げられて懸命に生きているその姿は、直視することすら憚られた。

生きるために働かなければならないから、学校に行くことが出来ない。い。

学校に行けないと言うことは、文字や計算のやり方を教えてもらえない。

ということとは、働き先で大人が給料を誤魔化しても、それを指摘することすらできない。

そして親も、自分達が生きていくために働かなければならなかった子ども時代を過ごしていたから、当然読み書きなんかできないし、計算も知らない。

子どもに教えることが出来ないから、働かせるしかない。

無知は罪である、とはよく言ったものだが、果たしてこの場合は当てはまるのだろうか。

そこから脱したくとも、大人が教えてくれないければ子どもは一生そこで這いつくばって生きていくしかないのだ。

そうして大人になった子達は、また次の子ども達にも同じことを教えるしかないのである。

自分達もそうだったから、または方法を知らないから。

ただの悪循環であると分かっているのに、知らないから変えることが出来ない。

その度に賢は思うのだ。

他の、裕福な国が教えてあげればいいのに。

それじゃダメなんだよって、勉強するから仕事の幅が広がって、もっと色んなことが出来るんだよって。

秀才で天才な兄を持つ男の子は、お兄ちゃんと同じで勉強が大好きだ。

知らないことを知っていく過程はとても楽しいし、自分の世界がどんどん広がっていくのだ。

出来ないことを出来るようにするために、そしてもっと先に行くために勉強をするのである。

やりたいことをやるために、勉強をするのである。

今はまだ、賢のやりたいことが何なのかは分からないけれど、でも今の内に沢山勉強しておけば、やりたいことを見つけた時に困らないはずだと、賢は思っていた。

信じていた。

しかしこの世界はどうだろうか。

自分が今まで信じてきたものは一切通じない、不思議な世界だった。

算数も社会も理科も、学校で勉強してきたものが何の役にも立たな

い。

頼りになるのは、先を歩く上級生達だけだった。

最初の頃は、それでよかった。上級生達が引つ張ってくれて、怖いデジモンと戦ってくれていたから、賢は何もしなくてよかった。

ただ守られていればよかった。上級生達の背後に隠れていれば、よかったのだ。

自分は何も出来ない、戦う力がない、そう言い訳して兄達が戦っているのを、ただ見ていただけだった。

兄達が戦っている後ろ姿は、まさにコントローラーで動かしているゲームの主人公そのものだった。

そう、ゲームみたいだと思っていた。

兄達の後ろで守られる立場に甘んじていたから、何処か他人事のように感じていた。

賢が大嫌いな争いが目の前で繰り広げられていたのに、何とも思わなかった。

……今ならどうかしてる、と言えるのに。

自分達の常識が音を立てて崩れていくのを、見て見ぬふりをしてきたツケなのだろうか。

パタモンを抱きしめる腕を強めながら、賢は思う。

パソコンのディスプレイに映し出されたアンドロモンによれば、デビモンは元々ムゲンマウンテンの頂上を根城にしているだけで、特に他のデジモン達に対して害をなすデジモンではなかったらしい。

それがいつの頃からか、そして何処で手に入れたのか、暗黒の力が凝縮された歯車を使って、他のデジモンの心を邪悪に染め、操り出したそうだ。

始まりは、海の方こうで突如現れた「暗黒」だった。

それは目に見えないほどの、小さな小さな「悪意」だった。

誰も、気にも留めることがないほどに、小さなものだった。

この世界の平和を守る者達も、気づかなかった。

それぐらいならば、世界の何処にでも散らばっていたからだ。

いちいち気に留める必要がないほどに、ちっぽけな「悪意」だったのだ。

しかしそんなちっぽけな「悪意」も、幾つも寄り集まれば強大な力となる。

気づいた時には、手に負えないほどに大きくなっていた「ソレ」は、もうこの世界の守護者ですらどうすることもできなかった。

そして、守る者がいるということは、壊す者も当然存在する。

この世の自然を、理を壊そうとする者が、大きく膨らみすぎた「悪意」に目をつけるのに、時間はかからなかった。

我が内に取り込み、己の養分とした。

邪悪に染めた心に、更に強大な悪意を取り込めばどうなるかは想像に容易い。

『……膨らみすぎた悪意は、幾ら取り込まれてもなくならなかった。養分も取り込みすぎれば己を蝕む毒となる。デビモンは取り込まれずに放置された悪意のおこぼれを頂戴したに過ぎないのだ』

アンドロモンは言う。

デビモンは元々天使だったデジモンが、何らかの理由で墮天してしまった姿なのだという。

闇に心を蝕まれ、奪われ、魅入られた天使の末路なのだという。

天使とは常に善の存在、光の体現者でなければならない。

闇の力に魅入られた天使は、その羽を黒く染めて邪悪に身を落とす。

例外は誰一人としていない。

『子ども達よ、デビモンを止め、ファイル島を救ってほしい。健闘を祈る。ゲンナイ様からの伝言だ』

「……好き勝手言ってくれるよなあ。デビモン倒したら覚えとけて、伝えといてくれよ」

何の事前連絡も予備知識もなしに連れてこられた太一達の不満は、いかほどか。

アンドロモンは苦笑しながら頷いた。通話を切る。プツン、と光子郎のパソコンのディスプレイは真っ黒に染まった。

この場にいる選ばれし子どもは太一、治、光子郎、ミミ、そして賢の5人である。

半数ほどが見当たらないが、こちらに向かっていている途中と信じて、揃っている一行だけでムゲンマウンテンに向かう。

ムゲンマウンテンに登るのは2度目だったが、前回同様にムゲンマウンテンに住んでいる気性の荒いデジモンは出てこない。

みんな、ムゲンマウンテンの頂上から山肌を沿うように漏れている、濃厚な暗黒の気配に怯えて隠れているのだ。

パートナーデジモン達も、何処かしらピリピリしているのが分かる。

そんなパートナーデジモン達を見て、子ども達も何処か落ち着きがなかった。

天敵がいらないが故に、危機的状況に置いて察知をするなどの本能がほぼ失われてしまっているはずなのに、これ以上先に進むのが怖いと足が竦んでいるのが分かる。

それでも、子ども達は進む。進まなければならない。

引き返すことも、止めたいと叫ぶことも出来ないところまで、子ども達は来てしまったのだ。

怖くとも、誰もが腹をくくったような表情を浮かべている。

だって戦わなければ、この世界の闇を晴らさなければ、帰ることが出来ないのだ。

それ以外の選択肢など、最初から子ども達に用意されていないのだ。

太一を始めとした上級生達は心の準備が出来ているが……賢の表情は冴えない。

パタモンを抱きしめる賢の腕は、以前強かった。

足取りも重いのは、他のみんなよりも小さいからだったり、坂道に疲れただけではないだろう。

戦いたくない、という気持ちだがパタモンには痛いほど伝わってくる。

『……ケン』

「……どうして」

気づかわし気に賢を見上げながら彼の名を呼べば、賢は小さく小さく、ぽつりと落とすように呟いた。

「どうして、戦わなきゃいけないの……？」

『ケン……っ？』

「おかしいよ、こんなの……デビモンが悪いことをしているからって、何で戦わなくっちゃいけないの？ どうしてお話しないの？ どうして誰もデビモンとお話しようとしらないの？ 元々はムゲンマウンテンで静かに暮らしていたのなら、話し合えば分かるはずなのに、何で……？」

疑問は尽きない。先を歩く上級生達は帰りたいたい一心でデビモンを倒すことだけを考えている。

デビモンが集めている「悪意」のために世界が危機に陥り、それをどうにかしてもらいたくて、別の世界から賢達を呼び寄せたと、ゲンナイさんは言っていた。

上級生達はそれが正しいことなのだと思っていていない。

だが、賢は違う。争いごとが大嫌いな、心優しい男の子は違った。

デビモンが悪いことをしたからやっつけるなんて、例え自分達を襲ってきたデジモンなのだとしても、賢にはどうしてもできなかった。

だってお父さんとお母さんが喧嘩をしたから、2人は離婚という道を選んでしまったのだ。

もつとちゃんと話し合いをしていれば、お母さんがお父さんの言葉に耳を傾けていれば、お父さんがお母さんの目を見れば、もつと違う道があったかもしれないのに。

学校の先生だって、お友達と喧嘩をしちゃったら、何が悪かったのかを話し合いましたよって言うていたのに。

賢には分からない。分からないから、答えが見つからない。答えが見つからないから、また同じ疑問が頭の中に浮かんでくる。

ぐるぐると無限ループの輪にはまった賢は、ますます口が堅くな

る。

まだ幼い賢は、知らなかった。何も知らなかった。

兄によつて目と耳を塞がれていた賢は知らないのだ。

悪意は賢の気持ち置いてけぼりにして、暴力を振るってくる。

戦いたくないという賢の優しい心を踏みにじつて、嘲笑ってくる。

仲よくしようと伸ばした賢の手を、平気で振り払う。

デビモンは最初から子ども達の命を狙っていた。自分の目的のために、野望のために。

子ども達が邪魔だったから、デビモンはその身に宿した悪意を尖らせて、刃の銚を子ども達に向けた。

上級生達が盾や壁になつていたせいで、賢は向けられた銚に気づけなかつたのである。

話し合えば分かり合えるはずという、優しい世界しかないと信じている賢は、上級生達がやろうとしていることが理解できなかつた。

そして上級生達も、同じ方向を見ている中で、1人だけ全く違う方向を向いていること子どもがいることに、気づかない。

きつと誰も気づけない。

ぞ、

山頂に近づいていくにつれ、濃厚になつていく闇の気配に怯えながら、上級生達の後をついていく賢の背筋が、氷の銚でなぞられたように凍つた。

ひ、と引きつったような悲鳴を上げて、パタモンを抱きしめる腕の力を強めて、立ち止まる。

顔を上げる。暗い空は、夜になつたからというだけではない。

空気を擦る音があちこちから聞こえてきて、そこでようやく子ども達は異変に気付いた。

暗い空でもはつきりと分かる、黒い点が色々な方角からムゲンマウンテンの頂上を目指して集まっていくのが見えた。

何だろう、なんて聞かなくても分かる。

パートナーデジモン達が、こちらが引くほどに警戒をしていた。

暗黒の力を纏った、黒い歯車だ。

本能を失った人間である子ども達に、黒い歯車から漏れ出ている暗黒の力を感じ取る芸当など、到底出来ない。

それでも、デビモンが棲んでいるムゲンマウンテンの頂上に、暗黒の力を纏った黒い歯車が、次から次へと色々な方角から飛んでくるということがどういふことなのか、子どもでも分かることだ。

古代ギリシャや古代ローマを思わせる神殿が鎮座している頂上から、轟音が聞こえてくる。

ぎよつとなった子ども達とデジモン達の視界に映ったのは、空を覆っている黒い雲とは別の色合いの黒い影だった。

ミミの悲鳴が、崩れる瓦礫に混じって響き渡る。

ばさり、山に翼が生える。

否、あの翼は太一も治も見覚えがあった。

ゆるりと黒い影が蠢く。立ち上がる。広げた翼が羽ばたけば、上から押さえつけるような強い風が、子ども達に襲い掛かった。

溜まらず、子ども達もデジモン達も地面に伏せる。というより、上からの風で立つことが出来なくなっていた。

ばさり、再びデビモンのボロボロになった翼が羽ばたく。

緩慢な動きでデビモンの身体が宙に浮いた。

空の黒に負けない黒が、空を突き破るように飛び上がっていく。

ようやくと風がやみ、子ども達は起き上がる。同時に、どしんという重たいものが高いところから落ちたような音と、腹に響く振動。

起き上がった太一とアグモンは、視界の端で黒いものが蠢くのを見た。

ども達は、怨嗟の咆哮から逃れる術はなかった。

ゆるり、もう一方の手も持ち上がり、暗黒のオーラが放出される。

先ほどよりも強い圧迫感に、子ども達は息苦しくなった。

首を、胸を強く押さえつけられているようで、子ども達の心の隅に恐怖心がちらつき始めた時だった。

『ハーブーンバルカン!!』

聞き覚えのある声の直後に、夜空に打ち上げられたものがデビモンに全て命中した。

よろめく巨体、両手から放出された暗黒のオーラが消える。

息苦しさがなくなつて、子ども達はその場に倒れ込んだ。

『メテオウイング!!』

暗黒に包まれた空に、場違いなほどに輝くオレンジの炎が揺らめいている。

キラリ、オレンジの流星がデビモンに降り注がれる。爆発音が鳴り響いた。

同時に、登り道の向こう側から空が駆けてくるのが見えた。

先ほどのミサイルとオレンジの流星は、イツカクモンとバードラモンのものだったようだ。

2体がデビモンを相手にしているうちに進化を、と空に促された子ども達は、デジヴァイスを手に取りデジモン達に向ける。

この世界を救つて、自分達の世界に帰るために。

世界なんて規模を救わなければならないのだから、こんなところで躓いていられない。

デジヴァイスから進化の光が伸びて、デジモン達を包み込む。

光が大きくなって、デジモン達の姿が変わる。

それぞれのパートナーにエールを送りながら、子ども達はデジヴァイスを固く握りしめた。

ただ帰りたい、その一心で。

グレイモンが大きく口を開けて、炎の塊をデビモンに吐き出す。

ガルルモンの口から、青い炎の一閃が伸びていく。

2つの色違いの炎が交じり合つて、デビモンに直撃した。

ら落下していった。

デビモンは、進撃を止めない。

海の中では負けなしのイツカクモンも、その重たい身体は陸の上では不利だ。

だからデビモンが伸ばした手から逃げ出すことが出来ず、あっさり捕まって、戻ってきたカブテリモンに叩きつけられて投げ出された。

一方的な蹂躪に、子ども達は最早成す術がない。

絶望の2文字が、子ども達の心の奥から泡のように浮かんでくる。

思った通りだった、と治は悔しさのあまり拳を握った。

昨夜、デビモンと初めて対峙したあの時感じたものは、間違いではなかったのだ。

普通の状態のデビモンにさえ敵わなかったのに、島1つをたつた1匹で八つ裂きにしてしまったデジモンがあんなに大きく、しかもファイル島中から集められた暗黒の歯車を使ってパワーアップした姿に、勝てるはずがないじゃないか。

痛みから回復できず、呻いているガブモンに寄り添いながら、治は唇を噛みしめる。

みんな、思っている。

敵わない、あいつに。敵うはずない。

自分達はただの子どもだ。デジモンがいなければ何もできない、無力な子どもだ。

好きで選ばれたんじゃない。行きたいと願ったわけじゃない。

ヒーロー願望なんて誰も持っていなかったのに。

頼れるものがお互いしかないという状況で、限界だった子ども達の心が折れ始めている。

しかし。

「諦めるか……！諦めて、たまるか！」

沈んでいきそうな治の心を揺さぶったのは、聞き慣れた声。

「こんなところで、敵わないからって、諦めてたまるか！俺達は帰るんだ！俺達の世界に！俺達の場所に！」

太一だ。崖下に転がっていったパートナーに、悔しそうに歯を食いしばりながらも、太一は叫ぶ。

太一が握りしめているデジヴァイスから、眩い光が漏れた。

「救ってやるよ！世界なんか幾らでも！俺達は帰る！！帰りたいんだ！！お前なんかには負けねえ！！」

戦況は最悪、状態は絶望的。それでも少年は諦めない。

帰りたい、ただその一心で。

そう、帰りたいのだ。お父さんやお母さんが待っているお家に。

お友達がいる世界に、自分達がいるべき場所に。

ここで負けたら、帰れなくなってしまう。

それは、それだけは嫌だ。

パートナー達が生まれた場所を守りたい。

でもそれ以上に、

「帰りたい……」

ぽつり、落とすようにミミが囁く。

「アタシも、帰りたい……ママとパパに抱きしめてもらいたい……！

ここで終わるのはいやあ！！」

ミミのデジヴァイスが強い光を放つ。

「まだ……まだやりたいことが、やり残したことが沢山ある……！何も出来なくなるのは、嫌です……！」

「そうだ……やるって決めたんだ……ここまで来て諦めるなんて、示しがつかないよ！」

光子郎と丈の心にも、闘志が灯る。

「……私、だって……！」

震える身体を叱咤しながら、空が立ち上がる。

——そうだ、みんな帰りたいんだ。

治は手に持っているデジヴァイスを見下ろす。

諦めかけたせいなのか、光が弱弱しかった。

ゲンナイも言っていたではないか、自分達にはデジモン達が進化す

るために必要なものを持っていると。

ここで自分が諦めてしまったら、ガルルモンは戦えなくなってしまう。

「……ガルルモン」

『つ、オ、サム……』

何とか立ち上がろうと震えているガルルモンの毛並みを整えるように、治はそつとガルルモンの頬を撫でた。

「……もう少し、頑張れるかい？」

僕も頑張るから、そう目で訴えながら見つめてくる治に、ガルルモンは一瞬目を瞬かせる。

『……ああー』

そして、力強く頷いた。

まだ頑張れる。治を守りたいから。

ガルルモンの返事を聞いた治は、ありがとうと礼を言って、デジヴァイスを握りしめながら大きなデビモンを見上げた。

相変わらず酷い呻き声をあげており、緩慢な動きでデジモン達を叩き潰そうとしている。

——大丈夫、まだやれる。

ガルルモンは地面を蹴って、頑張っている仲間達の下へと駆けていった。

……そんな仲間達を見ても、まだ動きだせない者がいる。

『ケン……い、ねえ、ケンってばー！』

パタモンが一生懸命語り掛けているのに、賢は微動だにしない。

震える両腕でパタモンを抱きしめ、必死に戦いから目を背けている。

怖い、恐い、こわい。形にならない悲鳴が、賢を押し潰そうとしている。

どうして? どうして? 賢には分からない。

可哀そうなぐらい争いごとが嫌いな、優しい男の子には理解らない。

ただ帰りたいたいだけなのに、どうして邪魔をしてくるのか。どうして意地悪するのか。世界が欲しいなんて、ゲームの悪役みたいなことを言うのか。

ゲームの悪役は、世界を自分だけのものにしたくて、悪いことをたくさんしていた。

主人公とその仲間達が、世界はみんなのものだと言って、悪役の企みを阻止するために旅をするのだ。

ここは、賢が大好きなアドベンチャーゲームにそっくりだった。

ゲームの主人公が太一で、自分達はその仲間。

世界を救うために異世界に呼ばれるなんて、初めはわくわくしたものだ。

大変なこともいっぱいあったけれど、でも仲間がいたから乗り越えられた。

だから賢はますますのめり込む。

ハマっていく。

悪いデジモンは勇者の太一と、1番仲のいい魔法使いの治がやつけてくれる。

弟として庇護の対象であることにすっかり慣れてしまっていた賢は、しかし自分もその一部なのだと、唐突に突きつけられてしまった。

一緒に旅をしているのだから、自分だって悪者をやっつける勇者一行の一員なのだ。

自分だけ何もしないなんて、この世界では許されないのだ。

この世界に呼ばれた以上、小さくとも賢は選ばれし子どもの一員として、役割を果たさなければならぬのである。

それを理解した時、賢は急に腕の中にいる友達が存在が怖くなってしまった。

あの時、パタモンがエレキモンと喧嘩をしてしまった際に泣いてしまったのは、そのためだった。

幾ら可愛い姿をしていたって、賢と一緒に守られることに甘んじていたって、パタモンはパタモンで、賢は賢なのだ。

守る者と守られる者なのだ。

その僅かな違和感を悟ってしまった賢に、最早逃げ道はない。

しかしそれでもなお、賢は運命から足掻こうとする。

『ケン……！』

「嫌だ……！」

目を閉じ、耳を塞ぐ。

背後から聞こえる破壊音が、賢の心に嫌でも現実として押し掛かってくるのに、賢は見ようとしなない。

「嫌だ……いやだ、いやだ、やだ、何で、どうして、こんなの、望んでない、のに、僕は、みんなと、お兄ちゃん、と、帰りたいただけ、なのに……！」

どんなに賢くとも、賢はまだ小学2年生だ。

世界を救うということがどういふことなのか、きつと分かっていなかった。

賢は賢いから大丈夫だって、お兄ちゃんですら気づかなかった。

両親の離婚というトラウマによって形成された賢の優しさに、誰も気づけなかった。

『うわああああっ!!』

イツカクモンの悲鳴が聞こえる。

賢越しに見えたパタモンの世界は、いつもの半分ほどだったけれど、賢に危険を知らせるには十分だった。

『ケンツ!!後ろっ!!』

「っ!？」

鬱陶しいデジモン達を全て払いのけたデビモンに視界に映った賢とパタモンに狙いを定め、その大きな手が伸びてくる。

ひゅ、と息を吸い込んだ賢は、大きな手に圧倒され、その場で硬直してしまった。

「賢っ!!」

気づいた治が、喉が張り裂けそうなほどに叫んで、こちらに向かってくる。

しかし手はすぐそこまで伸びてきていた。

治が間に合う距離ではない。

攻撃をしたくともパタモンの攻撃は大きく息を吸い込んで吐き出す空気砲、威力もないに等しく、賢に強く抱きしめられているせいで腕から逃れられない。

「あ……」

目を見開いて、ただ茫然と伸びてくる手を見つめる賢。

『ケンツ!!ねえ、動いて!!ケン!!』

このままでは捕まるか、山肌に押し付けられて潰されてしまう。なのに賢は動かない。

『ケンツ!!』

「賢っ!!」

パタモンと治の声が重なる。

『エクスレイザー!!』

その時だった。

空から伸びてきた光線が、デビモンの腕に直撃する。

一瞬動きが止まったタイミングで、空から白いものが降ってきた。

賢とパタモンのところに着地した白いものは、賢を担ぐように抱えて、その場から離れる。

走ってきた治の下へ、賢とパタモンを降ろしてやった。

『無事?』

「……君は」

「テイルモーン!」

その白いのは、猫の姿をしていた。

長い長い尻尾と、白い身体の二足歩行の猫に見覚えはなく、何故助けてくれたのか分からずポカンと見下ろしていたら、道の向こうから駆けよってきた2人の小さな陰に気づいた。

「ヒカリ!大輔!!」

太一が喜びの声を上げた。なかなか合流できなかつた妹と後輩が、

やっと来たのである。

「お兄ちゃんっ！」

「太一さーん！」

走ってきたヒカリと大輔は、ぼすんと太一に抱き着いた。

「よかった、お前ら無事だったんだな……！」

「ごめんね、お兄ちゃん」

「遅くなりました！」

『ヒカリッ！』

白い猫がヒカリの名を呼びながら駆け寄る。

誰だこいつ、って眼差して白い猫を見つめる太一に、ヒカリは言った。

「お兄ちゃん、この子はテイルモン。プロットモンが進化したんだよ」

「えっ!?このちっこののが!？」

驚く太一に、無理もないだろう、とヒカリは苦笑する。

だって大きさがアグモンよりも小さいのだ。

進化するイコール大きくなる、という方程式が出来ていた太一達は、完全に固定概念が覆された気分だった。

ふん、とテイルモンは鼻を鳴らす。

『見た目だけで判断していると、痛い目見るわよ』

『テイルモン！恰好つけてないで、加勢してくれ！』

上から声が降ってきた。

一斉に見上げた子ども達の視界に、青くスタイリッシュな竜が映る。

あのデジモンには、面影があった。

だから子ども達は同時に大輔を見やる。

えへへ、って照れ臭そうに笑う大輔に、やはりそうなのか、ともう一度見上げた。

「……ってえーそんなことしてる場合じゃないでしょう！」

仲間が2人駆けつけてくれたところで、状況は一行に変わっていないのだ。

子ども達は再びデジヴァイスを握りしめる。

テイルモンは、降りてきた青いデジモン……エクスブイモンに乗って、空へと戻っていった。

「……………」

治に支えられて佇んでいる賢は、信じられないものを見るような目で友達2人を見つめる。

大輔もヒカリも、賢と同じ小学2年生だ。

賢と同じように、上級生達の後ろにいて守られていたはずなのに、何も無いよって上級生達によって目を隠され、耳を塞がれていたはずなのに。

なのに、2人の傍には、パートナー達はいない。

上級生達と同じように進化を果たして、デビモンと戦っている。

鬱陶しく纏わりつくものが増えて、でたらめに腕を振り回しているデビモンを、倒そうとしている。

いつの間にか、兄は賢から離れていた。

……………ああ、

—— 僕らは、友達じゃなかったんだ。

友達だった。友達だと思っていた。

一緒に守られることに、甘んじていたはずだったのに、2人は賢を置いて先に行ってしまった。

横並び、一列に並んで、手を繋いでいたのに、賢の手を離してしまった。

戦いたくなかったのは、自分だけだった。

「……賢？」

上級生達に混ざってパートナーを応援していた大輔は、ふと違和感に気づいて辺りを見回す。

こっちの世界に来てから友達になった子が、何処にもいなかった。

治と一緒にいたはずなのに、太一の横に並んだ治の足元に賢はいない。

何処に行ったのかと辺りをきよろきよろ伺うと、1人離れたところ

でぽつんと佇んでいる賢を見つけた。

駆け寄る大輔。ヒカリも気づいて、大輔の後に続く。

「賢ー！」

「っ」

びくり、と賢の肩が震えた。

「どうしたんだ？」

「何かあったの？」

声をかけるが、賢は俯いたまま答えない。

不思議に思った大輔とヒカリは顔を見合わせ、腕に抱かれているパタモンを見下ろした。

「なあ、パタモン。賢の奴どうしたんだ？」

『……………』

どうしよう。パタモンは困惑する。

何も言わずにただ黙ってパタモンを抱きしめている賢を不思議に持っているのは、パタモンも同じなのだ。

賢の様子がおかしくなったのは、ムゲンマウンテンに登る前。

エレキモンと喧嘩をしましてしまったからだ。

その後ウッドモンに襲われた2人だったが、賢は頑なにウッドモンと戦おうとしなかった。

ただ逃げて、ウッドモンが諦めてくれるのを待っていただけだった。

デビモンを倒して、この島の闇を祓ってほしいと頼まれた時だって、賢はだんまりだった。

上級生達が歩いている後を、ついていくだけ。

『……………分かんない』

「え？」

もう、何が何だか分からない。

パタモンの想いが、とうとう爆発した。

『分かんない、分かんない、分かんない！ケンが何考えてるのか、ぜんぜん分かんない!!』

「パ、パタモン……………」

『戦いたくないのなんて、みんな同じに決まってるじゃないかあ!!ボクらだって好きで戦ってるわけじゃないよう!!でもそうしないと生きていけないから、戦わないとやられちゃうから戦ってるだけなのに!!なのに何だよ!!ケンったら戦いたくないって、そればかり!!理由も言ってくれないのに戦いたくないなんて、そんなの分かるわけないじゃん!!』

ケンの莫迦ああああって、パタモンは泣きながら叫んだ。

状況がさっぱり掴めない大輔とヒカリは目をぱちくりさせる。

賢は、知らないのだ。

争い合ってばかりいた両親の喧嘩しか見たことがない賢に、*“守るために戦う”*という手段があることなんか、知るはずがないのだ。

争いが生み出すのは悲劇だけであるという結果しか知らない賢が、知る由もないのだ。

デジモン達だって、子ども達を守りたいから戦っている。

デビモンと戦いたいから戦っているのではない。

争わずに済むのなら、平穏でいたいと願うのは、デジモンだって一緒なのだ。

「……パタモン」

賢にしがみつきながら泣きじやくるパタモンに、賢はどうしたらいいのか分からず途方に暮れている。

パタモンだって、賢を守りたい。

守るための力が欲しい。進化はその過程に過ぎないのである。

賢を守るために出会ったのに、その賢が戦いたくないと願うのは、本末転倒だ。

それは即ち、パタモンにとって死を意味するものと同じである。要らないというのと同義である。

守るために生まれてきたのだと信じてきたのに、その概念を覆されたのである。

庇護に甘んじながら、庇護を拒否したのである。

パタモンが泣きじやくるのも、無理はなかった。

「……賢」

何となく察しがついた大輔が、険しい表情で賢を見つめた。

「賢は、帰りたくないのか？」

「っ、そんな、わけ……！」

「だよな？俺だって帰りたいよ。そのために俺達、ここにいるんだろ？」

戦いたくないのは、誰だって同じだ。

避けて通れるのなら、話し合いで済むのならそれが一番だ。

でも運命はそれを許さない。

ここで戦わなければ、きつとこれから先賢は一生逃げ続けることになるだろう。

逃げるのが悪いこととは言わないが、それが許されない時がある。

今までなら、きつとそれでよかった。

だけど、事態はもう後戻りできないところまで来てしまっている。

それでも、

「……………」

賢の決心はつかない。戦えば、パタモンが傷ついてしまう。

それに……。賢はちらりとデビモンを見上げる。

耳を塞ぎたくなるような咆哮を上げながら、両腕をでたらめに振り回して他の子ども達やデジモン達を叩き潰そうとしていた。

みんな、戦っている。みんな、傷ついている。

帰るために、みんなで家に帰るために。

「それでも……僕は……！」

パタモンを抱きしめる賢の腕に、力が籠った。

『うわあああああああつ!!』

『あああああああつ!!』

は、と大輔達は声が出した方に顔を向ける。

直後、デビモンの周りを飛び回っていたエクスブイモンと、エクスブイモンに乗っていたテイルモンが、デビモンが振るった腕に吹っ飛ばされ、山肌に叩きつけられたのを見た。

「エクスブイモン！」

「テイルモン!!」

慌てて駆け寄る大輔とヒカリ。少し遅れて、賢も後についていった。

「エキスブイモン、大丈夫か?」

『な、何とか……!』

「テイルモン、しっかり……!」

『危ないから、下がって……!』

身体中に細かい傷がついているエキスブイモンもテイルモンも、だ
いぶ息が上がっているようだ。

だが2体とも、傷だらけになりながら尚も立ち上がろうと、震える
身体を叱咤させている。

大輔とヒカリを守ろうとしている。

——……ボクは……

がらり、と子ども達の頭上の山肌が崩れる音がした。

光のその先へ

その日、子ども達はこの世で最も美しい光を見た。

山肌が崩れる音がして、子ども達とそのパートナー達は反射的にそちらを見上げる。

そこから先は全てがスローモーションだった。

大きな瓦礫と小さな石、それから細かい砂の粒子がムゲンマウンテンの岩肌から離れて、宙を舞っているのが見えた。

あ、と言ったのは誰だったか。

『ダイスケ!!』

『ヒカリッ!!』

デビモンに吹っ飛ばされて地面に伏していたエクスブイモンとテイルモンが反応する。

テイルモンはヒカリを押し倒し、治は賢とパタモンを隠すように抱きしめる。

そしてエクスブイモンは大輔と一緒に、ヒカリとテイルモン、治と賢とパタモンに覆いかぶさった。

スローモーションが終わる。瓦礫が音を立てて降り注ぐ。

子ども達を自分の身体の下に隠すように庇ったエクスブイモンに、襲い掛かってきた。

太一の怒号にも似た悲鳴が響き渡る。

大量の砂埃が舞い上がり、エクスブイモン達の姿が一瞬消える。

「ヒカリっ!! 治っ!!」

「大輔っ!! 賢くんっ!!」

太一と空の悲鳴。駆け寄ると、瓦礫に埋もれたエクスブイモンが、

ぐったりと四肢を投げ出して気を失っているのが見えた。

お陰で大輔とテイルモンとヒカリ、そして治と賢とパタモンは無事だった。

「エクスブイモンッー」

頭を抱えてうずくまっていた大輔は、崩れた瓦礫の音が止むと目をぱちぱちさせながら辺りを見渡した。

すぐ傍でぐったりとしているパートナーを見て、顔を真っ青にして絶る。

一生懸命揺さぶって声をかけるが、エクスブイモンは動かない、答えない。

エクスブイモンの身体から這い出た治と賢とパタモンは、何とも言えないと言った表情をしていた。

ヒカリを庇う前に、エクスブイモンと共にデビモンに吹っ飛ばされてダメージを負っていたテイルモンも、何とかエクスブイモンの身体の下から何とか這い出てきたが、息を切らせて大きく肩を上下させている。

妹と後輩、親友が無事だったことにほっと胸を撫で下ろした太一だったが、事態は好転しているわけではない。

むしろ最悪の方向に転がり始めている。

巨大なデビモンに果敢に向かって行くパートナーデジモン達も、その力の差から次々と離脱していく。

体力が限界を迎えて、脚を震わせながら立ち上がろうとしているが、動くことも億劫な者。

吹っ飛ばされて岩肌对身体をぶつけ、全身に痛みが走って呻いている者。

みんな子ども達のために、敵わない相手と分かっているでもデビモンに向かって行ったけれど、1体、また1体と地面に伏していく。

ミミが絹を裂いたような悲鳴を上げた。目を逸らしたくなるような惨劇。

尚も立ち上がるうとするデジモン達を嘲笑うかのように、デビモンは咆哮を上げていた。

「……エクスブイモン」

呼びかけても揺さぶっても、何の反応も見せないエクスブイモンに、大輔はぼつりとパートナーの名を呟いた。

それからデビモンを見上げる。

バラバラに引きちぎられたファイル島の一部分から、ヒカリとテイルモンと一緒にエクスブイモンに乗ってムゲンマウンテンに戻ってきた大輔だったが、巨大なデビモンを見た時からずっと悪寒のようなものを感じていたのだ。

ヒカリも同様だったようで、デビモンを見た瞬間に息を飲んでいたので、大輔は見逃さなかった。

——まるで、世界中から沢山の“怖いもの”を集めて、ぎゅっと固めたような怖さ。

耳を塞ぎたくなるような咆哮を上げるデビモンに、気力だけで立ち上がった上級生達のパートナーデジモン達が最後の力を振り絞って飛び掛かっていくのが見えた。

もう一度エクスブイモンに目を向け、大輔は唇を噛みしめる。

デジヴァイスを握りしめる。光は失っていないものの、最初より弱まっていた。

エクスブイモンが意識を失っているせいなのだろうか。

「グレイモン!!」

太一の叫び声がある。崖の下を覗き込んでいた。

何度も何度も呼びかけているところを見ると、エクスブイモンと同じように意識を手放してしまったのだろう。

デジモン達の限界はとっくに超えてしまっている。

——このまま勝てなかったら、どうなるのだろうか。

誰ともなく、そんな諦めにも似た感情が脳の隅に思い浮かんだ。

「……………」

もう一度、エクスブイモンを見る。

閉じられた赤い眼。大輔は震える右手をエクスブイモンに伸ばした。

カラン……

首元で微かに、軽いものが転がったような音がして反射的に下を向いた。

振り子のようにゆっくりと動いている、ホイッスルが目に入る。

エクスブイモンに伸ばしていた手を止めて、ホイッスルを手にとった。

小さな大輔の手のひらと同じぐらいの大きさ。物心ついた頃、いつの間にか持っていたもの。

どうして持っているのか、何処で手に入れたのか、買ってもらったのだっただかすらも覚えていない代物なのに、どうしてか手放す気になれなくてずっと首にかけていた。

空が闇を含んだ分厚い雲で覆われているせいで、いつものように光を反射して鈍く光ることはなかったが、それでも大輔は目を離さなかった。離せなかった。

「……………」

見下ろす。じつと見下ろす。

ムゲンマウンテンが崩れる音、気力を振り絞ったデジモン達が吹っ飛ばされる光景、子ども達の悲鳴。

全てが大輔の目から、耳から遠ざかっていく。

そして、

ピー

…………ツ!!

何を思ったのか、大輔はホイッスルを両手で持ち直すと、大きく大きく、肺いっぱい空気を吸い込んで一瞬だけ息を止め、そしてホイッスルを口に咥えて一気に吐き出した。

合成コルクがホイッスルの中で細かく振動して、大きく甲高い音が鳴り響いた。

周りではもつと大きな音が立てられていたはずなのに、それに負けないぐらいの音だった。

子ども達が全員、音のした方向を見る。

大輔が顔を真っ赤にしてホイッスルを吹いているのを見た。

「……………ふはあつ、はあつ、はあつ……………」

肺いっぱい吸い込んだ息を全て吐ききった大輔は、ホイッスルから口を離して酸素を補給する。

太一達上級生やそのパートナー達、ヒカリとテイルモン、賢とパタモンの視線が大輔に集中した。

デジモン達を蹂躪していたデビモンも、頭に響くような甲高い音を聞いてその動きを止める。

しかし大輔はそんな仲間達の視線を気にすることなく、ただ目の前でぐつたりと意識を失っているエクスブイモンに目を向けた。

岩肌に反響していたホイッスルが空へと遠ざかっていき、静寂が辺りを包み込む。

あれだけの大音量を、耳元に近い場所で気化されたにも関わらず、エクスブイモンの赤い眼は瞼の奥に隠されたままである。

ホイッスルを持った両手が震え、滑り落ちそうになった時だった。

『……………!!』

見開かれた瞼の赤い眼は、何処か殺気立っていた。

崩れた瓦礫に埋もれていたエクスブイモンは、雄たけびを上げながらその瓦礫を弾き飛ばすように起き上がり、デビモンに向かって飛んで行った。

ほぼ同時に、崖下へ転落しながらも奮闘し、虚しくデビモンにあし

まった。

「パタモン……!?!」

『ケン、ごめんね』

光は更に強まる。白い光が暗闇に潰されかけたファイル島を優しく照らす。

呆然としている賢に、光の卵から声が聞こえた。

それは、謝罪の言葉だった。

ごめんね。どういふことだろうか。

デビモンが喉の奥を鳴らすように唸りながら、眩い光を消してやろうと腕を伸ばしてくるが、ファイル島中の闇を、そして世界中の悪意をかき集めて己の身に宿したデビモンに、その光は地獄の業火に等しかったようだ。

光に近づけたデビモンの手が、冷たいものと熱いものを合わせたような音を立てて、白い煙が昇る。

悍ましい悲鳴を上げ、デビモンは腕をわなわなとさせながら身悶えた。

もう、戻れない。

『……ねえ、ケン。どうしてボクのことを庇ったの?』

「え?」

『ウッドモンが襲ってきた時、それからさつき崖が崩れた時。どうして?』

「どうして、って……」

分からない。どうしてパタモンがそんなことを聞いてきたのか、賢には分からない。

「だって、それは、パタモンが危ないって、思ったから……」

『……そっか』

賢の答えを聞いたパタモンは、分かっていたと言いたげな、しかし何処か寂しげな声色だった。

「パタモン……?」

『ごめん、ごめんね、ケン。君はボクを守ろうとしてくれたけど、でもそれで君が傷ついちゃったらボクはきつと一生、ボクを許さないと

思う』

だってパタモンは、パタモン達は子ども達を守るために生まれてきたのだ。

そう、いつだってデジモン達は子ども達のために必死だった。

彼らがその強大な力を発揮するのは、いつだって子ども達のピンチの時。

子ども達の命が脅かされた時。

パタモンも、きつといつかは他のみんなと同じように、同じ条件で進化するんだろうなああって漠然と考えていた。

どんなデジモンに進化するのは分からなかったけれど、賢を守れるぐらい強かったらいいやつという曖昧なものだった。

そんな生半可な覚悟で、進化なんかできるはずがないのに。

そして、時は来てしまった。

いつかでもいいや、強ければいいやつて後回しにしてきたツケだったのだろうか。

唐突に訪れた試練は、小さな身体を容赦なく叩きつけてくる。

『ケン、ボクも同じだよ。ボクも君を守りたい。だからボクは選ぶよ』

パタモンは、選んだ。

「選ぶ……っ！」

『うん、選ぶ。ボクは、君を守るために戦う』

パタモンの言葉にぎよつとなった賢は、目を見開いて叫んだ。

「やめて……やめて！どうして!?何で!?何で守るために戦わなきゃいけないの!?戦って、傷つけあって、その後一体何が残るのさっ!!悲しいだけじゃないかっ!!」

「……賢」

本音ともとれる賢の叫び声に、治は何とも言えない声色で弟の名を呟く。

賢には分からない、パタモンが選択した道の意味が。

何故戦うことが賢を守ることに繋がるのか。

相手を傷つけ、自分を傷つけられて、そこに残るのは一体何だろう。物心がついた最初の記憶が両親の怒号だった賢にとって、今日の前

で繰り広げられている戦いはただの苦痛でしかないというのに。

争いは当事者だけでなく、周りも傷つけるのだ。

自分が我慢することで平和に解決できるのなら、それでいいではないか。

今までは、そうだった。

今までは、それでよかった。

『……………ごめんね』

パタモンは、再度謝罪した。

そして、

『パタモン、進化——!!』

想いは、進化する。

ばさりと重なった薄く軽いものが空気を撫でたような音がして、子ども達は息を飲む。

割れた光の卵がパタモンを包み込み、小さいマスコットだったパタモンの姿が変化していくのを見た。

大きくなったその姿を見た子ども達は、闇を晴らす天使だと思った。

すらりと伸びた手足に逞しい上半身、オレンジがかった長い金の髪、光と闇を公正に判断するために十字が刻まれたヘルメットを被った顔。

そして何よりその背に生えた黒い翼。

『——エンジエモン』

天使が名乗る。

エンジエモンと名乗った天使の背後から、パタモンを包んでいた白い光が凝縮されて発せられ、神秘的な雰囲気醸し出されていた。

デビモンの足元にいたグレイモンは、ムゲンマウンテンの麓の岩肌に叩きつけられ、空を飛んでいたエクスブイモンは宙に放り出されるように吹っ飛ばされていった。

揺れる地面、上から押さえつけるような風圧に、子ども達も悲鳴を上げながら転がったりその場でうずくまったりしていた。

「ぐっ……い！」

未だに揺れる地面。岩肌にしがみつく形で、何とか立っていた太一は、妹のヒカリの方に視線を向ける。

頭を両手で守るように抱え、その場にしゃがみこんでいた。

テイルモンがそんな彼女に覆いかぶさるようにして守っている。

傍にいた大輔や賢も似たようなものであった。

駆けつけてやりたいが、揺れる地面と上から押さえつけてくる風圧のせいで、まともに身動きが出来ない。

何とかならないかと、崖の下に落ちてしまったパートナーの名前を必死で呼ぶが、姿も見えない上にグレイモンが返事をする気配もないために、己の声が届いているかも怪しかった。

『……………っ』

宙に吹っ飛ばされたエクスブイモンは何とか、翼を羽ばたかせて何とか体勢を整え、後ろに下がっていく身体にブレーキをかけた。

『フーツ、フーツ……………い！』

肩で息をしているのは、ホイッスルで強制的に起こされ、闘争本能のようなものが刺激されたからだろうか。

エクスブイモンの赤い眼は何処かギラギラとしていて、まるで天敵と対峙しているかのような迫力まであった。

その隣に、デビモンの攻撃を躲したエンジエモンがすーっと滑るように並んだ。

『っ、お前……………!?!』

デビモンと離れたことで闘争心が少し抑えられたのか、エクスブイモンは隣に並んだエンジエモンにようやく気付く。

最初は見知らぬデジモンが突然現れたことに驚いたが、そのデジモンが纏う雰囲気やオーラのようなものが知っているデジモンと酷似、

アッアッアッ あッアッ あッあッ あッアッアッアッ アッアッ!!
デビモンの長い手が届かない位置にいるエンジエモンとエクสบ
イモンに向けて、空気を震わせるような咆哮を上げてくる。

下から突き上げるような突風に、エクสบイモンとエンジエモンは
両腕で顔を庇いながら耐える。

『っ……っ！』

『……あれはもう、私の手では救えない……』

暴風が止む。一息ついて眼下のデビモンを見下ろしていると、エン
ジエモンがそう呟いた。

エクสบイモンは怪訝な眼差しをエンジエモンに向ける。

エンジエモンと言えば、文字通り天の使い。

悪しき者に容赦せず、救うよりも消滅させることに重きを置いてい
るはずだ。

だがこのエンジエモンは、仲間で友達のエンジエモンは、聞き間違
いでなければ“救えない”と言った。

“救えない”という言葉は、つまり相手を救いたかったという後悔
が混じっているということだ。

相手はデビモン、エンジエモンにとっては宿命の相手、天敵、生涯
のライバルである。

一生交わることのない平行線である。

互いが弱点になりうるような存在であるはずなのに、エンジエモン
からデビモンに対する敵意のようなものが感じられない。

それどころか、一種の哀れみのようなものを感じた。

……エンジエモンの横顔に、胸騒ぎのようなものを覚えたのは、
きつと気のせいではない。

『どうするつもりだ？』

『……私は、私に出来ることをするだけだ』

それだけ言うと、エンジエモンはまた滑るように空を飛び、デビモン
の下へと降りていった。

エクสบイモンも慌てて後に続く。

ふわりと風に舞ったシーツのように柔らかく、巨大化したデビモン

の目線で止まる。

地獄の底から這いあがってきたような唸り声を上げながら、デビモンはのっそりとした動きで長い手をエンジエモンに伸ばす。

『デビモン……闇に染まった我が身の力を過信し、強大な闇に、否、光すら飲み込まんとする暗黒にその身を落とし、自我すら失ったお前は、最早デジモンですらない。デジモンではないお前を、私の力では救うことはできない……せめて闇の中で安らかに眠るがいい』

そう言うときエンジエモンは持っていたロッドを頭上に掲げる。

眩い光が再びエンジエモンを包み始めたのを見たデビモンは、その光が己を消滅させようとしているものだと本能的に察知し、それを阻止しようと両腕を大きく振って暴れ出した。

うわ、と子ども達とデジモン達は揺れる地面で尻餅をつく。

は、とエンジエモンとエクスブイモンの顔が青くなった。

光を嫌って暴れるデビモンの長い腕の先にいるのは、守るべきパートナー達。

ヒカリはテイルモンによつてその場から離れていたが、いかに成熟期と言っても成長期と大きさが変わらないテイルモンでは大輔と賢を含めて3人を運ぶことはできない。

だがそれは責められるようなことではない、テイルモンが守るべきなのはヒカリなのだ。

大輔と賢とも仲が良くても、2人には別のパートナーがちゃんというのだ。

エンジエモンとエクスブイモンはその翼を羽ばたかせて急いでパートナーの下へと飛び、エクスブイモンは大輔を押し倒すように抱きしめて地面を転がり滑っていく。

エンジエモンが賢を抱き上げて再び空へと戻った直後、デビモンが振り下ろした腕がムゲンマウンテンの岩肌を叩きつけた。

大きな手のひらが岩肌を抉り、瓦礫となって辺りに飛び散る。

もう殆どない気力を振り絞って、飛び散ってきた瓦礫から子ども達を守るデジモン達。

エンジエモンも、宙に舞って襲い掛かってきた細かい瓦礫から賢を

た。

もう誰も、戦えないのだ。

これ以上デビモンと戦う体力も気力もないのだ。

太一と離れてムゲンマウンテンの麓に落ちてしまったグレイモンも、先ほど大輔がホイッスルで目覚めさせた際にはエクスブイモンと共にデビモンに挑んでいったが、ぐったりしているのが見えた。残っているのは、エンジエモンだけ。

「ど、どうしたら……！」

しかし尚も賢は、戦うことを躊躇している。

戦えるデジモンはエンジエモンだけしかいないのに、賢は戦えばエンジエモンが傷ついてしまうことを恐れていた。

喉の奥に言葉が、息が張り付いて何も吐き出せない。

エンジエモンの肩に置いた手が分かりやすく震える。

エンジエモンは、そんなパートナーに何と声をかければいいのか分からず、口元をきつく結んだ。

その時である。

《がアア、あ、あ、ア、ア、ア、あ、あ、あ、あ、ア、ア、あ、あ、あ、ア、ア、あ、あ、ア、ア、あ、あ、ア、ア、あ、あ、ア、ア、あ……！！》

『っ!?』

「え……!?!」

デビモンの様子が一変する。

先ほどまであげていた、幾つもの声が重なったような咆哮とは違うものが、デビモンの口から飛び出してきた。

甲高かった声がちやぐちやに混ぜ合わさって、低く重くなる。

あ、と言ったのは誰だっただろうか。

どろり

ひ、と賢の喉が引きつる。

デビモンが伸ばした腕が、粘着を帯びて溶けだしたのだ。

熱で溶かされたチーズのように、重力に従って下へと伸びていく。異変は、腕だけではなかった。

脚が、胴体が、顔が、翼が、どろどろに溶けてデビモンの身体を作り替えていく。

そこにはもう、デビモンの陰も形もなかった。

面影があるのは、血のように毒々しい赤い眼だけだ。

「な、何、あれ……何で……!?!」

『……ケン、よく聞いておくれ』

そしてエンジエモンは、先ほどエクスブイモンにも言ったことを賢にも伝える。

「そんな……エンジエモン、どうにかならないの……!?!」

賢の言葉に一瞬虚を突かれたエンジエモンは、しかしすぐに真剣な表情を浮かべ、ゆっくりと首を横に振った。

その意味を悟った賢の目が、更に悲し気に揺れる。

……エンジエモンは、口元を歪ませて微笑んだ。

『……このまま放っておけば、デビモンは本当にデジモンではない何か”に変貌し、二度と光の世界へ戻ることはできないだろう。強すぎる力は、制御できなければただの毒でしかない……』

変貌し始めているデビモンが、これからどうなるのかエンジエモンも分からないらしい。

このままどろどろに溶けてムゲンマウンテンを覆ってしまうのか、それとも爆発でもするのか……どちらにしても、デビモンはもう助けられない。

そう告げれば、賢は悲しそうな目をしながら、デビモンを見やった。

『……ケン、君は優しいね。不思議だよ、きっと少し前の私なら何も感ぜずにデビモンを葬り去っただろう。でもデジヴァイスを通して流れてくる君の気持ちは、暖かいものだ。敵であるはずのデビモンに対しても、何の曇りもない。純粹に傷ついてほしくないと思っているね。……すまない、ケン。私のせいで、君を悲しませてしまった』

「そんな、違うよ！エンジエモンのせいじゃない!!僕が……!僕が、ぐずぐずしてるから……!」

本当は分かっていたのだ。

デビモンと戦わなければいけないことも、そうじゃないと帰れないことも、戦うことから逃げられないことも、全て。

だって賢は治の弟だ。天才少年の弟だ。

兄に似て賢い男の子が、そんな簡単で、複雑なことが分からないはずがないのだ。

分かっていたのに……。

『いいんだよ、ケン。さあ、みんなと一緒にいてくれ……』

賢の言いたいことは全て分かっていると聞いたげに、エンジエモンは微笑んだ。

すーっと滑るように音もなく治の下へ降りる。

『ダイスケ、ヒカリ。ケンを頼む。』

「う、うん……」

「エンジエモン……？」

大輔達に賢を預けたエンジエモンは、微笑みながらデビモンだったデジモンの下へ飛び去っていく。

『我が下に集まれ！聖なる光よ！』

両手に持ったロッドを頭上に掲げ、エンジエモンはそう高らかに告げる。

先ほどデビモンに邪魔をされてしまったが、今度はさせない。

エンジエモンの決意は固かった。

子ども達のデジヴァイスが光る。エンジエモンの言葉に反応して、デイスプレイから真つすぐ、光の筋が向かって行く。

ほぼ同時に、デジモン達が光に包まれ小さくなった。

グレイモンはアグモンに、ガルルモンはガブモンに、みんな成長期に戻ってしまった。

アグモン達が成熟期の姿を維持するためのエネルギーを、エンジエモンがデジヴァイスから根こそぎ奪ってしまったのである。

……その異様な力の大きさに、賢だけでなく大輔とヒカリも背筋が凍った。

「エンジエモン!!やめろ!!」

呆然としている賢を尻目に、エンジエモンは微笑んでいた。

『……すまない。こうするより手がなかったんだ。ケン、君の気持ち
を踏みにじるようなことをしてすまなかった。だが私も君を護りた
かった。君が傷つくのは、私も嫌だったんだ。君と同じだったんだ
よ』

「……お、なじ?」

消えていくエンジエモンをただ見守ることしか出来ない賢は涙を
流す。

その時、賢くも愚かな子どもはやつと気づいた。

どうしてパタモンが泣いたのか。

どうしてパタモンがエンジエモンに進化したのか。

どうしてエンジエモンが戦うことを選んだのか。

……どうして、エンジエモンが笑っているのか。

「……エンジエモン」

大輔とヒカリが何とも言えない表情でエンジエモンを見上げてい
るのが見えた。

『……ダイスケ、ヒカリ。ケンをよろしく。私は力を使い過ぎた。よ
く覚えておくんだ、子ども達。光も闇も、強すぎる力は身を滅ぼす。
己を過信し、闇に飲まれたデビモンのように。そしてデビモンを倒す
ために光の力を使ってしまった私のように……。さて、私はしばらく
休むとするよ。だけどケン。きつとまたすぐに逢える。君がそう望
むなら……』

エンジエモンは、光の粒子となって空へ還ってしまった。

「エンジエモオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オン!!」

賢の悲鳴がファイル島中に響いたことで、上級生達はようやく異変
に気づき最年少達の下へ駆けつけた。

闇が、晴れていく。

「……………」

『……ヒカリ?』

がつくりと膝をついて項垂れている友達を、ヒカリは黙って見つめる。

退化したプロットモンが心配そうに声をかけたが、ヒカリは何でもないとだけ言って、プロットモンを抱え、賢の周りに群がる兄達の下へ向かって行った。

アグモン達も怪我はないようだった。

よかった、と胸を撫で下ろす。

大輔も、バイモンを連れてみんなの輪に混ざろうとした。

「バイモン、大丈夫か? 立てるか?」

『……………ダイスケ』

岩肌にぐったりと身を預けているバイモンに声をかけるが、様子がおかしい。

目がとろとろしていて、こくこくと船を漕いでいる。

「?バイモン?」

『……ね、む……』

「え? ちよ、おい、バイモン!」

消え入りそうな声でそう言うと、大輔にもたれかかるようにして倒れ込んだ。

慌てた大輔だったが、聞こえてきた微かな寝息に、拍子抜けする。

よほど眠いのだろう、幾ら揺さぶっても声をかけても、バイモンは起きる気配がなかった。

大輔はしよすがねえなつて溜息を吐き、バイモンを背におぶって太一達の下へ行く。

賢は未だに、両手を地面について項垂れ、真珠のような大粒の涙を零していた。

「ううっ……!」

「……賢」

泣き崩れるしかない弟に、治は背中を撫でてやるしかない。

ようやく進化を果たした、誰よりも仲良しだった友達と突然サヨナラをしてしまったのだ。

賢の第二のトラウマを刺激するには、十分であった。

「……………あ」

不意にミミが声を上げ、つられて子供達が上空を見上げる。

黒い羽が数枚、ひらひらと賢の目の前に舞い降りた。

ぴかっと光ってひと固まりになる。

卵。

『デジたまや』

テントモンが呟いた。

デジたま。デジモン達の卵。

エレキモンが世話をしていたデジモンの赤ちゃんが住む、始まりの街にいっぱいあった卵。

『……………きつとパタモンね』

『ああ……………また賢に逢うために、卵からもう一度やり直すんだ』

パルモンとガブモンが言った。

賢は恐る恐る卵を拾い上げた。耳をくつつけてみる。

微かに鼓動が聞こえた。

「つ……………うっ……………うう……………うわああああああああ

あああああああああああああああああああああああああああ

ん!!」

絶叫にも似た賢の悲鳴が、ファイル島中に響き渡った。

地平線の向こうから、朝日が昇ってきた。

おおきなたいりくのおはなし
僕らの疑問

季節は梅雨が明けて、日本中の空気が夏に彩られる頃のことだった。

もうすぐ夏休みだ、とはしゃぐ小学生の子ども達が、ずらりと並んだ集合住宅街の前の道を走っていく。

期末のテストが散々だった中学生の男の子が、両隣にいる友達に慰められている。

進路に悩んで、ベンチでぼんやりしている高校生の女の子がいる。学生最後の夏休みだから、何処か旅行にも行こうかなと考えている、就職が決まった大学生が歩いている。

買い物帰りの、主婦たちの井戸端会議。汗だくになっているサラリーマン。

いつもの日常を背景の一部としながら、彼女はベランダで洗濯物を干していた。

昨夜は熱帯夜に近い温度で、それでも若くてお金があまりない夫婦は節約のためにエアコンを28度に設定していたせいで、寝汗をかいてしまったシーツを、物干しざおにかける。

皺を伸ばして、綺麗に伸ばす。

うん、と満足げに頷き、彼女はまだ残っている洗濯物に手を伸ばした。

ゆったりとした風が吹いて、物干しざおにかけたシーツや、彼女のスカートがふわりと膨らむ。

開けっ放しにしていたベランダの窓の向こうから、ニュースキャスターの無機質な声が淡々と原稿を読み上げている。

そしてその声に不釣り合いな、可愛い声が聞こえてきた。

「はいはい、ママはいいですよ」

あーうー、と言葉にならない声に、彼女はくすりと笑いながら返事をした。

彼女の声を聞いて、可愛く笑う声。

1年近くほど前に彼女が生んだ、彼女の娘だ。

その日一緒に生まれた他の赤ちゃんよりも大きく生まれたその子は、初めての子ということもあって戸惑いの連続であった。

お腹が空いているのか、おむつを替えてほしいのか、どっちで泣いているのか分からなくて夫と2人で右往左往するのはしよつちゅうだったし、夜泣きが酷くて夫と交代しながらあやしたり、一たび泣けば家事の最中でも手を止めなければならぬしと、ひと時も気が抜けない。

赤ちゃんのお世話がこんなに大変だなんて、思わなかった。

しかしそれも、彼女にとっては倅せであった。

普通の家にも生まれた彼女は、決して高望みなどせず、普通の男性と結婚して、普通の倅せを築く。

あれが欲しいこれが欲しいと背伸びをして、上ばかり見てはいつか足元を掬われてしまう。

だからまっすぐ前を見て、時々辺りを見渡したり、ちよつとだけ後ろを振り返ってみたりするのがちよつといいのだ。

いつかは一軒家を買って、家族で住みたいなあというささやかな願いだって、「普通」の人なら誰だって抱く夢である。

夫は大手の出版会社で駆け出しの編集者をしており、いずれは海外へも足を運ぶこともあるかもしれないから、持ち家は無理かもしれないけれど。

「……よし、と」

最後に、自分のTシャツを干して洗濯は終了である。

物干しざおにかけられて、風に揺れている洗濯物を満足げに眺めた後、彼女は空になった洗濯籠を持って部屋に戻った。

ベビーサークルの中で、娘がお気に入りのおもちゃを振り回して遊んでいる。

うー、あー、とまだ言葉になっていない声を出して、機嫌がよさそうだった。

時々おもちゃを齧ったり、床に叩きつけたりして、だいぶ草臥れているおもちゃは、国民的アニメの主人公で、あんパンに命が宿ったヒーローのぬいぐるみである。

娘はそのアニメが大好きで、忙しい時に見せるときやあきやあともしゃぎながらテレビにかじりついてくれるから、いつも大変お世話になっております、と彼女は頭が上がらない。

時計を見る。長針と短針が重なって、12の数字を指し示していた。

そろそろ昼食の時間である。まずは娘の離乳食を用意しなければ、と彼女はキツチンへと向かう。

うー、あー、と娘はベビーサークルの隙間から手を伸ばして、キツチンにいる母親を見やる。

「今ご飯作ってあげるからねー。もう少し待っててねー」

娘がミルクから離乳食に切り替わってから数カ月ほど経つ。

最初こそ慣れなくて、娘が好きなものが何なのか分からなくて、毎日、いや、毎食試行錯誤だった。

なかなか食べてくれなくてぐずるならまだマシンな方で、火がついたように泣き叫んでフォークやスプーン、果てはまだ中身が入っている皿を掴んで投げられたことも多々あった。

夜泣きよりもこちらの方に心が折れそうになった。

今はだいぶ娘の好みも分かってきたので、手際よく離乳食を作ることが出来る。

鼻歌を歌う余裕も出てきて、家事も楽しむ余裕が出来てきた。

娘がもう少し大きくなって、自分のことが自分で出来るようになって、もう1人か2人ぐらい欲しいなあと彼女は笑った。

「……よし、と」

今日の娘の離乳食は、野菜たっぷりの十分粥である。

赤ちゃんにしては野菜を嫌がらないので、彼女としてはとても助かっている。

味見をして、ちゃんと娘の好みの味になっているかを確認した後、娘のために買った、ピンクの可愛い茶碗に粥をよそう。

いつかこのお茶碗が小さく感じて、お母さん新しいの買ってーなんて言う日が来るのだろうと思うと、嬉しいような寂しいような。

まだ1歳にもなっていない娘の将来の姿を思い浮かべては、一喜一憂するのもきつと「普通の倅せ」。

「はあい、ご飯ですよ〜」

彼女はニコニコしながらベビーサークルの中に入り、娘を抱き上げてベビーチェアに座らせる。

涎かけを首に巻いてやり、お茶碗を持てば娘は待ちわびていたように全身をばたばたさせた。

娘の目の前に座って、スプーンで粥を掬う。まだ少し熱いそれに息を優しく吹きかけ、冷ましてやる。

「はい、あーん」

自分の口を開けながら、娘の口元にスプーンを持っていく。

あー、と娘は母の真似をして口を開けた。

口の中にスプーンを持っていけば、ぱくりと口を閉ざして、スプーンに乗っていた粥を口の中に入れ、もごもごさせる。

美味しい？と聞けば、もう言葉が分かっているかのように、ニコリと笑いながらきやあとはいやいだ。

「今日はパパ早く帰ってこれるんだって。よかったねえ。パパ帰ってきたらいっぱい遊んでもらおうねえ」

何処にでもある、何処にでもいる、普通の親子の会話。

そしてそれが、彼女が見た娘の「最後」の笑顔であった。

空が晴れていく。闇が消えていく。

分厚い雲に覆われていたムゲンマウンテンの上空は、初めてここに来た時と同じ、沢山の色の絵の具がついた筆を振ったような、不思議な青空が広がっていた。

子ども達も、そして巨大化したデビモンを相手に奮闘したデジモン達も、それをぼんやりと眺めている。

異変は、それだけではない。

ふと、治が見上げていた空から視線を外して、海の方に向けた。

あ、と声を上げた治につられて、子ども達とデジモン達は海を見た。海の向こうから、小さな島々がムゲンマウンテンに向かってきたのだ。

あの小さな島々が、デビモンによって引き裂かれたファイル島の欠片だと気づいたのは、丈であった。

光子郎のパソコンからメールの受信音が聞こえたので、光子郎は我に返って背負っている鞆からパソコンを取り出し、メールを確認した。

メールの相手は、アンドロモンからだった。

ファイル島から闇を祓ったことに関する感謝と、ゲンナイに報告をしたいので、疲れているところ申し訳ないがアンドロモンがいる工場に今から来てほしい、と言った旨であった。

余韻に浸る暇さえないのか、と子ども達は苦笑するしかない。

だから光子郎に、もう少し休ませてくれと言うメールをアンドロモンに送ってもらい、子ども達は疲れているデジモン達を伴ってムゲンマウンテンを下山する。

体力と気力を限界まで振り絞ってデビモンと戦ったデジモン達は、もう歩くのも億劫だと言いたげにのろのろとした足取りではあったが、誰からも早くしろという文句は出てこなかった。

子ども達を守るために奮闘してくれたということもあるが、何より足取りが重い子どもが2人もいるのである。

1人は賢。彼は先の戦いでパートナーを失った。

強大な闇の力に飲まれたデビモンを「救う」ために、自らも強大な光の力を取り込み、子ども達を、そして最愛のパートナーである賢を守るために、エンジエモンは文字通り命を懸けたのである。

命を賭してデビモンを葬ったエンジエモンは、しかしすぐに賢の下へ新たな命として戻ってきた。

今は物言わぬ卵だが、腕に抱けば優しい温もりが伝わってくる。確かに、そこに命がある。

——本当に、死んでしまったのだと、改めて突きつけられた賢の尻に、再び涙の玉が浮かんでくる。

いつも一緒だったのに、隣にいて笑い合っていたのに、友達は何処にもいない。

心にぽっかりと穴が開いたようで、賢は誰に何を言われても上の空だった。

上級生達もそんな賢の心情を察して、腫物に触るような扱いしかなかった。

もう1人は大輔である。

意気消沈している賢とは裏腹に、半目になって誰よりも息を切らしていた。

無理もないだろう、大輔は今その背に自分とさほど身長が変わらないパートナーを背負っているのだ。

ずっしりとした重みは、眠っていて意識がないせいだろう。

耳元に聞こえてくる穏やかな寝息に、大輔は何度放り投げてやろうかと思ったほどだ。

だが自分のパートナーも、先ほどまで激戦を繰り広げていたのだ。

他のデジモン達が次々とリタイヤしていく中、エクスブイモンとグレイモンだけがデビモンに果敢に挑んでいったのだ。

今回ぐらいいいじゃない、と空に宥められたので、大輔は仕方なく深い眠りについてしまったブイモンを背負って、悪路をとつとこ歩いている。

そもそも他の先輩達に任せたくとも、誰かに触れられることを怖が

るブイモンでは無理な話だ。

ここを降りると言われた時、丈が代わりに背負おうとしてくれたが、途端に顔を真っ青にさせて斃されたのである。

眠っていて意識がないにもかかわらずだ。

こんな時にまで弱点が発生しなくてもいいのに、と愚痴りながらも、大輔は最後まで頑張ってくれたブイモンを背負って、上級生達の後ろを歩く。

そう言ったわけで、子ども達がようやくムゲンマウンテンを下山したのは、太陽が空のてっぺんに昇りきった頃だった。

光子郎はデジヴァイスとパソコンを起動させて、ゲンナイからもらったテントを取り出し、デジモン達を自分達のベッドにそれぞれ寝かせてやった。

一晩中起きていた子ども達も、ベッドに身を投げ出したい衝動に駆られているのだが、それは後だ。

まずは話し合わなければならぬことがある。

「……つつーわけで、第1回！全員参加の話し合いを始める！議長は俺！太一！」

「太一、眠いのか？」

話し合い、ということ子ども達はテントの中で円に並んで座る。

妙にテンションが高い太一に、治が苦笑しながら突っ込んだが、太一はそれを無視した。

太一達はゲンナイから頼まれた、ファイル島の闇を晴らすという訓練を見事とは言えないが突破することが出来た。

アンドロモンからも、ファイル島から闇が祓われたという連絡が来たので間違いないだろう。

それが終わったら、いよいよゲンナイと対面できるわけだが、まずは。

「ゲンナイさんに聞きたいことなどをまとめたいと思います。誰か、意見のある人はいませんか？」

太一により、光子郎は書記係に任命された。

みんなの意見を、パソコンでデータとしてまとめてもらうためだ。

吝かではないので、光子郎はパソコンのメモ帳機能を開いて、いつでも打ち込める準備をする。

真っ先に手を挙げたのは、治だった。

「やっぱり僕としては、これかな。 〱 という基準で僕達を選んだのか」

「まあ、気になるよね」

あの日、キャンプ場には太一達だけではない。

沢山の子どもがいたはずなのに、どうして選ばれたのが彼らだったのか。

しかも太一達の学校の生徒だけでなく、一般客も大勢いたのだ。

その中には、家族で来た子どももだっていた。

何故太一達だったのか。

何故太一達でなければならなかったのか。

いや、そもそも子どもでなければならなかったのか。

キャンプ場には子どもだけでなく大人だっていたのだ。

大人の方が戦力としては上のはずなのに、どうして非力な子どもを選んだのか。

最年少の大輔達ですら、すぐに気づく簡単な、しかしとても重要な疑問だ。

デジモン達が進化するために必要なものを、自分達はもっているとゲンナイは言っていた。

しかしそれで納得できるほど、治は単純ではない。

そして治が疑問に思ったことは、本当に大切なことなのだということを親友の太一も空も分かっている。

最年長の丈も、後輩の光子郎やミミ、そして最年少の大輔達だって。

治がおかしいと言ったら、本当におかしな、見落としてはいけない、ただで納得してはいけないものなのだ。

だからこれは最優先で聞かなければならない。

次に手を挙げたのは、空だった。

「デジタルワールドを巣食っている闇って、一体何なのかしらね？」

「ガブモン達を見ていれば分かるけれど、デジモン達は、僕達の想像や

理解をはるかに超えた力を持っている。そんなデジモン達ですら敵わなくて、異世界から僕らと呼ばなければならぬほどの敵が一体何なのか……これも最重要項目だね」

一同頷く。

身を守ることですらできないような、子どもの自分達を呼ぶに至るほどの敵とは、一体何なのだろうか。

デビモンをあんな化け物に変貌させてしまう「闇」とは、一体何なのか。

デビモンですらあんなに苦戦したのに、海に向こうには一体どんな強敵が待ち受けているのか。

光子郎は息を飲みながら、それをパソコンに打ち込んでいく。

「ミミ達はいつお家に帰れるの？闇を晴らしてほしいってゲンナイさんは言ってたけど、それってどのぐらいかかるの？パパやママ、きつと心配してる……もう1週間も経ってるはずだもの」

ミミが言った言葉に一同は、あ、と思い出したように声をだした。忘れていたわけでは、決してなかったのだ。

ただ次から次へと起きる出来事のせいで、頭の隅の方へ追いやられていただけだ。

そうだ、それも大切である。

自分達はいっ帰れるのか、光子郎はしつかりとパソコンに打ち込んだ。

「それも大切だけど、僕はもう少しこの世界のことを詳しく聞きたいな」

丈が口を開いて言ったのは、何よりも基本的なことであった。

確かに、デジヴァイスに記録として保存されていたゲンナイからは、この世界のことは大まかにしか聞いていない。

初日に披露してくれた治の推理を証明してくれたようなものだが、ファイル島の安全が確保できた今、きちんと詳細を教えてもらいたいものだ。

光子郎はそれもパソコンにちゃんとメモする。

「……次、大輔」

上級生達がある程度意見を出し切ったのを見た大輔が、珍しく控えめに手を上げる。

そのことに目を見張りながらも、太一は大輔を促した。

「えっと、ブイモンのこと、なんでですけど……」

「ブイモン？」

「はい、あの、ブイモンって俺やヒカリちゃん達以外に触られるの、すっげー嫌がりますよね？ゲンナイさんなら何か知ってるかなーって……」

「……確かに、ゲンナイさんの口ぶりだと、ガブモン達のことを何か知ってそうだったよね」

ガブモン達はゲンナイさんに見覚えはなかったみたいだけど、と治は言う。

子ども達のためにデジモン達を用意したと言ったような趣旨を言っていたのを、ちゃんと覚えていた。

アグモン達は、何故ブイモンが誰かに触れられることを怖がるのかわからないが、ゲンナイなら何か知っているかもしれない。

治は光子郎を見やり、このことも書き加えておくように目配せをした。

他に誰か意見はないのか、と太一達が見渡すが、シンと静まり返った空間を破る者は誰もいなかった。

「……これからどうなっちゃうのかな」

ぼつりと呟いたのは、ミミであった。

誰も何も発していない静かな空間では、ミミの小さな声も嫌に響いた。

ギクリ、と何人かの肩が震える。

濃厚で、陰湿なあの力は、デビモンを変貌させてしまうほどの強大な力だった。

そして子ども達は、その闇に成す術もなく倒れ、エンジェモンの命を犠牲にしてその戦いの終止符を打った。

デビモンを侵食していた闇は、どう見てもファイル島だけに巣食っていた量ではない。

ならばどうやってデビモンはあれだけの量の闇を集められたのか
どうしてデビモンはあんな風になつてしまったのか。

この世界にはまだ、闇が巣食っている。

ファイル島から闇を祓ったら、次はファイル島が浮かぶ海の向こう、遠くの地へ行かなければならない。

この世界を守護する光を司つたデジモン達ですら敵わなかった、強敵を倒すために。

子ども達全員で力を合わせてもデビモンに敵わなかったのに、エンジエモンが命をかけてようやくデビモンを倒せたのに、海の向こうで手ぐすねを引いて待っているデジモン達は、どれほど強いのか。

そしてそんなデジモンに、子ども達だけで勝てるのだろうか。

「……それでも」

静まり返つた空間に、嫌に響いたのは太一の声だった。

「帰るためには、前に進むしか道は残されてねえんだ」

「太一……」

「勘違いするなよ？俺だつて本当は戦いなんざしたくねえ。誰が好き好んで戦争なんざするか」

前しか見えていない少年が、きつぱりとそう言い切つた。

「けど、やだやだつて駄々こねたところで、ゲンナイさんがあつさり帰してくれると思うか？」

「……確かに、あつさりと帰してくれるぐらいなら、最初から強制連行はしないよな」

丈が溜息を吐きながら太一の言葉に賛同する。

ここに連れてこられる前に、ゲンナイの方からこの世界に渦巻いている強大な闇についての説明があつたのなら、まだ心構えは違つたであらうに。

「だからさ、そこら辺も含めてゲンナイのおっさん、とつちめてやろうぜ。いくらでも罵倒していいつつつてたんだし」

にしし、と太一は歯をむき出しにして、いたずらっ子のように笑う。

そうだ、ここで子ども達だけであーでもないこーでもないと話し合つても仕方がない。

まだ見ぬ敵に対して、見えない帰路について頭を悩ませて仕方がない。

全てはゲンナイに逢って、話を聞いてからだ。

この世界を、そして自分達の世界を救うとみんなで決めたのだ。

もう戻ることはできない。

「……とりあえず、こんなところでしようか」

「今最優先で聞きたいのは、これぐらいだな」

全てを打ち込み終わった光子郎は、太一と治を見やる。

頷く太一と、答える治。

さて、と太一は立ち上がった。

「……もう行くのか？」

幾ら猪突猛進だからと言って、流石に急かしすぎではないだろうか。

立ち上がった太一を訝しむ治に、太一は、んなわけあるかとぶつきらぼうに返した。

「アグモン達もまだ寝てんだぞ？俺だって流石に疲れたよ。一晚だぞ、一晚？俺達も仮眠しようぜ」

「ああ、よかった。うんって言ってたら、殴り合いしてでも止めなきやって思ってたところだったんだ」

「ほっと一息吐きながら、何で右の拳握ってるんだい？」

ぶん殴る数秒前と言った体勢の治に、すかさず突っ込む丈だったが、治が笑顔のまま丈の方を振り向いたので、顔を逸らすしかなかった。

ピロン、と光子郎のパソコンの電子音が鳴り響く。

アンドロモンから、いつ頃来られるかというメールが来たようだった。

仮眠してから向かう、という旨を打ち込み、光子郎もさっさと着替えて自分のベッドに潜り込む。

自分達の世界にいた頃、世界中にメル友がいた光子郎は、母親が注意するのも聞かずに、夜遅くまでメールをする日々が続いていたのだが、今回の徹夜は何故かどっと疲れてしまった。

メールをするために夜更かししているのとは違う神経を使ったからだろうか。

ボスン、とベッドに身を投げると、先に寝ていたテントモンの身体が振動で小さく揺れる。

それでも起きる気配はなく、口元をむにやむにやさせながら寝言を言い放った。

『うくん、コウシロウはん、それ、ワテの、おやつ……』

「はは……起きたらご飯食べようか……お休み……」

そう言うとき光子郎は物の数秒で深い眠りについていた。

光子郎が泥のように寝入ったのをきっかけのように、男子も次々とベッドに潜り込んでいく。

女子も男子のテントを出て、自分達のテントへと向かおうとした。

「……あれ、ヒカリちゃん？どうしたの？」

「………へ？」

立ち上がり、空の後を追うように大きく欠伸をしながらテントを出ていこうとしたミミが、何気なく後ろを振り返ると未だに座り込んでいるヒカリの姿を捉えた。

不思議に思って声をかけると、ヒカリは大袈裟に肩を跳ねさせて、ミミの方を振り返る。

……そう言えば、話し合いの間、ヒカリはずっとだんまりだった。

「もうお話し合い、終わったわよ。アンドロモンのところに行く前に、少し仮眠するんだって。ヒカリちゃんも眠いでしょ？少しでもいいから寝ましょ」

「は、はい……」

わたわたと立ち上がって、ヒカリはテントを出る。

直後に、大きな欠伸。

もしかして、お話し合いに参加しなかったのは、すっごく眠たかったからなのかも、とミミは思う。

最年少達が参加している手前、ミミも眠いのを我慢していたのだが、彼女だって何度か船を漕ぎかけたのだから、ヒカリが平気なはずがない。

気づけなくて悪かったかなあ、と思い、ミミはヒカリの後ろを歩いて自分達のテントに向かった。

ヒカリの顔が真っ青になっている理由など、つゆ知らず。

爆音と、轟音。

ぶわりと舞い上がる風に混ざって、崩れた瓦礫の砂埃が、目や鼻や口に入り込んで、激しく咳き込む。

崩れていく、周りの見慣れた景色。

お母さんと手を繋いで歩いた歩道橋、お兄ちゃんと一緒に向かった公園への道。

立ち並んだ街路樹も、夜になると等間隔で道を照らしてくれる街灯も、お兄ちゃんと半分こしたジュースを買った自販機も、何も通っていない車道が無機質に点滅している信号機も。

全てが目の前でひっくり返される。崩れていく。

ピーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

………

ホイツスルの音。

春の肌寒い夜空と、立ち並ぶコンクリートジャングルに反響する。手を伸ばしても届かない、遥か彼方の空へと音が吸い込まれて消えてしまった後。

目の前の崩れた瓦礫が突如として盛り上がり、弾けるように飛び散った。

がらがら、大きな音。
中から現れたのは、茶色い兜を被ったオレンジ色の恐竜だった。
響き渡る咆哮で、空気がびりびりと震え、風が生み出される。
男の子と見間違えられるほどに短く切られた髪が、乱暴に靡いた。
大きく咆哮したオレンジ色の恐竜は、身体に乗っている瓦礫を振り
下ろした後、そのまま大きく開けた口にエネルギーを収集し始めた。
熱い風。

——撃て

誰かが、言った。

轟っ

勢いよく発射されたのは、青白い炎の光線。
口から真つすぐ吐き出された炎は、やがて辺りを包み込み……。

そこで、ヒカリは目が覚めた。
赤に近い茶色の瞳は小刻みに揺れ、瞳孔が開かれている。
全身に変な力が入ってぶるぶると震えた。荒い呼吸が、静寂なテ
ントに嫌に響いた。

「……………」
自分が今何処にいるのか思い出したヒカリは、荒くなつた呼吸を抑
えようと深呼吸を繰り返す。

数分かかって落ち着いたヒカリは、ゆつくりと上半身を起こした。
隣を見る。プロットモンが熟睡していた。

ヒカリを護るために進化を果たして、一晩中デビモンと死闘を繰り
広げたために、酷く疲労したのだろう。

ヒカリが身じろぎをしても起きる気配がなかった。

辺りを見渡すと、空とピヨモン、ミミとパルモンがまだ眠っているのが見えた。

沢山寝た気がするけれど、時間的には1時間も過ぎていない。

「……………」

息を吐く。もう一度ベッドに寝転がる。

二度寝する気にはなれなかったが、ぼんやりと1人起きているのも嫌だった。

起きる前に見た夢を、鮮明に覚えているからだ。

耳の奥に、夢の中の光景だったはずの爆音が繰り返し再生される。

ヒカリは呼吸をするのも忘れて、目を閉じ耳を塞ぎ、頭から布団を被った。

どうしてだか分からないが、とても怖い。

記憶にないはずなのに、まるでビデオのように色鮮やかに再生されるのである。

どうして、どうして。

大輔がエクスブイモンを起こすために、ホイッスルを思いつきり吹いてから、ヒカリの脳内に夢の光景が何度も再生されているのだ。

ヒカリがずっと黙っていたのは、そのせいだった。

どうしてあんな悲惨な光景が突然頭に浮かんだのかは分からない。

けれどあれは、テレビで見た映像などでは決してなかった。

だって、あれは、間違いでなければ……。

「あれは……グレイモン……?」

記憶の中にいたあの「恐竜」を、見間違えるはずがない。

あれは、間違いなくグレイモンだ。

茶色いヘルメットに、青い線のコントラストが入ったオレンジのボディの恐竜。

兄である太一のパートナーのアグモンが進化した、あのグレイモンである。

でもあんな風に、グレイモンが暴れている姿は見たことがない。

いや、そもそも「あそこ」は何処なのだろうか。

崩れた歩道橋とか挟まれたアスファルトとか、壊れた信号機や自販機

を見るに、あれはヒカリ達の世界の出来事のはずだ。

ならばグレイモンがいるはずがない。

グレイモンはこの世界の生き物なのだ。

この世界に来て、初めて出会ったはずなのだ。

……それでも、ヒカリは夢の中の光景をただの夢と否定することが出来なかった。

ゲンナイと言う青年

《こうして、対面するのは初めてだね》

モニターの向こうに映るのは、この工場に来た時に見た青年。

人の良さそうな微笑みを浮かべ、モニターの前に並んでいる子ども達を1人1人確認するように眺めているところを見ると、間違いなくリアルタイムの映像だ。

一方的に世界を救ってほしいとお願いしてきた、デジヴァイスに録画されたものではない。

やっと手探り状態から解放される、という安堵と共に……突然連れてこられた混乱による怒りを思い出す。

聞きたいことは、沢山あった。

沢山ありすぎて、何から聞けばいいのか分からなくて、まず口を開いた太一の喉から飛び出してきたのは、

「ふざけんなよ、おっさんー！」

であった。

太陽が天辺に昇った頃に、示し合わせたように同時に目を覚ました子ども達が次に行ったのは、空腹を満たすことだった。

特にデジモン達は巨大化したデビモンを倒すために、一晩中成熟期の姿を保って、フルパワーで挑んでいたために、胃の中は空っぽであつた。

進化をするとエネルギーを補充するために、いつもより更に空腹を覚えたデジモン達は、体力はある程度回復したが動き回る気力はなかつた。

子ども達もお腹は空いていたから動くのは億劫だったのだが、早い

ところアンドロモンの工場に行きたいので仕方なく食べ物を集めようとした時である。

最初に気づいたのは、プロットモンだった。

眠いのと空腹の中、何気なく子ども達を見回して、足りないことに気づいた。

誰がいないんだろう、と順番に名前を心の中で呟き……自分の親友とそのパートナーがいなかった。

まだ寝ているのかしらん？って不思議に思ったプロットモンがヒカリに尋ねると、若干反応がおかしかったもののすぐに我に返って同じように辺りを見渡し、大輔とブイモンがいないうことに気づいた。

このままだどご飯を食いつぶぐれてしまうことを心配したヒカリが、兄にそのことを告げると太一も気づいていなかったようだった。

まだ寝ているのかと思った太一がテントに戻ると、ベッドの傍らで何やら喚いている大輔の姿があった。

パニックになっているのか、英語で何やら捲し立てており、これはただ事ではないと悟った太一と治が大輔に駆け寄り、何とか落ち着かせて話を聞き出すと、幾らブイモンに呼びかけても、返事をしないどころか全く起きる気配がないのだという。

どういうことだ、と思って太一と治がブイモンに声をかけてみるが、ブイモンの瞼は固く閉ざされたままで、その赤い瞳が顔を覗かせることはなかった。

こんなことなかったのに、と大輔は困惑していた。

確かに今までは大輔が声をかければ寝ぼけながらも普通に起き上がっていたし、別段寝起きが悪いわけでもない。

昨日の戦いでは、太一達と合流するために、初めての進化であるにも関わらずほぼまる1日その姿を保ち、更に一晩中デビモンとの激闘を強いられていた。

それはプロットモンも同じ条件だが、プロットモンが進化したティルモンは、成長期のブイモンよりも姿が小さかったために、その姿を保つためのエネルギーも他のデジモン達より消費するのが少なく済

んだからだろうか、若干眠そうにしてはいるものの、アグモン達と同じように起きている。

力を使い果たしてしまったエンジェモンことパタモンは、卵になっているため除外だ。

戦闘が終わると泥のように眠りについてしまったのは、ブイモンだけだ。

そもそもデジモン達は進化をすると消耗したエネルギーを回復させるために、いつもより空腹になる傾向がある。

食いしん坊のアグモンが初めての進化を果たした後、全員が引くほどに大量の果物を摂取していたし、他のデジモン達もそうだった。

ブイモンもアグモンと同じぐらい食いしん坊だから、子ども達が何往復もして果物を集めなければならぬことを覚悟していたのだが、そのブイモンは眠りについたまま起きる気配がない。

大量の食べ物を探しに行かずに済むかもしれない、ということにおいては胸を撫で下ろしたが、幾ら呼びかけても起きないのは確かに心配だ。

それにこれからアンドロモンの工場に行くために、長い距離を歩かなければならない。

ブイモンは大輔とヒカリと賢以外の者が触れようとするかと怯えてしまうから、このまま目覚めなければ大輔に負担がかかる。

だがこのままではテントを片付けられないので、ひとまずテントから出るように大輔を促した。

まずは腹ごしらえをしなければ。その間にブイモンが起きることを願うしかない。

治にそう言われた大輔が四苦八苦しながらブイモンを背負うのを、歯がゆく見守り、何とかおんぶ出来たところでテントの外に出た。

外で待機していた他の子ども達にも、ブイモンが目覚まさない旨を伝えれば、同じように困惑していた。

アンドロモンの工場は子ども達がいる場所から、ムゲンマウンテンを挟んで反対側にある。

大輔が何度呼びかけても起きる気配がないブイモンを、小さな彼が

背負って行かなければならないから確実に足は遅くなる。

ゲンナイとアンドロモンには申し訳ないが、そちらの都合で子ども達は今日まで振り回されることになったのだから、これぐらいは許容してほしい、ということは何重ものオブラートに包んで光子郎がアンドロモンにメールをしたら、数秒後に返事が返ってきた。

そのことを不思議に思いながらも、光子郎は返ってきたメールの文章を読む。

アンドロモンから返ってきたのは、迎えに行くから待機してほしいという一文だけの簡潔なメールであった。

アンドロモンが迎えに来てくれる、ということなのだろうか。

不思議に思いながらも待機していたら、30分後に迎えに来てくれたのは、光子郎のパソコンの中にデータとして入っているのと同じ、ガードロモンの大群がやってきた。

アンドロモンの工場から迎えに来たのだろうか、と思い太一が臆せず話しかけたが、ガードロモンは何も答えることはなかった。

基本的にマシン型のデジモンには自我はなく、ただプログラムされたことを熟していくだけなのだという。

アンドロモンのように自我を持ったマシン型は稀なのだそうだ。

子ども達の数だけ迎えに来たガードロモンは、子ども達とデジモン達に手を差し伸べた。

ガードロモンには搭乗できる箇所がないので、ガードロモンの手に乗れと言うことだろうか。

互いに顔を見合わせ、しかし確かにマシン型であるガードロモンなら疲れることなく、休憩をとる必要もなく、アンドロモンの工場に着くかもしれないと思い、四苦八苦しながら全員アンドロモンの手に乗ると、ガードロモンは背中エンジンを点火し、再び上昇し来た道を引き返した。

「俺達はサマーキャンプに来ただけだったんだっつもの！そしたら急に

雪が降ってきて、みんなとはぐれるわ、空からこの訳分からん機械が降ってきて、変なところに来ちゃうわ、何でか知らんがアグモン達は俺達のこと知ってるわ、色んなデジモンに追っかけられるわ襲われるわ、もういい加減にしろよ!!」

モニターの向こうの青年に、一気に捲し立てた太一は、肩を怒らせ、上下させながらせえせえと息を吐く。

本当はもつと言ってやりたかったのだが、言いたいことがありすぎて1つにまとめきれなかったようだ。

子ども達は何と言っていいのか分からないという表情を浮かべながら、太一を見ることしか出来なかった。

《……突然連れてきてしまったことに関しては、本当に申し訳ないと思っている。すまなかった。私が頭を下げるだけで許されるはずがないと分かっているが……この通りだ》

画面の向こうにいるゲンナイは、唇を噛みしめ、震える声で謝罪しながら、頭を下げる。

彼の言う通り、頭を下げられた程度で子ども達の怒りは収まらないし、もつと言いたいことはあるけれども。

「……貴方を責めても、何にもならないのは、子どもの僕らでも分かります。帰りたくとも、この世界を救うまでは帰れないのでしょうか？」
頭を下げたゲンナイを困惑しながら眺めていた子ども達だったが、やがて治が口を開いた。

現実を誰よりも見据えていた、冷静な天才少年の口から出てきた言葉に、ゲンナイは徐に頭を上げて気まずそうに頷く。

「……ならもういいです。僕達が泣いても叫んでも、この世界を救うまで帰れないのなら、それを受け入れる以外もう僕達に道はありませんから」

《……ありがとう》

治の言葉に、ゲンナイは再び頭を下げる。

もつと言いたいことはあったけれど、治の言う通りここでゲンナイを責めてもどうにもならないのだ。

前に進むしか、子ども達に残された道はないのである。

やるべきことは、まだあるのだ。

次に進むために、ゲンナイはモニターの向こうの子ども達を見渡す。

「……さて、遅くなってしまったが、礼を言わなければならぬ。ありがとう、子ども達。ファイル島を救ってくれて」

「死ぬかと思ったけどな」

まだちよつと怒りが収まっていないらしい太一が、皮肉交じりにそう言っただけで、ゲンナイは苦笑する。

「それに関しては、本当に申し訳ないと思っっているよ。アンドロモンから聞いた。デビモンは、私が予想していた以上に、闇の力に飲み込まれていたらしいね……こればかりは、私のサポート不足だ」

「それに関してはもういいですよ。貴方を責めても仕方ありませんし……」

ただ、と空は目を伏せる。

空の言いたいことが何なのか、子ども達はすぐに察した。

「……私達、この世界のこと、何も知りません。ゲンナイさんがデジタルワールドにしてくれた動画のお陰で、ここが私達の世界とは違う、ピンとこないというか……ちゃんと教えてほしいんです」

アンドロモンの工場に来る前、仮眠する前に子ども達はみんなで話し合った。

聞きたいことが、聞かなければならないことが沢山あった。

子ども達が真剣な表情で見つめてくることに、ゲンナイも何も言わず小さく頷いた。

まずは、治が口を開いた。

「とても大事で、僕ら全員が共通して疑問に思っていることです。ゲンナイさん、どうして僕らだったんですか？」

何よりも最優先して、聞きたいこと。子ども達の、誰もが聞きたいと思っただけのこと。

どうしてゲンナイは、自分達を選んだのか。

あの日キャンプ場には、太一達以外の子ども達がいた。

子ども会でキャンプ場に来ていただけではない、あのキャンプ場には家族だつて何組かいたのだ。

ということとは、無作為に選んだわけではないはずである。

ふむ、とゲンナイは顎に指をかけて一瞬考える素振りを見せた。

《そうだね、ここで言えることは……君達が持っている『想いの力』がとても強い、ということだろう》

「『想いの力』？」

《そう、人間なら誰でも持っている、『想いの力』。即ち、『心』だ。この世界では情報が形や力となつて、デジモン達は進化する。デジヴァイスに記録していた録画でも言ったと思うが、通常デジモン達は長い年月をかけて進化するものだが、君達のパートナーであるアグモン達は、ちよつと特別なんだ。デジヴァイスから君達の強い想いを力として変換させることで、デジモン達は進化が出来るんだが……そうだな、例えば、君達の身に危険が及んだ時なんか分かりやすいだろう》

ゲンナイにそう言われた子ども達は、デジモン達が初めて進化した時のことを思い出す。

初っ端からクワガーマンと言う狂暴な昆虫型のデジモンに襲われた時、幼年期だつたデジモン達は、成長期へと進化を果たした。

守る力もなく、逃げることもしか出来なかつたデジモン達は、子ども達に迫つた危険によつて力を得た。

死にたくない、生きて帰りたい。それが、『想い』となり、力となつたということだ。

だがデジモン達が進化するために必要な『想いの力』は膨大で、誰でもいいというわけではない。

ここにいる9人は、その『想いの力』が他の子ども達に比べてとても強いから選ばれたのだと、ゲンナイは言う。

「……『想いの力』かあ」

「そう言われても、ね……」

疑問だつた理由を答えてもらったが、子ども達はいまいちピンと来ていない様子だつた。

「想いの力」が強いと言われても、自分達にはよく分からないものだ。

確かにデジモン達が初めて進化をした際、死にたくないとか助けてとか、そういうことを思ったかもしれないが、あの時は無我夢中だったのでよく覚えていない。

それに、と治は眉を顰める。

賢い治は、聞き逃さなかった。聞き流さなかった。

ゲンナイは「ここで言えることは」、と言っていた。それは即ち、ここで言えないことがある、という意味に他ならないだろう。

「想いの力」が強いというだけで自分達が選ばれたとは思えない。ではその「想いの力」が他の子ども達よりも強い、ということはどうやって調べたのだろうか。

太一や空、ミミヤや下級生達はピンと来てはいなくともそれで納得していたようだが、自分はそうではない。

治だけではなく、丈や光子郎も同じことを思っていたようで、治と同じように眉を顰めてゲンナイを見ていた。

ちらり、と光子郎が治を見てきたので、治は小さく首を振る。

それから丈の方を見やって、同じように首を振った。

何か言いたげではあったが、2人は口を閉ざす。

——今は、言及すべきではない。

ゲンナイがこの場で何も言わないと言うのなら、今は言うべきではない、または言うてはいけなないと判断したからだろう。

そして、「ここで言えることは」という言葉には、「いずれは言うが、今は言えない」という意味も含まれている。

子ども達は今、頼れるものが何もなく暗闇の中を手探りで進んでいるような状態である。

現時点で子ども達をサポートしてくれるのはゲンナイしかいないので、その言葉を信じるしかなかった。

……聞かなければならないことは、まだある。

「次の質問です。この世界を巣食っているという闇とは、何ですか？」
「デビモンの奴、その闇を使って俺達のことを消そうとしてたけど、最

後にはおかしくなつてたんだぜ？」

「ピヨモン達が総出で向かつて、全然敵わなかった……でもこの先デビモンよりもっと強いデジモンと戦わなきゃいけないんなら、今の私達じゃ力不足です」

治、太一、空の順番で発言する。

この世界を覆いつくさんとしている闇を祓うのが子ども達の成すべきことと言うのは理解したが、その闇とは一体何なのか。

どうやって生まれたのか。いつからその闇が世界を侵食していったのか。

敵の正体が分からないまま進んでいくのは危険だ。

闇を取り込みすぎて、変貌してしまつたデビモンにすら敵わなかつたのに。

《……実は、正体と言うか、黒幕と言うか……闇よりも陰湿で濃厚な、嫌なものだということは分かっているんだが、正体はつきりとしていないんだ》

「おいー！」

ゲンナイの返答を聞いて、太一はすかさず突っ込んだ。

闇から世界を救つてほしいと助けを求めておきながら、その闇の正体が分からないなんて、そんなのありか。

太一がわなわなと肩を震わせながら更に突っ込もうとしたら、ゲンナイに宥められた。

《済まない。私のような存在は、今私しか残っていないんだ》

「え……？」

《元々私のような存在は、沢山いたんだ。君達を迎えるために、君達をサポートするために。しかしある時、闇に影響されたデジモンに襲われて、私以外の全てが全滅してしまつた……それ以来、私が1人で全員分の仕事を抱えているんだ》

最優先でやらなければならないのが、選ばれし子ども達を迎えることで、その準備も複数人で行っていたために、他に手が回らなかったらしい。

敵の正体を探るのは、雇つたり味方になつてもらつたりしたデジモ

ンに探ってもらっている最中なのだという。

《大元の正体は、まだ分からない。だがその闇のおこぼれを頂戴して、どさくさに紛れて世界を自分のものにしてしようとしている者もいる。本来なら光の守護者によって粛清されるんだが……大元の闇と対峙した際に、力及ばず封印されてしまったんだ。そちらのこともあるし、私1人ではなかなか手が回らなくてね……》

「……誰もいないの？1人も？ゲンナイさん、1人ぼっち？」

デジたまを大事に抱えた賢が、ゲンナイに問う。

たった1人で、沢山のことを熟さなければならぬのに、こうして自分達のために時間を取ってくれている。

心配した賢に、しかしゲンナイは穏やかな笑みを返した。

《……確かに私は1人ぼっちだ。だが孤独ひとりではない。私と共に、この世界を救うべく奔走してくれている仲間達がいる。もちろん、君達もだ》

沢山いた仲間もういない。それでも、ゲンナイはこの世界を救うために、そして子ども達を助けるためにたった1人でも頑張り続けるという。

《そりゃね、大変さ。沢山いた仲間達の分まで走り回らなきゃいけない。でもそれは君達も同じだ。君達に全てを押し付けてしまったのに、私が弱音を吐くわけにはいかない》

隣り合っていないながら生涯交わることのない世界を救うために、何の説明もせず、この世界に放り出す形で、別の世界から子ども達を連れてきたという負い目もある。

自分達の手で解決できず、他の世界から無理やり連れてきた子ども達のためにも、ゲンナイは走り続けなければいけないのだ。

「……分かりました。でも無理はしないでください」

元凶の正体は分からなくとも、元凶を利用しようとする存在がいることは分かった。

次に戦わなければならないのは、そいつらだ。

治は自分達のために頑張っているというゲンナイを信じて、そう返した。

ありがとう、とゲンナイは微笑む。

《さて、空。君の質問なんだが、それは後ほど伝えることと関連しているから、それに合わせて答えるよ。何か他に聞きたいことはあるかい？》

はい、とミミが手を上げる。

「あのね、私達ここに来てもう1週間近く経ってるでしょ？パパやママ達、きつと心配してると思うんだけど……」

《ああ、そうだった。そのことについて言うのを忘れていたよ》

すまない、と苦笑しながらゲンナイは謝罪した。

《それなら心配はいらないよ。この世界と君達の世界では時間の流れ方が違うんだ》

「時間の流れ方が違う……？」

「どういうことですか？」

《君達の世界と比べると、この世界は時間の流れが速いんだ。だからこっちでは1週間経っているけれど、向こうでは殆ど時間は変わっていないよ》

「そ、そうなんですか!？」

こちらの世界に突如連れてこられてから、1週間以上経過している。

自分達の世界に帰るために彼方此方駆けずり回って、色んなデジモンに襲われて追いかけられて、最後の方では強大な力で変貌してしまったデビモンと対峙して、何度も死にそうになっていたから、普段は考えないようにしていたが、いつも心の隅でちらついていた。

その間、サマーキャンプはどうなったのか、行方不明になってしまった子ども達を探し回って、先生や保護者は奔走しているのでは、家族は死ぬほど心配しているのでは。

もしも無事に帰れた時に、親に何と言いつきをすればいいのか。そもそもこの世界を救うのに、どれだけの時間がかかるのか。それによって、自分達はいつ帰れるのか。

デビモンとの最終決戦が終わって、緊張の糸が切れた子ども達はだんだん冷静になってきて、そんな恐ろしいことばかり考えてしまっ

いた。

しかしゲンナイの話聞いた子ども達は、見るからに安堵する。ゲンナイの話が本当なら、自分達がいなくなったことに関して誰も気づいていないし、家族が心配しているということもない。

家族が心配することを気に揉みながら、いつ帰れるのかと気にしながら旅をする必要もない。

「それを聞いて安心したぜ」

「何言ってるのよ、太一！確かに私達の世界のことは気にしなくてもいいかもしれないけど、この世界が危ないことに変わりはないのよ？」

呑気に安堵する太一だったが、空がすかさず一喝する。

闇は子ども達の都合など知ったことではない、じわりじわりと侵食の手を緩めず、少しずつ、しかし確実に世界を蝕んでいる。

他の世界から人間を連れてこなければならぬほどに、この世界は今危機的状況にあるのだ。

悠長に構えている暇などない。

それに、と光子郎が恐ろしいことに気づいてしまった。

「……あの、ゲンナイさん。幾ら僕達の世界では時間がそれほど流れていなくとも、僕らが今いるのは、こっちの世界です。この世界の住人でなくとも、時間は進んだままなら……」

「?どうしたの、光子郎くん?顔真っ青よ?」

「……あ、あ、あー……そういうことか……」

ミミがキョトンとしながら真っ青通り越して真っ白になっている光子郎を指摘すると、丈は光子郎の言いたいことを理解したようだ。

光子郎とほぼ同時にそのことに気づいていた治が、分かっているさそうな他の子ども達に分かりやすく説明してくれる。

「あーつまり、僕らの世界は殆ど時間は流れていないけれど、こっちは普通に流れてるわけだろ?僕らは別の世界の人間でも、時間が流れている世界にいる以上、身体の成長は止められないわけだ」

「……あ」

「……つまり何が言いたいんだよ?」

空はそれで理解したようだが、太一とミミ、それから最年少達はまだよく分かっているようだ。

最年少は仕方がないにしても（賢も賢いとは言え、今はパタモンを失ったショックでいつもの理解力は何処かへ行ってしまったようだった）、太一とミミはそろそろ物分かりが良くなってもいいのではないだろうか。

空や光子郎、丈は呆れかえっているが、それでも治は見捨てることも見放すこともせず、根気よく2人に説明してやる。

「時間が流れているこの世界で過ごしていれば、身体は必ず成長する。太一だって小学4年の時と比べたら身長は伸びただろう？」

「当たり前じゃんか」

「だろう？こつちの世界で時間が過ぎれば過ぎるほど、僕らは当然成長する。身長だけじゃなく、髪だって伸びる。ここで長く過ごせば過ごすほど……」

「……つまり何が言いたいんだよ？」

「……だからな？向こうでは殆ど時間が過ぎていないのに、こつちで沢山の時間を過ごして成長した僕らを見たら、家族や友達は何て言うと思う？」

根気よく説明してやったお陰で、太一もミミもようやく理解してくれた。

最年少達はいまいち分かっていたいなかったようだが、それは後でもう1度説明するとして、ともかくその疑問は解消しなければならない。

全員が一斉に、ゲンナイに眼差しを向けると、ゲンナイはまたも苦笑していた。

《……それに関しても、大丈夫だよ。心配しなくていい》

「……時間が過ぎても身体が成長しない、という解釈でいいんですか？」

《うん、まあ、そういうことだ。詳しく話すと長くなるし、きっと今の君達ではまだ理解できないだろうから、原理などに関してはとりあえず無視してくれ》

「……そうですね」

さりげなく太一やミミ、最年少達に目を向けているから、ゲンナイが言わんとしていることを理解した治は半目で彼らを見やった。

先ほどの会話で、色々と察したのだろう。

「あの、僕はこの世界についてももう少し詳しく教えてほしいんですけど……」

丈がおおずと手を挙げる。

この世界を救うにあたって、この世界のことをもつとよく知りたいと思うのは当然だろう。

先ほどまでの質問のように、ゲンナイはすぐに答えてくれると思うのだが……。

《……それはどういう意味でだい？》

「え？」

《詳しく知りたいと言うのは、この世界の地形や地理についてかい？それとも、歴史についてかい？》

「……えーと」

まさかそんな質問が返ってくるとは思わず、子ども達は困惑する。異世界のものとして当然の質問をしただけなのに、どうしてゲンナイはそんなことを聞いてきたのだろうか。

子ども達が互いに顔を見合わせているから、ゲンナイも慌てて謝罪した。

《済まない。少々意地の悪い質問の返し方だったね。ただこの世界の歴史を知りたいという意味だったのなら、長くなってここでは話すことが出来ないから……》

「ああ、そういうことですか……」

委縮していた丈だったが、そういう意味だったと知って丈は肩の力を抜く。

丈や治、光子郎としてはデジタルワールドの歴史と言うのがすごく気になるが、3人の脳内に浮かんでいる人物達が恐らくと言うか確実に飽きることは目に見えていたので、勉強の時間はゲンナイに逢った時にでもしよう、ということになった。

「では、この世界の全体図のようなものはもらえますか？」

《もちろんだ。アンドロモンに、既にデータは渡しているから、後で受け取るといい。どんなデジモンが住んでいるのか、何処に何があるのかも大まかだが記してある。書き込みも出来るから、有効に活用してくれ》

ありがとうございます！という光子郎の嬉しそうな声が、広い広い管理人室にやけに響いた。

「……………」

「……大輔、ほら。お前も聞きたいことあるんだろ？」

上級生達に隠れるように控えていた最年少3人のうちの1人が、いつ前に出ようかと悩んでいた。

自分も、ゲンナイに聞きたいことがある。

でも上級生達がムツカシイことをゲンナイに尋ねていて、ムツカシイ話し合いをしていたから、いつ入っていいのか分からなくて立ち往生している形になっていた。

どうしよう、と手持ち無沙汰にぼんやりと先輩達のやり取りを聞いていたら、太一が気づいて前が出るように促してくれた。

《こんにちは》

「こ、こんにちは……………」

委縮してしまっている大輔の緊張をほぐすように、ゲンナイは柔らかい微笑みを浮かべる。

そのことで、少しだけ肩の力が抜けた大輔に、ゲンナイは尋ねた。

《君は何が聞きたいのかな？》

「…………えっと」

いつもの元気はどこへやら、おずおずとした様子で前に出た。

ここに来る前に大輔がゲンナイに尋ねたいと上級生達に言っていたことは、どうしてブイモンは触られることを嫌がり、恐がるのか。

不思議で不思議でしょうがなかったから、もしゲンナイが知っているのなら知りたかったけれど、それよりも。

「…………あの、実は…………ブイモン、起きないんです」

大輔の質問に、ゲンナイだけでなく他の子ども達も虚を突かれたような表情を浮かべた。

《……どういふことだい？ ブイモンがどうかしたのかい？》

「あの、えっと、デビモンのこと倒した後に、ブイモン、眠いつて言つてそのまま寝ちゃったんですけど、その、他のデジモン達もそうだったんですけど、でもブイモンだけ起きなくて……」

《……ん？》

言いたいことが頭の中でまとまり切れていないのか、言葉がぐちゃぐちゃで支離滅裂になっている大輔に、ゲンナイも困惑してしまっている。

治が慌てて助け船を出して説明してくれた。

ここに来る前に仮眠を取っていたのだが、ブイモンは仮眠が終わってゲンナイのところに行こうと言う時になっても起きなかったのだ。

大輔が何度呼びかけてもゆすつても、大声を出してもブイモンが起きる気配はなく、そうこうしているうちにアンドロモンが寄越してきた迎えが来てしまったので、そのまま工場に来た。

工場に着いても、ブイモンが目を覚ますことはなく、未だに眠り続けている。

他のデジモン達もまだ疲れが抜けきっていないようで、部屋の隅の方でぼんやりとしているのだが、ちゃんと起きている。

眠っているのはブイモンだけだ。

そういうと、ゲンナイは頭をかいて困ったような表情を浮かべた。

《うーん……何故だろう……？ 済まない、私も思い当たることが見つからないな……通常デジモンは進化をすると大量のエネルギーを消費するから、そのエネルギーを補うために大量の餌を摂取するものだ。寝ることで補う者もいるにはいるが……幾ら呼びかけても目を覚まさないと言うのは……アンドロモン、後でメディカルチェックをしてやってくれないか》

『分かりました』

大輔の質問に答えてやれなかったことを素直に謝罪し、アンドロモンにブイモンのことを託す。

頭を下げたアンドロモンは、それから大輔の方を向いた。

初めて出会った時のような元気がなく、しょんぼりしている大輔

にアンドロモンは冷たい機械の手を伸ばして頭をそつと撫でてやることしか出来なかった。

《……他に、質問がある子はいるかな?》

ぐるりと子ども達を見渡す。

ここに来る前に行った会議で出た質問は全てゲンナイに尋ねたので、太一が代表して首を横に振った。

《では、そろそろ次に行こうか》

いよいよ、本格的に世界を救う旅に出ることとなる。

ゲンナイはモニターの向こうで、モニターの前で少し前かがみになって腕を動かしていた。

何してるんだ、と太一が何気なく呟いたのを拾った光子郎が、恐らくモニターの前にこちらと同じようにキーボードやパネルがあつて、それを打ち込んでいるのだろう、と推理する。

そしてそれは、当たっていた。

《子ども達、まずはこれを見てくれ》

ゲンナイが何かを操作すると、ゲンナイが映っていたモニターがぱつと切り替わった。

それは、ファイル島だった。3Dモデルやイラストなどではなく、実際のファイル島を上から撮影したような構図だった。

カメラが引いていくように小さくなっていったかと思うと、右上の方に大きな陸地が見え始める。

「ゲンナイさん、あれは何?」

ミミが尋ねる。サーバ大陸だよ、とゲンナイは言った。

「サーバ大陸?」

《私が今住んでいるところだ。ファイル島と比べるとかなり闇が侵食している。今の君達では、デビモンにすら苦戦してしまった君達では、到底敵わないほど、強いデジモン達が至る所に住んでいる》

そこで、とゲンナイは子ども達が絶望する前に、一筋の希望を見せる。

モニターの右下、海が広がっている箇所にフレームインしてきたのは、何かの模様が描かれたプレートだった。

「それは……?」

《これは、君達の「想いの力」を更に引き出すアイテム、紋章だ》

画面に描かれているのは、オレンジ色の太陽の絵だったが、人によって紋章の形は様々だそうだ。

そしてデジモン達を進化させた時と同じように、いや、それ以上に強く想い、願うことで、デジモン達は次の段階へ進化するのだと言う。「どうして人によって形が違うんですか?」

《それは、人の性格とか体格とか、そういうものが違うのと同じだよ。君達が初めてここに来た時だって、全員が全員同じ想いだったとは限らないだろう?》

光子郎が尋ねると、ゲンナイはそう返した。

曰く、この紋章は、子ども達のそれぞれの「想い」が形となっっているらしい。

だから人によって紋章の形が違うのだそうだ。

《アンドロモン》

『はい』

ゲンナイに呼ばれたアンドロモンは、小さく頭を下げるとモニターの前のパネルへと移動し、アンドロモンの手のひらほどの大きさがあるパネルを次々とタッチしていく。

その度にパネルが白く光り、ポン、ポン、ポン、という膜に包んだような音が響いた。

すると、パネルの台の縁に小さな窪みが出来上がった。

《そこに1つずつ、デジヴァイスをはめて行ってくれ。こちらから紋章に関するデータを送り、アップデートさせる。そうすればデジヴァイスが紋章の居場所を教えてくれるようになる》

「え? ゲンナイさんがくれるんじゃないんですか?」

丈がそう言うと、ゲンナイは忘れていたと言うように苦笑した。

《ああ、済まない。私としたことが、言うのを忘れるとは……実は、紋章は今私の手元がないのだ》

「ええっ!？」

《正確には、色んなツテを頼って隠してもらったんだ。本当なら私か

ら君達の手に渡すはずだったんだが……》

穏やかだった表情が一変して、真剣なものとなった。

《……この紋章は君達の“想い”を引き出してくれるんだが、それが故に凄まじいエネルギーを帯びている。使い方を間違えれば、その身を滅ぼしかねないほどの、強力な……そう、デビモンを滅ぼした闇の力のように》

ゴクリ、と誰かの喉が鳴った。

《だがその肉体が滅びようと、心に力が飲まれようと、力を欲するデジモンは多い。他者よりも優れた存在になりたいというのは、デジモン達の本能だ。戦う力のない私が持つていれば、たちまち奪われてしまう》

子ども達の手助けとなるものが、子ども達に襲い掛かるものに変わってしまう。

それだけは避けたかったゲンナイは、苦肉の策でサーバ大陸の彼方此方に隠したのだと言う。

《そして私に協力的なデジモン達が、誰にも奪われないように見張ってくれている。サーバ大陸に着いたら、私の協力者に案内役をしてもらうようにも頼んだから、安心して紋章を探すことだけに集中してくれ》

本当は私の手で君達に渡したかったんだがね、とゲンナイは残念そうに言う。

理由が理由だ、仕方がないと子ども達は納得し、割り切った。

ゲンナイの他にも協力者がいるということだし、ファイル島よりは比較的楽に進めるだろう、と子ども達は樂觀的に考えることにし、全員のデジヴァイスをアンドロモンに預けた。

全てのデジヴァイスをアップデートするには時間もかかるし、日も暮れてきたということで、子ども達はアンドロモンの工場で一晩過ごすことになった。

置いていかれる気持ち

鉄製の診察台に寝かされたブイモンの周りには、医療ドラマで見るとような機械がずらりと並んでいる。

そこから伸びるコードについたパッドが、ブイモンの心臓付近と頭についている。

これ何ですか、と大輔が聞いたら、これでブイモンが目覚めない原因を見つけるんだよ、とアンドロモンが優しく教えてくれた。

ピ、ピ、ピ、という規則的な電子音が、静まり返った空間に響き渡る。

頑なに目を閉じたままのブイモンを、大輔は唇をきゅつと結んで見守ることしか出来なかった。

ゲンナイからの話がひと段落したところで、アンドロモンは大輔を連れて管理室を出た。

ブイモンの様子を見るためである。

最初はアンドロモンにブイモンを運んでもらおうとしたのだが、アンドロモンの機械の手でも生き物の気配を感じるのか、眠っているはずのブイモンはやはり真っ青になって魘されるので、結局大輔が背負っていくことになる。

そこで案内されたのが、管理室の4分の1ほどの広さの部屋だった。

ここは、普段はアンドロモンがクールダウンするための部屋らしい。

クールダウンって何？と聞くと、機械は継続して使い続けていくとどんどん熱を帯びて、ヒートアップしてしまう。

そうなるのを避けるために3時間動いたら、1時間休むというのを繰り返している。

それをクールダウンというのだ、と教えてくれた。

そう言えば光子郎さんもパソコンを弄っては休ませていたなあ、ということを思い出した。

『……うーん』

「アンドロモン、ブイモンは？何処がおかしいの？」

『……………』

「アンドロモン？」

『……それがねえ……何処もおかしくないんだよ』

「え？」

『数値は何も異常を示していない。ただ眠っているだけだ』

「……眠ってるだけ？眠ってるだけなのに、何で起きないんだろう……？」

『ふむ……深い眠りについていてるせいで、身体の機能は低下してはいるが、健康面に問題はなさそうだ。だから自然に目を覚ますのを待つしかなさそうだな』

「……………」

『心配はいらないよ。本当に眠っているだけだ。目を覚まさない間は何も摂取することはできないから、きつと起きたらお腹が空いたと騒ぐはずだよ』

何の問題もなく眠っているだけ、という診断に大輔は納得がいかない。

ならばどうして大輔が幾ら呼びかけても起きないのだろうか。

大輔はどんなに眠くても朝になれば自然と目を覚ますし、たまにお姉ちゃんに起きろーって部屋に乗り込まれて、布団をはぎ取られて叩き起こされる。

でもブイモンは起きない、起きてくれない。

アンドロモンが慰めの言葉をかけてくれるけれど、大輔が元気になることはなく、来た時と同じようにおおんぶをしてみんなの下に戻って行った。

《ファイル島からサーバ大陸までは、どんな大きな船でも5日以上はかかる。本当ならサーバ大陸へ渡る船も用意してやりたかったんだが、その前に敵に襲われてしまって、データを紛失してしまってね。その代わりと言ったら何だが、船の代わりに君達をサーバ大陸に連れて行つてくれそうなデジモンに連絡をしたから、そのデジモンに乗つて来るといい。ただそのデジモンは身体がかなり大きいから、ファイル島まで迎えに来ることが出来ないんだ。渡した地図に印をつけておいたから、その場所まで筏を作つて向かつてくれないか？ああ、うん。君達にばかり負担をかけるのは、本当に心苦しいとは思つていよ。お詫びにもならないかもしれないが、渡し損ねた食べ物のデータは復元できたから、それを渡しておこう。他に何か欲しいものはあるかい？今すぐと言うわけにはいかないが、出来る限り用意しておくよ》

デジヴァイスに紋章に関するデータをダウンロードしている最中に、ゲンナイがサーバ大陸へ行くための手段を教えてください。

ゲンナイからもらったデータを弄つてちよつとだけ口元がにやけていた光子郎は、ゲンナイにいきなり名指しされ肩を震わせていたが、急いで地図を開いて確認する。

広大な海にぽつんと赤い印が点滅している。

縮図された地図から治が計算してみると、ファイル島から1時間ほどの位置らしい。

今日はもう遅いのでそれはまた明日にするとして、何か他に欲しいものはあるかと聞かれた時、真つ先にミミが反応して勢いよく手を挙げた。

「あの一！あの一！私、欲しいのがあるんですけど！」

《何だい？》

「お風呂上りのスキンケアとヘアケアください！」

前にヒカリがシャワーを浴びた後にちやんと乾かさずに眠つてしまい、更に翌日起きた後にぼさついた髪を水で濡らして押さえつけるだけ、というのを目撃してしまったオシヤレ大好きミミちゃんは、真つ先に欲しいものを述べる。

太一達男性陣は何でそんなもの、と怪訝な表情を浮かべていたし、同じ女子の空とヒカリも首を傾げている。

男性陣やまだ小さいヒカリちゃんはともかく、そろそろ女子として色々と気になりだすお年頃のはずの空までが反応が鈍いのはどういうことだ、とミミは悲鳴を上げたくなつた。

しょうがない、この冒険中に色々と空さんに仕込んであげよう、なんてミミが企んでいることなどつゆ知らず、ゲンナイは君が望むのならと快諾してくれた。

《用意するのに時間がかかるから、サーバ大陸に着く頃に渡せるようにしておくよ》

「わーいーありがとうございますー！」

見るからに喜んでいるミミに、太一達は苦笑するしかなかった。

その時、アンドロモンに連れられてブイモンと一緒に出ていった大輔が戻ってきた。

どうだった、と太一が尋ねるが、その顔色と表情から芳しいものではないというのは、太一達も画面の向こうのゲンナイにも痛いほど伝わった。

ゲンナイから食事のデータを受け取った後、もう遅いから寝なさいというゲンナイの優しい労りの言葉を合図に、ゲンナイとの通信は終了した。

この管理室は四面が分厚い壁で囲まれており、窓がない。

つまり外の様子が、ここからでは分からないのである。

管理室から出て工場の屋上に行ってみれば、確かに見上げた空は綺麗に半分ずつ、濃紺とオレンジに分かれていた。

丈の腹の虫が鳴ったのを聞き、早速ゲンナイからもらった食事のデータを使用してみる。

光子郎のパソコンから次々とおにぎりが飛び出してきた。しかも具材付きで。

塩むすびはもちろん、梅やシヤケ、昆布、ツナマヨまで。

久しぶりの主食と具の種類の多さに、子ども達は歓喜の声を上げて、2つずつ受け取り夢中になって食べる。

丈なぞ、感極まって涙まで流していたので、ゴマモンに大袈裟じゃないかと呆れられた。

しかし丈が涙を流すのも無理はないだろう。

この世界に飛ばされて1週間以上は経過している。

その間、食べ物と言えば果物ばかりで、1度だけ卵尽くしの料理を囲んだが、それ以外は質素なものだった。

これからはまともな食事が出来る、と子ども達が涙ぐむのも無理はないのである。

デジモン達も疲れてはいたが、食事と聞いて一気に元気が出てきたようで、初めて見る、子ども達が彼らの世界で食べているという食べ物に興味津々だった。

子ども達から手渡されたそれを、一気に平らげるもの、恐る恐る口に運ぶものと反応はそれぞれであったが、全員が美味しいという感想を抱いた。

『美味しいね、ソラー!』

「そうね」

嘴にご飯粒をつけながら食べるピヨモンに、空は苦笑してハンカチで拭ってやる。

空に構ってもらえるのが嬉しいのか、ピヨモンはんふふと笑っていた。

『ええなあ、コウシロウはんらの世界は。こんな美味しいもんがあるやなんて……』

「ふふ、いつか僕達の世界に来れたら、たくさん食べさせてあげるよ」『ホンマでつか!?約束でっせ!』

食べるのが大好きなテントモンがぼやいたら、光子郎はしっかりとその眩きを拾ってそう約束をしてくれた。

テントモンの目が見るからに輝いたので、光子郎は苦笑しながらもちろんと答える。

他のメンバーも、概ねそんな感じだった。

そんな和やかな空気の中、1人だけ浮かない顔をしていることに、誰も気づけなかった。

ゲンナイからテントをもらった日と同じように、子ども達は工場の屋上にテントを設置して眠りにつく。

明日からはいよいよ海を渡り、数日かけてサーバ大陸という場所に移動するのだ。

しっかりと身体を休めて、明日からの旅に備えなくてはならない。サーバ大陸に連れて行ってくれるデジモンと合流するために、筏を作らなくてはならないのだ。

いつもより少しだけ早い時間に寝付いたせいで、大輔は変な時間に起きてしまった。

催したわけでも、寒さや暑さで目を覚ましたわけではない。

ただ何となく、言い知れぬ何かを感じ取って急激に意識が引つ張られたような気がした。

しばらく目を瞑って、ベッドで寝がえりを何度か打ってみたが、眠気が再び襲ってくるどころかどんどん覚醒していく。

「……………」

駄目だ、と大輔は諦めて起き上がる。

テントの中は薄暗い。自分のベッドで一緒に眠っているブイモンは、先ほどと変わらずぐっすりだった。

アンドロモンの話では数日は起きないということなので、暫くブイモンとお喋りが出来ないのは寂しい。

大輔は小さく息を吐いて、何気なく辺りを見渡した。

「……………あれ？」

隣のベッドが空っぽであることに気づいた大輔は、思わずと言った様子で声を出してしまった。

慌てて口を塞いで先輩達のベッドを見やったが、幸い丈がうーんとか言いながら寝返りを打っただけで、誰も起きる気配はない。

ほつと胸を撫で下ろし、再び隣のベッドを見やる。

そこは、賢とパタモンが使っているベッドだった。

いつもなら賢とパタモンとブイモンと、先輩達にもう寝ろって怒られるまでお喋りしているのに、今日の賢はベッドに入るまでずっと卵を抱えて貝になっていた。

お休みの言葉さえ、賢の口から紡がれなかった。

その賢が、ベッドにいない。

どうしたのかと慌ててテントの外に出ると、空を見上げて座り込んでいる賢の後ろ姿が、そこにあつた。

「賢……？」

「っ、あ、大輔、くん……」

声をかけると、肩を震わせて硬くなった賢は、勢いよく振り返った。それが大輔だと知って、何故か安堵した賢に、大輔は首を傾げながらも、テントに戻る気配がなかったたので、そのまま隣に座る。

一瞬だけ身じろぎした賢だったが、それでもそこから動くことはなかった。

「……やっぱりここじゃ星空見えねえなあ」

眩いた大輔の視線の先にあつたのは、工場から排出される灰色の煙のせいで薄らと曇っている夜空。

初めてここで寝泊まりした時、ミミの提案で工場の屋上にテントを設置し、寝ることとなったのだが、その時も星が排出された煙に遮られて、瞬く小さな光を見ることは叶わなかった。

そうだね、と賢は小さく同意するが、それ以上何かを言うことはなかった。

視線を夜空から賢へと移す。

その腕に抱いた、物言わぬ命。

かつて賢のパートナーだったデジモンが、力を使い果たして今は眠っている。

遠い昔のことのようだったようにも思えたあの出来事は、実は1日しか経っていない。

命を使い果たしたその瞬間を、大輔も目の当たりにしていた。

黒い翼を持った天使は、命と引き換えに新しい朝を連れてきたのである。

置いて行かれる賢の気持ちなど、これっぽっちも考えずに。

「……あ、の、さあ、賢……」

何か言わなければ、と思つて口を開いた大輔だったが、喉の奥から何か慰めの言葉が飛び出してくることはなかった。

何を、言うつもりだったのだろうか。

大丈夫だよという無責任な言葉だろうか。

元気出せよという慰めの言葉だろうか。

どちらも違う気がして、大輔は開いた口を閉じてしまう。

何を言つても、今の賢にはきつと響かない。

だつて大輔と賢の間には、大きな溝があるのだ。

パートナーを亡くした賢と、そうじゃない大輔。

そのたった1点の違いこそが、2人を隔てる決定的な溝となつていく。

まだ何も失つていない大輔の言葉は、幾ら投げてもその溝の底に落ちていくだけだろう。

デビモンを倒すために、文字通り命を懸けたパタモンは、力を使い果たして卵になつてしまった。

争いを嫌う子どもに嫌というほど突きつけられた、現実と宿命。

ここはゲームの世界なんかではない。自分達が住んでいる世界とは違つていても、確かに痛みを感じる世界だ。

性別も年齢も、そんなもの何の言い訳にもならないのである。

現に賢だけではなく、同じ年の大輔やヒカリも、上級生達の庇護を掻い潜つて戦場へと引つ張り出されてしまった。

そしてその結果が、これだ。

例えば大輔が上級生であつたとしても、かける言葉なんか見つからなかっただろう。

「……明日は、サーバ大陸に行くんだよね」

星のない夜空をぼんやりと見上げていた賢が、ぽつりと呟いた。

賢になんと声をかけたらしいものかと頭を抱えていた大輔は、賢の

言葉で引き戻される。

「お、おう、そうだな」

「……ファイル島から、闇が消えたから……他の、まだ闇が残ってるところに、行くんだよね」

「?・そうだな」

昼間にゲンナイが言っていたことは、半分も理解できていなかったが、治が分かりやすく簡潔に教えてくれた。

ファイル島から怖いものが消えたから、次はサーバ大陸に行つて同じように怖いものを消していく。

そうしてこの世界から邪悪なものを全て消し去れば、大輔達は晴れて自分達の世界に帰ることができるようのだと。

ファイル島に来てからほぼ毎日のように繰り返られる戦闘で、怒涛の日々を過ごしていた上級生達は何処か疲れたような表情を見せながらも、まだ見ぬ新天地に少しだけわくわくしているのが見て取れた。

大輔もきつと通常なら上級生達と同じようにはしゃいでいたかもしれないが、ブイモンが深い眠りについて全く目を覚まさないため、そちらに気を取られている状態である。

だからサーバ大陸に行くと言われても、そうかくぐらいの認識でしかなかった。

「……大輔くんは」

「へ?」

「大輔くんは、ブイモンが進化した時、どう思った?」

何と声をかけたものか、それとも黙つて立ち去ろうか。そんなことを考えていたところに、突然そんなことを聞かれて、大輔は面食らった。

賢は、真剣な表情で大輔を見ている。

賢が決してふざけているわけではないと悟った大輔は、しかし賢の質問の意図がよく分からず、頬をかく仕草を見せた。

「どう思った、つて……そりゃ、嬉しかったぜ?太一さん達みたいになれた!つて。ずーつと俺ら守られてばっかりだったもん」

「……そう」

「……賢は、嬉しくなかったのか？」

表情は冴えない。

デビモンと戦っていた時から、賢はしり込みしていたことを思い出す。

あの時は色々と無我夢中で、すっかり記憶の彼方に飛んでいたが、みんなが必死にデビモンと応戦していた時から、賢はずっと戦いから目を逸らしていた。

パタモンがエンジェモンに進化した瞬間に大輔も立ち会っていたが、賢はちつとも嬉しそうではなかったのを、確かに見た。

ずつとずつと、悲しそうな顔を引つ込めなかった。

エンジェモンが進化した時も、戦っている時も、最期の瞬間だって。まだパートナー達が進化出来なかった頃は、あんなに目を輝かせて想いを馳せていたのに、一体どうして。

賢は、卵を抱きしめたまま小さく頷いた。

「……僕のパパとママ、リコンしちやつたって話、したよね？」

「……おう」

「ママは普段はとっても優しいんだけど、パパと喧嘩するとずつごく怖い顔、するんだ」

唐突に、語り出す。

昼間はとても優しい母なのに、夜になって父が帰ってくると一変する。

貼りつけたような笑顔で父と接して、夕飯の時間はいつも薄ら寒い空気が流れていた。

自分は何となく居心地が悪いな、ぐらいにしか思っていないかったが、兄の治は両親を取り巻いていた空気に気づいていたらしく、ずつと両親を見ないようにならしていたそうだった。

そうだった、というのは両親が離婚した後、治からそう聞いた。

ご馳走様をして、自分が使った食器を台所のシンクに持って行って、暫くリビングでお兄ちゃんと談笑したりお兄ちゃんが宿題しているのを横目で見たりして、9時になったら歯磨きをしてパジャマに着

替え、両親におやすみなさいをして寝室へと向かう。

それだけなら他の家族と、何ら変わりはない。

でも幼い兄弟がベッドに入って1時間ぐらいすると、両親は普通の家族とは違う行動をとる。

意識が暗闇に差し掛かりかけた頃になると聞こえてくる、皿が割れる音。

女性の金切り声と、男性の怒声。

賢は、いつもその音に怯えていた。

治に抱きしめられ、目と耳を塞ぎ泣きながら眠った夜。

そして、賢は1度だけ見てしまった。

両親の諍いが一瞬だけ収まったのを見計らい、トイレに行った帰り。

リビングの扉が少しだけ開いていたから、好奇心に負けてその隙間からリビングを覗き込んだのが、運の尽きだった。

いつも優しい表情を浮かべた母はそこにおらず、アニメやゲームに出てくるモンスターのような怖い怖い形相をして、正面にいるらしい父を睨みつけていた。

悲鳴を上げそうになったが、咄嗟に口を抑えることで何とか堪える。

がちがちに震える身体を何とか叱咤して、賢は足元をよろめかせながら部屋に戻った。

ドアノブを掴み、音を立てないようにそーっとそーっと、時間をかけて下に引く。

自分の身体が入るぐらいの隙間だけ開けて、さっと入り込む。入るときと同じようにそっと扉を閉じて、その扉にもたれかかり、ずるずるとその場に座り込む。

はあ、はあ、と荒い息を何とか抑えようとして両手で口を覆い、気がついたらボロボロと涙を流していた。

優しいママ、大好きなママ。

——あのひとは、だれ？

次の日も幼稚園があることを忘れて、賢は一晩中その場に座り込む

で泣いたそうさ。

「……だから僕、喧嘩とか嫌い。争いとか、戦争も、嫌い。喧嘩のせいでパパもママも変わっちゃった。……パタモンも」

そつと卵を撫でる。なでなで、なでなで。何度も撫でる。

見下ろす目には、悲しみしかない。

友達だった。友達だと思っていた。

嫌だと言ったのに、止めてと言ったのに、パタモンは賢の手を離れて行ってしまった。逝ってしまった。

“進化をする”ということがどういふことなのか、賢には分かっていた。分かっていなかったから、進化をすることに関して気楽に考えていた。

大輔とヒカリと、そのパートナー達で、どんな風に進化するのかわかっていたように話し合っていた。

楽しかった。まだ見ぬパートナーの進化した姿に想いを馳せ、友達と語り合う日々は、楽しい冒険の一部であった。

……全てが、壊れてしまった。

「サーバ大陸に行ったら、また戦わなきゃいけない。この世界を助けなきゃいけないのは、分かっているけど、でも、僕、戦いたくないよ。またパタモンが傷つく。またパタモンが、パタモンじゃないデジモンに進化する。嫌だよ……!」

兄や兄の親友、先輩達や友人2人のデジモンはみんなそれぞれデジモンの面影を色濃く継いでいるのに対し、賢のパタモンはパタモンだった頃の面影が何処にもなかった。

愛らしい四足歩行で、大きな羽のような耳が生えたハムスターだったのに、賢の友達は何処にもいなかったのである。

そこにいたのは、美しい黒い羽を持った天使。

——あのひとは……だれ？

いつだったか、豹変した母の形相が頭に過った。

「……何だよ、それ」

思わぬ形で聞いてしまった賢の独白に、大輔は啞然とした様子で咳く。

絞り出すように出された声は、少し震えていた。

賢と大輔以外誰もいない、工場が稼働する音だけが夜空に吸い込まれていく中、大輔の声は嫌に響いた。

「何で、そんなこと、言うんだよ。そんな、パタモンじゃないとか、変わったやつたとか、何で」

言いたいことがまとまらずに、考えていることがそのまま飛び出しているせいで、大輔が何を言いたいのかわからない。

しかし大輔が怒っているのは、明確だった。

立ち上がり、両手を握りしめてわなわなと震わせている。

賢の息が、一瞬詰まった。

大輔を怒らせてしまった。顔から血の気が引いていくのが分かる。

両親の離婚というトラウマを抱えた男の子は、だから反応に遅れてしまった。

「パタモンは賢を守りたくて、頑張ったのに、なのに何でそんなこと言うんだよ」

「……そんな、ことって?」

「喧嘩のせいでパタモンが変わっちゃったとか、パタモンじゃないとか、そういうことだよ!」

賢が、争いごとが苦手なのは理解できた。

両親の離婚というトラウマによって形成された賢の優しい性格は、デビモンを倒すことすら躊躇してしまっていた。

パタモンが進化してしまったことから目を逸らしたかったことも、デビモンとエンジェモンの戦いが両親の言い争いを彷彿とさせてしまったことも、その切々と訴えてくる声色で、痛いほどに理解はした。理解はしたけれど。

「何で、そんなこと言うんだよお!パタモン、頑張ったじゃねえか!賢が傷つくところ見たくなかったから、守りたかったから、頑張ってたの

に、何で、パタモンが頑張ってたとこ見ないふりするんだよお！」

パタモンの全てを否定する賢の言葉が、大輔には許せなかった。

パタモンはただ、賢を守りたかっただけだった。

子ども達がピンチに陥ると、デジモン達は爆発的な力を発揮して進化を果たす。

通常はゆつくりと、時間をかけて力を蓄えて進化をするものだけけれど、選ばれし子どもでもある大輔達のデジモンは、デジヴァイスの力によって短期間での進化が可能である。

子ども達の想いや心を糧として、デジモン達は同じ個体よりも強いデジモンへと、進化をするのである。

しかしそれには子ども達だけでなく、デジモン達の想いも必要不可欠だ。

子ども達を守るために力が欲しい、という想いと、子ども達の死にたくないという気持ちが重なるからこそ、デジモン達は強い力を手に入れることが出来るのである。

子ども達だけでも、デジモン達だけでも、デジヴァイスは光らない。

もしも、少しでも子ども達とデジモン達の間で想いの齟齬があれば、強すぎる力は制御できずに歪な方向へと向かってしまうのだが、子ども達はまだ知る由もない。

賢は、進化してほしくなかった。

パタモンは、賢を守りたかった。

2人の気持ちはちぐはぐであったため、本来ならエンジエモンは暴走してもおかしくなかった。

否、もしかしたらエンジエモンに進化することすらできず、全く別のデジモンに進化していたかもしれない。

今回は運がよかったのだ。

勿論、そんなこと子ども達は知らないのだけれど。

「ぼ、く……そんな、つもり……」

「じゃあ、どういうつもりだよー」

「え、と……」

「戦いたくない、やだやだって！俺だってやだったよ！でも死にたく

ねえもん！お姉ちゃんに会いたいから、お姉ちゃんのとこに帰りたいから、だから頑張っただけだよ！賢は、お母さんやお父さんに会いたくないのかよ！帰りたいくないのかよ！」

「……帰りたいよ。帰りたいけど……でも……」

「でも、何だよ！」

「っ、大輔くんは、何が分かるの!？」

賢は、初めてに近い形で声を荒げた。

全てを壊す、賢にとつては悪の象徴とも呼ぶべき喧嘩や争いを避けたがる賢は、初めて友人に啖呵を切った。

「喧嘩のせいで、パパとママが喧嘩したから、僕達は離ればなれになっちゃったんだよ！お兄ちゃんとパパには、ママに言わないと会えなくなっちゃった！でもお兄ちゃんとパパに会いたいって言うと、ママ怖い顔するんだ！いつもむすつて顔、するんだ！悲しそうな顔するんだ！だから僕、我慢しなくちゃいけないんだ！ママを、悲しませたくないから！パパもママもいて、お姉ちゃんもずっと一緒にいてくれる大輔くんは、僕の、何が……!」

ボロボロと涙を流しながら、賢は必死に訴える。

今でも、鮮明に思い出せる、母に手を引かれて兄と父とは違う道を歩いた、あの日のことを。

賢は最後まで、みんなと一緒にいたいと願った。

でも大人達は、そんな幼い子どもの些細な願いを、いとも簡単に引き裂いてしまう。

幼い賢に、家族団らんの記憶は殆どない。

だから小さい頃は、父親に手を引かれたり肩車をしてもらったりしている同年代の子が、羨ましくてたまらなかった。

けれど離婚後の生活基盤を立てるのに必死だった母に、そんなことを言えるはずもなかった。

幼くとも賢かった子どもは、母に迷惑をかけまい、心配させまいと気丈に振る舞い、〝いい子〟でいようとした。

大人の言うことはよく聞いて、早寝早起きもして、お手伝いもして、いつもニコニコ、大人の手を煩わせない〝いい子〟でいようと、努力

した。

それでもやっぱり、兄と父と一緒に暮らしていたおぼろげな記憶が、恋しい。

「普通」の家族に戻りたい。

ただそれだけを願っていた子どもは、再び大切なものが手のひらから零れていくのを、ただ見守っていることしか出来なかった。

両親の離婚を阻止することが出来なかった、あの幼い頃のように。「……知らねえよ。分かんねえよ。賢の気持ちなんか、これっぽっちも分かんねえよ!!」

大輔も、負けてはいない。

日頃から大袈裟なぐらい声が大きくて、元気でやんちゃな男の子は、それ以上の声を張り上げて応戦する。

何も知らないのは、そっちの方なのに。

「一緒にいられるから、何なんだよ！一緒にいられりゃ、家族なのかよ！あんな、あんなの、家族じゃ、ない！お姉ちゃんのこと何にも考えない、お父さんとお母さんなんか……！」

そこまで言っつて、はつと我に返った大輔は慌てて口元を押さえた。絶対に言うまいと思っつていたことを、太一やヒカリにさえ内緒にしていたことだったのに、賢の言い分にあまりにも腹が立っつてしまっつて、普段押さえているものがつい口から飛び出してしまっつたのである。

しまっつたと思っつたが、もう遅い。

大輔がずつと心に秘めていたものを、僅かとは言え賢に知られてしまっつた。

賢を見やる。目を見開いて、ポカンとしている賢がいた。

「おいおいおい、どうしたー！」

一瞬だけ静まり返っつた空間に、聞き慣れた声がして大きな陰が割り込んできた。

太一だっつた。

更に遅れて治と光子郎と丈、女子3人もテントの外に出てくる。どうやら賢と大輔の大きな声で、強制的に起こされたらしい。

大きな声で起こされ何事かと辺りを見渡すと、最年少の2人の姿がない。

外に出てみたら、最年少2人が一触即発の状態だったために、慌てて間に入ってくれたようだ。

「どうしたよ？何があつた？」

「……何でもないっす」

よほどのことじゃなければ滅多に怒らない大輔が、珍しく機嫌が悪そうだった。

だから太一は努めていつも通りを装い、大輔と賢に尋ねてみたのだが、大輔はぶつきらぼうに一言だけ返して先輩達を押しつけてテントに戻って行った。

それだけでいつもの大輔と様子が違う、と太一と治は気づく。

いつもの大輔なら相手と喧嘩をしてしまったり、機嫌が悪かったりすると聞いてくださいよお！とか言つて、がーっと喋り通すはずだ。

脳内で言いたいことを纏めずに口から飛び出すまま言うだけ言つて、こちらが理解する前にすつきりしたーと言つて勝手に自己解決してしまうのである。

最初こそ太一も治も頭に沢山の疑問符を浮かべていたが、彼の姉があいつはああいう性格だから、ただ黙って聞いてやつてと言つてくれたので、以後その通りにしている。

だから何でもないと言つてテントに戻ってしまった大輔を見て、何処か調子が悪いのではと勘繰った治が先ほどまで大輔と一触即発だった弟に尋ねてみたが、呆けた弟も何でもないと言つて、卵を抱えてテントに戻ってしまった。

「……どうしたんでしょうね？」

「……さっきの様子じゃ、喧嘩でもしたみたいに見えたけど……」

光子郎と丈が言う。

確かに、微睡の向こうで聞こえてきた大きな声は、まるで怒鳴り合っているようで、喧嘩をしているように聞こえた。

一昨日まで仲良くお喋りしていた姿を見かけていただけに、2人が大きな声を出してまで喧嘩をするなど、珍しい。

況してや、

「……大輔はともかく、賢が、ね……」

治の呟きは、全員が拾った。

優しすぎるぐらい優しい男の子は、争いを嫌って何が何でも回避しようとする。

それは、昨日の戦いでも同じだった。

兄の治とすら喧嘩をしたことがなかったのに。

「……治」

「……まあ、いいんじゃないかな。いい機会だよ、賢にも僕にも……」

1つのものを2つに分けるほど仲のいい兄弟。

でも普段は離ればなれで、滅多に逢えない。

喧嘩が出来るほど、一緒にいられないだけなのだと、治だけが気づいている。

それはいいことなのか、悪いことなのか。

何にせよ。

「喧嘩して対立するぐらいなら、自分の本意じゃなくても仲良くする方を選んじやうからね。まだ2年生なんだ、我慢なんかしないでいいのに……」

「治くん……」

両親のことは、確かに気の毒だ。

しかし時には相手の矜持をぶっ壊す勢いで主張しなければならぬということもある。

賢にだって、譲れないものがあるはずだ。

喧嘩をして離れてしまうぐらいなら、友達でなくなってしまうぐらいなら、譲れないはずのものまで捨ててしまうのは、違う。

だから何があったのかは知らないが、この喧嘩はいい機会と見た方がいいだろう。

賢は優しすぎるのである。

調和を望むあまり、自分を押し殺して相手の意見にすり合わせるの
は、人形と変わりない。

弟はもう少し我儘になるべきだ。

なので大輔には悪いが、少しだけ傍観させてもらおうとするかな、と治は苦笑する。

「……治が言うんなら、それでいいけどよ」

「うん。だから先輩や光子郎達も、暫くはノータッチで頼むよ」

「はあ……」

「……傍観するのはいいけど、捻じれることだけは避けてくれないかな」

「勿論ですよ。放置はしません、傍観するだけです」

物は言いようだ、と光子郎は思った。

「……………」

「……ヒカリちゃん、もう寝ましよう?」

「2人とも友達だから、心配だね。でも明日も早いから、とにかく寝よう?ね?」

「そうよ。それに大輔なら大丈夫。きっと朝になったらけろつとしてるわよ。いつもみたいに」

男子が使っているテントをぼんやりと見つめるヒカリに、空とミミが気づかわし気に声をかけてくれた。

ヒカリも、あまり争いは好きではない。

しかし太一の妹だけあって、争いは好きではなくとも、そうしなければならないと割り切るのは得意だ。

戦いの最中、ずっと賢が怯えていたことにも気づいていたし、大輔が賢に怒ったのはもしかしたらそのことが原因なのかも、と思いつける。

当たらずとも遠からずなのだが、実際に喧嘩を見ていないヒカリは、何も言うことはできない。

「……はい」

しかしこの拭えない不快感のようなものはなんだろう?

ヒカリは冴えない表情のまま、テントに戻った。

清々しい朝、とは言えないがぐつぐつと眠ったお陰で、ぼんやりし

ていた頭はそこそこ冴えている。

子ども達はいつも通り旅に出る準備をして、テントを出た。

いつもなら前日の夜に取っておいた果物の残りを朝食にするのだが、今日は違った。

昨日ゲンナイがくれた食事のデータがあり、もうひもじい思いをせずに済むのだ。

昨日は夜も遅かったということもあり、1人につきおにぎり2つだけだったが、他にどんなメニューがあるのだろうかと少しわくわくしながら光子郎がデータを引き出す。

茶碗に入った白米、みそ汁、既に調理されているシヤケの切り身という丈が喜ぶメニューはもちろん、トーストやオムレツ、サラダと言ったオシヤレな洋食、ステーキ、カレー、スパゲティ、とにかくありとあらゆる食事のメニューが揃えられている。

汚れないように、食事のデータと一緒にゲンナイがくれたシートを敷いて、ちよつとしたピクニツク気分を味わいながら、子ども達は朝食を取った。

今日で、このファイル島ともお別れである。

ここに来て1週間以上経つが、長かったような、短かったような。テントを光子郎のパソコンに収納し、アンドロモンがいる管理室へと降りる。

ゲンナイが示してくれた位置で、子ども達をサーバ大陸へ運んでくれるデジモンと合流するため、一番近いところから出発するということになっているので、アンドロモンは昨日子ども達を工場まで連れてきてくれたガードロモンを呼び、海の近くまで運んでくれた。

大輔は、未だに不機嫌そうだった。

基本的に怒りが持続しない大輔が、昨夜の賢との喧嘩を引きずっているのは、かなり珍しい。

海に着くまで太一が何度かどうしたと問うても、大輔はぶっきらぼうに何でもないですを繰り返すのである。

こうなったら意地でも口を開かないのは、経験上よく分かっている

ので、彼の怒りが静まったのを見計らうしかない。

ただこれからの冒険に支障をきたすことだけはやめてくれ、とだけ言って、太一はそれ以上言及するのは止めておいた。

賢も昨日と変わらず、卵を抱えて悲しみを堪えている表情を浮かべている。

大輔との喧嘩を引きずっているのか、パタモンを失った悲しみか……あるいは、その両方か。

どちらにしろ、こればかりは時間が解決してくれるのを待つしかないだろう。

海岸近くの森に降り立った子ども達の前に、子ども達が以前助け出したデジモン達が合流した。

昨夜、子ども達が寝静まっている間に、アンドロモンが連絡を取っておいてくれたらしい。

ファイル島をデビモンの魔の手から、そして闇の脅威から救ってくれた子ども達のために、筏づくりの手伝いを申し出てくれた。

木を切り倒すのに骨がいきりそうだったので、その申し出を有難く受け取った子ども達は、筏づくりを開始させる。

いっぱい寝ていっぱい食べたパートナー達は元気もいっぱいだったが、筏を作るために進化をしてもらうのも、少し躊躇っていたところだ。

見たことがあるデジモンもいたし、それぞれ知らないデジモンもいた。

デビモンによって離ればなれにされた際に出会い、それぞれ助けたデジモンらしい。

助けた後に友好的になったのは羨ましいなあ、と思いながら大輔が作業していると、別の作業をしている賢が視界に入った。

途端にむすりと表情を顰める大輔。

昨夜のことは、まだ許していない。

パタモンを蔑ろにするようなことを言った賢なんか、もう知らない。

頬を限界まで膨らませた大輔は、さつさと賢から視線を逸らして自分の作業を再開させる。

だから、他のデジモンよりも小さい赤いデジモンが、賢に話しかけていることに気づくことはなかった。

1時間後。

「よおし、完成だー！」

太一が叫ぶように言う。

子ども達の目の前には、初めて作ったにしてはなかなかいい出来に仕上がった筏があった。

全員が乗っても、滅多なことがなければ壊れないだろうが、自分達をサーバ大陸まで連れて行ってくれるデジモンと合流出来ればいいのだ。

満足そうに出来を見つめた後、子ども達は筏を海に浮かべて手伝ってくれたデジモン達に感謝を述べる。

本格的にお別れだ。

少し寂しい気もするが、この世界を救うためには前に進むしかないのだ。

全てが終わったらきつとまた逢えると信じて、子ども達は後ろ髪をひかれながらも筏に乗り込み、ようやく慣れ始めたファイル島を後にする。

「いざ、新大陸へー！」

太一の号令を合図に、筏は大海原へと旅立っていった。

《ゲンナイ様、子ども達は無事に旅立ちました》

「ありがとう、アンドロモン」

サーバ大陸の、とある場所。

大きなスクリーンに映し出されたのは、ファイル島にいるアンドロモンである。

子ども達をサーバ大陸に送り出すまで見守っていてほしいと依頼していたのだが、しよっぱなからデビモンの放った黒い歯車の餌食になつてしまった、という報告を聞いて苦笑いしたものだ。

まあ、子ども達が無事に解放してくれたので、良しとしよう。

《……ゲンナイ様、1つ気になるのですが……》

画面の向こうのアンドロモンが、表情を1つも変えず、しかし声のトーンを落としてゲンナイに尋ねる。

「どうした？」

《ブイモンのことなのですが……》

「ああ、そう言えばブイモンの様子はどうだった？」

目を覚まさないブイモンを心配していたゲンナイに、アンドロモンは困惑しているような声色で切り出した。

《はあ……眠り続けている原因は分かりません。幾ら調べても眠っているだけなのです。なので私にはどうすることも……数日経てば目を覚ますことは分かったのですが……》

「……眠っているだけ？」

アンドロモンは頷く。

ゲンナイは怪訝な表情を浮かべる。

眠っている以外に何の異変も見当たらないので、対処のしようがないのだとアンドロモンは申し訳なさそうに項垂れた。

「分からないのなら仕方がない。君のせいではないよ」

そう言つて慰めたが、アンドロモンの表情はあまり冴えない。

ゲンナイに頼まれたことをきっちりこなそうと張り切っていただけに、子ども達に刃を向けてしまったことを悔やんでいるのかと思つていたが、それだけではなかつたようだ。

《眠り続けている原因が分からないのも心配ではあるのですが……私は別のことが気になっているのです》

「うん?」

何か、他の問題があったのだろうか。

ゲンナイはアンドロモンに続きを促すと、そこでアンドロモンはようやく表情らしい表情を浮かべる。

それは、険しさを表していた。

《……ブイモンのデジコアについてなのですが……どうも消費が激しいような気がしたのです》

「……………」

《急激な進化によって、子ども達のパートナーデジモン達は、我々と比べるとデジコアの消費は激しいものです。しかしデジヴァイスにはそれを負担、軽減してくれる機能が備わっているため、アグモン達のデジコアはすぐに修復されます。……しかしブイモンのデジコアは、デジヴァイスの修復が追いついていないように見受けられました》

《勿論きちんと修復はされているようです。ただ修復機能が消費に追いついていないだけで……ブイモンが目覚まさないのは、デジヴァイスの修復が追いついていないほどに消費しているデジコアを回復させるために、身体の防衛機能が無意識に働いているのでは……》

「……大輔には言ったのかい?」

《いえ、言っていません。飽くまでも推測ですので、いたずらに心配をかけるのは本意ではありませんし》

「……それがいいね。子ども達にはこれからの戦いに専念してもらわないといけないし、デジコアの修復が追いついていないからと言って、大輔とブイモンを戦いに参加させないわけにはいかない。彼らが選ばれたのにも意味があるのだから……」

《……………》

アンドロモンは目を細めてモニターの向こうにいるゲンナイを見つめる。

ゲンナイは誤魔化したつもりのようだが、機械型のデジモンである自分に嘘は通じない。

相手の細かい仕草、表情の変化、ちよつとした呼吸の乱れ、言葉のトーンなど、面と向かつていなくとも判断できる要素は沢山ある。

だからアンドロモンには分かっていた。

ゲンナイは、何か隠している。

しかし無理に問いただすつもりはなかった。

何故ならアンドロモンの役目は、ここで終わりなのだ。

闇が晴れたファイル島を、子ども達に取り返してくれた平和を守るために、アンドロモンは働かなければならない。

子ども達のことには心配だが、これ以上アンドロモンが手を貸してやることはできないのである。

次のサーバ大陸では、サーバ大陸のデジモンが子ども達をサポートするのだから。

「子ども達がついたらまた連絡をするよ」

《……はい。子ども達を、よろしくお願いします》

どうか子ども達が無事に旅を終えられるように。

アンドロモンは上司であり同士であるゲンナイに深々と頭を下げた。

プツン、と大きなスクリーンからアンドロモンが消え、白い線が画面の真ん中に一瞬走ってブラックアウトした。

ふう、と息を吐く。

ゲンナイはスクリーンが設置されている部屋を出る。

ドアを開けると、冷たい印象を受ける狭いコンクリートの狭い空間に出た。

目の前にあるのは、上へ昇るための階段。

壁の両脇がくり貫かれて、等間隔に蝋燭が設置されているだけの簡易な照明しかない、薄暗い階段をゲンナイはゆっくりと昇っていく。

12段ほど階段を上がったところに、地下室の外に出る鉄製の扉があった。

扉を開ける。眩い光が開いた扉の隙間から差し込まれる。

暖かい木の床板が張られた廊下に出てきた。

そこは、典型的な日本家屋だった。

目の前に別の部屋に通じる襖があり、廊下は横に伸びている。ゲンナイは向かって右側へと向かう。

正面の襖を開けると、畳の部屋があつた。

まだ「彼女」は帰ってきていない。

部屋の真ん中に置かれているテーブルには、ゲンナイの飲みかけの湯飲みと、ミカンが幾つか置かれている浅い籠。

それから1冊の、少し草臥れた本。

ゲンナイはその本を手にとると、パラパラとめくった。

ある程度までめくり、その手を止める。

「……………までは順調……………あとは……………」

彼の言葉の真意は、如何に。

大嫌い

この辺りですね、と光子郎がパソコンを見ながら言ったので、太一と治は筏に張った帆を畳んだ。

ファイル島から離れて1時間、周りには何もなく見渡す限り大海原である。

水色以外何もなくて、もしも悪意を持ったデジモン達に襲われれば一たまりもない。

筏の端っこから海を覗き込むような体勢を取っていた大輔は、何となしにぞつとして筏の真ん中へと引っ込んだ。

こつん、と何かの手に当たる。ブイモンだ。

鮮やかな赤い眼は海と空の間の青い瞼に遮られ、静かな吐息は筏にぶつかる波でかき消されている。

不気味なぐらい静かで、まるで死んでいるようだったが、呼吸によつて微かに上下している胸により、ブイモンが生きていることが分かる。

アンドロモンは数日経てば目を覚ますと言ってくれたけれど、それでもやはり呼びかけても何も答えてくれないというのは、かなりきつかった。

ブイモン達と出会ってから、約1週間以上。

たった1週間しかまだ一緒に過ごしていないけれど、大輔にとつてブイモンは頼れる相棒になりつつある。

他人に触れられることを恐れる、という弱点はあるものの、誰にだって弱いところの1つや2つは持ち合わせているものであり、マイナスポイントには至らない。

持ち前の好奇心もあって、ブイモンのことをもつと知りたいと思いい、もつともつとお話しがしたいのである。

早く目え覚まさないかなあ。サーバ大陸まで、連れて行ってくれる

デジモンがいても5日以上はかかるから、その間にまたいつものようにお喋りがしたい。

そう、いつものように。

しかし……

ばち、

目が合った。

ブイモンとではない。賢と、だ。

大輔はすぐさま顔を逸らして、賢を視界に入れないようにする。

限界まで膨らませた頬は、つつけばぷしゅつと空気が抜けそうだ。

賢は何か言いたそうにしていたような表情をしていたが、知らない、あんな奴。

頑張ったパタモンを蔑ろにするような賢なんか、もう知らない。

大輔と賢は絶賛喧嘩中である。

ここに至るまで、2人は全く会話らしい会話を交わしていない。

と言うのも、賢が何かを言おうとするたびに、大輔はあつちを向いてしまうのだ。

賢は、その理由を分かっているから、無理に引き留めることが出来ずに途方に暮れている。

そんな賢を見て、流石にちょっとやりすぎたかなって思うけれど、でも賢の言葉を思い出すたびにむかむかして、やっぱりそうは思わないって首をぶんぶん振る。

珍しいこともあるものだ、と上級生、特にサッカークラブの先輩である太一と治と空は思うけれど、それでも咎めたり説教したりはせず、傍観するスタイルを貫いている。

自己主張が激しい大輔は、自分の言い分が通らないとがーつと喚いて相手と喧嘩になることがよくあるのだが、その喧嘩が収まるのも一瞬だ。

言いたいことを言うだけ言ってすつきりするから、相手に自分の主張を何が何でも押し通そうとは思っておらず、言い過ぎたごめんって

すぐに頭を下げるのである。

お姉ちゃんともよく喧嘩をする大輔は、仲直りの仕方だつてちゃんと知っていた。

今回のことも、賢にごめん言い過ぎたつて言えばいいのだ。

そうすれば賢だつて、僕も無神経だつたつて頭を下げる事が出来る。

しかし大輔は、それをしなかった。

仲直りしようと思えないほどに、賢の言葉が酷いと思ったからだ。

パタモンは、頑張った。頑張っていた。

賢を守りたかっただけだつた。その結果、賢の心に深い傷を残してしまつたけれど、それでもパタモンは賢がその場で命を落としてしまふよりもマシだと判断したのだ。

身近で見ていた賢が、そのことに気づいていないわけがないのに、何故パタモンの頑張りを否定するような言い方をしたのか、大輔には分からない。

それほどまでに両親の離婚が賢のトラウマになっているのだが、家族が離ればなれではない大輔に、そんな心情を読み取れるはずもな

く。……そもそも大輔は、両親が嫌いだ。

だから余計に、両親が離ればなれになつて、家族がバラバラになつちやうことが想像しにくい。

賢のトラウマは、両親への愛ありきのものだ。

両親が好きだからこそ、家族がバラバラになつてしまつたことが賢にとつて根深い「闇」として、心に巣食っているのである。

だから大輔には、分からない。

「両親が嫌いな大輔は、家族が離ればなれになる痛みを想像できない」。

お姉ちゃんと離ればなれになる可能性は考えていない。

だつて大輔はお姉ちゃんが大好きだ。お姉ちゃんが行く方へ、大輔も向かう。

例え両親が1人ずつ引き取ると言つても、きっと大輔はお姉ちゃん

を引き取った方を選ぶ。

無理やり連れていかれても、持ち前の行動力を駆使して、何としてもお姉ちゃんの下へ向かおうとするだろう。

……お姉ちゃんも、両親のことはあまり好いていないけれど。

「……うわあっ！な、何だ!?!」

思考の海に沈みかけていた大輔を引き上げたのは、太一の悲鳴だった。

辺りを見張っていた子ども達は、太一の声に反応してそちらに顔を向ける。

海が、山のように盛り上がっていた。

幸い子ども達が乗っている筏が盛り上がった山に引き込まれることはなかったものの、子ども達は今の今まで平面だったはずの海に、突如として出来上がった山に、言葉を失っていた。

山の天辺から割れていくように水が流れ落ち、中から海の色とは正反対の、丸みを帯びた茶色いものが現れた。

ぽかん、と口を開いてそれを見上げていたら、それが喋った。

『初めまして、皆さん』

「うわ、喋った!」

「おい、太一!」

失礼なことを言い放った太一をどついて、治が頭をぺこぺここと赤べこのように下げまくる。

しかし茶色い山は、全く気にする素振りを見せず、笑いながら話を続ける。

『私は、ゲンナイ様に頼まれて君達をサーバ大陸まで運ぶ、ホエーモンと言います』

『わー！すーごーい!』

『ホエーモン、初めて見た!』

唾然としている子ども達を尻目に、デジモン達は大はしやぎである。

大きすぎるのと身体が半分海に浸かっているために全体図がよく分からなかったが、恐らくクジラ型のデジモンだろう。

子ども達が乗っている筏など一飲みにしてしまいそうなほどの巨体なデジモンは、普段は深海に住んでいるらしい。

選ばれし子ども達をサーバ大陸まで運ぶために、深海から浮上してきたのだという。

身体が大きいゆえに、深海に耐えうる強い身体を持っているものの、浮上すればその丈夫な身体は自らを殺す諸刃の剣だ。

『サーバ大陸までは、私が不眠不休で泳ぎ続けても、5日はかかりません。しかし私の身体ではずっと海面に顔を出していることもできません』

「哺乳類とは言え、深海の生き物だものな。それはしょうがない」

「じゃあ、どうすりゃいいんだ？」

博識の治が納得し、それに呼応するように丈と光子郎も小さく頷いて同意する。

ホエーモンの頭部に乗って移動するものだと思い込んでいた太一が問うと、ホエーモンはけろつと言いつつ放った。

『簡単ですよ。私の胃の中に入れてもいいのです』

「へ？」

「い、胃の中ですか!？」

胃の中に入ればどうなるか、小学生でも分かる。

胃液という何でも溶かす液体があつて、それで食べ物を消化してしまふのだ。

子ども達は一瞬顔を真っ青にさせたが、ホエーモンは笑った。

『大丈夫ですよ。私の方で胃液をコントロールするので、貴女達が胃の中に入っても、胃液が分泌されることはありませんから』

「……そうですか」

胃液をコントロールするなんて出来るのか、という疑問が治の頭を過つたが、ここは異世界である。

自分達の常識は通用しない。

行きますよ、と言って大きく口を開け、大量の海水と共にクジラに飲み込まれていく光景に眩暈を覚えながら、治は深く考えるのを止めた。

地響き。轟音。そして立ち込める砂煙。

大輔は今見ているものが信じられなかった。

堅いコンクリートが、紙みたいにくしゃくしゃにされて、崩れていくのを目の当たりにした大輔は、息を飲んだ。

高さのあるベランダから覗き込んだ夜の世界は、自分の知っている世界と一変していた。

普段なら立ち並んだマンションの灯りは、夜空に浮かんでいる星々を掻き消すように煌々としているのだが、今はまるで音楽を奏でているように点滅していた。

そして点滅している灯りで僅かに明るかった集合住宅街は、舞い上がる砂埃で覆われてしまっている。

リビングから持ってきた椅子に立って、大輔はお姉ちゃんと一緒にベランダの下で繰り広げられている惨劇を呆然と眺めていた。

昨日までお姉ちゃんと歩いていた、明日も歩くと信じていた歩道が無残にも壊される。

轟！

熱い塊が大輔とお姉ちゃんの視界を横切った。

爆音を鳴らしながら、何かに直撃する。

熱い塊と立ち昇った煙で、何にぶつかっただのかは分からなかった。

それが飛んできた方へ、大輔は顔を向ける。

オレンジの巨体に、青い線がコントラストとして入っている、茶色い兜を被った、いつか凶鑑で見たことのあるティラノサウルスのような恐竜が、唸り声をあげている。

「……あ」

その足元に、見知った子がいるのが見えた。泣いている。泣きながら何かを叫んでいる。その子を抱きしめている子がいる。

「……………っ！」

大輔は、その子の名を呼んだ。

熱い塊がぶつかった何かの方に夢中になっていたお姉ちゃんは、大輔の声に反応して同じ方を振り向いた。

上下左右、何処を見渡しても真っ黒である。

あの夢だ、と気づいたのは数メートル先に小さな光を見つけたからだ。

最後に見たのはもんざえモンの、おもちゃの町で一晩過ごした時だった。

小さな光が気になって手を伸ばした時、光の中に「誰か」が立っていた気がした。

そこで目を覚ましたことを思い出した大輔は、光の中に立っていた「誰か」が誰なのか、今度こそ確かめようと1歩踏み出した。

1歩、また1歩踏み出し、光に近づいていく。

上も下も左も右も前も後ろも全てが暗闇で、地面らしい地面など何処にも見当たらないはずなのに、何故か大輔の足はしっかりと地面を踏みしめている。

そのことに気づかず、不思議に思うこともなく、大輔はただ光に目を奪われる形で真つすぐ向かって行く。

しかし光は、大輔が近づいていこうとすればするほど距離を保つかのように離れていく。

逃げる光に、ムキになった大輔は駆け足になって追いかけるが、大輔がスピードを上げれば光も同じ速度で逃げていった。

大輔は、走る。光は、逃げる。

どのくらい走ったか分からないくらいに走って、奔って、はしって

……。

——ただだよ

声が、した。何もない空間に響く、低くて優しい声だった。

その声に反応した大輔は、光を追いかけるのをやめて立ち止まり、辺りをきよろきよろと見渡す。

誰、そう言いたいのに声は出てこない。

——ただだよ。まだ早い。まだその時じゃないから……

ぐい、と襟首を掴まれて引っ張られたような感覚を覚えた直後、そのまま空中に放り投げられた。

うわ、と悲鳴を上げる暇もなく、上へ上へと浮上していく。

——今はまだ。もう少しの間、サヨナラだ

そして、大輔は見た。大輔の目の前に現れ、翻弄するように逃げ回っていた光の中に、誰かが立っていたのを。

遠ざかっていく光景の中、その誰かが薄らと笑っていた気がした。

飛び込んできた光景は、この5日間で見慣れたテントの天井である。

人1人が入るのがやつとな外見とは裏腹に、9人の子ども達と9体のデジモンが余裕で入れる広さのテントは、ゲンナイからもらった便利なアイテムの1つだ。

これがなければ子ども達はファイル島を旅している間、ずーっと野宿を強いられていただろう。

硬い地面に、寒さから身を守ってくれる毛布などなく、デジモンや他の子ども達とくっついて暖を取る羽目になっていたはずである。

いつ野生のデジモンに襲われるか怯えながら、安眠することが出来ずに常に寝不足の状態の旅をしていたことも考えられる。

寝不足の状態が続けば心の余裕や精神力も削られて、小さな諍いやつまらない喧嘩で仲間割れを起こしていたかもしれない。

安心して眠れる場所を確保できたのは有難い、と丈は度々言っていた。

むっくりと起き上がる。隣を見ると、まだ眠っているブイモンが小さな寝息を立てていた。

いつになつたら起きるんだろなあ、と大輔はベッドから降りた。催したわけではなく、喉の渴きを覚えたわけでもなく、ただ何となく目を覚まして、すっかり覚醒してしまったからだ。

隣の賢のベッドをちらりと見やる。卵を抱えて背中を向けていた。すぐに目を逸らして、大輔はテントの外に出る。

見上げれば満天の星、はそこにはない。

暗いドーム状の空間は、ホエーモンの胃袋の中である。

子ども達をサーバ大陸まで運ぶために、ゲンナイによって派遣されたホエーモンは、深海に住むデジモンだ。

ずつと海上に顔を出しているわけにはいかないのです、子ども達を胃袋に飲み込んで運ぶという手段を取ったのである。

最初こそ驚いたものの、自分達の常識に当てはめていたらこの世界を旅することはできないと、子ども達は突っ込むことを諦めて、大人しくホエーモンの胃袋に収まった。

深海に住んでいるとはいえ、ホエーモンは現実の世界のクジラと同じ哺乳類のため、定期的に酸素を供給するために海面へと浮上するも、潜っている時間と比例せず海面に出ている時間は僅かである。

潜水能力で他のクジラの群を抜いているマッコウクジラは、1度の呼吸で1時間から2時間もの間潜水することが出来るのだが、どうやらホエーモンはデジモンが故にそれ以上の時間を潜水できるらしいのだ。

ホエーモンの胃袋に飲み込まれたのがお昼前、その後2度ほど浮上してついでに子ども達もホエーモンの外に出してもらって、新鮮な空気を堪能した。

その後は夜ご飯を食べてまったりとした後、就寝の時間となつたのでその後はどうなったのか分からない。

空を見上げても星空が見えないのはつまらないなあと思いつつながら、大輔はテントに戻らずにそのまま外に出てごろんと寝転がった。

「……………」

薄暗いホエーモンの胃袋は、星空の再現さえできていない。

昼間や夕方は明るかったのだが、夜になって眩しくて眠れないとミミがぼやいたのを聞いたホエーモンが、胃袋の灯りを落としてくれた。

胃袋に灯り……？って丈先輩が卒倒しかけたが、治と光子郎で何とか引き戻してベッドに放り込んでいた。

お休み、つてみんなに声をかけてベッドに入ったのは、何時だったか。

「大輔？」

ぼーっとドームの天井を見つめていたら、声をかけられたので大輔はびつくりして飛び起きた。

後ろを振り返ると、テントの入り口に治が立っている。

「トイレ……じゃないよな？どうした？」

トイレ用のテントは、男子用と女子用のテントの間に設置されている。

大輔は、男子用のテントの入り口の延長線上で寝転がっていたので、トイレではないと治は判断し、もしかして眠れないのだろうかと思っただけで気軽に問いかけたのだが。

「え、と……」

何と言ったものか、大輔は言葉に詰まってしまって口をもごもごさせた。

変な夢を見てしまったから、目を覚ましてしまった、と言葉にすれば何でもないはずなのに、どういう訳か治に素直に言うことが憚られてしまった。

太一や空、ヒカリと賢だったらきつとあつさりと口を割っただろうに、どうしてか口が重い。

治に言っても意味がない、という考えが大輔の頭にこびりついて離れないのである。

だから大輔は、迷った挙句眠れなくてとあながち間違ってもいないことを口にした。

治は一瞬だけ眉を顰めたが、それ以上追及することはなく、そうか

とだけ返した。

「……………」

気まずい空気が流れる。治はトイレに行くでもなくテントに戻るでもなくじつと大輔を見つめ、大輔は大輔で目を逸らすタイミングを逃して治と見つめ合うという変な状況に陥ってしまった。

見つめ合うこと、数秒。

何だこれ、と大輔の心が色んな意味で折れかけた時、最初に動いたのは治だった。

テントの入り口に立っていた治は、大輔の下へと歩み寄り、隣に座る。

頭上に沢山の疑問符を浮かべた大輔が口を開くよりも、治が言葉を紡ぐ方が早かった。

少し、話をしようか。

「……………話？」

「うん」

「話つて言っても……………」

何か話すことなどあつただろうか。

サッカー部の先輩で、太一と同じぐらい尊敬している治だけれど、改めて話をしようと言われると何を話せばいいのか分からず、口元に人差し指を添えてうんうんと考え込む。

治はくすりと笑うと、その後には紡いだのはありがとうという言葉だった。

「へ？」

「賢と仲良くしてくれて。1人だけ違う学校だし、もし大輔やヒカリちゃんがいてくれなかったら、仲間外れみたいに感じて、もっと大変なことになってたと思うんだ」

「……………」

途端に、大輔の表情が不機嫌なものとなる。

今、大輔と賢は喧嘩の真っ最中なのだ、と言っても大輔が一方的に賢に対して怒っているだけなのだが。

賢い治が、そんな後輩の様子に気づかないはずもなく。

「……昨日の様子だと、派手に喧嘩したみたいだね」

「……………」

「良ければ、何があったのかぐらいは聞かせてくれないか？僕は一応賢のお兄ちゃんだからね。何の情報もなしに賢を慰めることはできないよ」

「……賢に聞けばいいんじゃないですか」

「勿論、聞くよ。でもどちらか一方の話だけ聞いても、偏った意見しか出せないからね」

大輔が悪いのか、賢が悪いのか、はたまた両方が悪いのか。

どちらか一方の話だけを聞いても、それを判断することはできない。

いきなり賢に関するお礼を口にしたのは、どうやらそちらの方が目的だったようだ。

ニコニコといつもの笑みを浮かべているはずなのに、何処か威圧的なものを感じた大輔は、どうやら逃げることはできないらしいと観念して、ぐぬぬとなりながらも話すことにした。

ついうっかり晒してしまった、自分の醜態はひた隠しにして。

「……そうか」

しどろもどろになりながらも教えてくれた大輔の話に、治はそれだけ呟いた。

てつきり何かお小言を言われるものだと思い込んでいた大輔は、拍子抜けをする。

お姉ちゃんやんと喧嘩をすれば、お母さんが問答無用で説教するから、賢と喧嘩したことを咎めると思っていたのに。

……またお母さんのことを思い出して、大輔は治に見られないようにこっそりと苦い表情を浮かべた。

「……そうか。賢は……」
「争いを嫌うことを選んでいた」
「……」

苦い表情を浮かべてぐぎぎと歯を食いしばっている大輔を尻目に、治は落とすようにほつりと呟いた。

治と大輔以外誰もおらず、ホエーモンのドーム状の胃袋のせいで治

の眩きは綺麗に反響して、大輔の耳に思いっきり届いてしまう。

ぽかん、と治を見やる大輔の視線に気づいて、治は口の端を吊り上げる。

「……なあ、大輔」

「はい？」

「……大輔は、自分の両親のこと……好きかい？」

治の質問に、大輔の肩が大袈裟に跳ねた。

心臓がバクバクと激しく鼓動して、全身が小刻みに震えているのを、確かに感じた。

どうしてそんなことを聞くのだろう。

もしかして、昨日賢と口論した時のことを、治は聞いていたのだろうか。

どうして昨日賢と口論をしたのか、自分が言ったことは誤魔化したはずだけれど、本当は聞いていたのだろうか。

その質問は、大輔にとってまさに禁句であった。

大輔は両親が大嫌いだ。嫌悪していると言ってもいい。

今よりももっと小さい頃は人並みに好きだったけれど、でも今は大嫌いだ。

しかしそれを公言したことは1度だつてない。

何故なら子どもが両親を嫌いだということは悪いことだと知っているからだ。

分かつているからだ。

友達はみんな、両親のことが好きで、毎日のように昨日はお父さんと何をして遊んだとか、お母さんとこんなお話をしたとか、日曜日にはお父さんとお母さんとお出かけをするんだとか、楽しそうに話している。

ヒカリだつて例外ではない。

何を置いてもお兄ちゃんが1番のヒカリちゃんだつて、やっぱりお父さんとお母さんは大好きだ。

ヒカリのことは大好きだけれど、その大好きなヒカリがお父さんやお母さんのことを話題にすると口元を引きつらせてしまう。

人の感情に敏感なヒカリの前でそんなことをすれば、どうしたのつて絶対に聞いてくるから、笑顔を保つのが大変だった。

もしも両親に対して嫌悪を抱いていることがバレれば、きっとヒカリは幻滅する。

家族が大好きで、それが当たり前前のヒカリにはきつと大輔の気持ちは分からないだろう。

ヒカリのが好きだからこそ、ヒカリとは喧嘩をしたくないからこそ、大輔は両親が嫌いであることを誰にも言っていない。

後先考えずに行動すると思われがちな大輔ではあるが、自分が両親に抱いている感情がおかしいことはちゃんと気づいている。

だから大輔は、両親も好きだけれどお姉ちゃんはもつと好きだという体で誤魔化していた。

みんなが両親のことを話題にしている時は、お姉ちゃんのことを話して、自分の両親のことは話題に出さないようにしていた。

一緒にお話しているヒカリちゃんもお兄ちゃんが大好きだから、ヒカリちゃんは特におかしいとは思っていないようで、にこにこしながら大輔の話を聞いている。

お姉ちゃんが好きなのは本当だけれど、両親が嫌いであることを隠すためにお姉ちゃんの話ばかり口にするには、罪悪感はある。

それでも、両親の話をしないためには、お姉ちゃんを全面的に押し出すしかなかった。

だから今回も、友人達に言っているようにしようと口を開きかけたが、治の方が一瞬早かった。

「誰にも言ったことないんだけど、僕はね、大輔」

吹くはずのない風が、吹いた気がした。

「父さんも母さんも、大嫌いなんだ」

そう言い放った治の表情は、いつもの見慣れた笑顔だった。

サッカーボールを上手に蹴ることが出来た時に見せてくれる、あの笑顔と全く同じものだった。

「……………どうして?」

「どうして？簡単さ。僕と賢を引き離したから。それじゃ理由にならないかい？」

離れたくないと、みんな一緒がいいと泣いていた賢を無視して、両親は離婚した。

いかなる天才少年と言えど、当時の治は今の賢と同じ8歳だ。

大人の理不尽を止める術など持ち合わせているはずもなく。

「……父さんには、ちゃんと感謝はしているよ。僕を育ててくれてるんだし。でも母さんを止められなかった時点で、僕にとっては同罪さ」

大人の問題だからと、まだ子どもだった治と賢を蚊帳の外に放り投げて、勝手に大人達だけで話を進めて、子ども達の都合などお構いなしだった。

もう一緒にいることすら苦痛で、顔も見たくないから離婚にまで至ったことはこの際仕方がない。

喧嘩ばかりする姿を子ども達に見せるよりは、ずっといいだろう。

それでも、治は大人達を許せない。

「……治さんは、お父さんとお母さんが賢を泣かせたから、嫌いなのかな？」

「……それだけが理由でもないんだけど、まあ、概ねそんなところかな」

「理由？」

「うん」

賢を泣かせたこともそうだが、何よりも許せないことがあった。

でもそれは、今は言うつもりはない。

「誰にも、言ったこと、ないんですか？太一さんにも？」

「うん。太一にも」

「どうして？」

「……大輔は、今の話どう思った？両親が嫌いな僕は、おかしいと思うかい？」

大輔の質問に、質問で返すように、治は言う。

その顔は、断罪を待っている犯罪者のようだった。

唇をきゅつと結び、しつかりと大輔を見据える治の心臓は、激しく波打っている。

誰にも言ったことがないと言ったが、1度だけ。たった1度だけ、治は太一ではない別の友人に、両親のことをぼつりと漏らしたことがあった。

どういう経緯だったかは、忘れた。どんな流れだったかも、忘れた。でも治は何かの拍子に、両親が好きではないと漏らしたことがあった。

やっぱり、大輔のようにどうして？と聞かれた。

だから今の話を水で希釈するように薄めて、オブラートに包んで、話した。

友人の返答は、こうだった。

《育ててもらっているのに、嫌いだななんて酷い》

それは概ね、他人なら必ず返してくる言葉であった。

愛されて育った子どもなら、考えられる返答であった。

両親が揃っている子どもなら、当たり前前の考えであった。

分かっていたことだ、そんな答えが返ってくることぐらい。

分かっていたのに……。

「……お、俺……」

「うん？」

「……おかしい、とは、思わない、です」

大輔らしくない消え入りそうな声だったが、しかし大輔はきっぱりとそう言った。

治は驚愕で目を見開き、大輔を見やる。

「……そう、かい？おかしいとは、思わないかい？」

たった1度だけ零したことを否定されてから、親友にさえ言えなかつた心の内。

まさか弟と喧嘩をしている後輩に肯定されるとは思いもしなくて、震える声で思わず聞き返してしまった。

こくん、と大輔は呆けたように頷く。

「……そう」

それ以上は、聞かなかった。

大輔の性格をよく理解している治は、多分どうしてと聞いても大輔が何故なのか答えられないことぐらい、予想がついたからだ。

でも、それだけ聞ければ十分だった。

ずつと心の中に抱えていた重いものが、少しだけ軽くなった。

「……あの、何で、急に、そんな話に……？」

静まり返った空間が気まずくて、大輔はどうして治がそんなことを言いだしたのかと問いかける。

ああ、と治は思い出したように呟いた。

確か最初は賢の話をしていたはずだ。

どうして賢と喧嘩をしてしまったのか、両方から話を聞きたいのだと、治がそう言っつて。

そこからどうしてこの話になったのだったか、治は苦笑しながら答えた。

「……僕と違って、賢は父さんと母さんじゃなくて、争いを嫌うことを選んだ。それつてとてもじゃないけど、すごいことだと思っうんだ」

「……？」

「僕は『争いを引き起こした両親』を嫌いになつたけれど、賢は『両親を仲たがいさせた争い』を嫌つた。僕にはとても出来ないよ」

「……」

「だから今回、賢が大輔と喧嘩をしたのを見て、ちよつとびっくりしたんだ。パタモンが進化をしてデビモンと戦うことすら嫌がつていたのに、まさか自分から大輔と喧嘩をするなんてね」

「……」

今まで争いごとを避けてきた賢にとって、この冒険はとても酷なものとなるかもしれない。

しかしパタモンの死で立ち止まっつていては、これから待ち受けているであろう困難を乗り越えることはきつと出来ないだろう。

帰りたいと願つても、この世界を救うまでは元の世界に帰還することは叶わない。

帰るために、戦わなければならぬのに、両親の離婚をトラウマと

して抱えて、争いごととは嫌いだと目を閉じ耳を塞ぐことは許されないのである。

ここは現実の世界とは違う。

兄の治の背中に隠れていればいい世界ではない。

歳もトラウマも、この世界では関係ないのである。

「ありがとう、大輔。賢の本心を知れてよかった。やっぱり大輔にも聞いてよかったよ。大輔に聞かずに賢の話だけ聞いていたら、きつと賢の本心を知らずに、見当違いな慰め方をしていたかもしれない」

「……いえ、俺は、別に」

「うん。そんなつもりじゃなかったのかもしれないけれど、僕がお礼を言いたいんだ」

友達と仲たがいがいするのが嫌で、今までは自分の意見を押しとどめていた賢が、初めて自分の本音を友達にぶつけたのだ。

だから今回のことはいいい機会だと、治は笑いながら立ち上がる。

「……そろそろ寝ようか。これから5日間は海の上で、特にやることがないとは言え、規則正しい生活は身に着けておかなくちゃ」

戻ろう、と治が言うので、大輔も立ち上がってテントに戻る。

ベッドに上がり、お休みと言った治にお休みなさいと返して、大輔は寝転がった。

治も自分のベッドに、横になる。

布団を被るまでを見送って、大輔は寝返りを打ち、治には背中を向ける体勢を取った。

ブイモンは、まだ眠っている。

「……………」

太一のいびきだけがうるさい、テントの中。

大輔は治との会話を頭の中で再生させる。

——父さんと母さんが、嫌いなんだ

ひよんなことから知ってしまった、治の本心。

治ほどのいい子でも、お父さんとお母さんが嫌いだと思うことができるのかと、驚いた。

確かに意外ではあった。

成績優秀で、品行方正で、運動神経もよくて、先生の言うこともよく聞く、学級委員も務めている所謂「いい子」とされている治が、悪いこととは無縁だと思っていた治が、「両親が嫌い」だなんて「悪い子」みたいなことを思っている。
救われた気がした。

両親を嫌うことは、悪いことだって分かっていた。
分かっていたから、大輔は誰にも言わなかった。

でも今、少しだけ胸のもやもやが晴れた。

治のような「いい子」ですら、両親が嫌いだと思っている。

いいんだ、自分も、嫌ってもいいんだ。

嫌いでもいいんだと、言われた気がした。

自分を産んで、育ててくれた親を好きでなければいけない、愛していなければならぬなんて、そんな「呪い」に縛られる必要はないのだと。

「同じ」だったのだと。

気が付いたら、治を肯定する言葉が大輔の口からするりと飛び出していた。

治は驚いていたし、自分でもびっくりするぐらいするっと口から出していた。

どうして、と追及されたらどうしよう、と内心はびくびくしていたが、治は何も言っただけでなかった。

……いつか、自分も両親を嫌っていることを言えたらいいな、と思った。

話そのまま流れてしまっただけで、自分も同じ気持ちだと言うことは叶わなかったが、きつと治なら否定しないでくれる。

そのためには、賢と仲直りした方がいいのだろうけど……。

ごろん、ともう一度寝がえりを打って、天井を見上げる。

どうして治が急にそんなことを言いだしたのか、大輔には想像がつかない。

ただ賢と喧嘩をしていることを悲しんでいるわけでも、怒っているわけでもないことだけは伝わった。

談笑している最中でも、賢と仲直りしろなんて一言も言っていない。言っていない。

お友達と喧嘩をすれば、先生や大人がすっ飛んできては、同じことを言う。

喧嘩をしないけません、ごめんなさいをして、仲直りしましょう。

例えばどんなに相手が悪くて、大輔が手を出したわけではなくとも、経緯を見ていなかった大人はどちらも悪いと決めつけてお互い様、と喧嘩両成敗と謝罪のさせ合いをさせる。

ぶつきらぼうにごめんなさいとお互い返せば、大人達はその張りぼての平和を満足そうに見つめて、うんうんと勝手に納得する。

大輔は後に引くタイプではないため、喧嘩をしたお友達とも翌日にはけろっと仲良く遊んでいるのだが、それだけはどうしても納得が来なかった。

そういうのを、大人の自己満足だと、姉は不服そうに言っていたことを思い出す。

でも治は、言わなかった。

治の口から出てきたのは、ありがとうという言葉だった。

——賢に対する怒りが、少しだけ収まった気がする。

でもまだ当分許してやるつもりはない。

パタモンに酷いことを言ったのだ、パタモンが生まれてきて、ちゃんとパタモンにごめんねって言ったなら許してやろう。

うつらうつらと閉じていく意識の向こうで、そんなことを思いながら大輔は眠りについた。

明日も晴れますように。

『ごめんなさい』

深い闇の中に沈み込んでいた意識が、泡を立てながら浮上していくのを確かに感じた。

目が覚めて最初に飛び込んできた景色は、青いキャンパスに、筆についた絵の具を飛び散らせた空と、穏やかな瑠璃色の海。

ほんやりとした目で空を見上げていたら、潮の匂いがブイモンの鼻腔を攪り、少しべたつく風が頬を撫でる。

ざざあんという波の音がして、地面が微かに心地よく揺れていた。

『……………う？』

事態が飲み込めなくて、ぼーつとしたまま寝転がっていると、再び眠気が襲ってきた。

眠い、と目を閉じようとしたら、空の明るさを遮る影が生まれる。

あら、と優しい声が降ってきた。

「ブイモン、起きたのね？」

『……………』

「大丈夫？」

『……………』

「まだちよつとぼーつとしてるみたいね。私のこと、分かる？」

『……………そ、らっ…』

覗き込んできた陰は、眩しいオレンジの髪。

ピヨモンのパートナーである武ノ内空だった。

穏やかで優しい笑みを浮かべながら見下ろしてくる空を、しかしブイモンは何も考えられずに見上げるだけだった。

しばらく見つめ合うような体勢になり、空は困ったように眉尻を下げて笑った。

「うーん、もしかしてまだ眠い？困ったわね、もうすぐサーバ大陸に着

くんだけど……」

『ソーラー？どうしたの？』

しよぼしよぼとする目に逆らえずに殆ど閉じかけている赤い眼に苦笑していると、少し離れたところからピヨモンの声がした。

ぴよ、ぴよ、ぴよ、とひよこのような鳴き声をさせ、歌うように空を呼び掛けて近づいてくる。

後ろから抱き着いてきたピヨモンを軽く窘めながら、ブイモンが一瞬目を覚ましたことを教える。

「でもまだ眠そうなのよ。困ったわねえ、もうサーバ大陸が見えてきてるのに……」

『そっかあ。ブイモン、まだ眠い？』

『……………』

何かを話しているようだが、眠くて脳みそが全く働いていないせいで何を話しているのかも、ブイモンは判断できない。

殆ど閉じている瞼も、もう閉じている。

あ、と空はそれに気づいて声を漏らした。

「うーん、これは……」

『どうしようか、ソラ？』

「……とりあえず、大輔呼びましょうか」

本格的に眠ってしまったブイモンを、空は再度苦笑しながら見下ろし、太一や治と一緒にホエーモンの頭部でもしっかりと立っていられるギリギリのところまで、近づいてくるサーバ大陸にはしゃいでいる可愛い後輩を呼ぶ。

はい、つていい子の返事をして、空の下に駆けてくる。

その際、賢とぼちつと目があった大輔だったが、大輔はすぐに目を逸らして賢を見なかったことにした。

あまりにもあからさまで、空は眉を顰めたが、対角線上にいた治の視線を感じたので、開きかけた口を閉じる。

大輔と賢は、今絶賛喧嘩中である。

何が理由なのか、何があったのか、2人が喧嘩をしていた時、上級生達はテントで眠りにつこうとしていた。

うとうとと瞼が視界を閉ざそうとして、意識も深淵に誘われかけていた時に、テントの外から聞こえてきた怒号にも似た大きな声。

びっくりして飛び起きて、一瞬何が起きたのか分からず、しばらくベッドの上で挙動不審気味になっていたが、テントの外から声が聞こえてきたことに気づいて、同じく大きな物音を聞いて飛び起きたミミとヒカリを伴い、テントの外へと出た。

そこで空を筆頭とした子ども達が見たのは、息を切らして向かい合っている大輔と賢であった。

大きな声はどうやら2人が喧嘩をした喧騒だったらしい。

一触即発の険悪な雰囲気をつらつらしていたが、太一と治が間に入ったことで、それは免れた。

しかしその日を境に、大輔と賢は一切会話をしなくなってしまった。

サーバ大陸に着くまで、ホエーモンの胃袋の中で5日間過ごしていたのだが、その5日間大輔と賢は口を聞かなかったのである。

というより、大輔が一方的に賢を無視していた、という方が正しいだろう。

何があったのか気になるころではあるが、上級生達はみな、大輔の頑固さをよく理解しているので、向こうから言ってくれるのを待つしかない。

……賢には申し訳ないが。

「……っという訳なんだけど」

「えー？ ブイモン、また寝ちやったんですかあ？」

ひとまず大輔と賢の問題は隅に置いておくことにして、空はブイモンが先ほど起きたが再び寝入ってしまったことを伝える。

見るからに不満げな様子の大輔に空は苦笑するしかなかった。

誰かに触れられることを極端に嫌がるブイモンは、眠っていても大輔以外の誰かに触れられていることが分かるようで、上級生が背負ってやることが出来ない。

だからと言って大輔のみに負担を被せるのもどうか、と上級生達は頭を悩ませていた。

ブイモンの大きさは大輔とほぼ同じぐらいだ。

ちよつとだけブイモンの方が大きいかな？という大輔が怒るの
で言わないが、ともかく彼らの身長はそう変わらないので、大輔が背
負って行けば間違いなく足は遅くなるだろう。

サーバ大陸に着いたら連絡をくれとゲンナイにも言われているの
で、その時に相談しよう、ということになり、一行はもう目と鼻の先
まで見えてきているサーバ大陸を見据えていた。

子ども達と沖で待ち合わせたことから、身体のかななホエーモン
は、浅瀬に近づくことはできない。

そのため、ホエーモンとは沖合でお別れとなる。

ホエーモンと合流するために作った筏に再び乗って口から出して
もらった子ども達は、ホエーモンに手を振りながら別れを告げた。

手を振る代わりに潮を吹いて挨拶を返してくれたホエーモンは、子
ども達がサーバ大陸の浜辺に上陸するまで、沖合で見守っていてくれ
た。

すー、つと。

太一は両腕を横に広げ、大きく深呼吸をした。

昼間はホエーモンの頭部で代り映えのしない、果てしなく何処まで
も続く海を眺め、夜になればホエーモンの胃に避難して海中を進むと
いう生活を繰り返すこと、約5日間。

ようやく地面に足をつけることができる、と子ども達はみんな安堵
の息を漏らす。

ずーつとホエーモンに運んでもらって、楽ちんだったとはいえ、代
り映えのしない海を眺めながらの移動は、それはそれで息が詰まっ
た。

おまけに何処かの誰かさん達が喧嘩をしまして、ちよつとだけ
みんなの空気が悪かった。

二重の意味で、新鮮な空気が美味しい。

賢の懐中時計により、丁度昼時と知った子ども達は、昼食を取る。

今日の昼食は丈のリクエストにより、白米とみそ汁、塩鮭、甘い卵焼き、それから納豆だった。

手早く済ませ、サーバ大陸に着いたことをゲンナイに伝えるべく、光子郎はパソコンを開いた。

ファイル島で、アンドロモンの工場でゲンナイと対面した際に、サーバ大陸に着いたらここをクリックするように、と言われていたアドレスがメモ帳の機能にメモされている。

文字は青くなっており、その下には線が引かれていた。

これはリンクと呼ばれる機能で、これをマウス等でクリックするとそのページに飛ぶことが出来る。

光子郎はメモ帳のリンクをクリックする。

ぱ、と画面が切り替わり、何かがダウンロードされた。

それは、見たことのない通話サイトだった。

そこにはゲンナイの名前がリンク付きで貼られており、それ以外は何もないシンプルなページだった。

恐らくこのリンクをクリックすれば、ゲンナイと通信が出来るようになるのだろう。

光子郎は迷わずクリックする。

“LOADING”という文字が浮かんで、コール音が数秒。

《やあ》

ぱ、と画面いっぱいにはゲンナイの顔が表示された。

「こんにちは、ゲンナイさん。先ほどサーバ大陸に到着して、今お昼ご飯を食べ終わったところですよ」

《そうか。概ね予定通りだね》

「はい。それで、僕達はどうすれば……？」

《まずは、私の方で用意した案内デジモンと合流してほしい》

「案内デジモン、ですか？」

《ああ……このサーバ大陸はファイル島とは比べ物にならないほど強く、深い闇が渦巻いている。だからこちらにも思うように動けなくてね

……

ファイル島でもそうだったように、このサーバ大陸でもその闇を利用して世界を手に入れようとする悪いデジモンはいるらしい。

それを光子郎の傍らで聞いていた賢は、抱えた卵を抱きしめる腕に力を込めた。

そのことに気づいたのは、喧嘩をしてしまった大輔と、ファイル島と発つ前から口数が少なくなってしまったヒカリだけだった。

《それで、どうやら今回の敵はデビモンと違って、ネットワークもそれなりに使いこなしているらしくてね。こちらがネットワークなどを使って仲間と通信をしていると、正確に位置を割り出して襲ってくるのが何度もあった。だからなるべくこの通信も控えたいんだ》

「それで、案内デジモンを？」

光子郎の斜め後ろにいた治が、ずり落ちかけた眼鏡を指で押しながら聞き返す。

ゲンナイは小さく頷いた。

《その案内デジモンには君達の紋章を隠した場所を教える。だからそのデジモンに案内してもらいながら、紋章を集めてくれ。これ以上はそろそろ危険だから、詳しいことは案内デジモンに聞いてほしい》

「分かった。で？その案内してくれるデジモンってのは？」

《君達に送った地図に座標を送っている。案内してくれるデジモンとはそこで合流してくれ。ああ、そうそう。ミミに頼まれていたものも用意できたから、後で送るよ》

ファイル島を出る前に、ミミが頼んだスキンケアやヘアケアの類のことだろう。ミミは両手を合わせて喜んだ。

必要事項を伝え終えたので、光子郎も挨拶をして通信を切ろうとした。

が、その前に割り込んだ声がある。

「あ、あのーちよつといいですかー！」

大輔だった。

全員の注目を浴びることになったが、それに構わず大輔は画面の向

こうにいるゲンナイに話しかける。

「あの、もう5日経ったけど、ブイモン、さつきちよつとだけ起きたけど、また寝ちゃって。幾ら話しかけても起きなくて」

「ああ、そうだ！ゲンナイさん、ブイモンが全然起きないんです。ブイモン、大輔と賢くんとヒカリちゃん以外に触られるの、すごい嫌がるから私達が運んでやるのが出来なくて……どうにかありませんか？」

また上手く言葉を繋ぎ合わせられなくてしどろもどろになっている大輔に、空が助け船を出す。

2人の言葉に、他の子ども達は少し離れたところで熟睡しているブイモンに視線を向けた。

デビモンを倒して、ファイル島を出発してから広大な海をどんぶりこと渡って5日も経つのに、ブイモンは上陸直前に一瞬目を覚ましただけで、その後また眠ってしまった。

幾ら呼びかけても揺さぶっても、ブイモンは起きなかった。

諸々の理由でブイモンを運ぶことが出来るのは大輔と賢とヒカリの、最年少3人だけだ。

しかし大輔と賢は今喧嘩の真っ最中だし、賢はまだ卵から帰らないパートナーを守らなければならなかったために、ブイモンを背負うことはできない。

だから残りはヒカリだけなのだが、大輔は女の子に負担をかけさせたくないと言っているの、実質大輔だけになる。

上級生としては下級生にそんな負担をかけさせられないので、何とか出来ないものかとダメ元でゲンナイに頼んでみた。

ゲンナイも想定外だったようで、困ったように眉尻を下げて小さく唸った。

《うーん、そうか……もう5日も経っているし、アンドロモンの見立てでは数日で起きるはずだったのに……直接見てみないと分からないが、分かった。大輔でもブイモンを運べるようにしてみるよ》

「あ、ありがとうございます！」

それじゃあね、とゲンナイは笑顔で手を振り、そこで通信は途切れ

る。

光子郎はゲンナイから送られてきたサーバ大陸の地図を開いた。

ファイル島の小さな点と違い、サーバ大陸は広い。

子ども達がいる箇所が青く点滅しており、マウスのカーソルを使つて地図を少しずらしてみたところ、赤く点滅している箇所があった。

恐らくここに行けと言うことだろう。

軽く準備を済ませ、子ども達はゲンナイに指定された箇所に向かつて歩き始めた。

日はもう傾き始めている。

ファイル島にいた時と全く変わらない夕陽の色は、この世界に危機が迫っているとは思えないほど綺麗だった。

今日はここでキャンプしよう、という太一の号令の下、子ども達は日が暮れる前に寝る準備をした。

とはいっても、ゲンナイさんが用意してくれた寝床用のテントに、身体も洗えるシャワー用のテント、食事のテーブルのお陰で子ども達は、ここに来たばかりのような苦勞をしなくて済む。

それでも太一が早めにキャンプしようと決めたのは、大輔がいつもよりも早く疲れてしまったからだ。

当たり前だろう、大輔は初進化を果たしてからずっと眠り続けているブイモンを背負って歩いているのだ。

全身から力が抜けている者を運ぶのは、デジモンであっても大変だということがよく分かった。

誰よりも息を切らして、汗を滝のようにぐっしよりとかきながら、みんなの後を一生懸命ついてくる姿は、見ていてとても気の毒である。

かといって手伝ってやることはできない。

文句も愚痴も一切言わずに、それが当たり前だと言うようにブイモンを背負う大輔を気遣い、少し早いがキャンプを決めた次第である。

夕飯は各自好きなものを、光子郎のパソコンから出してもらおう。

ミミが真つ先に生クリームとイチゴ添えのチャーハンをリクエストした時は、全員の時が一瞬止まったが、見ないふりをした。

丈がものすごい何か言いたそうにしていたけれども、全身をぶるぶる震わせて言いたいことを全てのみ込んで我慢した。

気になったことや間違ったことは口にして訂正しなければ気が済まない丈にしては、かなりの譲歩である。

ゴマモンが慰めるように丈の足を前足で優しく叩いたら、丈はゴマモンに愚痴をこぼし始めた。

うんうん、つて嫌がらず鬱陶しがらず、愚痴を聞いてやるゴマモンは、生意気な性格からは考えられないほどいい奴である。

「俺、今日はカレー食いたいっすー！」

「カレー、ください」

それは、ほぼ同時だった。

光子郎のパソコンから、各々が食べたいものを出してもらって、順番が回ってきた時。

大輔と賢がほぼ同時に、同じメニューをリクエストした。

はた、とお互いが顔を見合わせ、しかし大輔はすぐにそっぽを向いて光子郎にカレーを催促する。

光子郎はどうしようかと困惑しながら太一と治の方に視線を向ける。

2人とも小さく頷いたので、特に言及したり賢をフォローするような言葉をかけずに、大輔にリクエストされたカレーのデータをパソコンから出して、大輔と賢に渡した。

ありがとうございまーす、つて笑顔で受け取ったらさっさと離れて行ってしまった。

賢は何か言いたそうに腕を伸ばしかけて、止めた。

小さく溜息を吐き、大輔が行った方とは反対の方に行つて、卵を抱えなおしてカレーを食べる。

自分達でフォローするから、今は傍観してほしいと太一と治に言われているから、その通りにしているが、こうして目の当たりになっていると何もしてやれないジレンマで、とてつもなくもどかしい。

テントモンが腹減ったと促してくるのを適当に宥めてやりながら、光子郎はハンバーグのメニューを選択して、テントモンに渡してやった。

静かな、夜だった。

煌めく星々は静まり返る街を照らすには光が小さすぎて、夜空に消えている。

車が通り過ぎる音すら聞こえず、賢は尿意を催して目を覚ました。

まだ眠いと訴える身体を徐に起こし、同じベッドで寝ていた兄を叩き起こす。

おにいちゃん、といれ。寝ぼけて籠った声でそう言えば、兄は枕元に置いておいた眼鏡を手探りで探し当て、引っかける。

大きな欠伸をしながら、兄はベッドから降りて賢の手を引いてトイレに付き合ってくれた。

子ども部屋から廊下に通じる扉のノブに手をかけた兄は、音を立てないようにそうつと、ゆっくりとノブを下ろした。

かちやり、という音が嫌に響いて兄弟はぎくりと肩を震わせたけれど、それ以外の音が何も聞こえなかったので、小さく胸を撫で下ろして廊下に出た。

真つ暗な廊下。

電気をつけると目が冴えてしまうからと、兄は電気をつけずに窓から漏れる街の灯りを頼りにトイレへと向かった。

賢は、夜の廊下が好きではなかった。

概ね小さい子どもと言うのは、夜の時間帯は家ではあっても好きではないものだが、賢のそれは恐らく他の子どもの比ではなかったと思う。

何も無いはずのところをじーっと見ていたかと思うと、泣きそうになりながら兄や母にしがみつくことは日常茶飯事だったし、特に大きな音がしたわけでもないのに耳を塞いだり、不可解な行動をよくして

いた。

最初は不思議に思っていた兄や母だったが、そんなことをしよつちゆうしていればいつしか日常の一部となり、誰も気にしなくなつた。

季節はそろそろ暖かくなりそうな、春の先ごろ。

トイレを済ませて手をしっかりと洗い、兄もトイレをして一緒に戻ろうとした時だった。

どおおおおおおおおおおおおん!!

下から突き上げるような爆音と振動。

ぎゃ、と賢は小さな悲鳴を上げて兄にしがみつく。

地震のような振動が2秒ほど。

兄は賢を抱きしめてその場にしゃがむ。

揺れが収まり、兄はそろそろと顔を上げて辺りを見渡す。

頭を抱えてうずくまっていた賢が見上げた兄は、眉を顰めて不思議そうな顔をしていた。

立ち上がって賢から離れていき、リビングの窓へ一直線に走っていく。

賢も待つてと小さな声で兄に呼びかけながら後を追った。

ぺたぺたぺた。

程よい弾力のあるものが硬いものにくっついて離れていくような音を立てながら、賢はよちよち走る。

がらり、兄が窓を開けた。

びよお、と冷たいビル風が窓から屋内に入り込んでくる。

兄弟が下を覗き込むにはまだ高い塀に、兄はリビングから椅子を引きずつてベランダに出した。

よじ登り、塀の下を覗き込んでいる。

兄は、何をしているのだろう。

兄と同じ景色を見たい賢は、兄が立っている椅子に駆け寄つてよじ登り、兄の前に割り込むように立って、そして――。

「っ、はあ、はあ……！」

がばり、とベッドのクッションを揺らしながら、賢は起きた。

詰まっていた息を忙しく吐き出して、全身を硬直させながら小さく肩を震わせ、視線は何処を見るでもなく泳いでいる。

薄暗いテントの中は、まだ誰も起きていない。

枕元に置いてある懐中時計に手を伸ばして、ボタンを押して蓋を開ける。

寝息すら聞こえてこない静寂なテントに、かち、かち、かち、と微かに針が動いている音が嫌に響いた。

時刻は、6時を少し前を差している。

起きるにはまだ早い時間だけど、目はすっかり冴えてしまってもう1度寝ようと言う気になれない。

溜息を吐いて、掛け布団を握りしめている手からゆっくりと力を抜いていった。

こつん、と下ろした手に何か当たる。

卵だった。パタモンが眠っている、デジたまだった。

「……………」

苦しそうな表情を浮かべながら、賢はデジたまにそつと手を伸ばす。

手を置く。暖かい。

はじまりの町で知った、デジたまの孵し方を、この数日間何度も行っただけれど、パタモンはいつまで経っても生まれてきてくれなかった。

卵は暖かいから、中で死んでしまっているという事は絶対になり、と光子郎が言ってくれたのに、パタモンは数日経っても生まれてきてくれないのである。

どうして生まれてきてくれないのかなあ、って賢はぼんやりと光のない目でデジたまを見つめながら、両手を伸ばして抱きかかえる。

ここにいるのに、ここにあるのに。

パタモンは、生まれてこない。

ここに来る前、みんなで筏を作っていた時に話しかけてきてくれたエレキモンだつて、大丈夫だつて、すぐに生まれてきてくれるよつて言っていたのに……。

「賢……う？」

びくり、と肩を震わせ、弾けるように振り向く。

まだ起きないと思っていた兄が、上半身を起こして賢を見ていた。

「どうしたんだ？」

「……お、兄ちゃん」

ど、ど、ど、と心臓が激しく鼓動して、兄を呼ぶ声がひっくり返つた。

目をぼんやりさせて、デジたまを抱く腕が見るからに震えているのが分かつて、治は賢の異変を察した。

枕元に置いておいた眼鏡を手に取り、顔にかけてベッドから降りた。

僅かな振動を感じたガブモンが、うーんとか言いながら寝返りを打つ。

それを苦笑しながら一瞥したあと、治は賢のベッドに腰かける。

2人分の体重を受けたベッドのクッションが、僅かに沈んだ。

「どうしたんだい？眠れないのか？」

賢の隣に座った治が、優しい声色と表情をしながらそう問いかけた。

その顔は、まだ一緒に住んでいた時、怖い夢を見たり母の怒号に怯えたりしていた賢を宥める時に見せてくれた、あの顔と全く変わらなくて、賢の胸が締め付けられた。

涙が浮かびそうになつたけれど、賢は堪えるように兄から顔を背けてデジたまを見下ろす。

「……………」

「……賢が懸念……心配している、というか、心に引つかかっているのは……パタモンのことかい？それとも……大輔のことかい？」

ぐ、と凶星を突かれて賢は唇を噛みしめる。

パタモンのこともそうだが、賢は大輔のことでも頭を悩ませていた。

賢は今、大輔と喧嘩の真っ最中なのである。

喧嘩をしている、というよりも一方的に無視をされていると言った方が正しいだろう。

大輔に話しかけたくとも、大輔は目を合わせるとぷいっとそっぽを向いて、止める間もなく何処かへ行ってしまうのだ。

これでは仲直りしたくとも、ごめんなさいすら言えない状態である。

しかし今まで喧嘩をしたことがない賢は、ごめんなさいという言葉は知っていてもどうやって仲直りすればいいのかまでは分からなかった。

身近で、喧嘩をした両親はそのまま仲直りすることなく離ればなれになったから、参考にはならない。

兄とは喧嘩をする前にどちらかが譲ってしまうから、そもそも喧嘩にならないのだ。

喧嘩を知らないから、仲直りの仕方も分からない。

1度ヒカりに相談してみたのだが、ヒカリも兄とは喧嘩をしないしお友達ともしたことがないから、分からないらしい。

ごめんね、とヒカリは謝ったけれど、ヒカリは何も悪くない。

そう言えばヒカリの様子がおかしかったが、一体どうしたのだろうか。

ファイル島を出た辺りから、ずーっとぼんやりしていて、太一や他の上級生達が話しかけると、抜けた魂が戻ってきたようにびっくりするから、上級生達は大輔と賢とは別の意味で心配していた。

「……賢？」

もんもんと考え込んでいたら、どんどん考えが脱線していき、何も言わない賢に治が声をかける。

は、と我に返った賢は首を左右に振って脱線しかけた考えを振り払う。

大輔のこともそうだけれど、それも大事だけれど。

「……パタモン」

「ん？」

「……パタモン、いつ、生まれてきてくれるのかなあ」

数日経っているのに、全く生まれてくる気配のないパタモン。

大輔と仲直りしたいのと同じように、パタモンとも仲直りがしたいのに、パタモンはいつまで経っても生まれてこないのである。

大輔と違って、パタモンとは明確な喧嘩をしたわけではないのだけれど、初めて進化をした時は2人の心はかなりズレたところにあつた。

賢は戦いたくない、パタモンは守るために戦いたい。

2つの反発し合う気持ちが存在していたにも関わらず、正常に進化したことはほぼ奇跡に近いが、今は賢はそんなこと知る由もない。

自分さえ我慢すれば、何も言わなければ、口を噤んでいれば丸く収まるのなら、それでいいと思っていた。

友達との絆を壊さずに済むのなら、自分は物言わぬ貝でいい。

けれどこの世界は、そしてパタモンは、それを許してくれなかった。自分の世界に帰るためには、戦ってこの世界を救わなければならぬ。

そして戦うためには、パートナーであるデジモンを進化させてやらなければならない。

分かっている。分かっているのだ、本当は、ちゃんと。

戦わなければ生き残れない、強くなければ護れないという、この世界の恐ろしくシンプルなルールも。

他の世界から人間の子どもを呼ばなければならぬほどに、闇に支配されつつあるこの世界の、最後の希望であることも、ちゃんと分かっている。

賢は賢い子である。聡い子である。

戦いたくないなんて駄々をこねても、それが通用しないことぐらい、ちゃんと分かっている。

だってデビモンは、賢がどれだけ戦いたくないと叫んでも願って

も、その恐ろしい魔の手を伸ばすことをやめなかった。

子ども達を本気で消そうとしていた。

最後には闇を取り込みすぎておかしくなつたとエンジエモンから教えてもらったから、ああなることは本意ではなかったのだろうとは思うけれど、それでも闇の力を抜きにしてもデビモンは子ども達を戦場に引きずり出してきた。

まだ10歳前後の子ども達なのに、大人の庇護をまだまだ必要とする子ども達なのに。

この世界は、そんな子ども達の都合なんか知らないのだ。

異世界から来た者達であつたとしても、この世界のルールには従わなければならぬ。

弱き者に、生き残る資格はない。

子ども達が生きている世界よりも、ずっと厳しい世界だつた。

帰るためには、この世界を救つて、生き残らなければならない。

分かっているのだ、それぐらい。

賢い子どもが、そんな簡単なこと分らないはずがない。

同い年の大輔や、ヒカリだつて理解している。

それでも、トラウマを抱えた少年には、どうしても1歩が踏み出せなかつた。

「パタモンは、僕のことを護ろうとしてくれてたのに、僕はそんなパタモンから目をそらしちゃつた。見ないふりしちゃつた……パタモン、僕のこと、嫌いになつちやつたのかなあ……」

大好きなパートナーを護るために、その手を離すことを選んだパタモン。

人間の子どもとデジモンは、どう足掻いても違うのだと、突きつけられた気がした。

大輔とブイモン、ヒカリとプロットモンと一緒に、上級生やそのパートナー達に護られていればいいと思つていた賢の願いは、星屑にさえ届かない。

パタモンは、デジモンだ。

非力でも、パートナーを護る「武器」でいなければならなかつた。

賢と違って庇護に甘んじることは許されなかった。

そのことを本能的に悟って、パタモンは「選んだ」のだ。

賢の横に並ぶのではなく、前に出ることを。

それは、パートナーデジモンの「運命」である。

だからこそ、賢はパタモンから目をそらしてしまったのだらう。

そんなことをすれば、パタモンが悲しむと分かっていたのに。

大輔のことだってそうである。

分かっているのだ、謝罪の言葉を口にしなければ、せつかく友達になつた大輔と二度とお話ができないことぐらい。

でもどうやってごめんなさいをすればいいか分からない。

怒らせたのなら、ごめんなさいをすればいいのは分かっているけれど、喧嘩をしたことがない賢には、分からない。

「……そんなこと、ないよ」

弟とも親友とも喧嘩をしたことがない治も、賢と同じで仲直りの仕方は知らない。

パタモンに嫌われた、大輔と仲直りしたいと思っている弟に、治はそう言っただけのことしか出来なかった。

地平線の向こうから登り始めたお日様が、月と星を追いかけるように昇ってきて、暑さと寒さを防いでくれるテントの布の向こうから、薄らと朝日の白い光が透けて入ってきた頃、子ども達は目を覚ます。

おはよー、と子ども達は口々に挨拶を零し、着替えたり顔を洗いにいったり、軽く運動をしたりと、各々朝の準備を行う。

早めに起きていた賢は、みんなが起きた頃に毎朝の日課である、懐中時計のネジを回した。

かち、かち、かち、と針が時を刻むのを耳にしながら、賢ものろのろと着替えをする。

だいぶ古いその懐中時計は、腕利きの職人が作ったものなのだらう、少しも狂うことなく正確に時を刻んでいる。

限界まで回せば、24時間持つその時計は、今8時を指している。

その時、ちよつとした朗報があった。

それは、みんなが起き出して、各々の準備を終えようとしていた頃だ。

洗顔を終えた大輔が今日も1日ブイモンを背負って行かなきゃいけないんだなあつてちよつとげつそりしていたら、自分が使っているベッドに青い陰が座っていた。

ブイモンだった。ブイモンが、やっと目を覚ましたのである。

暫く目を覚まさずに、1日中背負っていくことを覚悟していた大輔は、何が起こったのは最初は分からなかった。

理解するのに時間がかかった大輔は、数秒のフリーズを経て再起動し、英語で捲し立てながらテントの外にいる先輩達に知らせた。

太一達は面食らっていたが、一行の中で唯一英語が理解できる治が翻訳したことで、歓喜の表情に変わる。

ここに上陸する直前、1度だけ目を覚ましたつきり、あとはずーっと眠っていたブイモンのことをずっと気にしていた子ども達は、森中に響き渡るほどの悲鳴やら歓声やらを上げて、目を覚ましたブイモンを喜んだ。

しかしテントに入って、ブイモンの様子を確認した一行は、すぐに静まり返ってしまう。

確かにブイモンは目を覚ましたが、様子がおかしかった。

赤い眼をとろんとさせて、今にも眠ってしまいそうだった。

こつくりこつくりと何度も船を漕いでいるし、完全に目を覚ましたとは言い難い。

しかし大輔が手を差し伸べれば、ゆるりとはあるがその手を取り、引つ張れば立ち上がって歩くまでは可能になっている。

その足取りは遅いが、大輔はこれから数日は覚悟していた地獄のおんぶ日和を回避できた、涙を流していた。

んな大袈裟な、と思ったけれど、自分とそう身長が変わらないデジモンを背負って歩き続けるとか、それ何て罰ゲーム、と言いたくなるような苦行であることは間違いないので、大輔が咽び泣くのも無理はないだろう。

朝食を取った一行は、昨日の続きで先へ進む。

ブイモンにとつては数日ぶりの食事だったのだが、それでもブイモンは覚醒することなく、一口二口を口にしなければ、またこつくりこつくりと船を漕いだ。

完全に覚醒するにはまだ数日かかるだろう、というのは丈の見解だった。

ブイモンのペースに合わせて、一行は目的地へ向かう。

ゲンナイがくれた地図によると、これから一行が向かう先にあるのは、コロモン達が暮らしている村だそうだ。

コロモンの村、と聞いて一行が思い浮かぶのは、やはりというか太一のアグモンだろう。

初めて出会った時以来その姿を見ていない、薄いピンクでコロコロとしたフォルム。

そのコロモンが住んでいる村が、この先にあるという。

案内してくれるデジモンとは、コロモンの村で合流する予定だ。

そのデジモンとは、一体どんなデジモンなのだろうか。

ゲンナイから特徴を聞くのをすっかり忘れていたことに気づいて、太一達は苦笑した。

「ゲンナイのおっさんのこと、悪く言えねえな……」

「とりあえず村に着いて、そのデジモンと逢ったら謝罪しようか……」

子ども達のサポートで、色々とうっかりをしでかしたゲンナイさんだったが、自分達も対外だな、と太一と治は乾いた笑いを漏らす。

いつの間にか砂漠だった周りの風景は、森のエリアに変わっていた。

ファイル島でも、ゲンナイからテントをもらう前に砂漠のエリアを横切ったが、その時と比べると日差しは強くなり、適度な風も吹いていて、あの時のような苦労を感じることはなかった。

それでも、その砂漠のエリアが終わりを告げて、森のエリアに足を踏み入れた子ども達は、安堵の息を漏らした。

ファイル島にいた時と同じ空の天辺に、太陽が鎮座している。

賢の時計でちょうど昼時だと分かった一行は、そろそろ昼食を取ろ

うかとしていた。

その時である。アグモンが突如立ち止まって、鼻をひくひくさせたのは。

どうした、つて太一が聞くと、懐かしい匂いがすると行って立ち止まった時と同じように、急に走り出したのである。

少々入り組んだ森ではあったが、アグモンは漂ってくる懐かしい匂いに従って迷うことなく森の中を突き進んでいく。

子ども達は、その後を追いかける。

大輔も、眠そうなブイモンを引つ張って、上級生達に置いていかれないように必死に走った。

ずんずん進んでいくアグモン、後ろを振り返らずにパートナーの後を追いかける太一。

少しずつ距離が開いていく大輔とブイモンに気づいて、ヒカリとプロットモン、それから空とピヨモンが大輔のスペースに合わせて一緒に走ってくれた。

更に、それに治が気づいて、太一とアグモン、それから大輔達が視界に映るギリギリのところを走って、どちらも見失わないようにしてくれた。

やがて見えてきたのは、森の風景としては不自然な人工物。

村だ！とアグモンは言って更にスピードを上げた。待てよ、つて太一は声をかけながらもその足を止めない。

だいぶ距離を離されてしまったが、大輔達もその人工物を捉えられるところまで来た。

子ども達の足も、自然と早くなる。

そんな子ども達を見ている、1つの陰に誰一人として気づくことはなかった。

.

おかしな村①

わあ、と子ども達とデジモン達から歓喜の声が沸き上がる。

深い森で、突然開けた場所に辿り着いた一行の視線の先に、集落があった。

樹々の間からちらほらと見えていた、ひと際大きなゲルが集落の中心に建っている。

あそこからコロモンの匂いがするらしい。

アグモンの進化前であるコロモンはいい子ばかりだから、きつと突然やってきた子ども達を、嫌な顔することなく歓迎してくれるだろう。

案内してくれるデジモンも待たせていることだし、子ども達は小走りで集落へと向かう。

『……あれ?』

それは、ほんの僅かな違和感だった。

懐かしい同族に逢えるとわくわくしていたアグモンだったが、村に近づいていくにつれその足が遅くなっていく。

周りを走っていた子ども達は、足取りが遅くなっていくアグモンに気づかず、そのまま走って行く。

「どうした、アグモン?」

『……違う、ここ』

立ち止まったアグモンに気づいたのも、その眩きを拾ったのも、太一だけであった。

コロモンの村に到着した一行は、まずテントの大きさに驚いた。

何故かって、そのテントは1番背の高い丈が身を屈めれば何とか入れるほどの大ききだったからだ。

コロモンは幼年期Ⅱというレベルで、アグモンやガブモンの1つ前の姿である。

ファイル島で出会った、同じ幼年期Ⅱであるピヨコモンの村は1番小さな賢ですら頭を入れるのが精いっぱいだったほど小さいお家だったのに。

みんなその時のことを思い出しているのか、きよとんとしながらテントを見つめている。

住んでいる地域が違うからだろうか、治と光子郎と丈は探求心に火が付いたようで、額を寄せ合って何やら議論し合っている。

とりあえず誰かいないかとミミとパルモンは、あのコロコロとした丸いフォルムを思い浮かべながら村を散策し始めた。

太一がアグモンを伴って、遅れてやってきたのはその時である。

「こんにちほ〜」

パルモンを伴って、辺りを見渡しながら村を散策するミミの視界に、何かが映った気がして振り向く。

灰色でコロコロとしたフォルムが、もごもごと動いている。

何の疑問も抱かずに、ミミはその灰色のフォルムに近づいて声をかけた。

くるり、と4つほどある灰色のフォルムが振り向く。

あれ？つてミミは首を貸しげた。

そこにいたのは、1度だけしか見たことがないコロモンとは、似ても似つかないものだった。

コロモンは確かピンク色でコロコロしていて、赤い眼をしていて、頭に2つのひらひらとしたものをつけていたはずだ。

しかしミミの目の前にいる子達は、コロコロとしたフォルムで赤い眼は同じだけれど、色は灰色でひらひらした触覚ではなく、もふもふしていそうな羽の形をした耳だった。

赤い眼は同じなのに、コロモンの人懐こそうなくくりくりした目とは違い、三日月のようで一見するととても意地の悪そうな顔である。

パルモンがぎよつとしたように、パグモンだと言った。

「パグモン？」

『弱い者いじめが大好きで、いつつも他のデジモンのことを莫迦にしてるの。ここコロモンの村なのよね？どうしてパグモンが……』

パルモンの言葉が最後まで紡がれることはなかった。

何故なら沢山いるパグモンが、何も言わずに行き成りミミを担いで何処かへと連れて行ってしまったからだ。

幼年期と言えど、沢山の、更に不意を突かれてしまったパルモンは、ひっくり返ってしまう。

その直後に、ミミの悲鳴で異変を聞きつけた子ども達が駆けつける。

パグモンは素早く、子ども達がパルモンの下へ駆けつけた頃には、あつという間に一際大きなテントの中へと入ってしまった。

中に入る。ただのテントとは思えないほど、中はしっかりと作りになっていた。

赤くてふかふかとした絨毯が敷き詰められており、入り口の左右には2階へと通じる階段がある。

その階段に、ミミのテンガロンハットが落ちていたのを空が見つけた。

顔を見合わせた子ども達は、2階へと駆け上がる。

吹き抜けになっている2階の廊下に、今度はミミの鞆が落ちていた。

父親から無断で拝借した、キャンプのセットが詰め込まれているシヨルダーバッグ。

微かに物音が聞こえるカーテンの向こうに、ミミはいるようだ。

太一は遠慮なくカーテンを開けて、ずんずん突き進む。

治も後に続く。光子郎と丈も。

空と最年少達も続こうとして、ふと横にある籠に気づいた。

その籠の中に、ミミのウエスタンスタイルの洋服が乱雑に放り込まれていたのである。

それをじっと見下ろして、考え込む空。

背の低い最年少達は籠の中を見ることはできなかったけれど、端からだらんとミミの服が飛び出ているのだけは見えた。

それをぼんやりと眺めていた大輔とヒカリ、それから考え込んでいた空は唐突に閃き、慌てて太一達を止める。

「太一、だめ！」

「治さん、ストップ！」

「光子郎さん、丈さん！」

3人の切羽詰まったような声に、治と光子郎と丈は立ち止まったが、太一だけは間に合わなかった。

ばさりと、と思いつきりカーテンを引いてしまったのだ。

あちやー、と空は頭を抱えだし、ヒカリは顔を真っ赤にして大輔とブイモンと賢を連れてその場から離れる。

名前を呼ばれて立ち止まった上級生と、賢だけが分かっていたいなかった。

「はあく極楽極楽……」

纏わりつくような湿気と湯気、それから懐かしい匂いと零れる大量の水の音。

こんな状況でなければ、きっと太一だって喜んでいただろう。

しかし太一はその場で硬直した。

何故って、自分と1つしか変わらない女の子が、全裸になってお湯の中で寛ぎのあまり、その綺麗なおみ足を高く上げているのだから。

幸いなことに、彼女は背を向けた状態で座っているし、お湯も濁っているために彼女の全身を眺めることはできない。

頭の中が10割サッカーで占められている根っからのスポーツ少年である太一は、この事態をラッキーと捉えることはなく、ただ茫然と眺めているだけだった。

え、何だこれ、何が起こってるんだ？

ミミがピンチに陥っていると信じて疑っていなかった少年は、ミミを助けるべく心に抱いていた闘争心を燃やすことが出来ずに、ただその場に突っ立っていることしか出来ない。

ミミが気づいていない間に、空が太一を引っ張るなりなんなりすれば、この直後の悲劇を回避することは出来たのだろうが、空もそのままで頭が回らなかつたらしい。

そして案の定、

「いやああああああああ!!何覗いてんのよ!!レデイが入浴中なのよ!？」

異変に気付いたミミが振り返ってしまい、硬直している太一に、辺りにあるものを手あたり次第投げまくった。

ガツン、と風呂桶が太一の顎にクリーンヒットして、ひっくり返る。だからダメって言ったのに、とカーテンを閉めた空が呆れながら、ひっくり返っている幼馴染を見下ろした。

ここまでできて、治と丈と光子郎の男性陣は、空達が呼び止めた理由をようやく理解した。

顔が真っ赤と真っ青のミックスになって、紫色になっている。

それはそうだ、下手をしたら自分達も覗きの現行犯でミミから物をぶつけられていたかもしれないのだ。

女の子の裸という、自分達とは無縁のものを見てしまっていたかもしれないという気恥ずかしさと、罰せられていたかもしれないという恐ろしさが、いつぺんに治達に襲い掛かった。

彼らの場合はしようがないと言えましょうがない、治も丈も男兄弟で女っ気は母親しかおらず、そもそも治は両親が離婚しているせいで、身近な女性は空だけだ。

光子郎は一人っ子である。女の子の複雑な心の機微など理解できるはずもなし。

まあ、そんなものは覗いていい理由にはならないが、不可抗力の言い訳としては使えるだろう。

ただし太一はダメである。

ヒカリという妹がいるにも関わらず、デリカシーもへったくれもなくずかずか入り込んでいくのはちよつといただけでない。

ちよつと周りを見れば、ミミが風呂に入っているかもしれないというのは想像つくだろうに。

「ほらほら、みんな出ましよう。ミミちゃんが上がるまでここにいる気?ヒカリちゃん達はさっさと出てったわよ」

顔を紫にしている男性陣にそう声をかけて追い出した空は、未だ

ひっくり返っている太一の襟首を引つ掴んで引きずった。

俺は猫か、とか何とか騒いでいたが、無視である。

「危ないところだった……」

「ミミさんですが、僕達もでしたね……」

それはミミに対する懺悔か、それとも自分達に対する幸福か。

空達が止めてくれなければ、ひっくり返った屍が増えていたかもしれない。

治と光子郎は真っ青が引つ込んで真っ赤になっている頬を冷ますように、手を仰ぎながらカーテンの外に出た。

「……で、大輔くんはよく分かったね？」

「太一を引きずる空を苦笑しながら見やっていた丈が、先に外に出ていた大輔にそう聞いた。」

大輔と賢に挟まれているヒカリが顔を覆っているのは、男子に裸を見られそうになったミミに対する申し訳なさか、兄のデリカシーのなさに対する呆れと怒りか、はたまたその両方か。

苦笑いしながらヒカリを宥めていた大輔は、ちよつとだけ遠い目をしながら丈に返答してやる。

「うち、お姉ちゃんいますから……」

あー、って全員が納得する。

同じ女の子の兄弟でも、それが姉なのか妹なのかでやはり扱いは違ってくるものだ。

基本的に兄という生き物は妹を女の子として見ないのである。

子供なのである。いつまでも庇護の対象なのである。

妹が裸でいようがパジャマでいようが、子どもであり庇護の対象なのだから、そこに気恥ずかしきなんてあるはずがないのだ。

でもお姉ちゃんはそうはいかない。

例え相手が弟でも男の子だ。いつかはお姉ちゃんを色んな意味で越えてしまうのである。

だからこそ、お姉ちゃんは弟に理不尽という名の躰と教育をしつかりと施すのだ。

自分の地位が脅かされないように、いつかは力をつけて姉を簡単に

押さえつけてしまおう日が来ることを悟られないように、姉は弟に飴と鞭を使い分けながら洗脳していく。

お陰で弟は女性の陽と陰の部分をしっかりと見て育ち、女性に対して必要以上に夢を見ることなく大人になっていく。

女性に逆らえば殴られたほうがマシというぐらいの報復が待っていることを、弟は早々に悟るのである。

そもそも女の子は男の子よりも精神面の成長が早い。

同じ年の男女でも差が出てくるのだから、歳の離れた姉弟だったら尚更だろう。

更に言えば早いうちから男女の区別をつけるアメリカで育った本宮姉弟である。

大輔が四歳の頃にはもうお姉ちゃんは一人で入っていた。

お姉ちゃんが誰かと入るとしてもお母さんとだけである。

仕方ない、日本みたいに湯船と洗う所が違うわけでも、湯船が深くて子供一人では入れられない心配もないわけだし。

ともかくにもミミほどの多感な美少女が久しぶりのお風呂を邪魔、それも覗かれるなんてことになったら、どうなるかは火を見るよりも明らかだった。

顔を両手で覆って項垂れるヒカリ、遠くを見つめる大輔、それから恥ずかしそうにしている兄と上級生と、空に引きずられて出てきた太一を見て、事態を悟った賢はようやく顔を真っ赤にして俯いた。

ファイル島にいた時と同じ、ブラシにつけた絵の具を飛び散らせた夕暮れが、空いっぱいに零れている。

子ども達とデジモン達は、大きなテントの最上階で村のパグモン達による歓迎を受けていた。

それはまるでクリスマススの街並みのような飾りつけで、子ども達とデジモン達の前で踊っているパグモン達は三角帽子を被って、コロコロとした身体を使って一生懸命に踊っている。

まるで幼稚園児のお遊戯会みたいで、子ども達は微笑まし気に見

守っていた。

『ここ、パグモンの村だったんだね』

『……でもおかしいなあ。確かにコロモンの匂いがしたと思ったんだけど……』

そんな子ども達とは裏腹に、デジモン達はしきりに首を傾げている。

パグモンというデジモンがどういうデジモンなのか知っているデジモン達は、しかし自分達が知っているパグモン達と全く違う様子に、混乱していた。

弱い者いじめが大好きで、落とし穴を掘って落ちたデジモンを莫迦にしたり、悪口を言って泣くデジモンを莫迦にしたりと、しょうもない悪戯ばかりするデジモンが、こんなにこやか歓迎ムードで出迎えてくることに不信感のようなものを抱いていた。

しかしパグモンがここにいる以上、ここはパグモンの村で間違いのないのだ。

コロモンの姿が見えないのなら、コロモンは何処にいるのっていう質問はおかしい。

そもそも子ども達がすっかりと寛ぎモードだ。

ここは本当にパグモンの村なのかってデジモン達が疑念を抱いていても、子ども達がすっかり安心していているのなら、わざわざ不安にさせるようなことを言うのは憚れた。

「まるで竜宮城に来た乙姫様の気分だわ！」

「……それを言うなら浦島太郎、だろ？」

「……てへ」

パグモン達にここにこしなから運んできてくれた食事は、果物やキノコをそのまま焼いただけの、質素なもの。

ゲンナイから食事のデータをもらっているからもう必要はないのだが、歓迎のために用意してくれたのだから食べないのは失礼だろう。

子ども達は皿に盛られた果物に手を伸ばした。

デジモン達も、子ども達に倣う。

ブイモンも緩慢な動きで食べ物に手を伸ばしたのだが、まだうつらうつらしているために、出された料理に顔を突っ込まないか、大輔ははらはらしながら見守った。

「はい、あーん」

『あー！』

ヒカリは、膝に乗っているパグモンの口元に、小さく千切ったキノコを運んでやる。

ファイル島を出発する日から、口数がすっかり少なくなってしまうていたヒカリだったが、小さなパグモンの愛らしさで少しだけ心が晴れたのか、少しだけ笑顔を見せていた。

元気のないヒカリを心配して、一匹のパグモンがズーッとひつついてくれていたのだが（そのせいでプロットモンの機嫌が今も悪い）、ヒカリはそのパグモンを膝に乗せて一緒にご飯を食べている。

時々プロットモンが、ずるいずるい私もやってってねだってきてちよつと大変ではあったが、概ね順調に食事は進んでいく。

「……ふう、あの、パグモン」

焼きリンゴを食べ終えた光子郎は、お世話をしてくれている数匹のパグモンのうちの1匹に問いかける。

『はいはい』

「あの、僕ら実はここで待ち合わせをしているデジモンがいるんです。僕らがここに来る前に他のデジモンは来ませんでしたか？」

すっかり忘れていたのだが、ここには子ども達の力を更に引き出してくれる紋章の場所に案内してくれるデジモンと合流するために来た。

予定では昨日に着いているはずだったのだけれど、色々あって到着が1日遅れてしまったのだ。

ミミがパグモン達に拉致される形で風呂に連れていかれ、その後の騒動で子ども達の頭からすぽーんと抜けていたが、本来の目的は合流である。

もしも案内してくれるデジモンが既に到着していたら、早めに謝罪がしたいのだが……。

『うーん、貴方方以外でお客様は来てないですねえ』

光子郎に問われたパグモンは、表情を変えずにそう答えた。どうやら案内してくれるデジモンはまだ来ていないらしい。

そのデジモンが来てくれるまでここに滞在してもいいか、とお願いしたら、パグモン達は快諾してくれた。

やったあ、って喜んでるのはミミだ。

「さつきお風呂入っちゃったけど、ご飯終わったらまたはーいろいろと！いいよね、パグモン達？」

『もちろんですとも！』

「やった！空さんとヒカリちゃんも入りませよ！」

天真爛漫に喜んでるミミに、太一達は苦笑する。

久しぶりにこんなミミさんを見たな、と光子郎は密かに思っていたのだが、ミミのパルモンが初めて進化を遂げてからミミはずっと最年少達の世話を見てきた。

自分は最年少達と同じ守られる存在ではなく、前に出て戦わなければならぬ存在なのだとは自覚してから、ミミはずっと最年少達のお世話をしてきたのである。

ミミの本分である天真爛漫で、思ったことは全て口にするというのを我慢して、最年少達を不安にさせないように、ミミなりに気を張っていたのだが、久しぶりに湯船に浸かったことで張っていた気が少しだけ緩んだようだった。

空はそんなミミに苦笑しながらも、気持ちは痛いほど理解できるので承諾した。

ヒカリも首を縦に振ると思ったのだが……。

「……私、は、いいです」

膝に乗せたパグモンを何度も撫でながら、ヒカリは今にも消え入りそうな声でそう返した。

いつものヒカリと様子が違ったので、太一がどうしたんだって尋ねるけれど、ヒカリは何でもないとだけ返して口を開かない。

こういう時のヒカリは何を訪ねても絶対に口を割らないことをよく分かってるから、太一はこれ以上追及するのを止めた。

「太一達はどうする?」

「空達が入ったら入るよ。な?」

太一が男子に聞くと、全員が頷く。

いや、全員ではなかった。

「あー……俺はいいっす」

「……僕も、いいや」

大輔と賢が、そう言っただけで断った。

ヒカリと同じように、何処か元気がない声で、賢はともかく大輔までもがそんな調子だったから、パートナーデジモンを含めた一行は雷でも落とされたような衝撃を受けた表情を浮かべる。

何かあったのか? 腹痛いのか? 眠いのか? 何処か具合でも悪いのか? 上級生達が必要なら形相で大輔にそう詰め寄るものだから、大輔は圧倒されそうになった。

「ち、違いますよ! 別に俺具合悪いかじゃなくて、ただブイモンがまだ眠そうだし、一緒に入れないから……」

大輔の言葉に、上級生達の視線が一斉にブイモンに向けられる。目をとろとろさせて、こっくりこっくりと舟を漕いで、今にもその場に寝転がってしまいそうなブイモンに、全員が納得した。

これではブイモンと一緒に風呂に入れることはできない。

だからと言ってブイモンを放って自分だけ風呂に入るのも、きつと嫌だったのだろう。

賢は言わずもがな、まだパタモンがデジたまから孵っていない。

硬い表情を浮かべたまま、賢は未だ孵る気配のないデジたまをぎこちなく撫でる。

ちよつとだけ気まずい空気になった上級生達だったが、それなら仕方がない。

食べ終わった子ども達は、世話をしてくれたパグモン達に礼を言っ
て、テントを出た。

流石に子ども達が眠れるほどのベッドはなかったもので、子ども達はいつものテントで夜を明かすことにした。

パグモン達の目が怪しく光ったことに気づかずに。

爆音が響き渡る。

お兄ちゃんと一緒に通った、公園までの道のり。

お母さんと手を繋いで買い物に行った遊歩道。

お父さんの帰りをお兄ちゃんとお母さんと一緒に待っていた歩道橋。

遊びに来たお祖父ちゃんとお祖母ちゃんと歩いた並木道。

全てが目の前で崩れる。壊される。

「いや、いや。やめて、ねえ××。帰ろう、おうち帰ろうよ。ねえ！」

ヒカリは、泣き叫ぶしかなかった。

目の前で繰り広げられる恐ろしい事態に、目を背けることしかできなかった。

がらがら、がらがら。

大切なものが、音を立てて崩れていく。

強い力で叩かれた薄いガラスの板が細かい破片になってバラバラになっていくように。

見慣れた背景が崩れて、やがてヒカリの周りは闇に包まれる。

後に残されたヒカリだけが、色鮮やかに浮かんでいた。

「ひっく……うう……ひっ……うえ……」

絶望に打ちひしがれるヒカリを、抱きしめてくれる兄はいない。

その場に座り込んで、両手で顔を覆って、ヒカリは泣きじやくつて
いる。

「ひっく……ひっく……」

ごめんなさい。

「ひっく……」

「ごめんなさい。」

「うえ……」

「ごめんなさい。」

「ごめんなさい。」

「ごめんなさい。」

ぼう……

泣きじゃくっているヒカリの目の前に、ぼんやりとした光が浮かぶ。

ヒカリは、しゃくりあげながらも違和感に気づいて顔を上げた。そこにいたのは、

「っ、お母さん……!?!」

ヒカリとよく似た面立ちの女性、母だった。

ヒカリの目の前で、ヒカリを見下ろすように佇んでいる母。

恋しくて恋しくて、でもお兄ちゃんもお兄ちゃんのお友達も、ヒカリのお友達もずーっと我慢してその存在を思い出さないようにしていた、大好きなお母さん。

この世界を救うまでは帰れないって覚悟していたから、まさかこんなところで会えるなんて思わなくて、ヒカリはせき止めていたものがぶわりと決壊してしまった。

「お母さんっ!!」

母の足に、ヒカリはしがみついてわんわん泣き喚いた。

「お母さん、お母さん、お母さんー!」

お母さんの足に、涙を拭うようにぐりぐりと顔を押し付ける。

ヒカリが泣くと、ズボンが汚れちゃうからやめてって苦笑しながら

ら、お母さんはいつも抱きしめ返してくれる。

どうしたの、ヒカリ。何か悲しいことがあったの。お母さんに話してごらん。

そう言っただけ抱きしめて、よしよしって頭を撫でてくれる。

それなのに。

「……………お母さん？」

目の前の母は、ヒカリが泣きじやくっているのに、いつまで経っても抱きしめてくれないのである。

しゃがんで抱きしめて、よしよししてくれないのである。

いつまで経っても温もりがヒカリを包み込んでくれないから、ヒカリはお母さんの足に押し付けていた顔を恐る恐る離して、お母さんを見上げる。

「お母さん……………」

お母さんだ。見上げたヒカリの視界にいるのは、間違いなくお母さんである。

いつも優しく見守っていてくれる、お母さんなのに。

《……………》

お母さんが、じっとヒカリを見下ろしている。

その眼差しは、いつもと同じ優しさで満ち溢れていて、でも何処か悲し気で……………。

——違う。

「お母さん、じゃ、ない……………」

お母さんによく似た女性は、そこでようやく行動を起こした。

徐に膝をつき、戸惑っているヒカリの肩にそっと手を添える。

そして、

“それ”は夜通し走っていた。

昼間は汗が滝のように流れるほどに暑くて熱い砂漠地帯も、夜になれば周囲を氷に囲まれたように寒くなる。

その砂漠地帯をもともせず、“それ”は、ガジモンは走っていた。灰色の体毛に、ウサギのような長い耳は、一見すると可愛い見た目ではあるが、その目に滲み出ている意地の悪さやずる賢さを隠すこともせず、更に指の先から伸びる鋭い爪は、ガジモンの気性の荒さと攻撃的な性格をよく表している。

そのガジモンが、もうすぐ夜が明けようとしている砂漠を走っていた。

哺乳類型のデジモンとしては珍しく二足歩行のガジモンではあるが、早く移動するために四つ足で砂漠を突っ切っていた。

時折立ち止まっては、周囲を確認するように後ろ足で立ち上がり、鼻や耳をぴくぴくとさせていた。

そして方角を確認すると、また四つ足になって走り出す。

それを繰り返すこと、数十回。地平線の向こうから太陽が顔を覗かせようとした時に、ガジモンはようやく目的地にたどり着いた。

そこは、船の先端が地面から突き出した不思議な浜辺だった。

目と鼻の先に海があり、海の間から顔を覗かせた太陽が、濃紺の空を追い払って行く。

『エテモン様〜！何処にいらっしやるのですか、エテモン様〜！』

船の森の中を、ガジモンは大声を出して誰かを探しながら走る。

何度もその名を叫びながら探し回ること数分ほど、どしん、という地響きがした。

その音を聞きつけて、ガジモンは地響きがした方へ走る。

どしん、どしん、という重いものが地面に落とされるような地響きが近づいてくるたびに、ガジモンの全身が大きく揺れる。

砂埃を巻き上げながらやってきたのは、モノクロモンだった。

そのモノクロモンに向かって、ガジモンは何故かエテモン様と言い

ながら走り寄る。

モノクロモンはモノクロモンであつて、エテモンという名ではない。

それはデジモンであるガジモンが、1番よく知っていた。

ガジモンがエテモン様と呼んでいるのは、モノクロモンではなかった。

ガジモンの真横を通り過ぎてから、急ブレーキをかけるように地面を滑って止まったモノクロモンは、笑天門と書かれた丸っこいトレーラーを牽いていた。

ぷしゅうう、という音を立ててガジモンの前で停まったトレーラーは、がちや、と横が開いてぎらついた七色の光がトレーラーの中から溢れだした。

白いスモークもたかれて、ぎやぎやーンという耳障りな音が響く。

一瞬ガジモンがたじろいだのは、その音が頭に響いたからでは、決してない。

ああ、そうじゃないとも、うるせーなんて言おうもんなら明日の朝日は確実に拝めないのだから。

濛々と噴き出る白いスモークが薄れ始めた頃、煙の向こうにポーズを取っている陰が見えた。

『イエイ、イエーイー…この世で最強!!それがこの私!!エテモオオオオン!!』

晴れたスモークから出てきたのは、猿のような全身スーツを身にまとった、サングラスをかけたデジモンだった。

名前をエテモンと言い、先ほどからガジモンが呼んでいた、ガジモンの上司の名前であつた。

ふざけた大人が猿の着ぐるみを着ているような、とつてもシユールな外見だが最強と自称するだけあり、実力はファイル島を支配しようとしていたデビモン以上だ。

子ども達の次の相手はこのエテモンなのだが、現時点で子ども達はそのことを知らない。

『よっ！エテモン様！キング・オブ・デジモン!!』

ガジモンがそう言ったら、ガツンと拳骨で殴られる。

『朝っぱらから声が大きいわよ!!』

『それを言うならエテモン様の方が……』

『シャーラップ！お黙り!!』

こうやって盛り上げてやらないと機嫌が一気に急降下する癖に、一番煩くしていたのはエテモンなのに、自分の思ったタイミングでないところで声をかけられると、こうやって黙らせられるのだ。

あまりにも理不尽すぎる、とガジモンは涙目になりながらもこれ以上抗議はしない。

そんなことをすれば、大事な報告をする前に、塵芥にされて消されるからだ。

エテモンに仕えて早幾年。これまで何度同類が目の前で理不尽に消されたか、ガジモンは100を超えたところで数えるのを止めた。

自分より弱い者には強気に出るガジモンは、典型的な意地の悪いデジモンらしく、強い者にはへこへここと下手に出る。

自分より強い者に歯向かうなんて、愚か者のすることだ。

何が何でも生き残るために強い者に媚びへつらう、それが賢い生き方だ。

莫迦な正義感などで、腹は膨れない。

たとえ強いものの理不尽で頭に血が昇ろうとも、苛つこうとも、ご飯に在りつけるのなら喜んでプライドなんか捨ててしまおう。

それがガジモンというデジモンである。

仲間達の命を犠牲にしながら、何を言えば強き者の機嫌を取れるか、機嫌を損ねるかを判断していく。

そうやって最後まで生き残った者こそが、本当の強者だ。

だから賢いガジモンは、これ以上エテモンの機嫌を損ねないように、理不尽に対する文句は心の中に仕舞っておいた。

『アチキの計算によると、もうすぐ選ばれし子ども達がここに上陸してくるわ!!』

そう言ってマイクを向けた先には、トレーラーに設置されているモニターに青い光が点滅していた。

曰く、選ばれし子供達の到着予測地点らしい。

『それを待ち伏せして一気に叩きつぶすの！うくん、我ながらナイスな作戦！』

大声出したりしたら子供達に気づかれちゃうでしょ！、ってエテモンは大きな声でガジモンに注意するが、エテモンの作戦は昨日の時点でおじやんになってしまっている。

くねくねとした動きとニヤニヤしている顔は、自分が立てた作戦に酔いしれているからだろうが、全てを知っているガジモンは何処までも冷静であった。

来ませんよ子ども達、って冷静に言い放ったガジモンに、エテモンはええ？って間抜けな声を上げる。

『選ばれし子供達は一昨日の内に他から上陸して、今パグモンの村にいます』

『な、何ですってええ?!』

何でそうなるのようしてどうして!?!ってエテモンは最強と自称している化けの皮が少しだけ剥がれている。

徹夜で考えた寸分の隙も無い、完璧で素晴らしい計画は無駄に終わってしまった。

何で何でってエテモンはガジモンに詰め寄っているけれど、そんなこと言われても知らんがな、ってガジモンは思っていることだろう。

しかし絶対に口に出してはいけないので、ガジモンは誤魔化すようにモニターの誤っている情報を指摘する。

エテモンは慌てて、思いっきり操作板を叩いた。

機械オタク、特に治や光子郎が目にしたら間違はなくエテモンをぶん殴るであろう所業だったが、根っからの機械音痴であるエテモンは、そんなこと知ったこっちゃない。

思いっきり叩かれた機械は、独特のノイズ音を出しながら情報を更新する。

青い点滅は、途端に別の場所で光った。

野太い絶望の悲鳴を上げながら、エテモンはきいきい喚く。

『あー！ホントだわあ！アチキの作戦台無しじゃないのおお！絶対

許さないんだから!!』

全ては自分の機械音痴が招いたことなのに、エテモンは子ども達へ八つ当たりにも似た怒りを抱く。

その怒りを発散すべく、エテモンは台無しになった作戦の代案を考えながら、ゴチャゴチャとキーボードをいじり回した。

普段は配下のガジモンに任せっ切りで機械のことなんかこれっぽっちも分からないくせに、最新型とか聞かされると目の色を変えて飛びつくのである。

何処のミーハーだ、いじり方も知らない癖に。

そんなことを思いながらガジモンが見守っていると、トレーラーを引っ張っていたモノクロモンを切り離して、その場から離れていった。

『いでよ、ダークネットワーク!』

高らかに叫ぶと、トレーラーの前輪から2本の黒いケーブルが波打ちながら出現した。

闇の気配を漂わせているそのダークネットワークは、サーバ大陸のあちこちに張り巡らされており、エテモンの勢力として拡大されている。

ファイル島でデビモンが闇の力を秘めた黒い歯車を使って、世界を征服しようとしていたのと同じだ。

そのダークネットワークはエテモンが独自で生み出したものではなく、デジタルワールド中に蔓延っている悪意が闇に変換され、偶然生み出された産物である。

エテモンはデビモンと同じように、おこぼれを拝借しているようなものだ。

しかし元々の実力も相まって、ダークネットワークで強化されたエテモンは、自分こそが世界の支配者であると信じて揺るがない。

これさえあれば、“アイツ”だつてけちよんけちよんに倒すことが出来る!

まずは手始めに、この世界の救世主だなんてバカバカしいことを言われている子ども達を始末しなければ。

サングラスの奥に隠されたエテモンの目には、見た目からは考えられないほど暗い野望の火が灯っていた。

『はいよー！』

しゅっぱーっ！なんて、とても暗い野望を秘めているとは思えないほどに明るい声を合図に、トレーラーはケーブルをレールのようにして動き出した。

意志を持ったようなそのケーブルは、目的地であるパグモンの村まで一直線である。

コケにくれてくれた子ども達をどう料理してやろうかと、エテモンは囁く。

動き出したトレーラーに、ガジモンは慌てて飛び乗った。

『他の連中は連れて行かないんですか？』

『選ばれし子どもなんかアチキ一人で十分！』

そう言ってエテモンはサングラスを光らせ、高笑いをする。

子ども達の冒険は、まだ終わらない。

おかしな村②

——閉じた蓋は、開けなくちや。

闇の底を漂っていた男子とパートナー達の意識を引つ張り上げたのは、賢の悲鳴だった。

ぎゃ、という短い悲鳴と共にどしんと何かが落下したような音がしたけれど、誰も最早気にしない。

だってその音の出どころは丈のベッドからなのだ。

最年長でありながら何処か頼りなく、何をするにも少々腰が引けている丈が、賢の悲鳴に驚いて飛び上がってベッドから落ちたということとは安易に想像できた。

どうせゴマモンが慰めるから丈は放っておくとして、それよりも賢である。

賢の悲鳴のせいで、徐々に引き上げられていくはずだった意識を急浮上させた男子とパートナー達が見たのは、半狂乱になりながらベッドをひっくり返す勢いで何かを探し回っている賢の姿であった。

ばさばさと掛け布団を仕切りに振ったり、ベッドの下や裏側を覗き込んだりしている姿は鬼気迫る勢いで、兄の治でも声をかけるのを憚られた。

しかしこのまま放っておいたら、テント中をひっくり返しかねないので、治が恐る恐ると言った様子で賢に尋ねる。

涙を浮かべてしゃくりあげていた賢は、言った。

卵がない。それは、命を賭してデビモンを葬り去った、賢のかけがえのない友達が眠っている卵。

ここに来るまでずっとその腕に抱いて、大事に大事に温めていたの

に、その卵が何処にもないのだという。

ベッドから落ちた丈が何とか這い上がった頃、男子とパートナー達はようやく事態を理解した。

もうパニックである。

着替えたり身支度を整えるのも忘れて、男子とパートナー達はテント中をひっくり返す勢いで、賢のデジたま探しを手伝った。

この時ばかりは、喧嘩をしていたのも忘れて大輔も手伝った。

自分のベッドの下や、賢が使っている小さなタンスの引き出しを全部引つ張り出してみたが、デジたまは何処にもない。

デジたまはデジたまだ。つまり卵だ。

命が生まれる前、命を守る脆い殻だ。

だから勝手に何処かへ転がっていくはずがない。

男子とパートナー達が眠っている間に生まれたのなら、デジたまの残骸が何処かにあるはずだし、何より幾ら赤ちゃんでもパタモンが賢の傍を離れるはずがない、というのはデジモン談であった。

しかし幾ら探しても、賢のデジたまは何処にもない。

これはいよいよまずいのでは……？と全員の顔がさあつと青くなる。

いや、全員ではなかった。

「おい、ブイモン！いい加減起きろって！」

男子とパートナー達がテント中をひっくり返しながら探し回っている間、やはりブイモンは眠っていた。

デビモンを葬り去ったあの夜から、1週間近く眠り続けているブイモンは、少しずつ覚醒はしているのだが、完全に目を覚ましたわけではない。

これだけ大騒ぎでテント中を探し回っている間も、ブイモンは深い眠りについていて。

上級生がどうするどうするって輪になっているところを抜け出して、大輔はブイモンの頬をぺちぺち叩きながら何度も呼びかけた。

10度目の呼びかけの後、ブイモンは薄らと目を開ける。

喉がガラガラになり始めていたから、助かった。

『……ダイスケ?』

「やつと起きたかよ、Sleepyhead!」

聞き慣れない単語を言った後、大輔はブイモンの腕を引いて無理やり上半身を起こしてやる。

目は何とろろだし、船も漕いではいるが、何とか覚醒してくれた。

「ちよつと、さつきつから煩いわよ!どうしたの?」

男子のテントの騒ぎを聞きつけた空が、テントの外から苦情を零す。

それどころじゃねえんだ、と太一はパジャマのままテントの外に顔を出した。

着替えぐらいしなさいよ、という空のお小言は華麗にスルーして言い訳をすれば、煩いという苦情は空の頭から放り出された。

それからもう、てんやわんやである。

子ども達とデジモン達総出で家探しである。

しかしテントをひっくり返しても、デジたまは何処にもない。

その内、最年長の丈が嫌な結論に辿り着いてしまった。

これだけ探してもない、と言うことは、賢が蹴つ飛ばすなり手放すなりしてベッドから落ちて何処かに転がったのではなく、誰かがテントに侵入してデジたまを持って行ってしまったのでは?というものである。

だってそれ以外考えられない。

デジたまから手足が生えて、何処かへ走り去っていつてしまったわけではないのなら、それ以外考えられないのである。

子ども達が眠っている間に、パートナー達に気づかれることもなく、誰かが侵入してデジたまを奪って行ったと考える方が自然だ。

自然なのだが、そうなるに次に思い浮かんでくる疑問は、何のために?である。

誰かによって持ち去られたのであろう、ということとは理解したが、では一体何のために賢のデジたまを盗んだのだろうか。

そもそも誰がそんなことを?

疑問は尽きないが、次々と疑問が思い浮かんでくる治を止めたの

は、太一だった。

「今は誰が盗んだとか何のために盗んだとか、どうでもいいだろ！探すのが先だ！」

そう啖呵を切ると、太一はさつきと着替えて、アグモンと共に外に出る。

太一の言う通り、今は賢のデジたまを探して、見つけるのが先だ。泣きじやくつている弟を慰めながら、治もパジャマを脱いで服を着替える。

丈と光子郎も着替えてパートナー達を伴って外に出て行った。

大輔もさつきと着替えたのだが……ブイモンを歩かせるのに苦勞していた。

「ほくらあ、歩けつてばブイモン！」

『……………』

しよぼしよぼする目を何度も擦りながら、ブイモンは大輔に手を引かれてのろのろとした足取りで歩き始める。

昨日よりはマシだが、これでは賢のデジたまを探すのに難航しそうだ。

更なる問題が、子ども達に降りかかる。

女子2人とパートナー達を呼びに行った空が、太一が着替えて外に出たのとほぼ同時に慌てて戻ってきたのだ。

どうした、と太一が問えば、空から返ってきたのはヒカリの様子がおかしいという旨。

そう聞いた太一の行動は早く、空とアグモンを置いてけぼりにして女子が使っているテントへと走る。

遅れて男子のテントから出てきた治達は、何事かと反射的に後を追った。

女子のテントに入れば、ヒカリが眠っているベッドの傍らに心配そうに見下ろしているミミとパルモン、それからプロットモンがいた。

突然入ってきた太一に驚いているミミとパルモンを無視して、太一はずかずかとテントに入っていく、ベッドに入っているヒカリに声をかける。

横向きに眠っていたヒカリは、重たそうに身体を上に向けて、今にも消えそうな声でお兄ちゃん、と呼んだ。

薄暗いテントの中でも分かるぐらい顔色の悪い妹に、太一の喉がひゅつと鳴る。

そして思い出す。

キャンプに行く数日前、ヒカリは37度以上の熱を伴った風邪を引いていた。

大輔と出会ってから元氣そのもので、大輔と一緒に外で遊びまわっていたヒカリは滅多に風邪を引かなくなっていた。

具合が悪くなることはよくあったけれど、悪化する前に大輔が気づいて太一や先生に教えてくれていたので、すっかり油断していたけれど、ヒカリは元々身体が丈夫ではないのである。

幼稚園児の頃はしょっちゅう風邪を引いたり体調を崩していたせいで、まともに幼稚園に通えなかった。

キャンプに行く数日前に久々に高熱を出してしまったヒカリは、危うくキャンプを休むところだったのである。

幸いキャンプの5日前に熱は引き、その後も解くにぶり返すことがなかったのも、ヒカリは無事キャンプに参加出来た。

太一も安心していたし、大輔が同じグループにいたから、ぶり返したとしても目ざとく気づいて母に知らせてくれていただろう。

だがキャンプの5日前に治まって、キャンプ中も冒険中もぶり返さなかったからと言って、油断するべきではなかった。

少し考えれば分かることだったので、と後悔するがもう遅い。

「ヒカリちゃん、熱はないみたいなんですけど……ちよつとしんどそうで……」

太一が自分の不甲斐なさに拳を握っていると、見かねたミミが教えてくれた。

え、つて虚を突かれた太一は握っていた拳から力が抜けて、ミミの方を見た後、手袋を外してヒカリの額に手を伸ばす。

額から手に伝わる温もりは、熱くはない。

どちらかと言えば、少し冷たかった。

風邪と言えば熱を出すタイプのヒカリにしては、珍しく冷たいのである。

額から頬に手を移動させるが、やはりいつもよりも冷たく感じた。ヒカリの枕元にいるプロットモンが、心配そうにヒカリと太一を交互に見やる。

「ヒカリ、気分はどうだ？」

「…………ごめんね、お兄ちゃん…………ちよっと、怠くて…………」

太一は眉を顰める。ヒカリの体調を心配して、ではなく、最初に謝罪の言葉を口にしたことに対して、だ。

いつもこうだ。ヒカリは何も悪くないのに、ただちよっと我慢をしようだけなのに、ヒカリはいつもごめんなさいって言う。

それは、何に対しての謝罪なのだろうか、いつも思っていた。我慢をして、結局悪化させてしまう罪悪感？

それとも迷惑をかけてしまっている申し訳なさ？

どちらにしても謝罪はいらない。

太一は気にするなど言つて、頬から手を離してヒカリの柔らかい髪を優しく撫でた。

上級生達をかき分けて、大輔とブイモン、それから賢もやってくる。

「ヒカリちゃん、大丈夫？」

「具合悪いの？無理しないでね？」

「うん…………ごめんね…………」

少々呼吸が荒いヒカリに、大輔と賢は労りの言葉をかける。

ブイモンは相変わらず眠そうで大輔は大変だし、賢に至っては大切なデジたまが行方不明なのだ。

他人を気に掛けるほどの余裕はないはずなのに、大輔も賢も優しい子達である、と上級生達は苦笑した。

しかしいつまでも留まっていられない。

デジたまも探さなければならぬのだ。太一は治に目配せをして、その意図を読み取った治は2人をさりげなく促してテントから出て行った。

光子郎と丈も後に続く。残ったのは、太一と空とミミ、それからそ

のパートナー達だけだった。

タオルを取り出して、水に濡らしてきますねと言って出て行ったミを見送り、太一と空はヒカリの下から少し離れてこそこそと話し合う。

「空、ヒカリのこと頼むな」

「いいけど……アンタがついていなくていいの？」

「……ついてやりたいのは山々だけどさ……きつとあいつ、賢のこと知ったら自分の体調無視して一緒に探そうとするとと思うんだ」

そうでなくても、きつとヒカリは賢くんのお手伝いをしてあげてつて言うだろう。

自分は大丈夫だからって。ちよつと寝ていれば治るからって。

ヒカリは、そういう子なのだ。

どちらにしても、誰か1人がヒカリについていた方がいい。

「……本当に、ごめんね、お兄ちゃん……」

ヒカリから少し離れて内緒話をしていた太一と空の声は、小さくて聞こえない。

多分、ヒカリが体調を崩しちやつたから、出発が遅れてしまうというような相談をしているんだろうな、とどんどん自己嫌悪に陥っていくヒカリは、少し荒い呼吸を繰り返しながら再度謝罪した。

空との会話を中断させた太一は、苦笑しながらベッドに横になっているヒカリの下へ行き、優しく頭を撫でた。

「気にすんなって。ヒカリは悪くねえんだから。でもこんなことから、ゲンナイさんに薬とか用意してもらうんだつたなあ」

「ああ、そうね。ヒカリちゃんだけじゃなくて、私達も急に体調不良になったりしたら大変なもの。今度ゲンナイさんと連絡が取れそうな時に頼んでみましょう」

ヒカリが体調を崩さなければ、そんなこと思いつきもしなかっただろう。

絆創膏は空が持っているが、薬だけでなく包帯やガーゼ等も用意してもらった方がいいか。

メモ帳などはないので、あとで光子郎に伝えるとして。

「ヒカリは体調治すことだけ考えてな」

「……………」

「どっちにしても、案内してくれるデジモンとまだ合流できてないから、ここから出発することはできないのよ。だから、ね？」

ああ、そつか。ヒカリは微睡の中、太一と空の言ったことを頭の中で反芻する。

自分達の力を更に強める紋章がある場所に案内してもらうために、ゲンナイが用意してくれたデジモンと逢わなければならないのだ。

しかしそのデジモンは、まだこの村に来ていない。

そのデジモンと合流するまで、この村から出られないのである。

「空、ヒカリのことよろしくな」

「ええ。ヒカリちゃん、気にしないで眠っちゃいなさい。後で光子郎におかゆ出してもらおうからね」

「うん…………」

テントを出て行く太一の背中を名残惜しそうに眺めながら、ヒカリは目を閉じた。

案内してくれるデジモンがまだ来ていないことをゲンナイに連絡しようとしたのだが、タイミングが悪かったのか呼び出し音が幾ら鳴ってもゲンナイが出る気配はない。

仕方なく光子郎は通信を切って、賢のデジたまを探す方を優先させる。

子ども達は一番大きなテントを拠点として、子ども達は付近の森を探した。

しかし物言わぬ卵は、幾ら呼んだって返事をするはずがない。

何者かに持ち去られていたとしたら、もうこの辺りからはとっくに逃げているだろう。

みんなそのことに気づいているけれど、泣きじゃくる賢の手前、そんなことは口が裂けても言えなかった。

パグモンも手伝ってくれる。ぴよこんぴよこんとその丸い身体を跳ねさせながら、子ども達と一緒に探しに行ったり、集団でまだ探し

に行っていない場所へ行ったり……それでも卵は見つからない。

つい先ほど滝の方から戻ってきたパグモンが、そう言って跳ねる。そうですか、と光子郎は足元に描いていた簡易な周辺の地図の、滝の辺りにバツをつけた。

これはきつと罰なんだ。

賢はしゃくりあげながら、そんなことを考えてとぼとぼ歩いていった。

いつまで経っても生まれてこない、大切な友達。

戦うことを頑ななまでに拒否して、拒絶して、拳句の果てにはパタモンからも目を逸らしてしまった。

誰も止めることが出来なかったデビモンを止めたのは、最後まで戦うことを拒んでいた子どものパートナーが進化したデジモンであった。

世界で一番美しい光を纏いながら降臨した天使は、命を懸けてデビモンを葬り去った。

本当は救ってやりたかったと、まだ間に合うのならその手を取りたかったということと言っていたのは、きつと賢とブイモンしか知らない。

本来なら相容れない存在同士で、正反対同士で、両極端で、善と悪をそれぞれ体現したような2体のデジモンは、強すぎる力を出し切つて力尽きてしまった。

そうでもしなければ、止められないほどに、デビモンは闇を取り込みすぎたのである。

それは分かっている。誰も、お兄ちゃんのガルルモンでも、デビモンを止めることが出来なかったのだ。

正反対で、両極端の存在で、光そのものであり善の代行者であるエンジェモンしか止めることが出来なかったことぐらい、賢だって分かっている。

それでも、賢にとって争いはトラウマでしかなかった。

大好きな人達を傷つけ、絆をぶっ壊す怖いもの。

見慣れたハムスターのような姿をしていたデジモンだったパタモンが、何の面影もない天使に進化しなければならぬほどファイル島は危うかった。

でもやつぱり、争いは怖いし嫌いだ。

現に、賢とパタモンは今離ればなれになってしまっているし、大輔とも喧嘩をしてしまった。

嫌い。怖い。

デジたまが生まれないのは、そんな賢の怖がつている気持ちを敏感に察知してしまっているからなのだろうか。

パタモンには早く会いたいけれど、パタモンが生まれるということ、今度こそ否応なしに賢は戦いの場に身を投じなければならぬということになる。

「ひつく……ぐす……」

僕ってこんなに泣き虫だったっけ。

しゃくりあげ、次から次へと溢れてくる涙を両腕でごしごしと拭いながら、賢はとぼとぼ歩く。

自分が今何処にいるのかなんて、気づいてもいなかった。

俯いて、泣きながら歩いていたせいで、治達とはぐれてしまっていたことに、全然気づいていなかったのである。

だからぱきり、という音が背後から聞こえて、びっくりして顔を上げたら全然知らないところにいたことを知って、硬直してしまった。

辺りを見回すが、360度何処を見渡しても樹々が立ち並んだ森の中で、自分達が昨夜寝泊まりしたパグモンの村のテントが何処にもない。

あれ、あれ、って賢はわたわた辺りを見渡して……ばちつと大輔と目が合った。

「……………」

「……………」

見つめ合う2人の間に、気まずい空気が流れる。

大輔の隣に突っ立っているブイモンは、相変わらず眠そうだった

が、それでも昨日より足取りはしつかりしているようだった。
ブイモン大丈夫なのかなあ、って軽い現実逃避をする。

「……何してんだよ、お前」

聞いたことのないような低い声を出したのは、大輔である。

何でこんなところにいるんだ、と言いたげな声色と表情に一瞬たじろぎそうになったが、何とか踏ん張る。

「……大輔くんこそ、何してるの」

涙を乱暴に拭い、目を赤く腫らしながら賢は大輔に尋ね返した。

しかし返ってきたのは、別に、という言葉である。

それにムツとした賢は、あつそとぶつきらぼうに言った。

本当は、パートナーがいない賢がふらふらとみんなから離れて行くのを見ていたから、喧嘩をしているとはいえ心配でついてきたのだが、そんなことは口が裂けても言えなかった。

そんなこと知る由もない賢は、そっぽを向いて、行く予定のなかったはずの道を進む。

一瞬迷って、大輔は眠そうなブイモンの手を引いて、賢とは10メートルほど距離を空けてついて行く。

「……………」

「……………」

てくてく、てくてく。

賢は歩く。大輔はついていく。ブイモンは引っ張られている。

静まり返った空間に、風と戯れて揺れる葉が擦れ合う音が響いていた。

「……どうしてついてくるの」

「……俺もこつちに用があるんだよ」

しばらく歩いて、賢は立ち止まって振り返る。

大輔もほぼ同時に立ち止まって、ぶつきらぼうに返す。

暫く大輔を見つめて、賢はまた歩き出した。

大輔も歩き出す。賢とは一定の距離を保ちながら、賢とほぼ同じ歩幅で歩きながら。

なのに何も言っていない大輔に、ちよつとだけイライラし始めた賢

は、ちよつとだけ歩みを速めた。

すると大輔も歩くスピードを賢に合わせて速くする。

「……ついてこないでよー!」

「何処に行こうが、俺の勝手だろー!」

一体何なのだ。

喧嘩をしたことのない子どもは分からない。

この1週間近く、賢のことをずっとずっと無視していたくせに、賢が話しかけようとするといつもそっぽ向いて知らん顔していたくせに、どうして賢の後をついてくるのだろう。

しかしそれを指摘すると、大輔は気のせいだと言う。

澄ました表情を浮かべて、右手は眠そうなブイモンの左手を繋いで引いて、賢の後ろをついてくる。

賢には分からない。一度も争いをしたことのない男の子には分からない。

喧嘩をして、離婚をしてしまつてから今まで1度も顔を合せなかった両親を見て育つた賢には、全然分からない。

考えすぎてごちゃごちゃになつてしまつた賢の足は、やがて止まる。

「っ、さっきつから何なの!?!」

振り返りながら大地を踏みしめ、叫ぶ賢にすつかり油断していた大輔は文字通り飛び上がる。

眠そうにしていたブイモンも、大声を出した賢にびっくりして目を見開いた。

振り返つた賢の形相は、いつもからは考えられないほどに険しく、怒っていることが明確だった。

「大輔くんは、僕のこと嫌いになつたんじゃなかったの!?!」

「……は?」

「僕が、僕が分からず屋だつたから、いつまでも戦いたくないって我儘言つて、パタモンのことだつてちゃんと見てなかったから、だから大輔くんは怒つたんでしよう!?!喧嘩になつちやつたんでしよう!?!僕のこと、嫌いになつたから喧嘩しちやつたんでしよう!?!」

賢にとつて、両親の喧嘩の過程と結果を目の当たりにしてしまつた子として、喧嘩イコール嫌いになるという結論を生み出してしまふのは当然と言えよう。

しかしそれは、飽くまでも賢の理論だ。

黙っていた大輔は、かつとなる。

後はもう売り言葉に買い言葉だ。

「っ、おっまえ、何訳分かんねーこと……！莫迦じゃねえ!? 喧嘩したら嫌いになるって、それじゃ俺は何度お姉ちゃんのこと嫌いになりやいんだよ!? 俺もお姉ちゃんも、いつも喧嘩してるぞ! おやつとかテレビの取り合いとか! でも俺はお姉ちゃんのこと、嫌いだなんて1度も思ったことねえし! 離れたいとかいなくなれとか思ったことねえし!」

「それは大輔くとジュンさんの喧嘩が大したことないからでしょ! 大輔くんに分かる!? やめてって、そんなことしないでって、僕やお兄ちゃんが何度言ってもやめてくれなかったママとパパをずっと見てきた、僕達の気持ちなんか! 僕やお兄ちゃんの気持ちよりも、自分達が喧嘩する方が大事だって言われてるみたいな……! 世界からいらないって、ぽいって捨てられたみたいなきもち、大輔くん……!」

「そんなお父さんもお母さんもいらねえだろ! 捨てちまえよ!」

「捨てっ……! 何簡単に言ってるの!? ゴミを捨てるわけじゃないんだよ!? 大体捨てろって、だったら僕どうやって生きてつたらいいのさ! ママがいないと僕まだ何も出来ない子どもなんだよ!」

「別にお母さんの家から出て行って言ってるんじゃないやねえ! 一緒に住んでるだけの人って思えばいいじゃん! 俺だって……! そうして、きたん、だから……!」

口すぼみになっていく大輔。

また言ってしまった、と口元を押さえる。

言うつもりなかったのに、ずっとこの気持ちは押さえて生きていくつもりだったのに。

誰にも漏らさず自分の中だけで昇華していくつもりだったのに。

賢が訝し気に大輔を見つめている。

ああ、もう何もかも賢のせいだ。

イライラが募る。賢を睨みつける。また喧嘩になりそうな言葉が、大輔の口から飛び出てこようとする。

もう止められない。止めてくれる人はいない。

少しばかり覚醒したブイモンは、何があつたのか理解できずにただ交互に大輔と賢を見やるだけだ。

しかし。

『っ!!』

ひゅ、とブイモンは息を飲み、大輔の手を振りほどいて戦闘態勢に入った。

突然の出来事に、口から飛び出そうとした大輔の言葉は喉の奥に引っ込み、賢も唾然とした様子でブイモンを見る。

ぞ、

途端に、背筋を氷のナイフでなぞられたような悪寒が、大輔と賢を襲った。

ひ、と短い悲鳴を上げて、その場で硬直する。

拳を握りしめ、変に強い力がかかかってぶるぶると全身が震え、額からぶわりと冷や汗が流れる。

目を見開いた大輔と賢を護るように、ブイモンは辺りを忙しく見渡した。

眠気は、とつくに吹っ飛んでいた。

濃密な闇の気配が辺りを漂っているのが分かる。

風が吹いているわけでも、太陽が分厚い雲に隠れているわけでも、況してや夜でもないのに、露出している大輔と賢の肌が総毛だつほどの寒さを感じた。

地面に伸びる影からぬつと手が這い出てきて、自分達の首を絞めて

いるような感覚に陥る。

はー、はー、と無意識に浅くなっていた呼吸で、漏れる吐息が分かりやすいほどに大きくなった。

距離が開いていたはずの大輔と賢の間が、いつの間にか縮まっている。

周りには、生き物らしい生き物は何も無い。

気のせい？いや、突き刺すような視線や全身に押し掛かるようなプレッシャーは、絶対に気のせいではない。

ブイモンは注意深く辺りを見回した。

パグモンの村は森に囲まれており、大輔と賢はパグモンの村から少し離れた森の中にいる。

もう少し歩けば滝がある。そちらは既にパグモンが行っており、デジたまはなかったと子ども達に伝えているのだが、その時には既に1人で離れていた賢は知る由もなかった。

ひた……

かさかさと擦れて揺れている葉の中に、1本の針を落としたように微かな物音を、ブイモンは聞き逃さなかった。

振り向く。

毒々しいピンク色の身体に、赤い爪を持ったものが、いつの間にかそこに佇んでいた。

濃厚で、悍ましい闇の気配を隠そうともせず、その身体から漏らしているにも関わらず、ブイモンはそちらを振り返るまで「ソレ」がいたことに気づかなかった。

喉元に鋭い爪を突きつけられたような緊張感に包まれ、ブイモンは顔を青ざめさせながら息を飲む。

——無理だ。

瞬時に悟った。

無理だ。こいつには敵わない。対峙しているだけで分かる。あいつに挑んだ瞬間、自分はその命を落とすことになる。圧倒されるほどのオーラを感じたブイモンは、しかしそれでも尚戦闘態勢を解かない。

ここにいる中で、戦えるのはブイモンだけだ。

賢のパートナーは何故かいないが、とにかく大輔と賢を護らなければと、握って構えている拳に力が入る。

「え、あ……あいつ……なんで……？」

一方、賢は目を見開いて驚愕していた。

信じられないものを見ているような目をして、〃ソレ〃を見つめていた。

だって、あり得ないのだ。

いるはずがないのだ、ここに。

だって〃ソレ〃と出会ったのはファイル島である。

まだパタモンがいて、デビモンのせいでみんなとはぐれてしまった時、〃ソレ〃は賢とパタモンの前に現れた。

何をするでもなく、ただその場に佇んでいるだけだった〃ソレ〃が、どうしてここに？

「賢……？」

様子がおかしくなった賢を心配して、今の今まで喧嘩をしていたことなど頭から吹っ飛んで、大輔は声をかける。

しかし賢は〃ソレ〃から目を離さず、喉に言葉が張り付いたように口をパクパクさせている。

大輔は〃ソレ〃に再び目を向ける。

2本の鋭く尖った角が後頭部から生えており、目のようになっていく赤い模様は、見ているだけで闇の底に落とされそうだった。

腕の先についた、角と同じく鋭く尖った赤い爪。

そして何より全身から発せられている闇の気配は、大輔の全身に絡みついて離してくれない。

少しでも動いたら、あの鎌のように湾曲を描いている爪で喉元を掻き切られそうな気がして、太一達の下に戻るといふ選択肢はその場で

消されてしまった。

『……お前、誰だ？』

拳をきつく握りしめながら、ブイモンは尋ねる。

答えは期待していない。ここまで1度も言葉や鳴き声を発していないのだ。

ブイモンと違って腕をだらんとさせて、戦闘体勢すら取っていないところを見ると、戦う気も傷つけるつもりもないのか、それともブイモン達を莫迦に見下しているのか、それすらも分からない。

しかし悍ましい闇の気配を隠そうともしないその姿勢は、自分達の味方ではないことは間違いないだろう。

——どうする？

ブイモンは構えを解かずに考える。

1番いいのは進化をして戦うことだ。

相手の実力は未知数だが、進化をして不意を突くことぐらいはできるはずである。

放たれるプレッシャーのせいで“ソレ”から目を離すことが出来ないが、それでも一縷の望みにかけるために、大輔に声をかけようとした。

ずる、べちや……

水気を多く含んだ粘着質のものが硬いところに落ちたような音がした。

ずる、べちや……

“ソレ”が発しているわけではなさそうだ。

何故なら“ソレ”は先ほどから1ミリも動いていない。

ずる、べちや……

ゆつくりと、一定の間隔でその音は聞こえてくる。近づいてくる。大輔と賢とブイモンは、「ソレ」と対峙しているのとは違う緊張感を抱いた。

ずる……べちや……

ぬう、と。

それは現れた。

「ソレ」と対峙していたブイモン達の視界の端に、それは映った。

ずる、べちや……

暗い森の木々の間から太陽の下に姿を現したそれを見た時、大輔と賢とブイモンは「ソレ」と対峙していた時よりも緊張した。

何故ならそれは生き物の形を保っていなかったからだ。

歩み寄ってきたその音を裏切らず、全身が黄土色のヘドロで覆われており、そのヘドロが絶えず地面に落ちてべちよりと不快な音を立てている。

ひ、と大輔と賢が同時に引きつった声を上げた。

——あ……ア……あ……

声になっていない呻き声を出しながら、それはゆつくりと腕らしき部分を上げる。

ぼた、ぼた、ぼた、と腕にまで纏わりついているヘドロがダメになって地面に落ちる音がする。

「……………っ！」

もう限界であった。

「『ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああつ!!』」

大輔と賢とブイモンは同時に悲鳴を上げて、今の今まで抱いていた緊張感やら恐怖やらがすぽーんと何処かへ行ってしまう、猛ダツシユしてその場から走り去っていった。

砂埃を巻き上げながら、あわあわって慌てふためきながら、大輔と賢とブイモンは走る。

後をついてくるかもしれないとか、動いたら攻撃されるかもしれないって思っていたのが嘘みたい俊敏な動きであった。

「何だあれ何だあれ何だあれええええ!!」

「ししし知らないよお!」

『早く逃げ、逃げ、あばばばば!』

パニックに陥っている大輔と賢とブイモンが喚きながら、何処へ向かって走っているのかも分からずに走る。

後ろを振り返る余裕もなく、2人と1体は真つすぐ前を見つめて懸命に足を動かした。

どれぐらい走ったか分からないぐらい走って、走って、走って、2人と1体の目に飛び込んできたのは大きな滝だった。

とりあえずあそこに逃げ込もう、と誰ともなく思っ疲れ始めてきた足を叱咤しながら、2人と1体は滝の裏側へと逃げ込む。

それがいけなかった。

「……え、アグモン?」

『ダツ、ダイスケ!』

滝の裏側に逃げ込んだ2人と1体が見たものは、信じられないものであった。

息を切らして膝に手をつけて、バクバクしている心臓を静めるために深呼吸をしようとしていた大輔達だったが、そこには檻の中に閉じ込められている数十体ほどのコロモンと、1つのデジたま、それから地に伏しているアグモン、それから見たことのないデジモンが2体いた。

灰色の体毛と、ウサギのような耳、それから鋭い3本の爪と意地の悪そうな赤い眼は、何処となくパグモンを思い起こさせた。

突然乱入してきた大輔達に、アグモン同様啞然としている。

『ア、アグモン、どうしたんだ、これ……』

『ブ、イモン、これ、全部、嘘だったんだ！あそこ、やつぱりコロモンの村だったんだよ！パグモン達に乗っ取ってたんだ！』

『……どういうこと？』

ブイモンはアグモンが言っていることが分からなくて、頭上に沢山の疑問符を浮かべている。

無理もない、ブイモンはこの1週間近くほぼ毎日眠りについていたのだ。

時折目を覚ましてはいたものの、完全に覚醒していたとは言い難く、うつらうつらと舟を漕いでばかりで、本格的に目を覚ましたのはつい先ほどである。

しかし大輔と賢は、アグモンの言いたいことを理解した。

「ま、マジかよー！」

「パグモンの村じゃなかった!?それに、そのデジたま……！僕の一！」
『ちっ、バレちゃしようがねえ！』

灰色のデジモン……ガジモン達は構える。

大輔達がここに来るまでに大分痛めつけられていたらしいアグモンは、ボロボロになった身体を何とか起こして、ブイモンの隣に並んだ。

これで2対2だ。この場に太一はおらず、アグモンは進化出来ないが、ブイモンなら進化することが出来る。

つい先ほど遭遇した、恐ろしいものはすっかり大輔達の頭から抜け落ちていた。

『行くよ、ブイモン！』

『おう……っ!?!』

アグモンの勇ましい掛け声とともにブイモンも1歩前に踏み出したのだが、その瞬間ブイモンの世界と視界がひっくり返る。

脳みそを揺さぶられるような感覚に襲われ、その場に両膝と左手をついた。

ぐらぐらする視界のせいで頭が重く感じ、右手で支えるように添えるブイモンを見て、大輔達は驚愕する。

「ブイモン!？」

「ど、どうしたの!？」

『ブイモン!』

『……っ、ぐ、め……きゆうに、ねむく……!』

目の前がぼやけ、呼吸が浅くなるのが分かった。

覚醒したはずの意識が、急に引きずり降ろされる感覚に陥ったブイモンに、再び眠気が襲い掛かってきたのである。

どうして、先ほどまで目は冴えていたのに。

懸命に瞼に力を入れるが、襲い掛かってくる眠気はそれを嘲笑うかのようにブイモンを眠りに誘ってくる。

せっかく2対2になれたのに、とアグモンは焦燥感に苛まれる。

ガジモンはにやりと嗤った。

『とんだ助っ人だったなあ!ええ?来て早々戦えないなんてよ!』

『これで1対2に逆戻りだ!残念だったなあ!』

「なっ……ひ、卑怯だぞー!」

ニタニタと卑しい嗤いを浮かべるガジモン達に、大輔は吠える。

アグモンのボロボロ具合から、大輔達が来るまで2体ばかりでずつとアグモンのことを甚振っていたのは、誰の目から見ても明らかだ。

何故アグモンが太一と一緒におらず、1体だけでこんなところにいたのか、それはこの際置いておくとして、何らかの方法でこの場所にコロモンがいることを突き止めたアグモンは、太一達に知らせる前にコロモン達を助け出そうとしたところを、ガジモン達に見つかって袋叩きにあつたのだろう。

ブイモン達が駆けつけた時に、一瞬だけ曇らせていた表情は、今は晴れやかだった。

弱い者を甚振り、虐めるのが大好きなガジモンは、大輔に卑怯と罵られても平然としていた。

『何とでも言え!お前達はエテモン様に捧げることが決まったんだ!』

「……エテモン?」

聞き慣れない名前に、賢が眉を顰める。

「ガジモンは、鼻を鳴らして賢を莫迦にしたように見た。

『この世を支配するに相応しい、俺達のボスだ！もうすぐここにいらっしやる。その時がお前らの最後だ！』

下品な笑いが洞窟内に響き渡る。

大輔は歯を食いしばり、賢は息を詰まらせた。

アグモンはボロボロで立っているのがやっと、ブイモンは再度襲ってきた眠気と戦っているし、賢のパートナーはまだ物言わぬデジたまで、ガジモン達に奪われている。

檻の中に捕らわれているコロモン達も、戦力にはならないだろう。

まさに四面楚歌、絶体絶命である。

太一達がこちらに向かってきてくれるのを祈るしかない。

しかし悪意は蛇のように地面を這い、他の子ども達にもその毒牙を向ける。

おかしな村③

——声が聞こえる。

《おや、何かと思えば。久方ぶりの地平線の迷い子ですか》

——声が聞こえる。

《地平線と地平線の狭間に迷い込んでしまうなんて、貴女は運がいいのか悪いのか。いえ、きっとその両方ですね。何故なら貴女はここに来るのは、2度目なのですから》

——声が聞こえる。

《過去から現在（いま）へ。そして現在（いま）から未来へ。その速さを変えることなく、常に流れゆく時間と時間の狭間は、とてつもなく重いもの。その質量に耐えうる者はいないというのに、貴女のその丸裸の魂は傷つくことなく存在している。本当に不思議ですねえ》

——声が聞こえる。

《……しかし幾ら貴女が特別と言っても、長い時間ここを彷徨うのは危険ですね……仕方ありません。"また"送って差し上げましょう》

——声が聞こえる。

《……おや？いつの間に目を覚ましていたのでしょうかねえ。ここが何処だか分かりますか？私が誰で、貴女が誰か分かりますか？いえ、

この地平線の狭間において、自分が何者なのかなんて些細な問題ですね。ここでは貴女であつて、貴女ではないのですから。むろん、私も私であつて、私ではない。ここでの記憶も記録も、貴女の中には欠片も残らないでしょう》

——声が聞こえる。

《……ふふ、いけませんね。久しぶりの迷い子に、柄にもなくはしゃいでしまいました。さて、いつまでもここには、貴女の本質は本当に失われ、ただの概念となつて最後には地平線の一部となつて消えてしまうでしょう。それはあの方の本意ではありません。今日まで貴女のために、あの方は心を砕いて慎重にことを進めてきたのですから》

——声が聞こえる。

《少しずつ予定調和の未来から外れ、いずれ新たな地平線が生まれるでしょう。さて、それは最初から決まっていた宿命か、それとも貴女が望んだ運命か、はたまた神の悪戯による天命か……いずれにしても、ここから先は貴女が書き記す物語、貴女が描く地平線》

——声が聞こえる。

《……おや、見えてきましたね。さあ、あの光の向こうが、貴女の今の物語であり地平線です。あの光に包まれれば、たちまちここでの出来事は忘れてしまうでしょう。しかしそれでいいのです。それがいいのです。人は誰しも地平線の狭間に迷い込むものですが、誰一人としてその存在を覚えていないでしょう。何故なら……》

——声が聞こえる。

《……いえ、この話は止めておきましょうか。どうせ貴女とはここで
お別れです。貴女は既に地平線の住人、私は地平線の狭間を彷徨う、
哀れな咎人。平行の地平線は永遠に交わることがない。善と悪のよ
うに、光と闇のように、貴女と私が交わることは、決してない》

——声が聞こえる。

《さようなら、地平線の住人よ。願わくば、二度と逢うことのないよう
に》

——声が聞こえる。

——声が聞こえる。

——声が、聞こえる。

閉じた暗闇の向こうで、微かな喧騒が聞こえてくる。

ヒカリは微睡に引き留められながらも目を覚ました。

具合が悪くて寝込んでいたことを思い出し、上半身を起こす。

ベッドのクツションが揺れたのを感じたのか、枕元に寝ていたプロットモンが目を覚ました。

『ヒカリ！もう大丈夫なの？』

「うん、寝たらよくなったみたい。心配かけてごめんね、プロットモン」

何か夢を見ていたような気もするが、覚えていないので特に大した夢ではないのだろう、とヒカリは口を閉ざす。

朝起きた時には身体が怠くて、とてもではないが起き上がるのが困難であった。

兄や友人達にも心配をかけてしまい、ここを発つのが遅れてしまうのではと懸念していたが、目を覚ましたら朝の怠さが嘘みたいにするきりしていた。

ベッドから降りて、立ち上がってみる。屈伸運動を試してみる。

両手をぐーぱーと握ったり開いたりしてみる。

……特に異常は見られない。

本当にあの怠さはなんだったのだろうか、と思いながら、ヒカリはプロットモンを腕に抱き、テントの外に出た。

「……あら、ヒカリちゃん？」

少し慌ただしい。兄はパグモン達の住処であるテントの上に登って忙しなく辺りを見渡しているし、他の子ども達もばたばたしている。

何があっただろうかと思つて、テントの入り口でその慌ただしさをぼんやりと眺めていたら、テントの方に向かってきた空が気づいてくれた。

ヒカリの様子を見て来てくれたらしく、もう大丈夫なの？つて尋ねてきたから、大丈夫です、つて笑顔で答える。

しかし多少の体調不良なら、ヒカリは我慢してしまうことを知っている空は、本当に？つて半目でヒカリを見下ろす。

本当です！って慌てて答えると、空はまだ疑っているようで額に手を当ててみた。

……確かに先ほど触った時よりは、暖かみがあった。

賢のデジたまを探す前に触れた時は、少し冷たかったが、今は平熱ぐらいには戻っていいそうである。

具合がよくなったのなら、それはそれでいい。

しかし問題は……。

「空さん、みんなどうしたの？なんか慌ててるみたいだけど……」

ヒカリが心配するといけないから、と言って太一は賢のデジたまのことをヒカリに伝えなかった。

彼女が目覚めますまでには、デジたまも見つかるだろうと、少々樂觀視していたところもあったのは否めない。

しかし思っていたよりも早く、ヒカリは目を覚ましてしまった。

どうしたものか、と空はさりげなく隣のピヨモンに目線をやるが、ピヨモンも困ったような表情をしている。

うーん、と悩んでいると、ヒカリは辺りをきよろきよると伺い、そして言った。

「……大輔くんと賢くんは？」

『ピヨモンもいないわね。もしかしてテント？』

ヒカリとプロットモンの言葉で、空とピヨモンは、否、子ども達はようやく最年少2人の不在を知ることとなる。

そう言えば、って空とピヨモンがまず気づいて、大輔達の名を呼びながら村を歩き回り、それに気づいた治と光子郎が同じく大輔達の名を呼びながら探し、それから太一と丈の知るところとなった。

全員で呼びかけども、大輔と賢がはーいって返事をするのはなく、子ども達とデジモン達は搜索対象が増えてしまったことで大いに慌てた。

そして最年少2人を探している途中で、太一のアグモンもいないことが判明する。

嘘だろ、って子ども達は青ざめ、デジモン達はパートナーから離れたアグモンに呆れ、現場は更に騒然とした。

どうするどうする、ってお兄ちゃん達が慌てているのを、何も知らないヒカリとプロットモンは眺めていることしか出来なかった。

『……………』

『……………あら、アンタ……………』

そんなヒカリを、じつと見つめている者がいた。

1匹のパグモンだった。それは、昨日の夜、宴会の席にてヒカリの膝を陣取ってくれた個体だった。

子ども達にとっては沢山いるパグモンのうちの1匹で、見わけもつかないパグモンだがプロットモンには分かる。

種類は違えど同じデジモンだ、大好きなヒカリを独り占めした憎い相手の匂いはしつかりと覚えてやった。

どうしてくれよう、と睨みつけていると、ヒカリが視線を感じたのか、パグモンがいる方に顔を向けてしまった。

「あ、ねえ、パグモン。何があったの？みんな慌ててるみたいだけど……………」

空から説明してもらおうと思っていたのに、大輔と賢がいなくて気づいて、ヒカリのことをほったらかしにしてしまったせいで聞けず終いであった。

パグモンなら何か知っているだろうと思い、ヒカリをじつと見つめているパグモンに近づきながら話しかけた。

「大輔さんと賢くんもいないし……………何か知らない？」

『いない』

「いない？大輔くん達、いないの？どうして？」

『いない』

「え？」

『いない』

「パ、パグモン？」

『いない』

『ちよ、ちよつと、何よ？どうしたって言うの？』

パグモンの様子がおかしくなり、ヒカリとプロットモンはぎよつとなって後ずさる。

最早言葉は失われている。

目をぐるぐると回しながら壊れてしまったパグモンは、突如黒い光に包まれた。

遠巻きに様子を伺っていた他のパグモン達も、固唾を飲んで見守っている。

「な、何だ……？」

「ヒカリ！プロットモン！こっちにこい！」

治は呆然と眩き、太一は様子のおかしいパグモンの傍にヒカリとプロットモンがいることに気づいて叫んだ。

しかし2人は聞こえていないのか、黒い光を発しているパグモンを啞然と見つめている。

黒い光はやがて空気を入れられた風船のように膨らみ、ヒカリとプロットモンを優に飲み込んでしまうほど大きくなった。

へたり込むヒカリを護るように、プロットモンは黒く大きな光を睨みつける。

ぱあん、と膨らみすぎた風船が破裂したような音がした。

「……え？」

静まり、停止してしまった空気に、ヒカリの啞然としたような声だけが嫌に響いた。

黒い光を突き破って現れたのは、見慣れたデジモンであった。

大地を踏みしめる力強そうな四肢、伝説の金属・ミスリル並みの強度を誇ると言う毛並み、狼を彷彿とさせる頭部。

『グルルルルルルル流留ルルル……』

プロットモンのそれとは比べ物にならない、空気を擦るような低い唸り声。

パグモンがいた場所には、ガルルモンがいた。

治のパートナーであるガブモンが進化した姿だ。

しかし治のガブモンとは、様子が違っていた。

治のガブモンは青い毛並みをしているが、目の前にいるガルルモンは黒い毛並みをしていた。

治のガブモンが進化したガルルモンは優しそうな黄色い目をして

いるのに、目の前の黒いガルルモンはギラギラと血のように赤い目でヒカリを見つめていた。

無感動で、無感情で、ただそこに佇んでいるだけの“モノ”。
ヒカリは口をはくはくとさせて、息をするのも忘れてしまった。

『グル……』

ぎらり、と黒いガルルモンの目が光った気がして、プロットモンがヒカリに叫ぶ。

『ヒカリ！進化を！』

しかしヒカリはその場にへたり込んでしまって、自分の身を護ることも忘れてしまっている。

目の前で起こったことに脳の処理が追いついていないのだろうか。

真っ先に我に返ったのは、同じくガルルモンに進化をするパートナーを持つ治だった。

「ガブモン！」

『おう！』

デジヴァイスを手に取り、ヒカリを助けなければという思いを込めれば、デジヴァイスから光が漏れてガブモンを包み込む。

0と1がガブモンの身体を急激に書き換え、二足歩行の身体が大きくなって四足歩行となった。

大地を蹴り、ヒカリの前までひとつとびで駆けつける。

ほぼ同時に我に返った太一も、ヒカリとプロットモンの下に駆けよって、へたり込んでいるヒカリを抱っこしてその場から離れた。

「ヒカリ、大丈夫か!？」

「う、うん……」

他の子ども達の下まで戻ってきた太一は、ヒカリを地面に下ろして顔を覗き込んだ。

目を白黒させてはいたものの、特に怪我をしている様子は見受けられなかったので、太一とプロットモンはほっと胸を撫で下ろす。

『ぐがごぎげげがばぶべ』

言葉になっていない音を発しながら、黒いガルルモンは治のガルルモンに飛び掛かる。

治のガルルモンは負けじと応戦し、大きく口を開いて飛び掛かってきた黒いガルルモンを紙一重で避けると、距離を取って青白い炎を吐いた。

炎が直撃し、黒いガルルモンは溜まらず仰け反って後ろの方に跳んだ。

がしやあん、とパグモンのテントが1つ、破壊される。

きやあ、と言うミミの悲鳴がかき消された。

そこからはもう、阿鼻叫喚の地獄絵図だった。

理性を失った黒いガルルモンは執拗に治のガルルモンに飛び掛かり、治のガルルモンはそれを避けるために跳躍しながら翻弄していく。

時折青白い炎を吐いて黒いガルルモンを牽制するが、油断をしていたのは最初の一撃だけだったようで、炎を浴びても怯まない。

パグモン達は仲間の変貌に怯えているのか、隅の方でひと塊になって、仲間だった黒いガルルモンをただ見ていることしか出来ていないようだった。

大丈夫？ってミミが何度か声をかけても、パグモン達は怯えてしまつて答えない。

子ども達とパートナー達は、ガルルモン同士の戦闘の邪魔にならないように少し離れたところで待機していたが、それでも身体の大きな成熟期が2体も、テントが所々に設置されている狭い空間で戦うのは少し無理があつたようだった。

『……ぐうっ！』

「ガルルモン！」

黒いガルルモンも、青白い炎を治のガルルモンに向かって吐き出した。

空中に逃げていた治のガルルモンは、避けることが出来ずに炎をまともに食らってしまった、炎に押し出されて子ども達の方へ落ちてきた。

慌ててそこから避ける子ども達。しかし黒いガルルモンは追撃の

手を緩めず、直線上にあるテントに構わず突進してくる。

近くにいたミミとパルモン、光子郎とテントモンが悲鳴を上げながら、地面に倒れるように伏せた。

がしやん、とテントがまた一つ潰れる。

「うう、痛い……………あらう？」

テンガロンハットが飛ばないように押さえつけながら、顔を軽く横に振った。

すぐ隣に、頭を押さええてうずくまっている光子郎達がいる。

わあきやあと上級生達の喧騒の中、咄嗟に閉じていた目を開けて何気なく辺りを見渡したら、黒くて小さい何かが蠢いたのが視界に入った。

何だろう、と凝視する。潰れたテントの隙間から這い出て、ぽよんぽよんと地面を跳ねている、黒くて小さいもの。

牡丹餅みたい、というのがミミの第一印象だった。

「いたた……………ミミさん、大丈夫ですか…………？」

「え？あ、うん。私は大丈夫。パルモンは？」

『私も平気……………あれ？ミミ何持つてるの？』

起き上がった治のガルルモンが、首を何度か振った後に再度黒いガルルモンに攻める。

飛び掛かってきた黒いガルルモンに炎をぶつけ、先ほど自分がされた仕返しをしてやった後、ひっくり返った黒いガルルモンに押し掛かった。

「この子？…さつきその潰れちゃったテントから出てきたの。すぐくちっちゃいし、赤ちゃんデジモンかしら？…ここにいたら危ないわ」

押し掛かれた黒いガブモンは、四肢が千切れるのではと懸念してしまうほど出鱈目に振り回して、治のガルルモンを振り払おうとする。

パルモンは、ミミの腕に抱かれた黒くて小さいものに、驚愕の声を上げた。

『ボタモン!?!どうしてハイハイ?!』

『何やて!?!』

パルモンの言葉に反応したテントモンも、同様に驚いていた。

「どうしたの？」

「この子がどうかしたんですか？」

ミミと光子郎が尋ねる。

2人は、知らなかった。何も知らなかった。それはデジモン達にとつては当たり前で、当然で、常識だったから、知識として子ども達に教えようなんて、これっぽっちも思っていなかったのだ。

治のガルルモンを振り払った黒いガルルモンが立ち上がる。

しかし無理をしたその身体は既に限界を迎えていた。

『ボタモンは幼年期Ⅰ、赤ちゃんのデジモンなの！』

「赤ちゃん？ふーん、やっぱり赤ちゃんなんだ」

「この子が進化すると、パグモンになるんですか？」

『んなわけあれへん！ボタモンはコロモンに進化するんや！パグモンには絶対進化しーへんさかい！』

「へ？」

『ここはパグモンの村なのに、コロモンに進化するボタモンがいるなんておかしいわ！ねえ、ちよつと！』

ボタモンは幼年期Ⅰのデジモンだ。

人間で言えば生まれたばかりの赤ちゃん、1歳にもなっていない赤ちゃん、まだはいはいもできない赤ちゃんである。

幼年期Ⅰのデジモンは、幼年期Ⅱのデジモンよりも戦う力がないため、はじまりの町のようにお世話をしてくれるデジモンや、進化先である幼年期Ⅱや成長期などに見守られながら育つのが一般的だ。

潰れたテントの中から出てきたということは、このボタモンはテントの中にいたということに他ならない。

まだ戦う力のないボタモンが、群れや仲間からはぐれてこの村に1匹だけでやってきたというのは、考えにくい。

基本的にそれぞれの進化前の世話をするもののだが、ボタモンが進化するのは大抵コロモンである。

もちろん、デジモン達は無限の可能性を秘めているので、ボタモンの進化先はコロモンだけではないのだが、パグモンに進化することは

テントモンの言うとおりで絶対はないのだ。

じゃあ、何故ここにいるはずのないボタモンがここに？

激しい戦闘が繰り広げられている中、パルモンとテントモンはそれぞれのパートナーを伴って、隅の方に一塊になって縮こまっているパグモンの下へと駆け寄る。

ほぼ同時に、黒いガルルモンは断末魔のような咆哮をあげて、ずしんとその場に倒れ込んだ。

光に包まれ、小さくなつた黒いガルルモンは、パグモンまで退化していた。

ピクピクと小さく痙攣し、口の端から大量の泡と唾液を零している。

恐る恐ると言つた様子で、倒れたパグモンを覗き込む太一と治とガブモンを尻目に、空達はパルモン達が隅つこの方で震えているパグモン達に詰め寄っているのを見た。

『さあ、白状しなさい！』

『アグモンが、コロモンの匂いする言うてたんに、パグモンがおるなんておかしいなあとは思ってたんや。何や知つとるんなら、教えてくれまへんかいな？』

パルモンは怒っているのを隠さず、テントモンも口調こそ柔らかいが有無を言わさぬ圧迫感のようなものを醸し出しながら、パグモン達にじりじりと詰め寄る。

ひ、とパグモン達は2体の剣幕に圧され、びよこびよこ逃げだそうとしたが、異変を察して駆け寄ってきたガブモン達に通せんぼされてしまい、合計6体の成長期に囲まれ、逃げ場を失った。

遅れて、子ども達も駆け寄ってきたが、デジモン達と違って何が起こっているのかよく分かっていないようだった。

何があったのか、太一がミミと光子郎を訪ねると、ミミは抱っこしているボタモンを差し出しながら、パルモン達が教えてくれたことをそのまま太一達に伝える。

この村は、何かがおかしい。

「おい、何か知ってるな？知ってること全部吐け！」

1度疑ってしまったら、懐疑心は何処までも突き進んでいく。

太一は足下にいた1体のパグモンを乱暴に抱き上げて、じと目になりながら問いただした。

この期に及んでパグモンはまだ誤魔化そうとして、昨日の宴で歌っていた歌を披露するが、子ども達はもう騙されない。

そこでパグモンはどうとう、本性を表した。

先ほどまでの友好ムードは一転し、悔しそうな表情を浮かべて太一達を罵倒し始めた。

『ふうんだ！騙される方が悪いんだよ！』

『そうだそうだ！』

『せーつかくガジモン達に頼まれて、エテモン様に捧げようと思つたのに！』

『騙された莫迦な子ども達って、笑ってやろうと思つたのに！』

「……ははは、そうかそうか」

ぞ、と太一の背筋が凍る。

というか子ども達を取り巻く空気が凍ったというか何というか。

ひ、と太一の喉の奥から引きつったような音が飛び出す。

ぎ、ぎ、ぎ、と錆び付いたロボットみたいにぎこちなく、冷気を漂

わせている人物へと顔を向けた。

がっし、と太一が持ち上げていたパグモンを、アイアンクローの要領で引っ掴み、自分の顔の位置まで持ち上げたのは、太一の親友である治だった。

その顔は何処までもにこやかで、それが逆に恐ろしさを醸し出していた。

「とところで君たち、僕の弟のデジたまはどうしたのかな？わざわざコロモン達がいた村を乗っ取ったぐらいだ。デジたまがなくなつたのもどうせ君たちの仕業だろう？」

『知らないよーだ！誰が教えるもんか！』

「ははは、そうか。まあ大体検討はついてるけどね？」

「え？治、君、心当たりあるのかい？」

「丈先輩、思い出してください。こいつら確かに僕たちと一緒にデジたまを探してはくれましたけれど、こいつらが探しに行ったのは滝の方だけで、後は何処に探しに行くでもなく、ただ村をうろろろしていただけでしょう?」

確かに子ども達が村の周辺をうろろろしていた間、パグモン達は何故か真っ先に村から少し離れた場所にある滝の方へ探しに行っていた。

人はやましいことや場所を避けたがるものだが、その心理はどうやらデジモン達も同じらしい。

滝の方に何かを隠していて、それを子ども達に知られたくなかったから、パグモン達は自ら滝に赴いて何もなかったことをアピールしたのだ。

しかし幼年期の幼さ故か、はたまたパグモンという種族の特徴故か、色々と詰めが甘かったようで、それ以上の行動を起こさなかった。

治はどうもその時点で、おや?と思ったようだった。

ただ相手が幼年期だったから、きつと滝まで行って帰ってくるのに体力を使ってしまったんだろうな、とその時はそれで流してしまい、太一達にも特に言う必要はないだろうと頭の隅に追いやってしまったのである。

まさかその時は、特に気にもとめる必要はないと思っていたことが、この時に生かされることになるなんて思いもしなかったけれど。そしてそのことを指摘してやれば、まだまだ幼年期のパグモン達はあからさまにぎつくうつて身を強ばらせた。

分かりやすすぎて、いつそ笑える。

ふ、と治は鼻を鳴らして笑った。

「さて、まず君達は元々いたコロモン達を追い出すなりとつ捕まえるなり何なりして、この村を乗っ取った。平たく言えば住居不法侵入罪になるね。次。ここをパグモンの村と偽って僕達を騙した。これは詐欺罪になるのかな?最後、僕の可愛い大事な弟が大切に温めて待っていたパートナーのデジたまを許可なく、無断で、何処かに持ち去ったね?これは窃盗罪に当たる。おめでとう。君達はこれで立派

な犯罪者というわけだ。まだ赤ん坊ぐらいの歳なのに、もう犯罪者だなんて、君達の未来は明るいねえ。え？君達がやったって言う証拠がない？言うに事欠いて、まだ言い逃れしようとしているのかな？ん？あれだけ分かりやすく自白しておいて、盗んだのは自分達ではありませんか？ははは、面白い冗談だ。ところで、僕達の世界では罪を犯したものは相応の罰が下るんだ。罪の重さで罰の重さも変わるわけだけれども、住居不法侵入罪、詐欺罪、そして窃盗罪に相応しい罰って何だと思う？僕としてはやっぱり僕達のパートナー達全員と戦うことだと思うんだ。もちろん君達はそのままで、僕達のデジモンは進化させて、成熟期でね。え？フェアじゃない？罰なんだからフェアにしたら意味がないだろう？君達に拒否権はないよ。ああ、ちなみに太一はどんな罰がいいと思う？」

息継ぎ無しで一気に治はそう言い放つ。

サッカー部で、下級生達にドリブルのやり方や、シュートのコツを教えてあげている時の顔と、同じ笑みを浮かべていた。

……しかし言っていることはえげつない。

すごくえげつない。

パグモンをアイアンクロウで掴んで、顔の位置まで持ち上げてぎりぎりぎり絶妙な力加減で締め上げている姿は、どう見てもいつもの治とは程遠かった。

そんな治を唾然と見つめていたら矛先が向けられてしまい、太一は口元を引きつらせる。

そんなもんほつといて、とりあえずデジたま先に探そうぜ、とは言いやい難い雰囲気だったが、治の暴走を止められるのは太一だけだ。

デジたまが見つからなくて泣きながら探しているだろう賢のことも心配だし、大輔とブイモンも何処に行ってしまったのやら検討もつかないし、ということだ。

「……ほつとけよ、そんな奴ら。どうせこれ以上何もできねえって。それよりもデジたまと賢達探そうぜ」

「……それもそうだね。今はパグモン達なんかよりも、賢達の方が大事だ。僕としたことが頭に血が昇って、大事なものを見失うところ

だったよ。よかったね、君達。太一が寛大な判決を言い渡してくれて。さあ、僕達の気が変わらないうちに、一刻も早くここから立ち去ってくれ……正直君達のことには今すぐにでもシバキ回してやりたいぐらいには、腸煮えくりかえっているんだから……」

太一には聞こえないように、鷲掴みにしているパグモンだけに聞こえる音量で最後の台詞を言い放てば、パグモン達はひい！と灰色の体毛を真っ青に染めて、がくがくと頷いた。

すごすご、とかいう黒いオーラを背負って、顔に影を作りながら迫ってくる様は、幼年期のパグモンから見れば成熟期が迫ってきているような錯覚に陥ったことだろう。

えげつない台詞を吐いたとは思えないほど優しい手つきで、掴んでいたパグモンをそつと地面に置いてやれば、パグモン達は涙目になりながら、そそくさと村を後にした。

黒いガルルモンに進化してしまい、気を失ったパグモンももちろん連れて行って。

滝の方に駆けつけた子ども達が見たのは、ぐったりしているブイモンと、そのブイモンに寄り添っている大輔と賢、それからその2人と1体を護るべく、ボロボロになりながらも踏ん張っているアグモンだった。

奥には檻に入れられているたくさんのコロモンと、無造作に放り投げられているデジたまがある。

その檻の前に立ちあがる、見慣れない2体のデジモン。ガジモンだ、とテントモンが教えてくれた。

先ほどまで村を乗っ取っていたパグモンが主に進化するデジモンで、パグモン以上に質の悪い悪戯をしかけてくるらしい。

こいつらが黒幕か、とパートナーがボロボロになってしまつて怒りが頂点に達した太一と、大切な弟を泣かせたとして静かにぶちギレている治は、デジヴァイスを構えた。

「おつまえら、よくも俺のアグモンを！ただじゃ置かねえから覚悟し

とけ！」

「君達はよっぽど僕達を怒らせたらしいね……う？」

どうして大輔とブイモンと賢がここにいるのか、それはこの際置いておこう。

2体ばかりでアグモンを蹂躪したその罪は重い。

ずごくごごといいう真っ黒いオーラを背後から排出させて怒り狂っている太一と治は、子ども達でさえ近寄りがたい雰囲気だったが、アグモンはそれどころではなかった。

太一が言った、俺のアグモン、という台詞がずっとアグモンの頭の中をぐるぐると駆け巡っているのだ。

ずっとずっとみんなと一緒に待っていて、待ち焦がれていた大好きなパートナーが、自分のために怒り狂ってくれているのだ。

天にも昇る勢い、というのはこういうことを言うのだろう。

ボロボロで、大輔達を護るために奮闘して、立っているのもやっとだったアグモンは、それだけで元気になった。

『タイチー！』

「行くぜ、アグモン！」

『オサム、俺達も！』

「戦わせてばかりで悪いけど、頼むよガブモン」

デジヴァイスから光が漏れ、アグモンとガブモンを包み込む。

大きくなり、光を突き破って生まれたのはグレイモンとガルルモンだ。

滝の奥の洞窟内は狭いものの、成熟期が2体いても窮屈さは感じなかった。

大輔と賢はぐったりしているブイモンを引きずって、太一と治の背後に、空達の下に移動する。

「そ、空さん、みんな……」

「2人とも怪我はない？」

膝について大輔と賢の顔を覗き込んだ空の言葉は、2人を心配するものだった。

勝手に離れたことを怒られると思っていた大輔は、目を白黒させな

がら空を見上げ、ないですと呆けたように答える。

よかった、と空が安堵したと同時に、太一達の方も決着がつく。

流石に成熟期2体を相手にするのは無謀だったらしく、ガジモン2体はあっさりとグレイモン達に吹っ飛ばされ、滝の前に流れている川に落とされ、流されていった。

あまりにも呆気ない幕引きに、グレイモンとガルルモンはポカンとしていたし、太一と治は物足りないと言いたげに鼻息を荒くしながら流れ去っていくガジモンを見送っていた。

「ざまーみるー！」

「もう少し痛めつけてやりたかったんだけどね……ふふふ」

治の恐ろしい台詞は無視して、子ども達は檻の中に入られているコロモン達を解放してやる。

そこらへんに転がっている石で鍵をぶっ壊したり、パートナー達にぶっ壊してもらったりして、コロモン達を全て出してやった。

勿論、賢のデジたまも。

檻の中からデジたまを取り出して、わんわん泣きながらデジたまを抱きしめる。

よかった、とみんなが安堵する中、1体のコロモンがねえねえって太一に話しかけてきた。

『あのね、ぼくたちがつかまったあとに、もう1たいべつのデジモンがつかまったみたいなの』

「え？・そうなのか？・何処に？」

こつちーってコロモンは連れて行ってくれる。

滝の洞窟は奥行だけでなく向かって左側にも広がっており、そつちの方に新しく捕らわれたデジモンがいるらしい。

確かにぽつんと、コロモン達がいた檻とは離れたところに別の檻があった。

その中には、布の塊が蠢いていた。

もがーという悲鳴にも似た声が聞こえてきたので、恐らくコロモンが言っていたデジモンがあ布に包まれているのだろう。

どうして？と子ども達は至極当然の疑問を抱いたが、助け出すのが

先だ。

太一はそこらへんにあった手頃な石を掴んで、鍵をぶち壊した。檻を開いて、布の塊を取り出し、解いてやる。

中から姿を現したのは、更にロープでぐるぐる巻きにされている、蝙蝠のようなデジモンだった。

そのロープも解いてやれば、丸いフォルムに蝙蝠のような翼と、鳥のような足が生えているデジモンが現れた。

もがもがと言っていたのは猿轡をされているせいだったようで、それも取ってやる。

ぷは、と詰まらせていた息を吐きだし、新鮮な空気を吸い込みながら助けてくれた存在に目を向ける。

よう、と太一が代表して声をかければ、黄色い目をぱちぱちさせた。

『……貴方は、人間の子ども?』

「おう」

『……もしかして、ゲンナイ様の言っていた、選ばれし子どもですか?』

「ん?今ゲンナイ様って言ったかい?」

「君、もしかして、ゲンナイさんが言っていた、案内してくれるデジモン?」

蝙蝠のようなデジモンは、ぶわあつと泣きだした。

『あああああようやくお会いできましたあああああ!よかったです、本当によかったですうううう!』

わあわあと地面に伏して号泣するそのデジモンに、子ども達とパートナー達は苦笑する。

落ち着いて、つて空が宥めれば、そのデジモンはぐすぐすと鼻水を啜りながらも泣き止んでくれた。

『うう、すみません……こちらに着いたのは数日前なのですが、その時には既にコロモン達の村はバグモン達に乗っ取られていたようで……ワタクシもすっかり騙されてしまいました……』

コロモン達が住んでいる村だと聞いていたのに、そこにいたのはバグモンだったから、おかしいとは思っていたらしい。

たが乗っ取られていたなんて露ほども疑わず、道を間違えたと思いきんだそのデジモンは、パグモン達にコロモンの村は何処かと尋ねたそうだ。

結果は、ご存じの通りである。

「パグモン達は俺達が追い払ったから、もう大丈夫だよ」

『おお！そうですか！流石は選ばれし子ども達です！』

傍に居たコロモン達がすごいすごいどうやって!?!って無邪気に訪ねてきたけれど、太一達は曖昧に笑って誤魔化した。

先ほどの治は……ちよつと思ひ出すのは憚れるし、お子様には聞かせられない。

『ワタクシ、ピコデビモンと申します。ゲンナイ様に頼まれて、貴方方の案内をいたします。どうかお見知りおきを』

そう言つてそのデジモン……ピコデビモンは子ども達に挨拶をした。

え、つてヒカリはそのデジモンの名を聞いて、1人だけ驚いたような表情をする。

その名は、聞いたことがあった。

忘れもしない、『あの子』の話。

ヒカリは、ピコデビモンに話しかけようと口を開きかけたが、それは叶わなかった。

《あーもしもしい〜?》

新たな魔の手が、子ども達の行く手を塞ぐことになる。

砂漠と猿とラブソング

《選ばれし子ども達い〜！聞こえるう？よくもアチキを虚仮にしてくれたわねえ！腹が立つちゃったからあ、この村ごと消滅させてあげちやうわあ！》

その後はもう、地獄絵図だった。

パグモンに村を乗っ取られたコロモン達を解放し、奪われたデジたまを取り返し、そしてゲンナイから遣わされた案内デジモンと出会い、安堵していた子ども達とパートナー達だったが、突如聞こえてきた大音量のギターと、マイクを通って出された声にぎよつとなって洞窟から出ると、大きな猿がいた。

薄らと透けているのは、立体映像だからなのだろうか。

サングラスをかけ、マイクを右手に持ち、ギターを肩から下げた大きな猿を見て、コロモン達がエテモンだと怯える。

その名は、ガジモンが口にしていた言葉だ、とアグモンは思った。あわわ、つてピコデビモンが太一の顔の位置でホバリングしながら子ども達に教えてくれる。

『あいつは、貴方達の次の敵です！ダークネットワークと呼ばれている、暗黒のケーブルを駆使して、ゲンナイ様やワタクシ達の邪魔を何度もしていました！』

「あいつが？今度の俺達の敵？」

「僕らを名指しして、しかも消滅してやるとか言っている時点で想像はつくけれど……」

『見た目に惑わされてはいけません！あれでもかなり強いんです！何故ならエテモンは……完全体なのですから！』

完全体、と聞いて子ども達が思い浮かべたのはファイル島にいたアンドロモンだ。

アグモン達曰く、ものすごく進化したデジモンで、グレイモンとガ

ルルモンが2体ばかりで挑んでも、蠅でも追い払うかのように軽くいなしてしまっていた。

光子郎とカブテリモンが機転を利かせたお陰で、アンドロモンを正気に戻すことが出来たのだが、あれは運がよかつただけだ。

黒い歯車で操られ、普段のような動きが出来なかつたからこそ、カブテリモンはアンドロモンの隙をつくことが出来たのである。

黒い歯車を取り除いたアンドロモンは、元の温厚な性格に戻ったが、今度の完全体は子ども達の敵。

子ども達の顔色がさあつと青くなる。

『ダークネットワーク、カモン！』

子ども達とパートナー達が啞然としていることなど露知らず、エテモンは声高にそう宣言すると、村の方から地響きが聞こえてきた。

地面から浮き上がってきたのは、張り巡らされていた黒いケーブル。ル。

コロモンの村は滝から離れて森の向こうになるのだが、そこからでも見える位置まで、ケーブルが上昇した。

大きな立体映像のエテモンは、今にも高笑いしそうなほどに大きな口を開けていた。

黒いケーブルに、毒々しいピンクの光が走る。

それを見た大輔と賢、それからヒカりはひゅつと息を飲んだ。

直後に鳴り響いた轟音。

雷が落ちたような音と共に、コロモンの村のテントが破壊される。

否、破壊されたというよりはエテモンが言っていた通り消滅させられたと言った方が正しいだろう。

雷が当たると一瞬だけ炎と煙が上がり、普通ならテントの残骸が無残に転がるところを、跡形もなく消滅してしまったのである。

そしてその雷は、滝の方にいた子ども達にも襲い掛かってきた。

子ども達に直撃せず、まるで遊んでいるかのように周りに落ちては、子ども達が悲鳴を上げているのを、エテモンは楽しんでる。

ばしやあん、とすぐ傍にあった川に落ちて、水飛沫と水柱が上がり子ども達に覆いかぶさった。

「みんな、進化よー！」

ずぶ濡れになった空が叫ぶ。

ここまで莫迦にされて、黙って逃げるわけにはいかない。

よくも虚仮にしてくれたわね、なんて言っていたが、子ども達はエテモンに会ったこともなければ聞いたこともないのだ。

子ども達が知らない間に、何やら逆恨みをして八つ当たりをしていると言うのなら、冗談ではない。

子ども達は勇ましく返事をして、パートナーを進化させる。

ただし賢のパートナーであるパタモンは未だデジたま、大輔のブイモンは目をとろとろとさせてぐったりとしているため、大輔と賢はブイモンを引きずって洞窟の奥へと引っ込んだ。

だがここで予想外のことが起こる。

エテモンがにたりと笑い、ギターをかき鳴らすと進化をしたデジモン達は苦しそうに呻きながら、何と退化してしまった。

ぎよつとなった子ども達に、ピコデビモンがああ！と悲痛な悲鳴を上げた。

『あれは、ラブ・セレナーデ！エテモンの技です！』

『ラブ・セレナーデを聞くと、戦う力をなくしてしまうんや……』
「何だって!?!」

ピコデビモンの言葉を補足したテントモンの台詞に、子ども達は愕然とするしかない。

聞くだけで戦意を喪失してしまうなんて、それでは進化をして戦うということが出来ないではないか。

何て卑怯な、と思ったが、戦う力のない子ども達ではどうこうすることが出来ない。

その間にも、コロモン達の村は少しずつ地図から消えようとしている。

「どうすればいいんでしょう……!」

『今のままやと、どんなに頑張ってもこっちが不利や』

『もつと……もつと力があれば……!』

プロットモンが悔しそうに呟く。

相手は完全体である。初めて対峙した完全体は元々味方だったから、成熟期でも勝つことが出来た。

今回の完全体は敵、こちらも同レベルにならないければ勝ち目はない。

これこそが、ゲンナイが言っていた紋章のことなのだろう、と子ども達は思った。

パートナー達を、更なる高みへ進化させるアイテム。

しかしそれを持っていない今では、エテモンに挑んでも全滅するのがオチだ。

『それそれそれ!』

子ども達の迷いなど関係ないエテモンは、更にダークネットワークを操って黒い雷を派手に落としていく。

洞窟の入り口に辺り、揺れ、岩が崩れ落ちる。

子ども達とパートナー達は悲鳴を上げながら洞窟の奥へと逃げた。

こつち!とコロモン達が誘導する。

岩は完全に入り口を塞いでしまい、エテモンの高笑いだけが響いていた。

見てろよ、絶対いつか仕返ししてやるからな、と心に秘めながら、太一を筆頭に子ども達はコロモンに導かれるまま、洞窟の奥へと向かう。

ブイモンを何とか叩き起こして、眠そうにしているのを大輔が引っぱり、賢が後ろから押して、ヒカリとプロットモンが並走しながら、少しだけ遅れてついて行った。

自然に削られてドーム型になっていた内部は、やがて誰かの手が加えられたように真つすぐな道となり、何処かへと通じていく。

行きついた先は、行き止まりだった。

コロモンは言う。村に何かあったらここから逃げろという言い伝えがあるそうだ。

治はその言葉のニュアンスに引つかかって、眉を顰める。

ここに逃げ込め、ではなくここから逃げろ?

人工的に切り開かれた道からして、この奥は何処かに通じている道

でもあるのだろうか。

行き止まりだが、何処かに秘密のスイッチのようなものがあって、それを押すなりなんなりするところが開くのだろうか？

そう思つてコロモンに尋ねようとしたとき、ピコデビモンが悲鳴を上げながら目の前の壁に近づいていった。

『こ、これは……！』

「どうしたの？ピコデビモン」

壁に張り付くようにじーっと見つめているピコデビモンに、ミミが声をかける。

「バツ！と勢いよく振り向き、そしてこう言った。

『間違いありません！これは紋章です！』

「ええっ！」

「こ、この壁の模様が？」

驚愕する子ども達に、ピコデビモンは嬉しそうに続けた。

『はい！ゲンナイ様から教えていただいた紋章の特徴と一致します！

これは、“勇気”の紋章！』

「勇気……」

太陽をモチーフにしたような模様の紋章、勇気を象徴した紋章だと言う。

太一が模様を見上げながらピコデビモンの言葉を復唱した時、太一のデジヴァイスに異変が起きた。

「お、お兄ちゃん……」

「へ？……あ」

最初に気づいたのは、ヒカリだった。

太一のズボンに引っかけられているデジヴァイスから、何かを感じ取ったヒカリが何気に兄の腰に目を向けると、薄らとオレンジ色に光っていたのである。

妹の声に気づいて、太一がデジヴァイスを取ると、そのデジヴァイスと呼応するかのように目の前の壁がオレンジ色に光った。

太陽の模様が、勇気の紋章が縮小されていく。

みるみる小さくなって、やがてオレンジの光が薄れると、模様だけ

がその場に浮かび上がった。

びゅう、と風が吹く。

紋章は持ち主を待っていたかのように、太一のデジヴァイスに吸い込まれて消えた。

その代わり、デジヴァイスのディスプレイに、紋章が浮かび上がった。

「……俺の、紋章だったのか」

『おお！まずは1つめを無事にゲットしましたね！ええと……』

『タイチだよお。僕のパートナー、タイチ！』

『タイチ様！おめでとうございます！』

アグモンは喜び、ピコデビモンは祝いの言葉を述べる。

エテモンに一方的に敗北を期し、エテモンを倒すために新たな力を手に入れなければならない、と悔しがついていただけに、突然紋章を手に入れた驚愕からか、太一のリアクションは今いち薄かった。

それだけではない。

あ！って空が声をあげ、飛び込んできた風景は、コロモン達の村からずーっとずーっと遠くにある山の中。

ずっとなんてどれぐらい？って聞くと、みんなで移動すると1週間はかかるような場所だと言う。

そんなに遠い場所なのに、洞窟の中を数分もしないで移動しただけなのに、どうしてそんなところに繋がっているのか。

治は洞窟内部と外を忙しなく交互に見ているし、光子郎は興味が湧いたのか目を輝かせているし、丈はまたも自分の常識が打ち破られたショックで口をはくはくとさせている。

何にせよ、

「……とりあえず、エテモンから逃げることは出来た、ってことでいいのか？」

「……じゃないか？」

そしてじわじわと沸き上がる、紋章を手に入れた感動。

太一はデジヴァイスのディスプレイに浮かんでいる、自分の紋章を見下ろす。

太陽の模様をした、「勇気」を象徴する紋章。

それが、太一の紋章だ。心の中で何度も噛みしめる。

勇気の紋章。それはつまり、自分には勇気があるということに他ならないのだろう。

「これさえあれば、エテモンなんか……!」

アグモンを更に進化させることが出来れば、エテモンにだって負けないはずだ。

沸き上がってくる歓喜。しかし同時に……。

そんな太一に、待ったをかけるものがいた。

「太一」

治である。

洞窟の外に出て、エテモンから逃れられた喜びを全身で表している子ども達を尻目に、治はデジヴァイスを見下ろしている太一を呼んだ。

デジヴァイスから目を離して、治の方を見やる太一。

いつになく真剣な表情で、太一は目を白黒させた。

「治?」

「……お前が何を考えているのか、手に取るように分かるよ。……それさえあれば、エテモンなんか簡単に倒せる。そう思っているんだろう?」

眉を顰めながら、治は太一に歩み寄り、真正面から対峙する。

「ゲンナイさんは、確かに紋章は僕達やデジモン達を更なる高みへと進化させる道具だと言っていた。でも所詮、道具は道具だ。使い方次第で、善にも悪にもなる」

「……………」

「……調子に乗って傲慢になるのは、太一の悪い癖だ。僕達の目的は『世界を救うこと』であって、『エテモンや悪いデジモンを倒す』ことじゃない。そうだろうか?」

「……………!」

エテモンに一方的にやられて悔しいのは、太一だけじゃない。きつとアグモンだって悔しかった。

同族であるコロモンの村を守ってやれなかったのだから。

そして、太一とアグモンだけじゃない。

治だって悔しかった。一方的に蹂躪され、追い詰められ、嘲笑われ、成す術もなく逃げることしか出来なかった今回のことは、両親の離婚を彷彿とさせるものでもあった。

治と賢がどんなに喚いても泣き叫んでも、両親の破滅への道は止められなかった。

だからこそ、治は太一に忠告する。

「……強すぎる力は身を滅ぼす。それが例え光であれ、闇であれ……エンジエモンの最期の言葉、忘れたなんて言わせないぞ」

「……そう、だったな」

デジヴァイスを持っていた右手をぶらん、とさせながら、太一は力なく笑った。

命をかけてデビモンを倒した、美しい黒い羽を背負った天使の最期。

深くなりすぎた闇を照らすために、強い光を放つてその身を焼き尽くしてしまった。

その天使が最期に言った言葉を、忘れてはならない。

「……よし、治」

「ん？」

「いつもの、頼まあ」

何やら覚悟したような表情を浮かべながら、太一は言う。

その意図を理解した治は、にっこり笑って更に太一に歩み寄った。

自分の両手で太一の両頬を包むように宛がう。

そして……。

ばちーん!!

弾力のあるものを思いつきり叩いたような音にびっくりして、他の子ども達は反射的に振り返った。

「~~~~つてえ!!」

ひりひり、じんじんと痛みが走る両頬を押さえながら、太一はその場で身もだえている。

丈とミミと賢、それからパートナー達は頭上に沢山の疑問符を浮かべていたが、空と光子郎、そして大輔とヒカりは、2人がやっていることを瞬時に理解した。

「あー目え覚める……」

「ははは、いい目覚めだろう、太一。……さて、僕もやってもらおうかな」

「え？お前必要ねえじゃん？」

「いいから、いいから。これからに向けての景気づけも込めて」

「……あつそ。んじや遠慮なく……」

他の子ども達に見られていることなど露知らず、太一は治の両頬に自分の両手を宛がうと、思いつきり腕を広げて勢いよく治の頬を叩くように挟んだ。

「やっぱりばちーん！という音がする。」

ぎよつとなる丈達を尻目に、治も痛みで身もだえ、頬を押さえながらその場でぴよんぴよん跳ねた。

「はあーあ、いった……」

「うし！気合も入れたことだし！きつさと出発し」

『待つて待つて待つて、何かいい話で終わろうとしてるけど、ちよつと待つて！』

2人だけで解決して締めくくろうとしているから、傍らにいたアグモンが真っ先に我に返って太一達を引き留める。

何だよ、つてきよとんとした目でアグモンを見下ろす太一に、空は苦笑しながら言った。

「そりや、それアンタ達だけの儀式でしょ？知ってるのは私達だけなんだから」

「久しぶりに見ましたね、それ」

何か知っている風の空と光子郎に、丈が尋ねると代わりに大輔とヒカ리가答えてくれた。

「試合の前とか、試合中に太一さんが調子に乗ってたりすると、治さん

「がああやって気合いれたり戻してやったりしてるんですよー」

「自分でやるより、他の人にやってもらった方が思いつきり叩いても
らえるからって」

「……いつもそんなことしてるの、君達」

勝利のジnkクスやルーティーンなどで、人によっては気合を入れた
り気持ちを整えるということはするだろう。

しかし太一と治のルーティーンは、知らない人が見たらただの暴力
である。

現に丈達やパートナー達はびっくりしているのだし。

「……僕はてつきり喧嘩でも始まったのかと思つたよ」

「喧嘩になる前に空に殴られて終わりだから、それはねえって」

「ちよつと、太一？」

余計なことを言いなさつた太一に、空が笑顔で迫る。

やべ、と顔を青くさせながら、太一はアグモンを連れて駆け出した。
待ちなさい！って空は追いかけて、その後を慌ててピヨモンが追
う。

そのまま帰ってくることなく、真つすぐ走って行くもんだから、残
されたメンツも慌てて駆け出した。

しゅるり、と黒いケーブルが蛇のように這い出たことにも気づ
かずに。

空つ風と熱い日差し。

遮るものは何もなく、一面砂の足元では時々砂が舞い上がってい
る。

細かい砂の粒子が目や耳、喉に入り込んで、時々酷く咳き込んだ。
ファイル島でも広大な砂漠を横切ったことはあるが、あの時と違つ
て子ども達の用意は万全だ。

ゲンナイは食べ物の他にも色々と用意してくれていたようで、全員
分の日傘が光子郎のパソコンにデータとして入っていた。

それを出現させ、1人につき1本のペットボトルも持たせる。空になつてもまたパソコンから取り出せばいいが、スポーツをやっている半数が一気に飲むなど忠告した。

トイレが近くなつたり、飲んだ分だけ汗が更に吹き出て、余計に体内の水分が排出されてしまうそうさ。

水はこまめに、少しずつ補給し、汗はなるべく拭かないこと。どうしても気になるのなら、濡れたタオルで吹くこと。

汗は体内の余分なものを排出させるだけではなく、上がりすぎた体温を下げる役目も担っているのだ。

シャワーだつてあるんだから、べたついた身体は夜に洗い流せばいい。

ミミははーい、つて素直に返事をして、文句も言わずに上級生達の後、というよりも先導しているピコデビモンの後をついて行つた。

『いや、本当に申し訳ございません……。砂漠にあるコロツセオに紋章が1つ隠されているそうなのですが……。』

ピコデビモンが申し訳なさそうに言つた。

サーバ大陸はファイル島と違い、広い広い大陸である。

砂漠の広さも、相応に大きいのだ。

いつまでも果てしなく、終わりが見えてこない砂漠のエリアに、幾ら準備はしていても子ども達は根を上げそうになつていた。

しかしいいこともあつた。

もしもコロモンの村でエテモンに遭遇せずに、村から出発していたら砂漠の端っこから端っこまで歩かなければならなかつただろう、とピコデビモンは教えてくれる。

つまり、あの洞窟は近道でもあつたのだ。

あの洞窟を通らなかつたら、遠回りをして1週間近く時間をロスしていたに違いない。

エテモンの行動は、完全に裏目にでてしまったのだ。

子ども達にとってはこの上ない幸運だつた。

『……タイチイ?どうしたの?』

太一とお揃いのオレンジ色の傘を差したアグモンが、デジヴァイス

を見下ろして何かを考えこんでいる太一に気づく。

アグモンに声をかけられた太一は我に返って、歩きながらアグモンを見下ろした。

『何か考え事?』

「ん?大したこつちやないさ。この紋章を使ってグレイモンが進化したら、どんなのになるのかなって……」

その顔は、何処か楽しそうだった。

やはり男の子だ、モンスターが進化したり、ロボットが変形したりするアニメが大好きな太一は、グレイモンが更に進化した姿が待ち遠しいらしい。

紋章を手に入れた際の、何処かぎらついた表情は治が吹っ飛ばしたお陰で何処にもない。

初めてアグモンがグレイモンになった時のことを思い出して、少し高揚しているようにも見えた。

「もっとでっけー恐竜になんのかなあ。アグモンはどう思う?」

『んー?』

「何だよ、アグモン。乗り気じゃなさそうだなあ。興味ないのか?どんなデジモンに進化するのか」

『興味がないわけじゃないよ。でも僕はタイチを護れるぐらい強くなればばいいんだあ』

ふーん、って太一は返した。

太一としては、紋章を手に入れたことでアグモンと一緒に盛り上がりたかったのだが、アグモンは本当にどうでもいいらしい。

太一が紋章を手に入れて嬉しそう、どんなデジモンに進化するのかになって楽しそう、アグモンの心を占めているのはそれだけだ。

だって太一は、アグモンのことを俺のアグモンって言ってくれた。パートナー冥利に尽きるといふのは、きつとこういうことだろう。

嬉しくって嬉しくって、太一が来てくれた時と同じぐらい、アグモンは喜んでいた。

そんな太一だから、アグモンは自分がどんなデジモンに進化するのかなんて興味はない。

早い話が、どうでもいいのだ。

太一を護るために生まれてきたのだから、どんな姿だろうが受け入れるし、きつと強い。

それでいいのだ、それがいいのだ。

そう言えば、パートナー達はうんうんって頷いた。

『ゲンナイさんも言ってたでしよう？ワタシ達は武器だって。ワタシ達はそれでいいのよ』

それはある意味、停滞を表す言葉だ。

自分達は何も考えない。ただ護るべきものの盾であり、剣であり続ける。

それだけがパートナー達の生きがいなのだ。

一種の狂気である。恐ろしいほどに純粹である。

子ども達がその恐ろしさに気づくのは、凡そ3年後。

「……………」

そんなデジモン達の純粹な狂気を聞いた賢は、唇をぎゅっと結んで卵を抱きしめる力を強める。

——パタモンも同じだったのかな。

賢を護れるぐらい強ければ、どんなデジモンでも構わないと思っていたのだろうか。

ただ賢を護りたかった。生きていてほしかった。死なせたくなかつた。

そのためなら命を投げうっても構わなかつたのか。

賢さえ生きていれば、それでよかつたのだろうか。

……そんなものは、悲しさを生み出すだけだと知りながら。

砂漠地帯の憩いの場で休憩を挟んだ一行は、シャワーでべたついた身体を1度洗い流して、再び歩き出す。

本当はもう少し休憩したかつたけれど、いつエテモンが子ども達に

追いついてくるか分からない今、少しでも距離を離れた方がいいというピコデビモンの主張により、休憩は30分だけだった。

エテモンはダークネットワークだけでなく、サーバ大陸中に舎弟や部下がいるため、何処にいても必ず獲物を見つけ出すのだそうだ。

現にコロモンの村にいた子ども達を部下のガジモンが見つけた、エテモンに知らせたせいでコロモンの村は悲惨なことになってしまった。子ども達が遠くに逃げていることは、いずれ知られるだろう。

そして幸か不幸か、目指すコロツセオはこのオアシスからそう遠くない距離にあり、丈のデジヴァイスが反応を見せた。

さっさと行つて、さっさと見つけて、さっさととんずらくくのに限る。

太一が単眼鏡で覗き込んだ先には、古代ギリシヤや古代イタリアの神殿を思わせる朽ちかけた建物が見えた。

丈は自分の紋章が手に入る、と張り切って走り出したが、やはりそこは丈の体質と言うべきか、何も無いところで思いつきりすつ転んだ。

砂が積み上げられたオアシスは、すぐそこが坂になっていたので、丈はそれで足を取られて転んだと思っただが……。

『……ん？何だ、これ？』

すつ転んだ丈に、何やってんだと呆れながら駆けつけたゴマモンが見つけたのは、黒いケーブルだった。

砂から僅かに露出しており、恐らく砂の中に埋め込まれていたケーブルで、丈は足を取られてすつ転んでしまったのだろう。

何でこんなところに、つてゴマモンがケーブルに触れたのを見たピコデビモンが、ぎゃあつと悲鳴を上げた。

『い、いけません！それに触れては！』

『?どうしたんだ、ピコデビモン?』

『それは、エテモンが利用しているダークネットケーブルの一部です！そのケーブルを使ってエテモンは獲物の位置を正確に割り出しているのです！』

「なっ！」

『あわわっ！』

ゴマモンは慌ててケーブルを放るが、もう遅い。

僅かに触れただけでも、ケーブルは反応してしまうのだ。

こんなことなら言っておけばよかった、ってピコデビモンは後悔したが、こうなってしまうては仕方がない。

『早いところ紋章を見つけて、何処かに逃げるなり隠れるなりしましょう！幸いこの砂漠には知り合いがいます！奴に連絡して匿ってもらいましょう！』

「そ、そうだなー！」

丈の紋章があるコロッセオは目と鼻の先である。

子ども達は砂の地面に足を取られかけ、纏れさせながらも走った。

立ち並ぶ古代ギリシャや古代イタリアを彷彿とさせる柱や門には、繊細な模様の彫刻が施されている。

しかし今の子ども達とデジモン達に、その模様を楽しんでいる余裕はない。

足早に通り過ぎて、子ども達は立派な円形闘技場を真っすぐ目指した。

均等な大きさに作られた煉瓦が床に敷き詰められ、積み上げられて壁を作っている。

作られてからまだ時間が経っていないのか、子ども達の世界にあるコロッセオのように風化している様子は見られなかった。

どうして砂漠のど真ん中にこんなコロッセオがあるのか、地盤沈下などで沈まないのか、なんて疑問を持つ余裕すらない。

ピコデビモンに案内されて入った闘技場は、子ども達の予想を遥かに上回る大きさだった。

1万人の観客がいてもまだ余裕そうな観客席や、その観客席がいても空白が目立ちそうなほど広い闘技場。

これにはピコデビモンも驚いていた。

「……それで、紋章は何処にあるんだ？」

『……申し訳ございません。コロッセオにある、ということだけしか

聞いておりませんで……』

「はあ!? おいおい、しつかりしてくれよ! これじゃあ探している間に追いつかれちゃうじゃないか!」

「太一! 落ち着けて!」

ピコデビモンを責める太一を、治が押さえつける。

今はピコデビモンを責めている時間などないのだ、その間に紋章をさっさと見つけた方がいい。

そう治に宥められた太一はそれもそうだなってピコデビモンに謝罪し、慰められたピコデビモンは再度謝罪をした。

この話は、一旦これで終わりだ。

『ええと、デジヴァイスが反応していらっしやる方は……』

『ジヨウだよ! オイラのパートナーさ!』

『ジヨウ様ですね? 紋章に近づけばデジヴァイスが強く反応するはずです。そこを重点的に探しましょう!』

そう言うってから、ピコデビモンは地面に降りて、足で地面に模様を描く。

十字架と、その角に4つの三角形があった。

『ここにあるのは誠実の紋章のほずです。このような形をしておりま
す』

「……誠実ね」

『はい。誠の心。正しい心。どんな相手にも真正面からぶつかつていく、真心です。きっと貴方の役に立ちます』

ニコニコするピコデビモンに、しかし丈は何処か歯切れが悪そうであつた。

ぐ、と何かを堪えるような、唇を噛みしめているの奥からせりあがってくる何かを押さえつけているような、そんな苦しそうな表情を見せているのである。

それに気づいたのは、真正面にいたピコデビモンと、パートナーのゴマモンだけだつた。

『ジヨウ?』

「……いや、何でもない。早く探そう。エテモンが追いついてこない

うちに」

「ピコデビモンはさつき言ってた知り合いに連絡しといてくれよ。俺達で探すから」

『あ、はいー分かりましたー!』

ピコデビモンは慌てて何処からか蝙蝠のデザインをした鏡を取り出して、闘技場の外へと飛んで行った。

子ども達は紋章を探す。

丈のデジヴァイスが導くままに闘技場を歩いた。

外から見た時は風化しているようには見えなかったコロツセオだが、闘技場の中は所々ぼこぼこになっていた。

地面に敷き詰められている煉瓦が抉れ、覆い隠されていた地面の砂が剥き出しになっている。

闘技場に入って、向かって右にデジヴァイスが強く反応した。

とこととこと、丈を先頭にみんなが歩く。

時々左右に振って、位置を調整する。

「……この辺で強く反応している」

ぴたり、と立ち止まった先には、何故かサッカーのゴールがあった。

しかし不条理シリーズはもうファイナル島で慣れてしまっている。

今更闘技場にサッカーゴールがあったところで、もう驚くことはない。

丈のデジヴァイスは薄らとグレーの色みがかかって光り輝いていた。

少し位置をずらしたり離れたりと、その光が弱まって点滅する。

大きな闘技場の右側1／4の辺りにある、ということとは分かったが、デジヴァイスは正確な位置を割り出してはくれなかった。

「急いでるって言うのに……」

「みんなで探せば見つかるさ。幸い人手はあるんだし、場所も絞れている。形も分かっている。愚痴る前にさっさと探そう」

イライラしている様子の太一を、治が苦笑しながら宥める。

大人の言うこと聞かん坊の太一、治の言葉だけは渋々聞くので、ぶ

つくさ言いながらも探し始めた。

《……………》
キシツ

何処かで闇が嗤った気がした。

堕ちた太陽

ぞ、

大輔とヒカリ、それから賢の背筋に氷の銚を宛がわれたような、悍ましい悪寒が走る。

ひゅ、と息を飲み、紋章を探していたその手を止めて、その場に立ちすくんだ。

『……ダイスケ?』

まだ眠いのか、目を擦りながらもそれでも昨日よりは覚醒し始めたブイモンが、大輔の異変に気付く。

『ヒカリ……?』

弾かれたように立ち上がり、全身を小刻みに震わせているヒカリに、プロットモンが眉を顰めながら尋ねた。

「……………」

賢に気づいたものはいない。

きつとパタモンがここにいってくれていたら、真っ先に気づいてくれていただろうに、彼は未だに卵の中で眠り続けている。

上級生達は、紋章探しに夢中で気づかない。

足元の影の奥底から、得体のしれない何かが這い出てくるような錯覚に陥っていた大輔達は、声を上げることすらできなかった。

身体に強い負荷がかかって、全身が硬直して、手がぶるぶると震えて、足に上手く力が入らずにガクガクしている。

この感覚は、知っていた。

つい数時間前に感じたばかりのものだったから、よく覚えている。

これは……。

「おい、大輔! どうした?」

『何かあったの〜?』

太一とアグモンに声をかけられて、大輔はようやく我に返ることが出来た。

全身にかかっていた変な硬直が解けて、その場にへなへたと崩れ落ちる。

ダイスケ! ってブイモンが慌てて駆け寄って、大輔を支えてくれる。

どうやらブイモンが太一を連れてきてくれたらしい。

幾ら呼びかけても返事をしてくれず、目を見開いて硬直したまま動かなかったから、これはただ事ではないと思ったのだろう。

太一とアグモンが声をかけた途端に硬直が解けたもんだから、ブイモンがむすりとしながら抗議する。

『俺が呼んでも返事してくれなかったのに! 酷いや、ダイスケ』

「え、あ、わ、わりい……」

しかし大輔は放心状態から抜け出せず、ブイモンの方を見ずに謝罪の言葉をぼんやりと口にしただけだった。

ヒカリも似たようなもので、プロットモンが空とピヨモンに知らせて駆け付けた2人によって意識が強制的に引き戻され、その場に座り込んでしまった。

そこでやつと、治は賢の異変に気付いて賢の下に駆けつけた。

しかしまだ嫌な気分は拭えない。

何故なら漂ってくるプレッシャーが、消えたわけではないからだ。

静かに、誰にも気づかれないうように足元から忍び寄ってきて、子ども達の首を締め上げようとしているような、そんな感覚が大輔達の頭から拭えないのだ。

大輔は、ヒカリは、賢は辺りを忙しなくきよろきよろと伺う。

そしてデジモン達は、ようやく気付くのだ。

何も感じなかったのに、平然としていたのに、デジモン達は示し合わせたように顔を勢いよく上げて、同じ方向を見た。

目をガラガラさせて、歯を剥き出しにして、喉の奥を鳴らすように唸っている様子は、ファイル島にてデビモンの館に誘い込まれたあの

時と同じようなデジモン達の様子に、初めはキョトンとしていた子ども達の顔に警戒の色が浮かぶ。

デジモン達が見ている方向に、子ども達も顔を向ける。勿論、大輔とヒカリと賢も。

デジモン達と子ども達の視線の先には、先ほどは気づかなかった大きなモニターがあった。

しかし何か映っているわけではない。

彼らが見ているのはモニターの更にも上、モニターが設置されている壁の上だった。

ぽつん、とそこに何かがあるのは分かったが、遠くて何がいるのか子ども達には判別できない。

それでも、デジモン達が警戒心を剥き出しにして睨みつけていることから、そこにいるのが良くないものだというのは分かった。

モニターの上にいた何かは、音もなく降り立ち、子供達の前に佇む。それはピンク色で、悍ましい赤い爪を持った、見たことのないデジモンだった。

頭には2本の角があつて、赤い爪はまるで死神の鎌のように大きく、鋭い鋒だった。

何の言葉も発さず、ただそこに佇んでいるだけのはずなのに、そのデジモンから身が竦むようなプレッシャーを感じた子ども達は、ごくりと息を飲む。

言葉が出ない子供達を尻目に、大輔とブイモン、そして賢は、目の前に現れたピンク色のデジモンに目を見張った。

あのデジモンが初めて姿を現したのは、賢とパタモンの前であった。

その時はデビモンによって子ども達はバラバラに引き裂かれてしまい、何とかみんなと合流しようとして奮闘していた時だ。

賢はその時知らなかったのだが、賢以外の子ども達はそれぞれ上手く合流していたのである。

太一・アグモンと治・ガブモン、光子郎・テントモンとミミ・パル

モン、空・ピヨモンと丈・ゴマモン、そして大輔・ブイモンとヒカリ・プロットモンである。

賢とパタモンだけが、誰とも合流できなかつたのだ。

はじまりの町に迷い込んだ賢とパタモンの前に、「そいつ」は現れた。

何も言わず、何もせず、ただ目の前に佇んでいるだけだつた。「そいつ」は、悍ましく濃厚な闇の気配を漂わせていた。

その直後にウツドモンに襲われ、姿を消してしまつたためその正体を掴むことが出来なかつた。

次に現れたのは、つい数時間前。パグモンの村改めコロモンの村でだ。

パグモン達の悪質な悪戯により、パタモンが眠っているデジたまを奪われ、みんなを探していた時。

喧嘩をしている真つ最中の大輔とちよつとした言い合いをしていた時に、「そいつ」は再び賢の前に姿を現した。

その時もやっぱりその場で佇んでいるだけだつたし、その直後にまた邪魔が入つてしまつたので正体を探るチャンスを失つた。

そういうこともあり、大輔達はその存在を上級生達に伝えるのをすつかり失念してしまつていたのである。

ざり、という砂利が踏まれた音がして、ピンク色のデジモンは一步を踏み出たのが見えた。

ビク、とデジモン達の肩が震え、戦闘体勢になる。

デジモン達の興奮は、最高潮にあつた。

この中でただ1体、あのデジモンと対峙したことのあるブイモンも、当然のように。

初めて対峙した数時間前、ブイモンは戦つてもいないのに自分の敗北を悟つた。

無理だと。挑めば間違いなく自分の命を落とすと、そんな幻覚を見せられてしまつたのである。

知っているのだ、分かっているのだ。

鋭く尖っている爪が皮膚に食い込んでしまうほどに強く握りしめ、腕が震えている。

それでも、ブイモンはあの時感じた恐怖を押し殺すために、拳を強く握りしめて大輔の前に立つ。

あの時は恐怖が勝ってしまい、手も足も出なかった。

直後に邪魔が入って恐ろしい幻覚は解け、また眠気に襲われて忘れかけてしまっていたが、パートナーを護れないなんてパートナーデジモン失格である。

大丈夫、今度は仲間のデジモン達がいる。

——それでも、この拭えない不安はなんなのだろうか。

心の奥から、砂に溜まった空気が泡になって水面へ沸き上がってくるように襲い掛かってくる不安を、どうしても拭うことが出来なかった。

ざり、とそのデジモンがまた一歩足を踏み出して子ども達に近づいてくる。

ひっ、って恐怖で身が竦んでいるミミや光子郎を、大丈夫だって安心させてやりたいのに、空と治も恐怖で身を縛られて動けないのか、声をかけようとすらしていなかった。

呼吸をするのも躊躇うほどに、そのデジモンから溢れて子ども達やデジモン達を押さえつけようとするプレッシャーが押し掛かってくる。

誰一人として動こうとしないし、逃げようとも言わない。

動いても逃げても一瞬で追いつかれてしまう、という妙な確信があったのだ。

それだけでなく、そのデジモンから発せられるプレッシャーのせいで、子ども達は立ちすくんでしまって足が鉛のように重くて動かないのである。

ざり、ピンク色のデジモンがまた一歩近づく。

ざり、ざり、ざり、ざり……

砂利の音がこれほどまで怖いと感じたのは初めてだった。来るなど念じたところで、何も変わらない。

ピンク色のデジモンと、子供達の距離がどんどん縮まって行く。デジモン達も、あのピンク色のデジモンが持つ闇に当てられているのか、パートナーの前に立って睨みつけるのが精一杯だったようだ。

——どうなるんだ、俺達。

太一が拳を握りしめて歯を食いしばる。

こんなところで終わってたまるかという気持ちは強くあるのだが、プレッシャーに負けそうな身体に、挫けそうになっていた。

このまま世界を救うことが出来ずに、みんなでこの場でやられてしまうのか。

そんな時も諦めずに、みんなの戦闘を走っていた太一の心がめりめりと音を立てて折られかけている。

ふと、ピンク色のデジモンが歩みをやめた。

距離にして、約50メートル。

先ほどよりも大きく、そして重い闇の気配が、闘技場全体を包み込む。

冷や汗が尋常ではないほどに、子供達の額から溢れて、次々と頬を伝っていた。

ピンク色のデジモンが、徐に右の爪を掲げた時……景色が一変した。

どおおおおおおおおおおおおおおん!!

激しい爆音と破壊音が静寂をぶち破り、砂煙が子供達の視界を遮る。

「うわっ!!」

「きゃあああああああ!!」

今まで声一つあげられなかった子供達が、ようやく言葉を発した。濛々と立ち込める砂煙のせいで、何が起きているのか分からない。

分からないけれど、この場から離れた方がよさそうだ。

そう判断した太一と治、そして空は、誰よりも先に異変を察知してへたり込んでいた最年少を引っ張って、ゴールポストの後ろにある観客席の方に避難した。

「みんな、大丈夫か!？」

「な、何とか……!？」

「それより何なんだあいつは!!」

最年少組を背後に庇うように、上級生達とそのパートナーが佇む。爆発によってプレッシャーから解放された子ども達は、これまでの鬱憤を晴らすかのように騒ぎ立てた。

詰まっていた息を一気に吐き出して、まるで100メートルを全力疾走したかのように息を切らしている。

汗はびっしり流れ、顔から血の気が引いていた。

それほどまでに、あのデジモンが放っていたプレッシャーが重かったのである。

ひとしきり騒いで落ち着いたのか、子ども達はぜえはあと息を切らしながら黙り込んだ。

そして一斉に、先ほどまでいた場所に目を向ける。

砂煙は未だ濃く立ち込めていたが、ゆらりと黒い影が見えたような気がして、子供達の間には緊張が走った。

「……あー!」

その声をあげたのは誰だったか。

砂煙のカーテンの向こうから姿を現したのは、子供達がよく知るデジモンだったのだ。

オレンジ色のボディに青い筋が幾つも走っていて、頭部には頑丈な茶色いヘルメット。

ティラノサウルスのような逞しい身体のデジモンは……。

「グ……グレイモン……?」

呆然と呟いたのは太一である。

彼の相棒が進化した姿、グレイモンである。

何で、と子ども達は呆然となったが、コロモンの村に沢山のコロモ

やった。

顔色を真っ青にして、腕に抱いたデジたまを震えながらもしっかりと抱きしめている。

パタモンはまだ生まれる兆候は見られない。

賢が争いを恐れていることを感じ取って、パタモンは生まれてこれないのでは、とガブモンがこっそり教えてくれたのを思い出した。

デジモン達にとってパートナーの子ども達は、何よりも護らなければならぬ存在である。

太一が、治が、空が、他の子ども達が死にたくないとか助けてって強く心で願うことで、その思いがカタチとなってデジヴァイスに届き、力に変換され、デジモン達を更に強くするのである。

護るために強くなるデジモン達を、しかし賢は争いから目を背けて、拒絶してしまった。

帰りたいと思う反面、もう戦いたくないという思いが拮抗しあっているせいで、パタモンは生まれてこれないのではないかと。

護ってくれるパートナーデジモンがいないということは、真っ先に狙われるのは賢だ。

治は唇を噛みしめ、賢から目を離して振り絞るように言う。

「……分かった、気をつけろよ」

『無茶しないでよ?』

「分かっているって!」

『みんなを頼むね!』

駆け出して行くリーダーの背中を見送りながら、治はくるりと振り返った。

「ここは危険だ。観客席の上の方に移ろう。それからいつでも進化できるように、デジヴァイスは持つとくんだ!」

「みんな、こっちよ!」

治と空の後をついて行って、子供達は観客席の方へと移る。

ピコデビモンが戻ってきたのは、その時だった。

『も、申し訳ございません! ジャミングが酷くて、なかなか通じずに……って言うか何があつたんですか、コレ!』

「説明は後だ！とにかく君もこっちに来て！」

砂漠を根城にしている知り合いと連絡を取るために子ども達と離れていたピコデビモンは、目の前の惨劇に啞然としている。

ゴマモンを抱えた丈が急かして、ピコデビモンも子ども達と一緒に観客席の上の方へと避難した。

太一がデジヴァイスを構えて、アグモンをグレイモンに進化させる。

雄たけびを上げながら、グレイモンは勇ましく敵のグレイモンに突っ込んでいった。

「太一さんとグレイモン、大丈夫かなあ……」

『……だ、大丈夫だよ。グレイモン強いし』

『あつちもグレイモンよ、ブイモン』

心配そうにしている大輔に、ブイモンが励まそうとして口を開いたものの、プロットモンに突っ込まれた。

そうだった、敵もグレイモンだった。

どうするんだろう、どうなるんだろう、つて大輔とブイモンは気が気じゃない。

「……ん？」

その時だ。丈のデジヴァイスが一際強く輝いたのは。

眩しいぐらいの光がデジヴァイスから放たれて、丈は、ゴマモンは、子ども達は困惑する。

ピコデビモンだけが、歓喜していた。

『この辺りに紋章があるので！みなさん、探しましょう！』

ようやく場所を特定できた紋章。

子ども達は先ほどピコデビモンが描いてくれた紋章の模様を思い出しながら、くまなく探す。

紋章さえゲットできれば、こんなところに用はない。

エテモンがいつ襲い掛かって来るかも分からないし、何を考えているのか分からないあの見たことのないデジモンの遊びに付き合っている暇のないのだ。

子ども達もデジモン達も、床に這いつくばって目を凝らした。

進化した太一のグレイモンが、果敢に敵のグレイモンに向かっていく。

がっしりと組み合い、震えるほどに強い力で相手の手を砕いてやろうと握りしめ、押し返されないように地面を抉りながら踏ん張る。

力比べは僅かに太一のグレイモンが勝利、足と尻尾を使って1歩踏み出すと、硬い兜で覆われた頭で頭突きをかましてやった。

堪らず仰け反った敵のグレイモンに、太一のグレイモンは更に追撃をかまそうと力強い尻尾を振り回して、敵のグレイモンの身体を吹っ飛ばす。

しかし敵のグレイモンも負けてはいない。

強靱な尻尾に吹っ飛ばされたというのに、すぐさま起き上がって、太一のグレイモンに体当たりをした。

「グレイモン!!」

『だ、い、じょうぶ!』

表情をしかめてはいたが、太一のグレイモンもすぐさま起き上がって、敵の同族と対峙する。

同じグレイモン同士の戦いは、もうしばらく決着が付きそうになり。

——丈の紋章を探していた賢はその光景を見てしまい、デジたまを抱く腕の力がほんの少し強まった。

また争い合っている。

同じ種族なのに、仲間なのに、トモダチなのに。

太一のグレイモンは、太一を護るために、同種族と戦うことを全く躊躇していない。

割り切れないのだ、どうやったって。

本能的に、デジモン達も生きてるんだって理解している男の子には、とても辛い光景でしかないのだ。

それでも何も言わないのは、やめてって言わないのは、太一とグレイモンが自分達を護るために戦っていると分かっているから。

敵のグレイモンが逃げれば、きつと太一とグレイモンはトドメを刺

すようなことはせずに、みんなに逃げろと言うだろう。

しかしもしも、太一のグレイモンが負けてしまったら？

敵のグレイモンには、太一のグレイモンみたいに止めてくれる人はいない。

一緒に戦ってくれる人間がない。

ただただ本能的に、同種族であるグレイモンに対して敵意を剥き出しにして、戦っている。

敵のグレイモンに護るものなんて、護りたいものなんてないのだ。それが分かっているから、賢はやめてつて声を上げることが出来ない。

どん、と軽い衝撃が走って、賢は我に返った。

「……………」

「だ……大輔くん……」

じっと、咎めるような半目は、ぼんやりと突っ立っていた賢を咎めるような目つきだった。

何してんだよ、とぶつきらぼうに放たれた言葉も、ちよつとだけ刺刺しい。

「え、と……」

「……俺だって……太一さん、心配だよ。でも、丈さんの紋章見つけて、早く逃げないと、エテモンも来ちゃうんだぞ？分かってんのか？」
言われなくても分かっている、と目を泳がせながら賢は紋章探しを再開させた。

階段状になっている観客席の座席や壁には一面が繊細な模様が描かれている。

レリーフ、といったようなものだろうか。

複雑に描かれている壁の絵の中に収まっているのだとすれば、探し出すのは骨である。

それでもこの世界を覆いつくそうとしている、邪悪を払うために必要なものだ。

弱音を吐いている暇などない、と子ども達とデジモン達は注意深くレリーフの模様の1つ1つをじっと眺めて探す。

爆音と瓦礫の音が、派手に鳴り響いた。

紋章を探しているその手を止めて、思わず立ち上がった子ども達が見たのは、倒れているグレイモンだった。

どっちの、なんて言わずともみんな分かっていた。

敵のグレイモンは首輪をしている。

倒れたグレイモンには、首輪はなかった。

「太一さんっ！」

『グレイモン！』

大輔とブイモンが身を乗り出すように観客席の背もたれに手をついて叫んだ。

舞う砂埃の中、敵のグレイモンは躊躇なく太一のグレイモンを踏んづけてやろうと足を上げる。

太一のグレイモンは慌てて転がって避けた。

そのことにほっと胸を撫で下ろし、やきもきしながらも子ども達は紋章探しを再開させる。

何処だ、何処にある。

早く見つけてここから立ち去らなければ、あのグレイモンだけできなく追いついたエテモンも相手にしなければならなくなる。

コロモンの村を一瞬で地図から消し去ったあの力は、今の子ども達ではまだ太刀打ちできない。

紋章を手に入れ、力をつけなければ、子ども達に勝ち目はないのだ。強すぎた力でその身を滅ぼしてしまった者を知っているからこそ、

子ども達は必死になって紋章を探す。

「……あれ？」

『?ヒカリ?どうしたの?』

ふと、壁の模様の中を根気よく探していたヒカリの視界に、気になる模様が映り込んだ。

一瞬見逃しそうになったが、デジャビュのようなものに襲われて、プロットモンと一緒にその模様をもう1度、よく目を凝らして食いつめるように見つめる。

植物が描かれていたレリーフの中に、突然幾何学模様のレリーフが

現れたのだ。

両隣は植物なのに、その箇所だけが幾何学模様になっていたのである。

疑問に思ったヒカリは、辺りを見回した。

近くにいたのは、大輔とブイモンと賢である。

3人を呼んで、みんなでじいじいっと見つめる。

幾何学模様に紛れ込んでいる、十字架と4つの三角形は、間違いなくピコデビモンが教えてくれた紋章だ。

「……あつたーありました！」

叫んだ大輔の声を聞いて、子ども達とデジモン達は歓喜に包まれた。

ずうん、という重い音を立ててグレイモンが倒れこんだ。

敵のグレイモンの爪が、太一のグレイモンの脚を切り裂いたのである。

3つの黒い筋からぶしゆうつと勢いよく血が吹き出した。

グレイモン！と太一は叫び、思わず駆け寄る。

『ダイチ……っ、ダメだ……！』

痛みを堪えながら、グレイモンは太一に近寄らないよう告げるが、太一は聞いていなかった。

ただグレイモンが心配で、これ以上やられるのを見たくなくて。

いつもいつも自分の掛け声で、うん！つて力強く領いてどんな敵にだって立ち向かって行く相棒が、目の前で倒れたことを認めたくなくて。

グレイモンに手を伸ばす。

じんわりと暖かい。

ドクン、ドクン、とゆつくりと波打っている心臓の鼓動が、手に伝わってきた。

デジモンってこんなに暖かいんだな、なんて頭の片隅でぼんやり思っていたら、グレイモンが唸り声をあげながら、震える腕で上半身

を支えた。

「グレイモン！大丈夫か!？」

『ぐっ……いーだ、大丈夫……いーそれより……』

離れて、という言葉は続かなかった。

敵のグレイモンががばあつと大きな口を開けて、巨大な火の塊を太一のグレイモンに向かって吐き出したのである。

それが何なのか、太一にはよく分かっていた。

パートナーの必殺技である。

どれほどの威力を誇っているかなんて、誰よりも理解していた。

ヤバイ、と身を伏せたら、太一のグレイモンが尻尾をブンと降って火の塊を四散させる。

更に迫ってくる敵のグレイモンを、重い身体を支えるために力強く逞しい脚で蹴って、吹っ飛ばしてやった。

闘技場のど真ん中で戦っていたグレイモンが、闘技場を囲う壁まで吹っ飛び、崩れるほどの力で。

すっげえ、つて太一は興奮しかけたけれど、そんなことに感動している場合ではない。

先ほどからどうもグレイモンの様子がおかしいのである。

身体を支えている両腕が見るからに震えて、何かを堪えるように目をぎゅつと瞑っているのである。

呼吸も少し荒い。上手く息を吸い込めていないのか、苦しそうに喉が鳴っていた。

最初の方は果敢に挑み、敵と組み合っても押し負けなかったのに、時間が経つにつれて、足元が覚束なくなってきた。

敵のグレイモンに脚を切り裂かれたのも、動きが鈍くなっていたせいだ。

いつもならそんな失態犯さないのに。

壁まで吹っ飛んだ敵のグレイモンは、連鎖する破壊のヒビで次々と崩れてくる煉瓦をどうすることもできず、埋れて行く。

しばらくは大丈夫だろうと判断した太一は、焦りもあって少々苛立たし気になりながらグレイモンに怒鳴りつけてしまった。

「おい、どうしたんだよ、グレイモン！らしくねーじゃねーか、あんなのに遅れを取るなんて！まさか同族だからって遠慮してんのか!？」

『っ、違う、よ……！』

「だったら何で……！」

しかしグレイモンは全く気にしていないようだった。

それよりも太一に言いたいことがあるようで、懸命に言葉を紡ぐ。

『身体、に……っ、力が……入らないんだ……！』

「……は？」

何を言っているんだ、と言いたげに太一の表情が崩れる。

グレイモンは続けた。

『……闇の力が充満して……っ、いつも、みたいに、デジヴァイス

から、タイチの力が流れて、来ない……！』

「……!!？」

慌ててデジヴァイスを手取る。

光ってはいたが、いつものような強さではなかった。

どうして、って愕然となる太一。

いつもなら眩い光が溢れ出しているのに、どうして。

堅く脆いものが崩れるような音が響き渡る。

ハツと太一とグレイモンがそつちを見れば、崩れた壁に埋もれてい

たはずの敵のグレイモンが、立ち上がったのだ。

先ほどよりもより強い咆哮をあげて。

敵のグレイモンに伸し掛かっていた瓦礫が空に舞い上げられ、そし

て重力に従って雨のように落下してきた。

不幸は、突然訪れる。

太一が、突然倒れたのだ。

何が起こったのか理解できなくて、太一のグレイモンは硬直する。

ぐったりと四肢を投げ出して倒れている太一が、グレイモンの赤い

瞳に映った。

『タイチ……?』

パートナーの名を呼ぶが、太一は全く反応しない。

直後に、グレイモンと太一の周りに、瓦礫の雨が降り注いだ。

重たい物が落下してきた音で我に返ったグレイモンは、太一に覆いかぶさって瓦礫の雨から太一を護る。

皮肉にも、太一に覆いかぶさったことで太一との距離が縮まったことにより、グレイモンは理解してしまった。

ぐったりと倒れこんでいる太一の額から、赤い液体が流れている。

近くには、同じく赤い液体がついた大輔やヒカリの拳大ほどの大きさの破片。

考えることは苦手だと自負しているグレイモンでも分かった、簡単な方程式だ。

敵のグレイモンを埋めていた瓦礫の破片が空へと巻き上げられ、落下してきたものが不幸にも太一に直撃したのである。

本当に突然のことだったから、すぐ傍にグレイモンがいてすっかり油断していたからこそ起こってしまった、不幸な事故だった。

グレイモンの赤い瞳が揺れる。

瓦礫から這い出てきた敵のグレイモンが、咆哮を上げながら太一のグレイモンに襲い掛かり、何度も殴りつけてくる。

しかし太一のグレイモンは反撃しない。

ただ動かない太一を見下ろしているだけだ。

タイチ、タイチ。

声にならない声で、何度もパートナーの名を呼ぶ。

太一は答えない。

その瞬間、太一のグレイモンの思考が真っ黒に塗りつぶされる。

太一から太陽のように明るくて眩しい力を受け取っていたグレイモンの心が、闇に浸食されていく。

『……………あ』

何も、考えられなくなっていく。

笑っている太一が、どんな敵にも果敢に挑んでいく太一が、データ

の粒子になつて闇の中に消えていく。

これまで築き上げてきたはずの絆が、闇に絡めとられて沈んでいく。

残つたのは、ただパートナーを護らなければならないという本能だけだった。

『タイチ……』

護らなければ。僕が護らなければ。僕がタイチを護るんだ。ずっとずっと待っていた、大切なパートナー。

護るために強くならなきゃいけないかった。強くなくてはいけなかった。

そうじゃないとタイチを護れないから。タイチに嫌われちゃうから。

ああ、でも怪我させちゃった。護らなきゃいけないかったのに。護れなかった僕を、きつとタイチは嫌いになっちゃう。

嫌だ、そんなの嫌だ。

待つてたのに、ずっとずっと待つてたのに。

ごめんなさい、タイチ。嫌わないで。僕のこと嫌いにならないで。ごめんなさい。今度はちゃんと護るから。

ちゃんと護るために強くなるから、だから許して、怒らないで。何でもするから、僕を置いていかないで。

護らなきゃ、タイチを護らなきゃ。

僕のタイチ、僕だけのタイチ。

僕が護ル。僕だけがタイチをまもる。

ほかのだれにもわたさない。ダレニモアゲナイ。僕からタイチを取らないで。

護らなきゃ、護らないト。



キシッ》

沈んでいった闇の中で、あいつが嗤った気がした。

破壊の使者

突如として膨れ上がった濃厚な闇の気配は、大輔達最年少の3人だけでなく、他の子ども達やパートナー達にも襲い掛かった。

ぞわりとした空気は、今まで感じたことのないものだった。

先程のように地の底からじわりじわりと這い上がってくるようなものではなく、喉元に鋭いナイフの鋒を突きつけられたような感覚。

身体中に氷をかけられたような寒気と悪寒。背後から唯ならぬプレッシャーを感じた。

振り返りたくない、しかしこのプレッシャーの正体を確かめないといけない。

そうじゃないとパートナーである子供達を護ることが出来ないからだ。

だからデジモン達は勇気を振り絞って、震える身体を叱咤して、背後を振り返る。

がちがちに固まった身体は、なかなか言うことを聞いてくれなかったけれど、それでも振り返って正体を確かめないことには、何も始まらない。

冷や汗が次々と流れてくる中、デジモン達は背後を振り返る。

コロッセオの真ん中に、グレイモンが佇んでいた。

それは、太一のグレイモンだった。何故なら敵の証である首輪をしていない。

プレッシャーの正体はグレイモンだったようだが、何故？

『……っ!?!』

そう認めた途端、子ども達は息を飲み、デジモン達は全身の毛を逆立てた。

喉の奥を鳴らすように唸り、先ほど悍ましいピンク色のデジモンが現れた時よりも警戒心を抱いている。

コロッセオに充満していた闇を全部かき集めて1つに凝縮したような、濃厚な闇の匂いと先程とは比べ物にならないほどの威圧感が、デジモン達にのしかかっている。

視覚できるほどの強く濃い闇が、グレイモンの周りを漂っており、不気味さを更に強調していた。

『……グレイ、モン？』

恐る恐ると言った様子で、代表して声を上げたのは、拳を握って戦闘体勢を取っているブイモンだった。

何も言わず、動かず、悍ましい闇の気配を漂わせながらただそこに佇んでいるだけのグレイモンは、違和感しかない。

いつも勇ましく、パートナー達の先陣を切って戦闘に身を投じていくグレイモンと違う雰囲気と様子に、パートナー達は狼狽えることしかできなかった。

轟……！

その時だ、止まっていた時が動き出したのは。

嵐のような風が吹きすさんで、コロッセオの砂が舞い、子ども達の視界を奪う。

うわ、と子ども達は腕で顔を覆って庇ったり、うずくまったりして目を護った。

モウモウと舞い上がる砂煙に、げほげほと誰かが咳き込んでいた。舞い上がった煙が晴れていく。

『……あ、』

最初に“そこ”にいる存在に気付いたのはガブモンだった。赤い目が見開かれて、全身がブルブル震えている。

どうした、って治が声をかけるけれど、ガブモンは答えない。

ドライアイスの煙のように地面を這い、滑っている闇の気配が、子ども達の足元から忍び寄ってくるような寒気を覚えた子ども達がそ

ちらに目を向けると、視界の先にいたのは全身が剥き出しの骨で出来たデジモンだった。

人体や動物を支えている骨が、剥き出しになっているのである。

胸の辺りにはその骨に護られているようにデジモンの心臓…デジコアが見える。

大きさはグレイモンの1.5倍はあった。

——あれは一体……？

治は目を細めて凝視する。他の子ども達も、困惑していたが、パートナー達は違った。

ゆっくりと振り向いた骨のデジモンに、顔を真っ青にさせながら引きつったような短い悲鳴を上げる。

『あ……あかん……！何でや!?何であんなんが……!?!』

「?テントモン?どうしたんだい?」

剥き出しの骨に怯えているテントモンに、光子郎が詰め寄ると、テントモンは震える声で答えた。

『スカルグレイモンや!最悪や!何でよりによって……!』

「え?ど、どういうことですか?」

『ス、スカルグレイモンは戦いに執着したデジモンが、骨になってまでも戦いたいという強い思いで、あのような姿になったと言われております!背中に背負っているミサイルは、そこら辺のもの全部吹き飛ばしてしまうのです!』

「何だっ!?」

怯えているデジモン達に変わってピコデビモンがしてくれた解説に、子ども達に動揺が広がった。

足元から忍び寄ってきて、子ども達の喉を締め付けてくるような、悍ましい闇の気配を漂わせているスカルグレイモンは、まさに死の象徴である。

どんな完全体も、スカルグレイモンと正面からぶつかることは避けがたなのだ、パートナー達は震える声で教えてくれた。

それは単(ひとえ)に、背中に背負っている魚のようなシルエットのミサイルのせいだ。

グラウンド・ゼロ、という英語で「爆心地」という意味を持つ必殺技は、1度放たれてしまえば周りの物を全て消滅させる威力を持っている。

その後100年は、草木も生えず生き物も暮らすことが出来ない、荒れた土地へと成り果てるのだそうだ。

それを聞いて子ども達は更にぞっとした。

何だそれは。同じ完全体でも勝負したがるなんて、ただのチートではないか。

子ども達はパートナー達から目を離して、スカルグレイモンの方を見る。

ほぼ同時に、ゆっくりと振り返ったスカルグレイモンは、完全に子ども達とパートナー達を視界に入れた。

パートナー達が教えてくれたスカルグレイモンの恐ろしさを聞いて、尚もぐずぐずとこの場に留まっているほど、子ども達も莫迦ではない。

このままここにいるのは危険だと、警鐘を鳴らし続けている本能に、しかし子ども達は逃げ出すことはできなかった。

「太一！太一は何処!?!」

「お兄ちゃん!」

空とヒカリが、観客席から身を乗り出して太一を探す。

太一のグレイモンがいた場所に、突如として現れたスカルグレイモン。

それがどういうことなのか、誰も何も言わないが分かる。

あれは、間違いなく太一のグレイモンが進化したデジモンだ。

いつだって他の子ども達やパートナー達の先陣を切って、勇敢に敵に立ち向かっていた太一とグレイモンだったのに、一体どうしてあんな悍ましいデジモンに進化してしまったのか、子ども達には分からなかった。

だが今はそんなことを考えている場合ではない。

「……………いた！あそこだ!」

目を凝らして丈が指差したのは、スカルグレイモンの手元だった。

スカルグレイモンの白い骨の手に、太一が横たわっているのが辛うじて見えた。

「太一！」

『タイチイ!!』

治とガブモンが声を張り上げて太一を呼ぶが、スカルグレイモンの掌に横たわっている太一が、起き上がる気配はない。

子ども達の脳内に、言い知れぬ嫌な予感めいたものが横切った。

《……………キシッ》

ピンク色のデジモンが、コロッセオの上からその様子を眺め、不気味な笑い声を上げるとその場から姿を消したことに、子ども達は気づけなかった。

『どっ、どうしよう、ソラ……………!』

「……………何とかするしかないじゃない……………!」

スカルグレイモンを見てすっかり怖気づいてしまった様子のピヨモンが、不安そうに空に話しかける。

空は一瞬躊躇したものの、それでも自分の使命を全うすべく腰に手を伸ばした。

ジーンズに引っかけている、パートナー達の力を爆発的に引き出すデジヴァイス。

グレイモンが進化をしたということは、スカルグレイモンは完全体だ。

丈以外の子ども達はまだ紋章を手に入れておらず、成熟期以上の進化も果たしていない。

成熟期7体が完全体に挑むとどうなるのか、治や光子郎でも分からなかった。

数の暴力で押し勝つことができるのか、それともレベルの差は埋まらないのか。

……………どちらにしても、スカルグレイモンの手に横たわっている太一を助け出さなければ、話にならないことだ。

あのままでは、太一がいつスカルグレイモンに握りつぶされてしまふか分からない。

上級生達は覚悟を決める。そんな子ども達を見て、パートナー達も腹をくくった。

相手は同じ完全体のデジモンですら恐れると言われている、闘争本能の塊であるスカルグレイモンだが、この際そんな泣き言など言っていられない。

怖くても、デジモンとしての本能が早く逃げろと囁いてきても、子ども達が戦うと決めたのならそうするしか道は残されていないのだ。何より……相手は、大切な、共に戦う仲間だ。

スカルグレイモンに進化したというのは、見捨てる理由にはならない。

基本的に子ども達至上主義のパートナー達でも、アグモンを見捨てるなんて選択肢は最初からなかった。

『よし……行こう、みんな！』

いつもならアグモンが言う台詞を、ガブモンが言って進化の準備をしていた時だ。

敵のグレイモンが動き出した。

今の今まで時が止まっていたかのように、不自然なほどに静かに待機していたのに、突然咆哮を上げて、スカルグレイモンに突進していったのだ。

恐らくあちらのグレイモンも、スカルグレイモンが醸し出していた闇のオーラに圧倒され、身動きが取れなくなっていたのだろう。

しかし太一のグレイモンのように護るべきものを持たないグレイモンは、いわば野生動物そのものだ。

ただ目の前にいる敵を倒す、という本能のみが脳内を支配している状態の敵のグレイモンは、相手がスカルグレイモンであることもきつと分かっていない。

大きな口を開けてスカルグレイモンに噛みつきこうとしたが、スカルグレイモンは気にする素振りも見せず、鬱陶しい蠅でも払うかのよう片手でグレイモンを吹っ飛ばしてしまった。

モニターに激突して、バチバチと火花が散る。

どおおおおおんという爆発音が響いて、黒煙が舞い上がった。

爆風が前から襲い掛かってきて、子ども達は咄嗟に腕で顔を庇う。砂埃がまるで嵐のように巻き上がって、子ども達に降り注いだために、子ども達は全身砂まみれになってしまった。

「な、何て奴だ……！」

「くっ……！ピヨモン、お願い！」

『任せて！』

デジヴァイスから光が漏れ、ピヨモンを包み込み、火の巨鳥となったバードラモンは、大きな翼を羽ばたかせながら、力強く空を舞う。

バードラモンに続けと、他のデジモン達も進化の光に包まれながら、次々と飛び出していった。

ブイモンとプロットモンも進化をすべく、大輔とヒカリの方を見たのだが、上級生達ほど気をしつかりと持てなかったのか、その場で呆然と立ち尽くしているだけだった。

「まずはスカルグレイモンの気を引こう！あのままじゃいつ太一が潰されるか分からない！」

『分かった！』

治の指示を聞いたガルルモンは、まずスカルグレイモンの下に疾りだした。

スカルグレイモンの視界に入れば破壊衝動のスイッチが入り、相手が何者であろうとも戦いをやめない。

それでもガルルモンはスカルグレイモンへと直進していく。

太一をスカルグレイモンから引き離せて、治にお願いされたから。

スカルグレイモンの左手が振り上げられた。

『この……！』

空からバードラモンが急降下し、鋭い爪が付いた足でスカルグレイモンの左手を掴んだ。

一瞬動きは止まったが、スカルグレイモンはバードラモンを一瞥しただけで、振り上げた左手を振り下ろそうと力を込める。

『ぐう……！』

『バードラモン！』

カブテリモンがバードラモンに加わってスカルグレイモンの腕を掴む。

スカルグレイモンが更に左腕を振り下ろそうとして、太一を乗せている右手に僅かに力が込められたのを、地上にいたイツカクモンは見逃さない。

『ガルルモン！いったん離れろ！バードラモンとカブテリモンも、離せ！タイチが潰される！』

『っ！』

イツカクモンの言葉に、太一を奪還すべく奮闘していたガルルモン達は咄嗟にスカルグレイモンから距離を取る。

しかしスカルグレイモンはそれを許さず、左手をぐわつと伸ばして空に逃げようとしたバードラモンを掴んだ。

空の悲鳴が聞こえる。

スカルグレイモンは空の悲鳴なんか聞こえていないように、掴んだバードラモンを放り投げる。

勢いが強く、もみくちゃにされながら放り投げられたバードラモンは体勢を整えることが出来ずに、そのまま砂埃をあげながら地面を滑った。

空に逃げたカブテリモンが、投げられたバードラモンの先回りをして受け止めていた。

『ちくちく……』

『莫迦！タイチに当たるぞー！』

トゲモンが必殺技を放とうとしたが、トゲモンの技は広範囲にわたって無数の針を放つものである。

スカルグレイモンには大してダメージは入らないだろうが、その手に横たわっている太一のことを考えると、迂闊に放っていい技ではない。

イツカクモンに怒鳴られたことで、そのことを思い出したトゲモンは、一瞬動きを止めた。

バードラモンとカブテリモンから興味を無くしたスカルグレイモンは、足元でうろちよろしているイツカクモンとトゲモンに気づき、

徐に見下ろす。

やばい、とイツカクモンとトゲモンは咄嗟に離れたが、イツカクモンは海洋生物であるために、素早く動けない。

ガルルモンが奔る。

動きが鈍いイツカクモンから、スカルグレイモンの気を逸らすために視界を横切るように跳躍した。

闘争本能の塊であるスカルグレイモンは、「動くもの」に反応するのだ。

その目論見は正しかったようで、スカルグレイモンの視線がトゲモンとイツカクモンからガルルモンに移る。

ぶん、と振り上げた左腕が、ちよこまかと動き回るガルルモンを叩き潰そうと狙っていた。

成熟期と完全体という差はあるものの、身体が大きくて重いスカルグレイモンに捕まるほど、ガルルモンは鈍間ではない。

しかし逃げ回るだけでは、太一を助けることが出来ない。

どうしたものか、とガルルモンは冷や汗を流しながら考えていると、トゲモンが何かを喚いた。

『……がっ！』

ばしん、と視界がぶれて全身が地面に叩きつけられる。

考え事をしていただけで動きが一瞬遅くなってしまう、スカルグレイモンが振り下ろした手に捕らわれたのだ。

『くっ……メテオウイングー！』

ガルルモンを叩き潰そうと、再度左腕を振り上げたので、何とか回復したバードラモンが炎の雨をスカルグレイモンの左腕にぶつける。

ぶつけられたスカルグレイモンは一瞬動きをとめ、ゆっくりとした動きで炎の雨がぶつけられた腕を見上げる。

その隙にガルルモンはその場から離れ、カブテリモンが太一を救い出そうと高速で翅を動かし、スカルグレイモンに接近していったが……。

《グオオオ!!》

一際大きな咆哮を上げたスカルグレイモンが、接近してきたカブテリモンを左腕で振り払う。

それが合図だったかのように、スカルグレイモンは暴れ出した。

左腕を出鱈目に振り回し、太一を乗せている右腕は懐に仕舞うように胸の位置で固定し、ガルルモン達を追い立てるように足で地面を踏み鳴らす。

コバエのように周りを飛んでいるバードラモンやカブテリモンを叩き落そうとし、足元をうろついているガルルモン、トゲモン、そしてイツカクモンを踏みつぶそうとしている。

出鱈目に振り回した左腕が、コロッセオの壁や座席を破壊する。

地面を踏み鳴らしている足が、敷き詰められた煉瓦に穴を開けていく。

「くそ、あれじゃ太一達に近づけないぞ！」

「どうすれば……！」

離れたところで戦いを見守っている子ども達は、やきもきしながら戦況を見守ることしか出来ない。

このまま戦いが長引けば、パートナー達の体力を消耗するだけだ。

何とかスカルグレイモンに気づかれずに近づいて、太一を助け出さなければ……。

その時である。

ぼう……

子ども達の知らないところで、ある異変が起きていた。

それは、気を失ってスカルグレイモンの右手に横たわっている、太一からだった。

ズボンに引っかけているデジヴァイスが、薄らとオレンジ色に発光する。

そのオレンジの光が、デジヴァイスから飛び出していったかと思うと…… 光はブイモンに向かって飛んだ”。

『え……？』

ブイモンが気づいたのは、ギリギリのところだった。自分もガルルモン達に加勢すべく、大輔に進化をさせてくれるよう懇願していたから、ギリギリまで気づかなかったのだ。

大輔はどういう訳か、ブイモンの呼びかけに反応せず、ズーッとスカルグレイモンのことを見つめていたために、進化をすることが出来なかった。

一体どうしたんだろう、どうして大輔は自分を見てくれないのだろうか。

そんなことを考えていたら、反応が遅れてしまったのである。

『うわっ!!』

『ブイモンッ!?!』

パアン、と何かが弾けたような音がして、ブイモンがオレンジの光に包まれる。

眩い光で子ども達は目をぎゅつと瞑って、腕で顔を庇った。

『……え、こ、れ……』

光が収まる。

目を閉じていた子ども達は、恐る恐る目を開けた。

光に包まれたはずのブイモンは何処にもおらず、炎のように赤い鎧をまとった竜人が、そこにいた。

「え……」

「だ、誰?！」

光子郎はぼかんとし、ミミは叫んだ。

赤い鎧をまとった竜人は、慌てて弁解した。

『お、俺だよ！ブイモンだよ！』

「ええっ!?!」

子ども達は驚愕したが、言われてみればどこことなく面影がある。

ブイモンが進化をするとエクスブイモンになるのだが、そのエクスブイモンよりもブイモンの面影が強く残っていた。

『それ……進化?』

デジモンであるが故に、ブイモンに起こった異変を何となく察したプロットモンだが、だからこそ不自然だった。

ブイモンが進化した姿は、エクスブイモンと言うもつと逞しい姿をした、白い翼を持ったデジモンだ。

目の前にいるような、華奢な姿はエクスブイモンとは似ても似つかない。

そもそもエクスブイモン以外に進化したこと自体が謎だ。

子ども達は、デジモンは決められた姿にしか進化しないと思っていたし、パートナー達もきつとそう思っていただろう。

というか、こんなデジモンいたかしらん？つてプロットモンは首を傾げている。

デジモンとして、生きるために必要な他のデジモンの知識はあるのだが、脳内の辞書をめくってみても目の前にいるデジモンに関する知識が見当たらないのだ。

だからプロットモンは同じく啞然としているピコデビモンに目を向けるが、その視線に気づいたピコデビモンもプロットモンの意図を察して、慌てて首を振る。

ピコデビモンも知らないようだ。

あのデジモンは一体……。

プロットモンとピコデビモンが思考の海に沈んでいるのを尻目に、治が口を開く。

「……身軽そうだし、その姿なら上手くいけば太一を助けられるかもしれない。ブイモン！太一を助けてくれないか!？」

スカルグレイモンの脅威はまだ去っていない。

パートナー達が必死になって応戦しているが、まだ太一に近づけていなかった。

それどころか更に暴れてしまって、手が付けられなくなっている。右手に持った太一を奪われまいとしているかのよう。

バードラモンやカブテリモンは空から奇襲して気を引かなければならないし、イツカクモンやトゲモンでは身体が重すぎてスカルグレイモンの右手に乗っている太一の下まで跳躍することはできない。

必然的に素早く動けるガルルモンが、太一の奪還役を担っているのだが、ガルルモンも身体が大きいためにすぐに気づかれて阻止されて

しまう。

だが今のブイモンなら、大人の背丈ほどの大きさしかない今のブイモンなら、他の身体が大きい仲間達に囚になってもらえば気づかれずに近づくことが出来るはずだ。

『つ、で、でも、俺……』

ブイモンは、しかし躊躇する。

ブイモンは最年少3人と、そのパートナー以外に触れられることを怖がっている。

誰かに触れられると、全身が震えて冷や汗が止まらなくなって、呼吸が荒くなつて、目の前が真っ暗になってしまうのだ。

太一のことはいけ、太一も自分に触れてくるかもしれないということ……。「それなら大丈夫じゃないかな？ブイモン、今腕に鎧はめてるから、太一に触れられても大丈夫だと思うよ」

『え……あ、ほ、ホントだ！』

気づいていなかったようだ。

躊躇していた気持ちは吹っ飛び、ブイモンは仲間達に加勢すべく走り出した。

『ガルルモン！』

『?!?』

何度目かの太一奪還に失敗し、息が上がり始めているガルルモンに、ブイモンは駆け寄った。

聞き慣れた声で、見慣れない姿にガルルモンは驚いていたが、事情を話せばすぐに理解してくれた。

『それで、どうするんだ？』

『俺がタイチを助ける。俺の大きさなら、スカルグレイモンに気づかれないように近づくことはできると思うから、ガルルモンは援護に回ってくれないか？』

『分かった』

ガルルモンは息を整えると、デコボコになっている地面を蹴って走り出した。

スカルグレイモンを翻弄するような形でイツカクモンやトゲモン、バードラモンとカブテリモンにブイモンのことを伝える。

そのことに全員頷き、ブイモンの援護をすべくスカルグレイモンの周りを飛び回り、うろつき始めた。

スカルグレイモンは更に暴れ始める。

ブイモンは進化した跳躍力を使い、スカルグレイモンの骨を伝って右手に向かって行った。

途中で何度か気づかれそうになったが、その度に仲間達が気を引いてくれたお陰で何とか気づかれずに済んだ。

やはり身体が小さい分、気づかれにくいようだ。

『タイチ……い!』

何とか太一がいるスカルグレイモンの右手に辿り着く。

そこには目を閉じてぐったりと横たわっている太一がいた。

スカルグレイモンに気づかれないように呼びかけてみたが、反応はない。

額に赤いものがべったりとついていて、何処か怪我でもしたのかもしれないと思ったブイモンは、両腕を覆っている鎧に、慎重に太一を乗せてスカルグレイモンの右手から飛び降りる。

気づかれていないようなので、後は仲間達に任せて太一を子ども達の下まで運んで行った。

直後に、ブイモンの姿が元に戻り、ブイモンはその場にへたり込む。

「太一!」

「太一さん!」

ブイモンに助け出された太一は、その場に下ろされて子ども達に囲まれた。

ぎゃあ、と丈が顔を真っ青にさせて悲鳴を上げる。

太一の額に乾いて黒ずんでいる血がついていたのだ。

何処かに頭をぶつけたのだろうか、血は止まっているようだが、血が出るほどの衝撃というのはまずい。

「みつ、みんな、あの、何かタオルとか!ハンカチでもいいんだけど!持っていない!?!」

医者の子である丈が、顔を真っ青にさせながら子ども達に指示を出す。

子ども達はわたわたしながらも自分の荷物を探る。

光子郎は、パソコンを開いてゲンナイからもらったアイテムに何かいいものがないかと探していたら、ピコデビモンがあつ！と声を出した。

『そうでした！ゲンナイ様から預かっていたものがありません！』

ピコデビモンが蝙蝠型の鏡から、救急箱を取り出した。

最後に通信をした後、ゲンナイは救急セットの復元に成功したのだが、その後通信が出来ない場所に行くことになったために、ピコデビモンに預けてくれたらしい。

ピコデビモンから救急箱を預かり、開けると、包帯やガーゼや絆創膏など、一通り必要なものが揃っている。

丈は必要なものを救急箱から取ると、光子郎にパソコンから水を出すように頼み、それを空に渡してハンカチを濡らして乾いた血を拭うように指示する。

言われた通りにやり終えると、丈は顔を真っ青にさせたまま処置を施す。

手元が震えていたが、テキパキとした手つきで包帯を巻いた。

この包帯には傷を治す成分があるので、巻いているだけで人間が本来持っている再生能力を補助してくれるのだという。

頭を打ったことで丈は戦々恐々としていたのだが、それを聞いて少し安堵した。

太一が目を覚めたのは、その直後だった。

「う……………」

「太一っ！」

薄らと目を開け、小さく呻いた太一に気づいた治が太一の顔を覗き込む。

ぼんやりとしていた目で空を背景にした治を見上げる太一に、治は何度か呼びかけるとようやく我に返って上半身をがばりと起こした。

「おい！頭を打ってるんだから、頭を動かすなっ！」

「お、俺……！グレイモンは!？」

丈が怒鳴ったが、太一は聞いておらず、辺りを見回してパートナーを探している。

子ども達は一瞬言葉に詰まったが、黙っていても状況は変わらない。

治は、話した。指を指した。

治が指を指した先に視線を向けると、全身が骨になったデジモンが暴れている。

あれは、グレイモンだと、治は言った。

「……………」

絶句する太一。

悍ましい咆哮を上げながら暴れまわっている、全身骨だらけのデジモンが、グレイモン？

丈が止めるのも聞かず、太一は足元を震わせながら立ち上がり、フラフラとした足取りで客席の階段を降りようとする。

がくん、とその場に膝をつきそうになったので、治が慌てて駆け寄って自分の肩を貸した。

その表情は、いつもの太一からは信じられないほど、憔悴しきっていた。

「…………グレイモン」

呟いたのは、パートナーの名前。

いつも仲間達の先陣を切って戦闘でも勇敢に戦うグレイモンが、太一を護るために逞しい四肢で力強く戦うグレイモンが、何処にもいない。

全身が骨になって、仲間達を襲っている。

「…………グレイ、モン」

再度呟くも、太一の声は崩れる瓦礫にかき消され、スカルグレイモンに届くことはない。

崩れる。

崩れる。

崩れる。

「……………」

そんな上級生達から少し離れて、大輔は、ヒカリは、そして賢は、コロッセオが崩れていく様を呆然と見ていた。

大きな音を立てながら崩れて、瓦礫と化していくコロッセオの壁。子ども達が住んでいる世界にあるものとはほぼ同じ形をしており、それは人類の栄華を象徴する一つとされている。

その栄華を象徴するコロッセオが、スカルグレイモンによつて呆気なく崩れていく。

壊れていく。

「……………」

最初に声を漏らしたのは、ヒカリだった。

見開かれた赤い目に映る、崩れていくコロッセオの煉瓦の壁が、一瞬マンシヨンの外壁に変わった。

呼吸がどンドン浅くなる。乱れていく。

スカルグレイモンが大きく咆哮する。

その姿が、嫌に見慣れたオレンジの怪獣に見えた気がした。

「……………」

ぽつり、とヒカリは呟く。

あまりにも小さな、囁くような声だったために、隣にいたプロットモンは気づけなかった。

「……………」

また呟く。

ヒカリの目にはもう、〃目の前の景色は映っていない〃。

脳内の奥から浮かび上がってくる泡の1つ1つの中に、アニメやドラマの一場面のような絵が閉じ込められていて、記憶の水面に到達するたびに壊れた泡からヒカリの目の前に再生されていく。

「いやああああああつ！やめて！もうやめて！コロモン、やめて!!」
「ヒカリちゃん!？」

「やめてえ！お家壊さないでえ!!帰ろうよ、コロモン!!お家帰ろうよおっ!!」

髪を振り乱し、全てを拒絶するように目を閉じ耳を塞ぎ、ヒカリは叫ぶ。泣き叫ぶ。

スカルグレイモンを、コロモンと呼びながら。

「ヒカリ、ちゃん……?」

「……あ、おい！ちよつと、大輔くん!」

尋常ではないヒカリの様子に、空とミミ、プロットモンも啞然とすることしかできなかつた。

丈の焦つたような声に、空達は反射的にそちらを振り向いた。

フラフラとした足取りで、大輔が客席の階段を降りていく。

ブイモンが慌てて後を追って、その手を掴んだが、大輔は振りほどくこともせずにそのままフラフラと先に進んだ。

『ダイスケ！危ないってば！何処行くんだよ!』

ブイモンの制止の声も、大輔には届いていない。

何かに怯えているかのように、スカルグレイモンを真つすぐ見ながら大輔は言った。

「コロモン……」

『え?』

「コロモン……!」

大輔は、スカルグレイモンを見てコロモンと言った。

「コロモン!」

「賢?!何を言っているんだ!」

それは、大輔とヒカリだけではなかった。

同じく異変が起きていた賢も、スカルグレイモンをコロモンと言いながら、駆け寄ろうとしていたのだ。

太一を支えていた治が、太一が客席の背もたれを支えにして立っているのをちゃんと見て、賢の下に駆けよって後ろから抱きかかえるように阻止したが、賢はその腕から逃れようともがいている。

大輔も賢も、スカルグレイモンしか見ていない。

ブイモンはこんな事態だというのに、それが面白くなってムツとしながら大輔の腕を掴んでいる手に、更に力を込めた。

『ダイスケッー！どうしたんだよ！あれはコロモンじゃなくて、スカルグレイモンだよ！？退化すれば確かにコロモンだけど……』

「コロモン！なあ、コロモン！やめろってば！」

「コロモン！僕達の声が聞こえないの!？」

しかしブイモンが呼びかけても、治が羽交い絞めにして止めても、大輔と賢はその歩みを止めない。

スカルグレイモンをコロモンと呼びながら、駆け寄ろうとしている。

……一体、どうしたというのだ。

ヒカリは錯乱したようにコロモンの名を口にしてしているし、大輔と賢もスカルグレイモンしか見ていない。

「こ、これは一体……」

『わ、ワタシにも何がなんだか……』

光子郎とピコデビモンも、下級生達を止めるやり取りに参加こそしていないものの、その光景を遠巻きに見て啞然としている。

「コロモン……!」

ブイモンに止められても尚、大輔は歩みを止めない。

同じく、啞然としながらスカルグレイモンを見つめている太一の隣に並んで、大輔はようやくその歩みを止めた。

「コロモン……」

大輔には何が見えているのだろうか。

どうして大輔はスカルグレイモンを、コロモンと呼び続けているのだろうか。

上級生達は訳が分からなくて、ただ大輔を、ヒカリを、賢を見つめることしか出来なかった。

カラン……

その時だ、大輔の首から下げているホイッスルの合成コルクが、ホイッスルにぶつかって軽くて小さな音を立てたのは。

スカルグレイモンが暴れて崩れていく瓦礫の派手な音の中でも、はつきりと太一の耳に届いた。

は、とスカルグレイモンから目を逸らして、隣に佇んでいる大輔に目を向ける。

その表情は、太一と同じように恐怖や困惑や悲哀など、色々な感情がぐちゃぐちゃに混ざっていた。

きらり、と太陽の光を反射して鋭く輝くホイッスル。

初めて会った時からそれを首から下げたおり、それは何だっけ聞いてたら大切なものなんですって答えてくれた。

その時はふーんて流して、普段も特に気にしていなかったのだが、今日は、今は、どうしてかとても気になって仕方がなかった。

—— “あれ” を吹かないといけない。

太一は、唐突にそう思った。

大輔が持っているホイッスルを、今すぐ吹かなければ。

そう考えた太一の行動は早かった。

頭の鈍い痛みを無視して、太一は大輔の首から下がっているホイッスルを乱暴に掴むと、

ピー

!!

大きく息を吸い込んで、そしてホイッスルを口に咥えて思いっきり吐き出す。

合成コルクが中で細かく振動して、甲高い音が鳴り響いた。

崩れた瓦礫にも負けないぐらいの、大きな音だった。

静まり返る空間。子ども達はみんな太一を見る。

ファイル島にてデビモンとの最終決戦時に、大輔がエクスブイモン

を起こそうとした時と同じだった。

スカルグレイモンと戦っていたパートナー達も、そしてスカルグレイモンも動きを止める。

尻すぼみになっていくホイッスルの音。

ぷは、と肺の中の息を全て吐ききつて、太一は肩を大きく上下させながら酸素を取り込む。

《……………グ》

スカルグレイモンが小さく呻く。

終わりは、唐突だった。

「アグモン!!」

太一が叫ぶ。笛の音を聞いて動きを止めたスカルグレイモンが、音の出どころの方に目を向けていた。

ああ、こつちを見てくれた。そう思った太一は、足元をふらつかせながら歩き出す。

賢を押さえつけるのに忙しい治に変わって、光子郎が駆け寄って太一を支えた。

「アグモン！俺だよ！太一だよ！聞こえてるんだろ!?!」

声を張り上げて、太一はアグモンに必死に呼びかけた。

スカルグレイモンの下へ歩み寄ろうとしている太一に、光子郎は恐怖を抱くも、逃げれば太一が歩けなくなってしまうと思い、震えながら太一と一緒にスカルグレイモンに近寄って行った。

「なあ、アグモン！もうやめろよ！……ここにはお前を傷つけようとする奴はいないんだ！こいつらがわかんないのかよ!?!お前の、俺達の仲間だろ!?!ずっと俺達を待っていた時に、一緒にいた仲間達だろ!?!」

頭の痛みも忘れて、太一はアグモンに呼びかける。

例え返事が来なくなっちゃって、太一はアグモンを信じて何度も呼びかける。

「……………戻ってこいよ、アグモン。誰もお前を責めないよ。怖くないから、だから……………!」

涙を浮かべながら手を差し伸べる太一。

「賢つ!?どうしたんだ!」

ブイモンとプロットモン、そして治が倒れた3人の名を呼びながら揺り起こそうとするが、3人はぐったりとしたまま動かない。

ヒカリに至っては、涙を流していた。

先程の、尋常ではない様子と言い、一体何があったというのだろうか。……スカルグレイモンのことをコロモンと言っていたことも気になる。

「……ゲンナイさんに聞いたただした方がいいな」

「……………そう、ね」

退化したパートナー達と合流して、丈とミミは太一と光子郎に追いつく。

スカルグレイモンがぶち壊して、新しい入口になってしまったコロッセオの壁の瓦礫の向こうで、力尽きて幼年期にまで退化していたコロモンを、太一が抱き上げていた。

「…………ごめん、ホントにごめんな、コロモン…………!」

『…………ちがうよ、タイチはなにもわるくない…………ボクのほうこそ…………みんな、ごめんね…………』

その場に座り込んで、コロモンを胸に抱きながら、泣きながら太一は何度も謝罪していた。

コロモンも、今にも泣きそうになりながら太一の頬にすり寄っている。

ごめん、ごめんって、ずっと言い合っていた。

それを光子郎は傍らで見下ろしていることしか出来ず、唇をぎゅつと結んでいた。

ミミは駆け寄って、座り込んでいる太一の隣に膝をついて背中を優しく擦る。

そんな太一達を見て、丈は思うのだ。

誰も悪くないんだって。誰のせいでもないんだって。

太一とアグモンは、仲間達のために囀を買って出てくれたのだ。

それがどうしてか、グレイモンがスカルグレイモンになってしまつて、コロッセオはめちやくちやに破壊されてしまったけれど、でも太一の怪我の具合等を見て丈は何となく察した。

デジモンは、パートナー達は子ども達のピンチに進化をする。

太一の怪我を見て、グレイモンは暴走してしまったのだろう、というのが丈の見解だ。

そしてそれは、概ね当たっていた。

直後に、太一は限界を迎えたのか、ぱったりと倒れてしまった。

それは、早すぎる出逢いだった。

出逢ってはいけないものだった。

「日本に行きましよう！」

大輔は故郷を知らない。大輔は日本人ではあるが、アメリカで生まれ、アメリカで育った。

お家でももっぱら喋る言語は英語だし、知っている日本語も発音はまるで外国人のものだ。

お姉ちゃんは今の太輔と同じぐらいの頃にアメリカに来た。だから太輔よりは日本語を知っているけれど、英語を喋っている方が楽しい。

彼女が日本語を喋っているところを、太輔は見たことがない。

たまにお母さんやお父さんが懐かしそうな顔をして、日本のことを教えてくれるのだけれど、日本に足を踏み入れたことのない太輔にとっては、まるで他人事だった。

だからお母さんが日本に行くわよって笑顔で行ってきた時も、ふんふんと思わなかった。

それは太輔が4歳、お姉ちゃんが8歳の時だった。

季節は春休み真っ最中で、ということは大好きなお姉ちゃんがずっとお家にいられる期間だ。

朝からお姉ちゃんに遊んで遊んでおねだりして、お姉ちゃんはシユクダイがあるから我儘言っちゃダメってお母さんに叱られた。

むくれていたらシユクダイ早く終わらせるから待っててって、苦笑しながら頭を撫でてくれた。

お姉ちゃんだけあつてとでもしっかりしていて、宿題を持って帰ってきた日に計画表というのを立てていた。

春休みということもあり、宿題の量は多くなかったのが救いだ。

英単語を書いたり、簡単な計算をしたりするだけで、ページ数も少ないから、1日2ページのペースでも十分間に合う。

お姉ちゃんはさっさと英語の書き取りと算数を終わらせ、カーペットをごろごろと転がっていた大輔に声をかける。

俯せになっていた大輔がガバツと顔を上げて、四つん這いで移動してきたのを見た時は、まるで犬のようだとお姉ちゃんはまた苦笑した。

今日は外で遊ぶ気分ではなかったらしい大輔は、5人組の人形を部屋から持ってきて、お姉ちゃんに黄色とピンクの人形を渡して、大きな声をあげながら遊んでいたところに、母親の台詞だ。

「……ほーんと、思いつきで行動なんてしないでほしいもんだわ」
ぶす、と肘をつきながらお姉ちゃんは呟いた。

大輔はテレビでしか見たことのない飛行機に夢中になっており、お姉ちゃんの言ったことは全く耳に入っていなかったようだ。

ガラスにべったりと張り付き、目を大きく見開かせながら騒いでいる。

お父さんが苦笑しながら大輔を宥めようとしているが、大輔は全く聞いていないようだった。

お父さんが何か言おうとするたびに、ガラスをバンバン叩いたり、ピョンピョン跳ねたりと騒がしい。

旅行中の黒人夫婦がそんな大輔を見て苦笑している。

出張先へと向かうサラリーマンが、少し迷惑そうな表情を浮かべていた。

「行動力があるっていうのも、考えものよね。ふり回されるのはいつだってアタシ達子どもなのよ」

「あらやだ、お姉ちゃんてばいつちよまえに大人ぶっちゃって」

溜息を吐くお姉ちゃんに、お母さんはカラカラと笑うだけだ。もう一度溜息。

日本に行くと聞かされたのはほんの3日前だ。

春休みに入ったばかりとはいえ、日本へ発つ3日前にそれを知らせてくるなんて、社会人の原則であるホウ・レン・ソウはどうしたのだ。と、凡そ子供らしくないことを考えて、止めた。そう言えば両親は“考えるよりまず行動”をモットーとしており、今までもその持前の行動力で何度も子供達を振り回してきた。

長期の休みになってから行けばいいのに、思い立ったが吉日と言って、お母さんはまだ2歳だった大輔と小学校に通い始めたお姉ちゃんを連れて、突如エジプト観光1ヶ月の旅と称して、2人を連れ回したのだ。

お父さんはお父さんで、アメリカを横断するぞ！とか言つて、本当に実行しやがった人だ。

夏休みの時期に実行しただけ、まだお母さんよりはマシだったが。

1963年11月22日に暗殺されたある大統領を讃え、その名を与えられた空港から飛び立つてから、約15時間。

気圧が低くなると眠くなるお姉ちゃんと大輔は、空の旅をずっと寝ながら過ごした。

どすん、という衝撃を受けて目を覚ましたお姉ちゃんは、まだ眠そうな大輔の手を引きながら日本の地へと降り立った。

聞こえてくる、日本語、日本語、日本語。

お姉ちゃんだけでなく大輔も目を丸くしながら、忙しなく辺りを見回している。

そんな二人が面白くて、おかしくて、お父さんとお母さんはクスクス笑っている。

お姉ちゃんは大輔と違って日本生まれだ。

しかし今の太輔と同じぐらいの時にお父さんの仕事の都合で、アメリカに渡るようになったので、日本のことは知らないに等しい。

普段物怖じしないはずの2人が、珍しく戸惑いながらお母さんやお

父さんにしがみ付いている。

お母さんもお父さんもそんな2人を見て笑うだけで、特にフオローをしてくれることもなく、空港から出ている電車に乗り、幾つかの路線を乗り継ぐこと2時間弱。

ただでさえ十何時間もの間、飛行機の狭い空間で退屈な時間を過ごしていたというのに、また更に2時間弱もの間拘束されることとなり、大輔の機嫌はよろしくない。

それでも、流れていく電車の窓の景色を見ている内に、鼻歌を歌うぐらいには機嫌は直ってきたようだ。

お姉ちゃん見て見て！って隣に座っている姉に呼びかけ、流れていく景色にはしゃいでいる。

アメリカとはまた違った雰囲気風景を、お気に召したようだ。

景色に夢中になってる内に目的地に到着し、大輔はお姉ちゃんとお母さんの手に引かれ、電車を降りる。

行き交う日本語に目を丸くしながら、大きなスーツケースを2つ引きずるお父さんの後についていく。

ホームの中心に設置されている看板のようなもの。通り過ぎざまにそちらに視線を向ける。

一番大きな文字は日本語で書かれており、大輔には読めなかった。平仮名でさえ読めないのに、漢字で書かれていたら余計に分からないだろう。

しかしすぐ下に大輔も知っている文字が書かれていた。アルファベットだ。

ひ・か・り・が・お・か。大輔は口に出して文字を読む。隣にいたお姉ちゃんが何？と聞いた。

「ここ、ひかりがおか、っていの？」

「そうなの？」

「あそこにかいてあった」

「え？アンタ日本語読め……あ、下に英語で書かれてたのね」

ひかりがおか。光ヶ丘。ひかりって何だろう、と思いつながらも、大輔はお姉ちゃんとお母さんに手を引かれ、階段を登った。

お父さんとお母さん、小学生のお姉ちゃんは切符を改札に通す。切符が必要ない大輔は、さっさと改札を出ていく。

お母さんが待ちなさいって慌てて追いかけて、大輔の手を掴んだ。目を離すとすぐにフラフラと何処かへ行ってしまおう、とお母さんは溜息を吐く。

大輔の手をしっかりと繋ぎ直して、スーツケースを2つ引きずっているお父さんを置いて、さっさと歩き出した。

待ってくれよう、なんて情けない声を出しながら、ひいひい言っているお父さんを哀れに思っ、お姉ちゃんが、お父さんの隣に並んで歩いている。

左右に聳え立つ、アメリカとはまた違った集合住宅に圧倒され、大輔は口をぽかーんと開けながら辺りを見回している。

日本に着いてからというもの、アメリカとの違いに驚きつ放しだ。大輔と同年代の、日本人の子ども達がきやあきやあとはしやぎながら、公園へと走って行く。

ちらりと見えた遊具がとても魅力的に見えて、大輔の足がそちらに引きかけたが、お母さんにしっかりと手を掴まれていたのでそれは叶わなかった。

その公園から歩いて5分ほど。そろそろ大輔がぐずり始める頃合いに、着いたわよとお母さんが立ち止まった。

ここまで来るのに通り過ぎた、他のマンションと変わらない見栄えのマンションの前。

スーツケースを両手で引きずっていたお父さんが、やっと着いたかあゝって情けない声を上げていた。

「お義兄さんに会うのは久しぶりだな」

「そうねえ。結婚してこの子が産まれて……6年ぐらいかしら？」
お母さんとお父さんが、お姉ちゃんと大輔には分からないお話をしている。

思ったことは何でも口にする大輔は、考えるよりも先にお母さんの服を掴みぐいぐいと引っ張った。

大輔が何か言う前に、お母さんが口を開く。

「ここはお母さんのお兄ちゃん……アンタ達の伯父さんが住んでるところよ」

こここの最上階に住んでいる、らしい。さあ行くわよ、とお母さんは張り切って大輔の手を引き、マンションのエントランスへ入って行く。

エントランスへ入ってすぐのところ、1から9の数字が羅列されているボタンが設置されている機械があった。

鼻歌を歌いながらお母さんはボタンを押す。

ピンポーン、というチャイムの音のすぐ後に、はいという明るい男性の声があった。

お母さんが私よーって答えるが、日本語が分からない大輔には、呪文のようにしか聞こえなかった。

一言、二言会話を交わすと、エントランスの入り口が開いた。

中へと入る。正面にはエレベーターと、右側の奥の方に階段があった。

伯父さんは最上階に住んでいるから、階段で行ったら確実に全員の足が死ぬだろう。

というかお父さんはお母さんによってスーツケースを2つも持たされているから、階段で行くのはお父さんが可哀想すぎる。

お母さんはエレベーターのボタンを押す。扉が開く。

まずはスーツケースを持っているお父さんが入って、次にお姉ちゃんが入る。

大輔が後に続き、最後にお母さんが乗り込む。

最上階のボタンを押すと、扉が閉まってエレベーターがゆっくりと上昇した。

ほんの数秒の間のことなのに、大輔はそれでも退屈だったらしく、大人2人と大きなスーツケースが2つ、小さいとはいえ子供が2人とどうとてつもなく狭い空間の中で、ウロチョロと動き回る。

こら、って流石にお母さんが叱りつけた直後、チーンという音がしてエレベーターの扉が開いた。

真つ先に飛び出して行つたのは、大輔だ。

同年代の友達の中でもダントツでチビな大輔は、最上階の景色を見たくとも壁に阻まれそれは叶わなかった。

ちえつと舌打ちして、お母さんに呼ばれた大輔は軽い足取りで廊下を走る。

お母さんがピンポンを鳴らす前に、玄関が開いた。

いらつしやい、と玄関を開けたのは、人のいい笑顔を浮かべた男性だった。

この人が伯父さん？と大輔はお母さんの陰に隠れながら男性を見上げる。

そんな大輔に気づいて伯父さんは大輔の目線に合わせてしゃがみ、こんにちはと挨拶をした。

優しそうなその眼差しに、悪い人ではなさそうだと、大輔はお母さんの陰から前に出ることにした。

男性の一人暮らしにしては、室内はとても綺麗に片付けられていた。

清潔感のある、オフホワイトで統一された家具がセンスよく配置されている。

アメリカとはまた違う雰囲気の室内の様子に、大輔は忙しなく首を動かしている。壁にかかっている絵は、伯父さんが描いたものだろうか。

優しいパステルカラーで彩られた、風景画だった。

絵から目を離し、再び室内を見渡し、うろちよろと動き回る。

スライド型の扉の向こうの部屋の床には、見たことのないものが敷き詰められていた。

タタミ、という名前らしい。

畳を見たことがない大輔は、お姉ちゃんと一緒に恐る恐ると言った様子で、畳の部屋……和室と呼ばれる部屋に入ってみる。そろそろと手を伸ばす。

感触を確かめる。不思議な感触にお姉ちゃんと大輔は少々驚いた後、互いの顔を見合わせ、クスクスと笑いあった。

寝転がると気持ちいいよ、と伯父さんが日本語で教えてくれて、それをお母さんが英語に訳してくれたので、お姉ちゃんと一緒に寝転がってみる。

微かな草の香りが、大輔達の鼻腔を擦った。

床のように固くなく、しかし柔らかいわけでもなく、程よい寝心地でこのまま眠ってしまえそうさ。

最初のうちは、確かに楽しかった。

アメリカにはない、畳の感触にお姉ちゃんも大輔も笑い転げながら楽しんでいたのだが、ここは男の一人暮らしの一室だ。

結婚していない彼には、当然子供もおらず、ということは当然子供が遊ぶような玩具もない。

おまけに大人達は日本語で会話し始めてしまった。

大輔の顔からみるみる笑顔が消えていくのを間近で見ているお姉ちゃんは、慌ててお母さんに外に行っていいか尋ねた。

久しぶりに会った兄と、久しぶりに使う日本語での会話で盛り上がって、子供達のことをすっかり忘れてしまっていたお母さんは、しかし困ったような顔を浮かべた。

「この辺のことなんか分かんないでしょ？大丈夫なの？」

「ここに来るまでに公園あったじゃない。あそこ行ってくるわ」

ここから公園まで距離は離れていない。

この部屋からその公園が見えるぐらい近いので、それなら大丈夫かとお母さんは子供達に外出の許可を出した。

それを聞くや否や、大輔はお姉ちゃんの手を引き、玄関へと向かった。

まだ蝶々結びが出来ない大輔は、踵を潰したマジックテープのスニーカーに足をつっこみ、玄関のドアを開けた。

待ちなさいよ、とお姉ちゃんは苦笑する。

足を縫れさせながらも、お姉ちゃんは大輔に手を引かれながら外に出て行った。

少しもじつとしていない息子に、お母さんもお父さんもやれやれっ

て肩を竦めたり、溜息を吐いたりしたけれど、伯父さんは元気があつていいじゃないか、と笑った。

お姉ちゃんと手を繋ぎ、アメリカとは違った風景の中を歩いていくと、5分もしない内に先程の公園が見えてくる。

そこから聞こえてくる未知の言葉に、大輔は怯むどころかわくわくという気持ちが次々と湧いてきた。

言葉が通じなかったら、という不安は不思議となかった。

足早に公園に入って行く。予想に反し、子どもの数は少なかった。

世間一般では、今は春休みだ。4月になれば新しい学年に上がるため、宿題もない。

子どもにせがまれて旅行に出かけている家族が多いのだろう。

ここにいる子ども達は、おねだりが失敗した子達だろうか。

なんてことすら考え付かないほど、まだ幼い姉弟は、目の前に広がる魅力的な遊具に目を輝かせる。

ちらほらという子ども達が、公園の入り口に佇んでいる、この辺では見かけないような子ども達（もちろん大輔達のことである）を凝視していることに気づかず、大輔はお姉ちゃんの手を離して走り出した。

向かうのは、目の前の砂場。待ちなさい、というお姉ちゃんの制止を無視して、大輔は両脚を揃えると大きくジャンプをした。

砂場に着地し、砂が巻き上がると同時に2つの小さな悲鳴が聞こえた。

「あら、大輔ー」

走り出した大輔を追いかけていたお姉ちゃんは、見ていた。

大輔が向かって行った砂場には先客が2名おり、砂の山を作って遊んでいた。

しかし遊びたい一心だった大輔はそれに気づかず、1人が作っていた砂の山を上から崩すようにジャンプしてしまったのだ。

それに驚いて、1人は尻餅をつき、もう1人は硬直しながら大輔を見つめる。

大輔の方も遅れて先客がいたことに気づき、ポカンと見下ろしていた。

誰もいないと思っていた砂場に先客がいたことに驚いているのだろうが、それよりも。

「大輔！ダメじゃない、ちゃんと見なさい！」

「ごめん……」

「アタシじゃなくて、この子らに謝んなさい！」

お莫迦、とお姉ちゃんはグーで軽く大輔の頭を叩いた。

弟が何かやらかしてしまった時、それを咎めるのはお姉ちゃんの役目である。

大輔はすぐさまその子に対して謝った。しかしお姉ちゃんと大輔はすっかり失念していた。

ここは日本だ。使っている言語は当然日本語であり、普通の日本人の子どもならハローぐらいは知っているだろうが、基本的に日本語以外の言葉に馴染みなどない。

だが大輔とお姉ちゃんが使っているのは、英語だ。

だから英語で帰ってきたゴメンという言葉に、2人がキョトンと首を傾げるのは、当然だった。

2人は、男の子と女の子だった。

2人は、とても対照的だった。

男の子の方は、青みがかかった黒髪がフェイスラインを隠すぐらいの長さで、一瞬女の子だと思ってしまった。

女の子の方は短く切られた焦げ茶が男の子のようだったのだが、ワンピースを着ていた。

「……………」

「……………」

「……………えー、と……ごめん、ね？」

自分が喋っている言語と、相手が知っている言語が違うと気づいたお姉ちゃんは、慌てて日本語で謝罪した。

大輔よりは知っているとは言え、お姉ちゃんも日本語より英語の方が使っている期間が長いし、下手をすれば目の前にいる2人よりも単語同士を文として繋げることができないかもしれない。

こんなことなら、お母さんたちからちゃんと日本語教わればよかった、と今更ながらに後悔した。

だってまさか日本に来るなんて思ってたし、と心の中で言い訳してみたことを考えていると、ようやく女の子が小さな声で平気と答えた。

男の子の方も、女の子が口を開いたのと同時にはにかみながら頷く。

お姉ちゃんはほっと胸を撫で下ろす。

「けが、ない？」

「うん」

じ、と男の子と女の子はお姉ちゃんと大輔を交互に見やる。

こちら辺では見かけない2人だから、興味を抱いているのだろうか。

それとも2人が聞き慣れない言葉を喋っているから、不思議に思っているのだろうか。

どちらにしても、このまま何も言わずにただ見つめ合っているこの状況は、非常に気まずい。

どうしたものか、とお姉ちゃんが苦笑しながら考えあぐねているのを、大輔は容易に裏切っていく。

「あそぼっ！」

「……………」

沈黙に耐え切れなくなったのか、大輔が少し強気な口調で2人に言った。

しかし英語なので、2人は大輔が何を言っているのか分からず、またしても首を傾げる。

お姉ちゃんが代わりに通訳する。すると2人は、一瞬驚いたような表情を見せた。

しかしすぐに2人して可愛らしい笑顔を浮かべ、同時にこくと頷

いた。

そして女の子は、はい、と手にしていたものを大輔に手渡す。プラスチックのシャベルだった。

受け取った大輔は、早速と言わんばかりに砂を掬い上げ、大輔が崩してしまった砂の山に積み上げていく。

女の子は大輔が積み上げた砂を手でパンパンと固めて、男の子の方はバケツに砂をいっぱい入れてから砂山の近くにひっくり返した。

そろそろと引き抜くと、綺麗なバケツの形の砂が出来上がる。

ただひたすら、山のように積み上げていくだけの単調な作業なのに、3人は楽しそうだ。

同じ日本人でありながら互いに喋る言語が違う、育ってきた環境も国も違うというのに、3人はそんな壁などお構いなしのようだった。

まるで昔から知っているような、奇妙な感覚。

砂遊びに飽きた3人は、今度は滑り台の方へと走って行く。

散らかしたままの砂遊びの道具を、お姉ちゃんがバケツにまとめ、一緒に持って行った。

滑り台の階段を駆け上がり、一気に滑り降りていく大輔と、その後続く男の子。

女の子も、モタモタとしながらも大輔と男の子についていって、ゆつくりと滑り台を滑っていった。

甲高い悲鳴のようなものを上げながら、3人は何度も滑り台を滑り、時々大輔が滑り台を逆に駆け上がって2人をびっくりさせて、お姉ちゃんがこら！って怒る。

ジャングルジム、ブランコ、遊具に飽きて鬼ごっこやかくれんぼなどして遊んだ4人は、いつの間にか夕暮れになっていて、周りで遊んでいた子達がとつくに帰っていたことにすら気が付かなかった。

「ありや、いつの間に……」

「えー!?もう帰るの!?!」

つまらない!と大輔はむくれる。

お姉ちゃんももつと遊びたかったけど、丁度その時帰りのチャイムが鳴った。女の子と男の子がそわそわしている。

アメリカでは帰りのチャイムなんて鳴らないから、大輔とお姉ちゃんはびっくりしたけれど、それでも帰らなければならぬというの分かった。

「わがまま言うんじゃないの」

「だってー……」

「……あした」

頬を膨らませる大輔と、それを宥めるお姉ちゃんの耳に、ぼそりと小さな声が届いた。

声が出た方に大輔とお姉ちゃんと男の子は同時に目を向ける。

女の子が一瞬びっくりした顔を見せたが、すぐに可愛らしく微笑んだ。

「あした……また、あそぼ……？」

「！うん、あした、あそぼ！」

「……あし、た……うん、あした！」

男の子がパツと明るい笑顔を浮かべて、女の子に賛同する。

お姉ちゃんは一拍遅れたが、日本語を理解してお姉ちゃんは拍子抜けした。

旅行とはいえ、明日で帰るわけではない。2週間はここに滞在する予定なんだから、明日も遊べるのだ。

大輔にそう言うと、じゃあいやとケロツと機嫌が直った。

我が弟ながら現金な奴だ、とお姉ちゃんは苦笑する。

「じゃあ、あした」

「うん、あした」

「あした、あおうね！」

そう言って女の子は右手の小指を差し出す。

男の子の方は理解して、女の子の指に自分の指を絡ませたが、大輔とお姉ちゃんはその様子を見てキョトンとした。

大輔とお姉ちゃんを置き去りして、女の子と男の子は小指を絡ませた手を上下に振りながら歌を歌った。

日本語の歌で、聞き慣れない歌詞だったために、大輔とお姉ちゃんはそれをぼんやりと眺めているだけだった。

歌い終わると、今度は女の子が大輔に、男の子がお姉ちゃんに小指を差し出す。

頭上に沢山の疑問符を浮かべながら女の子と女の子が差し出した小指を交互に見つめていたら、ずい、と女の子が大輔に小指を近づけてきた。

大輔とお姉ちゃんは顔を見合わせ、2人の真似をしておずおずと自分の右手の小指を差し出す。

2人はそれぞれ、大輔とお姉ちゃんの小指に自分の小指を絡めると、先ほど歌っていた不思議な歌を歌い出した。

日本語の歌詞だったから、意味はよく分からない。

けれど何だか楽しくなってきた、大輔もリズムに乗って訳が分からないまま女の子につられて歌い出す。

ユービキツタ、と最後に紡いで、絡めた小指を少し強く離れた。

「ばいばい」

「ばいばいー」

ここに来て初めて、知っている単語を聞いた。ばいばい。さようならって意味だ。

公園の入り口で、大輔は遠ざかっていく2人に、腕が千切れるほど強く手を振る。

時々振り返っては、2人の方も控えめではあるが手を振り返していた。

夕焼けに吞まれるように2人の姿がとうとう見えなくなり、大輔は手を振るのを止めた。

「……さつと、帰ろっか」

「はーい」

まだ遊び足りない、とむくれていた大輔だったが、あしたも遊ぶ約束をしてもご機嫌だ。

お姉ちゃんと手を繋いで、調子つばずれな鼻歌をお姉ちゃんと一緒に歌いながら、2人は伯父さんのマンションへと戻る。

同じような形状のマンションに、お姉ちゃんと大輔は一度迷いかけたが、マンションのベランダからお母さんが大きな声を出して大輔達

の名前を呼びながら手を振ってくれたので、何とか帰ることが出来た。

エレベーターに乗り込み、お姉ちゃんが精いっぱい背伸びをして、伯父さんが住んでいる最上階のボタンを押す。

静かなエレベーター内で大輔が落ち着きなくうろろろするから、お姉ちゃんがこらって咎める。

チーン、とエレベーターのベルが鳴って、最上階につく。

扉が開くのも待ち遠しいと、大輔は僅かに開きかけた扉から身体を捻じ込ませるように外へと出る。

待ちなさい、っていうお姉ちゃんの制止を背後からかけられるのも構わず、伯父さんの部屋のインターホンを鳴らした。

「お帰り、2人とも」

優しい顔をした伯父さんが出迎えてくれた。

部屋の中からいい匂いが漂ってきたから、大輔は目を閉じて鼻をひくひくとさせながら匂いを嗅いだ。

「ただいまー」

「いいにおいーきょうのごはんなにー?」

お姉ちゃんのただいま、という挨拶を遮るほどの大きな声で、大輔は伯父さんに飛びついた。

お姉ちゃんとお母さんが、ただいまでしょ!と同時に叱りつけるが、伯父さんがまあまあって宥める。

ひよいつと大輔を抱き上げながら、今日はカレーだよと言って洗面所に連れて行った。

お姉ちゃんもちよこちよこと伯父さんの後についていく。薬用石鹸のポンプを押して、掌に液体石鹸を垂らす。

掌を擦り合わせ、泡立たせる。ぬるぬるとした感触が、次第にくしゆくしゆという音を立てて細かい泡が浮かんでは潰されていく。

手をぱちぱちさせながらその感触を楽しんでいた大輔だったが、伯父さんに促されたので水で泡を流した。

伯父さんの家には子供がないため、子供用の補助器具がない。

同年代の中でも背が低い大輔は、蛇口に僅かに手が届かないので、

伯父さんに抱っこしてもらっている。

泡を流しきり、綺麗なタオルで手を拭き、伯父さんに下ろしてもらって、洗面所から走って出て行った。

走らない！とまたお母さんとお姉ちゃんに怒られたのは、もはやご愛嬌だ。

夕飯まで時間があつたから、伯父さんに童謡を歌ってもらったり、一緒に遊んだりしながら、空腹を紛らわせる。

テレビのゴールデンタイムが始まる頃に、ようやくご飯にありつけることになって、大輔は諸手を上げて喜んだ。

大きなお鍋に、お肉とゴロゴロしたジャガイモがたっぷり入ったカレーは、大輔の好物だった。

小さいくせに大輔は沢山食べる。

子供にしては大盛のカレーを3杯、大人で言えば2杯分はペロっと平らげてしまうのだから、底なしの胃袋は侮れないというものだ。

大きなスプーンにカレーとジャガイモを乗せて、口を大きく開いてカレーを頬張る姿が、大変子供らしかった。

「……それでね、あしたもいっしょにあそぼってやくそくしたんだよ！」

今日の公園で出会った女の子と男の子のことを、楽しそうに報告する。お姉ちゃんがたまに補足する。

お母さんもお父さんも、伯父さんもニコニコしながら大輔とお姉ちゃんの話聞いていた。

「こゆびをこうやってね、うたうたったんだよ！あれ、なにかなあ？」お姉ちゃんと自分の小指を絡ませて、再現をした。

大輔もお姉ちゃんも日本語が分からないから、女の子が何と言っているのか分からなかった。

伯父さんは困ったような顔をした。女の子が歌ったのは、十中八九指切りげんまんだろう。

しかしそれを何と説明したものか、と伯父さんは考える。

お姉ちゃんの方はまだしも、まだ4歳で日本語が分からない大輔

が、それを理解できるとは思えないし、理解したらしたで、可愛らしい歌とは裏腹の恐ろしい内容の歌詞に、震え上がってしまうかもしれない。

日本の子供が誰かと約束をする時に歌う歌だよ、と表面だけを薄ら教えても、意味を教えて、と言われたらどうしようか、と困り果てていると、飽きつぱい大輔はもう興味が他のことに移ったようで、それ以上は何も追及してこなかった。

伯父さんだけでなく、お母さんとお父さんもほっと胸を撫で下ろす。

さあ、明日は何をして遊ぼうか――

同じことを考えているであろうお姉ちゃんと目を合わせて、くすくすと笑いあった。

その当時ヒカ리를構成していたのは、兄の背中と世界の半分だった。

先へ先へと走って行ってしまう兄は、後ろからついてきている妹のことなんかいつもほったらかしだった。

待って、といつも言っているのに、お兄ちゃんはお前がついてこいよと言わんばかりにどんどん先へ行ってしまう。

小さいヒカリよりは大きいけれど、それでもまだ兄として未熟な兄は、まだ「兄」が何たるものなのかをよく理解していなかった。

自分より小さい、ぐらいの認識でしかなかった。

面倒をみなければならぬという発想に至ることはなかったし、ましてや一緒に遊ぶという選択すら浮かばなかった。

まだ7歳の彼にとって重要なのは、友達と遊ぶことだったのだ。

ヒカリは女の子で、兄は男の子。

見た目通り活発で、身体を動かす遊びが大好きな兄と違って、ヒカリは絵本を読んだり絵を描いたりするのが好きだから、ヒカリと遊んでもつまらないのである。

だが幸か不幸か、ヒカリは自分よりも他人を優先するくらいがあった。

大好きなお兄ちゃんとうしても一緒にいたいヒカリは、絵本もお絵かきも我慢してお兄ちゃんの後を追ってお外に出る。

お兄ちゃんがお友達とサッカーをしているのを離れて見たり、お友達がない時は一緒にサッカーをさせてもらったりする。

ヒカリは身体が丈夫とは言い難い体質だった。

季節の変わり目にはいつも風邪をひいていたし、その度に寝込むほど、身体が弱かった。

それでもヒカリは、自分ではなく他人を優先していた。

どんなに体調が悪くとも、相手が楽しそうにしているのを邪魔したくないといつも我慢していた。

そのせいで後に兄とヒカリが悲劇に見舞われてしまうのを、ヒカリはまだ知らない。

ひよんなことから仲良くなった男の子と姉弟は、約束通り公園に来ていた。

3人と早く遊びたくって、ついつい早起きしちゃったヒカリは、まだお外が薄暗いのを残念に思いながらまだかなまだかなってベッドの中でゴロゴロして、長い長い時間を持て余した。

大人からすればたった2時間のことだったけれど、まだまだ小さいヒカリには永遠の時に感じられた。

ようやく朝日が昇って、お母さんが起きなさいって声をかける前に飛び起きたヒカリは、お母さんが作ってくれた目玉焼きとトーストを一生懸命もぐもぐして、ご馳走さまって台所に持っていった。

いつものヒカリからは考えられないスピードで朝ごはんを食べ終えたから、お母さんはびっくりしていた。

お顔も洗って歯磨きもして、お母さんのブラシを拝借して短く切られて寝癖であちこち跳ねている髪を一生懸命梳く。

短すぎてびよんびよんと跳ねている髪は、ブラシで梳くだけじゃ全然直らなくて、結局お母さんに綺麗にしてもらった。

どうしたの、ってお母さんが聞いてきたけれど、ヒカリは答える時間ももどかしいと言わんばかりに、髪を整えてもらったら急いでお部屋に戻った。

入れ替わりに、ようやく起きてきた兄が部屋を出て行く。

うわ、と兄を押しつけるように入ってきたヒカリにびっくりして声を上げた。

お洋服が入っているタンスを開けて、どれにしようかなって悩むヒカリに、兄は何かあったのかと母に聞いたが、母も何も知らないので答えられない。

お気に入り、クリーム色のワンピースを手にとってみる。裾の方に可愛く細かいお花の刺繍がしてある、ヒカリのとっておきだ。

何処か遠いところにお出かけする時に必ず着るもので、ようやくできたお友達に見て見て見つけたかったのだが、男の子の方とはともかく姉弟は兄と同じで走り回るのが好きな子達だった。

お気に入りのワンピースで走り回ったら、汚れてしまうかもしれない。

早々に却下して、あーでもないこーでもないって悩みまくって、結局お外で遊ぶ用のお洋服を取り出した。

放り出したお洋服をタンスにしまい、お着替えをしてお砂場セットとパジャマを持って部屋を出る。

カラコロ、カラコロ、という音を聞いて、お母さんはまたびっくりしていた。

パジャマを洗面所にある洗濯籠に放り込んだヒカリは、元気よく行ってきますって言ってお家を出て行く。

お兄ちゃんが昨日シユクダイをしていて遊んでくれなかったから、今日はお兄ちゃんに1日べったりすると思っていたのに、ヒカリは兄に見向きもせずにお家を出て行ったのである。

兄も兄で、いつも鬱陶しいほどくっついてくるヒカリがさつきと出かけてしまったのを見て、啞然としていた。

お母さんとお兄ちゃんがそんな状態になっていることなんかつゆ知らず、ヒカリは公園へと急ぐ。

今日また一緒に遊ぼう、って約束したけれど、時間を決めていなかったことに気づかず、ヒカリは早くあの3人と遊びたくって、公園の入り口からひよこつと顔を覗かせた。

いた、兄とはまた違う、特徴的な爆発した髪の毛の姉弟と女の子と見紛う顔立ちの男の子。

ヒカリはニコニコしながらお砂場セットをカラコロ鳴らして、3人に近づいて行く。

先に気づいたのは、男の子だった。

しゃがんで、昨日ヒカリがしていたみたいに砂山を作って遊んでいた3人だったが、カラコロという音で男の子が気づいたのか、顔を上げてヒカリを見つけた。

ヒカリに背を向けて遊んでいた姉弟に何か話しかけてヒカリの方を指さすと、姉弟は振り返ってヒカリを見た。

弟くんは花が咲いたように笑うと立ち上がり、たーっとヒカリに駆け寄ってくる。

遅れて、お姉さんと男の子も立って弟の後をついてくる。

駆け寄ってきた弟くんは、何か早口でまくし立てた後、ヒカリをぎゅーっとした。

突然ぎゅっとされたヒカリは、しかしよく分からずされるがままである。

ぽか、と小気味いい音がして、弟くんが離れた。

お姉さんが弟くんの頭を叩いたらしい。

頭を抑えながら弟くんが何か抗議して、それを見た男の子が苦笑している。

ごめんね、つてお姉さんにたどたどしく謝られたけど、何のことかわからないヒカリは首を傾げた。

まあいいや、つてヒカリは弟くんと男の子の手を取って、あそぼつて言つて4人でお砂場に戻る。

しばらくはお砂場で遊んで、飽きたらブランコや鬼ごっこやかくれんぼをしたり、滑り台を滑ったりして、たっぷり遊んだ。

お友達に会いたくつて、ついつい早起きしてしまった時は永遠を感じていたのに、いつの間にか公園の時計は長い針も短い針もてっぺんを指していた。

お昼ご飯の時間である。

また後でね、つてお昼ご飯を食べたら遊ぶ約束をして、一旦4人は解散した。

いっぱい遊んだからお洋服は砂まみれだし、走り回って転んでしまったからズボンもちよつとだけ汚れてしまった。

お母さんに怒られるかも、とお家の前に着いてからちよつとだけヒ

ヒカ리는怖かったけど、ただいまーってドアを開けてお家に入ってきた
ヒカ리의様子を見たお母さんは、何故かニコニコ笑っておかえりなさ
いってだけ返した。

あれ？ってヒカ리는首を傾げたけれど、怒られないと分かって玄関
を上がる。

お洋服は脱いでベランダに置いておきなさい、って言われたから言
われた通りにして、新しいお洋服に着替えた。

少し遅れてただいまー、って兄の声がする。

おかえりなさい、ってお母さんの代わりにお出迎えすると、兄はヒ
カリなんか目じやないぐらいドロドロに汚れていた。

一体どうしたらそんなに汚れちゃうの、ってぐらい汚れていたの
で、お母さんが怒っていた。

ヒカ리가服を汚しても怒らなかつたのに。

何度言っても聞かない息子と、ようやくお洋服を汚してくれた娘で
は雲泥の差であると、のちに母が語ってくれたが、今はまた今度。

お昼ご飯は焼きそばだった。

大人1人前では多すぎる焼きそばは、いつもなら兄と半分こしても
まだ余るぐらいヒカ리는食が細い。

だが今日はいっぱいいっぱい遊んだせいか、お母さんとお兄ちゃん
が目を丸くするぐらい、勢いよく焼きそばを掻っ込んでいた。

上に乗っかっている目玉焼きを潰して、焼きそばと混ぜるようにぐ
ちやぐちやして、お皿を持って焼きそばを頬張る。

いっぱい遊んでお腹が空いたから、いつもなら残してしまうヒカリ
は全部平らげた。

ごちそうさまでしたをして、少し休んだら歯を磨いて、また公園へ
と向かう。

次は何をして遊ぼうかな、とわくわくしながら公園に行ったら、増
えていた。

姉弟と男の子の傍に男の子とよく似た黒髪のお兄さんがいた。

黒髪のお兄さんは、お姉さんや兄と同じぐらに見える。

いつもなら知らない人を見ると委縮してしまうヒカリだが、姉弟と男の子が一緒にいるせいかな、不思議と怖いと感じなかった。

それどころか、あのお兄さんは誰だろう？と言ううちよつとわくわくとした気持ちが湧いてきた。

お砂場セツトをカラコロと鳴らしながら、ヒカリは4人に近付いていく。

弟くんは、すぐに気づいてくれた。両手を思いっきり振って、全身でアピールしている。

それによりお姉さんとお兄さん、それから男の子も気づいてヒカリの方を見る。

男の子がヒカリを指さしながら何かを話していた。

合流したヒカリに、こんにちは、つてお兄さんが柔らかく微笑みかけてくれた。

こんにちは、つて頭を下げる。

仲良くなつた子なんだよつて紹介してたの、つて男の子がにこにこしながら教えてくれた。

そっか、つてヒカリもにこにこする。

何をして遊ぼうか、つてヒカリが言う前に、お兄さんがサッカーボールを差し出してくれた。

何をして遊ぶのか、満場一致で決まった。

何かに呼ばれた気がしたヒカリは、目を覚ましてベッドを抜け出す。

暗いお部屋は兄と共同で使っているため、灯りをつければ兄は間違はなく目を覚ましてしまうだろう。

だから怖いけど、ヒカリは部屋のヒカリをつけずに出入口まで移動する。

窓から差し込む優しい月の光は満月で、灯りをつけずとも十分光源としての役割を果たしていた。

背伸びをして、ドアレバーに手をかける。

かちやり、とラッチが音を立てて、部屋の扉が開いた。

ぎい、蝶番が鳴る。扉の隙間から顔を覗かせたヒカリは、窓から差し込む青白い月の光で灯されたリビングを見渡した。

見慣れたはずのリビングに、人工的な白い光がないだけで知らないところに見えた。

ごくり、と息を飲んだヒカリは、首から下げていた宝物のホイッスルを手に持つ。

震える手で持ち上げ、口に啜える。

ぴい、と弱い音を鳴らせば勇気づけられた気がして、ヒカリは意を決して部屋を出た。

お父さんの書斎は、リビングを通って子ども部屋の真正面にある。とたとたとたと、と小さくて短い脚を一生懸命動かして、早足でお父さんの書斎に向かった。

かちやり、開ける。お父さんはまだ帰ってきていない。

なのにパソコンの電源がついており、ディスプレイが眩しく光っていた。

誘われるようなフラフラとした足取りで、お父さんのパソコンに近づく。

ヒカリの家族は、お父さん以外パソコンを使えないから、パソコンが使えるはずがないのだが、この時のヒカリはそれを知らない。

じ、とパソコンのディスプレイを見つめる。

ディスプレイの向こうから、何かが出てこようとしているのを感じたヒカリは、口に啜っていたホイッスルを離れた。

「ヒカリ、何やってるんだ？」

兄が背後から声をかけてきたのは、その時だった。

「……………たまご」

そうヒカリが眩いたことが合図だったように、硬いはずのディスプレイが水飴のように柔らかくなって、何か飛び出してくる。

ヒカリは、それに手を伸ばす。

そして…………。

朝早くから出かけるお母さんの声を遠くから聞きながら、兄は眠い目を擦って起き上がる。

二段ベッドの上からはしごで降りて、ヒカ리를起こそうとしたが、ヒカリが腕に抱いている「ソレ」を見てギョツと目を見開いた。

急いでお母さんと呼んだが、もう既にお母さんは外に出ていて、兄の声はガシャンという扉が閉まる音で遮られてしまった。

だから兄は仕方なく眠っているヒカ리를叩き起こす。

ヒカリの腕に抱かれていたのは、卵だった。

お母さんの代わりに朝ご飯の用意をしていた兄は、ヒカリが後生大事に抱いている卵をどうするのかと尋ねる。

宝物のホイッスルを返事代わりに吹いた。

兄は兄らしく、卵の処遇をどうするのかと悩んでいたが、ヒカリにはどうでもよかった。

だって感じるのだ、卵の温かさを。

彼女の身体程もある大きな卵を抱きかかえて、そつと顔を添えてみれば、ドクン、ドクンって命の音が聞こえてくるのだ。

だから大きな目玉焼きにするなんてでもない。

兄が揶揄いながら言うから、ヒカリは笛を吹いて抗議した。

ご飯を食べようとした時に、卵を落としてしまうという失態を犯したのだが、パソコンから出てきたただけあってその卵は本当に不思議な卵だった。

落とした卵を拾おうとして、椅子から降りたヒカリだったが、卵はまるで意志を持っているかのようにころころと転がって、彼女から逃げていく。

ころころ、ころころ。

テーブルの下を潜ったり、自分の分の朝食を作り終えた兄が椅子を片そうとして持って行く前を横切ったりして、卵は逃げていく。

慌てて後を追ったヒカリと兄が目にしたのは、文字通り自立した卵がぱきぱきと割れて、飛び出してきた黒いプニプニした、見たことのない生き物だった。

ぺちーん、と兄の顔に激突した黒いのは、びよんびよんと角にぶつかっては跳ね返って暴れる。

咄嗟に抱え込もうとしたヒカリだったが、黒いのは猛スピードでベッドの下に潜り込んでしまった。

兄が慌てふためく中、ヒカリはベッドの下を覗き込んで様子を伺う。

低く唸って威嚇していた。警戒しているのか、怖がっているのか。いずれにしても落ち着かせてやらなければならない。

が、それよりも先に兄が、首から下げていたゴーグルを外して、黒いのに投げつけてしまった。

そんなことをすれば余計に怖がるのに。

案の定、黒いのはビツクリして、大量の泡を吐いた。

うわ、って兄は壁際まで後ずさって逃げる。

でもヒカリは、逃げなかった。

ばちばち、と吐かれた泡が弾けて消える。

び、

ホイッスルを鳴らした。

ぷくぷく、

それに合わせて、黒いのが泡を吹く。

び、

ぷくぷく、

ホイッスルを吹く度に、黒いのがそれに合わせて泡を吹く。

楽しくって、面白くって、ヒカリは何度も笛を吹いて遊んだ。

たくさんの泡が、開いた窓から風に乗って空へ逃げていく。

団地に住んでいるたくさんの子どもが、それを目撃していた。

お腹が空いていたのか、ヒカリが持ってきたお菓子をすべて平らげてしまった黒いのを、兄は未だに訝し気に見ている。

どうしてかな、こんなにプニプニしてて可愛いのに。

この子は、彼女の「子ども」だ。

彼女が大切に抱きしめて温めた卵から産まれた、彼女の「子

ども”なのだ。

可愛がるのは当然だし、兄が変な名前を付けようとするのを止めるのも、“親”としての義務である。

ヒカリは、黒いのを母のように愛おしげに抱きしめた。

電話が鳴る。兄がはーいって言いながら電話を取るために離れていく。

しばらく黒いのを抱きしめていたヒカリだったが、ふと思いついた。

——みんなにも見せたい。

そうと決まれば、ヒカリは黒いのを抱き上げて、玄関へと向かった。電話を切った兄は、ヒカリが目の前を横切って玄関に向かって行つたから、流石に止める。

でもヒカリの頭の中はお友達に見せたいという思いでいっぱいだった。

兄の手を振りほどいて、玄関に座って脇に黒いのを置き、靴を履く。もう一度抱き上げて、ヒカリは玄関の扉を開けて、出て行つた。少し遅れて、兄も家を出る。

日頃からお母さんに言いつけられていることを護るために、玄関の鍵をきちんと閉めた。

エレベーターで追いついたので、一緒に乗る。

ちーん、と音がして1階について、ロビーを出て行つた。

目指すは、公園である。

てってって、と足取り軽く公園へ向かうヒカリに、兄は怪訝な表情を向ける。

いつもなら兄と一緒に公園へ行くか、お部屋で絵本を読んだりお絵かきしたりしているのに、この2日間は公園で遊んでいる。

それも、食の細くていつもご飯を残してしまうがご飯を残さないどころか、お替りを要求するほど。

引っ込み思案だった娘に変わりように、両親は喜んでいたけれど、一番身近な存在である兄は首を傾げていた。

いっつもいっつも兄の後ばかりくつついてた妹が、2日連続で兄に

は目もくれずに公園で遊ぶようになったのだ。

大人は察することができても、まだ7歳の兄には難しいことだった。

そもそも引つ込み思案なヒカリは、自ら友達の輪に入ろうとする積極性もない。

だから、公園に着いたヒカリが辺りを見渡し、両手をぶんぶん振り回している男の子を見つけて、真っ直ぐかけて行ったのを見た時は仰天してしまった。

ぼさぼさの髪の毛の男の子がたーつと駆けつけて、ヒカリをぎゅつと抱きしめたもんだから、兄は悲鳴を上げて慌てて引き剥がした。

きよとんとするぼさぼさの髪の毛の男の子と、抗議の目を向けるヒカリ。

遅れてやってきた姉らしき女の子が、ごめんねってたどたどしく謝ってきた。

続いて、黒髪の兄弟らしき男の子2人、兄と同年の方は眼鏡をかけている。

見かけない子ばかりだったけれど、兄弟の方は近所に住んでいるらしい。

学校が違うから、知らないのも無理はなかった。

姉弟の方は全く知らない言葉を2人して喋っていたので、兄は目を白黒させた。

幸い兄弟の兄の方がちよつとだけ姉弟の言葉が分かるらしく、通訳してもらおうとアメリカという国に住んでいるらしい。

同じ日本人だけど、女の子の方は生まれてすぐアメリカに渡り、男の子の方はアメリカで生まれたから、日本語は全く分からないそう

だ。

ふーん、つて兄は4人を見渡す。
ヒカリと弟達は、ヒカリが連れてきた黒いのに夢中できやあきやあとはしゃいでいた。

兄は、目をぱちぱちさせた。

あんなに引つ込み思案で、誰かと喋るのが苦手だったヒカリが、あ

んなにも楽しそうに笑っている。

この2日間、ヒカリが1人で公園に向かっていたのは、恐らく彼らと遊ぶためだろう。

何だよ、それなら俺も誘えよ、と兄がむくれるのも致し方なし。

だって眼鏡の男の子が持っているのは、兄も持っているものだ。

白と黒で彩られた、サッカーボール。

君もサッカーするの、って聞けば、君も？って返ってきた。

だからヒカリと弟達が黒いのに夢中になっている間、兄と眼鏡の男の子と女の子はサッカーボールを追いかけることにした。

それなあと、って男の子に尋ねられたけれど、彼女は何と答えていいものか考えあぐねる。

黒いのは、卵から産まれた。その卵は、パソコンから出てきた。

名前は知らない。犬でも猫でも鳥でもない、凶鑑でも見たことがなかった。

何だろうね、ってみんなでじつと見下ろしていると、黄色くてつぶらな目をぱちぱちさせながら黒いのが3人を見上げる。

でもその内考えることに飽きた3人は、まあいつかって3人と1匹で遊び始める。

3人で代わる代わる抱っこして触り心地を楽しんだり、一緒にブランコに乗ったり、滑り台を滑ったり、かくれんぼや鬼ごっこもしたし、黒いのが吐き出した泡を追いかけてたりもした。

その日は、満月だった。

不思議なこと、怪奇なことが起こる日は、必ずと言っていいほど満月の夜であることが多いと言われている。

昼間に兄と、兄弟と、姉弟と、黒いものといっぱい遊んだヒカリだったが、異変を感じて目を覚ました。

沢山沢山遊んだから、今日は熟睡すると思っていたけれど、ヒカリは元々眠りが浅い子で、僅かな物音で目を覚ましてしまうのだ。

だから隣にいるコロモンが呻きながら震えていることに気づくのも、必然であった。

コロモンは、昨日の夜にパソコンから出てきた卵から産まれた、あの黒い子が変化した姿だ。

最初は黒くて黄色い目で、牡丹餅みたいな形をしていたのに、みんなと遊んでいたらいつの間にか姿が変わっていたのだ。

大きさは黒いのこの2個分ぐらいで、色はピンクになっていて、頭に長いひらひらしたのがついていて、おめめはウサギさんみたいに真っ赤になっていた。

ヒカリもみんなも驚いてはいたけれど、でもピンク色のは黒いものと変わらず人懐こくて、遊んで遊んでつて全身を使って表現してきたので、なあんだつてみんな安心して遊びを再開させた。

コロモン、という名前が判明したのは少し後だった。

それまでうんとすんとも喋らなかつたのに、みんなと遊んでいたら突然喋れるようになって、みんなとってもびっくりしたものだ。

それでも、姿形が変わつても、言葉が喋れるようになって、ヒカリが瞬してあげた卵から産まれた、ヒカリの子であることに変わりはない。

いっぱい遊んだヒカリ達は、また明日遊ぼうねって約束して夕方の鐘を合図にお家に帰る。

帰宅して、手を洗つてうがいをして、部屋に入った直後にお母さんが帰ってきたときは、お兄ちゃんが変な動きをしていたけれど、ヒカリは一切気にせずにピンク色を抱きしめていっぱいお喋りした。

明日も同じ日が来ると信じて疑っていなかった小さな心に、亀裂が生じたのは数時間後。

夕飯のカレーを食べて、お母さんの目を盗んで兄と2人でこっそりカレーをコロモンにも食べさせてあげた。

美味しい美味しい、ってコロモンは嬉しそうに笑っていた。

お顔がカレー塗れになってしまったから、お兄ちゃんと2人でコロモンを隠しながらお風呂に連れて行って、みんなでシャワーを浴びた。

肩まで浸かって湯船に溜まったお湯に入った時、熱すぎたのかコロモンが悲鳴を上げそうになっていたけれど、兄がそれを阻止した。

身体を拭いてやって、またこっそり部屋に連れて行き、トランプとかカルタをやって時間を潰す。

お母さんにもう寝なさいって促され、2人と1匹はベッドに入った。

またあした、おやすみなさい。

その時のコロモンは何も変わった様子ではなかったのに、一体どうしたのだろう。

顔色が悪い。ピンク色の身体に青いのが混ざって、おかしな色になっている。

パニックに陥りかけたヒカりは、慌てて2段ベッドの上にいる兄をホイッスルで叩き起こした。

しかし兄にも心当たりや原因が分からないらしく、様子のおかしくなったコロモンをただ啞然と見つめているだけだった。

その直後である。

ばきばき、めり、という音を立てて、突然ベッドが沈んだ。

かと思えばヒカリーの布団が大きく膨れ上がり、兄が寝ている上のベッドも突き破ったのである。

布団がずり落ちる。

中から現れたのは、コロモンではなかった。

卵から産まれた直後の黒いのもなかった。

それは、兄が持っている恐竜の凶鑑に出てきた、ティラノサウルスによく似ていた。

黄色い身体に緑の目、鋭く伸びた爪が3本ずつ。

ベッドを破壊して現れた黄色い恐竜に、兄は言葉を失っていた。

酔った父親の声を聞きつけた兄が、慌てて扉のレバーを押さえつけるが、ヒカりはそれどころではなかった。

のっそりと動きだしたコロモンが、どすどすという音を立てて窓辺に歩み寄る。

外に出たがっているのだろうと悟ったヒカりは、窓を開けてコロモ

ンの背に飛び乗った。

兄の声が背後から聞こえてきたけれど、ヒカリはそれに答えず、窓から飛び降りたコロモンの背中に、必死にしがみつく。

車をペしゃんこにする勢いで着地したコロモンは、高所から飛び降りたことも感じさせずに、けろりとした様子で歩き出した。

人工的な明かりに照らされた夜の道は、昼間とは全く違う顔を見せており、ヒカリは息を飲む。

しかしコロモンはその歩みを止めず、何処へ行くでもなく進んでいくから、ヒカリは何も言わない。

お母さんと一緒に買い物に行く道、お兄ちゃんとお散歩した遊歩道、みんなと遊んだ公園までの並木道。

コロモンは背中に乗っているヒカリを気にも留めず、ただただ本能がままに歩いている。

「……コロモン、もうおはなししてくれないの」

黙り込んでしまったコロモンは、もうヒカリを見てくれない。

どうして、このこはひかりのこなの。ひかりのこどもなの。

ひかりがあたためてうまれてきた、だいじなこなの。

やがてヒカリは、ヒカリとコロモンの決定的な違いを見せつけられることになる。

所詮、コロモンはコロモンであり、ヒカリの子ではないのだ。

理性を失った獣に成り果てたコロモンは、最初に自販機を破壊した。

その鋭い爪で貫いて、力を誇示するようにぶっ壊してしまった。

自販機から転がり落ちるジュース。ヒカリは慌てて拾い上げようとするが、同世代の中でも小柄なヒカリでは缶ジュース1本すら持て余してしまう。

どうしよう、どうしよう、おまわりさんにおこられちゃう。

そんなことを思いながら缶ジュースを拾おうとしているヒカリの心情など露知らず、自販機に勝ったコロモンは興味を無くしてさっさと先に行ってしまった。

啞然としながらも、まだコロモンとは心が繋がっていると信じてい

たヒカリは、その後をついていく。

次に興味を示したのは、車だった。

深夜とは言え、我が家に向かうための車は数台ほど行きかっている。

車を通るたびに、コロモンはきよろきよると辺りを伺うかのように車を追いかけていた。

そして、ヒカリは見ってしまう。

直前まで近づいてきたトラックに気づかなかったコロモンだったが、大きく跳躍してそれを避けたかと思うと、大きな口をがぱっと開けて、トラックに向かって炎を吐き出したのだ。

ぎよつとするヒカリ。

炎はトラックには当たらず、電話ボックスに辺り爆発、黒煙を上げながら炎上した。

響き渡る破壊音。

ヒカリは悟ってしまう。

圧倒的な力を持ったコロモンは、その気になればヒカリのことだつてペしやんこにしてしまうことぐらい、簡単なのだと。

ヒカリのお部屋から飛び降りて、車をクツションにしたとは言え無傷だったことから、コロモンはただの生き物じゃないことは何となく分かっていた。

でもあんなに仲の良かったコロモンが、みんなと一緒に楽しそうに遊んでいたコロモンが、こんな風になってしまうことをヒカリは信じたくなかったのだ。

ただただ本能がままに炎を吐き、頑丈なはずの電話ボックスを一瞬で破壊してしまうほどの強大な力を持つコロモンは、最早ヒカリの子ではない。

炎上する電話ボックスから目を離せないヒカリは、しかしそれでもコロモンから逃げようとしなかった。

「コロモン、ねえ、コロモン、止めてー！ねえってば、ねえー！」

ヒカリの懇願は、コロモンの耳には届かない。

空を飛んでいる飛行機に気づいたコロモンは、炎を吐いた後それを

追いかけていく。

「コロモン……もうお家帰ろう……う？」

コロモンには届かない。

ヒカリの必死の声など、困惑した言葉など。

獣に成り果てた生物には、もう言葉は通用しない。

響き渡る爆音と轟音。

眩い光の筋が走る。

大きな鳥が、コロモンを傷つけようとする。

何度呼びかけても答えてくれないコロモンを、しかしそれでもヒカリは信じて呼びかけ続けた。

迎えに来た兄を振りほどき、コロモンと一緒に帰ろうとする妹を、兄は苦しそうな表情で見下ろすしかない。

走った電流が、ヒカリ達がいる歩道橋を破壊する。

砂埃と瓦礫が、ヒカリ達に襲い掛かる。

兄の悲鳴。瓦礫の向こうでヒカリを呼ぶ誰かの声が聞こえた気がした。

その光景を、大勢の子どもが見ていた。

異変を聞きつけて、察知した子ども達は、ある子は自室の窓やベランダから、ある子はリビングの窓から、そしてある子は親の目を盗んで玄関を出た廊下から。

1人の子どもが、異常を知る。

あらゆる電子機器がノイズを走らせながら、狂っていくのを。

電気が点滅したり、電子レンジが故障したり、でたらめな番号から電話がかかってきたり。

しかしこれほどまでに異常をきたしているというのに、大人達は誰1人として気づかない。

あ、という声を漏らしたのは、誰だっただろう。

舞い上がる砂埃で目を開けていられず、吸い込んだ息に混じった粉塵で喉をやられ、兄とヒカリは激しく咳き込んだ。

しかし、ガラガラという瓦礫の音がしたにも関わらず、兄妹の身体はペしやんこになっていない。

そろそろ顔を上げると、人工的な明かりを遮っていた、不自然に大きな影が出来ていた。

コロモンが、また大きくなっていたのだ。

今度のもっともつと、周りのマンションぐらいの、大きな恐竜に。まるで自分達を護るように覆いかぶさっていたのだ。

それはまるで、友達同士の抱擁のようで、兄は真つすぐコロモンを見つめる。

コロモンが初めてコロモンになった時、コロモンは頭についているひらひらとした触手を使ってヒカリの顔に飛びついて、しがみついていたのである。

兄は、最初はヒカ리를食べようとしたのだと勘違いして投げ捨ててしまったが、後にそれがコロモンの挨拶なのだを知った。

友達の印だと。

言葉を喋れるようになったコロモンが、パートから帰ってきたお母さんが夕飯の準備をしている時に教えてくれたのである。

理性を失い、ヒカリと兄のことなど忘れてしまったかのようなだったコロモンは、ちゃんと覚えていたのだ。

じわじわと、兄の心の奥から何かか沸き上がってくる。

身体に乗っている瓦礫を振り落としながら、大きくなったコロモンはヒカリ達を踏みつぶさないように慎重に立ち上がる。

空を突き破って生まれてきた、鸚鵡のような巨大な鳥に向かって、大きく咆哮した後青白い炎を吐いた。

飛び立とうとした大きな鸚鵡の翼が、炎に貫かれてもがれてしま

う。

無数の抜け落ちた羽根が舞い、鸚鵡はその場に倒れ込んだ。

突進していくコロモンは、立ち上がるうとしていた鸚鵡をヘルメツトのような角で突き上げるように押す。

コンクリートの地面を抉りながら踏ん張る鸚鵡。

停車している車が、歩道を護るガードレールが、一瞬にして破壊されていく。

「いや、いや、いや！コロモン、ねえコロモン！かえろう！おうちかえろうよお!!」

ヒカリは、とうとう泣きだしてしまった。

もうあのコロモンはヒカリの知っているコロモンじゃない。

みんなと一緒に遊んでいたコロモンじゃない。

ヒカリの知っている風景を、日常をぶち壊す、あの大きな鸚鵡と一緒だ。

泣くことで、ヒカリはコロモンを拒絶してしまった。

それでもヒカリは、コロモンの名を呼び続けた。

戦いは激しさを増すばかりだった。

周りを巻き込み、破壊しながらコロモンは鸚鵡と戦い、やがて蹂躪される。

大きな音を立てながら、兄とヒカリの前でぐったりと倒れこむ。

必死に手を伸ばすヒカリを、兄は羽交い絞めにして止めた。

倒れているコロモンに、鸚鵡が容赦なく歩み寄ってくる。

兄も必死にコロモンに呼びかけた。

しかしコロモンは目を覚まさない。

他の子ども達も、固唾を飲んで見守っている。

「コロモン！起きてよ！ねえ、コロモン!!」

兄は呼びかける。コロモンは起きない。

兄の脳内には、みんなで一緒に駆け回ったコロモンの姿。

兄の目から涙が溢れた時、弱弱い笛の音が聞こえた。

それは、ヒカリがいつも首から下げているホイッスルだった。

泣きながら、しゃくりあげながら笛を吹き、ヒカリはコロモンを呼び起こそうと必死だった。

コロモンが生まれた時、コロモンは怖がってベッドの下に逃げ込んだ。

ヒカリはそんなコロモンに、怖くないよ、大丈夫だよってという意味

を込めてホイッスルを吹いた。

やがて警戒心を解いたコロモンはベッドの下から這い出てきて、ヒカリの腕に抱っこされたのだ。

それを思い出したヒカリは、懸命にホイッスルを吹く。

しかし泣いているのとしゃくりあげているせいで、上手く吹けない。

先程吸い込んでしまった粉塵で喉が渇き、また弱弱しく咳き込んだ。

もう1度吹こうとしたら、それを兄に取り上げられた。

耳元で鳴り響く、甲高い笛の音。

マンシヨンに反響して彼方此方に飛んでいく。

この笛の音を、一体何人の子どもが聞いただろう。

限界まで吸い込んだ息を、限界まで吐き出せば、コロモンは目を見開いて飛び起きた。

大きく咆哮し、息を吸い、そして――

「……撃て！」

青白い光が、辺り一帯を包み込む。

熱風がヒカリ達に襲い掛かり、2人は、そして子ども達は咄嗟に目を閉じた。

ほんの、一瞬の出来事だった。

気づいた時には、全てが終わっていた。

そこにコロモンの姿はなく、そしてあの鸚鵡の姿もなく、ただマンシヨンに阻まれた地平線の向こうが白み始め、朝を迎えようとしていた。

それでも、ヒカリ達の周りの惨状が、あれは夢ではないと突きつけていた。

挟れたコンクリートと、無残に破壊された歩道橋。

電流が走ったせいで黒焦げになっている街路樹。

「……コロモン」

取り残された兄妹は、その惨状を目に焼き付けるかのように、しばらくその場から動けなかった。

その日、賢と兄は不思議な出来事と邂逅することになる。

絵本を読んだり絵を描いたりとお家の中で遊んで過ごすのが好きな賢が外で遊ぼうと思ったのは、本当に偶然である。

見かけない女の子と姉弟と意気投合し、次の日も遊ぶ約束をした賢はお母さんがお仕事に出かけたのを見送ってから、ブレスレットを右の手首につけて、お砂場セットとお家の鍵を持って玄関に向かう。

このブレスレットはお母さんにおねだりして買ってもらった、細い革が2本、ねじり合って小さな水晶の玉がついているものだ。

賢はこれがお気に入りで、保育園に行く時以外はずーっと身に付けている大切なもの。

今日は春休みの真っ最中。お休みの日はいつもお兄ちゃんとお遊ぶ賢が、珍しくお外に出ようとしているから、不思議に思ったお兄ちゃんが何処に行くのって尋ねてきた。

お砂場セットを持っているのだから公園に行くことぐらい、頭のいいお兄ちゃんならすぐに分かるはずなのに、賢が滅多にお外に出ないせいで混乱してしまったようだ。

新しいお友達が出来た昨日は、お兄ちゃんは塾があったためにいなかったのである。

お兄ちゃんにもお話ししようと思っていたのだが、その日は塾でテストがあつたらしく、いつもより帰りが遅かつたために賢は先に眠ってしまった。

お兄ちゃんとお話出来ないまま翌日を迎えた賢は、朝食をかきこむのももどかしく、口をもごもごさせながら遊びに行く用意をした。

行儀の悪いことをしている賢を、しかしお母さんはこらって咎める

こともせず、賢が持ってきたお皿を受け取って流し台でお皿を洗う。

そんなお母さんをしかめっ面で見やるお兄ちゃんに気づくことなく、賢は口の中のことを飲み込んで、洗面台に向かい、顔を洗ったり歯を磨いたりして準備をした。

お皿を洗い終わったお母さんが出かける頃、賢も準備を終えてお砂場セットを持って玄関に向かったところを、お兄ちゃんに見つかったのである。

そこでようやく、賢は新しく出来たお友達のことをお兄ちゃんにお話しして、お兄ちゃんが呼び止める間もなく玄関を飛び出していった。

午前中にたっぷり遊んだ賢は、お腹をいっぱい減らして帰ってくる。

お帰り、つて置いてけぼりにされたお兄ちゃんが笑顔で出迎えてくれた。

お昼ご飯を用意して待っていてくれたお兄ちゃんは、出がけに賢が言っていた新しいお友達について尋ねる。

置いてけぼりにしてしまったことなんかすっかり忘れていた賢は、楽しそうにお友達についてお兄ちゃんに教えてあげる。

女の子が2人と、男の子が1人。賢と同じ年の男の子と女の子で、もう1人の女の子はお兄ちゃんと同じくらいだそうだ。

昨日会ったばかりで、3人のことはよく知らないけれど、一緒に遊んでいてとても楽しかったから、今日も一緒に遊ぶ約束をしたのだそう。

お昼ご飯を食べたらまた遊ぶ約束をしたらしく、賢は急いでご飯をかきこんでいる。

慌ててご飯をかきこんだから、喉に詰まらせかけた賢をお兄ちゃんが苦笑しながら賢の背中を軽く叩いてあげた。

水で無理やり飲みこんで、でも賢は学習せずにまた急いでかきこむ。

「……僕も行っていいかい？」

ご飯を食べ終わり、出かける準備をしていた賢に、お兄ちゃんが遠慮がちに言った。

賢は、驚いた。

お兄ちゃんはいつも賢がすることをニコニコしながら見守ってくれるけれど、一緒に何かやろうと言いつことはなかった。

そういうのは大体賢からお誘いしていたのだ。

お兄ちゃんから混ぜてつて言うことは全くと言っていいほどなかったのだけれど、賢はお兄ちゃんが一緒に遊ぼうつてくれたのが嬉しくて、素直に頷く。

お兄ちゃんはパツと嬉しそうに笑つて、自分の部屋へいそいそと戻り、誕生日に買つてもらつたサッカーボールを持つて賢と一緒に玄関を飛び出していった。

何だこれ。

それが賢の、そしてその場にいた全員の感想だろう。

賢がお友達になつたホイッスルを首から下げた女の子と、知らない言葉話す姉弟と仲良くなつて1日近く。

たつた1日近くしか出会つていないのに、長年の親友のように仲睦まじく遊んでいた彼らは、ホイッスルを首から下げた女の子が持つてきた「あるもの」に釘付けになっている。

「それ」は、黒かつた。

「それ」は、小さかつた。

お兄ちゃんと一緒にやつてきた女の子の両腕にすっぽりと収まるほどの大きさで、黄色い円らな目をぱちぱちさせながら賢やお兄ちゃん、他のお友達をきよときよと見上げている。

なあにこれ、つて聞いたら、女の子はぱぱのぱそんからでてきたの、つて教えてくれた。

曰く、昨日の夜にパパのパソコンから出てきた卵を温めて、朝になつたら孵つたのだそうだ。

何が生まれるのかな、ひよこさんかな、卵が大きいから大きなひよ

こさんかな、つてちよつとだけわくわくしていたら、全然思ってもいなかったものが生まれてきて、女の子はびっくりしたそうだ。

びっくりはしたけれど、ちっこくて可愛いし、全然怖くないから、お友達に見せたいと思って女の子はこの不思議な生き物を連れてきたそうだ。

確かに、と賢はその不思議な生き物をまじまじと見やりながら思う。

女の子の両腕にすっぽりと収まるほど小さいその不思議な生き物は、何処からどう見ても怖いとは思えなかった。

黄色い円らな目をぱちぱちさせながら賢達を見上げてくる黒いを見て、すっかり警戒心が解けた賢達は、早速一緒に遊び始める。

お兄ちゃん達は何やらお話していたけれど、賢はそれよりもみんなで遊ぶ方が大事だった。

「ブランコ、のろうー!」

賢達以外、誰もいない公園は遊具を独り占めしてもズルいって言葉は聞こえてこないし、お兄ちゃんもこらって言ってこない。

滅多に出かけない公園に3日連続で遊びに来た賢のテンションは爆上がりだ。

興奮で顔を赤くさせながら、女の子と男の子と一緒にブランコに行く。

女の子は黒いのを膝に乗せて座り、賢と男の子は立ってブランコを漕ぐ。

きやあきやあとはしやく声が公園だけでなく、周りの集合住宅街に反射して響き渡る。

お話が終わったらしいお兄ちゃん達が、今日も持ってきたサッカーボールを追いかけているのが見えた。

ぷくぷく　ぷくぷく

女の子が漕いでいるブランコが前の方に行ったとき、黒いのは口（見えないが）からシャボン玉をぷくぷくと吐き出した。

それを見た賢は、そう言えば公園に行く前に、何処からかシャボン玉が風に乗って飛んできたのが窓から見えたが、もしかしてあのシャ

ボン玉はこの黒いのが出した奴だったのかなあ、と思った。

その内男の子がブランコに飽きて、滑り台を指さしながら知らない言葉を発する。

賢と女の子はゆっくりとブランコを止めて、ぴよんと飛び降りると先に走って行った男の子の後を追う。

そして10分ぐらい、滑り台を延々と登っては滑るを繰り返した。

お兄ちゃん達はまだサッカーボールを蹴っている。

滑り台にも飽きた賢達は、黒いのが吐き出すシャボン玉を追いかけ始めた。

手を伸ばすとふわりと逃げていき、気づかぬうちに耳元に寄ってきてパチンと弾ける音でびっくりしてひっくり返る。

そしてまた黒いのがシャボン玉をぶくぶく吐いて、賢達は追いかける。

「ほんとうに、このこなんなんだろうね？」

シャボン玉を吐き出すことに夢中になっていた黒いの見下ろして、改めて賢は口にする。

男の子と女の子も、黒いのに周りに群がるように賢と一緒にしゃがんで、黒いのをじっと見つめた。

黒いのはシャボン玉を吐き出すのが楽しいようで、それに気づかない。

つん、と男の子が躊躇も遠慮もなく黒いのをつつく。

ぷによ、と程よい弾力の感触が男の子の指先に伝わった。

じーっと黒いのを見つめた後、男の子は何か言う。言葉は分からなかったが、ジェスチャーさえあれば何とかなるものである。

男の子が黒いのを指さしてから両手を差し出しているので、恐らく黒いのを抱っこしたいのだろう。

女の子は小さく頷いて、黒いのを差し出す。

男の子は黒いのを受け取り、ぎゅっと抱きしめた。弾力のある身体がむぎゅっと潰される。

ぷきゅ、と黒いのが鳴いた気がして、賢もその柔らかそうな身体を抱きしめたくて、男の子におずおずと両手を差し伸べる。

賢と賢の手を交互に見た後、察した！といった表情を浮かべて賢に黒いのを手渡した。

受け取った賢の手に、黒いのの感触が伝わってくる。

見た目はつるつるしていそうだった黒いのだが、ちよつとだけほわほわとした毛が生えていた。

賢の好奇心が刺激される。本当に、この生き物は何だろう？何処から来たのだろうか？

お兄ちゃんが持つている図鑑でも見たことのない生き物に、賢の心はわくわくしていた。

もしかしてまだ誰も発見していない、“しんしゅ”の生き物かもしれない。

お父さんやお母さんに教えたら何て言うかな、と思いつながらも、賢はそろそろ返してほしそうな女の子に黒いのを返した。

そうやって黒いのをぐるぐると互いに回していくこと、数分後。

「…………え？」

最初に異変を察知したのは、賢である。

3人で輪になって、順番に黒いのを手渡すのが面白くてどんどん回していたら、きゆうにずしつとした重みを感じたのである。

ぱつちりとした赤い目と、目が合った。

へ？と間拔けな声を上げてしまったのは、致し方ないと言えよう。つい先ほどまで、男の子の手の中で黒くちんまりとしていたはずの

生き物は、賢の手の中で突然その姿を変えた。

“それ”は、ピンク色だった。

“それ”は、大きかった。

それをそう認識した瞬間、急に手のひらを重たく感じて、賢はつんのめりそうになった。

その前に賢の手のひらから黒かったピンク色がコロコロと転がっていったから、幸い転ばずに済んだ。

「…………何これ？」

「…………さあ？」

賢が宙に眩いた言葉を拾って、女の子が答えてくれたけれど無意味であった。

何故なら黒いのの正体も、誰も分かっていなかったのに、いつの間にか姿形が変わってしまったピンク色のことなんか、誰も分かるはずがない。

どうしよう？どうしよう？って3人で顔を見合わせていたら、ピンク色がぴよこんぴよこんとその場を跳ねながら、何かを訴えてきた気がした。

きよとんと見下ろしていると、ピンク色は頭のひらひらを女の子の腕に巻きつけてぐいぐいと引っ張っている。

もしかしてもっと遊びたいのかしらん？って思った3人は、サッカーボールを蹴って遊んでいるお兄ちゃん達の下へ行って、混ぜてもらうことにした。

黒いのがピンクに変わったことは、当然驚いていた。

夕暮れ時の鐘の音が鳴り響いている中、賢とお兄ちゃんはただいまって小さな声で玄関の扉を開ける。

お帰りなさい、って言うお母さんの優しい声が返ってきたので、賢とお兄ちゃんの肩が強張った。

急いで玄関を閉めてリビングに向かうと、お母さんが台所で夕飯を作っている。

もう一度、ただいまと気まずそうに言えば、もうすぐ夕飯が出来るから手を洗っていらっしやい、っていう言葉が返ってきた。

表情は、笑顔。機嫌はよさそうだと判断した賢とお兄ちゃんは、小さく返事をして洗面所に向かった。

賢は、お家が好きじゃない。

いや、お家が好きではないというよりも、家の中に漂う淀んだ空気が嫌いと言った方がいいだろう。

料理上手でお仕事もバリバリ熟すお母さん、もうすぐ昇進するかもしれないお父さん、勉強が好きでテストでいつも100点を取ってい

るお兄ちゃん、いつもニコニコしている賢の4人家族は、ご近所さんでも色んな意味で目立っていた。

というのも、夜になると毎晩のように騒がしいのだ。

騒がしいというのは、賑やかといういい意味ではなく、騒音という意味でだ。

毎晩のように女性のヒステリックな怒鳴り声が出て、男性がそれを宥めるうちにどんどんヒートアップしていくのである。

夜中ということで流石に夫婦も配慮はしているが、少なくとも両隣は毎晩のように引き起こされている喧嘩に辟易している様子だった。

何度か管理人から注意を受けてはいるものの、なかなか改善される様子がなく、両隣はそろそろお引越しを検討しているという話は、誰も知らない。

ご飯を食べている間の会話は、ないに等しい。

お母さんの教育方針という奴で、ご飯を食べている時はそちらに集中すべきだと言うことで、テレビもつけていなかった。

つけても、ニュース番組ばかりで、バラエティーとかアニメとかもお母さんが家にいる間は殆ど見たことがなかった。

日曜日の朝にやっている、戦隊ものの特撮ヒーローでさえ、賢は見ることがない。

そのせいで幼稚園でもお友達の話について行けなくて、1人でぼつんといることが多いのだけれど、幼稚園の先生もお母さんも、賢にお友達がいないという上辺だけを見て心配している。

「(馳走様」

張りのない声で、お兄ちゃんが食事を終える。

お皿はお母さんが片付けるからそのままにして、お兄ちゃんは部屋へ戻る。

お母さんは何も言わずに、ニコニコしながらお兄ちゃんにお勉強頑張ってねとだけ言った。

お母さんはいつもそうだ。賢はむくれる。

お母さんはいつも、お兄ちゃんが勉強に集中できるような環境作りをしている。

例えばお食事。身体にいいとされるものは何でも買って、野菜中心の食事。

お部屋のお片付けやお洋服を畳むのだって全部お母さんがやってくれている。

賢には、自分で出来ることは自分でしなさいって言うのに。

ごちそうさま、って賢も両手を合わせて自分の食器を台所に持って行き、軽く洗ってからお兄ちゃんと共用している子ども部屋へ向かう賢の背中に、お兄ちゃんの邪魔しないでねとだけお母さんは声をかけた。

態と返事をしないで部屋に入る。

お兄ちゃんは、勉強机に向かっておらず、2段ベッドの下の段にぼんやりと座っていた。

賢がそつと扉を閉めた音は、静まり返っている子ども部屋に、嫌に響いてお兄ちゃんは身体を大袈裟に震わせて我に返る。

「……お兄ちゃん？大丈夫？」

「……大丈夫だよ。心配かけたみたいでごめんね」

お兄ちゃんは時々、心が何処かへ飛んで行ったみたいにぼーっとしている時がある。

そして微かな物音を立てたり、賢が声をかけると、びくつと身体を震わせて何処かへ飛んで行っていた心が戻ってくるのである。

賢は洋服をぎゅつと握りしめた後、とてとてという音がしそうな足取りでお兄ちゃんに歩み寄った。

「……お兄ちゃん」

「……大丈夫だよ、賢。さて、母さんに内緒でこっそり遊んじやおうか」

何して遊ぶ？って聞いてくるお兄ちゃんの顔が何だかとおつても悲しそうで、賢は何と言えばいいか分からなかった。

静かな、夜だった。

煌めく星々は静まり返る街を照らすには光が小さすぎて、夜空に消

えている。

車が通り過ぎる音すら聞こえず、賢は尿意を催して目を覚ました。まだ眠いと訴える身体を徐に起こし、同じベッドで寝ていたお兄ちゃんを叩き起こす。

おにいちゃん、といれ。寝ぼけて籠った声でそう言えば、お兄ちゃんは枕元に置いておいた眼鏡を手探りで探し当て、引っかける。

大きな欠伸をしながら、お兄ちゃんはベッドから降りて賢の手を引いてトイレに付き合ってくれた。

子ども部屋から廊下に通じる扉のノブに手をかけたお兄ちゃんは、音を立てないようにそうつと、ゆっくりとノブを下ろした。

かちやり、という音が嫌に響いて兄弟はぎくりと肩を震わせたけれど、それ以外の音が何も聞こえなかったので、小さく胸を撫で下ろして廊下に出た。

真つ暗な廊下。

電気をつけると目が冴えてしまうからと、お兄ちゃんは電気をつけずに窓から漏れる街の灯りを頼りにトイレへと向かった。

賢は、夜の廊下が好きではなかった。

概ね小さい子どもと言うのは、夜の時間帯は家ではあっても好きではないものだが、賢のそれは恐らく他の子どもの比ではなかったと思う。

何も無いはずのところをじーっと見ていたかと思うと、泣きそうになりながらお兄ちゃんやお母さんにしがみつくことは日常茶飯事だったし、特に大きな音がしたわけでもないのに耳を塞いだり、不可解な行動をよくしていた。

最初は不思議に思っていたお兄ちゃんやお母さんだったが、そんなことをしよつちゆうしていればいつしか日常の一部となり、誰も気にしなくなった。

トイレを済ませて手をしっかりと洗い、お兄ちゃんもトイレをして一緒に戻ろうとした時だった。

どおおおおおおおおおおおん!!

下から突き上げるような爆音と振動。

ぎや、と賢は小さな悲鳴を上げてお兄ちゃんにしがみつく。

地震のような振動が2秒ほど。

お兄ちゃんは賢を抱きしめてその場にしゃがむ。

揺れが収まり、お兄ちゃんはそろそろ顔を上げて辺りを見渡す。

頭を抱えてうずくまっていた賢が見上げたお兄ちゃんは、眉を顰め

て不思議そうな顔をしていた。

立ち上がって賢から離れていき、リビングの窓へ一直線に走っていく。

賢も待ってと小さな声でお兄ちゃんに呼びかけながら後を追った。

ぺたぺたぺた。

程よい弾力のあるものが硬いものにくっついて離れていくような音を立てながら、賢はよちよち走る。

がらり、お兄ちゃんが窓を開けた。

びよお、と冷たいビル風が窓から屋内に入り込んでくる。

兄弟が下を覗き込むにはまだ高い塀に、お兄ちゃんはリビングから椅子を引きずってベランダに出した。

よじ登り、塀の下を覗き込んでいる。

お兄ちゃんは、何をしているのだろう。

お兄ちゃんと同じ景色を見たい賢は、お兄ちゃんが立っている椅子に駆け寄ってよじ登り、お兄ちゃんの前に割り込むように立って、そして兄弟を見た。

街灯に照らされた夜の街に浮かんでいたのは、オレンジ色のティラノサウルスと、大きな鸚鵡の怪獣。

オレンジ色のティラノサウルスは大きく咆哮を上げながら鸚鵡に突進していくのが見える。

周囲のお部屋から賢やお兄ちゃんと同じぐらいの子ども達が、同じようにベランダに出たり、窓から覗き込んだりしてオレンジ色のティラノサウルスと大きな鸚鵡の戦いを見守っている。

派手な爆音と轟音が辺りに鳴り響いているにも関わらず、大人達は

起きる気配が全くなく、戦いを見守っている子ども達を邪魔する者は誰もいない。

お兄ちゃんはいつの間にか持つてきていた双眼鏡で、その戦いを見ていた。

僕も見たい、つてお兄ちゃんに双眼鏡を借りて、覗いてみる。

オレンジ色のティラノサウルスが倒れたところが見えた。

ああ、つて近所から誰かの悲痛な声が聞こえる。

大きな鸚鵡が、頭の触覚からバリバリという電気の糸を出しているのが見える。

オレンジ色のティラノサウルスは起き上がる気配がない。

危ない、と何処かのマンションから、誰かが叫んだ。

ピー

……

ホイッスルの音がマンションの壁に反響し、夜空に吸い込まれるように余韻を残して消えていく。

一瞬の間を置いて、オレンジ色のティラノサウルスが目を覚まし、大きな咆哮を上げる。

……あ、

「賢!？」

お兄ちゃんの腕の中から飛び出した賢は、制止するお兄ちゃんの声も聞かずにリビングを真っすぐ突っ切って行き、靴をつっかけるように履いて玄関を出て行った。

ぎよつとなったお兄ちゃんは少し遅れて後を追ってきたが、賢は気にしている余裕はない。

エレベーターを待つ時間ももどかしく、賢は階段を駆け下りていく。

背後でお兄ちゃんが待ちなさい、つて止めてくるけれど、賢は止まらない。

それよりも早く「あそこ」に行かなくてはと、賢の心が訴えていた。

途中で何度か転びそうになったけれど、賢の心が「早くあそこに行け」と急かしている。

あのオレンジ色のテイラノサウルスがいる場所は分かっていたから、何処をどう行けばあそこに辿り着くのか頭に地図として入っていた。

早く行かなければ、「あそこ」に行かなければ。

走って、走って、走って、後少しで辿り着くというところで、白い光がそこを中心に広がっていくのが見えた。

あまりの眩さに、賢はうわっと短い悲鳴を上げながら立ち止まって、腕で顔を庇う。

すぐ後ろから追いかけていたお兄ちゃんも同様に。

数分という、思っていた以上に長い時間、光が辺りを包んでいた。

閉じた瞼の向こうで光が収まっていくのを感じた賢は、そうっと目を開ける。

そして賢の視界いっぱい広がった光景は、信じがたいものであった。

この道はあまり使ったことがなかったけれど、それでも自分が住んでいる街が「破壊されている様を目の当たりにする」のは、かなりショッキングだった。

道路の上を横切る歩道橋は見るも無残な状態で、コンクリートは彼方此方抉れている。

歩道に植えられた樹々は薙ぎ倒され、周りのマンションの一部にも破壊された跡が見られた。

「これは……一体……」

後から追いついてきたお兄ちゃんもこの光景を目撃して、啞然としていた。

「コロモオンー！」

女の子の声がある。

この数日間で仲良くなった、首からホイッスルを下げた女の子だ。

やっぱりそうだ、と賢は思った。

オレンジのテイラノサウルスは、女の子が昨日連れてきた黒いのであり、ピンク色の不思議な生き物の、コロモンだ。

ホイッスルが鳴り響いた後に、大きく咆哮したテイラノサウルスを見た瞬間、賢の脳裏に浮かんだのは一緒に遊んだあの生き物だったのである。

双眼鏡越しに見たあのオレンジのテイラノサウルスとは、とても似ても似つかないものだったはずなのに、どうしてか賢は「コロモン」だと思った。

ぼく、コロモン。

一緒に遊んでいる最中に、突然言葉を発した、あのコロモン。

その証拠に、友達になった女の子が懸命にコロモンの名前を叫んでいる。

その近くに、お兄ちゃんと同じ年の、女の子のお兄ちゃんがいた。

「あ……」

その光景をぼんやりと眺めていたら、後ろの方から声がして反射的に振り返る。

ゴーグルをかけた男の子と、そのお姉ちゃんだった。

どうやら賢とお兄ちゃんと同じように、この光景を目撃してここに来たらしい。

男の子と目が合う。……ああ、あの子も分かったんだ、と賢は思った。

あの子も、あのオレンジ色のテイラノサウルスが、昨日一緒に遊んだコロモンだって、分かったんだ。

だからここに来たんだ。

でもどうしよう？賢は考える。

女の子に、何て声をかけようか。

コロモンの名前をずっと呼んでいた女の子は、やがて声をすぼめていき、めそめそと泣きだしたのだ。

女の子のお兄ちゃんが、泣きだした女の子を慰めるように傍に寄る。

賢も何か言おうとして口を開き、手を伸ばしたが後ろからポンと肩を叩かれた。

お兄ちゃんだ。

見上げると、お兄ちゃんはゆっくりと首を横に振った。

何も言うべきではない、とお兄ちゃんの目が語っていた。

一瞬迷った賢だったが、ゴーグルをかけた男の子もお姉ちゃんに連れられて名残惜しそうにしながら立ち去っていくのを見た。

これ以上ここにいても、何も出来ない。

それは賢も分かっていたので、治の手に引かれながら自分達のマンションに帰るのだった。

滅多にテレビがつかないはずの賢のお家で、この数日間ニュース番組がつけっぱなしになっている。

保育園がお休みの春休み、ずっとお家にいる賢はお母さんがお仕事の時はこつそりアニメを見ていたのだけれど、この数日間お母さんはずっとお仕事を休んでニュース番組にかじりついている。

そのニュース番組は、ずっと同じ内容を繰り返していた。

数日前に賢とお兄ちゃん、他の沢山の子ども達が目撃した、大きな怪獣達の戦いのせいで壊れてしまった街。

テレビには壊れた街の様子が様々な角度や場所から映し出されている。

賢が実際に見た通りの光景が、テレビの中に映し出されているけれど、どの番組も同じことしか言っていない。

民間人を狙った無差別爆弾テロだと、ニュースのコメンテーターはずっと言っているけれど、誰一人としてあの大きな怪獣のことは言っていないかった。

あれだけ大きな怪獣が暴れまわって、沢山の子ども達がそれを目撃していたのに、ニュースの人達は誰もそのことを言わないのだ。

お兄ちゃんにそう言ったら、賢はお兄ちゃんは口元に人差し指を持って行って賢に口止めをした。

大人は、真実や事実ほど信じないものなのだ。

例えば子ども達が実際に目撃したものだとしても、大きな怪獣が暴れていたなんて突拍子もないものを、大人が信じるはずがない。

況してや、目撃者は子どもだ。

毎日のように空想や創作物語を頭の中で作り上げては、その物語に入り込んでいる子ども達の言葉なんか、大人が信じるわけがないのだ。

お兄ちゃんは寂しそうにそう言った。

だから賢も、言わないことにした。

数日前の夜に、お母さんとお父さんが気づかないうちにあの現場に行つて、こつそりお家に帰つてきたから、お母さん達にはバレていないから都合がいい。

でも……。

「賢ちゃん？何処に行くの？」

「……ちよつと、そこまで」

「そう？気を付けてね」

数日前に爆弾テロがあつて、他の家庭は外出を自粛したり、お兄ちゃんには危ないから外に出ないでねつて口を酸っぱくして心配しているのに、賢には何も言わない。

賢は小さく溜息を吐いて玄関を出る。

向かうのは、みんなで遊んだあの公園。

それは本当に偶然だったのか、必然だったのか、運命だったのかは分からない。

ただ数日間は大人しくお家にいたのに、今日になって公園に行こうと思つたのは何故だったのか。

何か胸騒ぎのようなものを感じた賢は、真つすぐ公園に向かつて行く。

息を切らしながら、公園まで走ればやっぱりいた。

首からホイッスルを下げた女の子と、ゴーグルをかけた男の子、そしてその男の子のお姉ちゃん。

初めて出会つた砂場に座り込んでいる女の子の隣に、男の子は座つ

ており、お姉ちゃんの方は男の子とは女の子を挟んで反対側で両ひざに手をつけて女の子を見下ろしている。

賢は、駆け足で3人に駆け寄った。

声をかけると、姉弟が気づいて振り返る。

女の子の方は、遅れてゆっくりと顔を向けた。

その目は、泣きはらした後があった。

……コロモンはみつからなかったのだと、何処かへ行ってしまったのだと、賢は悟った。

「ひつく……ひつく……」

女の子はしゃくりあげている。

何と声をかけていいものか、賢は何度か口を開きかけては閉じるということを繰り返していた。

困り果てた賢は、姉弟の方を見やる。

するとお姉さんの方が、片言の言葉で賢に話し始めた。

自分達は明日、アメリカに帰らなければならないと。

お兄ちゃんが少しだけ英語が分かるから、教えてもらった。

この姉弟は普段アメリカに住んでいて、今回は伯父さんの家に遊びに来たらしいのだ。

本当ならもう少し滞在する予定だったのだが、街が破壊されてしまったので予定を切り上げて明日帰ることになったと。

今日はお別れを言いに来たのだと。

それを聞いた女の子は弾かれたように男の子を見やる。

その表情には、絶望の色が浮かんでいた。

コロモンがいなくなってしまう、その上出来たばかりの友達まで明日帰ってしまう。

女の子は、声を上げて泣いた。

いやだ、かえらないで、そばにいて、ずっといっしょにいて。

その言葉をずっと繰り返しながら、女の子は男の子にしがみついている。

日本語が分からない男の子は、女の子が何を言っているのか分からなくてお姉ちゃんと賢を交互に見やっていた。

賢も困っている。

どうしたら女の子を慰められるのか分からなくて、何と云つていいのかわからなくて。

お姉ちゃんの方も困惑していた。

沈黙が続く。数分間の静寂。

やがて男の子は、何か意を決したような表情を浮かべると、しがみついてくる女の子を離れた。

突き放されたと感じたらしい女の子が、縋るように男の子を見やると、男の子は頭に着けていたゴーグルを外すと女の子にずっと突き出した。

キョトンとなる女の子とお姉ちゃんと賢。

男の子は構わずゴーグルを女の子に突き出す。

まるで受け取れとでも言いたげに。

ゴーグルと男の子を交互に見やった女の子は、やがておずおずとそのゴーグルを受け取った。

それが正解だと言うように、男の子は満足気に頷く。

そして、男の子はこう言った。

『

だがその言葉は、遠い異国の地の言葉で、女の子も賢も分からなかった。

お姉ちゃんが代わりに言ってくれた。

「やくそく」

「やくそく」

お姉ちゃんは言った。

次に逢う時までには持つていてほしいと男の子は言いたいのだ。

また逢うための、約束。

男の子が渡したゴーグルを両手で持つて、女の子はやっと笑顔を見せってくれた。

よかった、と賢が安堵すると、今度は女の子が動く。

首からかけていたホイッスルを取つて、ゴーグルをくれた男の子に渡した。

ゴーグルを預かるから、自分のホイッスルを預かっていてと。

言葉はなくとも、異国の言葉同士だとしても、その想いは伝わり男の子はホイッスルを受け取った。

また逢うための、約束。

2人を見守っていた賢の視界に、ちゃり、という音を立てて何かが映り込んだ。

賢の手のひらほどの大きさの、ペンダント。

目をぱちぱちさせながらそれを見て、反射的に手を差し出すとぽとりと落とされた。

お姉ちゃんが、自分の首から下げていたペンダントを賢に渡したのだと気づいたのは、数秒後。

約束の印、とお姉ちゃんは笑った。

自分にも、また逢うための約束をしてくれたのだと、賢は悟った。

賢も何かを上げなければと、慌ててポケットを探った。

何かないか、何か……右の手首の感触に気づく。

お母さんにねだって買ってもらった、二本の細い革がねじり合っていて、小さな水晶の玉がついたブレスレット。

何処に行くにもつけていた、大切なもの。

賢はペンダントを首から下げると、手首からブレスレットを外し、お姉ちゃんに手渡した。

ありがとう、ってお姉ちゃんは受け取った。

賢の手首に合わせてつけられていたブレスレットだが、特殊な結び方をしているから大きさは自由に変えられる。

紐をずらして、自分の手首に合うように調節してから、お姉ちゃんは手首に着けた。

男の子も首にホイッスルを下げて、女の子は頭にゴーグルを着けて。

——また逢う日まで

それが、4人の合言葉になった。

その数か月後、賢とお兄ちゃんは離ればなれにされることになる。

そして、約束の日

ダイスケエ、と今にも泣きそうな声色と表情で、ブイモンはパートナーの子どもを見下ろしている。

布団に寝かされているパートナーの大輔は、ブイモンの感情とは裏腹に穏やかな顔で眠っていた。

両隣には、同じように寝かされているヒカリと賢がいる。

ヒカリの布団の中でプロットモンは一緒に寝ており、治は賢の手を握って離さない。

『心配することないっぴ。直に目を覚ますっぴ。今は色んな事が起こりすぎて、キャパオーバーして心に負担がかかっちゃっただけだっぴよ』

深く息を吸えば、何処か懐かしい香りで肺がいつぱいになる木造の部屋に、障子で抑えられた太陽の光が差し込んでいる。

あれから丸一日経ったな、とぼんやり思いながら最年少達を見ていた治の耳に、ガラリと引き戸が開かれた音と甲高い声が届いた。

パタパタパタ、と頭部の翼をはためかせながら入ってきたのは、ピコデビモンのように丸いフォルムのデジモンだった。

ピコデビモンと違うのは、体毛がピンク色で頭部から生えた翼は白、天使のような羽であることと、足だけでなく手も生えているところだろう。

このデジモンの名前はピッコロモンと言い、エテモンの魔の手から逃がっている最中に匿ってくれた、味方のデジモンの1体である。

ピコデビモンが連絡を取ってくれたデジモンとは別のデジモンで、太一が怪我をし、最年少の子ども達共々倒れてしまったことを聞いて、自分の隠れ家で休むことを提案してくれた。

太一は今、別室で治療を受けている。

太一が倒れ、最年少が3人倒れた。

エテモンに追われているというのに、まだエテモンを倒すための力をつけていないというのに、これは手痛いロスだ。

最年少3人は特に目立った外傷などはなく、また身体が小さいことから他の上級生達が背負って行けばいいだろう、ということは話し合わずともまとまったのだが、問題は太一だ。

小さい3人と違ってそれなりに体格がある上に、意識のない人間を運ぶのは大人でも大変だと言われているのに、まだ小学生の子ども達では太一を背負うのも一苦労だろう。

ガブモンが、俺がガルルモンになって運んであげる、と提案してくれたけれど、いっどこでエテモンの目が光っているか分からないし、何かあった時のためにも体力は温存しておかなければならない。

こうして考えている間にも、エテモンの魔の手は刻々と迫っている。

大丈夫ですよ、と悩んでいる子ども達に、一筋の希望が差し込んだ。ピコデビモンである。先ほど連絡を取ってくれた、匿ってくれたデジモンに事情を説明したところ、5分で駆けつけると言ってくれたらしい。

短いようで長い5分という時間に、子ども達は安堵するやらその間にエテモンが来たりしないかと不安になるやらで、やきもきしながらその場で待機していた。

砂漠の向こうから水飛沫のように砂をかき分けて走ってきたのは、大きな豪華客船。

5分もしないうちにやってきた豪華客船は、崩れたコロッセオの前で停泊し、唖然としている子ども達の前にスルスルと舷梯が降ろされる。

客船の上から顔を覗かせ、大丈夫かと声をかけてきたのはファイル島でも見かけたヌメモンであった。

暗くてジメジメしているところに住みついているはずのヌメモンが、何故砂漠の乾燥地域に、そして豪華客船に？

砂漠を泳ぐ豪華客船と、乾燥地域で平然としているヌメモンという

コンボで唾然としている子ども達を急かしてくれたのは、ピコデビモンとパートナーデジモン達であった。

舷梯を使わず。パタパタとヌメモンのところまで行き、何かを話していた。

パートナー達に後押しされたこともあり、子ども達は舷梯を伝って船に乗った。

全員が乗ったのを確認し、ヌメモンが舷梯を仕舞ったのと同時に、豪華客船は回れ右をして元来た方角へと全速力で引き返していった。とりあえずは難を逃れた、ということ。胸を撫で下ろした子ども達ではあったが、まだ油断は禁物だ。

この砂漠一帯にエテモンのダークケーブルが張り巡らされていることに変わりはないし、頭を打った太一は応急処置しかしていないのだ。

豪華客船に乗せてもらっているとはいえ、いつエテモンが襲ってくるか分からないし、ここで戦闘になってしまえば太一達の身が危ない。

何処かもつと安全に休めるところはないか、とピコデビモンに聞くとしたら、既に手配済みだと言う。

みんなで船に乗り込んで、子ども達が太一達を客室に運び込んでいる間に、別のデジモンと連絡を取ってくれたのだ。

それがピッコロモンである。

完全体で、魔法の力を操ることが出来るピッコロモンは、砂漠のエリアと隣接しているエリアに結界を張り、身を隠しているらしい。

そこならばエテモンにもそう簡単には見つからないだろうし、太一達をゆっくりと休ませることが出来るのだが、あまり悠長に時間をかけてはられない。

そうしている間にも世界は少しずつ闇で侵食されているのだ。

紋章を見つけ、力を蓄えなければならぬ上に、太一がいつ目を覚ますか分からない。

そこで子ども達は、二手に分かれることにした。

太一達が目を覚ますまでに紋章をできるだけ集めるチームと、太一達を看病するチームだ。

と言っても人数の約半分が倒れてしまっているため、人数の関係で看病をするチームにいるのは治だけである。

『さてと……オサム、お前も少し休むっぴ』

「え……でも……」

賢の手を握り、ぼんやりと見下ろしている治を見かねたピッコロモンが、手に持っている杖で治の肩をポンと叩く。

現実に取り戻された治は一瞬肩をびくりと震わせ我に返つたのだが、賢を放つて何処かへ行くのは気が引けるようで、賢から目を離せずにいる。

ぽか、と槍で頭を叩かれた。

『喝っ！未熟者！』

「いった……い！」

『そんな顔色が悪い状態で看病したところで、倒れるのは目に見えてるっぴ！ケンはおサムの弟なんデショ？おサムまで倒れたらケンが悲しむっぴ！』

「……………」

『……………どうしても言うのなら、休まなくてもいいっぴ。その代わりにあの子達が倒れたことを、もう1回教えてほしいっぴ』

「……はい、分かりました」

居住まいを直し、治は言われた通りにピッコロモンに話す。

ここに来た時も軽く事情を話したのだが、敵のせいで太一が頭部を強打したことと、最年少組が倒れたと言うことしか言っていなかったのだ。

『うーむ、なるほどっぴ……』

コロモンの村でエテモンに襲われたところから、治は話を始める。

エテモンによってコロモンの村を壊滅され、逃げ込んだ洞窟の奥で太一の紋章である太陽の象徴、勇気の紋章を手に入れたこと。

コロモンの村から遠く離れた場所まで一気にワープし、ピコデビモンの案内によってコロッセオに隠された平等の象徴である誠実の紋

章を見つけたこと。

そしてそのコロツセオにて、奇妙なデジモンと出会ったこと。

その奇妙なデジモンが、敵意に満ち溢れたグレイモンを連れてきて、太一とグレイモンが戦ったこと。

そしてその戦いで……太一のグレイモンがスカルグレイモンに進化し、子ども達やパートナーデジモン達を恐怖のどん底に陥れたこと。

『ダイスケ達が倒れたのはいつだっぴ？』

「スカルグレイモンが暴れて、暫くした後です。スカルグレイモンが気絶していた太一を護るように抱えていたのを、ブイモンが……あ」

『どうしたっぴ？』

「あ、えっと……」

頭の中でまとめながらピッコロモンに話していた時に、治はやつと思ひ出す。

スカルグレイモンから太一を奪取するさい、謎の光が飛んできてブイモンを包み込み進化をしたのだが、その進化がおかしかったのだそうだ。

ファイル島で1度だけ見た、ブイモンが大きく逞しくなったような翼が生えた姿、エクスブイモンではなく、炎色の衣を纏った竜人のような姿をしていたらしいのである。

子ども達はもちろん、同じデジモンであるパートナー達も知らない姿だったようだ。

「絵心がないから図にすることは出来ないんですが……ブイモンがそのまま大きくなって、エクスブイモンよりもスリムで、鎧みたいのを纏っていて……ああ、そうだ」

勇気の紋章が、背中に彫り込まれていたと、治は言った。

ピッコロモンは息を飲む。が、それをおくびにも出さずに、ゆつくりと息を吐いて平常を装った。

「ピッコロモンは、知ってますか？そのデジモンのこと」

『……いや、ワタシも知らないっぴ。不思議だっぴねえ、知らないデジモンに進化するなんて』

「ピッコロモンも知らないんですか……ゲンナイさんなら知ってるかな？」

その治の呟きに、ピッコロモンは何も答えずスルーして続きを促した。

大輔達の様子がおかしくなったのは、その暫く後だ。

破壊の限りを尽くすスカルグレイモンに対して、大輔達がコロモンの名を連呼したのである。

確かにスカルグレイモンはアグモンで、そのアグモンはコロモンから進化する。

だがコロモンとして接していた時間は短く、子ども達にとってはアグモンの方がずっと身近な存在だ。

だからスカルグレイモンをアグモンと呼ぶのならともかく、最年少の3人はアグモンではなくコロモンと呼んでいた。

ヒカリに至ってはまるで錯乱したかのように叫んでいた。

もうやめて、お家を壊さないで、お家帰ろうよ。

頭を抱えながら、ヒカリはずっとそう叫んでいた。

そんなヒカリに呼応するように、大輔と賢もスカルグレイモンをずっとコロモンと呼んでいた。

……ねえ、

「ピッコロモンは……知っているんですか？僕達の知らない、何かを」
す、と。治はピッコロモンを真っ直ぐ見つめる。

その目は何処までも澄んでおり、真剣な表情は深い森で深呼吸をする古の樹々を思い起こさせる。

「ファイル島に来る前に、ゲンナイさんから色々と聞きました。この世界のこと、デジモンのこと、僕らがここに来たことも……」

治は目を閉じる。

「知っているのなら、教えてください」

どうしたものか、ピッコロモンは真っ直ぐその目を見つめ返した。

すぐに返事を返さなかったのは、ピッコロモンの失態だったかもしれない。

何のことだとも返しておけば、あとは何とでも誤魔化せたであろう

うに、ピッコロモンはそれをせずに治と見つめ合ってしまった。

……言うべきなのだろうか。ピッコロモンは唇を噛みしめる。

知っている、と言えば知っているのだが、それを自分の口から言っているのかどうか迷っていた。

本来なら、ゲンナイの口から子ども達に伝えられるはずの「事実」。

この子は相当賢いということを目で見抜いたピッコロモンは、はどうしたものかとこっそり溜息を吐いたのだった。

あの日の公園に、大輔とヒカリと賢は佇んでいた。

今も十分小さい3人だが、目の前で楽しそうにはしゃぎまわって、跳ねるコロモンを追いかけているもつと小さい自分達の幻影が映し出されている。

今の今まで忘れていた、何物にも代えがたいはずだった優しい記憶に、大輔はそつと俯いた。

「これ、ヒカリちゃんにくれたものだったんだね」

コロモンを追いかける小さな大輔は、ホイッスルを首から下げておらず、代わりに今のヒカリが首から下げているゴーグルを頭に着けていた。

「何で、忘れてたんだろ」

大切だったのに。あんなにあんなに大切だったのに。

お父さんに買ってもらったゴーグルを泣いていた女の子に渡すほどに、強く誓ったはずなのに。

必ずまた逢おうって。アメリカに帰らなければならなかった、大人の庇護がなければ何処かへ出かけることも出来ないほどに小さかった大輔が出来た、唯一の約束。

コロモンを失い、自分を失いかけ、泣きながら縋ってきた少女を取り戻すために、あのゴーグルを渡したのに。

「……私も、そうだよ。大輔くんにももらったこのゴーグル、絶対絶対忘

れないって思っていたのに、今日まですっかり忘れてた。大輔くんがくれたゴーグルは、私を勇気づけてくれる大切なものになってたのに、誰からもらったのか全然思い出せなくて……」

「……僕も……何で忘れてたのかな。この懐中時計、大輔くんのお姉さんがくれたものだったのに……」

ヒカリと賢も、それぞれが大切に思っていないながらもどうやって手に入れたのかを忘れてしまっていたアイテムを手に取りながら、自嘲気味に笑う。

今の今まで忘れていた、大切な記憶。

たった今、思い出した。

自分達は、あの日に既に出会っていたのだと。

僅かな時間だったけれど、確かに友達だったのだと。

幻影のヒカリがコロモンを抱きしめ、幻影の大輔がコロモンを追いかけて、幻影の賢がコロモンと笑って。

楽しかったあの日々は、確かに存在していた。

それなのにどうして、自分達は忘れてしまっていたのだろう。

《それについては、ワタクシの方からお話いたしましょう》

突如として聞こえてきた声に、しんみりしていた空気に包まれていた大輔達はぎよつとなった。

遊んでいる幻影の自分達を尻目に、今の聞き慣れない声は誰だと全員で辺りを見回す。

大輔達を置いてけぼりにするように、声は語り出した。

《そう、全てはここから始まったのです。その日、1つの命が何かに導かれるように、世界の狭間を通って異なる世界へ渡ってしまった。それだけでも当時の管理者達は慌てたというのに、その命が芽吹いてしまった》

背景が中心に吸い込まれるように、場面が変わる。そこには、ヒカリと太一がいた。

お母さんが出かけた後、まだ幼い太一がお母さんの代わりに、ヒカリに朝食を作ってあげているところだった。

お兄ちゃんが作ってくれる朝食を椅子に座りながら待っているヒ

カリの腕には、大きな卵が抱かれている。

大輔達はその大きな卵に見覚えがあった。

大輔とヒカリの視線が、2人の間にいる賢に向けられる。

いや、正確には賢の胸のあたりだ。

賢がその腕にしつかりと抱いている、まだ芽吹く気配を見せない卵、デジたまである。

幻影のヒカリと賢が抱いているデジたまは、模様こそ違うもの大きさや形状などは全く同じだった。

《芽吹いた命は急速に進化を遂げ、管理者達の予想を遥かに超えたものへと変貌した》

場面がまた変わる。崩れた瓦礫、抉れたコンクリート、なぎ倒された街路樹、煙が上がっている周囲のマンション。

そこに佇む、大きな影はオレンジ色のテイラノサウルスと、それを見上げている太一とヒカリ。

少し離れたところに、治と賢が、大輔とお姉ちゃんがいた。

《そしてこの光景を見てしまった多くの子ども達》

流れていく景色に映ったのは、この付近に住んでいた子ども達。

ベランダから、窓から、沢山の子ども達がこの光景を目撃していたのだ。

その中には、今一緒に冒険している上級生達の姿もあり、大輔達は息を飲む。

あの場所に、自分達だけじゃない。空や光子郎、ミミ、そして丈もいたのだ。

みんなが見ていたのだ、共有していたのだ。

あの日の惨劇を。

《事態を重く見た管理者達は、子ども達からこの日の光景を真っ白なペンキで上書きすることを選びました。異なる世界の存在を、人間達に知られるわけにはいかなかった。真実に近いことほど、人間の大人は信じないことなど知らずに》

場面は再びあの公園である。

黒く小さなデジモンを追いかける幼き日の大輔とヒカリと賢の幻

影が、笑い声をあげていた。

《むしろ子ども達に真っ白いペンキを浴びせてしまったことで、逆に大人達は不審がることになってしまいました。人間は人間であって、デジモン達とは異なる存在であることを、当時の管理者達は知らなかった。デジモン達のように上書きすればいいと》

人は忘れるものである。

それが如何なる理由であろうとも、大切な記憶であろうとも、時とともに風化していく遺跡のように。

そうしなければ生きていけないからだ。

コンピュータのように、データ容量を増やして新たな保存場所を作るなど、人には出来ないのだ。

《出逢ってはいけなかった出逢い、あつてはならぬことが起きた。だから管理者は貴方方から記憶を消した。貴方方の大切な思い出とともに》

クツクツと、声は笑う。

黒く小さなデジモンはボタモンという、コロモンが進化する前の赤ちゃんデジモンだ。

ヒカリはコロモンの村で見たことがあり、その時にデジモン達に名前を教えてもらったので知っている。

大輔と賢はその特別行動をしていたから、ボタモンの名前は知らなかった。

それでも、全てを思い出した今なら分かる。

あの時に出逢った、あの黒くて小さいデジモンだったのだ。

幻影の大輔とヒカリと賢が3人で向かい合って、ボタモンを代わりばんこで抱っこしている。

賢の手に渡った時、ボタモンがコロモンに進化した。

次の日も遊ぼうねって約束してお家に帰った後、コロモンは意思疎通が出来るようになる。

惨劇が起きたのは、その日の夜だった。

《これには管理者達も驚いておりました。通常デジモンというのは、長い時間をかけて次の世代へと進化を果たすもの。それがこの世界

での常識でありました。しかしその常識を、貴女が覆してしまった》
ヒカリのベッドの中で一緒に寝ていたコロモンは、やがてアグモンへと進化する。

大輔達が知っているアグモンよりもずっと大きく、つい数時間前までできていたはずの意思疎通が出来なくなってしまうていた。

ヒカリが呼びかける声など気にも留めず、アグモンはただ本能がままに動き回った後、更にグレイモンへと進化した。

《大輔、ヒカリ、賢》

声が真剣な色を帯びる。

《これこそが、貴方方が選ばれた理由ですよ》

「……………え？」

声は、続ける。

《ボタモンがコロモンへ、コロモンがアグモンへ、そしてアグモンがグレイモンへ進化できたのは、偶然などではありません。デジモン達は長い時間をかけて力を蓄えなければ進化することはできない》
でもあのコロモンはそれが出来た。何故か？

《大輔、貴方はこれまで何度、姿なき者の姿をその目で見ましたか？》
ぎゅ、と大輔は茶色いズボンを掴むように両手の拳を握りしめる。

そんなの、何度もあった。自分にしか見えない存在。母にも父にも、そして姉にさえ見えない、不思議な存在。

《ヒカリ、貴女はこれまで何度、声なき者の声を聞きましたか？》

ヒカリは不安そうに、上を見上げた。

声がするたびに、ヒカリは兄にしがみついたし、耳を塞いだ。

何処にも誰もいないのに、ヒカリを呼ぶ声が怖くて。

《そして賢、貴方はこれまで何度、気配なき者の気配を感じ取りましたか？》

賢は俯く。不安がる賢のことを、誰も気づいてくれなかったのに、この声はそのことに気づいてくれていた。

誰も賢のことは見てくれないって思っていたのに。

《貴方方のその異質な力。誰もが持っているながら、その命が果てるまでに気づかれることのない力。貴方方はちゃんとその気配を、声を、

そして姿を受け入れた。誰もが目を見て背けるものを、貴方方はきちんと受け止めて、真つ直ぐ向き合った》
すう、と。

地面から細い線が一本ずつ、くるくると回りながら現れた。

回転を緩めながら次々と現れ、徐々に姿が形作られていくそれは、深々と頭を下げていた。

足、脚、腰、胴体、腕や肩、そして頭部。

そうして完成された形に、大輔達は目を見開いた。

白い歪なストライプが入ったスーツを着ているそれは、脚と腕、それから腰は異様に細長く、広い肩幅はまるで子どもが描いた絵のようだった。

そして何より特徴的だったのは、その頭部である。

下げた頭が上がったそこにあるべき顔はなく、大輔達が抱えるのもやっとなほどであろう、デジたまよりも大きなガラス玉がシルクハットを被っていたのである。

手袋をつけたその手にはドクロの飾りがついた杖を持っていた。

《我々はそれを“命”と呼んだ。 “感情”と呼んだ。 “意思”と呼んだ。ヒカリが抱いた卵から“命”が生まれ、大輔と触れ合ったことで“感情”が生まれ、賢と向き合ったことで“意思”が生まれた》

シルクハットのツバを支えるように掴みながら、ガラスの頭部を持ったそれは芝居がかった口調で話を続ける。

《しかし本来なら平等に生まれなければならないはずのものが、“命”とばかり触れ合ってしまったために、バランスが崩れてしまった》
哀しい口調に変わる。

《同じことがありましたね、コロモン達の村で。貴女が触れあっていたパグモンの様子がおかしくなったことが》

様子がおかしくなったパグモンは、ヒカリがその腕に抱いて触れ合っていた個体だ。

幼年期のパグモンが成長期を通り越して成熟期である黒いガルルモンに進化したのは、そういうことだったのだ。

表情のないはずのガラスの頭部が、じつと自分を見下ろしているよ

うな気がしたヒカリは……悟った。

「……私の、せい？」

“命”を司る女の子は、悟るのだ。

ボタモンがコロモンになったのも、アグモンになって言葉を失ってしまったのも、グレイモンになって沢山のものを壊してしまったのも、全部ヒカリという女の子のせいなのだって。

ヒカリがパソコンのディスプレイに表示された、声なき声を発していた卵に気づかなければ、デジたまが現世に現れることはきつとなかった。

それが叶わなかったとしても、不気味がつて距離を置いていたらデジたまから命が孵ることは、きつとなかった。

ヒカリの両目から、大粒の涙が零れる。

「……ごめん、なさい。ごめんなさい、ごめんなさい……！」

あの出逢いさえなければ、ヒカリは大輔達と楽しく遊んだという思い出だけで終わったはずだった。

大輔が帰る日に、また逢おうねって約束して、その約束が霞む霧の向こうに置いてけぼりにされて薄れゆくはずだった。

小学1年で大輔が転校してきた時に、僅かなデジャビュを覚えながらも仲良しになっていくはずだった。

でも、全てが遅い。

「ごめん、ごめんなさい、大輔くん、賢くん……！」

「っ、そ、んな、ヒカリちゃんの、せいじゃない……！」

「そうだよ……！だって、きつき、言ってたじゃない！僕達と出逢ったからあのコロモンは進化したんだって！ヒカリちゃんだけのせいじゃないよ……！」

大輔も賢も、ヒカリにつられてボロボロと泣き始める。

また逢おうと約束した、大切な友達。

ようやく再会できたことを喜びこそすれ、怒ったり責めたりするわけがない。

3人は泣いた。泣いて、泣いて、泣いて……どれぐらい泣いたか分からないぐらい泣いた。

互いに慰め合って、時には揶揄ったりして、泣きながら笑い合った。笑い合いながら、泣いた。

大輔と賢の、お互いに対する怒りとわだかまりが、涙と一緒に溶けて流れ出ていったのは、その時だった。

《初めまして、というべきなのでしょうね。お三方》

ようやく泣き止んで、互いの顔を見合わせて笑い合った3人に、ずっと黙って見守ってくれていたガラスの頭部の者が穏やかに話しかける。

泣きはらした目を隠すことなく、大輔達はそれを見上げた。

「誰？」

《ふふふ、ワタクシは、ワタクシ》であって「ワタクシ」ではない、何者でもあり何者でもあるのです。どうぞお好きなように呼びください》

「？ど、どういうこと……？？」

《おっと、まだ幼い貴方達では理解できませんでしたか。では、スワンプモン》とでもお呼びください》

ガラス玉の頭……スワンプモンはそう言いながら再び頭を下げる。

「スワンプ、モン……？」

《はい》

まだぐすぐす言っていたヒカリが、おずおずと言った様子でスワンプモンに話しかけると、スワンプモンは立っていた体勢から膝をつき、ヒカリの目線に合わせて優しく返事をした。

今の今までスワンプモンの姿を見て怖がっていたヒカリだったが、途端にその恐怖が風に乗って消えていく。

じ、と見つめ合っていたら、はしやぎまわっていた幻影の大輔達が今の大輔達の前に並んだ。

それぞれの幻影がそれぞれの前に立って、ニコリと微笑みかけた後、その姿を薄めていきながら消えていく。

あの日の公園は、突如吹いた強風で大輔達が咄嗟に目を瞑った後、一面に広がる花畑へとその姿を変えた。

パステルカラーの見たことのない花が沢山咲いており、爽やかに吹

く風に乗って花びらが空へと舞う。

甘い匂い。青空を泳ぐ白い雲。遮るものは何一つなく、花畑と青空の境界がくつきりと分かれていた。

ここは何処だろう、と辺りを見回す3人に、スワンプモンは優しく、そして真剣に語り掛ける。

《大輔、ヒカリ、賢。先ほども言ったように、それは貴方方だけの力。貴方方しか持っていない力です。貴方方が1人でも欠ければバランスが崩れてしまいます。それはまるで朝と昼と夜が一続きになって貴方方を見守っているようなもの》

スワンプモンは言う。

コロモンが一時的に言葉と理性を得たのは、大輔と賢とも触れ合っていたからなのだ。

しかし「命」であるヒカリとあのコロモンと触れ合う時間が長かったために、コロモンは精神のバランスを崩して、言葉を、理性を失ってしまったのだ。

《それと同じように、子ども達の精神のバランスが崩れてしまえば、デジモン達は力を発揮することができません。それどころか想定外の進化を果たしてしまうでしょう》

「……それが、スカルグレイモン？」

3人の脳裏に浮かんだのは、太一のアグモンである。

全身骨で出来たあのデジモンは、確かに強そうではあったけれど、あの暴れようはどう考えても自分達を守ってくれるようには見えなかった。

ゲンナイさんは、デジモン達は子ども達を護るための武器だと言っていたのに。

《貴方のデジモンも危なかったのですよ、賢？》

「え？」

思ってもいなかったことを指摘された賢は、ぎよつとなつてデジたまを抱く腕に力を込める。

どうということ？って賢が困惑気味に尋ねると、やはり分かっていたなかつたようですね、とスワンプモンは苦笑した。

《争いを嫌う貴方と、貴方を護りたかったパタモン。子ども達とデジモン達の心が1つにならなければ想定した進化には至りません。しかし貴方方の心はちぐはぐであったにも関わらず、想定内の進化を遂げた。これは偶然とも言える奇跡です。2度目は恐らくありませんよ。次こそあのスカルグレイモンのように、子ども達を護らなければならぬ立場でありながら、子ども達に襲い掛かる災厄になりうるでしょう》

スワンプモンは忠告する。

デビモンとの最終決戦は、運がよかつただけなのだ。

子ども達の、自分達の世界に帰りたいという気持ちと、デジモン達の、子ども達を元の世界に帰してやりたいという気持ちが一気となった。そのため、デジモン達はその力を100%発揮できる姿へと進化出来るのだ。

だがあの時の賢とパタモンの気持ちは、互いに反対方向を向いていた。

パタモンが賢を傷つけるデジモンに変貌していたかもしれない、と聞かされた賢はぞつとする。

《賢、貴方もとっくにお気づきのはずです。賢い貴方が、分からぬはずがないのです。パタモンは待っているのですよ。貴方が勇気を出してくれることを》

賢が抱きしめているデジたまにそつと手を添え、優しく語り掛けるスワンプモン。

賢は俯く。唇を噛みしめ、デジたまを抱く腕の力を強める。

スワンプモンの言う通り、賢はちゃんと分かっている。

パタモンが生まれてこないのは、賢が今一步踏み出せないからなのだ。

戦いを極端に恐れていることで、パタモンが生まれるために必要なエネルギーが供給されていないのだ。

デジモンは人の想いを受け取ること進化をする。

《賢、パタモンにもう一度逢いたくないのですか？ごめんなさいを、しなくていいのですか？》

「……逢いたい」

再度問いかけてきたスワンプモンに、賢は乾いたばかりの涙をぽろぽろと零しながら呟いた。

「僕、パタモンに逢いたい」

ぴき、とデジたまに罫が入った。

「怖がってごめんって。パタモンを見ないでごめんって」

ぴきぴき、ぱき、と罫が下に向かって伸びていく。

蜘蛛の巣状に広がっていき、やがてデジたまが2つに割れ、命が顔を出す。

それは、ジエルのように半透明で、ぷるぷるとしていた。

円らな黒目は潤みながら賢を見上げ、やがて身体が光り、ピンク色の豚の貯金箱みたいな形に、更に光りに包まれて形が変わる。

翼のような耳が生えた大きなハムスターは、ファイル島にいた時からずっとそばにいてくれた、大切な友達。

青空のような澄んだ目は、うるうると涙が滲んでいた。

『ケン！』

「パタモン！」

賢は手を伸ばし、飛び込んできたパタモンを抱きしめる。

「ごめん、ごめんね、パタモン！僕が弱かったから、護られるのが当たり前だって思ってたから、パタモンに辛い思いさせちゃって……！」

『いいよ、いいんだよ、ケン！だってそれがケンだもん。弱くたって優しいのがケンだもん。僕のほうこそ、ケンを傷つけちゃってごめんねえ！』

ぐすぐす言い合いながら、2人は自分の気持ちを、思いをぶつけ合う。

「僕、これからもいっぱい逃げるかもしれない。だって、僕は、やっぱり戦いとか、嫌いだもん」

『ケン……』

「でも僕、もう目を逸らすのやめる。パタモンとずっと友達でいたいから……お家に、帰りたいから……」

《よくできました》

途端に、3人とパタモンの意識が遠のく。

綺麗なパステルカラーの花畑が、白く滲んで遠くへ消えていく。

《本当はもつとお話をしたかったのですが、これ以上この場に留まるのは、貴方方の無防備な魂によくありません。大丈夫。〃今度〃はちゃんと覚えてますよ》

スワンプモンの声が遠ざかっていく。

まだ聞きたいことは沢山あるのに、眠いと訴える身体は成す術を知らない。

《そう遠くない未来で、ゲンナイ様と相まみえることでしよう。その時に改めてゲンナイ様とお話すればよろしい》

「スワンプ、モン、は……もう、逢えない……の……？」

気力を振り絞って声を出した大輔の言葉は、ちゃんとスワンプモンに届いた。

パステルカラーの花畑と共に、滲む白い背景の向こう側へ閉ざされそうになっているスワンプモンは、ガラス玉の頭部で表情などないはずなのに、笑っている気がした。

《さあ、どうでしょう？ 貴方方が望めば逢えるかもしれないし、そうではないかもしれない。全ては流れる時間（とき）のまま、風のように身を任せるまま》

ですが、

《許されるのなら、ワタクシももう一度、貴方方と逢いたいですねえ》
それでは、さようなら。

「……私ね、大輔くんが転校してきた日に、懐かしいなって思ったの」
大輔達の視界に飛び込んできたのは、何処か懐かしい木目の板の天井。

開かれた障子の向こうから月の光が差し込んで、穏やかな風は少し肌寒い。

ここは何処だろう。テントの中ではない、デジタルワールドにはないと思っていた、自分達の世界の建物の中と似たような構造をしており、ふかふかの布団に寝かされていた。

それぞれの隣には、パートナー達。

デジたまだつたはずの賢のパートナーは、夢の中と同じくパタモンになって倅せそうな表情でむにやむにや言いながら眠っている。

それで、あれは夢ではなかったのだと悟る。

同時に、思い出す。

あの夢の中で語られた真実を、その真実を語ってくれた、スワンプモンというとても優しいデジモンを。

姿が見えない上級生達を不思議に思っていたら、窓から覗く真ん丸のお月様を見上げながらヒカリがぽつりと呟いた。

「最初はお兄ちゃんに何となく似てるからかなって思ってたんだ。元氣いっぱい、おかしかったら笑ったり、怒る時はちゃんと怒ったりして……。そういうところがお兄ちゃんに似てるからなのかなあって。でも違ったんだね」

何処か苦しそうに笑いながら、ヒカリは枕元に置かれていたゴーグルを取った。

自分達はずっと前に出逢っていたのだ。

出逢ってはいけない者と共に。

「これ、返さなくちゃね」

でも今は全てを思い出した。悲しい想いと共に。

また逢おうっていう約束も一緒に。

だから、また逢う日まで交換こ、って渡し合っていたお互いの宝物を返さなくては。

物心ついた時からずーっと首から下げていて、お兄ちゃんとお揃いって道行く人に自慢していたけれど、それももう出来ない。

だってこれは大輔の宝物なんだから。

でも大輔は首を横に振り、自分に差し出されたゴーグルをヒカリの手と一緒に押し返す。

「もうしばらく持つてよっぜ」

「え、でも……」

「うん。元の世界に戻ってからでもいいんじゃないかな？ 僕のはジュンさんのだし……」

あの日、宝物を交換し合ったのは大輔とヒカリだけじゃない。

賢と大輔のお姉ちゃんもお互いのを交換していたのだ。

賢は大輔のお姉ちゃんから懐中時計を、大輔のお姉ちゃんは賢からブレスレットを。

それに、と大輔は枕元に置かれたホイッスルを手取る。

「ずーっとしてたから、いきなり返すのは何か寂しいっていうかさー」

「……そっか」

分かった、ってヒカリは返ってきたゴーグルを優しく撫でる。

本当は、ちよつとだけ安心していた。

大輔と同じで、ずつとずつと首から下げてお守りみたいに思っていたから、返さなければいけないのは分かっているのだけれど、少し寂しかった。

でも元の世界に戻るまでという制限を設けたお陰で、覚悟も出来た。

自分達の世界に戻ったら、これを大輔に返そう。

そしてちゃんと、また逢えたねって言おう。

ヒカリは密かに決意する。

「ジュンさんも覚えてなかったの？」

「そうだなー、賢から預かったブレスレット、いつもこれ何処で買ったんだっけって言ってたし」

「そっかー」

ジュンさんに逢うの楽しみだな、って賢は笑う。

俺も早く逢いてえなー、って大輔も笑う。

喧嘩をしていたことなど、とつくに忘れていた。

ありがとうの花束を

それは、微睡の中で揺蕩う意識。

それは、水底の奥から浮かぶ泡。

一体いつの頃からだったのだろうか。

八神太一という少年が、八神太一ではなく「お兄ちゃん」となるに至ったのは。

ヒカリが生まれたのは、太一がまだ3歳の時だった。

3歳と言うと単語と単語を繋ぎ合わせて、短い文章を使う頃だろうか。

自分の気持ちを上手く言葉として吐き出すことが出来ず、他人に通じなくてやきもきして、うわああんって地団駄を踏んで、お母さんを困らせる年頃に、ヒカリという妹は生まれた。

お母さんに甘えて、抱っこ抱っこつてせがんで、しようがないわねえって苦笑いするお母さんが、いつの間にかそれをしてくれなくなった。

やがてお母さんのお腹は破裂してしまいうんじやないかってぐらい膨らんで、おかあさんどうしたの、おなかいたいなの、って拙い言葉で小さいなりにお母さんを心配しながらばたばた走り回っていた姿は、今でもお父さんとお母さんのいい思い出として語られている。

違うわよ、赤ちゃんが生まれるのよつて、お母さんに優しく教えてもらった時はよく分からなかった。

赤ちゃんって、近所の山口のお姉さんとお兄さんのところにいる、ちっちゃい子のこと？

保育園のお友達のお母さんが抱っこしてる、あのちっちゃい子？

太一が困惑している間にも、お母さんのお腹はどんどん大きくなっていく。

やがてお母さんは病院に行く回数が増えて、お父さんがお仕事に行かなくなつて、お家で過ごすようになった。

お母さんの代わりにお家のことをするようになった。

でもずーっとお仕事でお家のことなんか何も知らないお父さんが、いきなりお家のことをやるのは結構大変だった。

太一はその時のことを覚えていないけれど、お母さんは今でも昨日のことにように思い出しては、嬉々として教えてくれる。

掃除機を使えば太一が散らかした服を吸い込んでしまうし、洗濯物は適当に放り込むせいで色映り、ご飯は水の量を間違えてべちゃべちゃになったり、固くなつたり、卵焼きという名のスクランブルエッグが毎日出たりして、家中が泥棒にでも入られたかのようにしつちやかめつちやかにひっくり返っていた。

太一だつてここまで暴れない、とお母さんはそれを笑って許したらしい。

家のことなんか普段は全然しないのだ、家中ひっくり返してしまうのは致し方なし。

2人目が出来る頃には夫の扱い方も心得ているので、あれやってこれやってとこき使つてしまえばいいのである。

そのうち、最初は不器用だったお父さんもだんだん慣れてきて、最近ではお母さんよりもオムライスを作るのが上手になった。

太一の好物に、お父さんの作ったオムライスが追加されることになる。

出産のためにお母さんが入院することになった時、太一は泣き喚いて駄々を捏ねて大変だったと教えられた。

ただでさえお母さんのお腹が大きくなつていくせいで抱っこもおんぶもしてもらえなくなつて、掃除も洗濯もお料理だつてしてくれなくなつて、不満がたまり始めていたというのに、その上お母さんが入院していなくなつてしまうなんて聞いてない。

やだやだって全身でだだをこねたけれど、そんなことでお母さんの入院の決定が覆るはずもなく、お母さんはお父さんと仲良くねって言い残して病院に行ってしまった。

拗ねに拗ねて、3日ほどお父さんと口をきかなかったという、お父さんにとつてとぼつちりを受けることになる。

さらに4日後に、お母さんは生まれたばかりの赤ん坊をその腕に抱いて帰ってきた。

それが、ヒカリだ。

最初の印象は、「自分より小さい」、それだけだった。

「見て、太一。今日からお兄ちゃんよ、この子はヒカリ。仲良くしてあげてね」

「ああ、小さいなあ。太一が赤ちゃんのころを思い出すよ」

そう言つてニコニコ笑いながら妹を見下ろす両親を、その時はふんとしか思つていなかった太一だったけれど、やがて太一は赤ん坊が生まれるという意味を思い知ることになる。

妹が生まれた時、まだ3歳だった太一は当然甘えた盛りだ。

お母さんがやつと帰つてきて、破裂しそうなくらい大きくなっていたお腹も引っ込んで、やつとお母さんに甘えられると思つていたのに、お母さんはずーっと妹に付きっ切りなのだ。

太一が遊んでつて足元に纏わりついて、絵本読んでつてせがんでも、お散歩行こうつて誘つても、お母さんは後でねつて言つてヒカリに構つてばかりだった。

後つていつ、ねえねえまだあ？つてお母さんの周りをちよろちよろしては、お母さんに叱られる。

ヒカリが起きるでしよ、今ヒカリミルクの時間なの、ヒカリのおむつ変えてるから待つて。

ヒカリ、ヒカリ、ヒカリ。

太一が何を言つても何をしても、お母さんの口から飛び出してくるのは妹のヒカリの名前で、太一を呼ぶことはめつきり減つてしまつた。

代わりに太一を形容する呼称が変わつた。

“お兄ちゃん”

ヒカリがお母さんのお腹にいるときに何度か聞いた、太一の新しい呼び名だ。

お兄ちゃんなんだから我慢しなさい、お兄ちゃんなんだからしつかりしなさい。

“ヒカリ”と同じぐらい、 “お兄ちゃん” という言葉が飛び交った。

太一の不満はどんどん溜まっていくばかりなのだが、赤ちゃんのお世話で忙しいお母さんは気づかない。

太一は太一なのに、 “お兄ちゃん” なんて名前じゃないのに。そうやって駄々を捏ねたことも、1度や2度じゃない。

今までずっとお父さんとお母さんの愛を一身に受けて、独り占めしていたのに、突然出来た妹に対していきなりお兄ちゃんになれなくて、無理な話ではある。

そんなもんだから、当初太一は妹のヒカリを嫌っていた。

ぼくからおとうさんとおかあさんをうばった、わるいやつだ。

割と本気でそう思っていたし、時々意地悪をすることもあった。

勿論、その度にお母さんやお父さんに叱られる。

まだ赤ちゃんなんだから、仕方ないでしよって怒られる。

だからますます太一はヒカリが嫌いになる。

でも不思議なことに、ヒカリは兄から嫌がられて、時々意地悪をされているにも関わらず、兄の姿を見るととても嬉しそうに笑うのである。

泣きじやくって、お母さんやお父さんがよしよってあやしても全然泣き止まないのに、お兄ちゃんが傍に来るとぴたつと泣き止むのだ。

にこーつと、ふにやりとした笑みを浮かべて、太一に手を伸ばしてくるのだ。

小さな太一の手よりも、もっと小さな手が、太一の指を握ってくるのだ。

何度邪険に扱っても、何度意地悪しても、太一を見るたびにに

こーって笑いかけてくる妹に、太一はタジタジだった。

その度に思い知るのだ、己の器の小ささに。

目の前でまだ寝転がることしか出来ない小さい妹よりも、ちっぽけなことに捕らわれているような感覚になるのだ。

でもその時はまだ、「兄」としての自覚に芽生えたわけではなかった。

バシン、という弾力のあるものを叩く音が反響した。

次に太一に襲い掛かったのは、頬に走るヒリヒリとした痛み。

その痛みで太一の目の端からじんわりと水の粒が溢れる。

見上げた先には、怒りの形相を浮かべているお母さん。

肩をいからせ、歯を食いしばり、顔を真っ赤にして鼻息を荒くしながら、溢れ出そうな怒りを必死で抑えて振り絞るように口にする。

「ヒカりは……病気だつて言ったでしょう……！」

その直後、治療室のランプが消えて、扉が開いた。

ストレッチャーに乗せられて出てきたヒカりに、お母さんが今にも泣きそうな表情で駆け寄る。

叩かれた頬を押さえながら、太一もヒカリの顔を覗き込んだ。

頬を真っ赤にしながら、小さい身体が全身を使って呼吸をしている姿は、見ているだけで胸が痛んだ。

そんなつもりじゃなかったのに、こんなはずじゃなかったのに。

夏も近づき、セミの煩い鳴き声が合唱を奏で始めた頃の季節だ。

まだ身体に見合わない大きなランドセルを揺らしながら、学校から帰宅した太一は、その日は誰とも約束していなかったからどうしようかなあと考えていた。

お母さんもお父さんも当然だが仕事でおらず、家にいるのは風邪を引いて保育園を休んだヒカリだけだ。

人より風邪を引きやすい体質のヒカりは、もう4日も保育園を休んでいた。

5日目の今日の朝も、共同の子ども部屋の2段ベッドの下で苦しうに呼吸をしていたヒカ리를可哀想に思っていたが、帰宅した太一が見たのはソファアーに寝そべってテレビをぼんやりと眺めていた妹の姿。

お出かけの時にしかつけない、お兄ちゃんとは少し形状が違うゴージャルを首から下げて、それを指で弄んでいた。

元より風邪を滅多に引かない元気少年の太一が、それを見てヒカリの具合がよくなったのだと思うのは当然と言える。

特に予定がなかった太一はランドセルを放り出して、ヒカ리를連れて近所の公園に遊びに行った。

手に持って行ったのは幼稚園の頃にも買ったサッカーボール。

絵本を読んだり絵を描いたりして遊んでいることが多いヒカりは、保育園でも友達が殆どおらず、遊び相手はもっぱらお兄ちゃんである。

普段はお友達とばかり遊んでいるお兄ちゃんが、珍しくヒカ리를誘って公園に連れて行ってくれたから、ヒカりは嬉しくてたまらなかった。

身体が怠いのなんか全然気にしないで、お兄ちゃんとボールを蹴り合いっこしていたが、まだ風邪が治り切っていない病弱な身体が、炎天下にも近い日差しを長時間浴びればどうなるかは、火を見るよりも明らかだ。

結果、ヒカりは倒れてしまった。

頬を真っ赤にさせ、焦点の合わない視界の向こうでぼやけている兄に向って蹴ったはずのボールが、見当違いな方向へ飛んで行ったのが、最後の記憶だ。

気づいた時には病院にいて、お母さんとお兄ちゃんが泣きそうな顔でヒカ리를見下ろしていた。

大丈夫？ってお母さんがしきりに声をかけて、優しく撫でてくれたけれど、ヒカりはそれに答えずに兄の方を見上げる。

何かを堪えるような、言いたいことを我慢しているような表情は、

ヒカリの知っている兄の姿とは程遠かった。

元気を体現しているような男の子は、勉強もじっとしていることも苦手で、いつも外で遊びまわって泥だらけになって、お母さんにそのことで叱られたって知らん顔するような子だ。

思っていることは全部口にして、相手が誰であろうがズバズバと意見をぶつける子だ。

身体があんまり丈夫じゃないヒカリに対しても、お外で遊ばないからだって引っぱり回して連れ回すのに、何故か黙って見降ろしてくる。

喉を擦るように吐き出される息の中、何も言わない太一を不思議に思いつつ、ヒカリは頑張って口を開いた。

「…………おにいちゃん…………ボール、けれなくて…………ごめんね…………」

その言葉に、太一とお母さんは目を見開く。

ヒカリの口から飛び出てきたのは、熱で苦しい言葉でも兄を恨む言葉でもなく、兄への謝罪だったのだ。

ヒカリが倒れる直前に太一が言い放った言葉に対する返答だったと太一が気づいたのは、翌日。

くらくらする視界の中で変な方向へボールを蹴った時に、太一から聞こえてきた咎めるような言葉。

ちやんと蹴ろよー、と言いなながらボールを取りに行つて、太一がほんの数秒目を離れた際に、ヒカリは倒れた。

何が起こったのか理解できず、駆け寄った太一が触れたヒカリの小さな身体は、とても熱かった。

どうしたらいいのか分からずおろおろしていたところに、通りがかった近所に住む小母さんが太一に気づいてくれて、お母さんに知らせてくれたのだ。

救急車を呼び、小母さんと一緒に乗って病院まで向かい、小母さんと一緒に処置室の前でぼんやり待っていたら、お母さんが真っ青な顔をして駆けつけてきた。

まだ風邪が治っていないヒカリが、どうして外で倒れたのって当然お母さんは疑問に思う。

太一がおろおろししながらヒカリと一緒にいたことを小母さんが言えば、お母さんの形相がみるみる般若になっていった。

鬼みたいに顔を真っ赤にして、ぶるぶる震えて、お母さんに引っ叩かれたのはその時だ。

——懐かしいな

滲む白い背景に浮かんでいるその風景を、太一は自嘲しながら眺めていた。

自分はその時まで、ヒカリのことは「自分より小さい子ども」としか思っていないかった。

妹というよりも、「一緒に住んでいる遊び相手」という認識の方が強かったのだ。

自分が「兄」であるという自覚が全くなかったのだ。

母親のように、自分の腹の中で子どもが育まれていくでもなし、父親のようにその過程を見守って、母親のフォローをするでもなし、ただ見ていることしか出来ない、甘えた盛りに生まれてきた妹を「妹」として見られなかったのである。

幾ら周りからお兄ちゃんだから、お兄ちゃんなんだからって言われたって、太一自身が自覚しなければ何の意味もないのだ。

お母さんに引っ叩かれて、叱られて、ようやと自分は「兄」にならなければならぬのだと分かった。

妹が何かあった時には、お父さんよりも早く駆けつけて守ってあげないといけない。

妹に異変があった時は、お母さんよりも早く気づいて声をかけてやらなければならぬ。

それが太一の、「兄」の役目なのだ。

《おにいちゃん》

再生された苦い記憶が、白く滲む背景に沈むように溶け込んでいき、代わりに現れたのは「あの時」の妹。

《ボール、ちゃんとけれなくて、ごめんなさい》

くすくすん、と泣きながら言ったのは、「あの時」の言葉。

……太一は、目を閉じてゆつくりと息を吐いた。

目を開け、徐に妹に歩み寄る。

小さな妹は、自分が思っていたよりもずっと小さかった。

「……もういいよ、ヒカリ」

あの時言えなかった言葉を、太一はようやく言えた。

顔を真っ赤にして、苦しそうに胸を大きく上下させながら呼吸をしていたヒカリに、言っておげなければいけないかった言葉。

「もういいんだよ、ヒカリ。お前は何も悪くない。俺が、俺がちゃんと“お兄ちゃん”をやらなきゃいけないかったのに、それがどういふことなのか全然分かってなかったから……」

そう言つて太一は小さなヒカリの頭を撫でてやれば、泣いていた妹は優しい兄の手と言葉で、ぐしぐしと涙をぬぐい、そしてへらりと笑った。

妹の姿が先ほどの記憶と同じく白い背景に溶け込んでいった直後、太一の身体が後ろに引つ張られる。

「……………」

白かった視界はいつの間にか闇に閉ざされていて、ゆっくりと瞼を開ければ窓から差し込む月の光が、四角い窓から薄暗い部屋を青白く照らしている。

背中にふかふかとした感触と、目の前に広がった木目の板が敷き詰められた天井が視界に入る。

やけに頭と腹が重い気がして、太一は眉を顰めながらゆっくりと時間をかけて起き上がった。

ころん、と太一の腹からピンク色の丸い物体が転がる。

うわ、という聞き慣れた少し掠れた声で、パートナーのコロモンだと気づいた。

「コロモン？」

『ううん……ふえっ?! タイチ?!』

口元をむにやむにやさせながら、固く冷たい床に転がったことで目を覚ましたコロモンは太一が起き上がっていることに気づいて、赤い目をぱちぱちさせながら太一を見上げる。

「……………よう、コロモン」

『……タイチ?』

「ああ」

『ほんとに……?』

「ああ、心配かけちまったかな?」

『………うわあああああああああああああああああ
!』

唾然と太一を見上げていたコロモンを抱き上げて、座っている膝に乗せてやる。

何度も確かめるように太一に問いかけたコロモンは、やがて目をうるさせて大声を上げてわんわん泣き始めた。

漫画みたいな涙を流して、太一に縋りついてくるコロモンに苦笑しながら、太一はよしよしってコロモンのコロコロした身体を優しく撫でてやる。

『ごべんね えええごべんね え え え え え え え え!!
ボクの ぜい でごん な ごごに な つぢやつでえ え え え
え え え え え え 』

「おいおい、落ち着けて……」

大量の涙を流しながら太一にえぐえぐって縋りついてくるために、太一の青い服が更に濃い青に変色する。

きつたねえなあ、つて太一は笑いながらも、引きはがそうとはしなかった。

鼻水をつけられているわけでもなし、泣き方からしてコロモンに散々心配をかけただろうということは分かったので、邪険に扱うなんてできなかつたのだ。

『ぼぐ、ぼぐ、だい ぢがだおれ だどぎ、じんじやっだっでおぼつ
で!ぼぐ、ぼぐの ぜい でだい ぢが……!』

「だから、落ち着けて。泣くなよ、何言ってるか分かんねえよ」
『……おや、目が覚めたっぴか?』

泣いているせいで濁点だらけになっているコロモンに苦笑していたら、からりと障子が開いて中に入ってきたのは、知らないデジモン。

濃いピンク色の体毛と、丸い身体に取ってつけられたような手足、天使のような羽が頭頂部から生えていた。

「……誰だ？」

『命の恩人に対して誰だとは、失礼なやつだっぴねえ』

「……命の、恩人？」

『ピッコロモン……ぼくたちを、かくまってくれたデジモン……』

コロシアムで丈の紋章を探していた時に、ピコデビモンが連絡を取ってくれた、子ども達を匿ってくれるデジモンとはまた別の、子ども達の協力者だそうだ。

「ああ、そうだったのか……サンキュ、ピッコロモン」

『うむ。怪我の具合はどうだっぴ？何処まで覚えてるっぴか？』

あの時あったことは、断片的にだが覚えている。

瓦礫に埋もれた敵のグレイモンが、その瓦礫の山を吹っ飛ばして起き上がった時、吹っ飛ばされた瓦礫の破片が太一の額部分に当たって気を失ってしまった。

次に気が付いた時には、太一のグレイモンはスカルグレイモンへと変貌して、仲間達を襲っていた。

何が起きたのか理解できなかった。

いつもみんなの先陣を切って、敵に対しても勇敢に立ち向かっていくグレイモンが、全身骨だらけになって不気味な咆哮を上げながら仲間を襲い掛かっている姿なんて、誰が想像できただろうか。

何とか止めることは出来たけれど……その後のことは覚えていない。

それを聞いたピッコロモンは、ふむと一言呟くと、他の子ども達から聞いたことをそのまま太一に伝えた。

太一が気を失った後にピコデビモンが連絡を取ってくれたデジモンが迎えに来てくれたのだが、そこでは太一の怪我を治療する設備が整っておらず、更に最年少の3人まで倒れてしまったらしい。

それはつまり、妹のヒカリも倒れたということ……。

「ピッ、ヒカリ！ヒカリは……っ!!」

太一の他にも、大輔とヒカリ、賢の最年少3人も倒れたと聞いて太

一は当然取り乱し、ヒカリは何処だと尋ねようとして頭に走った痛みで身体を丸めながら呻いた。

『これ、無理するんじゃないっぴ。キミは頭を打ったんでシヨ？頭の怪我は特に気をつけなきゃいけないんだっぴ。大人しく寝てるっぴ』
「っ、でも、ヒカリが……！」

『あの子達なら心配いらないっぴ。さつき様子を見に行ったら、目を覚ましていたっぴ。でも色々あって疲れていたみたいで、私と挨拶したらまた寝てしまったっぴよ。だから君も休みなさい！』

び、と槍の鏃と共に正論を突きつけられた太一は、ぐうという小さな呻き声をあげることしか出来なかった。

そんな太一を見て、それまでとぼけた表情を浮かべていたピッコロモンは、突きつけた槍を下ろすと神妙な顔つきになり、目を伏せる。

『……ワタシ達の世界のことなのに、全く関係のない君達を巻き込んで、あまつさえ怪我を負わせてしまったことは、本当に申し訳ないと思っっているっぴ』

「ピッコロモン……」

『おまけに君のデジモンは、君が怪我をしてしまったことで大変傷ついて、紋章の力を暴走させてしまったっぴ。確かに時間はないっぴ。でもそのために君達を犠牲にするわけにはいかないっぴ』

大人しく寝ていれば、頭に巻いている包帯が怪我の治癒を早めてくれるそうなので、太一は渋々寝ることにした。

コロモンはぐしぐし言いながらも、布団に潜りこんで太一にぐりぐりと身体を寄せてくる。

それをそつと抱き寄せて、太一は優しく撫でてやった。

ピッコロモンはお休み、と2人に言い残して、そつと部屋を出て行った。

「……………」

『……………ごめんね、タイチ』

静まり返った空間は、先ほどと変わらず青白い月の光が窓から差し込んでいる。

ピッコロモンが出て行き、鈍い痛みが千留ように疼く中ぼんやりと

天井を見上げていたら耳元で声がした。

「……コロモン？」

『……ぼくのせいで、タイチがけがしちゃった……ぼくは、タイチをまもらなきゃいけないのに……タイチは、ぼくの、パートナー、なのに……！』

治まっていた涙が再び、コロモンの紅い目から零れる。

太一は仰向けにしていた身体を横向けにして、泣いているコロモンと向き直った。

「何言ってるんだよ……あんどきも言ったけど、コロモンは悪くないだろ？悪いのは……」

『ちがわないよ、だってぼくはタイチのパートナーなんだよ？ぼくがまもんなきやいけないんだよ？なのにぼく……ぼく……！』

参ったな、と太一は縫ってくるコロモンを拒否せず受け入れながら眉尻を下げる。

どうしたら分かってくれるのだろうか。

どう言ったら分かってくれるのだろうか。

『ぼく、ぼく、こわい。どうしよう、タイチ。またタイチをまもれなかったらっておもったら、こわくてたまらないんだ。ねえ、どうしよう、ぼく、どうしたらいいのお……！』

ぼろぼろと涙を零しながら心情を吐露するコロモンに、何と云ってやればいいのか分からずに、太一が途方に暮れた時だ。

泣いているコロモンに重なって、"あの日"の妹の声が聞こえてきたのは。

《ぼーる、ちゃんとけれなくて、ごめんね》

夢の中で、もういいよと言ってやった時の妹の言葉。

まだ風邪が治りきっていなかったことに気づかずに連れ回してしまい、強い日差しによって倒れてしまった妹。

《ごめんなさい》

悪いのは妹の体調不良に気づけなかった太一だったのに、"お兄ちゃん"にならなければならなかったにも関わらずそれを怠った太一だったのに、妹はお兄ちゃんを責めなかった。

それは、その言葉は倒れる直前に聞いた兄の、ちゃんと蹴ろよーという不満の返答だった。

——ああ、そうか。

どうして今になってあんな夢を見たのか、分かった気がした。

今のコロモンは、“あの時の妹”だ。

太一が怪我をしてしまったのを自分のせいだと思い込んで、心に闇が生まれて力を暴走させてしまったコロモンは、“あの日の妹”と同じなのだ。

同時に、“あの日の自分”でもあるのだ。

太一を護れなかったコロモンは、まさしく“太一”だった。

兄である自覚がなかった太一と、護るべきパートナーであるとちやんと理解していたコロモンとは少し違いはあるだろうが、それでも今のコロモンは“あの日の太一”によく似ていた。

意識は取り戻したし、ここに連れてきた時にピッコロモンにも看てもらったお陰で、特に後遺症はないだろうというお墨付きももらったけれど、それでもコロモンはきつと気が気ではなかったはずだ。

太一がこのまま目を覚まさなかったらどうしよう、死んじゃったらどうしよう。

目を覚ましたとして……もうコロモンなんか嫌いだと言われたら。

もういらないと、パートナーなんかじゃないと拒絶されたらどうしよう。

きつとコロモンは、自分が死ぬよりもパートナーが死んでしまうことの方が、パートナーに拒絶される方が怖い。

自分も同じだった。母に引っ叩かれてようやく妹が抱えている弱さを知った太一は、ヒカリが目を覚ますまで気が気ではなかった。

ヒカリが目を覚まさなかったらどうしよう、ヒカリが死んじゃったらどうしよう。

目を覚ました妹に再度謝られて、太一は猶更自分を責めた。

ごめん、ヒカリ。お兄ちゃんが悪かったって。

でもヒカリが見せてくれたのは、困ったような表情。

その時は分からなかったけれど、あの日のヒカリの言葉の真意が、

今になってようやく分かった。

コロモンが欲しいのは、お前が悪いんじゃないという否定の言葉じゃない。

「……コロモン」

太一は、怖い夢を見てお兄ちゃんのベッドに潜り込んでくる妹に見せるのと同じ顔を、コロモンに見せてあげる。

ぐすぐすと泣いていたコロモンは、目をぱちぱちさせながら太一を見つめた。

「好きだぜ」

『……タイチ?』

ぎゅ、と抱きしめてやる。

「好きだよ、大好きだよ、コロモン。『あんなこと』ぐらいで、嫌いになつたりするもんか」

『っ!』

それはきつと、ヒカリが言いたかった言葉。

それはまさしく、太一が言わなければならなかった言葉。

「ごめんな、コロモン。怖かったよな、こんなことになっちゃってさ。俺、お前と一緒にだ何にも怖いもんがなくなってたから、すっかり忘れてたぜ。自分が生身の人間だったってこと」

最初こそ見慣れない生き物に警戒していたものの、1カ月近く共に過ごしているうちに情のようなものが芽生え、それがいつしか信頼になつていた。

その信頼が、今回の事態を最悪な方向へと導いてしまった。でも、きつともう大丈夫。

「ありがとう、コロモン。もう大丈夫だよ。俺はここにいる。だから……そんなに自分を責めるなよ。な?」

『……タイチ』

「俺がいいって言ってんだから、いいんだよ。あーでも、他のみんなにはちゃんと謝つとかないとなあ。明日一緒に謝ろうぜ」

『……タイ、チ……』

「さっ、寝よ寝よ!早く怪我治して、お前らの世界を救わないといけ

ねーんだし！」

太一がしなければならなかったのは、否定の言葉をかけることではなく、コロモンを安心させてやることだ。

コロモンは守らなければならぬパートナーを、みすみす守れなくて傷ついてしまった。

それは事実だ。

周りがどれだけ、例えそれが太一であっても、お前のせいじゃない、お前は悪くないと言ったところでコロモンは自分を責めるだけである。

ならばどうすればいいのか、簡単なことだ。

傷ついているコロモンを抱きしめてやること、それだけでいい。

パートナーを護れなかったから泣いているのだから、そのパートナーがもういいって、大丈夫だって言えばいいのだ。

ごめんじゃなくて、ありがとうと言えばいいのだ。

ごめんという言葉は、相手の罪悪感を増幅させてしまう言葉だから。

「明日からまた頑張ろうぜ。失敗したって、何度だってやり直せるんだ。俺の怪我が治ったら、また頑張って護ってくれよ。俺も……お前が頑張れるように、精一杯やるからさ」

太一は、ここにいます。

ちゃんと、ここにいます。

自分を拒絶せずに、優しく抱きしめてくれる太一を、コロモンは目をぱちぱちさせながら見つめた。

「お休み、コロモン」

そう言うと太一はコロモンを抱きしめたまま目を閉じる。

数秒後に聞こえてきたのは、すーという寝息。

数分すればその寝息は男子を悩ませる鼾へと変わるだろう。

初めて一緒に寝た時は、その鼾にびっくりしてその夜は一睡もできなかったものだ。

1週間もすれば慣れてしまったその鼾が、今聞けるのはきつと奇跡。

『……タイチイ……』

ぼろ、とまたコロモンの紅い目から涙が溢れる。護れなかった自分を責めるでも、許すでもなく、太一はありがとうと言った。

それだけでコロモンの心の中に溜まっていた蟠りや、燻っていた闇がすーっと晴れていったのが分かった。

また太一をあんな目に合わせるのではないかと思うと、不安で、怖くて溜まらなかったのに、いつの間にかそんな気持ちは何処かへ飛んで行ってしまったのである。

『……ごめんね、タイチ』

もう夢の中へと旅立っている太一には、きつともう聞こえていない。

もういいと太一は言ってくれたけれど、それでも最後に1度だけ謝罪がしたかった。

これで、最後だ。

きつともう大丈夫。

虚ろな心

紋章探しに砂漠へ出かけていた他の子ども達に戻ってきたのは、夜も更けた頃である。

それは、頭を打って怪我をした太一と、気を失って倒れてしまった最年少の3人が目を覚ましたのと、ほぼ同時だった。

4人が目を覚ましたと聞いた空達は、ひとまずは安心だと胸を撫で下ろす。

じゃーん、と手に入れた紋章をミミが見せてくれたのは、一息吐いた頃だった。

「探すの大変だったんですよ。ピコデビモンったら、今回もゲンナイさんから大まかな位置しか聞いてなかったらしくて、帰りの船の中でもずーっと謝りっぱなしだったし」

「へえ、何処にあったんだい？」

『それがねえ、サボテンの中にあつたの』

パルモンは言う。

広大な砂漠に、1つだけポツンと佇んでいたサボテンがあつて、コカトリモンが所持している豪華客船で近づいていったところ、ミミのデジヴァイスが薄らと光ったかと思うと、サボテンの天辺に花が咲き、そこからミミの紋章、純真の紋章が姿を現したらしい。

ミミのデジヴァイスの収められた紋章は、太一のとも丈のとも違う、まるで雫のような形をしていた。

これで紋章は3つ、残りはあと6つだ。

あと6つも、この広いサーバ大陸を歩き回って探さなければならぬのか、と子ども達はげんなりしたが、ここでピコデビモンが朗報を持ってきてくれる。

『ピッコロモンの守護しているこのエリアに、2つ預けたとゲンナイさんから聞いております！なので、実質5つ見つけて、あと4つです

ね!』

『えっ、じゃあ今から取りに……』

『喝!』

痛い!という短い悲鳴が響く。

ぽかん、という軽い音は、ピヨモンが叩かれた音だった。

ピッコロモンが手に持っていた杖で、ピヨモンの頭を叩いたのである。

『今何時だと思ってるっぴ! 幾らここがワタシの結界の中でも、夜行性のデジモン達が徘徊しているに決まってるデシヨ! 君達はこれからもっと大変な冒険をしなきゃならないんだから、休める時には休むっぴ!』

叩きつけられる正論に、子ども達もデジモン達もぐうの音も出ない。

確かに身体は休息を欲しているし、紋章は逃げないので子ども達はピッコロモンに言われた通り眠ることにした。

一乗寺治が天才少年であることは、周知の事実である。

幼稚園の時にもう足し算と引き算を理解していたし、漢字だって書けていた。

本を読むのが好きだった治は、児童書では飽き足らず大人が読むような難しくて分厚い本も好んで読んでいた。

自分の知らないことを知識として吸収するのは楽しかったし、母親もゲームや漫画ではなく本を欲しがる息子がうれしくて、どんどん本を買い与えてくれた。

また、治は勉強だけでなく運動も出来た。

1番好きなのはサッカーで、休日になれば父親と一緒に公園でサッカーをして遊んだ。

それは、至って普通の家族像だった。

何処にでもある平凡な、他の子どもと比べると少しだけ賢い子どもがいる以外は全く普通の家族だった。

それが崩れてしまったのは、一体いつのころからだっただろうか。治の天才っぷりは、彼が小学校に上がる前から知れ渡っており、ご近所の子持ちの奥様はこぞって治を羨ましがった。

親の言うことをよく聞き、大人しい性格の治は手のかかる男の子を子どもに持つ親から大変羨ましがられたものだ。

「ほんっと、治ちゃんはいいい子でいいわあ。うちの息子なんか毎日服を泥だらけにして、何度叱ったことか……」

「聞きましたよお。治ちゃん、まだ小学1年生なのに6年生の受験用のテストで満点取ったんですって？羨ましいわあ」

「この前は道に迷った外国人を英語で道案内してあげたそうですねえ。まだ6歳なのに、うちの聞かん坊に爪の垢でも煎じて飲ませたいわあ」

こんな感じで近所の奥様方は毎日のように井戸端会議で母親を羨ましがり、持ち上げる。

最初は謙遜したり受け流していたりしていた母親も、だんだん毒されていく。

日本一の大学への進学率が高いと言われていた塾を見つけてきた母親は、異様なほど治に塾に入るように勧め、治が渋っているのも知らんぷりをして勝手に手続きをしてしまった。

月曜日から金曜日まで、学校が終わると真っ直ぐ塾に行って、7時から8時ぐらいまでみっちり勉強をする。

土曜日はほぼ丸1日、塾に缶詰めだ。

本当は日曜日も通わせたかったらしいが、塾の先生にやんわりと止められたというエピソードがあったことなど、治は知る由もなかった。

今でこそ自分の意見はしっかりと告げる治だが、当時は大人しい氣質だったために、塾に行くのは嫌だと拒否することが出来ずに、嫌々塾に通った。

勉強するのは嫌いではない、むしろ好きだ。

でもそれと同じぐらい身体を動かしたり、アニメを見たりゲームをするのも好きだ。

学校の友達とだって盛り上がるのはもっぱら前日に見たアニメやバラエティの話だし、1番仲のいい友達とは互いの家を行き来して当時流行っていたゲームの対戦で遊んでいた。

しかし母親が勝手に塾の手続きをってしまったせいで、友達と遊ぶ時間がなくなってしまった。

机に齧りついて勉強するよりも、泥だらけになって遊びまわる方が魅力を感じる同級生の男子は、急に付き合いが悪くなってしまった治から離れて行ってしまいうのに、時間はかからなかった。

元々内向的で、あまり自分の意見や感情を面に出さない治は、友達が減っていくことに落ち込んでいても誰にも気づいてもらえない。況してや、息子を天才少年だと褒め称えられ、息子をもっともっと褒めてもらおうと躍起になっている母親なら、猶更だ。

日に日に元気を無くしていく息子に気づいてくれたのは父親だったのだが、その理由が友達をなくしてしまったからだとは分からなかったようだ。

男の子だから、勉強と同じぐらい外で遊ぶのも好きなことを知っていたから、ほぼ毎日塾に通わされているせいで遊ぶ時間が無くなってしまったからだ、父親は思っていたらしい。

確かに賢い子どもは、父親にとっても自慢だった。

他人から褒められるのは気分が良かったし、何より好きなものに没頭する息子の生き生きとしている姿は、親としても誇らしかった。

勉強もできて、運動も出来る。

ある人はきつと、それは何も出来ないのと同じだと言うだろう。

だが何でも出来るというのは、それだけ将来の可能性が広がっている、ということだと父親は思っていた。

色んなものに挑戦して、これだと思うものを見つけて、そして将来に向かって羽ばたいてほしい。

それが父親の願いだった。

妻である母親も、同じ気持ちだと思っていた。

異様にぎらついた目で息子に勉強を強いている妻の姿を見るまでは。

「治ちゃんは天才なのよ！もつともつと勉強して、いい大学に入れて、もつともつと有名にするのよ！」

「そういうのは治の意志で決めるものだろう！私達が押し付けるものじゃない！」

両親の諍いが始まったのはその頃だった。

治を有名にしたい母親と、将来の道は自分で選んでほしいと思っ
ている父親。

2人の正反対の意志はぶつかり合っ
て留まるところを知らない。

子ども達の前ではそんな素振りを一切見せないものの、夜になつて子ども達が寝静まる頃を見計らって、近所にも子ども達にも全く配慮をしていない夫婦喧嘩をする。

弟は怯えてお兄ちゃんの布団に潜り込んでくるし、治は治で喧嘩の理由が自分であるとして目を閉じ耳を塞ぐ。

仲の良かった友達が離れて行き、行きたくもない塾に行かされ、家に帰れば両親の聞きたくない諍いを聞かされ……。

治の幼い心はどんどん削られていく。

両親が離婚したのは、治が小学2年生になつたばかりの頃だ。

春から夏にかけての、少し日差しの強い日。

母方の祖父母の家に突然連れていかれ、1カ月ほどそこに滞在し、戻ってきた頃には両親の離婚は決定されていた。

まだ4歳だった弟の賢は、泣いていやがった。

いやだよう、いやだよう、みんなでいっしょにいたいようつて泣き喚く賢と、啞然とする治を無視して、両親は子ども達の親権について話し合っている。

きつとそれについても何度も話し合っていたけれど、ずっと平行線のままだったのだろう。

どちらが子どもを引き取るかで散々もめて、裁判にまで発展していった。

それはまだいい。

大人同士の争いは裁判所ついでというところで、第三者が話を聞いて判

断するところだということは、天才少年の治ならちゃんと理解していた。

しかし理解していることと、納得しているということは同じようで全く違う。

大人達は子ども達の意見なんか聞こえないふりをして、勝手に話を進めていく。

みんなと一緒にいいって泣いている、まだ幼い賢のことなんか見えていないみたいに、話が進められていく。

「治ちゃんは私が引き取ります。あの子の環境を整えてあげられるのは、私だけです」

「お前は治に強いているだけだろう！そうやって押し付けて、治が壊れたらどうするんだ！」

「仕事で忙しくて滅多に帰ってこない貴方に言われたくないわ！」
「治が嫌がっていることに気づいていないお前が言うな！」

「父さん、母さん」

もう限界であった。

幾ら天才少年と言えど、心は小学2年生の子どもと同じなのだ。

知識量は他の小学2年生と比べものにならなくとも、治はまだ小学2年生なのだ。

両親の諍いを見て、耐えられるはずがないのだ。

本当は賢のように泣き喚きたかった。

みんなと一緒にが無理なのは分かっていたけれど、分かっているも一緒がいいのは治だつて同じだった。

両親の仲がいいところが見たいのは、子どもとして当たり前だった。

母親と父親が喧嘩をするところを好んで見る子どもなんか、いるはずがない。

それなのに両親は、治が小学2年生であるということが頭からすぼーんと抜けていたようだ。

この日ほど、治は自分の才能を恨んだことはなかった。

自分はただ勉強をするのが好きなだけだったのに、知らないことを

知るのが好きなかっただけだったのに。

一体何が両親を狂わせてしまったのだろうか。

「僕は、父さんについていくよ」

裁判では、子どもは母親と一緒にいるものだという単純な理由で、治と賢は母親に引き取られるという判決が出た。

母親は勝ち誇ったような笑みを浮かべていたが、治はそれを拒否したのである。

両親も裁判員も驚いていたし、弟もびっくりしていた。

考え直さないかと母親があの手この手で治を引き留めようとするが、治は頑として受け入れなかった。

お兄ちゃんと一緒にいられないと理解した弟は、自分もお父さんと一緒に行くと言いがみついたが、治は賢に言った。

「父さんも母さんも離婚して他人に戻ってしまうけれど、それでも僕達にとっては1人ずつしかいない両親なんだよ。僕達の存在が、4人が家族だったっていう確かな証拠になるんだ。それを途切れさせないためにも、僕は父さんのところで、賢は母さんのところで暮らそう。大丈夫、いつかきつと元に戻れるから……」

そう言っただけで弟と母を納得させた治だったが、最後の言葉は弟を慰めるための嘘である。

きつと一生、自分達が一緒に暮らす日が戻ることはない。

元には戻れない。

見えない絆は「物」ではないのだ。一度壊れてしまったら修復するのは難しい。

そもそもこれは建前に過ぎない。

治は母親と一緒にいたくはなかったのだ。

まだ父親の方がマシだったから、父親と一緒にいると言っただけに過ぎないのだ。

治はずっと、両親の争いを見て、聞いていた。

争いの理由も、離婚の原因も、全て治なのだ。

治を有名にしたい母と、飽くまでも普通の子として育てたい父。

そこに、賢の存在は欠片も見当たらなかった。

治にとって賢は護りたい大切な弟なのに、治ちゃんが賢ちゃんを護るのよって、治はお兄ちゃんになるんだからなって言ったのは両親なのに。

それなのに2人とも言い争っている最中、一言だつて賢のことを話題にしたことはなかった。

裁判の時だつてそうだ、2人も裁判员も治、治、治つて治のことばかりで、みんなと一緒にいたいって泣いている1番幼い賢のことなんて誰も気に留めていなかった。

賢をずっと守ってきたのは、誰よりも賢かつた治だけだつた。

賢はずつと、おかあさんもおとうさんもおにいちゃんも、みんないつしよがいいつて言つていたのに。

ずつとずつと、家族の誰よりも家族の行く末を案じていたのは賢だつたのに。

治が両親を嫌っているのは、そう言つた理由だつた。

サーバ大陸を目指して、ホエーモンの胃袋の中にいた時に交わした、大輔との会話。

両親の離婚というトラウマを抱えているせいで、人と争い合うことを嫌う弟が初めて喧嘩をした相手は、サッカー部の後輩だつた。

そのサッカー部の後輩に、初めて自分の気持ちを吐露した。

両親が嫌いだと。

優しい賢を泣かせておきながら、気にも留めずに治を自分の手元に置いておくことばかり考えていた両親を、好きになれるわけがないだ。

それでも治はまだ小学2年生なわけで、親元を離れて暮らしたいなんていう願いが聞き届けられるわけがない。

治の選択肢は、父親以外いなかった。

母親は治を有名にすることしか考えていなかった。

2人には治だけではない、賢だつていたのに、2人の目には治しか映っていなかったのである。

治は、それがどうしても許せなかった。

……それが賢を更に悲しませるものだと、分かっているながら。

「……あれ、治先輩？」

「っ、光子郎……」

夜寝る前に水を飲んでしまったせいなのか、光子郎はトイレに行きたくなって意識を急浮上させた。

しよぼしよぼする目を擦りながら何気なく辺りを見渡すと、テントモンがちょうど寝返りを打ったところであった。

苦笑し、眠気を訴える身体を叱咤しながら立ち上がって、他の子ども達やデジモン達を踏まないように慎重な足取りで部屋の外に出て行くと、そこにはサッカー部の先輩である治がいた。

ピッコロモンの屋敷は、結界の中にある森のエリアの、高い岩山の上にある。

その屋敷はドーナツのように真ん中がくり貫かれた円柱の形をしており、円の外側が部屋に、内側は中庭のようになっていてぐるりと柵で囲われていた。

その柵の間から足を出して、治が夜空を眺めている後ろ姿を、光子郎は見た。

治の名を呼ぶと、まるで魂が何処かへ飛んでいたかのように、治の身体が跳ね上がる。

相手が光子郎だと分かって治は罰が悪そうにしていたが、光子郎は特に気にすることはなく、どうかしたんですかと問いかけた。

「……ちよつと、眠れなくてね。そつちは？」

「トイレに行こうと思いましたが……あれ？」

ふと、光子郎は座っている治のズボンに違和感を覚えて、じっと目を凝らす。

Tシャツの下が薄らと光っていた。

それを指摘すると、気づいていなかった治は慌てて背中の方のシャツをめくる。

デジヴァイスが光っていた。

この光り方は見覚えがあった。

太一と丈の紋章を見つけた時に、彼らのデジヴァイスが光ったのと同じ光だ。

そう言えばピコデビモンがこの辺りに紋章が2つも隠されていると言っていたっけ、と思い出した治と光子郎は互いに顔を見合わせる。

「……黙って出てきちゃいましたけど、大丈夫でしたかね」

「そうだな……ガブモン達、きつとどうして自分達も連れて行ってくれなかったんだって怒るだろうな」

そう言いながらも2人の足取りは止まらず、デジヴァイスが導くままに歩を進めていく。

広大な砂漠に隣接していた、緑が生い茂るエリアはピッコロモンの結界のお陰で外からは見えないようになっていた。

エテモンに見つかる可能性は少ないが、このエリアに生息しているであろう夜行性のデジモンのことを考えればパートナー達は連れてきた方がいいはずなのだが、それでも2人は戻ろうとしなかった。

「太一さんは勇気、丈さんは誠実、ミミさんは純真……1人1人形も意味も違う。僕のはどんな紋章なのかなあ。治さんはどう思いますか？」

「……………」

「……治さん？」

「っ、ああ、ごめん。ぼーっとしてた……」

「……大丈夫ですか？顔色があまりよくないように見えますけど」

「そうかな？月明かりのせいだと思っけど……」

それよりも紋章の話だっけ、と治は笑顔で話を逸らす。

「どんな紋章か、か……考えたことなかったな。光子郎は？」

「そうですね……僕は考えすぎて結局まとまらない感じです。勇気とか誠実とか……何となく太一さんや丈さんらしいなって思ったら、だとしたら紋章はそれぞれ僕らに相応しい形をしているのかなって……だったら僕に相応しいものって何だろうって考えたら……」

「……自分に相応しい形、か」

光子郎の生き生きとした顔や、弾む口調に、治はこっそりと自嘲した。

この後輩の言う通り、紋章の名前や形がその人に相応しいものを象っているのだとしたら……。

——僕に相応しい形つて……何なんだろう。

自分には何の取り柄もない。

ただ、他の人よりも成績がいいだけ、運動が出来るだけ。

でもそれは個性でも何でもない。

個性というのは、その人にしかないもの、その人にしか出来ないもののことだ。

例えば太一は、みんなが躊躇するような壁や溝を、先陣切つて飛び越えていくような奴だ。

人はそれを無謀と呼んだり勇氣と呼ぶ。

よくも悪くも無鉄砲で、後先考えずに行動して痛い目に合うこともしばしばだ。

でもそんなことでへこたれたり落ち込んだりする太一ではない。

失敗しても、まあいつか！と言つて豪快に笑い、またチャレンジする。

太一を尊敬している後輩達は少なくないし、物怖じしない性格からか友達も多い。

間違つていると思つたら、上級生だろうが先生だろうが食つてかかつていくその姿は、まさにリーダーに相応しいと思つていた。

治も、太一を尊敬している友人のうちの1人である。

自分には持つていないものを、太一は沢山持つている。

自分には出来ないことを、太一は平気でやつてのける。

確かに成績も運動神経も太一よりは上かもしれないし、それは自分も太一も自覚しているところではあるものの、それでも治は太一には敵わないと思つていた。

劣等感を抱いていないと言つと嘘になるが、それよりも尊敬や憧れの念が強いのだ。

だから太一が紋章を手に入れ、それが勇氣だと知つた時、太一に相

応しいと素直に納得した。

納得したからこそ……自分が惨めに思えてくる。

「……ぱい、治先輩……治先輩！」

「っ！」

思考の海に沈んでいた治を引き戻してくれたのは、光子郎の声である。

は、と意識が引き戻され、無意識に歩を進めていた治は立ち止まった。

「大丈夫ですか？ やっぱり出直した方が……」

「……いや、考え事をしていただけだ。ここまで来たのに、今更引き返すのも面倒だよ。このまま行こう」

心配する光子郎に無理やり笑顔を浮かべながら、治は再び歩き出す。

光子郎は何か言いたげに、遠ざかっていく治の背中に手を伸ばして口を開いたが、しかし結局何も言わずに口を閉ざし、駆け足で治を追いかけていった。

同時に、2人のデジヴァイスの光が更に強まる。

「治先輩！」

「ああ、近いみたいだな」

デジヴァイスの導きを頼りに、2人の子ども達は先を急ぐ。

がさがさ、と草むらをかき分けて行きながら、光が導くままに足を進めていけば、あ、という眩きが2人の口から同時にもれた。

光が差し示している先にあったのは、井戸だった。

砂漠に掘られた井戸、つまり、ピッコロモンの結界の外だ。

どうしよう、と2人は顔を見合わせる。

ピッコロモンの結界のお陰で、エテモンに見つからずに休養できているのだが、外に出れば忽ちエテモンに居場所を察知されてしまう。やはりパートナー達と一緒に来ればよかったか、と後悔したが、ここまで来て引き返すのも悔しい、と妙な意地とプライドが2人の心をちくちくと刺激してくる。

「……………」

「……………」

ちよつとだけ、ちよつとだけなら出てもいいんじゃない？つて悪魔が2人の耳元で囁いてくる。

紋章をデジヴァイスに収めるだけ、結界の外と言ってもほんの数メートルしか離れていないし、と誰に向かつてなのか分からない言い訳を心の中に浮かべながら、2人は意を決して結界の外に出た。

さく、さく、さく、と細かい粒子を踏みつける静かな音が、肌寒い砂漠の夜空に吸い込まれていく。

強くなつていくデジヴァイスの光は、井戸のところでひとときわ強く輝く。

中を覗き込むと深淵が広がっており、底を覆い隠す闇が治と光子郎を見つめているように見えた。

「ごくり、と光子郎は息を飲む。

「……………ここにあるんですかね？」

「デジヴァイスはそう示しているね……………よし」

意を決した治は、井戸の中に通じている桶がぶら下がっているロープを手に取り、積み上げられている石煉瓦に足をかけた。

え、つて光子郎は目を見開いたが、そんな後輩に構うことなく治はロープにしがみつくと、慎重にロープを伝って降りて行った。

光子郎はどうしよう、どうしようつて一瞬だけ狼狽えたが、何の躊躇もなく降りていく治を見て覚悟を決める。

治の頭の上にいるのは申し訳ないが、この際そんなことは言っていられなかった。

月の光が届かず深くなつていく闇の中を、目を凝らしながら少しずつ下がっていくと、周りの石煉瓦の壁が突如として光り出した。

ぎよつとなつて降りるのを止めると、光はすーつと収縮されていきながらロープに掴まっている2人の周りをくるくると回り始めた。

小さくなつていく光に、やがて2つの色が浮かび上がる。

1つは青、1つは紫。

2人の周りをくるくる回りながら近づいていき、青いものは治の、紫のものは光子郎のデジヴァイスにそれぞれ収まった。

ロープにぶら下がっている状態で確認するのは危険なので、2人は急いで上に上がる。

井戸から出て、来た道に戻り、結界の中に入る。

腰につけていたデジヴァイスを手に取り、適当にボタンを押すと先ほど収まった紋章が浮かび上がった。

治の紋章は円の中心に波打った線が縦に入っており、円の左右にも上下の突起物がついていた。

光子郎の紋章は、大小2つの丸があり、眼鏡のように弧を描いた線で繋がっていた。

「これが、僕の紋章……！」

「……………」

光子郎が興奮を抑えようとしながら声を振り絞っている。

デジヴァイスを握りしめている手が震えているのが分かる。

純粹に喜んでいる光子郎を尻目に、治の表情はとても硬い。

じつと紋章を見下ろしている治の目はとても険しかったのだが、光子郎は自分の紋章に夢中になっていた光子郎は気づかなかつた。

『全くキミ達は2人とも何を考えているっぴか!!』

戻ってきた治と光子郎に降ってきたのは、ピッコロモンの雷である。

紋章を手に入れた治と光子郎は、空が白み始めていることに気づいて慌ててピッコロモンの家に戻ったが、一足遅くピッコロモンに見つかって叱られている。

ピッコロモンの両隣には怒っている様子のガブモンとテントモン。

目を覚ましたらパートナーがおらず、発狂寸前に至りながら仲間達を叩き起こして、治と光子郎を探し回っていたらしい。

騒がしきで目を覚ましたピッコロモンは、心配せずともすぐに戻ってくる何もかもを見透かしたような言い方で子ども達を宥めてくれたそうだ。

今すぐにも治と光子郎を探しに行きたい、と半狂乱になりかけて

いるガブモンとテントモンを制しながら待つこと数時間。

治と光子郎はまだ誰にも見つかっていない、誰にもバレていないことを祈っているような顔で、こそこそと戻ってきた。

無事な姿にホツとするやら、黙って出て行ったことに対する怒りやらで、子ども達はもちろん。パートナー達はこそこそ戻ってきた2人を押し倒す勢いで抱き着いてきた。

ひっくり返った治と光子郎に説教をかましたのは空と丈である。

ミミは心配したんですよう、なんて可愛いことを言ってきたが、それだけだったのが救いだった。

絶対安静の太一は、勝手に抜け出して紋章を手に入れてきた治と光子郎に対して怒ることも呆れることもなく、豪快に笑って済ませ、紋章ゲットおめでどうという言葉だけもらった。

最年少組にも知らせようとしたら、生まれる気配が全くなかった賢のデジたまがいつの間にか孵って、しかも一気にパタモンにまで進化していたことに、子ども達もデジモン達も大変驚いた。

何故ならデジたまから生まれると、どのデジモンも例外なく幼年期のデジモン……つまり赤ちゃんのデジモンとして生まれてくるものだ。

まさかまさかパタモンの姿のまま生まれてきたのか、なんて阿保なことを考えていたら、賢が種明かしをしてくれた。

生まれた時は確かに赤ん坊だったが、一気に進化してパタモンになったという。

それにはピッコロモンも驚いた。

選ばれし子ども達のパートナーデジモンは、確かにデジヴァイスの恩恵もあって従来のデジモンと比べると進化するスピードがとても速い。

通常のデジモンたちは長い年月をかけて次の世代へとその姿を変えらる。

しかしそれでは闇を晴らすためには時間がかかりすぎるために、ゲンナイ達は異世界から太一達を呼んで、デジモン達が急速に進化できるように対応したのだ。

急激な進化をするために、その姿を維持することが出来ずに退化をするというデメリットを抱えているパートナーデジモン達だが、それにしたって生まれてから直後に、一気に二段階も進化をするのはピッコロモンも予想外だった。

それだけではない。

一体何があったのかは知らないが、ファイル島を出る直前からずっと喧嘩をしていた大輔と賢が、いつの間にか仲直りをしていたので。

一体何があったんだ、と丈が啞然としながら尋ねるが、2人は笑って誤魔化すだけだった。

「……それで、2人の紋章ってどういう意味になるんだ？」

ピッコロモンから3時間にわたる説教を受けた治と光子郎は、正座をして痺れている足に悶えながら仲間達の下に戻ってきた。

3時間ずっと正座しっぱなしであったために、内側からじわじわと広がっていく痺れで歩くことが出来ず、2人して四つん這いになりながら太一が使っていた部屋に赴いた。

未だ包帯が痛々しく頭に巻かれている太一だったが、負傷したことを全く感じさせない笑顔を浮かべながら戻ってきた治達に労いの言葉をかけてくれた。

他の仲間達と、それからすっかり元気を取り戻した最年少達が太一の見舞いを兼ねて朝食を取っていた。

帰ってきた治と光子郎に、空と丈が再度軽い説教をかまし、もうピッコロモンから散々説教を受けただろうからいいだろうと太一が止め、ガブモンとテントモンはもう絶対絶対自分達を置いていくなど詰め寄ってきて、それぞれに返事をしてようやく朝食にありつけた。寝不足に正座で痺れた足のコンボはキツイが、空腹を訴えている身体のためにも朝食はしっかりと取らなければ。

太一がピコデビモンに訪ねたのは、治と光子郎が朝食の食パンと牛乳を頬張っている時だった。

ピコデビモンはメロンパンを美味しそうに頬張っており、倅せで蕩けている表情を浮かべていたが、太一に話しかけられたことで我に返った。

慌ててメロンパンをもごもごと飲み込んで、太一の質問に答える。
『ええとですね、ここにあったのは友情と知識だそうです。お2人のデジヴァイスを見せていただけますか?』

そう言われた治と光子郎は食パンを頬張りながら、腰につけているデジヴァイスを手に取り、ボタンを操作して紋章のデータを映し出す。

『ふむふむ、ええと、こちらの方……』

『コウシロウはんや、ワテのパートナーやで』

『コウシロウ様のは知識となります。で、眼鏡の方は……』

『オサムだよ、俺のパートナー』

『オサム様のは友情の紋章ですね』

「知識と友情かあ。2人らしいな」

太一が笑う。

これで紋章は5つ集まり、残るは空と最年少3人の4つとなった。着々と集まってく紋章に、子ども達の気分も色々な意味で高揚していく。

新しい力を手に入れるわくわくとした感情と、エテモンとの決戦が近づいているという緊張感がごちゃ混ぜになって不思議な気持ちだった。

紋章の力が暴走して、グレイモンが恐ろしいデジモンに変貌したのを目の当たりにした子ども達ではあったが、太一もアグモンも悪くないと分かっているから子ども達はそれほど気にしている様子はない。力は使い方を間違えると、自分の身を滅ぼすことになる、というのはファイル島の最終決戦で既に学んでいたからかもしれない、と丈は後に語ってくれた。

「……………」

紋章について話し合っている子ども達の会話に混ざっていない子が1人いる。

治だ。

デジヴァイスを握りしめ、ディスプレイに浮かんでいる紋章をじつと見下ろしている。

仲間達の言葉は、思考の海に沈んでいる治の耳には届いていなかった。

治の紋章の意味は“友情”だと、ピコデビモンは言っていた。それを聞いた時、治は何かの間違いだと本気で思った。

何もない自分が、自分のことしか考えられない自分の紋章が、友情？

友人が少ない自分が、親しい友人が太一しかないような自分が？ デジヴァイスを握る手の力が、更に強くなる。

世界の命運が、全てここにいる9人の子ども達と9体のデジモン達の肩に重くのしかかっている。

それを改めて思い知らされたような気がして、治の表情は更に険しくなった。

——しかし、これは……

『……オサム？大丈夫？』

「お兄ちゃん？」

黙り込んだ治に気づいたのは、パートナーであるガブモンと弟の賢だった。

両隣から顔を覗き込まれ、我に返った治は2人に何でもないとだけ返す。

本当に？つて2人とも同じ顔をして聞いてくるものだから、それがおかしくて治は吹き出してしまった。

「本当に何でもないと。自分の紋章を手に入れて、嬉しくて話を聞いていなかっただけさ」

「……………」

『……分かった。そう言うことにしといてあげるよ』

太一や空なら、その言葉できつと誤魔化されだろうが、相手はパートナーと弟だ。

治が誤魔化していることなどお見通しなのだろう、賢は困ったように眉尻を下げ、ガブモンは眉間に皺をよせている。

しかし2人は空気を読んで、それ以上言及することはなかった。

太一達の会話に再び参加する2人を見守り、治は再びデジヴァイス

に目を落とす。

——これは、ある意味チャンスなのかもしれない。

何もない自分がこの世界で何が出来るのか、ずっと考えていた。ここに避難してきた日の夜、自分達は何のために選ばれたのかピッコロモンに問い詰めたことがあったが、結局聞き出すことはできなかったのだ。

問い詰めた時に一瞬だけ見せた表情を、治は見逃さなかった。

ピッコロモンは、自分達の知らない何かを知っていると。

しかし結局ピッコロモンは答えてくれなかった。

言いたくないと言うのならそれ以上追及することはできない、と治は諦めたのだが、それでも空っぽの自分が何故選ばれたのかが分からなくてずっともやもやしていた。

ゲンナイは想いの強さが決め手だったと言っていたが、あの口調では絶対他にも何か隠している。

それを知るためにも、自分の紋章が“友情”であることに意味があるはずだ。

(……何もない僕でも、出来ることがあるのなら)

選ばれた意味があると言うのなら、この紋章と向き合ってみよう。

治は目を閉じ、深呼吸を1つ。

ゆっくりと目を開けて、デジヴァイスをズボンの裾に引っかけた。

「……あれ？ピコデビモン、何処行った？」

「何か通信入ったつって、さっき慌てて出て行ったぜ」

『……ええ、先ほど4人目と5人目の子どもが紋章を手に入れました。紋章集めは順調ですよ。全ての紋章が揃いましたら、絶大な力が手に

入ります。なあに、子ども達はすっかりワタクシめを信用していらっ
しやいますよ。ヒヒヒ……』

悪魔の子どもは、人知れず嗤った。

リアルとデータ

この世界に来てから、この夢を見るのは一体何日目だろうか。

上下左右、何処を見渡しても真つ暗な空間は、最早見慣れた夢の世界だ。

大輔以外誰もいない、光さえ飲み込んでしまいそうなほどの暗黒は果てすら見えない。

それなのに不思議と怖いとか寂しいとは思わなかった。

この夢は、一体何なのだろう。

何度も見ているけれど、この夢が何を示唆しているのか、大輔にはさっぱり分からなかった。

夢と言うのは平たく言えば、浅い眠りの最中に行われる記憶の整理であり、これまで自分が体験した出来事や言ったことのある場所が夢として再生されている状態のことを言う。

また、年代によって見る夢が若干異なるという研究データも出ており、大輔ぐらいの年齢だとテレビや絵本などの外部刺激で夢の内容が影響されることが多いのだが、完全な真つ暗闇の夢と言うのは一体何を意味しているのだろうか。

暗闇は怖くはないが、好きでもない。

今よりも幼い頃から、大輔は凡その人が「見えないもの」を見て生かしていた。

お父さんもお母さんもお姉ちゃんにも見えてない「見えないもの」は、昼も夜も関係なく見えていたのだが、夜は特にその数が多かった。

街灯のない夜の道、静まり返った公園、人気の少ない場所。

灯りがないにも関わらず、夜の闇にくつきりと浮かび上がって、急に遭遇すると心臓が止まるぐらいびっくりする。

そんな時はいつもお姉ちゃんにしがみついていた。

お父さんもお母さんもお姉ちゃんも見えていない、見えないものが見えている大輔を、家族は誰も否定しなかった。

“それどころか面白がつて、何が見えたの？とか何がいたの？なんて聞いてくる始末だ。

大輔も家族が否定しないから素直に見えたものを両親やお姉ちゃんに伝える。

だから家族は大輔がしがみついてきた時は、見えないもの“を見た時だと理解してくれていた。

お陰で“見えないもの“を怖がることも少なくなっていく、夜に遭遇しても驚かなくなっていた。

それでも、嫌いなものは嫌いだ。

ぼう……

暗闇だけの空間、大輔の背後に暖かい光が浮かび上がる。

振り返る。大きな光が浮かんでいた。

今までは大輔の顔ぐらいの大きさだったのに、今日は何故か大輔の3倍ほど、大人の男性ほどの大きさがあつた。

その光の中心から、ぼとんと1つの陰が生み出される。

その陰は少しずつ大きくなっていき、啞然としている大輔を尻目だんだんシルエットが形作られていった。

それは、大人の陰だった。

真っ黒の影に塗りつぶされていた陰は、髪の毛の先や身に着けている服の輪郭など細部にいたって浮かび上がっている。

すー、と。

陰の影が薄くなって、色づいていく。

服の色、髪の色、靴やズボンの色、そして肌の色が形成されていくにつれ、大輔の目が見開かれていった。

「……お父さん……？」

眩かれた、苦々しい思いが込められた言葉。

ぎり、と歯を食いしばって、姿を現したその陰を睨みつける。

そこにいたのは、大輔が大っ嫌いな父親だった。

お姉ちゃんを泣かせた、大っ嫌いなお父さん。

お母さんも嫌いだけれど、お母さんを止められなかったお父さんも同罪だと、大輔は両親を2人とも嫌っていた。

2人のせいでお姉ちゃんは……。
光が消える。

お父さんが1歩、前に出る。

大輔は2歩、後ろに下がる。

そんな大輔を見て、お父さんは悲しそうに笑った。

……その笑顔に違和感を覚えた大輔は、胸の前で握っていた両手の握りこぶしを若干緩め、しかめっ面もきよとんとした顔に変わる。

じつと見つめ合う、大輔とお父さん。

……いや、違う。

「……誰？」

お父さんじゃない。

お父さんに似ているけど、この男性はお父さんじゃなかった。

髪の色も顔つきもお父さんにそっくりだけれど、お父さんじゃない。
い。

一体誰だ。警戒心が一気に跳ね上がり、更に距離を取る大輔に男性は悲し気な笑みを崩さない。

だがその歩みを止めることもなく、1歩1歩踏みしめながら大輔に近づいてくる。

大輔は社交的だが、その反面得体のしれないものに対して警戒心が強い。

さつきよりも強い拒否反応を示しながら男性を睨みつける大輔に對し、しかし男性は気にも留めず大輔に近づいてくる。

……逃げればいいのだ。

背を向けて、走り出せばいいのだ。

真つ暗闇の空間、何処へ行けばいいのか分からないが、走って、走って、走って、逃げればいいのだ。

子どもの足で大人から逃げられるわけがないけれど、嫌なら、怖いのなら、得体が知れないのなら逃げればいいのだ。

……それなのに大輔の足は後ずさりすることしか出来なくて、見つ

めてくる男性から目を逸らすことも出来ない。

とん、

1歩踏み出してくる。

大輔は動けない。

とん、

また1歩踏み出してくる。

距離にして、約2メートル。

とん、

とん、

1メートル。

男性はその場で立ち止まると、一拍置いてその場に片膝をついた。たじろぐ大輔。やはりその目から逃げる事が出来ず、その場に縫い付けられたように動けなかった。

じ、っと見つめ合うこと、約数秒。
す、

立てた膝に乗せていた手を伸ばし、大輔の頭をぽんと軽く叩いた。思ってもみなかった行動をとった相手に、大輔は目を白黒させる。がしがし、と乱暴に撫でられ大輔の首がガクガクと揺らされた。徐に口を開き、そして男性は、

——ごめんな
と、言った。

「じゃあ、ピッコロモン。世話になったな」

治と光子郎がそれぞれの紋章を手に入れてから1晩経って、翌日の朝。

子ども達安全なピッコロモンの結界から出て、砂漠のエリアにいる。

からつとした空気の風が吹き、遮るものが何もない空にはガラガラと砂漠を照り付ける太陽が浮かんでいる。

うーん、と太一は腕を天に突きあげるように伸ばすと、背中の方がぽきつと鳴った気がしててと云いながら腰を押さえて前かがみになる。

「ご飯を沢山食べて進化を果たしたアグモンが、慌てて太一を支える。」

太一の頭からは包帯が取れて、傷はすっかりなくなっていた。

『……本当に行くつぴか？本当ならあと1日ぐらい休んでほしいつぴが……』

「ありがたいな、ピッコロモン。心配してくれてさ。でも俺の怪我でこれ以上遅れるわけにはいかないだろ」

無理はしないからさ、と笑う太一を、ピッコロモンだけでなくパートナーのアグモンも他の子ども達も心配そうに見つめる。

特にサッカー部の後輩である大輔や、妹のヒカリは他の子ども達の比ではなかった。

太一が怪我をした時、最年少の3人は錯乱状態に陥っていたために、太一が怪我をしていたことを知らなかった。

知ったのは、ピッコロモンの館に運び込まれて、目を覚ました後だ。隠さないブラコンのヒカリはそれを聞いた途端取り乱し、太一が寝

ている部屋に突撃しそうになったらしいが、大輔と賢が何とか宥めた、と聞いて太一は腹を抱えて笑ったのは完全な余談である。

『子ども達、そしてデジモン達。タイチが無茶をしないようにしっかりと見張るのだつぴよ』

「分かっていますよ」

『任せてよー』

頭に怪我をした子どもを連れて駆け込んできた子ども達を見た時、ピッコロモンは顔には出さなかったものの心臓が止まりそうな想いをした。

自分達の手に負えなくなってしまったほどに大きくなりすぎた闇を祓うために、無理やりの形でこの世界に召喚した、何も知らない子ども達。

その子ども達をサポートするために、ピッコロモンを始めとしたゲ

ンナイに雇われたり頼まれたりしたデジモン達がいるというのに、みすみす怪我をさせてしまった。

このエリアから離れるわけにはいかなかったとはいえ、ピッコロモンは自分の無力を呪った。

ピコデビモンもかなり落ち込んでいたし、本当ならあと1日2日ぐらい太一には休んでほしかったのだが、まだ紋章は全て集め終わっていない。

この世界を侵食している闇も着実に広がっている。

子ども達もそれを分かっているから、先を急ぎたいのだ。

早くこの世界を救うために、そして何より大切な人達がいる自分達の世界に帰るために。

『ピコデビモン、きつちりしつかり案内するっぴ。でも無理はさせてはならないっぴよ』

『もちろんですとも！この世界の救世主たる子ども達を、これ以上危険な目には合わせません！ワタクシに戦う力はありませんが、ワタクシに出来ることは全てやらせていただきます！』

太一を怪我させてしまったことを気に病んでいるピコデビモンが、翼を飛ばたかせながら鼻息荒く答えている。

頼んだっぴ、と再度念を押したピッコロモンに別れを告げ、子ども達は6つ目の紋章を探すべく、広大な砂漠を再び歩き出した。

『一体どうなってるのおー！』

野太い女口調の声が悲鳴のように響く。

『選ばれし子ども達がいるのは何処なのよおおー！』

エテモンだった。

コロモンの村で破壊の限りを尽くしたエテモンは、子ども達もコロモン達もいつの間にかいなくなっていたことに気づいて、部下を引き連れて子ども達を探していたのだが、一向に見つからないのだ。

サーバ大陸中に張り巡らされているダークネットワークさえあれば、簡単に見つかると思っていたのに、引つかかったのは1度だけで

それ以降何の音沙汰もないのである。

それどころか今日になって子ども達を指し示すマークが、サーバ大陸の彼方此方に出現しだしたのだ。

最初は機械の故障だと思っていた。

東の方でマークが反応したからそっちに行ってみたのだが、その場所に着いた途端に今度は反対側、西の方で反応があった。

仕方なくそっちに行ってみたが、今度は北の方角に反応した。

イライラしながら北に向かったものの、到着したと同時に反応は消え、今度は南で。

どうなってるの！と苛立ちを隠さず、とりあえず元の場所に戻ってみれば、今度は世界中でほぼ同時にマークが点滅しだしたのである。

またコンピュータを叩き壊しそうになったエテモンを何とか宥め、比較的機械に強いガジモンが代わりにパソコンを調べたのだが、どうやら原因はコンピュータの故障ではなさそうだった。

『何者かがハッキングを仕掛けて、ここのコンピュータのプログラムにウイルスを仕込んだみたいです！』

『ウイルスですってえええ？ウイルス種のアチキのコンピュータに、ウイルス仕込むなんていい度胸してくれてんじゃない！何処のどいつよ、ウイルスなんて送り込んだ奴は！』

『そ、それが相手の腕がいいみたいで、追跡できません……』

『キイイイイイイ!!なあに寝ぼけたこと言ってるのよ!!世界の！支配者たる！スパースターのアチキに！喧嘩売ってきてんのよ!?!何が何でも相手の正体を突き止めなさいよ!』

『は、はいいいい!!』

両手をわなわなとさせながら、弱音を吐くガジモン達を脅し、解析を急がせる。

しかしどこの誰が送ってきたか分からないウイルスのせいで、なかなか先に進めないようだった。

それでも、ガジモン達は言われた通りにした。

やっぱりできませんでした、という返事をする選択肢は、ガジモン達には残されていない。

もしも相手の正体を突き止めることが出来なければ、消されるのは自分達なのだと分かっているからだ。

弱い者には威張り散らし、強い者には媚を売るガジモンも、この時ばかりはついていくデジモンを間違えたなと後悔するが、色々遅い。

3時間後。

『……エ、エテモン様……ようやく突き止めました』

死に物狂いでウイルスが侵入してきた経路を辿り、やがて1体のガジモンが死にそうな目をしながらそう呟いた。

ガジモンが突き止めた個所に、青いマークが点滅している。

何処!?!とエテモンが身を乗り出すように、目の前のディスプレイに顔を近づけた。

反応している箇所に、エテモンの顔がみるみる険しくなる。

そこは、エテモンもよく知っているところだった。

『ピラミッド……ナノモンの奴ねええ? 散々痛めつけてやったつてのに、まだこのアチキに逆らう余裕があったつて訳? ふん、いいわよ。そつちがその気なら乗ってやろうじゃないの! 行くわよ、アンタ達!』

子ども達も見つけることが出来ず、邪魔も入ったという状況でエテモンの苛立ちは最高潮に達している。

今度こそナノモンも終わりだ、と疲れ果てたガジモン達は揺れるトレーラーの心地いい振動の中、眠りに落ちた。

『……僕が卵の間に、そんなことになってたんだね』

広大な砂漠を、いつエテモンに遭遇するか分からない恐怖と戦いながら、紋章を探すために歩き回る子ども達。

ぎらぎらと容赦なく降り注いでくる太陽を、傘で遮りながら先を急ぐ。

殿を歩いている最年少達は、上級生の後をついて行きながらお喋りをしていた。

ファイル島を出発してから一昨日辺りまでずーっと喧嘩をしていて、まともに喋っていなかった大輔と賢、同じ頃から口数が少なくなつて考え込むことが多くなつていたヒカリは、これまで黙つていた分を補うかのように喋りとおしている。

上級生達は、やっと元気を取り戻した最年少達に微笑みながらも、ちやんとついてきてねって注意した。

はい、つて返事をしたのは、つい一昨日までデジたまとして賢の腕に抱かれていたパタモンは、いつの間にかファイル島から出ていたことに大変驚いていたので、その説明をし終えた直後だった。

勿論、大輔と賢が一昨日まで喧嘩をしていたことも。

パタモンは当然驚いていた。

パタモンとエレキモンの喧嘩を見た時に泣き喚いていたほど、喧嘩が嫌いだったはずなのに。

嫌いな喧嘩をするほどに、譲れないものでもあつたのだろうか。

そう尋ねると、大輔はぐつと息を詰まらせたような表情を浮かべ、賢も困つたような顔で大輔と腕に抱いているパタモンを交互に見つめている。

ブイモンとヒカリ、プロットモンはそんな2人を見てキョトンとしていた。

「……ま、まあ、とにかく、パタモンが無事に生まれてよかったよなー」強引に話を誤魔化した大輔に、ブイモンは教えてくれよって詰め寄る。

ブイモンもパタモンと似たような状態で、ファイル島を出発して5日ほどは完全に深い眠りについていて、その後は徐々に徐々に覚醒していったために、ここ1週間近くの記憶が殆どないのである。

1度だけ、コロモンの村で賢のデジたまが行方不明になった際に、再度大声で喧嘩をした大輔と賢の音量で目を覚ましたのだが、その後再び眠気に襲われてまた記憶が途切れている。

大輔と賢が何故喧嘩をしたのか、ブイモンも知らないのだ。

ヒカリも、デビモンとの鬨いにて大輔がホイッスルを吹いてから蘇った、コロモンと既に逢っていた記憶に悩まされていてそれどころではなかった。

プロットモンは言わずもがな、ヒカリが心配で2人の喧嘩の内容を知らない。

1人と3体の目線が、大輔と賢に向けられる。

「……言いたくない」

唇を尖らせ、半目になりながら大輔はそう言った。

まるで拗ねているようなその表情にヒカリは吹き出しそうになったが、それをぐっと堪える。

「どうして?」

「……………」

こてん、と首を傾げながら尋ねてくるヒカリに、しかし大輔と賢はやっぱり口を噤んだ。

ちらり、とこつそり目線を向けるのは同じように大輔達を見てくるブイモンとプロットモンとパタモンだ。

今、大輔と賢の気持ちは1つになっていることだろう。

聞いてきたのがヒカリだけだったら上手く自分達の醜態をごまかして伝えることはできるのだろうか、原因が原因だけにおいそれと口にするのは憚られた。

だって2人が喧嘩をした主な原因は、パタモンなのだ。

命を懸けてデビモンを倒し、賢を護ったエンジェモンを、賢は拒絶してしまったのである。

それに怒った大輔が、いつもお姉ちゃんやっっている口喧嘩みたいになつと捲し立てて賢を責めたものだから、賢もかっとなつて言い返し、それで喧嘩になつてしまった。

両親の離婚というトラウマにより、喧嘩をすると二度と仲良しに戻れないと思ひ込んでいた男の子の、初めて行った喧嘩であった。

終わってみれば意外にもあっさりとしていて、本当に喧嘩をしていたのかと疑うぐらい、大輔ともいつも通りの会話を交わしていた。

あんなに恐れていた争いとは一体何だったのだろう、と拍子抜けし

たぐらいだ。

「……俺と賢だけの、秘密だから」

「え？」

「男同士の秘密なんだ。だから悪いけど、ヒカリちゃんにも言えないんだ。な？」

「……………」

「な？」

「……………うん」

『えー!?』

『何それ、ずるいー!』

しかしやっぱり本当のことを言うのは憚られる、と賢はどうしたものかと苦笑いを浮かべていたら、大輔が先に口を開いた。

男同士の秘密、という小学生男子なら誰もが懂れるであろう台詞を口にして。

最初は何を言っているんだと賢もポカンとしていたが、大輔が言い聞かせるように詰め寄ってきたから、その勢いに飲まれて思わず頷く。

ヒカリは流石男の兄弟がいるだけあって、『男同士の秘密』という言葉葉を聞いてあっさり引き下がった。

どうやら太一お兄ちゃんも、時々『男同士の約束』という言葉を持ち出して、ヒカリを置いてけぼりにすることがあるらしい。

『男同士の約束』には絶対的な約束や盟約みたいなものがあるらしく、これを破ったものには相応の罰が与えられるのだ、と『男同士の約束』が気になって一度だけ教えてとせがんだヒカリに、太一はそう言っただけで脅かして、結局教えてくれなかったのだとか。

だがヒカリは空気を讀んでも、デジモン達はどうだろうか。

『男同士の約束』、という小学生男子が懂れる言葉の意味など知らないデジモン達は、何で何でどうしてどうしてってそれぞれのパートナーにしがみついてくる。

太陽が照り付ける暑い熱い砂漠のエリアで、ただでさえ暑苦しいというのに引っ付いてこられたら溜まったものじゃない。

引っ付くな！と大輔はブイモンを引きはがそうともがいて、賢は腕から飛んで頭に乗ってきたパタモンに苦笑し、ヒカリは飛びついてきたプロットモンをまあまああって曖昧に微笑みながら宥める。

日常が、戻りつつあった。

そこは、切り立った崖に両側を挟まれた道だった。

ピコデビモンを先頭に、曲がりくねった道を進んでいくと、空のデジヴァイスが反応を示す。

こちらです、とピコデビモンは横道に逸れた。

人1人が通れるほどの細い道の先は少し拓けた空間になっており、そこには自然形成された周りの切り立った崖とは違う、人工的に彫られたような紋様があった。

それは、ハートの形をしていた。

空が自分のデジヴァイスを掲げながら近づいていくと、デジヴァイスの光の点滅が激しくなっていく。

紋章が強い光を放ち、他の子ども達の時と同じように縮小されて、空のデジヴァイスに収まった。

『こちらは愛情の紋章となります。ええと……』

『ソラよ！ソラの紋章は愛情なのね！ソラにぴったり！』

「……………」

『ソラ？どうしたの？』

「…………え？あ、ううん。何でもないわ」

空の紋章は、愛情。そう聞いたピヨモンは、厳しくも優しい空にぴったりだと思って、ニコニコしながら自分のパートナーを見上げたが、当の本人は何故か硬直していた。

デジヴァイスに収まった自分の紋章を、信じられないものを見るような目で見下ろしている。

急に黙り込んでしまった空を不思議に思ったピヨモンが、空の腕を何度か引っ張るとその刺激で我に返った空が、慌てて首を横に振っ

た。

こてん、と首を傾げて本当に？と尋ねてくるピヨモンに、空は無理やり作った笑顔を浮かべて何でもないと答える。

他の子ども達は、新たな紋章を手に入れた喜びで誰も空の様子に気づかなかった。

これで、6つ目の紋章が、子ども達の手に渡った。

残る紋章はあと3つ、最年少3人の紋章である。

「……あれ？」

ぴろん、と光子郎のパソコンにメールの着信音が鳴る。

背負っていたパソコンを下ろして、紋章を手に入れて喜んでいる仲間達に一言理を入れてから、パソコンを立ち上げた。

カタカタカタ、とキーボードとパッドを操作して、今しがた来たばかりのメールを開く。

「選ばれし子ども達へ……」

メールの見出しには、そう書いてあった。

光子郎がメールの見出しを口にした途端、6つ目の紋章を手に入れて若干浮かれていた子ども達が黙り込み、光子郎の周りに集まった。

「ピコデビモンの案内で、そろそろ愛情の紋章を手に入れた頃だと思う。私の名はナノモン。ピコデビモンと同じく、ゲンナイ様の下でサポートをしているデジモンだ……」

『ナノモンですっつて!?!』

メールを読み上げる光子郎の言葉に反応したのは、文面にも書かれていたピコデビモンだった。

光子郎を押しつけるようにパソコンのディスプレイに張り付こうとするから、テントモンが後ろから羽交い絞めをする羽目になった。

とりあえず落ち着かせてから、光子郎は再びディスプレイに目を通す。

そこには、こう書かれていた。

『紋章があった箇所が洞窟になっているはずだ。』

その洞窟は君達が今いる場所と、私がいるピラミッドがある場所までの道のりを短縮してくれる。

そこを通ってきなさい。ゲンナイ様もこちらに向かっている最中だ』

「……残り3つの紋章は私のピラミッドで管理しているから、安心しなさい。ピッコロモンから子どもが1人怪我をしたことも聞いたから、無理はしないように。医療設備も整っているから、到着次第精密検査をしてあげよう。ナノモン……だそうです」

「ピコデビモン、ナノモン知ってるのか？」

『もちろんです！ナノモンは成りこそ小さいですが、エテモンと同じ完全体のデジモンで、コンピュータの管理などを任されているのです！ナノモンのいるピラミッドにはとても大きなコンピュータがあって、そこでゲンナイ様の手助けをしているのですよ！』

ピコデビモンが言うのなら、このメールは信頼してもよさそうだと判断した子ども達は、目の前の洞窟に向かって足を踏み入れる。

洞窟内は、人の手が加えられたように整備されており、地面には煉瓦が敷き詰められて歩きやすくなっていた。

両側の壁と天井には、光子郎がアンドロモンの工場と、デビモンによってバラバラにされた際にとある遺跡で見つけた不思議な文字、デジタル文字が並んでいる。

パタパタ、とピコデビモンはとあるデジタル文字の前まで飛ぶと、そこをぐしぐしと擦った。

途端に、光源がないはずの洞窟内が明るくなる。

ぎよつとなる子ども達に、光子郎と治がアンドロモンの工場で得た知識を説明した。

この世界ではこの文字自体がエネルギーとなっている。

電気、という文字を書き込めば、それが電気エネルギーとなるのだ。

あの時光子郎の話聞いたのは治とミミとそのパートナー達だけで、他の子ども達は初めて聞いた内容だった。

「そんな……壁に描いたプログラムでそんなことができるなんて……コンピュータの中じゃあるまいし……」

「あながち間違っていないかもしれませんが。ゲンナイさん、言っただけじゃないですか」

「ここはパソコンを介して来ることが出来る異世界、でしたね。この世界全体はデータやプログラムが実体化した世界なんじゃないかって、僕は思ってます」

頭を抱えている丈に、治と光子郎が追い打ちをかけるかの如く畳みかけてきた。

本人達にそのつもりはないのだろうが、頭の固い丈を追撃するには十分である。

コンピュータの中の世界、と聞いて丈はますます項垂れたが、足元にいたゴマモンを抱き上げて平静を保とうとしている時点で、彼もこの世界に馴染みつつあることに気づいていなかった。

「……ここがデータの世界ってことは、私達自身も？」

「ええ、実態のない、データのみの存在です」

声が震えている空に対し、光子郎は淡々と述べる。

ここがコンピュータの世界だと言うのなら、今子ども達を構成しているものもデータ、つまり子ども達の実態がなくデータとして存在しているということになる。

「……実態がないって、生身がないってことか？」

「それって幽霊みたいなもの？」

「いや、幽霊ではないよ。自分の意識がデータ化されてコンピュータの中にいるってことさ」

「……それじゃあ、本当の僕達は何処にいるの？」

パタモンを腕に抱いた賢が、兄に尋ねる。

その表情は強張っており、パタモンを目の前で亡くした時の表情によく似ていた。

「もしも僕達の意識だけがここに飛ばされたんだとしたら……」

「ええ、身体は僕達が雪で遭難した時に避難した、あのお堂にあるのだと思います」

治と光子郎はぐるりとデジモン達を見渡す。

「デジモン達は、まさにデジタルモンスター。データ上の存在だったと言うわけです」

それは、あまりにも大胆な仮説であった。

ゲンナイが言っていた、コンピュータを介して来ることが出来る世界は、つまりコンピュータの中にある世界だと2人は考えたのである。

ここは日本ではない、この世界に飛ばされた初日に治が言い放った言葉に受けた衝撃と同じだけのショックが、子ども達を襲った。

大輔は自分の手のひらを見下ろす。

ぐーぱー、と握ったり開いたりしてみる。

その感覚は、自分達の世界にいた時と何ら変わらなかった。

だから1つの疑問が浮かぶ。

その疑問を言葉にして光子郎に尋ねようと口を開いた時、異を唱える者がいた。

「……俺はそうは思わないな」

子ども達の視線が一齐に声の主に向けられる。

太一だった。

その表情は重く、唇はきゅつと結ばれていて眉間に皺も寄っていない。

自分の仮説を否定されたと思ったのか、光子郎はちよつとムツとしながらどうということですかと尋ねた。

簡単だ、と太一は自嘲しながら自分の額に右手を沿える。

子ども達は、はつとなった。

太一の手が添えられた箇所は……。

「……俺達がデータの存在だったら、この痛みは一体なんだ？この世界じゃ痛みまでデータとして再現できるのか？だったら……ここにいる俺は、本当に八神太一なのか？」

「っ……」

それは、大輔が疑問に思つて、光子郎に尋ねようとしたことと、概ね一致していた。

大輔が思い出していたのは、クワガーマンに追いかけていた時のことだった。

思いつきりずっこけて、血が出るぐらい膝を擦りむいてしまった。サッカークラブでサッカーボールを追いかけていた時と同じよう

にすつ転んで、痛くて痛くて顔を顰めたことは今でも思い出せる。

空にもらった絆創膏のお陰で傷はすっかりよくなったけれど、もし自分達の身体がデータだというのなら、ゲームの主人公達みたいだったら、どうして怪我が痛かったのだろうか。

ゲームの主人公達は、怪我をしても血を出さないし痛がらない。

痛がっているのは台詞から伝わってくるけれど、画面のドット絵はそんな素振りを一切見せないのだ。

ゲームの世界なら、コンピュータの中なら、どうして自分は怪我をして、痛い思いをしたのだろうか。

治と光子郎に言いたかったことを、太一が代わりに言ってくれたので大輔はそのまま口を噤んだ。

ふと隣を見ると、ヒカリと賢が似たような表情を浮かべている。

もしかしたら、大輔と同じ疑問を思い浮かべたのかもしれない。

そんな最年少達に気づくことなく、全員の息を飲む音が静寂な洞窟内に響く。

そして、全員が互いの顔を見合わせる。

だって太一の言う通りなのだ。

太一が額を大怪我したのは、つい3日ほど前のことである。

額に瓦礫の破片が当たった太一はその場で気を失い、血も沢山流した。

傷跡はすつかり消えたものの完治したとは言い難く、時々痛みで顔を顰めていたのを治も空も目撃している。

その痛みは、サツカーの部活動でスライディングをして、膝を擦りむいた時の痛みとは比べ物にならなかった。

しかし光子郎や治の言う通り、ここがデータの世界だろうのならば、この痛みの正体は一体何なのだろうか。

コンピュータの中、と聞いて思い浮かべるのはやはりゲームである。

ゲームの世界では敵キャラに攻撃されても、主人公のキャラクター達は血を一滴も流していないし、回復の魔法で減ったHPを回復させたり、毒や麻痺を治したりしている。

ステータス画面を開けば、どんな技が使えるのか、どんなものを持っているのかというのが瞬時に分かる。

だがこの世界に来た子ども達は、特段変わった様子などない。

ステータス画面は幾ら願っても出てこないし、戦う力を授かったわけでもない。

子ども達がこれまで無事でいられたのは、自分達ではない代わりに戦力のお陰なのだ。

デジモン達のお陰なのだ。

パートナー達がいなかったら、子ども達は帰る方法どころか戦う術すら分からず、途方に暮れて永遠に帰ることが叶わなかったかもしれない。

「……なあ、治。前に言ってたよな。コンピュータは命令されたことしか出来ないって」

「……ああ」

それは、パソコンの授業の時のことだ。

来たる情報社会のために、お台場小学校は子ども達に早いうちからパソコンに慣れ親しんでもらうために、1クラス分のパソコンを導入した。

最新型のパソコンを買ったせいで、パソコンに詳しい外部の人間を雇う余裕はなくなってしまい、家にパソコンがある教員が担当することになったのだが、そんなことパソコンに目を輝かせていた、お家にパソコンがない子ども達は知る由もない。

物をぞんざいに扱ってぶっ壊す名人の太一は、お目付け役の治と空の間に座らされて授業を受けていた。

先生の話なんかそっちのけで、お家ではお父さんの許可がなければ絶対に触れない、触ってもネットサーフィンぐらいにしか使わないパソコンに夢中になっていた。

隣の席が治だったのはラッキーだと思った。

天才で秀才の治は、パソコンの操作だってお手の物だ。

下手すると先生よりも知っていたかもしれない。

しかし治はその知識をひけらかすことはなく、ただひっそりと、太

一と太一を挟んで反対側にいる空にだけ色々と教えてくれた。

コンピュータは、命令されたことしか出来ない。

それを教えてくれたのは、その授業の時だ。

その時はふーんとしか思わなくて、聞き流してしまっていたのだが……。

「……もしもここが本当にコンピュータの中だとして、アグモン達がデータの存在だってんなら……アグモンが俺のために泣いてくれたのも、コンピュータが命令したからなのか？」

『……タイチ』

頭に怪我を負った太一のために、ごめんなさいと泣いてくれたコロモン。

太一を失うかもしれない恐怖でいっぱいになって、怖い怖いつて泣いたコロモン。

パートナー達が、命令されたことしか出来ないコンピュータのデータだというのなら、あの涙はデータとしてインプットされていた行為だと言うのか。

『……コンピュータとか、データとか、僕はよく分かんないけど……でも僕の気持ちは本物だよ。僕がタイチを待っていた時のドキドキした気持ちも、太一を怪我させちゃって悲しかったり怖かった気持ちも……これが全部決められてることなんて、思いたくない！』

アグモンの悲痛な叫びが、洞窟内に響き渡る。

それはまさしく、心からの言葉であった。

他のパートナーデジモン達もアグモンの気持ちが痛いほどによく分かるのか、何かを堪えるような表情を浮かべたり、項垂れたり、アグモンや自分のパートナーを見つめたりと、様々な反応を見せる。

パートナーはいないが、ピコデビモンも何処か悲しそうに子ども達を見上げていた。

その表情が作り物だとするのなら、何て高性能なデータなのだろう。

この世界はコンピュータの世界だという仮説を立てた治と光子郎は、自分をじつと見つめてくるパートナー達の方を見た。

「……ピコデビモン、これから行くナノモンのピラミッドに、ゲンナイさんも来るんだよね？」

『え？ああ、はい』

「だったら僕達で結論付けるより、ゲンナイさんに聞いた方が早いな」
「……そうですね」

自分達の発言が、どれだけデジモン達を傷つけたのか理解した治と光子郎は、バツが悪そうに謝罪する。

途端に、2体は笑顔を浮かべていいよって許した。

いいよなんて簡単な言葉では到底許されないことを言ったのに、デジモン達はどれだけ心を傷つけられても、笑顔を浮かべていいよって許してしまう。

何処までも懐の深いパートナー達に、子ども達は苦笑するしかなかった。

『……ともかく、ナノモンのピラミッドに向かいますよ。コウシロウ様、ナノモンから送られてきたメールにプログラムがありませんか？』

「ええ、あります。これを実行して……」

開きっぱなしにしていたパソコンのキーボードを片手で打ち込むと、洞窟の先に変化が起こった。

行き止まりになって立ちふさがっていた壁がぐにやりと、まるで粘土みたいに柔らかく捻じれて消えたのである。

壁だった行き止まりの向こうに光が差し込んでいる。

「あの外にナノモンがいるはずですよ」

「え？こんな近くに？」

「いえ、さっきのプログラムで空間を繋いだらいいんです」

「なるほど、コロモンの村の時みたいなお状態か」

太一の紋章である勇気の紋章を見つけた時、コロモンの村から歩いて1週間近くかかるはずのエリアが目の前に広がっていた。

恐らく、あれと同じ原理なのだろう。

遠い場所と場所を、プログラムを打ち込むだけで繋げて、道のりを短縮できるなんて、まるで魔法のようだ。

自分達の世界では絶対に起こりえない事態に、子ども達は感心しきりである。

と、

『……おや、すみません。みなさん。ちよつと通信が入ったようですよ』
暫くお待ちください、と言つてピコデビモンはどうやって仕舞つていたのだとツツコミを入れられそうな、蝙蝠型の手鏡を手に取り、子ども達から少し距離を取つて手鏡に向かつて話し始めた。

気になった最年少3人とそのパートナー達だったが、きつと大事なお話なのよつて空に止められる。

どんなお話なんだろう、つて空に止められながらも気になつて仕方ない3人と3体は、はい、はい、つて何度も相槌を打っているピコデビモンをじーつと見つめている。

やがて、ええっ!?!という驚いたような声が聞こえた。

どうしたの、つてミミが尋ねると、子ども達がいたことを思い出したピコデビモンは慌てて取り繕つて、また小さな声で相槌を打つ。

数秒後。

『……はい、はい、分かりました。ではそのようにいたします……。皆さん、すみません!』

通信を終えたピコデビモンが切り出した言葉に、子ども達はどよめく。

先程の通信は、ここに向かつている途中のゲンナイからのものだった。

そのゲンナイから、とある場所で起きた異変について、至急調べてきてほしいという新たな任務を与えられたそうさ。

最後の紋章まで目と鼻の先だから、ちゃんと案内したかった、と落胆するピコデビモンに、子ども達もここまで一緒に行動してきたピコデビモンが離脱してしまうことを残念に思いながらも、仕方がないとそれを受け入れた。

自分達をサポートするためにゲンナイから遣わされてきたのだ、別の任務を与えられたのなら、それを全うすべきである。

目的地はすぐ目の前にあるし、あとは自分達だけでも大丈夫だ。

そう言つて子ども達はピコデビモンを促した。

『皆さん……すみません』

「謝るなよ。ピコデビモンのお陰で色々助かったからさー！」

『僕達のことなら気にしないで！大丈夫だから！』

『……ありがとうございます。そう言つていただけると、ありがたいです』

申し訳なさそうに頭を下げたピコデビモンは、ナノモンから送られてきたプログラムで作り返した出口から出て行き、空中でホバリングしながら再度ペこりと頭を下げ、空の彼方へと飛び去つて行つてしまった。

見送る子ども達。ほんの数日しか一緒にいられなかったが、ピコデビモンのお陰で紋章を見つけることが出来たことは、感謝していた。残る3つは、目の前だ。

ゲンナイもあのピラミッドに向かつているということ、エテモンを止めるために時間がないのは分かっているが、直接尋ねたいことは沢山ある。

光子郎が作ってくれた出口から身を乗り出してみると、そこはエジプトにあるスフィンクスと同じ形をしたオブジェの、口の中だった。辺りを見渡す。ナノモンがいるというピラミッドがあつたが、その形状に子ども達は驚いた。

普通ピラミッドと聞けば連想するのが、四角錐状の巨石建造物だ。底面が四角形の錐体状の、空に向かつて1点に集中している頂点が特徴的な建造物なのだが、子ども達の視界に入ったピラミッドは知っているものと全く違つていた。

形は四角錐なのだが、逆なのだ。頂点が下になっており、底面が上を向いている、つまり逆さまのピラミッドなのである。

頂点は砂の中に埋もれているのだが、一体どうやってバランスを取っているのか考えづらいほどにピタリと収まっついて、子ども達は啞然としながらピラミッドを見つめた。

これまでも数々の不条理シリーズは見てきたけれど、ここまで不条理なのは初めてである。

何にせよ、子ども達の最後の目的地はピラミッドなのだから、いつまでも呆けている場合ではない。

スフィングスの口から下にある砂地まで約2メートル弱。

ゲンナイがくれた便利アイテムの中に、確かロープもあったはずだ、と光子郎はパソコンを操作してロープを取り出した。

ナノモンに今から行くという旨のメールを送信し、子ども達はスフィングスの口からロープを伝って降りる。

ざく、と砂漠に降り立つと、ちよつとだけ足が沈んだ。

最後に丈とゴマモンが降りて、何故か後少しというところで落下して顔を強打したこと以外は特に大したこともなく、飛べるテントモンにロープを回収してもらって、子ども達はピラミッドに向かって真っ直ぐ突き進む。

ピロン、と電子音が鳴って、光子郎のパソコンにメールが届いた。

「ナノモンか?」

「何て書いてある?」

太一と丈が尋ねると、光子郎はタッチパッドとキーボードを操作しながらメールを開いた。

「えっと……ピラミッドの内部は侵入者を防ぐ仕掛けが沢山あって、案内なしに入るのは危険だから迎えを寄越すそうです」

『迎え、でつか?』

「うん、ピラミッドに来れば分かるって……」

メールによれば、ピラミッド内部は大昔のデジモンが遺した技術と、ナノモンの現代の知識で独自に組み上げた技術で複雑になっているらしく、ナノモンですら地図のような案内図がないと迷ってしまう複雑な構造になっているらしい。

見取り図を送って子ども達自身で来てもらっても構わないのだが、病み上がりの怪我人が1人いることを考えると、これ以上負傷者を出すのは忍びないという結論に至り、つい最近ゲンナイから派遣された味方のデジモンに内部を案内させる、とのことだった。

どういうデジモンに案内させるといふことは書いていなかったが、特に問題はないだろうということでナノモンには返信せずにピラ

ミッドに向かう。

『……おーいー!』

「ん?」

後少しでピラミッドに着く、というところで子どものような声がピラミッドの方から聞こえてきた。

立ち止まった子ども達に向かって、ピラミッドの方から何か走ってくるのが見えた。

近付いてくるにつれ、それはミルクチョコレートのように美味しそうな色合いをしていることが分かった。

円らな黒い瞳と、ロップイヤーという種類のウサギみたいに長く垂れた耳を揺らしながら走ってくる。

あのデジモンが案内してくれるデジモンだろうか。

そう思っただけで光子郎が尋ねようと口を開きかけた時である。

『わーいー! やつと来てくれたんだね! 待ちくたびれちゃったよ!』

少女のように高く、ちよつと間延びした声を上げながら、茶色いデジモンは両手を広げて、てつてつて、とそのまま走ってきたと思っただら……。

『逢いたかったよお!』

『……………つ!?!』

『はっ!?!』

『ちよつ……………!』

茶色いデジモンは何故かブイモン目掛けて走って来て、思いつきり抱き着いてきたのである。

ぎゅ、という音がしそうなほど抱き着かれたブイモンは、一瞬何が起こったのか理解できていなかった。

代わりに行動してくれたのが、パタモンとプロットモンである。

2体も一瞬硬直していたが、すぐに我に返って、慌ててブイモンと茶色いデジモンを引きはがした。

『何するのさー!』

『ブイモン、大丈夫!?!』

2体だけでなく、大輔やヒカリ、賢、それから上級生達もこれには

慌てた。

ブイモンは誰かに触れられることを極端に嫌がる。

大輔とヒカリと賢、それからパタモンとプロットモン以外の者がブイモンに触れると、目を見開いてガタガタ震えて、冷や汗が止まらなくなつて、勝手に悲鳴を上げてしまうのである。

だから上級生達もそのパートナー達も、極力ブイモンには触れないように心掛けていた。

触れさえしなければ、ブイモンは他のデジモン達のように「普通」だったからだ。

1度だけ、丈がうっかり触れてしまったことがあったが、それ以降はみんな更に細心の注意を払っていたから、特に問題らしい問題は起こらなかった。

それをあろうことか、知らなかったとはいえ茶色いデジモンはブイモンを思いつきり抱きしめやがったのである。

触れられるだけで悲鳴を上げてしまうのに、抱きしめられたらどうなるのか、全く見当がつかなかった。

引きはがされたブイモンの腕を引つ張って、大輔とヒカリと賢は大丈夫かってブイモンに声をかけたのだが……予想外のことが起こる。

『……なん、とも、ない……みたい』

「……はあ？」

引きはがされたブイモンは、大輔が声をかけるまでがっちーんと硬直していたが、硬直が解けた身体を見下ろして首を傾げていた。

いつもみたいに、ガタガタ震えたり冷や汗が流れなかったのだ。

それは、初めてヒカリと賢に触れた時の感覚と全く同じだった。

パタモンとプロットモンと、大輔以外は触れられるのが怖いと思っていたのに、ヒカリと賢も2体と1人と同じように平気だと思つた、あの時。

他の子ども達やデジモン達に触れられたらもうダメなのに、茶色いデジモンとは初めて会うのに、何故か抱き着かれてもいつもの症状が出なかったのである。

頭上に沢山の疑問符を浮かべるブイモンを啞然と見たのち、パタモンとプロットモンは思いつきり警戒心を剥き出しにして、茶色いデジモンを睨みつけた。

『……あんた、ロップモンよね？アンタがナノモンのところに案内してくれるデジモンなの？』

『うん、そうだよ。ピラミッドの中はえげつない仕掛けがいっぱいあるからねえ。僕も覚えるの大変だったよ』

『そんなのどうでもいいよ！何さ、君！何でブイモンってば平気なの！？僕達以外が触るの、すつごく嫌がるのに！』

頬を膨らませながらパタモンはぶんすか怒って、茶色いデジモン……ロップモンに向かって声を荒げる。

四つ足で踏ん張るように、最大限威嚇してやるが、ロップモンは全く意に介していないようで、ニコニコとした笑みを崩さなかった。

『まあまあ、落ち着いて。ナノモンも待ちくたびれるから、早いところ行こう？』

『まだ話は終わってないわよ！』
『プロットモン、落ち着いて！』

今にも噛みつきそうな雰囲気だったので、ヒカリが慌ててプロットモンを抱き上げて、ロップモンから引きはがす。

それでもヒカリの腕の中で暴れて、ロップモンに掴みかかりそうだから、ヒカリは抑えるのに苦労した。

『……ホントに忘れちゃったんだね』
『え？』

『？何か言った、ロップモン？』
『……何でもないよ。さ、ナノモンが怒り出さないうちに、早く行こう！』

くるりと翻って、ロップモンはたったたつとまた走り出す。

待てよ、と太一を筆頭に子ども達とデジモン達はロップモンの後を追った。

ロップモンの言っていた通り、ピラミッドは仕掛けだらけであった。

まず入り口が見せかけの壁だったのである。

何処からどう見ても壁で、幾ら見渡しても入り口らしい入り口は何処にもなかったのに、ロップモンは躊躇することなく見せかけの壁に飛び込んでいったのだ。

分かりやすく言うと、その一部分だけが立体映像で、実体がないのである。

それはファイル島に初めて降り立った日、太一と当時コロモンだったアグモン、光子郎と当時モチモンだったテントモンがクワガーモンから逃げるために飛び込んだ、見せかけの樹と同じ原理であった。

ピラミッドの内部は大分古いせいなのか、ところどころ壁が剥がれていたたり、天井が朽ちていた。

たまに侵入してくる阿呆がいるらしくて、そいつを撃退するために常時罾や仕掛けが作動されているためなのだそうだ。

その侵入者に付き合っつて一緒に侵入してきた奴が巻き添えを食らって、罾や仕掛けで命を落とすことも少なくない、というのをあつさりとした口調で言い放つものだから、子ども達もデジモン達も気が気ではなかった。

とりあえず、ここは踏まないでね、ここは触らないでね、と言うロップモンの忠告は素直に従った方がよさそうだ。

途中で高圧電流の網が張り巡らされている部屋に来た時は、流石に躊躇してしまっつたが、ロップモンが一声かけると電流がストップした。

ナノモンが止めてくれたらしいのだが、それなら他のトラップ類の作動も止めてほしいと思っつたのは言うまでもないだろう。

階段や長い通路、トラップだらけの部屋を通り抜けること、約数十分。

子ども達が辿り着いたのは、広い広い空間だった。

そこにはアンドロモンの工場で見た大きなスクリーンの倍はあり

そんなスクリーンがあった。

そのスクリーンに映し出されているデータの羅列や、外やピラミッド内部の映像、サーバ大陸と思しき大陸の地図が所せましと映し出されている。

治と光子郎の目が輝いた時、先頭を歩いていたロップモンがスクリーンの前にいた小さなデジモンに話しかけた。

『連れてきたよー』

『ああ、ご苦労だったな、ロップモン』

くるり、と何か操作をしていたらしデジモンが振り返る。

薬のカプセルが機械化して、手足が生えたようだ、と丈は思った。

『いかにも、私がナノモンだ。こんな成りだが、これでも完全体である故、見た目で判断すると痛い目に合うぞ。さて、早速だが君達には紋章を取りに行ってもらおう。想定していなかった出来事で予定よりも少し時間がおしているからな。ああ、君達を責めているわけではないぞ。どれだけ慎重にことを運ぼうとして、綿密に計画を立てても想定外のことは必ず起こる。況してや君達は私達の世界を救ってもらったために、別の世界から無理やり連れてきたからな。文句などあるはずもあるまい。紋章を持っていない子どもは誰かな?』

合成音のような声を出しながら、一気にそれだけ言うと、子ども達を1人1人、自分のメモリに保存するように眺める。

口を挟む隙もなくべらべらと喋られたことに呆気にとられていた太一達だったが、話の半分も理解できていなかったのか、大輔はナノモンに圧倒されることなく、元気よく俺です!と手を挙げた。

ロップモンに抱き着かれた衝撃から何とか戻ってきたブイモンも、真似をしてはーいって挙手をする。

我に返ったヒカリとプロットモン、賢とパタモンも然り。

『ふむ、1番小さい子ども達か。それならちようどいい』

ナノモンはくるりと振り返って、目の前のキーボードを操作する。
『あれを見ろ』

ナノモンが指さした方向には、何の変哲もない壁がある。

が、子ども達が壁に目を向けたと同時に、何処かへと通じる四角い

穴が出現した。

『ゲンナイ様からも聞いていると思うが、紋章はその存在自体が強大な力を持っている。ここにある3つは、その中でも特別なのだ。他の紋章のようにただそれと分らないように隠すことが難しかったために、ゲンナイ様はこの特殊な仕掛けがしてあるピラミッドの奥深くに隠し、その守護と監視を私に任せただ』

そして当然、その道のりにもトラップは仕掛けられているのだそう
だ。

『紋章を隠した後、ゲンナイ様が独自に作り上げたトラップであるため、私でも解除はできない。だが命を脅かすようなものではないから、安心しなさい』

「……それはいいけど、どうやって行けばいいんだ？この大きさじゃあ、俺達は入れないぜ？」

その入り口は小さな子どもが四つん這いになってやっと入れそうなほどの大きさしかなかった。

最年少の大輔と賢、そしてヒカリとそのパートナー達なら難なく潜れるだろうが、上級生達の中でも一番小さな光子郎ですら入れなさそうだった。

上級生のパートナー達もそれなりに大きく、入ったら詰まってしま
うだろう。

ということは、である。

『当然、その子ども達とパートナー達だけで行ってもらうことになる』

そうナノモンが言った途端、上級生達は反対した。

幾ら命を脅かすようなトラップがなくとも、まだ小学2年生の大輔達だけで行かせるのは危険すぎる。

妹と弟がいる太一と治を筆頭に、上級生達は何とかならないかとナノモンに詰め寄ったが、こればかりはどうしようもない、取り付く島もなかった。

『そもそもタイチ、だったか？お前は病み上がりだとピッコロモンからも聞いているぞ。幾らゲンナイ様特製の包帯を巻いたお陰で治癒が早まったとは言え、完全に治癒したわけではない。ここの設備で精

密検査をしてやってほしいとゲンナイ様からも頼まれているから、前は必然的にここで待機だ』

「っ、でも……!」

「賢達だけでなんて……」

「お兄ちゃん、太一さん」

尚も食い下がろうとする太一と治の台詞を遮ったのは、賢だった。その腕にパタモンを抱き、ナノモンに詰め寄っていた上級生達を真っ直ぐ見つめる。

「僕、行くよ。大輔くん達と。だからお兄ちゃん達はここで待ってて」
「っ、賢……!」

「僕、パタモンと約束したんだ。誓ったんだ。もう逃げるのやめるって。目を逸らすのやめるって」

両親を奪った争いごとをずっと避けてきた、平和を愛する男の子は決めたのだ。

自分達のいるべき場所へ帰るためにも、この世界の平和を取り戻すためにも、前を見つめると。

兄の背中に隠れるのは止めるのだと。

「大丈夫だよ。だってパタモンがいるもん。大輔くんもブイモンも、ヒカリちゃんもプロットモンも。だから怖くないよ」

「……賢」

「パタモン、僕のこと守ってくれる?」

『……当たり前じゃない! ケンは僕のパートナーなんだから!』

もう争いから逃げていた男の子はいない。

パートナーを争いから遠ざけようとしていた子どもはいない。

今度こそ、パートナーと一緒に歩き出すために、賢は兄にお願いした。

「お願い、お兄ちゃん」

真っ直ぐ治を見上げる賢に触発された大輔とヒカリも、上級生達を真剣な眼差しで見る。

「太一さん、俺も行きたいっす!」

「お兄ちゃん、お願い! 絶対無茶はしないって約束するから……!」

ブイモンとプロットモンも、それぞれのパートナーの隣に立つ。

『俺達でちゃんとダイスケ達を守るよ!』

『だから行かせて!守られるだけなんて、私達も嫌よ!』

プロットモンの言葉に思い当たる節がある上級生達は、言葉に詰まる。

最年少であるが故に護られる立場であった大輔達。

そのパートナーであるブイモン達も、必然的に庇護の対象になっていた。

アグモンやガブモン達と同じ、子ども達を護るパートナーデジモンであるにも関わらず。

3体ともファイル島で1度進化したきりで、サーバ大陸に来てからは諸事情により1度も進化をしていないが、本来なら他のデジモン達のように前線で戦う存在なのだ。

護られるような存在ではないのだ。

その結果、賢とパタモンの悲劇が起こったことを忘れてはいけない。

『……これだけ言ってるんだから、行かせてあげてもいいんじゃない?護ってばかりなのは、ダイスケ達にも失礼だと思うよ?』

「……………はあ、分かったよ」

澄んだ目は何処までも強い決意に満ち溢れており、3人と3体が横一列に並んで太一を始めとする上級生達に詰め寄ってくる。

ロップモンの後押しもあり、最年少の圧に負けた太一は首を縦に振るしかなかった。

やったあ、つて3人と3体は両手を上げて喜んでいるから、上級生達は苦笑するしかなかった。

まだまだ自分が護らなければと思っていたのに、いつの間にか最年少の3人は上級生達の背中から飛び出して、1人で歩き始めてしまっていたらしい。

子どもの成長は早いんだなあ、なんてお母さんやお父さんみたいなことを上級生達がしみじみ思っていたら、話はまとまったか、と情緒もクソもありやしないナノモンの言葉が空気をぶった切る。

じろり、とナノモンを睨みつける上級生達の心情など露知らず、大輔達ははーいという子の返事をして、入り口に向かって駆けていった。

『では、何ともないとは思うが、怪我をしないように気を付けていきなさい』

「はーい！」

『行つてきまーす！』

上級生6人とそのパートナー6体、それから2体の味方デジモンに見送られ、最年少達は四つん這いになって穴の中へと吸い込まれていった。

「……………」

『…………心配でたまらないという表情を浮かべているな』

『見送るって決めたんだから、腹くくればいいのにー』

「うるせえー！」

凶星を突かれた太一はやけくそ気味に怒鳴る。

目に入れても痛くないほどに可愛がっている妹が、心配ではないわけがないのだ、お台場小学校一のシスコンが。

空や光子郎達も呆れていたが、つい先ほどまで太一と同じように最年少を心配して、3人と3体だけで行くのを一緒になって反対していたから、何も言うことはできなかった。

『そんなに心配なら、監視カメラを一応設置しているから見るか？』

それを聞いた上級生達が一斉にナノモンに詰め寄ったのは言うまでもなかった。

信じる心

《さあ、往くべき道へ誘ってくれるのは誰?》

想定していたよりも狭い穴は、身体の小さな最年少でもきつく、上級生達では絶対に通れそうになかった。

両手と両ひざを地面について、交互に出しながら四つん這いになって穴の中を数十メートルほど進んでいくと、縦横高さが1メートルほどの小部屋に出た。

何の素材なのか、黒くて重厚感のある壁に囲まれているその小部屋は、正面だけがぼっかりと空いている。

地下へ続く階段があった。

道はそこしかないのです、大輔達は素直に従って階段を降りる。

「……あれ?」

『え、何これ?』

先導するように先頭を歩いて降りていた大輔とブイモンは、階段の1番下に辿り着いたので、両足でジャンプする。

階段を終えたその先は、等間隔に備え付けられているランタンの仄かな明かりに照らされた廊下があった。先ほどの小部屋と階段と違い、廊下の両側と天井、地面は石畳になっている。

オレンジ色の光は、ランタンを中心に1メートル強の周辺を照らすほどの光源がなく、奥に行くにつれ光が届いていないために、まるで廊下の奥は真っ暗闇に飲み込まれているようだった。

ゴクリ、と賢は息を飲み、パタモンを抱きしめる腕に力が籠る。

ふと、聞こえてきたさらさらとした音と、微かな水の匂いを嗅ぎつけて、大輔達は走った。

突然走り出した大輔とブイモンに驚いて、ヒカリ達も慌てて追いかける。

暗闇に飲み込まれかけた大輔とブイモンの背中がほどなくして見えた。

何かを覗き込んでいるような姿勢に、賢がどうしたのって尋ねると、大輔は何も言わずに視線の先を指さす。

「……………え？」

『池？何でこんなところに……………』

そこには、池があった。

上下左右を石の煉瓦に囲まれている廊下で、3人と3体合わせてもまだ届かないほど幅がある池があった。

小学2年生でも分かる不思議な現象に、3人と3体は首を傾げる。

『これじゃあ渡れないわ』

『パタモンは空飛んでいけるじゃん。あっちに何かないか調べてくるとかできない？』

『やつてもいいけど……………なんかそれやつちやダメな気がする……………』

「……………あれ？ねえ、大輔くん、賢くん！あそこにボートがあるよ！」

辺りを見渡していたヒカリが、壁際にボートを見つけた。

しかしそのボートは小さく、どう頑張っても2人しか乗れないほどの大きさしかなかった。

『ダイスケー！ここに何か書いてある！』

ブイモンが指を指した箇所に、確かに何か書かれていた。

仄かな明かりのせいで読むのに一苦労したが、何とか解読する。

そこには日本語で、こう書かれていた。

《1隻の船に乗れるのは人間2人か人間1人とデジモン1体。

船を漕げるのは人間のみ。

パートナーデジモンは、パートナーの人間としか一緒に乗れない。

さあ、どうやって渡る？》

「……………これって、川渡りパズル？」

「そうみたい」

「？なんだ、川渡りパズルって」

ヒカリと賢は知っているようだが、大輔は知らなかったので2人に尋ねる。

デジモン達もキョトンとしていたので、恐らく知らないのだろう。川渡りパズルというのは有名な論理的パズルの1つで、川岸にいる一団を様々な条件の下で川の向こうに渡らせるというパズルだ。有名な問題として、農夫と山羊とキャベツと狼の組み合わせがある。

キャベツを持った農夫が山羊と狼を連れて川の向こうに渡りたいのだが、船を漕げるのは農夫のみで農夫以外の船に乗せることが出来るのはいずれかの1つだけ。

おまけに農夫が一緒にいなければ山羊はキャベツを、狼は山羊を食べてしまう。

全員が無事に渡り切るにはどういう組み合わせで川を渡ればよいか、という問題になっている。

山羊とキャベツと狼がキツネとガチョウと豆袋になっているなど様々な組み合わせがあるが、どの問題にも共通しているのが「Aがない状態でBとCを一緒にしてはいけない」ということである。

今回の場合、パートナーデジモンは船を漕ぐことが出来ず、人間同士と一緒に船に乗ることはできるが、デジモンはパートナーの人間と一緒に乗ることが出来ない、という条件がつく。

つまり、大輔はヒカリや賢と一緒に船に乗ることはできるが、パートナーであるブイモンは大輔としか一緒に乗ることができないのである。

「……えーと？」

『つ、つまり……？』

考えるよりも先に身体が動く大輔とブイモンには、論理的パズルを解くのは少々難しかったようで、頭上に沢山の疑問符が浮かんでいる。

仕方ない、大輔はなぞなぞよりも外で遊ぶ方が好きなのだから。

「……まあ、実際にやってみた方が早いよね」

『え？ケン、もう分かったの？』

頭から煙を吹き出している大輔とブイモンを苦笑しながらフオーロした賢の言葉に、パタモンは目を丸くする。

まだ問題文を見て数分も経っていないが、賢は大輔とは反対でなぞなぞやクイズが大好きである。

暇さえあればクイズの本を読んでいるし、たまにお兄ちゃんと逢うと2人でクイズやなぞなぞを出して遊んだりしている。

このタイプのなぞなどは、前に治に出してもらってあっさり解いたことがあったので、自信があった。

ヒカリもちよつと考えて解くことが出来たらしい。

「えっ、えっ!? 2人とも分かったの!」

『お、俺全然分かんない……!』

「大丈夫だよ」

自分だけ理解していないことに焦る大輔とブイモンだが、賢とヒカリは優しかった。

大丈夫、パタモンとプロットモンも理解できていないから、となかなか辛辣なことを言うヒカリ。

引き合いに出されて解せぬという表情を浮かべている2体と一緒に、大輔とブイモンはヒカリからレクチャーを受ける。

1. 大輔とブイモンが船に乗る。
2. 大輔だけが戻ってくる。
3. 大輔とヒカリが乗る。
4. ヒカリだけが戻ってくる。
5. ヒカリとプロットモンが乗る。
6. ヒカリだけが戻ってくる。
7. ヒカリと賢が乗る。
8. 賢だけが戻ってくる。
9. 賢とパタモンが乗る。

「これで全員渡れるよ」

「……………」

「……………とにかく、今ヒカリちゃんが言った組み合わせで乗ろう?」

ヒカリからレクチャーを受けたものの、1人と3体は目が点になっ

てしまっているのです、これは説明するよりも実際にやって見せた方が早いと判断した賢により、大きな池を無事渡り切ることが出来た。

ほの暗い廊下を真っ直ぐ進むこと、約数分。

石煉瓦の廊下は終わり、目の前には観音開きの重厚な扉が現れる。

他に道はないし、大輔とブイモンは躊躇なく扉に手をかけ、踏ん張りながら開けた。

「……うわあっ！」

『すーいー！』

扉を開けて部屋に入ると、ヒカリとプロットモンは感嘆の声を漏らす。

そこは、大きな大きな空間になっていて、先ほどの石煉瓦の廊下とは全く違う、ガラスのように透き通った壁に囲まれていた。

そのガラスの壁の向こうはキラキラと煌めいていて、ただでさえ眩いのに、部屋の中には絢爛豪華な調度品が乱雑に置かれていたのである。

アメリカで人気の長編アニメーションを作っている会社が出した、魔法のランプが収められている洞窟の中のようなだ、と大輔は思った。

光を反射して煌めいている金銀財宝、丸や四角、三角、星の形をした宝石類。

見る人が見れば、お宝に目が眩んで手を伸ばしていただろうが、生憎大輔達は宝石などに興味はない。

自分達が今探しているのは、紋章なのだ。

大輔達は誘うように煌めいている金銀財宝に見向きもせず、そのまま真っ直ぐ突っ切って行く。

しかし……。

「ん……いー」

『ふんぐぐぐぐ……いー！』

見つけた扉は固く閉ざされており、3人と3体が力を合わせてもびくともしなかった。

ブイモンが、進化して無理やりこじ開けようかと提案するが、賢が待ったをかける。

「きつとここも、さつきみたいになぞなぞを解かないと前に進めないんだ。何かないか探そう」

そう賢が言った途端、背後で歯車がかみ合ったような音が聞こえた。

振り返ると、何もなかったはずの1本道に、台座のようなものが現れていた。

駆け寄る3人と3体。

その台座には足がなく、反重力装置のようなものがついているのか、数十センチほど浮いていた。

とはいっても、小さな最年少達が余裕で覗き込めるほどの高さだった。

全員で囲うように台座を覗き込んでみると、そこに窪みが1つあった。

その窪みには爪のような金属がついており、そこに“何か”をはめ込めるようになっていた。

『……これが、あの扉を開く鍵なのかな?』

「多分……」

扉を見ながら呟いたパタモンを肯定する賢の言葉は、何処か自信がなさそうだった。

何かをはめ込むのは間違いないだろうが、それが何なのか、ヒントも手がかりも見つけていない。

どうしよう、と顔を見合わせる賢とヒカリ、パタモンとプロットモンに発破をかけたのは大輔とブイモンだった。

「何だよ、2人とも！考え込むよりも、とりあえずそれらしい奴見つけて、持ってこようぜ！」

『そうだよ、考えてたって仕方ないじゃん！あれだけお宝がいっぱいあるんだし、ここに来るまでにそれらしいのはなかったんだろ?』

「ぜってーここどのどつかにあるって！探そうぜ！」

『おうー!』

「あ、ちよ……」

2人と2体の返事も聞かずに、大輔とブイモンは部屋中に溢れているお宝目掛けて走り出した。

触った途端に何か罠が発動したり、間違ったものを置いたら何かが起こるかもしれない、という考えは全く持っていないさそうだった。

慎重にことを進める人がいたら、間違いなく大輔は叱られるだろうが……。

「……そうだよね、考えたって仕方ないよね」

『ナノモンも命を脅かすようなトラップはないって言ってたし、大丈夫じゃないかな?』

『何かあったら、私達が進化して何とかすればいいのよ!ヒカリも行きましょ!』

「……うん、そうだね」

大輔の言う通りだ。ヒントや手がかりが見つからない以上、考えていたって窪みにはまるものが転がってくるわけもなし。

ならばまずは行動した方がいいだろう、ということと賢とパタモン、ヒカリとプロットモンも手分けをして探すことにした。

とは言うものの、全くのヒントも手がかりもなし、というのは高難易度の問題である。

大小さまざまな形をした宝石が、この金銀財宝で溢れている部屋に一体幾つあるのか、それすら分かっていない。

あの台座にピッタリとはまるものだとしたら、窪みは円を描いているので丸い形状のものだろうが、爪のような金属もその窪みにあるので、窪みの形に合わせるべきなのか、爪に乗せられるようなものなのかすら分からないのである。

とりあえず目についた宝石は全て手に取って、台座に持って行ってみるが、どれも決定打に欠けているようで、3人と3体は早束手詰まりを感じてしまった。

「うーん……これでもねえし……」

『ダイスケエ、これ1個ずつ全部試してくのお?』

ブイモンの指摘に、う、と言葉を詰まらせる大輔。

その両手には1つずつ形の違う宝石があった。

面倒になつたらしい大輔は、持ってきた宝石を1つずつ台座に収めて正解を探そうとしていたようだが、ぎつと集めただけでも50個以上はある。

周りの財宝の山にはまだまだ宝石が埋まっているから、全て試していたら時間がいくらあつても足りないのは、大輔でも分かつていた。

賢とパタモンは宝石を集めるついでに、何処かにヒントがないかと壁をぺたぺた触ってみたり、金貨の山に埋もれている別の金の台座を調べたりしている。

ヒカリとプロットモンはガラスの壁の向こうを覗き込んでいた。

やはりヒントがなければ解けないのだろうか。

先程池を渡った時のように、何処かにヒントが書かれていて、それに気づいていないだけなのだろうか。

あの時はヒントの近くに小舟があつたが、今回はどうだろう。

大輔は両手に持った宝石をぽいっと投げ捨てて、台座を覗き込んでみたものの、窪みが1つある以外は特に何も無い。

浮かんでいる台座の下に何かないかと覗き込んでみたが、影になっているのと大輔の顔が潜り込めるほど浮いていないために、確認するのは難しかった。

頬を膨らませてむくれながら台座から顔を上げると、ブイモンがいないことに気づく。

何処行つた、と辺りを見渡すと、3人と3体で押してもびくともしなかつた扉の前にいた。

ブイモンも流石にヒントや手がかりがないのは無理だと思つたのだろうか、扉の前をうろうろしているのが見えた。

『……あれ？ねえ、ダイスケ！』

金色に彩られた扉には大輔達が集めた宝石よりも小粒の宝石が、扉の縁をなぞるように並べられていて、天井から照らしている灯りを反射して眩い光を放っているために、目を細めながらそちらを振り返る。

どうした、と大輔がブイモンの下まで駆け寄ると、ブイモンの声を

聞きつけた賢達も扉の前に集合した。

全員が集まったところで、ブイモンが見て、と扉の真ん中を指さす。扉は両開きとなっており、中心は当然縦に線が入っているのだが、その中心を押さえるように銀色のプレートがはめ込まれていた。

さつきは気づかなかつたなあ、と思いつながらブイモンが指さしているプレートに目をやると、何かが書いてある。しかし。

「……何これ？」

「何て書いてあるんだろ……？」

賢とヒカリが首を傾げたのは、プレートに書かれている文字が日本語ではなかつたために読めなかつたからである。

しかしデジモン達から教えてもらったデジ文字でもなさそうだった。

ブイモンとパタモンとプロットモンもきよとんとしていたからだ。

この文字を読めたのは、ただ1人だけだった。

「俺読めるーこれ、英語だー！」

大輔だった。

プレートに書かれていたのは、僅か1年前まで大輔達家族が住んでいたアメリカで公用語として使われていた英語だったのである。

普段は日本語を喋っている大輔だが、興奮したり咄嗟の時は英語が飛び出してしまうほどには、まだ身近な存在だった。

読める人がいてよかつた、と賢達はほっと胸を撫で下ろす。

「何て書いてあるの？」

「ちよつと、待って。えーつと……」

プレートは大輔達の頭1個分高い場所にあつた上に、天井の照明を反射しているせいでとてもではないが読みにくかつた。

踏み台になりそうなものを探して、みんなでそれを運んで台に乗り、プレートの文字を読み取る。

そこには、こう書かれていた。

Humpty Dumpty sat on a wall,
Humpty Dumpty had a great fall

l.
All the kings horses and all
the kings men
Couldn't put Humpty together
again."

それは、アメリカにいた大輔にはとても馴染みのある詩であった。アメリカに住む子どもなら、誰でも知っている「なぞなぞ唄」だった。

知っている詩が書かれていることに若干困惑している大輔は、その下にも1文を見つけて声に出して読んでみる。

"Spring has come. Happy Easter!"

"……はあ?"

「大輔くん?どうしたの?」

「これ、どういう意味なの?」

『ダイスケだけで納得してないで、教えてくれよお』

『そうだよ!』

『どういう意味なの、それ!』

最後の1文に啞然としてしていると、賢達が急かしてきたので我に返り、踏み台から降りて書かれている文章の説明を始める。

「えつとき、賢とヒカリちゃん、マザーグースって知ってる?」

当然、2人と3体は首を振る。マザーグース、というのはイギリスやアメリカで伝承されてきた童謡や歌謡の総称であり、小説などでもよく引用されて親しまれている。

有名なのは、不思議の国のアリスである。

著者はチャールズ・ラトウィツジ・ドドソンというイギリスの数学者なのだが、ルイス・キャロルと言った方が分かりやすいだろう。

かねてから親交があったリデル家の三姉妹はルイスのお気に入りだったのだが、その中でも一等可愛がっていたのが次女のアリスという女の子で、不思議の国のアリスは彼女のために書いたものだ。

その不思議の国のアリス……正確には続編である鏡の国のアリス

にはマザーグースをモチーフにしたキャラクターが沢山登場しており、ハンプティ・ダンプティもアリスに出てくるキャラクターの1つである。

さて、そのハンプティ・ダンプティであるが、鏡の国のアリスでは卵に手足が生えたような姿で登場している。

というのも、ハンプティ・ダンプティはもともと卵を答えとしたなぞなぞ詩として作られたものだと考えられていたからだ。

今ではその答えが知れ渡っているために、なぞなぞとして引用されることは殆どなくなつたし、大輔もアメリカのお友達やお姉ちゃんに教えてもらったから、当然知っている。

だからこれがこの扉を開くためのヒントだとすると、少々簡単すぎないか、と逆に疑惑が浮かび上がってしまった。

最後に書いてある1文、*“Spring has come. Happy Easter!”*も、ハンプティ・ダンプティの詩を読んだ後なら、それが卵を意味するヒントだと容易に考えられることだ。

イースター、復活祭は、十字架にかけられて死んだイエス・キリストが三日目に復活したことを記念する、キリスト教に置いて重要な祭りで、装飾された卵を家の彼方此方に隠して宝さがしをする。

大輔もアメリカにいた時、お姉ちゃんのお友達や近所の優しいお爺ちゃんお婆ちゃんに招かれて、イースターのお祭りをやったことがあったが、今はそれは置いておくとして。

「……だから、多分答えは卵、だと思っただけ……」

『だけど?』

「そのまんま過ぎて、ヒントにもなっていない、っていうか……」

『そうかなあ?十分だと思うけど』

『そうだよー。だってダイスケが読めなかったら、僕達ずーっとここで止まってたよ?』

「んー……」

賢とパタモンにフォローされるが、それでも大輔は納得できないよ
うだ。

「大丈夫だよ、大輔くん」

そんな大輔に発破をかけたのは、ヒカリであった。

「大輔くん、さつき宝石を集めるときに言つてたじゃない。考えるよりもとりあえず集めようって。だからまずは試してみ、違つたらまた考えようよ、ね?」

『そうよね、やってみなきや分からないもの。卵を探せばいいんでしょ?』

「……そう、だな。よし、やってみようぜ!」

「うん!」

『そうこなくつちや!』

『探そう、探そう!』

そうだ、やってみなければ分からない。

違つたときは、後で考えればいいのだ。

3人と3体は領き合い、卵を探す。と言つても、きつとただの卵ではないはずだ。

こんな金銀財宝で溢れている部屋に普通の卵があつたら逆に浮いてしまつて、見つかりやすくなつてしまう。

恐らく卵型の何かだろう、と言う賢の推理に、まずは集めた宝石を片っ端から確かめてみた。

しかしそれらしい形の宝石はない。

まだ集めていない、金貨に埋もれている宝石は沢山ある。

時間も無いのに、こんな沢山ある宝石からたった1つを見つけ出すなんて、本当に出来るのだろうか……。

やってみようと言ひ出したのはヒカリだが、1つ1つ手に取つては脇に避けるという行動を繰り返して、もう10分近く経とうとしている。

このまま時間だけが過ぎて行つたらどうしよう……ヒカリの心に一点の曇りが浮かび上がった時である。

——……こつちよ。

声が聞こえた。

え、とヒカリは顔を上げて辺りを見渡す。

いつも一緒にいるプロットモンは、少し離れたところで卵型の宝石を探していた。

ということは、今の声はプロットモンではない。

気のせいかな、と宝石探しを再開させようとした時、再び声が聞こえる。

——こつちよ。

今度ははつきりと聞こえた。

しかしヒカリは何故か驚いたり怯えたりすることなく、宝石を探すその手を止めて、静かに立ち上がる。

それはまるで何かに導かれるように、何かに操られているかのように、ヒカリの足は真っ直ぐあるところに向かって行った。

宝石を探すのに夢中になっていたプロットモンは、ヒカリが離れていくことに気づいて慌てて後を追う。

ヒカリが向かって行った先は、ガラス張りの壁だった。

この部屋の壁は全面ガラス張りで、四角い枠に囲まれたガラスの板が1枚1枚はめ込まれていた。

そのガラスの壁の向こうにもキラキラとした宝石や金貨、財宝などが氷の中に閉じ込められているように浮かんでいる。

沢山あるガラス板のパネルのうちの1枚に、ヒカリはぼうっとした目で見つめながら向かって行った。

ヒカリが辿り着いたのと、プロットモンが追いついたのは、ほぼ同時だった。

『ヒカリ? どうしたの?』

「……見つけた」

ぴと、とガラス板に手をつき、ガラスの壁の向こうをじっと見据えている姿は、いつものヒカリではない感じがしてプロットモンは寒気がした。

ヒカリッ! と大きな声を上げて彼女の名を呼べば、ヒカリはよう

やっと我に返ったようで、目をぱちぱちさせた後、辺りをきよろきよろと見回した。

プロットモンがもう1度ヒカリの名を呼ぶと、ヒカリは今プロットモンに気づいたようで、きよとんと見下ろしていた。

『ヒカリ、見つけたって、何を見つけたの?』

「え?.....あ!」

プロットモンの言っていることが理解できず、頭上に沢山の疑問符を浮かべながら視線を再びガラスの壁の向こうに向ける。

そこに、それはあった。

ガラスの壁の向こうに沢山浮かんでいる宝石や金貨、財宝の中に紛れるように、卵の形をした宝石が、1つ。

別の場所を探していた大輔達を呼び、ガラスの向こうにある卵の宝石を確認する。

見つけたのはヒカリだとプロットモンが自慢げに言うと、大輔達は褒めてくれたが、ヒカリは素直に喜べなかった。

「どうやって取り出すんだ?」

大輔が言う。ガラスに顔を近づけてみたところ、板と言っても水族館の一番大きな水槽のように分厚かった。

最年少3人と成長期3体が体当たりしたって、罅すら入らないだろう。

ということとは。

「.....」

「.....賢くん、大丈夫?」

「.....大丈夫」

腰に付けたデジヴァイスを手に取り、黙って見降ろす賢。

心配したヒカリが声をかけるが、賢の目にもう迷いはなかった。

もう逃げないと決めたのだ。ここに来る時も、お兄ちゃんにそう言っただけ許してもらったのだ。

傷ついた少年は、もう逃げない。

「やろう、パタモン!」

『うん!』

もう迷わない。そう決めた少年のデジヴァイスからは、暖かい光があふれ出した。

大輔とヒカリも頷き合い、デジヴァイスを手取る。

聖なる光がパートナーを包み込み、0と1に変換されてその姿形が書き換えられていく。

『エクスレイザー!』

胸から腹部にかけて描かれているエクスの文字から、オレンジの光線が放たれ、ガラスに罅が入る。

『ネコパンチ!!』

思いつき振りつた拳が、更に罅を大きくする。

『へブンズナックル!!』

黄色い光線が真っ直ぐ放たれ、また罅が大きくなる。

後少してガラスの板は壊れそうだ。

エクスブイモン、テイルモン、そしてエンジェモンは顔を見合わせ、頷く。

エクスブイモンとエンジェモンが同時に光線を放った後、テイルモンが留めのパンチを叩きつけた。

がしやあああん、と派手な音を立ててガラスが割れた。

ガラスの壁の向こうに閉じ込められていた宝石、金貨、財宝が同時に飛び散ってきたので、デジモン達は自分のパートナーを抱き上げて慌てて避ける。

じゃらじゃらじゃら、と小さくて硬いものが落ちる音が止み、落ちて着いた頃にエクスブイモンが大輔を抱えたまま卵型の宝石を手にとった。

『ヒカリ、君が見つけたんだ。君が台座にはめ込んでくれ』

『ああ、それがいい』

そう言つてエクスブイモンに卵型の宝石を手渡されたヒカリは、一瞬困惑していたが、エンジェモンとテイルモン、それから大輔と賢にも促されたので、おずおずと卵型の宝石を受け取った。

ずっしりと重たい卵型の宝石は、他の宝石と違ってつるりとしていて、向こう側が透けて見えるほどの透明感だった。

「……行くよ」

その透明感はいつまでも見ていたい、と魅了されるほどの美しさだったが、自分達の目的はこの先にある。

ちよつと名残惜しみながらも、ヒカリは卵型の宝石を窪みに置いた。

窪みにあつた三つの爪が卵の重みで開き、ゴトンという音を立てて窪みにピツタリとはまる。

何処からか歯車がかみ合うような音がして、地面が少し揺れた。

ぎ、ぎ、ぎい、という蝶番が軋む音がして、扉が開いたのを見た3人と3体は、やったあとという歓声を上げて扉をくぐった。

パートナー達は進化させたままである。これから先何があつても対応できるようにだ。

そしてそれは、正解だった。

次の部屋の扉は、最初の廊下と違って数メートル先に行ったところにあつた。

重厚な扉を開けて中に入る。先ほどの部屋と違い、その空間は広がったが輝きはなかった。

部屋の左右の壁は石煉瓦が積み上げられており、正面には6つのトンネルがあつた。

それ以外特に何かあるわけではなさそうだったので、3人と3体は何の警戒心も抱かずにトンネルに近づいていく。

ぶうん……

トンネルまであと数メートル、というところでトンネルの前に突如として、6つの光が浮かび上がる。

その光の中にいた人物に、大輔達は驚愕の声を上げた。

「たっ、太一さん!?! 丈さん!?!」

「空さん、ミミ子さん!」

「え、お兄ちゃんと光子郎さん!?!」

ここにいないはずの上級生達の姿が、そこにあつた。

入り口が小さいから上級生達は入れないとナノモンに言われているのに、と大輔とヒカリ、デジモン達が混乱している中、賢はやっぱ

り冷静だった。

あれは立体映像だ。賢はそう言う。

あそこにいるのは本物の上級生達ではなく、上級生達の姿を映し出したビデオのようなものだ。

なあんだ、つて大輔とヒカリが胸を撫で下ろした時、賢はトンネルの上に文字が書かれているのを見つけた。

《2人はウソつき、2人は正直。

1人は正直でウソつき、

1人はウソつきで正直、

さあ、往くべき道へ

誘ってくれるのは誰？》

今度は日本語だった。賢が大輔達に見つけた文章のことを言った直後、異変が起きる。

ガコン

左右と後ろの壁から等間隔に穴が開いた。

え、と3人と3体が振り返った時、後ろの壁から砲弾が1つ、大輔達に向かって放たれる。

ぎよつとなった大輔達だったが、エクスブイモンが真っ先に動いて、見事な回し蹴りを披露しながら、砲弾を蹴っ飛ばした。

しかしそれで終わらない。

次は右の壁から砲弾が放たれたので、テイルモンが殴りつけてぶっ壊した。

すかさず、左の壁から砲弾が放たれ、今度はエンジエモンが杖をバットの要領で振り、砲弾を吹っ飛ばす。

それを皮切りに、沢山の砲弾が左右と後ろの壁から大輔達を狙って放たれた。

『ぐっ……い！』

『ちいっ！』

『このっ……い！』

子ども達を護るべく、デジモン達は次々放たれる砲弾に向かって行った。

「どうなってんだよ、これ!？」

「わ、分かんないよ!」

「と、とりあえず何をしなきゃいけないのか、考えよう!」

バキン、ドカ、という砲弾を破壊する音をBGMに、3人はトンネルの方に振り返る。

壁に書かれていた文字は、2人はウソつきで2人は正直、これは……。

「これ、多分ウソつきパズルだ……」

「嘘つきパズル?」

うん、と頷いた賢は2人に説明する。

これも川渡りパズルと同じく論理パズルで、2人以上の人間の証言を聞き、その証言の中に矛盾がないかを考えるパズルである。

例えば3人の人間がいて、その中の1人だけが本当のことを言っている、という問題文の場合、3人の証言を聞いて矛盾を見つけながら誰が正直者なのかを探し出すのである。

Aが本当のことを言っていた場合、Bはウソをついている。

しかしそうなるとCのこの証言は本当になるから、Aの言っていることは本当ではない……と言ったように、1人1人の証言が矛盾しないように考えていくのだ。

今回の場合は、6人の中で2人が嘘をつき、2人が本当のことを言う、ということだが……。

正直でウソつき、ウソつきで正直、というのはどうということだろうか?

ウソつきパズルも何度かやったことはあるが、この手の問題文は初めてだった。

とりあえず6人の証言を見ないことには始まらない。

問題文のように何処かに書いてあるのだろうか、と思いながらトンネルまで歩み寄ろうとしたら、立体映像が変化する。

《正しいのは左から2番目、

左端は危ないから行くな》

太一の立体映像に、そんな言葉が現れた。

それを皮切りに、他の子ども達の立体映像にも次々と言葉が現れる。

《正解は右から2番目、

隣の道は行き止まりだ》

と、治。

《正しい道の右隣りは行き止まりで、

左隣にはデジモンがいる道になるわよ》

と、空。

《左から3番目は行き止まりです。

右から2番目にはデジモンが出ます》

と、光子郎。

《正しいのは左端よ。

右から4番目にはデジモンが出るからね》

と、ミミ。

《右から5番目が正解だよ。

左から5番目はデジモンが出るよ》

最後に、丈。

この証言を元に、2人のウソつきと2人の正直、それから正直でウソつきとウソつきで正直を1人ずつ見つけ出していかなければならない。

何だコレ、と賢の心情には絶望の2文字が浮かんでいた。

確かに何度かうそつきパズルはやったことはあるが、最高でも登場人物は4人だった。

正直者は1人だけ、こんな複雑なものは解いたことがない。

でもこの中でこういうクイズをやったことがあるのは賢だけだ。

大輔は早々に目を回しているし、ヒカリも難解すぎて硬直してしまっている。

——僕がやるしかないんだ……！

賢は腹を括った。

「えつと……まず、太一さんの証言が正しいとして……」

“正しいのは左から2番目、左端は危ないから行くな。”

トンネルを左からA、B、C、D、E、Fとして、太一の証言が正しければ、正解はBのトンネル。

となると必然的に、「正しいのは左端」と言っているミミはウソつきになる。

当然、右から2番目、Eのトンネルが正しいと言っている治もウソつきになる。

隣のトンネルがどちらを指しているのかは分からないので、この際置いておくとして、次は空だ。

正しい道の右隣りは行き止まりで、左隣はデジモンがいる。

太一が正しいとすれば、Bの右隣りであるCは行き止まりで、Aにはデジモンがいるということになる。

少なくとも、空の下段の証言は正しい。

次は光子郎だ。左から3番目、つまりCは行き止まりで、右から2番目にはデジモンが出る。

上段の文は空の証言と一致しているので、これが正しいとするのなら、Eにデジモンが出ると言うことになるが……。

「……ああ、違う！太一さんは正直者じゃない！」

「え？」

「どういふこと？」

賢の推理を黙って聞いていた大輔とヒカリが思わずと言った形で口を挟む。

尊敬している先輩が、大好きなお兄ちゃんが正直者じゃないなんて、どういうこと、と咎めるような眼差しを向けてくる2人に、根本的なことを説明していなかったことを思い出した賢は、慌てて弁明した。

「2人とも、これはクイズなんだよ。なぜぞなんだよ。現実の太一さんはウソつきじゃないのは分かってるけど、これはゲームとしてのキャラクターなんだ。現実の太一さんとは無関係なんだよ」

恐らく、大輔達にも親しみやすくするために太一達を登場させただけなのだろう。

納得いかない、と言った様子の2人だが、今はそれよりも問題を解

く方が先なので、2人は無理にでも納得してもらおうとして。

もしも太一が正直者なら、これまでの証言により治とミミが嘘つき、太一と光子郎が正直者となる。

しかしそうになると、矛盾が生じるのだ。

「太一さんと光子郎さんが言っていることが本当だとすると、空さんの言っていることも正しいってことになる。これじゃあ正直者が3人になっちゃうんだ」

ウソつきも正直者も2人ずつしかないのだ。

だから太一が正直者という可能性はこでなくなった。

それだけではない。

「丈さんも違う」と言ってるみたいだけど、これって言葉のトリックだよ。だって左から2番目と右から5番目、右から2番目と左から5番目は同じ意味なんだから」

右から5番目と左から5番目は「正直者」の太一が言っている左から2番目で、「正直者」の光子郎が言っている右から2番目になる。

これでは正直者が4人になってしまう。

『うわあっ!!』

『エンジエモン!!』

「っ!!」

もう1度考えてみようとした時、エンジエモンの悲鳴が聞こえてきた。

は、と3人が振り返ると、砲弾を避けきれなかったエンジエモンが、黒い羽根を散らしながら吹っ飛ばされていったのが見えた。

エクスブイモンが駆け寄ろうとしていたが、次から次へと撃ち出される砲弾を前に、思うように動くことができないでいた。

賢の目が見開かれ、思考が停止する。

脳裏に浮かんだのは、パタモンが賢を護るために初めて進化を果たした、あの運命の夜。

息が詰まる。足が震え、上手く身体を支えられずにぐらつく。頭と目の前がぐわんぐわんと揺れる。

もう逃げないと、もう目を背けるのをやめると決意した誓いが、呆気なく崩れそうになった。

——仕方ないな。

声が、した。

——今回だけだよ。

誰。そう唇が動く前に、わつと頭の中に流れ込んできた“知識”。

膨大な量の“知識”に、賢は一瞬息が詰まった。

「賢?」

「ど、どうしたの?」

突然目の前で硬直した賢に、大輔とヒカリが心配そうに声をかけると、呆然とした様子でトンネルを見やる。

「……解けた、かも」

「え!」

「本当!」

突然流れ込んできた膨大な“知識”で、答えは一瞬で閃いた。

しかし、確かに証言に矛盾はないが、これで合っているという自信もない。

間違えたらどうなるか、この証言どおりトンネルの先に続いている外れの道は行き止まりとデジモンが待ち構えているだけなのか。

不安そうにトンネルを見つめている賢を、大輔はじつと見つめ……。

——ほら、発破かけてやれよ

背中を押された。

「……賢」

「っ、大輔くん」

「俺は、賢を信じるぜ」

「え?」

「間違ってたっていいよ。自信がなくなっただけいい。俺、こういうの苦手で賢に任せちゃったから……だから、信じる」

「……大輔、くん」

それは、真っ直ぐな瞳だった。

それは、嘘偽りのない瞳だった。

大丈夫、間違っただけでもやり直せばいい、何度だって。

「賢とヒカリちゃん、エクスブイモン達がいるから、怖くねえよ！」

「……うん、私も、大輔くんに賛成！」

きっとエンジエモンも、エクスブイモンもテイルモンも、同じことを言ってくれる。

パートナーがそう言うから、そんな理由で。

「……ありがとう」

信じてくれる、仲間がいる。

賢も、自分と仲間を信じることにした。

「エンジエモン、もう大丈夫だよ！正解は……！」

賢が走る。大輔とヒカリも、それに続く。

エンジエモン達も、砲撃が止む一瞬のタイミングを見計らってパートナー達の後を追った。

その姿がトンネルの奥に消えたと同時に、砲撃も止んだ。

「……………」

トンネルの奥は暗闇に包まれていたはずだったのに、飛び込んだと同時に眩い光に包まれ、3人と3体は思わずその場で顔を庇いながら立ち止まる。

やがて光に慣れてきて、瞼をそっと開けると、先ほどの部屋とは打って変わって、真っ白い部屋にいた。

正面と左右の壁に、大きな大きなレリーフが彫られていた。

向かって左の壁には、太一の紋章によく似た太陽と、その下に太陽を支えている台座のような絵が描かれていた。

向かって右も、太一の紋章のように丸とその丸から放たれる光のような大きいのと小さいひし形が4つずつ交互に並んでおり、中心の丸も小さかった。

そして、正面にあるのはMというアルファベットの文字によく似た模様の上下に大きさの異なるひし形が2つ、下のひし形の左右に逆三角の模様が2つ。

「……………」

「僕達の……」

「紋章……？」

大輔、賢、ヒカリの順で呟く。

同時に、3人の腰につけているデジヴァイスが光を放った。

慌てて手に取ると、大輔のデジヴァイスは正面の、賢のは左、そしてヒカリのは右の紋章に反応している。

3人は顔を見合わせ、頷き合った。

それぞれの紋章の前に駆け寄っていき、パートナー達も進化した姿を保ったまま後に続く。

デジヴァイスを掲げる。

壁に描かれた紋章が眩い光を放ち、小さくなっていきながらそれぞれのデジヴァイスに吸い込まれていく。

すーっと、静かに音もなく、デジヴァイスのディスプレイに吸い込まれていった紋章は、やがて光が収まっていく。

光が完全に消え、3人と3体が歓喜に包まれながらデジヴァイスに収まった紋章を確認しようとして……………。

3人は目の前が真っ白になった。

ナイン・レコード

8月1日。

それは、全世界の選ばれし子ども達にとって特別な日である。

その昔、世界を異常気象が襲った。

雨が全く降らずに湖が枯れたり、逆に大雨が降って洪水が起こった地域もあった。

雪が降るはずがない地域で雪が降り、曇り空が多い地域では1カ月以上快晴の日が続いていたり、とにかくその年の気象は異常であり、日本も例外ではなかった。

気温だけでなく湿度が高いために、常夏の国の出身者でも音を上げる日本の夏。

その夏の8月1日に、お台場から子ども会に参加していた子ども達が保護者に引率されながらサマーキャンプに来ていた。

3日間の工程で行われるはずだったサマーキャンプは、しかし世界中を襲った異常気象により、猛吹雪に見舞われてしまった。

地面が見えないほどに降り積もった雪のせいで、これ以上はキャンプを続行できないと判断した教師や保護者によってキャンプ中止の旨が子ども達に伝えられたのだが、その際行方不明者が複数名いることに気づいた。

吹雪が止み、慌てて探すこと約3時間弱。

子ども会で借りた場所から少し離れた小高い丘にある、古いお堂に行方不明になっていた生徒達はいた。

それが、八神太一を始めとする「選ばれし子ども達」だ。

行方不明になっていた約3時間弱、彼らは彼らの世界とは違う、「デジタルワールド」という場所で仲間達と時に喧嘩をしたり、励まし合ったりしながら大冒険を繰り返していったなど、当時の大人達は知る由もなく、その時行方不明になった子どもの中の1人が書いた小説

を読んで知ったほどだ。

その最初の冒険が終わってから、デジタルワールドは毎年のように人間の世界から可能性のある子どもを選出し、少しずつ理解者を増やしていった結果、太一達が大人になった頃には世界中の人間の下にデジモンがパートナーとしてやってきて、共に暮らしていた。

時を同じくして、デジモンに関するトラブルや事件も増えたのだが、太一達初代の選ばれし子ども達が中心となって解決へと奔走したお陰で、これまで大きな問題には至っていない。

そんな彼らを称えて、8月1日はデジモンの日という祝日になったのは、5年程前だった。

どれだけ忙しくとも、この日だけは絶対に全員で集まろう、と決めてから20年近く経つ。

5年前に8月1日が祝日になってからは、デジタルワールドを訪れる人間も増えたためか、大輔達がデジタルゲートを通ってデジタルワールドに着き、少し開けた場所に行くと彼方此方に人間と、人間と一緒にいるデジモンの姿が見受けられた。

今や増えに増えた選ばれし子どもやパートナーデジモンを持つ人間のお陰で、今更デジタルワールドを支配しようなんて考える莫迦はいない。

ここ数年のデジタルワールドは、本当に平和だった。

時折偶発的に出来たゲートにうっかり足を踏み入れて、現実世界に迷い込むデジモンや逆にデジタルワールドに迷い込んでしまう人間も一定数いたが、そう言った事態に陥った時のシステムも数年前に確立しているので、今や大した問題にはなっていない。

本当に、平和になった。

「……しかし、光子郎さん達もついてないですねえ」

『せーつかくみんなで久しぶりに逢えるんに、何だってタイミングが悪いだぎゃあ』

楽しそうにはしゃいでいる女の子と、そのパートナーらしき幼年期のデジモンを微笑みながら眺めていた最年少である火田伊織が、苦笑しながら言った。

パートナーのアルマジモンも伊織に賛同している。

「ほーんとーなあんて今日に限って初代組が全員遅刻なんだか！」

『仕方ないじゃないですか。タイチさんとコウシロウさんは政府とデジ研それぞれの方で呼び出しがあつて、ヤマトさんとソラさんは飛行機の遅延、ジヨウさんは急患が入っちゃったんですから。……ミミさんは純粹に寝坊したそうですけども』

「わーかつてるけどさあー！」

頬を膨らませながらむくれているのは旧姓井ノ上、現一乗寺京であり、それを宥めているのはパートナーのホークモンである。

今日は1999年に選ばれた元子どもと、2002年に選ばれた元子ども達と集まって、デジタルワールドで1日キャンプをする予定だったのだが、何らかの理由で半数が遅刻をしているのだ。

理由が理由だけに仕方がないのだが、何も今日という特別な日に1999年に選ばれた元子ども達が全員揃って遅刻しなくてもいいのに、ということでは京は怒っていたのである。

「まあまあ、京さん。落ち着いて。今兄貴から連絡があつて、やっと入国したってさ」

『先にキャンプできそうなところ見つけておいてーって』

そんな京に苦笑いしながら、兄から来たメールを読み上げたのは小説家として名を馳せている高石タケルと、そのパートナーのパタモンである。

仕事の都合でアメリカにいた兄夫妻は、アメリカ経由ではなく日本に帰国してからデジタルワールドに来るといふメールを一昨日寄越したばかりだった。

何でアメリカから行かないんだ、というツツコミは入れなかった。

普段はアメリカを拠点としている大輔から聞いた話なのだが、アメリカはデジモンやデジタルワールドに関する法律や規則が日本よりも厳しく、デジタルワールドに行くためには専用のパソコンを使わな

ければならないそうなのだ。

家庭用のパソコンからデジタルワールドに行くことは禁じられており、また専用のパソコンを使う際にも高額料金を払わなければならない。

しかもそれはアメリカ国籍を持った者に限ったことであって、外国籍の者が専用のパソコンを使うためには面倒な書類手続きをしなければならぬことだ。

それは選ばれし子どもとて例外ではないそうで、兄夫婦はそれが面倒で、用事を急いで片付けて日本に帰国してデジタルワールドに行くことを決めたそうだ。

兄貴らしい、と苦笑していたタケルだったが、ふと違和感を覚えた。何か物足りない気がしたのである。

何だっけ、と考えながら辺りを見渡して、やっと分かった。

タケルの視界の先には、タケルに背を向けて何処か遠くを見渡しているらしい大輔の姿があったのだ。

こういう事態が起こると、京と一緒に真つ先に騒ぎ出すはずなのに、会話にすら参加せずに静かに佇んでいたのである。

大輔だけではない、京が騒ぐとジヨグレスのパートナーだったヒカリや、夫である賢が真つ先に反応するはずなのに、今日に限って2人とも何故か大人しい。

いや、2人とも普段から大人しいが、何と言うか、普段の大人しさとは何か違っていた。

タケルは2人にも視線を向ける。

ヒカリは、大輔と同じように何処か遠くを見てぼーっとしているし、賢は京のすぐそばにいるはずなのに、何故か止めることも宥めることもせず、少し目を伏せていた。

「……大輔くん、どうかした？」

せっかくの記念日だと言うのに、様子のおかしい3人が目についてしまったタケルは、とりあえず近くにいた大輔に声をかけてみた。

らしくなく、ぼーっとしていたらしい大輔は、いきなり声をかけられたことで何処かへ行っていた心が引き戻されたようにびくりと肩

を震わせる。

「お……おう、タケルか。何だ？」

「いや、何だじゃなくて。ぼーっとしていたみたいだけど、大丈夫？も
しかして具合悪いとか……？」

「そーんなわけねーじゃんか！俺はいつも元気だよ！」

力こぶを作るように右腕を曲げて、二の腕に左手を添えながら笑顔
でそう言った大輔だったが、その笑顔が何処かぎこちないような気が
して眉を顰める。

両親の離婚という経験から人の顔色を常に伺い、他人の気持ちに敏
感になっているタケルは大輔が何か隠していると早々に見抜いて
じっと彼を見つめる。

「あーもう、全く。京はいつまで騒いでんだよ。周り見ろよ、注目浴び
てんぞ」

「えっ!?!やだ、恥ずかしい！」

「へー、お前にも一応恥ずかしいっていう感情あったんだ」

「どういう意味よー！」

『ミヤコさん！』

しかし大輔はタケルから目を逸らし、未だむくれて騒いでいる京に
揶揄いの言葉を投げる。

大輔の言葉にカチンと来た京は掴みかかろうとして、ホークモンに
強い口調で止められた。

どうしていつもそんなに落ち着きがないんですか大体貴女はです
ね……とホークモンの説教という名の愚痴大会が始まりそうになっ
たので、伊織とアルマジモンで何とか宥めて、ヤマトに言われた通り
にキャンプをする場所を決めるために歩き出した。

その際、未だにぼーっとしていたヒカリと賢に声をかけると、大輔
の時と同じように肩をびくりと震わせて、ようやく我に返ってくれ
た。

大丈夫？とタケルは尋ねるも、大輔と違って自分の気持ちはあまり
素直に打ち明けず、隠してしまうことが多い2人は曖昧な微笑みを浮
かべるだけだった。

今更になつて思う、ここでちゃんと問いただせばよかつた。
無理にでも聞きだせばよかつた。
後悔ばかりが、胸を締め付ける。

ピロン、という電子音が鳴り響く。

大輔達はヤマトに言われた通り、今日のキャンプ地を探すためにあ
あでもないこうでもないと話し合いながら、エリアをうろうろしてい
たところだつた。

空を見ると、ここに来た時にはお日様が傾き始めた薄い水色の空
だつたが、いつの間にかオレンジ色に染まつていた。

京のスマホにメールが受信されたのは、その時だつた。

ポケットに仕舞っていたスマホを取り出し、ディスプレイをタップ
して操作する。

メールの差出人は、ゲンナイだつた。

この世界の安定を望む者に仕えている自律エージェントで、太一達
の冒険時から色々とアドバイスをしてくれたりサポートをしてくれ
たりした協力者である。

……ここだけの話、協力者と言いながらピンチ直前になつて連絡し
てきたり、危機に陥つてから泣きついて来たりするので、協力者とし
ては色々と失格だつたりするのだが、それは置いておこう。

そんなゲンナイさんからのメール、ということで京とホークモンが
しよっぱい表情を浮かべていた。

大輔達にも言えば、似たような顔をしていたので、ゲンナイイコー
ルトラブルメイカーというのは、共通認識らしい。

それで、メールの内容というのが、時空の歪みを観測したのでメー
ルに書いてある座標まで行つて確認してほしい、というものだつた。

実は太一と光子郎が遅刻しているのは、その歪みが原因だつたらし
い。

光子郎は言わずもがなだが、太一が呼び止められたのは、外交官は外交官でもデジタルワールドと現実世界の橋渡しや交渉をする、対デジタルワールド専門の外交官だからだ。

初代にして世界中の選ばれし子ども達の代表格である太一は、デジタルワールドと現実世界の間で何かトラブルがあつた時に互いを取り持つのが主な仕事なのだが、デジタルワールドに出来た歪みが現実世界に影響を及ぼし始めているという連絡を受け、退社しかけた太一は職場へUターンする羽目になってしまったのである。

急いでいたために、彼らのグループSNSには「わるいおくれる」という平仮名で句読点すらない、短いメッセージだけしか送れなかつたのだ。

そういうことだったのか、とアクイラモンに乗りながら京はゲンナイへのメールに、指定された座標に到着した旨の返事をする。

「……ここでもいいんだよね？」

エクスブイモンから降りた大輔が辺りを見渡す。

そこは、先ほど大輔達がいた場所から3エリアほど離れた、別の広い草原のエリアにいた。

ゲンナイが教えてくれた空間の歪みがある、と言っていたエリアだ。

しかし辺りを見渡してみても、特に異変らしいものは見当たらない。

拾い草原の向こうには、遠近法で小さく見える森のエリアがあり、草原のエリアを住処としているデジモン達がちらほらと見受けられるだけだった。

大輔とタケル、賢と伊織は四方を見渡し、京はタブレットを弄ってヒカリはそれを覗き込んでいる。

デジモン達も周囲を警戒しており、いつでも戦闘に入れるように体勢を整えていた。

「……間違いないわ。一見何の変哲もないけれど、見てこれ」

タブレットを弄っていた京は、周囲を警戒していた大輔達を集めてタブレットを見せる。

ここ周辺の地図のようで、その一部が渦を描くように歪んでいた。縮小地図の規模を考えると、その渦はエリアを覆うほどの大きさで、とてつもなく大きなものが空間をぶち破ってここに無理やり出てこようとしているようだ、と言うのが光子郎の見解であった。

光子郎とデジ研の研究員達が総動員して解析した結果、とんでもないデータ容量を持ったデジモンだということが今しがた分かったらしい。

数は1体だけだったが、とんでもないデータ量ということは間違いなく完全体以上のデジモンだ。

成熟期までしか進化できない4体のデジモンと、「紋章」というアイテムがなければ完全体に進化できない2体のデジモンでは、数では勝つていてもレベルの差は埋められない。

デジモンは進化をする際に膨大なエネルギーを必要とするのだが、ブイモン、ホークモン、アルマジモンは遥か昔、デジタルワールド創世記に生きていた「古代種」と呼ばれるデジモン達で、デジタルワールドが生まれた頃に生きていたデジモンだったこともあり、現代種と比べるとエネルギーの消費や燃費が悪く、成熟期に進化するのでさえ稀だった。

完全体、究極体に進化出来た古代種はほんの一握り、現代種以上に貴重だったのである。

下手をすると成熟期に進化するのでさえ命がけであったため、古代種達は「デジメンタル」と呼ばれる今では失われた技術を持って生み出された疑似進化のアイテムを使用していた。

大輔、京、伊織のパートナーであるブイモン達は、太古に生きていた古代種達がいずれ来たるデジタルワールドの危機のために、「デジメンタル」とともに封印した個体であるために、成熟期以上の進化は望めず、他の個体と「ジョグレス」と呼ばれる融合進化をすることで、足りないエネルギーを補わなければ完全体以上に進化出来ないものである。

この「ジョグレス進化」も、「デジメンタル」と同じく失われた太古の進化なのだが、ヒカリのテイルモンのホーリーリングの力を利用

して出来ていたものであるため、今はそのジョグレスすら出来ない。究極体相手に成熟期で挑むなど、選ばれた当初の大輔ならやつてのけただろうが、今は妻子ある身であるためにそんな無茶は出来ない。むしろよくもまあ小学5年生の身であることが出来たなあと、今更になって思う。

「で、どうしろって?」

「とりあえず、相手に敵意があったら、何とか足止めをしてほしいって。太一さんのアグモンと、ヤマトさんのガブモンが究極体になれるように、またチンロンモンからパワーをもらいにいくからって……」

「間に合うの、それ?」

タケルの至極もつともな指摘に、急に不安な空気に包まれる。元“子ども達”。

しかしそんな“元”子ども達に発破をかけるのは、いつだってデジモン達だった。

『ダイスケ!今はここに出てくるデジモンのことだけ、考えようぜ!』
『そうですよ、ミヤコさん。ゲンナイさんだって、そのことは分かっているはずです』

『オレらはオレらに出来ることをやればいいだぎや!』

『タイチ達が来るまで時間稼ぎしてればいいんでしょ?大丈夫、大丈夫!』

『相手を傷つける必要はないんだ。牽制して距離を取りながら戦えば、少しでもダメージは与えられる』

『僕頑張るよ、ケンちゃん!』

いつだってデジモン達は、子ども達の隣に立って、同じ歩幅で歩いてくれた。

子ども達が躓いた時、ある者は手を差し伸べ、ある者は叱咤激励してくれた。

デジモン達と共に生きると決めたあの日から何年経っても何十年経っても、デジモン達の気持ちは変わらない。

大人になって子どもの頃の時には出来なかったことが出来るようになった代償として、出来たことが出来なくなってしまうけれど、

デジモン達は変わらず彼らの隣に立ってくれている。

彼らの心に浮かんだ不安など、何でもないように吹き飛ばしてくれているのだ。

大輔達は顔を見合わせ、そして笑った。

「よおしー太一さん達が来るまで、何が何でも足止めするぜ！」

『その意気だぜ、ダイスケ！』

「……全くもう、アンタって相変わらずねえ」

『いいじゃないですか、頼もしいと思いますよ』

溜息を吐きながら呆れる京ではあるが、それでもホークモンの言う通り、大輔のあのやる気は迷う自分達を正しい方向へと導いてくれる頼もしい声なのだ。

見れば他の子ども達も、京と似たような表情を浮かべながら大輔とブイモンを見ている。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

京のタブレットから電子音が鳴る。

それはメールではなく、警告音だった。

大輔とブイモンのお陰で安堵の空気に包まれていた“元”子ども達に、緊張が走る。

来るわよ、という京の声に、“元”子ども達はデジモンと人間を繋ぐ見える絆、D-3を構えた。

ぐにやり

空間が歪む。

大輔達はパートナーを進化させ、相手からの敵意に備えた。

歪んだ空間から、何かが見えない壁をぶち破ろうとしている。

空間がひび割れ、こじ開けられた向こうにパステルカラーの虹色の空間が見えた気がしたが、デジモン達と大輔達はその美しさに見とれることはできなかった。

何故ならひび割れた空間から、濃厚な闇の気配が一気に溢れ出してきたからだ。

闇の気配に敏感なタケルとヒカリと賢はもちろん、何も感じないはずの京や伊織までもが口元を引きつらせるほどの濃さだった。

ぬう、と。

割れた空間から闇を凝縮させたような水晶が這い出てきた。

ひっ！とヒカリが短い悲鳴を上げ、テイルモンが険しい表情でヒカリを庇うように戦闘態勢を取っている。

ぴき、パリン、とガラスが割れるような音を立てながらぶち破られていく空間から、六角形の大きな結晶体が姿を現した。

その中に獣のような姿をした影が閉じ込められており、闇の気配はあの中からだどヒカリは声を震わせながら言った。

「ア、ああアアああアアアアア、あ、ア、ア、ア、ああああああア、あ、アアアアアッ!!」

大人とも子どもとも、男とも女ともとれる高くて低い声は何重にも重なって周辺に響き渡った咆哮は、真上から重たい空気で押さえつけるようなプレッシャーで、「元」子ども達とパートナーデジモン達は咄嗟に耳を塞いだ。

このエリアを住処としている野生のデジモン達も、その咆哮の異常さにその場で硬直しているのが遠巻きに見えた。

ぎらり、と水晶の中にいる影の目が光った気がして、大輔は咄嗟に逃げろと仲間達に言う。

その場から散り散りに去った直後、水晶から真つ黒な光線が放たれ、大輔達がいた個所に当たり、地面を抉った。

それは明らかな悪意と敵意と殺気で、戦いは避けられないと悟った。

それは、見たことのないデジモンだった。

京はタブレットに入っている、光子郎が長い年月をかけて集めたデジモンに関するデータが纏まっているページから、あのデジモンが何者なのかを検索しようとしたが……。

「……データ、なし?」

通常はタブレットについているカメラからデジモンの姿が映し出され、それに関するデータなどが表示されるのだが、そのデジモンをカメラで映しても何も表示されなかった。

デジモンの名前、種族も型もレベルも、全てに「Unknown」と

しか書かれていなかったのである。

何よそれ、と絶望にも似た思いが京の声から漏れたが、それでもデジモン達は怖気づくどころかやる気を見せており、そんな姿に叱咤された「元」子ども達は慌てて首をぶんぶんと振る。

「……行くぜ、みんなー」

大輔が声を張り上げると、「元」子ども達はそれぞれD―3を手に取り、想いを込める。

その想いがデータ化され、0と1に変換されながらデジモン達に届けられる。

もう子どもの時ほどの力はなくとも、逃げるという選択肢など彼らにはない。

……一瞬だけ、泣きそうな表情を浮かべた大輔に気づかず、進化を果たしたデジモン達は謎のデジモンに向かい、仲間達も声を張り上げながら応援する。

どれぐらいの時間が経っただろうか。

5時間ぐらいだったと思うし、ほんの1時間だった気もする。

時間の経過も分からないぐらい、大輔達は戦闘に夢中になっていた。

と言っても本気の戦闘ではなく、当初の予定通り、太一とヤマトが来るまでの時間稼ぎだ。

辺りは彼方此方挟まれてクレーターが出来、このエリアを住処としていた野生デジモン達は既に避難している。

光子郎からの連絡通りのデータ容量の通り、謎のデジモンの攻撃はかなり強大なもので、油断していると存在を消されそうだ。

エクスブイモン、アキラモン、そしてエンジエモンが遠距離からちまちまと攻撃し、アンキロモン、テイルモン、ステイングモン達近距離攻撃タイプのデジモン達は、謎のデジモンの周りをウロチョロしながら牽制していく。

そうやって時間稼ぎをしていたら、風と共にオメガモンがやってき

た。

太一達が来たのかと思つて伊織は背後を見たが、広い草原の何処にもおらず、恐らく謎のデジモンを倒すことを優先としたために、オメガモンだけが先に来たのだろう。

手あたり次第に攻撃している謎のデジモンに向かってガルルキヤノンを乱発し、オメガソードを振り下ろす。

ばきん、

水晶に罅が入る。タケルが声を張り上げた。

——大輔の目に、光はなかった。

「よせっ!!」

その時だ。大輔でも賢でも伊織でもタケルでも、太一でもヤマトでも光子郎でも丈でもない、男の子の声がしたのは。

京が振り向く。

謎のデジモンを包んでいる水晶にグレイソードを突き刺していたオメガモンも、制止してきた声に一瞬その動きを止める。

闇が、嗤った気がした。

急速な闇の膨張を感じたタケル達は、再び謎のデジモンの方を見る。

ひび割れた水晶の中の影に、闇がどんどん集められてどんどん大きくなつていった。

数秒もしないうちに水晶いっぱいになるまで大きくなつた影は、ぱりんという音を立てて水晶を割つて漏れ出てきた。

影を包み込んでいた水晶は粉々に割れて、その形を失う。

どんどん膨張していく影は、ドラゴンモードのインペリアルドラモンでさえ容易に飲み込み込みそうなほどの大きさまで膨らんでいた。

「っ、みんな逃げて!!」

タケルの焦ったような声がした。

巨大な闇の塊に驚愕で硬直していた仲間達は、その声で我に返り、回れ右をして走り出す。

運命の、分かれ道だった。

微かな鳴き声を聞いたヒカリは、走りながらそつちに目を向ける。幼年期のデジモンが、泣いているのが見えた。

真っ白な身体 of 赤ちゃんデジモン、ユキミボタモンが泣いていた。謎のデジモンが出鱈目に辺りを攻撃していたせいで、このエリアに住んでいたデジモン達はみんな逃げだしていたのに、幼年期のデジモンがぼつんと1人ぼつちでそこにいたのだ。

仲間とはぐれたのだろうか、仕切りに当たりを見渡してわんわん泣いている。

どうして、何故、そう思う前にヒカリは仲間達から逸れて、ユキミボタモンの下へと走って行った。

「ヒカリちゃん!」

「大輔!」

それに気づいたのは、ヒカリの後ろを走っていた大輔と、大輔の隣を走っていた賢であった。

いきなり仲間達から離れて謎のデジモンの方に戻って行くヒカリに驚いた大輔は、その先に泣いている幼年期を見つけて理由を察する。

テイルモンが振り返らなかつたら、タケル達はヒカリ達が謎のデジモンの方に戻って行ったことすら気づかなかつただろう。

『ヒカリッ!?!』

『ダイスケッ!!』

『ケンちゃあん!!』

テイルモン達が、それぞれのパートナーの名を呼びながら戻ろうとした。

眩い光が辺りを包む。

その眩さのあまりに、ヒカリ達を連れ戻すために引き返そうとしたタケル達は咄嗟に目を瞑り、立ち止まった。

真っ白な光だった。

突風がタケル達を後ろに押すように吹き荒れる。

時間にして数十秒ほど。

光と風が止み、タケル達は恐る恐る目を開ける。

視界がチカチカしたが、何とか視力が回復して見えた景色は、焦土化した草原だった。

謎のデジモンは影も形もなかった。

謎のデジモンが打ち破った空間はそのままだったが、猛威を振るっていた謎のデジモンは何処にもいなかったのである。

何処へ行った、逃げたのか、とタケル達は謎のデジモンがいた個所に戻り……見てしまった。

大輔と、ヒカリと、賢が力なく倒れている。

先程の風で巻き上げられた埃が3人の身体に纏わりついて、少し汚れていた。

風で吹き飛ばされなかったのは、踏ん張ったからだろうか。

近寄ったタケルは、親友の女の子の腕に抱かれた小さなデジモンがいることに気づく。

ぴいぴいという鳴き声が聞こえた。

「ヒカリちゃんっ！」

『ヒカリィー！』

タケルとテイルモンが駆け寄る。

地面に伏している親友の身体を抱き上げる。

硬く閉ざされた目が開かれて、赤い目がタケルを見上げながら無茶をしたことを咎められると思って苦笑いすると信じて疑わなかったタケルは、なんて無茶をと言いながらヒカリに声をかけた。

しかしヒカリは、何度タケルが呼びかけても目を覚まさない。

「……ヒカリちゃん？」

様子のおかしい親友の名を再度呼びながら、タケルは抱き上げた彼女の身体をゆする。

ぐったりとした身体は、幾ら待っていても動く気配がない。

「ヒカリちゃん」

もう1度呼ぶ。

気を失っているだけだと信じて、大切な親友の名を何度も、何度も。

でもヒカリは目覚めない。

「大輔さん！大輔さん!!」

伊織の焦ったような声がした。

「賢くん!?ねえ、賢くんてば!!」

取り乱した京の声が聞こえた。

ヒカリから目を離し、ゆつくりとそちらに目を向ける。

揶揄うと面白いぐらいに大袈裟に反応していたリーダーダーが、その後輩の憧れでありライバルである親友が、ヒカリと同じようにぐったりとしていた。

「……………あ、

「ヒ、カリ、ちゃん」

悟ってしまった。

「ヒカ、リ、ちゃん」

理解してしまった。

「ヒカリ、ちゃん」

「……………気づいて、しまった。

「……………ヒカリちゃん」

でももう戻れない。

いまとむかしとみらいのおはなし

Butterfly

2030年7月25日、木曜日。

八神太一は外交官である。

デジモンとデジタルワールドの存在が人間に認知されるようになってから、2つの世界は手を取り合って共存する道を選んだのだが、それに伴い新たな問題も増えた。

人間側はデジモンを悪用したり犯罪に利用する者、憂さ晴らしや八つ当たりなどで虐待をする者、宗教的な理由でデジモンの存在を否定し抹殺しようとする者、デジタルワールドを我が国の領土と主張する者。

そしてデジモン側は、人間を見下して人間界に侵攻しようとする者。

異なる空間にある2つの世界と共存するなど前代未聞であるために、そう言ったことに関する世界的法律がまだできていなかった時代、そう言った問題を解決していたのは太一と大輔をリーダーとして活躍していた世界中の選ばれし子ども達であった。

最初、政府の人間は子ども達にそう言った問題を解決させることに難色を示していたが、かといってパートナーのいない大人達はどうすることもできず、況してやデジモンは現実世界にいると精密機械を狂わせてしまうほどの強い電磁波を放つために、人間だけで対処することはほぼ不可能に近かった。

それらを1つずつ解決していったのが、世界中の選ばれし子ども達なのだ。

デジモンを悪用したり犯罪に利用する者や、デジタルワールド及び

人間界の支配を企んだ者には容赦なくパートナー達に叩きのめしてもらい、虐待する者は生身でデジタルワールドを冒険させて心を折らせた、なかなか容赦のないことをしたこともした。

デジモンの存在を否定する者、抹殺しようとする者は時間をかけて話し合った。

理解と納得をしてくれた者もいたし、それでも認めようとしないうもいた。

話し合いで全てが解決するとは思っていないが、それでも理解してもらおう努力をしないという理由にはならない。

これは世界中の「元」選ばれし子ども達と現えられし子ども達の目下の課題でもあり、外交官としての太一の大切な仕事の1つでもあった。

だが太一の主な仕事は、現実世界とデジタルワールド間の調整や橋渡し、新たな問題が起こった時のための書類づくり等である。

太一達が初めてデジタルワールドを冒険したのは31年も前だが、2つの世界の交流が正式に始まったのはここ数年のことだ。

問題はまだまだ山積みで、次から次へとトラブルが太一の下に舞い込んでくるせいでなかなか家に帰れない日が続いているが、それでも太一は大切な世界に関われる仕事にやりがいを感じていた。

「八神外交官」

デジタルワールドと人間界の橋渡しになると決めたあの日から、がむしゃらに走ってきて早10年近く。

太一は今や世界になくはならない重要人物となっていた。

毎日のように机に積まれる書類は、次から次へと生まれている2つの世界の問題に関する書類だ。

それらを隅々まで目を通していたら視界が霞んできたので、目頭を押さえていたら、秘書に話しかけられた。

要件を聞くと、太一の後輩と名乗る者が尋ねてきた、ということだった。

太一の後輩、というといつかいない。

あいつも、太一と同じく2つの世界を繋ぐために誰よりも走り回っ

た功労者だ。

有事の際には外交官と同じ権限が与えられており、外務省にも自由に入入りできるのだが、自分は一介の一般人ですからと言って、太一の職場に来たことは殆どなかったのに。

太一は秘書や部下達に断りを入れて、後輩が待っているロビーに向く。

「よう、大輔」

「！太一先輩！」

ふかふかのソファーに座っているのは、見知った後輩の後ろ姿。

遠慮なく声をかければ、まるでご主人を見つけた子犬のように分かりやすく反応した。

もうとつくに先輩後輩の関係ではなくなっているから、太一さんでいいんだぞって言っても、この後輩は、先輩はいつまでも俺の先輩ですから、と言って先輩呼びを止めようとしな。

太一も、相手が太一だからとその呼び方を許した。

「どうしたんだよ、今まで何度遊びに来てって言っても一般人ですからって断ってたのに、珍しいじゃんか」

何かあったか？と尋ねながら太一が向かいのソファーに座ると、大輔は笑顔を引っ込めてしまった。

ん？と思つたが、特に気にせず話を続ける。

「そーいやブイモンはどうした？一緒じゃないのか？」

「……店番、させてます。連れてってごねられたんですけど……」

「連れてくりやよかつたのに。俺は気にしないぞ？」

「……………」

「……大輔？」

何故か、大輔は目を伏せてしまった。

前かがみになるように背中を丸めて、両膝に両腕を乗せ、太一と大輔の間にある脚の低いガラスのテーブルを見つめている。

微かに反射した大輔の表情は、いつもの彼らしくなかった。

「……何かあったのか？」

「……そういわげじゃないです。ただ……何となく太一先輩に逢い

たくなって……」

「はあ？なあとに言っただよ、あと1週間もすりや逢えただろ？」

1週間後の金曜日は、8月1日だ。

31年前のその日は、太一達選ばれし子どもがデジタルワールドへと召喚された日で、今は「デジタルモンの日」という祝日になっている。

その日は、どれだけ仕事が忙しくとも、絶対に集まろうとみんなが決めた大切な記念日だ。

成長するにつれ、みんなそれぞれの夢や仕事で忙しくて顔を合わせることも少なくなっていたけれど、その日だけは何があっても顔を合わせようと決めたのである。

毎年の恒例行事となっているその日は、デジタルワールドで1泊2日のキャンプをしていた。

今年ももちろん、空やミミが中心となってその計画を立てており、その日に向けて休暇を取るために仲間達は仕事をこなしている真っ最中である。

太一の言う通り、1週間後には必ず逢えるのに、どうしてこの後輩は逢いに来たのだろうか。

「……いやあ、太一さん最近忙しくて、うちの店にも食べに来てくれないうじゃないですか？前に来たの、確か去年の10月でしたよね？」

「……そういやあ、最近やけにデジタルワールドと現実世界のトラブルが増えてきて、てんやわんやしちまってたな……」

去年までは、少なくとも月に一回は近所にある大輔のラーメン店に赴いて、大輔が手ずから作ってくれたラーメンを食べていたのに、最近は愛妻弁当ばかりだった気がする。

妻にも、最近本宮さんのところに行かないのね、なんて指摘されていたような……。

「うちの店に来れないほど忙しいのに、遊びに行くのもどうかなーとは思ったんですけど……一回気になっちゃったらもう、忘れられなくて……」

苦笑いする後輩に、そう言うところ変わってないよなあと太一は笑った。

要は、最近顔を見せなくなった太一を心配して来てくれたのだ、この後輩は。

猪突猛進のくせに周りをよく見ていて、1人ぼっちでいる子に真っ先に声をかけることが出来るぐらい、気遣いがあつて優しい子だった。

言葉も気持ちもストレートにぶつけてくるから、ヒカリを始めとする大人しい子には引かれがちだったものの、大輔のそういうところ嫌いじゃないと、昔ヒカリが笑いながら言っていたことを思い出す。

「はは、悪かったな、心配かけて。確かに問題は増えてきたけど、俺の部下達はまあ優秀な奴ばっかでき。少しずつ片付いているから、心配すんな」

「……………」

「そんな顔すんなって。仕事がひと段落したら、ラーメン食いに行つてやるから。部下達も全員連れてってさ」

「……………」ありがとうございます。太一先輩の元気な顔見れて、安心しました」

豪快に笑う太一に、本当に何でもないので判断したらしい大輔は、ようやく昔と同じ微笑みを浮かべてくれた。

よほど心配をかけてしまったらしいなあ、と反省し、再度詫びるともう帰りますと言って立ち上がった。

「そっか。お見送りたいんだけど、まだ仕事残ってるんだ。早いとこ戻らないと……………」

「いいっすよ。太一先輩の顔見れましたし。早く戻つてあげてください」

俺は気にしないんで、という後輩の言葉に甘え、太一は自分の部署に戻る。

「問題増えちまったら、お前に押し付けるために呼び出すかもしれないから、覚悟しとけよー」

「えー、勘弁してくださいよ、太一せんぱーい」

「ははは、またな大輔！次は1日だ！ちゃんと準備しとけよ！」

冗談を言つてやれば、本気で嫌そうな表情を浮かべる大輔が面白く

て、太一は笑う。

昔から喜怒哀楽の表現が分かりやすい大輔は、先輩達のかっこうのおもちやだ。

太一はその筆頭で、構ってやっては揶揄って大輔の反応を楽しんでいた。

素直な大輔はそれを真に受けてきいきいと全身を使っただけ怒るものだから、上級生達はますます大輔を可愛がる。

きつとこれからもこの関係は変わらないんだろうな、と思いながら、太一は背を向けて今度こそ自分の部署に戻った。

「……………さよなら、太一先輩」

その背が見えなくなるまで見送っていた大輔が、今にも泣きそうな顔でそう呟いたことに気づかぬまま。

2030年7月28日、日曜日。

記念日まであと4日と迫ったところで、太一は職場からくたくたになりながら出て行く。

デジタルワールドと現実世界の橋渡しの第一人者と呼ばれている太一は、毎日のように運ばれてくるデジモンと人との間で起こったトラブルに関する資料に全て目を通し、優先順位などを決めては部下や同僚達に振り分けたり、デジタルワールドのエージェントとリモート会議をしたりと、なかなか忙しい日々を送っているのだが、毎年8月1日の1週間前ぐらいになると、同僚や部下達は気を遣って定時で帰らせてくれるのである。

一昨日は約1年ぶりに夕焼け空の下を歩いて帰宅したのだが、何故だか涙が出てきた。

スマホを取り出して、SMSで妻に今から帰る旨のメッセージを送り、スタンプで返事が返ってきたのを確認してから太一は職場の敷地を出た。

毎日毎日帰宅が0時を超えても、妻は文句を何一つ言わずに帰りを待っていて、軽い夜食も作ってくれて、本当に感謝している。

先に寝ていいんだぞ、っていつも言っているが、毎回貴方を待っている時間も楽しいの、って返されるので、ここ数年は手土産を欠かさないことにしている。

今日は何にしようか、とぼーつとした頭で考えながら門を出たら、門のところで誰かが佇んでいた。

誰か待ってんのかな、と思いつつと目に向けて、太一は立ち止まった。

「……賢？」

「……あ、太一さん」

そこにいたのは少々草臥れたトレンチコートを羽織って、ぼんやりと何処か遠くを見つめていた、「元」選ばれし子どもの仲間で、3日前に突然やってきた後輩の親友、一乗寺賢だったのである。

こんにちは、いえこんばんは？と苦笑しながら駆け寄ってきた賢に、太一は先ほどまで見せていた疲れも忘れて笑顔を浮かべた。

彼もまた、成長するにつれ仕事が忙しくなっただけで逢う機会が減ってしまった仲間だからだ。

とは言っても、賢とは大輔やタケルほど交流があったわけではない。

殆どが大輔を通してのものであったし、過去の出来事のことでもあったか、賢は積極的に太一に絡んでくることはなかった。

元来優しい賢は、昔自分がしてしまったことを今でも後悔しており、その償いをするために刑事になったのだとヒカリから聞いたことがある。

賢には兄がいた。10歳の時に亡くなったらしいのだが、彼はいわゆる天才少年で、両親はそんな兄を溺愛していたらしい。

天才少年を生んだ親としてご近所でも有名で、兄が褒められるたび

にいつも鼻高に兄を褒めていた。

賢のことも褒めてはくれていたが、まるで兄のついでのような物言いだだったので、賢は寂しい幼少期を送っていたらしい。

兄さえいなくなれば、と呪いにも似た想いを抱えていた賢は、実際に兄がいなくなっても両親の関心が自分に向けられることがなかったために、余計に寂しくなったそうだ。

その心の傷と隙間を狙われ、賢は「ある者」に唆された結果、「デジタルカイザー」という人格を得て、デジタルワールドを歪ませ、支配しようとしていた。

それが全て仕組まれていたものだとは知らず、全て自分の意志だと信じて疑わず、「デジタルワールドを破壊して回った賢は、パートナーの死という出来事によって目を覚ました。

その後は自分がしでかしてしまったことの償いをするために1人で行動していたのだが、大輔の真摯な対応と心に響いた言葉により、正式に仲間に加わった。

しかし賢が犯してしまった罪は、幾ら償おうとも消えることはない。

もう自分のように苦しみ、悲しむ人間を増やしたくなくて賢は刑事になったのである。

「どうしたんだよ、賢。何かあったのか？」

12人の「元」選ばれし子ども達のうちの1人ということで、デジモンに関する犯罪を取り締まる課が新しく出来、賢はその課の責任者となった。

仕事の内容としては太一がやっていることとよく似ているが、賢が太一の職場に来ることは殆どなく、連絡を取り合うとしてもっぱらメールやビデオ通話がメインな今日（こんにち）、顔を合わせることも珍しい。

何か重大な事件でもあったのだろうか、と太一の眉間に皺が寄ったが、それは杞憂だった。

「あ、いや……何かあった、ってわけじゃないんです……ただ、何か顔が見たくなって……」

気まずそうに、照れ臭そうに、頬をかきながら賢はそう言った。
「はあ？」と拍子抜けした太一は間拔けな声を上げる。

同時に、安堵した。

「なあんだよ、妙に真剣な表情して立ってたから、何か大変な事件でも起きたのかと思っただぜ」

「それだったらこんなところで呑気に突っ立ってませんよ」

「それもそうだ」

太一と賢は笑いながらそんな軽口を言い合った。

正直、太一は賢のことをあまり好いていなかった。

何よりも大切な相棒を操って、無理やり戦わせるようなことをしでかしたのだ、到底許せるはずもない。

しかし元来大雑把な性格の太一は、パートナーの死で本来の自分を取り戻し、自分の罪を償うために頑張ってきた賢を知り、許すと決めたのだ。

仲間達のごちやごちや言っていたが、反省している奴をこれ以上責めるのは違うだろうという鶴の一声により、仲間達は渋々だが納得してくれた。

その内、賢の頑張りも徐々に認められ、冬になる頃には完全に許され、本当の意味で仲間になった賢を、実は大輔とタケルの次くらいに気に入っていた。

「しかし、お前と言い大輔と言い、あと4日もすりや逢えるんだからわざわざ逢いに来なくなっちゃってよかっただろうに」

「……………」

「賢？」

「…………あの、太一さん…………今日、アグモンは？」

「ん？今日はデジタルワールドに。あつちでちよいとトラブルがあつたみたいでな。ゲンナイさんに泣きつかれて鬱陶し…………いや、仕方なくヘルプに行っただ」

「…………そうでしたか」

「そう言う賢こそ、ワームモンはどうした？」

「最近京さんが、子ども達の世話が大変そうだったので、ホークモンと

一緒に京さんの手伝いをしてもらってます」

「そっかー。お前んとこ3人だもんなあ。1番下の子はもう3歳なんだっけ？」

「はい。いたずら盛りで大変ですよ。この前も壁に油性ペンで落書きしちやっただけで……」

「あー、心が折れる奴だなあ、それ。うちんとも今でこそ大人しいけど、そんな頃にはティッシュ巻き散らかしたり、コンセントの穴に色んなもん突っ込んだり、大変だったわ」

息子が初めてデジタルワールドを冒険したのは、あの時のタケルと同じ年の時。

今はあの時の自分と同じ年で、太一のような闊達な性格ではないものの、決断力は彼によく似ており、今は小学生達を率いて立派なリーダーとなっっている。

ちなみに中学生のリーダーは大輔の息子だ。

「ん？アグモンに何か用事でもあったのか？」

話がどんどんずれていったが、アグモンのことを尋ねたということは、アグモンに用があったのだろうか。

そう思って聞くと、賢は何故か押し黙り、先ほどまで浮かべていた笑顔が消えて目を伏せてしまう。

「……………」

「……賢？」

「……大した用じゃ、ないんです。ただ……あの時のことを、ちゃんと謝っていなかったなあ、って思ったら……居ても立っても居られなくなってしまうって」

「……………」

太一は唇をきゅつと結んで賢を見やる。

賢が言っているのは、十中八九「あの出来事」だろう。

彼がデジモンカイザーと名乗り、デジタルワールドを支配しようとしていた時。

彼は「イービルリング」という特殊なリングを使ってデジモン達を操っていたのだが、そのリングは成熟期までのデジモンを操ること

はできてもそれ以上のデジモン、完全体を操るには情報処理が不足していたために、完全体を完璧に操るために太一のパートナーであるアグモンに酷な実験を強いて、挙句自分の家来としてメタルグレイモンを操ったのである。

大輔とブイモンの活躍により、アグモンを取り戻すことは出来たのだが、メタルグレイモンを操るために生み出したイービルリングの改良版、イービルスパイラルで更にデジモン達を下僕とし、苦しめてきた。

賢が正気に戻ってからは色々あってみんなでバタバタしていたし、何より賢を許すと決めたからすっかり忘れていた。

アグモンもあの時のことは全く気にしていなかったから、今更そんなことを、というのが太一の心情である。

それでも、伊織ほどではなくとも真面目な賢はずっと気にしていたようだ。

「……謝ったからと言って許されるわけがないのは分かっていますし、自分のエゴだとも分かっています。でも、どうしても謝罪したいんです。太一さん、あの時は本当にすみませんでした」

深々と頭を下げる賢に、太一は参ったなと苦笑した。

これが大輔なら、そんなことのためにわざわざ来たのか、って豪快に笑い飛ばしてやれるのに。

「……俺じゃなくてアグモンに謝ってくれよ」

分かっている。これは賢なりのケジメなのだということぐらい。

それを分かっているから、太一は賢を許すことにしたのだ。

でもそう言えば、賢に面と向かってそう言ったことがなかったなあと思ひ出す。

言っていれば、賢も今更になって謝罪してくることはなかったかもしれない。

そうすると悪いことをしてしまったな、と思ひながら、太一は上記の台詞を口にした。

人間とデジモンは一心同体なのだ、自分に謝るのならパートナーにも当然謝ってもらいたい。

それでチャラにしてやると、と付け加えるが、賢は何故か悲しそうな表情を浮かべるだけだった。

あれ？と太一は首を傾げる。
てつきり安堵すると思ったのに。

「……そう、ですね」

「そうだよ。8月1日になったら全員集合するんだから、そんな時に改めてアグモンに謝罪すりゃいいじゃんか」

「……………はい」

やっぱり賢の表情は晴れない。

賢の望んでいる言葉が分からなくて、太一は頬をかいた。

大輔ならもっと分かりやすい反応してくれんのかなーと思っていたら、俯かせていた顔を上げて太一を見てきた。

その目には、先ほどまで浮かべていた悲しみの色は何処にもなかった。

「……突然訪ねたりして、すみませんでした。僕、もう帰ります」

「そうか。気を付けて帰れよ」

「はい」

ありがとうございました、と言って賢は頭を下げ、踵を返して太一に背中を向けて歩き出した。

……その背中が妙に物悲し気で、太一は思わず賢を呼び止める。

「賢！」

振り返る賢。

太一は子どもの頃から変わっていない笑顔を浮かべながら、手を振った。

「またな！」

「……………」

賢はそれに返事をせず、もう一度頭を下げ、再び背中を向けた。

2030年7月31日、水曜日。

明日はいよいよ記念日だ。

太一達が初めてデジタルワールドを冒険し、生涯の友と出逢った大切な日。

世界中の人間にデジモンのパートナーが現れるようになってから、世界は一新した。

新しい仲間と過ごすためのルールを1から作り上げ、今日（こんにち）に至るまでに血の滲むような努力を積み重ねて出来上がった平和の礎。

世界はその日をデジモンの日とし、パートナーとの絆を深めるための、世界共通の祝日と定めた。

外交官である太一の仕事は、デジタルワールドと現実世界の橋渡しだけでなく、デジモンを利用した侵略や戦争が起こらないようにするための調整役でもある。

デジモン達は人間の友達であり、仲間であり、隣人なのである。共に生きる命なのである。

決してデジタルな世界の、デジタルな存在でも、況してや人間の欲望を叶えるための道具でもない。

当初はそれを分かっていたくない人間が大勢いたため、太一をリーダーとする世界の選ばれし子ども達は大変な苦労を強いられた。

特に、武力で他国を支配しようとしている国は、まず入国するのが大変だったし、話を聞いてすらもらえなかったものだ。

いつそのことそう言った国にはデジモンを送ることを止めるか、という意見も出たが、その国にいる選ばれし子どもに被害が及びそうになったので、太一と大輔がぶちギレて不法入国上等と言わんばかりの方法で相手国に乗り込み、説得（物理）を試みてようやく納得してもらえた、という逸話は最早伝説として語り継がれている。

デジモン達に何かしたら2人のデーモン（悪魔）が国を滅ぼしに来る、とさえ言われるほどになってしまったが、それはそれでデジモンに無茶なことを強いることが減ったので良しとしよう。

8月1日は記念日として祝日になったとはいえ、まだデジモン達と

の共存が始まってから数年ほどしか経っていない今は、まだまだ問題が山積みである。

しかも太一はデジタルワールドと現実世界の外交官であるために、デジモン関連の問題に関する資料は毎日のように届くから、それに目を通さないといけないのだ。

例え2つの世界の危機を救った英雄の1人とはいえ、特別扱いはできないのである。

明日は1度家に帰ってからデジタルワールドに向かうため、今の内に準備を済ませてしまおうと、定時で上がって妻の手料理を堪能した太一は自室へ向かう。

出張の時に使うボストンバッグを取り出し、1泊分の着替えやらパジャマやらアメニティやらを用意していたら、コンコンと控えめなノックが聞こえた。

返事をする、扉を開けた妻が上半身だけを覗かせて、電話が来た旨を伝える。

誰だ、と聞いたら妹さんよと帰ってきた。

目に入れても痛くないほどに溺愛している、妹のヒカリから電話なんて珍しい、と目を丸くしながら準備を途中で放ってリビングに出る。

外されている受話器を手にとって、太一はもしもと呼びかけた。

《…もしもし》

「どうした、ヒカリ？珍しいじゃんか、電話なんて」

いつもならSMSで済ませるのに、と太一は笑う。

デジモンとの共存によりインターネットは急速な発達を遂げ、今や固定電話は物好きぐらいしか所持していない。

強力な電磁波を発生させるデジモン達のお陰で、ちよつとやそつとじゃ電波障害なんて起きないぐらいには発達したし、電波を必要としない電子機器も増えたのだ。

しかしこれから先、万が一億が一、ということはある。

現実世界に住むデジモン達のために電波障害対策はしてあるが、それでもせいぜい成熟期レベルの対策だ。

完全体や究極体レベルになると発生する電磁波は並みのものではないから、太一達は今でも固定電話を所持しているのである。

《……声が、聴きたくて》

「……変なこと言うなあ。明日逢うんだから、嫌でも聞くだろう？」

《うん……》

一体どうしたと言うのだ、この1週間、3日起きにそんなことを言ってくる人物が3人もいるなんて。

もうすぐ記念日で全員集合するのに、どうして大輔も賢もわざわざ逢いに来たのかさっぱり分からない。

おまけに近くに住んでいる妹まで、声が聴きたくなつたという理由で電話してくるなんて。

太一が住んでいるマンションは実家と同じなのだが、ブラコンなヒカリもお兄ちゃんがいるからという理由で階違いの同じマンションに住んでいる。

作つたスープが冷めない程度の距離だが、近いが故にいつでも会えるだろうという理由で、太一もヒカリも互いの部屋には滅多に行かない。

それでも兄妹だから、他のメンバーよりは逢っている回数は多かった。

「……どうしたよ、元気ないな？」

滅多に電話をしてこない妹の、突然の電話と声の張りがないことから兄としての勘が働き、太一は優しく尋ねる。

何か嫌なことでもあつたのだろうか、旦那と喧嘩でもしたか？

もしもそうなら、旦那をとちめてやらなければ、とシスコ丸出しなことを考えていると、ヒカリは蚊の鳴くような細かい声でうんと言った。

《何でもないよ。ただ、本当に声が聴きたかつただけ》

「……そうか？」

《うん……本当は、逢いに行きたかつただけ……こんな時間だつたし》

「今から来るか？」

《あはは、それもいいかもね……でもやめとく》

昔のヒカリなら、兄にそう言われたら素直に来ていただろう。

例えば8時を過ぎている時間帯だとしても。

太一の妻もヒカリがブラコンで、太一がシスコンであることは重々承知しているから、夜分遅くにヒカリが訪ねてきても、あらあらいらっしやいって穏やかな笑みを浮かべながら招き入れてくれただろうけれど、流石にそれは悪いと思ったのか、ヒカリはそう言って遠慮した。

「……本当に何でもないのか？何かあるんだったら、兄ちゃんが相談に乗るぞ？」

《……ううん、いいの。もう……いいんだ》

いつだって兄の後ろに隠れていた妹。

自分には見えない“何か”を、聞こえない“何か”を、感じない“何か”を理解していたヒカリ。

そのせいなのか自分の気持ちを全面的に出さずに、いつも心の中に仕舞っていた。

兄だから分かる、今回も本当は“何か”あつたはずなのに、妹は兄に迷惑がかかるかもしれないと思って言わないのだ。

太一に助けてほしくて電話をしてきただろうに、太一に迷惑をかけるかもしれないから言えないなんて、気づいてほしい、聞いてほしいと言いたげなのはお見通しだった。

何度も何度も根気よく、しつこく尋ねなければ自分の心情を吐露できない妹が、何だか可哀想で……とても愛おしかった。

「……ヒカリ？」

《ありがとう、お兄ちゃん。こんな時間にホントにごめんね？》

だから今回もヒカリが観念するまで尋ねてやろうと思ったのだが、ヒカリもそんな太一の心情などお見通しだったようで、会話を終了させようとする。

太一は呆れたが、どうせ明日逢うのだからその時に問いただせばいいか、と思つて敢えてヒカリに乗ることにした。

それが、間違いだったと気づかずに。

「お休み、ヒカリ。また明日な」

《……………お休みなさい》

ガチャリ、と電話の向こうで通話が切れる音がする。

ヒカリは、また明日とは言わなかった。

イレギュラー

「ねえ、ゲンナイさん。まだナノモンのピラミッドにつかないの？」
日も暮れだした、オレンジ色に染まる空。

広大なサーバ大陸の3割ほどを占めている砂漠の上空に、なつちやんはいた。

正確には、ゲンナイが操縦するメカノリモンの手のひらに座っていた。

メカノリモンというデジモンは、デジモン初の乗り物型デジモンで、自ら戦う力のないデジモンが操縦して戦うように作られた、自分の意志で行動することが出来ないマシーンデジモンである。

デジモン達と同じような、データの塊の存在ではあっても戦闘能力は全くないゲンナイにとっては、大切な移動手段でもあり、戦闘手段でもあった。

しかしメカノリモンは成熟期であるために、戦闘能力はたかが知れている。

だからゲンナイにとってメカノリモンは対峙した相手に目くらまをし、逃走するための手段でしかなかった。

「落ち着きなさい、なつちやん。あと数十分もすればピラミッドに着くよ」

目を瞑っても運転できるぐらいに操縦しなれているゲンナイは、メカノリモンの手のひらに座りながら、足をブラブラさせている女の子……ハニーブロードの髪に瑠璃色の目をした「なつちやん」に、微笑みながらそう言った。

「だって、やっと大輔に逢えるんだもん。待ちきれないよ」
「……そうだな」

わくわくとした表情を浮かべるなつちやんに、しかしゲンナイは何処か浮かない顔だった。

操縦桿を握りしめるゲンナイの手に、変な力が入る。

「……ゲンナイさん、これから大輔達はどうなるの？」

「……どうなるんだらうな。もうだいたい『予定』から外れているみたいだし……」

そんなゲンナイに気づいてか、なつちゃんは先ほどまでの嬉しそうな表情を引つめて、少しだけ悲しそうにした。

なつちゃんの質問に対し、ゲンナイは右手を操縦桿から離し、服の懐に手をつ込む1冊の古い本を取り出す。

少々草臥れた様子その本は、何度も何度も読みこんでいることが伺えた。

メカノリモンの手動操縦を自動操縦に切り替える。

パラ、と適当にページを開き、パラパラと目的のページまで適当に捲る。

目的のページを見つけると、捲るのを止めてそのページを優しくなぞった。

『ピラミッドの支配者』

そのページにはそう書かれていた。

『あの時』の自分は敵の策略にはめられ、身体を奪われ、子ども達をサポートすることが出来ずに、色々と後手後手に回っていた。

子ども達には大変申し訳ないことをしたと、今でも思っている。

でも今は違う。

パターン、と本を閉じて本を懐に仕舞った。

自動操縦を手動操縦に切り替える。

「……もう遅れは取らない。もう二度とヘマをしないし……失くしたりしない」

きつとこれは、自分の無力を言い訳にして、全て子ども達に押し付けたツケなのだ、と、ゲンナイは思っている。

だからこそ、『この世界』では完璧にサポートしてみせる。

『世界の安定を望む者』の手足として、一介のエージェントに過ぎない、人間味も感情らしい感情もなかったはずのデータの塊でしかない。

かった彼の目には、人間と同じぐらいに強い意志を秘めた色を浮かべていた。

「おい、一体どうなってるんだよ!」

『ダイスケは!? ブイモンは無事なの!?!』

『少し黙れ! 今やっている!』

メインコンピュータールームは、パニックに包まれていた。

子ども達が全員並んでやっと届くほどの幅がある、大きなモニターはブラックアウトしており、ナノモンは忙しなく両手を動かして、キーボードを操作している。

そのモニターには、紋章を手に入れるために3人と3体だけで小さなトンネルの向こうへ姿を消した、最年少とそのパートナー達が映し出されていた。

たった3人と3体だけで行ってしまった最年少達を心配した上級生達のために、ナノモンが内部の監視カメラをモニターに映してくれるのである。

太一の治療も同時進行させようとしたのだが、ヒカリを心配して梃子でも動かんとモニターに張り付いていたので、仕方なく治療設備をここに移動させてモニターが見えるようにしてやり、問答無用で診察台に寝かせてやったのは、記憶に新しい。

終盤直前までは順調だった。

仕掛けがあると言っていたから、何処かの床石を踏んだり壁の一部を押ししたりと罫が作動するのかと思っていたのだが、そうではなかったのである。

最初は、川渡りパズルと呼ばれる論理パズルだった。

こちらの声は届かずとも、向こうの声を聞くことはできたし、壁に書かれていた文字も判別することはできたので、上級生達も問題文を読むことが出来た。

なぞなぞとしてはとても簡単な部類だったようで、治はもちろん、光子郎、空、丈はあっさりと解いてしまった。

ミミも光子郎に説明してもらって理解できたようなのだが、我らがリーダーの太一さんは大輔と同じく頭よりも身体を使う遊びの方が好きなので、治と空が2人がかりで説明しても理解してもらえず、空は早々に諦めてしまった。

治だけは何度も何度も、あの手この手で太一に説明するという根気強さを見せてくれたので、空も丈も素直にすごいなあと感心してしまう。

デジモン達にも一緒に説明して、モニターで最年少達が上手く池を渡ったのを見て、太一はようやく理解してくれたようだった。

妹のヒカリちゃんはあっさりと解いて大輔に説明していたのに、本当にこの男はサッカーすることしか頭にないのである。

次は、所謂宝探しだった。

台座の窪みにぴったりとはまるものを探す、という内容で、最年少3人とパートナー達があれでもないこれでもないって地道に探し回っているのを、上級生達はやきもきしながら見守っていた。

その内ブイモンがヒントを見つけ、3人と3体は出口の扉に集まって中心に書かれているらしいヒントを見るために背伸びをしていた。

残念ながら最年少達の身長では足りなかったようで、踏み台になるものを引きずって、その踏み台に乗って覗き込んでいた。

ナノモンに頼んで、大輔が覗き込んでいる部分をズームしてもらおうと、そこには英文が書かれていた。

英語が読める治が読み上げてくれたが、マザーグースに馴染みのない子ども達はピンと来ていない。

更に英文の下にもう一文書かれており、そこには「春が来るよ。ハッピーイスタール！」と言う英語が書かれていたらしい。

勿論、キリストのお祭りであるイースタールのことなんか知らない子ども達が、意味を知るわけもない。

そもそも今は夏なのに、何で「春が来た」なんだ、と太一が至極当然の疑問を口にしたが、誰も答えることはできなかった。

大輔は知っているようなので、戻ってきたら聞いてみようという結論に至り、子ども達は再度見守る。

卵型の宝石をヒカリが見つけた、3体のデジモンを進化させて、力を合わせて取り出し、台座の窪みにはめると扉が開かれた。

最後の問題で、上級生達はぎよつとなった。

何故なら、画面の向こうに自分達の姿があつたからだ。

ナノモンに尋ねると、ここに到着した際、太一達上級生6人の姿をスキャンするように、とゲンナイから頼まれていたようなのだ。

最後の問題で、大輔達に分かりやすくするために、ということしか聞かされておらず、言われたからやっただけ、としれつと言いつつ放ったナノモンに、頭を抱えたのは言うまでもない。

それだけでなく、最年少達が壁に書かれていたらしい問題文を読み上げた直後に左右と後ろの壁から砲撃が襲い掛かってきたのだ。

パートナー達が対処したものの、命を脅かすような仕掛けはないと聞いていたのに、これはどういふことだとナノモンに詰め寄ると、あれは勢いだけで殺傷能力はほぼないそうだ。

現にエンジエモンに砲弾が当たってひっくり返ったが、特に怪我をしている様子は見られなかった。

曰く、これから世界を救ってもらう救世主を、みすみす怪我させてしまうようなことするか、とのことだ。

どちらにしろこれぐらいのことも自分で対処できないのなら、これから先に待ち受けているであろう様々な危機を乗り越えることすらできないだろうな、とナノモンは密かに思った。

モニターの向こうの賢はエンジエモンが倒れた時に一瞬だけ目を見開かせて、絶望の色を浮かばせていたが、大輔とヒカリが何かを言つて我に返つたらしい。

何かを決心したような表情を見ると、ホログラムの太一達をもう一度見て何かを考えこみ……パートナー達を呼んで、大輔達を先導するように走り出した。

壁に書かれていたであろう文章は、こちら最年少達が戻ってから

聞くとして、ナノモンにカメラを切り替えてもらう。

そこは、真っ白な部屋だった。

正面の壁と左右の壁に、形の異なる紋章が彫られていた。

大輔達がそれぞれのデジヴァイスが反応を見せている紋章の前に立ち、デジヴァイスを掲げると紋章は壁から離れて小さくなっていきながらデジヴァイスに収まる。

異変が起こったのはその時であった。

紋章がデジヴァイスに収まった直後、部屋中を包み込むほどの白い光が突如として発せられ、上と下から押しつぶされるように1つの線になって映像が途切れてしまった。

上級生やそのパートナー達はもちろん、ナノモンとロップモンも驚愕していたので、想定していたことではないのだろう。

現にナノモンは先ほどからキーボードを忙しなく叩いて、カメラを復旧させようとしている。

しかし結果は見ての通りだった。

『……くそ、これではあの子達をこちらに誘導できん。仕方ない、ロップモン。緊急用の通路があるから、そこから子ども達を迎えに行つてこい』

『分かった！』

やられたのは監視カメラだけで、他のシステムは無事らしく、ナノモンは別のキーボードを操作して、大輔達が入つていった入り口とは違う場所に入り口を作り、ロップモンを行かせた。

穴の向こうに消えていったロップモンを見送り、ナノモンは再びキーボードをたたき、システムの復旧を急ぐ。

何が起こっているのか分からないまま、子ども達はただロップモンが最年少達を連れて帰ってきてくれることを祈ることしか出来なかった。

ロップモンはパタモンのこともプロットモンのことも「知っている」。

ずっとずっと昔から、どれぐらい昔かももう思い出せないぐらい昔から、パタモンとプロットモンのことを知っていた。

友達だった。大事な友達だったのだ。

再び巡り会うために、ロップモンは途方もない時間を過ごしながらずっと待っていた。

パタモンもプロットモンも、ロップモンのことは忘れてしまっていたし、ロップモンも悲しくはあったけれど、寂しさはなかった。

2人ともロップモンのことは覚えていないかもしれないよ、とゲンナイからは聞いていたし、何となくそんな気はしていたから、心の準備はできていた。

例えばパタモン達覚えていなくなっちゃって、自分が覚えている。

楽しかったことも悲しかったことも、全部自分が覚えている。

いつから待っていたのかは忘れてしまっても、3人で作った思い出は絶対に忘れない。

最年少の子ども達が通るのがギリギリなぐらいの高さのトンネルを一心不乱に走りながら、ロップモンは物思いにふける。

灰色に染まっているトンネルのずーっと向こうにある白い光を、無心で目指す。

ものの数分で白い光に辿り着き、紋章を保存していた部屋に辿り着くと、最年少の子ども達が集まって何やら騒いでいた。

それは、紋章を手に入れた歓喜の騒ぎなどでは、決してなかった。

「ブイモン！しっかりしろよ、ブイモン！」

「ねえ、ブイモン！どうしたの!?!」

「起きてよ、起きてよ!!」

痛みにも似た悲鳴。ロップモンは嫌な予感がして、最年少の3人……大輔と賢とヒカリに駆け寄る。

『どうしたの!?!』

『っー』

大輔達は取り乱していて気づかない。

代わりに、いつの間にか退化していたパタモンと、成熟期を維持しているテイルモンが反応した。

びくり、と肩を震わせて、恐る恐ると言った様子で振り返ったパタモンとテイルモンがロップモンを見つめてきた目は……先ほどまでとは全く違っていた。

『……ロップ、モン』

『……』

『……何かあったの？』

もしかして、という期待が一瞬湧いたが、大輔達の喚いている声がそれどころではないとロップモンを引き戻す。

再度尋ねると、パタモンとテイルモンは互いの顔を見合わせ、徐に首を横に振った。

『……紋章を、手に入れたと思ったら……ダイスケ達の様子がおかしくなってる……』

『どうしたのかしらって思って、声をかけようと思ったの……でも……』

直後に、ブイモンが急に苦しみだしたらしい。

頭を抱え、目を見開き、背を仰げ反らせながら喉が破れそうなほどの悲鳴を上げ、そしてそのまま後ろに倒れてしまったのだそうだ。

ロップモンはパタモン達から目を離し、ブイモンを取り囲んでいる子ども達の隙間から覗きこむ。

全身に変な力がかかったように小刻みに震え、赤い目に光はなく、涙がとめどなく流れていた。

様子がおかしいのは一目瞭然なのだが、何があったのかを尋ねるところは難しそうだ。

ロップモンは唇をきゅつと結んだ後、取り乱してブイモンを無理やり起こそうとしている大輔達に1発ずつ、その大きな耳でお見舞いしてやる。

その痛みと衝撃で、大輔達はようやく我に返った。

「え、あ、ロップモン……？」

『しつかりして。何があったのかは知らないけど、とりあえず戻ろう。君達が紋章を手に入れたのは、監視カメラで見てたから……』

上級生達も心配している、と言えば、呆然としながらも大輔達はブイモンを背負って、ロップモンの後について行く。

正規の出口は紋章を手に入れた後に作動する仕掛けになっていたはずなのだが、監視カメラがやられたときにそのシステムもダウンしてしまったようだ。

メインコンピュータールームの方は異常がなかったため、この部屋のシステムだけがやられてしまったのだろう。

それに関してはナノモンの領分だから関与することではないとして、問題は……。

『……あ、戻ってきた！』

ロップモンに導かれ、緊急用の暗く狭い通路を来た3人は、上級生達とそのパートナー達に迎えられる。

しかし3人の顔は、紋章を手に入れた歓喜ではなく、どちらかと言うと憔悴しきっていた。

3つの仕掛けを無事潜り抜けて紋章を手に入れたことを褒めてやろうとした上級生達は、拍子抜けした。

上級生達が紋章を手に入れるたびに羨ましそうにしていたから、てつきり喜んでいいると思っていたのに。

理由はすぐに分かった。

ロップモンが、ナノモンが太一のために用意していた診察台に、ブイモンを寝かせるように大輔に言ったからだ。

ブイモンは大輔に背負われている。

初めて進化を果たした後に、1週間近く眠ってしまった時のようだったので、最初はまた進化をしたことで寝てしまったのかと思ったのだが、様子がおかしい。

その目は完全に閉ざされておらず、薄らと開かれている紅い目には涙が零れており、全身も小刻みに震えている。

何があったんだ、と太一が代表して尋ねたが、大輔達も理由が分からないらしく、3人で顔を見合わせた後、静かに首を横に振るだけ

だった。

『……どうした？何があった？』

その時、システム制御室に行っていたナノモンが戻ってきた。どうだった、とロップモンが尋ねると、やはり紋章を保管していたあの部屋のシステムだけ落ちていたらしい。

幸い深刻なエラー等は出ておらず、ロップモンが大輔達を連れて行った直後ぐらいにシステムが復旧したそうだ。

そっか、と納得したロップモンは、ナノモンの先ほどの質問に答える。

と言っても、ロップモンもちゃんと答えることはできない。

何故ならロップモンが駆けつけた時には、既にそうなっていたからだ。

『どきどき』

診察台に寝かされているブイモンを心配して、群がっている子ども達を押し分け、ナノモンはブイモンを診る。

『……………』

「ナノモン、ブイモンどうなっちゃうんだ……？」

感情のない目で、じっとブイモンを見下ろしているナノモンに、パートナーである大輔が今にも泣きそうな表情を浮かべながら尋ねるが、ナノモンも何とも言えないと言った様子だった。

再度大輔達に何があったのか尋ねても、紋章を手に入れた直後にブイモンが苦しみだしたと言うだけで、他に原因が分からない。

一瞬紋章のせいか？と思つて大輔のデジヴァイスと太一のデジヴァイスを借りて比べてみたが、調べる限りその線もなさそうだ。

ナノモンはすつと目を細める。

「失礼、応答がなかったから勝手に邪魔させてもらったよ」

聞き慣れた声が聞こえて、子ども達とデジモン達の耳に届く。

は、と全員が一斉にそちらを見やると、そこにはこの世界にはいないはずの成人男性。

映像越しに何度か逢つた、子ども達をサポートしてくれている頼もしい存在。

「ゲンナイ、さん……？」

代表してその名を呟いたのは、太一である。

その声は何処か緊張しており、穏やかではなくとも味方のデジモンに保護されて幾ばくかりラックスしているであろうと思っていたゲンナイは、緊迫した空気に包まれている空間を不思議に思い、首を傾げた。

「ヒカリッー」

「っ、なっちゃん……」

そのゲンナイの後ろから、これまたここにいるはずのない人間の女の子が現れ、花が咲くような笑顔を浮かべながら走ってきたかと思うと、ヒカリに抱き着いてきた。

ぎゅーと抱きしめる女の子に見覚えがなく、太一達は誰だっ目で女の子を見つめる。

「……ナノモン、何があったのか説明してくれるかい？」

『……私に聞くよりも、小さき子ども達に聞く方が早いかと……』

まるで葬式のように暗い雰囲気を感じたゲンナイは、この守護及び3つの紋章の保管を頼んだ、ナノモンに尋ねると、ナノモンも事態を把握しきれないらしく、3人の最年少の子ども達……大輔と賢とヒカリの方を横目で見やっした。

ナノモンの視線の先を辿ったゲンナイは、ふむと小さく息を吐くと、悠然とした足取りで3人の子どもの前に立つ。

「こんにちは」

「……………」

久しぶりに見た大人の男性に怯えているような3人に、ゲンナイは努めて優しく微笑みかけ、その場に膝をついた。

ヒカリに抱き着いていた女の子は、ゲンナイが近づいてきた時に離れて、ヒカリに寄り添うように彼女の肩にそっと手を置いた。

「初めまして、になるのかな。画面越しでは何度か逢ったけれど、こうやって対面するのは初めてだね。私がゲンナイだよ」

「……………」

「何があったのか、教えてくれるかな？」

大輔とヒカリ、賢は互いの顔を見合わせたあと、困ったような表情を浮かべながらその顔を伏せた。

話してくれた内容は、パタモンとテイルモンがロツプモンに話したことと同じで、大輔達も詳しいことは分かっているようだった。

それを聞いたゲンナイは優しくなった表情を潜めて立ち上がり、診察台に寝かされているブイモンを見下ろす。

様子は先ほどと何ら変わりなく、幾ら呼びかけても起き上がる様子はない。

薄く開いた目から流れる涙、ぐったりとした身体。

……ゲンナイは見覚えがあった。

——……まさか！

ゲンナイの目が見開かれるが、子ども達に背を向けていたために彼の異変に気付くことはなかった。

心の奥底から湧き上がってくる焦燥感から、無意識に右手の人差し指で唇を撫でる。

まさか、そんなはず、しかしこの反応は……。

どうする、ゲンナイは考える。

何故ならゲンナイは、ブイモンがこうなったであろう原因に心当たりがあるからだ。

だが、それを子ども達に言うのは時期尚早だとも思っている。

“これ”は、子ども達が背負うには重すぎるのだ。

「……ゲンナイ、さん……ブイモンは……」

「……心配いらぬよ。私とナノモンで何とかしてみせるから」

心配そうに、ゲンナイの服を掴んで見上げてくる大輔に、ゲンナイは安心させようと笑みを浮かべて、彼の頭を優しく撫でる。

今にも泣きそうになっているその顔は……ゲンナイもよく知っていた。

——君は相変わらずだね、大輔。

自分がよく知る者と何ら変わらない、優しい心の持ち主に、ゲンナイは目を細めて大輔を見下ろした。

もう一度、ブイモンを見下ろす。

……今度は失敗しないと誓ったのだ。
必ず、助けてみせる。

ゲンナイはナノモンに目配せをし、その意図をくみ取ったナノモンは小さく頷いた。

『……子ども達よ、もう夜だ。ここに在る限り安全だから、今日のところはもう寝なさい』

「っ、でも……」

『お前達がここでブイモンを看病しても、事態が好転するとは思えない。お前達にはこの世界を救うという使命があるのだから、身体を壊しては元も子もないぞ。ロップモン、子ども達のために用意した寝室に案内してやれ』

『はあい。さあ、みんな。こっちこっち』

子ども達が反論する隙もなく、よどみなく正論を叩きつけてきたナノモンは、子ども達の意見は聞かないと言わんばかりにメインモニターの前に移動して、キーボードを操作し始めた。

頼まれたロップモンは場違いなほどに明るく返事をして、子ども達を後ろから押すようにその部屋を追い出した。

大輔は断固拒否してブイモンの傍に居ると主張したのだが、ロップモンに笑顔で却下される。

この部屋に入ってきた時の階段があった方向、先ほどは気づかなかったが、横に逸れた通路があり、そこには複数の扉があった。

子ども達がサーバ大陸に上陸したその日に、ゲンナイに言われて用意した寝室だそうだ。

ピラミッド内部はナノモンが普段籠っているメインコンピュートールームが地下深くにあるせいで、外の様子は分からないのだが、どうやらもう夜になっているようだった。

「……………」

ブイモンを心配してだんまりになってしまった大輔を気遣って、ヒカリと賢、それからアタシも一緒に行くと言ってついでにきたなっちゃん、彼に寄り添っている。

しかし2人の顔色もいいとは言えなかった。

パタモンとプロットモン、大輔以外でバイモンが触れられても平気な2人だから、2人もバイモンが心配で仕方ないのだろう。

しかしナノモンの言っていることも事実で、これ以上子ども達が出来ることなどきつとない。

「賢」

「っ!!」

治が声をかけてやると、憔悴していた弟は大袈裟なぐらい身体を跳ねさせて、兄を見やる。

「……お、にい、ちゃん……」

目を見開き、1つ1つの単語を噛みしめるように、治を呼ぶ。

そんな弟を不思議に思いながらも、きつとバイモンのことで頭がいつぱいになってぼーつとしていたのだろうと判断した治は、賢を安心させるように微笑んだ。

「……大丈夫だよ、きつと。何があったかは分からないけれど……きつとすぐに戻るさ。だから今は休もう?」

気休めにもならない言葉は、弟を慰めてくれないことぐらい分かっている。

それでも、このまま放っておけば兄達の目を盗んでバイモンの下へ行ってしまうような気がしたので、治は半ば強引に賢を納得させ、パジャマに着替えさせてベッドに放り込んでやった。

賢の本当の心情など、露ほどもにも想像しないまま。

ぴ、ぴ、ぴ、と規則的な電子音が、静まり返った空間に響き渡っている。

頭に怪我を負った太一のために出していた診察台に寝かされたバイモンの頭には、コードが沢山ついたヘルメットが被せられていた。

灯りが落とされていいる空間の光源はモニターから放たれているブルーライトで、普通の人間ならば間違いなく視力を落としているであろうが、そのモニターを見つめているのはマシーン型のデジモンであるために、その心配は無用であった。

モニターには心電図のような波形を描いている動画や、ピラミッドの外部に着けられている監視カメラからの映像、文字の羅列が映ったウインドウなど、いろんなものが画面いっぱい映っている。

ナノモンの隣では、ゲンナイが忙しなくキーボードを叩いていた。

「……………ゲンナイ、さん」

「っー」

画面に集中していたゲンナイは、突然かけられた声に驚いて、一瞬肩を跳ねさせる。

振り返ると、そこにはなつちゃんがいた。

なつちゃんだけではない、パジャマ姿の大輔とヒカリ、それから賢が立っていた。

「どうしたんだい？」

ゲンナイは怖がらせたり不安がらせたりしないように微笑む。

もしかしたら、ブイモンが心配で、全く眠れないのかもしれないと思いい、そう言われたら大丈夫だよと言ってやるつもりだったが、そうではなかったみたいだった。

「……………ヒカリ達が、話があるって」

「話？ブイモンのことなら……………」

ゲンナイの言葉を遮るように、3人は一斉に首を横に振る。

それから、ちらちらとナノモンの方を見た。

どうしたんだい、って聞いても、3人はちらちらとナノモンを見て、それから3人で顔を見合わせて、口を開きかけたり閉じたり、指をもじもじさせるだけで何も言おうとしない。

ゲンナイは察した。

「……………ナノモン、少し席を外してもいいかい？どうやら君には聞かれたくないようなんだ」

『構いませんぞ。先ほどとちつとも様子が変わりませんからな。何かあったらお呼びします』

「すまないね」

そう言うと、ゲンナイは子ども達が眠っている寝室がある廊下へ向かう。

更に奥にも部屋があるので、ゲンナイは3人をそこに連れて行つた。

そこは会議室のようなところで、ベッドではなくテーブルとイスがあった。

3人を椅子に座らせ、3人の正面に自分も腰を下ろし、なつちゃんには寝室に戻るように言ったのだが、大輔がそれを引き留めた。

「……なつちゃん、にも……聞いて、ほしい、から……」

ヒカリと手を繋いでいたなつちゃんは、目を見開いて驚いた。

「今」の大輔は、なつちゃんを「知らないはず」だ。

面識があるのはヒカリだけなのに、大輔の声色はずっと前からなつちゃんの名前を読んでいたように、心が籠っていた。

そして……なつちゃんを見つめる「目」が、知らない者を見る目ではなかったのだ。

懐かしむような、嬉しそうな、悲しそうな……色んな感情が交わった目。

「なつちゃんは……「なつちゃん」、なんだろう?」

「……………」

「……俺がニューヨークで、ミミさんとウオレスと、チビモンとグミモンと逢った……あの子なんだろう?」

「っ!!」

なつちゃんは驚愕のあまり息を飲む。

彼女だけではない、ゲンナイも驚きで目を限界まで見開かせていた。

あまりの衝撃に、なつちゃんとゲンナイの口からは空気しか出てこない。

そんな2人を知ってか知らずか、ヒカリが口を開く。

「……大輔くんから聞いたことあるよ、なつちゃんのお話。『思い出した』の。貴女だったんだね、なつちゃん」

「……ヒ、カリ……」

「寂しくて、悲しくて……パートナーが欲しいって、大輔くんにパートナーになってほしいって言って、チビモンと喧嘩しちやったって

「……」

「……………」

「なっちゃん……今もチビモンが、ブイモンが嫌い？」

「……好きだよ。大好き。だって私は大輔が大好きだもん。だから大輔のことが大好きなブイモンのことも、大好き」

「……………」

「ヒカリのことも大好きよ。だって大輔が大好きで、大輔のことを大好きって思ってるから」

「な、なっちゃん……！」

なんてこっぴどくかしいことを平然と言っただけのけるのだ、この子は。

ヒカリは顔を真っ赤にさせて、隣に座っているなっちゃんに物言わぬ抗議をする。

なっちゃんは笑った。

「私は賢のことも大好きよ」

「……僕と君は、逢ったことないの？」

「大輔が大好きな人、大好きなもの、大輔のこと大好きな人は、みんな大好きなの」

「……変なの」

そう言いながら、賢の表情は穏やかだった。

「……ゲンナイさん」

ほのぼのだった空気が一変する。

賢の、ゲンナイを見つめる目は真剣と懐疑に彩られていた。

「『僕達』はどうなったんですか」

質問の意図が分からないほど、大輔もヒカリも『子ども』ではない。

2人の目は、賢と同じだった。

ゲンナイは目を閉じる。

だって、思い出したのだ。

彼らは遠い未来に生きていた、かつての『選ばれし子ども達』だった。

本宮大輔、一乗寺賢、そして八神ヒカリ。

かつて世界を救った12人の「選ばれし子ども達」のうちの3人だったのだ。

「どうして、『僕達』はここにいらっしゃるんですか」

賢の声が震えている。

声だけではない、手も足も、全身が震えていた。

「答えてください」

3人は、ここにいないはずのない、イレギュラーな存在だった。

「最初の冒険」は、7人だった。

八神太一、石田ヤマト、武ノ内空、泉光子郎、太刀川ミミ、城戸丈、そして高石タケル。

この7人に、後にここにいる八神ヒカリが加わって、デジタルワールドを冒険し、世界を救った。

賢は1年後に、そして大輔は3年後に選ばれたために、ここにいないのである。

何故大輔がいて、ヒカリがいて、賢がいるのに、ヤマトとタケルがいないのか。

どうして亡くなったはずの賢の兄・治がいるのか。

何故、自分の苗字が一乗寺ではなく母の旧姓なのか。

……どうして、自分達はここにいるのか。

「教えて、ください」

膝に乗せた賢の手がズボンを握りしめ、振り絞るように紡がれた言葉は、今にも泣きだしそうな色を帯びていた。

ゲンナイは、閉じていた目を開いた。

その顔は……デジモンと同じようなデータの塊であり、人間らしい感情すらプログラムされていないとは思えないほどに、悲しみに満ちた笑みだった。

「……今話すと長くなってしまっうね。だから……そうだな。明日、みんなに見てもらいたいものがあるから、その後で話そう」

ゲンナイは、決めた。

明日、全てを話そうと。

太一達が選ばれた意味と理由と、ブイモンがあのようになってしまう原因も、全て。

本当なら太一達を選ばれた理由だけを教えるために来たはずだった。

“以前”の自分は、身体を思うように動かせず、仲間も自分を残して消えてしまったため、色んなものが後手に回っていた。

今は“以前”の知識のお陰もあって、沢山のデジモンを仲間にして、完璧とは言い難いが子ども達のサポートも出来た。

もう失敗はしない。

世界のためだけではなく、子ども達のために。

遮るものが何もない、広大な砂漠。

昼はじわじわと嬲り殺してくるように熱いのに、夜は寂しいほどに肌寒い。

その光景を見ていたのは、夜空に浮かんで煌めいている星々と、その星々を優しく包み込む月だけだった。

『はあっ、はあっ、はあっ……!!』

部下のガジモン達はみんな殺された。

しゅうしゅうと黒煙を上げながら周りが抉れている砂地に、上半身や下半身、または身体の一部を失ったガジモン達が、大量に横たわっている。

そこに立っているのは、満身創痍のエテモンだけだった。

『何なのよ……アンタ、一体何なのよ!!』

ご自慢のトレーラーは、どてつぱらに穴を開けられ、無残な状態になっている。

そのトレーラーを引っ張っていたモノクロモンは、とつくのとうにデータの粒子になって、風に乗って何処かへと流されていた。

エテモンと対峙している、毒々しいピンク色のデジモンが、何処からともなく飛んできていきなり攻撃してきたのだが、その時にやられたのだ。

『このアチキが……この世界を支配するスーパースターたるこのアチキが!! 得体の知れないアンタごときに勝てないなんて、そんなわけないでしょお!!』

手のひらに闇のエネルギーを集め、相手にぶつけるダーク・スピリッツ。

敵の戦意を喪失させるラブ・セレナーデ。

その技で、今まで沢山のデジモンを屠り、ひれ伏させ、力を蓄えてきた。

サーバ大陸中に張り巡らされているダーク・ケーブルも、自分の意のままに操って、強い奴を葬ってきた。

もうこの世界に自分より強いデジモンはいない。

この世界はアチキのものよ!

そう信じて疑っていなかったエテモンだったが、目の前のデジモンには自分の技を何度繰り出しても通用しない。

涼しい顔をして、避けることも弾くこともせず、ただ放たれている技を平然と受け止めているのである。

ダメージを受けている様子もない。

どうして、どうしてよ、何でなのよ!!

焦燥感ばかりが募って、エテモンの目を曇らせる。

『……………』

じつとエテモンを見つめていた。ピンク色のデジモンだったが、やがて無暗に攻撃してくるだけのエテモンに飽きたのか、ふ、と風が吹くように目の前から消えてしまった。

拍子抜けするエテモン。

『…………ふん、何よ。アチキのタフさに腰が引けたって訳? ふっふーんだ、そうはいかないわよ! アチキを虚仮にしてくれたこと、後悔させてあげ…………あぎゃっ!!』

どす、と背中 of 辺りに衝撃が走る。

直後に、痛みと熱がじわじわとその箇所から身体中に広がっていった。

『あが……あ、ぎ、あ……』

背中を刺されたのだと気づいた時には、遅かった。

痛みと熱が広がるのと同時に、びりびりとした痺れが全身を襲ったのである。

その痺れは身体の内を奪うだけでなく、痛みから逃れようとする考えも溶かしていった。

何も考えられない。脳みそを直接掴まれて揺さぶられているような感覚に襲われ、視界が赤く染まっていく。

自分が、自分でなくなっていく。

身体の中身がドロドロに溶かされて、作り替えられていくような感覚。

『あ……バ……』

深い闇の底から伸びてきた幾つもの手が、エテモンの意識を引っ張って闇の中に誘って行く。

『……あ』

とぷん、と。

エテモンの意識は闇に沈んで溶かされた。

《……》
キシツ》

何処かで闇が、嗤った気がした。

みらいとむかし

重い身体を引きずりながら、太一はようやく帰宅をした。

妻と息子は一足先に帰宅していて、とつくに喪服から普段着に着替えていたのだが、2人の顔色はよくないし表情も暗い。

おかえりなさい、という小さい頃の自分によく似た、でも性格は妻に似て穏やかな息子が声をかけてくれたのだが、太一はそれに返事をする余裕がなかった。

時刻は、夕方の5時近く。

妻は夕飯の準備をしており、息子もその手伝いをしていた。

しかし太一はご飯が喉を通るとは思えず、今日は夕飯はいららないとだけ言って夫婦の寝室へ直行してしまった。

背中を向けていたので、そう言われた妻と息子の表情までは知らない。

冷たくあしらうような言い方をして申し訳なかったなあとぼんやり思ったが、太一の心情はそれどころではなかったのだ。

妹のヒカリが死んだ。

その日は、太一達にとつてとても大切な、初めてデジタルワールドに召喚された記念日だった。

何でもない、1年に1度の普段よりちよつと特別な日になるはずだった。

去年のキャンプは、悪意ある完全体5体ほどに襲われた以外特にトラブルもなく、太一とヤマト、大輔と賢の主戦力4人があっさりと退けてくれたお陰で、その後はずっと平和だった。

一昨年 of キャンプでも、うっかり気性の荒いデジモンの縄張りに大輔が突っ込んでしまつて、みんなで追いかけられたが、それもいい思

い出だった。

3年前のキャンプも、4年前のキャンプも、何かしらのトラブルに見舞われていたが、みんなそれを楽しんでた。

31年前の何のサポートもない冒険と比べれば、1泊2日のキャンプなんて何てことはないのだ。

だから今年のキャンプも、何かしらの面白いトラブルがあればいいなあなんて、呑気な事をみんな思っていたことだろう。

突如として現れた高エネルギー反応を察知した光子郎からの連絡を受けた太一は、外務省を出て帰宅をしようとしていた時である。

8月1日は世界的な祝日ではあるものの、外交官という仕事上休みという概念は殆どない。

だからその日も普通に仕事だった。

ただいつもと違って午前中だけで帰るところだった。

1度家に帰ってキャンプの道具を持って、自宅からデジタルワールドに行こうとしていたのである。

普段ならキャンプ道具を職場に持って行って、仕事が終わったら職場のパソコンからデジタルワールドに言っていたのに、どういう訳か今年に限って行動パターンを変えてしまったのだ。

例年通りにしていれば、もしかしたら結果は違っていたかもしれないのに。

でも何度後悔しても、考えても、もう遅い。

妹は死んだのだ。それは紛れもない事実なのだ。

妹だけではない、後輩も、その親友も。

ほんの紙一重の時間であった。

デジタル研究所の所長である光子郎と、ビデオ通話で連絡を取り合いながら高エネルギー体の正体を突き止め、他のメンバーにも連絡して急いで駆けつけた。

でも間に合わなかった。

日本に着いたばかりのヤマトに無理を言って、アグモンとガブモン

をオメガモンに進化させて、一足先に行ってもらった。
でも、間に合わなかった。

高エネルギー体は急速にエネルギーを膨張させ、周りを巻き込むように爆発した。

その爆発に巻き込まれて、ヒカリと大輔と賢は亡くなってしまったのだ。

ヒカリは逃げ損ねた幼年期を助けようとして、大輔と賢は急に引き返してしまったヒカリを助けようとして。

妹らしいなあ、と誇りに思うと同時に、その幼年期がちゃんと逃げていれば、なんて嫌な気持ちにもなる。

まだ幼年期Iの赤ちゃんデジモンで、自力で逃げられなかったのだから仕方ないじゃないか、と何度も何度も自分に言い聞かせていても、少し油断すると心の奥底から蠟燭の火に炙られ、紙が焦げるようにその考えが太一の耳元を掠めてくる。

太一は何度も頭（かぶり）を振ってその考えを打ち払い、ベッドに身を沈めた。

——どうしてこうなってしまったのだろう。

枕に顔を埋めると、目尻に浮かぶ涙を枕が吸ってどんどん湿っている。

今日は、妹と後輩とその親友の、合同葬式だった。

3つ並んだ遺影には、まだ若い3人の眩しい笑顔が場違いなほどに輝いていた。

確か、去年の8月1日に撮った全員集合の時の写真だった。

真ん中に座った自分と後輩、自分を挟んで後輩の反対側には親友のヤマトとその妻・空、後輩の別の隣には後輩の親友とその妻が。

残りの6人は自分達の後ろに立って、パートナー達はそれぞれ抱えたり足元にいたり肩車をしたりして、一緒に写真を撮ったのだ。

それ以外にも色々写真はあるのだが、横顔だったりブレていたりして、遺影に1番向いていたのがその集合写真だったのだ。

……まさかその写真が、最期の写真になるなんて夢にも思わなかった。

次の年も同じように面白いトラブルに見舞われながらキャンプをすると信じて疑っていなかった、去年の記念日が懐かしい。

大人になってからみんなそれぞれの夢や仕事で忙しくて、なかなか会う機会がなかったのだが、その日だけは絶対にみんなが集まろうと決めていたのだ。

来年からどうすればいいのだろう。

楽しい記念日は、悲しい日に塗り替えられてしまった。

妹が死んだ。後輩が死んだ。その親友が死んだ。

3人の大切な仲間をいっぺんに失ってしまった。

そんなの、もつと先の話だと思っていたのに。

外交官として世界中を飛び回り、何年も何十年もかけてデジタルワールドと現実世界をよくしていった、身体にガタがきたら鍛え上げた後輩や部下達にその役目を譲って、その後は仲間達と大騒ぎしたり、妻とのんびりした余生を過ごして、子どもや孫に看取られながら永遠の眠りにつくと思っていたのに。

人生どうなるかなんて分からないよ、と、そんな人生プランを口にするたびに、1つ上のおつちよこちよいで責任感のある先輩に苦笑されていた。

分かっていますよ、ってその度に返していた。

分かっていたなかった。

分かっていたなかったから、今こんなにも悲しいし、哀しい。

葬式の間、母親はずっと泣いていたし父親も泣きたいのを堪えて唇を噛みしめていた。

妹の息子で、太一の甥っ子は、妹のパートナーをずっと抱きしめていた。

後輩の両親も、そしてあれだけ憎まれ口叩いて、大人になってもしよっちゅう喧嘩をしていたお姉さんも、息子で弟の突然の訃報に放心していた。

後輩の親友の両親なんかは、見ていてこちらが苦しくなるほどに泣いていた。

泣きじやくつていた。

大声を上げ、ほぼ錯乱状態になりながら、息子の遺体にしがみついていた。

火葬の時なんかは、見ていられないほど取り乱していた。

当然だ、何せ彼らは既に息子を1人亡くしているのである。

その子は天才少年だった。まだ10歳だった。

交通事故で、車にはねられて、当たりどころが悪くてその子は死んでしまったらしい。

だから僕は、兄さんの分まで母さん達に親孝行するんだ、と眩しい笑顔を浮かべながら言っていたのは、何年前だったか。

でも残った息子まで、両親の手をすり抜けて逝ってしまった。

孫達がおばあちゃん、と呼んで慰めようとしていたが、男の子の孫の方は息子に生き写しであるため、ますます泣き声が激しくなってしまうていた。

彼女の夫が引きずるように火葬場を後にしていたのを、ぼんやりと見送ったのは覚えている。

そこから先は記憶が曖昧だった。

死んだ妹は、後輩は、その親友は、呆気なく焼かれて骨になってしまった。

彼らを焼いた炎の煙は、煙突から空へ吸い込まれていくように立ち昇っていった。

次に気づいた時には、もう納骨は終わっていて、食事会が開かれていた。

でも何かを食べる気になんてなれなくて、ずーっと座りっぱなしだった。

隣で親友の声があった気がしたが、言葉は全て通り抜けていくばかりで、脳内で変換を拒否していた。

もう何を言われても、太一の心には響いてこなかった。

妹は死んだ。妹は死んだ。妹は死んだのだ！

『お兄ちゃん』

妹の声が、鮮明に脳内で再生される。

でも、数年すればもう妹の声は思い出せなくなるだろう。

人の記憶は、声から失われていくらしい。

数年後に妹の姿が映っている記録を見たとしても、ヒカリってこんな声だったっけ、なんて薄情なことを思ってしまうであろうことに、寒気を感じた。

愛しい妹。可愛い妹。何があっても護りたかった妹。

最愛の人を見つけて、兄の庇護から旅立った彼女を護ろうとしたのは、昔妹に好意を寄せていた後輩だった。

その後輩も、親友と共にヒカリを護ろうとして、3人とも逝ってしまっただ。

「……………」

徐に起き上がる。枕に顔を埋めていたせいで涙は枕の布に吸い込まれて湿り、顔についた水分でぐしゃぐしゃになっていた。

大輔、ヒカリ、賢。

この3人は記念日の前に逢いに来たり、電話をかけにきていた。

あと数日もすれば記念日出逢えるにも関わらず、だ。

その時は珍しいな、としか思っていなかったが、今になって思う。きっとあの3人は、記念日に太一と逢うことはできないと分かっていたのだと。

大輔と賢は知らないが、妹のヒカリに“そう言った力”があったのは、周知の事実である。

幼い頃は自分には見えないものを見たり聞いたりして、怯えた妹が自分にしがみついてくるのがよくあったのだが、成長するにつれそう言ったことが少なくなっていき、恋人を作った頃にはもうそう言ったことを聞かなくなっていた。

大人になると子どもの頃に持っていた不思議な力は失われていくと聞いたことがあったし、ヒカリの恋人にそれとなく聞いた時もそのような素振りには全く見せていなかったようなので、ヒカリ

もてつきり大人になったことでそう言った力がなくなったからだと思っていた。

そうじゃなかった。

取り繕うのが上手になっただけだったのだ、きつと。

誰にも見えないものを見たり聞いたりしても、それを面に出すことがなくなっただけだったのだ。

もう太一には会えないと察してしまった妹は、一体どれだけの恐怖を抱えていたことだろう。

逃れられることが出来ない運命の糸に絡めとられてしまった妹は、どれだけ泣いたことだろう。

気づけることは出来たはずなのだ。

普段はSMSで済ませているのに、電話をかけてきた時点で気づくべきだったのだ。

受話器を置いて、妻と息子に断りを入れて、妹の住んでいる部屋まで行けばよかったのだ。

どうしたんだって、何かあったのかって。

たったそれだけの行動で何が変わったのか、そう聞かれたら答えることは出来なくとも、妹を安心させてやることぐらいはできたはずだ。

それが出来なかったのなら、妹が折れるまで問いただせばよかったのだ。

取り繕うことが上手なくせに、何かあったとしても隠したがるくせに、聞いてほしい、気づいてほしいと言いたげに太一を見てくる。

あの電話も、もしかしたら気づいてほしくてしてきたのかもしれない。

そう思ったら、あの時あっさり電話を切った自分を殴りたくなかった。

「……ヒカリ」

妹の名を呟く。そうしたら妹がひよっこり現れて、小さなころから変わらない笑顔を浮かべて、なあに、お兄ちゃんって返事をしてくれる気がして。

そんなことあり得ないのに。

「ヒカリ」

目を閉じれば鮮明に思い出せる。

例えば4歳、初めて「デジモン」という存在を知ったあの日の姿。

例えば小学2年生、初めてデジタルワールドを冒険したあの日の姿。

例えば小学5年生、2度目選ばれたあの日の姿。

例えば中学生、例えば高校生、例えば大学生、例えば……。

様々な年代の妹が、水の底から泡のように浮かんで消えていく。

でも、もう妹はいない。

「ヒカリ……っ!!」

何度ヒカリの名を呟いても、ヒカリから返事は来ないし、来るわけがない。

だって妹はもうこの世にいないのだから。

「ヒカリイ……!!」

乾きかけていた涙が再び溢れた。

水の玉が目尻から次々溢れて、ボロボロと零れていく。

ぼた、ぼた、と水を吸って湿っている枕の布に水の玉が落ちて、新たな染みを作り出していった。

妹はもういない。

妹だけではない。

「大輔……賢……!!」

自分に懐いていた後輩、その後輩の親友。

妹と同じぐらい、大切だった2人の仲間も、もう何処にもいない。

何処にも、いないのだ。

生まれたての世界は、とても狭かった。

その狭い世界で、ブイモンは生きていた。

緑が生い茂り、その緑にたわわに実った果物があって、太陽を反射して煌めく湖、色とりどりの花々からは鼻腔を擦るいい匂いが風に運ばれて世界を包み込む。

世界は、そんなシンプルなもので出来ていた。

その頃のブイモンは、その世界に生きる沢山のデジモンの中の1体に過ぎなかった。

同族や、他の似たような仲間達と協力しあつて、時々小競り合いをして毎日代わり映えのない日々を過ごしていた。

そうやってこれからを過ごしていくんだと、ブイモンは何の疑いもなく思っていた。

きつと他の同族たちも同じ気持ちだったはずだ。

その日ブイモンは、同族数体と、他種族であるホークモン数体とアルマジモン数体と遠出をしていた。

自分達の集落にはない、珍しい果物が生っている樹があつて、それを持って帰ってみんなと一緒に食べるためだった。

両腕いっぱい抱えたそれを時々落つことしそうになりながら、ブイモンは上機嫌で先頭を歩く。

待つてくださいよ、ってホークモンの種族で1番仲のいいホークモンが駆け足で追いかけてくる。

腹減つたく、つてアルマジモンの種族で1番仲のいいアルマジモンが、籠に入っている果物を背負いながら、のんびりと歩いている。

他の同族達はそんな仲のいい3体を苦笑しながら、後ろから見守っている。

いつもの光景だ。

いつもの光景のはずだった。

それは唐突に訪れた。

先程まで聞こえていた喧騒が、突然止んだ。

『?..どうかし』

た、という言葉は紡がれなかった。

振り返ったブイモンの目の前に、首がない同胞の身体が突っ立っていたからだ。

時が止まる。息が止まる。

ご..し..や、

喉の奥に空気の泡が張り付いて、言葉も出てこなかった。

何が起こっているのか理解できなくてフリーズしているブイモンとホークモンとアルマジモンを尻目に、首がなくなつた同胞の身体は、上から重量のあるものに押し潰され、同胞の身体を構築していたデータの粒子が血のように飛び散り、同胞は目の前で「死んだ」。

同時に、遮るものがなく太陽に照らされていたはずのブイモンとホークモンとアルマジモンを、影が覆った。

ブイモンは、恐怖心に負けて恐る恐る顔を上げる。

その顔は逆光のせいなのか、黒く塗りつぶされたようによく見えなかった。

——ぞわり

一瞬にして大量の汗が噴き出た。

逆光で見えないはずの顔を見た途端、上から押さえつけられるよう

な、腹を空かせた蛇が首をじわじわと絞めているような圧迫感を覚え、ブイモン達は抱えていた果物を落としてしまう。

は、は、と短い吐息が連続的に吐き出され、上手く呼吸が出来ない。ばく、ばく、ばく、と心臓の鼓動が早まり、脳が警鐘を鳴らして早く逃げろと急かしてくる。

しかしその足は動かない。

同胞の中でも速いと評判のその足は、地面を蹴ろうとしない。

それどころか、上から押さえつけてくる圧迫感にあっさりと負けて、その場にへたり込んでしまった。

ぎらり

顔が見えないデジモンが背負っている太陽の光を反射し、振り上げた爪が嘲笑うようにぎらつく。

ああ、きつとあの爪で同胞の首を撥ねたんだ。

何処か他人事のように、ぼんやりとした眼差しで振り上げられている爪を見つめる。

ぶん、と振り下ろされた爪がブイモンに迫る。

ガギイイイイイイン……!!

硬い金属性の物がぶつかり合う音がした。

同時に浮遊感を覚え、ブイモン達は強く叩きつけてくる風の中、空を泳いでいた。

『死ぬなよ、××』

『お前こそな××○○○!!』

そんな軽口が叩かれているのも意識の向こう側で、ブイモンは何が起こっているのかさっぱり理解できなかった。

眼下を見下ろす。

自分達がいたであろう場所からぐんぐん遠ざかって行き、襲い掛かってきたデジモンはいつしか豆粒みたいに小さくなっていった。

だからあのデジモンが一体何だったのか、未だに思い出せない。
上を見上げる。黄金が、自分達を包んでいた。

自分と同じ紅い瞳と青の身体。

黄金の鎧に包まれているそれは、何処か懐かしい匂いがした。

『だ、れ……』

『喋るな、舌を噛むぞ！』

じわじわと侵食していた恐怖心が払拭され、ブイモンはようやく声を出したが、黄金の誰かはびしやりと制した。

びよおびよおという風の音が、ブイモンの耳元を掠っている。

『っ、もう追ってきたか……！』

やがて、何かに気づいた黄金の誰かは舌打ちをして、高度を下げていった。

そこは、森に囲まれた拓けたところだった。

その近くには盛り上がった岩の丘があり、黄金の誰かはそこに降り立った。

辺りを忙しく見渡すと、盛り上がった岩の丘に駆け寄り、ブイモン達を片腕で抱えたままもう片方の腕で岩肌をくり貫くように、穴を開けた。

更に奥へと掘ってブイモン達を放り投げるように押し込め、くり貫いた岩肌で蓋をするように、3体を隠そうとした。

『っ、ま、待ってください！一体何が……！』

我に返ったらしいホークモンが、外と簡易な洞窟を遮断しようとしていた黄金の誰かに縋りつく。

怖い。空のように澄んでいる瞳は、そう物語っていた。

隣にいるアルマジモンも、流石の事態に普段ののんびりとした性格は鳴りを潜めて、同じように黄金の誰かを縋るように見つめている。

何が起こったのか、何が起こっているのか、分からないまま暗闇に放り込まれようとしていることに、ブイモンも恐怖を感じていた。

『……………』

しかし黄金の誰かは答えない。

見つめてくる3対の瞳は、すっかり怯え切っている。

それでも、これ以上長居はできない。

説明している時間もないのだ。この子達を護るためにも、だから、

『……俺がいいと言うまで出てはいけない』

黄金の誰かは、振り絞るように言った。

『見つかったら……』

間が空く。目を逸らす。低く、唸るように言い聞かせてやる。

『……殺されるよ』

ひゅ、と3体は息を飲み、がっちんという音が聞こえてきそうなほど震えながら硬直した。

今にも泣きそうになりながら、否、目尻に水の玉を浮かべながら口を両手で隠し、必死に頷いた。

「見つかったら、殺される」

後にその言葉が深く、ブイモン達の心を傷つけ、決ることになるのか、黄金の誰かは知る由もない。

『……いい子だ』

黄金の誰かは、笑った。

それが、ブイモン達が見た誰かの「最期」である。

ずずず、という音がして岩肌の蓋が閉じていく。

光は遮断され、完全な暗闇が支配する。

もう自分の輪郭さえ、暗闇に奪われて分からない。

聴覚も嗅覚も触覚も正常だが、視覚が奪われただけで不安で押し潰されそうになる。

声を出すまいとして、無意識に呼吸まで抑えながら、口元を両手で覆い恐怖でこぼれ出そうな悲鳴を必死で押しとどめる。

匂いでホークモンとアルマジモンがすぐ近くにいることは分かっているのだが、極度の恐怖心と緊張のために指一本動かすこともでき

なかった。

“見つかったら、殺される”

黄金の誰かの口から放たれた言葉は、呪いのようにブイモン達的心をじわじわと削っていく。

“見つかったら、殺される”

どうして？

“見つかったら、殺される”

分からない。意味が分からない。

“見つかったら、殺される”

殺されなきゃいけないようなこと、していないのに。

自分達はただ、ここで生きていただけなのに。

見つからないように口元を押さえ、声を押し込んでいる両手が見えなくても分かるほどに震え、目尻に浮かんでいた水の玉が1つ、ぽろりと零れた。

それがぎっかけになって、次から次へと水の玉が溢れては押し出して、零れていく。

『っ……っ……い！』

しゃくりあげる声すら出すのが怖くて、身体を丸めてその声を喉の奥に押し込む。

すぐ近くでホークモンとアルマジモンが自分と同じように涙を零しながら、声を押し殺しているのを気配で感じ取る。

でもそれだけだ。

慰めることも声をかけることも出来ず、ただブイモンはそこで震えていることしか出来なかった。

どおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおん!!

『ひっ!!』

『っ!!』

『!?!』

たった数分だったのに、自分の姿も友達の色も見えない暗闇の中で

ブイモンには暗闇に包まれてしまつて見えないが、ホークモンは頭を抱えて見開いて光を失い、濁つた空色の目から沢山の涙が溢れていた。

それを聞いたアルマジモンもつられるように、丸いガラスの精神にひびが入る。

『……………あ』

崩壊する。ホークモンと違い、アルマジモンは短く呻いただけだった。

『……………』

ブイモンの両腕がわなわなと震えている。

中途半端に上げられた腕は、頭を抱えようとしているのか、目や耳を塞ごうとしているのか、それはブイモンにも分からなかった。

それすら分からないほど、ブイモンの精神は崩壊しかけていたのだ。

——どうして？

見開かれた紅い目には絶望の色が浮かんでいた。

——何で？

——何でこんなことになつちやつたの……………？

——……………俺達を、助けた、から……………？

ガラリ、と、ブイモンの精神も崩壊を始める。

紅い目は曇りガラスのように濁つていった。

震えは止まり、中途半端に挙げられていた腕はゆっくりと下ろされていく。

どうしてこんなことになつてしまつたのか、ブイモンは知らないし分からない。

きっとこれからも、知ることはないだろう。

でもこれだけは確実だ。

あの黄金の誰かは、ブイモン達を助けたために命を散らせてしまつたのだと。

ぐらりと傾いた黄金の誰かの身体。

力なく地に伏したその身体を、そのデジモンは何を思っで見下ろしているのか。

隙間から垣間見える光景を、ブイモンは光を失った目で呆然と見つめる。

ぐしや、

そのデジモンは右足を振り上げたかと思うと、物言わぬその身体を思いつき踏みつける。

デジモンは死ぬとデータの粒子となって消えてしまうのだが、その黄金の誰かはデータ量が多いのか、さらさらとしたデータの粒子が空中に漂いながらも、その身体はなかなか消えない。

その身体を、尊厳を踏みにじるように、そのデジモンは何度も何度も蹴りつけるように踏みつけた。

ぐしや、ごしや、ぐちや……

強く強く、何度も何度も踏みつけているせいで肉が抉られ、削られていく。

生々しい音が嫌に響き渡っていた。

崩れ落ちる肉片もデータの粒子になって消えていく。

ぐしや、ぐしや、ぐしや、ぐしや……

蹴る、蹴る、何度も蹴る。

その度に肉片が抉れて、べちや、べちや、と生肉が辺りに飛び散る音がする。

もう手のひらぐらいの肉片しか残っていない。

黄金に輝いていた鎧はとうの昔に砕け散っていた。

自分達を助けてくれたあの眩い黄金は、もう何処にもいない。

ぐしや……

目が合った。

に集めて、改めて自己紹介をした。

ブイモンは、まだ目を覚ましていなかった。

昨日ほどの震えではなかったものの、まだ若干震えており、薄く開かれています。瞳から流れている涙は未だ乾いておらず、赤く腫れている。下眼瞼が見ていてとても痛々しかったです。

心配そうな表情を浮かべながらブイモンを見つめる子ども達に、ゲンナイは口を開いた。

「子ども達よ、心して聞いてほしい……私は、ブイモンがこうなってしまった心当たりがある」

「っ!」

大輔達を含めた子ども達は、目を見開いて硬直した。

「……聞きたいか?」

「っ、当たり前だろ!」

「一体ブイモンに何があつたんですか?」

太一と治が代表してゲンナイに詰め寄る。

大輔はずつと診察台に横たわっているブイモンに寄り添って、ずっと手を握っているし、ヒカリと賢となつちゃんは大輔にぴったりくっついて離れない。

ゲンナイは目を閉じてゆっくりと深呼吸をすると、決心したように目を開き、子ども達をぐるりと見渡した。

「……君達には辛いものになるかもしれないよ。それを背負う覚悟はあるかい?」

神秘的な表情でそんなことを聞いてきたゲンナイを不思議に思いながらも、太一は勇ましく返事をする。

でもそれは子ども達を代表したものではなかった。

何故ならゲンナイがそう言った瞬間、太一以外の子ども達はたじろいだからだ。

辛いものになる、という言葉はまだしも、背負う覚悟はあるかなんて言われるとは思っていなかったようで、ざわついてこそいないものの顔を見合わせて迷っていた。

これから自分達は何を聞かされるのだろう、という不安がありあり

と浮かんでいる。

そんな子ども達の不安を感じ取った太一も、仲間達の方を見て黙り込んでしまった。

「……聞きたいです」

「っ、大輔……」

静まり返った空間に響いたのは、大輔の声である。

は、と子ども達は一斉にそつちを見た。

診察台に寝かされているブイモンの手を握って、真つ直ぐゲンナイを見つめている。

「……俺は、ブイモンのパートナーだから、だから、どんなことがあつたってブイモンは俺のパートナーだから、ブイモンに何か辛いことがあつたって言うんなら、俺、ちゃんと、聞きたいです……!」

「……分かった」

唇をぎゅつと結んで、強い意志を秘めた目でゲンナイを見つめる大輔。

ヒカリと賢も顔を見合わせて頷き合い、同じような眼差しでゲンナイを見つめた。

そんな最年少達を見て不安を抱いていた上級生達も、不安を払拭させてゲンナイを見やる。

覚悟を、決めたようだ。

「……口で説明しても、きつと想像しにくいだろう。だから記録で見せるよ」

そう言うときゲンナイは手のひらを上に見せるように翳す。

ぼう、と手のひらの上に浮かんだ青く丸い光。

ナノモンは部屋の電気を消し、ゲンナイからその光を受け取るとキーボードが並んでいる台にある窪みに、その光を置くように収めた。

その結果が、これだ。

ミミは未だに耳を塞ぎ目を閉じ、泣きじやくってへたり込んでいるし、空はそんなミミに寄り掛かるように抱きしめたままだ。

彼女も放心から帰ってきておらず、ぼーっとしている。

光子郎と丈もぼんやりと突っ立ったままだし、治はどっかりと座り込んで両手で顔を擦るように覆っていた。

太一はずつとゲンナイを睨みつけている。

あれはゲンナイに対して怒りを抱いているのではなく、少しでも気を抜くと情けない表情になりそうだからだ。

ゲンナイもそれを分かっているようで、太一のその態度について敢えて何も言わなかった。

それよりも、とゲンナイは最年少3人の方を見やる。

診察台に寝かされているブイモンの手を握って、光子郎や丈と同じように暗くなったモニターを呆然と見ていた。

え、なに、あれ、うそ、しらない、あんなの、そんな、しらないしらない、うそだそんなんでどうしてしらないしらないしらないしらないしらないしらない!!

大輔の頭の中は大混乱である。

当然だ、「前世」でも今でも、ブイモンの過去なんて知らなかった。興味がなかったと言ったら嘘になるが、1度だけ聞いた時にずつと寝てたから覚えてない、とあっけらかんと言いつつ放っていたから、覚えていないのなら仕方がないとそれ以上言及しなかった。

こんな、こんな酷い過去を、ブイモンは背負っていたの……？

「うゝえ……!」

嘔吐くように息を吐いたヒカリが、とうとう座り込む。

なつちゃんが慌ててヒカリを支えようとしたが、ヒカリより1センチぐらいしか高くないなつちゃんではヒカリを支えきれず、2人とも尻餅をついてしまった。

賢は……大輔とほぼ同じような反応で、根が張ったように動かない。

「……どういう、ことなんですか、ゲンナイさん」

太一はもう1度、ゆっくりと噛みしめるようにゲンナイに問いかけた。

ゲンナイは、今度は口を開いた。

「……ブイモンはね、太一。君のパートナーであるアグモンや、治のパートナーであるガブモン、他の子ども達のパートナーとは、少し違うんだ」

「……違う？」

「そう。アグモン達はいわゆる“現代種”と呼ばれているデジモンでね。そうだな、君達の世界で言うライオンとかゾウとか……今の時代に生きているデジモンなんだが、ブイモンだけは違うんだ。ブイモンは大昔、気が遠くなるぐらいの大昔に生きていた種族のデジモンなんだよ」

「……大昔、の？」

衝撃的な映像を見せられて、未だにショックから抜け出せない大輔は、何処か他人事のようにゲンナイと太一のやりとりを聞いていた。

「授業とか、テレビで見なかったかな？大昔は人間じゃなくて、恐竜が地球を支配していた時代があっただろう。だが恐竜は巨大隕石の衝突によって絶滅してしまったね」

「……………」

「だから今では恐竜は何処にもいない。ブイモンはそういうデジモンなんだ」

「……つまり……ずっとずっと、昔に生きていて、絶滅してしまったデジモン、という、ことです、か……」

『オサム……』

ダメージからいくらか回復した治が、会話に参加する。

ガブモンが心配そうに寄り添うが、ガブモンも顔色はよくなかった。

それでも、立ち上がって太一の隣へ移動した治を必死に支えながら一緒に歩いた。

ゲンナイは目を細めながら頷く。

「今はもう、ブイモンという種族は大輔のブイモンだけ、この世でたった1体しかない、絶滅危惧種なのさ」

大輔のブイモンがまだ残っているから、絶滅種ではない。

しかしブイモンと同じ時代に生きていたデジモン達は、先ほどの映

像に映っていた謎のデジモンにより、ブイモン他数十体ほどだけを残して全て滅んでしまった。

「……少し、休憩しようか」

すっかり憔悴しきってしまっている子ども達を見て、ゲンナイがそう提案すると、空はピヨモンとパルモンを伴ってミミと共に寝室に引っ込んでいった。

ずっと黙り込んでいた光子郎と丈も、それぞれのパートナーに連れられて同じく寝室へと向かう。

彼らの足取りはとても重く、シヨツクの大きさを物語っていた。

「……………くそっ!!」

『あ、タイチ…………』

悪態を吐いて、太一も寝室の方に戻って行った。

慌てて追うアグモン。

治も、顔を俯かせながら僕も休むと呟き、その呟きを拾ったガブモンに支えられながら部屋を出て行った。

パタモンとテイルモンは、互いの顔を見合わせた後ロツプモンを連れて同じく部屋を出て行く。

——残っているのは、大輔とヒカリと賢、なっちゃんである。

「……………ゲンナイ、さん」

「……………君達も休むかい？私が言うのもなんだが……………酷い顔色だ」

大輔は首を横に振る。

「……………ここにいたいっす」

「……………そうか」

大輔の気持ちは痛いほどに分かる。

ゲンナイはナノモンに目配せをして、一旦この部屋から出てもらった。

今なら、他の子ども達もデジモン達もいない。

「……………ゲンナイさん、あれ、は……………あれって……………」

「……………本当のことだよ。嘘を教えるわけがないじゃないか」

「……………そうじゃ、なくて……………」

ゲンナイはこの部屋の入り口に目を向け、他の子ども達が来ないこ

とを確認すると、へたり込んでいる大輔達の前に座った。

「今なら太一達もいないから、気にしなくていいよ」

「……………前」のブイモンも、そうだったんっすか」

「うん？」

「…………前」のブイモン達も、ああいう風にみんななくなっちゃったんですか…………？」

「…………そのことなんだがね」

ゲンナイはとんでもないことを口にした。

「ここは君達が、そして私達がいた世界ではないんだ」

「…………は？」

「君達」が生きていた世界とは、違う世界線の世界なんだよ」

「え…………あ、ま、待って、ください、どういう、こと…………」

「大丈夫だ、きちんと順序立てて説明するから落ち着きなさい」

ゲンナイは、話してくれた。

「まずは前提の話をしよう。パラレルワールドというのは知っているかな？」

パラレルワールド、というのは日本語で平行世界、決して交わることのない2つ以上の異なる世界のことだ。

それはつまり、現実世界とデジタルワールドのことである。

だが世界は現実世界とデジタルワールドの、2つだけではない。

世界と言うのは選択肢の数だけ存在しており、また選択肢が増えるたびに世界も増えていくのである。

通常は交わることなく、一定の距離と空間を保って、同じ時間が流れていくもののだが、例外なのが大輔達がいる世界とデジタルワールドだ。

この2つの世界は引き離すことが出来ないほどに密接に絡み合っており、一方の世界に異変が起きるとその異変に引っ張られるようにもう一方の世界にも異常が起こる。

今デジタルワールドで起こっている異変が、現実世界に異常気象という形で現れているように、だ。

その異変を解決するために、デジタルワールドは現実世界から太一

達「選ばれし子ども達」を召喚したのである。

それは、大輔達の「前世」でも同じだった。

違うのは、ヒカリが選ばれし子どもとしてデジタルワールドを冒険したタイミングと、大輔と賢が選ばれた時期だ。

ヒカリは風邪を引いてキャンプを休んでしまったために、太一達と一緒にデジタルワールドを冒険することはできなかつたし、パートナーであるプロットモン、基テイルモンもゲンナイのミスではぐれてしまっていたせいで、出逢うタイミングが遅かった。

賢が選ばれたのは2000年、太一達の冒険の1年後だった。

大輔は3年後、2002年に選ばれ、とある事情で洗脳されていた賢を元に戻し、デジタルワールドに生じた歪みを直すためだった。

だから、本来なら3人もここにいないはずがないのだ。

まだこの場にいるはずがないのである。

「……もしもここが君達が生きていた世界線の、過去の世界であるなら、当然君達がここにいるはずがない。時間は改竄を許しても、歴史は改竄を許さない。歴史の修正力は悔ってはいけない」

それは、正史から横道に逸れようとする二元に戻そうとする世界の力。

大輔達がいた世界では、大輔達が歩んできた歴史が「正しいもの」だから、未来から過去に渡って歴史を改竄しようとしても、決まっている未来に辿り着くために及ぶ力なのである。

未来で死に、過去に飛んできたのなら、修正力が働いて大輔達がここにすることは決してない。

しかし大輔達はここにいる。

もう少し後で選ばれるヒカリは、2000年と2002年に選ばれる賢と大輔は、ここにいてる。

だからゲンナイは早々に悟った。

この世界は彼らが作った未来とは別の未来に向かおうとしている、異なる世界なのだ。

「……兄さんが、いるのも……「世界」が違うから……？」

賢の言葉が重く大輔達に押し掛かった気がした。

賢の兄、一乗寺治は故人だ。

賢が4歳の時に、治は交通事故で亡くなったのだが、この世界は彼らが生きた世界とは違う世界線のために、「交通事故で死ぬ」という歴史にはならなかった。

歴史を変えたわけではない。

ゲンナイの言葉を借りるなら、「治が死なずにデジタルワールドを冒険する」というのが、この世界の正史なのだ。

兄が生きている。生きて、共に冒険している。

それだけでも賢の目頭に熱いものがこみ上げてきた。

もう二度と逢うことは叶わないと思っていた、憎くて大好きだった兄。

でも……。

「……ゲンナイさんは、どうして……?」

「前世」のことを思い出した時、自分達をずっとサポートしてくれていたゲンナイは「ゲンナイ」だと確信した。

何故なら、本来この時のゲンナイは敵の策略により、自身を老人化していたからだ。

太一達が初めて会った時のゲンナイは、お爺さんの姿をしていたと太一達からも聞いていた。

大輔達がここにいるはずがないのと同じように、若い姿のゲンナイがいるはずがないのである。

「前世」のことは思い出したが、「今世」のことだってちゃんと記憶には残っていた。

「ゲンナイ」が初めて子ども達の前に姿を現したのは、アンドロモンの工場にて、アンドロモンに促されてみんなで輪になってみんなのデジヴァイスを中心に向けた時。

録画データのゲンナイは確かに若かったし、デビモンを葬った後に再び赴いたアンドロモンの工場で、録画ではなくリアルタイムでの映像に映っていたゲンナイは、老人の姿ではなかった。

そして何より、「前世」の記憶を思い出した昨日の夜、ゲンナイと話をした時に彼は何の疑問も持たずに会話をしていた。

それはすなわち、彼も大輔達と同じように未来から過去へ飛んできた存在ということだ。

彼の場合はデータだから、死ぬという概念はないしどうやってこの世界に辿り着いたのかも疑問だが、尋ねればゲンナイは基本的にちゃんと答えてくれる。

今回も、ゲンナイはちゃんと教えてくれた。

「……その前に聞きたいのだが、3人も覚えているのは何処までだ？」

「何処まで、って言う……死んだ時のこと、っすか？」

「うん、まあ、そうだね。何処まで覚えてる？」

「……死んだ時のこと、は、覚えてないです。ただ、死ぬ直前ぐらいまで、なら」

「なら、死ぬ直前にとあるデジモンと戦ったことは覚えているね？」

頷く3人。

「前世」で大輔達は、彼らと共に選ばれた元子ども達と一緒に、8月1日の記念日にキャンプをするために、デジタルワールドに来ていた。

キャンプ地を探そうとしていた時に、ゲンナイからメールがあった。

高エネルギー体が次元の壁をぶち破ってこようとしているから、現場に行って正体を見極めてほしい、という旨のメールだったはずだ。

現場に駆け付けた大輔達が見たのは、見たこともない、水晶の中に閉じ込められたようなデジモン。

光子郎が30年近くかけてかき集めた世界中のデジモンを登録したデータベースにもヒットしなかった、正体不明のデジモンだった。

しかし「前世」を思い出したと言っても、その記憶は虫食いのように断片的であるために、その前後が曖昧になっていた。

そう正直に言えば、ゲンナイは大丈夫だよと言ってくれた。

「君達はあのデジモンが起こした爆発で死んだんだが……その爆発で空間に穴が開いて、あのデジモンはそこから別の次元に逃げたんだ。そして君達のデータ……君達の世界で言う魂や心の一部、または大

部分が、あのデジモンが逃げた勢いに巻き込まれて、引っ張られた。そうして辿り着いたのが、この世界なのさ。それだけなら、この世界の私に任せればいい。別の世界に干渉するのはルール違反だからね」

「……そのルールを破ってでもゲンナイさんがここに来たのは……あのデジモンの存在に關係しているんですか？」

「流石だ、賢。その通りだよ。実はあのデジモンを追ってきた、別の世界の子どもが迷い込んできて、丈が保護していたんだ」

「えっ」

「その子から聞いたんだが、あのデジモンは存在するだけで空間や因果律を無理やり捻じ曲げてしまうほどのエネルギーを持っているらしい。おまけに異次元を移動する能力も持ち合わせているらしく、これまでも沢山の世界を渡ってきたそうなんだ。その子どもはあのデジモンを止めるために、あのデジモンの後を追って沢山の世界を渡ってきて……その先々で世界が歪んでしまったのだと、話してくれたよ」

「……………」

「そこで最初の、大輔の質問だ。バイモンの過去……あの悲惨な過去は、我々の正史ではあり得ない歴史だ。我々エージェントが生まれたのは古代種達が滅んだずっと後のことだが、きちんと記録として残っているよ。バイモン達古代種は時代の波に押されて、変化していった環境に対応できずに、緩やかに絶滅の一途を辿った。君達の世界で絶滅した生物と同じようにね」

「……………ま、さか」

ゲンナイの話を聞くうちに、徐々にだがショックから抜け出せた大輔達は、さあつと顔を青ざめさせた。

「……君達が考えている通りさ。あのデジモンが逃げた先は、平行世界のデジタルワールドの過去。つまり“ここ”だ。あのデジモンの影響で因果律が捻じ曲げられて……古代種達はあんな形で絶滅させられたんだ」

「……………っ!!」

胡坐をかいた大輔の膝の上に乗せられている両の拳が、ぶるぶると

震えるぐらいに強く握りしめられている。

その顔には見たこともないような、怒りに満ちた形相が浮かんでいた。

怒る時は一瞬で、その怒りも持続しない大輔にしては、珍しいぐらいに怒っている。

でもそれは当然のことだろう、ブイモンは大輔のパートナーだ。大切なパートナーが、あのデジモンのせいでも辛い目にあっただのだから。

訳も分らず殺されそうになって、間一髪助けてくれたデジモンもブイモン達を護ろうとして目の前で死んでしまった。

どれだけ怖い思いをしたことだろうか。

映像を見ただけのミミも、髪を振り乱して泣いていたぐらいだ。

当事者であり、その恐怖の中心にいたブイモンの心境はいかほどに。

「……ブイモン、私達と一緒にいた時、全然そんな話してなかったよね？」

「……きつと忘れちゃってたんじゃないかな」

最年少達とそのパートナー達でひと塊になって、ずーっとお喋りをしてきた3人と3体だったが、ブイモンからそんな話は聞いたことがなかった。

いつも自分達のことばかり知りたがって、ブイモン達のことを聞いたことがなかったと、今になって思い出す。

聞かなかった自分達も悪かったが、あんなに辛い過去を抱えていた素振りを見せなかつたから、ヒカリは至極当然の疑問を口にし、それに答えたのは賢であった。

「あれだけ怖い思いしたら、心にかかる負担は想像できないよ。だから……心を護るためにブイモンは『忘れた』んじゃないかなあ」

つまり自己防衛反応だ。

ブイモンは生きるために、あの辛くて怖かった出来事を、全部忘れることで自分の心を護つたのである。

忘れることにしたから、自分の記憶からあの出来事を全部消したか

ら、ブイモンはそんな素振りを見せなかったのだ。

賢が確認するようにゲンナイを見やると、その意図を察したゲンナイは恐らく、と言って小さく頷いた。

「……俺、ゲンナイさんに聞きたかったことがあったんです」

「うん？」

「デビモンを倒した後、アンドロモンの工場で、太一先輩達が色々質問してましたよね」

「そうだね」

「それで、俺もブイモンが全然目を覚まさないって質問しましたよね」「ああ。今だから言うが、アンドロモンが検査したところ、デジコアの消費が激しかったそうだ」

まあ、当然だな、とゲンナイは何でもないように言った。

“前世”で、大人になった頃に聞いた話を、臆気ながらに思い出す。

ブイモン達古代種は現代種と比べると感情の起伏が激しく、データの書き換えを意味する“オーバーライト”が荒々しいために、寿命が極端に短い。

まだデジモン達が生まれたばかりの古代という時代に生きていたために、進化の幅も狭く成熟期に進化するのがやっとで、その成熟期に進化するのにも命がけだった。

通常の古代種が進化をすれば、たった1度の進化が命とりとなり、最悪の場合死に至るのだが、ブイモン、ホークモン、アルマジモンの場合はパートナーデジモンであるという制約のために、進化にかかる負担をパートナーである子どもや、媒体となるデジヴァイスが請け負う形で軽減され、進化と退化を繰り返すことが可能になった。

今回も、ブイモンは大輔のパートナーであるが故に、古代種であっても進化にかかる負担は大輔とデジヴァイスが軽減してくれるはずなのだが……。

「……恐らく、デジヴァイスの容量を超えていたのだろうね。そのデジヴァイスでは、ブイモンの進化にかかる負担を軽減しきれなかったんだと思う」

正史では今から3年後、デジヴァイスの形状が変わる。

D-3という名のデジヴァイスなのだが、旧式のデイヴァイスにはなかった機能が備えられており、データ容量も更に増えたことで、できなかつたことが出来るようになった。

それが、アーマー進化とジョグレス進化だ。

アーマー進化は古代種が生きていた時代、進化の幅が少なかった古代種達の主流であり、進化にかかる負担が殆どなかった、古代種にとっては容易に進化をするためのアイテムだった。

その利便性を危惧した者達によって、様々な制限が駆けられたうえに、古代種のデータを持つていなければ使用することもできないために、古代種の数が減るにつれて廃れていった進化である。

とある事件によりデジモン達は通常進化が出来なくなったために、デジタルワールドの安定を望む者達によって、デジメンタルと共にその存在を復活させられたのが、大輔のブイモン、京のホークモン、そして伊織のアルマジモンである。

更に、古代種のデータを因子として持っていたタケルのパタモンとヒカリのテイルモンがいたことにより、その2人も新たに選定されたのだが、その話は今は置いておこう。

今聞きたいのは、それではないのだ。

「ホントは、別のこと聞こうと思ってたんです。ブイモンの奴……パタモンとテイルモンと、それから俺とヒカリちゃんと賢以外の人やデジモンが触ると、すっげー怖がること。何でだろうって思ってた、でもブイモンも何でか分からなくて、どうしようもなくて……ゲンナイスさんなら知ってるかなって思ってたんすけど……」

「……確証はないが、推測はしている。確信がないから断言はできないのだが……」

「それでもいいです」

「……助けてもらったことが原因なのではないか、と私は見ている。詳しいことはまた今度話すが、実は私となっちゃんがあのデジモンを追って辿り着いたのが、丁度古代種達が絶滅させられた直後辺りだね。ブイモン達を保護したのは私なんだが……その時既にブイモンは触れられることを拒絶していた」

ショックな出来事を目撃して、精神が崩壊寸前にまで追い詰められていたブイモンは、ゲンナイ達が保護しようと伸ばした手を見て、悲鳴を上げて拒絶したのだそうだ。

可哀想なぐらいぶるぶる震えて、ボロボロと涙を零して、自分の存在を消すように身体を小さく丸めて怖がっていたらしいのだ。

「……忘れたと言っても、それは心の記憶だけで、身体の記憶は覚えていたのだろうか。触れられることを今でも怖がっているのは、恐らくそういうことだと思っている」

身体の記憶というのは、身体に染み込まれた習慣のようなものだ。

毎日毎日、同じ動作を繰り返すことで、意識せずともその動きが自然にできるようになる。

ブイモンは強烈な恐怖を体験したことで、それが身体に染みついてしまったのだろう。

“自分を助けたデジモンが死んだ”という恐怖が、“自分に触れたら相手が死ぬ”という恐怖に変換されたのだ。

だが新たな疑問が浮かぶ。

「……大輔はともかく、何で僕と八神さんは平気なんでしょうか」

賢がその疑問を口にした。

触れられることを怖がるブイモンが、大輔が触っても平気なのは納得できるとして、何故ヒカリと賢までも平気なのか。

そして何故パタモンとテイルモンも平気だったのか。

するとゲンナイは困ったような表情を浮かべて、後頭部をがしがしとかいた。

「ヒカリと賢が平気な理由は分からないが、パタモンとテイルモンが平気な理由は……私の口からは言えないな」

「……何か知ってるんすか？」

「ああ。だが私の口から語るべきではないだろう。本人達に直接確認するといい……パタモン達も恐らく、“思い出した”だろうからな」

意味深な言葉を発したゲンナイは、さて、と言って両膝に手をつきながら立ち上がった。

「少し休憩しようか。1度に情報交換をしても、整理しきれないだろ

うしね」

「え、あ、でも……」

「喉も乾いただろう。何か取ってくるよ」

「あ、アタシも行くー」

そう言うとゲンナイは、黙り込んでしまっていたなつちやんと一緒に子ども達の寝室として用意されていた廊下へと消えていった。

まだ聞きたいことがあった賢は、中途半端に伸ばした手を引っ込め、座り直す。

大輔を挟んで反対側にいたヒカリと目が合った。

「……………」

「……………」

言葉はない。否、何も言えないのだ。

ゲンナイの言う通り、受け取った情報量の多さに、2人の脳が処理しきれていないのである。

ただでさえ『自分達は既に死んでしまった人間である』ということとを思い出して、混乱が収まっていない状態なのに、ゲンナイから聞かされた情報で更にオーバーヒートしてしまいそうだった。

「……僕達、これからどうすればいいのかな」

「……………」

『前世』の記憶があるとはいえ、大輔も賢もヒカリも、この冒険に最初から参加していた3人ではない。

しかし全てを知らないわけでもない。

この冒険の行く末、結末、自分達が得るもの、失うもの。

辿り着く道が同じなら、自分達はどうすればいいのだろうか。

知らない振りを通して、これまで通り上級生達の後について行くべきか。

それとも……。

どおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおん!!

運命の女神は、更なる試練を子ども達に課す。

brave heart

それは、開戦の狼煙である。

ピラミッド内部を地震のように襲ってきた爆発音を聞いて、別室にいたナノモンが慌ててメインコンピュータールームにやってきた。

キーボードがある台に飛び乗り、忙しくキーボードを操作している。

「今の揺れは何だ!？」

次に、大輔達のために飲み物を用意していたゲンナイとなつちちゃんが、お盆に乗ったコップを持ってきて駆け込んできた。

そのすぐ後に、寝室に引っ込んでいた子ども達。

大輔達も突然聞こえてきた爆発音にびっくりしてフリーズしていたのだが、太一達の姿を見て我に返り、ナノモンに駆け寄った。

『今外の映像を映します!……!……!』

慣れた手つきでキーボードを操作したナノモンは、大きなモニター以外の監視カメラからの映像を映し出す。

そこに映っていた映像に、その場にいた全員が息を飲んだ。

《あ、嗚呼ああアアアあ嗚アアああああアアア嗚呼ああああああ嗚呼っ!!》

喉をぶち破るような咆哮が、カメラのマイクと外から同時に聞こえてきて、二重奏（デュエット）のように響き渡り、子ども達とデジモン達は咄嗟に耳を塞いだ。

どおおおおおおおおおおんっ!!

モニターに映っている“ソレ”は、劈くような咆哮を上げながらピラミッドの周りを破壊している。

どおん、どおんと絶えず響いている爆発音と振動に、子ども達は立っているのもやつとだった。

『くっ……何故だ、一体何故奴が……!』

キーボードを操作しながらナノモンが悪態を吐く。
ゲンナイもお盆をなっちゃんに預け、ナノモンの手伝いをすべき
キーボードを叩き始めた。

そこにいたのは、エテモンであった。

ただし子ども達が1度だけ見た、猿の着ぐるみのような姿ではな
かった。

上半身はそのままだったのだが、下半身は太いコードが沢山集まっ
て絡まっているような形状だったのだ。

どくん、どくん、と心臓のように波打って、なかなかグロテスク
だった。

ひ、とミミはその悍ましさに悲鳴を上げて、空にしがみついている。

大輔、ヒカリ、賢はモニター越しでも漂ってくる濃厚な闇の気配を
感じ取って、その顔色はよくないものになっていた。

『あ、あれ……エテモン、だよね……？』

『何、あれ……』

アグモンとガブモンが呆然としながら呟いた言葉を拾ってくれた
のは、キーボードを忙しなく操作しているナノモンであった。

『ああ、あれはエテモンだ。間違いない。奴め、どうやらあのダーク・
ケーブルに完全に取り込まれたようだ……』

『ダーク・ケーブル……って、ピコデビモンが言っていた……』

『そうだ。闇を凝縮した、いや、あれはもう闇ですらない。光すら飲み
込んでしまう暗黒だ。我々デジモンにとつては毒にしかならん。弱
い者ならまず近づこうともせんかっただろうが……エテモンはあの
強大な暗黒の力に魅入られ、利用しようとしていたのだ。あの暗黒の
ケーブルが何処から来て、どんな結果をもたらすのかも知らずにな
……』

「……ゲンナイさん、あのケーブルって何なんだ？」

「黒幕がデジタルワールドを支配するために放ったもの、だと私は
思っている。あのダーク・ケーブルの存在を確認してから、明らかに
デジタルワールドの光の守護者達が弱体化し始めた。取り除こうに

も、闇よりも深い暗黒の力に、戦闘能力など皆無の私のような存在は手も足もでなかった」

モニターから目を離さずに、ゲンナイは子ども達に伝える。

「黒幕の正体は、残念ながらまだ分かっていない。だが黒幕がデジタルワールドを支配しやすくするために、このダーク・ケープルという種をばらまいて、これを利用してしようとする悪しき心を持ったデジモンに使わせて、そのデジモンが世界を支配した瞬間を狙って横取りしようとしている、というのが私の見解だ」

『あいつめ、何度も忠告したというのに、それを聞かずに結局乗っ取られては世話がない……』

ピラミッドの仕掛けや罠などを駆使して、ナノモンはピラミッドを攻撃しようとしているエテモンに対抗しているが、決定打には至っていない。

このままでは長期戦になって不利になるのはこちらの方だと悟ったナノモンは、決心した。

『ゲンナイ様、ここを頼みます』

「……何処に行くんだ、ナノモン」

『外に。エテモンの奴を、止めてきます』

「そんなっ！無茶よ！」

何を言い出すのか、ナノモンの言葉にぎよつとなった空がナノモンを止めた。

感情も表情もない、無機質な目をナノモンは子ども達に向ける。

『なら君達が出てくれるのか？そんな顔をしている、君達が？』

「え……」

『私でも分かるぐらい、今の君達は消沈しているぞ。先ほどの映像が理由だろう。今の君達では、パートナー達を次のステップに進化させるどころか、成熟期にすら進化させられんぞ』

「なっ……」

『お前達のパートナーはお前達の武器であり、盾だ。それが故に君達の感情に左右されやすい。今からそんな状態では、いざという時に戦力にならん』

ズバツと言われて子ども達はぐうの音も出なかった。

ナノモンの言う通り、子ども達の心は今、ブイモンの悲惨な過去を映像として目の当たりにしたことで、鎮火してしまったように燻ってしまっている。

とてもではないが、こんな状況でも戦わなければという気に、どうしてもなれなかった。

『……まあ、あの記録を見たタイミングも悪かったな。エテモンが来るのがもう少し早ければ、君達にもまだ戦意は残っていただろうが……』

ナノモンがキーボードをポンポンと操作すると、床からナノモンが乗れるぐらいの大きさの台がせり上がってきた。

それに飛び乗り、ナノモンはそのまませり上がっていく台に乗って、上へと運ばれていく。

「ナノモン！」

『……あの時エテモンを止められなかった、私のミスです。元より勝とうとは思っていません。相打ちにすら持ち込めないでしょう』

「なら何故！」

『彼らが最後の希望だからです』

ゲンナイが声を張り上げてナノモンを止めようとしたが、ナノモンは止まろうとはしなかった。

表情のない、無機質な機械の顔が、笑った気がした。

『私が足止めをします。ゲンナイ様はその間に子ども達を連れて少しでも遠くに逃げてください』

「ナノモン!!」

ゲンナイはキーボードを操作してせり上がっていく台を止めようとするが、ナノモンが何か細工をしたのか、台は止まらなかった。

『子ども達よ、この世界を頼んだぞ』

どんどん上がっていく台の上から、ナノモンは子ども達にそう言い残して天井の向こうに姿を消した。

ナノモンとエテモンは古い知り合いである。

知り合いと言つても友達のように親しい間柄というわけではない。最初に2体が出会ったのは、エテモンがまだまともだった頃、各地を回ってはた迷惑な歌声を披露していた頃だ。

音が割れるほどに大きな声で歌いまくっていたエテモンは、その内機材が故障してしまい、その修理をしてもらうためにナノモンと知り合ったのである。

その頃には既にゲンナイに雇われ、いつか来る選ばれし子ども達のサポート役として、ピラミッドに隠された紋章の守護をしていた。

機械に強いナノモンは、その傍らで機械修理を受け持っており、カラオケ資材をよくぶっ壊しては、しょっちゅう修理を頼みに来ていたエテモンによく悪態を吐いていた。

その度に口喧嘩に発展し、もう来ないわよと言つた1週間後にはまたぶっ壊れた機材を直せと言いにやってくるのだから、呆れ果てても言えなかった。

エテモンがおかしくなったのは、いつの頃だっただろう。

その日は壊れた機材を直せと乗り込んできてから2週間経つた時だった。

また壊したのか、莫迦者という台詞を用意していたナノモンは、エテモンが持つてきたものを見て硬直した。

強大で濃厚な闇の力を纏っていた「ソレ」に、何の感情もわからないはずの機械型デジモンである自分は、恐怖を抱いた。

それは何だ、と問いかけたナノモンを無視して、エテモンはサンダラスの向こうに隠れている目をぎらつかせながら、それをナノモンに押し付けた。

これを利用してこの世界を支配する。アンタも仲間に入れてあげる。

最初は何を言われているのか、さっぱり分からなかった。

この世界を支配する？何を言っているのだと。

そんなことをすればデジタルワールドの意志がエテモンの存在を癌と見做して、消去しようとするに決まっているではないか。

これまでも世界を支配しようとするデジモンが現れるたびに、世界を守護する者達によって肅清、消去されてきた歴史を、知らないはずがない。

いずれ来る選ばれし子ども達のサポートをするためにゲンナイに雇われたナノモンが、エテモンの誘いになんか乗るはずがなかった。目を覚ませ、これを今すぐ捨てろ。

しかしエテモンは、そんなナノモンの主張を一蹴した。それは力がなかった、弱い者の戯言だと。

世界を支配するだけの力もなかったのに、世界を支配しようとしたからだ。

でもこれさえあれば、光の守護者など恐れることはない。

現にこのケーブルを使って、エテモンは光の守護者の家来を1体、倒してしまったそうだ。

そのケーブルから力ももらい、そして相手はそのケーブルを使って弱体化させて。

何てことを、とナノモンは愕然とした。

《よせ！分からののか、それがお前の命を削り取ろうとしているのが！お前はそこまで莫迦だったのか!？》

《なあによ、その言い方！知らない仲じやないから、せーっかく仲間にしてあげようと思ったのに、アチキに逆らうっての?》

興覚めしたわ、と言ってエテモンはその日は帰ったのだが、ナノモンは気が気ではなかった。

ゲンナイ様がおっしゃっていたのはこのことだったのかと、今更になって危機感を抱く。

何とか思い直してほしいと思い、何度か連絡を取って説得をしたのだが、エテモンは聞く耳を持たず、どんどん悪い方向へと突き進んでいった。

舎弟と言う名の下僕を増やしていき、支配領域を拡大していき、逆らう者は全てダーク・ケーブルで増大した力で制裁を加えた。

それでもナノモンは、エテモンを説得するのを止めなかった。

あまりのしつこさに、エテモンも苛ついたようにナノモンを1度ス

クラブにしてしまったほどだ。

連絡が取れなくなったナノモンを心配して、ゲンナイが来てくれなかったら、きつとナノモンはそのまま廃棄されていたか、エテモンに何らかの形で利用されていただろう。

もう自分にはどうすることもできないところまで、エテモンは落ちてしまったのだ。

……このままではエテモンはエテモンではなくなってしまう。

しかしナノモンは1度敗れてしまった身であり、ダーク・ケーブルによつて更に強化されたエテモンは、あの時以上に強くなっているだろう。

だからゲンナイから聞いた異世界の救世主、選ばれし子ども達に全てを託そうと思った。

そのために今日まで紋章を護り続けていたのだが……完全にタイミングが悪かったとしか言いようがないだろう。

今の子ども達はすっかり戦意が喪失してしまっている。

しかしナノモンは、それを責めるつもりはなかった。

『……エテモン、いや、ダーク・ケーブルに意志を乗っ取られたお前は、もうエテモンではないな。哀れなものだ、利用していたつもりが逆に利用されていたことに最期まで気づかなかつたのだから。……意識の奥底から湧き上がってくるこの感情が悲しいというものなら、私は知りたくなかったよ』

ピラミットの外に出たナノモンは、ダーク・ケーブルに乗っ取られて劈くような咆哮を上げているエテモンを見ながら、届くはずのない言葉を口にする。

その目には、機械型のデジモンでありながら哀れみという感情が込められていた。

《あゝあゝあゝアゝアゝ鳴〃呼〃阿ゝアゝアゝアゝあゝあゝあゝあゝ亜〃亜〃唾〃あゝあゝアゝアゝアゝアゝあゝ鳴〃呼〃鳴〃呼〃アゝアゝあゝあゝあゝ亜〃あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝツ!!》
『ぬうつ!!』

凝縮された暗黒のエネルギーが発射され、ナノモンは慌てて避け

る。

ナノモンがいた個所が大きく抉れた。

出来るだけピラミッドから離れ、エテモンの注意をこちらに向け
る。

その目論見は成功したようで、エテモンは動くナノモンを追うよう
に身体の角度を変えた。

ゆっくりと追いかけてくるエテモンに、ナノモンは両方の手の指先
を向ける。

『プラグ・ボムッ！』

データを破壊、再構築し、相手を構成しているデータをめちやく
ちやにしてしまう技、プラグ・ボム。

幾つもの小型のミサイルがエテモンに向かって発射されたが、エテ
モンは軽く腕を振っただけでそれを全て吹っ飛ばしてしまった。

戦いが、始まった。

モニターの向こうに映っている景色は、まるで映画館で映画を見て
いるかのような錯覚に陥った。

派手な爆音と轟音、爆風によって抉れる砂の地面、時折その激しき
を物語っている振動。

そして悍ましいダーク・ケーブルに捕らわれ、自我を失ったデジモ
ンが身も竦むような咆哮を上げている姿は、パニック映画もかくやと
言った映像だった。

そこにいる誰もが、その光景に目を奪われていた。
だがそこに感動など欠片もない。

圧倒的な力の差に嘆いて、1歩も動けないのだ。

エテモンとはまだ1度しか対峙していないが、その実力差は明らか
だった。

コロモンの村でたった1度だけの戦いで、戦力の差を思い知らされた。

おまけにそのエテモンに対抗するための手段として与えられた紋章は、太一のグレイモンがスカルグレイモンという悍ましいデジモンに進化させたことによつて、子ども達に進化の先の進化に対する恐怖のような感情を植え付けてしまった。

誰も口にしないだけで、あの時のことは子ども達に立派なトラウマとして心に刻み込まれてしまっているのだ。

太一とアグモンが悪いわけではないから、余計に。

全員の紋章が揃っていても、まだ誰のデジモンも完全体へと至っていない。

唯一完全体になった太一のアグモンによつて、強大な力は制御できなければ仲間達をも傷つける脅威となりうることを、嫌というほど思い知らされたせいで、みんな足踏みしているのである。

そんな状況から抜け出せないまま、子ども達に襲い掛かったのは更なるシヨツキングな映像であった。

数奇な運命なんて言葉が陳腐なものに聞こえるほどの衝撃的な過去。

自分以外の仲間を目の前で殺され、自分も殺される寸前にまで追い詰められ、おまけに助けてくれたデジモンまでも目の前で死んだという恐怖を経験した、ブイモンの辛い記憶の記録。

誰もが言葉を失ったし、呆然とすることしか出来なかった。

ミミは空とパールモンに支えられて、やつと立てるぐらいシヨツクを受けているのだ。

誰も、ブイモンの過去を知らなかった。

きつとブイモンも、自分がそんな目にあっていたことを忘れてしまっていたのであろう。

そうでなかったらあんなに明るくなんて振る舞えないし、現にブイモンは氣を失った状態から戻ってこない。

薄く開けられている瞼の向こうにある紅い目からは光が失われ、涙

がとめどなく溢れていた。

何を思えばいいのか、どんな感情を抱けばいいのか。

怒ればいいのか、悲しめばいいのか、ぐちゃぐちゃになった思考がまだまとまり切れていなかったというのに、戦いは子ども達に考える暇すらくれない。

世界を救うために、自分達の世界から無理やりな形で召喚された自分達は、過去にあった出来事など関係ないのだろうか。

今すべきなのは世界を救うことであって、ブイモンの止まった時間を戻してやることではないのだろうか。

それならば何故、ブイモンは世界を救うデジモンの1体として選ばれたのか。

そんな迷いを抱いていた子ども達を見抜いて、ナノモンはエテモンを止めるために外へと出てしまった。

この世界を頼んだと、まるで遺言のような言葉を子ども達の心に刻んで。

ゲンナイがモニターの向こうに、必死に呼びかけている。

太一は、そんな光景を呆然と見つめていた。

自分は、どうしてここにいるのだったか。

そんな基本的なことすら忘却の彼方に飛んで行ってしまったかのようにだった。

『タイチ……』

そんな太一の異変を察して、アグモンが気づかわし気に声をかけてきてくれていることにも気づかない。

ただモニターの向こうで繰り返し広げられている一方的な蹂躪を見つめていることしか出来なかった。

世界を救ってほしいと一方的に頼まれ、連れてこられて、自分達の残っていた選択肢など1つしかなかった。

だが自分達に一体何ができるというのか。

日本という、争いとは無縁で世界的に見ても犯罪発生率が少ない国で生まれ育った子ども達は、戦争のやり方もその収め方も知らない。

「別の世界から無理やり召喚してしまった形で、この世界に呼んだ君達を絶対に無傷で帰すと、誓ったんだ。……ナノモンの犠牲を、無駄にしているいけない……!」

太一はゲンナイを見た後、モニターに再び目を向ける。

どんどんボロボロになって、壊れていくナノモンの身体。

それでも尚、子ども達を助けるために戦いを止めようとしなない。

振り返る。自分を治療するために持つてこられた診察台の上で、ブイモンは横たわっている。

——ああ、

「なあ、アグモン」

自分は、何のためにここにいるのか。

『なあに、タイチ』

どうやって、ここまで来たのか。

「アグモンは、何があっても俺についてきてくれるか……?」

いつでも傍にいてくれたのは、誰だったか。

『僕はタイチの行くところだったら、何処にでも行くよ』

太一は、笑った。

その台詞はアグモンが初めてグレイモンに進化した後に言ってくれた言葉だ。

元の世界に帰るために、みんなで島を冒険して帰る手段を探すことになった時。

アグモンはニコニコ笑いながらそう言ってくれたのだ。

無謀ともとれる太一の行動を否定せず、ただ太一の思うがままにすればいいと。

いつも無茶をしては治や空に怒られている太一を、問題ばかり起こしてお母さんから雷をもらっている太一を、そのままでもいいのだと肯定してくれた存在。

スカルグレイモンに進化してしまい、トラウマを抱えてしまったアグモンにも言ったように、アグモンと一緒になら何処にだって行けると信じている。

「……行くぜ、アグモン!」

『おうー!』

太一はデジヴァイスを握りしめ、部屋を出て行こうとした。

何処に行くの、と空が引き留める声がする。

勿論、外だと太一は当然のように答えた。

「何言ってるんだ!今の僕たちじゃあ、エテモンに敵うはず……!」

「じゃあ、ナノモンがやられるのを黙って見てろってのか?ナノモンの言った通り、ゲンナイさんと一緒に逃げるってか?さっき逃げようって言ったゲンナイさんに抗議したのにか?」

「っ、そ、それは……」

口ごもる治に、太一は向き合う。

「……俺は阿呆^{ばか}だけどき、助けてくれたデジモンを見捨てるほど愚^{ばか}かじゃない。敵わなくなっただっていいさ。ナノモンを見捨てるぐらいなら、俺はあそこに行く」

「太一!」

「それに!!」

引き留めようとする治を遮るように、太一は声を張り上げた。

「……もしこのままエテモンと戦わずに、次の進化も出来ずに負けちゃったら……またあなるんだろう?」

「……………」

「また……ブイモンみたいに、犠牲になるデジモンが、いっぱい増えるんだろう……?」

「っ!!」

子ども達が息を飲む音が、嫌に響いた。

大輔は心臓がぎゅっとなつたのを感じて、診察台に寝かされているブイモンを見やる。

ずつと涙を零しているのは、きつと今も夢の中であの日に捕らわれて怯えているからだ。

息が詰まりそうになって、心臓がバクバクして、他の子ども達と一緒にモニターを見ていた大輔は、胸の内に仕舞っていた気持ちが爆発しそうになって、ブイモンの下に駆けよっていった。

その後を追って、賢とヒカリ、パタモンとテイルモン、それからなっ

ちやんとロップモンも。

——何を、やっているんだらう。

上級生達はみんな、同じ気持ちだったはずだ。

「だから、俺は行く。エテモンを倒すんじゃない、もうブイモンみたいに悲しい思いや寂しい思い、辛い思いをするデジモンを増やさないために」

デジヴァイスがうっすらとオレンジ色に光った気がした。

ゲンナイはそれを見逃さない。目を見開き、息を飲み、そして……
歓喜した。

「……太一、行くのかい？」

「ああ、行くよ」

『もちろん、僕もね！』

彼らの表情に、迷いなど微塵もなかった。

決めたのだ、彼らは。

前線に立って戦うことを。

「……無理はしないと、約束してくれ」

そう言うけどゲンナイはキーボードを操作する。

すると、この部屋の出入り口の向こうに、外の景色が映った。

否、映像として映ったのではない、外と内部を“繋げた”のだ。

コロモンの村から1週間ほど歩かなければならない距離の場所に
出た時と同じように。

空の紋章を手に入れた洞窟から、ナノモンがいるピラミッドまで繋
げたように。

その証拠に、モニターを通して聞こえていた爆音が、より身近なも
のへと変化した。

舞い上がる砂埃が、部屋に入ってくるのが生々しかった。

「……行ってくるな」

『行つてきまーす！』

凍り付いている子ども達に優しい笑みを浮かべ、太一とアグモンは
聞こえてくる爆音などものともせずに駆け出した。

太一、治が声を出して太一を引き留めようとしたが、その声は言葉

として喉の奥から出てこず、ただ空気の泡として吐き出されただけだった。

その冒険の始まりに、彼らの意志はなかったかもしれない。

ただ元の世界に帰るために、未知の世界へと踏み出したただけだったかもしれない。

自分を慕ってついてきてくれる不思議な生き物は、それこそ生き残るための手段でしかなかったかもしれない。

世界を救うなんて漠然としすぎていて、全然ピンと来ていなかった。

ただ世界を侵食していく闇から世界を救えば、自分達の世界に帰れる。

“元の世界に帰るために、世界を救う”。

主体は自分の世界であって、飽くまでもこちらの世界はおまけであつた。

でも、今はもう違う。

「おい、エテモンー！」

腹の底から、太一は叫ぶ。

原型をギリギリ保っていたナノモンを、エテモンが掴んでいた。

ゆったりとした動きで、エテモンは太一とアグモンの方を見やる。

『お……まえ、た、ち……に、にげ、ろ……と……』

虫の息のナノモンが、か細い声でそう言ったが、太一とアグモンはきっぱりと言い放つ。

「嫌だね！俺達は逃げないって決めたんだ！」

『ナノモン、絶対君のこと助けるよ！僕達は逃げない！』

想いは、進化する。

太一の、もうブイモンのような犠牲者を出したくないという願いにも似た強い想いは、0と1のデータに変換され、デジヴァイスを通してアグモンに伝わる。

アグモンの身体が光に包まれる。大きくなって、逞しい四肢とな

る。

いつもならそこで止まるが、今日は違った。

オレンジ色の強い光がデジヴァイスから放たれ、ナノモンとエテモンはその眩さに目を瞑った。

心と身体の奥から、力が沸き上がってくるのが分かる。

内側が爆発しているように、身体が一回りほど大きくなった。

肩から手にかけて光が走ったかと思うと、腕の感覚がなくなった。

鈍痛が走る。ずく、ずく、ずく、と鼓動のような痛みが腕全体を包んだと同時に、鎧のような機械の腕と生身の時よりも鋭い爪が現れた。

頭部を覆っていた兜も、左腕と同じ金属のものに変化し、胸部にはハッチがついた。

極めつけは、その役割を果たしているのか分からない、背中に生えた少しボロボロになっている翼だ。

光の中から姿を現したのは、グレイモンを改造したようなデジモンだった。

その名も、メタルグレイモン。

ファイル島で出会ったアンドロモンと同じ完全体のデジモンだ。

スカルグレイモンのような禍々しさなど微塵もない、正真正銘の太一のパートナーである。

相棒が更に進化した姿に太一は目を見張ったが、すぐにエテモンの方に向き直った。

今すべきは、進化した相棒に感動することではない。

相棒が進化したもう一つの姿を思い浮かべて、比べることもない。

……ナノモンを、助けることだ。

「……ナノモンを離せええええええ!!」

デジヴァイスを握りしめながら腹の底から叫べば、更なる力がメタルグレイモンに送られる。

メタルグレイモンをオレンジの光が包み込み、大きな咆哮を上げるとエテモンに向かって突進していった。

どしん、と重量級のものがぶつかり合う音がして、エテモンはそのままメタルグレイモンに押されていく。

その拍子にエテモンの腕からぼろ、とナノモンが落ち、放り投げられるナノモンを太一が駆け寄って受け止める。

「大丈夫か、ナノモン！」

『っ、ばか、もの……なぜ、にげ、な、かった……！』

「へっ、言っただろ。俺は逃げないって！……お陰でアグモンが進化したよ」

『……そう、だな』

太一とナノモンの目線の先には、エテモンを押しているメタルグレイモンがいる。

鋭い爪でエテモンの下半身に絡まりながらぶら下がっているダーク・ケーブルを切り裂き、咆哮を上げながら伸ばしてきたエテモンの腕に噛みつき、右腕を振るって殴っている。

もうコロモンの村の時のように、一方的に敗北を期したりしない。それに……。

エテモンを真っ直ぐ見つめていた太一は、更に強くデジヴァイスを握りしめる。

強い願いと想いが、メタルグレイモンに伝わる。

は、とメタルグレイモンは伝わってきた太一の想いに、一瞬だけたじろいだ。

でもすぐに立て直し、胸のハッチを開ける。

分かったよ、タイチ。

そう答える代わりに、メタルグレイモンはエテモンを見つめた。

《あゝ、嗚、嗚、呼、阿、啞、啞、ア、ア、ア、ア、あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、嗚、呼、ア、ア、阿、啞、あゝ、あゝ、あゝ、ア、ア、ア、ア、吾、あゝ、あゝ、あゝ、嗚、呼、啞、嗚、呼、あゝ、あゝ、嗚、呼、!!》

喉をぶち破るほどの咆哮は、いつしかエテモンの声が失われて二重三重の音が重なっている。

——……もう、アレはエテモンじゃない。

『ギガデストロイヤー!!』

開いた胸のハッチから、2つのミサイルが飛び出してエテモンにぶち当たる。

やったか!と太一はナノモンを抱えながら勝利を確信した。

しかし異変が起こる。

辛うじて壊れていなかった、ナノモンの機械の身体に備わっていたサーチ能力が反応する。

メタルグレイモンのギガデストロイヤーがぶち当たったエテモンは、悍ましい悲鳴を上げながらダーク・ケーブルを中心として捻じれた。

ナノモンの目は、しつかりと原因を捉えていた。

エテモンに絡まっているダーク・ケーブルは闇よりも深い暗黒の力を備えていた。

強力な暗黒の力を持ったダーク・ケーブルに、同等の力を持った技をぶつけるとどうなるか。

太一達の目の前で空間が歪み、周りを巻き込みながら大きくなっていく。

メタルグレイモンは慌ててその場から遠ざかろうとしたが、まるで見えざる腕が幾つもメタルグレイモンに巻き付いているように動くことが出来ず、それどころか歪みで生じた風に捕らわれて引き込まれそうになっていた。

「メタルグレイモン!!」

異変に気付いた太一は、壊れかけているナノモンが歪みに巻き込まれないようにピラミッドの陰に置いて、メタルグレイモンの下へ駆け寄り寄っていった。

『ま、待て……!』

ナノモンは太一を引き留めようとしたが、壊れかけた身体では声を張り上げることすらできなかった。

ナノモンの後ろから、ゲンナイと治が飛び出してくる。

「メタルグレイモン!」

『っ、タイチ!来ちゃだめだ……!』

完全体とはいえ、進化したばかりのメタルグレイモンは、まだその力を制御しきれしていない。

よって大きくなっていく歪みから逃げる術を、メタルグレイモンは持っていないかった。

太一が巻き込まれないように忠告したのだが、太一はそれを無視してメタルグレイモンに駆け寄っていく。

ふわり、身体が浮いた。

え、と思う間もなく、太一はあつという間に歪みに引き込まれていく。

歪みが消えるまで踏ん張ろうと思っていたメタルグレイモンは、太一を護ろうとして腕を伸ばした。

地面に根を張るように踏ん張っていた力強くて逞しい脚が、紙屑のように浮いた。

そして、

「太一!!」

歪みが消える。

治の声だけが虚しく響き渡る砂漠に、太一とメタルグレイモンの姿は何処にもなかった。

いまとみらい

約束したの、ずっと一緒にいるって。

これを見てくれ、とゲンナイは子ども達にモニターに映った映像を見せる。

そこには、2つのよく似た球体があった。

何ですか、これ、って治が聞くと、これは君達の世界とデジタルワールドだと教えてくれた。

「同一多重空間というのを知っているかな？」

「全く同じ場所でありながら、決して交じり合うことのできない空間、のことですか？」

「そうだ。君達の住む現実世界と、デジタルワールドがまさにそういう空間なんだ。君達はこの世界を隣り合った別の世界だと思っているようだが、少し違う。デジタルワールドと現実世界は、全く同じ空間でありながら、決して干渉することが出来ない、そんな世界だった」だが暗黒の力が増大したことにより、今現実世界とデジタルワールドはその境界が曖昧になっているのだそうだ。

現実世界で起きている異変は、それが原因らしい。

「つまり……どういうこと？」

「世界というのは幾つもあるものだが、それらは全て隣り合っているもので、時間の流れも同じなんだ。だが、君達の世界とこのデジタルワールドは、他の世界と違って全く同じ場所にある。地球の裏側、内側、そういうもつと踏み込んだ深い場所に、この世界は存在している」パネルのキーを操作すると、地球とデジタルワールドに幾つもの線のようなものが現れる。

それは、それぞれの世界のネットワークで、2つの世界を重ねると

ピッタリと一致した。

球体の大きさも、ネットワークの位置も、全て。

「ここはパソコンなどの電子機器を通して出てくることが出来る世界……。分かりやすく言うと、コンピュータの中に出来た世界が独自に発展した世界ということだ」

「……僕と光子郎の仮説は当たっていたのか……」

ここに来る前に通った洞窟の中で、治と光子郎は、ここは実態のないデータだけの世界だという仮説を立てた。

アンドロモンの工場と、洞窟の中にあつた見たことのない文字、通称デジ文字を消したり書いたりすることで、様々なことが出来る。

コンピュータに書き込んだプログラムで、コンピュータを自在に動かすことが出来るように。

だから自分達は、今はデータの存在であると。

だがそれを否定したのは、太一だった。

情報の授業を受けた時に治が言っていた、コンピュータは命令されたことしか出来ないということをちゃんと覚えていた太一は、自分が額に大怪我を負って死にかけたことも、そのことでコロモンがすぐく傷ついてわんわん泣いたことも、全部データとして決まっていたことなのかと。

コンピュータは、命令されたことしか出来ない。

それはゲームも同じだ。

エンディングが決まっているものも、エンディングが複数あるものも、道を選ぶことはできても結局辿り着く場所は同じなのだ。

それは、ゲームを作っている人達が決めたエンディングで、誰も書き換えることはできない。

「……そうだね、太一の言う通りだ。確かにここは、治、光子郎。君達の仮説通りコンピュータの中にある世界だけれど、全ての事柄が初めから決まっているわけじゃない。ある程度のルールは存在しているが、行く末を決めるのは神や現実世界の間達じゃなく、ここに生きているデジモン達だ。だからそう言った意味では、デジモン達も人間と同じさ。色々と例外はあるがね」

その話はまた今度することにして、とゲンナイは話を戻す。

パネルのキーを操作し、モニターに映っていた球体は消えて、代わりに白い背景と赤い点が現れた。

一定のリズムで点滅している点は、ゆっくりと動いている。

「……いつまで経っても太一のデジヴァイスの反応が、狭間からデジタルワールドに現れる気配がないし、それどころか先ほどよりも動きがまた遅くなっている。十中八九、太一達は現実世界の方に引き寄せられているな」

ゲンナイの言葉に、子ども達は安堵するやら不安がるやら、様々な反応を見せていた。

「現実世界に着いた時、太一がパソコンに近寄ったりすればコンタクトを取ることはできるが……何度も言った通り、現実世界とデジタルワールドでは時間の流れが違う。太一がコンピュータに近づくまで、こっちの時間がどれだけ流れるか……」

「……太一もそう莫迦じゃないから、日付が変わっていないことにさえ気づけば、何とかしようとはすると思います……」

治の言葉に、ついうっかり知っていると言いきうようになったゲンナイは、苦笑をして誤魔化した。

未来では光子郎の次ぐらいに、一緒に仕事をしていた期間が長いのだ。

彼の性格は熟知している。

何故こんな話になったのか、話は2時間ほど前まで遡る。

襲撃してきたエテモンを倒すために、ピラミッドの外に飛び出していった太一とアグモンは、紋章が正しく作用されたことでメタルグレイモンへと進化を遂げた。

その圧倒的な力は暗黒の力に飲まれ、理性と知性を失い本能がままに暴れていたエテモンを簡単に押さえつけたのだが、その後が問題であつた。

駆けつけた治が目撃したのは、謎の歪みに吸い込まれてその姿を消

した親友とそのパートナーの捻じれた後ろ姿だった。

太一とグレイモン、基メタルグレイモンを飲み込んだ歪みは、2人を巻き込むともう用はないと言わんばかりに綺麗に消え去った。

まるで無理やり捻じった部分が、手を離れた瞬間反発して元に戻ったように。

治はガブモンを連れて太一が消えた辺りまで駆けつけ、腹の底から太一の名を呼んだが、辺りは戦闘の名残が漂っているだけで親友の返事は何も来ない。

最悪の事態が頭を過り、治の心に絶望の火が灯った時、背後から声をかけられた。

ゲンナイだった。

壊れかけ、スクラップ同然のナノモンを抱えながら、ゲンナイは言う。

「治、まだ希望を捨てるのは早い。運が良ければ太一は無事だ」

「……運が、よければ……？」

ゲンナイは慰めのつもりで言ったのだろうが、その言葉は絶望に沈みかけている治を引っ張るには至らなかった。

それどころか加速していった。

運がよければ、なんて、それじゃあ運が悪かったら、太一は……！
ゲンナイはそんな治に気づかず、背を向けてピラミッドの方に戻る。

呆然としている治を、ガブモンが何とか引っ張ってゲンナイの後を追った。

ゲンナイは知っている。

太一がとんでもない強運の持ち主だということ。

ゲンナイは確信している。

世界線が違っててもほぼ同じルートを辿っているのなら、太一は間違いなく現実世界にいると。

ナノモンをメデイカルルームに放り込んで修復作業をしている間、

ゲンナイはナノモンの代わりに大きなモニターの前に陣取ってキーボードを操作していた。

「君達と直接会ったら言おうと思っていたんだが、実は君達が持っているデジヴァイスには様々な機能が備わっていてね」

デジモンを進化させるだけなら、デジヴァイスという媒介は必要ない。

何故なら大輔とヒカリと賢が、デジヴァイスなしでボタモンをコロモンに進化させたからだ。

デジモンを進化させることが出来る能力を持つ子どもなら、一定期間触れ合っていればデジモンは進化する。

しかしそれは飽くまでも「進化させるだけ」ならという条件でだ。

デジモン達は想いの強さで進化を果たし、感情が高ぶることで規定以上の強さを発揮するのだが、それは諸刃の剣でもある。

想いや感情に負が交わっていると、力が暴走してしまい理性を失う。

スカルグレイモンに進化してしまった時が、いい例だろう。

あれは目の前で太一が倒れ、太一をちゃんと護ることが出来なかったという負の感情にグレイモンが飲まれ、負けてしまったからだ。

進化しても暴走することなく、己の持つ力に飲まれることなく戦えるように、デジヴァイスという制御装置を必要とするのである。

もしも選ばれたのが大人だったら、行動する前に考えてブレーキをかけるから、デジモン達を暴走させずに進化させることはできるだろう。

しかしそれが故に、「立ち止まってしまおう」。

大人になるにつれ色々なことを経験するからこそ、できることが増えていくがそれと同時に子どもの頃に出来たことが出来なくなってしまう。

思ったことを後先考えず口にする、できもしないなんて夢にも思わずに突っ走る、こっぴড়াずかしい台詞を躊躇なく吐き出す。

だから「子ども」が選ばれる。

有り余ったエネルギーを、まだ汚いものを見たことがない輝く瞳

を、現実を知らない夢を持っている子どもが、デジモン達を進化させる糧として選ばれるのである。

そして子ども達の強すぎる想いを制御するのがデジヴァイスだ。

大輔とヒカリと賢がその昔光が丘に迷い込んだボタモンを進化させたことだけを伏せ、ゲンナイはモニターから目を離さずにデジヴァイスの役割を子ども達に話してくれた。

そしてもちろん、デジヴァイスに備わっている機能はそれだけではない。

「デジヴァイスを持っている者の居場所を探知する機能と、結界を張る機能だ。結界を張る機能についてはまた今度話すとして、まずは居場所を探知する機能だな」

ポン、ポン、ポン、とゲンナイは手際よくゲンナイの手のひらほどあるキーを次々とタッチして、操作していく。

ぱ、とモニターが切り替わり、真っ白なモニターに赤いマークがぼつんと点滅していた。

「ゲンナイさん、これは……」

「太一が持っているデジヴァイスを追跡している。もしも先ほど太一とメタルグレイモンを飲み込んだ歪みがこの世界の別の場所に繋がってしまったら、デジヴァイスを持っている限り太一の居場所は何処にいたって分かるんだ」

「そうですか……よかった……」

ゲンナイの言葉を聞いて安堵する子ども達。

まあ恐らく、と言うかほぼ確実に太一とメタルグレイモン基コロモンは現実世界にいるだろうが、それはお口にチャックだ。

そして案の定。

何時間経つても太一を示しているデジヴァイスの赤い点滅が、何処か別の場所に現れる気配がない。

それどころか徐々にその点滅が移動するスピードが落ちていっている。

間違いなく、太一は現実世界へと向かっていた。

「どうしたんですか」

自分の予想が当たっていたことでやけそうになっている口元を隠すために右手で口元を覆っていたのだが、子ども達にはそれが深刻なものに見えたようで、丈が代表して尋ねてきた。

ゲンナイは説明する。もしかしたら太一はここではなく現実世界に向かっているかもしれないと。

そして、冒頭に至る。振れに巻き込まれ、吸い込まれた太一とメタルグレイモンが、どうして現実世界に戻っていつているのか、子ども達は当然疑問として口にした。

幾ら隣り合ったとても近い世界だとしても、次元の狭間に放り込まれた太一とアグモンが、元の世界である現実世界に帰るなんて、本当に奇跡や運がよかったとしか言いようがなかった。

太一はそれで納得していたが、知りたがりの光子郎がそんな非科学的なことで納得できるはずもなく、賢や丈、ゲンナイを巻き込んで理由を探ったことを思い出して、ゲンナイはしょっぱい表情を浮かべたが、子ども達に気づかれることはなかった。

「……いずれにせよ、太一が現実世界に戻ってパソコンに気づくなりなんなりしてくれなければ、こちらからはどうすることもできない。先ほどのこともあるし、君達は少し休みなさい。太一とアグモンのことは私に任せて。それとも何か食べるかい？」

時刻は昼過ぎ。いつもならみんなで昼食を取っている時間だが、流石にそんな気になれないようだった。

子ども達は顔を見合わせる。確かに、全員の顔は見ていられないぐらい青白かった。

無理もない、診察台で眠っているブイモンの悲惨な過去を見てしまい、暗黒の力に飲み込まれたエテモンに襲撃され、そして子ども達の中心とも言える太一とアグモンが一時離脱してしまっているのだ。

子ども達の心のダメージは計り知れない。子ども達は素直に頷き、デジモン達に伴われるように重い足取りで部屋を出て行った。

勿論、大輔となつちゃん、賢とパタモン、ヒカリとテイルモン、それからロップモンはその場に残って。

「……………」

「……………」

「……………」

3人とも押し黙っている。

響くのはゲンナイが操作しているパネルのキーを叩く音だけだ。

ブイモンはまだ目覚める気配を見せず、薄く開かれた両目から溢れる涙は止まらない。

大輔は何度もその涙を乱暴に手で拭うが、涙は次から次へと溢れていた。

見かねたなっちゃんがもうやめるように進言するも、大輔はなっちゃんの声など届いていないようで涙を拭う手を止めない。

『……………ねえ、ヒカリ』

どうすればよかったんだろう。

どうしたらよかったんだろう。

ブイモンの過去は変えられないとは分かっているのに、ヒカリはずっとその考えが頭の中を駆け巡っている。

……………いや、違う。変えられないのではない、変えてしまったのだ。

あの日、あの正体不明のデジモンを自分達が逃がしてしまったせいで。

あのデジモンが逃げた先が、自分達がかつて生きていた世界とは異なる世界、つまり自分達が今生きている世界だった。

いつだったか1度だけ聞いたことがあった、ブイモン、ホークモン、アルマジモン達古代種の最期。

迫りくる時代の波に抗うことが出来ず、古代種達はゆるりとその姿を消していった。

でもそれは、種としては当たり前のものだった。

変わりゆく時代に適応できないのなら、種族として滅んでしまうのは仕方のないことであった。

デジタルワールド創世記という途方もない昔に生きて、進化の幅も少なかった古代種が、新たな力を手に入れた現代種に追いやられてしまうのも、自然の流れだった。

それが、本来の歴史、正しい歴史である。

しかし自分達があのデジモンを逃がしてしまったせいで、この世界は本来の歴史からずれてしまった。

どうすればよかつたんだろう。

どうしたらよかつたんだろう。

ヒカリの頭の中は、ずっとそれだけが占めている。

だからテイルモンが呼びかけてきたことに気づかず、テイルモンに軽く揺さぶられて我に返った。

「つ、あ、ぐ、ぐめん、テイルモン……考え事してた……何……？」

『……考え事？』

うん、とヒカリは小さく頷く。

テイルモンに声をかけられたことで思い出した。

さつきゲンナイと話し合っていた時には、パタモンもテイルモンも、そしてロツプモンもいなかった。

だから知らないのだ、大輔達は未来で死に、魂だけが過去に戻ってきたことを。

今はみんなもいない。だからヒカリは賢に言つて。パタモンとテイルモン、ついでにロツプモンにも自分達のことを言おうと思つたのだが、テイルモンの方が早かつた。

『言わなければならないことがあるんだ』

「え？」

『ケンも聞いてほしい。出来れば……ダイスケも』

「え……僕？」

「……………」

ずっとブイモンについて離れない大輔をぼんやりと見守っていた賢は、自分と呼ばれるとは思っていなかったようで、何処かに飛んでいた魂が突如引き戻されたように、大袈裟に跳ねながらテイルモンの方を見やる。

大輔はずっとブイモンの方を見ているが、テイルモンの声はちゃんと届いたようで、ブイモンの涙を拭っていた手を止めた。

なつちゃんはどうかと大輔達を見回していたが、ヒカリと目

が合ったのでその場に留まることにした。

ティルモンの決意に満ちた目を見て、パタモンは悟る。

賢の隣から、ティルモンの隣に移動し、それからロップモンもティルモンを挟んでパタモンとは反対側に立つ。

そして、衝撃の事実が、3体の口から語られた。

『……ヒカリ、ワタシ達は、昔ね——』

“天使様” だったの……。

白い煙が煙突から立ち上っている。

タケルはそれを外からぼんやりと眺めていた。

黒い服は結婚などのめでたいものではなく、仲間だった者達への弔いの服。

今日は、大輔と賢とヒカリの、合同火葬の日だった。

世界を救ったかつての英雄のうち、3人が謎のデジモンが起こした爆発により亡くなったことは、瞬く間に世界を駆け巡った。

世界中のお偉いさんが、彼らの親族に労りやお悔やみの言葉をかけるために電話をしてきたり、メールを送ってくれたし、世界中の選ばれし子ども達が葬式に参加したがった。

全員が参加できる余裕はないので、そこは遠慮してもらい、選ばれし子ども達とその家族だけの、ひっそりとした葬式が行われた。

葬式は、酷いものだった。

酷いもの、というのはめっちゃくちゃになったとかそういう意味ではなく、家族の悲しみが響き渡ったという意味で、だ。

特に一乗寺家の母親の憔悴ぶりは、見ていられないものだった。

既に息子を1人亡くしているのだ。

その亡くした息子の分まで大切に愛すると決めたのに、残った息子

まで彼女の手元からすり抜けてしまった。

賢が死んでから今日まで、彼女はずっと泣き喚いていた。

けんちゃん、けんちゃん、お願いだから貴方まで私達を置いて行かないで。

ずっとそれだけを口にしていたために、お通夜も告別式も、彼女の夫によって外に連れ出されて最後まで参加できていなかった。

いよいよご遺体を焼く、という時がピークで、発狂したように泣いて、賢が収められていた棺に縋りついて喚いていた。

でも誰も、そんな彼女を止めなかったし、何も言わなかった。

みんな同じ気持ちだったからだ。

大切な人が亡くなった気持ちは、世界共通のはずだ。

虚無感、焦燥感、悲しみも苦しみも、心と喉の奥から吐き気のように沸き上がってきて、内臓にじわじわとした痛みが広がる。

八神家も本宮家も、一乗寺家の母親のように外に出さないだけで、きつと心の内は黒く激しい感情の嵐が吹き荒れていたことだろう。

家族ではない自分が、こんなにも苦しいのだから。

「タケル」

「っ、兄貴……」

口元が寂しいのを誤魔化すように煙草を吸っていたら、ぽん、と肩を叩かれた。

大袈裟に跳ねて振り返ると、そこには自分と同じ髪色をした兄が片手をあげて挨拶をした。

少し離れたところには父と母がいて、何かを話している。

離婚してから数年は顔を合わせようとしなかった両親だったが、あの夏の冒険から何か思うところがあったのか、定期的に4人そろって食事をしたり何処かに出かけるようになっていた。

再婚にまでは至らなかったものの、離婚する前ぐらいには仲良しになってくれたので、これはこれでいいかと満足したのが、もう十数年も前。

「お前、煙草なんて吸ってたのか」

「うん、本当にたまに、だけど。小説のネタやストーリーに行き詰った

時とか」

携帯用の灰皿に煙草の灰を落としながら、タケルは言った。

妻は身体に毒だからやめろと何度も口を酸っぱくして言ってくるのだが、考え事がごちゃごちゃになって思考が乱雑になると、気が付いたら吸っているのだ。

若い頃はカフェに入り浸ってコーヒーを飲みながら何時間でも居座りながら小説を書いていたのだが、最近はおっぱら煙草を吸っていることが多い。

子どもからも臭いが嫌だと不評だし、これを機に禁煙でもしてみようか。

ゆっくりと息を吸って煙を貯め、深く吐きだす。

ヤマトは漂ってきた煙の強さに、眉を顰めた。

「そんなに強いのか？」

「あれ、兄貴もしかして煙草だめ？」

「俺はもっぱらワイン派なんだよ」

「何それ、お祖父ちゃんみたい。あんなに苦手って言うてたのに」

「俺が苦手なのは飽くまでもあの軽いノリであって、趣味や嗜好に罪はないだろう」

「罪って」

「お前も少しぐらいワインとか嗜んでみたらどうだ？ますます親父に似てきたって、母さんが愚痴ってたぞ」

「え、マジで？」

見た目だけならヤマトの方が父親に似ているのに、何故か趣味嗜好はタケルの方が父親に近いらしく、母はたまに嘆きの電話をヤマトにしていたらしい。

タケルは気まずそうに煙草を携帯用の灰皿に押し込めた。

その時である。

夫に支えられながら、賢の母が引きつけを起こしたみたいにくったりして、火葬場に戻ってきたのは。

「……………」

「……………」

その顔は放心しており、足にも力が入っていないようで彼女の夫は彼女の両肩をしっかりと掴んで、引き摺るように彼女を連れてきていた。

賢の妻であり、彼らの義娘でもある京がまだ3歳の息子を長女に預けて駆け寄っていくのが見えた。

京の目元も、賢の母に負けず劣らず真っ赤に腫れていた。

その光景だけで、胸の痛みが増す。

携帯用の灰皿を持っていた手に、無意識に力がかかった。

最初の彼は、仲間ではなく敵だった。

あの世界を自分の物にするために、デジモンカイザーと名乗ってせっかくタケル達が築き上げた平和と調和を乱す存在として。

そのせいで通常の進化ができず、デジタルワールドは新たな進化の可能性を持った子どもを選定した。

それが、大輔と京、伊織、そして自分とヒカリであった。

賢も元々選ばれし子どもとしてデジタルワールドの危機を救ったことがある1人なのだが、敵の策略によりデジタルワールドに災いをもたらす者に成り果ててしまったので、彼を止めるために5人が選ばれたのだ。

紆余曲折を経て賢は仲間に加わったが、彼を受け入れるまで様々な苦悩もあった。

デジモンカイザー時代のこととは、気分がやたらハイになっていたようであり記憶にないらしいのだが、あの恥ずかしいコスプレ感満載の衣装のことだけは覚えていたようで、今でも思い出すと恥ずかしさのあまり地面に穴を掘って埋まりたくなる、と酒を飲む度に遠い目をしながら語っていた。

小説に書きたいんだけど、あの時の衣装あんまり覚えていないんだよね、イラストに描いてくれる？って爽やかな笑顔で言ったら、何故か目を逸らされた。

……大人になってから、だいぶ普通に話せるようになったと思っていたのに、彼はもう空の上だ。

立ち上がる気力すら失ったららしい彼の母親の、廃人のような姿がと

でも痛ましい。

「……太一さん、何処？」

「……あそこだ」

そう言つて兄が親指で指し示した方向には、階段に腰かけて項垂れている太一がいた。

その周りには、彼の両親と息子、それから彼の妹の夫と息子。

自分の兄に負けず劣らずのシスコンな彼に、いつもの覇気など微塵もなかった。

彼女が結婚すると、今の夫と一緒に挨拶に来た時だつて、あそこまで落ち込んでいなかったと思う。

結婚というめでたいものと、人の死を比べること自体がおかしいが。

思えば彼女とは昔から距離が近くて、将来は何となく結婚するんじゃないかあ、とぼんやり思っていた。

彼女もそうだったようで、いつだったか、私タケルさんと結婚すると思つてたと言われた。

実際、お付き合いみたいな関係になったことはあった。

でも何かが違った。違和感が凄まじかった。

高校に入った頃には自然消滅していて、別の恋人が出来ていた。

その恋人とは違和感のようなものがなかったから、やっぱりヒカリは自分にとって“女の子”ではないのだと確信した。

そう、彼女は“姉”とか“妹”とか、もっと近いものだったのだ。

最初の冒険の終盤で、兄や上級生達が敵の罠にかかつて次々とその姿を消して、最後に残ったのがたった2人と、自分のパートナーだけになった時、自分がヒカリを護らなくちゃと必死だったあの気持ちの、延長だったのだ。

護られてばかりで、兄や上級生達から目を覆われて耳を塞がれて、戦いから遠ざけられていた最年少は、終盤になってやっと自分も世界を救う者の一員なのだと自覚したのである。

自分よりも少しだけ背の高かった、同じ年の女の子を護るために奮闘した時のあの気持ちを、恋だと勘違いしてしまったのだろう。

だから違和感が凄まじかったのだ。

きつとその違和感に気づかないふりをして、蓋をしていたら2人もダメになっていただろうな、と彼女の恋人を紹介された時に思ったことは、誰にも言っていない。

彼女とお付き合いをしていた期間は本当に短かったし、兄達も気づいていなかった。

それぞれ結婚してからの何度目かの集まりで、そう言えば僕とヒカリちゃん付き合ってたねって何かの拍子で零した時、全員から驚かれたし。

……何があっても護ると決めた女の子を、護ることが出来なかった。

タケルは俯く。

あの日誓った想いは、今でも胸に宿っている。

自分は妻子ある身だし、優先すべきはもちろん自分の家族ではあるけれど、それでも「護らなければならない女の子」であったことに、変わりはないかった。

それなのに、自分は何もできなかった。

彼女を護ろうとしたのは、自分をライバル視して突っかかっていた、リーダーの意志を強く受け継いだ彼と、彼の親友だった。

そう言えば彼の家族は何処にいるんだろう、と視線を動かすと少し離れたところに本宮家はいた。

彼の妻と息子、それから両親とお姉さん。

出逢った頃から険悪な仲で、行く先々で互いの悪口を漏らしていた姉弟だったが、それでもやはり心の奥では互いを思い合っていたらしい。

彼の姉が結婚した時は、姉貴を倅せにしないと許さねえからなどと、酒を飲んでグダグダになりながら、顔を涙と鼻水でぐしゃぐしゃにしなから管を撒いていたのは、今でもみんなが集まると話題に上がっていた。

彼の姉も、彼の結婚式で涙をボロボロ流していた。

何だ、やっぱりお姉さんのことが大好きなんだね、と言うと胸倉掴

んで殴り掛かってきたことがあったつけ、と思い出して苦笑していたタケル。

今は、もうそんなやり取りもできない。

火葬が終わったのは、その数十分後だった。

係の人達が、淡々とした口調で告げに来て、親族や仲間達はのそのそとした動きで火葬場に戻って行った。

焼却炉から取り出された3人の遺体は、真っ白い灰と骨だけが残っていた。

——ああ、本当に死んじゃったんだ。

ぽつり、とタケルの目尻から雫が浮かんで、頬を伝って落ちていく。

「……タケル、大丈夫か？」

「……大丈夫なわけ、ないじゃん」

何を当たり前のことを、とタケルは咎めるように兄を見つめる。

そうだよな、ってヤマトは失言を謝罪した。

大丈夫ではないことは明白なのに、大丈夫かと尋ねてしまうのは日本人としての性（さが）だ。

分かっただけで尋ねてしまうぐらい、タケルが消沈していることに、ヤマトは気づいていた。

ヤマトと会話をしている時はいつも通りに振る舞っていたけれど、それでもじわじわと滲んでくる気持ちには抗えない。

姉であり妹だったヒカリ、自分をライバル視してよく突っかかってきた大輔、そしてそんな大輔を窘めて代わりに謝ってくれた賢。

かけがえのない3人の仲間が、タケルの目の前でその命を落とした。

亡くなった直後は何があったのか、理解できずにずっと放心していた。

お通夜の時は、3人が亡くなったことが信じられなくてずっと俯いていた。

そして、今日の火葬。

3人の遺体が収められた棺が、3つの焼却炉に入れられ、燃やされた。

もう3人の器は何処にもない。

爆発の衝撃で彼方此方傷ついていた身体には、痛々しく包帯が巻かれていた。

大怪我を負って眠っているだけにしか、見えなかった。

その内パツチリ目を覚まして、おはよーなんて呑気に欠伸をしながら起き上がるんじゃないかって、火葬の直前まで思っていた。

そんな淡い期待、叶うはずがないって分かっていたのに。

デジタルワールドから『希望』という概念を与えられた元選ばれ子どもは、足元がガラガラと崩れ去っていくような感覚に陥る。

ぽつ、ぽつ、ぽつ、次から次へと珠のような水が目尻から溢れて流れていく。

じわじわと足元を侵食していたものが、一気に身体中を覆って、心の中に根を張った。

「お父さん……」

「貴方……」

そんなタケルの手を、そつと握ってくれたのは息子と妻である。

妻は、タケルがヒカリに抱いていた特別な感情を知っていた。

好きとか愛しているとか、そんなものを超越した気持ち、理解してくれていた。

分かっているから、妻はタケルに寄り添った。

そんな心遣いに嬉しく思いながらも、それでも涙は止まらなかった。

ヒカリの代わりなど、いなかったからだ。

誰もヒカリの代わりなどなりえなかったから、妻の心遣いも息苦しさしかない。

「……ふっ……」

ぽたり、また雫が落ちる。

「う、つく……っ、ひ……」

しゃくりあげているせいで、肩が跳ねる。

それをきっかけに、仲間達や親族からすすり泣く声が聞こえてきた。

——ああ、本当に、

「死んじゃったんだ、なあ……！」

震える手で口元を押さえながら、嗚咽を漏らしたタケルを妻は黙ってみていることしか出来なかった。

いつだって、僕達は自分のことばかりだった。

いつだって、自分のことしか考えていなかった。

本当に悲しかったのは——だったのに。

天使様のお話

むかしむかし、あるところに3にんのてんしさまがおりました。

《おはようございます、セラフィモン様》

《本日もよろしくお願いします、ケルビモン様》

《今日もいい天気ですね、オフアニモン様》

3にんのてんしさまはそれぞれ、おとこのひと、おんなのひと、けものすがたをしておりますが、すがたがちがうことなんかまったくきにしないぐらい、なかよしでした。

おとこのてんしさまは、せいぎとちつじよをつかさどり、せかいのへいわをたもっております。

《やあ、おはよう、皆》

けものてんしさまは、かみさまとちせいのしゅごしやといわれておりました。

《うん、今日も頑張ろうねー》

そしておんなのてんしさまは、じひとじあいにもちあふれたてんしさまでした。

《御機嫌よう、皆さん。いいお天気ですね》

3にんは、いつもいっしょでした。

うれしいこともかなしいことも、いつも3にんでわけあっていました。

おんなのてんしさまには、まいにちにつかになっていることがありました。

それは、げかいのようすをのぞきみることでした。

《……いつ見ても美しいわ》

みどりいっばいにひろがったもり、おひさまをはんしやしてきらめくうみ、いろとりどりにさくおはな、すべててんしさまがくらししているせかいにはないものでした。

そしてそこでくらすものたちの、いきいきとしたかおは、このよでもっともうつくしいとおもっていました。

じひとじあいのてんしさまは、げかいでくらすいきものを、いつもやさしいめでみまもっていたのです。

なかでもおきにいりだったのは、ちいさなあおいりゆうのこどもでした。

《……ふふ、いたわ》

ちいさなあおいりゆうのいちぞくは、ながくいきられないしゅぞくでした。

それはきようだいなちからをもっただいしようでした。

でもそのことをけっしてうらんだり、なげいたりせず、きようというひをだいにいきることをしているいちぞくでした。

そのなかでも、いつとうげんきなこが、おんなのてんしさまのおきにいりでした。

そのこはいつもぼーるみたいにとびはねて、おなかいっぱいたべて、たくさんねて、そのひそのひをくいのないように、げんきにすごしていました。

おんなのてんしさまは、まいにちそのこをみていました。

そのこがげんきだと、てんしさまもえがおになりました。

がんばろうとおもえました。

へいわをまもるのはとてもたいへんだけれど、そのこがいきっているせかいをまもるために、てんしさまはがんばりました。

《やあ、オファニモン。今日も下界の観察かい？》

《ボク達も一緒に見ていい？》

《ああ、セラフィモンにケルビモン。どうぞ》

ときどきおとこのてんしさまとけものてんしさまも、いつしよにそのこをながめています。

《今日もあの子は元気だね》

《オファニモンお気に入りの子だね。あはは、飛び跳ねてるよ》

へいわでした。

《そうね……今日も平和で何よりだわ》

へいわ、だったはずでした。

《さあ、もう一仕事、頑張ろうか》

《そうだね》

《ええ》

かみさまと、3にんのでんしさまが、へいわをたもっていたはずでした。

そのへいわは、みごとにくずれさってしまいました。

『……いつだったかしらね。何処からともなく“あいつら”が来て、いきなり世界を破壊し始めたのよ』

あるひ、そらのむこうからおそろしいものがやってきました。

それは、ざんぎやくとよばれるものでした。

それは、ぼうりよくとよばれるものでした。

げかいにすむものたちは、みんなちからをあわせて、おいほらおうとしました。

しかしぼうりよくとざんぎやくは、それをあざわらうかのように、かれらのいのちをいともかんたんにうばっていききました。

ざんぎやくとぼうりよくは、かれらのいのみちだけでなく、かれらのすまうばしよまで、むぎんにもうばっていききました。

《やめて!!お願い、やめてえ!!》

てんしさまは、さげびました。

てんしさまは、なげきました。

あざわらいながらうばっていくざんぎやくとぼうりよくにいきなり、かなしみました。

《神様!》

そして、かみさまにおねがいました。

《神様、お願いです!どうか下界に行くことを許してください!あの子達を、助けたいのです!》

『……でも神様はうんって言うてくれなかったんだよね』

やがてぎんぎやくとぼうりよくによつて、すべてのいきものがしにたえてしまいました。

みどりいっばいにひろがっていたもりも、おひさまをはんしやしてきらめいていたうみも、いろとりどりにさいていたおはなも、このよでももつともうつくしいとおもっていたものが、すべてうばわれてしまいました。

《ああ……！》

てんしさまはなきました。

《なんて、こと……！》

たくさんたくさんなきました。

《うう……！》

だってもうないのです、てんしさまがめでていたものが、うつくしいとおもっていたものが、もうどこにもないのです。

おきいにいりのりゆうのごどもも、どこにもいません。

どこをみわたしてもいないのです。

せかいのどこにもいないのです。

《神様》

だから、かみさまにおねがいました。

《神様、お願いです……。どうか下界に行かせてください……。あの子を探したいのです……。！》

『やっぱり神様は、うんって言うてくれなかったよ』

てんしさまはなきました。

たくさんたくさんなきました。

どれぐらいないのか、わからないぐらいなきました。

《オファニモン、泣かないでくれ……》

おとこのてんしさまは、ずっとそばにいてくれました。

《悲しいね……。僕も、とても悲しい……。》

けものてんしさまは、いつしよにないてくれました。でもおんなのてんしさまは、なきやみませんでした。なきやんでくれませんでした。なかよしのてんしさまたちがそばにいてくれたのに、かなしみはきえてくれませんでした。

『……でもね』

りゅうのこどもは、いきていたのです。

『生きてたんだよ』

ざんぎやくとぼうりよくから、のがれていたのです。

『……“あれ”を生きていると言えるのなら、ね』

りゅうのこどものいちぞくは、みんなみんなしんでしまったけれど、そのこはいきていたのです。

それをしったとき、おんなのてんしさまはよろこびました。

かなしみのなみだは、よろこびのなみだになりました。

《神様》

てんしさまは、もういちどかみさまにおねがいました。

《神様、お願いです。ワタシの全てを貴方に返すので、あの子の傍にいらさせてください。永遠の命など、あの子のためなら惜しくありません》

『神様はやっと、うんって言うてくれたわ』

おんなのてんしさまは、じぶんのすべてをかみさまにかえして、りゅうのこどものもとへといきました。

『もう分かっていると思うけど、この“りゅうのこども”は、ダイスケ、

君のパートナーのブイモンだよ』

「……それって」

『ええ、ファイル島で初めてなっちゃんに逢った時に、なっちゃんが教えてくれた、〃てんしさまのおはなし〃よ。あれはワタシ達のことだったの』

そうだったんだ、とヒカリは納得していたが、その時いなかった大輔と賢はきよとんとしている。

それに関する話は後ですることにして、テイルモン達は話をつづけた。

ひとりぼっちで、かなしくてないたりゆうのこどもは、もうひとりぼっちじゃありません。

てんしさまだったてんしさまと、りゆうのこどもは、ずっといっしよに、しあわせにくらしました。

『……ここがちよつと違うんだよね』

ロップモンは教えてくれる。なっちゃんは苦笑いする。

オファニモンが愛していた地上のものが全て奪われ、泣き暮らしていた彼女（デジモンに性別はないが、便宜上そう表記する）を慰める日々を送っていたある日、突然ゲンナイがやってきた。

正史としては、その頃にはまだいかなかったはずのメカノリモンに乗り、その手のひらにブイモンと、ホークモンと、アルマジモンを乗せて。

最初は、驚いた。

いるはずのない人間が突然天界にやってきて、ブイモン達を預かってほしいなんて言ってきたのだから、当然だ。

しかも彼は人間ではなく、当時まだ確立していなかったエージェントと名乗っていたので、更に混乱した。

『……ゲンナイが未来から来たって聞いたのは、その時。しかも平行世界の未来だから、そりゃあ驚いたよね』

俄かには信じられずに動揺していたセラファイモンとケルビモンを

尻目に、ゲンナイは時が来るまでブイモン達を預かっていたほしいと、再度セラファイモン達に頼んだ。

“神”にお伺いを立てなければ何とも言えない、と言おうとしたセラファイモンを遮ったのは、今の今まで泣き伏していたオファアニモンだった。

メカノリモンの腕に乗せられていたブイモンを見るなり、歓喜の声を上げて駆け寄って、抱きしめて離さなかったのだ。

セラファイモンとケルビモンが止める間もなく、オファアニモンはブイモンをつれて戻って行ってしまったので、セラファイモンとケルビモンは苦笑しながらホークモンとアルマジモンも預かってくれた。

「……その後、どうなったの？」

『しばらく……どのぐらいだったかなあ、1000年2000年はとつくに過ぎてたかな。それぐらいの時間は流れたと思う』

ゲンナイが言っていた“時”が来るまで、3体はずっと天界の方で保護をしていたらしい。

オファアニモンはお気に入りだった“りゅうのこども”から片時も離れることはなく、従者が窘めるのも無視して、ずっと世話を焼いていたという。

『でも、ブイモンは……ブイモン達は、目を覚まさなかった』

テイルモンがポツリと落とすように呟いた。

3人の視線がロップモンからテイルモンへと移る。

『……あの映像、見たなら分かるよね。ボク達もちろん、天界から見てたよ。仲間が、助けてくれたデジモンが、目の前で殺されて……平気なわけ、ない』

今度はパタモンだ。

苦しそうな表情を浮かべて俯くパタモンにつられて、テイルモンとロップモンも目を閉じる。

保護された時、ブイモン達は既に心が壊れていた。

外部からの刺激に全く反応を見せず、その目に光は宿っておらず、まるで罅が入って曇ってしまったガラス玉のようだと、オファアニモンは悲しんだ。

命は助かったが、一概には喜ばなかった。

それでもオファニモンは、献身的にブイモンの世話をした。

ホークモンとアルマジモンも、セラファイモンとケルビモンがそれぞれ預かって、同様に世話をしていた。

しかしやっぱり、3体が目を覚ますことはなかった。

『……そうこうしているうちに、ゲンナイが迎えに来たの』

『ボク達が天界で過ごしていた間に、色々あったみたいなんだけど……』

『基本的に僕達は下界に干渉できないから、何があつたかまでは分かってなかったんだ。『あいつら』のせいで下界が殆ど破壊された後は……下界の観察もやめちゃってたし』

デジタルワールドが3度目の危機に陥っていたことを知ったのは、その時だった。

1度目の危機は、ブイモン達古代種が滅ぼされ、地上がめっちゃくちゃにされた時。

2度目は、強大な闇がデジタルワールドを覆った時。

そして3度目が……。

「……今？」

『ええ、そうよ。ゲンナイはこうも言っていたわ』

本当はその『時』ではないのだけれど、色々あつてその『時』が早まったから、少し早いけれど引き取りに来たと。

「……どういう、ことだ？」

『何だっけ、正史の通りなら本当は違う？とか言っていたんだよね。詳しいことはよく分かんないけれど』

ロップモンの言葉で、賢は悟った。

ゲンナイは、ここは自分達がもともといた世界とはズレた場所にある、パラレルワールドだと言っていた。

自分達が作り上げた未来までの道筋は、あの世界の『正史』だから例え自分達の世界の過去に戻ったのだとしても、歴史を変えることはできない。

変えようとしても修正力が働くのだと。

だが大輔達がいるこの世界は、大輔達が元居た世界で作り上げた正史がまだ綴られていない世界だ。

太一達を選ばれた理由が、光が丘でヒカリがデジたまからボタモンを孵し、コロモンからアグモン、それからグレイモンに進化させ、パロットモンとの闘いを目撃したからだ。

その戦いを観測していたデジタルワールド側が、ヒカリと同じ特性を持った、デジモンを進化させる力を持った子ども達をそこで選定したのだ。

デジタルワールドに蔓延る闇を祓ってもらう、*「選ばれし子ども」として。*

だがそれは、ヒカリも含めた*「8人」*の話だ。

その時の大輔と賢は、光が丘での事件は目撃していない。

大輔が*「選ばれし子ども」としてデジタルワールドに選定されたのは、太一達が冒険をした年、3体目の敵がデジタルワールドと現実世界を支配するために、現実世界に侵攻してきた時だ。*

賢は……選ばれた時のことはあまり覚えていなかったらしく、詳しい話は聞いたことがない。

『……さっきのお話でも、言ってたよね。*「てんさまはもういちどかみさまにおねがいしました」*』

《神様、神様、お願いです。ワタシの全てを貴方に返すので、あの子の傍にいさせてください。永遠の命など、あの子のためなら惜しくありません》

『……ほんっと、何考えてんだか。テイルモンてば、オファニモンとしての力をぜーんぶ神様に返して、ゲンナイと一緒に行くって言いだしたんだよお?』

神様やセラファイモンを宥めるの大変だったんだよお、とロップモンがわざとらしく茶化すと、テイルモンは顔を真っ赤にしてロップモンの方を見やる。

『う、嫌いわね!仕方ないでしょ!』

『それにしたってさあ』

『ボク達に何の相談もなかったのは酷いよ』

まあ、と顔を真っ赤にしているテイルモンを見ながらロップモンは……寂しそうな表情を浮かべる。

『……それだけ心配だったんだらうけどね、ブイモンのことが』

『……………そんなんじゃないわよ』

「テイルモン？」

真っ赤だった顔が、元の白に戻る。

ロップモンから顔を逸らし、俯いたテイルモンは……何処か虚しそうな顔をしていた。

『…………約束、しただけよ。ずっと…………傍にいるって。一緒に、いるって』

苦しそうに紡がれたのは、その言葉。

パタモンもロップモンも分かっていた。

ブイモン達が「あいつら」に襲われた時、助けにいきたくったけれど神様にダメだと言われたから助けられなかったことを、とても悔いていることを。

神様が止めるのも無視して、助けに行けばよかったと。

それなのに神様の言うことを優先してしまったから……。

『…………だからゲンナイに頼んだのよ。ワタシも一緒に行かせてほしいって。ブイモンを…………その「時」のために連れて行くのなら、ワタシもその「時」って奴と一緒にいかせて…………』

「…………それで、テイルモンは…………私のパートナーになったの？」

「…………じゃあ何で忘れてたんだ？」

『…………神様に自分の力を返して、ゲンナイと一緒に行ったはいいんだけど、その時にはもう既にヒカリのためのパートナーのデジたまが用意されていたのよ。ゲンナイはまだその時はいた仲間達の目を盗んで、ワタシのデータを無理やりデジたまに組み込んでくれたのだけれど…………恐らくそのせいね。でもあの紋章がヒカリ達のデジヴァイスに収まった時に、はつきりと思い出した』

そう、とヒカリは目を伏せた。

自分達が大事なものを思い出したように、テイルモン達も忘れていた記憶が引つ張り出されたのだ。

ヒカリはデジヴァイスを手取る。

ぴ、ぴ、とボタンを適当に押すと表示された、前世からのヒカリの大切なもの、ヒカリと同じ名前の「光の紋章」。

太一の「勇気」や空の「愛情」と違い、タケルの「希望」と並んで特別な紋章だった「光」は、またしても不思議な力を、ヒカリ達に見せつけたようだ。

「……パタモン、は？」

膝を抱えてパタモンに尋ねたのは、賢である。

『……お話でも言ったでしょ。ボク達はとっても仲良しだったって。ボク達もテイルモンと、ゲンナイさんと一緒に行くことにしたんだ』
賢の質問に、パタモンは悲しそうに笑いながらそう答えた。

「ロップモンは？」

『うん？』

「ロップモンは、何で？ パートナーがいないのに、何で……」

『パタモンと同じだよ。仲良しだからさ』

「……それだけ？」

『うん、それだけー』

これで僕達の話はお終い、とロップモンが締めくくる。

『ちよつと休憩しよっか。いっぺんに話しても疲れちゃうでしょ……君達も、話したいことがあるみたいだし』

「！」

ロップモンの言葉に、3人は肩を震わせた。

しかし、ちよつと待て、という大輔の言葉を華麗にスルーし、ロップモンはお腹空いたーとか言いながら部屋を出て行く。

パタモンとテイルモンは分かっていたようだが、キョトンとしながら出て行ったロップモンと、大輔達を交互に見やった。

『話したいこと？』

『何？何かあった？』

どうしよう。3人は顔を見合わせる。

自分達が所謂「転生者」であることを、パタモン達に伝えるべきか、否か。

普通に考えるのなら、相手は自分の相棒で、分身で、もう1人の自分なのだから伝えた方がいいに決まっている。

「普通ならば」。

しかしそれには、大輔でさえ躊躇する理由があった。

ちらり、大輔とヒカリはさりげなく賢を、賢は大輔とヒカリを見やる。

「……ちよつとだけ、待っててくれないかな」

そう切り出したのは賢だった。

え、と大輔とヒカリは賢を見やる。

賢は敢えてそれを無視した。

「せっかくパタモン達は、パタモン達のことを教えてくれたのに、ごめんね。でもちよつとだけ、もうちよつとだけ、待ってて。そしたら、ちゃんと話すから」

『……………』

「ごめん、ごめんね、パタモン」

そう言つて賢はぎこちなくパタモンの頭を撫でる。

——パタモンを抱きしめることは、できなかつた。

白い雲に覆われた世界は、全てが白で統一されている。

陶器のようにつるりとした手触りの石はつなぎ目が何処にもなく円に形作られており、エンジェモンなどの天使型デジモンによく似た彫像が立てられた噴水からは、さらさらと白く輝く水が流れていた。

その噴水を取り囲むように、白や白に近いピンクの花が植えられて

おり、時折吹く風で気持ちよく揺れている。

『オファニモン！』

美しいレリーフが彫られた神殿は、オファニモンが統括しており、女性型の天使デジモンが主にオファニモンの仕事の補佐をしたり世話をしたりしていた。

その神殿に、オファニモンの親友であり同僚でもあるセラファイモンとケルビモンがほぼ乗り込むような形でやってきた。

仕事の途中だったオファニモンは、キョトンとしながら乗り込んできたセラファイモンとケルビモンを見やる。

『セラファイモン、ケルビモン。ご機嫌よう。何かあった？』

『何かあった、じゃないだろう！』

『“神様”から聞いたよ!? オファニモン、自分の力を全部“神様”に返して、下界に行くって！』

『ああ、そのこと? ええ、そうよ』

セラファイモンとケルビモンが問い詰めると、オファニモンはあっさりと白状した。

あまりにもあっさりとしていたので、セラファイモン達は一瞬拍子抜けするが、すぐに我に返って再度詰め寄る。

『一体何故……いや、理由は何となく思い浮かぶが、それにしたってどうしてそんなことを……!』

『そうだよ……ここまで来るのに、僕達すっごい苦労したじゃない! それなのにそんなあっさり……!』

『説得しにきたのなら、お生憎様ね。もう決めたことよ。時間もないし、今引き継ぎで忙しいの』

『オファニモン様、お呼びでしようか』

ぎゃいぎゃいと騒ぐ親友達を尻目に、オファニモンは仕事や作業を続けている。

そこに、別の女性型の天使デジモンが現れた。

金色に靡く長い髪と、目元を覆った鉄のマスク、4対の白い翼と天女の羽衣のようなピンク色の長い布を両腕に巻いていた。

『ちようどいいところよ。もうワタシの話は聞いていますね?』

『はい。ゲンナイという名の者と共に下界に行くと……あの、オファニモン様、本当に行かれるのですか……?』

『オファニモン様、考え直してはくれませんか?』

『オファニモン様がいなくなったら、我々はどうしたらよいのですか?』

女性型の天使デジモンがおずおずと言った様子で尋ねると、オファニモンの手伝いをしていた成熟期の天使デジモン達も次々と縋るように尋ねてくる。

彼女らも、オファニモンが突然下界に行くと言い出したことに納得していなかったようだ。

当たり前だろう、これまで何百年とオファニモンに仕えていて、彼女の美しい心に心酔しきっていたのに、オファニモンはあっさりと自分の地位を捨てたのだから。

『そのために引き継ぎをしているのよ。エンジエウーモン』

纏わりついてくる天使デジモン達を振り払うなんて下品なことはず、抱き寄せて優しく宥めながらオファニモンは先ほどやってきた女性型の天使デジモン……エンジエウーモンに語り掛ける。

そして、驚愕のことを口にした。

『エンジエウーモン、次の“オファニモン”は貴女を指名します。セラファイモンとケルビモンと共に、“神様”を支えて、立派にお勤めを果たしてくださいね』

『ええっ!!』

それには、呼び出されたエンジエウーモンだけでなくセラファイモンとケルビモンも驚いた。

『ちよ、ちよつとオファニモン!』

『ワタシの傍で補佐をしていましたし、ワタシが今までやっていた仕事の流れは分かっていますね』

『そ、それは分かりますが……』

『それなら大丈夫ね。明日から本格的な引き継ぎをしますので、今日はまだもう下がりにさい』

『は、はあ……』

『オフアニモン！』

困惑しているセラファイモンとケルビモンをよそに、オフアニモンはにこやかに話を進めていく。

呼び出されたエンジェウーモンも、突然の辞令に狼狽しているようで、頭に沢山の疑問符を浮かべながら部屋から出て行った。

オフアニモンの身の回りの世話をしている他の天使デジモン達も動揺して、ひそひそと話し合っている。

『さあさあ、皆さん。ワタシが下界に行くまで時間もありませんよ。やらなければならぬことはまだあるのですから、手を止めないで』

『……オフアニモン』

パンパン、と手を叩きながら止まってしまっている天使デジモン達に声をかけるオフアニモンに、これはもう説得するだけ無駄だと悟ったセラファイモンとケルビモンは、彼女の邪魔にならないようにそつと出て行った。

『……………』

『……オフアニモン、出て行っちゃうんだね』

三大天使であり、神を支える特別なデジモンだけが歩くことを許される、*“神の花園”*と呼ばれる庭園がある。

セラファイモンとケルビモンは、その庭園を歩いていた。

時間があえばオフアニモンと3人で、その庭園でいつまでもお喋りをしたり、お茶会を開いていた。

もうすぐ、それも出来なくなる。

ケルビモンはお茶会のためのテーブルとイスを見た。

在りし日の自分達の幻影が、楽しくお喋りをしている。

『……オフアニモンが出て行くのが、悲しいわけではないんだ』

十字が刻まれたヘルメットで表情は見えないが、セラファイモンの声色からとても沈んでいることだけは分かった。

『いや、オフアニモンが出て行くのももちろん悲しいのだが……』

『うん……分かるよ、セラファイモン。そんな大事なことを、僕達に何も言わずに決めちゃったのが悲しいんでしょ？』

セラファイモンとケルビモンはオフアニモンの親友だ。

生まれてからずっと同じ時を過ごして、共に笑い合ったり悲しんだり、何をするにもいつも一緒だった。

日課だった、下界を覗き見ることだって。

それなのにオファニモンは、自分達に何も言わずに下界に行くことを決めてしまった。

セラファイモンとケルビモンは、それが悲しかったのだ。

何も言ってくれなかったことが、悲しかったのだ。

せめて下界に行くとは決めたことを、一言でも言ってくればまだ心の準備はできていただろうに。

今回のことだって、「神様」から聞いたのだ。

心底驚いたし、「神様」もてつきりセラファイモンとケルビモンは知っているものだと思っていたようで、びっくりしていた。

『……セラファイモン』

風が吹く。力を入れていないセラファイモンの羽が、その風で僅かに揺れていた。

昔は羨ましいと思っていたその羽。

三大天使の中で自分だけが獣の姿をしていたから、それが悲しくてこっそり泣いていたこともあった。

でも親友の2体はそんなケルビモンのことなどお見通しで、こっそり泣いていたのにも真っ先に気づいて、寄り添ってくれていた。

例え獣の姿だって、ケルビモンは自分達の大切な友達だと、いつもそう言ってくれた。

だから、決めた。

『分かっているよ、ケルビモン』

胸に灯った決意を口にしようとしたが、セラファイモンは首を横に振ってケルビモンの言葉を遮った。

セラファイモンの言う通り、セラファイモンには分かっているのだ、ケルビモンが言わんとしていることが。

ケルビモンは笑った。

『流石、僕の友達だね』

『伊達に何百年の付き合いじゃないさ』

『そうと決まったら、早速“神様”に言いに行かなきゃね!』

『オフアニモンのように、引き継ぎもしなければな。幸い私の部下にも1人、見込みのある奴がいるが……お前は大丈夫なのか?』

『大丈夫、大丈夫。何とかする』

『……頼むから“神”の苦労を増やすようなことはするなよ?』

『だーいじょうぶだって!……多分』

『何か不穏な言葉が聞こえたぞ? 本当に大丈夫なんだろうな?……おい、返事ぐらいしろ、待て!』

昔々あるところに、3人の天使様がおりました。

3人は、いつも一緒でした。

嬉しいことも悲しいことも、いつも3人で分け合っていました。

セラファイモンとケルビモンは決意する。

嬉しいことも悲しいことも、3体でいつも分け合っていたのだ。

オフアニモンが下界に行くというのなら、当然自分達だって行かなければ。

“神様”を支える存在としてこれまで生きてきたと言うのに、一気に3体も抜けてしまえば天界中が大騒ぎになるだろう。

部下達もきつと必死になって引き留めに来るだろうけれど、そんなの知ったことか。

ケルビモンは鼻歌を歌いながら、この後の騒動を想像してくふくふと笑っている。

セラファイモンは、そんなケルビモンに呆れながらも強く咎めることはしなかった。

光を失った紅い珠は、人知れず目を覚ます。

美しくも儂い一筋の雫を流しながら。

置いていく気持ち

外から絶えず聞こえてくる打撃音、爆音、衝突音。

暗闇の向こう、粗末な岩の蓋で閉ざされただけの隔たりの向こうで、自分の命を狙っていた者が派手な戦闘を繰り広げている。

ブイモンは必死に目と耳を塞いで、時が早く過ぎるのを待った。

ボロボロと涙を零して、心が壊れそうになるのを必死で耐える。

しかしそれも時間の問題だ。

助けてくれたデジモンが負けてしまったら、次は間違いなく自分達の番である。

どうして、どうして、どうして。

そればかりが頭の中を駆け巡って、その度に粉々に砕けかけて、それでも必死で保とうとしている心が悲鳴を上げている。

耳を塞いでいるせいで使えない両手の代わりに、身体を小さく丸めてしゃくりあげる声を膝で押さえつけるように、飲み込んだ。

どうして、どうして、どうして。

外から音が叩きつけてくるたびに、ブイモンの脳裏には目の前であつさりと死んでしまった仲間の姿が浮かび上がってくる。

「見つかったら、殺される」

助けてくれたデジモンの言葉通り、見つかったら仲間達みたいいきつと潰されてしまうんだ。

成す術も抵抗すら許されずに、惨めに死んでいくんだ。

だからブイモンは祈る。

死にたくない、見つかりませんように。

助けてくれたデジモンが、勝てますように。

そしたらきつと助けてくれたデジモンは、いつ見つかるか分からない脆弱な岩の蓋を開けて、自分達をもつと安全なところまで連れて行ってくれる。

そこにはきつと、助けてくれたデジモンが助けた、他の仲間もいる。怖かったねって、助かってよかったねってみんなで無事を確認し合って、それで思いつきり泣くことが出来る。

だから今は耐えよう、仲間達と再会する時まで、そこら辺に転がっている石ころみたいに。

それだけがブイモンの希望だった。

でもその希望は、あっさりと崩される。

《死ねえっ!!》

しっかりと閉じていたはずの目はいつの間にか開かれており、自分を覆い隠していたはずの岩の盾は何処にもなかった。

白く光る背景と、黒い陰。

引き裂かれた黄金色。

足元がガラガラと崩れ落ちていく錯覚の中、黒い陰はゆつくりとこちらを振り向く。

——…ミ ツ ケ タ

何処かで闇が嗤った気がした。

海の底の貝のように閉じていたブイモンは、深淵の空虚から引き上げられる。

高い天井は自然物ではなく、誰かの手が加えられた美しい長方形が並んでいた。

震える四肢に何とか力を入れて、ゆつくりと起き上がる。

全身が怠さを訴えていて、座っているのも億劫だった。

——ここ、どこ？

頭の中がぐちゃぐちゃになっており、自分が何処にいるのかも分からない。

目の前で大きな四角が発光しているが、ブイモンは気にも留めずに寝かされていた台を降りた。

脚に上手く力が入らず、降りた際にガクンと膝から崩れ落ち、受け身も取れずに倒れ込んだ。

『……………』

全身に走った痛みにも、呻き声すら出てこない。

ぼろ、枯れたはずの涙が一筋零れる。

発光している四角のお陰で、闇の中でも辛うじて何が何処にあるのかが判別できた。

目の前の少し離れたところに、上に続く階段が見える。

ブイモンは震える手足を何とか動かし、時間をかけて階段まで這っていった。

その度に目尻に溜まった涙が零れた。

次第にしゃくりあげられていく吐息を、唇を噛みしめて押さえながら、何とか階段に辿り着いたブイモンは、更に両手を使って這って上がる。

かなりの時間をかけて踊り場まで登ったが、体力も気力もかなり消費したことで肩を上下させるほど息を切らしていた。

それでも、ブイモンは震えて力の入らない足に何とか力を入れて、壁に身体を預けるようにもたれかかり、壁伝いで歩き出す。

煉瓦が積み上げられた薄暗い廊下に、ブイモンのしゃくりあげる声だけが響き渡っていた。

ボロボロ零れてくる涙は、何度拭っても次から次へと頬を伝う。

だっと思いついてしまったのだ。

心の奥底、小さな箱の中に押しやってきつく蓋を閉じてしまっていたはずなのに、それが突然内側から弾けるようにぶわーっと溢れ出てきたのである。

助けてくれた黄金色も、あの日一緒にいた仲間も、みんな死んじやった。

仲間が踏み躪られたあの瞬間も、助けてくれた黄金色が無残にも引き裂かれたあの時も、全てを思い出してしまった今、鮮明に再生される。

喉の奥から空気の泡が沸き上がってきて、吐き気と共に吐き出された。

口元を手で覆いながらその吐き気を何とか抑えようとして、更にしゃくりあげる声が大きくなる。

ずっとずっと、箱の中にしまつて目を背けていたものが、目の前にばらまかれたのだ。

心を粉々に砕かれたことすら忘れており、今の心は表面だけが磨かれて綺麗になつていただけだった。

忘れたいと願つたから。

助けてくれた黄金色も、あの日一緒にいた仲間達も、目の前で理不尽に蹂躪され、その命を散らせた。

今だって気を抜いたらその時の情景がありありと脳内に再生されそうになる。

その度に表面だけが磨かれたボロボロの心に、ぴし、ぴし、ぴし、という音を立てて罅が入って、欠けていく。

何処も怪我をしていないのに、鈍い痛みが胸の奥に走る。

ぼた、ぼた、と大粒の真珠みたいな涙が、煉瓦が敷き詰められた廊下に零れる音が、やけに響いた。

しゃくりあげながら、零れる涙をぬぐい、長い長い廊下を歩く。

右へ、左へ、自分が今何処にいるのかも分からないまま、ブイモンは歩く。

過去の悍ましい記憶を思い出したブイモンは、代わりに自分が今何処にいるのも忘れてしまつていた。

選ばれし子ども達がいるのは、ナノモンが守護しているピラミッドで、大輔とヒカリと賢の紋章を保護していた場所なのだ。

ナノモンがこの場所に来る以前から存在しており、その頃から既に様々なトラップが仕掛けられており、後にこのピラミッドの守護を任された時に更に改良が加えられた。

このピラミッドに招待された時も、ロップモンという案内デジモンがいなければ無事にピラミッド内部を通過することはできなかった。

しかしそんなトラップだらけのはずのピラミッド内部で、ブイモン

たった1体、無防備に歩き回っているはずなのに、そのトラップが発動する様子は全く見受けられなかった。

というのも、マシーン型のナノモンとピラミッドのシステムは同期しており、エテモンによってスクラップ直前まで壊されてしまったナノモンの負担にならないように、今はピラミッドの全てのシステムを切っている状態なのだ。

しかしそんなこと知る由もないブイモンは、ただ今自分がいる場所から逃げたくてただ道なりに歩いている。

全てを思い出したブイモンは、代わりに自分の役割を忘れてしまっていた。

何故助けてくれた黄金色が隠してくれた洞窟じゃなくてここにいるのか、分からない。

ホークモンは何処にいるんだろう。アルマジモンは？

一緒に助けられたあの2体は、種族の域を超えて仲の良かったあの2体は、何処にいるんだろう。

『……っ、っ……』

喉の奥に音が張り付いて、しゃくりあげる声すら出てこない。

両手で零れる涙をぬぐいながら、ブイモンは暗く長い廊下を1人ぼつちでとぼとぼと歩いた。

「っー」

言い知れぬ不安に駆られて、大輔は飛び起きた。

ナノモンが用意してくれた寝室は地下にあるせいで、外の様子を伺う窓はなく、今がどの時間帯なのか、明るいのか暗いのかも分からなかったが、そんなことを気にしている場合ではなかった。

ばく、ばく、ばく、と心臓が激しく鼓動して、今にも口から飛び出してきそうだった。

胸のあたりのパジャマをきつく握りしめる。

は、は、と何度も短く息を吐いた。

まるで学校のグラウンドを全力疾走したみたいな疲労感を覚えて、

大輔は深呼吸をして息を整えようとした。

しかし心臓は静まることなく、それどころか更に激しさを増した気がした。

何故だろう、すごく嫌な予感がする。

そう思った途端に、脳裏に浮かんだのは相棒の後ろ姿。

いても立ってもいられなくなった大輔は、弾かれるようにベッドから飛び降りて、寝室を飛び出した。

バン、とみんなが眠っているのも構わず思いっきり寝室の扉を開けたから、子ども達は何事だと飛び起きたが知ったことではなかった。

ペタペタペタ、とカーペットも敷かれていない冷たい煉瓦の廊下に、大輔の小さな足が踏みしめる音がする。

すぐ傍のメインコンピュータールームは、ゲンナイがナノモンの代わりに動かしていたので、電源がつきっぱなしだった。

青白い光が、電気が消されて真っ暗になっている部屋を照らしている。

その部屋に、元は太一の頭の怪我を完治させるために運ばれた、今はブイモンが寝かされている診察台があった。

寝る前と、何も変わっていないはずだ。

それなのにこの言い知れぬ不安は何なのだろう。

心臓がバクバクと、大輔を責めるように波打っている。

「大輔くん、どうしたの……?」

「ブイモン……!」

「大輔……?」

大輔によつて強制的に叩き起こされた子ども達も、少し遅れてやってきた。

ヒカリと賢が声をかけたが、大輔の耳にはまるで届いていないようで、ブイモンの名前を呟きながら走り出す。

反射的にヒカリと賢も大輔の後を追う。

そして、

「お兄ちゃん！ブイモンがいない！」

「何っ!?!」

賢の一言により、子ども達は賢のデジたま以来のパニックに陥る。眠気も吹っ飛んでしまった子ども達とデジモン達は、総出でブイモンを探しに行く。

ナノモンの代わりに作業をして、今は休憩に入っていたゲンナイとなつちちゃんも騒ぎに気づいて部屋から出てきた。

治から事情を聴き、2人とも顔を真っ青にして一緒に捜索に加わってくれた。

過去にあった出来事を思い出してしまったブイモンは、ゲンナイの見立てでも当分は目を覚まさないはずだった。

子ども達ですらショックを受けたあの悍ましい記憶を、そのまま体験したブイモンの心の傷は計り知れない。

その心の負荷を考えると、少なくともあと数日は目を覚まさないだろうと言われていた。

それなのに、ブイモンはいない。

大輔はあの時の賢のように半狂乱に陥り、ブイモンの名を何度も呼びながらブイモンを探す。

今はナノモンが治療中であるために、セキュリティシステムも全てダウンしているので、トラップが作動することもない。

だから子ども達はピラミッド中を彼方此方探し回った。

でもブイモンはいない。

「……まさか!」

ゲンナイはそう呟くと、急いでメインコンピュータールームに戻って行く。

一緒に探していたなつちちゃんは、突然走り出したゲンナイに驚いて、反射的に追いかけた。

途中で何人かの子ども達とすれ違い、何事かとゲンナイを追いかけてきたがゲンナイは構うことはなかった。

電源がつきっぱなしになっているモニターの前に立つと、パネル型のキーボードを急いで操作する。

「ゲンナイさん」

『どうかしはったんですか?』

「ピラミッドのシステムとナノモンは同期しているから、今は殆どのシステムが休止している状態だが、監視カメラだけは動かしているんだ。だから……」

ポン、と不思議な電子音を立ててエンターキーを押すと、監視カメラの画像が巻き戻しされた。

しばらくすると、誰もいなくなったメインコンピュータールームの端っこに何か映った。

ブイモンだ。

巻き戻っているから、後ずさりしているように見える。

もう少し巻き戻すと、ベッドで眠っているブイモンが映し出されたので、ゲンナイはそこで巻き戻すのを止めた。

動画が再生される横になつていたブイモンがむっくりと起き上がって、しばらくぼんやりとしていたが、やがて診察台から落ちるように降りると、床を這いずりながら移動していった。

時間をかけて移動し、やがて監視カメラの画像から消える。

ピラミッドの内部を探し回っていた子ども達が、何処を探してもブイモンが見つからなかったので、一旦メインコンピュータールームに戻ってきたのはその時だった。

ゲンナイは監視カメラの画像を切り替える。

階段が映り、ブイモンがそこでも時間をかけて這って上がっていくのが映る。

大輔の顔色は真つ青から真紫、そして真つ白に変わっていった。

今にも倒れそうならい足元がフラフラしており、ヒカリと賢となつちやんが気づかわしげに大輔に寄り添う。

階段の踊り場に何とか辿り着いたブイモンは、暫く壁にもたれかかった後、何とか壁を伝って立ち上がり、目元に両手を当てながら長い廊下を歩きだした。

何度も監視カメラを切り替えながら、廊下を歩くブイモンを追っていく。

何処に向かっているのか、目指している場所があるわけでもないのか、突き当たりに着く度に迷うことなく左右どちらかの道を進んでい

く。

そしてブイモンを追っていくうちに……監視カメラの端に仄かな明かりが映った。

ゲンナイの顔色がさっと変わる。

ブイモンが向かった先は、

「まずい、どうやらブイモンは外に出たようだ……!」

「っ!!」

「あ、大輔くん!!」

「ま、待って!」

ゲンナイの言葉を聞いた大輔は我に返り、上級生達を押しつけて走って部屋を出て行った。

丈とミミが慌てて呼び止めるが、大輔は聞いていない。

走って部屋を出て行った大輔の後を追って、ヒカリとテイルモン、賢とパタモン、少し遅れてなっちゃんとロップモンが走る。

上級生達は一瞬どうしようという表情を浮かべて互いの顔を見合わせるが、最初に治とガブモンが動いたことで、他の子ども達も我に返ることが出来た。

ゲンナイは一瞬迷ったが、エテモンが倒された後の展開を思い出して、暫くは大丈夫だろうと判断し、子ども達の後を追うことにした。

どのぐらい歩いたか分からないぐらい、ブイモンは歩いている。くすくすくすんとしゃくりあげながら、次々と溢れてくる涙を拭い、時々柔らかい砂の地面に足を取られながら広大な砂漠を彷徨っていた。

砂漠には危険なデジモンが住みついているはずなのだが、昨日の戦鬨の余波が残っているのだろうか、1体でとぼとぼ歩いているブイモンに襲い掛かってくる気配が全くない。

地平線の向こうから白い太陽が少しずつ顔を覗かせている。

ずる、

『っ！』

べしや、とブイモンは思いつきり砂に顔を打ち付けながら前にめりに転んだ。

足元をふらつかせていたから、当然だろう。

しかしブイモンはそのまま倒れ伏せ、起き上がろうとしない。

握りしめた拳に、震えるほど力を込めた。

『ひっ……う……』

ゆつくりと仰け反るように顔を上げる。

砂が張り付いて涙と混ざって顔はぐちゃぐちゃになっており、涙の水分を吸った地面も色が変わっていた。

震える両手を何とか地面につけて起き上がった。

ひつく、ひつく、というしゃくりあげる声だけが聞こえてくる。

『……みんな』

何で、どうして。

そんな思いだけが込み上げてくる。

『何処お……』

涙が更に溢れてきた。

しゃくりあげる声も大きくなっていく。

『みんなあ……！』

広大な砂漠に、たった1体。

知らない世界に放り出され、見捨てられた可哀そうな独りぼっちな小さな青い龍の子ども。

——もう何処にも仲間はいない。

『置いてか、ないでえ……！』

今なら分かる。自分達がいた時と、今では環境が全く違うのだ。

もしもあの時、自分のように辛うじて助かった仲間がいたとしても……生き残っている保証などない。

世界の何処を探しても、きっと自分の仲間は何処にもいない。

『置いて、行かないでえ……！』

魂の叫び。心の悲鳴。
聞いてくれる者は、もう何処にもいない。

パジャマ姿であることも忘れて、大輔はピラミッドを飛び出ししていく。

外に出るまでの道が分からなくて、最初の丁字路でどちらに行けばいいのか分からず迷っていたら、途中で追いついたロップモンが出口までの近道を案内してくれた。

一緒に追いついたヒカリとテイルモン、賢とパタモン、それからなっちゃんも一緒に、ピラミッドを出て行けば、そのまま真っ直ぐ、登り始めた太陽に向かって等間隔に並んだ点が続いている。

ブイモンの足跡だとすぐに気づいて、大輔はまた走り出した。

ヒカリ達も後を追う。

遅れてきた上級生と、ゲンナイも。

体力も精神力も気力も、全てが限界を迎えているブイモンではそう遠くへは行けない。

案の定、ピラミッドから500メートルも離れていないところに、ブイモンはいた。

どうして、とか、何で、とかそんな疑問よりも、見つかってよかったという安堵が子ども達に広がる。

しかし、それは間違いだった。

『置いて、行かないでえ……!』

魂の叫びが、心の悲鳴が、背を向けているブイモンから聞こえてきた。

子ども達は、ヒカリとテイルモンは、賢とパタモンは、ロップモンとなっちゃんは、そして大輔はそれを聞いて硬直した。

子ども達だけじゃない。

“今”を生きている子ども達のパートナーデジモン達も、びくりと肩を震わせる。

古代デジタルワールドという、気が遠くなるぐらい大昔に生きてい

たデジモン、それがブイモンだ。

でもブイモンの種族は、あの映像に映っていたもう2体のデジモンの種族は、踏み躪られるようにみんな死んでしまった。

ゲンナイが知る本来の歴史とは違う、時代の波に抗えず、ついて行けず、緩やかにその姿を消したのではない。

謎のデジモンが過去へ飛んだ影響で因果律が歪められ、正史とは外れた新たな歴史として書き記されて。

この世界はゲンナイが、そして大輔達を知る世界ではない。

新しい歴史を歩んでいる、新しい世界なのだ。

だから今の、目の前にいるブイモンはブイモンであって「ブイモン」ではない。

大輔が知っている、「大輔」のパートナーだった「ブイモン」じゃない。

「大輔」が置いて行ってしまった「ブイモン」じゃない。

「……………っ!!」

孤独に震えている小さな青い龍の子どもの背中を見た大輔は、衝動に駆られて走り出した。

「ブイモン！」

砂に足を取られ、纏れさせながらブイモンの横にスライディングしながら膝をついた。

いつもサッカー部で、硬いグラウンドですっ転んだりスライディングをして膝を擦りむいているから、柔らかい砂の上でスライディングなんて全然怖くない。

今大輔が怖いのは……………今にも死にそうなくらい心が堕ちているブイモンのことだ。

「ブイモン、俺が、俺がいるよ！絶対お前のこと、置いて行ったりしない！独りぼつちにしない！ずっと、ずっと一緒だよ！ずっとそばにいるから！俺が……………護るから!!」

そんなブイモンの心を「こちら側」に何とか引き留めようと、大輔は必死になって叫ぶ。

感極まってブイモンと同じようにボロボロと涙を零し、拭うことを

忘れて、独りぼつちが悲しくて泣いている可哀想な龍の子どもをぎゅうぎゅう抱きしめる。

しかし心が壊れかけてしまっているブイモンは、大好きな大輔が抱きしめてくれていることにも気づいていない。

壊れたガラス玉のように曇ってしまつた紅い目は、何も映し出していなかった。

それでも大輔はブイモンを抱きしめるその腕を緩めない。

「……………」

『……………』

そんな大輔を見たテイルモンとヒカリも、フラフラとした足取りでブイモンと大輔に向かって行く。

「大輔くん、私も……ブイモンの傍にいてもいい……？」

「……ヒカリ、ちゃん」

『ワタシも……傍に、いるって、約束、したの……！ワタシも、ずっと……………！』

賢とパタモンも。

「……仲間がみんないなくなつちやつた苦しみも、悲しみも……僕達には分かんない。でも……」

『うん、そうだね、ケン。ボク達は何があつても傍にいるよ』

そして、なつちゃんとロップモンも。

「……私も……私も、一緒にいる」

『僕達はそのためにここにいるんだもん。当然だよ』

最年少の3人と天使だつた3体、それから大輔に逢うために生まれ変わった女の子は、その目に涙を滲ませながらブイモンを囲むように座り込み、その心を包むように抱きしめてやる。

それでも、ブイモンは気づかない。

「……………」

『……オサム？どうしたの？』

太陽が地平線から飛び立っていく。

白んでいた空は徐々に水色へと彩られ、陽の光が砂漠に佇む暗い霧囲気を纏つた子ども達を場違いなほどに照らしていた。

最年少達の啾り泣く姿を見ていた治は、やがて決心したような表情を浮かべた。

それに気づいたガブモンが声をかけると、治は目を閉じる。

「……決めたよ、ガブモン」

『何を？』

治は、ガブモンに耳打ちをする。

告げられた言葉に、驚きのあまり目を見開いて治を見つめた。

優しく微笑む治に、治の決意の強さを見たガブモンも、決心する。

「みんな、聞いてくれ」

心痛む光景を呆然と見ていることしか出来ない上級生達は、治の声を聞いて振り返る。

「僕とガブモンは、今日ここを離れる」

「……………え？」

「お、治、君、何を言って……………」

「みんな、太一がいなくなる前に言っていたことを、覚えてるかい？」

動揺する子ども達を尻目に、治は話を続ける。

「太一がいなくなる前……………？エテモンと、戦っていた時のこと？」

「正確にはエテモンと戦う前だね……………。あいつ、こう言っていたよね。

“このままエテモンと戦わずに、次の進化もできずに負けてしまったら、ブイモンみたいな犠牲者が出るんだろう？”って」

は、と子ども達は息を飲んだ。

忘れるはずがない、たった1日前、昨日の出来事だ。

確かに、太一はそう言っていた。

暗黒の力に飲まれ、凶悪化してしまったエテモンに怖気づいてしまった子ども達に、太一はそう言い放ってアグモンと一緒にエテモンの下へ行った。

「きつと、太一は気づいたんだ。 “順番が逆だった” って」

「……………順番？」

『逆って、どういうこと？』

「僕達の目的は飽くまでも、 “元の世界に帰ること” だった。自分達の世界に帰るために、この世界の平和を取り戻す。この世界を支配し

ようと企んでいる悪いデジモンから、この世界を救う。でも違うんだ。逆だったんだよ。『この世界を救って、元の世界に帰る』んだ」

「……何が違うの?」

「全然違うよ。元の世界に帰るために世界を救うのと、世界を救って元の世界に帰るんじゃないや、目指すものが違ってくる。前者だと仕方なく戦ってる風に思わないか?」

「……言われてみれば、そうかもしれないが」

『うーん、何や訳分からんくなってきた……』

「……それで、治くんとガブモンがここを離れるのと、何の関係があるの?」

「あるさ。言ったら、太一は僕達の目的の順序が逆だと気づいた。『だから進化できた』んだ」

「え!」

治は言う。自分達の世界に帰るために世界を救うのと、世界を救って自分達の家に戻るのでは、心の持ちようがまた違ってくる。

太一はそのことに気づけたから、アグモンを次に段階に進化させることが出来たのだ。

自分の世界に帰りたいという気持ちよりも、この世界を救いたいという気持ちの方が強くなったから。

「きつとブイモンのあの記憶を見たからこそ、太一も決心したんだろうね。だから僕も決めたよ。僕もあんな……ブイモンみたいなデジモンを、これ以上増やしたくない」

「……………」

「だからガブモンと武者修行の旅にでも出ようと思ってね」

「武者修行の旅?」

「ああ。強くなるために、この世界を救うために。それに……」

一旦言葉を切った治はいたずらっ子のような笑みを浮かべた。

「それに、何?」

「太一が帰ってきた時に、驚かせてやりたいからな。置いてけばりになんてさせないぞって」

子ども達は目をぱちくりさせて治を見やった。

その言葉にも表情にも、迷いとか戸惑いのようなものは一切見られない。

ただ真っ直ぐ前を見つめているその目に宿っているのは、自信だった。

信じているのだ、ちゃんと太一がここに戻ってくるって。

幼馴染の空でさえ、太一がいない今とても不安で揺らいでいるのに。

「っ、だ、だったら、僕達も……！」

「……丈先輩、今のご自分の顔、鏡で見た方がいいです……酷い顔だ」

「……」

最年長として、治とガブモンだけで行動するのはどうかと丈は同行を申し出たが、治にはお見通しだった。

今だブイモンの記憶の映像からショックが抜け切れていない他の子ども達の表情は、とても晴れやかとは言い難い。

そんな状態で武者修行の旅に出たとして、果たして何人の子ども達がデジモンを次の段階に進化させることが出来るだろうか。

それに、と治は再度最年少達の方に目を向ける。

上級生達も、つられてそちらに目を向けた。

最年少達は、まだブイモンを抱きしめてその場に座り込んでいた。

「……ブイモンがああ状態じゃあ、旅は続けられないと思う。あれじゃあ進化するどころじゃない。大輔を護れない」

「……………」

「テイルモンとパタモンがいるけれど……やっぱりあの2体が最優先すべきはヒカリちゃんや賢だろうし、だったらここでじつとしていた方が安全だろう？」

「……そう、ね」

そこまで理路整然と言われてしまうと、反論することすら憚られた。

だがそれでも1人で行くのは……と子ども達が難色を示していたら、思わぬ助っ人が割り込んできた。

「2カ月」

「えっ？」

「期限を設けてみたらどうだい？今から2カ月だけ、武者修行の旅に出るんだ。結果が出て出なくても、2カ月後には必ず戻ってくる。どうかな？」

そう提案したのは、ゲンナイだった。

予め期限を設けておくことで、治とガブモンは強くなるために集中できるし、子ども達もちゃんと帰ってくるかと分かっていたら安心できるだろう。

そう言つてやれば、子ども達は顔を見合わせ、そういうことならと納得してくれた。

ちなみにこの2カ月という期間は、太一が現実世界からデジタルワールドに帰ってくるまでの月日である。

「その間に君達の心の整理もついているだろう。どうだい、治？他のみんなは私の提案に乗ってくれたが……」

「構いませんよ。がむしやらに修行するよりも、期限付きの方が集中できそうですし」

「よし、決まりだ。1人旅に必要なものを揃えてあげるから、少し待つてくれるかい？」

ありがとうございます、と頭を下げる治に、ゲンナイはこっそりと息を吐いた。

自分が知っている正史の流れとはだいぶ違うが、それでも子ども達が仲違いをしてバラバラになってしまうという最悪のシナリオは避けられたようだ。

あれはあれで正史の流れとして組まれている出来事ではあるが、この世界”を救うためには少しでも障害は取り除いておきたいものだ。

……やはりイレギュラーがいると、こうも違ってくるのかともこっそり思う。

「まずはピラミッドに戻ろうか」

疲れている子ども達にそう促してやると、子ども達は小さく頷いて元来た道へ戻る。

丈と空が、まだブイモンを抱きしめて啜り泣いている最年少達の下へ歩み寄り、声をかけてやった。

4人と2体の目は涙で張れており、ロツプモンがそれを見て苦笑している。

——4人の心が揺れた気がした。

そして数時間後、必要なものを全て用意してもらった治はガブモンを伴い、ピラミッドから旅立っていった。

その頃にはナノモンの修理も済んでおり、子ども達と一緒に治を見送ってくれた。

『無茶はするなよ』

「太一じゃないから、大丈夫ですよ」

『オサムのこと俺がすっかり見てるから、安心して！』

「ええ、ガブモン、お願いね……治くん」

「空、後は頼んだよ。じゃあ、行こうかガブモン」

『うん！』

「……お兄ちゃん」

仲間達に背中を向けようとしたら、か細い声で呼び止められた。

自分をそう形容するのは、ここではたった1人しかいない。

治は今にも泣きそうになっている弟の下に歩み寄って、目線を合わせるように膝をついた。

「ごめんな、賢。勝手に決めちゃって。でも分かってほしい。決して賢のことがどうでもよくなつたから置いていくんじゃないって」

「……大丈夫、分かってるよ。お兄ちゃんはそんな人じゃないもん。ブイモンを放っておけなかつたんでしよう？」

「そっか、ならいいんだ。……なあ、賢。お兄ちゃんと約束してほしいことがあるんだ」

「……約束？」

「うん」

治は賢の両肩に手を添えると、そつと額同士をくつつけた。

「お兄ちゃんがない間は、空達がお前達を護ってくれる……でも、もし空達に何かあったり、空達も僕のように修行の旅に出ることになったら、お前が大輔とブイモンを護るんだ」

「……………」

「今ブイモンは深い悲しみに沈んでしまっているね。だから大輔を護るために戦うことが出来ない。パタモンと、ヒカリちゃんとテイルモンと一緒に、大輔とブイモンを護ってやってほしい」

「……うん。約束する。僕とパタモンと、ヒカリちゃん達で絶対に大輔くとブイモンを護るって」

「それでこそ、僕の弟だ」

賢の額から離れ、治は優しく微笑んだ。

賢は、泣きたいのをぐっと堪えて自分の両肩に添えられている兄の手を取る。

隣にいたパタモンも、自身の小さい手を治の手に重ねた。

『任せて、オサム。ケンもダイスケもブイモンも、ボクが必ず護るよ』

『アンタだけにいいカッコさせないわよ』

「治さん、私も約束します」

2人の会話を聞いていたヒカリとテイルモンも割って入り、治の手に自分達の手を重ねた。

ブイモンは今、子ども達の寝室で眠っており、大輔はその付き添いでここにはいない。

見送りをしようとは思っていたが、治がブイモンの傍にいてあげてと言って見送りを断ったのだ。

ほっとしたような表情を浮かべていたから、やっぱりブイモンが心配なのだろう。

眠っていて意識のないブイモンにも一応別れの挨拶はしたが、返事があるはずもなく。

ただ眠りながらも両目から涙を流している姿はとても痛々しく、それを見て治はますます決心を強めたのだ。

「……それじゃ、今度こそ行ってきます、だ」

「うん。ガブモン、お兄ちゃんのことよろしくね」

『任せて！』

仲間達に別れを告げ、治はゲンナイからもらったリュックを背負い直し、地平線に向かって歩き出した。

その歩みに迷いなどなく、治の決心の強さが伺える。

遠ざかっていく副リーダーの背中を見て、子ども達は何を思うのか。

それはきつと子ども達にしか分からない。

それでも、

——きつと彼らなら、自分達力で乗り越えられる。

例え世界が違ってても、歴史が違ってても、彼らは自分が知っている救世主達と同じ性質を持っている。

人間達はそれを魂と呼んでいる。

あの世界の正史では、自分は敵の罠に嵌められたために子ども達にまともな支援が出来なかったが、それでも子ども達は自分達力で世界の平和を掴み取ってくれた。

だからこの世界でも、きつと大丈夫。

時間はかかってもいい。その間に世界を覆う闇の侵食が広がったとしても、子ども達自身が迷ったままでは闇を振り払うことはできないのだ。

自分達が何をすべきなのか、どうするべきなのか、治が言っていたことの意味が何なのか、じっくりと考えて自分達なりの答えを出してほしい。

そうすれば子ども達の想いは何倍もの力となって、デジモン達に勇気を与えてくれるだろうから。

むかしとみらい

「……何だ、これは」

ネットワークとは少し違う空間を漂いながら “この世界” にやってきたゲンナイの、最初の感想はそれであった。

ゲンナイと一緒に “この世界” にやってきたなっちゃんも、想像すらしていなかった光景に言葉を失っている。

2人の目の前に広がっている光景とは、彼方此方から黒煙が上がって、緑が生い茂っているはずの森の木々が無理やりねじ伏せられたように無残な状態で転がり、力なく伏せているデジモンの身体がデータの粒子となってその姿を消そうとしているものだったからだ。

どおん、という派手な爆音が遠くから聞こえてきて、硬直していたなっちゃんは悲鳴を上げてゲンナイにしがみつく。

ゲンナイはそんななっちゃんを宥めながら、持ってきていたタブレットを開いた。

これは光子郎と共同開発していた、彼らのいる現実世界よりも優れた機能や情報処理速度を誇る最新型のタブレットである。

本当は自前の物を持つてくる予定だったのだが、ここに来る直前に急いで完成させましたと言って光子郎から渡されたのである。

きっと役に立ちます、と子どものころから変わらない自信に満ちた眼差しで。

有難く頂戴したゲンナイは、早速光子郎がカスタマイズしてくれたタブレットを起動させ、ディスプレイをタップした。

大輔とヒカリと賢が謎のデジモンが起こした爆発によって死亡した件は、現実世界だけでなくデジタルワールドにも瞬く間に駆け巡った。

今はデジタルワールドを支配しようなんて、莫迦な考えを持った者は全くと言っていいほどいないために、歴代最強の選ばれし子どもが3人も亡くなったと聞いても、莫迦な行動を起こす者は現れなかったものの、デジタルワールドを守護している者達の間には動揺が走った。

ゲンナイはホメオスタシスの命を受け、急いで光子郎とコンタクトを取ったのだが、なかなか光子郎は出てくれず、やっと出てきてくれた時には、既に大輔達の葬儀を終えた後であった。

突然仲間が亡くなり、元・選ばれし子ども達もかなり動揺していたようで、ゲンナイが連絡してきたことに誰も気づかなかったのだと言う。

申し訳ありません、とディスプレイの向こうで、かなり憔悴しきつた表情で光子郎が頭を下げてきたので、ゲンナイはこちらこそと顔を硬くしながら言った。

「……まさかこんなことになるとは……こちらの不手際だよ。本当に申し訳ない……」

《いえ……誰も予想なんかしていなかったと思います。僕もそうでしたし……》

あの日、デジタルワールド側が観測した時空の歪みは、異常なデータ量を持った謎のデジモンが空間をぶち破ろうとした反応だった。

しかも、このデジタルワールドには存在していないかったデジモンで、光子郎がこの30年間こつこつと集めてきた、どのデジモンにも当てはまらなかったのである。

人間との共存を選び、ともに歩むことを決意したデジタルワールドは、この30年間で新種と呼ばれるデジモンが次々と現れたのだが、その度に光子郎やデジ研の研究員達が詳細なデータを調べて、新種のデジモンとしてデータベースに登録していた。

しかし今回現れたデジモンは、そのデータベースに乗っていないかった。

詳しく調べるためには、デジ研の施設に連れて行ってデータを抽出するしかないのだが、そのデジモンは光子郎達が駆けつける前に大爆

発を起こして空間を歪ませ、ぶち破られた穴を通って逃げてしまった。

その爆発に巻き込まれて、大輔達は亡くなってしまった。

正体不明のデジモンを調べられなかった悔しさも、倒せなかった怒りも、仲間を失った喪失感とは比べ物にならない。

元・子ども達は、今その喪失感に打ちのめされている。

「太一達は今どうしてる？」

《……皆さん、各々暫くは仕事を休むそうです……手が付けられないと……》

それはそうか、とゲンナイは聞いておきながら、無神経な発言だったことを反省した。

ゲンナイを始めとしたエージェントは、選ばれし子ども達をサポートしたり、ホメオスタシスの代わりに動くために人の姿をしているものの、人の心は持ち合わせていない。

デジモンのように感情で強くなる、という性質を持っていないからだ。

飽くまでもエージェントはホメオスタシスの手足であり、選ばれし子ども達のサポーターである。

感情よりも合理的に物事を進めなければならないのだ。

選んだ子どもが「使えない」と分かると、さつさと切り捨てて次の子どもを選ぶ。

そうやってこれまでデジタルワールドの危機を乗り越えてきた。

しかしそれが故に、人間から反感ももらっていた。

理性と感情を持ち合わせている人間が葛藤する場面でも、エージェント達は躊躇なく踏み込んでくるために、デジモンと人間以上に衝突したことが度々あった。

それでも、ゲンナイ自身はずっとそばで子ども達を見てきたから、他のエージェントと比べれば心は持ち合わせている方だ。

たまにエージェントとしての性質は垣間見えるものの、子ども達と深く関わっていくうちに、こういう言い回しをしてはいけない、こういう言い方をすると人間は怒る、ということを学習していき、次第に

感情にも似たものが芽生えていった。

時々言い方を間違えて太一やヤマトから怒られることもあったが、それでも他のエージェント達のような失敗は少なくなっていた。

他のエージェント達はデジタルワールドを見回るのに忙しく、人間との交流も少ないために合理主義な者は未だ多いのだ。

人間と関わることの多かったゲンナイがエージェントの代表を務めているために、必然的に人間との関わりも更に多くなっていく。

おまけに太一達がこの30年間で人間の心とは何ぞやということをお教えてくれたお陰で、他のエージェントと比べるとゲンナイは人間に関する知識や理解などがより深まっていったのだ。

人間は死んだらデジモンのように生まれ変わることは容易いことではない、というのも、太一達と関わったことで得た知識だ。

それまではただの情報に過ぎなかったが、知識として結び付けておけば、少なくとも人間を怒らせるような物言いはしなくて済む。

そうでなくとも、大輔とヒカリと賢の死はどうでもいいこととして簡単に処理が出来ない、否、簡単に処理をしたくない出来事だ。

これが「大切」という感情だと言うのなら……あまり知りたくなかったな、とゲンナイはこっそり自嘲した。

《光子郎、準備できたよ》

《ああ、丈さん。分かりました。……ゲンナイさん》

「ああ」

しんみりとした空気に酔いしれていたら、ディスプレイの向こうに映っていた扉から、丈が上半身だけ覗かせてきた。

丈の言葉に返事をする、光子郎はキーボードを操作させる。

ディスプレイが光り、ゲンナイの身体がディスプレイの向こうに吸い込まれていく。

光の中を通って行き、数秒もしないうちにゲンナイは現実世界に現れた。

こちらです、と光子郎は先ほど丈が顔を覗かせた扉を開けて、白い廊下を歩く。

ここは光子郎が所長をしているデジタル研究所、通称デジ研の所長

室、つまり光子郎の職場である。

世界各国のデジ研と情報交換をしたり、研究員達から送られてくる研究結果やデータを閲覧したり、デジタルワールド側の協力者から送られてくるデジタルワールドの状況を見たり、ゲンナイと通信したり、1日の大半をここで過ごしているらしい。

集中すると周りが見えなくなってしまふ光子郎は、寝食も忘れて仕事場に籠ってしまふから、どうにかしてほしいと研究員達に何度か泣きつかれたこともあった。

光子郎に案内された部屋には、見知った人間が既に何人が集まっていた。

先程光子郎を迎えに来た丈と、ヤマト、空、ミミ、それから伊織。パートナー達は留守番しているらしく、ここにはいない。

全部で12人いる先駆者たちのうち、半数しか来ていなかった。

……来ていない半数の内の更に半数は、既にこの世から去ってしまっているため、実質来ていないのは3人だ。

挨拶もそこそこに、ゲンナイは光子郎と共に部屋の中心に向かう。

この部屋は、集中すると寝食も忘れてしまふ光子郎のために用意された仮眠室だ。

その仮眠室のベッドに、1人の少年が座っていた。

病衣を着ているのは、まだ少年の体調が万全ではないために、いつでも休めるようにするためである。

この少年は、光子郎の息子、ではない。

光子郎の子どもは、今のところ娘1人だけで、今後子どもを作る予定は今のところなかった。

かと言って、丈の息子でも、ヤマトと空の息子でもない。

勿論、ミミの息子でも伊織の息子でもなかったし、ここに来ていない他のメンバーの子どもでもない。

なら彼は一体誰なのか？

「初めまして」

「ああ、うん。もう何度目の「初めまして」かなあ。まあ、いいや。初

めまして」

「その口ぶりだと、以前私と逢ったことがあるようだが、生憎と私は君と逢った覚えはないんだ。それとも私が老人の姿の時に逢っているのかな?」

「んー、そうとも言えるし、そうじゃないとも言える?」

「おい、ふざけてるのか?」

「ヤマト、落ち着いて」

曖昧に濁すような少年の言葉に、ヤマトが苛立たし気に語気を荒げると、空がそつと寄り添いながら宥める。

そんな2人を苦笑し、少年は右手をひらひらと振った。

「そういう訳じゃないよ。ただ何て説明すればいいのかわかって、思っただけさ。出だしを間違えちゃったら、俺の話も信じてくれないだろう?」

「それを判断するのは、君ではなく僕達ですよ。大丈夫です、嘘偽りなく事実のみを述べてくれれば、僕達は信じますから」

「あーうん、お前はそういう奴だよ、光子郎」

名乗ってもいないのに光子郎の名を言い当てた少年は、参ったなあと言いながら笑った。

「さて、これも何百回したか分かんないけど、〃君ら〃とは初めましてなんだから仕方ないな。自己紹介、しようか。俺の名前は秋山遼。ここじゃない現実世界の住人さ」

「遼くん、ですね。初めまして。君は知っているようですが、こちらも念のため名乗らせていただきます。泉光子郎です。ここデジ研で所長をやっています」

「城戸丈。医者だよ。最年長なんだ」

「太刀川ミミでーす!」

「火田伊織と言います」

「石田空よ。よろしくね」

「……石田ヤマト」

順番に自己紹介をすると、少年——遼は1人1人の顔を見て、最後にぶつきらぼうに言い放ったヤマトに苦笑を漏らし、そして俯いた。

「……大輔と賢と……ヒカリちゃんだっけか……本当に死んじゃったんだな」

「……………」

俯いた遼の視線の先にあるのは、己の両手。

脚を覆うようにかけられたシーツを握る手が、微かに震えていた。

「……ごめん、俺のせいだ」

「……どういふことだ？」

「詳しく話すと長くなっちゃうから、かいつまんで話すと、俺は『あのデジモン』を追っていたんだ」

『あのデジモン』、と遼が指しているのは、大輔と賢とヒカリが死んでしまった原因である、空間をぶち破って現れた、異常なデータ量を持ったデジモンのことだ。

遼は自分の世界からあのデジモンを追って、沢山の世界を渡ってきたのだが、この世界に来た時に何かの手違いで、丈が勤務している病院の前に転移してしまったらしい。

気を失って倒れているところを、丈の病院の看護師達に保護されたのだが、その日は奇しくも記念日、8月1日の朝だった。

丈があの日、遅刻したのは遼を保護して、診察していたためだった。数時間もすれば目を覚ますだろう、と思い、あとは同僚に引き継ぎなりして任せようと思った時に、光子郎とゲンナイから同時にメールが届いた。

異常なデータ量を持った何かが、デジタルワールドの空間をぶち破ってこようとしていると。

敵か味方かは分からず、一足先にデジタルワールドに行っていた後輩達はその場に向かっているから、君達も急いでくれと書かれていたので、同僚を呼び出そうとしたのだが、看護師がやってきて遼が目を覚ましたと教えてくれた。

あとは同僚に任せる、と丸投げすることが出来なかった丈は、心の中で後輩達に謝罪しながら足早で遼がいる病室に向かうと、目を覚ました遼が丈を見るなり慌てたように縋りつき、デジタルワールドに連れて行ってくれと喚いたので、宥めるのが大変だった。

何とか落ち着かせて話を聞いたのだが、どうも要領を得なかったの
で、とりあえず連れて行ってやろうと思い、用意しておいたキャンプ
道具と待機していたゴマモンと一緒に、病院のパソコンからデジタル
ワールドに向かった。

しかし本日は8月1日という休日であったために、色んな場所から
沢山の人やデジモンがデジタルワールドに来ていた関係で、後輩達が
いるエリアとは少し離れたエリアにゲートを開かなければならな
かった。

それだけでも時間のロスだと言うのに、そこは砂漠のエリアであつ
たので、丈のパートナーであるゴマモンが力を発揮することが出来
ず、チンロンモンの下に行っていた光子郎に迎えに来てもらう羽目に
なってしまった。

「もう自分がどの世界から来たのかも分かんないぐらい、たあつくさ
ん渡ってきたなあ。でもあいつを止めない限り、世界は歪んでいくば
かりだからさ。何としてもあいつを、どうにかしないとイケないんだ
よ」

「……どういうこと、ですか」

「あいつはさ、存在するだけで世界の、こう、何て言うか、因果律？理
？そういうのを捻じ曲げちゃうんだ。あいつが逃げた先々の世界で、
それで完結していたものが全部めちゃくちゃにされちゃまったのも、も
う何度も見たよ。デジモンがいた世界もあったし、いなかった世界も
あった。もちろん、別の世界の君達もいて、協力してもらったことも
何度かあった。でも、駄目だった。いつもあと一歩つてところで逃
げられるんだ」

今回もそうだった。

いつもなら「あのデジモン」とほぼ同じ場所に転移するのに、何が
あったのか、遼は現実世界の方に弾き飛ばされてしまった。

それが大きなタイムロスとなってしまうのだ。

丈と光子郎、それから遼とゴマモンがカブテリモンの手に乗せても
らって移動している最中に、バードラモンに乗ったヤマトと空、太一
とミミとパルモンと合流した。

アグモンとガブモンは、デジタルワールドに着いた時にタブレット越しで、光子郎がチンロンモンから預かった力を託し、それぞれ究極体に進化して更に合体してオメガモンになり、一足先に後輩達のいるエリアへと向かってもらっていた。

それでも、どれだけオメガモンが最強と言われていても、〃あのデジモン〃を倒せるなんて、太一とヤマトには悪いが遼はさらさら思っていないかった。

だからグレイソードが呆気なくあの水晶に突き刺さっているのを見て、遼は愕然とした。

咄嗟に声が出た。

《よせ!!》

あの時のあの声は、遼の制止する声だったのだ。

「今回みたいなのは初めてだった。あいつのあのクリスタルは、どんな攻撃も受け付けないし、ダメージも入らない。それなのにオメガモンのグレイソードが突き刺さって、罅が入った。あり得ないんだ、そんなの」

そしてその直後の、爆発も遼は予想もしていなかったと言う。

あいつは自爆をする技は持っていなかったはずなのに。

逃げるために爆発したというのは考えにくい。

今までとは違う何かが起こっているような気がして、本当はここでもう話しているのも惜しいのだと、遼は申し訳なさそうに笑った。

「これまでと違う現象が起きているのなら、一刻も早くあいつを追わないと……」

「気持ちに分かるけれど、医者としてそれはおすすり出来ないな」

今にも飛び出していきそうな遼を強く止めたのは、医者の方だった。

「大分無茶してみたんだね。君の身体は外も内もボロボロだったよ。これ以上無茶をしたら、命の保証はできないから、医者としては止めてもらおう」

「はは、それ別の世界の丈にも言われたよ」

「へえ、別の世界の僕にも言われたの。じゃあ何でここにいるのかな？ん？」

「ちよ、ま、待って待って、圧がすごい！何!?別世界とはいえ、丈の言うこと聞かなかったの怒ってる!？」

「ははは、怒ってなんかないよ、全然怒ってない、うん、怒ってない」「いやいやいや怒ってるだろ、これ絶対怒ってるって！ねえ！止めて！誰か！俺が悪かったから！」

暫くすると、タブレットのディスプレイが切り替わり、グラフや文字の羅列が出てくる。

ぱ、ぱ、ぱ、と次々現れるグラフや図形や文章が落ち着くのを待ってから、ゲンナイはそれらをじっくりと眺めた。

「…………ふむ」

「ゲンナイさん、どう？」

「ああ、どうやら『今』のデジタルワールドは所謂、古代デジタルワールド期と呼ばれていた時代だね」

「ごだい…………？」

「そう、ブイモンやホークモン、アルマジモンが生きていた時代だ。しかし…………」

タブレットから顔を上げ、ゲンナイは辺りを見回した。

直後、どおんという爆発音がしたので、ゲンナイはなっちゃんを連れて辛うじて生え残っている樹々に身を隠す。

「っ、どうやら私の想像を遥かに超えていたようだ…………」

「どういふこと？」

「見てごらん、なっちゃん」

そう言ってゲンナイはタブレットを見せる。

ディスプレイにはこの周辺の地形と思しき、シンプルな線だけで描かれた図形が、赤い点を中心に映っていた。

その赤い点から、等間隔で広がっている波紋と、その波紋がぶつか

るたびに点滅している黄色い点が1つ。

「これなあに？つてなつちゃんはゲンナイに問う。」

「光子郎がカスタマイズしてくれたものさ。設定して、今は半径100キロに絞っているんだが、この波紋は所謂レーダーで、半径100キロ以内にいるデジモンの生体反応をキャッチする。光子郎作なだけあって、このレーダーも相手にはキャッチされないんだ」

「へえ」

「それで、だ。このレーダーを見るに、生体反応は1つしかない。おかしいんだよ」

「何が？」

「半径100キロ以内に、生きているデジモンが1体しかないない、ということがだよ」

「……え？」

「幾ら種族が未来ほど多くなかった古代デジタルワールド期とは言え、半径100キロ以内に生体反応が1つしかないなんて、あり得ない。未来よりも古代デジタルワールド期は狭かったからね。」

「……この点は1体だけじゃなくて、集団がひと塊になっている、とかじゃなくて？」

「それもない。光子郎は本当に優秀だからね。1体だけの反応と、集団でいる時の反応を別々にプログラムしてくれている。それに……」

ゲンナイは更にディスプレイをタップする。

半径100キロギリギリに反応している黄色い点をタップするとズームされ、黄色い点に幾つもの記号が示されて、文字が書き込まれていった。

「……どうやらこの反応は究極体のようだ」

「究極体？インペリアルドラモンみたいな？」

「ああ、そして……」

ゲンナイは再度顔を上げる。

茂みから顔を覗かせ、黒煙が上がっている方角を見た。

その方角は、ゲンナイ達が隠れる直前に上がった爆発音があった方角だった。

「……この周りの無残な状況は、間違いなくこのデジモンの仕業だろうな」

「えっ」

「事態は私が想像していたよりもまずいようだ。先ほど見たデジモンの死骸のことも考えると……」

最悪な展開が頭を過る。

ゲンナイの表情はいつになく険しかった。

「……いかん、このままでは未来が変わってしまうかもしれない！」

「え、ゲンナイさん!？」

茂みから飛び出したゲンナイは、タブレットを操作すると、ディスプレイを自分とは反対側に向ける。

ディスプレイが光り、中からメカノリモンが飛び出してきた。

操縦席に乗り込み、未だ状況が飲み込めていないなっちゃんをメカノリモンの手のひらに乗せ、メカノリモンを飛ばした。

操縦桿の中心にタブレットを設置して、忙しくタップするゲンナイに、なっちゃんは大きな声で呼びかける。

「ねえ！未来が変わっちゃうって、どういうこと!？」

「……………」

しかしゲンナイは切羽詰まっているのか、答えてくれなかった。

タブレットと前を交互に見ながら、何処か当てがあるわけでもなく彷徨うゲンナイに、なっちゃんは不安しか感じられない。

でもゲンナイは、それどころではなかった。

遼の言っていた通り、存在するだけでその世界の因果律を歪めてしまうデジモンが、「この世界」にいるとすれば……!

どれぐらい彷徨っただろうか。

がむしやらにメカノリモンを飛ばし、何処へ行ってもタブレットが何も反応を示さなかったために、ゲンナイの脳裏に絶望の2文字が過った時である。

ピコン

タブレットが鳴った。

ピコン、ピコン、ピコン

それは、規則正しい音だった。

タブレットに何も反応せず、いつしか前だけしか見ることが出来なくなつたゲンナイは、弾かれるようにタブレットの方に顔を向けた。赤い点を中心に広がっていく波紋、そしてその波紋がぶつかるたびに反応するオレンジの点。

これは、複数体のデジモンの反応だ。

目を見開いたゲンナイの、操縦桿を握る手に力が籠る。

脳裏をかすめた絶望が消されていく。

でも……。

いや、今は可能性にかけるべきだ。

ゲンナイは首を何度も振りながら、反応を見せている方角にメカノリモンを向かわせる。

「……この辺りのはずだ」

30分後、波紋が広がる度に反応していた黄色い点滅と、ピコン、ピコン、という一定の間隔で鳴っていた音が早まっていくのを確認したゲンナイは、メカノリモンを降下させた。

そこは、拓けた場所だった。

少し小高い丘があつて、半径50メートルほど開けているのだが、戦闘があつたことを伺わせる惨状だった。

地面は彼方方扶れ、樹々が倒れ、灰色の煙が上がっている。

ここで何らかの戦闘があつたようだが、タブレットの反応を見るにこの辺りのようだ。

タブレットのディスプレイをタップして図形を拡大させると、反応は小高い丘の方角からあつた。

丘の上にいるのだろうか、と思つたが、先ほど上空から見下ろした時にはデジモンの姿はなかつたので、それは違うだろう。

ならば何処に？ どれだけ目を凝らして見ても、タブレットの反応は小高い丘を指している。

「ねえ、ゲンナイさん！ ニー！ 何かあるー！」

いつの間にかメカノリモンの手から降りていたなっちゃん、切り

立った岩肌に何かを見つけたらしく、ゲンナイを呼ぶ。

タブレットを外してメカノリモンから降りたゲンナイは、なつちゃんがいる箇所へと向かった。

そこには、不自然に盛り上がっている箇所があった。

遠目では分からないが、近くでよく見ると少し押せば動かせるような、なつちゃんの胸元辺りの大きさの岩だ。

ふと、思いついてタブレットを見る。

この不自然な岩と、反応がある箇所は、ほぼ位置が同じだった。

……もしかして、とゲンナイはなつちゃんと一緒に岩を動かす。

少し時間はかかったが、何とか岩を動かすことは出来た。

ず、ず、と地面に二本の線を描いて動かされた岩の向こうには、自然で出来たにしてはこれまた不自然な穴が開いていた。

なつちゃんが覗き込む。

「……ブイモン！」

「！」

「あと、ホークモンと、アルマジモンも！」

なつちゃんに退いてもらい、ゲンナイも覗き込んでみる。

薄暗かったが、確かに3体はいた。

穴は3体が少し余裕を持って入れるほどの広さと奥行だった。

どうしてこんなところに、という疑問は湧いたが、それよりもまずここから出てもらわないと、と考えたところではたと気づく。

岩をどかしたことで、この中に隠れていたらしい3体が何らかの反応を見せてもいいはずなのに、先ほどから3体は何も言わないし、動く気配がない。

嫌な予感があったゲンナイは、なつちゃんにブイモン達を引っ張り出してもらうように頼んだ。

まずは、近くにいたホークモン。

上半身だけを入れて、壁にもたれかかっているホークモンを抱きしめて、何とか引っ張り出した。

ずるり、と抵抗なく出てきたホークモンだったが、空のように澄んでいるはずの青い目は、傷ついたガラス玉のように曇っており、涙の

筋が見えた。

ぎよつとなつたなつちゃんは、そつとホークモンを横たわらせると、再び上半身を中に突っ込む。

次に引つ張り出したのは、アルマジモンだった。

こちらも力なくぐったりとして、薄らと開かれた目から涙が零れていた跡が、頬に走っていた。

「……………」

なつちゃんが息を飲む音が、嫌に響いた気がした。

最後の1体、ブイモンも穴の中から出すために、なつちゃんは身体を穴の中に入れたが…………。

『……………あああ
あああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああああ
突然、喉をぶち破るほどの音量が穴の中から聞こえてきたので、ゲ
ンナイはぎよつとなつた。』

なつちゃんもびっくりしている。

だつてなつちゃんは、ブイモンに向かって手を伸ばしただけだ。

もう大丈夫って、ぎゅつと身体を丸めて耳を塞ぐように頭を抱えて、蹲っている可哀想な龍の子どもに、そつと触れただけだ。

それなのにブイモンは、なつちゃんが触れた途端に大袈裟なぐらい身体を震わせて、更に奥へと引っ込んでしまったのだ。

涙をポロポロ零し、しゃくりあげながら可哀想なぐらい震えているのだ。

なつちゃんは、訳が分からない。

「ゲ、ゲンナイ、さん……………」

穴から這い出たなつちゃんは、困ったようにゲンナイを見上げる。

ゲンナイも状況が読み込めなかったので、顔だけを穴の中に入れてみた。

は、は、は、と短く息を吐いて、がちがちに震えて、しゃくりあげながら奥へ奥へと引っ込むうとしている。

もうこれ以上、奥に引っ込むことはできないのに。

迷子になった子どもみたいに泣きじやくって、喉をぶち破るほどの声量で喚いて、もういやだもういやだ怖い怖い怖いって言う、ブイモンの感情を叩きつけられているような感覚に陥って、なっちゃんは思わずその場で硬直してしまう。

「……………」

「……ゲンナイさん、どうしよう」

穴から出てきたゲンナイは、穴の中から聞こえてくる泣き声と喚き声が混じった、聞いているだけで心の奥に張りが突き刺さるような悲鳴に、呆然とすることしか出来ない。

だがこのままここに居るのは危険だ。

遠くから絶えず聞こえてくる破壊音の主が、いつここに来るか分からないから、早いところここから逃げた方がいい。

しかしなっちゃんが触れようとした結果、ブイモンは恐慌状態に陥ってしまったている。

……仕方がない。

「ここに簡易な基地を作ろう。それでブイモン達を簡単に治療してみよう」

「……大丈夫、なの？」

「リスクはある。だがいつまでもここで、ぼうっとしている場合ではない」

そう言うとゲンナイはタブレットを操作して、ブイモンが隠れている丘に向かってタブレットを向けた。

カシャ、とカメラのシャッター音がした。

特に変わった様子はないが、ぐったりとしているホークモンをなっちゃんに任せ、ゲンナイはアルマジモンを優しく抱き上げてやる。

ホークモンをおんぶしたなっちゃんを伴って、岩肌につ込んでいった。

岩肌につかるとこなくすり抜けていくと、中は岩肌が剥き出しになった研究室のような施設になっていた。

診察台とベッド、作業台と幾つかの実験器具、幅50センチほどの三段の本棚が作業台の隣にあった。

その簡易な設備が揃えられた空間で、ブイモンの鳴咽だけが響いている。

なっちゃんは何と声をかけようかとブイモンをじっと見ていたが、ゲンナイに呼ばれたためにそれを断念した。

診察台に寝かされているアルマジモンの隣に、ホークモンを寝かせるように言われたので、その通りにしてやると診察台の頭の方から薄い膜のようなものが現れて、寝ているホークモンとアルマジモンの上を通り過ぎていく。

診察台のすぐ傍にあるモニターに、映像が映し出された。

「ゲンナイさん、これは……?」

「ホークモンとアルマジモンの記憶を映像化したものだ。何があったのか、これで分かるはずなんだが……」

そして、2人は知る。

この惨状の理由を、この悲劇の意味を。

エージェントとして教えられた、自分が生まれる前のデジタルワールドの正史から外れた出来事を。

「……これも、遼が言っていた『あのデジモン』の仕業なのか……?」
「……………う、」

振り絞るように紡がれるゲンナイの言葉を尻目に、顔色を真っ青にさせたなっちゃんは、口を抑えながらトイレに行った。

直後に、嘔吐するような咳が聞こえてきたので、恐らく吐いてしまったのだらうと思われる。

だが今のゲンナイには、なっちゃんを気遣う余裕はなかった。

遼から教えてもらった『あのデジモン』に関する情報が本当なら、この世界の歴史は間違いなく狂わされている。

ならば自分の知っている未来は……。

「……………」

なっちゃんが嘔吐く以外、とても静かだ。

ゲンナイが作り出した空間の端っことで、しゃくりあげていたブイモンはいつの間にか泣くのをやめて、その場で横たわっていた。

恐らく泣き疲れてしまったのだらう。

うつすらと開かれている目の端から涙が零れた跡が残っている。
ゲンナイは大きめのタオルを取り出して、そつとブイモンに歩み寄った。

震えているが、意識がある気配はない。

タオルを広げて、タオル越しにブイモンに触れてみる。

ブイモンは何の反応も見せない。

起こさないように慎重にタオルで包み込み、そつと抱き上げた。

ベッドに寝かせてやると同時に、なっちゃんがトイレから出てきた。

その顔色は未だ青く、口元を押さええている。

「……なっちゃん、少し休んでいなさい」

「……で、も」

「いいから、ね?」

まだ幼い彼女を連れてくるのは、やはり間違っていたのだろうか。しかし長い間生まれてこれず、やっと大輔に逢えるって楽しみにしながら生まれてきた彼女に突きつけられたのは、残酷な知らせだった。

逢いたかった人に逢えず、泣きじやくる彼女を放っておけなかった。

だからつい、一緒に来るかいと声をかけてしまった。

まさかこんなことになっているなんて、誰が想像していようか。

——今は、後悔している場合ではないな。

ゲンナイは頭（かぶり）を振る。

調べなければならぬことは沢山ある。

ここで嘆いている時間はないのだ。

本来の歴史から外れた出来事による、未来への影響。

遼が追っていた「あのデジモン」の行方。

そして……この惨状の本当の理由。

「今」が古代デジタルワールド期なら、エージェントどころかホメオスタシスもまだ確立していない。

ホメオスタシスの前身はいたと思うが……下手なことを言って怪

しまれるのは避けたい。

そして、まず最初にしなくてはいけないのはここからの移動と、ブイモン達をどうするかということだ。

時が来るまで自分の下で保護してもいいが、戦う力のない自分ではブイモン達を護り切れることは出来ないだろう。

ホークモン達の記憶によれば、この惨状を引き起こしたデジモンは間違いなく、ブイモン達の命を狙っている。

相手は究極体、メカノリモンしか戦闘手段がないゲンナイは言わずもがな、なつちゃんも戦闘向きのデジモンではないから、対峙したら逃げるしかないのだ。

だが心を壊してしまった3体のデジモンとなつちゃんを連れて、逃げられる自信もない。

どうするか……。

タブレットを弄りながら考え込んでいたゲンナイの目に、飛び込んできた情報があった。

「……これは……」

眩くゲンナイ。

情報を読み進めていく。

口元を隠すように右手で添えて……決断した。

「……ここなら、独立しているし……話せば分かってくれるか……？」

不安がないと言えば嘘になるが、賭けるしかない。

ゲンナイは慎重に外を伺い、メカノリモンを出してからブイモン達を外に運び、なつちゃんにも出てもらって、丘の中に作った簡易な施設を消して、メカノリモンに乗ってその場を離れた。

目指すは……天界のエリアである。

スワンプモン

窓がない部屋の光源は、ランプを模したオレンジの優しい光だ。心地よい眠りに誘うための灯が部屋を優しく照らしている中に、最年少の3人はいた。

時刻は、8時を過ぎた頃。

大輔のお姉ちゃんから借りた約束の証である、金色の懐中時計の蓋を閉め、賢は顔を上げる。

隣には大輔、大輔を挟んで反対側にヒカリ。

正面のベッドには固く目を閉ざしているブイモンと、寄り添い合うように眠っているパタモンと、テイルモンとロップモンがいた。

ロップモンの寝相が酷くて、パタモンが潰されているが賢はそれを苦笑してスルーする。

とつくに起きている上級生達は、ようやく全快したナノモンにこき使われて、メインコンピュータや他の部屋をばたばたと行き来しているのが、閉じたドアからでも聞こえてきた。

太一とアグモンが歪みに飲み込まれて7日、治とガブモンが太一に追いつかんと修行の旅に出てから6日。

当面の間は安全と言っても、世界の危機が去ったわけではない。しかし子ども達は、未だピラミッドに留まっている。

大輔のパートナーであるブイモンが、辛い過去の出来事を思い出してしまって目を覚まさないために、先に進むことが出来ないから、と上級生達は言っていたが、最年少の3人は気づいていた。

自分達を引っ張ってくれていたリーダーと、そのリーダーを支えていたサブリーダーが不在となってしまった今、行くべき道を見失ってしり込みしてしまっているというのが、本当の理由だということに。

太一がいたから、自分達の行くべき道が見えていたのだ。

治がいたから、自分達がやらなければならないことが分かっていたのだ。

今でも分かっている、行くべき道もやらなければならないことも。しかし頭で分かっている、感情や心がついてきてくれないのである。

がむしやらに前だけ見ていた頃は、やるべきことがはっきりしていた時は、何も考えずに真つすぐ進めていたのに、今では何を目指していたのか分からない。

前世でもそうだったと、聞いていた。

先輩達から聞きかじっただけ、希望の申し子が臆気な記憶を頼りに書いた本を読んだだけだったけれど、太一のアグモンがメタルグレイモンに進化し、エテモンと対峙した際に生まれた歪に飲み込まれて、太一とアグモンはデジタルワールドの時間で2か月以上もの間、行方不明扱いされていた。

その時の子ども達は、デジタルワールドと現実世界の時間の流れが違うということも、太一達が現実世界に戻っていたことも知らなかった上、その時の敵の策略によって全員がサーバ大陸中のあちこちに散ってしまうという事態に陥っていた、らしい。

太一とアグモンがデジタルワールドに戻ってきたことで、子ども達は再び使命のために1つとなったのが、あの時はどうしようかと思つた、と太一が苦笑する度に他の先輩達が気まずそうにしていたのを、今でも覚えている。

今は、どうだろうか。

治とガブモンが修行の旅に出た2日後、エテモンによってスクラップ寸前にまで追い詰められていたナノモンの修復がようやく終わり、ナノモンは通常の業務に戻っている。

ゲンナイは1週間の間に、ピラミッドの内部でナノモンの手伝いをしたり、時折ピラミッドの外に出て調査をしたりなどして、子ども達がいつでも旅に出られるように準備を進めていてくれた。

そんなナノモンやゲンナイを見て、上級生達は未だに1歩が踏み出せないながらも、何かをしなければと思っているのか、ナノモンの手

伝いを買って、ばたばたと走り回っている。

ゲンナイから何か聞いているのか、ナノモンも子ども達に使命を果たすようにせつつくようなことはせず、子ども達の申し出を素直に受け入れてくれた。

緩やかでも確実に、暗黒の魔の手が迫ってきて、蝕んでいる状況を考えたら、今すぐにでも旅に出たほうがいいのは分かっているも。

「……俺さあ」

ぼすん、とブイモン達が眠っているベッドに上半身を預けるように倒れこみながら、大輔は口を開いた。

「太一さん達と冒険したかったなって、ずっと思ってたんだ」

「……………」

「太一さん達はさ、俺達みたいに行ったり来たりが出来なくて、俺達みたいにまともなサポートとかなかった中で、デジタルワールドを冒険してたんだろ？そりゃ、京や伊織や、タケルやヒカリちゃんや賢と冒険するのも楽しかったけど……」

不満があつたわけではない。

でも太一達から聞かせてもらった話や、タケルがまとめた小説を読む度に思ったのだ。

自分もその輪に加わりたかつた。

きっと京と伊織も、同じ想いを抱いていたに違いない。

当事者にしか分からないような話をしている太一達を見る度に、京も伊織も羨ましそうに彼らを見ていたのを知っていた。

最年少で当時の記憶は朧気だったと苦笑していたタケルと、太一達の冒険には途中参加だったヒカリでさえも、時折6人の中でも2人だけに伝わる空気を醸し出していたのだから、大輔は猶更羨ましかった。

勝手にライバル視をしていたタケルと、憧れの気持ちを隠さなかつたヒカリが、小学2年生の時に壮絶とも言える冒険を経験したのだ、同じ年である大輔がそう思うのも無理はなかつた。

人間界に侵攻してきたヴァンデモンに囚われていた自分とは違い、2人は幼いながらもヴァンデモンに立ち向かうべく奮闘していたの

だから。

でも……。

「でも、こんな形でなんて、望んでなかったんだよなあ……」

振り絞るように出された声は、少しだけ震えていた。

確かに、太一達と一緒に冒険したかった。

ズルいズルい羨ましいってタケルに絡んで苦笑いされ、ヤマトにいい加減にしろって小突かれたことも度々あった。

でもそれは叶わぬ望みだということも、ちゃんと分かっていた。

幾ら望んだところで時間は巻き戻せないし、過去にも戻れない。

だからなのか、今のこの状況を大輔はどうしても喜べないようだった。

それは、とヒカリは小さくため息を吐く。

ヒカリも同じだった。

太一達と一緒に冒険をしたと言っても、ヒカリは途中参加だ。

本当なら太一達と一緒にキャンプに参加して、太一達と一緒にデジタルワールドに飛ばされて、太一達と一緒に冒険するはずだった。

しかし風邪を引いてキャンプを断念せざるを得なかった上に、ヒカリのパートナーであるテイルモンは様々な不幸が重なり、アグモン達と待っていることが出来なかった。

例え風邪を引かずに太一と一緒にキャンプに参加して、デジタルワールドに飛ばされたとしても、パートナーがいない状況ではみんなに守られるだけの足手まといにしかならなかっただろう。

テイルモンと一緒に冒険した期間はとても短かったから、最初から最後までずっとパートナーと一緒にだったタケルを羨ましいと思わなかったと言えは嘘になる。

前世ではよく大輔達にいいないなあって羨ましがられていたが、太一達と一緒に冒険をしたかったと夢を見ていたのは、ヒカリも一緒だった。

こんな結果を望んでいなかったことも、もちろん。

「……これから、どうすればいいのかな」

ぽつりと落とすように呟いたのは、賢だ。

ベッドに突っ伏していた大輔も、そんな大輔をぼんやり眺めていたヒカリも、一斉に賢の方に視線を向ける。

賢は、ロップモンに押しつぶされて唸っている自分のパートナーを見つめていた。

前世とは違う冒険、前世とは違うパートナー、そして前世とは違う人生。

賢の心情と戸惑いは如何ほどに。

「……………どう、つて？」

「僕らは3人とも、この冒険に参加してたわけじゃない。高石君の小説を読ませてもらっていたから、ある程度の進行は分かるけれど、それでも僕らの知っている道筋から少しずつ逸れていってる」

天真爛漫だった賢からはかけ離れた、前世でもよく見た少し陰のある表情を浮かべる賢に、大輔もヒカリも唇を真一文字に結ぶ。

賢の言いたいことは、その言葉だけで理解できた。

ゲンナイから聞かされた話によれば、ここは自分達の前世ではなく、謎のデジモンが過去に飛んだ影響で生まれたパラレルワールドである。

既に行先が決められている世界の過去に飛んだとしても、大輔達が太一達と一緒に冒険することは絶対にできない。

パラレルワールドだからこそ、大輔達はここにいるのだ。

しかしそれと同時に、世界は大輔達が知っている未来とは別の未来を歩み始めている。

当然だ、前世の冒険ではいなかった大輔達がいるのだから。

たったそれだけの違いで、と思う者もいるかもしれないが、道端の石ころを蹴るか蹴らないかだけで、その先の運命が変わってしまうものだ。

デビモンと死闘を繰り広げたエンジェモンが、その命を散らせてデジたまに戻ったり、太一とメタルグレイモンが、エテモンと戦った際に生み出された歪に巻き込まれて現実世界に帰ってしまったたり、と前世と変わらない出来事もあったことから、子ども達にとつてターニングポイントになりそうなイベントには大きな変化はないだろう。

だがそれまでの道のりは、何が起るのか全く予想が出来ない。自分達が関わることで、自分達が動くことで、前世になかった出来事が起こったり、前世であったことがなかったことにされたりするかもしれない。

そう思うと、上級生達ではないが、1歩踏み出すことがどうしても出来ないのだ。

「未来は変わり始めてる。僕らの記憶も思い出も、役に立たなくなっている。僕らが進むべき道は……何処にあるのかな……」

賢の弱気な発言を聞いて、ヒカリも俯いてしまう。

大好きで、頼りになる兄は、ここにはいない。

助けてほしくとも、どうしたヒカリ、って微笑んでくれる頼もしい兄は、前世と同じなら現実世界に帰っているはずなのだ。

いつだって自分達の行く先を見つけて、指し示してくれた兄。

前世での最初の冒険でも、2度目の冒険でも、リーダーの才を遺憾なく発揮してくれていた。

兄がいたから、いてくれたから、自分達は迷わずに済んだのだ。

でも、兄は今、ここにはいない。

頼るべき上級生達も、太一がいないことでガタガタになってきている。

治は自分がやるべきことを見つけたから、自分の足で歩き出せたけれど、もし上級生達がこのまま立ち止まって現実から目を逸らし続けってしまったら……。

前世の二の舞は避けられないだろう。

そうなったら、自分達はどうすればいいのだろうか。

他の上級生達についていくしか、ないのだろうか。

少なくとも、大輔は他の上級生達と一緒に、最悪ここに残るしかない。

ブイモンは悲しみと寂しさに負けて、押し潰されてしまって、戦う力もないのだ。

(お兄ちゃん……)

俯くヒカリの視界に、硬く握りしめた自分の手が映る。

幾ら兄を呼んでも、答えてくれる兄はいない。

現実世界とデジタルワールドでは時間の進み方が違うから、6日を過ぎた程度では太一もコロモンも行動すら出来ていないだろう。

所々の違いは出ていても、大まかなところが変わっていないのなら、太一とコロモンが戻ってくるのは約2か月後だ。

たった2カ月、されど2カ月。

幼い頃からの夢を叶えて就職し、結婚するまで職場近くのアパートメントで1人暮らしをしていた時は、忙しくて数カ月も会えない、ということはざらだったはずなのに、たった6日、兄の姿がないだけでこんなにも不安になるなんて……。

(お兄ちゃん)

再度、心の中で兄を呼ぶも、やはり返事はない。

溜まらずヒカリは、ブイモン達が眠っているベッドに突っ伏した。

兄の声が聴きたい。兄の力強い言葉を聞きたい。

でもその兄は、今はいない。

(……お兄ちゃん)

いつしか、ヒカリの意識は深い闇の底に引きずり降ろされていた。

其れは、最初から「其れ」ではなかった。

いつの頃から「其れ」が存在していたのか覚えていない。

其れに形なんてものはなかった。何も、持っていなかった。

空間と空間の狭間、一定の速さで流れる時間の中に身を任せながら、其れは長い瞬間(とき)を過ごしていた。

上も下も右も左も、何処を見渡しても色々な世界が、様々な歴史を紡ぎながら水のように流れていくのを何度も見た。

いい方向へ向かった世界も、終焉や破滅へと転がり落ちた世界もあった。

しかし其れはそんな世界を覗いても、何の感情も浮かんでこなかった。

其れは、ただ「見ていただけ」だった。

その世界が救済されようが、終焉へ堕ちようが、其れにとってはどうでもよかったのだ。

だって其れはどう頑張っても、その世界に参加することが出来ないのだ。

その世界に入って、その世界の住人として歴史を刻むことが出来なかったのである。

ただ流れていく世界を、歴史を、眺めているだけ。

当事者にも傍観者にもなれない立ち位置など、一体何が楽しいというのだろうか。

いや、そもそも其れに、感情などあったのだろうか。

いつ生まれたのか、いつから存在していたのか、気が付いた時にはすでに「其れ」として確立していた其れは、自分が何者なのかも分かっていなかった。

分かりようがなかったのだ。

何も持っていないかった其れは、自分が世界や歴史に参加できないことを羨むという感情を抱くことすら出来なかった。

ただ一つ、分かっていることは、其れは決して許されない罪を一生背負って過ごしていかなければならない、ということだけだった。

その罪が何だったのかすら、其れは忘れてしまったのだけれど。

——それを「虚しい」ということすら知らなかった頃だ、其れが出会ったのは。

いや、「アレ」を出会いと呼ぶには少々状況が特殊だろうか。とにもかくにも、其れは出会った。

無限の空間と無数の時間が重くのしかかるこの狭間で。

最初は、好奇心すら持っていなかった。

他の世界を覗き見るのと同じように、その世界の観客であった其れ

は、どういうわけか他の世界のようにさつきと離れていくことができずに、目が離せなかったのである。

幾つもの世界で覗き見た人間と呼ばれている存在の姿、「自分」と同じような不思議な生命体と仲睦まじくしている様子、時に笑って時に泣いて、其れには備わっていない「感情」を出して、喧嘩をしたり和解をしたりしながら成長していく子ども達。

何処か懐かしくて、何処か羨ましくて。

つきん、と胸の奥に痛みのようなものを感じながらも、目を逸らすことが出来ずに其れは随分長い時間、その世界を眺めていた。

流れていく時間に身を任せながらその世界を見ていたら、あるシーンが映し出された。

大人と呼ばれる身体の大きな人間が6人と、それに付き従っている不思議な生き物が6体、そしてそんな人間と不思議な生き物に立ちただかるように佇んでいる、謎の水晶。

世界の狭間から覗き見ているにも関わらず、その謎の水晶から発せられている悍ましい「何か」が漂ってくるのが分かる。

——何だ、「コレ」は。

色んな世界を見てきた。色んな世界の結末を見守ってきた。

しかしこれまで見てきた世界とは、何かが根本的に違うと其れは思った。

今までだって科学技術が発達した世界や、魔法に特化した世界など色々と垣間見てきたし、この世界のように人間に使用する不思議な生き物の存在だってあった。

世界を支配せんと企む悪しき存在を倒すべく、使役している不思議な生き物とともに立ち向かっていった世界は、他にもあった。

だがあの世界にいる「アレ」は、どの世界の理にも当てはまらないと、其れは直観した。

——「アレ」は……まずい……！

白い騎士が乱入してきたのが見えた。

両手は不思議な生き物の頭部になっており、右手の頭部から長い剣が飛び出していた。

その剣が謎の水晶に突き刺さった時、意識の奥がムズムズした気がした。

それが胸騒ぎと呼ばれるものだど知るの、ずっと後のこと。

ピシリ

突き刺さった剣から、水晶が雷のような罅が広がっていく。

同時に、悍ましい気配が突如として増幅した。

意識がざわつく。悍ましい気配がどんどん膨張して行って、様子がおかしいと気づいた人間達はその場から逃げていくのが見えた。

しかし何故か、6人のうちの1人が何を見つけたのか急に引き返した。

引き返した陰に気づいたもう2つの陰が、その陰を追いかけて引き返している。

眩い光が辺りを包み、其れが覗いていた窓が閉じた。

ぐにやり

——っ！

目の前のパステルが捻じれる。

ギョツとなつた其れは慌ててその場から離れた。

捻じれはどんどん大きくなっていき、そこをぶち破ろうとしているように尖っていく。

ぶちり、という音が幻覚で聞こえた気がした。

ぶわ、

捻じれた個所が、花が咲くように開かれる。

捻じれながら開かれた箇所に向こうから、罅が入った水晶がぬつと這い出てきた。

想定していたよりもずっと大きなその水晶の中に蠢く不気味な陰を見た其れは、目の前を通り過ぎていく水晶から目が離せなかった。

感情は備わっていないくとも、本能は持っている。

その本能が、其れに警鐘を鳴らしている。

「アレ」は、関わってはいけないと。

何故なら狭間を漂っている其れでさえ、流れていく世界に介入することが出来ないのに、あの水晶は空間の壁をぶち破って狭間へと逃げ

込む術を持ち合わせているような“化け物”だ。

通り過ぎて行った軌跡も歪ひずんでいることから、恐らく“アレ”は存在するだけで空間を、理を捻じ曲げてしまうような、其れと同じ“存在してはならない存在”だ。

だが其れの力では“アレ”をどうこうすることは出来ない。

戦ったことなど1度もないが、それだけは言える。

そもそも自分は世界に参加することを許されない、咎人なのだ。

どの世界の住人にも当てはめられない自分が、“アレ”をどうこうしてはいけない。

ふわり……

“化け物”の行く末から目を逸らし、ぶち破られた穴に目を向けると、パステルの狭間でも目立つ光を見つけた。

あの水晶と違って嫌な感じなどせず、誘われるように光に近づいていくと、水晶が作り出した歪ひずみに引つ張られるようにその後を追って漂っている。

ピンクと、黒と、それから金色。

パステルの空間に、嫌に目立っているその光は、何処か懐かしい匂いと雰囲気をもとっており、其れは知らず知らずのうちに近づいていた。

光は、近づいてきた其れを弄ぶようにふわふわと周りを漂った。

《……あなたは誰？》

声が聞こえた。

辺りを見回してみたが、其れ以外の存在など、何処を見渡しても見当たらない。

《ねえ、あなたは誰？》

はつきりと、今度は聞こえた。

気のせいではない。もう1度辺りを見回して、声の主を探したのだが、幾ら見渡したところで狭間に其れ以外の生命が存在できるわけがない。

しかし声は、確かに聞こえてきた。

ふわり、と其れの前にいたピンク色の光が舞う。

そこでようやく気付いた。

先ほどから聞こえてきた声は、この光から発せられていたのだと。

——……ソレこそ、何だ。

《……私は、光。世界の、光。であり、命そのもの》

其れが訪ねると、一拍置いてピンクの光がそう告げてきた。

光は、光と名乗った。世界の光で、命そのものという、
なぞなぞにも似たような返答だった。

意味が分からずに沈黙を貫いていると、今度は黒い光がすいっと前
に出てくる。

「「が光なら、僕は優しさかな」

——やさしさ、

「そう。世界に溢れている慈愛の情、真心、愛しさ。そう言ったものが
全部詰め合わさったもの」

金色の光が跳ねる。

へじゃあ、俺は奇跡だ。勇氣と友情、炎と水、前に突き進むための
道しるべ。それが俺だ

それで、と奇跡と名乗った金色の光が言葉を紡ぐ。

《……お前は、誰だ?》

——……分からない。

其れには何も無いのだ。其れは、何も持っていないのだ。

名前も形も身体も、過去や未来でさえも。

持っているのは、罪を犯したという事実だけ。

咎人であるという柵しがらみだけ。

世界に参加することを許されず、ただ救済を、終焉を覗き見るこ
とができないだけ。

……この3つの光は、どうしてはつきりと自分の存在を疑わないこ
とが出来のだろうか。

——……ソレは、何なのだ。

其れが訪ねると、3つの光は何も言わずに其れの周りをゆらゆらと
舞いながら、ある場所へ誘導する。

それは、其れが先ほどまで覗き込んでいた場所だった。

《……私達はあそこにいたの》

“光”は先ほどと違って、声のトーンを落としながら囁いた。数分前に起こった出来事の、続きの映像のようだった。

女と呼ばれている人間が1人と、男と呼ばれている人間が2人、ぐったりとしている。

それを男と女が1人ずつ、抱き上げたり声を張り上げたりしながら、3人の人間に声をかけていた。

残りの1人は茫然としている。

不思議な生き物達も、それぞれ何かしらの反応を見せていた。

白い騎士が跪いている。

それから、場面の端から更に人間と不思議な生き物が走ってきた。

人数は同じ6人。合計12人の人間と、12体の不思議な生き物がそろった。

……そのうちの3人は、まるで糸の切れたマリオネットのようにピクリとも動かなかった。

【あれが、僕達】

黒い光が、ピンクの光と同じように声を落としながら呟いた。

金色の光は何も言わない。

《私達は、死んでしまったの》

——……死。

それは、其れには全く馴染みのない言葉であり、何度も目撃した現象であった。

沢山の世界を見てきた其れは、当然“死”という現象も知識として知っている。

あくまでも知識として、なのだが。

——何故？

へ見てたんだらう？だったら、知ってるはずだ

——……あの悍ましい力を発していた水晶が

金色の光は肯定の意味を込めて沈黙する。

そう、見ていた。其れは見ていた。

あの水晶が闇の力を増幅させて爆発を起こした、あのシーンを。

「……あれは、あれだけは、放っておいちゃいけない。もう二度と命を奪わないと決めた僕らだけれど……あれは何が何でも止めなきゃいけない」

黒い光が静かに言い放った。

「あれは、きつと僕達にしか止められない。他の世界に割り込めば、きつとその世界はねじ曲がった理に耐え切れずに崩壊してしまう。だから、僕達が何とかしないと……」

——ソレは「アレ」が原因で世界の理から外されたのに、か狭間に放り出された魂がどうなるかなんて、火を見るよりも明らかだ。

沢山の世界を垣間見てきた其れは、命の巡りもたくさん見てきた。天国と呼ばれる場所がある世界、輪廻転生というシステムがある世界。

この光がいたあの世界のシステムがどうなっているのかも知らないが、狭間に放り出された魂があの世界に再び組み込まれることは出来ないだろう。

悍ましい水晶が作り出した穴はとうに塞がれているし、通り道は未だに歪ひずんでいる。

《それでも、私達がいかなきゃいけない》

“光”は、そう言つて其れから離れていく。

作り出された歪ひずみを辿つて、「アレ」の後を追おうとしていることをすぐに理解した。

へどうなるかなんて、誰にも分からない。勝てるかもしれないし、負けるかもしれない。それでも、やりたいんだ

——……やりたい？

へそう。これは俺達が決めたこと。俺達がやるつて決めたこと。それは誰にも止められないし、止めることはできない

【それが、僕達がいた世界のルール。理】

《辿り着く先の未来が決められていたとしても、道は選べる》

——……

其れには分からない。其れには、何も分からない。

使命があるわけでも、目的があつたわけでもなく、ただこの狭間を漂っているだけの存在である其れは、何も持っていないのだ。

何かを感じることも、何かを思うことも、何かを考えることも、其れはしなかつたし出来なかつた。

それでも……そのまま見送ることが出来なかつた。

……………

歪み^{ひず}を追いながら狭間を漂い、其れから離れていく光。

……………待て

気が付いたらそう言い放っていて、3つの光の後を追つて歪み^{ひず}の道を泳ぐ。

——ここは狭間。時間と空間の狭間。生身ではないとはいえ、いずれ押しつぶされて、ソレらの目的を果たす前に消滅する

《……………》

——“此れ”には何もない。沢山の世界を垣間見た。その結末も終焉も、全て見てきた。“心”というのも“命”というのも“感情”というのも、知識として知ってはいても分からなかつた

何もなかつたから、例え沢山の世界を覗き見ていたとしても、何も感じない。

ただ情報として記録されていくだけの光景と知識だった。

——初めてだ。“知りたい”と思つたのは。確かに此れの奥から湧き上がってきているはずなのに、此れにはこれを何と言うのか分からない。でもソレとあれば、それが分かるかもしれない。

初めて会つた相手に何の警戒心も抱かず、それどころか会話を試みてきた。

狭間に迷い込む人間など滅多におらず、いたとしてもその重さに耐えきれなくて一瞬でペしゃんこになってしまうために、命の触れ合いなどしたことがない其れは、3つの光が何を考えているのか理解できなかつた。

だから、“知りたい”と思つた。

“知りたい”と思つたことに、驚いた。

驚いたことに、驚いた。

何もなかったはずの其れに、何か芽生え始めたのである。本人は全く自覚がないのだけれど。

——此れは知りたい。知りたいから、ソレとともに行くことにする
【……………】

——此れに見せる。此れに教えろ。ソレを、この狭間の重さから守る代わりに

それを聞いた「光」の声が少し高くなった。

《……………ありがとう。優しいのね》

——此れに感情はない

〈それはこれまでの話だろうか？これからは違う〉
……………

【知りたいんでしよう？色んなものを、色んなことを。教えてあげるとよ】

でもまずその前に、とピンク色の「光」が其れの周りを舞う。

《名前を付けてあげる》

〈そうだな、名無しは不便だもんな〉

【どんな事象にだって出来事にだって存在にだって、名前は必要だものね】

思ってもみなかった提案に、其れは何も言えなかった。

そうだね、そうだな、黒と金色も賛成して、本人を置いてけぼりにして楽しそうに笑いあっている幻覚が見える。

それらは光の塊だから、顔なんか見えないのに。

其れには何もないのに。

《名前はね、つけられて初めて意味を成すものなのよ》

【名前のない君は、何処にもいないのと同じ】

〈何処にもないこの空間と同じ〉

——……………咎人に名前など、必要なのか？

《咎人であろうとも、貴方は「アナタ」》

【存在しているのなら、君は「キミ」だよ】

〈何もなくなつて、お前は「オマエ」さ〉

其れを置いてけぼりにして、3つの光は其れを取り囲むようにふわ

ふわと回る。

どれぐらいの時間が経っただろう。

一瞬だったかもしれないし、何年、何十年だったかもしれない。

「……スワンプモン」

黒い光が、囁いた。

【誰でもない、何にもなれない君は、スワンプモンだよ。どう？】

其れに変化が訪れたのは、その瞬間である。

パステルカラーの斑に彩られた空間で、其れはひととき強い光を放った。

にゆるにゆると光が形を変えていく。

光が4つの方向に伸びていき、蠢きながら細かいところまで形作られていった。

やがて其れを包み込んでいた光は、ぽおん、と沢山の光の粒になって弾けて、雪のように舞い散る。

ふと、違和感のようなものを覚えて視界を認識すると、そこには見慣れないものが移った。

何だこれは、と思っていると、わきわきと動いたので、其れはびつくりして思わず後ずさる。

クスクス、と3つの光は慌てふためいている其れを笑っている。

わきわきと動いていたのは、“手”というものらしい。

沢山覗いた世界にいた、“人間”が持っていたものと同じなのだ
知った。

手だけではない。見下ろせば足もある。胴体もある。

顔はどうなっているのだろう、とまだぎこちない両手を動かしながら顔があるであろう部分に持っていくと、つるりとした感触。

——これ、は……

へはは、“スワンプモン”か。お前らしいなあ、“——”

“奇跡”と名乗った光の、最後に呟いた言葉は何故かノイズがかかって聞こえなかったが、其れにとってはそんなものでもよかった。

それよりも、“其れ”という概念でしかなかった其れが、名前を付

けられただけでその姿を変え、概念まで変わったのだ。

其れは……スワンプモンは身体の奥で何かが揺さぶられたような気がした。

“心”を知らなかった虚ろの中に、何かが芽生えた。

“命”を知らなかった空っぽの中に、何かが生まれた。

“感情”を知らなかったがらんだものの中に、何かが沸き上がった。

——今日から、此れはスワンプモン。これより先の未来永劫、ソレのためにこの存在を肯定しよう

何でもなかった其れに、何にもなれなかった其れに、何もなかった其れに、意志が生まれた瞬間だった。

《……つくづく、貴方方とは縁があるようですね》

横並びにちよこんと座っている3人の幼子達の後頭部を見下ろしながら、スワンプモンは苦笑した。

風に乗ってお菓子のように甘い匂いが漂ってくる。

周りにはパステルカラーの花が一面に咲いており、空には綿菓子のような雲がふわふわと浮かんでいた。

レリーフが彫り込まれたアンティーク調のテーブルには、イギリスのティータイムで使われているようなティースタンドと、琥珀色の液体が入ったカップが置いてある。

それを手に取って、水晶で出来ている頭部に傾けるが、口などあるはずがないので飲めているのかも分からなかった。

不思議だなあ、と賢はぼんやりとスワンプモンを見つめる。

《まさか貴方方が前世の出来事を思い出してしまうとは、流石のワタクシも予想外でした。ゲンナイ様も驚きになったでしょうねえ》

「……？スワンプモン、ゲンナイさんのこと知ってるの？」

《ええ、存じておりますとも。ゲンナイ様となっちゃんもまた、ワタクシの導きによってこの世界、この時代に流れ着いたのですからね。ただ貴方方と違って偶発的に破れた壁ではなく、無理やりな形で破ったものだったため、もう少しで狭間の理を壊してしまうところだったの

ですが》

なかなかシヤレにならないことをシレッツと言い放ったスワンプモンに、大輔達はギョツとした表情を浮かべたが、スワンプモンは気づかないふりをした。

大輔とヒカリと賢は、夢を見ていた。

いや、夢にしては意識が妙にはつきりとしているから、《夢》という定義には当てはまらない《夢》だった。

太一のアグモンがスカルグレイモンへと進化を果たしてしまった日の夜に見た、あの場所、あの景色、あの香り。

そこはスワンプモンの縄張りで、居場所で、牢獄だと3人は知らない。

絵具が水に滲むように、宙に映し出された映像を、大輔達は見ていた。

それは、自分達が《自分達》になる前の出来事。

スワンプモンがスワンプモンとして確立したきっかけ。

あの頃のスワンプモンは何も知らなかった。何も持っていないかった。

そんな自分にこの姿と名前をくれたのは、世界から弾かれた3つの光。

情報としてしか知らなかった心も、意志も、感情も。

がらんどうの存在には、まだ心も意志も感情も十分には満たされていないものの、あの頃と比べればだいぶ生き物としての存在が増してきた、と思う。

それでも世界から弾かれてしまった存在であることに、変わりはないかったけれど。

《……ワタクシに、意味などなかった。ただ流れていく時間と広がっていく空間の狭間で、与えられた役目は罪を償うことだけでした。数多ある世界に参加することも出来ず、ただ育まれていく命や紡がれていく歴史を、ただ傍観することしか許されなかった。貴方方がいなければ、ワタクシは今でもただの概念として狭間を漂っていたでしょ

う》

名前を与えられたから、意味を持った。

意味を持ったから、命に成った。

命を持ったから、感情が芽生えた。

だから、少しだけ。

ほんの少しだけ。

《欲が出てしまいましたってねえ》

欲？と3人は首を傾げる。

前世の記憶を持っているとはいえ、今は子どもの身である大輔達がほぼ同時に、同じ方に同じように首を傾げたので、もしも自分に表情があつたら吹き出してしまっていたらどうな、とスワンプモンは思った。

《貴方方のことはずっと見ておりましたよ。何せワタクシは犯罪者であり傍観者。貴方方が無事使命を果たすその日まで、何があつても見守っていようと思つていいたのですが……》

どんなに子ども達がピンチに陥ったとしても、その試練は子ども達自身で乗り越えなければならぬことだ。

行く当てもなく彷徨っていた時も、デビモンの恐ろしい力でファイル島が分断され、子ども達も離れ離れになってしまった時も、デビモンとの最終決戦の時でさえも。

助けてやりたい気持ちを必死で抑えて、ただただ傍観に徹していた。

だがあの時だけは、駄目だと思った。

「あの時？」

《……賢、初めて「アレ」に会った時、どう思いましたか？》

「アレって……？」

《「アレ」は「アレ」です。凡そ他の生きとし生けるモノ達とはかけ離れたモノ。闇よりも深い闇を宿した、存在してはならぬモノです。

「アレ」は度々貴方方の前に現れては、貴方方を惑わした。命を命と

も思わず、あろうことか貴方方を手にかけてしまった》

だからあの時、咄嗟とは言え手を出そうとしてしまったと、スワン
プモンは笑った。

スワンプモンが何を言っているのか、何故笑っているのかよく分
からない3人は首を傾げる。

《ああ、すみません。何のことか分からないですよ。大輔、賢。コロ
モンの村でパタモンのデジたまを探していた時のことを覚えてます
か?》

「……………おう」

「……………うん」

コロモンの村にいた時と言えば、2人がパタモンのことで喧嘩をし
てしまい、仲たがいの真っ只中だった。

その時のことは2人にとって黒歴史確定の出来事なので、あまり思
い出したくないのだが、反応しないわけにもいかないので、2人は
しよっぱい顔をしながら小さく返事をした。

《その時に遭遇したでしょう。いや、賢はそれ以前にも遭遇してい
たでしょう。あの悍ましい闇を漂わせた存在と》

「え、あ……………え?」

スワンプモンに言われて、賢は思い出した。

パタモンのデジたまを探している最中と、それ以前で遭遇したもの
と言えば、あいつしかいない。

闇すらも飲み込んでしまいそうな、濃厚な暗黒の気配を漂わせてい
た、あの毒々しいピンク色のデジモンのことだ。

大輔も思い出したようで、顔を引きつらせている。

その時ヒカリは体調不良を訴えてテントで休んでいたため、そのデ
ジモンと遭遇することはなかったものの、その後丈の紋章を探して立
ち寄ったコロッセオでそいつを見ている。

大輔がそのことを説明すると、顔を青くさせて口元を手で覆った。

《「アレ」は、明らかに貴方方を狙っていた。亡き者にしようとして
いた。ワタクシは貴方方を助けたいと願い、そして……………貴方方の世界
に現れることが出来た》

想定していた姿形ではなかったものの、そのデジモンのプレッシャーに圧されて身動きが取れなくなっていた大輔達を引き離すことには成功したし、そのデジモンもスワンプモンの姿を見るなりその場から消えたらしい。

「……も、しかして……あの時現れた、あのドロドロしたやつって」

《はい。ワタクシですよ》

「えー!?あれスワンプモンだったのかよ!?!」

あのデジモンのプレッシャーに押し潰されそうになっていた時、突如として現れたのは蠢くヘドロだった。

意思をもった泥人形は、全身のヘドロを地面に落としながら緩慢な動きで大輔達に歩み寄ってきていた。

その衝撃で我に返った2人と1体は、悲鳴をあげながらその場をダッシュして逃げたのだが、まさかそのヘドロの正体がスワンプモンだったとは!

《世界に参加できない罰を受けていたワタクシは、貴方方から戴いた名の通りの姿となつて、現世に現れることが出来ました。 “アレ” を屠ることも出来ればよかったです。それをしていれば恐らくワタクシの存在そのものが消えていたでしょうねえ》

スワンプモンの名前は、1987年にアメリカの哲学者が考案した思考実験に登場する、スワンプマンが由来となっている。

ハイキングに出かけた男が突然落ちた雷により命を落とし、更に別の雷がすぐ傍にあった沼に落ちた際に化学反応を起こして、死んだ男と同一の姿、意識、記憶を持って生成された。

それがスワンプマン、沼男という意味だ。

この世界にむりやり己の存在をねじ込ませたスワンプモンは、名前の由来通りの姿となつて大輔達の前に現れたのだ。

大輔達を助けるために。

《それが考慮されたようで、新たな罰を受けずに済みましたよ》

スワンプモンは笑った。

咎人で、世界に参加することを許されない身でありながら、大輔達を助けるためにそれを破ってしまったのだから、相応の罰を受けると

思っていたのだが、待てども待てどもその罰が下ることはなかったらしい。

どうやらスワンプモンに罰を与えた存在にとっても、あの襲撃は予想外だったようで、大輔達を助けたことでそれは不問になったようだ。

ただきつと、2度目はないだろうとのことだった。

《これは貴方方が描く物語。貴方方が紡ぐ地平線。傍観者どくしゃであるワタクシが出来るのは、貴方方を見守ることだけ。世界の行く末を決めるのは貴方方なのですから。そうでしょう、《選ばれし子ども達》？》

3人はぐつと唇を噛みしめる。

《選ばれし子ども》と言う言葉の意味を、重みを、3人は誰よりも分かっているから。

《…少しお喋りが過ぎてしまいましたね。そろそろ夢の時間は終わりますよ》

スワンプモンがそう言うと、周りの景色がぼやけて、意識が遠のいていく。

夢の時間は終わりだ。

《これより先、ワタクシと貴方方が再び相まみえることが出来ても、貴方方の手助けをすることは叶わない。ですので、最後に1つだけ》

滲んで浸食していく白い背景の向こうに消えつつあるスワンプモンは、口元の辺りに人差し指を添えながら言った。

《“アレ”を追いなさい》

あのデジモンを追えと。

《“アレ”は恐らく、貴方方が探している歪みと関係している。“アレ”とあの歪みの気配が、全くの同一のものでした》

ずっと見ていたから、スワンプモンは分かっていた。

それを視ていたから、スワンプモンは知っていた。

空間の壁をぶち破り、時間を遡って逃げていったあの歪みと、濃厚な暗黒を纏っていたあのデジモンが、同じ気配をしていたことを。

大輔は、賢は、ヒカリは何か言いたくて口を開くが、言葉が喉から吐き出されることはなかった。

《世界に平和を。世界に安寧を。貴方方なら出来ると信じていますよ。貴方方がくれた、心から》

白い海に沈むように飲み込まれる3人。

後に残されたのは、パステルカラーの花畑に、ポツンと佇むスワンプモンだけとなった。

《……………》

また1人になってしまった。

でも寂しくはない。

大輔も賢もヒカリも、スワンプモンのことを覚えている。

に参加することが出来ない、ただの傍観者どくしゃだとしても。

《ワタクシにできるのは、貴方方の行く末を見守ることだけ…………》

思い描いた未来を現実のものにするために、今何をすればいいのか。

咎人であるスワンプモンに、そこに参加する資格はないが、見届ける義務はある。

あの世界の終焉を、あの世界の結末を。

予定調和の未来から外れ、本当の意味で自分達で描かなければならない未来へ歩まなければならなくなった彼らを。

再び椅子に腰を下ろし、左手を持ち上げると、何も無い空中を撫でるようにすつと横に動かした。

スワンプモンが手を動かすのと連動して、空中に映像が映し出された。

パステルカラーの花畑とは正反対の、無機質な人工物に囲まれている人間の子どもが数人映っていた。

彼らは、これからあの世界の、これからの未来を描いていくために奮闘しながらも、誰にも知られることがない、世界を救う英雄達だ。

“予定外の”というのが頭につくが。

『…………本来なら生まれるはずではなかった世界、紡がれることのない歴史、予定調和を外れた未来…………。この物語の終焉も、結末も、貴方方が望んだ通りに書き記されるとは限りませんよ』

それもまたよろし、とスワンプモンはくつくつと愉快そうに笑っ

た。

コンコン、と控えめなドアのノック音が響く。

しかし返事はない。

ミミとパルモンは互いの顔を見合わせ、申し訳ないと思いながらそつと寝室の扉を開ける。

等間隔に並んでいるベッドの合間の壁に設置されているランプが、優しいオレンジ色に灯っていた。

横並びの9つのベッドは、今は昼頃の時間帯であるため、ドアの正面にある1つのベッドを除いて、当然誰も眠っていない。

ミミとパルモンは、その正面にあるベッドに歩み寄った。

ベッドには、数日前に悍ましい記憶を思い出してしまい、壊れてしまったブイモンが、未だに硬く目を閉ざして横たわっていた。

そんなブイモンを護るように、パタモンとテイルモンとロップモンが、そしてそのベッドの周りに、大輔とヒカリと賢が顔を伏せて寄りかかるように眠っていた。

ミミはそんなブイモン達を、唇を噛みしめながら見下ろした。

手袋をはめた手を握りしめたために、ギリ、と革が鳴った。

『ミミ……』

その僅かな音を間近で聞いたパルモンは、困ったような表情を浮かべてミミを見上げた。

上級生達はナノモンに扱き使われている合間を縫い、寝室に閉じこもる形で出てこない大輔達の様子を、代わる代わる見に来てくれた。

声をかけるだけの人もいれば、様子を見に来たと言う名目でサボりに来る人もいた。

ミミは、後者だった。

そして、ミミは頻繁に大輔達の様子を見に来てくれていた。

ナノモンの人使いの荒さに、お嬢様気質のミミが付いていけなかった、というのもあるが、積極的にナノモンの手伝いをしている上級生達のお陰で、ミミのやる事が少ないのだ。

……その理由を、ミミは分かっている。

子ども達をこれまで引っ張ってくれていたリーダーとサブリーダーの不在、そして深く傷つき、硬く目を閉ざして目の前のベッドで横たわっているブイモンの過去を垣間見たせいだ。

戦争を、争いを知らない子ども達には、見るに堪えない映像だった。

長い間平和が保たれていた日本に生まれた子ども達にとって、戦争などテレビの向こうの出来事ではない。

遠い国の、自分達には関係のない事象なのである。

そもそも子ども達はサマーキャンプに来ただけの、ただの子どもだ。

争いのことなど何も知らない子ども達が、突然世界を救ってほしいと異世界に連れてこられ、右も左も分からないまま、ただがむしやらに、ここまで来た。

この世界を救えば、お家に帰れる、それだけを信じて、それを糧にして頑張ってきた。

……その仕打ちが“コレ”なのかと、子ども達の消沈ぶりは目も当てられない。

その上、真っ先に自分を取り戻したリーダーは時空の歪に巻き込まれて現実世界に戻され、サブリーダーもリーダーの言葉に後押しされるように、子ども達の下から離れて修行の旅に出てしまった。

後に残されたのは目標を、行先を見失った上級生と、途方に暮れている下級生の3人だけだ。

「……………」

ミミが下級生の“お姉さん”を出来ていたのは、5年生が中心となつて子ども達を引っ張ってくれていたからだ。

疲れてもへこたれても嘆いても、大丈夫？ って声をかけてくれてい

だから、ミミは安心して上級生に甘え、下級生達の面倒を見てきた。でもその上級生達は、未だに迷っている。

ゲンナイもナノモンも、それに関しては何も言っていない。

……しかし、本当にそれでいいのだろうか。

だって自分達はこの世界を救うために呼び出されたのだ。

この世界を救わなければ、お家に帰れないのだ。

このままここにいれば、確かにもうこれ以上傷つかなくて済むかもしれない。

ミミはまだ4年生だ。

お友達と喧嘩をするのはよくないこと、喧嘩をしてしまったらごめんなさいをして、仲直りをしましょう、って大人達に言い含められる年齢だ。

そうでなくとも、ミミは争いも傷つけ合いも好きではない。

思っていることをズバズバと言って、お友達に哀しい顔をさせてしまうことは多々あるが、きちんとごめんなさいが出来る子でもある。

でも、それが通用しないことがあるのは、知らなかった。

バイモンを傷つけたあの出来事は、決してごめんなさいで済む問題ではない。

だってバイモンは殺されかけたのだ。お友達を目の前で殺されたのだ。

失った命は2度と戻らないことぐらい、ミミも知っている。

命をかけてデビモンを倒したエンジエモンは、デジたまになって賢の下に戻ってきたけれど、バイモンは違う。

バイモンはずっとずっと昔のデジモンで、もうバイモン以外のバイモンはいないとゲンナイも言っていた。

それはつまり、バイモンのお友達は皆、賢のパタモンのようにデジたまになって戻ってくるが出来なかった、と言うことだ。

ごめんなさいって頭を下げてでも許されないほどに、残酷なことだ。そんなずっとずっと昔の出来事が、今繰り返されようとしている。

《……もしこのままエテモンと戦わずに、次の進化も出来ずに負けちゃったら……またああなるんだろう？》

《また……ブイモンみたいに、犠牲になるデジモンが、いっぱい増えるんだらう……?》

失踪する前、エテモンと戦うために飛び出そうとした太一の言葉が、ミミの脳裏に過る。

ミミ達がこうして迷い、留まっている間にも、ブイモンのように罪のないデジモン達が傷つき、その尊い命を散らしているかもしれない。

……そんなの、絶対に、いやだ。

「……パルモン、アタシ、やっぱり決めた」

『……何を?』

傷つけるのは嫌だ、傷つくのは嫌だ。

でも傷ついた誰かを見捨てるのは、もつと嫌だ。

ベルトに引っ掛けていたデジヴァイスが、薄らと黄緑の光を放った気がした。

みらいのおはなし

——冷たいなあ

身体に纏わりつく冷たいものを鬱陶しく思いながら、ブイモンは息を吐いた。

重たい身体は腕を持ち上げる力も残っていないはずなのに、空に手を伸ばすように揺れながら伸びていた。

見上げれば揺らめく空に歪む白い光。

遠ざかっていくごとに、白い光を包んでいる濃紺が真っ黒に塗りつぶされる範囲が広がっている。

薄らと開けている目から上に向かっていく水分は、纏わりついている冷たいものと混じり合って出ていったことにすら気づかない。

ごぼり、

口から洩れる空気が、不確かな丸を描きながら昇っていった。

「へい、いらつしやい！何名様つすか！」

『お席はこちらです！』

がらりと開かれた引き戸は古き良き昭和の香りを漂わせる、平屋のガラス戸。

部活帰りの高校生と思しき制服姿の男子が5、6人、賑やかにお喋りをしながら入ってきた。

男子だけでなく、そのパートナーらしきデジモン達も一緒だった。

このラーメン屋の店長兼オーナー兼社長である大輔は、従業員と一緒に忙しなく厨房を駆け回っており、ブイモンが接客係の中心となっ

て店を切り盛りしている。

最初は、アメリカで始めたラーメン屋台で、従業員は2人だけだった。

その従業員というのは、もちろん大輔とブイモンのことである。

自由の国と言われているが、実際は日本よりもかなり厳しいアメリカでラーメン屋の屋台を営業するのは、かなり大変だった。

それこそ、アメリカのトップと真面目に議論したり、乱闘寸前にまで行ったりしたが、紆余曲折を経て何とか屋台を引くことを許されたのである。

その時のことは割愛するが、大輔が大人になる頃には既に寿司に次ぐ有名で健康的な日本食としてラーメンはアメリカでも広まっていたものの、昔ながらのジャパニーズスタイルの屋台はアメリカ人の注目を浴びて、あつという間に大輔は一流企業の仲間入りを果たした。アメリカで成功した大輔は今、日本に帰国して社長自ら従業員として厨房に立っている。

社長として会社の社長室に籠っていたこともあったが、それも数年で飽きてしまったのだ。

考える前にまずは行動するタイプの大輔が、社長室でじっとしていられるはずがないのである。

それを聞いた仲間達は、大輔らしいなあなんて苦笑しつつも、彼の作ったラーメンが食べられることを喜んでいた。

有名ラーメン店の社長がいる店として、今日も今日とて彼の店は大繁盛している。

「いらっしや……あ、ヒカリちゃん！」

「こんにちは、大輔くん」

『相変わらず忙しそうね』

『テイルモンも！来てくれたのか！』

がらり、引き戸が再び開かれ、大輔と従業員は一斉に挨拶を交わしたが、相手を見て大輔の目が輝く。

それは、大輔が幼い頃から憧れてやまない、大切な仲間で尊敬する先輩の妹の八神ヒカリとそのパートナーであるテイルモンだった。

ブイモンは2人を調理場前のカウンターテーブルに案内する。

大輔がヒカリとお喋りをするために、ブイモンがさり気なく気を利かせたのだ。

ぐ、と親指を立てて生暖かい微笑みを見せたブイモンに、後でぶちのめそうと大輔が真顔で決意したのを、ブイモンは知らない。

「大輔くん？」

『どうした？』

「っ、いや、何でもない……ははは……」

大輔がこの子に恋をしていたのは、遙か昔だ。

そりゃ憧れていることに変わりはないが、それ以上の気持ちはもう持っていない。

と言うか自分もヒカリもとづくに結婚しているし、何なら子どももいる。

その子ども達は、ついこの前初めての冒険に出かけたばかりだ。

日帰りではあったが、それでも子ども達は楽しかったようで、大輔の息子は大興奮しながらその冒険で何があったのかを教えてくれた。

他の仲間達も似たようなものだったらしく、SNSのグループメッセージはそのことが話題になっていた。

「珍しいね、ヒカリちゃんがこの時間帯に来るの」

従業員達も気を遣ってくれて、大輔がやっていた作業が変わってくれた。

余計なことを、と思いつつも、みんなが集まる時ぐらいしかお喋りしなくなってしまった大切な女の子が来てくれたことが嬉しくて、一旦そのことについては頭の隅に追いやりながらヒカリに話しかける。

大輔が昔からの夢を叶えたように、彼女も自らの夢である幼稚園の先生になるという夢を叶えたのだ。

毎日元気が有り余る子ども達を相手にするのは大変だが、それでも夢を叶えたヒカリはとても生き生きしていた。

ヒカリだけではない、大輔の仲間達は全員それぞれの夢を叶えて、今はその先の夢を追いかけている最中だ。

そのために昔のように集まることは少なくなってしまったが、それ

でも8月1日の記念日だけは、どれだけ忙しくても時間を作って集まるようにしていた。

その集まりがあと1カ月まで迫っている、という平日の昼間に、ヒカリとテイルモンはやってきた。

これまでも仲間達がちよくちよく大輔のラーメン屋に来ることはあったが、大体来るメンバーは決まっている。

専業主婦の京や、料理研究家のミミ、小説家のタケルはしょっちゅう来ているのだが、ヒカリが来るのはとても珍しかった。

別にヒカリが大輔を避けている、とかそういう理由ではなく、ただ単に時間の都合がつかないだけであることは、大輔もちゃんと分かっている。

分かっている、大輔は敢えてそのことを話題した。

ただ何となくよ、つていう返答が返ってくるとばかり思っていたのだが……。

水が入ったグラスを両手で包むように掴み、何故かそつと顔を俯かせる。

『……ヒカリ?』

「……大輔さんに逢いたくなかった、じゃダメかな?」

かと思うとぱつと顔を上げて、笑みを浮かべながら彼女はそう言った。

きっとその言葉は普通の男ならドキリとするものだろうし、昔の大輔なら舞い上がっていただろう。

しかし今はもう彼女を1人の仲間として見ている大輔を知っているブイモンは、そんな彼女の言葉にはてなと首を傾げた。

あと1カ月もすれば昔の仲間が集まる日が来るのだから、その言いは何となくおかしいように思えたのである。

それはテイルモンも同じだったようで、心配そうに彼女を隣の席から見上げていた。

ただ1人、大輔だけは分かっているとでも言いたげに、曖昧な微笑みを浮かべている。

『ヒカリ……』

「いらつしやいませ……ああ、社長！」

何か言わなければと思ったブイモンは彼女の名を呼び掛けたが、同時に引き戸が開く音がした。

従業員が社長の代わりに挨拶をしようとしたが、入ってきた人物に見覚えがあったので大輔を呼ぶ。

大輔とヒカリが入り口の方を見ると、これまた珍しい客がいた。

「やあ、大輔。あれ、ヒカリさんもいたんだ」

『来たよ』

「賢!?!」

「賢くん！」

『『ワームモン!』』

それは、大輔の親友で刑事をやっている、元天才少年の一乗寺賢とそのパートナーであるワームモンだった。

パートナーデジモンを持つ人間として初の刑事である賢は、元選ばれし子どもとして人間界で悪さをするデジモンが起こした事件を解決したり、人間界に迷い込んだデジモンを悪用する人間を取り締まったりする課を作り、その課長として日夜奔走している。

課を纏める1番偉い立場であるために、恐らく仲間内で1、2を争うほどに忙しい彼が、大輔の店に来ることは大変珍しかった。

「何だ、何だ?今日は珍しい客万来だな!」

「ははは、大輔も相変わらずで安心したよ。ヒカリさん、隣いいかな?」

「勿論!」

接客をしていたブイモンが、ワームモン用の椅子を持ってきてくれたので、カウンターテーブルに備え付けて座らせる。

接客担当の従業員達が、自分達は気にしないで旧友たちと交流を深めてください、と言ってくれたので、ブイモンも会話に参加した。

『ケンもヒカリも珍しいな!いつもは来いって言っても時間がないって来れないのに』

「ははは、それに関しては申し訳ないと思ってるよ」

『でも今日は何となくダイスケのラーメン食べたくなったんだよね、

ケンちゃん』

『あら、ケンもなの？ヒカリもそうやって今日ここに来たのよ』

「……そうだったんだ？」

「……うん」

「……ヒカリちゃん」

曖昧に微笑むヒカリに、大輔はいつもの太陽のような表情は鳴りを潜め、ぽつりと落とすように彼女の名前を呼ぶ。

昔から、このヒカリという子は本当のことほど隠したがる子だった。

何があつたのか、しつこくしつこく聞いても大丈夫だからとしか言わず、その癖隠していることがすぐにばれるような振る舞いをする。

タケルはヒカリのそう言うところに少々腹を立てていた。

気づいてほしいって、どうしたって聞いてほしいって言いたげな表情を浮かべているくせに、尋ねると何でもないようなふりをする。

その癖だけは許容できない、と愚痴っていたタケルに、お前も似たようなもんだよって大輔が指摘してやったのは、中学生の時だった。

こういう時は、言ってくれるまで待つていた方がいいのは、ブイモンもよく分かっていた。

だから、指摘しようと口を開きかけて、やめた。

それに……。

ブイモンはちらりと大輔を見やる。

ここ最近、パートナーである大輔の様子もおかしかった。

あまり過去を振り返ることをしない大輔が、ここ半年ほどアルバムを引っ張り出しては一人で眺めていたり、冒険の後に撮ったビデオを深夜に流していたり……。

そう言うのは仲間内で集まった時にしか見ないのに、ましてや大人になつてからはみんなそれぞれでその事情で忙しく、記念日以外では年に数回集まればいい方だったから、思い出を振り返る機会だつて少なかつた。

そんな大輔が、ブイモンを誘つたり仲間誰かと一緒に見たりするわけでもないのに、アルバムやビデオを眺めているのは、ブイモンか

ら見てもおかしいと疑う行動ではあった。

しかし、ブイモンはそのことについて指摘したり尋ねたりすることは、終ぞなかった。

あれで大輔は頑固なところがあり、聞いたり尋ねたりしなければ何も言わないし、話さないと決めたら絶対に話さない。

ブイモンにも言わず、仲間も誘わず1人で思い出に耽っているということは、何か仲間には言えないことでも抱えているのだろう、というだけでは何となく分かったから、指摘しなかったのである。

——今なら、喧嘩をしても無理やり聞き出せばよかったと、後悔ばかりが胸を締め付ける。

「……俺も今日は何となく、2人が来るんじゃないかと思ってたよ」

ヒカリと賢の前で肘をつき、手のひらに顎を乗せながら、無理やり笑みを浮かべているような表情を見せる。

ブイモンもテイルモンもワームモンも、そんな大輔が珍しくて目を丸くしたのだが、賢とヒカリはそっかただけ言って、笑った。

……その笑みが、目の前にいる大輔と同じような笑みで、ブイモンは寒気を覚えた。

「……2人とも、ご注文はいかがなさいますか?」

お店は心地いい喧噪に包まれているはずなのに、その一角だけが妙に静かな気がして、パートナー達は思わず互いの顔を見合わせる。

そんなパートナー達の気持ちなんか知ってか知らずか、大輔は先ほどまで浮かべていた神秘的な笑みを消して、営業用の笑みを浮かべながら注文を取った。

2人と2体も、大輔の丁寧な言葉遣いで思い出したらしく、気恥ずかしそうにメニュー表を取って眺めた。

大輔の店は老若男女問わず、連日沢山のお客さんが来るためにメニューも豊富なので、来るたびに迷うのだとヒカリの親友であり、賢の奥さんである京が言っていたのを思い出しながら、2人は注文をする。

「私、野菜ラーメン。お野菜マシマシで細麺ね」

『ワタシはワントン麺で』

「僕はチャーシュー麺にしようかな。麺は太麺で」

『僕、あんかけラーメンがいい!』

「あいよ!」

『毎度ありい!』

大輔とブイモンの元気な声が、厨房に響き渡る。

従業員たちがそれに負けじと、大きく返事をした。

『……………ここにいたのね』

嗅ぎ慣れない新緑の匂いが漂っている。

緩やかな風が吹いて周りの木々を揺らしているから、カサカサという心地いい自然のメロディーが聞こえてきた。

目の前には太陽の光を反射して、眩く煌めく湖の水面。

太一達初代の選ばれし子ども達が、初めてデジタルワールドでキャンプをした場所であり、全てを終えた後でパートナー達とお別れをした場所でもある。

そんな場所に、ブイモンはいた。

8月1日の記念日で何度かキャンプをした場所だから、ブイモンも知っていた。

俺達の思い出の場所なんだ、と楽しそうに語っていた太一を、羨ましそうにしていた大輔の顔も鮮明に思い出せる。

……………どれだけ見上げて、最愛のパートナーは何処にもいない。

『……………テイルモン、何でここに』

『あんたがいないってんで、探しに来たのよ』

レオモン、心配してたわよ、と言うとテイルモンはブイモンの隣に座った。

そう言われても申し訳ない気持ちがあく湧いてこなかったから、自分の心はすっかり死んでしまったのだなあ、とブイモンは光を失った紅い目を湖に戻す。

大輔が、死んだ。

半年前のことだ。

その日は年に1度の記念日だった。

どんなに忙しくとも、その日だけは絶対にみんなが集まろうと決めていた、子ども達にとつてとても大事な日だ。

そんな日に襲い掛かった、悲劇。

空間をぶち破って現れた、正体不明のデジモン。

大輔達はゲンナイに頼まれ、遅刻していた太一達よりも先に現場に駆け付け、謎のデジモンと対峙した。

太一とヤマトのパートナーが、チンロンモンから力を借りて、オメガモンへと至って駆け付けてくれるまでの、いわば時間稼ぎであった。

オメガモンは、歴代の選ばれし子ども達の中でも、屈指の実力を誇る強者だ。

1度だけ敗北を許してしまった戦いはあったものの、それでも最後の切り札として常に君臨していた。

ブイモンとワームモンもチンロンモンの力を借りれば、オメガモンと同等の、あるいはそれ以上の強者となれるが、そこに至るまでの進化に障害がある。

純正古代種であるブイモンは、パートナーの力を借りても完全体に進化するのに、他のデジモンと比べるともの凄い負担と負荷がかかる。

だからこそ、ジヨグレス進化というデジコアのデータが近いデジモン同士で、融合進化をするという方法があった。

しかしそのジヨグレス進化はアーマー進化同様、失われた古代の進化方であり、どのようなきっかけや方法でジヨグレスをするのかという資料が残されていなかったために、ゲンナイがテイルモンのホーリーリングを使ってジヨグレスに必要なエネルギーを補っていた。

そのホーリーリングも持ち主であるテイルモンに返してしまっただし、世界の平和を取り戻した今、強大な力は必要ない。

それが、仇となった形になってしまった。

大輔は死んだ。

駆けつけたオメガモンのオメガソードにより、水晶を砕かれた謎のデジモンは、最後の足掻きと言わんばかりに悍ましいエネルギーを急速に収集して、辺り一帯を吹っ飛ばすような大爆発を起こした。

その爆発に巻き込まれて、大輔は死んだ。

大輔だけじゃない、隣に座っているテイルモンのパートナーであるヒカリも、今ここにはいないワームモンのパートナーである賢も。

パートナーの子どもを守るために命を落としたデジモンはたくさんいたが、パートナーを失ったデジモンはまだいなかったために、デジタルワールド側の管理者達や、現実世界の方もこれには慌てた。

今や世界中の人間、赤ちゃんや老人、貧困層、富裕層など年齢や家庭など関係なく平等にパートナーデジモンが与えられている。

しかしその中でも未だパートナーの人間を亡くしたデジモンは現れていなかったために、その際のデジモン達の処遇を決めていなかったのだ。

おまけに様々な理由があって、今エージェントのオリジナルであるゲンナイも不在だ。

今デジタルワールドの管理の代表はゲンナイのコピーが務めており、パートナーを亡くしたデジモンの処遇について、今早急に話し合いを進めている最中である。

なのでパートナーを失ったブイモン達は、レオモンの保護の下、デジタルワールドにて待機だ。

パートナーの人間がいないデジモンが現実世界に留まる理由はないし、そもそも人間とデジモンの絆を繋ぐデジヴァイスがあるからこそ、現実世界は電波障害による被害を免れている。

デジヴァイスがないデジモンは、現実世界にとって脅威でしかないのだ。

『……大丈夫？』

『……平気、だよ』

『そんな今にも死にそうな目えしているのにな？』

『だったら聞かないですよ』

『こうやって聞きでもしないと、あんた一生誰にも言わないでしょう』

昔から遠慮のないデジモンではあったけれど、今は輪をかけて遠慮がない。

テイルモンだってブイモンと同じように、パートナーを亡くしているのに。

そうオブラートに包んで尋ねてみると、テイルモンは眉をひそめた。

『……平気なわけ、大丈夫なわけないでしょう。まだ半年よ？半年しか経っていないのよ？たった半年で立ち直れるわけないじゃないっ！！』

テイルモンが喚いた。

その青い目にいつもの意志の強い輝きはなく、悔しそうに歪められていた。

テイルモンは他のデジモン達と違い、1体だけはぐれて、他の仲間よりも遅れてヒカリと出会った。

デジタルワールドを救うための切り札として、ゲンナイ達エージェントによつて、デジたまから用意されていたアグモン達パートナーデジモンだったが、ダークマスターズ最強のデジモン・ピエモンの襲撃にあい、ゲンナイによつて連れ出された際に、1つだけデジたまを落としてしまった。

それが、テイルモンのデジたまだ。

デジたまから孵ったテイルモンは、自分が何者なのか分からないまま、ただ誰かを待つ日々を過ごしながら生きていた。

そのうち、待っているだけでは何も始まらないと思い始め、プロットモンに進化した時に旅に出た。

何を待っているのか、何を求めているのかも分からないまま旅に出たプロットモンを待ち受けていたのは、嘲笑う深い闇。

子ども達を抹殺し、デジタルワールドと現実世界、両方の支配を企む闇の帝王・ヴァンデモン。

プロットモンが持っていたデジヴァイスと紋章から、選ばれし子どもとともに世界を救うデジモンだと分かったヴァンデモンは、プロットモンを捕らえ、心が折れるほど痛めつけてやれば、プロットモンの

心は簡単に折れてしまった。

自分の役目も使命も、長い年月の間に忘れてしまったプロットモンは、やがてテイルモンへと進化し、いつしかヴァンデモンの忠実な下僕と成り下がってしまった。

ヴァンデモンに対する怒りや憎しみは忘れなくとも、もうそれ以外の生き方が分からなかったテイルモンが、現実世界に侵攻したヴァンデモンについていった先で出会ったのが、パートナーのヒカリだ。

本当ならアグモン達と同じように、ゲンナイが連れて行ってくれたファイル島で、パートナーの子どもと出会って、一緒に冒険をするはずだったが、そんな経緯があって遅れてしまった。

それだけに、ヒカリを失ってしまったショックは大きい。

『……ごめんなさい、言い過ぎたわ』

『……別に』

興奮していたテイルモンははっと我に返り、ぼつが悪そうに謝罪の言葉を口にしたが、ブイモンの返事は素っ気ないものだった。

元氣いっぱい、今日を生きること全力投球していたブイモンが、大輔を失ってからその面影がまるでない。

テイルモンは目を細める。

『……皮肉なものね』

『……』

『……ワタシ達はパートナーが全てだわ。パートナーを中心に全てが回っている。ヒカリが戦ってって言えばワタシは戦うし、護ってって言えば護る。ワタシ達は何処までも、パートナーありきなよ』

『……』

『それなのに世界は、闇に覆われて蝕まれる世界は、ワタシ達に助けを求めておきながら、ワタシ達が助けを求めても知らんぷりだわ。世界を救うために奔走したヒカリ達が死んでも、世界は何事もなかったかみたいに巡り続けてる。朝が来て、夜が来て、朝日が昇って、月が昇って……。こんなことってある？こんなことがあって、いいと思う？』

『……』

『ヴァンデモンの下にいた時と同じぐらい、今はこの世界が憎くてた

まらないわ』

でも、それでも、憎くてたまらなくとも、完全に嫌いになることはできない。

だってこの世界は自分の故郷で、パートナーのヒカリが命をかけて護ってくれた大切な世界だから。

世界がヒカリを奪ったのではない、悪いのは、ヒカリを奪ったのは、あの謎のデジモンだ。

世界を恨むのはお門違いというものだ。

……例えばパートナーと一緒に笑い合っているデジモン達を見る度に、喉を掻き箸りたくなるほどの悲鳴をあげたくなるのだとしても。

『……………』

『……変なこと言ったわね、忘れてちようだい。もう夕暮れだし、そろそろ帰りましょう?』

『……もう少し、ここにいます』

立ち上がり、手を差し伸べてくるテイルモンに、しかしブイモンは顔を逸らしながらそう告げた。

そう、とテイルモンはそれ以上追及せず、ただ暗くなる前に帰ってきなさいね、とだけ言って、背を向けた。

風が吹く。

見上げれば、現実世界とは違う茜色の空模様だった。

『……………』

デジタルワールドに帰ってきて、半年。

半年も経ったと言うべきか、半年しか経っていないと言うべきか。

月日が流れたことに変わりはないが、未だにデジタルワールドの空気に慣れない。

眠りから目覚めてすぐに大輔と一緒に現実世界に渡って、ずっと現実世界で過ごしてきたブイモンは、今や世界でも少数しかいない“古代種”と呼ばれている、太古に生きていたデジモンである。

今とは全く環境が異なる時代だった上に、眠りにつく前の記憶は全くと言っていいほど残っていなかったため、ここが故郷だと言われても違和感しかなかった。

どれだけ時間が過ぎても、日にちが経つても、`ここ`が自分の居場所とはどうしても思えなかった。

テイルモンとワームモンのように割り切ることが出来ず、デジタルワールドに帰ってきたその日からずっと、ゲンナイの隠れ家に引き籠っていた。

時々冒険していた時の仲間達や、先輩デジモン達が心配して様子を見に来てくれたが、どんな言葉をかけられたのか、それに対してどう返答したのかも覚えていない。

そのうち慣れるよ、と言ってくれたゲンナイはもういない。

事情は知らない。ただここ数か月、隠れ家に帰らないという日々が続いて、何やらこそそそしていたことだけは知っている。

それを問いたただす気力もなくて、ただぼんやりとした日々を過ごしていたら、いつの間にかいなくなってしまっていた。

何処に行ったの、とテイルモンに尋ねたが、テイルモンも知らないと言った。

それ以上は興味が持てなかったのだ、ふーんとだけ返して、それっきりだった。

もう、どうでもよかったのだ。

この半年間、ブイモンは抜け殻だった。

パートナーのいない世界は、まさに灰色の景色だった。

目が覚める前のことは何も覚えておらず、気が付いた時には自分以外の同胞はこの世界から消えており、現代種の楽園となっていた故郷を色づけてくれていたのは、他でもないパートナーだ。

あの頃は前しか見ていなかった。

自分を目覚めさせてくれたパートナーや、自分と同じように眠りから覚めた仲間と一緒に、この世界を救うために駆け回った。

デジタルワールド側の勝手な都合で、何年、何十年、何百年、何千年もの間眠っていて、いざ危機が訪れると助けてくれなんて言っ勝手に目覚めさせられたけれど、そんなものすら気にならないぐらい必死だった。

冒険が終わり、危機が去り、世界が平和になってからも、自分のパー

トナーは夢を叶えるために走り続けていた。

大人になってからは幾分か落ち着いたけれど、こうと決めたら突っ走るのには相変わらずで、そんなパートナーについていけるのは自分だけだと、信じていた。

でもそんな大輔は、もういない。

『……………』

ブイモンにとっても、大輔はブイモンの全てだった。
命そのものだった。

長い眠りについていた間に、同胞達はみんな抗えぬ時代の波に流され、ブイモンは文字通り1人ぼっちだった。

大輔といった時はそんなこと考える暇もなかったのに、大輔が死んでしまい、現実世界に留まる理由がなくなり、デジタルワールドに戻ってきて初めて、ブイモンは自身が置かれている立場を思い知った。

ワームモンとテイルモンもアーマー進化とジヨグレス進化が可能な古代種デジモンだが、ブイモンと違い古代種そのものではなく、古代種のデータを受け継いだデジモンである。

変わりゆく時代の波についていくことが出来ずに、絶滅してしまつた純正の古代種であるブイモン、ホークモン、アルマジモンと違い、パタモン、テイルモン、ワームモンはうまくその波に乗って、現代に生きることに特化することが出来た。

それぞれの種族の中でも、アーマー進化が出来る個体と出来ない個体があり、タケルのパタモンとヒカリのテイルモンはアーマー進化が可能な個体だったが故に、再度選ばれたのである。

しかしパタモンとテイルモンは飽くまでも、“古代種のデータがDNAに刻まれている現代種”であるので、パタモン系やテイルモン系それぞれの集落が存在していた。

パートナーに会えなかつた間、パタモン達は冒険した仲間達だけでなく、そう言った同種族の集落で過ごしていたらしい。

ワームモンも同じだ。

パタモンとテイルモンと比べると古代種のデータが強く出ているものの、どちらかと言えば現代種寄りの種族である。

数は少ないがワームモンだけの集落もちゃんと存在しており、賢のワームモンはその集落に身を寄せている。

ブイモンは、違う。

大輔のブイモンは、この世で大輔のブイモンだけだ。

集落なんて当然ないので、デジタルワールドに帰ってきた時は、ゲンナイの下で世話になっていた。

そのゲンナイも、今はもういない。

代わりにはじまりの町を守護しているレオモンやエレキモンの下において、時々赤ちゃんデジモンの世話を手伝っているのだが……虚しさは晴れないし、心の穴も埋まることはない。

『……ダイスケ』

ぽつりと呟かれる、最愛のパートナーの名前。

それに答える者は、もういない。

1人ぼっちだったブイモンの心の隙間を埋めてくれていた者は、何処にもいない。

淋しさと恋しさで何度名前を呼んでも、どうしたんだよって苦笑しながら声をかけてくれる者は、もういないのだ。

世界にたった1人ぼっちで放り出された、可哀想な青い龍の子どもに、手を差し伸べてくれる者は誰もいないのだ。

ああ、本当に、人生というのは本当に、かくもままならないものである。

助けてくれと手を伸ばして縋ってきた世界は、平和を守った龍の子どもが1人ぼっちで泣いていても、見向きもしない。

世界が平和になったのなら、英雄もヒーローも必要ないのだ。

用済みなのだ。

2つの世界は以前よりも近づいているものの、デジタルワールド側の“そう言った理”は太一達の代から問題になっており、度々議論になっているのだが、どれだけ話し合いを重ねても溝はなかなか埋まらないらしい。

でももう、どうでもいい。

そんなもの、どうでもいい。

パートナーがいない自分には、もう関係ないのだ。

1人ぼっちになった自分を、そして死んでしまったパートナーを助けてくれなかった世界など、もう知ったことではないのだ。

『ダイスケ』

もう1度、呟く。

ひよお、と背後から冷たい風が吹いた。

は、と見上げると、茜色だった空はいつの間にか濃紺に染まっており、白い光を放つ満月が浮かんでいた。

『……………』

命は生まれる。命は死ぬ。

それはまるで地平線の向こうから太陽が昇り、朝が巡るように。

それはまるで散りばめられた星空に月が浮かび、夜が廻るように。

変わりゆく世界に不要だと切り捨てられた同胞達みたいに、大輔の

命は呆気なく散ってしまった。

自分は一体、何のために頑張ってきたのだろうか。

大輔は一体、何のために世界を救ってきたのだろうか。

色んなものを失ったブイモンにとって、大輔だけが全てだったの

に。

それをおくびにも出さずに、ただ前だけを見てひたすら頑張ってきたというのに、助けを求めてきた世界を死に物狂いで救った結果がこれだというのなら。

《ブイモン！》

不意に、聞こえてきたのは懐かしいパートナーの声。

たった半年、もう半年。

鮮明に届いたのは、現実か幻か。

《どうしたんだよ、そんな顔して。らしくねえぞ？》

『…………おれ、らしく、ない』

そんなことあるはずなのに、そんなわけがないのに、底抜けに明るい大輔の声と言葉が聞こえてくる。

《ほら》

声がる方向に目を向ける。

広がる湖はとても静かで、波しぶきの音すら聞こえてこない。
白い光を放つ満月が、湖に浮かんでいる。
ぽう、と。

湖に反射している満月の中に、懐かしい姿が浮かんだ。
一緒に冒険していた時の、大輔の姿だ。

首元にファーがついた、炎の模様が描かれたジャケット。

頭部には尊敬してやまない先輩から譲り受けた、少し古いゴーグル。

ああ、懐かしいなあ、なんて光を失った紅い瞳で、ぼんやりと月の
中の幻影を見つめる。

事あるごとに誇らしげに自慢してきたあのゴーグルは、彼の子ども
の頃に瓜二つな彼の息子が引き継いだ。

もう一緒に冒険はできなくなってしまったけれど、彼にそっくりな
息子がデジタルワールドを駆け巡っている。

また冒険したいなあ、つて子どもの頃から変わらない笑顔を浮かべ
て自分を見下ろしていたのが、今は懐かしい。

『……ダイスケエ……！』

目の前が滲む。みるみる表情が歪んでいく。

ぼろり、と大粒の涙が次から次へと溢れて、ぼたぼたと流れていく。
抱えた膝に涙が落ちる。

大輔がこの世を去ってしまったから、バイモンの心も一緒に死んで
しまった。

何を言われても、何を聞いても、もうバイモンの心が動くことはな
かった。

ただずつと、月日が流れていく世界に“居た”だけだった。

時間は振り返ることなく、世界は止まることなく、バイモンを容赦
なく置き去りにしていく。

『……会いたいよお……！』

もう1度、大輔に会いたい。

恋しくてたまらない、世界でたった1人だけのバイモンのパート
ナー。

あまりにも突然なサヨナラだった。

歳を重ねて、大輔の子どもが大人になって、結婚して、子どもを産んで、大輔はお祖父ちゃんになって、だんだん昔のように動き回るこ
とが出来なくなつて、そしていずれはベッドや畳の上で静かに息を引
き取るものだと信じていた。

人間はそういうものだ、大輔も太一も、他の子ども達もそう言っ
ていた。

丈と光子郎だけは、人生何があるか分からないから、一概にはそう
言えないよと苦笑していたけれど。

《ブイモン》

声が、聞こえる。

止まらない涙を拭うことも忘れて、ブイモンは顔を上げた。

湖に浮かぶ月の中の大輔が、いつもとは違う柔らかい笑みを浮かべ
ながら、手を差し伸べてきた。

——ああ、

『……おれも、そつちにいきたい』

涙でぐしゃぐしゃになった顔に、ぎこちない笑みが浮かぶ。

手を伸ばす。一歩足を踏み出す。

ぱしゅん、と足元に冷たい感触が伝わった。

『つれてって』

どうして置いていったの。

世界で一人ぼっちの自分には、もう何も残っていないのに。

どうせなら一緒に連れて行ってほしかった。

『おれも……』

ぱしゅん、ぱしゅん、と一歩踏み出すごとに、冷たい水の感触がせ
り上がってきている。

水面が揺れる。月の中の大輔は、優しく微笑みながら手を差し伸べ
ていた。

ぱしゅん、ぱしゅん

あと少しで、手が届く。

ああ、もう、早く、

『.....』
死にたい』

ばしやんつ！

水が跳ねる。

月の中に浮かんでいたはずの大輔が、目を赤く光らせながら、狂ったような笑みを浮かべた。

《いらぬなら、その器我らに寄越せ》

その口から発せられた言葉は、大輔の声とは似ても似つかないものだった。

みらいといま

——坂を転がっていく石は、もう壊れることでしか止まらない。

季節は秋の終わりから冬の始まり。木枯らしが吹き始めて、街行く人達がマフラーに顔を埋める季節になった頃だ。

肌寒い外とは無縁の屋内、机に積み上げられた書類の山を何とか片づけた太一は、同じ姿勢を保っていたせいで硬くなっている身体をほぐすようにストレッチをすると、背中からばきりという嫌な音が聞こえた気がした。

反射的に前かがみになって、音がした辺りに手を当てていてと呟いた。

「八神外交官、今日はもうお帰りになられた方がいいのでは……」

疲れた顔をしながらストレッチをしている太一に、部下たちが気を使つて声をかけてきた。

「そうですよ。急がなきゃならない書類は特にならないのに、何でそこまで根詰めちゃってるんですか？ご家族心配しますよ？」

「あ、こらー！」

根を詰めている太一のことを心配してのセリフだったが、別の部下が慌ててそれを窘める。

は、とその場にいた全員が顔を青ざめさせて、太一の方を見やった。窓の方に顔を向けているために、彼の表情を伺うことはできないのだが、天井に伸ばした両腕が一瞬だけ震えたのが見えた。

しかし振り返った太一の表情はいつもと変わらず、そうだなくなんて呑気な返事が返ってくる。

そのことにほっとしつつも、部下たちは余計なことを言い放った若手を睨んだり、小突いたりした。

すみません、つて若手は苦笑いしながら、声に出さずに周りに謝罪をしている。

気づいているのかいないのか、太一は深く息を吐きながら帰り支度をのろのろと始めた。

3カ月前。

それは、太一の最愛の妹と、可愛がっていた後輩、それからその親友である3人が悲劇に見舞われて命を落とした日だ。

奇しくもその日は、今やデジタルワールドと現実世界の架け橋である、元祖選ばれし子ども達にとっての記念日でもあった。

かけがえのないパートナー達と出会い、苦しいことも悲しいことも、嬉しいことだつて共有してきた大事な記念日が、一瞬にして厄災の日として塗り潰されてしまった。

最初の2週間は、最愛の妹がいなくなってしまったことが信じられなくて、ずっと部屋に籠っていた。

次の2週間は、足元からじわじわと燻る炎に身を焼かされていくように、妹がいなくなつてしまったことを実感してきて、涙がボロボロと溢れて止まらなかった。

……しかし世界はそんな太一を置いてけぼりにして時を刻んでいく。

例えば太一がヒカリの死を受け入れられずに目を背けようとも、何度も朝は巡ってくる。

何事もなかったかのように太陽は昇るし、時間が来れば地平線の向こうに沈んでいく。

世界はなんて残酷なのだろう。

どれだけ太一が時を戻してほしいと願っても、時が止まってほしいと望んでも、地球が逆回転することはないし、時間は一方的に未来へ流れていく。

デジモンが死んでもデジたまに戻るように、人間が生き返ることは決してないのだ。

妹達が死んだのがデジタルワールドだとしても、デジタルワールド

の理に人間は組み込まれていないから、命が巡ることはないのだ。

分かっている。

分かっているから、悲しい。

哀しい。

「……………」

肌に小さい針がいくつも突き刺さってくるような風が吹いている。

短くなった陽はとつくに地平線の向こうに沈み切っており、吐いた息は少し白かった。

見上げた夜空は、都会の強すぎる灯りのせいで、小さな星はかき消されている。

腕時計を見れば、まだ20時にもなっていないかった。

記念日以外でこんなに早く帰るのは初めてだな、と太一はぼんやり思いながら帰宅の路につく。

太一が職場に復帰したのは2カ月前だ。

上司は『無理をするな』と太一を気遣ってくれたが、太一は曖昧に微笑みだけで返事をしなかった。

復帰してから、太一は何かにとり憑かれるように仕事に没頭した。

外交官として世界中を飛び回るだけでなく、デジタルワールドと現実世界を行き来して、寝る暇もないぐらい忙しい時だつてここまでではなかった、と部下や上司が心配するほど鬼気迫っていた。

家に帰らず、職場で寝泊まりをする日々、睡眠時間だつてまともにとっていたわけでもなく、深夜の3時ぐらいいまで仕事をして、3時間仮眠をとつて、6時に起きてまた仕事をする、という日々を繰り返していた。

時々彼の妻から電話がかかってくるきたり、メッセージが送られてきたりするが、太一は大丈夫だという返事しかしなかった。

妻も、太一が仕事に没頭している理由を知っているから、強く言うことが出来ずにいた。

時々着替えや弁当を持ってきてくれていたけれど、頑張つてね、お疲れ様という言葉はかけても帰ってきてとは言つてこなかった。

そんな日々が2カ月近く。

とうとう部下達からストップの声がかかった太一は、休んでいた1カ月の間に溜まっていた書類をほぼ終えてしまったこともあったので、素直に帰ることにした。

職場を出る前に、妻には連絡してある。

数秒後に来た返事を見て、申し訳ないことをしたなあと苦笑した。

いや、苦笑できる立場か、と今度は自嘲する。

太一が今守らなければならぬのは今の家族、妻と子供であって、妹の家族ではないのだ。

もう妹は自分の庇護を離れて、この人とならという相手を見つけていたのだ。

それなのに自分は、庇護をとうに離れた妹のことばかり考えて、守らなければならぬ家族を蔑ろにして、ほったらかしにして。

(……何やってるんだろうなあ、俺)

雑多な人込みをかき分けながら、ふらふらと夜の街を歩く太一の思考は、ずぶずぶと沈んでいくばかりだ。

ここ2カ月の自分の行動を振り返れば、妻から三行半を突き付けられてもおかしくないようなことばかりしているが、妻は太一を労わったり心配したりする言葉ばかりかけてきてくれるから、本当に頭が上がない。

いつも通り妻に何か手土産でも買おうかと、煌々と灯っている店の窓の向こうをぼんやりと眺めていたら、背後からポンと叩かれた。

振り返る。そこにいたのは、

「やつほ、太一くん」

一番可愛がっていた後輩の、お姉さん。

「え、ジュ、ジュンさん……」

彼と同じだった、何をしてもしも収まらなかった爆発頭は、大人になってからあてたストレートパーマで、毛先が少しだけ跳ねた髪型になっていた。

そんな姉を、大輔はいつも嬉々としていじっていたが、その倍ぐらい姉にいじられて最後の方には口喧嘩で終わる、というパターンが恒例になっていた。

そんな彼らを、自分を含めた仲間達はよく笑いながら囃し立てたり、やんわりと宥めていたのが、今は懐かしい。

「ひ、久しぶり……になるのかな……」

「そうね……大輔達の葬式以来かな」

ピクリ、と太一の頬が一瞬だけ引きつる。

本当に一瞬だったが、ジユンは目ざとく気付いて苦笑を浮かべた。ジユンと大輔と違って、太一とヒカリは本当に仲のいい兄妹だったから、ヒカリが亡くなった時の落ち込みようは尋常ではなかった。

通夜の時も葬儀の時も出棺の時も、太一はずっと顔を俯かせて、仲間や友人に話しかけられても何の反応も見せていなかったのだが、流石に3か月も経てば日常生活を送れるぐらいには回復したらしい、とジユンは安堵の息を吐いた。

「……3か月、かあ。時が経つのは早いわねえ」

「……………」

今度は目に見えて太一の肩が跳ねる。

それぞれの妹と弟が亡くなってから、まだ3か月、もう3か月。

あつという間とも思えるし、まだそれぐらいしか経っていないとも思える。

日常生活を送れるぐらいには回復できても、妹を失った傷を癒すにはまだ早い。

大人になっても顔を合わせればじゃれ合いのような喧嘩をしていたジユンでさえ、弟がこの世を去ってしまったことがとても悲しいのだから。

「……もう職場復帰してるんだね」

「……上司は、まだ休んでいてもいいって、言ってくれたんですけど……………」

「んー、そうだよねえ。分かるわ。私もまだしんどいんだけどさ、なんかしてないと発狂しそうでさあ……………」

あはは、って笑う彼女の笑顔に、いつもの豪快さは感じられない。

それでも彼女の笑顔はかつての彼女の弟を思い起こさせるには十分で、太一は更に泣きたくなった。

もしもここで京に会っていたら、太一の涙腺はたちまち決壊していたことだろう。

今も、唇を噛みしめていないと、涙をこらえることが出来ない。

「……3か月ってさあ、長いようで短いよね」

「……………」

「大輔って普段はアメリカに住んでたじゃない？だからここにいないのは、大輔がアメリカに帰ったからで、どうしても死んじゃったって思えなくてさあ……」

「……………」

「太一くん達のこと違って、アタシと大輔って仲のいい姉弟とは言えなかったじゃん？まあ、半分ぐらいはアタシが大輔のことからかってたせいなんだけど……」

「……………」

「……こんなことになっちゃうんだったら、もっと仲良くしておけばよかったって、今更になって思うんだよね。あんな風にからかって、いじってコミュニケーション取るんじゃなくてさ、ちゃんと話せばよかったって」

「……………」

太一は何も言わない。

1人でべらべらと喋っているジュンの言葉に、ただ耳を傾けている。

彼女の声は、震えていた。

「……この3か月さあ、家事やってても子どもの相手してても、仕事してても、ずーっと大輔のことばかりか思い出すんだけどさ、それが最近の大輔ばかりなんだよね。子どもの頃の大輔のこと、あんまり思い出せないの。びっくりしたよ。子どもの頃の大輔だったら、たぶん太一くんやヒカリちゃん達の方が知ってたんじゃないかな」

「……あの頃のジュンさん、色んなところで大輔の悪口言っていましたもんね」

流石にそれはどうなんだ、と思ってました、と太一は努めて普通を振舞って苦笑いを浮かべる。

うん、つてジユンは頷いた。

大輔のことを、本当に嫌っていたわけではないのだ。

ジユンの性格上、本当に嫌いなものは口にもしたくないから、大輔のことを嫌っていたら、行く先々で大輔の悪口を話題にするはずがないのである。

だが良くも悪くも真つすぐで、疑うことを知らない大輔は、姉がそういう性格だということも忘れて姉に突っかかっていった。

姉と違って姉のことを心底嫌っていて、姉と同じように行く先々で姉の悪口を言っていた。

その人の本質を無意識に理解してしまう大輔にしては珍しく、姉の真意や本意に気づかず、姉の言っていた言葉を真に受けて、同じように返していたのである。

兄と仲のいいヒカリに叱責されてからは、姉の悪口も目に見えて減っていたが、それでもギスギスとした空気は変わらず、まともに会話を交わしたのは、たぶん大輔が高校を卒業した頃だ。

大輔達の冒険が終わった後、デジタルワールドの存在が少しずつ認知され始めて、ジユンの下にもパートナーがやってきても、長年の確執をそう簡単に払しょくできるはずもなく、ジユンがデジモンに関する知識を得たのは光子郎経由だった。

大輔達以降の選ばれし子ども達は、デジタルワールドで起こった問題を解決するために選ばれたというよりも、人間界と交流するために選ばれたという意味合いが強かったから、デジタルワールドと人間界を行ったり来たりしている大輔達と違い、ジユンは本当にパートナーとしてデジモンと一緒にいるだけであった。

せっかくデジモンという共通の話題が出来たのに、ジユンと大輔はその共通の話題で会話が弾むことはなかったのだ。

それまでの間に築いてきたものが、最悪だったせいで。

「アタシもパートナーとデジタルワールドを旅したら、少しは何かが変わったのかしら。少なくとも大輔ともう少しお話できてたのかなあ……」

「……………でしようね」

たら、れば、の話なんかきりが無いのは分かっているが、それでも2人の心に思い浮かんでくるのは、後悔の念である。

ジュンの下にパートナーデジモンがやってきた時、ジュンはもう高校生だった。

冒険ではしゃぐ歳でも、世界を救うことに魅力を感じる歳でもなかったから、必要最低限の交流しかなかったし、パートナーもどちらかというと干渉を嫌うタイプなので、そう言った意味では気が合っていた。

本当に気まぐれでしか、パートナーと会っていなかった。

しかし最近になって、そのパートナーが妙にくつついてきているらしい。

今日も職場についてきたが、これまでそんなことは1度だつてなかった。

何かと理由をつけて現実世界にいたがって、ジュンの傍を離れようとしなかった。

しかしジュンは、そんなパートナーの心情を正確に理解していた。

それはそうだ、パートナーがそんな行動をとるようになったのは約3か月前、ジュンの弟が死んだ辺りからなのだ。

ジュンのパートナーは、思い知ったのである。

デジモンと違って、人間はいとも簡単にその命を落とすことを。

傷ついた花を手折るように、容易くその命を奪われてしまうことを。

強き者の前では無力で、虫けらのようにその命を踏みつぶされてしまうことを。

ジュンのパートナーだけではない、ジュンと同じタイミングで京の姉や丈の2人の兄の下にやってきたパートナー達も、そして命を落とした仲間達を目の当たりにしてしまった太一達のパートナー達も。

あの日以来パートナーにべったりなデジモンもいたし、太一のアグモンのようにべったりとまではいかなくとも、人間界で過ごす時間が多くなったデジモン達もいた。

それまでは遠く離れていたって、一緒にいなくなつたって、心は通じ

合っていると信じていたのに。

……自分達の知らないところで、子ども達が手の届かないところに行ってしまうのでは、という恐怖が刻み込まれたせいであることは明確であった。

……そう言えば、とパートナーデジモンの話題になっていたことで思い出したのだが……。

「……ジュンさん、ブイモンのこと、何か聞いてますか？」

「え？ブイモンのこと？……ごめん、聞いてないわ。ブイモンのことは大輔の家族に任せちゃってるから……」

「そうですか……」

ブイモンは大輔のパートナーだ。

大輔が選ばれし子どもとして選ばれた時からこれまで、ずっと現実世界で暮らしていたのだが、大輔がいなくなってしまうた今、現実世界に留まっている理由はない。

しかし今ブイモンが何をしているのか、全く情報が入っていないから分かっていない。

1か月廃人のように過ごし、2か月間は考える暇もなくすほどにがむしやらに働いていたから、仲間達の近況も知らないのだ。

今日ジュンと出会ったことで、色々目覚めた太一は、近いうちに光子郎辺りに心配をかけたであろうことを、ショートメッセージで送ろうと決めた。

光子郎ならブイモンだけでなく、テイルモンやワームモンのことも知っているだろうし。

「……つと」

人混みが多くなっていく。

歩道はすれ違うこともできないほどの人混みで溢れかえっていて、2人で並んで歩いていた太一とジュンは1列になって駅の改札へ向かっていった。

iCカードを改札にタッチして中に入ると、ジュンは手前の階段の辺りで立ち止まった。

「アタシこっちなんだけど、太一くんは？」

「俺はあっちです」

そう言つて奥の階段を指さす。

太一とジyunは、家の方向が逆だった。

「じゃ、ここでお別れね。……なんか久々に太一くんとお喋りしたなあ」

「……そうですね。あの頃は歳も違ったからそもそも生活スタイルも違いましたし」

「ってゆーかアタシ、あの時君らが何していたのかも知らなかったからねえ」

あはは、と笑つたジyunは、あの頃よりも少し影を落とした笑顔を浮かべながら、手をひらひらさせて階段を登っていく。

その後ろ姿に、今はもういない後輩の姿が何故か重なつた。

まだ昼間だというのに、そのエリアはまるで満月のない夜のようになつて暗かつた。

濃い灰色の雲が空を覆い、じめじめとした空気がそのエリア一体を漂っている。

鬱蒼と生い茂つた森は光を拒んで、黒と灰色だけで彩られていた。そんなエリアのほぼ中心にあたる位置に、“それ”はあつた。

そのエリアの雰囲気を感じると押し固めたような建造物は、濃厚な闇の気配を漂わせており、並みのデジモンでは近づくことすら容易ではない。

何故ならそのエリアには、闇の気配が充満しているだけでなく、特定の種類のデジモンしか入れないような結果が張られていた

特定のデジモンが住み着いているエリアに、何故そのような結果が張られているのか、そのエリアに隣接しているエリアに住み着いているデジモン達には理解できなかった。

天敵が住み着いているようなエリアにわざわざ近寄るようなこと

はしないし、相手が何かしてこない限り、こちらが攻撃をする必要もないのだ。

だから付近のエリアに住み着いているデジモン達は、気味悪がって近づくことすらしなかった。

しかしそんな不気味なエリアに、最近になって多数のデジモンが入りするようになっていた。

殆どがウイルス種と呼ばれる、このエリアに住み着いているのと同じ種類の、違うエリアから流れ着いたデジモンである。

ただでさえ不自然な結界が張られているせいで、近隣エリアに生息しているデジモン達は近づくことを敬遠しているというのに、外から別のデジモン達が集まっていることも手伝って、そのエリアとの境界に近づくデジモンは皆無だった。

そんなエリアの上空を、一体のデジモンが飛んでいる。

丸い顔に直接生えた、鳥のような脚と、悪魔を模した頭巾を被り、更にその頭巾は蝙蝠のような翼が出来ていた。

飛行能力はお世辞にも高いとは言えず、一生懸命蝙蝠の翼をはためかせながら、そのデジモンは飛び立った城から離れていった。

城の中で行うにはリスクが高すぎることを、これからしなければならぬからだ。

しかしあまり離れすぎても怪しまれるので、これを行う際は主が不在の時を狙うか、それらしい理由を述べて許可を取る。

怪しまれないために今の地位まで上り詰めたのだ、ここで台無しにするわけにはいかない。

さりげなく辺りを見回して、自分に見張りや監視がついていないかをしっかりと確認してから、ピコデビモンは鬱蒼とした茂みを掻き分けるように着地した。

「ごそごそ、と翼を手のように器用に動かして取り出したのは、蝙蝠を模した鏡。」

その鏡を覗き込んだのは、自分の姿に見とれるためではない。

『もしもし、ゲンナイ様？ピコデビモンです』

声を潜めながら、ピコデビモンは鏡にそう語りかけた。

途端に、ピコデビモンが映っていた鏡に、別の姿が映りこむ。

この世界にはいない、人間と呼ばれる生き物とそっくりな姿をした、その正体はこの世界の安定と安寧を望む、セキュリティシステムの末端エージェントであった。

《やあ、ピコデビモン。今は大丈夫なのかな?》

『はい、今ヴァンデモン様はお留守ですので』

そうか、とゲンナイはほつと息を吐いた。

《今はどんな様子だい?》

『以前と変わりません。各地から選りすぐりの、腕利きのデジモンを集めている最中です』

《……そうか、それは“前”と変わらないか》

ピコデビモンの報告を聞いて、ゲンナイは眉を顰める。

時折、ゲンナイは“前”とか“以前”とかいう言葉を使っては考え込んでいるが、いつか話してくれるだろうと思ひ、ピコデビモンは言及しなかった。

《それでは引き続き、ヴァンデモンに怪しまれない程度に強いデジモンを集めてくれ》

『承知しました。他にご用件はございますか?』

《ああ》

ゲンナイが続けた言葉に、ピコデビモンは目を丸くした。

『こちらの勢力を何名か子ども達に、ですか?』

《ああ、今すぐじゃなくていいし、他のスパイのデジモン達でもいい。何名かこちらに差し向けてほしいんだ》

『それは構いませんが、一体どうして』

ゲンナイの話によると、こうだ。

子ども達とパートナーデジモン達は、この世界の暗黒を取り払うために強くならなければならないのだが、少し前にちよつとしたトラブルがあつて、足止めを食らっている最中である。

急かすつもりは毛頭ないのだが、それではいつまで経っても次のステップには進めない。

子ども達とデジモン達が強くなるためには、紋章の意味を理解し

て、成長しなければならぬのだ。

《こちらが用意した相手では、きっと子ども達も本気を出せないだろうし、本当の意味でも強くなれない。自分達が相手をしているのは、自分達が戦わなければならぬのは一体何なのか……こちらが勝手に呼び出しておいて、何て酷いことをと我ながら思うが……》

『大丈夫です、ゲンナイ様。きっと子ども達は分かってくれています。もしも子ども達がゲンナイ様を責めるようなことがあれば、ワタクシも甘んじて一緒にその罰を受けますから……』

《……すまないね。君にも大変な重荷を背負わせてしまつて……》
『いいえ、これはワタクシが望んだことですから……』

疲れたような笑みを浮かべるゲンナイに、ピコデビモンは微笑みかける。

仲間達が暗黒勢力によって全て消されてから、ゲンナイは仲間になつてくれそうなデジモンに声をかけ、スカウトしながら、1人で走り回っていた。

それは、まるで何かにとり憑かれたようだ、とスパイ仲間が眉を顰めていたほどに、鬼気迫っていた。

《だが、今はまだ子ども達に少しでも休息をとってほしいんだ。色々なことがいつペんに起こりすぎてしまったからね。だから……》

『分かつております！ヴァンデモン様のことはお任せください！ゲンナイ様は子ども達のことだけをお考えください』

《すまないね。その時が来たらまた連絡するから、他の仲間達にも伝えておいてくれ》

『はい、それでは……』

ブツン、と鏡の向こうのゲンナイが、ブラウン管のテレビの電源を落としたように消える。

ふう、と一息ついた時である。

ぬ、

と。

薄暗い天気でも分かるぐらいに濃い陰が差し込んで、ピコデビモンに覆いかぶさるように現れた。

『何をしている、ピコデビモン』

弱いデジモン達なら聞いただけで身動きが出来なくなるような、威厳のある重低音の声に、ピコデビモンはその場で石のように硬直してしまった。

もう何百年も聞き慣れた、今はここにいないはずの声。

頭巾を被ったピコデビモンの額から、冷や汗が1つ流れる。

いつ帰ってきた？先ほど見送った時には、数日帰ってこられないと言っていたはずだ。

『何をしている、と聞いておる。答えぬか、ピコデビモン』

冷や汗が、2つ。

いや、落ち着けピコデビモン。

ゲンナイとの会話を聞かれたから、何だというのだ。

ヴァンデモンは自分が何をしているのか知っている。

ヴァンデモンの情報をゲンナイに流しているように、ゲンナイの情報をヴァンデモンにも流しているのだ。

だからいつものように振舞えばいい。

ゲンナイから子ども達の情報を集めていましたと、言えればいいのである。

ピコデビモンは一瞬で思考し、一息ついてから「いつもの」胡散臭い笑みを浮かべながら、振り返った。

『これはこれは、ヴァンデモン様！随分お早いお帰りで！今ゲンナイの奴から、子ども達の情報を集めていたのですよ！』

『ほう………？………それで、ゲンナイ様は、何と？』

『………え？』

貼り付けていた、にこやかな笑みの仮面が剥がれ落ちる。

ぎゅっと閉じていた目が間抜けに開かれ、視界に映ったのは凜とした佇まいの、高貴な姿ではなかった。

ボロボロの帽子とマントを身にまとい、その手には先端に太陽のような飾りがついた杖を持っている。

その姿を認めた途端、ピコデビモンの表情はみるみる怒りに満ちた。

『ウィザーモン！貴様という奴は！』

『ははは、すまない。だが私が本物のヴァンデモンであつたら、お前の命がどうなつていたか分からないぞ』

痛いところを突かれ、ピコデビモンはぐうと唸る。

そこにいたのは、ヴァンデモンがまどつている重苦しい雰囲気とは程遠い空気の、ウィザーモンというデータ種の成熟期デジモンであつた。

ウイルス種を苦手とする者が多く、またウイルス種しか入ることを許されないこのエリアで、何故データ種のデジモンがここにいて、天敵とも呼べるウイルス種と談笑をしているのか。

実はピコデビモンは、ヴァンデモンに忠誠を誓いながらもゲンナイにも仕えている、所謂『ダブルスパイ』なのである。

ヴァンデモンにゲンナイや子ども達の動向を流しつつ、ヴァンデモンの動きをゲンナイに伝えるという、まさに命綱なしの綱渡りをしているような危ない役割を、ピコデビモンは熟していた。

ピコデビモンと言えば強い者に媚び諂ひ、弱い者にはふんぞり返つて威張りくさるといふ、典型的なウイルス種の特徴が顕著なデジモンなのに、ダブルスパイという命の危険に晒されるような役割を果たしているのは、どういうことなのか。

それは、このピコデビモンの目的に関係していた。

『……なるほど、近いうちに子ども達の新たな成長のために、こちら側の勢力を嚇けてほしいと……ゲンナイ様もなかなか無茶を言いなさる』

『それはゲンナイ様も承知しておられたよ。だがこれも子ども達やこの世界……引いてはヴァンデモン様のためだ』

今しがたゲンナイから受けた新しい指令を伝えると、ウィザーモンは含み笑いを浮かべる。

ピコデビモンは……何かを堪えているように、唇を噛みしめながらそう言った。

ウィザーモンは、気の毒そうな眼差しでピコデビモンを見下ろし、帽子を目深に被りなおした。

『……とりあえず、他の仲間達には私の方から声をかけておこう。ヴァンデモンにはお前から上手く言っておいてくれよ』

そう言い残して、ウィザーモンは魔法使いらしく、その場から一瞬にして姿を消した。

ピコデビモンが振り返った時にはもうおらず、風が取り残されたように、ふわりとピコデビモンの頬を撫でただけだ。

沢山いるヴァンデモンの手下の中で、純粹にヴァンデモンを慕って仕えているデジモンは、実は少数派だ。

無理やり従われた者が7割、1割はお零れを狙っている者、そして1割がゲンナイに雇われたスパイだ。

どう頑張っても、世界を救う勢力は後手に回りがちであるため、ゲンナイは協力してくれそうなウイルス種に片っ端から声をかけ、ヴァンデモンの勢力を削ぐためにスパイとして送り込んでいたのだ。

ウィザーモンがその筆頭だが、主な活動内容はヴァンデモンの勢力を削ぐことで、情報をゲンナイに伝えることではない。

それはダブルスパイであるピコデビモンの役割である。

何故ならピコデビモンはウィザーモンのようにゲンナイから送り込まれたのではなく、最初からヴァンデモンに仕えていたデジモンだからだ。

言わばヴァンデモン側の勢力であるピコデビモンが、何故ヴァンデモンを裏切るような真似をしているのだろうか。

……きつと誰も信じてくれない。

信じてくれたのは、ゲンナイだけだった。

選ばれし子ども達のために、そして世界のために奔走していたゲンナイに声をかけたのは、ピコデビモンの方だった。

『待っていてください、ヴァンデモン様……！』

ワタクシめが必ず、貴方様を……。

.

愛されなかった少女

武ノ内空のお母さんは、華道の家元である。

若い頃に家元としての資格を取って以来、渋谷の貸しオフィスの一角を借りて、華道の教室を週3で開いている。

生徒やお弟子さんが沢山いて、2カ月に1回の頻度で生徒やお弟子さんが活けた花の展覧会を行っていた。

その展覧会に何度か連れてこられたことがあった空は、小さい頃こそその美しさに目を奪われて、すごいすごいって言いながらお母さんが咎めるのも聞かずにウロウロしながら沢山の作品を眺めていたが、ここ最近は何かと理由をつけて行っていない。

元々男勝りだった空は、小学校低学年の頃から仲が良かった太一に引っ張られて、サッカーをやっていた。

まだ女子がサッカーをするのが珍しかった頃、お台場小学校の先生は空がサッカー部に入ること全然抵抗なんかなくて、それどころか上級生でも1人2人女子のメンバーがいたから、先輩達が新しく入った女の子の後輩である空を沢山可愛がってくれて、楽しくって夕方までボールを追いかけていた。

空は、帰りの時間が嫌いだった。

そろそろ帰ろうぜ、って太一に言われるといつもむすりとして、太一に手を引かれながら自分のマンションへと帰るのが毎日の日課になってしまっていた。

太一はいつも帰るのを渋る空を、彼女のマンションまで送り届けてくれてから、自分のマンションに帰る。

また明日なあって言いながら手を振る太一を見送り、空はマンションのエントランスに入る。

エレベーターのボタンを押して、待つこと数秒。

チーン、というベルの音がしてエレベーターの扉が開く。重い足取りでエレベーターに乗り、背伸びをして自分の階のボタンを押した。

ウィーン、と若干上から押さえつけられるような感覚を覚えながら、空は壁にもたれかかり自分の階に着くのを手持ち無沙汰に待った。

チーン、とまたベルの音がして、扉が開く。

エレベーターを出て右に曲がると、手前から4つ目のドア。

ランドセルを下ろして、脇のポケットから鍵を取り出す。

鍵穴に差し込んで、回す。

ガチャリ、と鍵が開いた音がしたので、引き抜いてもう一つの鍵穴に差し込んで、同じように回した。

ドアレバーを下に引いて、開ける。

ただいまという言葉はないし、お帰りという言葉も帰ってこない。

お父さんは京都の大学で助教授をしているから、ずっと単身赴任でお家にはいないし、お母さんはお花のお稽古で遅くなる。

だから空は、今日は1人だ。

今日だけじゃない、お母さんは渋谷で週3日もお花のお稽古があるから、空は1週間のうち3日間も1人で過ごさなければならぬ日がある。

沈む太陽で赤やオレンジが斑に染まっている夕焼け色を背負いながら、空はがらんだ部屋に入る。

ドアを閉め、2つの鍵をしっかりと閉めて、靴を脱ぐ。

自室に靴を放り投げてから、洗面所に向かった。

背伸びをしてもまだ届かない洗面台に踏み台を置いて、そこに乗ってからレバーを上にあげて水を出し、置いてある固形の石鹸を手にとり取って手と一緒に水で濡らしながら擦りつける。

徐々にぬめり気を帯びていき、泡立ち始める。

八つ当たりをするようにがしがしと石鹸を擦り、十分泡立たせてからぽいっと放って、がしがしと手のひらを擦り合わせる。

出しっぱなしになっている水に手を突っ込んで、泡を洗い流す。

十分洗い流してからレバーを下に下げて水を止める。

昨日お母さんが変えたタオルで水気を取ってから、踏み台から降りて、太一と遊んでいたせいで泥だらけになった服を脱ぎ、バスルームに入って大きな盥に服を入れる。

お湯と水の蛇口のハンドルを回して、丁度いい温度にしてから盥に張って、泥だらけの服をガシガシと洗った。

ドロドロになっていている服をそのまま洗濯機に放り込むと、他の服にその泥がついてしまつて余計に汚れてしまうから、お母さんに怒られるのだ。

洗濯はちゃんとやってあげるから、泥だけは自分で落としなさいと言うお母さんの言いつけをちゃんと守つて、身体を洗う次いでに服も一緒に洗う。

乾いた地面にスライディングをしたり、すつ転んだりしただけだったから、汚れていると言つても水洗いで十分汚れは落ちた。

いつだったか、前日が雨で地面がぬかるんでいたから、お母さんに何度も注意されていたのに、それをついつかり忘れてしまつて太一と遊んだ結果、お母さんの雷が落ちてきたことがあつた。

それを思い出して表情を顰めた空は、乱暴に服をはたいて、ぎゅーつと絞つた。

洗濯籠に湿つた服を放り込んでから、空は本格的にシャワーを浴びた。

時間にして、大体20分ぐらい。

お湯を張るのを忘れていたのと、もうシャワーを浴びている最中で面倒臭かつたから、リンスを落としたり空はお風呂を出た。

用意されているバスタオルを取つて身体の水気を拭いたら、パジャマや下着を持つてこなかつたことに気づいて、空は溜息を吐いた。

まだ水が滴っている髪の毛にフェイスタオルと、胸と下半身を隠すようにタオルを巻いて、脱衣所を出る。

自分の部屋に行つて、新しい下着とパジャマを取り出し、さっさと着替えた。

頭に巻いたタオルを解いて、髪の毛を拭きながら部屋を出る。

もう1度脱衣所に向かつて、身体を拭いたタオルを籠に放る。
わしやわしや、と乱暴に髪の毛を拭きながらリビングに向かった。
時間は6時少し前。お夕飯は7時と決めているから、まだ1時間
ちよつとある。

赤みがかつたオレンジから、濃紺のグラデーションに彩られている
窓の向こうを背景に、空はテレビをつけた。

不気味なほどに静まり返っていた空間に、場違いなぐらいに明るい
リポーターの声が響いた。

今の時間帯だと報道番組しかやっておらず、まだ小学低学年の空で
は日本や世界の情勢は難しく理解できないから、報道番組なんか見
てもつまらないのだが、今この時間帯だとどの局もニュースしかやっ
ていない。

それでも、静まり返っている空間に独りぼちなのはとても寂しい
し怖いので、テレビをつけているしかない。

クラスで流行っているアニメのビデオを見る気にもなれず、空はテ
レビの前にあるソファアに座った。

中継が終わり、ニュースキャスターの明るかった声が鳴りを潜め
て、今度は淡々とした声色に代わる。

空はそれをつまらなそうに眺めた。

右から左へと流れていくニュースキャスターの言葉の羅列を子守
歌に、いつの間にかうとうととしていた空がはっと気づいた時には、も
う報道番組は終わっていて、バラエティが始まっていた。

お母さんがいる時は絶対に見ることが出来ない、お母さん曰く《下
品な笑い声が響く番組》。

お母さんがいない日はこっそり見て、翌日お友達や太一とその話題
で盛り上がっているのだけれど、今日はどういう訳かそれを見る気にな
れなくて、空はテレビをつけばなしにして夕飯の準備をした。

と言っても、お母さんが家を出る前に用意して、冷蔵庫に入れてお
いてくれたものをレンジで温めるだけなのだけれど。

ガス台に置きっぱなしになっていた鍋には、お味噌汁が入ってい

た。

空は換気扇のスイッチを入れて点火ダイヤルを回し、火をつけて鍋を温める。

そこで、思い出した。

慌てて炊飯器を開けて、中を覗き込んで、頭を抱えた。

ご飯を炊くのをつっかり忘れていた。

お米を洗って、水を入れて、スイッチを押すだけだから、それだけなら小学低学年の空でも出来るでしょうって最近教えてもらったのだ。

今日が初めて、そのお米を炊く日だったから、すっかり忘れていた。仕方がない、と空はお釜を取り出してお米を1合入れる。

やり忘れた自分が悪いのだ、お母さんの分だけ炊いておいて、自分はご飯なしにしよう。

今から炊くとご飯にありつけるのが8時頃になってしまう。

まだ台所のシンクで洗い物をするには背が少し届かない空は、洗面所に行って踏み台を持ってくる。

踏み台に乗り、お米を入れたお釜をシンクに入れて、蛇口から出した水でガシガシと洗った。

まだ、水が透明になるまでお米を洗えと言われていた時代だ。

空は八つ当たり気味に、一心不乱にお米を研ぐ。

お米をお釜から零さないように、手で受け口を作って水を流す。

それを何度か繰り返し、水が透明になった頃に空は1合炊く分の水を入れ、お釜の外についている水気を取り、炊飯器にセットし、ボタンを押した。

音楽が流れる。

空は顔を逸らして冷蔵庫からおかずを取り出した。

肉じゃがとサバの煮物、お味噌汁はお米を洗っていた間に、いい具合に温まっていたので、火を消した。

食器棚からお味噌汁用のお椀を取り出し、お玉で掬ってお味噌汁を入れる。

チーン、とレンジが音を立てた。

お味噌汁をリビングのテーブルに持って行ってから、レンジから肉じゃがを取り出して、入れ替わりでサバの煮物を温める。

パタパタパタ、と小さい足が忙しなく動き回る。

外はすっかり暗くなっていた。

「いただきます」

空以外誰もいない、聞こえてくるのはテレビのバラエティ番組の笑い声だけで、空の挨拶に返事をしてくれる人は誰もいない。

それでも、しっかりと染みついているその挨拶は、今よりもっと小さい頃から、お母さんにさんざん躰けられた産物だ。

いただきますを言わなかったら、お父さんにも容赦しない。

カチャカチャ、とお箸がお皿やお椀を掠った音や、テレビのバラエティ番組の芸人達の豪快な笑い声だけが響くりビング。

空はツンとした鼻の奥の痛みを誤魔化すように、息を吸うのと一緒に鼻をすすった。

お母さんが帰ってきたのは、空が夢の中に足を踏み入れるか入れないか、意識が水の中で揺らぐような感覚で目を閉じていた頃だった。

分かっていた。

お母さんが自分を「お母さんの娘」じゃなくて、「家元の娘」として接していたことぐらい。

大切な挨拶の躰を怠らなかったのは、空にちゃんとした人間になってほしいからじゃなくて、家元の娘として恥ずかしくないようにするためであることぐらい。

でも今回ののはあんまりだ。

酷い、酷い、酷い。

嫌い、嫌い、お母さんなんか大っ嫌い！

いつもいつも、お家でも着物を着てお花を活けて、空のことなんか全然見ていませんっていう態度を取っているくせに、お家でも「お母

さん”じゃなくて”家元の武ノ内淑子”として振る舞っているくせに、どうして”あんなこと”を言ったのか、空には全然理解できない。空は次から次へと溢れてくる涙を拭いながら、しゃくりあげていた。

何処か行く当てがあるわけでもなく、さ迷い歩いていた。

水と草の匂いが混じっている。

今日は女子サッカーの試合があった。

まだ女子サッカーが珍しかった頃の試合だったので、1試合1試合がどれも大切なものだった。

しかしその数日前、空はサッカー選手の命である足に怪我を負ってしまった。

走るところか、歩いたり座ったりするのに支障をきたすレベルで、そんな足でサッカーの試合なんかしてしまえば、確実に入院してしまうことは目に見えている。

それは分かっていた。

分かっていたけれど、空はそれよりも試合に出ることの方が大事だった。

空は女子サッカーの主力で、チームにとっても貴重な戦力だったのだ。

明日の試合、期待しているぞってチームからも監督からも言われていたから、空はどうしても試合に出たかった。

でもお母さんは、それを許さなかった。

出かけようとする空を呼び止め、いつものように空に背を向けて、花を生けながらこんこんと説教をしてきた。

座れと言われて、渋々ながらも座った時、怪我をした足に痛みが走った。

お母さんは、その時の空の呻き声を聞き逃さなかった。

「何が大事な試合ですか！正座も出来なくなるようなサッカーなんか、止めてしまいなさい！」

それでも試合に行くと言いはる空に、お母さんは声を荒げながらそう言い放った。

その時の空の心情は、きつと誰も想像できない。

最初こそ太一に引つ張られる形で始めたサッカーだったが、次第に楽しくなって、女子サッカーチームのエースストライカーに抜擢されるぐらい、たつくさん練習したから、毎日泥だらけ、怪我だらけになってお家に帰ってきた。

その度にお母さんは、女の子なのにこんな男の子みたいになつて呆れながらも泥まみれのお洋服を洗濯してくれたし、たつくさん動き回るせいで他の女子の2倍は食べる娘のために栄養とスタミナ満点の食事を作ってくれたし、試合の日には空の大好きなものがいっぱい詰まったお弁当だつて持たせてくれた。

試合に勝てばお祝いもしてくれたし、負ければ次頑張れって外食に連れてつてくれた。

お花のお稽古の合間を縫って、空がサッカーしていることを応援してくれていたのに、それなのに、どうして！

「私はお花よりサッカーの方が好きなの！」

「空！それでも貴女はこの私の子どもなんですか！」

——ああ、やっぱり。

「お母さんの莫迦！どうしてわかつてくれないのよ!!」

空は目に涙を浮かばせながら、母を罵倒して出て行った。

背後からお母さんが空を呼ぶ声が聞こえてきたけれど、それを無視して試合の場所まで向かった。

でも試合には間に合わなかった。

駆けつけた頃には、試合は終わっていた。

ぼろ負けという、無残な試合結果で。

顔を俯かせて歩いてきたチームメイト達に、空は言葉を失った。

泣いている子もいた。

空とすれ違う時、誰も何も言わなかった。

気づいていなかったのか、それとも言葉すらかけられないほど空に對して怒りを抱いていたのか……。

今となつては分からない。

それ以来そのチームに居辛くなってやめてしまったから。

監督からは、怪我をしていたことに気づけなかった謝罪と、次があるという励ましの言葉をもらったけれど、空の心は晴れなかった。

でも空が女子サッカーチームを止めたのは、それだけが原因ではなかった。

「空ちゃん？何してんの？」

試合があったあの日、お母さんが分かってくれなかったあの日、泣きじゃくりながらとぼとぼ歩いていた空に声をかけたのは、空が尊敬してやまない人だった。

「……ジュン、さん？」

小学校のサッカー部の後輩である、本宮大輔の4つ上のお姉さん、本宮ジュン。

太一の妹のヒカリちゃんと一緒に、いつも大輔のサッカーを見て、応援している人。

小学生にしてパンクファッションを好み、学校中の男子をひれ伏させた伝説を作った、空が今一番憧れている人だ。

何処かへ出かける途中だったのか、それともその帰り道か、いつも学校で着ているものよりも、もう少し派手めなパンクファッションを身に着けていた。

「え、ちよ、どうしたのよ、何で泣いてるの、空ちゃん？」

空が泣いていることに気づいたジュンは、慌てて空に駆け寄り、ハンカチを取り出した。

泣きすぎてぼーつとしていた空は、差し出されたハンカチを受け取ることも出来ず、ジュンはあーもうとか言いながら自分で拭いてやる。

しかし拭いても拭いても、次から次へと出てくる涙に、ジュンはただ事ではないと悟った。

とりあえず座ろうと言って、新緑が眩しい河原の土手に腰をかける。

ぐすんぐすんってしゃくりあげる空を、ジュンは隣に座って優しく背中を擦ってくれた。

ゆつくりと、時間をかけて落ち着いてきた空は、やがてぽつりぽつりとジュンに漏らす。

今日は大事な試合があったのだが、足を怪我してしまったこと。それを母に見咎められ、説教され、母と喧嘩をしてしまったこと。

「……………」

「…………ジュン、さん？」

それまでうんうんって聞いてくれていたジュンが、話が進んでいくにつれて黙り込んでいった。

不思議に思った空がジュンを見やると……困ったような、怒っているような、複雑な表情を浮かべながら空を見つめていた。

「ジュンさ、」

「あのねえ、空ちゃん」

はあ、と軽く溜息を吐いたジュンの次の言葉で、空はひゅつと息を飲んだ。

「私が貴女のお母さんでも、きつと同じこと言ったわよ」

その後の記憶は全くない。気が付いたら家に帰っていた。

お母さんはいなかった。

心ここに在らずと言った様子だった空は、いつの間にか電気がついていない自室の真ん中に座り込んでいた。

「…………う、あ……ああああああああ……!!」

止まっていたはずの涙が、またポロポロと流れた。

今度はしゃくりあげるのではなく、流れた涙を拭うことなく、子どもみたいに声を出して泣いた。

誰も、私の味方なんていない。

「…………分からないよ、ジュンさん」

鬱蒼と生い茂った森の中。上空を見上げてみれば、そこだけぽつかりと円が描かれるように開かれており、煌めく星空が彼女を見下ろし

ている。

しかしそんな美しい星空観賞に浸る余裕など、彼女にはなかった。パチパチという薪が弾ける音をBGMに、空は独り言ちた。

視線の先にあるのは、デジヴァイスに収められた自身の紋章。

それは愛情だと、誰かが言った。

「私には、分からないよ……」

だって空は、あの日から独りぼっちだ。

お母さんとまともに会話をしたのは、いつだったか。

思春期と反抗期も相俟って、空はお母さんと事務的な会話しかしていない。

お互いの顔を見て、会話を交わしていない。

華道の教室も評判が評判を呼び、最近では週3日が5日に増えてしまい、すれ違い生活が加速していった。

休日も、お母さんと同じ空間に居辛くて、部活がある日は朝から夕方まで練習し、ない日は太一と治を誘って公園でサッカーをして、時間を潰していた。

お父さんは相変わらずいない。

たまに電話をかけてきてくれるけれど、共通の話題など何もなければ、こちらも会話が弾まない。

元気か、とか学校では何してる、とか聞いてくるけれど、別に、という返事しか返せていないのが現状だ。

ただでさえ、父親という立場の人達は仕事やら何やらで、自分の子どもと触れ合う時間が少ないのに、空のお父さんは今京都に単身赴任をしているせいで、ますます娘との溝が広がっている一方だ。

娘ということもあり、まともに会話をしてくれない空との距離を考えあぐねているようで、最近では娘の近況は母親から聞いているらしい。

しかしその母親も、娘との間に出来てしまった溝のせいで、近況が分からない。

そのせいでますます武之内家の雰囲気は暗くなっていく。
まさに悪循環。

「空さん？」

背後から呼びかけられた声で、空は我に返る。

慌てて振り返れば、そこにはパジャマ姿のミミが、テントの入り口から顔を覗かせていた。

「ミ、ミミちゃん……どうしたの？」

「こっちの台詞ですよ。まだ12時ですよ、12時！起きたら空さ
んいないから、もう朝なのかなって思ったら、まだ暗いし！もしか
して空さん、ずっと起きてたんですか？」

駄目ですよ、なんて可愛らしく怒るミミに、空は曖昧に微笑んで
謝罪した。

そう、もう深夜を回っている時間帯だ。確かミミとパルモンとピヨ
モンがおやすみなさいい、ってベッドに入っていたのが9時ぐら
いだったから、3時間ほど薪の前に当たっていたことになる。

流星に考えこみ過ぎたか、と空は立ち上がろうとしたのだが、その
前にミミが空から見て3時の位置に座り込んだ。

「ミミちゃん、寝ないの？修行は明日もやるんでしょ？」

空達がいるのは、ナノモンの縄張りである砂漠のピラミッドではな
い。

何故なら彼女らの周りには、空を覆いつくさんばかりの木々が生え
て、深い森を作り出しているからだ。

ナノモンのピラミッドから、バードラモンで1時間程移動するとこ
ろにある森のエリアに、彼女らはいる。

治とガブモンが出て行つてから1週間程経つた日、ミミとパルモン
も修行の旅に出ると宣言したのは、皆で朝食を食べていた時だった。

あまりにも突然の宣言だったため、丈は咽てしまい、もう少して口
に入れていたものが喉に詰まるところだった。

光子郎は食べようとしていた目玉焼きを皿に落とし、空もパンを食
べる体勢で硬直した。

最年少の3人なんか、口をはくはくときかせて、ミミを茫然と見つめ
ていた。

そんな仲間達の様子なんか全く気にしないで、ミミは朝食を美味し

そうに頬張っていたのは、なかなかシユールだった。

何で、とか、どうして、と丈や光子郎が思考停止している中、空は真っ先に我に返って1人で大丈夫なのかと心配になった。

お姉さんの振る舞いが増えてきていたとはいえ、基本的にはお姫様な性格のミミが、できることなら誰かがやってくれるのを待っているようなミミが、自ら修行の旅に出ると言い出したのだから、空達の反応は当然だろう。

だから空はミミとの同行を持ち掛けた。

すると、やはり1人では思うところがあつたのか、ミミはあからさまに喜んでいたので、少々脱力したものだ。

修行と言ってもどのようなようにデジモン達を強くすればいいのか分からず、2人で考えたのは「お互いを修行相手として、経験値をあげていくこと」であつた。

流石にそこら辺の野良デジモンとは言え、何もしていない相手に喧嘩を吹っ掛けるのは良心が痛んだからだ。

時折襲い掛かってくるデジモンはいたものの、次なる敵とは全く関係なく、強い相手の気配を感じ取つたデジモンだったので、普通に追いつ返しながらそれも経験値としていた。

そうやって修行を繰り返し、今日で2週間目に突入する。

「何か目え冴えちやって！空さん、まだ眠くないなら、ミミとお喋りしてください！」

えへへーって可愛く笑うミミに、まるで甘えてくる妹のような感覚に陥つた空は、仕方ないわねえって苦笑する。

やった、とミミは両手をあげて喜び、早速と言わんばかりに話し出した。

彼女の口から飛び出てくるのは、学校のお友達のこと、今興味あることや、来たいお洋服、アクセサリー。

帰ったら何がしたいとか、何処に行きたいとか、9割ほどが自分のことだつた。

時々、空さんはどうしたいですか、とか何が好きですか、って尋ね

てきて、それに空が答える形で会話をしているが、殆どミミが喋っていた。

普段は1つに纏められている髪が下ろされ、ヘアゴムの跡がついて少しふんわりとしている髪が、ミミが身振り手振りをする度に揺れる。

ピンク色のパジャマは所謂ネグリジェと呼ばれるような、ワンピース型のパジャマで、襟の部分はレースのようになっていた。

可愛くて、お洒落に余念がなくて、コロコロと表情を変えながらお喋りに興じているミミに、妹のような愛しさを感じながら……空の口元から少しずつ笑顔が消えていく。

「……ミミちゃんは、お花とか好き？」

マシンガンのように繰り返されるトークの隙間を見つけた空は、ほぼ初めてのような質問をミミに投げかけた。

先ほどまで聞き役に徹していた、お姉さんのように思っている人の質問に、ミミは目を丸くしながらもすぐに花のような笑顔を浮かべて頷く。

「どんな花が好き？」

「んー、タンポポとかスズランみたいに小さい花も好きだけど、やっぱり私はチューリップとかコスモスとか可愛いのがいいなあ！フラワーアレンジメント、でしたっけ？ああいうのも可愛くて好きです！空さんは？」

「……私は」

訊ねられて、空は俯く。

あれ、とミミが思った時には、遅かった。

「……好きじゃないの、お花。お母さんを思い出しちゃうから」

ミミの話を聞いて、空は思ってしまうのだ。

お母さんが欲しかったのは、私みたいに外で走り回って泥だらけになる、お母さんの言うことなんか聞かないお転婆娘じゃなくて、ミミちゃんみたいな娘だったんじゃないかって。

ミミのようにお洒落で、女の子らしくて、お花が好きな女の子なんて、まさしく華道家の娘に相応しいではないか。

少々我儘なところはあるものの、基本的には素直なミミなら、きっとお母さんも指導のしがいがあるというものだろう。

流石武之内さんの娘さんだ、と言われても疎ましく思うことなく、えっへんと胸を張るに違いない。

父親との会話だつて、聞いてもいないのに今日は何があつた、とかこんなことをした、とお喋りをして、父親は口を挟む隙も無く、それでも楽しそうにうんうんと相槌を打ってくれる。

ミミを中心とした、笑顔の絶えない武之内家となっていただろうに……。

「私のお母さんね、華道の家元つてやつなの。自分で教室も持つててね。ほぼ毎日教室で先生やってるの」

どうしてこうなつてしまったのだろう。

小さい頃は確かに、母に憧れていたはずなのに。

「私がサッカーをするの嫌がつて、私に無理やりお花をやらせようとするの。私はお花よりサッカーの方が好きつて言つてるのに」

誰にも言うつもりはなかつた。

あの日、憧れのジュンにまで母の方が正しいと言われてから、誰も自分の気持ちなんか分かつてくれないつて、ずっと押し殺していたのに。

「……………」

ミミはただ黙つて聞いている。

じ、と俯いて、抱えた膝で隠すように座っている空を、ミミはどういう気持ちで見ているのだろうか。

「…………この紋章」

膝で隠していた顔を少し上げながら、空は手に持っていたデジヴァイスを見下ろす。

“愛情”と称された、その名に相応しいハートの形をした紋章が、デイスプレイに浮かんでいた。

「…………ゲンナイさん、言つてたわよね。紋章は私達の想いが、それぞれ形になつてゐるつて。太一のは勇氣、治くんのは友情、光子郎くんは知識、丈先輩は誠実、ミミちゃんは純真…………大輔達のは聞きそびれ

ちやつたけど、でもきつとあの3人も相応しい想いを持つてると思うの」

「それは……空さんもそうでしょ？」

「そんなことない！」

いつもと様子の違う、お姉さんのように思っている人にミミはそう言っていると、空は大きな声でそれを否定した。

バサバサ、と何処かで鳥が飛び去ったような音が聞こえてきた。

「そんなの全然、私らしくなんかないっ！」

「そ、空さん？」

「何よ、愛情なんて！まるで私に愛情があるみたいに……っ！私はお母さんに愛されていないのにつ！」

だっってお母さんは空がしたいことを応援してくれなくなった。

脚を怪我するような危険なスポーツだと決めつけて、空のことなんか見てくれなかった。

お母さんが必要なのは空ではなく、*「華道家・武之内淑子の娘」*なのだ。

そんな自分の*「想い」*が、愛情？

母にも父にも愛されなかった自分が？

母の望む娘になれなかった、自分が？

まるで笑えない喜劇ではないか。

「……でも、空さん。いつも私達のこと、考えてくれるじゃないですか」

静まり返った空間に、パチパチという薪の弾ける音が響く。

静寂を引き裂いたのは、一滴の雫であった。

「みんなのことなんて、どうでもいいの！ホントの……っ！ホントの私のことなんか何にも知らないくせに、勝手に決めつけないでよっ！！」

「それは嘘です」

「っ、ミミちゃん……っ？」

爆発寸前にまで膨れ上がり、喚き出した空に対して、ミミは静かにそう言い放った。

目を閉じ、今にも泣き出しそうになっていた空は、自分の言葉を否定したミミの方に顔を向ける。

いつも可愛らしい笑顔を咲かせているミミの表情は、真顔だった。じ、と真つすぐ空を見つめて逸らさない。

「みんなのことなんかどうでもいいなんて、嘘です。嘘つかないで、空さん。私、いつもの空さんが好き。嘘つきの空さんは嫌いです」

「っ、嘘なんかじゃないっ！だって私は……！」

「じゃあどうして私が修行の旅に出るって言ったたら、心配してくれたんですか？」

「……え？」

「一緒に来てください、って言ったたら、空さん来てくれましたよね？何ですか？」

「……それ、は……」

空はそれ以上何も言わなかったが、後に続く言葉は容易に想像できた。

ミミはにつこりと笑う。

「ねえ、空さん。本当にみんなのことどうでもいいんなら、私が修行するって言った時についてきてくれたりしないですよ」

「……」

「本当にどうでもいいって思ってる人はね、空さん。私がついてきてほしいって言ったたら、やだとか、何でって言って、私のこと放っておく人なんです。光子郎くんみたいに！」

「……え？」

「だって聞いて下さいよ、空さん！ファイル島でみんなバラバラになっちゃった時、光子郎くんたら酷かったんですよー！」

先ほどまで笑っていた顔が、一瞬で怒り顔になる。

プリン、という効果音が付きそうなほどに怒っているミミは、デビモンにより子ども達が引き離された時のことを愚痴り出した。

太一とアグモンは治とガブモンと、空とピヨモンは丈とゴマモンと、そしてヒカリとプロットモンは大輔とブイモンとそれぞれ合流していた頃。

みんなとはぐれて心細い思いをしていたミミとパルモンが、千切れ
た島を歩き回ってようやく見つけたのが光子郎とテントモンだ。

しかし再会を喜ぶミミとパルモンとは違い、目の前の謎に夢中にな
っていた光子郎は、ミミへの扱いがおざなりになってしまった。

その時のことを思いだして、ミミは両手の拳を肩の位置で握りしめ
て、歯を食いしばりながら怒りを隠さない。

「……ってえ、ことがあって！酷いと思いません!？」

「そ、そうね……」

「だから、空さんは自分勝手なんかじゃないです!」

「……え」

「みんなのことなんかどうだっていいって言うのは、つまり自分のこ
としか考えてない、自分勝手なことですよね？でも空さん、空さん
は今まで一度だって我儘言いました!?!もう帰りたいとか、休みたいと
か、お腹空いたとか、コーラ飲みたいとか!言っていないですよね!」

「……………」

「太一さんみたいにさっさと行っちゃったり、光子郎くんみたいに何
かに夢中になって他のこと忘れちゃったり、丈先輩みたいに情けない
こと言ったりとか!全っ然してないじゃないですか!」

ちやつかり自分のことを言わない辺りがミミらしいと言えよう。

治に関しては欠点らしい欠点が見当たらなかったもので、言及するこ
とはなかった。

いや、ミミが言いたいのはそこではない。

自分達が今何処にいるのかも忘れたミミは、力説をやめなかった。

「……私、空さんのお家の事情とか、よく分かんないです。今回のこと
がなかったら、こんな風にお話することはなかったと思うし、5年生
の人とか、サツカーの人っていう印象しかなかったかも。でもね、空
さん。そんな私でも、空さんって優しい人なんだなあって思えまし
た。お姉さんがいたら、こんな感じなのかなって。だから……」

ミミは一旦言葉を切ると、膝を抱えていた空の両手をそっと取る。

ミミの手が重ねられた手を見て、それから再びミミの方を見やる
と、苦しそうな、哀しそうな表情を浮かべていた。

「……愛されていないなんて、そんな淋しいこと言わないでください。空さんみたいに優しい人が、愛されていないなんてこと、絶対にあるはずない」

「……………」

真つすぐ自分を見つめてくるミミに、しかし空は目を逸らしてしまつた。

俯く。そこに笑顔はない。

断言してくるミミに、何と返したらいいのか、分からなかった。

この子は、ちゃんと愛されて育つたのだろうなというのが、言葉の節々から感じられる。

……だからこそ、空の気持ちは更に沈んでいく。

「……ありがとう、ミミちゃん。でもそろそろ寝ましようか。明日起きられなくなつちやうから」

「ふえ？あれ、そう言えば今何時……」

「もう1時過ぎちやつたわね」

「うわわ、ちよつと調子乗りすぎちやつた！」

「そうね。明日も修行しなきゃだし、寝ましよ」

「はあ〜い」

曖昧に微笑みながら話をすり替えれば、それにつられたミミは慌ててテントへと戻っていく。

このテントは修行の旅に出る際に、治と同じようにゲンナイさんが用意してくれたものだ。

みんなで使っていたテントのように、見かけは1人用の小さなテントだが、中に入れば2人と2体が大の字で寝転がっても、まだ余裕で使える程に広く、簡易だがキッチンもついており、更にトイレやシャワーもついている一級品だ。

女の子らしく、ピンク系でまとめられた内部は、しかし自分には合わないものばかりだな、と空は少々及び腰になっていた。

ずっと男の子に混じって、サッカーボールを追いかけて走り回って、泥だらけになりながらお母さんを困らせていた女の子は、今更女の子らしさを求められても、どうすればいいのか分からない。

「おやすみなさい、空さん」

「おやすみ、ミミちゃん」

既にパジャマに着替えているミミは、そのままベッドに入る。

昼間の修行で疲れ果てていたパルモンとピヨモンは、先ほどまで空とミミがお外でお喋りしていたことにも気づかないほど、ぐっすりと眠りこけていた。

シャワーを浴びる気になれなかった空は、ダンスからパジャマを取り出し、さつさと着替えてベッドに入る。

ベッドの真ん中を陣取っていたピヨモンを起こさないように、奥へと押し、横になった。

目を閉じる。眠れるのか分からないが、先ほども言ったように明日も修行をしなければならぬ。

この世界を救うために、自分達の世界に帰るために……。

——帰る……私達の世界に……お母さんのところに？

あの家に居場所なんかないのに、帰れるのだろうか。

娘が大変な思いをしながら異世界を冒険しているなんて、夢にも思っていないお母さんは、空が帰ってくることを歓迎してくれるのだろうか。

今回のキャンプに行くのだから、お母さんは表情を一つも変えなかった。

キャンプに行く、とお母さんの了承も得ず、殆ど事後報告に近い形だったのに、お母さんは、そう、とだけしか返してくれなかった。

《愛されていないなんて、そんな淋しいこと言わないでください。空さんみたいに優しい人が、愛されていないなんてこと、絶対にあるはずない》

寝る直前の、ミミの言葉が何度も何度も再生される。

それでも、幾ら思い出しても、空はお母さんに愛された思い出を見つけないことは出来なかった。

「……………やっぱり、私には分からないよ」

・
放り出された空の独り言を、受け止めてくれる者は誰もいない。

愛情と純真

よく寝たー、というミミの掛け声により、彼女らの1日は始まる。昨日は夜更かしをしてしまったせいで、いつもより起きるのが遅れてしまった8時半。

すっかり硬くなってしまった身体を解すように、両手を上に突き上げる。

パルモンも真似をしながら身体を伸ばしていると、いい香りが漂ってきた。

おはよう、ミミちゃん、って声をかけてくれたのは、簡易キッチンに立っていた空だった。

修行の旅に出てから2週間程、その間、空は軽食を毎回作ってくれていた。

食事はゲンナイが用意してくれたミニパソコンのデータからでも取れるのだが、何だかありがたみを感じない、という理由で食材としてのデータも追加してもらったのだ。

精製されているお米や、容器に入ったお味噌、お店で売っているような野菜や果物、調味料などを入れてもらい、それらを使ってお母さんに教えてもらった通りの料理を披露した。

母親の趣向で洋食が多いミミだが、和食も大好きだ。

特に納豆が好きとのことなので、朝食には必ずご飯とみそ汁と納豆を出してくれる。

いつもいつもそうやって、ミミが起きる前に起きて朝食を用意してくれたら、修行に夢中になっている間に昼食や夕食も作ってくれるのだ。

たまには自分が空さんのために、自分の好きなものを作ってあげたいと思うのだが、ミミは低血圧の気があるせいで朝があまり強くない、最近は朝から晩まで修行三昧の日々を過ごしているせいで、夜は

気絶するように深い眠りに陥ってしまい、結果空よりも早く起きられた試しがなかった。

「いったただつきまーす！」

『まーす！』

両手を合わせて空と食材に感謝を込めながら、ミミは朝食を食べる。

今日も1日、強くなるための修行を熟すため、朝ご飯はしっかりと食べなければ。

美味しい美味しい、つてパルモンと言い合いながら食べている上機嫌なミミとは裏腹に、空の心は晴れないままだった。

箸を持つ手はのろのろとしていて、口に運ぶご飯も、ちびちびとしたもの。

時々箸を休めてはぼんやりとしていて、ピヨモンが空を呼んだ時には、ミミもパルモンもピヨモンも食べ終わった頃だった。

我に返り、1人と2体の視線が自分に向けられていたことで、自分がまだ食べ終わっていないことに気が付いた。

『ソラ、大丈夫？何だか元気がないよ？』

『具合でも悪い？』

「あ、う、ううん！大丈夫！気にしないで！さあて、御片付けして、少し休憩したら、修行始めよっか！」

お母さんが見たら確実にはしたないと苦言を呈してくるであろう、流し込むようにご飯を掻っ込み、みそ汁も一気に飲み干して、てきぱきとミミ達が食べ終わった食器をシンクに持っていく。

わざとらしく鼻歌を歌う空に、ミミの表情は何処か心配そうだった。

——…昨日のこと、まだ気にしてるのかな

眠れなくて、少し夜風にも当たろうかなと思ってテントの外に出たら、まだ空が起きていたから、眠たくなるまでお喋りをしていたのだが、その時から空の様子がおかしかった。

いつも穏やかで、優しく、でも誰かが危ないことをしたり悪いことをしたら心配してくれたり、叱ってくれたりしてくれる、お母さん

みたいな、お姉さんみたいな空さん。

お姉ちゃんがいたらこんな感じなのかなって、ミミは空に憧れめいた気持ちを抱いていた。

パルモンが初めての進化を果たした時から、ミミは下級生に対してお姉さんぶっていたのだが、それは全部空の真似っ子である。

空が上手にお姉さんをやっているのを見て、ミミも真似っ子をしているのである。

見本がよかったのか、ミミは上手くお姉さんを担ってくれたので、空はこれまでの旅で「お母さん」で「お姉さん」を兼任せずに済んでいたのだが、ここにきてその「お母さん」役も重荷になっているようだ。

昨日のお喋りでほんの少しだけ吐露された、空の気持ち。

自分はお母さんに愛されていないなんて、どうして空はそんなことを言いだしたのか、ミミには分からなかった。

だって空は間違いなく「お母さん」だった。

太一が無神経なことを言ったりやったりすれば、りつけてくれたし、治や丈のフォローも上手だったし、自分や光子郎にも気を回してくれていたし、下級生達が我慢をしていると大丈夫？ってすぐに察して声をかけていたし。

ミミの母親は少し天然なところがあって、父親と毎日甘い空気を醸し出して、ミミがほったらかしにされていることもあったが、基本的にはちゃんと母親をやっている。

ミミがちよつとでもぐずれば、どうしたのミミちゃん、つてニコニコしながら撫でてくれるし、仕事が上手くいかなくて落ち込んでいる夫を慰めたり、お料理も掃除もミミや夫のために毎日頑張っていた。

何度もお手伝いをしたことがあるから分かる、家事というのはとても重労働だ。

愛する子どもと夫のためとはいえ、毎日やれば気が滅入るし、毎日の献立を考えるのだから大変なのである。

空はこの2週間、毎朝作ってくれる朝食だって、簡単なものだなんて言っているけれど、あれだって絶対お母さんが空に教えてくれたも

のだ。

ご飯の水加減も、お味噌汁の味噌や具材も、ミミのお家のものとは全く違う。

ご飯は少し硬め、お味噌汁は赤みそで、具材は豆腐だけでなく根菜類も少し入っている。

小さい空が踏み台を使って、お母さんの隣で一緒にお野菜を切る姿が、安易に想像できた。

……どうして、空は愛されてないだなんて、そんな淋しいことを言っただろうか。

料理や作法1つとっても、きちんとしている空が愛されていないだなんて、ミミにはどうしても考えられない。

『ミミンっ。』

食器を片付けている空の後ろ姿をぼんやりと眺めていたら、パルモンに呼ばれた。

慌てて足元の方に視線を向けて、なあについて答えたら、パルモンが不思議そうな表情を浮かべてミミを見上げていた。

『ずっとソラのこと見てるけど、どうかしたの？修行の準備とかしなくていいの？』

いつもは朝起きて、朝食を取ったら少し休んでいる間に修行の準備をしたり、髪を整えたりしているのだが、いつまで経っても行動に移さずに、ただじっと空の背中を見つめていることを疑問に思ったようだ。

は、とデジヴァイスの時計を見れば、もうすぐ9時半をとつくに過ぎていく。

ミミは慌てて鏡台の前に座り、身支度を整えるのだった。

「さあーあー今日も頑張るぞー!」

髪とお肌を整え、身支度をし、何やかんやとドタバタして、時刻は10時を20分ほど過ぎた頃。

テントをミニパソコンに仕舞い、少し歩いて開けた河原に辿り着い

たミミとパルモンは、空とピヨモンと対峙する。

今日も今日とて、互いのパートナーを進化させて、経験値を積んでいく修行だ。

空とミミはデジヴァイスを構えて、パートナー達に合図を繰り出した。

デジヴァイスから漏れる、進化の光。

ピヨモンとパルモンの身体を包み込んで、バードラモンとトゲモンが生まれてくる。

真つ先に飛び出していったのは、トゲモンだった。

先手必勝、と言わんばかりに赤いグローブがはめ込まれた拳を、バードラモンに叩きつけようと振るうも、紙一重で飛び上がることで躲した。

ばさり、と広げた翼から、幾つもの炎の雨を降らせる。

トゲモンは慌てず、それらを総て拳で打ち込み、掻き消してやった。最初こそ苦手な炎ということで逃げ回って回避していたトゲモンだったが、最近は慣れてきたのか少し焦げたぐらいでは騒がなくなつた。

炎の雨を総て打ち消してやると、お返しとばかりにトゲモンは必殺技である無数の棘を、身体を高速で回転させながらバードラモンに向けて放った。

バードラモンも負けてはいない。

旋回するようにそれを躲し、急降下してトゲモンに襲い掛かる。

トゲモンはそれをギリギリまでひきつけ、避けながらパンチを食らわせた。

少々よろめいたが、危なげなくバランスを取り、上昇していく。

連日の特訓のお陰なのか、バードラモンもトゲモンも体力はついてきているようで、1時間ほど成熟期の姿を保持しているが、疲れている様子は見られない。

……しかし、やはりと言うか、決定打に欠けていた。

2週間以上特訓を重ねているが、空の紋章もミミの紋章も、光る兆候は全く見られない。

デジモン達は人間達の想いの力で強くなる、と言っていたから、想いの力が足りないのだろうか、と思ひ、ミミはデジヴァイスを両手で掴みながら強く強く念じてみるが、紋章もデジヴァイスも、何の反応も見せなかった。

もう1つの条件である、パートナーの子どもがピンチになった時の方がいいのだろうか、と考えたが、子ども達の目的は世界を覆う闇を祓い、救うことであつて、敵を殺すことではない。

発動条件が分からないのに、片っ端から野良デジモンに喧嘩を売るのも何か違う気がして、目下の目標は体力づくりとなつている。

何が足りないんだろう？何が必要なんだろう？

太一さんはどうやってグレイモンを進化させたんだろう？

自分の紋章を見下ろしながら、ミミは考える。

ピコデビモンは、ミミの紋章は「純真」だと言つていた。

「純粋」なら分かるが、「純真」とは何だろうか？

丈に聞いたら、心に汚れ（穢れ）がないこと、邪心がなく清らかなことだと言つていた。

要するに、心が綺麗な人のことだよ、と言われた時、ミミはよく分からない、と思つた。

ミミにとつて心が綺麗な人、と言うのは、アメリカでも有名な長編アニメーションに出てくる、お姫様のような人達だ。

幼い頃に繰り返し見た、綺麗なドレスを着て、どんなに辛いことがあつても、いつかきつと幸せになれると信じて辛い日々を堪え、王子様に見初められるような美しい人達。

彼女達はその辛い境遇も、意地悪な人間も恨んだり妬んだりするこゝとなく、ただただ必ず訪れるであろう未来の倖せのために、健気に頑張っているあのお姫様達のような人達のことを純真と言うのであつて、自分が当てはまるイメージが湧かなかつた。

あれがしたいこれがしたい、あれ欲しいこれ欲しいってパパやママに言つて、自分の欲しいものもやりたいことも我慢しない、やりたくないことはなるべくやらない我儘なお姫様な自分を自覚しているから、そんな自分の紋章が純真だと言われても、いまいちピンとこない。

やはり紋章のことを考えるのは後にして、まずはトゲモンの体力向上に専念すべきだろう、とミミはデジヴァイスを握り直し、バードラモン相手に奮闘しているトゲモンに目を向けた。

空は空で、デジヴァイスを見下ろして思考の海に沈んでいる。

トゲモンに声援を送っているミミの声など、意識の彼方に追いやられており、感覚は総てシャットアウトされていた。

まるで真つ暗な闇の中に佇んでいるように、今の空は何も聞こえていないし、何も見えていない。

それほどまでに、空は思考に没頭していた。

だって分からないのである。

幾ら考えても分からないのである。

ジュンは言った、私が貴女の母親なら同じことを言っていたと。

ミミは言った、空のような優しい人が、愛されていないなんてことはあり得ないと。

ジュンはどうしてあんなことを言ったのだろうか。

お母さんに直接言われた空は、お母さんがどうしてそんなことを言いだしたのか全つ然分からなかったのに、空からの話を聞いたジュンは、お母さんが正しいと言ったのだ。

サツカーが大好きな弟がいるから、ジュンなら気持ちを分かってくれると思っていたのに、ジュンは空の味方をしてくれなかったのである。

ミミが空に憧れているように、空はジュンに憧れていた。

自分の“好き”を貫き通し、教師のお小言もどこ吹く風と受け流し、間違っていることは間違っているとはつきり指摘する、あのサバサバとした性格は、空だけでなく学校中の女子の憧れだ。

4つも離れた弟がいるからか、小さい子達の扱いやあしらい方も上手く、まるで学校のアイドルなのである。

少々日本語が不自由という弱点はあるものの、英語の発音は完璧で、いつだったか道に迷っていた外国人に、姉弟揃って英語で案内してあげていたこともあった。

意地悪な男子や教師にも怯まず、よく回る口で撃退したこともしば

しばだ。

女子がサッカーなんて、と陰口を言われた時も、ジューンは相手を莫迦にしたように見つめながら、むしろアメリカじゃサッカーは女子のスポーツですけど？と言いつ返してくれたこともあった。

ここは日本だ、という返し文句にも、じゃあ何で西洋のスポーツやってんのよ、とぐうの音も出ないような反論で相手を黙らせてくれた。

女子の自分がサッカーをやるのはおかしいのかって悩んでいる空を莫迦にしていた男子は、みんなジューンが追い払ってくれた。

あんなのに負けるなって、空ちゃんは空ちゃんのやりたいことをやればいいって、ジューンは応援してくれた。

それ以来、女子がサッカーをすることに難色を示してくる奴には、ジューンが言っていた言葉をそのまま返して黙らせた。

ジューンのお陰で、女子でもサッカーをしていいんだって自信がついた矢先のことだ、脚を怪我してしまったのは。

サッカーをしている女子は人口が少ないから、空が所属していたチームだって1人も欠けてはいけなくらい、人数が少なかった。

だから無理をしても試合に出なければならなかったのに、お母さんはそれを許してくれなかった。

試合に出たい、サッカーをしたいって言う空の気持ちをも、全く汲んでくれなかった。

家を飛び出して試合場まで行ったのはいいものの、試合はとつくに終わっていたし、出られなかった悔しさとお母さんに対する怒りで、感情がぐちゃぐちゃになっていたところに、憧れの人からのトドメの一言。

——アタシは、どうすればよかったの？

幾ら考えても、答えは見つからなかった。

「空さんっ!!」

ミミの切羽詰まったような声で、空はようやく身に迫っている危機に気づく。

思考の海に沈んでいた空の意識は急激に引き上げられ、詰まってい

たらしい息が一気に吐き出された。

視界がオレンジ色に染まりつつある。

バードラモンだ、と気づいた時、パートナーと目が合った。

『くっ……！』

風圧に押し流されたバードラモンは、無理やりその巨体を捻って、立ち竦んでいる空を紙一重で避ける。

びよお、とかき乱された風が空を襲った。

咄嗟に腕で顔を庇い、目を瞑る。

「空さあんっ！」

『バードラモン!!』

「ミ、ミミちゃん……一体何が……?」

ミミとトゲモンが慌てて駆け寄ってきた。

思考に耽っていた空は、何があつてバードラモンが吹っ飛んできたのか、状況が読めなかったため、ミミに訊ねるしかない。

するとミミは泣きながら空にしがみついて、ごめんなさあいつて涙声で謝罪してくる。

どうやら急降下してトゲモンを突風で巻き上げようとしたらしいが、トゲモンのパンチが急所に当たってしまったようで、そのまま吹っ飛ばされたらしいのだ。

ごめんなさいごめんなさい、つて退化したパルモンとともに、ミミが必死になって頭を下げてくるが、空はそれどころではない。

慌ててバードラモンの方を見れば、河原の岸に埋められているような、大きな岩に身を預けていた。

ぶつかつた衝撃か、ピヨモンに退化している。

「ピヨモンッ！」

遠目からでもぐつたりとしているのが分かったので、空は顔を真っ青にさせながら駆け寄る。

「ピヨモン、しっかり！」

『っ、ソ、ラ……っ、あ、あ、あ、っ!!』

苦悶の表情を浮かべているピヨモンをそっと抱き起こそうと、その身体に触れた時だった。

今まで聞いたことがないような悲鳴をあげるピヨモンに、空とミミはギョツとなる。

ぶるぶると右の翼を震わせながら、ぐったりとしている左の翼に添えた。

その表情はまるで激痛を堪えているように顰められている。

は、とパルモンがピヨモンの傍で膝をついた。

『ピ、ピヨモン……まさか、岩にぶつかった時に翼……』
「っー」

それだけ聞けば、ピヨモンの異変に気付かない空ではない。

ミミも口元を両手で覆って、ピヨモンを見下ろしている。

ピヨモンは恐らく、岩にぶつかった衝撃で退化をしたのではない。

岩にぶつかる前に退化をしまい、風圧を殺しきれなかったせいで、強く岩に身体をぶつけてしまったのだろう。

この様子では、翼が折れているかもしれない。

空に触れられたことで全身を襲う激痛に見舞われ、身体が硬直してしまっている。

息をするのも苦しいのだろうか、ずっと短く吸っては長く吐いて、というのを繰り返していた。

——アタシのせいだ……

空は歯を食いしばる。

ギリ、と歯ぎしりの音がするほどに強く食いしばり、顔に影を落としながらピヨモンの翼にそっと手を添えた。

アタシのせいだ。修行中なのに、相手が仲間とは言え技の打ち合いをしていたのに、進化をしながら戦っていたのに、バードラモンのことをちゃんと見ていなかった、アタシが悪いんだ。

相手がミミちゃんじゃなかったら、次の敵だったら、ピヨモンはきつと骨折なんかじゃ済まなかった。

ちゃんとバードラモンを、相手を見て、どう動かなきゃいけないのか指示をしてやらなきゃいけないのに。

サツカーと一緒に。

サツカーは自分1人ではできない。

仲間が、対戦相手がいるから成り立つのだ。

考え事をしていたから、ボールを追いかけられませんでした、なんてサッカーの試合だったら激怒ものである。

監督から喝が飛び、仲間から非難される。

戦いとサッカーは比べ物にはならないかもしれないが、それでもチームが一丸となって戦わなきゃいけないのは同じなのに……。

「……………ミミちゃん、残念だけど……………修行は中止しましょう」

ゲンナイから救急セットはもらっていたが、それは飽くまで応急処置用、擦り傷や切り傷を手当するためのものだ。

ゲンナイも流石に、骨折は想定外だったのだろう、救急セットにもミニパソコンにも骨折を処置するようなアイテムはなかった。

治療のしようがない、と項垂れる空に、ミミとパルモンは何も言えなかった。

ここでまだやりたいなんて言う奴は、ただの莫迦か薄情者だ。

『ソ、ソラ……………アタシ、なら、だいじょうぶ、だか、ら、い、っ！』
「何言ってるの！折れてるかもしれないのよ!?そんな身体で修行なんか続けられるわけないでしょ！ミミちゃん、申し訳ないけど、ピヨモンの腕ぐらいの長さの棒、探してくれない？添え木にするから」

「は、はい！パルモン、行こう！」

『うん！』

まだやると言い張るピヨモンを一喝した空に頼まれ、ミミはパルモンを伴って森の方へと走る。

手頃な枝が落ちていないだろうか、と辺りを見回すも、数分すると溜息を吐きながら項垂れてしまった。

『……………』

「……………ごめんね、パルモン。アタシが無茶なこと言ったから……………ピヨモン、怪我させちゃった……………」

『ミミは悪くないわ？アタシだってパンチする時、変に力入れすぎちゃって……………後でソラとピヨモンにもう一回謝らなきゃ……………』

「……………」

『……………』

「……空さん、やっぱり……修行、嫌だったのかなあ」
もう1度、溜息。

思い出すのは、昨日の夜の出来事。正確には、深夜を回っていたから今日の出来事だが、空は初めての形で自分の気持ちをミミに対して吐露した。

自分は母親に愛されていない。他人のことだって、どうだっていい。だから自分が何故愛情の紋章を与えられたのか分からないと。ミミだって、何故自分が「純真」と言う紋章を与えられたのか、分かっている。

だからこそ、この修行で何かを掴みたいとミミは思っていたのだが、空は違うのだろうか。

空も同じ気持ちだと思っていたけれど、本当は修行をしたくなかったのだろうか。

「……やっぱり、駄目ね、アタシ」

言いたいことを言えるのは、ミミの長所だ。

でも時々、思っていることをそのまま言うせいで、お友達とちよつとしたいざこざになることもある。

ミミちゃん言い過ぎ、つてお友達に窘められたことも、両手で数えきれないほどだ。

長所は、短所である。

自分の気持ちに正直になりすぎて、相手の都合や気持ちを蔑ろにしてしまうことも、よくあるのだ。

思ったことを言っただけだもん、と悪びれないこともあったし、確かに言い過ぎたかも、と反省することもあった。

最近是最年少達のお姉さんを頑張っていて、自分の気持ちを全面に押し出すことが減っていたから、長らく忘れていたようだ。

今ここに、お姉さんをやらなきやいけないための最年少達はいない。

基本的に甘えん坊のミミが、お姉さんをやらずに済む年上の人がいるのなら、それに寄りかかって甘えてしまうのは当然の結果である。心配してついてきてくれたからと言って、少し甘えすぎたかなって

ミミは反省する。

そんなことない、って否定してくれるのは、いつだってパルモンであつた。

『だってミミは前に進もうとしていたじゃない！タイチとアグモンがミミ達の世界に飛ばされちゃって、オサムとガブモンは修行の旅に出て、他のみんなはどうしようどうしようって悩んでた中で、強くなりたいて次に行動したのはミミよ！もうブイモンみたいに、哀しい思いをするデジモンが増えて欲しくないって！アタシだってそうだもの！ずっとずっと、ミミを待っていた間一緒に待ってた仲間のこと、アタシ何にも知らなかった。アタシ達と一緒にだつて、ずっと思つた。でも違つた！ブイモンはずっとずっと昔の、もういなくなつちやつたデジモンの生き残りで、あんな辛くて哀しい過去があつたなんて！アタシもどうすればいいのか分からなかったのに、ミミはちゃんと前を見ようとしてたじゃない！ミミは駄目なんかじゃない！そりゃ、最初は大丈夫かなって、ちよつと不安だつたけど……』

「パルモン……」
そうなのだ。

心の拠り所を2人も一気に失つて、停滞していた子ども達の中で、真つ先に立ち上がったのは最年長の丈でもお母さんの空でもない。

素直で我儘なお姫様だつた、ミミだ。

あの時、ブイモンの悍ましい過去を知つた子ども達の中で、真つづくにブイモンの気持ちを受け止めてしまったミミなのだ。

悩まなかつたわけではない。自分の気持ちに正直で、思つたことはすぐに口にしてしまつて、時には相手を傷つけるような言葉を紡いでしまう女の子は、それでも暴力や争いは嫌いだった。

出来ることなら耳を塞いで、目を逸らしたかつた。

自分じゃなくて他の誰かがやればいいのになつて、思つたこともあつた。

それでも無理やり折り合いをつけて、お家に帰るために世界を救おうって、それまでは頑張ろうって思つていた。

自分が傷つくのも、お友達が傷つくのも嫌だつたお姫様は、知つて

しまったのだ。

悪意というのは、子ども達の気持ちなんか無視して、突然襲い掛かってくるのだって。

奇しくも最年少で、パートナーが誰よりも遅く進化した賢が、ファイル島での最後の戦いで悟ってしまった状況を、ミミはその時思い知ったのである。

それまではお家に帰りたいて言う気持ちが先行していたのに、ブイモンに襲い掛かった悪夢を、デジタルワールドを覆いつくそうとしている悪意を目の当たりにしてしまったお姫様は、ようやく悟ったのである。

だから決めたのだ、だからこそ決めたのだ。

沈んでいた最年少達を見て、ミミは決めたのである。

「……そうよね、これぐらいでへこたれちゃダメだわ。戦うって決めたんだもの、アタシ。パルモンのいるこの世界を、ブイモンみたいに哀しい思いをしたデジモンを護るんだって」

へこみかけていた気持ちが、再浮上してくる。

甘えるのも愚痴を吐くのも、全部終わってからにしようと思っていたのだ。

よし、とミミは頬を両手で軽く叩き、気を引き締めた。

よかった、とパルモンは元気になったミミを見て、ほっと胸を撫で下ろす。

「さて、空さんにも頼まれたし、木の枝探しましよっか。添え木にするって言ってたし、なるべく頑丈そうなのがいいかな？それとも何本か持ってた方がいいのかしら」

『とりあえず良さそうなのを何本か持ってって、ソラに見てもらったら？』

「うん、そうする」

気持ちを改め、ミミとパルモンは空に頼まれた添え木用の木の枝を探そうと、地面に目を落とした時である。

『霸王拳っ!!』

何処からか聞こえてきた声と共に飛んできたのは、鬼の顔のような紫色の衝撃破。

バキバキ、と言う何かが折れる音と、凄まじい風圧で、ミミとパールモンの身体は吹っ飛ばすように転がっていく。

きやあ、と悲鳴をあげながら、何とか身体を起こし、風圧が飛んできた方角を見やった。

『ガハハハッ！今のはほんのご挨拶だっ！』

「だっ、誰?!いきなり何するのよ!」

下品な笑い声と共に現れたのは、緑色の巨人である。

銀混じりの白く長い髪に、口から見える大きな牙、頭から生えた角、手に持っている棍棒は何かの骨だろうか。

ギラギラと獲物に狙いをつけた水色の目は、真つすぐミミとパールモンを見つめて逸らさない。

パールモンは立ちはだかるように、そいつを睨みつけた。

『ミミ！あいつは、オーガモンよ!』

「オーガ、モン?」

『強いデジモンと戦うことを生きがいにしてて、弱い者虐めもしてる、悪いデジモンなの!』

「わ、悪いデジモン……まさかっ!」

『ガハハハハッ!』

ブン、と手に持っていた棍棒を振り下ろすように、先端をミミとパールモンに向けるオーガモンは、高らかに宣言する。

『ヴァンデモン様の名の下に、テメエら選ばれし子ども達を総て抹殺してやる!覚悟しな!』

「……………ヴァンデ、モン?」

聞き慣れぬ名前に、ミミはその名を繰り返すように呟いたが、オーガモンがそれに答えることはなかった。

大地を蹴るように走り出し、一気に距離を詰めてパールモンにその棍棒振り下ろそうとする。

パールモンはミミを護るべくトゲモンに進化をし、迫ってきたオーガ

モンに向かって拳を繰り出した。

バキ、とトゲモンの拳が、オーガモンの振り下ろした棍棒に当たると、ミシリという音がして棍棒がしなる。

それを聞き逃さなかったオーガモンは、ボックスステップでトゲモンから離れる。

『ガハハハッ！思ってたよりやるじゃねえか！』

『当たり前でしょ！』

『この棍棒はスカルグレイモンの骨から作ったもんだぜ？普通は拳の方が碎けるもんだが、テメエはなかなか鍛えているようだな！』

スカルグレイモン、と聞いたミミの肩が跳ねる。

それは、その名は、自分達を常に導いてくれていたリーダーのパートナーが、1度だけ見せた姿。

不幸な事故により大怪我を負った太一を見て、心に生まれた闇が暴走してしまった果てに進化をした姿だ。

パートナー達は愚か、ただの人間でしかないミミ達でさえ、スカルグレイモンから発せられるオーラに圧倒されたのを、ミミは決して忘れないだろう。

パートナー達が全員で対処しても、歯が立たなかったあの恐ろしいデジモンの骨で出来たのが、あの棍棒だとオーガモンは言う。

それはつまり、このオーガモンは怯むことも恐れることもなく、スカルグレイモンと戦って、勝利したということだ。

自分達ですらスカルグレイモンが力尽きるのを待つしかなかったのに、スカルグレイモンに勝った相手と戦って、勝てるのだろうか。

一瞬だけ、ミミの心に迷いが生じる。

しかしそんな迷いを吹き飛ばしてくれたのは、他でもないパートナーであった。

『ミミッ！』

「っ！」

『大丈夫よ、ミミーアタシはこんな奴に負けないっ！』

「……うん、うんっ！そうよ、アタシ達だって修行してたんだもの、負けたりなんかしないわ！」

ミミはデジヴァイスを握りしめる。

デジヴァイスはミミの想いを受け止めて、更に強く光り輝いた。

そこから伝わってくるミミの想いに、トゲモンは両手のグローブをバシバシと打ち合わせる。

『行くわよっ！』

『望むところだっ！』

オーガモンはスカルグレイモンの骨で出来た棍棒をポイツと放り投げると、ファイティングポーズを取る。

強いデジモンに喧嘩を売るのが好き、というトゲモンの言葉通り、オーガモンはトゲモンを強敵と認めたようだ。

棍棒による攻撃よりも、素手による攻撃の方を好むオーガモンは、好戦的な笑みを浮かべると拳を後ろに引く。

『霸王拳！』

『ココナッツパンチ！』

オーガモンが繰り出したのは、先ほどの紫のオーラだ。

トゲモンは右の拳を突き出して、それを相殺する。

『まだまだ！霸王百連拳!!』

『こつちだつて！マツハジャブー！』

今度は両方の拳を交互に打ち出しながら、幾つものオーラを放ってきた。

トゲモンは慌てず、冷静に攻撃を見極めて、素早く何度も拳を打ち出してオーラを掻き消している。

すごい、つてミミは祈るようにデジヴァイスを握りしめながら、圧倒されていた。

この2週間、バードラモンを相手にしていた修行の成果が出ている。

バードラモンの必殺技であるメテオウイングは、両翼から幾つもの火球を打ち出す技だ。

トゲモンはそれを総て、パンチで打ち消すと言う修行を何度も行っていたため、オーガモンの技にも対処できたのである。

頑張れ、つてミミはデジヴァイスを握る力を強めた。

技を打つのが煩わしくなったのか、オーガモンは大きく舌打ちをするとオーラを打ち出すのをやめ、トゲモンの顔を殴りつけた。

身体に生えている棘を物ともしなかったその拳に、一瞬だけトゲモンは怯んだものの、常時流れ込んでくるデジヴァイスからのミミの気持ちを受け止め、すぐに体勢を立て直し、負けじとアツパーを食らわせてやる。

まともに受けたオーガモンは、しかし楽し気な表情を崩すことなくボディーブローを仕掛けてきた。

カウンターを食らわせるように、ほぼ同時にオーガモンの頬を殴りつけるトゲモン。

ファイル島でもんざえモンと繰り広げた、あのラッシュを彷彿とさせるバトルだった。

ドカ、バキ、と殴りつける音が鳴り響く。

ミミの顔が、どんどん泣きそうな表情に歪められていく。

戦うのも傷つけあうのも、本当は好きじゃない。

でもここでオーガモンを何とかしなければ、河原には怪我をして動けないピヨモンが待っているのだ。

だから頑張って、ってミミは心の中で強く強く願う。

誰かを思いやる、強い思い。

空を護りたいというミミの気持ちが伝わり、トゲモンの二の腕が一瞬だけ盛り上がる。

『ココナッツパーンチ!!』

ミミの想いと自分の気持ちを乗せた拳を、オーガモンに食らわせてやれば、溜まらずオーガモンは吹っ飛ばされる。

砂埃をあげながら地面を滑っていくオーガモンに、ミミは勝つたのだと思つてトゲモンに駆け寄ろうとしたが、トゲモンはそれを鋭い声で止める。

トゲモンは、ファイティングポーズを解いていなかった。

『……ガハハハッ！やっぱ強いなあ、テメエ！俺様の見込んだ通りだぜ！』

濛々と立ち上っていた砂煙が晴れる。

殴りつけられた頬を撫でながら、オーガモンが立っていた。

『……テメエの強さに免じて、俺様も本気で相手をしてやる！』

ニヤリ、と嗤ったオーガモンの手には、いつの間に握られていたのか、オーガモンの手と同じぐらいの大きさの、水晶が在った。

何あれ、と呟くミミとは裏腹に、トゲモンの警戒心は頂点に達する。ビリビリとした痺れるような空気。

スカルグレイモンとは違った、悍ましい“何か”を、その水晶から感じ取った。

アレは、まずい。

本能的に察したトゲモンは、あの水晶を壊そうとしたが、オーガモンの方が早かった。

水晶を掲げる。真っ黒な光が、水晶から放たれた。

眩さはなかったものの、その悍ましいオーラに、トゲモンは咄嗟にミミを庇って光から目を逸らす。

それは、一瞬だった。シユウシユウと白い蒸気のような煙が発せられ、辺りに広がっていく。

トゲモンは恐る恐る、と言った様子でミミから離れ、そして、見た。

オーガモンがいたはずの場所に、オーガモンではないデジモンがいるのを。

『さあ……第二ラウンドと行こうぜ！』

高速で回転する右腕のカッターが、ミミとトゲモンの希望を打ち砕くように唸っていた。

そして花は咲き誇る

地面が揺れる。

離れたところから聞こえてきた爆音に、痛みで荒くなっている息を整えようと、ゆっくり呼吸しているピヨモンを労わっていた空は、何事かと咄嗟にピヨモンを庇うように抱きかかえた。

その際、動かさないようにしていた翼が揺れ、激痛が走ったピヨモンが呻く。

ごめん、と謝っている暇はない。

爆音はこちらに向かつて何度も響き渡り、音のする方から砂埃や黒煙が噴き上がっているからだ。

爆発物があつて爆発したのではない、ということはここが何処なのかを分かつていれば明白であろう。

デジモンが技を放つて攻撃しているのだ。

しかも爆音が聞こえている方角は、先ほど空が頼んでミミとパルモンが添え木になるような枝を探しに行った方角である。

最悪の展開が頭を過つた空が、ピヨモンを岩にもたれかからせて、ミミの様子を見に行こうとした時だった。

どおとおおとおおおおんっ!!

一際大きな爆発音。

きや、と空は目を閉じ耳を塞ぎ、伝わってきた衝撃から身を護る。直後に、砂煙を纏いながら何かか転がってきた。

『うう……!』

「トゲモン!?!」

濛々と舞い上がる砂煙が晴れ、中から姿を現したのは緑色のサボテン。

両手にはめられた赤いグローブを地面につき、身体を震わせながらも立ち上がりとしているトゲモンに、一体何があったのだと空は混

乱するばかりだった。

「トゲモオン！」

「！ミミちゃん！」

少し遅れて走ってきたミミに、空は何があったのか訪ねようとしたのだが、事態はまだ終わっていない。

再度爆発音が聞こえて、空は再び目と耳を塞ぐ羽目になる。

近距離での爆発だったためか、爆風が叩きつけられ、空の身体が後ろによろめいた。

ソラ、と力なくピヨモンの声が、僅かだが聞こえた気がした。

『ガハハハハハッ!!』

噴き上がる黒煙の向こう側。

黒煙を割るように、ぬつと姿を現したのは、見たこともないデジモン。

その身体はまるで漫画やアニメに出てきそうなサイボーグだった。上半身は緑色で生身の身体なのだが、両腕の前腕は機械化されている。

右腕は丸鋸になっていて、所々赤く錆びついているように見えた。

左腕も手の形にはなっているものの、ロボットの手のように指先まで金属になっている。

何より特徴的なのは、下半身だ。

バイクのように大きく太い車輪がついており、背中から見える3本のパイプは排気口だろうか、仕切りにエンジンを吹かしているような音が聞こえる。

シユウシユウ、と何かを擦るような音は、生身の顔の口元を覆っているマスクから聞こえてきた。

雄鶏の鶏冠のように立派なモヒカンが、風に揺れている。

あれは、と空が思う前に、そのデジモンが名乗りを上げた。

『来いよ、ガキ共！テメエらまとめて全員、このリベリモン様が捻り潰してやる！』

曰く、死の淵に追い込まれたデジモンが、周囲のジャンクデータを取り込み進化したと言うデジモンらしい。

自分の身体を改造して、更にパワーアップを図るために、他の機械系デジモン達からパーツを略奪する無法者で、かなり厄介がられているそうだ。

だが今の空達にとって厄介なのは、そのことではない。

最初ミミ達に襲い掛かってきたのは、オーガモンというデジモンで、トゲモンとラツシユの打ち合いをしていたところで、更に進化をしたのがリベリモンだ。

オーガモンは成熟期。そのオーガモンが進化をしたということは……。

「完全体……」

危ないから下がって、とトゲモンに言われて空の下に逃げてきたミミが、息を切らしながら教えてくれた。

空は息を飲む。

吹かしたエンジン音を響かせながら、満身創痍気味のトゲモンと対峙をしているリベリモンから目が離せない。

ヴァンデモン様の命令で、選ばれし子ども達を倒しに来た、とも言っていたというので、あのリベリモンは間違いなく敵だ。

しかしこの2週間、次なる進化を果たすために修行をしていたとはいえ、空もミミも進化の兆しは見られなかったし、紋章の意味もまだ理解できていない。

体力だけはいったと思うが、成熟期と完全体ではどれだけ数を揃えようともレベルの差は埋まらないことは、太一のアグモン（スカルグレイモン）で実証済みである。

更に、リベリモンは見るからに機械やサイボーグと言った風貌で、植物型のトゲモンとは相性が悪すぎる。

右手の丸鋸を振るわれればお終いだ。

そして最悪なことに、空のピヨモンは翼を折ってしまい、戦闘に加勢することが出来ない状態である。

トゲモンがリベリモンの相手をするしかないのは明白だった。

「トゲモン！アタシ達で何とかしましょう！」

『ええ！』

トゲモンは気合を入れ直すように、バシバシと両手のグローブを叩く。

雄叫びをあげながらオーガモン……リベリモンに向かって技を放とうとしたが、リベリモンの方が早かった

『爆ぜろやあーヴァンキツシュミサイル!』

左腕を掲げ、そして振り下ろす。

ガシャン、という音がして、左手首がハッチのように開き、そこから大量のミサイルが、トゲモン目掛けて放たれた。

トゲモンは走るのを辞めず、飛んできたミサイルを両方の拳で処理していきながら、リベリモンを殴り飛ばそうとしたが……。

どおおおおおおおおおおおおおんっ!!

「きやああああああああああっ!!」

『ッ、ミニッツ!』

爆発音とともに聞こえてきた、パートナーの悲鳴。

振り返ると処理し損ねたミサイルが、ミニ達がいる付近に落ちたよううで、空はピヨモンを抱えながら、ミニも帽子を押さえるように頭を抱えて吹っ飛ばされていた。

目の前の敵から目を離してしまったトゲモンの隙を、リベリモンは見逃さない。

『マキシマムデモリッシャー!』

『ぎゃあああああっ!!』

右腕の丸鋸を高速回転させ、真横に振るって切りかかる。

まともに食らってしまったトゲモンは、植物の身体が切断されることはなかったものの、完全体からの攻撃は思っているよりもトゲモンに大ダメージを与えた。

勢いを殺せず、トゲモンは紙屑のように地面を転がっていく。

ミニが悲鳴をあげながら駆け寄ってくるのを、トゲモンは制した。リベリモンがエンジンを吹かしながら、トゲモンを追撃しようとしてきたからだ。

トゲモンは切りつけられて激痛が走る身体を何とか叱咤して起こし、ファイティングポーズを取る。

しかしリベリモンのスピードは速く、トゲモンが構えたと同時に懐に潜り込まれる。

『おらあつ!!』

『あぐつ!』

「トゲモンツ!!」

機械仕掛けの拳に、トゲモンの最大の武器とも言える棘など通用しない。

殴りつけられ、歪む顔。

体勢を整える隙すら与えられず、トゲモンはリベリモンに蹂躪される。

ミミは悲鳴をあげることしかできなかつた。

『……………い、かなきや…………』

打撃音とミミの悲鳴だけが絶え間なく響く中、ぽつりと落とされるように呟かれた言の葉。

それを拾ったのは、近くにいた空だけだつた。

トゲモンが蹂躪されているのを見ていることしか出来ない空は、翼を折って戦線離脱してしまっているピヨモンを抱きしめていた。

ぐったりとしている四肢に、僅かに力が込められている。

「ピヨモン……………」

『行かなきや…………アタシも…………たたかわ、なきや…………!』

「っ、何言ってるの!?!」

打ち付けて、折れたせいで力を入れられない翼を庇いながら起き上がろうとするピヨモンを、空は信じられないものを見るような目で見下ろす。

立ち上がろうと地面に折れていない方の翼について、震えるピヨモンを、空は抱き寄せて阻止しようとした。

無茶だ、そんなの。

だってピヨモンの翼は折れてしまい、羽ばたくことが出来ないのだから。

少し力を入れただけでも激痛が走って、呼吸することすらままならなくなっているのに、進化なんてできるはずがない。

よしんば出来たとしても、折れた翼が治癒されるわけではないから、空を飛ぶことだって出来ない。

ピヨモンが進化するのには、空を飛んでこそ意味を成すデジモンなのだ。

翼が折れたバードラモンなど、足手まといにしかない。

そう空はピヨモンに言うが、ピヨモンは空の腕から這い出ようと必死にもがく。

その際、折れた方の翼に力を入れてしまったため、何度目かの激痛が走った。

『うあ、っ……!!』

「ほら、もう！アンタ、自分の身体が今どうなってるか、分かっているの!？」

『でも……っ!』

「でももだってもないっ！お願いだから止めて！」
空だつて分かっている。

ピヨモンは、デジモン達はパートナーを護るためにここにいることも、進化をすることも。

蹂躪されても尚、ミミを護ろうと何度でも立ち上がろうとするトゲモンも。

でも、それでも。

「折れてるのよ!?!そんな折れた翼でどうしようって言うの!!そんなんで戦うなんて、莫迦なこと言わないでっ!!」

『っ……!!……っ……っ……っ……っ……!!』

そして初めて、空とピヨモンは向き合った。

『どうして分かってくれないのっ!!』

「……………っ!!」

強い風が、空に纏わりつく。

お気に入りの青い帽子の紐が揺れる。

突風が空の髪を乱暴に撫でつける。

音が消える、視界が白く染まる。

それは、その言葉は――。

『っ！』

「ピヨモンッ!!」

頭の中が一瞬真っ白になってしまった空の手が緩む。

ピヨモンはその隙を逃さず、空の庇護から逃れるように飛び出していった。

しかし、

『あゝあゝっ!!』

「ピヨモンッ!」

進化をしようとしたピヨモンを、腕の痛みが阻む。

脚の先から頭の先まで、ビリビリと電流のような痛みが走り、一瞬にして力が抜けたピヨモンはその場で倒れこんでしまった。

慌てて抱きかかえる空。

瞬間、どおんという爆発音が聞こえてくる。

まだ戦闘は続いているのだ。

狙い撃ちにされてはたまらないので、空はピヨモンを抱えてその場から離れる。

『うゝうゝ……!』

「ピヨモン……!」

痛みで震えるピヨモンを、空はきつくきつく抱きしめる。

《どうして分かってくれないのっ!!》

先ほどのピヨモンの言葉が、しつこいぐらいに脳内を駆け巡り、再生される。

《どうして分かってくれないのっ!!》

じわり、と空の視界が滲んだ。

ピヨモンの輪郭がぼやけ、ピンク色だけが映し出される。

《どうして分かってくれないのっ!!》

ぼたり、と溜まった涙がピヨモンの目尻に落ち、まるでピヨモンが泣いているように流れる。

痛みで呻くピヨモンは気づかない。

折れている翼に、空は震える左手をそっと添えた。

「……………お母さん……………っ!」

やっと分かった。

やっと理解わかった。

どうしてあの時、お母さんはあんな酷いことを言ったのか。

どうしてあの日、ジュンはお母さんの味方をしたのか。

分かっていたなかったのは、自分の方だったのだ。

「ごめんなさい……………!お母さんっ!」

母の愛情が、やっと分かった。

ばき、と肉を殴りつけるような音。

砂埃をあげながら、トゲモンは倒れこむ。

「トゲモンッ!」

『きこちゃ……………ダメ……………!』

ミミは駆け寄ろうとするが、トゲモンはそれを阻み、満身創痍の身体を気力だけで起こす。

ファイティングポーズは解かない。

トゲモンの役目は、ミミを護ることだ。

いつの頃からか、生まれた時からなのか、それすら分からないほど遠く、気が遠くなるほど長い時間、トゲモンはミミを待っていた。

一緒にパートナーとなる子ども達を待っていた仲間達と共に、どんな子が来るのかな、仲良くなれたらいいなって毎日のように話し合いながら、トゲモンはミミを待っていたのである。

ようやく会えた当初は、泣き喚いたり我儘を言って他の子ども達を

困らせたりと、本当にこの子が自分のパートナーなのかと表情を顰めたこともあったが、初めてパルモンがトゲモンに進化を果たしてから、少しずつ変わっていった。

最年少の3人に対してお姉さんぶるようになったし、今回だってミミは自分から修行の旅に出ると言い出した。

現実世界ではパパやママに可愛がられ、甘やかされていたお姫様だったのに。

ブイモンの悍ましく、哀しい過去を見て、髪を振り乱す程に泣き喚いて、頭を抱えることしか出来なかったお姫様は、自分の足で立ち上がり、ここまで来た。

自分の役目を、自分の力を理解しようと、前を向いて歩き始めた。

——だったら、自分の役目は。

『ココナッツ……アッパー!』

ふらつく足を何とか踏み出し、トゲモンはリベリモンにアッパーを食らわせようとする。

力が上手く入らず、そのアッパーが当たることはなかったが、トゲモンは諦めない。

ミミを護るために、ミミが望んだ世界を作るために……ミミの、武器になるために。

『ちくちく、バンバン!』

トゲモンはふらつく身体を利用して、その場で高速回転をし出した。

無数の棘がリベリモンに向かって放たれるも、リベリモンは下半身のタイヤで縦横無尽に駆けながら、飛んでくる棘を悠々と避けている。

『マキシマムデモリッシャー!』

『ぎゃあああああああ!!』

「トゲモオンツ!!」

右腕を振るい、高速回転させた丸鋸でトゲモンに切りかかる。

避けられなかったトゲモンは吹っ飛ばされ、砂埃をあげながら地面を滑る。

駆け寄ってきたミミを、今度は止めなかった。

『ガハハハツ!!何だ、何だ?!もう終わりか?!張り合いがねえなあ!!』

リベリモンの嘲笑う声が聞こえる。

うるさい、と言えたらどれだけよかったか。

しかし今のミミの目には、痛ましく転がっているトゲモンしか映っていない。

「トゲモン、しっかりっ!」

『……………う、う……………』

呻く気力も、最早残っていないらしい。

立ち上がる体力も、総て使い果たしてしまった。

トゲモンはもう戦えない。

それを悟ったミミの目尻に、涙が浮かぶ。

「……………ん、で」

どうして、どうして?」

ミミには分からない。

「……………なん……………で……………」

傷つけられるのも、傷つけるのも厭うお姫様には、何も分からない。

「……………なんでえ……………っ!」

『あ?』

キツ、と目尻に浮かんだ涙を散らせながら、ミミはリベリモンを睨む。

「何でよっ!何でこんなことするの!?ヴァンデモンって奴は、何がしたいのよっ!誰かを傷つけて、何かを奪って、色んなものを壊そうとして、戦って、戦って、戦って……………っ!それで何が得られるのよっ!!」

こんなこと、間違っている。

ミミは叫ぶ。デビモンも、エテモンも、この世界を支配しようとして、闇の力を利用してしようとして、逆に意志を乗っ取られて、最後にはその命を散らしてしまった。

ヴァンデモンも、間違いなくデビモンやエテモンのように、世界を乗っ取るうとしていることは容易に想像できた。

だってヴァンデモンの手下だというリベリモンがやっているのは、デビモンやエテモンと同じなのだ。

世界を救うために奮闘している選ばれし子ども達と、そのパートナーデジモン達の邪魔をして、子ども達に襲い掛かっている。

デビモンは、自分の目的を果たすために、子ども達は邪魔だと言っていた。

ならばヴァンデモンにとっても、子ども達は邪魔な存在のはずだ。だからこうして、リベリモンがミミ達と対峙するのは分かる。

でも、理由が分からない。

何故、デビモンもエテモンも、ヴァンデモンも、世界を支配しようとしているのか。

何故、誰かを蹴落として、傷つけてでも、頂点に立とうとするのか。みんなで仲良く暮らせればいいではないか。

この世界は、誰のものでもない。

ここに住んでいるデジモン達、みんなのものなのに。

「何で独り占めしようとするのっ!?!ここに生きてるのは、貴方やヴァンデモンだけじゃないのっ!?!トゲモンやピヨモンとか、アグモン達にとっても大事な場所なのに!!何で奪おうとするのっ!?!」

『……ケツ、くっだらねえ』

ミミの渾身の悲鳴を、しかしリベリモンは吐き捨てるように一蹴する。

『いいか、この世界は弱肉強食。強い奴だけに生き残る権利があんだよ。弱え奴に生きる資格はねえ。それがまかり通る世界なんだよ、こ

こは』

「だからって……!?!」

『甘ったれんなっ!!』

「っ!」

『弱いくせに、理想論ばかりほざいてんじゃねえ!!何度も言わせんなっ!ここは!?!そういう世界だっ!!テメエら人間の世界がどんなもんか知らねえが、自分達の世界の常識を押し付けんなっ!弱い奴は逃げるか、這い蹲って泥水啜るしかねえんだよ!!だからこそ、強く

ならなきやいけねえ！自分が死なねえために、相手を殺して、奪い取る！！ここは“そういう世界”なんだっ！！いい加減、現実を見ろっ！！」

『現にそのトゲモンはもう動けねえだろっ！！何故か分かるか!?弱えからだっ!!覚悟がねえからだっ!!さっきの戦いで、俺が気づかねえと思っただのか!?そいつ、俺を殺そうとしねえじゃねえかっ!殺そうとしてねえじゃねえかっ!!殺気がねえんだよ!俺は完全体だぞっ!!成熟期のデジモンが、完全体の俺を殺す気で戦わないなんざ、あり得ねえっ!!どうせテメエが殺すとか抜かしたんだろっ!!』

『そんな甘っちょろい覚悟で、鬨気で、俺様に敵うわけねえだろうがっ!!俺に勝てないなら、ヴァンデモン様にだっ!!勝てやしねえっ!俺を殺すつもりがねえんなら、黙って殺されろっ!!』

耳を塞ぎたくなるほどの暴論に、しかしミミは反論できなかつた。だっ!!、リベリモンの言っただ通りなのだ。

ここは、ミミ達のいる世界ではない。
トゲモン達の世界、ミミ達の世界でいうところの、人の手がついていない自然の世界なのだ。

強者だけが生き残り、弱者は淘汰されていく。
反抗することも、抵抗することも出来ず、ただ強者の糧として屠られていく。

ミミだっ!!そうだ。
生きていくために、ミミ達人間だっ!!色んなものを犠牲にしている。

食べ物、住むところ、お勉強だっ!!、犠牲になったものがいたから、ミミは今を生きている。

……デビモンも、エテモンも、ミミ達が生き残るために、犠牲にしまった。

手を差し伸べることは、出来たかもしれないのに。
正面から話し合う道だっ!!、あつたかもしれないのに。

今なら、あの時何故賢が拒絶をしたのか、理解できる。

あの時のミミは、死にたくない、お家に帰りたいたいという気持ちでいっぱいだった。

さつき喚いたミミの言葉も、リベリモンの言った通り甘ったれの綺麗事に過ぎないのだから、分かってる。

何も言い返せない自分が悔しくて、ミミはトゲモンにしがみつくように縋りながら、両手の拳を強く握り……。

「……………違う」

振り絞るように、ミミは言った。

強く握った拳が震える。

あ、？とりべりモンは、小さく呟いたミミの言葉を聞き返した。

「違う……………こんな、間違ってる……………っ！」

この世界は、弱肉強食。

それは、リベリモンの言っていた通りだろう。

強くなければ、生き残れないのは、ミミ達の世界だって一緒。

……………いや、違う。

そんなの、おかしい。

そんな世界は、おかしい。

「生き残るために戦うのは、否定しないわ。アタシ達だって、そうだもの……………死にたくない、お家に帰りたい……………！でもっ!!」

脳裏に過つたのは、ブイモンの過去。

ただ生きていただけなのに、生きて、生きようとしていただけだったのに、ブイモンは一瞬にして仲間を、友達を、居場所を、総て奪われた。

あれは、弱肉強食なんかじゃ、絶対じゃない。

あれを、弱肉強食と呼ぶのは、認めない。

「貴方達の言ってることも、やってることも間違ってる!!…こんな、弱肉強食じゃないっ!!ただの暴力よっ!!侵略よっ!!そこに生きてるデジモン達の命を、居場所を、生きてる世界を無視して一方的に奪うことを、弱肉強食で片づけられないでっ!!言い訳にしないでっ!!」

ミミは叫ぶ。ミミは泣く。

そして真つすぐ、リベリモンを見つめる。
こんなのは間違つてると、ミミは恐れない。

だからこそ、紋章は輝く。

「きゃあっ!?!」

『ぎゃっ! なっ、何だっ!?!』

ミミが握りしめていたデジヴァイスから、黄緑色の光が漏れる。
暖かくて、優しい光だった。

デジヴァイスに収納されていた紋章が、デジヴァイスと連動して黄
緑色に変色する。

トゲモンの身体が光り輝いた。

「っ、トゲ、モン?」

ゆっくりと宙に浮かび上がる、トゲモンを包んだ光の卵。

やがてその卵から、新しい命が生まれてくる。

二足歩行のサボテンだったトゲモンに、美しい花が咲いた。

ピンク色のチュールリップのような帽子、棘が生えた鳶のような髪
と、ピンクのワンピース。

羽ばたく羽は葉っぱで出来た、まるで花の妖精のような女の子。

「あ、れって……」

「嘘……ミミちゃんの、トゲモンが……」

『……進化、した……?』

ミミも、空も、そしてピヨモンも、光から生まれた妖精を茫然と見
上げる。

背丈はミミよりも少し大きいぐらいでしかないものの、同じデジモ
ンのピヨモンには分かった。

2週間前、モニター越しで見かけた、グレイモンが進化を果たした
あのデジモンと同じ、凄まじいパワーを感じたのである。

「……トゲモン?」

『違うわ、アタシはリリモン』

「リリモン……?」

『そうよ、ミミ。アタシが進化したのは、貴方の純真な涙のお陰。その気持ちをも、アタシはいつまでも大事にしたい』

リリモンは空に舞い上がり、何処からともなく大きな花を取り出した。

『フラウカノンッ！』

打ち出されたのは、高エネルギー体。

リベリモンに真つすぐ飛んでいく。

しかし機動力のあるリベリモンは、それを簡単に避けてしまった。

『チッ！進化したか……だが、同じ完全体だからって、進化したての奴に負けるかよっ！ヴァンキツシユミサイルッ！』

空を飛ぶリリモンに、もう右手の丸鋸は届かない。

必然的に技が1つ封じられ、しかしリベリモンはそれで引くことはなく、左手から再びミサイルを何発も放った。

『うふふ』

不敵に笑うリリモンは、舞うように空を飛び、ミサイルを総て躲けていく。

苛立たし気に、リベリモンはミサイルを何発も放つが、リリモンはフラウカノンで相殺したり、ミサイル同士で爆発させながら、いなしていった。

そして、

『……んがあっ?!?しまった、弾切れ!?!』

幾らサイボーグ型のデジモンとは言えど、打ち出されるミサイルも無限ではない。

リリモンはその隙を逃さず、身軽さを利用した素早い動きで、一気にリベリモンに詰め寄った。

『んなっ！』

『この距離なら、避けられないでしょ』

可愛らしく笑いながら、リリモンは花からエネルギー弾を打ち出した。

まともに食らったりリベリモンは、溜まらず吹っ飛んでいく。

『んがあああっ!!』

「やったー！リリモン！」

リリモンに駆け寄り、ミミは抱き着く。

進化した、次なる進化を、果たしたのだ。

ミミの悲痛な思いに、誰かを思つて流した涙に反応して、紋章が輝いたのだ。

やっと分かった気がした。

純真とは、綺麗な心と言う意味ではない。

誰かのために頑張れる心を、純真と言うのだと。

自分のためだと、ミミは自分を甘やかしてしまつて、頑張れない。でも他の誰かのためなら、ミミはいっぱい頑張れるのだ。

誰も傷ついてほしくないから、誰にも傷つかれたくないから。

「リリモン、ありがとうっ！ホントにありがとうっ！」

『いいのよ、ミミ。アタシこそ、ありがとう』

抱き合つて、喜びを分かち合うミミとリリモン。

そんな1人と1体を微笑ましく見つめ、歩み寄ろうとした空は、はつと険しい表情を浮かべた。

「ミミちゃんっ！リリモン！」

空の言葉と視線の方向で、ミミとリリモンは異変に気付く。

濛々と上がっていた白い煙の向こうに、バチバチと火花を散らし、息絶え絶えながらもリベリモンが佇んでいた。

倒したわけではなかったのか、と空はピヨモンを抱きかかえながら、ミミの下に駆け寄る。

リリモンも、ミミと空を背後で庇うように前に出た。

『チツ……！ホントに、とんだ、甘ちゃん、だぜ……！喜んでる、ごふっ、暇が、あんなら……とつとつと、トドメ、さしや、よかった、のに、よ……！』

「……………」

そう、リベリモンの言う通り。

リベリモンがミミ達の敵である限り、ミミはトドメを差さなければならぬ。

この世界を奪おうと、支配しようと企んでいる敵の手下だと言うの

ならば、猶更。

リリモンが至近距離で技を放った時、もう1発すかさず撃てばよかったのだ。

そうすればリベリモンは、間違いなく息絶えていただろう。

たとえ進化したてであっても、デジヴァイスと紋章の恩恵を受けたパートナーデジモン達は、通常の完全体と比べれば強いのだ。

この世界の掟である、弱肉強食のルールに従うのなら、ミミはリベリモンをここで倒さなければならぬのだが……ミミは、じつとリベリモンを睨み、衝撃の言葉を口にする。

「いやよ」

『……何?』

「それじゃ、貴方達と同じじゃない。アタシ達の邪魔になるから倒すなんて、そんなの、貴方達と一緒にじゃない!」

ミミは決めたのだ。

ブイモンの哀しく忌まわしい過去を見た時から、この修行の旅に出た時から、ミミは決めていたのだ。

「アタシは誰も殺さないっ!誰も殺させないっ!護るために戦っても、殺すために戦わないっ!貴方達と一緒にしないでっ!」

「……ミミちゃん」

『ミミ……』

もう2度と、あんな哀しい争いは起こさせない。

誰かが傷ついて、奪われる戦いなんか、あっていいはずがないのだ。

繰り返してはならないのだ。

リベリモンはマスクで隠れている歯を、食いしばってギリツと鳴らす。

『……殺さない、殺させない、だあ?ふざけんなっ!そんな甘っちょろい覚悟が、この世界で通用すると思ってるのかっ!!お前みたいのが真っ先に死ぬんだよっ!!この世界はっ!!』

『煩いっ!!』

ドンツ!と、リベリモンのすぐ隣で、小さな爆発が起こる。

花の武器を構えたりリリモンが、技を放ったのだ。

『この世界、この世界って、総てのデジモンの代表みたいに言わないでっ！助け合って生きているデジモンだっているのっ！貴方の見た世界だけが、この世界のルールみたいに言わないでっ!!』

リリモンは、パルモンはそうやって生きてきたのだ。

子ども達を待っている間、仲間達と身を寄せ合って生きてきたのだ。

確かにこの世界は生き残りや競争に関しては、シビアかもしれない。

でもリリモンは、信じている。

ミミがそんな世界でいてほしいと願っているのなら、その願いを叶えたい。

リリモンだって、争い合うばかりの世界は嫌だ。

色んなデジモンと手を取り合って、共に生きていきたいと願うことの、何が悪いのか。

『ミミが殺さないと言うのなら、アタシも殺さない。誰の命も奪わない、奪わせない。アタシは、ミミの思い描く世界を生きたいのよっ！』
『……………チツ』

武器を構えたまま、しかしリリモンはこれ以上の戦う意志を示さずに、リベリモンを睨みつける。

たかが人間の小娘に、殺傷能力を持たないデジモンに啖呵を切られたりベリモンの戦意は、すっかり喪失していた。

『くっだらねえ…………やめだ、やめ。萎えちまった…………やれるもんなら、やってみろよ。そんな甘っちょろいもん、すぐに踏みにじられるに決まってる。この世界はテメエらが思うほど、お優しくできてねえんだ。それで自分の命を落とすことになったとしても、テメエらが撒いた種だ。そんな時になって後悔したって、取り返しがつかねえんだよ』
「そうなる前に、アタシ達が止めてみせるわ」

リベリモンの吐き捨てた言葉に、反論したのは空だった。

腕の痛みで顔を顰めているピヨモンを抱きながら、空はリベリモンを真っすぐ見つめる。

空の表情に、先ほどまでの迷いはなかった。

「護つてみせる。この世界も、ここに生きるデジモン達も、みんな。アンタ達になんか、負けないっ！」

「……空さん」

『……………ケツ、勝手にしろ』

何の力もないはずの、デジモン達がいなければとつくに死んでいたはずの人間は、真つすぐリベリモンを見つめて逸らさない。

その力強さに、リベリモンは一瞬押し黙った後に、吐き捨てるようにそう言い放ち、ギシギシと軋む機械の身体を何とか起こして、その場から立ち去った。

後に残ったのは、戦闘の跡が残って、穴ぼこだらけになった河原や、薙ぎ倒された木々、黒煙が舞い上がる森、そして立ち去っていくリベリモンの背中を、呆けながら見守っている空とミミとリリモンである。

ピヨモンは、疲労からかいつの間にか眠りに落ちていた。

「……………あ」

完全にリベリモンの気配がなくなった時、リリモンはようやく緊張が解けたのか、光り輝いて小さくなる。

しかしそこにいたのは、頭部に花を咲かせたパルモンではなかった。

『つ、つかれた……おなかすいたあ』

「タネモン！」

ファイル島で以来、久しぶりに見かけたのはパルモンが進化する前の姿、タネモンだった。

成熟期に進化する時でも膨大なエネルギーを消費し、普段よりも更に食欲が増すのだから、より上の世代である完全体に進化すれば、成長期の姿を維持できないのは当然だろう。

「お疲れ様、タネモン……本当に、ありがとうね」

『ふふ……』

「ミミちゃん」

空腹と疲労でぐったりしているタネモンを拾い、労わりを込めて抱きしめてやれば、タネモンは嬉しそうに笑う。

そんなミミとタネモンを見て、空は一息ついてから声をかけた。

「おめでとう、ミミちゃん。タネモンが完全体になったわね……紋章の意味、理解できたんだ？」

「空さん……はい、何となくですけど……」

『コツはなんとなくつかめたから、これからはかんぜんたいがきても、ちゃんとたたかえるわっ』

「ふふ、そっか……じゃあ、ミミちゃん。一旦ゲンナイさんのところに帰りましょうか」

「えっ」

『ピヨモンが翼の骨折っちゃったし、タネモンも今は疲れてて進化できないでしょ？ゲンナイさんのとこでちょっと休んで、それでまた修行のし直ししましょ』

「……はい、そうですね！」

昨日までとはまるで別人の空の様子に、ミミは首を傾げるも、いつもの空に戻ってくれたことが嬉しかったので、それ以上は言及しないでおいた。

『イツデエ——ツ!!』

『煩い、これぐらいで騒ぐな、みつともない』

とあるエリアの、森の奥。

選ばれし子ども達が感知できないぐらいまで、遠くに逃げたりベリモン、基オーガモンは、思いつきり力を込めて巻きつけられた包帯に、悲鳴をあげていた。

その治療をしているウィザーモンは、あまりの煩さに顔を顰めている。

その態度が気に入らないのか、オーガモンは治療をされている身でありながら、ウィザーモンに怒鳴りつけた。

『そうは言うけどなっ！あの餓鬼ども、マジで容赦なかったんだぞっ!?ゼロ距離からカノン砲って、何考えてんだっ！その癖、誰も殺さねえとか甘つちよろいことほぎきやがるし……っ！』

『容赦ないのは、むしろ大歓迎じゃないか。子ども達には強くなつてもらわなければならぬのだから』

『テツメエは直接餓鬼どもと対峙してねえから、んな呑気な事言つて、イツデエエエエエツ!!』

『その口閉じないと、次は消毒液直接ぶち込むぞ』

『俺！一応！怪我人！』

完全体で機械仕掛けのサイボーグ型デジモンだったとはいえ、ゼロ距離で発射された高エネルギー体をもろに食らえば、ダメージは計り知れない。

皮膚は彼方此方焼け爛れ、自慢の髪も少し焦げ付いている。

消毒液をしみ込ませた綿を慎重に傷口に当て、慣れた手つきで包帯を巻いてやれば、まるでミイラデジモンのようだ。

……髪が焦げて少ーしだけ短くなっていることは、子ども達のためにも黙つていよう、とウィザーモンは襟で隠れている口元を歪ませた。

『よし、これで一応の手当は済んだ。あとはアジトにでも戻つて、療養しておくんだな』

『おう……んじゃ、当初の予定通り、俺あこれで離脱するぜ』

『ああ。ヴァンデモンも今は遠くに出ていて、こちらのことには気づいていない。偽装は私とピコデビモンでやっておくから、お前はその怪我をきちんと治せよ』

『へいへい』

持つてきた包帯を殆ど使ってしまったことに、冷や汗をかきながら、ウィザーモンは救急セットを仕舞い、置いておいた杖を手に取り、くるんと回転させる。

ふわり、とウィザーモンの姿は、風に乗って消えた。

オーガモンはだいぶマシになった痛む腕を抑えながら、よつこらせと立ち上がる。

ヴァンデモンは今近くにはいないはず、とは言つても、いつ何処から現れるのか分からないため、早めにこの場を移動しなくてはならないのだ。

事後処理やその他諸々は、ピコデビモンに押し付ければいい。

このオーガモンは、確かにヴァンデモンの手先として子ども達の前に立ちほだかったが、ヴァンデモンに忠誠を誓っているわけではない。

ピコデビモンやウイザーモンと同じく、ゲンナイに雇われたスパイデジモンだ。

元々はファイル島に住んでいたのだが、様々な理由があってゲンナイと共にサーバ大陸に渡った経緯がある。

その経緯が何なのかは、オーガモンの口から語られることはないだろう。

自分の役目は、これで終わりなのだ。

ヴァンデモンは、失敗した者やしくじった者には、容赦ない罰を与える。

最悪の場合殺されてしまうこともあるし、実際に何度かその光景を目の当たりにしたこともあった。

部下や手下となった者達への、見せしめの意味もあったのだろう。

このまま帰れば、オーガモンは間違いなくヴァンデモンに殺される。

いつ思い出しても胸糞悪い、とオーガモンは舌打ちをした。

ウィルス種には3通りのデジモンがおり、1つは強さを求めて色々なデジモンに片っ端から喧嘩を売る者、1つは他のデジモンを跪かせて支配しようとする者、そしてもう1つが狡猾な手で強者に取り入り、お零れを狙う者だ。

最初の1つは純粹に力を求め、1体だけの力で上に押し上がろうとするのに対し、後の2つは他者を蹴落としてでも、卑怯な手を使ってでも目的を達成しようとする。

どちらかと言うと1つ目のタイプであるオーガモンは、同じウィルス種であっても、他の2つのタイプのウィルス種を毛嫌いしていた。力は誇示したいが、弱い者を甚振るためではない。

生涯のライバルと決めた“アイツ”よりも上に行きたいがために、オーガモンは強くなりたいのだ。

弱い者虐めが楽しいのは否定するつもりはないし、オーガモンもその気がないとは言わないが、それよりも強いデジモンと戦う方が楽しいのだ。

相手が強ければ強いほど、張り合いがある。

そいつを倒せば、自分は強いと実感できる。

だがヴァンデモンのように、得体のしれない“何か”を利用してまで、強くなりたいとは思えなかったし、思わなかった。

純粹に、鍛えた自分の力で伸し上がりたいオーガモンにとって、ヴァンデモンのやっていることは理解できないし、したくないのである。

だからミミに言い放ったあの言葉は、半分は本心で半分は不本意だった。

強くなければ生き残れない、と言うのは本当に思っているが、弱い者に生きる資格はないなどとは思っていない。

弱い奴を見るとイライラしたりはするものの、基本的にオーガモンというデジモンは、強者にしか興味がないのだ。

弱者は見向きもしないだけだ。

弱いのなら、強くなればいいだけの話である。

少なくとも、このオーガモンはそうやって生きてきた。

自分が生きるために、強くなって力をつけてきた。

この世界は、“そういう世界”だ。

ミミにそう言ったあの言葉は、間違いなく本心である。

しかし……。

《アタシは誰も殺さない!》

そう堂々と言い放った、あの子どもの言葉が、オーガモンの頭から離れない。

《アタシは、ミミの思い描く世界を生きたいのよっ!》

ミミの言葉に賛同した、リリモンの凜と佇む姿が忘れられない。

『……………ケツ』

この世界は弱肉強食だ。

その持論を、オーガモンは変えるつもりはない。

……でも、

『……せいぜい足掻いてみせろ、クソガキども』

そう悪態を吐いたオーガモンの口元は、知らず知らずつり上がって
いた。

湖の畔で

「なーに情けない顔してんのよ、丈くん」

あれは、いつのことだったろうか。

きつかけは忘れてしまった、どうせ碌なものではない。

鈍くさい丈はいつも面倒な役割を押し付けられては、損な役回りを務めることになる。

みんなが面倒臭がるから、学級委員なんて誰もやりたがらないから、みんな丈に押し付けたのに、丈がその役割をきちんと全うしようとする、みんな白けた眼差しを向けてくる。

空気読めよって顔をする。

騒がしいから静かにしろって、授業中なんだから先生の話に耳を傾けろって、とても当たり前のことを注意すれば、いい子ぶるなど先生のいないところで囲んでくる男子。

宿題を集めるように先生に言われていたのに、なかなか提出しない子がいるからちよつと強い口調で言えば莫迦にしてくる女子。

みんなが嫌がって丈に押し付けた学級委員を、ここぞとばかりに責め立ててくる。

そういったものが積み重なって、イライラがどんどん増長していつて、とうとう丈は爆発してしまった。

何を言ったのかは覚えていない。

ただ我に返った時には、みんながポカンとした眼差しで丈を見つめていた。

注目されていることに気づいた丈は、顔を真っ青にさせて教室から出て行った。

校舎の横の、非常階段。項垂れて座っていたら、声をかけられた。

爆発したような髪型と、小学生が着るには少々派手な、パンク系の服。

「……本宮くん」

「ジュンでいいって言ってるでしょ」

隣座るよ、と丈の了承も聞かずに腰を下ろす。

丈は、彼女がどうも苦手だった。

転校してきたその日から、自分の思っていることを隠さずけけとした物言いをし、小学生には不相応なパンクファッションを着て教師を仰天させた、自己主張の激しい子だ。

目立つことを良しとしない丈とは、正反対の立ち位置にいる子。

転校してきた日に、隣の席に座って学級委員として面倒を見る羽目になったのが、運の尽きか。

とても失礼なことを考えている丈の心情など知らず、ジュンは丈に話しかけてくる。

「そんな顔するぐらいなら、いつもからちゃんど発散させてればよかったのに」

「……僕はいつだって平穩無事でいたいんだよ。さつきみたいのは……ちよつとタイミングが悪かっただけさ」

「ふーん？」

自分から話を振ってきたのに、返ってきたのは興味がなさそうな生返事。

何だよ、と思いつつも丈の口から飛び出していく愚痴が止まらない。

「みんなやりたくないって、面倒だからって全部僕に押し付けてきたのに、いざ僕がその役目を全うしたらこんなはずじゃなかったって顔してさ。だったら自分達でやればいいのに、意味が分からないよ。責任は負いたくないって、全部放棄したのは自分達だっていうのに」

「ホーキ？何でそこで掃除の道具が出てくんの？」

何を言っているんだ、と返そうとしてその前に思い出した。

このクラスメートは、つい最近までアメリカにいたのだ。

3歳ぐらいからずーつとアメリカに住んでいたらしいから、日本語もままならないのだと先生も言っていた。

だから丈が少しずつ日本語を教えてやっている最中なのだ。

要領と物覚えがいいジュンは、丈が教えることをあつという間に吸収するから、ここ最近日本語での会話も問題なかったのだが、さすがに難しい言い回しは理解できないらしい。

「箒じゃなくて、放棄、ね。自分に与えられた責任を背負いたくないって、要するに捨てちゃうことさ。ああ、そう言った意味では箒と一緒かもね。いらぬものや捨てるものを集めるのが箒なんだから」

「あはは、丈くんでも冗談言うんだ」

「僕だって冗談ぐらい言うよ。時と場合によるけどね」

さて、彼が言いたいのはそういうことではない。

「学級委員はクラスメートに何かあれば、真っ先にやり玉に挙げられる、何も得することなんかない役回りだよ。その癖、責任だけは重いんだ。だからみんながやりたがらないのも、一定の理解はできる……でも、だからって、無責任すぎる」

「そーよねえ。自分はやりたくないって丈くんにぜーんぶ押し付けたんだから、だったら丈くんの言うことやることに口出すケンリはないわよねえ」

普通こういうクラス委員は、立候補制である。

誰も立候補がいなかった場合、どの委員にも所属していない、余った者がじゃんけん等で決めるものだろうが、丈のクラスは堅物で融通の利かない、真面目な丈がいるからと、クラスメートはこぞって丈に押し付けた。

それなのに、丈が学級委員を真面目に務めれば、面倒臭そうな表情を浮かべる。

何と自分勝手なクラスメートの多いこと。

「もう一回、さつきみたいに怒鳴ってみれば？流石にやりすぎたって反省するんじゃない？」

「無理無理。何か喚いてる、ぐらいの認識しかないと思うよ？責任から逃れたくて僕に責任を押し付けてくるような連中だもん。さつき僕が怒ったことだってもう忘れてるか、何で僕が怒ったのか分かってないか、どっちかだよ」

溜息を吐きながら、丈は立ち上がった。

「丈くん？」

「……ん、何か愚痴ったらちよつとすつきりした。ごめんね、本宮くん。世話をかけちゃったよ」

「だからジユンでいいってば。気にしない、気にしない。話聞いただけでいいんなら、幾らでも聞いてやるわよ」

「はは、ありがとう。じゃあ次は爆発する前に聞いてもらおうかな。さあつて、また明日から頑張るかあ」

どうせ教室に帰ったところで、あのクラスメートがこれまでのことを反省しているはずがない。

それどころかきつと、学級委員が何してたんだよ、なんていちやもんつけてくるだろう。

丈の話を聞かずに莫迦にしていたことを棚に上げて。

「ごめんなさい」

だから翌日、クラスメート達全員が頭を下げた謝罪してきたことに、丈は驚愕した。

教室に入ると、いつもなら遅刻ギリギリのクラスメート複数人も既に教室にいて、丈が入ってくるなり顔を真っ青にしながら丈に頭を下げてきたのである。

丈に学級委員を押し付けたいじめっ子、授業中に騒いでいた男子、宿題をなかなか出さなかった女子、丈が真面目を貫けば貫くほど莫迦にしていた、他多数のクラスメート達。

暖かな春の日差しから、差すような夏の日差しに差し掛かるような季節だったはずなのに、クラスメート達は真冬に裸でプールに放り込まれたのではと思わせるほど、顔が真っ青で歯もガチガチ鳴らして、ブルブル震えていた。

昨日まではあんなに丈のことを莫迦にして、丈の言うことなんか知らんぷりって対応だったクラスメートの、突然の豹変ぶりに、丈は目を白黒させるしかない。

「おはよう、丈くん」

お葬式にも似たような雰囲気になっている教室で、場違いなぐらい明るく、そしていつも通りの声色で声をかけてきたのは、帰国子女の

本宮ジュンである。

彼女に割り振られている席の背もたれに腕を回して、椅子の重心を後ろに傾けるようにして座っている。

危ないからやめなよ、と溜息を吐きながら彼女の下に歩み寄り、一体何があつたのか訪ねれば、

「さあ？」

とだけ返された。

しかしニヤついている口元を隠さないところを見ると、確実にこの状態を作り出したのはジュンだろうということは、簡単に予測できる。

多分問いただしても、のらりくらりと躲されるだろうな、とジュンの様子から悟った丈は、これ以上は追及せず、未だに頭を下げているクラスメート達にも、もういいよと面倒くさそうに返した。

それを聞いたジュンは、ケラケラ笑いながらクラスメート達に声をかける。

その際、クラスメート達全員の身体が一斉に跳ねたのは、恐らく気のせいではない。

「よかったねえ、みんな。丈くんが優しいやつで。アタシだったらぜえったい許さな〜い」

その言葉を聞いたクラスメート達全員が、これまた一斉に、ひっ!?!と悲鳴をあげる。

恐らくクラスメート達は、少し前に起こったことを思いだしているのだろう。

今年アメリカから転校してきたジュンは、このクラスで蔓延っていた、先生ですら気づかなかつた問題を転校してきて2カ月で解決してしまった人物だ。

学校中を巻き込む大騒動に発展してしまったため、クラスメートの男子は勿論、他学年の男子に至るまでジュンのことを恐れているし、下級生の女子達はジュンを尊敬と憧れの眼差しで見つめていた。

ちなみにクラスメートの女子も、半分はジュンを恐れており、半分は尊敬している。

……だからこそ、今こんな状態になっているんだろうなあ、と丈は飽くまでも冷静であった。

ちなみに丈がジュンのことを苦手としている割に、冷静に判断できるのは、丈はクラスの問題に巻き込まれた被害者であり、問題解決に導いてくれたジュンに一応感謝をしているからである。

「……ありがとう、ジュンくん」

未だにびくつきながらも、ジュンから解放されたクラスメートが焦るように散り散りになっていくのを見ながら、丈が小さい声でそう言ううと、ジュンは目を丸くした後はどういたしまして、と返してくれた。

早朝の空気は薄く、吸い込む度に冷えた空気で肺が凍りそうになる。

は、は、は、と繰り返して吐き続けた息は、吸い込むのも辛い。

しかし、目標まであと100メートルだ。

丈は鉛のように重い足を必死に動かしながら、目印にしていた場所まで懸命に走った。

「はあ、はあ……ゴマモン、大丈夫、か」

『ひっ、へっ……へんっ、ジョウト、比べりやつ、何てことっ、ないやいっ』

「っ、言ったなあ？」

相変わらず憎まれ口を叩くパートナーに、丈はにやりと笑って、わざと走るペースを上げる。

待てよっ！っって焦るパートナーの声に、待たない、と返して丈は何とか走り切った。

「はあ、はあ、はあー……い！」

『づ、づがれだ……い！』

緑が敷き詰められている地面に横たわり、ぐったりと身を任せる丈とゴマモン。

置いておいた荷物を取りに行く余裕もないが、喉の渇きと空腹は疲

労を訴えてくる足を急かしている。

仰向けになつていた身体をゴロンと俯せにして、匍匐前進の要領で荷物が置いてある箇所まで移動しようとした。

『はい、どうぞ』

「んえ？」

す、と差し込まれる陰。

植物の蔓のようなものが、丈が取りに行こうと思つていた荷物を持つて、丈の目の前に置いてくれる。

「ありがとう、ベジーマン」

ここ数日で顔見知りになつたデジモンの優しさに、感謝をしながら受け取つた。

丈がいるのは、湖の畔に建てられているレストランである。

太一とアグモンが現実世界に飛ばされ、翌日に治とガブモンが太一達に追いつくべく修行の旅に出ると言つて出て行き、それに触発されたミミとパルモンが治達に1週間遅れて空と共に出て行つた翌日、光子郎も調べたいことがあると言つてテントモンと共に離脱した。

最年少が心配で最後まで残つていた丈だったが、光子郎と入れ替えに助つ人が来てくれたために、下級生達に流されるような形で、丈とゴマモンも修行の旅に出ることになつたのである。

ゲンナイは他の子ども達にも渡したのと同じ必需品を持たせてくれた。

最初こそ、たった1人で、下級生達に流されるみたいは何となく、と言つた感じで旅立つた丈だったが、1人になつたことで逆に考えることが出来るようになったのか、今は積極的に修行に精を出していた。

自分はまず、何をやらなければならないのか。

何のためにここにおいて、何のために戦っているのか。

2つ以上の選択肢があると選ぶのに時間がかかる上に、多数決を求められるとパニックに陥つて何も考えられなくなってしまうのだが、1人で修行の旅に出たことでじっくりと時間をかけて考えることが出来た。

生意気なことや辛辣なことは言ってきたても、基本的に丈の決めたことに関して何も言わないゴマモンも、口を出してこなかったこともあり、逆に考えが整理できたようだ。

—— 僕らがしなきゃいけないのは、まずこの世界を救うこと。そのためには力をつけなくちゃいけない

メタルグレイモンとエテモンの戦いを見るに、丈達が対峙する相手は一筋縄ではいかない。

デビモン相手でもあれだけ手こずったのだ、イツカクモンを次のレベルに引き上げなければならぬのは必須である。

デジモンの進化を促すのは、子ども達の強い思い。

ゴマモンがイツカクモンに進化した時のことを思いだしながら、丈はここを拠点にしてから考えたメニニューを思い出す。

成熟期に進化するのにもかなりのパワーを消費していたから、その次のレベルはそれ以上にパワーを消費することは間違いない。

その時のために、力をつけておこうと、丈は毎日その付近をジョギングしているのである。

根っからの勉強少年である丈は、体育の成績はあまりよろしくない。

部活で走り回って体力がある5年生は勿論、パソコンオタクでありながらサッカー部に所属している光子郎や、同じくサッカー部に入っている大輔、大輔くんやお兄ちゃんと走り回っているお陰で意外と体力があるヒカリや、勉強だけでなくスポーツもそこそこ熟している賢にすら劣っている。

ミミが頭数に入っていないのは、丈と同じだからだが、それは置いておこう。

上の兄2人が早起きをしてジョギングをしているのを知っていた丈は、それぐらいなら運動音痴の自分でもできるだろう、と言うことで体力づくりの一環として毎日ジョギングをしているのだが、これが意外に奥深かった。

たかがジョギング、と侮っていたのだが、ペース配分に気を付けなければ、あつという間に気力が尽きてしまうのである。

最初の頃はそれを間違えてしまい、500メートルも走れなかった。

ゴマモンも、丈の決めたことならと黙ってついてきてくれたが、水中のデジモンであるため陸上でのジョギングは200メートルも持たなかった。

しかしやると決めたことは、最後までやり通す丈は、それぐらいではへこたれなかった。

毎日、毎日、走り込んだ。

走って、体力をつけた。

要領は悪いが、コツコツと努力するタイプの丈は、やがてコツを掴んでいく。

どのように走るか、息の仕方は、姿勢は、足の運び方、自分のペースはどんなものか、等々、太一達部活組が聞いたら、何を言っているんだと言われるようなことを、丈は毎日の鍛錬で知っていく。

そして少しずつ、距離を伸ばしていくこと、1 km。

次の目標は1100メートルかな、と思いながら、丈はゲンナイがくれたミニパソコンからペットボトルのスポーツ飲料水と水、タオルを取り出す。

スポーツ少年達の助言をしつかりと聞いていた丈は、水でタオルを濡らして、汗をかいた身体を拭いた。

ゴマモンにスポーツ飲料水を飲ませてやる傍ら、自分も一口二口飲む。

「おーい、ベジモン！これぐらいでいいかな？」

『はいはい！いつも、ありがとうございます！今日はいつもよりお客さんが多いので、もう少し持ってきてもらえますか？』

『オッケー！』

リヤカーに詰められているのは、先ほど畑でとったばかりの、新鮮な野菜と骨付き肉だ。

初めて骨付き肉が畑にぶっ刺さっているのを見た時は、目の前がくらくらしたのだが、ここはデジタルワールド、自分達の常識が一切

通じない異世界である。

ここは異世界、ここは異世界、と何度も自分に言い聞かせるように暗示をかけたお陰で、何とか受け入れることができたのは、成長の賜物だろう。

ピラミッドの周りは砂漠であるため、ゴマモンの力を10分の1も引き出せないから、何処かいい修行場所はないかと歩き回って見つけたのは、広い広い湖だった。

ここならゴマモンの修行場として最適だろう、と言うことで、拠点は何処にするかと湖の外周を歩いてきた時のことである。

1匹のデジモンが、背中に籠を背負って何処かへ向かって行くのが見えた。

この辺のデジモンだろうか、何処かいい場所知っているかな、という期待を込めながら丈とゴマモンはそのデジモンの跡について行くことにした。

足がないにも関わらず、意外と移動速度が速かったので、丈はへばったゴマモンを抱えながら、何とか見失わない程度の距離を保ってついて行った先にあったのが、この畑である。

森を開拓して作られたであろう広い畑に生っていたのは、新鮮な野菜達。

思わず手を出してかぶりつきそうになるのを、畑のおかしな光景で抑えることが出来た。

大根や人参、ジャガイモなどの根野菜や、レタス、キャベツなどの葉野菜が生えているのは別におかしくはないのだが、季節がバラバラ、所謂旬の野菜が1つの畑に総て収められているのである。

野菜ごとに1番美味しい時期と言うのがあり、その季節に合わせて種をまいたり収穫したりするものなのだが、この畑に生っている野菜は春夏秋冬総ての野菜があるのだ。

食事はもっぱら和食中心である城戸家は、医者の家系ということもあって、そういった食育も欠かさない。

だから小学6年生にしては季節の野菜というものを知っている丈は、首を傾げる。

更に驚いたのが、骨付き肉の存在だ。

少年漫画で連載中の海賊王を目指している少年の漫画に出てくるような、骨の周りに肉がついている肉がそのまま、畑の土の中に埋まっていたのだ。

骨だけが出ていて、犬か何か埋めたのだろうか、と思っていたのだが、デジモンが両方の触手を骨に巻き付けてずぼっと引っこ抜いたのを見て、それが肉だと分かった。

顔を真っ青にさせて、何が起こっているのか分かっていない丈とは裏腹に、デジモンであるゴマモンは目を輝かせてそれを見ていた。

野菜を引っこ抜いているのはベジーン、というデジモンらしい。性格はなかなか陰険なのだが、野菜作りのプロだそうで、彼が作る野菜はどれも一級品、特に骨付き肉は涎が出るほど美味しいのだそうだ。

食べてみたい、とごねるゴマモンを、ここでのお金は持っていないし、ゲンナイから食事のデータをもらっているのだから我慢しろ、と宥めながら、丈は作業しているベジーンを見やる。

広い広い畑を彼方此方移動しながら、野菜を一つ一つ丁寧にとっていく様は、とても手慣れていた。

それでも、やはり一人（一体）で畑を回るのは重労働なのだろう、その内野菜を取っては休憩する時間が少しずつ長くなっている。

いい修行場所も聞きたいし、ここはちよつと恩を売っておくのも悪くないか、とちよつとだけ下心が働いた丈は、それを上手く隠してゴマモンと共にベジーンに声をかけた。

それが、ベジーンとの出会いである。

最初こそ見慣れないニンゲンという生き物にびっくりして、警戒していたベジーンだったが、よかつたら手伝わせてほしいという申し出に、ミケモンの手も借りたかつたベジーンは喜んで受け入れてくれた。

鈍臭いが故に少々手間取ったものの、人手が増えたことでいつもよりは収穫できた野菜に喜んだベジーンは、お礼にと連れて行ってくれたレストランで、食事をご馳走してくれた。

お金を持っていないから、と断る丈を遮って、骨付き肉を所望したゴマモン。

こら、つて慌てて諫めるも、ベジモンは賄いでよければと快諾してくれ、レストランの裏口に連れて行ってくれた。

レストランの中でただ飯をもらうのは、他の客に失礼だという丈の言い分を理解してくれたので、簡易のテーブルを出してそこに賄い食を持ってきてくれたのである。

一口食べただけで、とても美味しいことが伝わり、お腹が減っていたこともあつて丈もゴマモンも夢中になって食べた。

ベジモンもよっぽど嬉しかったのだろう、修行をする場所を探していると言っていると、営業の邪魔をしないのなら、この辺でやればいいとオーナーであるデジタマモンから許可をもぎ取ってくれた。

それ以来、丈は修行の合間を縫ってはベジモンの手伝いをしていく。

体系のせいで使うことが出来ずに放置されていたリヤカーを使っているお陰で、ベジモンの半分の労力で野菜を運ぶことが出来ている。

最初は丈がレストラン付近で修行することに難色を示していたデジタマモンも、修行の合間とは言えリヤカー一杯に野菜を詰め込んで運んできてくれるお陰で、ベジモンもレストランの方に集中できるし、在庫切れで客を待たせることも少なくなったから、丈を歓迎するようになった。

あからさまだなあ、と思いつつ、自分も下心があつて近づいたので、苦笑に留めておく。

それが終わったら昼ご飯だ。

ベジモンと知り合った時に食べた骨付き肉が忘れられないゴマモンは、今日もあの肉が食べたいと丈にねだるのだが、デジタルワールドの金の単位はアメリカドルであるため(ピラミッドを出る前にゲンナイさんが教えてくれた)、日本円しか持っていない丈ではレストランのお金を払えない。

そもそもゲンナイから食事のデータをもらっているのだから、それ

でいいではないか、と骨付き肉には及ばないものの、それなりに味のいい肉を渡してやれば、あつという間に機嫌が直る。

我がパートナーながら単純だ、と思いなながらも、丈もお握りを頬張った。

食事が終われば、午後はゴマモンのトレーニングを中心に修行を再開させる。

レストランの営業の邪魔にならないよう、ある程度距離を置き、ゴマモンを進化させて技の精度や、泳ぐスピードを上げる特訓だ。

海洋のデジモンとは言え、イツカクモンの身体はかなり大きく重い。

これまでの敵勢力は陸上で戦うデジモンが多かったので、得意の水中戦に持ち込むためにも、水中でのスピードは必須である。

時々湖に住むデジモン達にも手伝ってもらいながら、イツカクモンを鍛えているのだが……これが正解なのかどうか、いまいち分からな

い。

『どう、ゴマモン?』

『どうって言われても……』
休憩を挟みながら、丈はゴマモンに訊ねてみるも、ゴマモンも強くなれているのかという自覚は、ピンと来ていないらしく、困ったように首を傾げるだけだった。

それじゃ困るよ、と丈はどっかりと座り込む。

「君が進化をするのに僕の力が必要なんだとしても、実際戦っているのは君なんだから。例えば前より泳ぐスピードが速くなったな、とか前より疲れなくなったな、とかさ」

『ん、言われてみれば……そうだなあ、陸で走れる距離が伸びたとか?』

おいら的には何の意味もないけど、と付け加える。

確かにゴマモンは水生のデジモンで、進化をしたイツカクモンも水中に適した身体をしている。

ということは十中八九、更なる進化を遂げたゴマモンの姿も、同じように水中のデジモンのはずだ。

陸上での動きに力がついたからと言って、それが水中で生かされるとは限らない。

少なくとも体力はついたから、イツカクモンの姿をもう少し長く維持することは出来るだろうが、やはり決定打に欠ける。

丈は呻きながらゴロン、と後ろに転がった。

「……誠実、かあ」

丈達の世界とほぼ同じように構成されている太陽は、ほぼ真上に昇っており、眩い光をギラギラと照らしている。

それを遮るように、丈はズボンにつっかけていたデジヴァイスを手に取り、翳す。

ボタンを適当に押せば、ぴ、ぴ、と言う電子音が響き、小さなディスプレイに十字架と、その周りに小さな三角形が浮いているデータが映し出された。

砂漠のコロッセオで見つけた、「誠実」と呼称されている紋章である。

自分が知っている限り、誠実とは文字通り誠の心、正しい心、嘘を吐かない人のことを言うと言っていた。

丈はじっくりと考えてみる。

誰かがいると、その意見に引つ張られて自分の意見を言えないことが多いのだが、1人だと周りの声に惑わされずに没頭することが出来るのである。

嘘を吐かない人、と言う意味なら丈も当てはまる。

しかし丈の場合は嘘を吐かない、と言うよりも嘘を吐けないと言った方が正しいだろう。

医者の家系と言うこともあり、父も母も息子達を厳しく育ててきた。

末っ子が故に、父と母の言葉を真つすぐ受け止めてしまい、丈は嘘を吐くことが出来ない子に育った。

嘘を吐こうとしても、嘘を吐いたことがないからどうしても顔に出てしまったり、矛盾点を突かれてしどろもどろになったりしてしまう。

これは果たして、「誠実な人」と言えるのだろうか。

クラスメート達から厄介な役割を押し付けられることも、押し付けられた役割を熟して煙たがれることも、「誠実」と言えるのだろうか。

自分がやりたいたいと言ったわけではないことを全うしようとするのは、「誠実」と言っているのだろうか。

「……はあく駄目だ。全然分らない」

どさりと、とデジヴァイスを掲げていた手を投げ出すように、緑の絨毯に置く。

ゴマモンも、丈の真似をして仰向けに寝転がったが、身体の構造的に少々無理があったのか、すぐに俯せの体勢になった。

『どうしたんだ、ジョウ?』

「……うん、いや、うん……誠実って何なんだろうなって」

『うにゅ?』

「……僕のいいところって、何なんだろうなって」

『ジョウのいいところ?…………………………うーん』

「うん……分かった……分かったよ……」

自分で自分のいいところなんて、分かるはずがない。

考えれば考える程、思い浮かんでくるのは自分の嫌いなところや、嫌なところ。

大人に足を突っ込みかけているとはいえ、丈はまだ小学6年生だ。

自分を客観視できるほど冷静沈着でもないことは自覚しているの
で、パートナーのゴマモンに訊ねてみるも、帰ってきたのは沈黙と唸り声。

分かっていただけに、落胆も一押しだ。

視界が滲んでいるのは、きつと気のせいではない。

『まあまあ、ジョウ。そう落ち込むなって』

そんな丈に対しても、相変わらずゴマモンはマイペースだった。

これがピヨモンとかパタモンだったら、ごめんねとか泣かないでって慰めてくれていたであろうに、友達甲斐のない奴め、とちよっぴり恨めしくなる。

「誰のせいだよ」

『誰のせいだろーねー』

「お前だよっ!」

『うぎやっ!』

しらばつくれるゴマモンに、少タイラつとした丈は俯せになっているゴマモンの方に転がると、伸し掛かるようにゴマモンの上に乗っかって、頬を引っ張ってやる。

ぎやあつ、と悲鳴をあげながら、くすぐったさでゴマモンはケラケラと笑った。

『ごめん、ごめんってば!くすぐりたい!』

「僕は真剣に悩んでるんだぞ!」

『分かっているけどさあ。なるようにしかならないって!明日どうなるかなんて、誰にも分からないのに、今から未来のこと考えててもしょうがないじゃん?』

「っ、あのなあ」

丈の眉間の皺が、先ほどより深くなる。

ゴマモンの楽観的な発言は、丈の神経を逆なでするだけだった。

「僕達には時間がないんだよ!今こうしている間にも、この世界にも僕達の世界にも異変は広がっていつてる……僕達は早く力をつけて、次の進化をしないと……!」

『ジヨウ』

起き上がり、矢継ぎ早に言葉を紡ぐ丈を遮るように、ゴマモンは丈の名を呼んだ。

その声色がいつになく真剣だったため、丈は言葉を詰まらせるように黙り込んだ。

『そうやって焦ると前しか見えないのは、ジヨウの悪いところだと思う』

「……………そう、だね」

真つすぐ丈を見つめながら言い放たれたのは、丈の弱点とも言える悪癖。

自分の意志ではなく、家族に引っ張られるように医者になるという

夢を抱いている丈は、優秀な兄達へのコンプレックスもあり、自分の考えをなかなか曲げられない頑固者だ。

その頑固な性格のせいで、ファイル島を回っていた時は、仲間達にかなり迷惑をかけた。

卵焼きにかける調味料の話は、その最たるものだ。

思い出して顔から火が出そうになるが、今は黒歴史で身もだえている場合ではない。

ゴマモンの言う通り、頑固者の丈は自分の常識外の出来事が目の前で起こるとパニックに陥りやすく、冷静な判断が出来なくなる。

そうすると普段は見えている幾つもの横道が消えて、前しか見えなくなってしまう。

“あれをしなきゃ”という考えでいっぱいになってしまい、視界を狭めてしまうのである。

最優先でやらなければならないことは何か、とじっくり1人で考えて出した結論だったのだが、それが今裏目に出ていたようだ。

丈は大きく深呼吸をする。

霧がかかりかけていた丈の脳みそが、晴れていく。

「……そうだ、焦ってたって仕方ない。見えるものだって見えなくなっちゃうんだ。まずは強くならなくちゃね」

『そーそー！まっ、そもそも戦うのはおいらだけどねえ』

「それを言っちゃあ……」

『おーいー！』

胸を張るゴマモンに苦笑していたら、背後の方から呼びかけてくる声。

振り返る。ぴよこん、ぴよこん、と跳ねるようにやってきたのは、黄色い野菜のようなデジモン、ベジモンだ。

蔓のようになっていている手に、何かをぶら下げながら、愛想のいい顔を浮かべてこちらにきている。

眼鏡をかけても視力が悪い丈は、それが何なのか分からなかったが、ゴマモンは目ざとかった。

『飯っ！』

「いや、何で分かるの。って言うかさつき食べたよね？足りなかった？」

『何言ってるの！進化して泳ぎまくって、湖に住んでる奴らと修行してたんだから、いつもより減るに決まってるだろっ！』

だから最近はず段より食べているのか、と呆れるもデジモン達の特性だからそれも致し方なし、である。

湖の畔にあるレストランに迷惑が掛からないように、レストランからだいぶ離れたところで修行をしていたために、脚を持っていないベジモンはここまで来るのに少々苦労したようだ。

『やあやあ、修行の成果はいかがですか？』

「んー、ぼちぼちってとこかな？ベジモンは、レストランは大丈夫なのかい？」

『ええ。お昼時は過ぎてますし、この時間帯は客も殆ど来ませんから、実質休憩時間みたいなものですので』

これどうぞ、とにこやかに差し出したのは、蔓に下げているバスケット。

パカ、と蓋を開ければ、美味しそうなサンドイッチが綺麗に詰め込まれていた。

ベジモンが働いているのは、デジタマモンが経営する店で、所謂大衆食堂と言うところだ。

安くてパパッと出来る料理が多く、サンドイッチなんて洒落たものは置いていなかったが、丈がゲンナイからもらったミニパソコンから取り出したサンドイッチを見て、最近作るようになったらしい。

デジタマモンはあまりいい顔をしなかったが、物珍しさから客が増えたので、特に何も言われなかったのは、完全に余談である。

『これ、賄いで作ったサンドイッチです。よろしければ食べてくださいな』

「え、でも」

『いいのっ！』

ベジモンの申し出に、丈は戸惑ったが、ゴマモンは丈の台詞に被せるように前のめりになる。

こら、って丈はゴマモンを窘めるけど、ベジモンは気にした様子はない。

むしろどうぞどうぞ、とバスケットを差し出してきた。

ゴマモンはバスケットに顔をつ突っ込む勢いで、サンドイッチにかぶりついたので、丈は咎めるのを諦めて、バスケットからサンドイッチを1つ取り出した。

瑞々しい野菜と、ハムがサンドされた、シンプルなサンドイッチ。

専ら和食中心である丈だが、洋食が嫌いなわけでも苦手なわけでもないの、遠慮なくかぶりついた。

「……うん、美味しい」

『それはよかったですー！』

素直に感想を述べれば、ベジモンは嬉しそうに笑った。

『沢山食べて、力をつけてください。何せ貴方は我々の救世主なんですから』

何の曇りもなく言い放ったベジモンに、丈はサンドイッチを喉に詰まらせそうになる。

ファイル島でゲンナイやアンドロモンが言っていたが、いつの頃からかデジモン達の間で、『デジタルワールドが闇に覆われ、危機に陥った時、異世界から『選ばれし子ども達』がやってくる』という噂が流れた。

その時はファイル島内だけの話だと思っていたのだが、ベジモンと初めて会った時に、選ばれし子どもかと訊ねられた。

デジモンの中には丈達人間のような人型のデジモンも存在するが（エンジェモンがいい例だろう）、デジモン特有の匂いや気配を感じなかったので、ベジモンは丈が前々から噂として流れていた『選ばれし子ども』という奴なのでは、と判断したそう。

この辺りは一見平和ではあるものの、やはり闇の力の影響というものが徐々に広がりつつあるようで、長年の常連だったデジモンが突然来なくなったり、食べにくる客が減ってきていたり、と少なからず影響が出てきているらしい。

だからベジモンは、丈とゴマモンのことを最初から歓迎していた

のだ。

デジタマモンの方は商売あがったりで、最近少しピリピリしているらしいが……。

『……でもね、あのレストランで働くのが夢だったんです。初めてあのレストランで食事をした時、こんなに美味しいものがこの世にあるのかと、衝撃を受けましたよ。ワタシの種族はあまり強いデジモンとは言い難くて、技も弱いし、何処に行っても煙たがれるし……幸い野菜作りの才能があったから、デジタマモンはワタシを雇ってくれたんですがね』

「……そっか」

『……』

ゴマモンによれば、ベジモンはウイルス種。

成熟期だがアグモンやガブモンぐらいの強さがあれば、成長期でも勝てるぐらいには弱いデジモンらしい。

ただ必殺技であるウンチ投げが厄介なので、誰も相手にしたがらないとのことだ。

それは、ある意味種が生き残るための生存本能とも言えよう。

生物というのは、人間が思っているよりもシビアなのだ。

ベジモンという種族も、好きでそうなったわけではないはずである。

そうしなければ生き残れないような環境にいたからこそ、ベジモンはベジモンとして成り立ったのだろう。

もしそうなら、ベジモンを責めたり邪険に扱うのは、お門違いというものだ。

少なくとも丈は人間であるため、ゴマモン程ベジモンに偏見はない。

「……危ないとか、辞めようとは、思わなかったの？」

『んー……いやあ、思わないですねぇ』

「どうして？」

『そりゃねえ。今はこんな状態ですし、正直いつ自分が危ない目に合うかって冷や冷やしてはいますよ。ワタシのように、戦う力が弱いデ

ジモンは特に』

でもやっぱり、あのレストランを離れようとは考えなかったようだ。

少なくなっても、1人でも食べに来てくれる客がいるのなら、ギリギリまでレストランを開いていきたい。

デジタモンも同じ考えのようで、口にはしないものの、店を閉店する気配は見せない。

『だからワタシもデジタモンが辞めない限り、ついて行こうと決めたんです』

「……そっか」

ウイルス種特有の、少々意地の悪そうな顔に浮かぶのは、キラキラとした素晴らしい笑顔。

今の仕事が本当に楽しいのだと言うのが、痛いほどに伝わってきた。

きゅ、と丈の唇が結ばれる。

がさり

『んむ？』

茂みが揺れた音に反応して、サンドイッチを頬張ったままゴマモンが振り返る。

がさ、がさがさ、と葉っぱが擦れる音に、丈とベジーモンも背後を振り返る。

ひよこ、と顔を覗かせたのは、手のひらサイズの小さな饅頭のようなデジモンだった。

黒い牡丹餅みたいなのと、白い大福みたいなのと、それからクラゲのような半透明なデジモン。

ボタモンは見たことがあるので知っていたが、白いのとクラゲのよくな半透明のデジモンは知らなかったのでゴマモンに訊ねてみると、白いのはユキミボタモンと言う、ボタモンの亜種のようなもので、クラゲのような半透明のデジモンはポヨモンだと教えてくれた。

幼年期Ⅰと呼ばれている、プカモンよりも前の世代の赤ちゃん達で、戦う力もないから大体お世話好きの成長期や成熟期のデジモン達

に面倒を見てもらうことが多いそうだ。

どうしてこんなところに赤ちゃんが、と思う前に、ベジモンが動く。

『ああ、お前達。腹が減ったのか。よしよし、連れてってやろうな』
「ベジモン、知り合いかい？」

『まあ、面倒を見ているのはワタシなので、知り合いと言えば……』
おいで、とベジモンは優しい顔で、空っぽになったバスケットを示してやれば、赤ちゃんデジモン達はきやあきやあと可愛らしく騒ぎながら、蓋が開いているバスケットに次々飛び込む。

それじゃ、とベジモンは頭を下げて、来た道に戻っていった。

「……………」

ぴよこん、ぴよこん、とバスケットを極力揺らさないようにしながらレストランの方へと戻っていくベジモンの背中を、丈は黙って見護る。

——強いなあ

小さくなっていくベジモンの背中を、丈は目を細めながら見つめた。

いつ闇の脅威が降りかかってくるかも分からないのに、ベジモンもデジタマモンもここから逃げずに、いつも通りの日常を送ろうとしている。

やると決めたから、やりたいと思ったから。

突然この世界に呼び出されて、右も左も分からずがむしやらに突き進んで、やつと事情を知っている人に出会えたと思ったら、世界を救うために力を貸してほしいと言われて、言われたままに世界を巡っている自分とは、大違いだとも。

ベジモンは、自分で道をちゃんと決めたのだ。

あの赤ちゃん達だって、デジタマモンの態度を見れば分かる通り、きっとベジモンの独断で世話を焼いているのだろう。

経営者としてはデジタマモンが正しいから、第三者である自分が口を出すことではないが……それでもベジモンは強いなど、丈は湖の方に向き直った。

澄んだ青空と、その青空に浮かぶ太陽、太陽の光を反射して煌めく湖。

とても闇がこの世界を覆いつくそうとしているとは思えない程の、平和な光景だったが、それでも暗黒の勢力は確実にこの世界を侵している。

並みのデジモン達では歯が立たないほどの、強力で驚異的な力。

それに対抗するために、自分達は呼ばれた。

泣き言を言う暇なんか、子ども達にはなかった。

ただただ、自分達の世界に、家に、居場所に帰りたいかった。

そのためだけに、子ども達は頑張っていた。

……でも、それでは、それだけでは駄目だと思い知らされた。

闇に食らいつくされたデビモン、あのピラミッドで目にしたブイモンの悍ましい過去、そして暗黒の力で壊れてしまったエテモン。

これまで丈は、他の子ども達に流される形でこの世界を旅してきた。

1番年上なのに、最年長なのに、子ども達を引っ張っていたのは自分ではなく、1つ下の5年生3人。

情けない姿しか見せてこなかった丈が、初めて自分で考えて、自分から行動した。

じつくりと、ゆつくりと自分と向き合いながら考えて、歩き出した。……だったら、やることは決まっている。

—— 僕もやらなきゃ。やるって決めたんだから

「ゴマモン」

『んむ?』

ベジーモン自慢の野菜で作られたサンドイッチを、お腹いっぱい食べてご機嫌なゴマモンは、満足そうに俯せになっている。

丈はにやり、と笑った。

「もう少し休憩したら、また修行だからね」

『えーっ!』

「言っただろ。僕達には時間がないんだって」

『そうだけど、焦ったら何も見えなくなるだろとも言ったじゃん!』

「でも出来ることはあるさ。考えて無駄なら行動しなくちや。太一ならそうするよ」

『むあーっ！ジヨウのオーガモン！』

何だよそれ、と丈はむくれているゴマモンの頬を突いてやった。

思う信念、岩をも通す

『しまったあああああああああああああああつ!!!』

灰色の雲が空を覆い、じめつとした空気が漂うそのエリアは、支配しているデジモンが張った結界のせいで、ウイルス種以外が立ち入ることが出来なくなっている。

ただでさえ世界を侵食し始めている暗黒の気配で、多くのデジモン達が怯えたりピリピリとした空気を放つたりしている中で、そのエリアだけが「異様」で「普通」だった。

結界のせいでウイルス種以外のデジモンは弾き出されてしまい、そのエリアに逃げることも避難することも出来ない。

しかし隣接しているエリアから、そのエリアを伺うことは出来る。ウイルス種に対抗できるワクチン種のデジモンが、結界ギリギリの箇所まで近づいたところ、ウイルス種のデジモン達は、「普通」にそのエリアをうろついていた。

他のエリアは、いつ暗黒の勢力がその手を伸ばしてくるか分からないから、知性のあるデジモンは物陰に隠れたり、警戒心の強いデジモンは仕切りに辺りを伺ったりしながら移動しているのに、そのエリアに住み着いたウイルス種達は、「いつも通り」なのである。

呑気に餌を食べたり、同種のデジモンと縄張り争いをしたり、暗黒の影響なんて全く受けていませんっていう日常を送っているのである。

ただでさえウイルス種しか入れないエリアということで、気味悪がって近づくものは皆無なのに、そんな状態を聞かされれば、ますます近づくものはいなくなる。

そんなエリアに、つい最近になって異変が起きる。

他のエリアからたあつくさんのウイルス種達が、まるで甘い蜜に誘われる蜂のように、集まり出したのだ。

強そうな者から、癖のありそうな者まで、多種多様なデジモン達が、そのエリア目掛けて移動しているのが目撃されている。

そして、そのエリアに足を踏み入れたウイルス種は、殆どのデジモンが再びそのエリアから出てくることはなかった。

何故ならそのエリアでは今、とある計画が秘密裏に動いていたからだ。

綿密に、たつぷりと時間をかけて練られたその計画のために、このエリアは封鎖されたのである。

誰にも邪魔をされるわけにはいかない、と言いながら、特定のエリアを封鎖するように結界を張って、特定のデジモンのみを受け入れている時点で、光の守護者達の知られるところになるのだが、そのデジモンは邪魔なんか入るはずがないと確信していた。

現に今こうしている間にも、1度も光の守護者達が乗り込んでくる気配はなかった。

光も差さないほどに分厚い雲に覆われ、昼でも夜のように暗いそのエリアのほぼ中心に鎮座するのは、そのエリアに相応しい程に美しい純黒の城である。

積み重なった煉瓦は歴史を感じさせるほどに古く、そのエリアに充満している闇を吸ったかのように黒々としていた。

そんな闇の城に集められたデジモン達が、一瞬でざわついた。

エリアから出て不在にしていた闇の城の主でもあるヴァンデモンが、帰ってきたのだ。

馬ではなくデビドラモンと呼ばれる、邪竜型の使い魔デジモンによつて引かれた馬車は、ヴァンデモンの移動手段だ。

何処へ行くにもその馬車に乗り、数日帰らないということが多かったため、ヴァンデモンの姿を数日見ないのも突然帰ってくるのもいつものことだったから、部下達は何とも思わなかったのだが、いつもと様子が少しだけ違った。

馬車が正面入り口から、扉をぶち破るように飛び込んできたのだ。広いエントランスをうろついていたデジモン達は、派手な音を立てながら突然飛び込んできた馬車に驚き、その場で硬直した。

全員の目が馬車に釘付けとなり、次第に混乱に包まれた。

この城の主らしからぬ帰還方法であった。

と言うのも、ヴァンデモンは城を出る時も帰ってくる時も、正面玄関ではなく自室にあるバルコニーを使う。

だから下つ端のデジモン達ほど、ヴァンデモンの姿を見たものはいないし、幹部と呼ばれる古参のデジモン達も、主らしからぬ行動に驚いていた。

幹部の筆頭であるピコデビモンが慌てて飛んできて、馬車の中にいるであろう主に声をかける。

ガコン、と馬車が傾き、飛び込んできた衝撃で扉が外れた。

そこから落ちるように現れたのは、表情を顰めて悔しそうにしているヴァンデモン。

普段はきつちりとオールバックにしている髪はぐしやぐしやに乱れており、高貴なマントも少し襤褸になっていた。

口元が切れているのか、血が垂れており、腹の辺りを抑えているところから、そこを負傷しているのだろうかと言うのが分かる。

ずるり、と傾いた馬車にもたれかかりながら出てきたヴァンデモンに、ピコデビモンを筆頭とした幹部達が、ヴァンデモンを支えようと駆け寄るが、ヴァンデモンは鬱陶しそうにそれを振り払い、私に構うなど吐き捨てた。

『し、しかし、ヴァンデモン様……』

『構うなど言っているー！』

それでも気遣わし気に、ヴァンデモンに声をかけるデジモンがいたが、ヴァンデモンはそんな気遣いすらも踏みにじる。

腹を抑えている手とは反対の手を振り上げれば、襤褸になったマントが翻る。

不気味な声をあげながら、大量の蝙蝠が生み出され、ヴァンデモンに声をかけたデジモンに襲い掛かった。

『ぎゃあああああああああああつ!!』

まさに、断末魔。

城中に響き渡るほどの絶叫をあげながら、そのデジモンの命は蝙蝠達にいかけらも残さず食い尽くされた。

ピコデビモンは、他の幹部達は、そして偶然その場に居合わせた雇われデジモン達は、その光景を目撃して息を飲む。

何体かは顔を真っ青にさせていた。

誰も、何も言わない。

言った結果が、先ほどの惨劇だ。

『くそっ……忌々しい、選ばれし子どもめ……っ！このままでは済まさんぞ……っ！』

吐いた悪態は、選ばれし子どもへの呪いの言葉。

気配を消してピコデビモンの背後に現れたウィザーモンが、恐らくいずれかの選ばれし子どもと接触し、勝負をしたが相打ちにでもなったのだろう、とピコデビモンに耳打ちしてきた。

……日に日におかしくなっている、とピコデビモンは唇を噛みしめる。

闇を愛し、闇に生きる存在ではあるものの、ピコデビモンが敬愛していたヴァンデモンはここまで冷酷ではなかった。

気高い振る舞いをいつでも忘れず、圧倒的な力でデジモン達を従えるところはあるものの、失態を犯したデジモンに対して死をもって償わせるほど、残忍な性格ではなかったはずだ。

それは、長年仕えてきた幹部達ならよく知っている。

そんなヴァンデモンを、ウイルス種らしいと妄信する者もいれば、困惑する者もいる。

ピコデビモンは当然後者だ。

ゲンナイのためにダブルスパイという危険を犯し、子ども達の手助けをしているところからも分かるだろう。

このままでは、ヴァンデモンは本当にこの世界から肅清対象として、光の者達から排除されかねない。

長年ヴァンデモンに仕え、慕っているピコデビモンにとって、それ

だけはどうしても避けたい事態だ。

——それでも、覚悟はしておいた方がいい。

ゲンナイに任せ、ヴァンデモンを助けると決めた時、ゲンナイにそう言われたことを、ピコデビモンは思い出す。

どれだけ手を尽くしても、届かない思いはある。

ピコデビモンが幾らヴァンデモンを思って行動したのだとしても、それがヴァンデモンに届くとは限らないのだ。

それほどまでに、ヴァンデモンは深い闇に取り込まれ、暗黒に魅入られて、目も耳も閉ざされている。

だからどんな結果になっても、それを受け入れ、誰も恨まないと決めていた。

……それでも、出来ることは最後までやり切りたい。

それだけしか、ピコデビモンには残されていないのである。

手が伸ばせるギリギリまで手を伸ばして、ヴァンデモンを救いたいのだ。

世界が闇に覆われ、破滅の道を辿っていることは知っているし、ピコデビモンもそれは望んでいない。

でもそれと同じぐらい、ピコデビモンにはヴァンデモンが大事なのだ。

ゲンナイに咎められる覚悟も、子ども達に非難される覚悟も承知の上で、危ない橋を仲間達と共に渡っている。

痛みに耐え、よろめきながらも奥へ消えていく主人を見送り、ピコデビモンは啞然と突っ立っている幹部や雇われデジモン達に、仕事に戻るように促した。

シヨツキングな光景を目撃してしまったデジモン達は、ピコデビモンに声をかけられたことで我に返り、その場から逃げるようにそそくさと仕事に戻っていく。

『……どうするんだ、ピコデビモン』

他のデジモン達が散開していく中、気配を消していたウィザーモンが静かに声をかけてきた。

どうする、と言うのは恐らくヴァンデモンのことだろう。

ヴァンデモンは、自分こそがこの世界の王たる資格を持つと自負している。

王に相応しいかはともかくとして、強いのは確かだ。

選ばれし子ども達には特別な力があるとはいえ、子ども達のデジモンは進化を始めたばかり、まだヴァンデモンと同じレベルには至っていないはずだ。

それがヴァンデモンを退却させる程に力をつけ始めている子どもがいる……。

『……出来ることを、やるだけさ』

世界は救いたいが、ヴァンデモンに死んでほしくないし、子ども達に殺させたくない。

裏切り者と蔑まれようとも、ピコデビモンは決めたのだ。

ウィザーモンは溜息を吐きながら、根を詰めすぎるなよとだけ吹き、煙のようにその場から消える。

まだ混乱が残る城のエントランスで、先ほどの騒ぎを知らないデジモン達が、仕事に戻っていくデジモン達に何があったのかと訊ねているのが聞こえた。

幾らウイルス種とは言え、先ほどの光景はなかなか堪えたようで、口を噤む者ばかりだった。

ピコデビモンはそれを咎めることなく、喧噪を縫うように飛び去って行った。

そして数日後、冒頭の絶叫に至る。

主たるヴァンデモンの怪我は既に完治しており、再び何処かへと出かけて行ってしまった。

雇われデジモン達や幹部達は来るべき日のために、今日も今日とて準備に忙しい。

数日前の騒ぎなどなかったかのような、いつも通りの光景の中で聞こえてきた絶叫。

何事かとデジモン達は作業している手を、何処かへ向かおうとしている足を止めて、忙しなく辺りを見回している。

スパイとして潜入している他の仲間達は、ピコデビモンが何かやら

かしたのかと察した。

代表してウイザーモンが様子を見に行くと、自室として宛がわれた部屋の中で、頭を抱えてぶつぶつと呪詛のようなものを呟いているピコデビモンの姿が。

……何か失態でもやらかしたな、とウイザーモンは半目になる。

『おい……』

『ハッ……い・ウイ、ウイザーモン……』

扉をそつと閉め、声をかけてやればウイザーモンが入ってきたことすら気づいていなかったピコデビモンは、大袈裟なぐらいに身体を跳ねさせてウイザーモンの方を見やる。

羽と一体になっているマスクのせいで顔色は分かりにくいだが、黄色い目に浮かんでいる絶望とか焦燥で、やっぱり何かやらかしたと悟った。

『……一応聞いてやるが、何をした？』

『俺が何かやらかしたのが前提かっ!!いやそうだけでもー』

普段の口調が崩れてしまうほどに取り乱しているピコデビモンは、ウイザーモンに話しかけられたことで、一周回って冷静になったのか、深いため息を吐きながら項垂れた。

『………しまった』

『は？』

『間違えてしまった……!』

『何をだ？』

振り絞るような声で、要領を得ないことしか言わないピコデビモンに、優しいウイザーモンは根気よく訊ねる。

『……子ども達に送り込むデジモンを……間違えた』

『はあ？』

『だからっ！デジモンを間違えたんだっ！』

『落ち着け！声を落とせ！間違えたというのはどういうことだ!』

ピコデビモンの声量がどんどん大きくなっていることに焦り、ウイザーモンは慌ててピコデビモンを宥めた。

ピコデビモンの声を、ヴァンデモンの手下が聞きつけたりすれば、

ウィザーモンもピコデビモンもタダでは済まない。

とりあえず扉を少しだけ開けて、誰もいないことを確認してから、再度ピコデビモンに訊ねれば、羽を器用に使って両目を覆い、衝撃の事実を口にする。

『……ジョウという子どもとゴマモンの下に送る予定だった、我々の同志と、ヴァンデモン様の下にしていたデジモン……間違えたんだ』

『はあっ!?!』

ウィザーモンは先ほどピコデビモンに忠告したことも忘れて、大声を出してしまった。

『どうしたら間違えるんだ!?!と云うかそいつに我々のこと、バレたのでは!?!』

『いやっ!我々の同志の方には既に声をかけていたんだ!だからバレてはいない!へまはしていない!』

『結果的に送るデジモンを間違えたのだから、へまをしたことに変わりはないだろうっ!』

『おっしやる通りで!』

思わず持っている杖でピコデビモンをどついてしまった。

魔法の杖を物理に使うな、というツツコミは誰からも入らない。

『もう一度聞くんが、何故間違えたんだ?』

『送り込む準備をしていた時に、通りかかった奴と間違えた……』

『莫迦なのか?』

『煩いっ!』

ながら作業をしていたために、転送装置から離れて遠隔操作をしていたピコデビモンは、ちょうど監視用の鏡に映ったそのデジモンを、送り込むデジモンと間違えて転送装置を作動させてしまったらしい。

その後によってきた、送り込む予定だったデジモンが監視用の鏡に映ったことで、間違いが発覚したということだ。

『莫迦なのか?』

『二度も言うなあっ!ああ、どうしたものか!間違えたデジモンは知性はあるが、意志疎通が出来ない……間違つて子ども達を傷つけて

アアアッ!!』

レストランに近づくにつれ、見えてきたのは長く赤い巨体、蛇のように顔をもたげながら暴れているのは。

『あつ、あいつ、ワルシードラモン!?』

ゴマモンが叫ぶ。

ワルシードラモンとは、ファイル島で出会ったシードラモンが、闇の力を使って進化した姿だと言う。

シードラモンは成熟期、だからワルシードラモンは完全体だ。

そう聞いた丈の足が一瞬止まる。

修行をしているとはいえ、ゴマモンはまだ完全体に進化出来ない。

そして完全体に進化するための、紋章の意味も丈はまだ理解できていない。

勇んで駆けつけたのはいいが、あの大きなワルシードラモンと対峙して戦わなきゃいけないのか……?と丈の顔が青くなっていく。

しかしその考えを、丈はすぐに振り払った。

『ああくー!お、お店が、お店があくー!』

何故ならデジタマモンが、破壊されていくレストランを見上げながら嘆いていたからだ。

ベジーンモンが言っていたことを思い出した丈は、怖気づいていた心を何とか叱咤して、ワルシードラモンを睨みつける。

「頼むよ、ゴマモン!」

『おうー!』

そうだ、何もワルシードラモンを倒す必要はない。

何か理由があつて暴れているのなら、大人しくさせればいいんだ。

まずはレストランから引き離さないと……。

丈のデジヴァイスから光が漏れ、ゴマモンを包み込む。

分解され、再構築され、大きくなったイツカクモンは湖に飛び込み、レストランを襲っているワルシードラモンに体当たりした。

『ギシャアアア……!!』

『そら、こつちだー!』

攻撃されたことで、ワルシードラモンの標的がイツカクモンに移

り、くるりと方向転換してイツカクモンを追いかけて行った。

今のうちに、と丈はレストランの方に向かう。

完全体であるワルシードラモンの攻撃を受けたせいで、レストランは今にも崩れそうだ。

ここには崩れた瓦礫に巻き込まれてしまう、と思った丈は、茫然と立ち尽くしているデジタマモンに、離れるように言おうとしてはたと気づく。

「ベジューモンは……？」

ベビー達にご飯をあげる、と言ってレストランに戻っていたはずのベジューモンがいない。

レストラン内にいたのなら、デジタマモンと一緒に外に出ていると思っていたのに。

丈のつぶやきを聞いて我に返ったらしいデジタマモンは、そう言えばと辺りを見回し、それからさっと顔を青ざめさせた。

『ま、まさかまだ中に……!?!?』

「!」

『あ、おい！待ちなさい！』

屋根の部分は半壊しており、残っている部分も今にも崩れそうだが丈は、デジタマモンの言葉を聞いた瞬間、反射的に駆けだしていた。

扉の機能は最早果たしていないので、崩れている壁から丈はレストランの中に入る。

煉瓦に足を駆けた途端、ガラリと崩れてこけかけたが、何とか踏ん張った。

崩れた屋根の瓦礫で食堂は滅茶苦茶になっている。

垂木と呼ばれる、野地板を支える木の棒が床に突き刺さり、木片が飛び散っている。

コンクリートに埋められた鉄筋が飛び出て折れ曲がっていた。

「ベジューモン!?!?ベジューモン、いる!?!?」

粉々のコンクリートに足を取られそうになりながら、丈は中に残っていると思われるベジューモンを呼ぶ。

がら、と目の前で屋根の瓦礫が落ちてきたので、あまり時間をかけていられない。

不安定な床を慎重に、しかし急いで歩きながら丈はベジーンモンを探す。

がらがら、と細かい破片が降り注ぐ中、僅かな呻き声を丈の耳が拾った。

「ベジーンモン!？」

『ああ……ニ、ニンゲンのお方……』

呻き声が聞こえた方へ向かえば、崩れた瓦礫の下敷きになっているベジーンモンがいた。

パイパイと泣いているのは、ベジーンモンが連れて行ったベビー達だ。

恐らくベビー達がいたために、素早く動けなかったのだろう

ベジーンモンが文字通り身体を張ってベビー達を護ったようで、ベビー達は多少砂埃を被って汚くなった程度で、見たところ怪我をしていない様子はない。

そのことにホツとしつつ、丈はベジーンモンの方を診た。

鷲のような手は所々細かい傷が出来ており、頭部の部分から黒い液体のようなものも流れている。

これは人間でいうところの血、だろうか。

血を見ただけで気絶しそうになる丈だが、崩れそうになっている家で気絶をしましては洒落にならない。

何とか踏ん張って堪え、丈はベジーンモンを救出しようと崩れた瓦礫をどかし始めた。

『あ、あの……！ニンゲンの、お方……！ワタシは、いいので……！この子達を……！』

「君だけを置いていけないよっ！」

ベビー達だけでもと懇願してくるベジーンモンだが、丈は瓦礫を退ける手を止めない。

目の前で助けられる命があるのに、それを放っておくなど、医者の子息として出来るはずがなかった。

しかし崩れかけている屋根の欠片は絶えず丈の上から降り注いでおり、いつ瓦礫が丈を押し潰すか分からない。

そうなれば必然的に、ベジーモンとベビーにも被害が出る。

ベジーモンは弱いとはいえ成熟期だが、ベビー達は幼年期Ⅰ、コロモンやプカモンよりも小さく弱い存在だ。

うるうるうる、とつぶらな瞳を潤ませながらベジーモンに縋りつくベビー達を見て、ピラミッドに置いてきた最年少の3人を思い出した丈は、ぐっと唇を噛みしめる。

「……必ず、戻るから！」

ベジーモンからベビー達を受け取り、丈は後ろ髪を引かれる思いをしながら、その場を後にする。

先ほどよりも落ちている瓦礫が多く、足場が悪い。

両腕もベビー達を抱えて塞がっているので、入ってきた時よりも時間をかけて外に出た。

『ベジーモンはっ!?!』

デジタマモンが慌てて駆け寄ってくる。

丈は切れかけている息を整えて、ベジーモンを助けに再びレストランへ入るために、ベビー達をデジタマモンに預ける。

ピーピーと泣き喚くベビー達に困惑するデジタマモンを無視して、丈が立ち上がった時だった。

ばしゃんっ!!

「うわっ!?!」

白くて大きなものが、畔に波を生み出しながら叩きつけられる。

イツカクモンだと気づいたのは、ワルシードラモンが首をもたげながら、イツカクモンを意地悪く見下ろしているのを見た時である。

「イツカクモン！」

『だ、い、じょうぶっ! ジョウは、離れてて……!』

「あ、ああ……」

何とか体勢を整え、イツカクモンはワルシードラモンに技を放とうとしたが、ワルシードラモンの方が早かった。

『ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

一際大きい咆哮をあげると、ワルシードラモンの周りに大量の氷の塊が生み出される。

ワルシードラモンの必殺技の1つ、イビルアイシクルだ。

びゅん、と風を切り、沢山の氷の塊がイツカクモンに降り注がれる。

イツカクモンは丈を護ろうと、その大きな身体で丈を隠す。

ビュンビュン、と絶えず空気を裂き、大量の氷の塊がイツカクモン達に襲い掛かる。

「あ……」

どごお、と氷の塊の1つがレストランの屋根に直撃する。

それを見た丈は、ほぼ反射的に、レストランの中へと走り出した。

『ジヨウツ!』

イツカクモンが呼び止める声も聞かず、丈はレストランの中へと消えていく。

しかし氷の塊で崩れた壁のお陰で、何故丈がレストランの中へ入っていたのかが分かった。

瓦礫のせいで身動きが取れないベジーンモンが、いた。

先ほどの攻撃で足場は更に悪くなっており、丈は瓦礫を乗り越えたり、穴を避けて遠回りをしたりしながら、ベジーンモンの下へと駆け寄っていく。

がらり

は、とイツカクモンはその音を聞きつけて、レストランの上部を見た。

屋根が、崩れる。

がら、がらり

折れた垂木がまるで鋭い鉋のように尖っており、それが真つすぐ、下に向けられている。

がらり

ずる、と垂木が下にずり落ちる。

『ギシャアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

ワルシードラモンが再びイビルアイシクルを放つ。

『やめろおっ!!ハープーンバルカンッ!』

イツカクモンは角から何発もの技を放つが、ワルシードラモンが生み出した氷の塊に追いつかない。

幾つもの氷の塊がイツカクモンやデジタマモンに襲い掛かり、その幾つかがレストランに当たり、破壊していく。ずる、

ぶつかった衝撃で、少しずつずり落ちていた垂木を支えていた瓦礫が、一気に崩れる。

丈がベジーモンの下に辿り着き、救出しようとその場にしゃがみ込む。

鋭い鋸が真つすぐ落ちていく。

“丈の首筋に向かって”。

『ジョウツ!!』

イツカクモンが叫んだ声で、丈は自分の身に迫る危険に気づいた。目を見開く丈。

しかし彼は逃げなかった。

瓦礫に埋まって身動きが取れないベジーモンに覆い被さったのである。

あのまま逃げれば、確かに丈は助かるかもしれない。

しかしベジーモンは確実に、その垂木に貫かれるだろう。

そのことが一瞬で脳内を過った丈は、医者の子としての使命を全うすることを選んだ。

いや、きつと丈はそんな崇高なことなど、考えていない。

ただ助けると、必ず戻るとベジーモンと“約束”したのだ。

その命を見捨てるなど、丈には出来なかった。

『うああああああああああああああつ!!』

想いは、進化する。

丈のピンチに、イツカクモンはワルシードラモンと対峙していたことすら忘れて、その巨体でレストランの残った壁をぶち壊すように丈の下へと急いだ。

身体が白い光に包まれる。

床に突き刺さっていた瓦礫が、ゆっくりと浮かび上がる。

重力が反転したのではなく、イツカクモンを包み込んでいる光のエネルギーが凄まじく、その余波で吹き飛ばされているだけだ。

丈とベジーモンに襲い掛かった垂木の鋭い鋸も、イツカクモンが放つ凄まじいエネルギーで粉碎するように消滅する。

膨れ上がっていく光。

その光を突き破って生まれたのは、巨大な甲羅。

落ちてきた瓦礫を受け止め、レストランの屋根を完全に破壊した。

『……ジョウ』

「……………へ？」

ぎゅ、と目を瞑り、次に来るであろう衝撃を覚悟していた丈だったが、いつまで経っても痛みが襲ってこない。

恐る恐る、と目を開けたと同時に、頭上から声が降ってきた。

間の抜けた声をあげながら上を見上げると、甲羅を背負い、長い牙と角を持ち、発達した筋肉に金属のハンマーを持ったデジモンがいた。

「ゴ、ゴマモン……？」

『今はズドモンさ。ジョウ、オイラ達とうとうやったんだ！』

ゴマモン、基ズドモンが嬉しそうに丈を見下ろしながら言うてる。

そのやんちゃそうな笑顔は、ゴマモンの時と何も変わっていないかった。

あれだけ悩んで、あれだけ迷っていたのに、あっさりと完全体に進化できたことにポカン、と言葉を失くして見上げていたが、危機は去ったわけではない。

『ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

咆哮が響き渡る。

ズドモンは、その咆哮を聞いて背後の方を睨みつける。

巨体故に動きは少しゆっくりとしていたが、襲いかかってきた氷の塊をものもしなかった。

『おりゃああっ!!』

それどころかその氷の塊の雨の中を突き進み、ワルシードラモンに

向かって行く。

右手に持ったハンマーを振り上げ、ワルシードラモンの長い身体に叩きつけた。

『ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

発達した筋肉によって振り下ろされたハンマーの威力に、ワルシードラモンは溜まらず悲鳴をあげる。

イツカクモンが進化をしたのなら、ズドモンはワルシードラモンと同じ完全体だ。

だったらワルシードラモンに負けるはずがない。

ズドモンが進化したエネルギーの余波で、ベジーンモンに押し掛かっていた瓦礫も吹き飛ばされているので、丈はベジーンモンを抱えてデジタマモンの下へと走った。

急ぎすぎて足が纏れ、デジタマモンの前で顔面から思いつきりずっこけてしまったが、そんな痛みにも構っている暇もない。

ズレた眼鏡を直しながら、丈は自身のパートナーを応援すべく、声を張り上げた。

「頑張れええええええええっ!!ズドモオオオオン!!」

『おうよっ!!』

デジヴァイスを握りしめれば、紋章の力を得て黒くなったデジヴァイスから更に強い光が漏れる。

丈の強い思いがデジヴァイスによって変換され、ズドモンに更なる力を与える。

もり、とズドモンの腕の筋肉が盛り上がった気がした。

『ギシャアアアアアアアアアアアッ!!』

叩きつけられたハンマーの痛みで、怒りのボルテージが上がったワルシードラモンは、その場で輪を描くようにぐるぐると回り出す。

黒い風が生み出され、引っ掻き回され、大きな竜巻となる。

ワルシードラモンを構成している闇の力から生み出された、ダークストロームという技だ。

並みのデジモンなら呆気なく？み込まれ、鋭利な風の刃で身体をもみくちやにされ、切り裂かれていただろうが、ズドモンはクロンデジ

しかし数分経つても、数十分経つても、ワルシードラモンが目覚まして、湖から這い出てくる気配がない。

もう危機は去ったのだろうか？

丈とズドモンは顔を見合わせる。

『……………どうする？』

「……………とりあえず、湖から離れようか」

『だな』

無難だが、確実な提案である。

ズドモンは大きな掌に丈とベジーマン、デジタマモン、それからベビー達を乗せ、湖から離れていった。

『…………………………』

そんな彼らの後ろ姿を見送り、湖に沈んでいったワルシードラモンを引き上げて、何処かへと連れ去った魔法使いと小悪魔がいたが、彼らの知るところではない。

『ほんつとーに！ありがとうございます！』

「も、もういいってば！お礼ならさつきも言ってくれたじゃないか！」

『そーそー！』

湖から離れた、森の拓けた広い場所。

ベジーマンが耕して、美味しい野菜が生っている畑に、丈とポケモンはいた。

畑に着いた途端、気が抜けたのかズドモンは一気にポケモンまで退化して、その場にへろへろとへたり込んでしまった。

成長期から成熟期に進化する時も、大量のエネルギーを消費しているよりもより食いしん坊になるのだ、完全体ともなれば消費量はいつもの比ではないだろう。

無事だった荷物からミニパソコンを取り出し、大量の食べ物と飲み物を取り出して、全員で分け合って食べた。

怪我をしたベジーマンには、医療キットを取り出して消毒液や絆創膏、包帯をつけてやる。

漸く一息ついて、皆ではあく！って一息を吐いた時、ベジーマンと

デジタマモンは土下座の恰好で丈とポケモンにお礼を言った。

気にしないで、と苦笑いしながら言うが、ベジEMONとデジタマモンは止まらず、結局ポケモンが食べ終わるまで何度も何度もお礼を言ってきた。

「それで、これからどうするんだい？」

レストランはあんなになっちゃったし、と丈はデジタマモンに訊ねる。

主な原因はワルシードラモンだが、ズドモンもその一角を担っているから、丈も少々罪悪感を抱いていた。

弁償しろ、と言われたらどうしよう、と思っているのだが、気になってしまったことを誤魔化すのが許せない丈は、口にせざるを得ない。

ドキドキ、と心臓が激しく鼓動を打っているが、それは杞憂に終わった。

『そうですね……少なくなっただとはいえ常連さんはまだいますから、営業は続けたいとは思ってますが……機材がないことには……』

幸い湖から離れたところにある畑は無事だ。

調理するためのキッチンや道具があれば、後はどうとでもなるだろうが、あの様子ではキッチンも破壊されてしまっているだろう。

何とかしてやりたい、と腕を組んでうんうん考え込んでいたら、デジタマモンは突然立ち上がった。

『まあ、くよくよしていても仕方ないです！これまで稼いだ金は一応別のところでも保管していますし、使えるものも残っているかもしれないし、とりあえずやれることをやっていこうと思います。さあて、行くぞ！ベジEMON！』

『ええっ!?オ、オーナー！もう少し休んでも……!』

『ダメダメ！明日には営業再開するんだ！金は残っているとはいえ、再建できるまでのお金じゃあない！とにかく稼がないと!』

『オーナー!』

ダーツ!と止める間もなく、デジタマモンは卵から出ている2本の逞しい足を動かして、走り去って行ってしまった。

足がないベジEMONはぴよこん、ぴよこんと身体をはねさせてデジ

タマモンを追う。

まるで嵐のようだ、と置いてけぼりを食らった丈とポケモンは、砂埃が舞い上がる目の前の光景を、ポケモンと見やったのだった。

『……ふおれはら、もむもむ、ほうふんの?』

「口にももの入れたまま喋るんじゃない」

ぐう、と未だになる腹の虫を宥めるために、食事を再開させたポケモンは丈にそんなことを訊ねる。

お家でやったら絶対父に叱られるようなことをしたポケモンを叱りながら、丈は空を仰いだ。

「そうだなあ……とりあえず当初の目的だった進化は果たしたし、まだ時間も残ってるし、後はポケモンが完全体に慣れるまでは、もうしばらく特訓とкаしてた方がいいかな……」

『んむんむ。タイチとアグモンもいつかえってくるかわかんないし、それまではちからをつけておきたいのは、オイラもさんせーかな!』

先に旅立った治が、ゲンナイと設けた約束の期間が2カ月。

丈はそれよりも10日ほど遅れて修行の旅に出た。

治が帰る期間に、丈もピラミッドに戻ろうと思っているから、まだまだ時間はある。

それまではポケモンと、体力づくりを中心に完全体のパワーに慣れるための特訓をするのがいいだろう、と丈とポケモンは決めた。

ところで、

「どうして進化できたんだろ……?」

『んあ?』

紋章は次の段階に進むための増幅器である、とはゲンナイ談である。

そして紋章の形は人それぞれであり、その人に相応しい形をしていると言う。

丈の紋章は誠実、正しい人、誠の人という意味だが、丈はいまいち理解できていなかった。

自分は正しい人間なのか、誠実という言葉に相応しい人間なのか、それが分からなくてさつきまで悩んでいたと言うのに、何故あんなに

あつさりといツカクモンを完全体に進化させることが出来たのか。

あの時は、ただベジーモンを助けたくて一心不乱だった。

あのレストランで働くのが夢だったと、ウィルス種特有の少々意地の悪い顔をキラキラさせながら夢を語ったベジーモンを、死なせたくないと思っただけだ。

理不尽な暴力で夢を奪われることが、あつてはならない。

自分のようにただ周りに流されて夢を決めたのではなく、ベジーモンは自分で決めた夢を叶えようと努力をしていた。

それを護りたかっただけだ。

そうプカモンに告げると、何故かプカモンはニヤニヤしだした。

「何、その顔……」

『べつつにー？』

プカモンはあーん、と大きく口を開けて、サンドイツチを頬張る。

キョトンとしている丈からの視線も何のその、プカモンは鼻歌でも

歌いだしそうなほどに上機嫌だ。

——やっぱりオイラのパートナーはサイコウだな！

丈が気づかなくてもいい。

誰も気づけなくてもいい。

だからこそ、自分は進化できたのだと、プカモンは食べかけのサンドイツチを口の中に放った。

探究者

泉光子郎は、泉政実・佳江夫妻の、本当の子どもではない。それを知ったのは、本当に偶然だった。

ある日の夜、尿意を覚えて眠い目を擦りながら、トイレに起きたのは誰しもが経験のあることだろう。

しかしその帰りで、たまたま両親の部屋の扉が開いていて、たまたま隙間から灯りが漏れていて、たまたま覗き込んでしまったことで、光子郎の心に決定的な傷を与えてしまったのは、正に不運としか言いようがない。

1人っ子で、1人部屋に憧れを抱いていた光子郎は、集合住宅という形状の家だったこともあり、早いうちから1人で寝ていた。

それまでは母である佳江が専業主婦だったこともあって、両親と一緒に寝ていたのだが、今のマンションに引っ越してきてからは、1人で寝るようになったのだ。

どうして引っ越したんだっけ、と言う疑問が頭を過ったけれど、それも霞みの向こうに追いやられる。

あの日、トイレに起きなければ、両親の部屋を覗き込まなければ、両親の部屋から漏れた灯りを素通りしていれば、きっと今の光子郎はここにはいなかった。

扉越しから見た見た両親は、光子郎に背を向ける形で座り込んでおり、寝ている光子郎を起こさないように最低限までトーンを落とした声で、真剣に話し合っていた。

いつ光子郎に本当のことを言おうか、と悩む母。

もう少し、あの子が「自分」と言うものを確立するまで待とう、と言った父。

光子郎に聞かれているなんて微塵も思わず、両親は話を進めていく。

これ以上聞きたくなくて、光子郎は喉の奥からせり上がって来る悲鳴を飲み込もうと口元を抑えながら、足音を立てないよう慎重に自室へと戻り、何もかもを拒絶するように頭から布団を被って夜を過ごした。

それ以来、光子郎は父と母とどう接すればいいのか、解らなくなっ
てしまった。

それまではそれなりに子どもらしく甘えたり我儘を言ったりして
いたのだが、それもどうしていたのか思い出せない。

母が穏やかに話しかけてきても、父が優しく気に語り掛けてきても、
光子郎は余所余所しい返事しか出来なかった。

他人に対しても、自分の境遇を誰かに知られてしまうのでは、とい
う猜疑心から口調もぎこちなくなり、誰に対しても敬語で話すよう
になった。

何も知らない人からすれば、丁寧に話すことが出来るなんて賢い子
なんですね、と泉夫妻を褒めるだろう。

だがその実、敬語と言うのは相手を敬うだけでなく、
「貴方と親し
くなるつもりはありません」、という一種の拒絶だ。

普通は親しくなればなるほどに、口調というのは砕けていくものだ
が、年上だけでなく年下や同級生にまで敬語を使うのは、不自然な光
景である。

だが子ども時代をとうに卒業した大人達は、そんな異様な光景に気
づけない。

気づいたのは、泉夫妻だけだ。

突然の息子の豹変に、母は狼狽えた。

父の方は何かを察したようで、余所余所しい態度を取る息子を咎め
ることはなかった。

そのせいで親子の溝は、ますます深まっていく。

光子郎がパソコンにのめり込んでいったのは、丁度その頃だ。

元々デジタル機器には興味があったし、オタク気質なことも手伝っ
て、あつという間にハマった。

元からあまり我儘を言うような子ではなかったから、夫妻は光子郎にねだられるがままに、パソコンやデジカメ、携帯などのデジタル機器を買い与えてやった。

そうすることで、何か悩んでいる様子の息子の気が楽になるなら、と小学生には高額すぎるものを与えることに、何の疑問も抱かぬまま。

父は、光子郎が興味を持つだろうと、社会人用のプログラミングの教材も買ってくれた。

父母との会話が気まずくて、逃げるようにのめり込んでいたデジタル機器は、いつしか光子郎の趣味となり、空っぽになりかけていた光子郎の人格を形成していく材料となる。

独学で学んでいくには限界があったので、担任の教師にパソコン部を作ってもらおうと思ったのだが、パソコンが一般家庭に普及し始めた頃だったために、パソコンを扱える人も少なかった。

情報の授業では、家にパソコンがある教師が担当となっていたが、その教師もネットサーフィンや資料作成のためと言う程度にしか使えない。

独学だったとはいえ、パソコンのことなら光子郎の方が詳しくだったが、その時の光子郎は今の太輔やヒカリぐらいの年齢だったために、教師からの許可が下りなかった。

新しいクラブを作りたいのなら、最低でも5人の部員を集めて、5年生か6年生の生徒に、クラブの代表となってもらう必要がある。

しかし人見知りのせいで、クラスにすら親しい友人がいなかったため、まず人数集めで躓いてしまった。

担任の教師も、光子郎がクラスの輪に入ろうとせず、単独行動を好むことを知っていたので、これを機に友達を作ったらどうだと苦笑しながら言われた。

光子郎にとっては余計なお世話だったが、言い返す度量もなかったので、はあ、と気の抜けた返事を返すことしか出来なかった。

さて、光子郎が通うお台場小学校は、生徒達はいずれかのクラブ活

動に所属することは必須である。

人見知り故に、集団行動やチーム競技が苦手な光子郎にとって、運動部などは最早苦痛でしかない。

だからこそ、団体行動を必要としないパソコン部を作りたかったのだが、年齢と部員数が達しないことを理由に却下されてしまった。

どうしたものか、と悩んでいた光子郎を、太一と治がサッカー部に誘ってくれたのは、去年の夏である。

去年の子ども会でも光子郎はパソコンを持って行って、大人達の日を盗んで1人で没頭していた。

なるべくひと気のいない、木陰で涼しい場所を選んでパソコンを弄っていた光子郎の下に転がってきた、1つのサッカーボール。

パソコンのディスプレイから顔をあげて、キョトンとしながらボールを見つめていたら、悪い悪い、つて言う全然悪びれていない声がかげられた。

特徴的な爆発頭をヘアバンドとゴーグルでまとめている青い服の男の子と、その子ほどではないがボサついた藍色の髪に眼鏡をかけた男の子。

お台場小学校でも有名な、光子郎よりも1つ上の4年生達だ。

学校中の生徒が知っているほどの有名人で、名前は確か八神太一と一乗寺治、だつたはず、と思いつつながら光子郎は膝に乗せていたパソコンをすぐ横に置いて、ボールを手に取ると太一に渡した。

サンキュ、とボールを受け取り、太一は治を伴ってその場を離れようとしたのだが、その前に治が光子郎に話しかけてきた。

「それ、君のかい？」

そうやって指さしたのは、ボールを渡すために地面に置いておいた、光子郎のパソコンだ。

太一はボールのことばかり考えていて気付かなかつたようだが、治の目は光子郎のパソコンに釘付けだった。

心なしか目が輝いている、ような気がする。

はい、と気の抜けた返事をすれば、治は興奮したように捲し立ててくる。

ポカン、としている太一を尻目に、治は専門用語も交えながら話しかけてきたから、光子郎は自分が人見知りであることも忘れて、治と会話した。

公立の小学校に通いながら、中学レベルの受験や、高校の全国模試で高得点を取り、英会話もネイティブ並み、どのスポーツも卒なく熟すほど運動神経も抜群。

先生達からの受けもよく、年齢に似合わぬ大人びた表情を見せることが多い治が、まるで年相応の子どもみたいに目を輝かせながら、光子郎とのパソコン談義を楽しんでいる。

独学とは言え、大人顔負けのパソコン知識を持っている光子郎の話に、ついてこられる人なんかいないと思っていたから、光子郎は夢中になって治と話し込んだ。

が、それも途中で止められる。

「おい、治！パソコンの話が出来て嬉しいのは分かるけどよお。外でまでそんな話しないでいいじゃんか！外だぞ、外！今は走り回る時間！」

太一だ。

難しい専門用語のオンパレードで、ついてこられなくてポカンとしていた太一だったが、ようやく我に返って治と光子郎の会話に割って入ったのである。

あ、と間の抜けた声を出して、治は申し訳なさそうに頭を掻きながら、太一に謝罪をした。

先ほどまで2人でサッカーをして遊んでいたのに、太一をほったらかしにして、パソコンを持った後輩と話し込んでしまったのだから、太一が拗ねるのも無理はないだろう。

「お前もさあ、せーつかくのキャンプだったのに、なあーんでパソコンなんか持ってきてんだよ。こんなところでパソコン弄ってないで、サッカーしようぜ、サッカー」

「え、あ、ちよ」

「おい、太一！」

え、え、って光子郎が混乱している間に、太一は光子郎の腕を取っ

てずんずん進んでいく。

治は置いてけぼりにされそうになった光子郎のパソコンを持って、慌てて太一の後を追った。

そこからはもう、あれよあれよと勝手に話が進んでいく。

訳が分からぬまま、光子郎は太一と治の2人だけだったサッカーに参加して、ボールを蹴り合っていた。

サッカーよりも野球の方が好きなせいで、ボールを上手く蹴れない光子郎を太一が時々揶揄って、治がそれに対して窘めたり、光子郎をフオローしたりして、親睦を深めていく。

こんなに笑ったのも、誰かと会話をしたのも、久しぶりだった。

太一はキャンプにまでパソコンを持ってくる光子郎を揶揄っても、深く踏み込んでこない。

治も、パソコンに詳しい光子郎を褒めることはあっても、不躰な質問はしてこない。

自分が置かれた状況を誰かに知られることを極端に恐れて、他人と距離を置くようになってしまった光子郎にとって、2人の傍はとても居心地がよかった。

キャンプ中はずっと2人にくっついていたし、キャンプから帰ってからも暇さえあれば太一と治とサッカーをしていた。

夏休みが開けると、早速サッカー部に入学した。

ずっと自分の殻に閉じこもっていた息子の、予想もしなかった行動に、両親は呆氣にとられていたものの、それでも外に出て笑顔も見せるようになった息子の変化を、2人は喜んだ。

中途半端な時期に入学したせいで、自分より年下の子達よりも技術は拙かったし、試合でもベンチにすることが多かったが、それでも光子郎はたつきさん練習をして、技術を磨いていった。

4年生になれば試合にも少しずつ出られるようになったし、母は光子郎の好物をたつきさん詰め込んだお弁当を持って、父は有給を取って2人で応援に来てくれた。

まだ両親と話すのはぎこちないし、周りと自分をシャットアウトするためのにめり込んだパソコンも、立派な趣味になっていたから、止

めるつもりもない。

それでも少しずつ、前のように両親と話が出来るようになってきた頃だ。

太一と治のお陰で、前よりも少しだけ周りを見る余裕を持てるようになった光子郎が、何度目かの試合に出た時のことである。

その日は、1年生と2年生、3年生と4年生でチームになって、近隣学校のサッカー部と試合をした。

最初にやるのは3年生と4年生のチーム。

前半で相手チームにリードを許してしまい、お台場小の3年生と4年生のチームは少し焦っていた。

低学年のチームのように和気藹々としたものではなく、かと言って上級生のようにピリピリとしているものでもない。

しかし技術が上がって、自信もつけ始めた頃だ。

結果が思うように出せなくて、焦るのも無理はないだろう。

応援に来ていた5年生や6年生が、焦る3年生と4年生を叱咤したり励ましたりしている。

結局後半でも巻き返すことは出来ず、結果は2対3で負けてしまった。

惜しかったね、とか次頑張れ、と言う労わりの言葉をかけられた3年生と4年生と入れ替わりに、1年生と2年生がコートに出る。

身体も小さく、まだ技術も追いついていない中、1人だけ動きが違う子がいた。

小さい身体を一生懸命動かして、ボールを追いかけている男の子。

顔からずっこけても何のその、泥だらけになって膝に血を滲ませても、歯を食いしばって走り続けているのは、尊敬する太一と治が一等可愛がっている後輩の、本宮大輔だ。

喜怒哀楽がはつきりしていて、相手が年上でも自分の主張を忘れないし、曲げない。

1年生の時にアメリカから帰ってきた帰国子女で、4つ離れたお姉さんは転校間もなく、学校中の生徒や教師を恐怖のどん底に陥れた事件を引き起こした張本人でもある。

当時3年生だった光子郎にとっては全く関係のない事件ではあったものの、光子郎もその事件の全貌を聞いて、顔を真っ青にさせたものだ。

大輔のお陰で他の子達よりは交流のある太一や治も、ジュンの名を聞くと一瞬身構える程である。

そのお姉さん、本宮ジュンが、弟が出る試合の応援に来ているのが見えた。

母が持つてきてくれたスポーツドリンクで喉の渇きを潤しながら、1年生と2年生の試合をぼんやりと見つめていたら、一際大きな声援が聞こえたのだ。

声がする方を見たら、大輔とよく似た顔立ちの、太一以上に爆発した髪型の、年上の女の子がいた。

口元に両手を添えて、負けたら承知しないわよーなんて物騒な言葉が聞こえてくる。

光子郎の傍にいた太一と治は、そんなジュンを見て苦笑している。前半が終了し、点数は0対0の引き分け。

まだ体力がない1年生と2年生のチームは、後半はチームを全員入れ替えて試合を続行させる。

点数を1点も稼げなかったことが悔しかったのか、大輔は泥だらけのまま姉の下に突進していった。

待つて待つて汚い汚い、とジュンは抱き着いてこようとした大輔を阻止し、用意しておいたらしい濡れタオルで顔の泥を拭いてやっていった。

悔しさを全身で表現しながらぎゃあぎゃあと喚いているのを、ジュンは苦笑しながらうんうんって聞いていた。

その時である、大輔とジュンの下に2人の男女が駆け寄ってきたのは。

顔立ちが大輔とジュンに似ていたから、恐らく姉弟の両親だろう。

駆け寄ってきたと言うことは、2人の両親は何か用事があつて試合を最初から見られなかったのだろうか。

そんなことをぼんやりと考えながら、何となく目を離せなくて、そ

のまま一家の団らんを見つめて……光子郎はギョツとなる。

大輔の顔が、感情が全て抜け落ちたような表情になっていたからだ。

感情が服を着て歩いている、と治がよく大輔をそう表現するほど、感受性の強い大輔の顔に、何も浮かんでいなかったのだ。

お姉ちゃんの応援で張り切っていた大輔なら、両親が来てくれたことでますます張り切るのだろうなって思っていたのに、両親が話しかけても大輔はうんともすんとも反応しないのである。

代わりにジユンが両親に何か返事をしていたが、ジユンの表情も心なしか悪い。

目が泳いでいるし、口元も引きつっている。

本宮夫妻の表情は、こちらに背を向けているせいで見えないが……気づいていないはずがないだろう。

大輔は取り繕うともせず、両親を視界に入れないためか、ずっとそっぽを向いているのに、夫妻はそんな大輔を咎めることも叱ることもしようとしなない。

……何だ、"アレ"。

「……光子郎？　どうかした？」

ぼんやりと何処かを見つめている我が子に気付いた母が、キョトンとしながら光子郎に声をかけてきた。

その声で我に返った光子郎は、慌てて何でもないと返した。

そう？と母は心配そうに光子郎を見やるが、光子郎は本当に何でもないですから、と笑顔で取り繕いながら、母が作ってきてくれたお握りを頬張った。

納得のいつていない表情を浮かべる母だったが、これ以上は問いかけても無駄だろうと判断してくれたのか、何も聞いてこなかったの
で、ほっと胸を撫で下ろした。

母にバレないように、こっそりと本宮一家の方に視線を向けた。

大輔はいつの間にかチームメイトの方におり、その表情もいつもの大輔に戻っていた。

あれは見間違いだったのか？と思う程に、いつも通りだったのであ

る。

だが両親と一緒にいるジュンの表情が、未だ引きつっているところから、気のせいではなかったと知った。

——どうして

光子郎は分からない。

大輔は、どうして両親に対してあんな表情を見せたのか。

ジュンは、何故あんなに表情を強張らせているのだろうか。

そして両親は、何でそんな態度を取る2人について、何も言わないのか。

知らず知らずのうちに、光子郎の眉間にしわが寄る。

自分と違って本当の両親の下で、姉と一緒に何の不自由も何の柵もなく暮らせているはずなのに、そんな両親に対してどうしてあんな態度を取れるのだろうか。

1度気になった疑問は幾ら振り払おうとも離れてくれず、考えれば考えるほどモヤモヤとした思考が脳内を占めてくる。

何故、何故、何故？

自分は両親の本当の子どもではないと知った日から、両親とも他人ともまともな会話が出来なくなってしまったのに。

信じていた両親の、実質的な裏切りで、何を信じていいのか分からなくなったのに。

「光子郎？」

沈んでいきそうになった思考が、急激に浮上する。

母ではない、別の誰かの声。

太一と治が、立ったまま光子郎を見下ろしていた。

「どうかしたのかい？」

「すっげー難しそうな顔してたぞ」

「……いえ。さっきの試合が悔しくて……」

「ああ、うん。まあ、気持ちは分かるよ」

「だなあ。お前らも、なかなかいい動きしてたぞ。光子郎のスタミナも、前よりぐんと上がってたし」

「そうだな。ただボールを相手から奪った時の動きが、ちよつと慢心

してたな。奪ったからって油断しちゃだめだぞ」

「は、はい……」

咄嗟に嘘を吐いたのだが、上手く誤魔化せたようだ。

いや、あながち嘘でもない。

太一と治からみつちり扱かれたお陰で、中途半端な時期に入部しても、他のチームメイト達の動きについていけないのだ。

しかしサッカー部で2TOPを任されている太一と治に仕込まれたにも関わらず、それが相手に通用しなかったのだから、悔しいという気持ちは事実である。

でもそれ以上に、目に映ってしまった後輩一家の、異様な光景が気になって仕方がなかった。

本当の両親の庇護の下にしながら、両親を拒絶するようなあの態度は、一体何なのだろう。

……だが光子郎は結局、大輔にそれを訊ねる事は出来なかった。考えているうちに、気づいたのだ。

大輔の性格を考えたら、何か悩み事があるのなら、絶対に誰かに相談しているはずだ。

しかしあの後、太一や治にさりげなく大輔の両親のことを聞いてみたが、特に気になる事は言っていなかった。

太一と治が大輔を可愛がっているのと同じように、大輔も太一と治に懐いていた。

そんな2人すら知らないと言うことは、大輔は両親に関する事を誰にも打ち明けていないということである。

両親との間に溝があることを、知られないようにしているのである。

両親と上手くいっていないのは、自分も同じだ。

そんな自分も、太一や治にすら悩みを打ち明けていないのに、自分は大輔の悩みを暴こうとしている。

——それは、本当にやっていいことなのだろうか？

誰にも言えなくて自分の殻に閉じこもった自分が、そんなことをし

ていいのだろうか？

そう考えると急に申し訳なきが沸き上がったので……忘れることにした。

あの時の光景を、見なかったことにした。

太一達に相談してみようかとも思ったけれど、治はともかく太一は気になったら即行動するタイプだ。

光子郎が打ち明ければ、たちまち太一は場所も周りも考えずに、大輔に直球で質問を投げかけただろう。

それで治と喧嘩になったり、大輔との仲が気まづくなったりするのは、本意ではなかった。

気になることは何でも調べなければ気が済まない光子郎だったが、もしも大輔が自分と同じように、両親のことで悩んでいるのなら、それは触れるべきではないのだ。

誰にも悩みを打ち明けられなかった自分が、大輔の隠している悩みを剥きだしにしてはいけないのだ。

——いつか、いつか僕がちゃんとお母さんやお父さんと向き合える日が来たら……

その時までには、せめて太一や治のように、“サッカー部の先輩”の1人として在り続けよう。

ちゃんと両親と向き合って、心の整理がつけば、同じような悩みを抱えていた先輩として、接することが出来るかもしれない。

太一にも治にも言えない、言わない、光子郎の密かな決意は、胸の奥で燻り続ける。

『やあ、始めまして。君達がコウシロウとテントモンだね？ゲンナイ様から話は聞いているよ。何でも、この世界の成り立ちや歴史について知りたいそうじゃないか。そう言うことなら、ここはうつつつけてだ。何せ古代デジタルワールド期に作られた遺跡があるからね。ただ大分古いし、貴重なものだ。全てを解読したわけでもないから、不用意に触れないでくれると助かる。ああ、申し遅れた。私の名前はワ

イズモン。ここの守護デジモンであり、管理デジモンでもある』
よろしく、と差し伸べられた手を、ど、どうも、と口籠りながら取
て握手をする。

ワイズモン、と名乗った目の前のデジモンの足元には見開かれた本
があり、その中から浮かび上がるように民族衣装に似たものを着た人
型のデジモンが浮かんでいる。

顔は目深に被っているフードのせいで全く見えないが、その奥から
覗く、怪しく光る目は何処か穏やかだ。

こつちだ、とワイズモンは宙を浮かぶ本に乗ったまま、滑るように
移動していく。

光子郎とテントモンは、慌ててワイズモンの後を追った。

この世界の成り立ちや歴史を知りたい、という探求心は、この世界
に來た時からあった。

乗り気がしなかったキャンプに來たのは、単にサッカー部の先輩や
後輩が参加していたからで、必要な時以外は持ってきたパソコンで暇
を潰すつもりだった。

季節外れの雪、猛吹雪に見舞われて、運悪く子ども会の集団から離
れていた他の8人の子ども達と共に連れてこられたのは、見たことも
ない世界。

自分が知っている知識や常識が当てはまらない、見たことのない植
物や、聞いたこともない生き物。

デジモンと名乗るその生き物と共に世界を巡れば巡るほど、深まっ
ていく謎。

仲間達も、デジモン達も、目の前にあるものがそのままの形として
存在しているとして受け入れているが、光子郎はそうではない。

聞けば聞くほど、知れば知るほど、見れば見るほど、謎は解決する
どころか増していくばかりで、光子郎の好奇心は刺激されっぱなし
だ。

自分達が異世界に飛ばされ、遭難しかけていることも忘れるほど、
光子郎はこの世界にのめり込んでいた。

だからこそ……この世界が見舞われた悲劇に、胸を痛めた。

この冒険が終わったなら、世界を救えた暁には、ゲンナイに頼んでこの世界のこともっとよく調べたいと考えていた。

デジタルワールドと現実世界では時間の流れが違うという話だったから、もし叶うのなら夏休みを利用してデジタルワールドに留まり、この世界の謎を解き明かしたい。

そのために、疑問に思ったことや、仲間達が零した何気ない一言、デジモン達から聞いた知識を全てパソコンにメモしておいた。

……そんなワクワクとした好奇心が、握りつぶされたのは数日前。ここはゲームの世界ではない。

一瞬の油断が命取りになる、まさにサバイバルの世界なのだ。

自分達の世界と同じように、紡がれてきた時間の中で起きた暴力と殺戮の歴史。

その歴史の生き証人とも呼べる、後輩のパートナーデジモンであるブイモンは、未だ目を覚まさない。

——だからこそ……僕達は知らなければならぬ……

パソコンを背負っているバッグの、ショルダーハーネスを握る手に力が籠る。

子ども達が見たのは、飽くまでも「ブイモンの視点から見た歴史」だ。

だからブイモンに襲い掛かってきたものが何なのか、ブイモンを助けたものが何なのか、光子郎は愚か現代種であるテントモン達も知らない。

ずっとずっと昔の出来事で、記録にすら残っていないのだ。

それが分かれば、今この世界を覆いつくそうとしているという闇のことも、何か分かるかもしれない。

……ゲンナイに関する疑問も。

『さあ、着いたよ。ここだ』

思考の海に沈んでいた光子郎を引き上げたのは、ワイズモンの妙に明るい声。

は、と顔をあげれば、目の前に聳え立つ、所々朽ち果てた形跡のあ

る遺跡。

ファイル島で見つけた、あの遺跡よりも規模が大きくて、古そうだ。ここは子ども達がいたピラミッドのある砂漠のエリアから、1週間ほど歩いて辿り着くことが出来る森林のエリアである。

富士の樹海や熊野古道、屋久島の杉の森を彷彿とさせるような、自然と共に生きる少年と、山犬に育てられた少女の交流を描いたアニメに描かれていたような、神秘的な雰囲気を漂わせる森だった。

土の中の水分を吸い取って吐き出されているせいなのか、空気が冷たく歩くだけで空気中の水分がじんわりと肌に纏わりつく。

地面も所々でこぼこしており、サッカー部で鍛えているとはいえ、同年代と比べると背が低いために光子郎は歩くのに少々手間取ってしまった。

案内人であるワイズモンを何とか見失わないように、時々湿った土に足を取られて転びそうになったりしながらも、光子郎とテントモンは目的地に辿り着いた。

それが、目の前の遺跡だ。

ここに来れば光子郎の知りたいことが分かるかもしれない、と教えてくれたのはゲンナイである。

ブイモンの記憶から垣間見た通り、謎のデジモン達によって古代種達は殆どその姿を消してしまった。

だがその時のことを記録として残していたデジモンがいた。

ゲンナイがそれを知ったのは、子ども達を呼ぶ少し前のこと、子ども達のために暗黒勢力の目を掻い潜りながら、沢山のデジモンに声をかけていた時だったらしい。

誰からも忘れ去られたような、原生林の奥の奥。

自然豊かなはずのそのエリアには、デジモンは1体も住んでおらず、そのエリアに立ち入ってくることもない。

そんな場所に、この遺跡は鎮座していた。

その遺跡を守護しているのが、ワイズモンなのである。

『ここはちょっと特殊なエリアだね。来る途中でも、1体もデジモンを見なかっただろうか？大規模なデジモン避けがされているのだよ。』

その昔、とあるデジモンがこのエリアにかけた大魔法のお陰なのさ。そのお陰で遺跡も、朽ちてきてはいるものの、完全な破壊は免れている。最も、そのせいで私はこのエリアの外に出ることは叶わないのだがね』

ゲンナイがこの森に足を踏み入れることが出来たのは簡単な話、彼はデジモンではなくエージェントだからである。

デジモン避けの魔法は施されていたが、デジモンではないゲンナイは当然その対象ではない。

味方になってくれるデジモンを求めてサーバ大陸を隅から隅まで走り回っていたゲンナイは、そのお陰でワイズモンと言う昔を知るデジモンと出会うことが出来た、と言うわけだ。

そんなことを語りながら、遺跡に近づいていくワイズモンの後を、光子郎とテントモンはついて行く。

近づくにつれ、鮮明になってきたのは、遺跡に描かれた壁画。

ブイモンは勿論のこと、ブイモンの記憶にいたホークモンと呼ばれる鳥型のデジモンと、アルマジモンと呼ばれたアルマジロのようなデジモンも、そこに描かれていた。

かつては色鮮やかな建造物だったのだろう、少し塗装が剥げて、石が剥きだしになっている箇所が多くみられる。

こんな時でなければ、きっと光子郎は大喜びで遺跡に触れ回って、パソコンを開いて分析や解読をしていただろう。

でも今はそんな時間はないし、そう言う場合でもない。

光子郎がここに来たのは、遺跡の調査をするためではなく、ワイズモンから話を聞くためなのだ。

遺跡の中に入る。

朽ち果て、崩れかけている入り口には、上から降ってきたであろう石の塊がごろごろと転がっており、光子郎はそれらを跨ぎながら入った。

中は、空洞だった。

遺跡ハンターが目を輝かせるようなお宝があるわけでも、黄金で出来た壁があるわけでもない。

遺跡を荒らす不届き者を追い払う罫があるわけでもない。

壁にはミミズが走ったような線が、幾つもびつしりと書き込まれており、テントモンが進化をしてカブテリモンになっても、余裕で飛び回れるぐらいの空間となっている。

辺りを興味深そうにキョロキョロと忙しなく見回す光子郎に、テントモンがツンツンと肩を突いた。

何、とおぎなりに訊ねれば、ワイズモンの方に爪を差す。

空間のほぼ中心で、ワイズモンは立ち止まっていた。

ぼう、と光源がないのに、ワイズモンを光が照らした。

『それでは始めようか……この世界の歴史の授業を』

何処からともなく風が吹き、ワイズモンの足元にある本が、風で捲かれていった。

誰も知らない物語

デジモン、即ちデジタルモンスターの起源とは、一体何なのだろうか。

デジタル、とついている以上、パソコンが普及し始めた頃に誕生したのは間違いないはずだ。

パソコンの大元とも言えるコンピュータの起源は、1643年にフランスのブレーズ・パスカルが作った機械式加算機である、パスカリーヌであると言われている。

元々コンピュータは計算やデータ処理を自動的に行う装置全般のことで、計算をする作業者を指す言葉であった。

つまり、コンピュータの元々の仕事は計算機であり、今のように資料作成や動画作成を目的としたものではない。

転機が訪れたのは、1970年代である。

それまでコンピュータと言えば、研究所や企業などで1室を丸々占有するほど大きく、個人で所有するには高価で、一般人にはとても手が出せないものだったが、アメリカのMITSという会社がAltair 8800という小型の個人用コンピュータを開発・販売した。

世界初のパーソナル・コンピュータである。

スペック的には従来のコンピュータを大幅に下回っていたものの、それが起爆剤となってパソコンはどんどん進化していった。

一般家庭に普及され始めたのは、1995年以降のことである。

それまでパソコンと言えば、ブラウン管のテレビのようにモニターが分厚く、持ち運ぶなどとてもではないが不可能だった。

パソコンの元祖を生み出したとされるアメリカでも、当時のデスクトップ型パソコンは重いという評価だった。

それを持ち運びできるように開発したのが、我が国日本の某企業である。

1986年には既に試作機が出来上がっていたそうだ。販売されたのは1989年、光子郎が生まれた年である。

1996年以降は更に小型化され、サラリーマン等の限られたユーザーから誰でも使えるようになった。

今は1999年。パソコンが一般家庭に普及され始めたばかりと言っても過言ではない。

それ故、パソコンを扱える人は多くはなかった。

コンピュータウイルス、と呼ばれるプログラムがある。

マルウェアと言う、コンピュータに被害をもたらすプログラムの一種で、まるで生物学的なウイルスのようにコンピュータを破壊することから、コンピュータウイルスと呼ばれている。

1940年代にはその発想はすでに存在しており、1970年代にセキュリティテスト用として作成された「The Creeper」が、世界最初のコンピュータウイルスだ。

デジタル機器にのめり込んでいる光子郎も、当然コンピュータウイルスのことは知っているから、怪しいサイトは開かないようにしているし、知らない人からのメールも開かないようにしていた。

セキュリティも常に最新のを更新して、ウイルスが侵入する隙を与えないようにしていた。

しかしセキュリティが向上すればするほど、悪質なハッカー達はその裏をかいたり、より強力なウイルスを作成してばら撒いたりしている。

正にイタチごっこだ。

そんなある日、ネットワーク上に謎のウイルスが広まった。

ウイルスは周りのデータやバグを吸収しながら、変化を続けて行った。

まるで生き物のように次々と増殖していきながら、ネットワークを通じて被害をもたらしていった。

いつ生まれたのか、どうして生まれたのかは定かではない。

しかしパソコンのスペックが向上してく度に、そのウイルスも同じ

ように進化をし続けて行った。

人類の歴史と共にパソコンが高性能になっていくと、やがてネットワークの中で独自の世界が作り出されていった。

パソコンの中のデジタルな世界でありながら、誰にも知られることなく、その世界は繁栄していった。

コンピュータウイルスから始まった命は、その世界と同じように独自の生命体を作り、増やしていった。

それがデジタルモンスター、デジモンの起源だ。

ネットワークの向こう側の世界と言うこともあつてか、人間の世界の影響を強く受けながら、デジモンの数はどんどん増えて行った。

デジモンの最初の起源である、ウイルス種。

そのウイルスに対抗するために作られたプログラムが元になった、ワクチン種。

パソコン上のデータがそのままの形となった、データ種。

その3種は、まるで三竦みのような関係で成り立っており、ウイルスはワクチンに弱く、ワクチンはデータに弱く、データはウイルスに弱い、と言った関係だ。

基本的にデジタルモンスターは、その3つの属性に分かれているのだが、それに当てはまらないデジモンがいる。

大輔のパートナーデジモンであるブイモンのような、『古代種』のデジモンで、それらはフリー種と呼ばれていた。

『確かに古代種は滅ぼされた。私の『本』にも記録されているから、それは間違いない。だが全ての古代種が滅ぼされたわけではない。あの惨劇から辛うじて逃れられた古代種デジモン達が、その時の悲劇を残すために、この遺跡を作ったのだ』

物語は、ページの始まりへ。

古代種のデジモン達は現代種と比べると潜在能力こそ高いが、感情の起伏が激しく、データの書き換えと言う意味のオーバーライトも荒々しかったために、寿命が極端に短い。

そのために、古代種のデジモンの多くが、成熟期以上に進化をすることが出来なかった。

そんなある日、デジタルワールドで大破壊の危機があった。
古代種達を滅ぼした出来事よりも、ずっとずっと前の出来事だ。

その危機を救うべく、奮闘したデジモン達がいた。

『それがロイヤルナイツ、と呼ばれるデジモン達だ。詳細などは残っていないが、これらは“最初の究極体”と言われている』

「……究極、体？」

聞き慣れない言葉に、光子郎は繰り返すように言葉を紡ぐ。

ワイズモンは小さく頷いた。

『進化を超越した進化、完全を凌駕するデジモン。それが究極体だ』

「完全体よりも更に強いデジモン、と言うことですか？」

『そうだ』

光子郎は、きゅ、と唇を結ぶ。

完全体を超えた存在である、究極体。

テントモンはまだ完全体に進化することが出来ないのに、その先の進化を聞くことになるとは、夢にも思わなかった。

否、光子郎は、子ども達は何の説明もなくデジタルワールドに連れてこられたせいで、デジモンのこともデジタルワールドのことも、何も知らないのだ。

完全体と言う存在は、ファイル島で出会ったアンドロモンで何となく分かっていたが、こうして自分の身に降りかかると実感が湧かないものだ。

ゲンナイからは詳しく聞けなかったから、ワイズモンに色々聞いたのだが、今は目の前のことに集中しなければ。

『デジタルワールドが危機に瀕した際に、それを防ぐべくロイヤルナイツは完全を脱し、究極の存在となった。これにより、デジタルワールドは救われた』

「なるほど……」

『しかしなにぶん、大昔の出来事だな。資料があまり残っていない。分かっているのは、デジタルワールドの危機を救った後、“神”と呼ばれる存在に仕え、その後デジタルワールドの平和を護った、と言うことだけだ』

しかし話はそこで終わらない。

『その平和を、彼奴等は自ら壊したのだ』

それは、世界の危機が訪れたのと同じぐらい、突然のことだった。世界が危機に瀕したことがあることを、知るデジモンが殆どいなくなり、ロイヤルナイツの役割も形骸化してきた程の、長い間続いた平和を、自ら崩した。

それが、ブイモンの記憶の出来事だ。

『自ら築き上げた平和を、自ら壊し、そしてその時代に生きていたデジモン達の命を、残らず狩りつくそうとした。成熟期以上の進化を果たせない古代種達は、ただ蹂躪されるがままだった』

そう言うと、ワイズモンはすーっと移動を始めた。

慌てて追いかけると、入り口から向かって正面の壁の方に向かう。

広い広い空間だったため、少々時間がかかった。

壁の数メートル手前で立ち止まると、静かに両腕を広げる。

光源もないのに光が灯り、正面の壁を照らした。

それは、壁画だった。

テレビの特集で見たような、エジプトやメキシコのマヤ文明のように、絵が描かれていた。

向かって左に騎士のような姿をしたデジモンらしき絵が2つ、そして右には10体のデジモン。

壁一面に描かれているお陰で、1体1体の姿を細かく認識することが出来た。

長い時間のせいで劣化してしまっているが、辛うじて色がついていることが分かる。

左の騎士のようなデジモンは、1体がピンク色で、もう1体が白かった。

光子郎は慌ててデジカメラを取り出し、それらを記録する。

「ワイズモン、これは……?」

『これは、戦いの記録だ』

ワイズモンは言った。

『古代種はその性質から、確かに成熟期以上の進化を遂げるのは難し

い。しかしだ、コウシロウ。難しいだけで、出来ないわけではないだ。何故ならロイヤルナイツもまた、古代種のデジモンだからだ』

大昔、まだ古代種達が暮らしていた時に、デジタルワールドに大きな危機が迫っていた。

ならば当然、その危機を食い止めるために進化をしたのは、古代種達だ。

そして古代種のデジモン達は、現代種と比べると気性が荒く、闘争本能も強い。

条件が同じなら、追い詰められた古代種達が取的手段は1つである。

『生き残ったうちの10体の古代種が、ロイヤルナイツに対抗すべく、同じ究極体に進化をして戦った様子を描いたのが、この壁画だ。この10体は、後に十闘士と呼ばれることになる』

「十闘士……」

『聞いたことおまへんな……』

『無理もない。何せ古代デジタルワールド期のデジモンだからね。現代種の君が知らないのは、当たり前だ』

壁画を熱心にデジカメで撮影する背後で、テントモンも興味深そうに壁画を見つめている。

自分の話を聞いてくれる存在が嬉しいのか、ワイズモンの声は少し弾んでいるように聞こえた。

ワイズモンは、話を続ける。

『この十闘士と言うのは、それぞれ10の属性を司るデジモンでね。火を司るエンシエントグレイモン、光を司るエンシエントガルルモン、風のエンシエントイリスモン、木のエンシエントロイアモン、水のエンシエントマーメイモン、氷のエンシエントメガテリウモン、雷のエンシエントビートモン、土のエンシエントボルケーモン、闇のエンシエントスフィンクモン、そして鋼のエンシエントワイズモン』

え、と光子郎とテントモンは、ワイズモンを見やる。

フードの奥から光っている黄色い目は、何処か誇らしげだった。

『このエンシエントワイズモンは、私のご先祖なのさ』

「そ、そうだったんですか」

『そう。私のご先祖と仲間達が、この2体のロイヤルナイツと戦ったんだ』

この時の光子郎は知らなかったのだが、デジモンに交尾と言う概念はない。

そもそも雄と雌という性別が存在しない。

デジモンはデジたまと呼ばれる卵から生まれるが、雄と雌が交尾をして卵を産むわけではない。

データの塊であるデジモンは、死ぬ間際に自分のデータをコピーして、デジたまとなり、生まれ変わるのである。

ワイズモンはその転生を何度も繰り返しながら、この遺跡を守護していた。

ご先祖という言い方をしていたが、ワイズモンはエンシエントワイズモンそのものでもある。

そして、デジモンは転生をする度に違うデジモンへと生まれ変わるのが常なのだが、このワイズモンはエンシエントワイズモンの時から記録・保存したデータを後世へと繋いでいくために、ワイズモン以外の進化を拒んでいたのだ。

しかしデジモンにとっては当たり前の、常識的な概念とルールであるために、ワイズモンもテントモンもそのことを光子郎に伝えることはなかった。

それよりも、伝えなければならないことが沢山あるからだ。

『……………さて、私のご先祖と仲間達は、平和を取り戻すべく、このロイヤルナイツ2体と勇敢に戦ったのだが……………そう簡単に事は上手く運べなかった』

ワイズモンの声が曇る。

視線を落とすと、足元にあった本が浮かび上がり、ワイズモンの目の位置で止まった。

両腕を前に伸ばすと、ワイズモンの足元から上に渦を巻くように風が吹き、ページが勢いよく捲れて行った。

「ワイズモン、それは……………？」

『これは、ご先祖がエンシエントワイズモンになった際に、後世に語り継ぐために残した日記であり、記録媒体だ』

「記録媒体……」

捲れていたページが止まる。

ワイズモンは本を掴むと、右手の指でなぞるように、文字を追って行った。

もう何度も読み返して、何度も脳裏に過った記憶だ。

フードで隠れて分からないワイズモンの表情が、人知れず曇る。

『確かに我がご先祖、エンシエントワイズモンとその仲間達は、ロイヤルナイツと戦った……しかし力の差がありすぎた』

「力の差、ですか？」

『左様。幾ら完全を超越した究極の力とは言え、我が先祖達は進化をしたばかり。対するロイヤルナイツは究極体となつてから沢山の月日が流れている。その間に蓄積された経験や、強大な力に振り回されぬように鍛錬された精神、精練された技、どれをとっても我がご先祖達は足元にも及ばなかった……この、忌々しい2体の攻撃を防ぐことで、精一杯だった』

崩れた平和を取り戻すために、奪われた命のために勇敢に戦った十闘士達だったが、1体、また1体と破れてしまい、残ったのは火と光を司つた古代の戦士達と、ワイズモンのご先祖だけだった。

『私のご先祖は、戦闘向きとは言えなかった。究極体となる前も、対抗する力はなく、逃げることしか出来ないと嘆いていた。友であった2体が勇敢に立ち向かっていくのを見て、何もせずにはいられなかったのだが、所詮は戦う力も持たない頭でつかちだ。他の仲間達のように死に損なつたものの、最早ただの足手まといでしかなかった……絶望すら、抱いたよ』

それでも残つた2体は、諦めなかった。

腕をもがれようが、脚を切り落とされようが、技を防がれようが、決して挫けることを良しとしなかった。

何故なら、2体の背後には護らなければならぬ命があったから。

ロイヤルナイツの魔の手から何とか逃れ、生き延びた同胞達がいた

から。

ここで負けるわけにはいかない、平和を託して消えて行った仲間達に示し合わせが付かないと、2体は無我夢中で相手に切りかかった。そして……気が付いた時には、ロイヤルナイツの2体の身体には、大量の傷がつけられていたらしい。

「え？」

『どういうことですか？』

『残念ながら、ご先祖の記録には残っていない。死を覚悟していたご先祖がほんの一瞬意識を手放した後、ロイヤルナイツの2体は、傷を負わされていたのだ』

地に伏して見上げていた、空での戦い。

傷の痛みで一瞬だけ気を失っていた、僅かな間に起こった異変。

それを確かめる術はもうない。

その戦闘が元で、火は消え、光は星となったのだから。

『だが、退けることには成功した』

そう言つて、ワイズモンは本を捲る。

『火と光は力を使い果たしてしまつたが、ロイヤルナイツの2体もまた、致命傷を負つた。そのまま飛び去ってしまったが、彼奴等がこの地に現れることは二度となかった』

平和は取り戻せた。

しかし失つたものはあまりにも多く、あまりにも大きかつた。

『十闘士は我がご先祖を除いて、皆命を落とした。エンシエントワイズモンのように、辛うじて生き残つた者もいたが、その戦いでデジコアを激しく消費してしまい、寿命が尽きてしまつた』

エンシエントワイズモンは戦闘向きではなかつたからこそ、力も命も他の十闘士のように消費することがなかつた。

だがただ1体、残されてしまつたエンシエントワイズモンの心境は、如何ほどに。

『彼奴等は退けたが、いつまた彼奴等が戻ってくるか分からない。彼奴等ではない、他のロイヤルナイツが襲い掛かってくるかもしれない。そう考えた我がご先祖は残つた古代種達を護るために、この地に

逃げてきた。そしてこの事を後世に伝えるべく、残った古代種達と共にこの遺跡を作り、この歴史を知るに相応しい探究者のために、このエリアに魔法を施して彼奴等に見つからないようにした……』

正に、悲劇。

どんな悲劇作家にだって書けないだろう、目を逸らしたくなるような惨劇に、光子郎の眉間に皺が寄る。

デジカメを持っている手に、無意識に力が込められた。ゆつくりと、正面の壁画を見上げる。

ロイヤルナイトに対抗すべく進化を果たしたとされる、十闘士の存在。

残念ながらロイヤルナイトを屠るまでには至らなかったものの、それでも助かった古代種がいた。

その後、どのように過ごしたのかは知らないが、それでもつかみ取った平和の中で、静かな余生を過ごしたことだろう。

……その助けられた古代種の中に、ブイモン達は含まれなかった。別のデジモン達に助けられたことで、命拾いはしたが、心に大きな傷を負ってしまった。

十闘士に助けてもらえれば、少なくとも平和な時間は過ごせたはずだ。

しかしそうなれば他の古代種と共に、ブイモンは絶滅してしまっていただろう。

あの黄金色のデジモンに助けられたからこそ、ブイモンは選ばれし子どものパートナーデジモンとして選定されたのだから、運命とは何とも皮肉なものである。

『……………と、……までが話の前提だ』

「えっ？」

ぼんやりと壁画を眺めながら、古代種に降りかかった悲劇を偲んでいると、ワイズモンから放たれたのは予想もしていなかった言葉。

これまで語られた物語を、ワイズモンは前提と言い放った。

同じく壁画をぼんやりと見上げていたテントモンと共に顔を見合わせ、目をパチパチとさせた。

その反応は予想していた、と言わんばかりに、ワイズモンはガシガシと頭巾で隠れた頭部をかく。

『ここまで長々と語ったんだが……まあ、何と言えはいいのだろうか……この本を見て欲しくとも、書かれている文字は古代で使われた文字だから、読むどころか理解することも出来ないだろう。だからこの本に書かれていることをそのまま読み上げるが……とりあえず、何も言わずに聞いて欲しい』

そう前置きをすると、ワイズモンは一旦本を閉じてから、裏表紙に手をかけ、開く。

ぱら、と捲られたのは、本の1番最後のページ。

何も書かれていないように見えたが、ワイズモンがページに手を置くと、ぽう、と柔らかい光が灯される。

するとじわじわと滲みながら浮かび上がってきた、ミミズが走ったような記号。

何度か見たことがあるデジ文字とは、形が違う。

これが古代デジ文字だ、とワイズモンが教えてくれた。

昔々、ブイモンやエンシエントワイズモンが生きていた頃に使われていた、古ーい文字だと言う。

先祖代々受け継いできた記録であるため、ワイズモンは読めるとのことだ。

『この本の最後のページに、とても見過ごせないことが書かれていたのだ……読むぞ』

真剣な声色のワイズモンに、光子郎は無意識に居住まいを直し、ゴクリと唾液を飲み込んだ。

《信じられないことが起きている。何が起こったのか、何があったのか全く理解できないし、想像もつかない。友が生きていたならば、何を莫迦なと一蹴されていただろう。疲れているのだと話も聞いても聞かないかもしれないが、私自身、私の身に今まさに起こっていることが信じられないのだ。私ではなく、他の友が同じような混乱と困惑で悩んでいても、恐らく友と同じことを言うだろう。それぐらい、信じられないことなのだ。そのためにも、このページだけは何としても

死守せねばなるまい。私の魔力も、気力も、そして生命力さえも使い果たしてでも、このページだけは。だから私の「イシ」を継ぐものよ、遙か未来の私の子孫よ。どうかこのページを戯言とせず、後世の者達に何としても伝えてくれ。これは私達の存在すら揺るがす重大な出来事なのだ》

少し長かったが、そんな前置きが書かれていた。

少々大げさでは、と思ったが、それだけ後に控えている「重大な出来事」が大切な物なのだろう。

光子郎とテントモンが固唾を飲んで見守る中、ワイズモンは一旦読むのを止めると、小さく息を吐いた。

もう、何度も何度も、読み返したページだ。

最初から最後まで、この本を何度も読み返した。

何処にも矛盾はないし、おかしいところはなかった。

それだけに、最後のページに書かれていることが腑に落ちない。

だがこのページに強力な魔法が込められていることは事実だ。

ならばご先祖の言葉通り、このページに書かれていることを戯言と無視せず、目の前にいる探究者達に伝えなければならぬ。

ワイズモンはゆっくりと息を吸い込み、続きを読み上げる

《この本に書かれていることは、全て出鱈目だ》

その言葉を聞いた光子郎とテントモンは、目をパチパチとさせた。

《この本を読んでいる者も、そして私の子孫から話を聞いているであろう探究者も、本や語られた言葉を歴史の事実と信じるだろう。私の記録だけでなく、私の記憶まで、それを事実と認識し始めている。本来の史実を書こうにも、私の手が、記憶が、それを拒んでいる。生き残った仲間達まで、影響が始めている。私の記憶が正常なうちに、それだけは書き記さねばならない》

ワイズモンの声以外、何も聞こえない静まり返った空間。

光子郎もテントモンも、息をするのを忘れた。

《ああ、駄目だ。思い出そうとすればするほど、闇の底に沈んでいくような感覚だ。今、これを書いている時ですら、私は何を書いているのだろうと文字を書く手が止まりそうになる。もう始まりの歴史です

ら思い出せない。書き直そうとしても、これが本来の正しい歴史ではないかと、私ではない私が嘯く。すまない、これ以上は書けそうにない。愚かな私を、弱い私を、抗えなかった私を許してくれ。だから結論だけを、書かせてもらおう。押し付けるように申し訳ないが、君達に委ねるしかないのだ》

ここまで読むと、ワイズモンは一旦本から顔をあげ、光子郎とテントモンを見つめた。

フードの奥に隠された顔は、表情が見えない。

しかし黄色く光るその目は、真剣だった。

ここから先を読めば、もう後戻りはできない。

知らなかった頃には戻れない。

恐らく、とても信じられないが、とても残酷なことが書かれている。それを知る勇氣はあるかと、ワイズモンの目は語っているように見えた。

……愚問だ、と光子郎は目を伏せる。

知りたいから、ここに来た。りたいから、ここにいる。

何も知らぬまま突き進めるほど、この冒険も世界も甘くないのだ。

戻れないのなら、進むだけだ。

その先にある真実が、誰かを傷つけるものだとしても、光子郎は知らなければならぬ。

「……お願いします」

伏せていた目を開けて、真つすぐワイズモンを見つめる。

両親との確執のせいで、人付き合いが苦手になってしまった光子郎は、誰かと目を合わせることも怖がっていた。

見ないでほしかった。知られたくなかった。

自分是他の子達と違うのだと、思い知りたくなかった。

そんな光子郎が、真つすぐワイズモンを見つめて離さない。

光子郎の心情も人生も何も知らないが、その瞳に力強さを感じたワイズモンは、決心したように小さく頷き、再度本に目を落とした。

《信じられないと、君は戸惑うだろう。ありもしない妄想をと、君は怒るだろう。そんな莫迦など、君は笑うだろう。私自身、同じ心境だ。

しかし事実だ。だから心して読んで欲しい。——この世界は、書き換えられている》

長い長い前置きの、序章が始まる。

《事の発端は、私の記憶と記録の齟齬だ。私が経験し、感じた心をそのまま本に書き、いつかの子孫達にこのような歴史があつたのだと、知ってほしかった。そのために書いた記録が、私の記憶と全く異なる言葉を綴っている。最初は何度も書き直した。しかし書き直した翌日には、また書き換えられていた。何者かが悪戯でもしたのかと思つたが、この本は私の魔力を注がなければ読むことすらできない、魔法の本となつてゐる。だから何者かが書き換えられるはずがないのだ。そして最悪なことに、日を追うごとに私の記憶は、この本の記録に記された出来事に塗り替えられている。十闘士たる私が、超賢闘士と呼ばれた私が、何故、何故、何故》

読み上げているワイズモンの声に、感情が籠っている。

これまで信じてきたものが偽物なのかもしれないと知って、冷静でいられる者はいないだろう。

《私は考えた。日に日に書き換えられていく記憶と戦いながら、私は必死に考え、そしてある仮説を立てた。突拍子もない仮説だ。私自身、そんなことがあるはずないとその考えを振り払おうとしたが、振り払おうとすればするほど、その仮説は私の頭を占めていく。その仮説が、先ほど書いた“この世界の書き換え”だ。私自身の書き換えではないのなら、もうそれしかない。何者かが過去のデジタルワールドに飛び、歴史を書き換えてしまったのだ。私達が築き上げてきたこれまでの歴史を、希望を、光を、その者が台無しにしたのだ。あの忌々しい、ロイヤルナイツのように》

物語は、最終章へ。

《ああ、もうダメだ。もう何が本当で何が偽りなのか、思い出せない。恐らくここに書いた仮説も、本を閉じれば最後、忘れてしまうだろう。その前に伝えなければ。探究者よ、子孫よ。どうか真実を暴いてほしい。探し出して、白日の下にさらしてほしい。私はここから動くことが出来ない。書き換えられたとはいえ、ここは仲間達と過ごした大切

な場所で、後世に伝えていかなければならない歴史を綴った場所だ。私の命が尽きるその時まで、私の“イシ”を継いだ者を繋いでいくため、ここに居なければ。身勝手な願いなのは承知している。しかし私は知りたい。知らなければならぬ。もう私はいないだろうが、私の“イシ”を継いだ者には、知る義務がある。どうか、どうかお願いだ。歴史に手を出した愚か者に罰を、私達が繋いできた命を、彼らが歩んできた道を、この世界が紡いできた光を、どうか――》

そこで、日記は途切れている。

少し休憩しようか、と本を再び足元に浮かせ、ワイズモンは何か飲み物を取ってこようと云って、その場から離れていった。

恐らく、しばらくは戻ってこないだろう。

ワイズモンはその名の通り、とても賢いデジモンだ。

そして、聡いデジモンだ。静かに話を聞いていた光子郎の顔色を見て、少し時間が必要だと判断してくれたのだろう。

そのことに感謝をしながら、光子郎はワイズモンから聞いた話を整理してみようと、パソコンを開いた。

テントモンも同じことを思ったのか、何も言わずに光子郎の隣に座る。

パソコンのメモ帳機能を開き、今しがたワイズモンから聞いた話を大まかにメモした。

詳細はまた後でワイズモンに聞いて改めてメモをするとして、重要なのは後半の部分。

何者かによつて、歴史が書き換えられているかもしれない、という記述。

現実を生きている者ならば、歴史が書き換わっているなんて、そんな突拍子もないことを信じるわけがないだろう。

クラスの子達が、未来から来た猫型のロボットのアニメの話をよくしていたし、光子郎自身も、アニメの話と分かっていてもロボットや未来の秘密道具等は興味があつたので、たまーにだが見ていた。

大冒険を繰り広げて、過去にも未来にも行っていた。

でもそれは、飽くまでも「アニメ」の話だ。

未来がそうなるとは限らないし、随分前に亡くなった漫画の神様が生み出した未来のロボットのお話も、2003年が舞台設定になっている。

今は1999年。かつての人類が思い描いていた未来とは、程遠い。

車は未だに地面を走っているし、パソコンだって普及し始めたばかりだ。

しかしここは、現実の世界ではない。

パソコンを通して渡る異世界で、光子郎が住んでいる世界とは常識が違うのだ。

自分の物差しは全く役に立たないのだから、それでこの世界を図ってはいけない。

ならばエンシエントワイズモンがあの本に記した、何者かが歴史に干渉し、書き換えたかもしれないという仮説を、莫迦莫迦しいと捨て置くことは出来ない。

しかし歴史が書き換えられたという痕跡があっても、その書き換えられた痕跡と言うのが何なのか、書き換えたのが誰なのかが分からなければ、仮説を立証することはできない。

——それから……ゲンナイさん……

これまで旅のサポートをしてくれた、この世界の安定を望む者と自称した、ゲンナイという青年。

彼には謎が多すぎる。

遠い遠い昔のデジタルワールド、エンシエントワイズモンに認知されず、黄金色の謎のデジモンによって救い出されたブイモン達の記憶から垣間見た、恐ろしい歴史的一幕。

子ども達の戦意は殺がれ、自分達の目的すら忘れてしまうほどの衝撃を受けた。

ゲンナイはそんな子ども達にも、申し訳なさそうにフォローしてくれたが、彼の正体が全くつかめない。

味方であることは確実だ。

それは信じている。だがよく分からない。

彼の口ぶりでは、黄金色のデジモンが死んでしまった後に保護したのがゲンナイのようだったが、その後のことは聞いていなかった。

訊ねる余裕がなかったと言うのもあるが、ある程度時間を置いて、パートナーを完全体にするために仲間達から離れたことで、考える余裕が出来てきた。

ブイモン達古代種が、謎のデジモン達によって滅ぼされた後、彼は何処で、どのように過ごしていたのだろう。

ブイモン達が生きていた、古代デジタルワールドとは今からどれくらい前なのだろうか。

そんな昔から、ゲンナイは仲間と共にデジタルワールドの危機を察して、光子郎達のために準備をしていたと言うのだろうか。

考えれば考えるほど、沼にはまっていく感覚に陥ってしまい、考えが纏まらない。

『……ワテ、何も知らなかったんでんな』

歴史を書き換えたのが誰なのかという仮説と並行して、ゲンナイの事を考えていたら、それを眺めていたテントモンが口を開いた。

「テントモン？」

『ワテ、ずーっと、ずーっと。コウシロウはんらのこと、待つとったんや。あのファイル島で、コロモンやツノモンらと一緒に、ずっと待つとった。いつ来るんやろか、どんな子なんやろかって、コロモンらと話しながら楽しみにしとったんですわ』

『……………』

『コウシロウはんが来てくれはった時、ほんまに嬉しかったんですわ。夢やないんや、ホンマなんやって、嬉しくって嬉しくって……』

『……………』

『コロモンらも、同じや。ずーっと会いたくて、夢にまで見とったパートナーにやっと会えて、コウシロウはんらが何て思っとるかなんて、考えたこともあれへんかった』

「それは……あるかもね」

何と言っていていいか分からず、莫迦正直に答えてしまってから、光子郎は後悔した。

何の説明も事前準備もなく、突然連れてこられた異世界。

そこで出会ったのは、何故か自分の名前を正確に呼び、パートナーだと言い張った不思議な生き物。

目を逸らしたくても、距離を取りたくても、頼れるものがない子ども達に、デジモン達は遠慮なく近づいてきた。

やがて諦めと言う名の受け入れで、デジモン達と仲良くなった子ども達に浮かび上がった、この世界の謎。

しかしこの世界に住まうはずのデジモン達は、よく分からないとか知らないとか、興味がなとか、そんな返事ばかりだった。

子ども達が知りたいことを、何一つ教えてくれなかった。

だってデジモン達にとって大事なものは、子ども達なのだから。

『……ホンマ言うとな。ワテ、コウシロウはんがおれば、ええって思とったんですわ。どうでもええって。コウシロウはんがデジタルワールドやワテらのこと訪ねてきても、何でそんなこと聞くんやろとしか、思てへんかった。ワテらにとって大事なんは、コウシロウはんらやったから……世界救う、言われても、ワテらもピンと来てへんかったん』

「……………」

『ずーっと一緒におったコロモン……アグモンらも、ワテにとっては友達やけど、せやけどアグモンとコウシロウはんやったら、ワテは間違ひなくコウシロウはんを選びますわ』

息を飲む光子郎。

だがデジモン達にとって、パートナーデジモンとして選定されたテントモン達にとって、それは当たり前感覚なのである。

アグモン達がいれば、テントモンの台詞にうんうんと深く頷いていたことだろう。

それほどまでに、パートナーデジモン達にとって子ども達は、大切な存在なのだ。

『……ブイモンのことかて、そうや。あの日までワテも、アグモンら

も、ブイモンはワテらと同じや思とった。いやあ、むしろそんな発想すらなかったですわ。ブイモンかて、誰かに触れられるん怖がる以外は、ワテらと同じように、ディスクはんらのこと待とったから……」

「……だったら、これから知っていこう」

『コウシロウはん?』

ずっと傍にいたのに、ずっと一緒に子ども達のことを待っていたのに、自分のパートナーのことばかり考えて、ブイモンが背負っているものに何も気づかなかった。

ブイモン自身がそのことを忘れていたのだから、それは仕方がないことである。

でももう、知らなかった頃には戻れない。

光子郎が、この世界の歴史の歪みを知ってしまった時のように。

ならば取るべき道は1つである。

「何でも知った気になって、それに胡坐をかいていちや、ただの頭でっかちになる。大切なのは、貯め込んだ知識をどうやって、いつ使うのかってことなんじゃないかと、僕は思うんだ」

『コウシロウはん……』

「僕の紋章は『知識』だ。何でも知っているって意味じゃなく、自分の人生をこれから先、彩るために必要な『知識』。このままパソコンみたいなデジタル技術がもつともっと進化していけば、人類は必ずこの世界の存在に気付くと思う。そのためにも、僕は知りたい。理解りたい。この世界のこと、歴史のこと、デジモン達のこと……君のこと」

『……コウシロウ、はん』

「僕達は知らなきやいけないんだ。何があつたのか、どうしてこうなってしまったのか。この世界を単食おうとしている闇とは何なのか。ロイヤルナイツのこと、歴史を書き換えた存在のこと……だから、テントモン」

一旦言葉を切り、光子郎は真つすぐテントモンを見つめる。

「……僕と、一緒に頑張ってほしい」

『……はいなー!』

テントモンの表情は変わらないが、その声色は先ほどと違い、弾んでいた。

何も知らずに、のうのうと生きていた自分に打ちのめされかけていたテントモンだったが、これから一緒に知っていかうと言いつつ放つてくれた光子郎に、テントモンは力強く頷く。

何も知らないまま、前に進むことは出来ない。

この世界の真実ほんとうの歴史を解明し、何が起きたのかを知らなければ。そのためにも、まずは目の前の謎に取り掛かってしまおう。

ワイズモンがお盆に乗せたカップとティーポットを持って戻ってきたのは、その時だった。

『すまない、誰かにお茶を入れるなんて久しぶりだったから、少々手こずったよ……整理はついたかい？』

何の、なんて聞かなくても分かるだろう。

光子郎とテントモンは先ほどと打って変わって、目が輝いている。

目の前にぶら下がっている謎を、何としても解き明かしてやろうとする目だ。

知識を得る喜びを誰よりも知っているワイズモンは、自分とおなじような探究心を持つ仲間に優しく微笑んだ。

「早速なんですが、聞きたいことがあります……」

『何だい？』

「色々とあるにはあるんですが、まず知っておかなきゃいけないなと思ってるのは……古代種を滅ぼした、2体のロイヤルナイツのことで「す」

仲間であり、後輩である大輔のパートナーの、仇とも言えるデジモン。

壁画に描かれ、十闘士のデジモン達と対峙している2体のデジモンの正体は、何なのか。

あの悲劇に心を痛めている子ども達も、パートナーデジモン達も知りたいはずだ。

ブイモンに一生消えない心の傷を負わせ、古代種達を蹂躪した、あの卑劣な2体だけは、絶対に許せないし許さない。

この世界を救うのが光子郎達の役目なのは分かっているが、それは冒険して行きながら情報を得ればいいのだ。

大昔に起こった出来事を知っているのは、ブイモン以外ではワイズモンしかない。

ならば聞く機会は、今しかない。

今すぐどうこうできなくとも、いずれ対峙する時が必ずやってくるだろう。

少しでもワイズモンから情報を聞き出さなければ……。

それを悟ったワイズモンが頷き、その2体の名前を言おうと、口を開いた直後。

どおおおおおおおおおおおんっ!!!

大地を揺るがす爆発音が、光子郎達を襲った。

賢者の意地

激しい揺れと、爆発音。

光子郎は立っていられず、うわ、と言いながらその場に蹲った。

テントモンは慌てて光子郎に寄り添い、ワイズモンも何事かと狼狽えていた。

がらがら、とただでさえ朽ちかけている遺跡が、その衝撃で上から細かい瓦礫となって降ってきた。

揺れが収まったのを見計らって、ワイズモンは外に飛び出していく。

光子郎とテントモンも、少し遅れて遺跡の外に出た。

《おーっほっほっほっほ!!》

響き渡る高笑い。

上空から聞こえたそれに、ワイズモンと光子郎とテントモンは反射的に顔をあげた。

ギョツとなって、目を見開く。

空を覆うほどの巨大な円盤、所謂UFOが浮かんでいた。

そのUFOから空中に立体映像が映し出されている。

肥大した脳みそに、ギョロリとした黄色い目、蛸のように幾つもある足。

昭和の時代に思い描かれていた宇宙人にそっくりだった。

『べ、ベードモンやつー!』

「ベードモン!?!」

テントモンが叫んだ。

ベードモンとは、遠い宇宙からやってきたとも、植物の実から生まれたとも言われているデジモンだ。

その弱そうな見た目とは想像できないほど、恐ろしい攻撃力を身に着けていると言う。

そして特筆すべきは……完全体である、と言うことだ。

「か、完全体……！」

成りはふざけているが、立派な完全体。

まだ完全体への進化を果たしていないカブテリモンでは、ベータモンには叶わない。

どうしよう、と光子郎とテントモンが戸惑っている中、ワイズモンは全く別の、しかし重要な疑問をベータダモンにぶつけた。

『貴様っ!! 一体どうやって……! ここは我が先祖が張った結界に護られているんだぞ?! どうやって突破した!!』

そうだ、ワイズモンは言っていたではないか。

この遺跡を護るために、後世に伝えていく記憶と記録を護るために、他のデジモンに荒らされなかったために、このエリア一帯に大規模なデジモン避けの結界を張ったと。

お陰でこのエリアにはデジモンは住んでおらず、デジモンではなかったが故にゲンナイは偶然見つけることが出来た。

光子郎とテントモンが入れたのも、ワイズモンが許可をして結界の一部を緩めたからである。

光子郎達が入った後は、また結界を強化したから、何人たりともこのエリアに足を踏み入れることは出来ないはずなのに……。

すると立体映像のベータダモンは、莫迦にしたように鼻で笑った。

《ハンッ。随分と自分の腕に自信がおりのようなけれど、所詮魔法なんてプログラムと一緒なのよね。儂が作ったウイルスで、結界のプログラムを破壊させてもらったのよねっ!》

『何だっ?! 莫迦なっ、あれは古代の魔法だ! 現代種であるお前に解読できるわけが……!』

《おーっほっほっほー!》

ベータダモンは再び高笑いをした。

《アンタの言う通り、あの結界のプログラムを解析できなかったけれど、そんなもんには意味はないのよねっ! 解読できないのなら、プログラムを食い尽くすウイルスを作ればいいだけなんだからっ!》

『ぐっ……!』

ワイズモンは両手を突き出した。
ふうん、と言う電子音がして、ワイズモンの目の前にスクリーンが映し出される。

ミミズが走ったような記号が書かれていたが、それを食らいつくす黒い点の塊が、幾つも走っていた。

これがウイルスか、とワイズモンはウイルスを除去しようと、スクリーンに直接打ち込むように両手を動かし始めた。

それを見逃すベータモンではない。

《おーつとー！勝手なことはさせないわよ！悪魔のなげキツス！》

右手の指を2本、唇につけてから、ちゅ、とわざとらしく音を立てて投げキツスのジェスチャーをすると、何処からともなく巨大な岩が幾つも現れ、降り注がれようとしている。

《ここに「アレ」があるのは分かっているのよね！助かりたいなら、「アレ」を渡すのよねっ！》

『っ、誰が貴様らのような奴にっ！』

《だったら力づくで奪ってやるのよねっ！》

にやあ、と卑しい笑みを浮かべると、ベータモンは生み出した岩を、ワイズモン達目掛けて落とす。

光子郎はテントモンをカブテリモンに進化させて、降り注ぐ岩の対処を頼んだ。

メガブラスターを何発も打ち込んで、岩を次々と砕いていくのを見届けた光子郎は、ワイズモンの下へと駆けつけた。

ワイズモンの目の前にあるスクリーンに目を通す。

書かれているプログラムの文字は、光子郎が全く知らないもの。

下手に触ればプログラムそのものを壊してしまうが、ウイルスに侵されている今、それを気にする必要はない。

光子郎は鞆からパソコンを取り出すと、それを起動させる。

目にもとまらぬ速さでキーボードを打ち込み、何かのプログラムを組んでいった。

パソコン少年の光子郎は、ウイルスのことだつて勿論知っている。偶然送られてきたウイルスをわざと受け入れて、そのプログラムを

解析したこともあった。

メル友の中にアメリカ人がおり、同じ年ながら優秀なハッカーの友達とウイルスを作ったこともある。

独学とは言え、これまで何度もプログラムを自作してきた。

だから、

「これを……こうして……っ！行けっ！」

タンツ！とエンターキーを押す。

赤外線ポートを通って、ベータダモンに送られたのは、光子郎が友人と共に作ったウイルスを、少々改造したもの。

かなり性質（たち）の悪いウイルスで、並みのハッカーではそのウイルスを除去することは出来ない。

ベータダモンのUFOの構造がどうなっているのか分からないが、友人が作ってくれた自律型プログラムを組み込んでいるから、勝手に判断してくれるだろう。

数秒後、ベータダモンの立体映像に異変が起こる。

ザザ、とザツピングが起こって、ベータダモンの映像が乱れる。

その乱れた映像からも、ベータダモンが焦っているのが分かった。

今のうちに、と光子郎はワイズモンに頼んで、結界プログラムを食い尽くそうとしているウイルスを一匹、自分のパソコンに送つてもらった。

そのウイルスの解析を大至急行い、プログラムを反転させてワクチンを作り、増殖させてワイズモンに送り返す。

光子郎が作ったワクチンが、ワイズモンの結界プログラムを食い尽くそうとしているウイルスを退治し始めた頃、ベータダモンも光子郎から送られたウイルスの対処に成功したのか、攻撃を再開した。

降り注がれる岩の嵐と、幾つもの光線。

カプテリモンは縦横無尽に飛び回り、それらを躲したり技で岩を壊したりしながら応戦していくが、カプテリモンの体力も無限ではない。

ワイズモンは結界のプログラムを組み直さなければならぬから、カプテリモンに加勢することは出来なかった。

結界は大昔、エンシエントワイズモンがこのエリアを護るために作ったものだ。

もう誰も知らない古代デジ文字で組まれたプログラムだから、治せるのはその子孫であるワイズモンしかない。

ワイズモンの戦力が見込めないのなら、手段は1つ。

カプテリモンが完全体になるしかないのだが、今の光子郎にそんなことを考えている余裕はなかった。

何故なら除去したばかりウイルスが、再びベーダモンから送り込まれ、ワイズモンが組み直すようとしている結界のプログラムを食い始めたからだ。

あのウイルスを突破したのか、と光子郎は再び別のウイルスを作つてベーダモンに送り、ベーダモンの攻撃の手が緩んだ隙にワクチンを作つてウイルスを除去した。

ウイルスを作つては送り、ワクチンを作つてウイルスを除去する、その繰り返しが続くこと、1時間。

ベーダモンが生み出した岩の1つが、遺跡に命中した。

どおん、と派手な音を立てて遺跡が崩れるのを見たワイズモンは、プログラムを組み直す手を止めてしまった。

直後に送り込まれたウイルスにプログラムが食われていることに気づかず、ワイズモンは崩れていく遺跡から目が離せない。

思い浮かぶのは、かつての仲間達。

平和を壊した者達に立ち向かっていった友と、壊れていく世界に泣くことしか出来なかった同胞達。

二度とその悲劇を繰り返してはならないと、生き残った同胞達と共に立てた遺跡が、呆気なく崩れていく。

『……………』

何かを考えこむように目を伏せたワイズモンは、一瞬のうちに決心した。

遺跡の中へ戻るワイズモン。

ベーダモンに送るウイルスを作っていた光子郎は、崩れていく遺跡に戻っていくワイズモンを見て、急いでプログラムを組み終わると、

ベータダモンに送りつけ、ワイズモンの後を追った。

今度のは簡単に除去できないはずだ。

奮闘しているカブテリモンに声をかけるのも忘れ、光子郎はパソコンを鞆に仕舞って、遺跡の中へと走る。

初めて入った時から朽ちかけていた遺跡の中は、更に酷く崩れていった。

目の前の壁画は未だ無事だが、あれもいつ破壊されるか分からない。

そんな壁画の前で、ワイズモンが蹲っている。

危ないですよ、と声をかけながら駆け寄れば、ワイズモンは何かを抱えて顔をあげた。

『コウシロウ、済まない。こんなことになってしまった。君達をこんな目に合わせるつもりはなかった』

「分かっています、分かっていますよ、ワイズモン。悪いのはワイズモンじゃない。あのベータダモンなんですから……」

『これを』

光子郎の言葉を遮るように、ごとり、と差し出されたのは、ミミズが走ったような記号が彫られている、加工された岩の板。

何ですか、これ、と訊ねれば予言書だと返ってきた。

「予言書？」

『ゲンナイ様が私に預けた、予言書だ。ここならデジモン避けの結界が張ってあるから、簡単には忍び込めないだろうと見込まれてな。しかし結界を破られた以上、ここも安全ではない。だからこれを、お前に託す』

そして、ここから逃げろ。

がし、と光子郎の両肩を掴みながら、ワイズモンは言った。

ワイズモンの言っていることが理解できず、光子郎は一瞬硬直する。

逃げろ？何故？

外ではまだカブテリモンが、ベータダモンを相手に戦っている。

完全体を相手に倒すことが出来なくても、追い払うことぐらいは出

来るはずだ。

そう主張したのだが、ワイズモンは力なく首を横に振った。

『私の役目は、ここを護り、そして後世に伝えていくことだ。例え偽りの歴史だとしても、それを歴史として、次の世代達に伝えていかなければならない。だが結果が破られた今、最早なす術はない』

「そんな……！だ、だったらワイズモンも一緒に……」

ワイズモンは再度首を振る。

『元々決めていたのだ。役割を終えたら、この遺跡と共にそのまま朽ち果てようと。私は、コウシロウ。お前にこの世界の歴史と矛盾を伝えたことで、役目を果たせたと思っている』

「そんなっ！」

『君は、ここで立ち止まっている時間はないはずだ。君が倒すべき相手。そのヒントが、この石板に書かれている。恐らく、否、十中八九、ベータモンの狙いはこの石板だ。そうでなければここに来ることもあるまい。どうやってここを突き止めたのかは不明だが、今はどうでもいい。解説も済んである。だからお前は、これをゲンナイ様に……』

「っ、ふざけないでくださいっ！」

光子郎は、初めて声を荒げた。

崩れる音が響き渡る遺跡の中で叫ばれた光子郎の声は、何処か掠れていた。

この場所がワイズモンにとって大切な場所なのは、理解している。

先祖が残した、言わば遺品とも呼べるものなのだ。

それがベータモンによって壊されてしまったのを見て、心が折れてしまったのも、解らなくはない。

だけど。

「何でここで諦めるんですか！貴方の先祖は、貴方の先祖の友達は、諦めなかったんでしょ！?最後まで抗って、戦ったんでしょ！?貴方も、諦めないでくださいよっ！」

『……………っ！』

「ここで貴方が、僕らが諦めたらっ！本当に何もかも終わっちゃうん

ですよ!?僕は嫌ですっ!何も知らないまま、分からないまま、何も成し遂げないまま消えるなんて、絶対につ!」

『コウシロウツ!』

光子郎はそう言って、ワイズモンを振り払うように外に飛び出していった。

同時に、ベーダモンと対峙していたカブテリモンが空から降ってきて、どしやりと地面に伏す。

カブテリモンツ!と光子郎はパートナーに駆け寄った。

「カブテリモン、大丈夫かい!」

『あかん、コウシロウはん……っ!下がってなはれっ!』

《おーっほっほっほっほお!》

上空から聞こえてくる、耳障りな高笑い。

光子郎とカブテリモンがそちらに目を向ければ、傷一つついていないUFOと、立体映像で卑しい高笑いをしているベーダモンの姿。

《成熟期の分際で、儂に挑もうなんて1000年早いのよね!死にたくなかったら、大人しく、アレ”渡すのよねっ!》

『っ、アレ”が何なのか知りまへんが、コウシロウはんはんに手出しはさせへんでっ!』

ベーダモンの言葉にカツとなったカブテリモンは、怒りを滲ませながら立ち上がり、再び上空へと向かう。

ゆらり、とUFOがその巨体に似合わず素早く動き、カブテリモンの突進を躲した。

4本の腕を交差させると、バチバチバチ、と大きな電気の塊が生み出される。

『メガ、ブラスターツ!!』

両腕を広げ、電気の塊が放たれる。

真つすぐ軌道を描いて飛び出していった電気の塊は、しかしUFOに当たらない。

それでもカブテリモンは、光子郎を護るため、そしてこの遺跡を護るために、諦めなかった。

光子郎は言わずもがな、この遺跡は仲間であるブイモンの軌跡を知

る唯一の手掛かりなのだ。

例え偽物の歴史だとしても、それを紐解いていけば、真実が明るみになるはずなのだ。

それをみすみす、壊されてなるものか。

何度目かの岩の雨が降り注ぎ、カブテリモンに襲い掛かる。

幾つかぶつかったが、カブテリモンは諦めない。

光子郎も、カブテリモンを援護すべくパソコンを開き、ベータモンにウイルスを送ってやろうとした。

それを、つまらなさそうに眺めるベータモンに、光子郎もカブテリモンも気づかない。

《……何をそんなにムキになっているのよね》

吐き出されたのは、盛大な溜息。

心底莫迦にしたような、立ち向かってくる光子郎とカブテリモンを見下し、軽蔑しているような声色。

キーボードを打とうとした光子郎の手が止まる。

《こおーんな古臭い、何の役にも立ちやしないガラクタ、護つても意味がないのよね》

『……………ガラクタ?』

《そうよ、ガラクタ。むかあーし昔の、もう過ぎた歴史のことなんか保存して、どうするのよね。そんな役に立たないもの、さっさと消してしまいうに限るのよね》

『……………』

《アンタ達もそうなのよねっ！セイギのミカタ気取りで、外からやってきたくせに、我が物顔でのさばっちゃって！鬱陶しいのよね！》

『……………さっ』

《いいからさっさと「アレ」渡すのよね！アンタ達のくだらない茶番に付き合ってる暇はないのよね！》

『……………らんかい』

《どうしても渡さないってんなら、あのデジモンごと遺跡を…………》

「黙ってくださいっ!!」

『黙らんかいっ!!』

光子郎とカブテリモンの声が、重なる。

「他の誰にもっ！僕にも、カブテリモンにも、お前にもっ！先人達が命をかけて積み上げた平和をっ！文字通り犠牲になって築いてきた歴史をっ！莫迦にする権利はないんだっ！」

『あんさんにとつてはいらんもんでも、ワテらにとつては希望なんやっ！』

これまで歴史を積み上げてきた人達がいるから、今生きている人達がいる。

光子郎の両親がいなければ、両親を育んだ祖父母がいなければ、その祖父母を生んだ先祖達がいなければ、光子郎はここにこうして立っていることすらなかった。

光子郎の両親は、本当の両親ではない。

生みの親がどうなったのか、あの日の会話を盗み聞きして以来、両親とともに会話が出来なかったけれど、それでもこれまで光子郎を愛し、育んできたのは今の両親だ。

何も知らなかった頃には戻れない。

それでも、何も知らなかった頃の思い出が、なかったことになるわけではないのだ。

『メガブラスターツ!!』

怒りからか、カブテリモンが放つ電気の塊は先ほどより大きい。

しかし決定打に欠ける。ベーダモンは莫迦にしたような表情を止めず、岩の雨と光線を降らせ続ける。

光子郎もカブテリモンをサポートしようと、再びウイルスを作る作業に移ろうとして……はた、とパソコンを見下ろした。

爆音が鳴り響く中で思い出したのは、パートナーが初めて進化をした時。

アンドロモンの工場を見た、見たこともないぐらい大きなお化け電池の中で、見たこともない文字の羅列で組まれたプログラム。

あれを解読しようとした時、何が起こった？

「……そうだー！」

キーボードを打つ。

主力武器である角も飛躍的に高められており、発達した前肢の付け根に筋肉上の部分が現れたことで、格闘能力も向上している。

だから当然、突っ込まれたUFOはアトラカブテリモンの角によって、いとも簡単に貫かれてしまった。

《ぎゃあああああアアアアアああ阿啞啞アアアあああああつ!?》

UFOから聞こえてきた、断末魔のような悲鳴。

映し出されていた立体映像は乱れ、ベータモンの悲鳴にもノイズが走る。

ずぼ、とUFOから角を引き抜き、距離を取ると、角にエネルギーを集中させた。

オレンジ色の光が、UFOに向かって放たれた。

『ホーンバスターツ!!』

《ぐぎゃあああああああああああああああああああああ
……………っ!!》

派手な爆音と、黒煙。

そしてベータモンの、聞くに堪えない悲鳴。

哀れ、UFOは遙か空の彼方へと飛ばされていくのだった。

『……済まなかったね、コウシロウ、モチモン』

戦闘が終わり、辺りに残ったのは、降ってきた岩の雨とUFOから放たれた光線によって木々が薙ぎ倒されて荒地になった一帯、それから崩れかけた遺跡である。

全壊は免れたものの、建て直すことはほぼ不可能だろう。

でもワイズモンは、構わないと言った。

遺跡の内部は肝心な部分は無事だったし、壁一面にびっしりと書かれていた文は、総て覚えている。

何より、先程言ったように、ワイズモンは光子郎とテントモンに、この世界の歴史を伝えられたのだ。

何かあればまたこのエリアに戻ってくればいい、と瓦礫をどかした

り荒地地になった一帯を軽く掃除したりと手伝いをしてきている光子郎とモチモンに言った。

ありがとうございます、と笑う光子郎。

どちらにしろ、完全体に進化をしてエネルギーを使い果たし、幼年期になってしまったモチモンでは暫く身動きが取れない。

モチモンのエネルギーが充填完了するまでは、ここで休ませてもらうでしょう。

ある程度の瓦礫をどかし、モチモンのためにパソコンから食べ物のデータを実体化させて、手渡してやる。

モチモンは嬉しそうにピョコピョコ跳ねると、サンドイッチにかぶりついた。

光子郎達が外での作業をしている間、遺跡の中を確認するために入っていったワイズモンが戻ってきたのは、その時。

そして、上記の台詞である。

「何がですか……？」

『先ほどのことだよ。私が何もかもを諦めようとしていた時、諦めるなど言ってくれただろう』

「あ……あの時は、すみませんでした……あいつに負けたくないって思ったら、つい……」

『いや、いいんだ。君の言う通りなのだから。私がこれまで護ってきたものが、呆気なく崩れていく様を見て、私はまた諦めようとしてしまった。君に私の知っている全てを託したから、もういいと満足しようとした……全く、探究者たるこの私が、この世の謎を解き明かすことなく、命を手放すなど……』

自嘲するワイズモン。

ごとり、と重たいものがゆっくりと落とされる音がした。

先程見た、ワイズモンがゲンナイに持つて行つて欲しいと言っていた、石板。

ベーダモンが狙っていたという、予言書。

『この予言書を狙ってきたと言うことは、十中八九あのベーダモンは、君達の敵の手下だろう。先程も言った通り、この石板には君達の敵に

関する予言書が書かれている。だから時が来るまで、ここで保管して
いて欲しいとゲンナイ様に頼まれた。しかし敵の手下にこの場所が
バレた以上、ここで保管するのは難しい。解読も済んでいるし、君か
らゲンナイ様に返しておいてもらえるかな?』

「あ、はい。分かりました」

それから、と受け取った石板をどうしよう、ととりあえず食べ物に
夢中になっているモチモンの傍に置いておくと、ワイズモンは手を差
し出す。

何かを持っていた。本だ。

ワイズモンの本より一回りほど小さな本だった。

反射的に受け取り、これは?とパラパラ捲りながら訊ねると、ワイ
ズモンが持っている本の、写本だと言う。

『先祖が記録として残していたこの本を、現代のデジ文字に翻訳しな
がら写した。とは言っても全て終わったわけではない。要所を重点
的にピックアップして、優先的に翻訳した。終わっていないところ
は、古代デジ文字のままなんだ。これを、君に渡しておくよ』

「い、いいんですか?」

『勿論。むしろ君のような子にもらってほしいんだ。君ならばこの本
を正しい用途で使ってくれるだろうと、信じているよ』

「あ、ありがとうございます!」

『それに……私が1から全て教えるよりも、君は自分の力で解き明か
したいだろう?』

頭巾に隠れて分からないワイズモンの顔が、ニヤツと悪戯つ子の笑
みを浮かべた気がした。

光子郎は目をパチパチさせた後、吹き出すように苦笑した。

「そうですね。ワイズモンの授業も楽しかったです……僕、自分で
謎解きがしたいです」

『探究者たるもの、そうでなくてはな……いつか、生き残った同胞
にも、会いたいものだ』

ぼつりと眩かれた、最後の言葉。

光子郎は、優しく微笑んだ。

「全て終わったら、必ず」

『そうだな。全て終わったら』

『ちよつと!!:!!どういうことなのよねっ!!』

分厚い雲は灰色で、いつも陰気臭い雰囲気を漂わせている。

陽の光が差し込む隙間はなく、そのエリアに生えている樹々は、漂う闇を吸って真っ黒に染まっていた。

ほぼ黒や灰色で彩られているその光景を眺めながら、ワインを嗜むのがヴァンデモンの日課でもあった。

数日前に負った怪我也、デジモン特有の頑丈な身体のお陰で、すっかり良くなっている。

しかしその時の戦闘で屈辱的な引き分けを喫してしまい、怪我は治っても精神の方は未だ荒んでいる。

世界の王たるもの、小物と見なした者に後れを取るなど、あつてはならない。

取るに足らないと侮っていただけに、ヴァンデモンの怒りは収まらない。

しかしそんな小物にいつまでも心をさいているのも、ヴァンデモンのプライドが許さなかつたので、こうして心を落ち着けるために、日課を過ごしている。

デジタルワールドを支配するために集めた兵士は200を超えており、配下につきたいと申し出る者はまだまだ沢山いる。

準備も着々と進んでいる。忌々しい光の守護者達を締め出す結界のお陰で、邪魔らしい邪魔もない。

選ばれし子ども達も、恐るるに足らず。所詮戦う力のない、矮小な存在だ。

傍に仕えているデジモン達も、ヴァンデモンの敵ではない。

数日前は少々傲慢になってしまったが、今度は油断しない。

全ては自分がこの世界を、そして人間界を支配するため。

後は“アレ”を“アイツ”が持ってくれば、子ども達も容易に出だ

しは出来ないだろう……と、勝利の美酒に酔っていた時だった。

闇に染まった美しい景色を窓越しに眺めていたヴァンデモンの下にやってきたのは、何とも醜いもの。

元は皿のような円盤型だっただろうボロボロになった機械が、派手な激突音をかき鳴らしながらバルコニーにぶつかつた。

バルコニーで日課を楽しんでいたヴァンデモンは、突如降ってきた、この景色に全くそぐわない無機質な物に動じることなく、爆風を身に受ける。

表情も動かない。テーブルは吹っ飛んでしまったが、幸いにもワイングラスは手に持っていたため、無事だった。

ゆるり、とワイングラスを口元に持っていき、ワインを煽っていると、壊れたUFOから這い出てきたのは、宇宙人のような姿をしたデジモン・ベータモンだった。

『話が違うのよねっ！あれはどういうことなのよねっ!!』

『……話が違う、とは何のことだ？』

『とぼけるんじゃないのよね!!……あの、選ばれし子どものことなのよねっ!!』

ギラギラとした黄色い目でヴァンデモンを睨みながら、ベータモンはヴァンデモンに掴みかかる。

胸倉を掴まれたヴァンデモンは、しかしそれでも動じない。

『選ばれし子どもなんか、取るに足らないって言ったのはアンタなのよねっ!!だから「アレ」もらってくるついでに、始末してやろうと思つてたのに……！まさかあそこまで強いなんて、聞いてないのよねっ!!』

『……フツ』

『っ、な、何がおかしいのよね……！』

詰め寄るベータモンに、ヴァンデモンは鼻で笑う。

その姿がどうにも不気味で、ベータモンは掴んでいた胸倉を放しながら、たじろいだ。

ゆつくりと、ヴァンデモンは立ち上がる。

『……貴様ごときが、本当に選ばれし子ども達を、どうこうできると

思っていたのか?』

『な、何ですって……!?!』

『……ふん、まあいい。それで?』

『は?』

『私は貴様に、 “アレ” を取ってこいと言ったはずだ。まさか選ばれし子どもがいたから、取ってこられなかったとでも言い訳するつもりか?』

『んぐっ……!』

後退りをするベーダモンを、威圧するように見下ろし、悠然と歩み寄るヴァンデモン。

ベーダモンは、ヴァンデモンの手下でも配下でもない。

ヴァンデモンがデジタルワールドと人間界を支配しようとしている、と何処からか聞きつけて、お零れをもらおうと思つて近づいたのである。

ただベーダモンは、強き者にただへこへここと頭を下げるほど、安いデジモンではなかった。

こんな見た目でも完全体である。同じ完全体のヴァンデモンに首こうべを垂れるつもりなど、サラサラなかった。

人間の世界もデジタルワールドも支配し、ヴァンデモンが油断した隙を狙つて背後から突き落としてやろうと企んでいた。

しかしそれを悟らせるのはまずいので、まずは仲間に入れて欲しいとすり寄つたのである。

同じ完全体だから、戦力はあつた方がいいだろう、と言えば簡単に乗ってくれた。

その代わり、条件を出された。

それが、 “アレ” ……石板を取ってこい、と言うものだった。

その石板が何なのか、ベーダモンは聞いていない。

訊ねてみたが、貴様が知る必要はないと一蹴された。

その不遜な態度に少々ムツとなったものの、石板を持つてくると言う簡単な条件で仲間になれるのだから、その程度なら目を瞑ろう。

ヴァンデモンの配下であるピコデビモンから、石板の場所を教えて

ビモンは、ベードモンの企みなどとつくに見抜いていた。

ヴァンデモンも、また然りである。

確かにベードモンも完全体ではあるが、ヴァンデモンの足元にも及ばない小物だ。

条件を突き付けた時も、無事に持つてこられるならば良し、そうでないのならその程度の存在だと、全く期待などしていなかった。

案の定、ベードモンはヴァンデモンから突きつけられた条件を達成することが出来ず、選ばれし子どもに敗北した。

ピコデビモンは愉快そうに嗤う。

石板が今何処にあるかをヴァンデモンとベードモンに教えたのは、ピコデビモンだ。

その石板がどういうものなのかはヴァンデモンも知っていたが、それを持ち去る前に別の何者かによって持ち去られてしまっていた。

ヴァンデモンは内心焦った。

どれだけ自分が強かろうとも、弱みらしい弱みは全て消去しなければならぬ。

ヴァンデモンが何処でその存在を知ったのかは知らないが、とにかくヴァンデモンにとって、その石板は存在してはならないものなのである。

ダブルスパイのピコデビモンが、石板の在処をゲンナイから聞き出した時は安堵したほどだ。

そこに丁度やってきたのが、ベードモンなのである。

数日前に選ばれし子どもとの戦闘で傷を負い、精神も少々荒んでいたヴァンデモンは、念には念を入れてベードモンを利用した、と言うわけだ。

『子ども達は着々と力をつけてきている……そろそろヴァンデモンも動くだろうな』

『……………そうだな』

9人いる子ども達の内、6人の子ども達の子ジモンが完全体へと進化を遂げた。

1人は今現実世界へと飛ばされてしまっているものの、決意を秘め

た子ども達は確実に前へ進もうとしている。

この世界を救うために闇を払い、平和を取り戻すために……ピコデビモンの敬愛するヴァンデモンを、屠ろうとしている。

先程までベーダモンを嘲笑っていたピコデビモンの表情が曇った。

『……ゲンナイ様も言っていただろう。覚悟を決めろ、ピコデビモン』
『分かっている！』

分かっているのだ、それがどういうことなのか。

ヴァンデモンに仕えながら、ゲンナイの手伝いをする決めた時から、これまでずっと覚悟していた。

『……結末がどうなるうとも、俺は子ども達やゲンナイ様を恨むつもりはない……ヴァンデモン様に罵倒される覚悟も……』

それでも、許されるのなら……彼を救いたいと願うことは、悪いことなのだろうか。

『……先に行くぞ』

ほん、とピコデビモンの頭部を軽く叩くと、帽子を目深に被りながら、その場から煙のように消える。

ウィザーモンも、分かっているのだ、知っているのだ。

最初からゲンナイ寄りだったウィザーモンでも分かるぐらい、ピコデビモンはヴァンデモンを慕っている。

ヴァンデモンがどれだけの罪を背負おうとも、ピコデビモンにとつてはたった1体の慕うべき主なのだ。

『ヴァンデモン様………』

苦しむ小悪魔の些細な願いは、誰にも届かない。

じわりと纏わりつくような重い空気、肌に突き刺さるように空から降り注ぐ太陽、蒸発した水分で歪む景色。

そして目の前に広がる、嫌に見慣れた人混みと喧噪。

耳障りな蝉の大合唱が、現実をこれでもかと突きつけてきた。

「……………」

『……』

茫然と立ち尽くしながら、太一とコロモンは呟いた。

1999年8月1日12時20分

何処までも遠い縹色の空に、飛行機が一筋の飛行機雲を描きながら飛んでいく。

置いてけぼりにされたジェット音が、蟬の合唱と不協和音を奏でているのも気にならないほど、太一は狼狽えていた。

じわりと纏わりつくような重い空気、肌に突き刺さるように空から降り注ぐ太陽、蒸発した水分で歪む景色。

そして目の前に広がる、嫌に見慣れた人混みと喧噪。

耳障りな蟬の大合唱が、現実をこれでもかど突きつけてきた。

「……………」

『どっ！…………』

茫然と立ち尽くしながら、太一とコロモンは呟いた。

大人や子ども、女性、男性、老人、様々な人間達が行き交っている目の前の光景は、間違いなく太一達の世界であると言うことを突き付けている。

太一達以外の人間を見たことがなかったコロモンは、大きな赤い目を更に見開かせて、ただただ目の前を通り過ぎていく人間達を見上げていた。

『に…………ニンゲンばかり…………』

太陽の熱が籠った石煉瓦のせい、日本特有の重い空気の夏のせい、それとも知らない光景を目の当たりにしたせいなのか。

手足のないコロモンの顔には、大量の汗が流れていた。

振り絞るように出された言葉に、コロモンの今の気持ち反映されているのが分かる。

今まで草木が広がる柔らかい地面だったり、見渡す限りの大海原だったり、突き刺すように冷たい雪原だったり、自然の中で生まれ

て育ってきたコロモンにとって、ここは未知の世界だろう。

それは、太一達選ばれし子ども達が、初めてデジタルワールドに飛ばされた時の気持ちと、全く同じだった。

「……まさか」

じわりと滲み出た汗が頬を伝う太一の視界に、幼稚園ぐらいの子ども達が1列に並んで、保護者と思しき女性2人に挟まれて、よちよちと歩いているのが映る。

夏休みを満喫している大学生、汗だくになっているサラリーマンや、付近に住んでいると思われる小学生達、おめかししている女性、ベビーカーを押しているお母さん。

ほんの数週間前まで見慣れていた光景が、夢にまで見ていた懐かしい空間が、太一の前に広がっている。

「まさか……俺達、元の世界に戻ってきたのか……？俺達……やったのか……？」

辺りを見渡す。ここは、学校の友人達とよく待ち合わせをしている広場だ。

遠くには、カタカナのコの字を90度回転させたようなビル、テレコムセンターが見える。

建設中のビルに、大きなクレーン車が、蜃気楼で揺らめいていた。

ここは江戸時代、1853年にペリーが幕府に開国を要求し、それに脅威を感じた幕府の老中の命によって築造されたのが始まりだ。

元はペリーを追い払うために造られた埋め立て地は、明治時代に陸軍省の所管となり、大正や昭和の時代に民間人や東京都に払い下げられた。

平成の今に至るまで、埋め立てられては埋没し、というのを繰り返しながら、今なお開発中のその土地は「お台場」と言う、太一の地元であった。

「夢じゃ……ないよな……？」

デジタルワールドと言う、自分達の常識が何一つ通用しない世界に飛ばされ、やっと慣れてきたところだった。

人間は何処を探してもいないし、非力な自分達を簡単に捻り潰して

しまうほどに大きな恐竜や虫が彼方此方いて、いつ自分達を襲ってくるか分からない恐怖に怯えて、少しも気が休まらない。

協力者によつて衣食住は確保できたものの、何度目を覚ましてもそれが夢であったことなんてなくて、その度にながかりしていた。

それでも世界は、そんな子ども達の心情などお構いなしに目まぐるしく過ぎていく。

世界を救うために召喚され、パートナーだと言う訳の分からない生き物達と一緒に、小さな島を冒険しながら進化と言う力を得て、島に巣食う闇を打ち払った。

その後、更に大きな闇を晴らすために大海原を渡り、大陸に降り立った。

紆余曲折あり、進化の先の進化を果たし、また1つ闇を消し去った。しかしその闇は最初に戦った闇とは比べ物にならないほど巨大で、悍ましいもので、世界の空間に亀裂が入ってしまうほど、手に負えないものだった。

その歪に巻き込まれたことは覚えている。

気が付いたら、ここにいた。

ここに立っていた。

見慣れた景色のご真ん中、太一が恋しくて堪らなかった地元、故郷、居場所に、ぽつねんと立ち尽くしていた。

夢だろうか、などと呟いたが、肌に纏わりつく鬱陶しい空気や、耳元を通り抜けていく喧噪が夢ではないと太一をせっついてくる。

——本当に？自分は、本当に帰ってこられたのか？

それでも、つい数刻前まで文字通り命がけの戦いを繰り広げていた太一は、実感が掴み切れていない。

コロモンも、太一のそんな動揺と嬉しさが混じった複雑な気持ちが伝わってきたのか、少々戸惑ったような声で太一に呼び掛ける。

しかし、ボゴツ、という音と衝撃で、コロモンはうぎゃつと呻きながら吹っ飛んで行った。

ギョツとなった太一の視界に、転がっていくボールを受け止めるように拾った、ヒカリや大輔よりも小さな女の子が映る。

子ども用の、柔らかいゴムでできた軽いボールだった。

親らしき大人は見当たらなかったが、どうやら遊んでいた女の子が適当に投げたボールが、思いつきりぶつかってしまったようだ。

柔らかめのボールとは言え、コロモンとほぼ同じ大きさのボールがぶつかってきた挙句、すつかり気の抜けた状態であったのなら、吹っ飛ばされても仕方がないだろう。

我に返った太一は、コロモンを心配するよりも先に、女の子に話しかけた。

「ね、ねえー！ここ、何処？日本？それとも、デジモン達のいる世界？」
しかし女の子は、キョトンとしている。

突然見知らぬお兄さんが話しかけてきたのだから、当然の反応だろう。

目をパチパチとさせた後、女の子は太一の足元に目線を向ける。

『エテモンはっ!?ほかのみんなは!?』

女の子の視線の先にいたのは、ボールに吹っ飛ばされて頬が赤くなっているコロモンだ。

太一が心配をしてくれないよりも、ボールで吹っ飛ばされて痛いよりも何よりも、聞きたいことがある。

しかし太一もコロモンも、失念していた。

本当にここがデジタルワールドではなく、太一の住む現実世界なのだとしたら、絶対にやってはいけないことがある。

元の世界に戻れたのか不安に駆られていた太一は、そんな初歩的なことに全く気が付けなかった。

「ねえ、答えてよ、お願い！」

「……………」

見知らぬお兄さんに、矢継ぎ早に質問されたことが原因か、それとも自分の手元にあるボールと同じぐらい大きい、見たこともない生き物に声をかけられたせいかな。

女の子はみるみる涙目になり、表情を崩し、大きな声で泣きながら母親の下へと走り去ってしまった。

そこで、太一はようやく自分の失態に気づき、顔がさあつと青ざめ

る。

コロモンは、自分が原因だなんて露ほども思わず、顰め面をしながら太一を見あげた。

『タイチイ、なかしちやダメだよお』

「莫迦っ！お前見て泣いてんだよ！」

大好きな太一の、思ってもいなかった言葉に、コロモンはギョツとなった。

更に、女の子が泣いたことよって、周りを行き交っていた人たちの注目が、太一とコロモンに集まる。

それまでそこに突っ立っていただけの、背景に同化していた太一とコロモンのことなど、微塵も興味を持っていなかったはずの無数の目が、太一達に向けられる。

女の子を泣かせた、と言う事実のみを目撃していた人達は、咎めるような眼差しを太一達に向けていた。

え？え？こわい？ボクこわい？こわいの？と戸惑うコロモンの口を慌てて塞ぎ、太一は突き刺さる視線を受けながら、コロモンを抱きかかえてその場を走り去った。

その間も、コロモンは拒絶された事実にはショックを受け、太一や他の人間達に訊ねるものだから、太一はどうとうコロモンの柔らかい身体に拳骨を落とす羽目になった。

丸い展望台が特徴的な建物を見上げながら、太一は漸く一息つく。ここまですれば、女の子を泣かせた意地悪な男の子、として太一を見てくる人間はいないだろう。

湿気が酷い真夏の炎天下の中を走り回ったせいで、尋常ではない汗が全身から溢れて滴り落ちる。

何をしても収まらない、ポリユームのある爆発頭のせいで頭に熱が籠り、額から流れる大量の汗が目に入って、染みる。

服に汗が染みて、身体に張り付く。

溜まらず襟元を掴んでパタパタと引つ張って、中に空気を送り込むが、気休めにもならない。

近所にあるのに、1度も行つたことのない観覧車を遠目で見ながら、太一は日陰を求めて歩き出した。

登下校や、友達と遊ぶのに通い慣れた道が、これが現実であるとまします太一に突きつけられる。

「……お台場」

駅前にあるバスの停留所に書かれた文字は、間違いなく太一の見慣れたものだ。

「やっぱり間違いない。ここは俺ん家の近くだ！」

『タイチの?』

「帰ってきたんだよ、日本に! 帰ってきたんだ!」

嬉しさのあまり、抱えていたコロモンを、頬ずりするようにつきつく抱きしめる。

「いたいいたい! とコロモンは抗議したが、太一は聞いていないのか、頬ずりをやめない。

「きつと、あの歪みに吸い込まれたからだ。お前がコロモンに戻っちゃつたのも、そのせいだよ! やつたんだ、俺達!」

本当のことを言うと、怖かつた。

いつだつて明るく、子ども達を引つ張つてきた太一だったが、そうしないと自分を保てなかつた。

クラスでもリーダー役を引き受けることは多かつたが、今までとは責任や重みが違つていた。

一歩間違えれば、誰かが死ぬかもしれないと言う、危険と隣り合わせの冒険だつた。

子ども達の代わりにデジモン達が戦つてくれるとは言え、やることがないわけではない。

デジモン達は子ども達がいなければ、爆発的な力を得ることは出来ないし、進化することも出来ない。

だから子ども達はどうしたつて、必然的に、前線に出ていなければならぬのだ。

強い心でデジモン達を強くする。

言葉にすれば簡単だが、ただ強い心があればいいわけではない。常に正しい心を持っていなければ、デジモン達はたちまち光から闇へと堕ちてしまう。

それは、とても気を張る作業でもあった。

少しでも怖がったり、諦めたりしてしまえば、デジモン達は力を発揮できない。

デジヴァイスと言う媒体が心の力を増幅させてくれるとは言え、毎日のように戦闘を繰り返していれば、心は消耗していくだけだ。

でもそんな日々も、もう終わりだ。

『……よかったね、タイチ』

嬉しそうな太一を見て、コロモンもうつすらと笑みを浮かべる。

言葉に少しだけ間があったことに気づかないほどに、テンションが高い太一は再びコロモンに頬ずりをした。

遠くに見えるレインボーブリッジを懐かしく思いながら、太一はコロモンを抱えて歩を進める。

なるべく日陰があつて、建物からクーラーの冷気が零れるような場所を選びながら歩く太一の足取りは軽い。

友達とよく立ち寄るコンビニや、お母さんの荷物持ちに駆り出されるチェーン店のスーパーマーケットを、足早に通り過ぎる。

先ほどのバス停から程なくして、太一はある建物の前で立ち止まった。

「コロモン、見て見ろよ。これが俺ん家だ」

太一達が先ほどまでいた江東区から、港区へと移る。

駅から徒歩1分、近所にチェーン店のスーパーマーケットがあるシーリア台場の五番街にあるマンションが、太一の実家だ。

コロモンはその大きな建物に目を丸くして驚いていたが、それは恐らくそのマンション自体が太一の家だと思ったからだろう。

と言うか、絶対そうだ。

だってコロモンはデジタルワールドの生き物だ。

これまで人工的な建物なんか殆ど見たことがないし、現実世界のルールや理なんか知ったこっちゃない。

目に映るもの総てが新鮮で、コロモンはその赤い目をずーっと丸くしながら、太一の腕の中にいた。

自分の功績ではないのに、得意げに笑った太一は、そのままマンシヨンのエントランスに入る。

いつも見る管理人さんがいないが、気にすることではない。

意気揚々とエレベーターに乗り込み、最上階のボタンを押す。13階。

コロモンはわくわくとした気持ちを抑えきれなかったが、エレベーターが上昇していくにつれ、太一の心には不安が募っていった。

確かに、ここは現実の世界、太一の世界だ。

肌に纏わりつく夏の空気も、街を行き交う人々の喧騒も、風に乗って運ばれてくる海からの潮風も、ごちゃつく周りの景色も、そして流れ出た汗のせいで乾きを覚える喉も、五感の総てが太一に、ここは自分の世界だと訴えてくる。

それでも、確かにここは太一の世界だけれど、本当に「太一の世界」なのだろうか。

この世界の時間の経過は、どうなっているのだろうか。

チン、とエレベーターが目的の階に到着したことを告げる。ゆっくりと開く扉を、太一は踏みしめるように歩き出した。

太一達の部屋は、最上階の奥の角部屋から2つ目、1306号室である。

ドアの前に立つ。

表札にはローマ字で「YAGAMI」と書かれていたので、間違いなくここに住んでいるのは「八神」の姓の人だろう。

八神なんてそうそう多い苗字でもない。

しかし部屋の前に立った時、太一は再び夢見心地にかられる。

五感の総てが、ここは太一の世界だと訴えてきても、拭えない不安が付きまどっている。

サマーキャンプに遊びに行っただけの子ども達は、予想外の冒険を繰り広げることになり、デジタルワールドで少なくとも2カ月近くの時を過ごしていた。

その間、すっかり家を空ける羽目になってしまった太一を、両親はどう思っていたのだろうか。

両親からしてみれば、子ども会のサマーキャンプに連れて行った我が子達が、突然行方不明になったのだから、パニック必須だろう。

太一達だけではない。

突然の吹雪に見舞われ、丁度その時他の子ども達や大人達から離れたところにいた、あのお堂に避難していた他の7人の親達もそうだ。

吹雪が止んで、先生や親達が点呼を取ったら人数が足りない、いないのは誰だ、探せ探せて大人達は躍起になって、他の子ども達も不安になって、それでも何処を探してもいなくて、きつと全員の顔は真っ青になっていただろう。

太一とヒカリのお母さんはお手伝いのために来てくれたけれど、他の子ども達の両親は忙しかったり、都合が合わなかったりで来られなかった人もいる。

子ども達の安全を護らなければいけなかった大人達は、一体どういう心境だったのだろうか。

親御さん達に何と説明すればいいのだろう、と頭を抱えていたに違いないだろうが、こればかりは不可抗力としか言いようがなかった。

大事なお子さんが、突然の吹雪で行方不明になりました、大変申し訳ございません、なんて言葉では済まされない。

方々探し回って、それでも見つからなくて、警察に連絡をした後とかだったらどうしよう。

何処を探しても見つからなかった息子が、たった1人で、しかも変な生き物を抱えてひよっこり帰ってきた、なんて誰が信じられるだろうか。

今まで何処にいた、ヒカリは？他の子ども達は？

そう尋ねられるのは、絶対に避けられない。

何と答えればいい？

吹雪のせいで方向感覚が分からなかったとか？

それとも莫迦正直に、異世界に行つて冒険してきたと言おうか。間違いなく病院に突っ込まれるだろうから、流石にそれは出来ない。

考えなしの太一でも、それは理解できる。

そう思ったら、ドアノブに手を伸ばせない。

タイチ？ってコロモンが心配そうに見上げてくるが、構ってやれる余裕がなかった。

再度、表札を見る。

何度見ても、表札には太一の苗字である八神の文字が書かれているだけだった。

その下には、母が買ってきたアイスクリーム型の飾りがぶら下がっている。

父と2人でよく分からんセンスだ、と半目になったデザインだから、間違いなく、ここは太一の家だ。

……でももし、そうじゃなかったら？

子どもが2人もいなくなった両親が失意の末、ここにはいたくないと引越していたら？

東京に出たがっていた地方の親戚に、ここを譲っていたら？

『……タイチ？だいじょうぶ？』

そんなことをごちゃごちゃと考えていたら、コロモンが声をかけてきた。

我に返った太一は、それだけで安堵してしまった。

自分の世界のはずなのに、常識から外れた冒険と戦いを経験したせいで、1人ぼっちになってしまったような感覚に陥っていたが、コロモンがそれを否定してくれた。

少なくとも、ここに太一を知っている者が存在している。

大丈夫、自分はここにいる。

八神太一はここにいる。

太一は深呼吸をして、意を決してレバー型のドアノブに手をかけ……はたと気づいた。

「鍵……母さんが持ってた」

太一の両親は共働きた。

だから普段は身に着けている家の鍵を、母と一緒にだからとサマーキャンプに出掛ける時は置いてきてしまった。

小学生にとっては夏休みであつても、社会人の父に夏休みは存在しない。

サマーキャンプの当日だつて、お父さんは寝坊して慌ただしく身支度をして、行ってきまーすつて元気よく出て行った。

それはつまり、家は無人であるということの意味する。

お母さんがいるからいいや、つて太一は鍵をポケットやリュックに入れずに、出かけてしまったのだ。

念のためレバーを下げようと試みるが、当然開くはずもない。

拍子抜けした太一は、とぼとぼとした足取りで、元来た道に戻つていった。

どうしたのタイチ、はいらないの、つてコロモンが心配する声に返答する気力もない。

あれだけ緊張していたのが莫迦みたいで、何も考えられなかった。

「……どうすつかなあ」

エレベーターで下に戻り、エントランスを出て、マンションの敷地を繋ぐ階段に座り込む。

コロモンをクッションのように抱きかかえ、太一は深い深いため息を吐いた。

決心が呆気なく崩れ去つてしまい、途方に暮れる。

鍵がないのでは、家に入ることも出来ない。

そもそも時間が沢山経過していて、両親がそこにおらず他人が住んでいるのなら、鍵を持っていても不法侵入になってしまう。

自分達の世界に戻つてこられたのはいいが、ここが本当に自分の知っている世界なのかが分からない。

分からないから、確かめられない。

頭を抱えて黙り込んでしまった太一に、どう声をかければいいのか分からず、コロモンもしゅんとなるしかなかった。

「……太一くん？」

そんな太一に、声をかけてきた者がいた。

項垂れた太一は、自分の名前を呼んでくれる者がいたことに、弾けるように顔をあげた。

コロモン以外に、自分を知っている者がいる。

そのことに驚き、歓喜し、顔をあげてそれが誰なのかを確認した。

「……ジュンさん？」

数段上から自分を見下ろして呼びかけてくれたのは、自分を慕ってくれる後輩の姉で、1つ上の6年生の、本宮ジュンだった。

本宮家は八神家と同じ敷地にある、別の棟のマンションに住んでいる。

そのため、学校に行くときは敷地内で待ち合わせをして、一緒に登校するのが日課になっていた。

たまーに大輔と太一のどちらかが寝坊をして、時間通りに待ち合わせ場所に来た方が迎えに行く、と言うこともあり、互いの家の場所は知っていた。

ただ、大輔が太一達の家遊びに来ることはあっても、太一やヒカリが大輔の家遊びに行くことはなかった。

ヒカリが何度か大輔くんのお家に遊びに行きたいとお願いしていたのだが、その度に大輔は何かと理由をつけて八神家の方に行ったり、外で遊ぶことになる。

どうしてかなあ？って首を傾げるヒカリに、お家のことは人それぞれよって母が苦笑していたのを思い出しながら、太一はジュンを見上げる。

「どうしたの、太一くん。何でここに？って言うか、あれ？サマーキャンプに行ってたんじゃない？」

「えっ、あつ、あの、えつと……」

まさか知り合いに会うなんて思ってもいなかった太一は、ジュンからの質問に答えることが出来ずに、ただあわあわするだけだった。

ジュンの疑問も尤もである。

だって今日、ジュンの弟は子ども会のサマーキャンプに参加をして

いて、数時間前に行ってきまーすって家を出て行ったばかりだ。

朝ちよつとしたいぎこぎがあつたものの、それでも大好きなヒカリちゃんと尊敬する太一先輩と一緒にサマーキャンプをする、っていう楽しみで、1カ月も前から指折り数えて今日と言う日が来るのを待っていたのだ。

ジュンは用事があつてキャンプの参加は見送つたが、何故サマーキャンプに参加して、ここにはいないはずの太一がここにいるのか。太一はしどろもどろになり、目を泳がせ、口籠らせながら、ふとあることに気付いた。

ぽろ、と膝に抱えていたコロモンを落としながら立ち上がり、太一はジュンに駆け寄る。

いて、と言いながらコロモンが階段を転げ落ちたのも、お構いなしだった。

「あ、あの、ジュンさん！今日って何年の何月何日ですか!？」

「……はあ？」

サマーキャンプに出掛けたはずの太一が何故かここにいて、しかも突然変なことを訪ねてくるのだから、ジュンのその反応も当たり前だろう。

しかし必死になってジュンに縋りついてくる太一の様子が尋常ではなかったため、戸惑いながらもジュンは答えた。

「せ、1999年の8月1日だけど……」

「時間はっ!？」

「12時20分……」

そして太一は、やつと思ひ出すのだ。

変異してしまったデビモンを、エンジエモンの命を犠牲にして、やつとの思いで倒した後のことだ。

ゲンナイに呼び出された子ども達は、アンドロモンがいた工場に行き、そこで初めてゲンナイと邂逅した際に色々と質問をした。

デジタルワールドとは何なのか、デジモンとは、何故自分達はデジタルワールドに召喚されたのか、デジタルワールドを覆う闇とは何なのか、それから……時間経過のことも。

——そうだ、ゲンナイさん言つてたじゃねえか。デジタルワールドと俺達の世界じゃ時間の流れ方が違うって

デジタルワールドで幾ら過ごそうが、現実世界ではほんの数分しか経っていない。

それはつまり、太一のお家はこのマンションの1306号室のままだし、両親は何処にも行っていない、と言うことだ。

安堵から、太一はその場にへなへたと崩れ落ちてしまった。

太一くん!?!とジユンは慌てて膝をつき、放心している太一の顔を覗き込む。

その時だ。

『タイチイ、おっことすなんてひどいよお』

「……………へ?」

「あ」

座り込んでいた太一のクッションをしてやっていたというのに、太一は突然立ち上がって落とした挙句、いたいようつて嘆いているのに無視されていたコロモンが、抗議の声をあげた。

コロモンが怒るのも無理はないが、タイミングが悪かった。

ぷんぷんと可愛らしく怒りながら、ボールみたいな身体を跳ねさせて太一の下にやってきたコロモンを見て、ジユンは硬直した。

放心していた太一は、コロモンが話しかけたことによつて我に返り、慌ててコロモンを抱きかかえる。

2カ月近くもデジモン達と共にいたことですっかり忘れていたが、本来コロモンはこの世界の生き物ではない。

暗黒に浸食されたエテモンに、巨大な力をぶつけたせいで歪みが生じ、巻き込まれる形で現実世界に飛ばされてしまっただけだ。

だから先ほど公園で幼児に泣かれてしまったのだし、行き交う人達からも不審な目で見られたのだ。

その時にちゃんと、人前では喋るなど言い含めておけばよかった、と後悔するがもう遅い。

コロモンが思いつきり喋っているところを、ジユンにばっちり目撃されてしまった。

どうしよう、何と言って誤魔化そうか……。
ぐうううううううううう……

不意に、低く空気が抜けるような音がした。
へ？と太一とジュンの目が点になる。

その音は、何かが発射したり、崩れたりするような、深刻な音ではなかった。

何故ならその音は太一が抱きかかえているもの……コロモンから聞こえてきたからだ。

ぐうううううううううう……

『……おなかへったあ』

「お前な……」

それは、コロモンの腹が鳴る音だった。

顔だけしかないのに腹が鳴ると言うのはどういうことだ、という疑問は置いておくことにしよう。

頭部のひらひらした触覚から力が抜け、弾力のある柔らかい身体が、アイスクリームが溶けるみたいになんかへんやへんやになる。

通常、デジモンは1度進化をすると滅多なことでは退化をしないのだが、選ばれし子ども達のパートナーとして宛がわれたデジモン達は、その特殊性から時間をかけずに一瞬で進化をすることが出来る。

代償として、長時間その姿を維持することが出来ずに成長期の姿へと戻ってしまい、更に膨大なエネルギーを消費することで通常よりも食欲が旺盛になる。

コロモンはつい先ほど、成熟期の更なる先である完全体と言うデジモンに進化を遂げたため、普段よりも更にエネルギーを消費してしまっている、幼年期まで退化をしてしまった。

むしろ今まで腹が減ったと騒がなかった方がおかしいぐらいだ。

『ねえ、タイチィ。なんかたべたいよお〜』

「ちよ、待って。今はヤバいって！さっきのこと、忘れたのか？」

『そんなこといったってえ〜』

太一は何とかコロモンを宥めようとするが、食欲魔人と化してしまったコロモンを大人しくさせることは不可能に近い。

おなかすいたくなんかたべたいよおくねえタイチイく、つてコロモンはジュンの目も憚らずに、太一の胸にぐりぐりと身体を押し付ける。

どうしよう、今から誤魔化すには遅すぎる。

暑さから流れる汗とは違う汗が、額から流れてきた。

そんな太一を見て、目を点にしていたジュンは……ぷすりと吹き出した。

「うち、来る?」

「……………はえ?」

本宮ジュン

はい、と手渡されたのは、先ほどジュンが買ってくれたコーラだ。ありがとうございます。って太一は受け取り、プルタブを起こす。ぷしゅ、と言う空気の抜けるような音がして、薄い金属の蓋が開けられた。

口をつけて、一気に煽る。

ごく、ごく、と流し込めば、液体に混ざった泡が口の中で弾け、ピリピリとした刺激が喉を通っていく。

「……っ、ぷはあっ！はあー、生き返る！」

久しぶりのコーラに、太一はようやくと一息つけた気がした。

お腹が減ったとごねるコロモンを宥めるためには、手っ取り早くご飯を食べさせるしかない。

しかし家の鍵は母が持っているし、その母は今キャンプ場にいる。母が鍵を持っているから自分は持つてこなくてもいいか、と横着したせいで自分の家の鍵は持つてきていない。

だから家に戻って、コロモンに何かを作ってやることが出来ない。

お金もないから、コンビニで何かを買ってやることも出来ない。

だからジュンが、家に来るか聞いてきてくれたのは、とても有難かった。

今日の夕方から用事があるジュンは、子ども会のサマーキャンプに参加していない。

お姉ちゃんも一緒だったらよかったのに、とキャンプ場に行く途中のバスの中で、大輔がぼやいていたのを太一は思い出した。

夕方まで時間があるし、お母さんは大輔と一緒にキャンプ場に行つ

てしまったので、明後日までのご飯等はお母さんが買いだめしておいたものや、置いておいたお金で買ったたりしておくようにと言われていたので、今日の昼はコンビニで済ませようと思い、外に出たところだったらしい。

渡りに船だ、と太一はこの偶然に感謝をした。

だから、代わりに昼食を作ることを提案した。

「え、作るって……太一くん、料理するの？」

「ええ、ほら、うち共働きなんで……今の大輔やヒカリの歳ぐらいから、目玉焼きぐらいなら作ってましたよ」

「はえー、つまりお母さんのお手伝いか。偉いねえ。アタシもそのぐらいならするんだけどさ、面倒くささが勝っちゃって……」

「分かります。食材切ったり洗ったり、調理器具出したり、調味料出したりって面倒つすよね」

年上の丈にさえタメ口をきく太一が、少し崩し気味とは言え、ジュンに敬語を使って話している。

太一の性格を知っている人間なら、まず敬語を知っていたのかということで驚きそうだが、しかし相手がジュンだと分かれば納得するだろう。

何せジュンは、お台場小学校では知らぬものがない有名人なのだ。

女子からは憧れの眼差しで見られ、そして男子からは恐れられ、遠巻きに見られている。

ジュン本人は全くそんなものを気にしていないし、太一も彼女の弟である大輔と顔見知りであるため、他の男子と比べれば耐性はある。……それでも、彼女の「あんな姿」を目の当たりにすれば、誰だつて無意識に背筋が伸びるだろう。

太一がジュンに対して崩した敬語を使うのは、そのためだ。

『タイチィ〜』

「あーごめん、ごめんージュンさん、ちよつと急ぎましようか」

「あはは、そうだね。でもコロモンくん、お店ついたら大人しくしててね。お家着くまでお喋り禁止」

はあくいい、とジユンの言葉に、コロモンは素直に返事をした。

太一は、ほっと胸を撫で下ろす。

どうやらジユンは、コロモンを受け入れてくれたらしい。

先ほどの公園のように拒絶されたらどうしようと思っていたが、最初こそ目を点にして思考が停止してしまっていたようではあるものの、太一とコロモンのやり取りを見て、害はないと判断してくれたらしい。

この器の大きさは、流石は大輔の姉と言ったところか。

「ジユンさん、何か食いたいもんあります？」

「ん、コンビニで済ますつもりだったから、これと言ってリクエストがないなあ……太一くんの得意な料理でいいよ」

それを言われると困る。

難しくもないもの、一般家庭で作られるような料理なら一通り作れるし、お金はジユン、と言うより本宮家から出るので、好き勝手することは出来ない。

どうしたものか、と考えて……はた、と思い至った。

「ジユンさん」

「ん？」

「卵料理、平気ですか？」

本宮家の部屋は、同じ敷地内ではあるが、八神家とは別の棟のマンションにある。

だから学校から帰った大輔とヒカリは、ただいまーってランドセルを部屋に放って、とんぼ返りするように外に飛び出していき、しよっちゅう敷地内で遊んでいた。

サッカークラブの活動がある時は、太一と大輔がボールを追いかけるところを、ヒカリとジユンがお喋りをしたり、応援をしたりしながら観戦する。

大輔とヒカリの仲がいいから、太一とジユンの会話も必然的に多く

なるのだが、こうして本宮家にお邪魔をするのは初めてだった。

別棟とは言え、同じマンションだから、部屋割りなどが違っているわけではない。

それでも、大輔は八神家にしよつちゆう遊びに来ているのに、太一やヒカリは本宮家には行ったことがない。

テレビゲームも嫌いではないが、どちらかと言うとアウトドア派の太一は、全く気にしたことはなかった。

大輔も太一と同じで、外で遊ぶ方が好きだし、太一の家遊びに行っても少しゲームをしただけで、やっぱり外に行こう、というのがお決まりのパターンになっていたからだ。

チン、とエレベーターが到着の音を告げる。

エレベーターを降りて、左に曲がる。

八神家はエレベーターを降りて右に曲がり、奥から2番目の部屋だが、本宮家も同じ奥から2番目の部屋のようだ。

ビニール袋を揺らすジュンの後を追いながら、太一は初めて来る後輩の家に少しだけドキドキしている。

学校の先生の度肝を抜いたパンクファッションのパンツから、アクセサリーの鈴をつけた鍵を取り出した。

鍵穴に差し込み、90度捻ればカチリと言う音がした。

ドアを開ける。お昼を買うためだけに外に出たから、クーラーを消さなかったのだろう、ひんやりとした空気が一気に溢れてきた。

久しぶりの文明の利器に感謝と感動をしながら、太一はおずおずとした足取りで部屋に入った。

「お邪魔しまーす……」

「遠慮しないでいいよー」

食材が入ったビニール袋を揺らしながら部屋へ入っていくジュンの後を、太一はコロモンを抱えながら慌てて追いかける。

玄関から入ってすぐの左手には、カウンター型のキッチンがあり、左手には洗面所兼風呂場がある。

太一の家のもとは違うソファード配置のリビングダイニング、その奥には太一の家だったらお父さんの書斎である部屋があるが、本宮

家ではどうなのだろうか。

それから洗面所兼風呂場と同じ面に、ドアが2つ。

こちらはそれぞれ両親と、子ども部屋となっているのだろう。

ドアを閉め、鍵をかけて靴を脱ぐ。

家の時のように脱ぎ散らかしかけたが、ここは後輩とは言え初めて来るお家だ。

母に知られたら拳骨を落とされそうなので、きちんと揃えてからリビングダイニングに向かう。

ジューンはキッチンに向かうと、ビニール袋から食材を取り出した。それからフライパンやサラダ油、ボウル等を取り出し、キッチンの入り口で佇んでいる太一に声をかけた。

「太一くん」

「うお、はい！」

「何、ぼーっとしちやって。あ、そっか。太一くん、うちに大輔のこと迎えにきたことはあっても、遊びにきたことはなかったよね。どう？って言っても、同じマンションだから間取りとか同じだし、感動も何もないか。それより準備できたからさ、オムライス作ってよ。うちのお母さんもお父さんも忙しくて、そんな洒落たもん、なかなか作ってくれないんだよねえ」

昼食は、オムライスになった。

家族の中でお母さんの次に料理が出来る太一の得意な料理は、卵料理だ。

初めて目玉焼きを作った時、お母さんもお父さんも妹も、美味しい美味しいって喜んでくれたのが嬉しくて、もつと喜んでもらいたくて卵料理を頑張った。

以前フアイル島で、冷蔵庫に入った卵を見つけた時も、その腕をいかになく発揮し、更に太一以上に料理上手な治にも習って、レパートリーを少しだけ増やした。

そのうちの1つが、オムライスだ。

何度作っても卵がふわふわにならないし、形が崩れてしまう、と卵料理を作っていた時に治に愚痴ったら、コツを教えてくれたのだ。

あの時はオムライスのライスがなかったから作ることはできなかったため、今回がぶっつけ本番だ。

上手くできなかつたらごめんなさい、と素直に謝りながら、太一はコロモンをリビングのソファアールに置いた。

「すぐ作るから、ちよつとここで待っててな」

『はあい』

パタパタパタ、と小走りでキッチンに向かう。

ジュンは太一の手伝いをするつもりらしく、キッチンでござござと何かをやっていた。

ぐううううううううう……

本日何度目かの、腹の虫が鳴る。

キッチンでそれを聞いていた太一とジュンは苦笑しながら、もう少し待ってて〜と言ってきた。

『……………』

ころん、とコロモンはクッションの効いたソファアールを、手持ち無沙汰に転がる。

カツン、と軽い音が幾つか聞こえて、それからリズムよく何かをかき混ぜるような音もした。

パタパタと忙しく歩き回る音。

しかしそれらに耳を澄ませてみても、コロモンの空腹は誤魔化せない。

膨大なエネルギーを消費しながら完全体への進化を遂げたせいで、成熟期の姿を維持できずに幼年期まで退化、失った分のエネルギーを補給したくて、コロモンの腹はひっきりなしにご飯をせがんでいる。

はやくたべたいなあ、おむらいすっていうのがどうなのかよくわかんないけど、おいしいのかなあ、って考えれば考えるほど、お腹の虫が激しく鳴り響く。

その度にジュンはクスクスと笑い、太一は恥ずかしそうに俯くのだが、ソファアールからは死角になっているせいで、コロモンには分からない。

目を閉じて何とか空腹を誤魔化そうとしていたら、不意に甘い香り

が漂ってきた。

パチリ、と大きな赤い目を開けて、何処からその匂いが漂ってくるのか見回す。

ベランダ側は一面がガラス窓になっており、向こう側にはレインボーブリッジと呼ばれる大きな橋が見える。

が、景色に興味はないので、コロモンはさっさと窓から目を離し、漂ってくる匂いの元を辿るように、くんくんと嗅いだ。

そしてコロモンは、ソファアの正面の2つある扉の間に、太一の腰辺りまでの高さがある棚と、その上に高さ45センチぐらいの、大人が抱えるのがやっととぐらいの大きさの箱があった。

ただの箱ではなかった。

何かを仕舞う、と言うよりも祀るように両開きの扉があり、その中に座っている小さな人形のようなものと、黒い板、何かの絵、光子郎のパソコンから出てくる「ごはん」を入れている器に似たものが、色違いで2つ置いてあった。

でもコロモンは、その箱には興味がなかった。

それよりも興味を引くものが、箱の前にあった。

ぴよん、とソファアから飛び降りる。

腹が限界まで減っていたコロモンは、ここが何処なのかも我も忘れて、「それ」に飛びついてしまった。

ガシャーン!!

「はっ!?!」

「え、何っ!?!」

丁度3人分のオムライスが出来上がったところだった。

鶏肉のこま切れを焼くぐらいなら出来る、というジユンに鶏肉を任せ、太一は他の作業をする。

レトルトのご飯をチンして、ボウルに移し、ケチャップをかけてかき混ぜた。

冷凍のグリーンピースとコーンは、自然解凍をしている時間はないので、少し邪道だがこちらもレンジでチンをして、ケチャップライスに入れて混ぜ込んだ。

本当はちゃんとフライパンでやりたかったのだが、ここは他人の家だし、そもそも太一は現時点でここにいるはずがないので、仕方がない。

卵は2つずつ割って、慣れた手つきでかき混ぜる。

温めたフライパンに流し込み、取っ手を掴んで流した卵を広げるように、ぐるりと回した。

菜箸で適当にかき混ぜた後、火を止めた。

取っ手を再び手に取り、手前に傾ける。

取っ手を持っていた手の手首を、もう片方の手でトントンと叩く。

その振動で広がっていた卵が少しずつ寄っていき、オムレツが出来上がった。

鶏肉も、少しだけ焦げたが問題ない。

ジュンは舌をぺろっと出して誤魔化していたが、太一も昔はよくやったので、苦笑するだけにとどめておく。

出来たオムレツを、皿に盛りつけたケチャップライスに手際よく乗せ、中心に包丁で切れ込みを入れれば、オムレツが左右に広がり、ケチャップライスを包んだ。

それをあと2回、こちらも手際よく作る。

1回目よりも上手くいったので、これはコロモンとジュンさんにあげよう、とダイニングに持って行こうとした時に、それは聞こえた。

「……ああーっ!!何やってんだよ、お前!」

オムライスが乗ったお皿を持ったままキッチンから出てみれば、ソファーにいたはずのコロモンがいつの間にか移動し、棚の上にある小さな箱に飛びついていたのだ。

いや、正確には、その箱の前に置かれている、フルーツにかぶりついていた。

オムライスをダイニングのテーブルに置いて、慌ててコロモンのところへ駆け寄る。

そして、コロモンのでかしたことに気づき、さあっと顔を青ざめさせた。

「ばっか、お前!やめろっ!食うな!」

『だあつてえ〜もうおなかペコペコだよ〜』

「だあーっ！言いながら食うなつての！それは食っていいもんじゃねえー！」

『んえ？』

「食うなつちゆうに！これはお供え物だ！お前が食っていいもんじゃねえのっ！」

『オソナエモノつてなに？』

「神様とかにあげるご飯みてえなもんだよ！食べたいんだつたら、くださいってしなきゃいけないのっ！……ああ、リンゴ全部食っちゃみやがって……ジュンさん、すみません……」

リンゴとバナナと桃が置かれていたのだが、コロモンはリンゴをペロリと食べてしまったようだ。

空腹だったところをほったらかしにしてしまったのは、申し訳なかったとは思うが、それにしたつて他人のもの食うなよな、と言うと、なんで？と澄んだ目で返されてしまった。

だつてそこに置いてあつたのだ、だつたら食べるだろう、とコロモンは至極当然のように言うので太一は面食らつたが、よくよく考えたらデジタルワールドではそうやって過ごしていた。

ゲンナイから食べ物サポートがあるまでは、そこら辺に実つていた果物や木の実を取つていたし、コロモンが人間界の理やルールを知るはずがないので、それは仕方のないことだつたのだ。

だがそうだとしても、これはやってはいけないことであるので、太一はコロモンにこれ以上は食べるなどだけ言つて、ジュンに謝罪する。

いいわよ、つてジュンは笑つた。

「それ早めに食べなきゃいけないかつたし、何か言われたらおやつ代わりに食べたとも言つとくわ。もしオムライス足りなかつたら、それも食べていいから」

『いいの!?!』

「おつまえ、少しは遠慮しろっ！つて、あー！しかもお前飛びついたから、仏壇もひっくり返つちやつてるじゃんか！つたくよー……」

よくよく見れば、その小さな箱は仏壇だった。

太一とヒカリのお祖父ちゃんお祖母ちゃん家にあるような、大きくて立派なものではなく、マンション用の小さな仏壇だ。

コロモンが飛びついたせいで仏壇にあった位牌とお鈴、それから写真立てが落ちていた。

線香立てがひっくり返っていないのは、不幸中の幸いだった。コロモンを放るようにどかして、ジユンと太一は2人で落ちた仏具と写真立てを拾う。

ジユンは位牌とお鈴を元の位置に戻し、太一は写真立てを手にとったが、再びカシャン、という落ちた音がした。

コロモンが落とした表紙に、写真立ての押さえが緩んでしまったように、バラバラになってしまった。

ひらひらと舞った写真を慌てて手に取る。

ぱし、と何とか掴んで写真立てに戻そうとして……書かれている文字に気付いた。

“ジユン 1歳”

太一は硬直する。

通常、仏壇に写真が飾られているということは、その写真は故人のものということの意味する。

生きている人間を仏壇に飾ることは、まずありえない。

フルーツに目が行っていたコロモンは当然、写真など興味なかったし、太一も写真立ての表の部分が床に面していたため、写真に写っている人物を見ていない。

大輔の近親者が亡くなったのを飾っているのだろうか、程度にしか思っていなかったのだが、裏に書かれているその名前は、間違いなく隣にいる彼女の名前だ。

——— どういうことだ？

狼狽える太一に気付いてコロモンが声をかけてくるが、太一は聞いていない。

す、と手に持っていた写真が消える。

いや、消えたのではない。

誰かにとられたのだ。

誰に？ここにいるのは太一とコロモンと、もう一人しかいない。

太一はゆつくりとした動作で顔を動かし、隣にいる人物を見やる。

その人……ジュンは、何でもないように写真立てを拾い、写真を仕舞って仏壇に収めた。

その写真には、ジュンや大輔が赤ん坊の時こうだったのだろうか、と思うぐらいそっくりな女の子が、笑顔で写っていた。

「……さ、オムライス冷めちゃうよ。食べちゃお」

お鈴を鳴らし、両手を合わせて軽く挨拶をして、ジュンはまた何でもないように立ち上がる。

びつくりするぐらい、いつも通りのジュンだった。

ジュンに声をかけられたことで我に返った太一は、コロモンを引っ掴んで慌ててダイニングのテーブルに向かい、ジュンの向かい側に座る。

無作法だが、コロモンの姿では椅子に座って食べられないので、テーブルに置かせてもらった。

大きな大きなオムライスに、コロモンの目が輝く。

いい？いい？たべていい？って涎をダラダラ垂らしながら見上げてくるその姿は、パニックに陥りかけた太一を正常に戻すには、十分だった。

「んじや、いただきますーす」

『まーすー！』

「……いただきます」

言うなり、コロモンはオムライスにかぶりつく。

ご飯や卵が飛び散るぐらいかぶりつくものだから、太一は落ち着いて食えと苦言を呈した。

そんなコロモンが、まるで弟と重なって見えたのか、ジュンはいっぱい食べなおおらかに言いながら、オムライスを一口食べた。

「……んーおいっしーえ、やば。お母さんやお父さんが作るのより、美

味しんだけど！」

「え、そ、そつすか？よかった。実はあんだけえばつてたけど、オムライス作んの初めてで……」

「えー、うっそ！初めてでこんな上手にできんの？はー、やっぱ年季からして違うわねえ……」

言いながら、ジュンはパクパクとオムライスを食べ進めていく。顔を綻ばせながら食べるその様は、いつものジュンだ。

お休みの日にお昼を忘れてみんなまで遊んで、太一のお母さんに時々ご飯を食べさせてもらう時と、同じ顔だ。

美味しい美味しいってあまりにもいつも通りで、太一は拍子抜けする。

『……タイチ、たべないの？』

あまりにもぼーつとしていたからなのか、コロモンが手つかずの太一のオムライスを見ながら、そんなことを聞いてきたので、太一も慌ててオムライスを食べた。

ちえ、つて残念そうな舌打ちが聞こえた気がしたが、無視をしておく。

スプーンで掬い、口の中に入れる。

ふわふわの卵と、ケチャップが絡んだご飯が絶妙に混ざり合い、我ながら美味しい、と自画自賛したいところだ。

……でも今日は、どうしてもそんな気になれない。

ヒカリやお母さんがいないから？

自分の家じゃないから？

いや、どれも違う。

理由は、解っている。

「……………」

「……別に、聞きたいなら聞いてもいいよっ」

スプーンを咥えたまま黙っている、というとても分かりやすい太一の態度に、ジュンは苦笑しながらそう言ってきた。

ビクリ、と太一は大袈裟な程に跳ねながら、何で、とかどうして、とか口籠っている。

何故自分の考えていることが分かったのだ、とでも思っているのだろうか。

知り合ってまだ1年しか経っていないが、太一の人となりを知るには十分の年月だ。

オムライスを食べる手を止めず、お母さんがいたら絶対叱られるポーズをとるジюнに、太一は意を決して訊ねた。

「……あの、写真の子どもは……ジюнさん、じゃない、ですよね」

「当たり前でしょ。仏壇に飾ってあるんだから。あれは、アタシと大輔のお姉ちゃん」

パクリ、とオムライスを一口。

え、って太一とコロモンはジюнを見やる。

「生きてたら中学2年生かな。アタシの2個上だから。でも死んじゃったの。お姉ちゃんが1歳の時に」

「……………」

「原因は、よく分かんないや。なんか乳幼児にはよくあることだったみたいなんだけど、お母さん、自分が目を離したせいだつてすつごい自分を責めちゃつて。それだけならまだいいんだけど、普段全く絡まない親戚連中が、こぞつてお母さんのこと責めてね。お父さんも頑張ったんだけど、お母さん、どんどんダメになっちゃつてさ」

「……………」

「立ち直るのにすつごい時間かかったんだけど、ある日妊娠してることが分かつて。それで、今度こそ死なせない、死なせたくない、何があつても護ろう、つて思つて、それで死んだ子の名前を次の子につけたの」

それがアタシ、とジюнはあつけらかんと言いつつ放った。

ぱく、ともう一口入れ、噛みしめるように咀嚼する。

「笑つちやうでしょ。アタシの名前は、アタシのものじゃないの。アタシが持っているものも、お母さんやお父さんに買ってもらったものも、アタシのじゃないの。全部全部、お母さん達が『ジюнお姉ちゃん』にあげたかったものなの。お母さんがアタシにしてくれることは、全部『ジюнお姉ちゃん』にしてあげたかったもの。アタシのも

のは、何1つないの」

ジュンがそれを知ったのは、去年の今頃だったそうさ。

お母さんに頼まれて、仏壇の掃除をしていたのだが、掃除のためにどかしておいた位牌と写真立てを、肘にぶつけて落としてしまったらしい。

その時、大輔はヒカリとだったか、他の友達とだったかと遊びに出かけていていなかった。

怒られないうちに片づけてしまおう、と慌てて拾い上げた時、同じように写真立ての蓋が外れてしまい、写真がひらりと舞い落ちた。

そしてジュンは、自身に隠された秘密をその時知ってしまった。

「……………」

太一は、何と言ったらいいか分からなかった。

こう言う時、何と声をかけるのが正解なのだろう。

一年以上も付き合いがあつて、一緒に遊ぶことも多かった友人の、知られざる一面を垣間見てしまった心情を、どう伝えればいいのか。

太一は自分で作り、一口しか手を付けていないオムライスを見下ろす。

タイチ？つて心配そうに声をかけてくるコロモンの言葉も、太一には届かない。

「…………大輔、は、そのこと…………」

「知ってるわよ。教えるつもりはなかったんだけど…………」

自分の秘密を知ってしまったジュンは、お母さんやお父さんに問いただす勇気はなく、かと言ってこれまで通り接すること難しくなった。

どうしたらいいのかわからなくて、ぐちゃぐちゃになってしまった気持ちが発散することも出来ずに、大輔を連れて衝動的に家出をしてしまったことがあったそうさ。

もう夜になると言う時間帯、夕飯の支度をしていたお母さんの目を盗んで、こっそりマンションを出て行ったジュンと大輔は、何処か知らない遠くに行くことも出来なかったので、近くの公園の遊具の中に

隠れていた。

娘と息子がいなくなったことに気付いたお母さんが、慌ててお父さんに連絡をして、お父さんが急いで帰っている間、1人で探し回った。

2時間後、空腹に耐えかねた大輔がジュンに訴えたことで、家出は終わりを迎えたのだが、探し回っていたお母さんと、急いで帰ってきたお父さんに、これでもかと叱られた。

その時に、ぐちゃぐちゃになっていたジュンの気持ちが発火して、ぶちまけてしまったのだそうだ。

その場は大輔もいたのに、大輔は何も知らなかったのに。

ジュンがこんな思いをしているのは、全部全部お母さんとお父さんのせいなのに！

叱られたことを理不尽に思ったジュンは、怒鳴るようにぶちまけた。

大輔が姉の苦悩を知ったのは、その時である。

「…………ふう、ご馳走様。美味しかったわー。満足、満足！」

最後の一口を放り込み、ニコニコと本当に倅せそうに微笑みながら、空の皿にスプーンを置いて、両手を合わせた。

一息つくようにコップの水を煽る。

「…………太一くん、食べないの？コロモン狙ってるけど…………」

結局、太一は自分が作ったオムライスを完食することは出来なかった。

食べ足りないコロモンは、口の端から涎を大量に垂らし、太一のオムライスに目が釘付けになっていたので、太一は茫然としながらもコロモンにオムライスを与える。

空気が読めていないコロモンは、わーいと言いながらオムライスに飛びついた。

よく食べるねえ、とジュンは苦笑しながら、オムライスにかぶりついているコロモンを見つめる。

「……………」

コロモンの咀嚼音以外、聞こえてくるのは窓で軽減された蝉の声だけだ。

ジユンは、オムライスを食べた余韻に浸っているのか、小さく鼻歌を歌いながら、水を少しずつ摂取している。

クーラーの効いた空間はとても快適で、つい数十分ほど前まで生死をかけた戦いを繰り返していたとは思えないほど、平穩に包まれていた。

コロモンがオムライスを平らげた頃、太一はようやく口を開く。

「……大輔が、俺達を家にあげないの、って、それが関係してるんですか……?」

「んー?多分?」

コップを置き、ジユンは振り返って仏壇を見やる。

太一もつられて、そちらに目をやった。

ようやく満腹になったコロモンは、満足そうに息を吐いて、またぐてーつとなる。

大きな口を開けて欠伸をしたから、恐らく眠いのだろう。

食べたら寝る、なんて赤ん坊のようだとジユンは笑った。

「大輔さ、アタシの名前が本当はお姉ちゃんの名前って聞いた時、すごい怒ったのよ。普段の癩癩なんか目じゃないくらい。酷いって。お姉ちゃんが可哀想だって。そんなわけで大輔はお父さんもお母さんも、嫌いなよね」

それ以来、大輔はお母さん達とまともに会話もしなくなったらしい。

事務的な会話と、うん、とか、ふーん、とか、冷たい反応ばかり返すようになった。

それまでは、お姉ちゃんのお仏壇にも毎日手を合わせていたのに、それもしなくなった。

仏壇にいるのは、確かに大輔のお姉ちゃんだけれど、それでも大輔のお姉ちゃんは今ここで生きているジユンだけだ。

お姉ちゃんが大好きな大輔は、それ以来ますますお姉ちゃんにべつたりになった。

お姉ちゃんを護れるのは自分だけだと思っているのか、お母さんやお父さんがジユンに話しかけると睨みつけるようにもなった。

お母さんもお父さんも、そんな大輔を諫めることはしなかった。

「うちに連れてきたら、お母さんとお父さんのこと嫌ってるの、バレちゃうでしょ？ そうなったら絶対、理由を聞かれる。言える？ 太一くんなら。死んだお兄ちゃんの名前をつけられたんだって」

「……………」

「アタシは大輔じゃないから、本当のところはどうか知らないけど、まああいつのことだし、概ね間違ってると思うわよ」

ジュンはコップの水を一気に煽ると、ふう、と一息ついた。

「太一くん、水のお替りいる？」

「え、あ……じゃあ、お願いします」

「はいよー。ついでにお皿片づけちゃうね」

「あ、あの、俺も……」

「あー、いいって！ 座ってていいよ。太一くん、お客さんなんだから」
オムライスまで作ってもらっておいてなんだけどき、とジュンは笑う。

立ち上がりかけた太一は、ジュンの言葉に圧されるように、脱力しながら再び椅子に座り込む。

視界に映ったコロモンは、完全に寝入っていた。

苦笑する余裕は、今の太一にはない。

今しがたジュンから聞いた事実には、頭が追いつかないのだ。

アメリカから帰ってきた本宮家と知り合って、まだ1年しか経っていないが、それなりにジュンと大輔のことは知っているつもりだった。

2人ともアメリカで育ったからか、思っていることは総て口にしなければ気が済まず、間違っていると思ったら相手が誰だろうが食って掛かる。

日本語はちよつぴり苦手だが、それをからかったりすれば英語で捲し立てられるので、今では誰もネタにしない。

好き嫌いがはっきりしていて、嫌いな相手には話しかけもしないところも共通している。

誰とでも仲良くなる人懐っこいところも、そっくりだ。

4つも歳の差があるのに、対等に喧嘩をするところも、よく目撃されている。

サッカー部で、上級生達に混じってちよこまか動き回る大輔を、ジyunはヒカリと一緒によく見学していた。

違うところも、勿論ある。

大輔は勉強が苦手だが、ジyunは成績は上位の方だ。

大輔がヒカリと一緒に勉強会をしているのを、ジyunが時々からかいながら面倒を見ている。

服装も、大輔は動きやすくしてシンプルなTシャツ短パンなのに、ジyunはパンクファッションを好んでいる。

それを着て登校してきたのを見た先生の度肝を抜き、職員室に呼ばれたこともあったが、ジyunはそんなものど吹く風、と言った態度で先生の説教も右から左へ受け流していた。

パンクファッションと言っても、髪を染めたり剃ったり、本格的なものではなく、Tシャツに髑髏が描かれていたり、肩をちよつと出している程度のものであったので、先生達も最近は諦めているらしい。

こうやって思い返せば、大輔とジyunのことについて知っていることは、沢山あった。

でもそれは飽くまでも、ある一定の方角から見ていた2人に過ぎないのだ。

だって学校での2人はよく知っているけれど、家での2人は何も知らない。

ジyunの名前が、2人の死んだ姉からそのままつけられたことも、大輔が両親を嫌っていることも……。

大輔は1度だってそんな素振りを、太一達の前では出さなかった。

(……本当に、何も知らないんだな、俺……)

きっと信頼していなかったわけではない。

大輔は太一によく似て、嘘とか人を騙すことが苦手だ。

誤魔化すのも下手で、態度や顔に出やすいのだ。

だから大輔が太一のことを、本当は嫌っている、というのは絶対に

ないだろう。

太一もヒカリも両親が大好きで、昨日はお母さんが手作りのケーキを作ってくれたとか、今度のお休みはお父さんが遊びに連れて行ってくれるのだとか、そんな他愛のない話をクラスメートとよくしている。

それが普通だと思っていたし、一緒に話をするお友達も、そういう会話でよく盛り上がっていたから、両親を嫌う子がいるなんていはずがないと思っていた。

いや、両親を嫌う子がいるという発想すらなかった。

もしもジュンから話を聞かずに、何かの拍子で大輔が彼の両親を嫌っていると知ってしまったら……きつと酷いことを大輔に言ってしまったっていたかもしれない。

「太一くん、スイカ食べる？」

ジュンは、先ほど買ったスイカを皿に盛って、キッチンから出てきた。

その顔は、いつも太一が見ているジュンの澆刺とした笑顔そのものだった。

兄と姉

はい、と満腹になったコロモンと、意識が沈みかけていた太一の前に差し出されたのは、先ほど買ったばかりで、ジュンが切ってくれた小ぶりのスイカと、氷で冷やされた水。

オムライスを2つも平らげたはずのコロモンは、目を輝かせながらいただきまーすとスイカにかぶりついた。

完全体に進化を果たしたことで、体力の消耗が著しく、成長期の姿を保てなくなってしまうことは分かっているのだが、それにしたって遠慮をしなすぎだ、と太一はコロモンを軽く小突いた。

いたいよう、と言いながらも瑞々しいスイカの美味しさに気を取られて、痛みなどすぐに忘れてしまった。

食い意地の張ったパートナーに溜息を吐きながらも、足りなくなつたパワーを補うために、いつもよりも食欲を増すのだから、仕方ないと言えば仕方ない。

『ハイヒイ！ほれ、ふつごくおいひい！』

「口にも入れながら喋んなつての」

何言ってるか分かんねえよ、と太一は自分でもよくやってお母さんに注意されていることを、コロモンに言い返してやる。

しゃぐしゃぐと夢中になってスイカにかぶりつくせいで、コロモンの大きな口の周りはスイカの汁やら果肉やらで、べっとりとしていた。

ティッシュを数枚拝借して、口の周りを乱暴に拭いてやる。

ありがとー、って言いながらコロモンは2切れ目のスイカにかぶりつく。

口の周りが再び大惨事となったので、太一は半ば諦めた。

パキ、パキ、パキ

掃除機で吸い込むような勢いでスイカを食べるコロモンが、3切れ

目に入れた時、台所の方から何か音が聞こえてきた。

まるで薄い薄いガラスの板を折っているような音で、太一は気になって立ち上がり、台所へと向かう。

「……何してんすか？」

「あ、ごめん、煩かった？」

台所に戻ったはずのジュンの姿がない、と思ったら、何故かしやがんでいた。

右手に調理用の鋏を持ち、左手には空っぽになった卵のパック。

半透明のプラスチックバッグに、細かく切った卵のパックを切り落としていく。

総て切り終わると、ジュンは鋏をスタンドに引掛、卵のパックや鶏肉が入っていたパック、レトルトご飯のパック、それから空になった冷凍野菜の袋をまとめてプラスチックバッグに入れて、持ち手のところをぎゅっと結んだ。

それを自分の部屋に持っていくジュンに首を傾げていると、ジュンは何でもないように笑った。

「証拠隠滅よ。オムライス作ってみたって言い訳は出来ても、太一くんやコロモンの分は言い訳できないっしょ？」

お母さんに追及されるのめんどいし、とジュンは自室へと入っていく。

確かに卵を3つ程使ったオムライスを3人前、10個入りの卵パックを丸々1つ使ってしまったのは軽率だったかな、と太一は思った。

親子仲があまりよろしくなくとも、最低限の会話ぐらいは交わすはずだ、これどうしたの、と聞かれても上手い言い訳は思い浮かばないので、何事もなかったかのように、証拠を隠滅してしまった方が手っ取り早いだろう。

それならば、コロモンがかぶりついているスイカの皮も隠した方がよさそうだ。

あれも、ヌイグルミのふりをしていたコロモンが、美味しそう美味しそうって目を輝かせて飛びつこうとしたのを阻止するために、ジュンが買ってくれたものである。

ダイニングに戻ると、3切れ目を食べ終えたコロモンが4切れ目に取り掛かっているところだった。

まだ食うのか、と太一はコロモンを再び小突いて、綺麗にしゃぶりつくされたスイカの皮を重ねて、ジュンのところに持って行つてやる。

「ジュンさん、スイカの皮、どうしたらいいですか？」

「明日燃えるゴミの日だから、それは三角コーナーのところに捨てていいよ。明日出しちゃうわ」

「はい」

ぼさ、と無造作に捨てて、軽く手を洗ってからダイニングに戻る。残りの皮はまた後で捨てよう、と太一は椅子に座って出された水を一気に飲み干した。

証拠隠滅のためにプラスチックのゴミを一纏めにして、自室に放り込んできたジュンが戻ってきたのは、その時である。

「……それで？」

「へ？」

ぼんやりとコロモンが6切れ目のスイカにかぶりついているのを眺めていた太一に、ジュンは話しかけてきた。

「へ、じゃなくて。どうすんの？キャンプ場に戻るの？」

「……え、と」

「何があつたか知らないけど、太一くん今お金ないんでしょ？どうやって戻るの？ってか小母さん、太一くんがこっちにいること、絶対知らないっしょ。何て言い訳するつもり？」

「……………」

考えていなかったわけではない。

ただ知らない世界から自分の居るべき場所に帰れたことが嬉しくて、頭からすっぽ抜けていたことは事実だ。

あの出来事が夢ではなかったことは、コロモンがここにいることで既に理解している。

しかし実際問題、太一は今この瞬間、ここにはいけない存在だ。暑い夏の最中、自然豊かなキャンプ場にて、季節外れの猛吹雪に巻

き込まれた太一は、他にも吹雪で迷子になった子ども達と共に、大人達の助けを待っているということになっているはずなのだ。

それが何の手違いか、デジタルワールドと言う異世界に無理やり連れてこられ、世界の救世主として祀り上げられ、デジタルワールドを単食っている闇を払うために、頼るものが何もない状態での大冒険を強いられているのである。

最初の戦いで尊い犠牲を出しながら辛くも勝利し、次の戦いでは自分の使命を改めて思い知り、それを覚悟の上で強敵に立ち向かった。

お陰で相棒は更なる進化を遂げたが、強大な力がぶつかり合ったせいで歪みが生じてしまい、太一とコロモンはそれに吸い込まれる形で、デジタルワールドから放り出されてしまった。

そうして辿り着いたのが、ここお台場である。
つまりは不可抗力なのだ。

デジタルワールドに飛ばされた時の場所なら、元のキャンプ場に戻れたかもしれないが、冒険を強いられた太一達は彼方此方巡っただけでなく、ホエーモンでも5日泳ぎ続けなければならぬ程の距離まで離れた大陸にまで、足を運ばなければならなかった。

移動した場所で異次元へと放り出されたのだから、キャンプ場に戻るはずがない。

むしろあれだけの距離を移動したのに、同じ日本の圏内で、しかも実家近くに飛ばされたのは、余程運がいいとしか言いようがないだろう。

しかし話はそれだけでは済まないのだ。

どうしよう、と太一は今更ながらに自分の立場の危うさに気付いて項垂れる。

両肘をテーブルにつき、両手で頭を抱える。

戻る？ 何処に？

キャンプ場？ デジタルワールド？

どうやって？

キャンプ場に戻る金はない。 あったらジュンに奢ってもらってないだろう。

デジタルワールドにはそもそも、向こうから引つ張られる形で行ったのだから、行き方が分からない。

と言うか、キャンプ場からデジタルワールドに行ったのだから、どちらにしてもキャンプ場に戻らなければ、行くことも出来ないのかもしれない。

……そもそも、他の子ども達はどうなっているのだろうか？

治は？空は？光子郎、丈、ミミちゃん、賢、大輔、そして……ヒカリ。

みんな戻ってきているのなら、一体何処にいるのだろうか？

妹のヒカリも、同じ敷地内のマンションに住む大輔も、こっちに戻ってきた時に傍にはいなかった。

もしかしてみんなバラバラの場所に戻されたのだろうか。

それとももうみんな自分の家に戻ってきているのだろうか。

1度連絡をした方がいいか……いや、それは駄目だ。

太一は今、自分の家ではなく本宮家にお邪魔している。

自分の家ならまだしも、他人の家から治達の家にかけて確認するのは、流石に気が引けた。

もしもみんなまだ自宅に戻っていなかった時、迷惑がかかるのは本宮家だろう。

キャンプ場に行ったはずの子どもから電話がかかってきて、しかもお宅の息子さん娘さんいますか、なんて尋ねたら、親は心配するに決まっている。

そうなればキャンプ場にいる子ども会の大人の誰かに、確認の電話を入れるだろう。

そして吹雪ではぐれた、キャンプ場の何処かにいるはずの我が子が、本宮さんのお家から電話をかけてきたことが、キャンプ場にいる母にも知られるはずだ。

戻った時にどういうことなの、って問いただされるのは目に見えている。

そもそも、治達もこちらに戻ってきている保障もないのだ。だってあの歪みに巻き込まれたのは、自分とコロモンだけ。

ピラミッドの中でゲンナイ達と待機しているはずの仲間達がどうなったのか、太一には分からないのだ。

キャンプ場には行けない、デジタルワールドにも戻れない。

抱えていた頭をあげ、太一はコロモンを見やる。

スイカを食べ終わって、倅せそうにゲツプを吐き出しながら、コロモンは仰向けに寝転がっていた。

それを半目で見下ろす太一。

コロモンがデジタルワールドへの行き方を知っている、という可能性は0だろう。

初めての出会いでも、コロモンはさっぱり要領を得ない話しかしてこなかった。

ここは何処だ、お前は誰だって聞いても、ここはデジタルワールドで、ぼくはコロモン、という答えしか返ってこなかった。

デジタルワールドはデジタルワールド、デジモンはデジモンと言う、最早哲学かと問いかけたくなるような返答に、光子郎や治が頭を抱えていたのは、記憶に新しい。

太一は再度頭を抱えることしか出来なかった。

「……うん、まあ、ゆっくり考えな」

百面相を浮かべる太一に、色々と察したジユンは苦笑いしながら立ち上がり、ダイニングと一体になっているリビングに向かう。

足の低い長方形のテーブルの上に、無造作に置かれているリモコンを手に取り、赤い電源ボタンを押す。

お留守番の心細さを誤魔化すためにBGMとしてつけていたテレビだったが、特に面白いものやっっていなかったから、11時頃には消してしまっていたのだ。

お昼ご飯を買いに出る前まで、ダラダラと漫画を読んだり、夏休みの宿題に取り掛かっていた形跡が、テーブルに残っている。

後で片づけよう、と未来の自分に丸投げして、ジユンは食べそこなったスイカの残骸を片付けようと、リモコンを置いて、テーブルに戻った。

棒付きのアイスがあつたはずだから、それでも食べようとスイカの

皮を三角コーナーに放り投げる。

皿についたスイカの汁のべたつきは、水で洗ったぐらいでは取れないので、面倒だが洗剤で洗おう。

ジュンは先ほど使ったばかりのスポンジを手に取り、洗剤を付けた。

《……8月1日、お昼のニュースです》

夏休みとは言え、それは子どもの権利であって、働いている大人達には関係ない。

子ども達が退屈しないように、昔のアニメを流したり、心霊特番を放送するのは、テレビ局に勤めている大人達の仕事だ。

また、1日中子ども達のために番組を流すわけにはいけないので、子ども達が宿題をしていたり、遊びに行ったりしているであろう時間帯に放映されるのは、当然報道番組だった。

いつもならBGMにもならない番組だが、その時だけは様子が違った。

何故ならオムライス2人前と、小ぶりなスイカを1玉近く食べて、満腹で寝こけていたはずのコロモンが、突然ガバリと起き上がったからだ。

近くで項垂れていた太一は勿論、洗い物をさっさと済ませて証拠隠滅を図ってリビングに戻ってきたジュンも、コロモンの挙動に驚いた。

「うわっ！急になんだよ、コロモン！」

『……………』

太一の抗議を無視して、コロモンはじ、とテレビの方を見ている。実家で飼っている猫のミーコがたまにやる仕草によく似ていたから、太一は何となく嫌な予感がした。

テレビを見やる。休日のお昼の時間帯で、よく見る男性アナウンサーが映っていた。

男性アナウンサーが話しているのは、連日放送している世界の異常気象についての内容だった。

「あっ！」

「え？」

太一は声を上げる。

テレビに映っていたのは、東南アジアの、とある地域の水田だった。カラカラに枯れて、網目のような罅が走っている大地に佇む陰を、太一は見てしまった。

全身が炎に包まれた人影が、膝をついてそこに佇んでいる。

しかしその場所を映しているはずのカメラマンを始め、男性アナウンサーさえもそれに気づかず、そのままニュースは続けられる。

中東のある国では水害のせいで建物が崩壊したようで、壁やガラスに罅が入って倒壊しかけていたのだが、水害だけが原因とは言えない状況を垣間見た。

何故ならそこには、暴れているシードラモンが映っていたからだ。

泥水の中から顔を、身体を起き上がらせた影響で泥水が巻き上げられ、津波のように周りを飲み込んでいく。

本宮姉弟が生まれ育った国、アメリカの都市部では、真夏にも関わらず雪が降っている。

そこに映った雪だるまは、まるで子ども達が降り積もった雪で作ったように可愛らしかったが、太一はそれがただの雪だるまではないことを知っていた。

総て太一があの世界で出会って、戦ったことがある存在だ。

どうして、と茫然とする太一に、ジユンの悲鳴が叩きつけられる。

「は、え？ちよ、ちよっと、何あれ!?何なの、あれ？」

「っ、ジユンさん？」

「え、太一くんも見たよね？炎の巨人みたいのとか、おつきな蛇みたいのとか！」

「……ジユンさんも、見えるんですか？」

「え？ってか普通に映ってたじゃん！すぐ消えちゃったけど！何でアナウンサーもカメラマンも、何も言わないわけ!？」

今年の夏は、地球全体がおかしかった。

東南アジアでは全く雨が降らず、水田が枯れ、中東では大雨による洪水が発生。

アメリカでは記録的な冷夏となった。

サマーキャンプにいた太一達は、何も知らなかった。

それが、誰も知らない世界での、冒険の始まりになることを。

でも今は違う。太一は、知っている。

あれは、あの生き物は、自分達とは異なる世界で、確かに存在している。

夢や幻なんかでは、決してない。

だって太一のコロモンは、ここにいる。

2人前のオムライスを完食し、小ぶりなスイカを1玉近くペロリと平らげ、先ほどまでご満悦で寝転がっていた、勇ましい相棒はここにいる。

つまりテレビに映り込んでいた“在れ”も……デジモン達も、いるのだ。

太一とジユンとコロモン以外に見えていない、という条件ではあるが。

「あれは……メラモンと、シードラモンと、ユキダルモン、です」

「メラ……え？」

「こいつ……コロモンと同じ生き物です。デジモン。デジタルモンスター。デジタルワールドって言うところに住んでいる、俺達と同じ、生き物です」

「……太一くん？」

「行かなきゃ……」

「え？」

「俺、行かないと。デジタルワールドに、戻らないと」

ニユースを見て、太一は理解した。

まだ終わっていないのだ。

デジタルワールドを巣食う闇は、まだ晴らせていないのだ。

そうだ、ゲンナイさんも言っていたではないか。

デビモンもエテモンも、デジタルワールドを覆っている闇のお零れを、頂戴しただけに過ぎないって。

光を、闇すら飲み込まんとする強大な暗黒から零れ落ちた力を、利

用しただけだった。

元凶たる暗黒がまだ蔓延っているのに、こんなところでぐずぐずしている暇はないのだ。

ズボンにつっかけていた白い機械、デジヴァイスを手に取る。

見下ろす。うんともすんとも言わないデジヴァイスに導かれて、太一達はデジタルワールドへと旅立った。

どうやって行けばいいのか、皆目見当もつかないが、このデジヴァイスがキーになるはずだ。

『タイチ……』

「コロモン、何とかデジタルワールドに戻る方法を考えようぜ。早いところ皆と合流しないと……」

あそこには、まだ妹もいるのだ。

パートナーのテイルモンがいるとは言え、まだ幼い小学2年生。

治や空が護ってくれているとしても、自分の妹は自分で護りたい。

「考えろ……考えろ……どうやってデジタルワールドに行く……? ここからじゃキャンプ場は遠いし……」

『ぼくがしんかして、つれてつたげようか?』

「それは駄目だ。ここじゃあデジモンって言う生き物は、間違いなく怪物扱いされる。こんな都会のと真ん中で進化なんかしたら、大騒ぎどころじゃない。俺もお前も捕まっちゃうぞ」

『じゃあどおするのお〜』

「それを今考えてんだよー」

くそっ、治がいてくれたら、すぐにいいアイデアを提案してくれるのに、と太一はその場をぐるぐる回りながら、必死に考える。

自分が何処にいるのかなんて、太一の頭からはすっぽーんと抜けていた。

「……パソコン」

「えっ？」

数分経った頃だろうか、そんな言葉が聞こえてきたのは。

コロモンと2人で声が見えれば、困惑気味の表情を浮かべながらも、真つすぐ太一を見つめているジュンがいる。

「よく分かんないけど、コロモンも、あのテレビに映ってた怪獣も、デジモン……デジタルモンスターって言うんでしょ？で、そのコロモン達はデジタルワールドってここに住んでる……デジタルって言うぐらいだし、パソコンが何か関係してるんじゃない？」

「……それだ！」

言われて思い出した。

確かゲンナイさんは、デジタルワールドはパソコンを介して現実世界と繋がっている、と言うようなことを言っていたはずだ。

太一はジユンにパソコンがあるかどうかを尋ねると、こつち、とだけ言ってテレビの横にある扉を差す。

八神家の間取りなら、父親の書斎がある部屋だ。

ジユンに案内されて通された部屋は、八神家と同じく本宮家の父親の書斎になっていた。

買ったばかりと思われる、埃を被っていないパソコンの電源を、ジユンは慣れたようにつける。

時々学校の宿題で調べものをする際に、父のパソコンを拝借することがあるので、ある程度の知識はあるそうだ。

幾つかのアイコンが並ぶモニターを覗き込む。

……ここからどうする？

太一は再度硬直する。

根っからのアウトドア派の太一は、パソコンなんて学校の授業で、しかも治や空が隣にいる状態でしか操作をしたことがない。

父親のパソコンは父親の許可が下りて、ネットサーフィンをするこゝとしか出来なかった。

光子郎はケーブルとデジヴァイスを繋げて、何やら操作していたが、機械音痴で物をぞんざいに扱ってぶっ壊す名人の太一では、どうこうすることも出来ない。

早速詰んだ、と太一は頭を抱えかけて……は、と何かに気付いた。

それまで物言わぬガラクタとなり果てていたデジヴァイスが、突如として動き出した。

ピコピコピコ、と独特の電子音を響かせ、小さなディスプレイにデ

ジ文字の羅列が次々と表示されていく。

何だ何だ、とコロモンとジユンと呆氣にとられていると、今度はパソコンに異変が起こった。

白い光を数秒ほど発すると、青緑色だったモニターに人の顔が映し出されたのである。

《太一!?!》

「っ、ゲンナイさん!!」

モニターに映っているのは、父親と同年代程の青年。

協力者であり、自分達をあの世界に呼び寄せた元凶の、ゲンナイだった。

太一の無事を知ったゲンナイは、目を見開かせ、そして安堵の表情を浮かべている。

《どうやら無事だったようだな》

「ゲンナイさん!俺、今俺達の世界にいて、何とかそっちに戻りたいんだけど、でもどうすりゃいいの……!」

《落ち着いて。大丈夫だ。デジヴァイスは持っているね?それをパソコンにかぎすんだ。少し無理やりだが、ゲートをこじ開けてこちらに繋ぐことはできるから》

「そ、か。戻れるんだな?ならいいや」

『ねえねえ、ゲンナイさん!』

《おお、コロモンか。メタルグレイモンに進化したのだから、そりゃいっつもよりパワーは消費するな。怪我とかはしていないかい?》

『ぼくならだいじょうぶだよ!それよりゲンナイさん。そっちどうなってるの?エテモンは?ガブモンたちはぶじ?』

《ああ、エテモンなら君達のお陰で、時空の歪に飲まれて消えてしまったよ。今頃デジタルワールドでも人間界でもないところを、彷徨っていることだろう。君達は運が良かった。下手をしたら日本どころか、地球でもないところに飛ばされていたかもしれないんだから》

「おい、おっさん。聞いてねえぞ、そんな話」

《おっと、失言だったようだ。さて、こちらは何とかゲートを開いたよ。準備はいいかい?》

「今の話聞いた後で飛び込みたくねえんだけど……」

「……太一くん」

は、と太一とコロモンは硬直する。

ゲンナイとコンタクトを取れた安堵感で、またもやジュンのことが頭からすっぽ抜けていた。

デジモンとデジタルワールドのことは軽く説明したが、緊急事態だったために本当に触りの部分しかジュンに説明できていないのだ。

キャンプに行ったはずの後輩が、生きている変なヌイグルミと共に戻ってきて、ご飯を作ってくれたかと思ったら、デジモンだのデジタルワールドだの、大輔やヒカリのような下級生がギリギリ許されるよな、メルヘンチックな言葉を口にして、パソコンを貸してくれと血相を変えて詰め寄ってきたのだから、ジュンとしては訳が分からないだろう。

コロモンのことをあつさりを受け入れてくれたから、今更隠すのも何だかなあと唸っていると、やがてジュンの方から、ふう、という溜息が漏れたのが聞こえた。

「……君が何をしようとしてんのか、そのコロモンとか、さっきのデジモンとかデジタルワールドだとか、色々聞きたいことはあるけど、今はやめとくわ。何か緊急事態みたいだし。だからさ、これだけ教えて」

大輔は、無事？

ジュンは真つすぐ太一を見やりながら、そう尋ねてきた。

「アタシはキャンプに行っていないんだから、何があつたのかなんて知らないし、知る由もないわ。でも、それ。コロモン。喋るヌイグルミで誤魔化せばいいのに、太一くんはホント嘘つくの下手だよね」

「あ、いや、えっと」

「ま、誤魔化したところで、あの食欲じゃあすぐにバレてたかもただど」

「うぐ」

痛いところを突かれた太一は、しよっぱい顔を浮かべるしかない。

仕方ないだろう、コロモンに人間の世界のことなんか教える暇もな

く帰ってきてしまったのだし、自宅に戻る気満々だったし、そもそも家に入れなかったし。

それを差し引いても、ジュンの順応性は高すぎだろうとは思うが。「今日はキャンプ1日目、今頃みんなで作ったカレー食べてる頃のはずでしょ？サッカー部で大輔や治くんと話題にするぐらい、太一くんも楽しみにしてたのに、そんなキャンプほっぽって家に帰ってくるとは思えないし。忘れ物したってんなら、まあ分からなくもないけど、この時間に取りに帰ってくる？ってか小母さんなら、忘れ物したーなんて言おうもんなら、自業自得だって返すでしょ」

「……………」

「それでも太一くんがここにいてるってことは、何かあったって考えた方が自然じゃない？」

違う？とジュンは笑った。はあ、と太一は溜息を吐いた。

完敗である。1歳しか違わないとはいえ、この短時間でそこまで見抜かれてしまったのは、もう誤魔化しようがないだろう。

そもそもコロモンのことがバレた時点で、詰んでいるのだ。

あの場で追及されなかったのは、ジュンが色々と察して空気を読んできたからである。

大人には内緒にしておきたいことがあるのなら、子どもなら考えることは一緒だ。

このコロモンはどう見ても、大人には言えない代物だろう。

それならば、言及すべき点は、それだけだ。

「全部言わなくていいわよ。でもこれだけは聞いておきたいの。大輔は無事なのかどうか。太一くんなら分かるでしょ。もし逆の立場だったら、ヒカリちゃんが無事かどうか、知っておきたいでしょ？アタシはこれでも大輔の姉ちゃんなんだから」

「…………ズルいなあ、ジュンさん」

そう言われてしまったのは、仕方がないではないか、と太一は自嘲する。

ジュンの言う通り、自分がサマーキャンプに行かずに、ジュンがコロモンを連れて帰ってきていたら、まず真っ先に何かあったのか考

え、ヒカリの安否を問うだろう。

自分の知らないところで、ヒカリが知らない世界へと旅立っていたら、太一なら自分も連れていけとジュンに無茶を言うに違いない。

ならば、ちゃんと言おう。

総てを打ち明けるには時間が足りないが、これからのためにも、ちゃんとやっておいた方がいいに決まっている。

……どう頑張ったって、ジュンは「あっち」には行けないのだから。

「とりあえず無事、ですかね。今ちよつとはぐれちゃったんで、何とも言えないんですけど。少なくとも護ってくれる奴はいるんで」

「このコロモンみたいなの？」

「……分かるんですか？」

「分かる、って言うか……まあ、少なくとも只者じゃないでしょ、この子」

動物図鑑にも載っていないさそうな、不思議な生き物。

まるでボールに入れば、ポケットサイズになっちゃうモンスターみたいな見た目のものだ、ただただ可愛いだけではないのは何となくジュンにも分かる。

「とりあえずって言う言い方が何か気になるけど、まあ言及はしないでおこうかしらね。大きな怪我してないのなら、それでいいわ」

太一の言葉で色々と察してくれたジュンは、これ以上の言及はしないでくれた。

ジュンにとって大切なのは、弟が無事なのかどうか、それだけなのだ。

どうやら太一と弟には、何か大きな使命があるようだし。

「……大輔のこと、よろしくね」

今のジュンでは、大輔に何があっても駆けつけて助けることが出来ない。

護ってやれない。

太一とコロモンと、モニターに映る男性との会話で、自分は駄目なのだと思います。

自分ではどうすることも出来ないのだ。
何とかしてくれるのは、今のジユンが頼れるのは、目の前にいる1
つ下の後輩だけなのである。

悔しいけれど、ジユンはぐっと我慢した。

唇を噛みしめて、自分も連れていけと言いたい胸の内を必死で
抑えながら、ジユンは振り絞るようにそう言った。

太一には、痛いほどにジユンの気持ちが分かる。

本当ならデジタルワールドに、一緒に連れて行ってやりたい。

大輔の無事を、ジユン自身で確認させてやりたい。

でもそれは出来ない。

ジユンは選ばれし子どもではない。

デジヴァイスもなければ、パートナーデジモンもない。

大輔を護る術がないのだ。

大輔も、今自分自身を護る術を持たない。

パートナーであるブイモンは、昔の恐ろしい記憶を引っ張り出さ
れ、心が壊れてしまい、戦うことが出来なくなってしまった。

一緒に飛ばされた仲間達がいるとは言え、仲間のデジモン達が最優
先すべきは、自分達のパートナーだ。

いつでも大輔を護ってやれるとは限らない。

「……………はい」

それでも、誰かがやらねばならない。

身を護る術がない大輔を護り抜き、ジユンの下に返してやらなけれ
ばならない。

きつとそれができるのは、太一だけだ。

大輔の先輩として、ジユンと同じく護るべき妹がいる兄として……
そして、ジユンとのこの約束を果たすため、太一は唇を引き締めなが
ら頷くこと以外、許されなかった。

「すみません、ジユンさん。突然来て、ご飯奢ってもらっちゃった上
に、何も説明できなくて。お金は帰ってきたら払います」

「別に気にしなくていいよ?」

「そうはいかないっすよ。殆どコロモンが食べちゃったんだし」

何の遠慮もなくお昼ご飯を食べさせてもらったが、そのお金を払ったのはジユン、本宮家のお父さんが汗水たらして稼いだお金だ。

のっぴきらない理由があったとは言え、ジユン一人分のお昼と誤魔化すにはお金を使いすぎた。

ジユンは自分のお小遣いから誤魔化しておく、と言ったが、それは太一の気が済まない。

だから、無事に冒険を終えて帰ってきたら、必ず返すと一方的に約束をさせてもらった。

「……俺が帰らなきゃいけない理由ができました。ジユンさん、待っててください。大輔は俺が必ず無事に連れて帰ってきます」

「……うん、よろしく」

デジヴァイスをパソコンに向ける。

目も開けられない程の眩い光が、パソコンのモニターから発せられた。

光が消え、ジユンが眩む視界から復活した時には、もう太一とコロモンの姿はなく、パソコンのモニターも通常のものとなっていた。

「……行ってらっしゃい」

祈るような言葉は、太一にはもう届かない。

狭間の世界

ぽーん、と空に放り出されたみたいな感覚だった。

本宮家のパソコンから無事、デジタルゲートを潜れた太一とコロモンは、突然の浮遊感に狼狽える。

え、何、まさかデジタルワールドの上空に投げ出されたんじゃないよな？って、白い光で眩んでいた目を開ければ、眼前に広がるのはパステルカラーのマーブル模様。

え、と太一とコロモンは硬直する。

放り出された勢いのまま、重力も風圧も何も感じることなく、太一とコロモンはマーブル模様の空間を泳ぐように飛ばされていく。

止まりたくとも太一とコロモンの身体は落ちることもなく、真つすぐ飛ばされていくせいで、どうにもならない。

何とかならないかと両手足をジタバタさせるが、飛ばされながら身体が回転するだけで抵抗にもならなかった。

タイチィ〜！って情けない声を出しながら、コロモンの丸い身体は太一の倍の速さで回転している。

「どうなってるんだよーってかここ何処だよおー！」

初めて飛ばされた時とは、何か様子が違った。

あの時は虹色だったり真つ暗だったり、とにかく不思議な空間ではあったが、こんなパステルカラーではなかったはずだ。

てつきり初めての時のような空間に飛ばされていくものだと思っていた太一は、訳が分からない。

とりあえずこのままだとコロモンとはぐれてしまいそうなので、回転しているコロモンを掴もうと必死に手を伸ばす。

上下も左右もない空間で、何処をどう向けばいいのか分からなくなったコロモンは、ただ回転していることだけは理解して、ピンクの顔を青くさせながら、おええええとか言っていた。

ここで吐くなよ、と祈りながら伸ばした腕は、悪戦苦闘しながらも何とかヒラヒラの触覚を掴み、引き寄せる。

持ち前の運動神経で何とか体勢を整えた太一は、目をぐるぐる回しているコロモンをその腕に抱きながら、空間を泳ぐ。

「コロモン、ここ何処だ？」

『わかんない……』

コロモンに問いかけるも、まだ目をぐるぐるさせているせいなのか、自分が何処にいるのか分かっていないコロモンは、質問に答えることが出来ない。

頼りねえなあ、と苦笑しながら見下ろしていたら、目を回していたコロモンが突如として正気に戻り、赤い目で正面を睨みつけた。

コロモン？と太一が声をかけると同時に、コロモンは太一の腕を飛び出し、アグモンへと進化する。

進化をして、身体の面積が広くなった抵抗力的なのか、進んでいたアグモンの身体が漸く止まった。

後ろにいた太一も、アグモンの背中に受け止められる形で止まる。

本宮家でオムライス2人前と、小ぶりのスイカー玉を平らげたお陰だろうか。

だが翠に変化したその目は、鋭く前を見据えたまま逸らさない。

もう2カ月近くもアグモンと一緒にいたから分かる。

これは、敵意を持った者が近づいている証拠だと。

パートナーの子ども達を護るためにいるデジモン達は、子ども達に敵意や殺意を向ける者には容赦がない。

敵が近づいてきているのだと悟った太一は、デジヴァイスを握りしめ、アグモンと同じように前を見据える。

ほぼ同時に、前方から高エネルギーの球体が飛んできた。

危ない、とアグモンは後ろにいる太一を横に突き飛ばし、その反動を利用して自分もその場から離れる。

ひゅーん、と高エネルギーの球体は、太一とアグモンの間を通り過ぎていく。

何だ、と思う間もなく、前方から幾つもの球体が飛んでくる。

避けることが出来ないぐらいに飛んできた球体に、アグモンの身体が再び光った。

『メガフレイム!!』

大きな炎の球体が、飛んできた球体を丸呑みにする。

しかし総てを葬ることは出来ず、幾つか取りこぼした球体が、スピードを緩ませずに迫りくる。

グレイモンはその巨体で、咄嗟に太一を庇い、球体を受け止めた。

幾つもの爆発を起こしてぶつかった球体は、グレイモンの巨体を後退りさせる。

『ぐっ……!』

「グレイモン！大丈夫か!？」

『ああ……!』

よろめいたグレイモンだったが、背後にいる太一を護るべく、かぶり頭を振って気を引き締める。

攻撃を受けて分かった。このエネルギー体は、完全体レベルのものだ。

何者かが明確な殺意を持って、グレイモンと太一を狙っている。

ぐるる、とグレイモンは殺気を抑えずに唸り、前方を睨みつけた。

『ほーっほっほっほー!』

嫌に耳につく高笑いが聞こえたのは、その時だ。

来るか、とデジヴァイスを握りしめた太一の眼前に現れたのは、下半身に幾つもの長く太いコードに絡ませ、上半身は猿の着ぐるみのような姿をした、太一達の敵だったもの。

『ここが何処だか、教えてあげましょうか?』

何で、と太一とグレイモンの目が見開かれる。

『ここはお墓よ。アンタ達のね!!』

ここにいるはずがない。だってあいつは、進化したメタルグレイモンが倒したはずだ。

「何で……何で、お前がここに……!」

『エテモン!』

『ほーっほっほっほー!ばあつかじやないの、アンタ達!』

敵は、エテモンは嗤った。

『このアチキが！スーパースターたるこのアチキが！あの程度で死ぬわけないでしょ！地獄の底から這いあがってやったわよ！アンタ達を道連れにするためにね！』

「くっ！」

『させるか！メガフレイム！』

掌に先ほどと同じ高エネルギーを集め出したので、グレイモンは技を放ってそれを阻止しようとした。

しかし相手は完全体、成熟期のグレイモンの技など、当たっても意味がない。

世代の差は、どれだけ数を揃えても埋められないのだ。

そうでなくとも、今ここにいるのはグレイモンだけなのだ。

相手と対峙するには、メタルグレイモンに再び進化するしかない。

先ほどジュンの家で沢山ご飯食べたし、いけるか、と太一はデジヴァイスを握り直すが、エテモンはそれを見逃さなかった。

『おおーつと！そうはさせないわよ！ダークスピリッツ100連打！！』

「うわっ！」

『ぐっ！！』

両手を交互に動かして、技を連発しながら太一達が進化をする隙を与えない。

グレイモンは太一を抱き込むようにして背中を向け、連打される球体を受けることしか出来なかった。

「グレイモンッ！くそ、卑怯だぞっ、エテモン！」

『ほーっほっほ！何とでも言いなさい！！これはアチキの復讐よ！！アンタ達選ばれし子どもを確実に倒すためなら、何だっつてするわ！！アチキをこんな目に合わせたこと、絶対後悔させてやる！』

ドン、ドン、ドン、ドン！！

爆発音が絶え間なく聞こえてくる。

技が当たる度に、グレイモンの身体が震える。

ダメージは蓄積していくばかりで、反撃する隙すらない。

このままではデジタルワールドに戻るどころか、こんな訳の分らない場所で、誰にも知られることなく朽ち果てることになる。

——嫌だ、ジュンさんと約束したんだ。大輔をよろしくって、頼まれたんだ。絶対にジュンさんの下に連れて帰るって、決めたんだ。こんなところで……！

一筋の風が、吹いた気がした。

——冥府の沼——

ドブン、とエテモンの下半身が沈む。

何もない、パステルカラーのマーブル模様が上下左右に広がっているだけの空間に、突如として現れたのは、まるで夜の闇のような沼だった。

ぎやつ、とエテモンは沼に身体を取られ、バランスを崩す。

それにより、絶えず放たれていた攻撃が止む。

濛々とグレイモンの背中から灰色の煙が上がり、痛みで呻いたグレイモンはずっと強張りながら抱き込んでいた太一を離すように脱力した。

慌ててグレイモンの陰から飛び出した太一が見てやれば、グレイモンの背中は焼け爛れたように赤く染まっていた。

「グレイモン!!」

『太一、グレイモンにデジヴァイスを翳しなさい』

「っ、え?」

ひゅ、と息を飲みながら太一がグレイモンを呼べば、聞こえてきたのはグレイモンの声ではなく、全く聞いたことのない声。

誰だ、と太一が辺りを見回すと、エテモンから太一とグレイモンを庇うように、人影が佇んでいた。

歪な白い線が引かれた黒い服、異様に長い手足、そしてシルクハットを被った、つるりとした水晶のような大きな頭部。

爆風に煽られないように、シルクハットを左手で抑え、右手は何かを握ってエテモンに突き出している。

「だ、誰だ……？何で俺の名前……」

『今は時間がありません。太一、自分の立場を弁えないこの大莫迦者は、このワタクシが相手をしておきますから、まずはグレイモンの治療をしなさい』

「ち、治療つたつてどうやって……」

『ムツキイイイイイイ!!何なのよ、アンタ!突然現れて正義のヒーローよろしく、選ばれし子どもなんか庇っちゃって!邪魔すんならアンタも地獄に落としてやるわよ!!』

沼に身体を取られて、思うように動けないエテモンだが、それが更にエテモンを苛立たせる要因になったらしい。

額に青筋を浮かべながら、エテモンは自由の両手を交互に振り回して、先ほどのように技を放ってくる。

しかし太一を助けた謎の水晶の魔人は、ふんと鼻で笑った。

『残念ながら貴方の出番も役目も、もう終わっているのですよ。弾き飛ばされた亡者よ、行く末を失った悪鬼よ。いい加減、夢から目覚めなさい』

右手を振り上げる。

その手に持っていたのは、持ち手が髑髏に彫られているステッキだった。

くるん、とバトンのように振り回し、ないはずの地面に叩きつけたような音を立てながら突き立てた。

バン!バン!バン!

水晶の魔人に当たる前に、何か目に見えない壁のようなものに技が当たって弾け飛ぶ。

涼しい顔をして技を防ぐ魔人に、エテモンは更に青筋を1つ増やして、壁を壊してやろうと躍起になって技を放った。

『さあ、太一。今の内です。デジヴァイスをグレイモンの傷に翳しなさい。聖なる光は悪しき者を苦しめ、善き者に癒しを与えるのです。傷を完全に治すことはできないでしょうが、痛みを和らげることは可能なはずです』

さあ、と促され、太一は言われるがままに、グレイモンの背中にデ

ジヴアイスを翳す。

ほわ、と柔らかい光がデジヴアイスから漏れ、グレイモンの背中に当てられる。

しゅうううう、と言う音を立てて、みるみる傷が塞がっていった。

『う、う……』

「グレイモン！具合はどうだ？」

『っ、タイ、チ……うん、少し良くなった……』

焼け爛れた背中の赤みは引いていたが、魔人の言う通り完璧に癒えたわけではなさそうだ。

それでも、あの魔人の援護をすることぐらいなら出来そうだと太一はグレイモンを叱咤して起き上がらせるが、それに待ったを魔人がかける。

『休んでいなさい。ここは貴方が察している通り、デジタルワールドでも人間の世界でもない場所です。貴方達にとっては半分の間も発揮できない未知の場所』

す、とシルクハットの鍔に手をかけ、深くかぶり直した魔人が、笑った気がした。

振り返った水晶の頭部には、目も鼻も口も、表情すらなかったのに。

『ここはワタクシの領域。夢に溺れた愚か者は、このワタクシ、スワンプモンが成敗して差し上げましょう』

す、とステッキを横にして両手で持ちながら、魔人……スワンプモンは言った。

『ムキイイイイイイイイイイイツ!!何よ、何よ！カッコつけてちゃって！アンタもアチキのこと莫迦にしてるんでしょ!?!転んだってタダじゃ起きないわよ！アチキを地獄に送るってんなら、アンタもその子ども共々一緒に道連れにしてやるわ!!』

『残念ながら、ワタクシはウィル・オ・ザ・ウィプスなのです。貴方がワタクシを道連れにしたところで、門番がワタクシを門前払いするでしょうねえ』

『訳わかんないこと言って、煙に巻こうっての!?!そうはいかないから!』

『やれやれ、これだから教養のない脳筋は……まるで見境のない猿のようではないですか。おっと、失礼。貴方は猿でしたね』

『キイイイイイイイツ!!もう許さない!!謝ったって遅いんだからね!!』

エテモンはすっかりスワンプモンのペースにはまっている。

幾つもの青筋を浮かべながら、出鱈目に技を放つが、スワンプモンは飽くまでも涼しい表情を崩さない。

どのぐらい経ったか、あれだけ激しく鳴り響いていた轟音と、エテモンの雄叫びは勢いを失くしていく。

ぜえ、ぜえ、と息を切らし、肩で呼吸をしていたエテモンが見たのは、傷1つ負っていないスワンプモン。

『………終わりですか?』

地の底から這いあがってくるような、冷ややかな声色。

太一とグレイモンは息を飲み、エテモンはたじろいだ。

『なっ、何よ……何なのよ、アンター!このアチキの攻撃を食らって、無事で済むわけ……!』

『先ほどの光景をもうお忘れで?ワタクシには貴方の術を総て弾く術があるのです。貴方は無駄にエネルギーを消費しただけですよ』

バリアを解いたスワンプモンは、ないはずの地面を蹴る音を立てながら、エテモンに歩み寄っていく。

エテモンは未だ、沼にはまったまま動けない。

『アチキはっ……アチキはスーパースターよ!世界を統べる王なのよっ!こんなところでくたばってたまるもんですか!!』

『まだ気づかないのですか、愚か者。言っただけです、貴方の役目も出番も終わったのだと。〴〵ここ〴〵にいる時点で、貴方にはもう戻れる術はないのですよ』

コツ、コツ、コツ。

みつともなく悪あがきをするエテモンに、スワンプモンは冷たく言い放つ。

そう、〴〵この場所〴〵にいる時点で、〴〵スワンプモンがここにいる時点で、エテモンは敗けているのだ。

“ここ”は、“そういう場所ではない”から。

『さようなら、目醒められなかった愚か者。貴方に“次”はありませ
ん』

タンツ、と軽やかなステップを踏んだ Swamp モンの身体が、高く
高く浮かび上がる。

持っていたステッキの先端を上に向けたかと思うと、まるで何かを
落とすように振り下ろした。

『ほのいかづち やり
火雷の槍』

ピシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ンツ!!

うわ、と太一とアグモンは、暴力的な眩さと、身体を震わすほどの
衝撃に咄嗟に目を瞑り、耳を塞ぐ。

それは、ほんの一瞬の出来事だった。

振り下ろされたステッキの先端に導かれるかのような、あるいは白
いキャンパスを真つ二つにするように描いたような、大きな大きな雷
がエテモン目掛けて落ちてきたのだ。

たった一瞬だった。太一とグレイモンが目を閉じ、耳を塞いだほん
の一瞬の出来事だった。

恐る恐る目を開ければ、そこには衝撃を受けて少し挟れている沼だ
けで、エテモンの姿は何処にもなかった。

粘性の泥は、雷が落ちた衝撃で抉れているも、徐々に平らに戻っ
ていく。

見ておらずとも総てを察した太一は、ぞつとしながらも助けしてくれ
たこともあって、素直に礼を言った。

口元は若干引きつっていたが、Swamp モンはいえいえいと穏やかな
口調で返してきた。

『間に合ってよかった。ワタクシめがない隙を狙ったのでしょう
ね。そうでなければ、今頃太一達はここにはいない。暗黒の勢力は

思っている以上に力をつけていますね。まさかこんなところにまで干渉してくるとは……』

『どういうことだ？そもそもここって何なんだ？』

『僕達、デジタルワールドに帰りたいたいんだけど……』

『大丈夫。ワタクシが送って差し上げます。ここが何処かも、説明させていただきますとも。さあ、2人とも。ワタクシに捕まって』

太一と、戦闘が終わったことで退化したアグモンは、両腕を差し出してきたスワンプモンの腕に左右それぞれ捕まった。

それを確認したスワンプモンは、行きますよ、と声をかけて音もなく泳ぐように前方へと移動し始めた。

その際、エテモンを拘束するために現れた沼を放って移動し始めたので、太一はあれいのか、と訊ねたが、いつか消えるでしょう、と言う何とも無責任な答えが返ってきたので、太一は半目になってスワンプモンを見やった。

おっと、今はそれどころではない。

「それで、お前は誰なんだ？何で俺の名前を？」

『ここって何処なの？何でエテモンはここにいたの？知りたいことだらけで、僕達何を聞いたらいいいのか、もうよく分かんないよ……』

『ええ、ええ。順を追って説明しますとも。まず、先ほども言いましたが、ワタクシはスワンプモンと言います。挨拶が逆になってしまいましたね。初めまして、太一、アグモン』

スワンプモンは語る。

ここは何処でもあり、何処でもない場所。狭間と呼ばれる場所なのだそうだ。

狭間と言うのは、沢山存在している世界と世界の間にある隙間のよななもので、誰でも気軽に入り込めるものではないらしい。

隣り合っている世界に出来た隙間はとてつもなく重く、生身の人間が立ち入れば一瞬でぺちゃんこになってしまうとのことだった。

ぺちゃんこになる、と聞いて青褪めた太一とアグモンだったが、太一達はデジヴァイスの恩恵でそれを免れているらしい。

何でもありだな、と太一は半目になった。

『じゃあスワンプモンは何で潰れないの?』

『ワタクシはここで生まれたようなものですからねえ』

『そんなもん?』

『ええ、そんなもんです』

何だかはぐらかされている気がするなあ、と思っただが太一は何も言わないでおいた。

『次に、何故貴方方を知っているか、でしたね。ワタクシはこの狭間から、沢山の世界を垣間見ることが出来るのです。色々な世界がありました。平和な世界、争いが絶えない世界、貴方方のような生き物と人間が共存している世界、科学が発達している世界、終わってしまった世界』

「……世界ってそんなにあるんだな」

『そっか。色んな世界を見てるってことは、僕達の世界もそうやって見てたんだね?』

『ご明察です』

声が弾んでいるのは、気のせいではないはずだ。

『それから何故太一達がここにいるか、ですが、先ほど言ったように暗黒の勢力は、こちらが思っている以上に力をつけてきている。世界の救世主たる選ばれし子どもと言うのは、あちら側にとって非常に都合が悪い存在です。なのでデジタルワールドに戻ってこられないよう、ゲートに干渉して貴方方をこちらに迷い込ませようとしたのでしよう』

「ここに迷い込むとどうなるんだ?」

『何も』

「え?」

『どうしようもできません。貴方方はデジヴァイスの恩恵で潰されることはありませんが、ここではデジヴァイスの導きも通用しない。戻ることすら進むことも出来ず、永遠にこの狭間を彷徨うこととなっていたでしょう』

『ず、ずっと? ご飯も食べられないってこと?』

『ここは常に時間が進んでいると同時に、止まっているのです。お腹

がすくことも、生理現象もない代わりに、死ぬことも生きること出
来ない』

「は……?死ぬことも生きること出来ないって……結局どっちなん
だよ?」

『ふふふ、子どもには少々難解でしたね。簡単に言えばここから出る
術はない、ということですよ』

『ええーっ!?!じゃ、じゃあどうやって戻ればいいの!?!』

『言ったでしょう。ワタクシはここで生まれた。言わばワタクシの故
郷です。何処に向かえばいいのかなど、ワタクシには朝飯前ですよ』
迷うことなく進んでいくスワンプモン。離れたらお終いだ、と太一
とアグモンはスワンプモンの両腕にしがみつく力を込める。

「そ、そうだ。エテモン!エテモンのことも聞きたかったんだ!」

『僕達が倒したはずなのに……』

『おやおや、アグモン。貴方ともあろう方が。デジモンが死んでしま
うとどうなるか、お忘れですか?』

『え?えーっと』

『どういうことだ?』

『エンジエモンの死を見ていたなら、太一も多少は知っているでしょ
う。デジモンと言うのは、緻密で重たいデータの塊。死んだデジモン
はデータの粒子となってダークエリアに送られ、そして生まれ変わ
る。さて問題です。あのエテモンは一体どういう結末に至ったで
しょうか?』

問われて、考える。

メタルグレイモンの技と、エテモンから発せられていた濃厚な闇の
力がぶつかり合って、変な歪みが生まれた。

その歪みに吸い込まれて、太一達は人間界へと戻っていった。

あの時、歪みの発生源となったのはエテモンだ。つまり……。

「……エテモンも歪みに吸い込まれていた。死んだわけじゃなかった
んだ」

『正解です』

顔がないはずのスワンプモンが、笑った気がした。

『貴方方と対峙した際は正気を失っていましたが、狭間に吸い込まれた衝撃だったのでしょうかねえ。エテモンは意識を取り戻し、貴方方を執拗に狙っていた。げに恐ろしきは執着と復讐心です。本当に愚かしい……』

下手をすればこの空間に閉じ込められるだけでなく、あのエテモンに殺されていたかもしれない。

容赦も情けもない敵の仕業に、太一の背筋が凍った。

……太一達の戦いは、まだまだ続きそうだ。

『……おっと、お二方。残念ですが質問タイムはここまでのようですよ』スワンプモンの言葉に、太一達の視線が前に向けられる。

目の前で柔らかく白い光が、大きく口を開いていた。

すう、と浮かび上がったのは、逆さまになったピラミッド。

ナノモンがヒカリ達の紋章を守護し、エテモンを倒すためにグレイモンが進化した、あの場所だった。

やっと戻れた、と太一とアグモンは安堵の息を吐き、その光に向かって泳ぐ。

するり、と太一とアグモンがしがみついていたスワンプモンの腕が、流れるように解かれたのは、その時だった。

「……スワンプモン？」

あれ、と太一は止まる。

少し遅れてアグモンも止まり、振り返る。

ここまで案内してくれたスワンプモンは、光の中に飛び込もうとしている太一達を見守るように佇んでいる。

太一達と一緒に行くこうとはしなかった。

『すみませんね、お二方。ワタクシはここまでです』

「え、一緒に来てくれないのか？」

『ええ。ワタクシにはやらねばならぬことがあるので』

『やらなきやいけないこと？』

アグモンが首を傾げながら質問すると、歪な線が走ったスーツの懐に手を入れる。

す、と壊れ物を扱うように優しく、そしてゆっくりと取り出したの

は、淡く輝く青い光。

掌ほどの大きさの青い光を、太一とアグモンはまじまじと見つめる。

……どういふ訳か、太一はその青い光が泣いているように感じた。

『これ、何?』

『……………この子は』

スワンプモンの声のトーンが、少しだけ下がったような気がした。

『この子はね、ただ会いたかっただけなのです。会いたいと願い、その願いが強すぎて、世界から弾き出されてしまった、可哀想な子なのです』

『?世界から弾き出された?って、どういうこと?』

『……………例えば、世界を破壊しようとする存在がいたとしましょう。大勢の命を奪い、その命が住まう世界を壊そうとする者です。貴方方の世界だと、それに見合う罰は何だと思えますか?』

「……………俺達の世界じゃあ、まず間違いない死刑、かな」

『僕達の世界なら…………二度と生まれ変われないかも』

『そうですね。でもこの子はそんな罰すら軽く見られるほどの罪を犯してしまつたのです。だから二度と生まれ変われない代わりに、二度と死ねないこの狭間に放り出されてしまった…………』

「……………何だよ、それ」

会いたいと願っただけなのに、その願いが少し強かつただけなのに、それなのにそんな酷い罰を受けなければならぬなんて、そんなのおかしい。

太一の拳が強く強く握られる。

スワンプモンは太一の気持ちに痛いほどに分かり、そしてその肩にそつと反対の手を添えた。

『太一、大丈夫。確かにこの子は罪を犯し、世界から弾き飛ばされてしまいました。だからワタクシが、この子が会いたがっている者のところに連れて行くのです』

「……………」

『前にも、世界から弾かれた命を運んだことがあります。その時も、

ちやんと送り届けることができました。今度もちやんと見つけて、その方の下に大切に送り届けます』

今にも泣き出しそうな太一とアグモンを交互に見やった後、スワンプモンは太一達の方を向いたまま、すーっと後ろに下がった。

『さて、ここでお別れです。太一、アグモン。子ども達を最後まで導いてやってください。貴方方が先を走ってくれるから、子ども達も安心して走ることが出来る。ワタクシはいつでも、貴方方の無事を祈っております』

「……分かった」

『……………』

唇をきゅつと引き締め、何かを堪えながら、太一は振り絞るようにそう言った。

せつかく知り合えたのに、助けてくれたのに、仲間達に紹介することが出来ないのは残念だ。

でも太一にやらなければならないことがあるように、スワンプモンにもやらなければならないことがある。

太一はくるりと背を向け、光の中に飛び込もうとした。

『アグモン?』

じ、とスワンプモンの掌の光を見つめていたアグモンは、徐にスワンプモンに近寄り、その光に手を伸ばす。

青い光が、少しだけ怯えたように震えた気がした。

『……………大丈夫』

目を閉じ、その光に顔を近づけながら、アグモンは囁いてやる。

『きつと会えるよ。どれだけ時間がかかっても、諦めないで。僕だつてタイチに会えたんだ。君もきつと会えるよ。僕信じてる……君も、僕やタイチや、スワンプモンを信じて』

それは、無責任な言の葉なのかもしれない。

必ずという確証はない、絶対と言う保証はない。

諦めないで何て言えるのは、希望を簡単に捕まえられた者の、とてつもなく軽い言葉だ。

……それでいて、とても力強い言葉だ。

アグモンの背中を茫然と見ていた太一だったが、やがてアグモンの肩を抱くように近づいてきた。

「……俺も信じてる。世界から弾かれちゃうほど、強く願ったんだろ？ だったらもう誰も、お前を責めないよ。もしお前のこと責める奴がいたら、俺達でとつちめてやる。なあ、アグモン？」

『勿論だよ……だから大丈夫。安心して』

『……ありがとう、アグモン、太一。貴方は本当に優しい子だ』
自分達も大変なのに、こうして他人を思いやれることが出来るのだ。

きつと会える、きつと救える。

強い思いを具現化するのが、デジタルワールドなのだから。

『さあ、もう行きなさい。ワタクシも行きます。願わくば、もう二度と会うことのないように。ここは本来、誰も見ることでできない狭間なのだから』

「淋しいこと言うなよ、スワンプモン」

『僕達はもう仲間だよ！』

『……ありがとう』

今度こそ、太一達は光の中に飛び込んだ。

広大な砂漠と、逆さまのピラミッド。

太一とアグモンは、それをしばらく見上げた後、恐る恐ると言った様子でピラミッドに近づいた。

デジタルワールドで何日過ごしても、現実世界では数分しか経っていないと、ゲンナイは言っていた。

逆に言うと、現実世界で過ごした数時間は、デジタルワールドでは何か月も経っている、ということだ。

仲間達は、妹や後輩達は、無事だろうか。

人間界に帰ってきた時と似たような心情に見舞われた太一の額には、冷や汗が大量に流れている。

タイチ？ って何も考えていないアグモンは、黙り込んでしまった

パートナーを見上げた。

何でもねー、つて頭を振り、仲間達に罵倒される覚悟を決めた太一は、景気づけに頬を両手で叩いた。

「……うし、行くぞ、アグモン」

『?うん!』

しかし太一の覚悟は、あっさり打ち砕かれることとなる。

ピラミッドに近寄った途端、外の監視カメラから見えたのだろう、ゲンナイの大きな声が聞こえてきた。

数分程して、ロップモンとヒカリとテイルモンが、ピラミッドの外に出てきた。

ゲンナイから言われたのだろう、妹は顔を真っ青にさせて、走ってきたのか息を切らして、茫然とピラミッドの入り口に佇んでいた。

「……おにい、ちゃん?」

「おう」

「お、にい、ちゃ」

「おう」

「……お兄ちゃんっ!!」

うるうるうる、とヒカリの赤い目に浮かぶ水だまり。

ギョツとなった太一が慌ててヒカリを宥めようとしたが、ヒカリの方が早かった。

ボロボロと大量の涙の粒を零して、ヒカリはだつと駆け出して、太一に抱き着いた。

大声を出して泣き喚くことはしなかったものの、歯を食いしばって太一の服をぎゅーって握りしめて、零れている涙を拭いて、太一の存在を確かめるように抱きしめる。

いつだったか、ヒカリだけがはぐれて迷子になった時と同じ反応に、太一は目を細めた。

「……ごめんな、ヒカリ。心配かけた」

「っ……っ、お、にい、ちゃん……!ほんとに、おにいちゃん、だっ……!うっ、うう……!」

「うん、そうだよ。兄ちゃんだ」

「っ、お兄ちゃあんっ！」

ひきつけのようにはやくり上げ、ヒカリは何度も兄を呼ぶ。

太一はそれを鬱陶しがることも振り払うこともなく、ヒカリの気が済むまで泣かせてやった。

抱き着く妹の頭を、背中を優しく摩り、彼女が内に秘めていたであろう、哀しみや淋しさを吐き出させてやる。

いつまでも治達が現れず、太一を罵倒したり心配したりする言葉が飛んでこないことに気付いたのは、ヒカリが泣きついてきた数分後だった。

「ヒカリ、テイルモン。治達は？」

「治達なら、修行の旅に出てるよ」

未だしやくり上げて、上手く言葉を紡げないヒカリに変わって答えたのは、ゲンナイだった。

お帰り、と微笑んでくれるその姿に、どうやらゲンナイは先ほど太一達に何があったのか知らないらしい、と悟る。

それは後でゲンナイに伝えるとして、治達が修行の旅に出たと言うのはどうということだろうか。

ゲンナイによれば、太一達が現実世界に飛ばされてしばらくはここに留まっていたのだが、太一達に追いつきたい治とガブモンがまずピラミッドから旅立っていった。

その次にミミと空が、次の日には光子郎が、1日半遅れて丈が、それぞれ修行の旅に出たのだと言う。

修行の成果が出て出なくても、2か月後には戻ってくる、という約束をして。

「そっか。じゃあ俺達はここで待つてた方がいいか？」

「そうだね、すれ違いになるとまずい。申し訳ないが、もうしばらく待つていてくれないか？」

分かった、と太一達はピラミッドの中に入る。

太一への断罪が少し先延ばしにされただけだったが、何はともあれ今すぐ罵倒されることはなさそうだ、と安堵しながらナノモンが待つ地下の管理室へと向かう。

無事でよかった、とナノモンからも労われ、なっちゃんがお疲れ様ってお水を持ってきてくれたので、遠慮なくそれを飲み干す。

僕もー、ってコップをもらって水を飲もうとしたアグモンが、あれ？って気づいた。

『ヒカリ、ダイスケ達は？』

「あれ？そーういやいな。ブイモン、まだ目覚めてないのか？」

昔の傷を思い出してしまったブイモンは、太一達が人間界に飛ばされる前から深い眠りについてしまっていた。

その後どうなったのか知らない太一達は、そう言えば先ほど修行の旅に出たメンバーに大輔達の名前が挙がらなかったことから、てつきりヒカリと一緒にピラミッドで留守番をしているものだと思っていた。

しかし太一が帰ってきた時、ヒカリは迎えに来てくれたが大輔達は来なかった。

ヒカリと同じぐらい、太一の事を好いていて、尊敬している大輔が、帰ってきた太一のお出迎えをしないのはかなり不自然だった。

「……………」

『……………』

途端に、静まり返る空間。

何故かその場にいる全員が俯いて、唇を引き締めていたから、え、あれ、俺何か変なこと言った？って太一達は狼狽える。

「……………大輔くん達は」

数秒ほど静まり返った空間で、意を決したヒカリが口にしたのは……………。

灰色の厚い雲に覆われた空には、太陽の光が差し込む隙間などない。

やたら空気が重々しく、大輔と賢の足取りは軽いものとは言えなかった。

ゴクリ、と同時に息を飲む音が聞こえるほど、そこは静寂に包まれていた。

眼前に広がるのは、先が見えない程に鬱蒼と生い茂った、深い深い森だ。

これから大輔と賢は、この森に入らなければならない。

『……どうする？案内しておいて何だが、やはり止めるか？』

大輔達のすぐ後ろに佇んでいた獅子の顔をした獣人が、大輔達にその声をかける。

唇を真一文字に結んで、眼前の森を見つめていた大輔は、声をかけられたことで我に返った。

ぶんぶん、と首を横に何度も振り、そしてキツと森を睨みつける。

『……止めるなんて、逃げるなんて、したくねえ。少しでもここに希望があるってんなら、俺は行く！』

「大輔くん……うん、僕達も行くよ。今更引き返せないもの」

『うん！頑張ろうね、ケン、ダイスケ！』

本当のことを言えば、今すぐにでも帰りたい。

足は分かりやすい程震えているし、両手も上手く力が入らない。

噛みしめた唇は少しでも緩めたら、情けない悲鳴が飛び出てきそうだった。

……それでも、大輔達は帰れない。帰るわけにはいかない。

「……行くぜ」

「うん……」

『行つてきます！』

『……健闘を祈る』

弱気な心を叱咤し、大輔達は歩き出す。

その腕には、頑なに目を閉ざしたチビモンが眠っていた。

.